THE CENTRAL REVIEW

中央公論

新年號

第三十七年　第一號　第四百[illegible]號

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ



卑猥なる廣告の申込みは謝絶す　中央公論社

印度マドラス大學ナラス教授著　大學教授立花俊道譯

六版出來

佛教の要諦

▼釋尊彫像、アジャンタ壁畫等の寫眞版十一頁入
▼四六版總布製　價參圓貳拾錢　郵税十二錢

これ幽玄なる佛教々理の眞諦を何人にも解し易きやうに手に取る如く明快に説破せる稀世の名著にして現に印度マドラス大學、カルカッタ大學等の指定參考書として推薦せられ、歐米の學者間にも嘖々の好評ある「エッセンス、オブ、ブヂスム」の全譯である。譯亦明快を極む。

目次

◉歴史的佛陀　◉四締（四大眞理）　◉世界の謎
◉佛教の合理性　◉佛教と苦行主義　◉人格
◉佛教の道德説　◉佛教と厭世主義　◉死及び死後
◉佛教の婦人　◉賢正八正道　◉至高善

◉「……かゝる主題に關する空前の良書と稱するを得ん」——スマンガラ大僧正

十一版

獨逸ヘッケル博士著　文學士栗原古城譯

◉宇宙の謎

參圓　郵税拾貳錢

六版

白耳義マーテルリンク著　文學士栗原古城譯

◉靈智と運命

貳圓貳拾錢　郵税十錢

六版

ロッヂ博士著　高橋五郎譯

死後の生存

▼附錄としてワルシス博士の有名なる「靈怪實在論」を添ふ

定價參圓　送料十二錢

十八版

ノーベル賞金を得たる白耳義文豪マーテルリンク著　文學士栗原古城譯

死後は如何

附錄「交靈術とは何ぞや」

四六版上製　價壹圓九拾錢　郵税十錢

人間の死後は果して如何　絶滅か永生か　將た「醒むるなきの睡眠」か、既成宗教は其權威を失し、近代科學は之に就て何等の說く所無し　而も闇黑の中一道の光明あり　泰西の新科學は既に靈魂の不滅を實證し將に轉廻轉生の眞理を說かんとす。

現代第一の文豪にして思想家たるマーテルリンクは、深く此不思議なる心靈の現象に動かされ、其神秘的冥想と、聰明なる理智との高潮に乘じて、此大問題を解決せんとしたる者、即ち此の書也。譯書は將來世界を震撼すべき心靈運動の曉鐘として本書を提供する者と云へり　附錄とせる「交靈術とは何ぞや」に至りては眞に人界靈界に亘る一大驚異を說ける者にして物質萬能の現代社會は之を讀んで將に大なる戰慄と畏怖とを禁じ得ざるべき也。

東京本郷西片町　玄黄社　振替東京七九九五番　電話小石川一三九番

卑猥なる廣告の申込みは謝絶す　中央公論社

長篇小說 地上

嶋田清次郎氏著

新刊出來

▼四六大版四百四十頁
▼定價貳圓、送料拾錢

若き勝利の世界を展開して悲壯なる男性美を高調し豪華秀麗の戀愛を讃歌せる一大雄編は太陽の如くに出でたり◇現代の新らしき日本を代表する一部の社會を、さながらに描き來つて、各方面の新人の面目鮮かに現れ來る◇萬華鏡の如くに人間一切の色調を反映し融合せしむる大描寫と、讀者の魂を灼き盡くすの大情熱とは、何等の誇張なくして「空前」と云ふに躊躇せず◇單に既刊『地上』に比して嶄として秀出するのみならで恐らくは文壇稀覯の大名編として此の『燃ゆる大地』は讀書界と出版界とを震撼せしめむ

第四部 燃ゆる大地

賣高既に三十萬部に達せり

第一部 ■地に潜むもの■ 價壹圓參拾錢 郵送料拾錢

第二部 ■地に叛くもの■ 價壹圓六拾錢 郵送料拾錢

第三部 ■靜かなる暴風■ 定價貳圓 郵送料拾錢

東京牛込矢來三番地 振替東京一七四二 新潮社 電話番町八〇七番 八〇八番 八〇九番

信用なき古舗及び卑猥なる賣品の廣告揭載は謝絶す



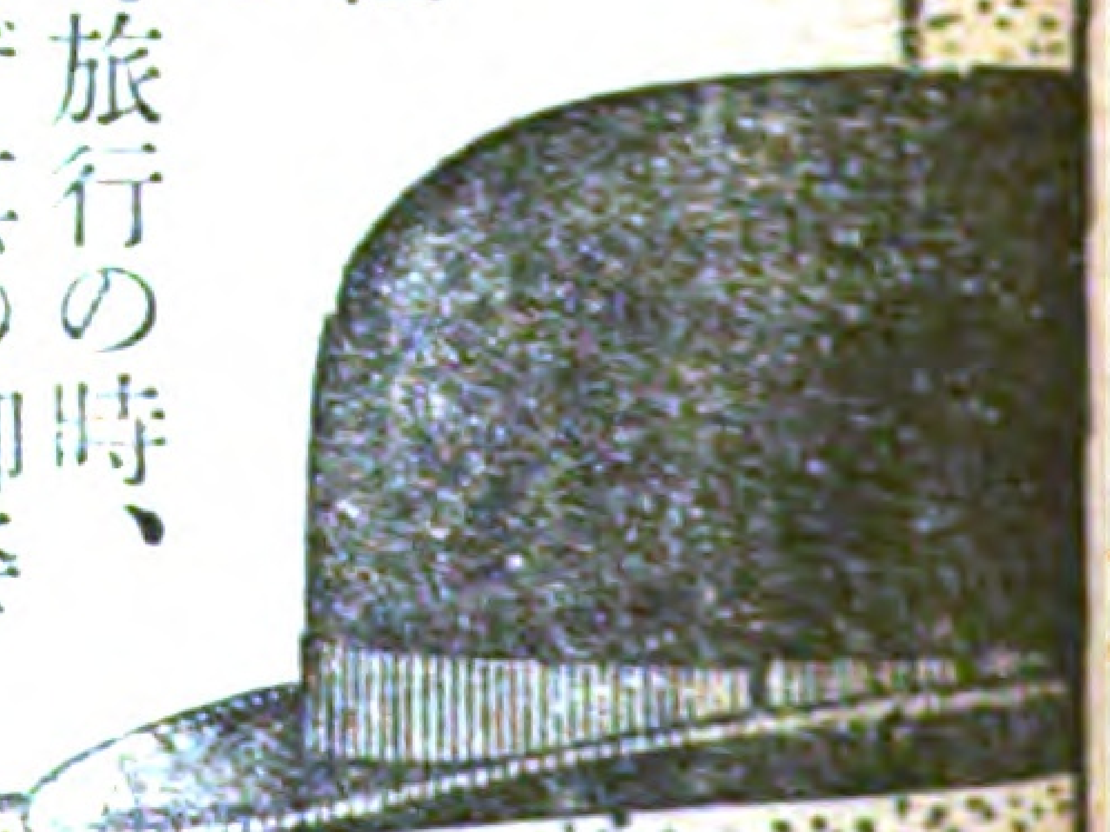
帽子に對する正しき智識

帽子に場合あり!!帽子にも用ゆべき場合があります、晝は御勤務、夜は社交界、二六時中凡ての場合をタッタ一個の帽子で間に合はそうとは無理な話です、訪問の時散歩の時旅行の時、競技の時、其折々に必ず御服裝を御召替になる貴下は又必ず其の御姿に釣合ふ可き帽子に御取替へなさる事と存じます、そうでなくては折角の御人品も引き立たず其の時々の氣分を充分に出す事も味ふ事も出來ぬからです、殊に正月初め、御結婚其他祝賀等の儀式には是非とも禮帽の御召を願ひ度いものですが禮帽の中でも我專賣特許**黑中山帽ピースダービー**は接頭部をわざと柔軟くし冠り心地よき樣にこさへてあるので何時も服裝趣味に御理解ある皆樣の熱狂的歡迎を受けて居りますのは**鷹印帽子**の誇とする處であります、

相變らず御愛用の程を!

賀正

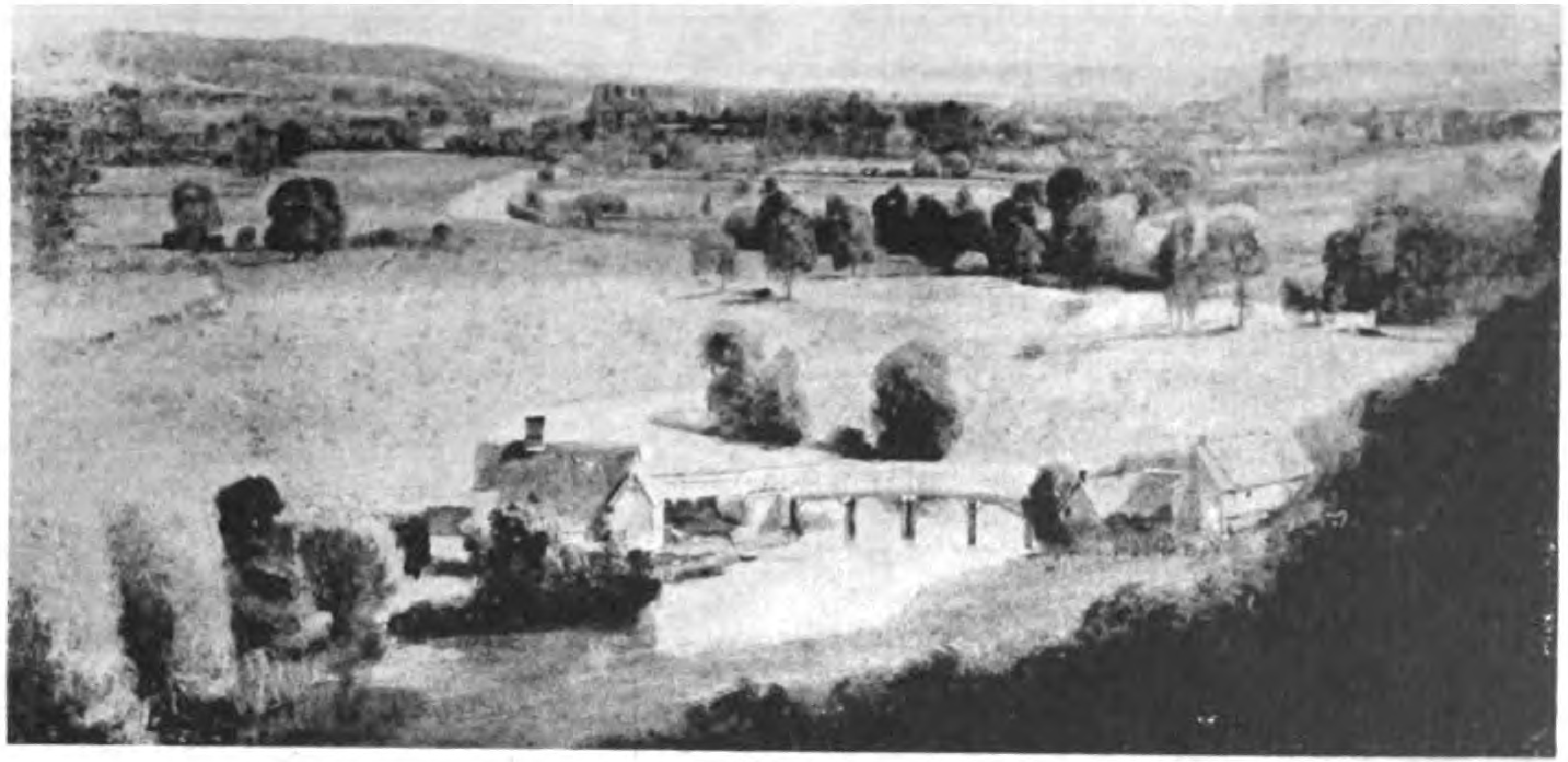
株式會社 高橋製帽所



信用なき店舗及び卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絕す



プラトン萬年筆
何時までも削らずに書ける專賣特許の萬年鉛筆
プラトンシャープ鉛筆
一圓以上數十圓迄
技巧が良い…体裁が良い…持ちが良い…何よりも其のペン先が良い
日本文具製造株式會社製造
中山太陽堂文具部發賣



VIEW IN DEDHAMVALE, SUFFOLK.

近代科學の生める**偉大**なる**治療法**を

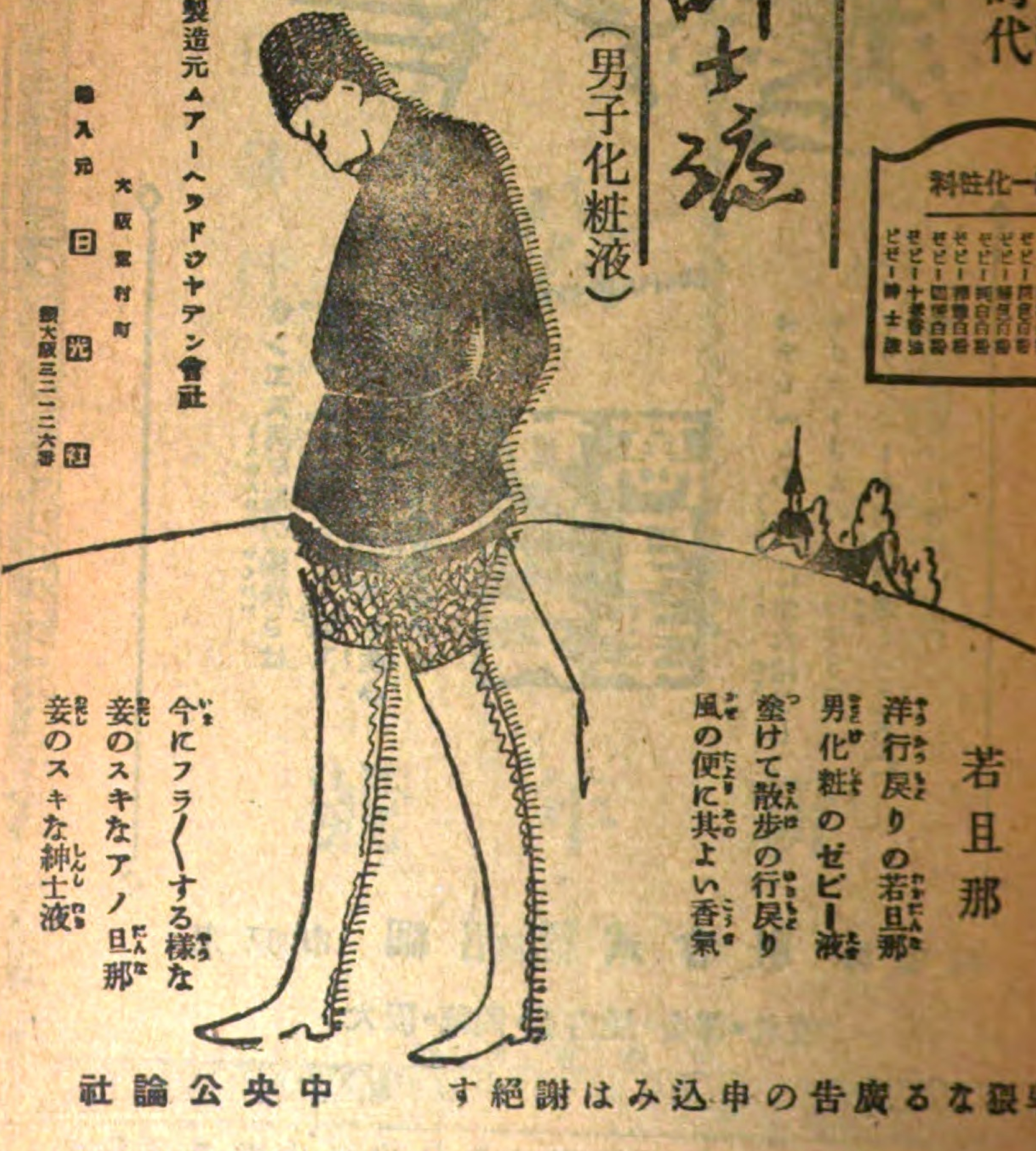
詳述せる書籍を何人にも進呈す



人類の歴史あつて以來疾病の治療と云へば、毒を以て毒を制する藥物療法に依る外なしとし、一にも藥、二にも藥と、無暗に有毒物質を體中に注入する事が行はれて來た、然し醫學の進歩と共にそれの甚だ危險なる事が判明して今後の治療學上に一大改造の時代が現出した、卽ち人は天の與へた自然の發育機能を充分に發達せしむれば疾病は忽然として去り、無病長壽の本全を保つ事が出來る。茲に於て物理療法の隆盛を來たした本書は近代科學の生める最高の理學療法中の寵兒たる。電波光線、電氣に依る理想的の保健手段に就て詳述せるものなれば何人も必ず一讀すべきものである。

希望者は卽時ハガキにて『治療法』送れと申込まれたし無代進呈す

東京市本郷一丁目 **ラヂオレーヤー商會** （電話小石川六二四 振替東京五二四七）



卑猥なる廣告の申込みは謝絶す　中央公論社

大正十一年

中央公論

一月一日發行

新年號

第卅七年第一號

第四百四號

社會改造の必要と人類愛の高唱

―大正十一年を迎ふるに際して―

今度の大戰爭に依て覺醒せられたる新しき魂が、次代の文明の上に貢獻し得べき最も著しきものは、云ふまでもなく其が社會改造の必要を痛感し併せて人類愛訓育の急務を高唱しつゝある點である。抑も此二者の氣附かれ又說かれたのは固より今に始つたことではないが、併しその一般民衆の殆んど本能的ともいふべき要求となつたことと今日の如きは蓋し歷史上他に見ざる所である。而して我が日本も此點に於ては今や世界の大勢と略ぼ步調を揃ひつゝあるのは、我々の私かに欣幸を感ずる所である。

社會改造は第十九世紀の初めから唱へられたのであつた。近代的意義に於ける改造論は所謂產業組織の變革と概ね其起源を同うすると謂て可い。若し夫れ人類愛の世界主義的意識に至ては、或意味に於ては人類其者の古きが如く古しと觀るを妨げない。然しながら、最近に至るまで之等の者は實は選れたる少數先覺者の理想に止り、多數の民衆はまだ〱もつと低き本能に支配され乃至因襲傳習の桎梏から中々脫却し得なかつた。之を先覺者の立場から觀れば、彼等の獻身的努力は漸々酬へられて世界は年と共に開明に赴きつゝあつたとも云へるが、之を民衆一般の立場から觀るに、彼等は未だ高尙なる理想の種子を十二分に生長繁茂せしむるに適當な地盤とはなつて居なかつた。而して今度の戰爭は實に此瘠地を變じて豐饒の地味を有するものたらしむるの働きを爲したのである。

今度の戰爭は勞働者の地位を向上した。一つには戰爭の規摸の擴大すればする程國家の勞働者に賴む所益々甚しくなるの結果でもある。斯くして勞働者の人格的尊重といふことは單に口先きばかりの通辭としては許されなくなつた。加之、戰局の進むに連れて益々烈しくなる無類の慘禍は、遂に將來再び之を繰り返さゞらんとするの熱求を生じ、軈て又之が爲には腕力の橫行を許さず爾後は總ての國際問題の處理に道理を最行力の發言者たらしめざる可らずとの確信を懷かしむるに至つた。戰前に於ては人常にいふ、力なき正義は役に立たぬと。併し、力備れば常に正義を蔑視するに至るを如何せん。本當の平和は、正義が正義だけで力を壓倒し得なければならぬ。否、少くとも夫れだけで力と對抗し得るでなければならぬ。力の背景なしに正義が實際政界の有力なる一要素たらんとしつゝある所に、吾人は時代の一休徵を看破すべきである。

者もに於ては[illegible]つた。[illegible]弊を除去すべしと主張するのである。又人類愛の[illegible]に對して[illegible]と主張するのである。つた。之等の傳統を超越した普遍的同類意識の如きは畢竟空想に過ぎぬと主張するのである。之等の論者は今でもある。殊に我國に於て其の多きを見る。が、併し、其の我が日本に於てすら右述の方面に於ける最近思想界の變化は實に眼まぐるしいものがあるではないか。

但し、斯く云へばとて我國の思想界は常に健全に進んで來てゐるとは云へない。少くとも吾人は、社會改造の要求と人類愛の高唱とが當初彼此相提携し得なかつたといふ事實に於て多大の遺憾を感ぜざるを得なかつた。社會改造の要求は攻擊の第一矢を資本主義に向けた。此處まではいゝ。併し資本主義を非とするは何の爲か。勞働者階級の自主的人格を認めぬからではないか。而して吾人が彼を非として勞働者の人格的尊重を說くは、畢竟彼等を向上して新文化創造の積極的一原動力たらしめんが爲に外ならぬ。此處に勞働者の社會改造運動が理想的一制限を受けねばならぬ點がある。絕對的階級鬪爭論の漸次其の過ちを悛めねばならぬ所以である。而して所謂有識階級が、漸く人類愛に目覺めた事も亦實は此趨勢を進むるに與つて力があつた。彼等が所謂資本家根性の奴隷となり、又は少くとも因襲的弊習の捉うる所となり、動もすれば勞働者階級の當然の人格的要求に耳目を蔽はんとした事が、幾ら其の激昂を挑發し不當の爭鬪心を誘導したか知れない。所謂階級鬪爭は、社會改造運動の積極的一目標としてこそ其の誤りなるを責むれ、此間の事情より發せる不得已の現象としては、吾人も大に之を諒とするものである。然るに昨今段々此方面にも眼が開いて來た樣だ。江川坦菴の所謂「里はまだ夜深し富士の朝ぼらけ」の感なきを得ぬも、識者階級の着眼は既に富岳の山嶺に一大光明を認めつゝあると謂て可い。斯くして勞働階級も有識階級の見識を信頼するを得、有識階級亦勞働階級の當然の要求を省察して社會改造の正しき方向を定むることが出來る。兩者の提携は實に現代生活の物心兩面の基礎を正しうするものにして、此處に始めて本當の文化が繁茂することが出來るのである。

戰爭の終結を告げてより昨年までの數年間は、大難を逃つて健康未だ十分に恢復せざる謂はゞ病後の人の樣なものであつた。社會は猶ほ混沌として不安の種も少くなかつたが、今や漸く心身安定して前途の光明を恃み得る徵候が著しく見へ始めた。此意味に於て大正十一年は吾人の文化的努力に非常な希望を添うるものである。而して我が中央公論は、年來の持論の漸く酬ゐられたるを視し、更に新なる精進を以て讀者に見へんことを期するものである

中央公論



第卅七年第一號
一月號
第四百號

社會生活の內面的根據

阿部次郎

一

社會とは何であるか。私は今この概念の細かな穿鑿を避けて、最初にはたゞ極めて廣義にこれを解釋して置く。茲にいふ社會とは生物の團體である。それが人間であつても蟻であつても、兎に角二つ以上の生物が團體として生活するところに、この意味に於ける社會は常に成立する。故に人類とか國家とかいふものばかりではなく、家庭も會社も學校も

[illegible]するとき、吾々は、等しく社會の名によつて呼ばれてゐるものゝ間にも、全然內面的意義を異にする[illegible]ことを發見するであらう。此等種々の社會のうちで、孰れが正しくて孰れが不正であるか。外見上一樣に見える社會といふものに就いて、それ〴〵に異れる內面的意義を區別し、その中から、眞の社會――當にあるべき社會の觀念を明かにして見たい。本論に於いて私の目的とするところは正に此點にある。

現實に於ける種々の社會は如何にして成立したか。その歷史的成因を探つてこれを類別するのは、社會學上相應に複雜な問題であるに違ひない。併し此等の社會をその倫理的意義から見れば、吾々は大體これを三樣に區別することが出來るであらう。第一の社會は主人と奴隸との社會である。第二の社會は利己的約束の社會である。第三の社會は人格結合の社會である。第一と第二とは、倫理上から見れば共に利己主義を根據とする。それは利己主義的社會の二つの異れる形式である。之に對して第三の社會は、前二者とは全然異れる倫理的立脚地を持つてゐる。それは一言にして言へば人格主義的根據の上に立つてゐるのである。現實に存在するあらゆる社會で、この三樣の動機の混合から出來てゐないものは恐らくないであらうが、併し三者の孰れを主としてゐるかに從つて、思想上これを區別して考へることは可能である。或種の社會主義者から見たら、國家といふものの成立は第一の部類に屬するであらう。營利會社や其他の經濟的團體は、主として第二の社會に該當する。之に反して敎會や學校等は、その本質上第三種の社會であるべき筈のものである。

第一に、主人と奴隸との社會とは何であるか。それは一人若くは一團の强者が周圍の人間を征服することによつて成立する社會である。强者は――特に原始的な强者は、强烈な、制限を知らぬ慾望と、他人を壓倒してこれを頤で使ふに

足るほどの腕力若くは狡智の力を持つてゐる。併し強者と雖も千本の手足を持つ譯ではない。彼はその無限の慾望を遂成するための手足として、その周圍に蠢動する弱者を驅使する必要を感ずる。かくて彼は、その優れたる智力と強い意志と、慾するところを遂行する拳骨の權利（ファウストレヒト）とを以て、弱者の勞働の掠奪を始めずにはゐられない。ファウストとは異れる意味に於いて「千本の手を使ふ只一つの心」となり、「馳走と嚇しとで元氣をつけ、金もやり、おびきもし、虐げもし」ながら——約言すれば最も裸かな意味に於いて「恩威を並び行ひ」つゝ、粘強く彼はその最後の目的を實現しようとする。さうして憐むべき奴隷は、或ひは強者の笞の音に戰き、或ひは屈從によりて購ひ得たる強者の保護にほくそ笑みながら、その主人の周圍に蝟集する。かくて引ずる者と引ずらるゝものと、征服者と被征服者との團體は組織せられ、何時の間にか「奴隷の道德」といふ一種の道德意識さへその間に發生して來るのである。私は固より一般に國家の成立をこの方面からのみ解釋し得ると信ずる者ではない。寧ろ純粹にこの意味に於いてのみ成立してゐる社會は、今日の世界に於いては最早考へることが出來ないであらう。とは云へ、この種の社會は種々の變形の下に未だ今日の世界に殘存してゐる、この事實を認めぬ者は餘りに樂天的に失すると云はなければならない。この社會に於いて團結の中心力となるものは、強者又は特權階級の利己主義である、その利己主義の力強さである。さうして奴隷となる者の側に於いては、畏怖若くは打算として現れる彼等の利己主義が、彼等を促して、宿命の如く強者の支配統制の下に走らしめる。彼等は、磁石に吸はれる鐵片のやうに、若くは灯火に慕ひ寄る夏蟲のやうに、強者の周圍に吸ひ寄せられずにはゐられない。併しこの社會の結合力は此處にあるが故に、それは強者の力が衰へるか、弱者の力が增大するかによつて崩壞するであらう。其處には物理力による強制的團結があるのみで、心と心との內面的結合の力が働いてゐないからである。

併し強者若くは特權階級の利己心による統一は崩壞しても、猶其處には利己主義を基礎とする別樣の社會が成立し得

なり、それは、多くの利己主義者が同等の地位に於て利益を競爭するところに於て調達する一種の均勢である[illegible]。[illegible]社會は、如何なる強者によつても、久しくこれを維持することは極めて困難である。抑壓せられ虐使せられ搾取せらるゝ者の、不平や、怨恨や、羨望や、嫉妬や、陰險な執拗な、復讐心などは、互ひに醗酵し次第に醞釀して、早晩強者の專制を覆滅する爆彈とならずにはゐられないであらう。況してそれほどに強くも非凡でもないものが、此途によつて最高可能の利己主義的滿足を求めむとするは甚だ危險である。故に少しく怜悧に、少しく溫和に、少しく自知の明ある者は、異れる途によつて同一の目的を達せむとする。他人の所有を掠奪してこれを自己のものとすることは愉快であるが、併し力の優れた者が勝手に他の所有を掠奪することが出來るやうな社會では、自己の所有も亦何時強者によつて奪ひ去られるかもわからない。自分がその社會に於ける最强者であるといふ自覺を持たぬ限り、寧ろ多數の人が相連合して、一般に掠奪を禁じ、團體の力を以て掠奪者を處罰すべき申合せを作つて置く方が、大局から見て結局自分の利益である。又此處に非常な儲け口があつても、一人の力ではこれをどうすることも出來ないか、若くは多數が共同することによつてその利益の率が大に增加するかする場合に於いては、或る規則による利益分配の約束の下に、多くの利己主義者の團體が組織されるであらう。さうしてこの團體は、他にこれを威嚇する敵を有するとき、共同防禦若くは共同攻擊の目的のために、更にその結合を鞏くする。かくて、或程度の制限の下に最高可能の利益を享受せむとする者の、保護と共同利益と共同攻守とのために、其處に一種の社會が成立するのである。さうして第一種の社會にあつても、强者がその特權を鞏固に維持せむがためには、相互の間に第二種の社會を組織して、奴隷の反噬を顧慮し、勞力の掠奪を完全にする必要あるが故に、第一種の社會は早晩その中に第二種の社會を孕まずにはゐられないであらう。第二種の社會は、其基礎となる利害の一致がある限り、前者に比して一層自然であり一層內部の矛盾が少い。從つて吾々は今日の世界に於いて

も、利己的約束を中心の團結力とする多くの社會を見ることが出來る。この社會は、一人若くは數人の利己心によつて強制的に結合せられるのではなくて、各成員の利己主義が相集つて自然にその團結を固めてゐるのである。併し利己主義によつて集まる者は又利害の背反によつて離散せざるを得ない。而かも利害の一致とは極めて頼み難き結合の根據である。事情の變化は、昨日の敵を今日の味方となし、今日の味方を明日の敵とする。人間の利己主義が完全に征服されぬ限り、利己的商量を基礎とする社會形式は容易に凋落せぬであらうが、併しこの形式に從つて組織される個々の社會は泡沫のやうに且つ結び且つ消え失せる。此處にも亦、心と心との内面的結合が深くその社會の根柢を固めてゐることがないからである。

併し第三の社會は――人格的結合を基礎とする社會は、前に述べた二種の社會の缺點を超越する。他人をも亦自己と等しき人格として敬重するところには、固より主人と奴隸との對立といふやうなことは存在することが出來ない、從つて奴隸の反噬によつて崩壞するやうな危險は、この社會に於いては決してあり得ないのである。又人格の根本義は、私(1)が他の場合に於いて述べたやうに、それが超個人的な、先驗的なものによつて統一されてゐるところにあるとすれば、個人相互の間に於ける利害の背反といふやうなことは、結局この社會の基礎を脅かすだけの力を持つことが出來ないであらう。人が無條件に自己の利益を追求すればこそ、利益を異にする他人と結合することが無意味にもなつて來ようが、凡ての人が凡そ眞なるもの、善なるもの、美なるもの、聖なるものを追ふ點に於いて一致してゐる限り、利害の一致不一致の如きは、このより高き目的に於いて結合することを妨げ得る譯はないのである。自由な、獨立した人格の、相互の敬重と愛とを基礎とすることによつて、社會は始めてその内面的結合を全くすることが出來る。若し社會がこの基礎を缺く、若くはこの基礎の上に自分を建て直さうとする情熱と努力とを缺くならば、それはたゞ直接間接の形に於け

こ慾と利慾との機關であるにとゞまつて、人格を向上せしめるための缺くべからざる契機としては、[illegible]たぬものとなつてしまふであらう。

とは云へ、人格的結合を基礎とする社會といふやうなものは、徹頭徹尾利己主義者であるやうに見える吾々にとつて果して可能であるか。それはたゞ白日の夢に過ぎないやうなことはないであらうか。

二

この問題を考察せむとするに當つて、吾々の注意は人生に於ける二つの不思議な事實にひきつけられる。第一に、吾々が自己の周圍に居る者を何氣なく他「人」と呼んでゐながら、その實、吾々は如何に彼等を人ならぬ物として、他人ならぬ他物として、取扱ふに馴れてゐることであらう。彼等は、食物や衣服や財産や、山や海や河と等しく、吾々の生涯の行路上に投げ出されて、或ひは吾々の生を妨げ、或ひはこれを助成する、有用若くは有害なものの一種である。吾々は自分にとつて都合のいゝものを、抱き、愛し、歡迎する。さうしてそれが自分の邪魔になるときには、憎み、怒り、足ずりをする。彼等も亦吾々と等しく、それ自身の喜びと悲みとを持ち、與へられた命の芽を彼自身の仕方に從つて育てて行かなければならぬ人格であることは、極めて多くの場合に於いて忘却される。利己主義者には自己以外に「人」といふ者はない筈なのに——彼にとつては、凡て自己以外のものは、彼の慾望を充すための器械や道具や物質に過ぎない筈なのに、吾々は極めて多くの場合に於いて利己主義者として振舞ひながら、猶僭越にも吾々の對手になる者を他物と呼ばずに他人と呼んでゐるのである。少くとも私にとつては、この事は人生に於ける大なる不思議の一つである。併し如何なる利己主義者にとつても、人といふ物は一種特別な物質である。利己的目的の手段として他人を取扱ふ際

にあつても、彼はこの器械の特別な性質を豫定して、その性質にふさはしくこれを利用することを心懸ける。これを怒らせれば反噬する物として、待遇が惡ければ怠業する物として――約言すれば、少くとも慾望の主體なる「心」の持主として、これを取扱ふに特殊の途があることを彼は意識してゐるのである。併し吾々は如何にして人間と呼ばるゝ肉塊に心があることを知ることが出來るか。吾々の見るを得るものは、たゞ横目縱鼻、兩手兩足を持つ一團の肉體である。吾々の聽くを得るものは、たゞその肉體から漏れる鳥語や雨聲に似た一種の音響である。然るに吾々がこの肉團を目して、慾望の主體、心の持主、統一ある自我と考へるのは如何なる理由によるか。これも亦人生に於ける一つの大なる不思議と云はなければならぬ。

リップスはこの第二の不思議に答へるに感情移入の概念を以てした。[2] 私も亦此處に、彼の根本思想に從つて、簡約にこの事實の說明を企てようと思ふ。凡そ喜や悲や、怒や歡樂や、希望や失望や、物に惹かれ物を追ふ慾望や――約言すれば人格のあらゆる生活は、吾々がたゞ自己の內にのみ體驗するを得るところである。さうして喜怒哀樂等樣々な精神活動の表象も亦、過去に於ける此等のものの體驗なしには成立することが出來ない。從つて、吾々自身の側から云へば他人の喜怒哀樂等も亦、吾々自身の體驗を基礎としてのみ理解し得るところである。顏面と聲音と身體の全體とを以てする他人の表情が、眞正に「表情」としての意義を獲得するのは、畢竟此等のものを見聞することによつて、吾々自身の體驗、若しくは吾々自身の體驗の表象が、見聞するものゝ性質に相應する變化を受けて吾々自身の中に喚起されるからでなければならない。たゞそれは、他人の身體運動と必然的に結合さるゝ自己の體驗若くは體驗の表象であるが故に、吾々はおのづからこれをその人の喜怒哀樂として解釋する。從つて他人の「心」とは、吾々の側から見れば、吾々自身の心の―― 感情の移入に過ぎない。それは吾々自身の感情の移入であるが故に、若しこれを妨害するやうな事情さへな

[illegible]れば、自分自身の中から湧き出した感情と同様に、[illegible]
お純粹である限り、吾々は何等の利己的商量なしに、涙に濡るゝ他人の顔を見れば、自分自身のそれと等しくこれを拭はむとする衝動を感ずる。又吾々が幼兒の微笑を見て我知らず自分も微笑するのは、決してこれによつて他人の歡心を買はむがためではない。他人の心が吾々に響を傳へるのは――換言すれば「同情」といふ現象は、利己主義的打算の動機を以ては到底說明し難き、一層原本的な、一層直接な人性の必然である。さうして利己主義者がその奴隷に對して、彼等が一種特別な物質であることを感ずるも、畢竟彼が知らず識らずの間に自ら體驗した感情移入によつて支配されてゐるからでなければならない。彼はその奴隷を見て、最初には何の利己的商量なしに、彼等の心が自分に響いて來ることを感ずる。併し彼の中心を支配する動機が同情ではなくて利己主義であるが故に、彼はこの感情移入に深入することなしに、たゞ此の如き心を持つ動物はこれを如何に取扱へば最も有利であるかの問題にこれを轉用するのである。この場合の感情移入は畢竟發育せぬまゝに流産して塵に塗れ泥に汚された感情移入である。かくて利己主義者は、その感情移入から彼の世間的怜悧(クルークハイト)を造り出した。併し彼の世間的怜悧の基礎にも亦感情移入の作用が含まれてゐるといふ事實は、如何なる人も徹頭徹尾利己主義者ではないことを――感情移入による同情も亦人間にとつて原本的なものであることを――證明するものと云はなければならない。人間には固より利己心があるが、彼は先天的の利己主義者ではない、彼はたゞその同情を殺すことによつて利己主義者となるのである。第二の不思議に對する考察は、吾々をこの結論に導く。

或一部の人の觀察に從へば、子供は人間のうちでも最も利己的なものである。彼等は他人の便と不便と幸福と不幸とに顧慮することなく、性急に無遠慮に自己の慾望の滿足を求める。さうしてその滿足を與へられなければ、泣いたりわめいたりあばれまはつたりする。實際外觀を一瞥すれば彼等は人生に於ける最大の暴君であるらしくも見えるであらう。

併しその同じ子供が、友達の泣くのを見れば自分も大聲に泣き出したり、友達がほしさうな顏をしてゐるのを見れば無邪氣にその玩具を呉れたがつたりするのは何故であるか。吾々はこの純眞な、打算を超越した同情を、彼の利己主義によつて説明することは到底出來ないであらう。此場合に於いては、子供が大人のやうな反省と熟慮との能力を缺いてゐるがために、この方面からの説明は大人の場合よりも一層困難を加へる。寧ろ吾々は、此の如き不可能の説明を試みる代りに、彼の無遠慮な利己的態度と彼の打算を忘れた同情との根據を、兩者に共通な或るものに——彼の無邪氣に求むべきである。彼には未だ大人のやうな豐富な經驗がなく、彼の智力——特に反省の能力は未だ甚だ幼稚であるが故に、彼は自他の所有を區別するを得ず、自己の衝動を抑へることが出來ない。從つて彼を動かすものはたゞその時々にその心に盛り上つて來る現在の欲望である。その欲望が或物をいじつたり壞したり喰つたりすることであれば、彼は何人の所有なるを問はず自らこれをいじつたり壞したり喰つたりするとを求める。併し他人に與へむとする衝動がその心に盛上つて來るとき、貯蓄して他日の用に備へようとするほど利己心の發達して居らぬ彼は、痛快にこれを他に與へて顧慮するところがないのである。故に、私の見るところに從へば、子供の生活を以て人間が利己主義者であることの證明とせむとする者は、未だ盾の一面を見て居るに過ぎない。他の一面を見る者にとつて、寧ろ子供の生活は人間が利己主義者でないことの明瞭な證據を提供してゐるのである。

大人の生活に於いては、人間の利己主義も同情も、共にこれほど簡單直截に表出される譯に行かない。彼の利己的動機は巧みに正義と同情との假裝の下に潛み、彼の同情は自己の利害を顧慮する打算の念と絡む。此處では美しきものは醜きものと混じ、光と暗とは複雜に相交錯する。併しそれほど不純な、欺りの多い大人と雖も、美的觀照の瞬間に於いて、猶純粹な同情の心を體驗することを許されてゐるのである。心を専らにして一つの藝術を觀賞するとき、吾々は次第に

現實的利害の觀念を超越して、作者の立場に同化することを意味する。さうして鑑賞の度が深まれば深まるほど、この同化は益々完全の度を加へる。藝術品の中に表現せられたる世界には、固より利害によつて動かされ行く人生の姿が幾度かその影を見せるであらうが、吾々はこの世界を見るに作者自身の眼を以てし、作者自身の心を以てする。縱令作品そのものは利己主義に基く生死の鬪爭を描いてゐるにしても、これを描く作者の立脚地と鑑賞者との間には何の隙もあることを許されないであらう。作者と鑑賞者との間に鬪爭あるのときは即ち美的觀照が全體として破壞されるのときである。美的觀照は作者の立脚地に同情することによつて始めて成立する。從つて苟も自ら美的觀照の體驗を持つほどの者は、少くとも或る瞬間に於いて、人間は利害を忘れて對象の觀照に沒頭し、これに同情しこれに同化して、對象の心を以て心とすることが出來るといふ事實を疑ふことが出來ない。その瞬間は如何に稀有であつても、この稀有な瞬間は明かに吾々の中に潛む無限の可能性を證明する。この意味に於いて、吾々はリツプスと共に「美的感情移入とは、同情の事實を純粹に表示して、吾々にその本質を認識させる一つの實驗のやうなものである」と云ひ得るであらう。利己的動機を基礎とせざる物我自他の融合は、恍然として美しきものに見惚れる刹那の體驗が虛僞でない限り、決して不可能ではないのである。問題は吾々が如何に純粹になるか、如何に集注するか、如何に對象の中に透徹するかにある。此等の條件が具備しさへすれば、利己主義者ならぬ人間の面目は、雲裂けて日出づるが如く明かに輝き始めるであらう。

併し吾々は本來利己主義者ではないとすれば、現實生活に於ける吾々の態度が、何故にあれほど深刻に利己的であるか。吾々の同情が極めて多くの場合に蔽ひ隱されて、利己心のみ獨り勢を逞くするのは何故であるか。この問題は未だ何の答へられるところもない。第一の不思議は依然として吾々の解答を促してゐるのである。

三

繰返して問ふ、人間はどうしてこれほど利己的であるか。一言を以て答へれば、それは、現實の生活に於いては、純粋な感情移入（同情）の成立を妨げる事情がいつでも存在してるからである。私は茲に、その事情のうち最も重なるものの二つを擧げようと思ふ。一つは物象現實の意識である。もう一つは自我對立の意識である。

物象現實の意識とは何を意味するか。物象現實の意識とは、土地や家屋や衣服や調度や——凡て欲望の對象となるものを、その所有や使用や消費の關係に於いて、物理的因果關係の中にあるもの、換言すれば、それは甲が占有すれば乙が占有の自由を奪はれるもの、乙が消費すれば甲が消費の能力を失ふものと思惟することを意味する。藝術觀照の際に於いては、吾々は貧しき者に同情することによつて寸毫も自己の所有を失ふ必要がない。吾々はたゞ作者の貧しき人に對する同情に支配されて、貧者の苦しみを思ふ心に充たされ、彼等に彼等の欲するところを與へたいと願ふこゝろで一杯になつてしまふ。併し作品の翫賞に於いてこの心に滿るあひだ、吾々の衣服や財産が書齋の窓から飛び出して行くといふやうな現象は、お伽噺の中ででもなければ發見することを得ないのである。然るに吾々がこの心を現實生活に於いて實行しようとするとき、一枚の着物を與へるとは一枚の着物を脱ぐことである。一椀の食を與へるとは一椀の食を自ら節することである。茲に於いて同情の實行と自己の利慾とは正面衝突を惹起さずにはゐられない。顧みて自己と自己の家族との飽暖を思ふとき、今日の飽暖に障碍なきも明日明後日の飽暖に對する準備如何を考へるとき、又蓄財によつてその支配慾の滿足を求めむとした最初の一念を想起するとき、吾々は與へむとして差出した手を再び引込まして自分の懐を先づおさへて見ようとする衝動に驅られる。さうしてこの衝動の亢進するや、吾々は貧しき者の勞力を掠奪して

自家の懐を肥すことさへも企てるやうになるのである。

同様の現象は貧しき者の側に於いても亦行はれる。藝術品のうちで豐かな、日の光の輝き生活の描寫を讀むとき、吾々も亦その瞬間に於いては豐かな惠まれた者である。作中の世界に同化することによつて、貧者はその貧苦からの瞬間的解脱を味ふことが出來る。併し醒つて現實の生活を見れば、敝衣は依然として敝衣であり、空腹は云ふまでもなく空腹であることをやめない。茲に於いて彼等は益々明瞭に、この豐かな惠まれた生活が自分には奪はれたものであることを意識する。かくて彼の中には、羨望と憎惡と反抗と破壞との慾望が猛然として湧き出して來るのである。地獄のどん底にゐる者に對して天國にゐる他人の幸福を喜べといふのは、固より無理な注文と云はなくてはならない。彼等は面を背けて天國の幸福を見ることを——同情することを拒まうとする。寧ろ單に見ることを拒むのみならずその存在をも否定してこれを爆破し去ることを冀ふ。他人を追ひのけて自ら其處に住むことが出來れば最上であるが、それが出來なければ、一切の者を悉く地獄に墮すことが彼等のせめてもの喜びである。實際自ら最も悪い生活をしてゐる者にとつては今日以上に悪い世界を考へることが出來ないであらう。凡ての者が最も悪い生活をする世界は、今日のやうに善い生活と悪い生活との差別ある世界よりも「より善い」世界と思はれて來るであらう。吾々がかう云ふ考方から脱却する途は、たゞ立脚地を高めること、利己主義以上の立脚地に立つこと、「豐かな惠まれた生活」は所有の多少によつて定まらず、凡て他人を除外する必要あるところには天國がないこと——此等のことを自覺するところにのみある。

併し吾々に養ふべき肉體があり贅澤と享樂とを求める慾望がある限り、此の如き立脚地の轉換は決して容易ではない。從つて物象現實の意識ときり離すことの出來ぬ現實生活に於いて、利己心の猛威が同情の動機を壓迫する理由は、極めて當然の自然現象として理解することが出來る。一旦この潮流に足をさらはれるとき、吾々の心を荒くするものは決して

自己の實際占有してゐるものや當然吾々の占有に歸すべきものを奪はれることのみではない。世界の何處かの隅に於いて或る著しき物を占有する者は――それが當然彼の權利であるとないとを問はず――吾々がそれを占有する可能性を奪ふ者として「癪に觸る奴」である。かくてそれが財寶であつても高位であつても美人であつても、苟も一の稀有な占有があるところには、必ず無數の嫉妬と惡意とが附隨する。さうしてそれは又「精神的」意義を本質とする物象にも波及せずにはゐられない。藝術品[3]は精神的生命の象徴として、吾々の心に人格的生命の共鳴を喚起するところにのみ意義を持つてゐるものであるが、鑑賞の機會を享受する便宜や、名品所藏の誇りを主として見れば、これも亦吾々の爭奪慾を刺戟せずにはゐない。又智識は他人に頒つことによつて寸毫も減少するものではないが、これを名譽慾や收入慾の手段として見る者にとつては、學者の特權を獨りに恣するために、殆んど專賣特許をさへ必要とするであらう。彼は第一の學者たる名聲を維持するために自己を追ひ越さうとする者を陷れる必要をさへ感ずるであらう。かくて現實生活の地獄は、複雜を極め怪奇を極めたものとして吾々の眼前に展開される。[4]「侶を除外することを必要とする」ところに心を置く限り、吾々は到底この地獄を脱却することを得ないのである。

併し吾々の考察はもう一歩を進めなければならない。若し吾々が物象現實の意識を如何ともすることが出來ないにしても、他人の食ふ物が吾々の腹をふくらすことを信ずることが出來るならば――凡そ他人の享樂が吾々から何物をも奪ふところがないことを信じ得るならば、吾々はこれほど甚しく「自己のために」する必要を感じはしないであらう。物象現實の意識が「侶を除外することを必要とする」利己主義に變形するのは、其根柢に自我對立の意識――換言すれば彼我對立の意識があるからである。さうしてこの意識は、單に物質爭奪の衝動のみではなく、又更に人格價値を目標とする誇示と凌駕と嫉妬と排擠との衝動をも亦激發する。他人の人格の偉大は、あらゆる意味に於いて吾々の人格の劣惡

を必要とするものではない。寧ろ眞正に偉大な人格は、後に云ふやうに、[illegible]

は、その偉大を保持するためにも、又その偉大によつて幸福を享受するためにも、他人の偉大が必要である。併し偉大な人格はこれを感ずることが出來ない。他人の偉大が直ちに彼自身の偉大ではないことを感ずるとき、吾々はこれを讃仰することによつて向上の努力を刺戟される代りに、此處にも亦堪へ難き威脅と「嫉」とを感ずる。特に吾々が、人格の偉大にそれ自身の價値を認めずに、ただ物質獲得の手段としての意義のみを認めるとき、彼の偉大は吾々の影を薄くし、吾々から世間的勢力を奪ひ、吾々の利慾を妨げるものとして、嫉妬と憎惡との念を煽らずにはゐないであらう。從つて人間の偉大も亦それ自身に於いて無數の敵を挑發する。吾々が縱令聊かにもせよ兎に角サムシングとしてこの世に生活するとき、吾々は自分の全然豫期せぬところにさへ、數多きナツシングの惡意を刺戟してゐることを如何ともなし難いのである。況して吾々の偉大がこれを保護する無邪氣さを缺くとき、吾々は自己の偉力を以て此等の惡意ある者を飜弄したり虐げたりしてやらうとする誘惑を感ぜずにはゐられないであらう。從つて數限りなき無數の小さい闇は、光の中からさへ暗黑をひき出して來る。かくて殘虐と反抗と、慢心と阿諛と、侮蔑と匍匐とは互ひに相錯綜して、現實生活の地獄に一層の悽愴を加へて來るのである。

併し此の如き事情は人間の「同情」を根絶して、彼を徹底的利己主義者とすることが出來るであらうか。私はさうは思はない。私は寧ろ、最も悽慘な利己主義者にあつても、その根柢に於いては、殺されきれぬ同情が輝いてゐることを信ぜむとするものである。私は今茲に、嫉妬(5)の感情についてこれを證明して見たい。

嫉妬とは何であるか。それは（人格と人格との關係について云へば）他人の價値に對する憎惡を伴ふ羨望の感情である。從つて又他人の價値を――若くは他人の價値の外觀を傷けむことを欲する衝動である。故に嫉妬の感情が成立する

ためには、其處に三つの要素が具備してゐなければならない。第一に他人の高さを認識する智慧のないところには嫉妬はない。第二に自己の低さに對する自覺がないところにも嫉妬はない。第三に自己の偉大を求める意志がないところにも亦嫉妬はあり得ない。從つて他人の偉大を認めるほどの感覺を持たぬ鈍者にも、自己の低劣を感ずる能力を缺くやうな愚者にも、向上の志を知らぬ薄馬鹿にも、この意味の嫉妬は萌すことが出來ないであらう。これ等のものは一つ一つの要素としては皆人格の積極的價値を構成するものである。この方面から見れば、他人の價値に對して嫉妬を感ずるものは、嫉妬さへ感ずるを得ぬ痴呆に較べれば、遙かに人間としての「脈」があるといはなければならぬ。吾々は、嫉妬といふ猛烈な惡德の中からも猶德の要素を――特に他人の價値に對する同情の要素を發見して來なければならない。何となれば他人の價値を承認するとは、價値ある他人に對して感情移入を行ふこと、換言すれば同情を基礎として始めて成立する心理だからである。

然らば人格の積極的價値をなすものが三拍子揃ひながら而もこのやうな惡德を合成するのは何故であるか。それは彼自身の意志が、この三つの德に對して自ら反抗するからである。その意志がこの三つの要素を否定する方向に働かうとするからである。彼は餘儀なくも他人の價値を承認する。が、彼はかくの如くにしてこれを承認しなければならぬことを苦々しく思ふ。又彼は餘儀なくも自己の低劣を感ぜざるを得ない。が、彼はこれを恥づる代りに、低劣を低劣のまゝに是認する途に腐心する。さうして彼の向上の志は外部的末梢的な刺戟を受けるのみで、これを向上の努力の原動力とせずに、却つて他の偉大を毀傷せむとする墮落の方向に動いて行かうとする。要するに彼の中には二重の誤謬があると云はなければならないであらう。偉大な者の傍にあるとき、低劣な者は一層低劣に見えるといふのは、視覺錯誤の法則であつて事物の本質に適用せらるべきものではない。偉大な者をも低劣にすれば、低劣な者は確かに外觀上目立たなく

たこで[illegible]しかくすることによつて彼は本當に自ら成長するのではない。[illegible]においては、[illegible]を陥れることによつて、彼自身の低劣の度は新たに甚しさを加へるのである。若し彼が本當に自ら高くならうと欲するならば——高く見せようとせずに高くならうと欲するならば——彼の採るべき道はたゞ徐々として自己を養ふことのみである、低く見らるゝの恥辱を忍び、この恥辱をさへ向上の道に進ましむる笞として、一歩一歩自己を築き上げて行くことのみである。然るに彼はこの眞理を忘れた。此處に彼の第一の謬誤がある。さうして彼の第二の誤謬は彼我對立の世界のみを見て、別に彼我融合の世界があることを見失つてゐるところにある。吾々の仲間に一人の偉大な者があるといふ事實は、人類の中に含まれてゐる無限の可能性の保證として、吾々自身の努力の生活をも亦保證せずにはゐない。さうして偉大な者を瞻仰してその偉大な所以を學ぶことは、自ら偉大の途を行かむとする者にとつて絕好の參考となるであらう。かくて偉大な人格は、吾々の向上の志を刺戟し、吾々の向上の努力を保證し、又實際吾々の向上を援助する。これは彼の偉大が決して彼のみの偉大にはとゞまらないからである。人生をこの方面から見ることを學ぶことによつて、吾々は始めて人類社會の一員としての資格を具備するのである。

以上の考察によつて、吾々は、人格的結合の困難と可能とを同時に認識し得たと云つて差支がないであらう。吾々の社會生活は固より美的觀照の對象のやうな美しき假象の世界ではない。吾々は物象現實の意識と自我對立の意識とを根本假定とする世界の中に生きながら、戰ひによつて——特に自己の內に向けられた戰ひによつて、自他融合の世界を打開して來なければならない。それにはたゞ美しきものを見ることだけではなくて、美しき人格を築き上げて行くことが必要である。この努力が如何に困難であるかは、吾々の熟知してゐるところであるが、併しこの困難な努力を根柢とせずには、當來社會の基礎は決して築かれないであらう。當にあるべき社會は、自然によつて與へられたものではなくて、

使命として課せられたものである。自然はたゞその可能に對して或程度の保證を與へてゐるにとゞまる。過去に於けるあらゆる社會が著しく利己主義的であるといふ事實は、決して當來社會の根據を薄弱にするものではない。此の如き社會でなければ吾々の内面的結合を全くすることが出來ないと信ずる信念は、此の如き社會の權利を證明する何よりの根據である。他のあらゆる場合に於けるが如くこの場合にも、"Du kannst, denn du sollst" (可能なり、何となれば當爲なるが故に)といふカントの言葉は、吾々の困難な努力に策勵を與へてくれるのであらう。吾々はこの言葉に信頼して、當來の社會を人類の未來に建設するために、待つことを知る辛抱強い努力を續けて行くべきである。

四

吾々は既に人格の内面的結合を基礎とする社會の可能であることを見た。然らば吾々は如何にして此の如き新社會の建設を企つべきであるか。これは極めて複雜にして困難な問題である。併し當來社會の根本原理を一般的に考察することは、吾々が自分の倫理的立脚地を明確に攫んでゐる限り、必ずしも企て及ばないことではないであらう。私の考に從へば、當來社會は、その成員について云へば、最も深い意味に於いて自由な人格――リップスの所謂君主人によつて組織せられなければならぬ。さうして君主人と君主人とは二つの正しき愛によつて――ダンテの言葉を用ゐれば l'amor della spera suprima(至高の世界に對する愛)とcarita (隣人の愛)とによつて結合されるのみならず、又この愛を以て君主人ならぬ者との結合をも求めて行かなければならぬ。從つて當來社會の制度は、この自由と愛とを保護し煦育することを第一の使命とすべきである。併し今私に許された時間は既に盡きた。私は玆で此等の事の細説に入るべき餘裕を持たない。故に私は、讀者をも自分をもだれさせぬやうに、追かけて次號に於いて多少の詳説を試みようと思ふ。

中央公論」大正十年一月號「人生批評の原理としての人格主義的見地」。阿部著「倫理學の根本問題」第一章、第二章、第三章。「美學」第三章第一節。リップスは、感情移入の理論を基礎として、人間は純な利己主義者でないことと、人間には利他と利己とを超越した人格價値の感情があることとを證明するプロセスに、到る所に於て透徹してゐる。此問題に關する私の思索も、大體に於いて彼の範圍を脫することが出來ない。以下私の述べるところは、必要上彼の所說を簡略に繰返しつゝ、自分自身の體驗と思索とによつて多少彼の所說を補つて行くに過ぎない。直接に彼の說を聽きたいと思ふ人は、彼自身の著書について熟讀玩味せられむことを切望する。その勞は必ず酬いられるであらう。

(3)「美學」特に第三章第一第二節、第五章第一第二節。

(4)ダンテ「神曲」煉獄第十四歌八五—八七。「思想」大正十一年一月號「ダンテ雜話」參照。

(5)「倫理學の根本問題」第二章、七〇—七二。憎惡と嫉妬と毀傷の喜び（シャーデンフロイデ）との感情の分析は、リップスの倫理學の中でも最も秀拔な部分の一つに屬する。彼は此等の部分に於いて、迂濶な一學究ではなくて、ニイチエのいふ意味の心理家（プシヒヨローグ）であり、彼自身の言葉で云へば「現實感（ヰルクリヒカイツジン）」の豐かな人であることを證明する。私のこの一節は主要な點に於いて彼の指導に從ひながら多少分析を細かにすることを心懸けた。

勞働政策上の差別觀から平等觀へ

林　癸未夫

一　考察の態度

吾等は決する前に先づ考へなければならぬ。考へる前に先づ見なければならぬ、華やかな論策や鋭い批評は、其データを形造る事實に誤謬や偏見が如何程附纏つてゐても、議論それ自體が十分讀者の興味を唆るものである。殊にそれが豫め用意された一つの結論の承認を讀者に強ゐるがために、組織的に組立てられた議論である場合には、普通の讀者は論理の妙、行文の技に眩惑されて、其議論の基礎を成す所の事實の正確さに就て餘り多くの注意を拂はずに、唯其上に建てられた議論のみを賞翫しやうとするに忙しい場合が尠くない。併し現代の如く思想上の急激なる過渡期に於て、特に泰西の新思想を輸入するに日も之足らざる現今の日本に於て、就中社會問題や勞働問題に特別のインテレストを有せらるゝ人々に取つて、最も大切なものは、豫言的な議論よりも、先づ事實に對するまちがひのない理解に在ると私は信ずる。吾等は一切の豫斷(プレジユヂス)から離れて、心靜に事實を正視しなければならぬ。斯くの如くにして吾等は事相の眞實に觸れることが出來る。かゝる眞實の上にのみ吾等は動かさる主張や、適切なる計畫を築くことが出來るのである。斯くの如き事實の正解から離れて、只單に理論に傾聽することの如何に危險であるかは、何人も良く之を知つてゐる筈である。

世には事物を取調べた後に來るべき筈の結論を先づ設けて置いて、然る後に其結論を護るに都合の好い材料のみを蒐集して歩く人がある。之は多くの場合意識して行はるゝことであるだけに、吾等がそれを避けることは難事でない。只吾等が觀察者として最も心せなければならぬことは、人間は自分の感情を樂しませる事物の價値を過大に見積り、然らざるものを過少に見積るといふ自然の心理作用を有することである。之は大抵の場合無意識に行はれることであるだけに、吾等は之を避けるが

爲に常に最善の注意を拂ふことが肝要である。吾等は又努めて先入主たる過去の思想、習慣並に自分一個の利害から自分を解放して、透明な偏見のない心を以つて一切の事象に對せなければならぬ。之は難事中の至難事であると同時に、要中の至要事である。吾等が公正に觀察し、正當に理解し、あるべき筈の眞實に到達するがためには、より以上大切なものを私は知らない。

私は日本現代の政治家、實業家、勞働者並に當世の時務に對し多少の責任と抱負とを有する一般の人士が、特に歐米の現狀を顧念せられんことを要請して息まない。何となれば歐米の現狀は之を對岸の火視するには既に餘りに世界の距離が短縮してゐるからである。歐米の國民に取り緊切な問題は、やがて吾が國民のためにも緊切な問題である。之が現存の社會制度から見て、安全思想の産物であるか危險思想の産物であるかを論ずるは無用である。安全であつても危險であつても其勢たるは同じだからである。そして民衆を驅るものは常に此勢である。勢は屢々舊い法律道德を破壞するのみならず、新しい法律道德を形造る。そして新しい法律道德の支配の下に更に新しい勢を醸す。斯くて世界は各人の好惡利害に頓着なく其の往くべき道を往く。そして改造は遂げられるのである。矢既に弦上を離れた以上は、何物をか穿貫しなければ止まない。之を空中に遮ることは最早絶對に不可能であることを知らなければならぬ。

二　批判の標準

併しながら吾等は改造の目的と手段とが窮極に於て是であるか非であるかを識別することを怠つてはならない。此識別なくしては吾等は去就を決することが出來ないからである。然らば此是非を識別すべき標準は何であらう。結局それはベンザムの標語たる「最大多數のための最大幸福」といふことの外にはないと私は信ずる。此觀念は個人の道德的意識を究明する倫理學の立場からは、鮮明を缺ぐの嫌ひがあるけれども、實際政治の理想としては、これで明白であり且十分である。從つて此標準に適ふものは常に是で、適はぬものは常に非である。例へば一家の富裕は誰に取つても望ましいことであるに相違ない。併し若し主人一人のみが美酒佳肴に饜いて、家族奴婢は皆營養不良の狀態に在らねばならないとしたら、彼等に取つては賤が伏屋も金殿玉樓に勝るであらう。一國の富强は願はしいことに相違ない。併し若しそれが國民大多數の個々の生活の幸福安寧に裨補する所がなかつたとしたら、畢竟それは一部の特權階級の功名心と奢侈慾とを滿足せしめるに過ぎないであらう。國家又は

[illegible]各個人は、[illegible]自己、自己の子孫、又は自己の同胞の幸福を増進し、安寧を保持する所以であるといふ確信の下に於てのみ、甘じて此犧牲に堪へることが出來るのである。然らざれば良心は敢然として犧牲を拒むであらう。しかすることが又道徳上肯定されなければならない。尤も事實問題としては各個人は、今當に自己に課せられんとする所の犧牲が、之を甘受するに値するか何うかを、正當に判斷し得ない場合が屢々ある。或個人又は或階級のみの野心に滿足を與へ、其權勢を維持する方便に過ぎないことに氣づかずして、如何に可憐なる幾多の生命が喜捨されたかは、史上無數に示さるゝ所の事實である。個人主義的に十分覺醒してゐる筈の現代人すら、非常の場合に際しては、巧妙なる宣傳の係蹄にかゝつて、犧牲的精神を錯覺の間に喚起されることがあつたではないか。吾等は素より心して之を避けなければならない。殊に吾等が平素に於て冷靜に省察しなければならぬことは、現代の國家が果して如何なる程度に國民の精神的又は物質的犧牲を要求する權能を有する筈であるかといふ問題である。忌憚なく言へば、國民大多數の個々の生活の幸福安寧と、切實に相伴はない國家の富强は無意義であるのみならず、却て有害である場合が稀でない。國民大多數の立場より見れば、[illegible]識上の義務も、[illegible]れることを免かれる譯には行かない。

問題を産業界に限つても全く同じ事が言へる。企業の動機が黄金慾であるか、權勢慾であるか、或は活動、略取を好む人間の本能の發作であるかは姑く別問題とする。唯企業家の當るべからざる熱心と努力とが大部分の場合に於て公的でなくして私的の動機から出でゐることは、爭ひ難い事實である。但し現代の産業國に於て、企業家の心事が私的であるといふことは、彼等の企業の効果が公的であるといふ自然の結果を寸毫も左右するものではない。資本主義勃興以前の生産は唯個人の日常生活の必要を充たすに足る程度に限られてゐた。人々は自己の用を充たすがための必要品は出來るだけ自身之れを製作するを原則とし、自身製作することの出來ない物品のみを他人に依賴した。依賴を受けた者は自己の用を充たすがためにする勞力の餘剩を以て、他人の物品を製作したが、依賴を受けなければ決して自己の必要品以外の物を製作しなかつた。即ち一切の生産は交換を目的としないで直接の使用を目的としてゐたのである。斯くの如き時代に於ては産業上に傭主被傭者の雇傭關係はなくして、唯主從若くは師弟の關係があつたばかりである。然るに資

本主義の勃興は此關係を一變せしめた。すべての物品は使用のためよりも交換のために製作された。需要よりも供給が常にイニシアチーヴを有つやうになつた。明敏にして打算的なる企業家は、人間故有の美的觀念や安易豐富を求むる本能を刺激するがために、常に新奇巧妙なる發明を奬勵し且迅速にそれを企業化することを怠らなかつた。斯くの如くにして供給は需要を指導し、需要は更に次の供給を誘發した。そして機械と動力との發明に依つて產業は躍進的に發達して、大規模なる分業組織と工場經營とを現出せしめた。現代のインダストリアリズムの基礎は實に茲に確立せられたのである。

產業が大規模なる分業組織になつた事と、その必然の結果として何人も自己必要品中の極少部分のみを自ら製作するか、或は全然製作しないで、全く他人の製作品のみに依賴するやうになつた事とは、あらゆる企業の公的性質を極度に擴大せしめた。それにも拘はらず企業家の心事が私的であるといふ事實は依然として存續してゐるが故に、茲に企業家の私的立場と企業の公的性質との間に、動もすれば相容れ難い扞格を生ずる危險が著しく增大して來たのである。此場合に企業家に對して、公共の利益と相容れない限りに於て自家の利益を放棄することを勸告するは固より不當でない。併し其勸告は企業其者の存立を危うしない程度內に嚴に限らなければならぬことは勿論である。企業は言ふまでもなく第一に資本を要する。併しながら資本に對する利率のみが必ずしも企業成立の條件ではない。何となれば一切の企業は單に不勞所得を目的とする「金持ち」の投資のみに依つて成立し得るものではなくして、別に活潑にして怜悧なる「仕事師」の計畫と經營とを必要とするからである。此故に假令「金持ち」には相當の利子を支拂ふことが出來たとしても「仕事師」の活動力を抑壓し又は痲痺せしめるやうな制度が强行されたとしたら、矢張產業は萎縮して其禍を蒙むるものは社會公共に外ならないのである。

果してさうだとすると、企業家を適度に保護奬勵することが國家社會のために必要であることを認めない譯には行かない。企業家を保護奬勵する方法としては、其報酬を厚くしたり、其名譽を表彰したりするが如き積極的な手段よりも、寧ろ彼等の企業的本能を思ふ存分に發揮することを妨げないやうな消極的方面に注意を拂ふことが一層大切である。何となれば企業的精神は藝術的精神と同じく、利害の打算よりも寧ろ本能の衝動に發端する場合が多いからである。

企業家を保護奬勵することにより產業は振興されるであらう。併しながらその振興された產業が、國家又は社會の大多數

者の幸福と安寧とに、何等かの形態に於て貢献するものでなければならぬといふことは、産業其者の存在が社會的に是認される所以の第一義である。若し其産業が大多數者の幸福と安寧とに貢獻する所がないか、或は特種の人々の奢侈慾のみを滿足せしめるに過ぎないものであるとするならば、國家又は社會は其産業の停止を命ずるか、或は之を企業家の手から奪うて、國家又は社會自らの利益のために之を經營し得るやうな方法を取ることが是認されなければならぬ。

更に進んで考へると、假令或種の産業は公共のために必要缺ぐべからざるものであつても、其産業經營の方法、例へば工場の設備、職工の待遇等に或種の制限を設けるか、或は其産業の管理の方法、例へば原料の購入、製品の販賣等を掌る機關に何等かの制肘を加へるか、又は其産業自體を全部公共團體の經營に移すことが、大多數者の幸福と安寧とを被護增進するために一層有効であると云ふ事實が、理論上及實際上證明せられたならば、吾等は斯くの如き方法を採用するに躊躇すべき理由はないのである。

此故に吾等は新しい政策を吟味するにも、舊い制度を考察するにも、先づ嚴正なる批判の標準を最大多數者の上に置かなければならぬ。漫に新奇なるものを謳歌するは、徒に舊套を墨守することと等しく有益でない。然しながら若しも以前のものに代るべきものが大多數者により多くの幸福と安寧とを與ふべき可能性を有つてゐるならば、吾等は安じて舊を去り新に就くことが出來る。吾等は勢を察すべくして勢に驅られてはならぬ。同時に勢なるが故に理にあらずと豫斷してもならぬ。吾等は常に虚心して是非鑑別の標準を「最大多數のための最大幸福」に置くことを忘れてはならない。

三　産業萬能主義

十九世紀の文明の精華は驚異すべき産業の發達であつた。産業發達の主動力は活潑にして打算的なる資本主義的精神の高調に在つた。資本主義的精神の高調を誘發したものは、十八世紀末の政治的革命に依る第三階級の解放であつた。解放されたる第三階級は政治に科學に經濟に有らん限りの活動の天地を開拓して行つた。彼等は恐るべき征服者であつた。あらゆる障害は彼等の撓まざる勇氣と努力とに依つてつぎ〳〵に破碎された。しかのみならず哲學は彼等の自由を保證し、經濟學は彼等の立場を擁護し、政治は彼等の活動を奬勵し、科學は彼等の功名心を鼓舞した。一切のものは彼等の便宜のために備へられてゐるやうに思はれた。斯くの如くにして彼等は莫大なる生産と消費

との手段を通して人類の社會生活の樣式を根柢から改造してしまつたのであつた。斯ういふ彼等の事業を指導した精神を私は假に產業萬能主義と名づける。此產業萬能主義の一大勝利に必然的に隨伴した諸種の新現象中、最も社會全班の利害に痛切なる影響を及ぼしたものは、實に勞働者といふ特種階級の出現であつた。茲に所謂勞働者とは賃金勞働者を意味する。詳しく言へば勞務を給付して若干の報酬を與へられる雇傭契約の一方の當事者たる人間である。此種類の人間の夥しい增加、人類の最大多數が此方法を以てするより外に生きる途が見出せない程に增加したといふことが產業萬能主義全盛の最も顯著なる結果であつた。前節に述べたやうに產業萬能主義勃興以前の生產は、大部分小規模なる家庭工業に依つて行はれてゐた。工業主は現代の意味に於ける傭主ではなくて、主人又は師匠であつた。其助手は被傭者ではなくて奴僕又は弟子であつた。彼等相互の關係は決して雇傭關係ではなかつた。奴僕は勞務の給付者ではなくて、只忠實なる從者としての位地に在つた。弟子は一定の年期奉公を果した後には、必ず自ら獨立の工業主たるべき保證を與へられてゐた。師匠も弟子も等しく職人として同一の階級に屬してゐた。師匠が弟子以上に特別の社會上の地位を要求することは、上層階級から見れば潜越であつて、弟子から見れば汚辱であつた。彼等の關係は家族的情誼に依つて緊切に結びつけられてゐたのであつた。

斯ういふ關係は產業革命以來の大規模なる機械的生產方法に依つて大部分絕滅してしまつた。最早其處には主從の誼もなければ、師弟の情もない。唯相互に經濟的の打算に依つて結ばれる傭主被傭者の關係が在るばかりである。しかも斯ういふ關係の下に置かれた勞働者の數は、傭主の數に數百千倍する程の夥しき多數に上り、終に人類の最大多數を抱擁する一大階級を形造るまでに至つた。これは吾等が今日見る所の明白な事實である。

斯くの如き勞働階級の出現は、必然產業萬能主義の社會全班に對する効果を批判するに、精到深刻なる考察を以てしやうとする一派の學者を生ぜずには置かなかつた　何となれば勞働者は社會の最大部分を占むるものであるから、若し批判の標準を最大多數の最大幸福といふ點に置くならば、產業萬能主義の功罪は　それが眞實の意味に於て勞働階級の幸福と安寧とに如何に貢獻しつゝあるかを、徹底的に檢討した後でなければ之を決定することが出來ない筈であるからである。

私は茲に直接又は間接に產業萬能主義を檢討し、其病弊を指摘し、其の勞働階級に對する政治的經濟的の禍害を芟除することを目的として、提唱された諸學說を敍說することを避けたい

といふ。これは革命に依らなくとも議會に多數を獲た結果であるからである。唯私は茲に是等の諸學說が勞働者を產業萬能主義の桎梏から救ひ出す方法として主張した所は、概ね雇傭條件の改善や社會政策的の施設ではなくして、寧ろ社會組織の改造や、勞働權の確認や、不勞所得の廢棄や、生產財の公有といふが如き根本的提案であつたことを指摘しなければならぬ。それは明に產業萬能主義の根幹に斧鉞を下さんとするものであつて、其性質の革命的なる點に於て、第二、第三階級を畏怖せしめると同時に第四階級を陶醉せしめるに十分であつた。

斯くの如き學說に刺激せられて起つた初期の勞働運動が多くの場合政治的であつたことは寧ろ當然と言ふべきである。英國ではチヤーチストの騷擾がそれであり、佛蘭西では二月革命や巴里コムミユーンの變がそれであり、獨逸ではラツサルやマルクス主義の信奉者に依つて起された社會黨運動がそれであつた。

併しながら暴力に依る威嚇や、選擧權の擴張を基本とする政權獲得の手段に依り、一擧にして其理想を實現しやうとする彼等の努力は、到底無殘なる失敗に了るか、さなくば餘りに前途茫漠であることが、次第に彼等に會得された。彼等は斯くの如き政治的手段に熱中するよりも、寧ろ現在の生活狀態を幾分でも向上することの出來る經濟的手段に依り、此に一步を進めることの方が、遙に賢明な策であることに氣がついた。而して其最も有效な方法として彼等が最も苦心經營したのは、勞働組合の發達に外ならなかつた。

四　過去の勞働政策

勞働階級の運動目標が政治的から經濟的に推移したことに依つて起つた重要な結果は、勞働者保護立法の發達であつた。如何に達識な政治家も政治的革命の聲に對しては、畏怖から起る壓制の政策を用ゐるに躊躇しなかつた。併し勞働者の要求が單に傭主に對する反抗であり、雇傭條件の改善に止つてゐる限りは、政治家は案外冷靜であり又割合に寬容であつた。しかのみならず彼等は時としては進んで勞働者保護の施設を講ずることが、革命熱の危險から自ら衞る所以であると考へた。英吉利の一八七〇年以後の勞働組合に關する法制、北獨逸聯邦の一八六九年の營業法中の同盟罷業禁止條項の廢止、佛蘭西の一八八四年の同職勞働組合の公認等は丁度此時代の雰圍氣の中から生れた。殊に獨逸帝國統一後のビスマルクの社會政策的立法や、十九世紀後半以後の英國に於ける數次の工場法規は範を他の產業國に示した。其他の歐洲諸國、北米合衆國の諸州、濠洲の諸邦

は十九世紀の末から二十世紀の初めにかけて、それ〴〵の程度に新なる勞働者保護法の制度に忙しかつた。

一面に於て勞働運動直接の相手方たる企業家も亦勞働者酷使の必ずしも自己の利益でないことに次第に氣づいて來た。そして賢明なる傭主等は溫情主義に、利潤分配制度に、團體交涉權の承認に、勞働者愛護の實を示して銳意事業經營の圓滑を期するに至つた。

所謂社會改良家と稱せらるゝ人々も、産業萬能主義に隨伴する社會的疾患を緩和するために熱心なる運動を開始した。住宅問題に、感化事業に、救貧制度に彼等は効果少き、併しながら尊い努力を惜まなかつた。

是等の政治家の力に依つてする勞働者保護立法や、企業家の施設に係る職工優遇制度や、社會改良家の努力に成る救濟事業等の不統一なる配列が、過去に於ける勞働政策の輪廓を形造つてゐた。具體的に言へば、工場法、傷害賠償法、社會保險法、勞働組合法、職業紹介所、勞働爭議和解仲裁制度、最低賃金法、住宅組合補助制度、施療院、感化院、特種教育、工場内の幸福增進施設、團體交涉等が即ちそれであつた。是等の勞働政策は多少の程度に於て各産業國に行はれざるはなかつた。

唯吾等が玆に明確に會得して置かなければならぬことは、如上の過去の勞働政策は、主義として賃金勞働者としての彼等の社會的境遇や、産業經營上の從屬的地位には何等の變更をも試むることなしに、只彼等の生活の內容を幾分かづゝ改善してやりたいといふ程度に限られてゐたといふことである。言ひかへれば過去の勞働政策は人類の最大多數が勞働階級に屬することを既定の事實として、亦人力の左右することを得ざる必然の運命として之を承認し、只此階級として權利づけられたる範圍内に於てのみ其生活を出來るたけ豐富ならしめんとするに過ぎなかつた。畢竟勞働政策の基調は、階級對階級の差別觀に膠着して敢て渝ることを欲しなかつた。若し勞働階級が此差別觀を無視するやうな要求を提起するならば、それは危險思想として忽ち抑壓を免れることは出來なかつた。

斯くの如くにして世界大戰前に至るまでの歐米各國の勞働者は、賃金勞働者としての其社會的地位には何等の異動もなかつたとは言へ、種々なる勞働政策の裨補に依つて、幾分づゝ其生活狀態を向上しつゝあつたのである。彼等の生活狀態は現代の文化が要求する諸條件には缺ぐる所が多かつたとは言へ、之を半世紀乃至一世紀以前の彼等の父祖の生活狀態に比較するならば、確に數段の進境を示してゐたに違ひない。此意味に於て彼等は過去の勞働政策に感謝すべき理由がないとは言へないので

ある。

五　戰爭に促進されたる勞働階級の自覺

私は既に勞働階級の出現が産業發達の避くべからざる結果であつたことを述べた。而して世界大戰前までの各國の勞働政策は概ね勞働者を雇傭關係に依る賃金取得者としての地位に膠着せしめた儘、其生活を改善しようとする努力であつたことを述べた。併しながら今や吾等は世界大戰を一轉機として、茲に新しい歴史の第一頁を開くべき機運に見舞はれたのである。

最初大戰が勃發した時、それが餘りに咄嗟であつただけに、各國民の傳統的な愛國心は不意の衝動に燃え上つて反省の暇もなかつた。開戰の數日前白耳義の首都に參會して、社會主義者の國際的協力に依り、同胞殺戮の罪惡から各國の勞働者を救濟しやうと決議した獨佛其他の社會黨員が、此決議に効果を與へるために、急遽自國に歸還した時には、彼等の同僚は既に「偏狹なる愛國心」に捉へられんとしてゐた。數日を出でずして宣戰は、スチームローラーの如くあらゆる物情を強壓して、聲高く布告された。獨佛英の政府當局は慷慨悲憤の熱辯を揮うて、擧國一致未曾有の國難に殉ぜんことを國民に要請した。而して各國社會黨員は、此愛國的熱情の暴風の前に、散亂する枯[illegible]主室中に[illegible]國會議員中眞先に從軍を志願して眞先に戰死した。[illegible]權の花環を以て飾られて、多年の政敵と雖、其前に粛然として襟を正さゞるを得なかつたのであつた。

併しながら戰爭久しきに涉るに伴れて、眞先に「偏狹なる愛國心」から目さめて、自家本來の立場を嚴正に省察しなければならぬことを悟つたのは、やはり各國の社會黨員であつた。彼等は開戰數日前に於けるブラツセル會議を想起して、互に忸怩たらざるを得なかつた。彼等は徐々に祖國といふ係蹄から脫け出さうとあせるやうになつた。

斯ういふ彼等の感情の最初の示現は一九一五年九月に瑞西チンメルワルドに催された國際社會黨會議であつた。此會議に出席しやうとした社會黨員は、國境を踰ゆることに多大の苦心を拂はなければならなかつたが、ともかく佛獨露瑞の社會黨員の若干は一堂に相會して、戰爭の原因と目的とに就て互の意見を交換するの機會を得た。併しながら彼等は未だ眞にナショナリズムを蟬脫して、インターナショナリズムに歸依し得る程の心の準備を有たなかつたが故に、此會議は終に罵詈の交換の裡に閉ぢられなければならなかつた。

併しながら戰局の推移は矢張彼等を安住せしめなかつた。彼等は前年の失敗を繰返すべく、翌年再び瑞西のキエンタールに集會した。が此時も亦議論徒に沸騰して何等の歸結をも見ずに散會せざるを得なかつた。戰爭の永續が絕對に勞働階級のために有害であることに就ては何人も異論はなかつたけれども、如何にして戰爭を終止せしむべきかの方法に就ては、何人も空想以上の名案を有たなかつたのである。

以上の二回の社會黨會議の出席者は、何れの國の社會黨をも正式に代表すべき權能を有する人ではなくして、言はゞ急進的な一部分のみを代表してゐたに過ぎなかつた。然るに露國第一回の革命後、ケレンスキー內閣は瑞典の首府に交戰國及中立國全部の社會黨及勞働黨の代表者會議を開催して、各自戰爭の目的を協議しやうといふ提案をした。これは言ふまでもなく社會主義者及勞働組合の非公式なる講和會議に外ならなかつた。而して此提案を最も歡迎したのは、チンメルワルドにも、キエンタールにも其代表者等を送ることを敢てしなかつた獨逸の多數派社會黨であつた。彼等は其領袖の殆ど全部をストックホルムに差遣して、彼等の講和條件を公表し、以て交戰國間の平和論を促進するに努めた。而して此差遣委員中には、獨逸に於ける最大の勞働團體たる自由組合（フライエゲウェルクシャフテン）の牛耳を執つてゐたレギーンの交つてゐたことを注意しなければならぬ。

それよりも、もつと吾等の注意しなければならぬことは、開戰以來獨逸の社會黨に對しても勞働組合に對しても、非常な反感を懷いてゐた英國の勞働階級が、右のストックホルムに其代表者を差遣することを大多數を以て承認したことであつた。之に反對したのは唯海員の組合のみであつた。何となれば獨逸の暴戾な潛航艇によつて、海底の藻屑となつた者は重に海員であつたからである。彼等は甘じて此の如き惡逆無殘の戰鬪行爲に出づることを、自國政府に認容した所の獨逸の勞働者とは、如何にしても一堂に會して、相倶に戰爭終熄の手段を議する程の寬容を有ち得ないと叫んだ。此悲痛なる主張は深甚なる同情を以て迎へられた。それにも拘はらず、英國勞働界の巨頭連中は擧つてストックホルム會議の參加を支持したのであつた。

當時英國政府は高壓的に之に干涉したがために、事實英國勞働者の代表者と、獨逸勞働者の代表者とは、瑞典の首府に握手するの機會を有つことが出來ずにすんだ。併しながら當時旣に聯合國の盟主であつた英國の勞働階級が、如何に自國と敵國との間に於ける自己の地位を省察し、評價してゐたかは之によつて明瞭にされた。固より彼等は輕々しく祖國を見棄てやうとはしなかつた。唯彼等は祖國を擁護して外敵を膺懲するといふこ

とが、彼等自身に取つて眞に何を意味するかを知らなければならないとした。若し祖國を擁護するといふことが、單に自國内の一部の特權階級の地位と利益を擁護するに止まるものとするならば、又それが彼等自身の眞の幸福と安寧とを增進するために役立つものでないとするならば、彼等は先づ自國内の特權階級と自身等との關係を適當に調節しなければならないとした。此調節なくして、自身等と同一の境遇に在る敵國の同僚と鬪ふことが、自身等のために結局是であるか非であるかを見極めなければならないとした。茲に目ざめて來たことが彼等をして、ストックホルムに相會して倶に共に戰爭の目的の那邊に在るか、如何なる條件を以てすれば互に干戈を收めて同胞の誼を恢復することが出來るかを、祖國としての立場からでなく、勞働階級としての立場から考慮しやうと企てしめる動機であつた。勿論此企圖は政府の干歩によつて成就しなかつた。併しながら敵味方相互の勞働階級をして、其企圖の上にでも此處まで近接せしめたものは、各々自國内に於ける社會制度經濟組織に對する彼等の多年の不滿であつた。此不滿を露骨に表白することを妨げてゐた特權階級の壓迫が、戰爭のために弛緩を來たしたことであつた。戰爭のために國難に殉ずる者は主として勞働者でありながら、資本家や企業者は多大の收益を得て、內心戰爭を

認識してゐるといふことであつた。假令敵國を壓伏し得ても、其慶澤に浴するものはやはり軍人資本家其他國民の一部分であつて、大多數の勞働者の境遇は到底改善せられる見込がないといふことであつた。而して最後に彼等の夙年の希望たる現社會制度改造の目的を達成するには、戰爭によつて總てが常調を失して舊秩序に動搖を生じてゐる今の時期を選ぶことが最も策の得たるものであることの自覺であつた。言ひかへれば彼等は戰爭によりて、從來彼等が畏れ憚つてゐた特權階級も國家の危急存亡に瀕しては、彼等の力を借らずしては何事も爲し得ないものであるといふことを知つたと同時に、此特權階級の不當な壓制と搾取とから自らを解放することは、正當にして又可能なることを自覺したことであつた。この意味の自家解放なくして、唯祖國を擁護し、外敵を懾服したとしても、それは彼等自身に取つては無意義であるといふ事實に氣が附いたことであつた。此故に彼等は外敵と和しても內敵とは和しまいとした。寧ろ外敵と和することによりて、內敵と戰ふべき力を保留しやうとした。斯ういふ彼等の感情が、目前祖國の危機に瀕してすら、炭坑や、造船所や、軍器工場に同盟罷業を勃發せしめる原因であつたのである。

右のやうな自覺が抗拒すべからざる勢を以て歐洲各國の勞働

階級に浸潤して行つたとは言へ、各國の大勞働團體の有力なる幹部が、極力輕擧盲動を避けやうとしたことも事實である。如何に彼等が勞働階級に對する政府の誠意を疑ひ、資本家の横暴を憎んだとは言へ、彼等は決して祖國に對し反逆を敢てする者ではない。彼等は戰時の變態の下に在つては、姑く隱忍して大なる破綻を示すないとした。併し彼等は早晩來るべき平和克復の後に於ては、異常なる戰時の狀態を舊に復するだけでは承知しまいとした。必ず社會制度、經濟組織の根柢を改造して、資本と勞働との關係を合理的な新基礎の上に再建しなければ、如何にしても默して止むものでないといふ其決意を忌憚なく發表して、政府と特權階級とに警告することを怠らなかつた。一九一八年六月の英國勞働黨の「勞働と新社會秩序」の宣言の如きは其顯著なるものである。殊に一九一七年十一月の勞農政府の革命は、世界最初の社會主義國の誕生として、西歐諸國のプロレタリヤに深甚な感激を喚起さずには置かなかつた。何れの國に於ても最左翼の社會主義者の宣傳は、最早冷眼に默過する譯には行かない程の勢を示して來た。極めて保守的な政治家又は資本家にあらざる限り、勞働階級を飽くまでも戰前の位置に膠着せしめた儘で、戰後の恢復事業に當ることの不可能なることを次第に感づいて來た。勿論これは啻にプロレタリヤの威嚇に因るブルジョアジーの讓歩とのみ見るべきものではなかつた。賢明なる學者、政治家及資本家は、勞働階級の要求の裡に動かし難い論據を發見して、之に順應するの已み難き理由を悟つたのである。玆に新勞働政策の萠芽が發したのであつた。

六　社會主義的思想の普及

十九世紀の中葉から二十世紀の初頭にかけて、つぎ〱に唱導せられたる共產主義、國家社會主義、サンヂカリズム、ギルド社會主義等に關する諸學說の中心思想が、不合理なる不勞所得の廢止と、賃金奴隷の境遇からの勞働階級の解放と、及其方法として生產要具を擧げて國有若くは公有に移すことに在つたことは今改めて說くまでもない。此點までは是等の諸學說は槪ね一致することが出來た。而して私は此一致したる共通の部分を指して社會主義的思想と名づけやう。

社會主義的思想を如何にして具體化すべきかといふ實行手段に關しては、共產主義と、國家社會主義と、サンヂカリズムと、ギルド社會主義との間に著しい相違のあることは、何人も周知の事實である。これがために彼等は共同の敵たる資本主義と戰ひながら、味方の異主義と又相鬪いでゐる。而して相俱に其理想の實現を遲緩ならしめてゐるのである。

今彼等の主要とする所の實行手段を大別するならば政治的と非政治的との二つとすることが出來る。

私の所謂政治的とは暴力に依る革命的手段を用ゐるとなく、各國に於ける現憲法を改正することに依つて其目的を達しやうとするものである。これがためには憲法を改正すべき適法の權限を有する機關を先づ改造して、彼等の主張に聽從せしめなければならぬ。此機關を改造するがためには多くの場合先づ選擧に勝を制することが必要の順序とせられる。選擧に勝を制するがためには選擧法其者の改正も必要であるが、もつと根本的に必要なことは國民の思想を改造することである、而してそれは唯教育に依つて成就するの外はない。勿論玆に謂ふ所の教育とは、學校教育のみを指すのではない。演說も、論文も、示威運動も、同盟罷業も、其他一切の宣傳は廣い意味に於ての教育である。是等一切の方法を盡して國民を教育し、其思想を革新し、輿論を改造することが最大の事業である。これに成功した時、戰ひは全勝した時である。其時こそ彼等は平和と歡聲との間に、一國の政體を變更することも出來れば、生產要具の公有、資本主義の根絕、賃金制度の廢止といふが如き多年の綱領に肉を着け、血を通はしむることも出來るのである。唯此場合に於て、決して所謂「プロレタリヤの獨裁政治（ディクテーターシップ）」なるものを行つてはならない。それは民衆中の一部分のみが政權を專有し、又は政權を無產プロレタリヤにのみ專有しやうとするものであつて、其れに於て非デモクラシーであるからである。一部の者の便宜のために他の一部を虐げると云ふことは、現在社會主義者が非難攻擊して息まない所の現制度の缺陷を自ら反覆するものであつて、不合理であると同時に不必要である。爭ひは何處までも光明正大でなくてはならない。何人の意志をも脅威拘束することなしに、完全なデモクラシーの原理の上に戰はれ且勝たれなくてはならない。之が私の謂ふ所の政治的手段である。

然らば非政治的手段とは何であるか。それは上記の如き順序を經ないで、××××××××××××××××、××××、××××××××××××、咽喉の間に勞働階級が權力を掌握し、思ふまゝの變革を成就しやうとするものである。此故に或時期までは「プロレタリヤの獨裁政治」が已むを得ない必要とせられる。彼等は平和の裡の投票函の作用によつては勝利を得る見込のないものと信じてゐる。何となれば國民の大多數の頭腦は未だ彼等の目的に共鳴し得る程度に改造されてゐないからである。此故に彼等の反對者又は其後繼者が改宗して彼等に歸依するまでは之に抑壓を加へることが、過渡期の已むを得ざる手段とせられる。此故に彼等は本來平和

論者であり、非軍國主義者でありながら、赤衛軍を組織して自ら護らなければならぬやうな矛盾を冒すことになる。假令それが一時の方便ではあつても、一階級の他階級に對する專制であり、デモクラシーの無視であることは爭はれない。

かやうに政治的手段と非政治的手段とを比較するならば、政治的手段が至當であつて、非政治的手段の排斥しなければならぬことは論を俟たないやうに思はれる。併し吾等が此斷定を下す前に先づ解決しなければならない一つの疑問がある。それは非政治的手段の主張者に依りて最も力說せらるゝ所の疑問である。即ち政治的手段は畢竟空想であつて、永久に實現の可能性を有ないものではなからうかといふ疑問である。此疑問の提起者は斯ういふ。現時の特權階級は大體に於て現存の社會制度、政治組織、産業經營法の存續を利とする人々である。否之を存續するとによりてのみ其特權を維持することの出來る人々である。從つて彼等は其力の能ふ限りを竭して現存の諸制度、諸組織を維持しやうと努めるに違ひない。而して此努力は、現存の政治機關並に經濟機關を通じて、國家權力の形に於て若くは國法の庇護の下に於て、組織的に且大規模に行はるべき可能性があるのである。乃ち政治的手段の主張者が唯一の賴みとする所の教育ですら、現特權階級の利益擁護のために、縱に左右せられるかも知れないことを覺悟せなければならぬのである。斯ういふ事情の下に於ては、國民思想の改造によつて現特權階級の好まないやうな新社會を導出さうとする計畫は、所詮實現する見込は絕對にないとしなければならぬ。玆に於てか非政治的手段が手段としては好ましからぬに拘はらず、竟に已むを得ない唯一の方法となるのではないかと。彼等は更に斯う言ふ。教育によつて改造することは難い。改造した後に教育することは易い。此故に先づ斷行せよ。理解は之に續くであらう。而して思想は改造せられるであらう。其時こそプロレタリヤの獨裁は解除されて、萬民は眞のデモクラシーに復歸するのであると。

この兩派の主張の相異は昨年のカウツキーとレニンとの論爭によつて明白にされた。同時にそれが勞農治下の露國と、社會民主黨と中央黨との連衡の下に在る獨逸の現狀を反映してゐるのである。而して佛蘭西に於ても、伊太利に於ても、英吉利に於ても、其他の諸國に於ても、それ〴〵異つた度合に於て此兩派が現に對立し抗爭しつゝあるのである。

この兩派の何れが窮極に於て其主張の正當を立證し得るかは私の知らない所である。唯吾等のまさしく知らなければならぬことは、此兩派の何れもが社會主義的思想の深刻な信奉者であると同時に、今日此思想は勤勉な眞面目な一般の勞働階級の間

にまで[illegible]を實施して、[illegible]たる[illegible]の上に[illegible]ふべからざる信念を形造つてしまつたといふことである。今日歐洲各國の有力なる勞働團體の首領等は悉く社會主義者であると言つて可い。最左翼の勞働者から異端視されてゐる英國のトーマス、獨逸の故レギーン、佛蘭西のジューオーの如きも、其主義とする所から言へば確に社會主義者である。何となれば彼等は種々なる機會に於て、主要産業の社會化と共民主的經營とを主張してゐるからである。唯彼等が屢々「黄色」として一部の急進派から罵られる所以は、彼等が飽く迄も非政治的手段の排斥者であるがために外ならない。

社會主義は十九世紀の終り頃までは、まだ眞に勞働階級の「心」となつてはゐなかつた。一八四〇年前後の英國のチャーチストの運動は、それが政治的であつたにせよ、將社會的であつたにせよ、勞働階級の社會主義運動と看做すべきものではなかつた。佛蘭西の二月革命も巴里コムミューンの變も、所謂民衆を形造つてゐたものは、勞働階級といふよりは寧ろ無頼の暴民であつて、之を操縱したものは實行的才能のない思想家か、然らざれば「人民の爲に」といふ假面を被つた野心家の一團であつた。獨逸では『共産黨宣言』から三十年近くを經過して『ゴータ綱領』となり、更に十數年を經過して『エルフルト綱領』まで進んだが、「[illegible]一によつて[illegible]された[illegible]」[illegible]る壓迫とは、勞働階級をして[illegible]アカデミックな[illegible]に[illegible]れて目前の勞働條件の改善に沒頭せしむるに至つた。二十世紀の初めまでは何れの國の勞働階級も、社會主義を眞に「自分の物」として感得し把握するだけの熱情を未だ喚起されずにゐたのであつた。

併しながら二十世紀の初頭以來、勞働組合の著しい發達と、資本主義的勢力の壓迫と、此間に乘じた急進思想家の根氣强い宣傳とは、次第に勞働階級をして社會主義の甘味に近づいて行かしめた。社會主義はそれが單に學者の思想であり、インテリゲンチヤの宣傳である間は、實行力を持たない空論として等閑に附することが出來たかも知れない。併しそれが一度勞働階級の信念となり、民衆運動の目標となるに及んでは、俄に動力を與へられた機械の如く、着々として實行に進むべき可能性を有するに至る。勞働者は學者の如く思索攻究の趣味も有たなければ、宣傳者の如く博辯宏辭に感興も惹かない。彼等は端的に其欲するものを求め、求むるものを摑まうとする。此故に彼等はいつも簡單であり、せつかちであり、露骨である。從つて又眞劍であり、大膽であり、熱烈である。此故に過去に於て彼等の隊團が未だ少數であり、其團結が十分强固でなかつた間は、彼

等の運動は無謀な暴擧として、譯もなく特權階級のために壓迫し去られたかも知れない。併しながら今日の彼等は然かく容易に壓迫せらるべく既に餘りに强大な團體として結束されてゐる。戰後に於ける歐洲列國の勞働組合の發達は眞に驚くべきものである。彼等の擁する經濟的勢力は既に怖るべき域に達してゐる。彼等は殆ど多年の被壓迫的境遇から脫却し得たのみならず、やゝもすれば逆に既往の壓迫者を壓迫せんと試みつゝある。今や貴族も政治家も資本家も、如何にして勞働階級の蓄積したる偉大なる實力の脅威から逃避すべきかに就て非常な苦心を拂ひつゝある。彼等が多年擅有してゐた經濟的特權は、勞働階級の同盟罷業權の無遠慮なる行使によつて、既に半身不隨の狀態に在る。目下彼等の頼みとする所は、其政治的特權を未だ奪はれずにゐることだけである。之をしも失はゞ彼等に斷末魔の時が來なければならない。かういふ危險に漸次近接しつゝある貴族、政治家、資本家に取つて、勞働階級の社會主義的思潮が如何に怖るべきものであるかは固より想像に餘りある所である。

七　勞働政策の新基礎

大戰を一大轉機として新しい時代の幕は開かれた。今や世界各國は改造に向つて急進し或は漸進しつゝある。あらゆる人の「心」と「物」とは、其持主に有意識にも將た無意識にも改造されつゝある。而して人類の最大多數を占むる勞働者のためにする所の勞働政策は、果して如何に改造されつゝあるであらうか。

勞働者の階級としての存在を廢するといふことが、勞働政策の窮極の理想であると考へることは不當でない。若し此理想の實現する時が來たら、同時に勞働政策なるものは不用に歸すべきものである。何となれば勞働政策は畢竟賃金取得者としての勞働者の生活を向上發展せしむべき方法を攻究するを目的とするものであるからである。此故に若し勞働者が他人に雇傭されて賃金を取得することによつて生活するといふ現存の事實がなくなつたとしたら、言ひかへれば階級としての勞働者の存在が廢されたとしたら、勞働といふ事實は人類社會に永久に廢さるゝ時期はないけれども、今の意味に於ての勞働政策は存在の理由を失ふものである。

併しながら社會主義國の建設によつて勞働階級を廢止することが、必然的に社會人(勞働階級廢止後には勞働者といふ言葉が不用になると思ふから、假に社會人と呼んで置く)としての彼等の生活を現在以上に富裕ならしむることが出來るか何うかは、新社會に於ける生産が今日よりも一層豐饒に、圓滑に行はれる

か何うかといふことに直接支配されるものである。今日の社會制度の下に在つては分配が甚だ不公平であるといふ。これは事實に相違ない。併しながら分配が如何程公平に行はれても、分配すべき生活資料の生産が萎縮するならば、社會人は經濟的平等といふ空虚な特權を樂む以外に、何等得る所はないのみならず、或は悲慘なる生活に甘ぜなければならぬことになる。革命後の露國がその最も好い殷鑑である。此故に勞働階級の撤廢といふことが窮極の理想であるとしても、此理想の實現は嚴に社會人の生活の幸福發展といふ結果を招徠し得べき方法順序の下に於てのみ行はれなくてはならない。言ひかへれば社會人の文化的生活を豐富ならしむるに必要缺ぐべからざる生産事業を益々振興し發展せしむることが出來るといふ見込が確實である場合に於てのみ行はれなくてはならない。しかも之を行ふことの出來る時期は、既存の資本主義的生産組織に替はるべき社會主義的生産組織が、新にペンと紙とによつて完成されたゞけでは　未だ到來したとは言へない。それは又政治的或は非政治家の手段によつて、何人かゞ何時でも現生産組織を變更し得るだけの勢力を蓄積し得たゞけでは、未だ到來したとは言へない。それは實に、既往の産業の發達の一大理由をなした所の利己的衝動に基く企業的精神と、生活の壓迫に餘儀なくされる所の勞働の能率といふ、經濟的の二大動因に代はるべき新しい精神的動因が普く社會人を支配して、同時に生産にいそしませるやうな新社會道德の樹立せられた時期でなくてはならない。少くとも斯くの如き新社會道德の樹立を確實に豫測し得た時期でなくてはならない。其時期に於てのみ吾等は安じて舊生産組織を一排して、新生産組織に就くことが出來る。但斯くの如き新社會道德の樹立が可能であるか何うか、又假に可能であるとしても其時期は何時であるかといふことに就ての各人の觀察は隨分相異してゐる。

論じて玆に到つて、私は漸く新勞働政策を支配しつゝある所の中心思想に對する私の見解を明にすべき階段に達した。私の見る所を以てすれば、戰後の歐米各國の勞働政策は、主として其國々の政治家、學者、資本家、勞働者等の相互的勢力の均衡作用によつて定まつて行きつゝある。しかも一方に於ては勞働組合の異常なる發達と、彼等の間に於ける社會主義的思想の普及と、並に彼等を指導し若くは其主張を支持する所の學者の熱心なる宣傳と、他方に於ては是等の勢力を無謀に抑壓することの不可能なるを悟つた政治家の聰明と、結局是等の勢力の前には道を讓るの外はないといふ一部資本家の自覺とが相合して、社會の各方面に續發する所の部分的反抗にも拘はらず、能く勞

働政策の大綱を支配して歩一歩其新基礎を築きつゝあるのである。

勞働政策の新基礎は其政策の立案者の主觀に於て、必ずしも現存の資本主義的產業經營法を廢して、之に替ふるに社會主義的產業經營法を以てすることが、必至のプログラムであるといふ自覺の下に建設されつゝあるのではない。併しながら少くも彼等は前段に縷述したやうな勞働階級の團體としての急速な實力の增進と、並に彼等の間に於ける社會主義的思想の普及とが、舊勞働政策の基調を成してゐた所の差別觀を、到底今後に維持し得べからざるものとしたことを次第に理解したのである。言ひかへれば彼等は在來の特權階級が自ら其特權の一部又は全部を棄てゝ、進んで勞働階級に讓步し、妥協することの外には、社會的危機から遁れ出る途がないことを痛切に自覺したのである。急進論者からは頑迷固陋にして濟度すべからざる者のやうに罵られてゐる舊型の政治家、資本家等も、時代精神の自然の感化によつて次第に其思想に變化を來たし、いつしか勞働政策上の新方針を賞贊し、或は其正當を默認しなければならないことを悟つたのである。即ち之を客觀的に批判するならば、彼等は產業經營法の根本的改造が、社會道德の見地から可能であるか何うかに就ては適確な意見を構成するに至らないでも、又それが可能であることを信じても、それを實現し得べき時期と方法とに就ては、未だ判然たる計畫を立て得るに至らないでも、ともかく日一日、それを可能ならしめるやうな、少くもそれに近い或ステーヂに行き着くことを可能ならしめるやうな方針に向つて確實に進んで行きつゝあるのである。即ち今日の勞働政策を表面有りのまゝの形に於て見るならば、それが急進論者の理想から如何程低級であり、微溫的であつても、その底に流るゝ一脈の赤い絲は、新時代の勞働政策を產業民主々義といふ土臺の上に導いて行きつゝあることを明瞭に觀取することが出來ると私は信ずるのである。

產業民主々義の意義に就ては私は既に別に之を說いた。(本誌昨年九月所載拙論『產業民主々義への次の一步』參照)今之を他の言葉を以て言ふならば、勞働政策上の差別觀から平等觀への推移がそれである。舊時代の勞働政策は、勞働者を何處までも賃金取得者としての地位に定着せしめたまゝ、其生活を改善してやらうといふ努力であつた。然るに新時代の勞働政策は、賃金勞働者の階級的地位からの解放を窮極の到着點として、それに對する準備行爲として、勞働者の智識及生活の向上を期する所の努力である。舊勞働政策は飽くまでも階級的差別觀に捕へられてゐた。新勞働政策は階級的平等觀に立脚してゐる。こ

ねばならぬといふことは寧ろ當然といふべきものである。

かういふ私の見解を證據立てるがためには、戰爭の末期から最近に至る數箇年間に、歐米各國に於ける新勞働立法、其他各般の顯著なる對勞働施設を擧げて茲に之を詳述しなければならぬ。少くも私は米國に於ける工場委員會制度の發展、英國の勞資協調を目的とする諸制度、佛蘭西の新勞働立法、獨逸革命後の產業政策及勞働政策、伊太利の產業共同管理案、露國勞農治下の政治、產業及勞働等に就て、其概略を物語らなければならぬ。併し是等の題目に就ては私が既に世に公にしたものも大分あるから、茲には其一切を省略することを許されたいと思ふ。唯茲に特に注意を要する點が二つある。其第一は上記の各國の制度施設の上に示現せられてゐる所の新勞働政策の內容には餘程の軒輊があつて、私の敢てするやうに、差別觀から平等觀への推移として一律に論斷することが不當なやうに思はれるかも知れないことである。併しながら私の信ずる所によれば、これは單に形式及程度の相違であつて本質の相違ではない。各國が別個の國民性と政治組織と經濟狀態とを有する限り、其處に各々特異なる社會的の示現を有することは寧ろ自然である。併しながら日にまさり行く思想の共通と、相互の影響とは、結局相率ゐて同じ方向へ進んで行く外には、行くべき道のないことを示すに於て一である。例へば水は時に溢れて氾濫する。或るものは波を浮べ、或者は波を浮べる。或者は河心を流れて一瀉となり、或者は岸に沿うて淵となる。併し結局は皆海へ行く。或者は昨日流れ、或者は今日流れ、或者は明日流れる。併し結局は皆海へ行くのである。

其第二は私が本論に於て高唱せんとする所の、新勞働政策の基礎たる平等觀が、上記の各國の勞働政策を指導しつゝある中心思想には相違ないけれども、それは未だ必ずしも其政策の立案者又は協贊者によりて適切に自覺されてゐるのではないといふことである。從つて彼等の或者は私の見解に對して異議を唱へるかも知れない。それにも拘はらず彼等は確に勞働政策上の差別觀から平等觀に改宗しつゝあるものと私は斷ずる。其處に時代思想の無言の推移がある。此無言の推移を感得することの遲速が、一歩の境に先覺者と追隨者とを區別するのであらう。

軍備縮少と國民思想

水野廣徳

世界平和に進まんとする新紀元第一年の新年に於て過去の懺悔の爲め此の文を稿す

一　幽靈が躍り出す

誰かゞ幽靈會議とさへ罵倒したる華盛頓會議に足が生へ、會議の大眼目たる海軍縮少問題と極東問題とは既に其の原則が議定せられ、今は唯枝葉の細項に就きて協議せられて居る。中にも會議の最大の最大目的たる海軍縮少に關しては大勢既に定まり、其の米國案に決するか、我が修正案が容れられるか、或は又兩者折衷案に落ち付くか、何れにしても本誌の發行せらるる頃までには恐らく各國全權間に協定成立し、幽靈が下駄穿いて躍り出すであらうと思ふ。

或は世界永久の平和を確立せんとする人道上の理想に發足すると、或は戰後に於ける過重の軍備費を輕減せんとする經濟上の理由に基源すると、將た或は軍備競爭に出る國際間の危機を緩和せんとする當面の要求に出發するとを問はず、軍備の縮少制限——或は進んで撤廢——は今日世界に於ける多くの國民の衷心よりの希望である。就中此の希望の最も强きものは英國の政治家と米國の國民と日本の平和論者とであると思ふ。英國の政治家は戰後窮迫せる經濟回復の爲め軍費の緊縮を必要とし、米國々民は戰爭の爲め其の多幸なる生活を脅やかさるゝを恐れ、日本の平和論者は軍備競爭に基づく危險なる日米の衝突を避けんが爲め、何れも軍備縮少の切要を感じて居る。而して世界の平和と軍費の輕減とは其の間に於ける共通の意念である。今回の華盛頓會議は英國政治家に依つて薪を積まれ、米國國民に依つて油を注がれ、大統領ハーディング氏は唯一本のマッチを擦つたに過ぎないと傳へられて居る。

二　西に佛蘭西東に日本

軍備縮少の聲高き今の世界に於て、公然之に反對せるものに

[illegible]る。仏國政府は表面に於てベルサイユ條約實施監督の爲めと稱し、裏面に於ては對獨強壓政策實行上、其の陸軍々備の縮少に反對して居る。日本國民は一部は日米必戰説の誤まれる宣傳に迷はされ、一部は帝國主義的妄想に捉はれ、海陸軍備の縮少を好まない樣である。前議會に於て軍備縮少の提案をば愼重審議することなく、一對九の絶對大多數を以て一蹴し去りながら、僅に數ケ月の後には米國よりの軍備縮少の提議に欣然として贊同した。議會と政府との差別こそあれ、同じ日本國民の態度としてはあまりに豹變的である。何れが果して本氣であるかを疑はざるを得ない。

日本政府は欣然として華盛頓會議に列することを承諾したが、日本國民は果して欣然として政府の回答を歡迎したであらうか。吾人の見る處を以てすれば甚だ疑なき能はずである。國の内外に對し比較的高度の知識を有せる少數の都會人を除き、國民の大多數を占むる地方の人士は軍備縮少に對し、縱令積極的に反對せざる迄も消極的に好まざるものと推定すべき幾多の見聞に接して居る。日本の議會は民意を代表せるものにあらずとの言を屢々耳にするが、軍備問題に對する議會の表決ばかりは或は國民多數の意志を代表せるものにあらずやと思はれる。

[illegible]代表と言はねばならぬ。

三　此の教育家此の女學生

新聞紙の報ずる處に依れば、裏日本とかの某市教育會にては、過般教育界の大問題となりし教育費整理案に反對の決議として「斯かる整理案が眞面目に論議せらるゝに至れば小學教師仲間に軍備縮少論者の續出せんことを恐る」と發表して居る。是れ明らかに軍備縮少反對の意思たると共に軍備縮少論者を危險視して居るものと言はねばならぬ。又東京市の某高等女學校に於ては生徒に對して軍備縮少の贊否を問ひしに、姫御前の勇猛にも不贊成者が多數であつたと云ふことである。此の教育家にして此の女生徒あり、スパルタ教育の昔も思ひ出されて物凄い。最も廣く平和を唱道すべき教育家にして既に然り、最も深く平和を好愛すべき女子にして既に然りとすれば他は推して知るべきである。軍人の頭目が華盛頓會議を罵倒するのも怪しむに足らず、帝國主義者等が公園に於て軍備縮少は國家の滅亡と悲鳴するのも驚くを要せず、地方政治家が在郷軍人團に氣兼して軍縮講演會を逃げ廻はるのも無理ならずである。

四　大和魂と神風

都會に於ける一派の帝國主義者や、侵略主義や、或は爲めにせんとする一種の憂國業者は暫く措き、純眞朴直なる地方人士が軍備縮少に反對し或は之を好まさるは何故であらう。地方旅行に依つて得たる實査に徴するに、軍備に對する地方人の思想と觀念とは、之を大別して次の二種類に分つことが出來ると思ふ。即ち其の一は戰爭讃美者で、一般帝國主義と等しく世界征服の大使命を有せる日本發展の道は唯戰爭あるのみであると信じて居る。而かも世界を知らさる彼等は今尚ほ日本を以て神國と爲し大和魂と神風とに信頼し、戰へは必ず勝つと獨りで定めて居る。日の丸の旗を翻へし劍付鐵砲で突撃さすへれば毛唐人などは一溜りもなく降參すると思つて居る。夫でもペルリの黑船は我が國民の頭に餘程こたへたと見へ、軍艦ばかりは日本魂でも叶はぬと正直に諦めて居る。併し之とても愈日本が危なくなれば忽ち伊勢の神風が起つて敵艦を吹き沈めて下さると信じて居る。誠に馬鹿々々しき話であるが實際斯樣に信じて居る。斯かる迷信者に對しては理論は通じないので說明の仕樣がない。夫れ程神風の御利益があれば軍艦などは最初から不要ではないかと言へば、人事を盡した上でなければ神は助けて下さらぬと宗敎的の言を云ふ。先般の陸軍大演習の際、東京侵入軍が風波の爲め上陸不可能なりしに對し、正氣か戲言か知らねど、畏多くも帝都を占領せんと企つる如き軍隊が神風の怒りに觸るゝは當然であると歎んだ將官もあると言へば、無知の田舍人の迷信も無理はないことである。要するに彼等は戰爭すれば日本は必ず勝つ、勝つては領土も廣まる、償金も取れる、年貢も廉くなる息子が勳章も貰へる、親爺の鼻も高くなると思つて居る。軍艦と軍隊との數のみが戰勝唯一の道具であると信ぜる彼等が軍備の縮少に反對するのも當然の歸決である。

五　日〇必戰信者

其の二は日〇必戰信者である。彼等田舍人は或る種の宣傳に依り、日〇戰爭は到底避くべからざるものと盲目的に信じて居る。彼等は有ゆる機會に於て或る方面より、〇國を以て日本の發展を妨げ、日本の生存を脅かし、日本の獨立を危ふするものと敎へられて居る。正直にして而かも海外の事情に無知なる彼等は、田舍人の一徹にも〇國を以て不倶戴天の仇敵と爲し、彼を斃すか我れ死すか、世界に日〇の共存を許さないとまで思ひ込んで居る。斯くて田舍人通有の排外心と、油を注がれたる敵愾心と、祖先傳來の愛國心とが結合混交して日〇戰爭に備ふる爲めには、縱令三度の食事を二度に節し、二枚の着物を一枚に減ずるも忍ばねばならぬと覺悟して居る。其の迷盲に對しては

[illegible]
に對しては軍備縮少の[illegible]は恐らく亡國の兆と響くであらう。

六　新聞記事と軍事宣傳

思想單純なる田舍人をして斯くの如き妄想と迷信とに陷らしめたる原因と動機と理由とは種々あるであらうと思ふ。新聞記事の如きも慥かに其の一である。殊に其の挑發的大活字を以てせる排外的誇張的なる外國電報の見出しの如きは、與つて最も力あるものである。冷靜に考察すれば左程でも無き電報に對し、讀者の好奇心を唆らん爲めか殊更に「○國の横暴」などゝ標題の付しあることは珍らしくない。電報の内容を仔細に玩味咀嚼するに足るべき海外知識を有せざる者は、唯其の標題のみを見て忽ち之に捉はれて仕舞ふ。先入主となりたる此の印象は容易に取り去ることは出來ない。

陸海軍の軍事宣傳も亦其の最も有力なる因事である。抑も國家が苟くも軍備を存置する以上、軍事當局者が國民に對して國防の必要を說示し、軍事知識の啓發涵養に力むるは敢て非難すべきでない。而して之に對する當局者の素志と目的とは純潔高尙なるものであるであらうと信ずる。然るに實際に於て此等の教化宣傳に從事するものは、多くは識見狹く教養淺き若少の軍

而して之を聞く[illegible]は教育淺く世界[illegible]小學校長と簡閲點呼官の言を以て[illegible]に自信する人々である。

彼等軍人は今尙ほ例を日清日露の戰爭に取り、戰爭を以て國家發展唯一の手段と說き、以て單純なる地方人の自負心を煽てゝ居る。又常に假想敵國を或る外國に求め、口を極めて其の傲慢無禮を責め、以て正直なる地方人の敵愾心を激して居る。尙ほ之を補ふに貧乏國の日本が今日世界に重きを爲す所以は唯一强力なる軍備の存するが爲めである。日本より軍備を取り去れば亡國の外はないと、無知なる田舍人を嚇かして居る。何れも幾分の道理と幾分の事實とを有し、且つ新聞に依つて豫備觀念を付けられ居る爲め田舍人の耳には比較的入り易い。簡閲點呼官などの訓示中には恐ろしく極端なる意味の言葉が含まれることも有るさうである。恐らく彼等は誠心誠意を以て斯く信じ斯く語るのではあらうが、夫にしても過大なる軍備の爲めに國を誤まりたる獨逸の例などはオクビにも出さない。而して陸軍は陸軍本位の說を立て、海軍は海軍本位の說を立て、往々其の間に杆格齟齬を來すが如き滑稽さへ生ずることがある。先年海軍紀念日に若き海軍士官が某地の女學校へ講演に聘せられた際、生

徒に對して女子の國家に奉ずる最善の道は、良妻賢母となりて强健なる多數の男兒を産み、之をして悉く海軍々人たらしむるに在りと說き、然らば陸軍はどうすると云ふ抗議が出でたとかで、今尙ほ地方の笑話に殘つて居ると云ふことである。默を逐ふ獵師山を見ずとかで、此位まで徹底すれば愛嬌があつて却つて罪が無い。軍備充實の宣傳も或る程度迄は無論必要であらうが、今日のやり方は頗る藥が利き過ぎて、寧ろ國家を危險に導くものではないかと危ぶまれる。

七 在鄕軍人會と國民大會

昨年僕は東京より左程遠からざる地方の在鄕軍人及青年團の郡總會に軍事講演の爲めに招かれたことがある。講演者としては他に陸軍の某氏があつた。此の人が怪辯を振つて〇國の暴慢を攻擊すると滿場拍手を以て之を迎へ、日〇戰爭避くべからずと說くと喝采頻りに起り、「我に大和魂あり赤將何するものぞ」と叫ぶと聽衆熱狂して歡呼の聲堂を動かさんばかりであつた。此の光景を目擊したる僕は日本の在鄕軍人なるものが、如何に日〇戰爭を歡迎せるか、又彼等が如何に日本魂なるものを盲信せるかを具體的に知ることを得た。彼等在鄕軍人なるものは、現代の戰爭が物質力に左右せらるゝことと如何に大なるかに關しては全然無知である。唯突擊して塹壕の埋草になることしか敎へられて居ない。彼等の知れる戰爭は唯日淸日露の戰爭か靑島の戰爭のみである。從うて戰爭なるものを以て萬歲〳〵旗行列や提灯行列の景氣の良き威勢の良き御祭騷ぎと心得て居る。今回の戰爭に於て歐洲人が體驗したる肉を剝ぎ骨を削るが如き戰爭の眞の酸苦を嘗めて居ない。手足を失ひたる獨逸の癈兵が冷たき石の道路に慄ひながら、血膿滴る傷口を寒風に暴らしつゝ乞食して居る悲慘を知らない。爲めに彼等は戰爭なるものに對して冷靜に眞面目に考察するの力を缺いで居る。……

斯くの如きは單り田舍の在鄕軍人のみではなかつた。東京の眞ん中に於てさへ之と全然同一の現象を、過日芝公園に行はれたる國民大會とかに於て見ることが出來た。彼等は百臺の決死飛行機あらば、一夜の中に東京を燒き拂ふことの出來る今の戰爭なるものを知らない。本來戰爭なるものは國民が堪らへに堪らへ、忍びに忍びし眞の怒に發せるものでなければならぬ。御祭氣分や野心家の煽動に乘つて、妄りに開戰說などに贊同すべきものでない。少し元氣の良いことを言へば、直ぐ煽てに乘るのが日本人の大缺點である。世間或は之を以て新興國民の熱血であると賞讃するものもあるが、熱は熱だか流感の熱よりも尙ほ性質が惡るい。

八　軍事常識の國民的缺如

軍部の宣傳如何に巧妙にして又如何に猛烈なるも、國民の常識にして發達すれば之に犯され、之に惑はさるゝ害は無いのである。然るに軍備を重んずる癖に軍事に對する我が國民の常識は今日尚ほ甚だ低劣である。或は皆無である。軍事に對する此の無知識が、一面に於ては所謂盲者蛇を恐れざる的の戰爭讃美となり、一面に於ては軍事專門家の言を公理的に盲信することゝなる。一二の例を擧ぐれば、國防的軍備は必ず相對的であると云ふことさへ了解の出來ない者がある。偶了解しても軍事當局者より工業力の關係を説かるれば忽ち混惑して仕舞ふ者が多い。或は武力を根據とせる戰鬪と國力を基礎とせる戰爭とを混同して居る者もある。軍事當局者が戰鬪に於ては負けぬと云へば、戰爭に於ても負けぬものと速斷して仕舞ふ者がある。或は又今日に於ては最早や常識語となれる八八艦隊の意義さへ知らぬものは國民の大多數を占めて居ると思ふ。其の他現代の軍艦は燃料に石油を用ゐることを知れる者は極めて少數の國民であると信ずる。之を以て當局者にして萬一誠意を缺げる場合は國民を誤魔化すことは甚だ容易である。議會に於ける議員の質問振りを見れば一般が察せられる。

九　八八艦隊と絶對國防

吾人が地方を旅行して相當知識ある人々より屢發する質問は八八艦隊の國防的意義である。當局者が國民に説明する處に依れば、「日本の海軍には假想敵を有せず、八八艦隊は國防上絶對必要なる一戰略單位に過ぎない」と言つて居る。元來國防の爲めに設くる軍備は對內的でなく、必ず對外的のものである。既に對外的のものとすれば、必ず假想敵國の存在を認めねばならぬ。假想敵國の無き軍備は國防上無意義なるもので、恰かも支那や和蘭の海軍の如く單に警察的軍備に過ぎない。警察的軍備としては八八艦隊は餘りに尨大に失する。素より軍事當局者が外交上の顧念よりして、假想敵國を否認する精神に對しては吾人之を諒とし且つ其の苦衷に同情する。併しながら一般國民は當局者の苦慮を了解するの軍事知識なく、當局者の言をば其の儘直譯的に解釋するが爲め、種々の疑惑と誤解とを來すに至るである。

八八艦隊に對する前記當局者の聲明を文字通りに解釋すれば、八八艦隊は我が國防上絶對必要の勢力である、既に絶對的なる以上、他國勢力の增減に依つて動かさるべきものでないと言ふことになる。是に於てか或る人は「八八艦隊さへ完成すれ

ば、最早や日本の國防は安全である。之さへ出來ればイツ何時○國の挑戰に應ずることが出來る。今暫らくの辛棒じや」と考へて居る。又或る人は「八八艦隊は我が國防上絕對必要のものである、他國が如何に海軍を縮少するとも我が國は斷じて八八艦隊に手を觸るゝことは出來ない」と信じて居る。軍事的常識より考ふるも誠に馬鹿氣たる。愚想であるが、事實に於て斯く信じ切つて居るのであるから、軍備縮少論者を以て危險視するのも情として無理も無い點がある。

一〇　戰國と戰爭。軍備と國力

我が國民の多くが軍備縮少に反對し或は之を好まさる消極的とも云ふべき、而かも極めて重大なる原因と理由とは、今日尙ほ戰鬪と戰爭とを同一視して居る爲めである。軍備（卽ち武力）と國力（卽ち國防力）とを混同して居る爲めである。抑も戰鬪とは彼我武力の打ち合ひである。戰爭とは彼我國力の果たし合ひである。而して戰鬪の雌雄を決するものは所謂軍備である。戰爭の勝敗を定むるものは所謂國力である。戰鬪は戰爭中の一局面に過ぎないと等しく、軍備は國力中の一部分に過ぎないのである。故に軍備は如何に强大なるも、其の背後に於ける國力にして優越ならざれば、縱令局部の戰鬪に於ては勝を制することを得るも、大局の戰爭に於て勝つことは出來ないのである。局部の戰鬪に於て大勝を博しながら、大局の戰爭に於て大敗に陷ゐりたるものに近くは獨逸の好適例がある。之を以て一國の軍備なるものは一朝有事の際、其の全力全能を發揮し得る程度のものでなければならぬのである。卽ち軍備は或る程度迄國力に相應せねばならぬのである。軍艦如何に優大なるも戰時之を動かすの燃料さへなく、軍隊如何に多數なるも戰時に之に給する彈藥さへなき軍備は、唯觀艦式の飾りと觀兵式の賑ひとに過ぎぬのである。事實に於て現在我國の軍備たる海軍の八八艦隊と陸軍の二十二個師團とは、戰時に於て軍需の補給が果して完全に出來るや否やを疑つて居る。然るに我が國民の多くは今尙ほ軍艦と軍隊との數さへ多ければ、妻子は空腹に泣き寒さに凍へて居つても、戰爭には必ず勝てるものと信じて居る。之が爲め唯無理解に無自覺に軍備の縮少制限に反對することとなる。

一一　邪推僻視の繼兒根性

軍部の宣傳とか、國民の無知識とか、の國內的理由の外に否な寧ろ之等と相關聯して、我が國民をして軍備縮少に反對せしむる他の有力なる因子がある。乃ち日本に對する外國の壓迫である。本來日本國民が平和的民族であるか、將た好戰的民族であ

るかは別の研究に讓り、維新前より歐米各國が我が國に加へたる政治的經濟的時に軍事的の脅迫威嚇は、其の故意たると、偶然たると、或は全然無意識たるとを問はず、痛く我が國民の心を刺戟して或は排外的敵愾心を激發せしめ、或は武裝的自衛の必要を强感せしめ、遂に邪推僻視の繼子的根性に陷ゐらしめた。就中日清戰後に於ける露佛獨三國聯合の暴慢不法なる武壓的干涉は、敏感にして自尊心强き我が國民の憤激を沸騰點に迄昂騰せしめたのである。

斯くの如く一面に於ては外國の壓迫を受くると共に、一面に於ては支那及露國の脅威をば武力に依つて擊排し得たるが爲め、武力卽ち軍備に對する我が國民の信賴心と、戰爭に對する我が國民の讃美心とは自ら高まらざるを得ない。加之目前に印度、安南、緬甸、南洋諸島及び支那の如く、歐米の爲めに或は併吞せられ、或は侵蝕せられつゝある生きた標本を見せ付けらるゝに於ては、我が國民たるもの常に戰々兢々たらざるを得ない。帝國主義者と軍權者流と軍器業者とは、此の國民心裡の傾向を巧みに捕へて益々國防の必要を宣傳し、遂に我が國民をして今日の軍備萬能主義者に作り上げて仕舞つたのである。

之を以て歐米人は常に我が國を以て軍國主義侵略主義と非難攻擊するも、其の源に溯れば一は我が國民の傳統的尙武思想にも因るが、一は歐米人が我が國民を驅つて茲に至らしめたるもので、其の一半は彼等が負ふべきものである。彼等歐米人は我が國を責むるに當り先づ彼等自身の歷史を顧みる必要がある。

一二 競爭的軍備擴張

其の無意識たると有意識たるとを問はず、由來我儘と無遠慮とは强者に付き物である。之と同時に僻見と猜疑とは弱者に付き物である。近年に於ける日米間の問題の如きも、米國としては最初或は故意に日本を壓迫する積りでなく、正當の行爲と信じて居たのかも知れない。併しながら日本より見れば如何にも我儘で橫暴なる如く感ぜらるゝ爲め、自ら反抗の態を取る。此に於て米國も亦「リツツル、ジヤツプ」生意氣なりと今度は壓迫的態度に出る。日本は益躍起となる。其の間に國家我に捉はれたる兩國の新聞と、事有れかしと狙ふ兩國の好事家と、慾に目の無き兩國の軍器製造業者との挑發と煽動と宣傳とに依り、遂に兩國民の誤解となり、憎惡となり、反抗となり、何時の間にか兩國の間に踰ゆべからざる深き險しき溝を造つて仕舞たつのである。是に至つて次に來るものは言ふ迄もなく、互に自衛の名の下に行はるゝ競爭的軍備擴張である。

先年我が國論を沸騰せしめたる學童問題や移民問題の如きも、

米國としては之を主張するに相當の根據と理由とを有すること、恰かも支那に對する日本の主張に相當の理據を有すると同様であらうと思はれる。然るに貧弱なる支那は日本に對して武力の競爭に堪へないが爲め、自ら日本を共同の敵とする米國の袖に縋がることゝなる。此に至ると日本は一方に於て陸軍を以て支那を威壓し、他方に於て海軍を以て米國に對抗するの已むを得ざるに至るは勢の免れ難き處である。事實に於て日本は現在正に其の境遇に立つて居る。我が貧弱なる國力を以て何時迄此の形勢を持續し得るであらうか。將來を云ふ迄もなく、現在に於てさへ日本の軍備は既に行き詰まりの斷崖に立つて居る。軍艦は出來ても燃料問題の解決が出來て居ない、兵隊の頭數は揃ふても兵器の改良が出來て居ない。芝の國民大會に於て何とか云ふ人が軍備制限反對の意味に於て、軍備制限の聲は戰爭を豫報する警鐘であると叫んだが、是れ寧ろ軍備制限の緊急必要を立證する上に於て眞の言葉である。

一三　殘るは唯戰爭あるのみ

由來軍備競爭の行き詰まりは常に戰爭である。歐洲大戰は陸に在つては露佛對獨墺の陸軍競爭行き詰りの結果である、海に在つては英對獨の海軍競爭行き詰りの結果である。國民が際限なき軍備費の負擔に飽きたる時、殺を好む軍權者流と野心ある政治家とは、自國に、或は自家に最も有利なる時機を撰んで戰爭を開始すべく國民を導いて行く。否らざるも戰爭不可避を叫んで國民の敵愾心を不條理に煽て揚げ、軍艦を製造する爲めに、軍隊を增加する爲めに、國民の懷を搾り取る。此の時に於て平和愛好者に依つて叫ばるゝ聲が軍備制限縮少である。若し之に應ぜざれば殘る處のものは唯戰爭あるのみである。此意味に於て軍備制限の聲は戰爭の豫報であるとも言ひ得る。歐洲大戰前獨逸は英國の海軍競爭中止の提議を峻拒したるが爲め、遂に兩國の無際限製艦競爭を誘起し、延ひて歐洲大戰の一大原因となつた。而かも其の海軍は如何に努力するも遂に英國の壘を摩する能はず、聞くも無殘の最後を遂げたのである。

幸に賢明なる我が日本の政治家も軍權者も、眞面目に「日米必戰說」や乃至「日米戰爭可能論」などを信ずることなく、米國大統領の發したる軍備制限提議を快諾したのは、誠に我が國の爲め至大の幸福である。然るに日本の爲す處は絕對正にして、外國の爲す處は悉く日本壓迫の爲めと自信せしめられ居る我が國民は、既に政府の贊同せるに拘はらず、今尙ほ軍備制限に對し狐疑逡巡して之に應ずることを好まない傾向がある。

一四　眞に鐵中の錚々

軍備制限反對者は獨り我が國のみの特産物ではない。帝國主義者、侵略主義者、排外主義者、武斷主義者は世界何れの國にも存在して居る。交通發達せる今の世界に於て人間の思想は各國共通である。一方に急進的の社會主義者あれば他方に反動的の軍國主義者の在るを免れない。唯其の力の優劣強弱は、國の政策と國の境遇とに依つて相違あるのみである。社會主義を强壓する國に於ては少くも表面的に軍國主義が跋扈し、國際的難局に立てる國に於ても亦、社會主義的色彩よりも軍國主義的色彩の濃厚なるが常である。軍備縮少贊成運動には屋外集會を禁ずるも、軍備制限反對運動には之を許すが如き國もある。

是等思想上の反對者以外に物質上よりする利己的反對者がある。其の主なるものは軍器並に之に關聯ある物件の製造業者である。彼等の陋劣なるものは其の豐富なる資力を恃いて、或は言論機關の買收、或は好事家の操縱など、種々の手段を以て軍備縮少制限に反對することがある。英獨海軍協定の不調に終はりたるは、兩國製艦業者の毒酒が廻はりたる爲めなどゝの世評さへある。現に華盛頓會議に於ける海軍縮少協定に對しても、英國の軍器工場が之に反對して居るとの報がある。我が國に於ても表面軍備制限を賛成するものであるなどゝの言葉を吐いて、暗に之に反對せる事業家もあれば、軍器製造業上失業の點よりして軍備縮少に反對する勞働團體の連中もある。此の間に於て軍器製造に大關係を有せる米國の鋼鐵王ゲーリー氏が、自家の利害を眼中に置かず世界平和の爲め敢然として海軍の縮少制限に贊意を公表したるは、之こそ眞に鐵中の錚々として誠に見上げたる心懸けである。

一五　軍縮反對者の色別

軍備縮少主義中者にも、人道上よりする理想論者もあれば、經濟上よりする實際論者もあるが如く、軍備縮少反對者中にも亦種々の分子がある樣である。軍事を專門の職とせる軍人と利己的見地よりする事業家は論外とし、反對論者中には積極的に侵略慾に燃ゆる帝國主義者もあれば、消極的に武力威嚇の武斷主義者もある。國光發揚國威伸張の國權論者もあれば、神州由來武を以て立つの傳統的尚武主義者もある。人類鬪爭本位の哲學に立脚する者もあれば、○國を叩き付けて遣り度いと云ふ感情に出發せるものもある。甚だしきは政黨の掛引きや、選擧區の人氣やに捉はれたる黨略本位、便宜主義者もある。其の思想と主義とに立脚せる人に對しては、頭腦を哀れむと共に尙ほ幾分

の敬意を表する價値がある。唯利己的に出發する者に至りては唾棄すべきである。何れにしても世界の大勢に盲にして自國の實情を顧みざるものと謂ふべきである。

一六　海軍案に對する軍事的觀察

華盛頓會議に於て論議せられつゝある問題は目下尙ほ海軍に關してのみである。陸軍問題に關しては佛國全權ブリヤン氏が、縮少反對の爆彈を投げて巴里に引き揚げて仕舞つた。素より豫定の行動として驚くにも怪しむにも足らない。陸軍問題は華盛頓會議に於て解決する迄もなく、國內問題として處理することが出來る。併し現在の日本に於ては少くも軍部大臣に文官任用の途の開かるゝ迄は縮少の實現困難であらうと思はれる。縮少の困難なるのみならず、國民にして油斷すれば折角海軍縮少に依つて節減し得たる經費を陸軍に橫取りせらるゝかも知れぬ。

海軍問題に關する經過は世間既に周知のことである。米國の原案に對して日英兩國共に其の主旨に贊同し、日英米三國海軍を或る比率の下に制限縮少すると云ふ根本原則は既に確立したのである。唯比率の點に於て、日本よりは英米主力軍艦の六割原案に對して七割修正案を提議し、英國よりは潜水艦の比率に於て尙ほ一層の制限を提案して居る。米國の原案是なるか、日本の修正案正しきかは論理的に之を判決することは甚だ困難である。若し論理的に解決せんと欲せば、各國均等の外はない。是れ既に確定したる協定の原則に反するものである。

論理に依らず實際問題として之を解決するに於ても、日本としては政治上と軍事上との兩方面より觀察することが必要であると思ふ。之を純軍事上より論ずれば米國案必ずしも完全なるものではない。戰爭を豫想する國防上より見れば、單に主力軍艦のみならず潜水艦、航空母艦等の補助艦艇に於ても修正を要する點が少なくない。我が軍事委員が國防の最小限度として七割の要求は、寧ろ餘程遠慮をしたものと思はれる。故に若し我が修正案に對し、米國が協調的でなく威壓的態度を取るが如きことあらば、吾人は華盛頓會議の爲めに惜しみ且つ悲しまざるを得ない。會議は必ず協調的和親的でなければならない、壓迫的威嚇的では縱令協定は成立するも其の效果は半減して仕舞ふ、是れ華盛頓會議に對する吾人の當初よりの希望である。

軍事上より見て吾人の怪訝に堪へざるは、我が全權が何故七割案に拘着して、太平洋防備問題に觸れないかと云ふ點である。此の問題に對しては世上既に論議盡されて居るが故、最早や贅に述ぶる必要さへ認めない。此の問題を解決せずして、徒に一割の增加を爭ふ我が全權の意の存する處を圖り知らない。

一七　海軍案に對する政治的觀察

併しながら之を政治上より見る時、比率の如何に依つて海軍協定を成立せしむべきか、或は之を破裂せしむべきかは、主力軍艦の一割や五歩の增減よりも遙かに重大なる問題である。若し此の協定にして不成立に終らんか、其の責の何れの國に存するを問はず、今後に於ける海軍の競爭的擴張は誠に恐るべきものがあるであらう。素より日英米三國共に今日軍備費の多額に苦しめるは同樣である。併しながら米國も英國も愈となれば振るべき袖を持つて居る。然るに日本は最早や振るべき袖がない。筒袖位は有るかも知れぬが、夫では踊りにならない。財力に於て到底競爭に堪へ得ざること明白なる我が國は、米國海軍に對して三割に落つるか四割に落つるか、恐らく六割の力を維持することさへ困難であらうと思はれる。夫が厭やなら我に最も有利なる時機を擇んで、伸るか反るか、國運を賭して乾坤一擲の戰爭に出づる外他に途は無い。英國タイムスは、日米戰爭起らば英國は米國に味方せざるべかずと公言して憚らざる今日、支那は我國に對して極度の排日態度に出てある今日、日本は佛國軍閥の援助のみを空頼みとして開戰するの勇氣と決心とがあるか。

或る志士はヤンキイの七人位は獨りで引き受けると力んで居る。或る學者は[illegible]數本の棒を國家に捧げると云ふも、一人で世界を敵として戰ふには夫では餘りに貧弱ではないか。せめて一命でも拋り出すと何故言はぬか、國民最後の血の一滴までもとは、何れの戰爭に於ても叫ばるゝ常套語である。芝公園に於ても屢此の語が繰り返へされ、大なる拍手喝采を以て迎へられたを見て頗る心強く感ぜられた。然るに國民の半は愚か、三分の一も五分の一も斃れぬ前に屈伏して仕舞ふのが、昔からの戰爭の常である。獨逸では戰爭中繰り返へし〳〵此の語が叫ばれたが國民の十分の一が死傷せざる前に潰れて降參したではないか。之を以て我が國民は華盛頓會議を單に軍事上の見地のみより抗爭することなく、政治的大局より冷靜に愼重に考察することが必要である。要するに吾人は日本國民として、我が全權の提議の容れられんことを熱望すると同時に、協定が不成立に終はらざることを一層強く切望する。而して其の間に於ける進止と折衝とは全權の手腕に信賴して可なりと信ずるものである。

一八　全權不信任決議

帝國を代表せる我が全權が既に比率主義の承認を聲明せるに拘はらず、國民の一部には尚ほも比率主義を否認して均等主義を叫び、決議文とかを態々華盛頓に於ける各國全權に電報した

る好事家もあると傳へられて居る。是れ單に時期を誤まれるのみならず、明らかに我が全權に對する不信任決議と云ふべきである。各國全權に電報する迄もなく、先づ我が政府に逼つて全權を招還せしむる方が早道である。此の電報に接して我が全權の面に變色動くとの外電を見て、吾人は我が全權の爲めに同情に堪へない。斯くの如きは全權を後援するのでなく寧ろ全權を苦むるものである。其後に於ける英米全權の我が修正案に對する反對的態度の俄に強硬となりたるが如き觀あるも、何等か此の間の消息を傳ふるものではあるまいか。兎角國を傷ふ者は破壞的なる共産主義者無政府主義者よりも、寧ろ盲目的なる國權論者と帝國主義者とである。

一九　ラツセルの置土産

「ベルトランド、ラツセル」は日本に對する置土産として、「日本人の侵略的根性を矯め直し文化的新日本を作るには、一度敗戰の地獄に陷ゐるの外に道はない」と言つたと云ふことであるが、或は眞言かも知れぬ。併しながら吾人日本人としては何とかして此の恐るべき煉獄の責苦を受けずして新たなる道に進みたいと思ふ。而して之に處するの途は多々あるならんも、當面の策として吾人は左の諸項を掲げたいと思ふ。

一、軍隊は國民に對し純眞なる國防に必要なる軍事的知識普及の範圍を越へて侵略的思想を鼓吹せざること

二、新聞紙は國際問題就中外國電報に對し故意に誇張的標題を愼み以て國民の誤まれる排外的思想を挑發せざること

三、小學校教科書の編纂に注意し純正無垢なる兒童の心理に戰爭讃美の意識を涵養せざること

軍事當局者は今尙ほ軍隊を以て國民教育の完成所と唱へ、軍隊の飯を食はざるものは完全なる國民にあらざるが如く考へて居る。然るに軍隊に於て鍛ひ上げられたる在鄕軍人なるもの丶思想は、大體に於て前に述べた如くである。治に居て亂を忘れざるは誠に可なるも、治に居て亂を好むが如き國民を養成せられては物騷至極である。新聞記事に對しては重ねて述べず。小學校の教科書に對しては世間既に種々の論難がある。其の或は學校教育に依るか、或は遺傳的先天性に依るかは知らぬが、日本の兒童が戰爭に對する讃美憧憬の情は遙かに歐米の兒童よりも強きは、其の遊戯と嗜好とに依つて略ぼ察知することが出來る軍事當局者は現在の教科書を以て、國民の尙武心を鼓吹するに尙ほ不足なりと云つて居るそうである。一方に於ては戰爭記事が多き過ぎると唱へ、一方に於ては少な過ぎると云ふ。教科書編纂係の苦心に同情する。六週間現役が一年現役となり、完全

なる國民となつて教育に從事するのであるから、完全なる思想の出來るも疑問ならずと思はれる。

二〇　吾人の對米觀

吾人は妄りに歐米人就中米人を以て聖人君子と爲すものではない。彼等の唱ふる正義人道を無條件に盲信するものでもない。其と同時に吾人は彼等を以て我が國一部人の呪ふが如く、無理由に日本を意地め、無茶苦茶に日本人を苦しめる惡魔とも思はない。併しながら日本人中にも惡人あるが如く米國人中にも惡人はあるであらう、日本人中に侵略主義者のあるが如く、米國人中にも侵略主義者はあるであらう。日本人中にも感情的に米國を憎む者あるが如く、米國人中にも感情的に日本を憎む者もあるであらう。併しながら米國の侵略主義者如何に無謀にして無知なるも、日本を併吞することの愚なるを知つて居るであらう。日本を支配することの不可能なるを知つて居るであらう。更に六千萬の日本人を不條理に激怒せしむるとの自國に取りて有害無益なることをも知つて居るであらう。人を呪はゞ穴二つとかで己れ人を欺く者は人も亦己を欺かんかと疑ひ、己れ侵略慾に捉はれ居る者は人も亦侵略慾を有するが如く疑ふは人情の自然である。日本の侵略主義者の心に米國の侵略主義が强烈に濃厚に許容するのも亦此の理である。

僕の如きも軍國主義と偏狹なる國家主義とに捉はれ居たる際には、米國の爲す處、言ふ處、悉く不滿に堪へなかつた。然るに人類の目的は平和に在り、平和は先づ國際間の融和を圖るに在りと信じて以來、米國の行動に對しても冷靜に公平に考察するの餘裕を生じ、今日に於ては日本の帝國主義者や感情的憎米者の云ふが如く、米國に對して無理解なる不安を感じて居ない。由來多くの場合に於て帝國主義者や侵略主義者は利己主義者でなく、寧ろ過度に熱烈なる愛國者憂國者である。吾人は彼等の思想に對しては時代に後れたる頑迷を非難するも、人間其のものは立派な人が多い樣に思ふ。吾人は是等の人々が一層大所高所に立つて國家の安泰を講ぜられんことを望むものである。

二一　前途に横はる三大難關

海軍制限協定は、我が國民一部の滿足すると、せざるとに拘はらず、必ず成立するものと確信して居る。否な成立せしめねばならぬものである。併しながら縱令此の協定にして成立するも、混沌たる露國は別とし、少くも獨逸に對する佛國の强壓政策と日米間に蟠まれる感情的相互誤解と、日支間を距つる不思議なる反日とが除却せられざる限り、經濟上の緩和は求め得べきも、

精神的の平和は結ばれぬであらうと思ふ。但し日本としては之に依つて日米間の衝突を避け得るの効果は甚大なるものであることを疑はない。

世界は今平和に向つて一歩を蹈み入れた。更に第二歩を蹈み入るゝか、或は第一歩を再び後に引き退くるかは、各國民の覺悟に依つて決するのである。萬一後に引くが如きことあらば、近き將來に於て再び蹈み出すの機會は絶對に無いであらう。然る時は世界は復たく\力の世に復へり、露骨殘忍なる弱肉强食の混沌狀態に陷るを免れないであらう。是れ人類の大不幸にして就中世界に孤立せる我が國の最大不幸であると信ずる。我が國民は今日の此の機會を善用利導するに力を盡さねばならぬと思ふ。

二二　結言

世界平和の妨となるべき軍備は思ひ切つて縮少すべし。戰爭の出來ぬ迄に制限すべし、更に進んで全然徹廢すべし。併しながら苟くも爰に大小を問はず軍備の存する以上、國民は無理由に或は感情的に軍隊と軍人とを呪つてはならぬと思ふ。之と同時に軍隊と軍人とは其の捉はれたる軍事第一主義の思想から脱却せねばならぬ。軍人の軍隊たる謬見を棄てゝ國民の軍隊とせねばならぬ。

（大正十年十二月五日）

結婚改造論

法學博士　森本厚吉

一　結婚改造の必要

時代の勢力は實に偉大なものである、例を軍備縮少問題に採りて考へても、僅かに一ケ年前には、當局は勿論の事、議會でも、社會でも、皆突飛な極端論として顧みなかつた。私自身も國民教育費國庫支辨論に關聯して僅かに軍事費二割減を主張す

るのでさへ、之を否定して議論せざるを得なかつたのであつた。然るに、時代精神はワシントン會議の大勢を支配して、我國全權さへ思切つた縮少案に賛意を表されて居る、昨年の議會で、尾崎行雄氏の縮少案を、即座に否決して得意であつた議員諸君も、今日漸く彼等が時代思潮を解しなかつた不明を恥ぢて居る事と思ふ。國家萬能主義の時代から、世界平和時代に、着々と進み行く現代の活動振りを見て、心から快感を覺えずには居られない、個人としても亦國家としても、時勢と共に進歩し得ないものは、現代に生存權を放棄して居るのであるから、社會進化の行程からとり殘されて、衰頹するのは止むを得ない運命である。

斯く考へつゝ、我國現在の社會諸相を研究すると、時勢に逆行して居る事物が、各方面に少からず存在して居つて、世界の日本としての進歩を阻害して居る事が少くない。近來先覺者連が口を揃へて、社會改造の急務なる事を高唱したのは蓋し當然の事である。然り社會を改造し、我民衆をして新時代の精神に覺醒せしむる事ほど、今日重要な事はない。然るに社會改造が叫び出されてから、既に數ケ年を經過して、此一九二二年が生れ出でたのに、其改造成績が頗る不良であるのは何故であらう。

私は信ずる、今日叫ばる改造の言論が、其の多く空なりし理由は、其改造論は主として、社會又は經濟制度等の、外的改造論であつて、其根本となつて居る内的改造論即ち、動機の改造論はまだ重きをなして居ないが爲めであると思ふ。

動機が改造されるならば、社會運動は秩序正しく徹底的に、行はれるであらうから、必ず家族の改造が問題になる。我が家族生活は舊い〳〵時代に出來た家族制度によつて、今猶束縛されて居るのであるが故に、家族其者が社會改造の原理を裏切つて居る。從つて、社會改造は先づ、社會の單位である家族の改造から始まらねばならぬのである。而して其家族生活の出發點は、婚姻にあるのは云ふ迄もない事である。我國在來の婚姻制度や其習慣は、甚だしく非文化なものである事は、周知の事實であるが故に、是れを時代に適するものに改造する事によりて始めて健全な家族が成立し、夫等が集合して始めて理想的社會が實現されるのである。要するに、社會改造の根本義は動機の改造であつて、其の社會に顯はるゝ結果は先づ結婚改造として表はる可きものである。

二　動機の改造

動機の改造と云ふ事に關しては、私は「文化生活」十一月號

卷頭に近頃次の樣に書いたのであるが、議論の順序として今是れを繰返す事を許されたい。

「見よ！見苦しい綱紀の廢頽、風紀の紊亂を。大正の聖代に百鬼續出して文化の生血を吸ふて居るではないか、國民の模範階級に起つた事だけでさへ、東京府、市の疑獄、滿鐵最高幹部の收賄、大學教授助教授の卑賤な婦人關係等を筆頭に大小數へ擧げれば殆んど際限がない。

然かも政府當局は深く之を怪まず、社會も亦大喝して之を責むる勇なきは、蓋し國民の良心痲痺して道義心の低級なるを曝露して居る爲であらう嘆かはしい事である。

心的文化生活の骨である可き正義人道が、かくまで地におちて顧みられない現代社會であるのに、文化主義の哲理を誇擧的に宣傳したり、或る實生活に於ける食、衣、住、社交等を改善した位で、文化生活を營んで居ると思ふものが少くない。勿論これ等も必要な行程ではあるが、眞に現代文化に生くる生活はそんな淺薄なものではない。先づ根本義として、各自進んで個人生活の動機を改造する事に最善の努力を盡し、以て道德的改造の實を自ら擧げ得る樣にする事が先決問題である「人若し自己の魂を失はゞ全世界を得るとも何の益あらんや」である。

顧みれば我國も大戰後漸く「世界の日本」となつて、國際的舞臺に踏み出す樣になつた。そして始めて氣がついて驚いた事は、幾百年來我誇りであつた大和民族の文明も、世界文化に比較すると、幾多の缺陷が存在して居ると云ふ事實であつた、夫れがために後ればせながら、先年來各方面に改造問題が提唱されたのは眞に慶賀すべき事であつたが、物事に厭き易き我國民性の短所は又こゝにも現はれ、未だ改造の實が擧つたと云ふでもないのに、早やその改造論がぽつ／＼下火にならうとして居るのを私は深く悲むのである。

かゝる時に當つて取り殘されて居る重要問題の內で、少くとも動機の改造といふ事だけはこのまゝ葬り去る可きものでない事を近來熟々感ずるのである。勿論、經濟的壓迫は非常に强く且つ未だ精神的方面を取扱ふほどに經濟學は進步して居ない今日ではあるが、生活の根本問題はやはり「經濟生活の改造ではなく、其動機の改造である」といふ原理をスマートと共に、私共の「第二の思想」として叫ばざるを得ない。

動機さへ改造し得るならば、自然に道德的改造が行はれて、生活は根本的に向上し得るのである。即ち生活を支へて行く消費は無意味な冗費を少くして、未來の富の造り替（レクリエーション）を大にし、又利己的消費が社會的のものに進化する、其結果終には經濟生活の本質が奉仕の競爭となり相互的奉仕の無意識的協力が社會

の必要となるに到るのである、かくしてこそ初めて眞の文化生活が實現されるのである。

幼稚な現今の經濟學の立場から看過する物的文化生活論は、心物兩面を有して居る眞の文化生活論に入る必要な第一思想に過ぎない事を決して忘れてはならぬ。云ふまでもなく、今日社會はパンに缺乏を感じて居る、我等は奮闘して民衆に夫れを豐に與へなければならぬが、矢張り人はパンのみにて生くる事は出來るものではない。改造すれば動機の上にのみ、美しい完全な文化生活は建設される。だから所謂改造の叫びが聲を潜めんとして居る今日こそ、道德的改造が一層高唱されなければならぬ時である。然りマルクスやリカードと共に、再びラスキンやカーライルに學ばねばならぬ時が來たのである。

三 家庭改造と結婚改造

動機が改造されるならば、人は眞面目になつて、順序正しい進歩の階段を、上るものであるから、必ず家庭生活の改造が問題になる、如何となれば、我國の家庭生活は封建時代の遺物で未だ因襲から脫し得て居ないから、歐米文明國に比較すると、今猶百年以上も後れて居る。夫れを其儘にして居いて家庭の集りである社會を改造せんとするのは無理な事ではあるまいか。

自己が自分の家庭改造を行はないでも、改造の旗を振ることは出來やうが、夫れは所謂看板、乳鉢の類である。自己の家庭がまだ十分にデモクラチックになつて居ないのに、社會のデモクラシーを高唱するのは無意味な事である。内では家庭の女王である可き妻女の人格を尊重しないで、終日高等女中にあらざれば、人形同様の玩弄物に過ぎない様な待遇を與へ、外では下劣な醜業婦人と席を共にする宴會に、有頂天になるが如き不合理な生活を營んだり、或は社會國家の重大問題を待合で論じたり、或は眞面目である可き議事の審議が、喫煙や喫茶等と共に仕だらなくなさるゝが如き、或は不經濟極まる二重生活の浪費を敢てしながら、臆面なく社會改良を叫ぶが如きは、皆一種の芝居の所作事とより見る可らざるものであるから、其實績の舉らないのは當然の事である。

エルウード曰く「家族に對する愛着心が發達するのでなければ、より大なる集團に對する愛着心は强くなるものではない、故に、家族的情緒の强い處では必ず强力な愛國心と、社會的同情心が見出されるものである」(Ellwood, Social Problem, p. 199) 家族は自己と社會の中間物であり、家庭生活は社會生活の縮圖であるから、社會改造運動は先づ自己の家庭を實驗品として、其處から始まるべきものである。此の點に注意を拂ふて居

ない外的改造運動が行きなやんで居る今日、私共は此等社會問題の正當なる解決を徹底的に行はんが爲に、先づ家庭建設の中心である結婚問題から論究するのは自然の理である、是れ私が茲に結婚改造論を敢てする所以である。

我文化の最大缺陷は、婦人が男子に比して能力の劣つて居る事にある。而して、現代文化は個人の人格を尊重し、其自由發達を期する事に基調を有するのであるから、各自に各々與へられた境遇に於て自己の生活能力を完全に發揮しなければならぬ、然るに、我國の女子は未だ男子が文化に貢獻した程の、努力を盡して居ない事が否む可らざる事實であるのを悲しむ。

私が曾て婦人勞働の實地研究に從事して驚いた事は、女は男より二割内外廉い賃銀をとつて居る事が常であり、男女同一の仕事に從事して同一の能率で其仕事高が同じ場合でも女の賃銀は、男の六割位で滿足して居る事實さへ目撃した。而して其理由としては、唯彼等が女性であるが爲めとの事である。然かも夫れが餘り不思議な事とも考へられて居ない。之れ實に社會も婦人自身も女性を卑下して、其の能力は男の六割位のものと思つて居るが爲めであらう。

私は決して女が男と同一の仕事をして競爭すべきものであるとは思はない、今は分業の世の中であるから、主として女は男と異つた方面に活動する事によつて女の天職を十分に發揮し得られる。假令其活動の方面は異つて居つても、常に男子と同等の地位に女子が立つ事によつて、合力の結果文化の開發を見る事が出來るのである、然るに我國に於ては當然女子のなす可きもの、或はなさねばならぬものに於て、僅か六割位の能力より活用されて居るに過ぎないものがある。主として男子の力によりて築き上げられた我文化は、今殆んど行詰まりになつたかの感があるが、是れを今後更らに開展するには、絶對に女子の活動を必要とする。先進の外國では男女對等で活動して居るにも拘らず、我國では未だ十分に女子が解放されて居ないから、外國の如く一と一と二の力でなく、一と六割卽ち一・六の力のみが用ひられて居る、換言すれば彼れは二人で二の仕事をして居るのに、我れは二人で一・六の仕事よりして居ないと云ふ事である。是れでは今後國際競爭場裡に立つて勝を占むる事は至難な事であらう、今や婦人の立つ可き時である、男子も是れが爲めに出來る限りの努力を吝んではならぬ、男子は專横を恣にして女子を僅かに半人前のものに畏縮させて置くのは、男子自身の爲めにも不利益な事である。

婦人の活動す可き領域は種々あるが、其最も手近かなものは時代の進歩に適應する家庭の建設である、勿論男子も是れに貢

任を有するのであるが是れは主として女子の本領であるが、女子が百年も二百年も時代に後れた形式の家庭に今猶蟄居して、因襲の奴隷となつて居るのは現代婦人としては勿論、男子にとつても大なる恥辱である、而して婦人を現代に活かすが爲には先づ結婚の改造から始まる可く、其結婚の改造をなす爲に先決問題として我家族制度の改造を必要とする。

四　家族制度の改造

我國の女子を無能に陷らしめた強力なる原因は我家族制度である、此制度は家を基とし家長と家族との集團を本體とする制度である、一名是れを戸主制度とも稱する、我民法では戸主の親族にして其家にあるもの及其配偶者は是を家族とすと規定してあるのを見ても、戸主は家族ではなく家族を支配する主體で配偶者等より一段高い地位を占めて居るものである。

故に此制度の下にある家族と、西洋の家庭即ちホームとは大いに異つて居る、ホームは家庭制度の結果、各自は皆家族員で各々自由平等の人格が認められ、妻は妻とし、子は子とし、夫や父と同樣に夫々特殊の權利が認められて居るから、ホームの内には特に家長權を有する者は存在して居ない。我家族制度は専制主義の發現で、西洋の家族制度はデモクラシーの發現である、家族制度の行はれて居る間に[illegible]出來るものでない、從つて此制度の下に現代に適應した結婚を行ふ事は不可能であると云つても過言ではない。併し家族制度が時代錯誤である事は明かで、早晩破る可きものである事に就て梅博士は民法要義親族編の中に次の樣に書いて居られる「我國に於ては、今猶戸主制を存し、戸主は家族に對し一定の權利義務を有し、其間に自ら一の團體をなせり、是れ社會の進歩と同時に漸次廢滅す可き事項なる事は殆ど疑を入れず」此制度は印度民族に最も盛で、羅馬でも一時盛に行はれ生殺與奪の權を父が有して居つたのであるから、子を賣り身代りとなす等の事は普通の事であつた「ブルータスが其子を殺したのは、刑名によらず人と謀らず父たるによりてなせり」との事は有名な話である。斯かる時代に於て結婚の如きは勿論家長の定むるもので當事者の自由は絶對的に認められて居なかつたのは何も不思議な事でない。

大正の今日斯かる性質の家族制度が存在すべき理由の全然ない事は、此制度の起因は何處にあるかと云ふ事を知れば明かになる、専門學者の説によると、家族制度の起因は二つある、第一は社會上の原因で「草創の世、政治組織未だ整備せざる時に當りては、弱者は到底獨立して生存するを得ず、僅かに強者の

庇護の下に匿れて自己を護衛し、婦人兒子は家長の保護の下に生存を保つに過ぎず……家長が絶對の權力を收め、其下にある家族は一擧一動是れ背かさらん事を虞れ、戰々兢々其命ずる儘に動きたるは察するに難からざるなり」

第二の原因は祖先教の影響である。「祖先崇拜は未開人の間には最も廣く行はれたる所にして、死靈は人間界の事物に關係すとの信仰に基き其祭祀は是等死靈の歡心を得、其怒を鎭むるを以て目的とす、墓所を大切にし…其共同の祖先の保護の下にある一族は、自ら祭祀を司る家長の下にありて鞏固なる團結をなし、其最も重大事たる祭祀を司る可き家長は、絶對の權力を以て家族に臨めるに至れるものなり」（本莊法學士著經濟史研究三六〇頁）

以上の二原因は今日では共に其必要を認めないのである。時代は其後著しく進歩したのであるから、今となつては梅博士の言の如き當然消滅す可きものであるのに、是れが勢力を逞くして結婚も其支配を受けるのであるから、今日幾多の犧牲者が續出せざるを得ないのである。故に家族制度に更ふるに家庭制度を以てし、家族の各員は互に自由平等の人格を尊重する事によりて、自覺心を發現せしめ、自立自助の精神が活動して各其生活能力を極度に發揮せしめ得る麗はしいホームを建設すべきである。從つて家族制度の精神を無視する事が結婚の改造に必要な第一歩である。

五　婚姻の種類と其發達

如何にして結婚の改造を行ふ可きやと云ふ問題を解決するには、先づ婚姻の過去に於ける事實及其發達の狀態を明かにする事が必要である。古來種々と論議の戰はされた此の問題に關する研究を綜合して考へると、先づ、幼稚な原始時代に於て男女間の性慾關係が頗る亂れて居つた事は想像するに難くない。原始人の腦力が幾分進歩した後に子供の生れる事によつて始めて、男女間の關係が制限されて、一種の結婚が成立する樣になつたのであらう、故に結婚あつて子供が出來るのでなく、子供が出來て結婚が成立したものと想像される。而して其後行はれた結婚の制度や方法は隨分複雜なものであつたが結婚の制度は大體次の樣に三大別にして考へるのが至當であると思ふ、

一、群婚（Group Marrige）と云ふのは男子の一團（普通に兄弟）が女子の一團（普通に姉妹と結婚して、其團體の各婦人は各男子の妻となるのである。

二、一妻多夫（Polyandry）と云ふのは男子の一團（普通に兄弟）が一婦人の夫になるのであるが、是れは餘りに廣く

[illegible]島の土人には普通に二人、ホッテントットでは二人の夫を有するのは能く知られた事實である。

三、一夫多妻（Polygamy）と云ふのは強力で、富んで居る男子が多數の妻を有して居るので、今日でも種々の形式で是れが行はれて居るのを見る、昔ソロモンの榮華はよく后宮七百の王妃と三百の貴妃を容れたとあり、レホボアム王は法律の許す極度の數即ち十八人の妻と七十五人の妾を有せりとあるが如き記事は少なくない。

是等の結婚制度を行ふ方法は大別すると四類とする事が出來る。

一、掠奪婚と稱するもので、永い間盛に異族間の結婚に主として用ひられて居つた方法である。即ち男子が異つた種族から女子を掠奪して結婚するのであるが、此方法によると尙武の精神が養成されたり、異族の血を混じ、又近親婚をさくる事等によつて健康をよくし、或は一部落に於て婦人の缺乏せるのを調整する等の理由で家長が盛んに奬勵したのである。之れ初代のアリヤン人種が最も普通に行ふた方法で今日でもアルーシヤン島やカルホルニヤの土人の或部落では類似の結婚が行はれて居る。

二、賣買婚と稱するもので、結婚が當事者の手段として發達したものである。即ち暴力によらず双方合意の上、相當の賠償物を提供して妻を購買するのである、例へばニューメキシコでは我群の美人を妻とするには馬十二頭を要し、亞弗利加では安價な妻は牝牛五頭乃至十頭、高價なのは三十頭を要し、又カロリン群島では僅かに若干の果物及魚類を以て容易に妻を求むる事が出來た、又時には父が娘を競賣に附して最高の評價をした男に何等の條件をつけずに娘を渡す場合もあつた、而して娘の價格が餘りに高い爲に一生獨身で暮す者がテッケ、チュルコーマンスで見られると書いてあるが、我國では同樣の事實が今日でも屢々見られる。

三、贈與婚と稱するもので、賣買婚が發達したものである。特に賠償として物資を提供するのではなく、娘の父は夫たる可き男から相當の贈物が提供される事によつて娘を與へるのである、支那及日本等では極く普通に行はるゝ方法である。

四、共諾婚と稱するのは最も發達した方法で今日歐米文明國で普通に行はれて居る、即ち男女各自が互に承諾する事によりて結婚が成立するものである。

現在我國で普通に行はるゝ結婚は、表面は共諾婚であつても事實は賣買婚と贈與婚との雜種である、勿論昔の樣に露骨に金

錢での賣買は行はれないが、結納の交換される事、結婚仕度を重視する事、或は本人の意志を重んじないで、他人が結婚の決定權を有するが如き事等は、皆今日の結婚が商買化されて居る事を證明して居る。更らに男女間の社會的需要供給の關係が變化する事によつて、花嫁の方から賣るのを急ぐ必要が起る場合もある、其結果として、持參金制度までが起る樣になつた、ウエスターマークが「結婚持參金を有せざる者は現今でも、青年女子が特に力强い引き付ける力を有しない限り生涯獨身で暮す危險を有す」と書いたのは僅か二十餘年前の事で、我國では其の樣な事實が今日少くない。

かゝる商賣的又は壓迫的の結婚が、改造されて共諾婚に進むのである、之は單に當事者同士が互に承諾を與へるのみでなく、夫れが法律で承認される事によりて成り立つ婚姻である、故に法律論としては「婚姻とは當事者双方の合意による一男一女の終身的共同生活關係を法律が承認せるものを云ふ」(穗積博士婚姻制度論ニ依ル)此の定義に基づいて、我國現行の婚姻を批判すると種々の缺陷があるから、現代に活きんとする者は、舊慣を破つて根本的に改造する必要を自覺するであらう。

六 結婚の慘虐史

結婚の歷史は女子が男子から受けた一種の壓迫史の如き觀がある、從つて裏面から觀察を下すと、結婚の發達史は妻の權力發達史に外ならない、今日猶夫は妻の人格を尊重せず、物品取扱にし、妻の地位が夫よりも一段低きものとする習慣のあるが故に、對等の立場で共諾婚を行ひ得ないのは全く過去數千年間の歷史的產物であると思ふ。

今女子が如何に人格を無視され虐待されて居つたかの實例として二三の事實を記述する。

先づラボックによると、女子は男子の共有す可きものであるのに、若し特に妻を獨占するを欲する者は、先づ一種の代償的行爲をなさねばならぬ、其の行爲とはリビアンのナサモニアンオージレー等に見る如く結婚の當夜は招かれた客に Jus primae noctis の權があるとか、又ペロー國マンタ地方では新婦が先づ新郎の知友親戚の意に從ふて結婚當夜を過す事を條件として結婚が行はれるとか、或はバレークック島の土人の如く、結婚の當夜女は全く招待客の權利に屬し第二夜より初めて夫の所有物となる俗があるとか、或はブラジル、ニカラガ地方に行はれる樣に結婚の第一夜の權利が酋長或は僧侶にあると云ふ樣な事實は少くない。

以上は極端な例であるが夫等の惡習慣が今猶我國に於て働き

とだ。彼等自身に取つて眞に何を意味するかを知らなければならないとした。若し祖國を擁護するといふことが、單に自國內の一部の特權階級の地位と利益を擁護するに止まるものとするならば、又それが彼等自身の眞の幸福と安寧とを增進するために役立つものでないとするならば、彼等は先づ自國內の特權階級と自身等との關係を適當に調節しなければならないとした。此調節なくして、自身等と同一の境遇に在る敵國の同僚と鬪ふことが、自身等のために結局是であるか非であるかを見極めなければならないとした。玆に目ざめて來たことが彼等をして、ストックホルムに相會して俱に共に戰爭の目的の那邊に在るか、如何なる條件を以てすれば互に干戈を收めて同胞の誼を恢復することが出來るかを、祖國としての立場からでなく、勞働階級としての立場から考慮しやうと企てしめる動機であつた。勿論此企圖は政府の干涉によつて成就しなかつた。併しながら敵味方相互の勞働階級をして、其企圖の上にでも此處まで近接せしめたものは、各々自國內に於ける社會制度經濟組織に對する彼等の多年の不滿であつた。此不滿を露骨に表白することを妨げてゐた特權階級の壓迫が、戰爭のために弛緩を來たしたことであつた。戰爭のために國難に殉ずる者は主として勞働者でありながら、資本家や企業者は多大の收益を得て、內心戰爭を歡迎してゐるといふことであつた。聯合國敵國を通じておなじこと、其恩澤に浴するものはやはり軍人資本家其他國民の一部分でもつて、大多數の勞働者の境遇は到底改善せられる見込みないといふことであつた。而して最後に彼等の夙年の希望たる現社會制度改造の目的を達成するには、戰爭によつて總てが常調を失して舊秩序に動搖を生じてゐる今の時期を選ぶことが最も策の得たるものであることの自覺であつた。言ひかへれば彼等は戰爭によりて、從來彼等が畏れ憚つてゐた特權階級も國家の危急存亡に瀕しては、彼等の力を借らずしては何事も爲し得ないものであるといふことを知つたと同時に、此特權階級の不當な壓制と搾取とから自らを解放することは、正當にして又可能なることを自覺したことであつた。この意味の自家解放なくして、唯祖國を擁護し、外敵を懾服したとしても　これは彼等自身に取つては無意義であるといふ事實に氣が附いたことであつた。此故に彼等は外敵と和しても內敵とは和しまいとした。寧ろ外敵と和することによりて、內敵と戰ふべき力を保留しやうとした。斯ういふ彼等の感情が、目前祖國の危機に瀕してすら、炭坑や、造船所や、軍器工場に同盟罷業を勃發せしめる原因であつたのである。

右のやうな自覺が抗拒すべからざる勢を以て歐洲各國の勞働

階級に浸潤して行つたとは言へ、各國の大勞働團體の有力なる幹部が、極力輕擧盲動を避けやうとしたことも事實である。如何に彼等が勞働階級に對する政府の誠意を疑ひ、資本家の横暴を憎んだとは言へ、彼等は決して祖國に對し反逆を敢てする者ではない。彼等は戰時の變態の下に在つては、姑く隱忍して大なる破綻を示すまいとした。併し彼等は早晩來るべき平和克復の後に於ては、異常なる戰時の狀態を舊に復するだけでは承知しまいとした。必ず社會制度、經濟組織の根柢を改造して、資本と勞働との關係を合理的な新基礎の上に再建しなければ、如何にしても默して止むものでないといふ決意を忌憚なく發表して、政府と特權階級とに警告することを怠らなかつた。一九一八年六月の英國勞働黨の「勞働と新社會秩序」の宣言の如きは其顯著なるものである。殊に一九一七年十一月の勞農政府の革命は、世界最初の社會主義國の誕生として、西歐諸國のプロレタリヤに深甚な感激を喚起さずには置かなかつた、何れの國に於ても最左翼の社會主義者の宣傳は、最早冷眼に默過する譯には行かない程の勢を示して來た。極めて保守的な政治家又は資本家にあらざる限り、勞働階級を飽くまでも戰前の位置に膠着せしめた儘で、戰後の恢復事業に當ることの不可能なることを次第に感づいて來た。勿論これは啻にプロレタリヤの威嚇に因るブルジョアジーの讓歩とのみ見るべきものではなかつた。賢明なる學者、政治家及資本家は、勞働階級の要求の裡に動かし難い論據を發見して、之に順應するの已み難き理由を悟つたのである。玆に新勞働政策の萌芽が發したのであつた。

六　社會主義的思想の普及（一）

十九世紀の中葉から二十世紀の初頭にかけて、つぎ〳〵に唱導せられたる共產主義、國家社會主義、サンヂカリズム、ギルド社會主義等に關する諸學說の中心思想が、不合理なる不勞所得の廢止と、賃金奴隷の境遇からの勞働階級の解放と、及其方法として生產要具を擧げて國有若くは公有に移すことに在つたことは今改めて說くまでもない。此點までは是等の諸學說は槪ね一致することが出來た。而して私は此一致したる共通の部分を指して社會主義的思想と名づけやう。

社會主義的思想を如何にして具體化すべきかといふ實行手段に關しては、共產主義と、國家社會主義と、サンヂカリズムと、ギルド社會主義との間に著しい相違のあることは、何人も周知の事實である。これがために彼等は共同の敵たる資本主義と戰ひながら、味方の異主義と又相鬩いでゐる。而して相俱に其理想の實現を遲緩ならしめてゐるのである。

今彼等の主張する所の實行手段を大別するならば政治的と非政治的との二つとすることが出來る。

私の所謂政治的とは暴力に依る革命的手段を用ゐることなく、各國に於ける現憲法を改正することに依つて其目的を達しやうとするものである。これがためには憲法を改正すべき適法の權限を有する機關を先づ改造して、彼等の主張に聽從せしめなければならぬ。此機關を改造するがためには多くの場合先づ選擧に勝を制することが必要の順序とせられる。選擧に勝を制するがためには選擧法其者の改正も必要であるが、もつと根本的に必要なことは國民の思想を改造することとである、而してそれは唯教育に依つて成就するの外はない。勿論玆に謂ふ所の教育とは、學校教育のみを指すのではない。演説も、論文も、示威運動も、同盟罷業も、其他一切の宣傳は廣い意味に於ての教育である。是等一切の方法を盡して國民を教育し、其思想を革新し、輿論を改造することが最大の事業である。これに成功した時、戰ひは全勝した時である。其時こそ彼等は平和と歡聲との間に、一國の政體を變更することも出來れば、生產要具の公有、資本主義の根絕、賃金制度の廢止といふが如き多年の綱領に肉を着け、血を通はしむることも出來るのである。唯此場合に於て、決して所謂「プロレタリヤの獨裁政治（ディクテーターシップ）」なるものを行つてはならない。それは國民の一部から參政權を奪ひ、ここに政權を擧げてプロレタリヤにのみ專有しやうとするものであつて、根本に於て非デモクラシーであるからである。一部の者の便宜のために他の一部を虐げると云ふことは、現在社會主義者が非難攻擊して息まない所の現制度の缺陷を自ら反覆するものであつて、不合理であると同時に不必要である。爭ひは何處までも光明正大でなくてはならない。何人の意志をも脅威拘束することなしに、完全なデモクラシーの原理の上に戰はれ且勝たれなくてはならない。之が私の謂ふ所の政治的手段である。

然らば非政治的手段とは何であるか。それは上記の如き順序を經ないで、××××××××××××××××××××、×××××××××××××××、咽喉の間に勞働階級が權力を掌握し、思ふまゝの變革を成就しやうとするものである。此故に或時期までは「プロレタリヤの獨裁政治」が已むを得ない必要とせられる。彼等は平和の裡の投票函の作用によつては勝利を得る見込のないものと信じてゐる。何となれば國民の大多數の頭腦は未だ彼等の目的に共鳴し得る程度に改造されてゐないからである。此故に彼等の反對者又は其傍觀者が改宗して彼等に歸依するまでは之に抑壓を加へることが、過渡期の已むを得ざる手段とせられる。此故に彼等は本來平和

論者であり、非軍國主義者でありながら、赤衛軍を組織して自ら護らなければならぬやうな矛盾を冒すことになる。假令それが一時の方便ではあつても、一階級の他階級に對する專制であり、デモクラシーの無視であることは爭はれない。

かやうに政治的手段と非政治的手段とを比較するならば　政治的手段が至當であつて、非政治的手段の排斥しなければならぬことは論を俟たないやうに思はれる。併し吾等が此斷定を下す前に先づ解決しなければならない一つの疑問がある。それは非政治的手段の主張者に依りて最も力説せらるゝ所の疑問である。即ち政治的手段は畢竟空想であつて、永久に實現の可能性を有たないものではなからうかといふ疑問である。此疑問の提起者は斯ういふ。現時の特權階級は大體に於て現存の社會制度、政治組織、産業經營法の存續を利とする人々である。否之を存續するとによりてのみ其特權を維持することの出來る人々である。從つて彼等は其力の能ふ限りを竭して現存の諸制度、諸組織を維持しやうと努めるに違ひない。而して此努力は、現存の政治機關並に經濟機關を通じて、國家權力の形に於て若くは國法の庇護の下に於て、組織的に且大規模に行はるべき可能性があるのである。乃ち政治的手段の主張者が唯一の賴みとする所の教育ですら、現特權階級の利益擁護のために、縱に左右せられるかも知れないことを覺悟せなければならぬのである。斯ういふ事情の下に於ては、國民思想の改造によつて現特權階級の好まないやうな新社會を導出さうとする計畫は、所詮實現する見込は絶對にないとしなければならぬ。玆に於てか非政治的手段が手段としては好ましからぬに拘はらず、竟に已むを得ない唯一の方法となるのではないかと。彼等は更に斯う言ふ。教育によつて改造することは難い。改造した後に教育することは易い。此故に先づ斷行せよ。理解は之に續くであらう。而して思想は改造せられるであらう。其時こそプロレタリヤの獨裁は解除されて、萬民は眞のデモクラシーに復歸するのであると。

この兩派の主張の相異は昨年のカウツキーとレニンとの論爭によつて明白にされた。同時にそれが勞農治下の露國と、社會民主黨と中央黨との連衡の下に在る獨逸の現狀を反映してゐるのである。而して佛蘭西に於ても、伊太利に於ても、英吉利に於ても、其他の諸國に於ても、それ〴〵異つた度合に於て此兩派が現に對立し抗爭しつゝあるのである。

この兩派の何れが窮極に於て其主張の正當を立證し得るかは私の知らない所である。唯吾等のまさしく知らなければならぬことは、此兩派の何れもが社會主義的思想の深刻な信奉者であると同時に、今日此思想は勤勉な眞面目な一般の勞働階級の間

にまで廣く發達して、無數な彼等の頭腦の中に拔くべからざる信念を形造つてしまつたといふことである。今日歐洲各國の有力なる勞働團體の首領等は悉く社會主義者であると言つて可い。最左翼の勞働者から異端視されてゐる英國のトーマス、獨逸の故レギーン、佛蘭西のジューオーの如きも、其主義とする所から言へば確に社會主義者である。何となれば彼等は種々なる機會に於て、主要産業の社會化と其民主的經營とを主張してゐるからである。唯彼等が屢々「黄色」として一部の急進派から罵られる所以は、彼等が飽く迄も非政治的手段の排斥者であるがために外ならない。

社會主義は十九世紀の終り頃までは、まだ眞に勞働階級の「心」となつてはゐなかつた。一八四〇年前後の英國のチャーチストの運動は、それが政治的であつたにせよ、將社會的であつたにせよ、勞働階級の社會主義運動と看做すべきものではなかつた。佛蘭西の二月革命も巴里コムミユーンの變も、所謂民衆を形造つてゐたものは、勞働階級といふよりは寧ろ無頼の暴民であつて、之を操縱したものは實行的才能のない思想家か、然らざれば「人民の爲に」といふ假面を蒙つた野心家の一團であつた。獨逸では『共産黨宣言』から三十年近くを經過して『ゴータ綱領』となり、更に十數年を經過して『エルフルト綱領』まで進んだけれど、「修正主義」によつて[illegible]る壓迫とは、勞働階級をしてアカデミックな主義の論爭から離れて目前の經濟條件の改善に沒頭せしむるに至つた。二十世紀の初めまでは何れの國の勞働階級も、社會主義を眞に「自分の物」として感得し把握するだけの熱情を未だ喚起されずにゐたのであつた。

併しながら二十世紀の初頭以來、勞働組合の著しい發達と、資本主義的勢力の壓迫と、此間に乘じた急進思想家の根氣强い宣傳とは、次第に勞働階級をして社會主義の甘味に近づいて行かしめた。社會主義はそれが單に學者の思想であり、インテリゲンチヤの宣傳である間は、實行力を持たない空論として等閑に附することが出來たかも知れない。併しそれが一度勞働階級の信念となり、民衆運動の目標となるに及んでは、俄に動力を與へられた機械の如く、着々として實行に進むべき可能性を有するに至る。勞働者は學者の如く思索攻究の趣味も有たなければ、宣傳者の如く煽揺宏辭に感興も惹かない。彼等は端的に其欲するものを求め、求むるものを掴まうとする。此故に彼等はいつも簡單であり、せつかちであり、露骨である。從つて又眞劍であり、大膽であり、熱烈である。此故に過去に於て彼等の集團が未だ少數であり、其團結が十分强固でなかつた間は、彼

等の運動は無謀な暴擧として、譯もなく特權階級のために壓迫し去られたかも知れない。併しながら今日の彼等は然かく容易に壓迫せらるべく既に餘りに强大な團體として結束されてゐる。戰後に於ける歐洲列國の勞働組合の發達は眞に驚くべきものである。彼等の擁する經濟的勢力は既に怖るべき域に達してゐる。彼等は殆ど多年の被壓迫的境遇から脫却し得たのみならず、やゝもすれば逆に既往の壓迫者を壓迫せんと試みつゝある。今や貴族も政治家も資本家も、如何にして勞働階級の蓄積したる偉大なる實力の脅威から遁避すべきかに就て非常な苦心を拂ひつゝある。彼等が多年擅有してゐた經濟的特權は、勞働階級の同盟罷業權の無遠慮なる行使によつて、既に半身不隨の狀態に在る。目下彼等の賴みとする所は、其政治的特權を未だ奪はれずにゐるとだけである。之をしも失はゞ彼等に斷末魔の時が來なければならない。かういふ危險に漸次近接しつゝある貴族、政治家、資本家に取つて、勞働階級の社會主義的思潮が如何に怖るべきものであるかは固より想像に餘りある所である。

七　勞働政策の新基礎

大戰を一大轉機として新しい時代の幕は開かれた。今や世界各國は改造に向つて急進し或は漸進しつゝある。あらゆる人の「心」と「物」とは、其持主に有意識にも將た無意識にも改造されつゝある。而して人類の最大多數を占むる勞働者のためにする所の勞働政策は、果して如何に改造されつゝあるであらうか。

勞働者の階級としての存在を廢するといふことが、勞働政策の窮極の理想であると考へることは不當でない。若し此理想の實現する時が來たら、同時に勞働政策なるものは不用に歸すべきものである。何となれば勞働政策は畢竟賃金取得者としての勞働者の生活を向上發展せしむべき方法を攻究するを目的とするものであるからである。此故に若し勞働者が他人に雇傭されて賃金を取得することによつて生活するといふ現存の事實がなくなつたとしたら、言ひかへれば階級としての勞働者の存在が廢されたとしたら、勞働といふ事實は人類社會に永久に廢さるゝ時期はないけれども、今の意味に於ての勞働政策は存在の理由を失ふものである。

併しながら社會主義國の建設によつて勞働階級を廢止することとが、必然的に社會人(勞働階級廢止後には勞働者といふ言葉が不用になると思ふから、假に社會人と呼んで置く)としての彼等の生活を現在以上に富裕ならしむるとが出來るか何うかは、新社會に於ける生産が今日よりも一層豐饒に、圓滑に行はれる

か何うかといふことに適從される問題である。今日の社會制度の下に在つては分配が甚だ不公平であるといふ。これは事實に相違ない。併しながら分配が如何程公平に行はれても、分配すべき生活資料の生産が萎縮するならば、社會人は經濟的不等といふ空虚な特權を樂む以外に、何等得る所はないのみならず、或は悲慘なる生活に甘ぜなければならぬことになる。革命後の露國がその最も好い殷鑑である。此故に勞働階級の撤廢といふことが窮極の理想であるとしても、此理想の實現は嚴に社會人の生活の幸福發展といふ結果を招徠し得べき方法順序の下に於てのみ行はれなくてはならない。言ひかへれば社會人の文化的生活を豐富ならしむるに必要缺ぐべからざる生産事業を益々振興し發展せしむることが出來るといふ見込が確實である場合に於てのみ行はれなくてはならない。しかも之を行ふことの出來る時期は、既存の資本主義的生産組織に替はるべき社會主義的生産組織が、新にペンと紙とによつて完成されたゞけでは　未だ到來したとは言へない。それは又政治的或は非政治家の手段によつて、何人かゞ何時でも現生産組織を變更し得るだけの勢力を蓄積し得たゞけでは、未だ到來したとは言へない。それは實に、既往の産業の發達の一大理由をなした所の利己的衝動に基く企業的精神と、生活の壓迫に餘儀なくされる所の勞働の強制といふ、經濟的の一大動因に代るべき理想的の心的動因が普く社會人を支配して、相與に生産にいそしませるやうな新社會道徳の樹立せられた時期でなくてはならない。少くとも斯くの如き新社會道徳の樹立を確實に豫測し得た時期でなくてはならない。其時期に於てのみ吾等は安じて新生産組織を一排して、新生産組織に就くことが出來る。但斯くの如き新社會道徳の樹立が可能であるか何うか、又假に可能であるとしても其時期は何時であるかといふことに就ての各人の觀察は隨分相異してゐる。

論じて茲に到つて、私は漸く新勞働政策を支配しつゝある所の中心思想に對する私の見解を明にすべき階段に達した。私の見る所を以てすれば、戰後の歐米各國の勞働政策は、主として其國々の政治家、學者、資本家、勞働者等の相互的勢力の均衡作用によつて定まつて行きつゝある。しかも一方に於ては勞働組合の異常なる發達と、彼等の間に於ける社會主義的思想の普及と、並に彼等を指導し若くは其主張を支持する所の學者の熱心なる宣傳と、他方に於ては是等の勢力を無謀に抑壓することの不可能なるを悟つた政治家の聰明と、結局是等の勢力の前には道を讓るの外はないといふ一部資本家の自覺とが相合して、社會の各方面に續發する所の部分的反抗にも拘はらず、能く勞

働政策の大綱を支配して歩一歩其新基礎を築きつゝあるのである。

勞働政策の新基礎は其政策の立案者の主觀に於て、必ずしも現存の資本主義的產業經營法を以てすることが、必至のプログラムであるといふ自覺の下に建設されつゝあるのではない。併しながら少くも彼等は前段に縷述したやうな勞働階級の團體としての急速な實力の增進と、並に彼等の間に於ける社會主義的思想の普及とが、舊勞働政策の基調を成してゐた所の差別觀を、到底今後に維持し得べからざるものとしたことを次第に理解したのである。言ひかへれば彼等は在來の特權階級が自ら其特權の一部又は全部を棄てゝ、進んで勞働階級に讓歩し、妥協することの外には、社會的危機から逭れ出る途がないことを痛切に自覺したのである。急進論者からは頑迷固陋にして濟度すべからざる者のやうに罵られてゐる舊型の政治家、資本家等も、時代精神の自然の感化によつて次第に其思想に變化を來たし、いつしか勞働政策上の新方針を翼賛し、或は其正當を默認しなければならないことを悟つたのである。即ち之を客觀的に批判するならば、彼等は產業經營法の根本的改造が、社會道德の見地から可能であるか何うかに就ては適確な意見を構成するに至らないでも、又それが可能であることを信じても、それを實現し得べき時期と方法とに就ては、未だ判然たる計畫を立て得るに至らないでも、ともかく日一日、それを可能ならしめるやうな、少くもそれに近い或ステーヂに行き着くことを可能ならしめるやうな方針に向つて確實に進んで行きつゝあるのである。即ち今日の勞働政策を表面有りのまゝの形に於て見るならば、それが急進論者の理想から如何程低級であり、微温的であつても、その底に流るゝ一脈の赤い絲は、新時代の勞働政策を產業民主々義といふ土臺の上に導いて行きつゝあることを明瞭に觀取することが出來ると私は信ずるのである。

產業民主々義の意義に就ては私は既に別に之を說いた。（本誌昨年九月所載拙論『產業民主々義への次の一步』參照）今之を他の言葉を以て言ふならば、勞働政策上の差別觀から平等觀への推移がそれである。舊時代の勞働政策は、勞働者を何處までも賃金取得者としての地位に定着せしめたまゝ、其生活を改善してやらうといふ努力であつた。然るに新時代の勞働政策は、賃金勞働者の階級的地位からの解放を窮極の到着點として、それに對する準備行爲として、勞働者の智識及生活の向上を期する所の努力である。舊勞働政策は飽くまでも階級的差別觀に捕へられてゐた。新勞働政策は階級的平等觀に立脚してゐる。こ

れは進步といふよりは寧ろ改造といふべきものである。

かういふ私の見解を證據立てるがためには、戰爭の末期から最近に至る數箇年間に、歐米各國に於ける新勞働立法、其他各般の顯著なる對勞働施設を擧げて玆に之を詳述しなければならぬ。少くも私は米國に於ける工場委員會制度の發展、英國の勞資協調を目的とする諸制度、佛蘭西の新勞働立法、獨逸革命後の産業政策及勞働政策、伊太利の産業共同管理案、露國勞農治下の政治、産業及勞働等に就て、其概略を物語らなければならぬ。併し是等の題目に就ては私が既に世に公にしたものも大分あるから、玆には其一切を省略することを許されたいと思ふ。唯玆に特に注意を要する點が二つある。其第一は上記の各國の制度施設の上に示現せられてゐる所の新勞働政策の內容には餘程の軒輊があつて、私の敢てするやうに、差別觀から平等觀への推移として一律に論斷することが不當なやうに思はれるかも知れないことである。併しながら私の信ずる所によれば、これは單に形式及程度の相違であつて本質の相違ではない。各國が別個の國民性と政治組織と經濟狀態とを有する限り、其處に各々特異なる社會的の示現を有することは寧ろ自然である。併しながら日にまさり行く思想の共通と、相互の影響とは、結局相率ゐて同じ方向へ進んで行く外には、行くべき道のないことを流れに譬へてある。例へば流れは同じ河の水である。ただ或者は泡を浮べ、或者は波を浮べる。或者は河心を流れて瀬となり、或者は岸に沿うて淵となる。併し結局は皆海へ行く。或者は昨日流れ、或者は今日流れ、或者は明日流れる。併し結局は皆海へ行くのである。

其第二は私が本論に於て高唱せんとする所の、新勞働政策の基礎たる平等觀が、上記の各國の勞働政策を指導しつゝある中心思想には相違ないけれども、それは未だ必ずしも其政策の立案者又は協贊者によりて適切に自覺されてゐるのではないといふ事である。從つて彼等の或者は私の見解に對して異議を唱へるかも知れない。それにも拘はらず彼等は確に勞働政策上の差別觀から平等觀に改宗しつゝあるものと私は斷ずる。其處に時代思想の無言の推移がある。此無言の推移を感得することの遲速が、一步の境に先覺者と追隨者とを區別するのであらう。

軍備縮少と國民思想

水野廣徳

世界平和に進まんとする新紀元第一年の新年に於て過去の懺悔の爲め此の文を稿す

一　幽靈が躍り出す

誰かゞ幽靈會議とさへ罵倒したる華盛頓會議に足が生へ、會議の大眼目たる海軍縮少問題と極東問題とは既に其の原則が議定せられ、會は唯枝葉の細項に就きて協議せられて居る。中にも會議の最大の最大目的たる海軍縮少に關しては大勢既に定まり、其の米國案に決するか、我が修正案が容れられるか、或は又兩者折衷案に落ち付くか、何れにしても本誌の發行せらるる頃までには恐らく各國全權間に協定成立し、幽靈が下駄穿いて躍り出すであらうと思ふ。

或は世界永久の平和を確立せんとする人道上の理想に發足すると、或は戰後に於ける過重の軍備費を輕減せんとする經濟上の理由に基源すると、將た或は軍備競爭に出る國際間の危機を緩和せんとする當面の要求に出發するとを問はず、軍備の縮少制限――或は進んで撤廢――は今日世界に於ける多くの國民の衷心よりの希望である。就中此の希望の最も強きものは英國の政治家と米國の國民と日本の平和論者とであると思ふ。英國の政治家は戰後窮迫せる經濟回復の爲め軍費の緊縮を必要とし、米國々民は戰爭の爲め其の多幸なる生活を脅やかさるゝを恐れ、日本の平和論者は軍備競爭に基つく危險なる日米の衝突を避けんが爲め、何れも軍備縮少の切要を感じて居る。而して世界の平和と軍費の輕減とは其の間に於ける共通の意念である。今回の華盛頓會議は英國政治家に依つて薪を積まれ、米國國民に依つて油を注がれ、大統領ハーディング氏は唯一本のマッチを擦つたに過ぎないと傳へられて居る。

二　西に佛蘭西東に日本

軍備縮少の聲高き今の世界に於て、公然之に反對せるものに

西に於ても政府あり、民衆之を好まざるものに更に日本國民たる。伊國政府は表面に於てベルサイユ條約實施監督の爲めと稱し、裏面に於ては對獨強硬政策實行上、其の陸軍々備の縮少に反對して居る。日本國民は一部は日米必戰說の誤まれる宣傳に迷はされ、一部は帝國主義的妄想に捉はれ、海陸軍備の縮少を好まない樣である。前議會に於て軍備縮少の提案をば愼重審議することなく、一對九の絕對大多數を以て一蹴し去りながら、僅に數ヶ月の後には米國よりの軍備縮少の提議に欣然として贊同した。議會と政府との差別こそあれ、同じ日本國民の態度としてはあまりに豹變的である。何れが果して本氣であるかを疑はざるを得ない。

日本政府は欣然として華盛頓會議に列することを承諾したが、日本國民は果して欣然として政府の回答を歡迎したであらうか。吾人の見る處を以てすれば甚だ疑なき能はずである。國の內外に對し比較的高度の知識を有せる少數の都會人を除き、國民の大多數を占むる地方の人士は軍備縮少に對し、縱令積極的に反對せざる迄も消極的に好まざるものと推定すべき幾多の見聞に接して居る。日本の議會は民意を代表せるものにあらずとの言を屢々耳にするが、軍備問題に對する議會の表決ばかりは或は國民多數の意志を代表せるものにあらずやと思はれる。

議會の決は更に民意を代表と言はねばならない。

三　此の教育家此の女學生

新聞紙の報ずる處に依れば、裏日本とかの某市教育會にては、過般教育界の大問題となりし教育費整理案に反對の決議として「斯かる整理案が眞面目に論議せらるゝに至れば小學教師仲間に軍備縮少論者の續出せんことを恐る」と發表して居る。是れ明らかに軍備縮少反對の意思たると共に軍備縮少論者を危險視して居るものと言はねばならぬ。又東京市の某高等女學校に於ては生徒に對して軍備縮少の贊否を問ひしに、姬御前の勇猛にも不贊成者が多數であつたと云ふことである。此の教育家にして此の女生徒あり、スパルタ教育の昔も思ひ出されて物凄い。最も廣く平和を傳道すべき教育家にして既に然り、最も深く平和を好愛すべき女子にして既に然りとすれば他は推して知るべきである。軍人の頭目が華盛頓會議を罵倒するのも怪しむに足らず、帝國主義者等が公園に於て軍備縮少は國家の滅亡と悲鳴するのも驚くを要せず、地方政治家が在鄕軍人團に氣兼して軍縮講演會を逃げ廻はるのも無理ならずである。

四　大和魂と神風

都會に於ける一派の帝國主義者や、侵畧主義や、或は爲めにせんとする一種の憂國業者は暫く措き、純眞朴直なる地方人士が軍備縮少に反對し或は之を好まざるは何故であらう。地方旅行に依つて得たる實否に徵するに、軍備に對する地方人の思想と觀念とは、之を大別して次の二種類に分つことが出來ると思ふ。卽ち其の一は戰爭讃美者で、一般帝國主義と等しく世界征服の大使命を有せる日本發展の道は唯戰爭あるのみであると信じて居る。而かも世界を知らざる彼等は今尙ほ日本を以て神國と爲し大和魂と神風とに信賴し、戰へは必ず勝つと獨りで定めて居る。日の丸の旗を飜へし劍付鐵砲で突擊さすへれば毛唐人などは一溜りもなく降參すると思つて居る。夫でもペルリの黑船は我が國民の頭に餘程こたへたと見へ、軍艦ばかりは日本魂でも叶はぬと正直に諦めて居る。併し之とても愈日本が危なくなれば忽ち伊勢の神風が起つて敵艦を吹き沈めて下さると信じて居る。誠に馬鹿々々しき話であるが實際斯樣に信じて居る。斯かる迷信者に對しては理論は通じないので說明の仕樣がない。夫れ程神風の御利益があれば軍艦などは最初から不要ではないかと言へば、人事を盡した上でなければ神は助けて下さらぬと宗敎的の言を云ふ。先般の陸軍大演習の際、東京侵入軍が風波の爲め上陸不可能なりしに對し、正氣か戲言か知らねど、畏多くも帝都を占領せんと企つる如き軍隊が神風の怒りに觸るゝは當然であると歎んだ將官もあると言へば、無知の田舍人の迷信も無理はないことである。要するに彼等は戰爭すれば日本は必ず勝つ、勝つては領土も廣まる、償金も取れる、年貢も廉くなる息子が勳章も貰へる、親爺の鼻も高くなると思つて居る。軍艦と軍隊との數のみが戰勝唯一の道具であると信ぜる彼等が軍備の縮少に反對するのも當然の歸決である。

五　日〇必戰信者

其の二は日〇必戰信者である。彼等田舍人は或る種の宣傳に依り、日〇戰爭は到底避くべからざるものと盲目的に信じて居る。彼等は有ゆる機會に於て或る方面より、〇國を以て日本の發展を妨げ、日本の生存を脅かし、日本の獨立を危ふするものと敎へられて居る。正直にして而かも海外の事情に無知なる彼等は、田舍人の一徹にも〇國を以て不倶戴天の仇敵と爲し、彼を斃すか我れ死すか、世界に日〇の共存を許さないとまで思ひ込んで居る。斯くて田舍人通有の排外心と、油を注がれたる敵愾心と、祖先傳來の愛國心とが結合混交して日〇戰爭に備ふる爲めには、縱令三度の食事を二度に節し、二枚の着物を一枚に滅ずるも忍ばねばならぬと覺悟して居る。其の迷盲に對しては

哀れにも[illegible]い、其の[illegible]に對して[illegible]べくもある。[illegible]い人に對しては軍備縮少の聲は恐らく亡國の呪と響くであらう。

六　新聞記事と軍事宣傳

思想單純なる田舍人をして斯くの如き妄想と迷信とに陷らしめたる原因と動機と理由とは種々あるであらうと思ふ。新聞記事の如きも慥かに其の一である。殊に其の挑發的大活字を以てせる排外的誇張的なる外國電報の見出しの如きは、與つて最も力あるものである。冷靜に考察すれば左程でも無き電報に對し、讀者の好奇心を喚らん爲めか殊更に「○國の横暴」など〻標題の付しあることは珍らしくない。電報の内容を仔細に玩味咀嚼するに足るべき海外知識を有せざる者は、唯其の標題のみを見て忽ち之に捉はれて仕舞ふ。先入主となりたる此の印象は容易に取り去ることは出來ない。

陸海軍の軍事宣傳も亦其の最も有力なる因事である。抑も國家が苟くも軍備を存置する以上、軍事當局者が國民に對して國防の必要を說示し、軍事知識の啓發涵養に力むるは敢て非難すべきでない。而して之に對する當局者の素志と目的とは純潔高尚なるものであるであらうと信ずる。然るに實際に於て此等の教化宣傳に從事するものは、多くは識見狹く教養淺き若少の軍人である。[illegible]。而して之を聞くものは教育低く且つ頑冥なる田舍人である。小學校長と簡閲點呼官の言を以て[illegible]と爲し[illegible]に信仰する人々である。

彼等軍人は今尚ほ例を日清日露の戰爭に取り、戰爭を以て國家發展唯一の手段と說き、以て單純なる地方人の自負心を煽てゝ居る。又常に假想敵國を或る外國に求め、口を極めて其の傲慢無禮を責め、以て正直なる地方人の敵愾心を激して居る。尚ほ之を補ふに貧乏國の日本が今日世界に重きを爲す所以は唯一強力なる軍備の存するが爲めである。日本より軍備を取り去れば亡國の外はないと、無知なる田舍人を嚇かして居る。何れも幾分の道理と幾分の事實とを有し、且つ新聞に依つて豫備觀念を付けられ居る爲め田舍人の耳には比較的入り易い。簡閲點呼官などの訓示中には恐ろしく極端なる意味の言葉が含まれることも有るさうである。恐らく彼等は誠心誠意を以て斯く信じ斯く語るのではあらうが、夫にしても過大なる軍備の爲めに國を誤まりたる獨逸の例などはオクビにも出さない。而して陸軍は陸軍本位の說を立て、海軍は海軍本位の說を立て、往々其の間に杆格齟齬を來すが如き滑稽さへ生ずることがある。先年海軍紀念日に若き海軍士官が某地の女學校へ講演に聘せられた際、生

徒に對して女子の國家に存する最善の道は、良妻賢母となりて強健なる多數の男兒を産み、之をして悉く海軍々人たらしむるに在りと說き、然らば陸軍はどうすると云ふ抗議が出でたとかで、今尙ほ地方の笑話に殘つて居ると云ふことである。獸を逐ふ獵師山を見ずとかで、此位まで徹底すれば愛嬌があつて却つて罪が無い。軍備充實の宣傳も或る程度迄は無論必要であらうが、今日のやり方は頗る藥が利き過ぎて、寧ろ國家を危險に導くものではないかと危ぶまれる。

七　在鄕軍人會と國民大會

昨年僕は東京より左程遠からざる地方の在鄕軍人及青年團の郡總會に軍事講演の爲めに招かれたことがある。講演者としては他に陸軍の某氏があつた。此の人が怪辯を振つて○國の暴慢を攻擊すると滿場拍手を以て之を迎へ、日○戰爭避くべからずと說くと喝采頻りに起り、「我に大和魂あり赤將何するものぞ」と叫ぶと聽衆熱狂して歡呼の聲堂を動かさんばかりであつた。此の光景を目擊したる僕は日本の在鄕軍人なるものが、如何に日○戰爭を歡迎せるか、又彼等が如何に日本魂なるものを盲信せるかを具體的に知ることを得た。彼等在鄕軍人なるものは、現代の戰爭が物質力に左右せらるゝことと如何に大なるかに關しては全然無知である。唯突擊して塹壕の埋草になることしか敎へられて居ない。彼等の知れる戰爭は唯日清日露の戰爭か青島の戰爭のみである。從うて戰爭なるものを以て萬歲〳〵旗行列や提灯行列の景氣の良き威勢の良き御祭騷ぎと心得て居る。今回の戰爭に於て歐洲人が體驗したる肉を剝ぎ骨を削るが如き戰爭の眞の酸苦を嘗めて居ない。手足を失ひたる獨逸の癈兵が冷たき石の道路に慄ひながら、血膿滴る傷口を寒風に暴らしつゝ乞食して居る悲慘を知らない。爲めに彼等は戰爭なるものに對して冷靜に眞面目に考察するの力を缺いで居る。……

斯くの如きは單り田舍の在鄕軍人のみではなかつた。東京の眞ん中に於てさへ之と全然同一の現象を、過日芝公園に行はれたる國民大會とかに於て見ることが出來た。彼等は百臺の決死飛行機あらば、一夜の中に東京を燒き拂ふことの出來る今の戰爭なるものを知らない。本來戰爭なるものは國民が堪らへに堪らへ、忍びに忍びし眞の怒に發せるものでなければならぬ。御祭氣分や野心家の煽動に乘つて、妄りに開戰說などに贊同すべきものでない。少し元氣の良いことを言へば、直ぐ煽てに乘るのが日本人の大缺點である。世間或は之を以て新興國民の熱血であると賞讃するものもあるが、熱は熱だか流感の熱よりも尙ほ性質が悪るい。

八　軍事常識の國民的缺如

軍部の宣傳如何に巧妙にして又如何に猛烈なるも、國民の常識にして發達すれば之に犯され、之に惑はさるゝ苦は無いのである。然るに軍備を重んずる癖に軍事に對する我が國民の常識は今日尚ほ甚だ低劣である。或は皆無である。軍事に對する此の無知識が、一面に於ては所謂盲者蛇を恐れざる的の戰爭讃美となり、一面に於ては軍事專門家の言を公理的に盲信することゝなる。一二の例を擧ぐれば、國防的軍備は必ず相對的であると云ふことさへ了解の出來ない者がある。偶了解しても軍事當局者より工業力の關係を說かるれば忽ち混惑して仕舞ふ者が多い。或は武力を根據とせる戰鬪と國力を基礎とせる戰爭とを混同して居る者もある。軍事當局者が戰鬪に於ては負けぬと云へば、戰爭に於ても負けぬものと速斷して仕舞ふ者がある。或は又今日に於ては最早や常識語となれる八八艦隊の意義さへ知らぬものは國民の大多數を占めて居ると思ふ。其の他現代の軍艦は燃料に石油を用ゐることを知れる者は極めて少數の國民であると信ずる。之を以て當局者にして萬一誠意を缺げる場合は國民を誤魔化すことは甚だ容易である。議會に於ける議員の質問振りを見れば一般が察せられる。

九　八八艦隊と絕對國防

吾人が地方を旅行して相當知識ある人々より屢々受くる質問は八八艦隊の國防的意義である。當局者が國民に說明する處に依れば、「日本の海軍には假想敵を有せず、八八艦隊は國防上絕對必要なる一戰略單位に過ぎない」と言つて居る。元來國防の爲めに設くる軍備は對內的でなく、必ず對外的のものである。既に對外的のものとすれば、必ず假想敵國の存在を認めねばならぬ。假想敵國の無き軍備は國防上無意義なるもので、恰かも支那や和蘭の海軍の如く單に警察的軍備に過ぎない。警察的軍備としては八八艦隊は餘りに尨大に失する。素より軍事當局者が外交上の顧念よりして、假想敵國を否認する精神に對しては吾人之を諒とし且つ其の苦衷に同情する。併しながら一般國民は當局者の苦慮を了解するの軍事知識なく、當局者の言をば其の儘直譯的に解釋するが爲め、種々の疑惑と誤解とを來すに至るのである。

八八艦隊に對する前記當局者の聲明を文字通りに解釋すれば、八八艦隊は我が國防上絕對必要の勢力である、既に絕對的なる以上、他國勢力の增減に依つて動かさるべきものでないと言ふことになる。是に於てか或る人は「八八艦隊さへ完成すれ

ば、最早や日本の國防は安全である。之さへ出來ればイツ何時○國の挑戰に應ずることが出來る。今暫らくの辛棒じや」と考へて居る。又或る人は「八八艦隊は我が國防上絕對必要のものである、他國が如何に海軍を縮少するとも我が國は斷じて八八艦隊に手を觸るゝことは出來ない」と信じて居る。軍事的常識より考ふるも誠に馬鹿氣たる。愚想であるが、事實に於て斯く信じ切つて居るのであるから、軍備縮少論者を以て危險視するのも情として無理も無い點がある。

一〇　戰國と戰爭。軍備と國力

我が國民の多くが軍備縮少に反對し或は之を好まざる消極的とも云ふべき、而かも極めて重大なる原因と理由とは、今日尙ほ戰鬪と戰爭とを同一視して居る爲めである。軍備（卽ち武力）と國力（卽ち國防力）とを混同して居る爲めである。抑も戰鬪とは彼我武力の打ち合ひである。戰爭とは彼我國力の果たし合ひである。而して戰鬪の雌雄を決するものは所謂軍備である。戰爭の勝敗を定むるものは所謂國力である。戰鬪は戰爭中の一局面に過ぎないと等しく、軍備は國力中の一部分に過ぎないのである。故に軍備は如何に強大なるも、其の背後に於ける國力にして優越ならざれば、縱令局部の戰鬪に於ては勝を制することを得るも、大局の戰爭に於て勝つことは出來ないのである。局部の戰鬪に於て大勝を博しながら、大局の戰爭に於て大敗に陷りたるものに近くは獨逸の好適例がある。之を以て一國の軍備なるものは一朝有事の際、其の全力全能を發揮し得る程度のものでなければならぬのである。卽ち軍備は或る程度迄國力に相應せねばならぬのである。軍艦如何に優大なるも戰時之を動かすの燃料さへなく、軍隊如何に多數なるも戰時に之に給する彈藥さへなき軍備は、唯觀艦式の飾りと觀兵式の賑ひとに過ぎぬのである。事實に於て現在我國の軍備たる海軍の八八艦隊と陸軍の二十二個師團とは、戰時に於て軍需の補給が果して完全に出來るや否やを疑つて居る。然るに我が國民の多くは今尙ほ軍艦と軍隊との數さへ多ければ、妻子は空腹に泣き寒さに凍へて居つても、戰爭には必ず勝てるものと信じて居る。之が爲め唯無理解に無自覺に軍備の縮少制限に反對することとなる。

一一　邪推僻視の繼兒根性

軍部の宣傳とか、國民の無知識とか、の國內的理由の外に否な寧ろ之等と相關聯して、我が國民をして軍備縮少に反對せしむる他の有力なる因子がある。乃ち日本に對する外國の壓迫である。本來日本國民が平和的民族であるか、將た好戰的民族であ

るかは別の研究に譲り、維新前より欧米各國が我が國に加へたる政治的経済的時に軍事的の壓迫威嚇は、其の故意たると、偶然たると、或は全然無意識たるとを問はず、痛く我が國民の心を刺戟して或は排外的敵愾心を激發せしめ、或は武裝的自衛の必要を強感せしめ、遂に邪推僻視の繼子的根性に陥ゐらしめた。就中日清戰後に於ける露佛獨三國聯合の暴慢不法なる武壓的干渉は、敏感にして自尊心強き我が國民の憤激を沸騰點に迄昂騰せしめたのである。

斯くの如く一面に於ては外國の壓迫を受くると共に、一面に於ては支那及露國の脅威をば武力に依つて擊排し得たるが爲め、武力即ち軍備に對する我が國民の信頼心と、戰爭に對する我が國民の讃美心とは自ら高まらざるを得ない。加之、目前に印度、安南、緬甸、南洋諸島及び支那の如く、欧米の爲めに或は併吞せられ、或は侵蝕せられつゝある生きた標本を見せ付けらるゝに於ては、我が國民たるもの常に戰々兢々たらざるを得ない。帝國主義者と軍權者流と軍器業者とは、此の國民心裡の傾向を巧みに捕へて益々國防の必要を宣傳し、遂に我が國民をして今日の軍備萬能主義者に作り上げて仕舞つたのである。

之を以て欧米人は常に我が國を以て軍國主義侵略主義と非難攻擊するも、其の源に溯れば一は我が國民の傳統的尚武思想にも因るが、一に欧米人が我が國民を[illegible]に至らしめたるものであり、其の一半は彼等が負ふべきものである。彼等欧米人は我が國を責むるに當り先づ彼等自身の歴史を顧みる必要がある。

一二　競爭的軍備擴張

其の無意識たると有意識たるとを問はず、由來我儘と無遠慮とは強者に付き物である。之と同時に僻見と猜疑とは弱者に付き物である。近年に於ける日米間の問題の如きも、米國としては最初或は故意に日本を壓迫する積りでなく、正當の行爲と信じて居たのかも知れない。併しながら日本より見れば如何にも我儘で横暴なる如く感ぜらるゝ爲め、自ら反抗の態を取る。此に於て米國も亦「リッツル、ジャップ」―生意氣なりと今度は強壓迫的態度に出る。日本は益躍起となる。其の間に國家我に捉はれたる兩國の新聞と、事有れかしと狙ふ兩國の好事家と、慾に目の無き兩國の軍器製造業者との挑發と煽動と宣傳とに依り、遂に兩國民の誤解となり、憎惡となり、反抗となり、何時の間にか兩國の間に踰ゆべからざる深き險しき溝を造つて仕舞たつのである。是に至つて次に來るものは言ふ迄もなく、互に自衛の名の下に行はるゝ競爭的軍備擴張である。

先年我が國論を沸騰せしめたる學童問題や移民問題の如きも、

米國としては之を主張するに相當の根據と理由とを有すること、恰かも支那に對する日本の主張に相當の理據を有すると同様であらうと思はれる。然るに貧弱なる支那は日本に對して武力の競爭に堪へないが爲め、自ら日本を共同の敵とする米國の袖に縋がることゝなる。此に至ると日本は一方に於て陸軍を以て支那を威壓し、他方に於て海軍を以て米國に對抗するの已むを得ざるに至るは勢の免れ難き處である。事實に於て日本は現在正に其の境遇に立つて居る。我が貧弱なる國力を以て何時迄此の形勢を持續し得るであらうか。將來を云ふ迄もなく、現在に於てさへ日本の軍備は既に行き詰まりの斷崖に立つて居る。軍艦は出來ても燃料問題の解決が出來て居ない、兵隊の頭數は揃ふても兵器の改良が出來て居ない。芝の國民大會に於て何とか云ふ人が軍備制限反對の意味に於て、軍備制限の聲は戰爭を豫報する警鐘であると叫んだが、是れ寧ろ軍備制限の緊急必要を立證する上に於て眞の言葉である。

一三　殘るは唯戰爭あるのみ

由來軍備競爭の行き詰まりは常に戰爭である。歐洲大戰は陸に在つては露佛對獨墺の陸軍競爭行き詰りの結果である、海に在つては英對獨の海軍競爭行き詰りの結果である。國民が際限なき軍備費の負擔に飽きたる時、殺を好む軍權者流と野心ある政治家とは、自國に、或は自家に最も有利なる時機を撰んで戰爭を開始すべく國民を導いて行く、否らざるも戰爭不可避を叫んで國民の敵愾心を不條理に煽て揚げ、軍艦を製造する爲めに、軍隊を增加する爲めに、國民の懷を搾り取る。此の時に於て平和好愛者に依つて叫ばるゝ聲が軍備制限縮少である。若し之に應ぜざれば殘る處のものは唯戰爭あるのみである。此意味に於て軍備制限の聲は戰爭の豫報であるとも言ひ得る。歐洲大戰前獨逸は英國の海軍競爭中止の提議を峻拒したるが爲め、遂に兩國の無際限製艦競爭を誘起し、延ひて歐洲大戰の一大原因となつた。而かも其の海軍は如何に努力するも遂に英國の壘を摩する能はず、闘くも無殘の最後を遂げたのである。

幸に賢明なる我が日本の政治家も軍權者も、眞面目に「日米必戰說」や乃至「日米戰爭可能論」などを信ずることなく、米國大統領の發したる軍備制限提議を快諾したのは、誠に我が國の爲め至大の幸福である。然るに日本の爲す處は絶對正にして、外國の爲す處は悉く日本壓迫の爲めと盲信せしめられ居る我が國民は、既に政府の贊同せるに拘はらず、今尚ほ軍備制限に對し狐疑逡巡して之に應ずることを好まない傾向がある。

一四　眞に鐵中の錚々

軍備制限反對者に獨り我が國のみの特産物ではない。帝國主義者、侵略主義者、排外主義者、武斷主義者は世界何れの國にも存在して居る。交通發達せる今の世界に於て人間の思想は各國共通である。一方に急進的の社會主義者あれば他方に反動的の軍國主義者の在るを免れない。唯其の力の優劣强弱は、國の政策と國の境遇とに依つて相違あるのみである。社會主義を强壓する國に於ては少くも表面的に軍國主義が跋扈し、國際的難局に立てる國に於ても亦、社會主義的色彩よりも軍國主義的色彩の濃厚なるが常である。軍備縮少贊成運動には屋外集會を禁ずるも、軍備制限反對運動には之を許すが如き國もある。

是等思想上の反對者以外に物質上よりする利己的反對者がある。其の主なるものは軍器並に之に關聯ある物件の製造業者である。彼等の陋劣なるものは其の豐富なる資力を藉いて、或は言論機關の買收、或は好事家の操縱など、種々の手段を以て軍備縮少制限に反對することがある。英獨海軍協定の不調に終はりたるは、兩國製艦業者の毒酒が廻はりたる爲めなどゝの世評さへある。現に華盛頓會議に於ける海軍縮少協定に對しても、英國の軍器工場が之に反對して居るとの報がある。我が國に於ても亦兵器[illegible]するものであるなどゝいふ意見を吐いて、暗に之に反對せる事業家もあれば、軍器製造職工失業の點よりして軍備縮少に反對する勞働團體の幹部もある。此の間に於て軍艦製造に大關係を有せる米國の鋼鐵王ゲーリー氏が、自家の利害を眼中に置かず世界平和の爲め敢然として海軍の縮少制限に贊意を公表したるは、之こそ眞に鐵中の錚々として誠に見上げたる心懸けである。

一五　軍縮反對者の色別

軍備縮少主義中者にも、人道上よりする理想論者もあれば、經濟上よりする實際論者もあるが如く、軍備縮少反對者中にも亦種々の分子がある樣である。軍事を專門の職とせる軍人と利己的見地よりする事業家は論外とし、反對論者中には積極的に侵略慾に燃ゆる帝國主義者もあれば、消極的に武力威嚇の武斷主義者もある。國光發揚國威伸張の國權論者もあれば、神州由來武を以て立つの傳統的尙武主義者もある。人類鬪爭本位の哲學に立脚する者もあれば、○國を叩き付けて遣り度いと云ふ感情に出發せるものもある。甚だしきは政黨の掛引きや、選擧區の人氣やに捉はれたる黨略本位、便宜主義者もある。其の思想と主義とに立脚せる人に對しては、頭腦を哀れむと共に尙ほ幾分

の敬意を表する價値がある。唯利己的に出發する者に至りては唾棄すべきである。何れにしても世界の大勢に盲にして自國の實情を顧みざるものと謂ふべきである。

一六　海軍案に對する軍事的觀察

華盛頓會議に於て論議せられつゝある問題は目下尙ほ海軍に關してのみである。陸軍問題に關しては佛國全權ブリヤン氏が、縮少反對の爆彈を投げて巴里に引き揚げて仕舞つた。素より豫定の行動として驚くにも怪しむにも足らない。陸軍問題は華盛頓會議に於て解決する迄もなく、國內問題として處理することが出來る。併し現在の日本に於ては少くも軍部大臣に文官任用の途の開かるゝ迄は縮少の實現困難であらうと思はれる。縮少の困難なるのみならず、國民にして油斷すれば折角海軍縮少に依つて節減し得たる經費を陸軍に橫取りせらるゝかも知れぬ。

海軍問題に關する經過は世間既に周知のことである。米國の原案に對して日英兩國共に其の主旨に贊同し、日英米三國海軍を或る比率の下に制限縮少すると云ふ根本原則は既に確立したのである。唯比率の點に於て、日本よりは英米主力軍艦の六割原案に對して七割修正案を提議し、英國よりは潛水艦の比率に於て尙ほ一層の制限を提案して居る。米國の原案是なるか、日本の修正案正しきかは論理的に之を判決することは甚だ困難である。若し論理的に解決せんと欲せば、各國均等の外はない。是れ既に確定したる協定の原則に反するものである。

論理に依らず實際問題として之を解決するに於ても、日本としては政治上と軍事上との兩方面より觀察することが必要であると思ふ。之を純軍事上より論ずれば米國案必ずしも完全なるものではない。戰爭を豫想する國防上より見れば、單に主力軍艦のみならず潛水艦、航空母艦等の補助艦艇に於ても修正を要する點が少なくない。我が軍事委員が國防の最小限度として十割の要求は、寧ろ餘程遠慮をしたものと思はれる。故に若し我が修正案に對し、米國が協調的でなく威壓的態度を取るが如きことあらば、吾人は華盛頓會議の爲めに惜しみ且つ悲しまざるを得ない。會議は必ず協調的和親的でなければならない、壓迫的威嚇的では縱令協定は成立するも其の効果は半減して仕舞ふ、是れ華盛頓會議に對する吾人の當初よりの希望である。

軍事上より見て吾人の怪訝に堪へざるは、我が全權が何故七割案に拘着して、太平洋防備問題に觸れないかと云ふ點である。此の問題に對しては世上既に論議盡されて居るが故、最早や爰に述ぶる必要さへ認めない。此の問題を解決せずして、徒に一割の増加を爭ふ我が全權の意の存する處を圖り知らない。

一七　海軍案に對する政治的觀察

併しながら之を政治上より見る時、比率の如何に依つて海軍協定を成立せしむべきか、或は之を破裂せしむべきかは、主力軍艦の一割や五歩の增減よりも遙かに重大なる問題である。若し此の協定にして不成立に終らんか、其の責の何れの國に存するを問はず、今後に於ける海軍の競爭的擴張は誠に恐るべきものがあるであらう。素より日英米三國共に今日軍備費の多額に苦しめるは同樣である。併しながら米國も英國も愈となれば振るべき袖を持つて居る。然るに日本は最早や振るべき袖がない。筒袖位は有るかも知れぬが、夫では踊りにならない。財力に於て到底競爭に堪へ得ざること明白なる我が國は、米國海軍に對して三割に落つるか四割に落つるか、恐らく六割の力を維持することさへ困難であらうと思はれる。夫が厭やなら我に最も有利なる時機を擇んで、伸るか反るか、國運を賭して乾坤一擲の戰爭に出づる外他に途は無い。英國タイムスは、日米戰爭起らば英國は米國に味方せさるべかずと公言して憚らざる今日、支那は我國に對して極度の排日態度に出てある今日、日本は佛國軍閥の援助のみを空頼みとして開戰するの勇氣と決心とがあるか。

或る志士はヤンキイの七人位は獨りで引き受けると力んで居る。或る學者は[illegible]界を敵として戰ふにはそれでは餘りに貧弱ではないか。せめて一命でも抛り出すと何故言はぬか、國民最後の血の一滴までもとは、何れの戰爭に於ても叫ばるゝ常套語である。之を公園に於て屢此の語が繰り返へされ、大なる拍手喝采を以て迎へられたるを見て頗る心強く感ぜられた。然るに國民の半は愚か、三分の一も五分の一も斃れぬ前に屈伏して仕舞ふのが、昔からの戰爭の常である。獨逸では戰爭中繰り返へし〳〵此の語が叫ばれたが國民の十分の一が死傷せざる前に潰れて降參したではないか。之を以て我が國民は華盛頓會議を單に軍事上の見地のみより抗爭することなく、政治的大局より冷靜に愼重に考察することが必要である。要するに吾人は日本國民として、我が全權の提議の容れられんことを熱望すると同時に、協定が不成立に終はらざることを一層強く切望する。而して其の間に於ける進止と折衝とは全權の手腕に信賴して可なりと信ずるものである。

一八　全權不信任決議

帝國を代表せる我が全權が既に比率主義の承認を聲明せるに拘はらず、國民の一部には尚ほも比率主義を否認して均等主義を叫び、決議文とか態々華盛頓に於ける各國全權に電報した

る好事家もあると傳へられて居る。是れ單に時期を誤まれるのみならず、明らかに我が全權に對する不信任決議と云ふべきである。各國全權に電報する迄もなく、先づ我が政府に逼つて全權を招還せしむる方が早道である。此の電報に接して我が全權の面に變色動くとの外電を見て、吾人は我が全權の爲めに同情に堪へない。斯くの如きは全權を後援するのでなく寧ろ全權を苦むるものである。其後に於ける英米全權の我が修正案に對する反對的態度の俄に強硬となりたるが如き觀あるも、何等か此の間の消息を傳ふるものではあるまいか。兎角國を傷ふ者は破壞的なる共產主義者無政府主義者よりも、寧ろ盲目的なる國權論者と帝國主義者とである。

一九　ラツセルの置土產

「ベルトランド、ラツセル」は日本に對する置土產として、「日本人の侵略的根性を矯め直し文化的新日本を作るには、一度敗戰の地獄に陷るの外に道はない」と言つたと云ふことであるが、或は眞言かも知れぬ。併しながら吾人日本人としては何とかして此の恐るべき煉獄の責苦を受けずして新たなる道に進みたいと思ふ。而して之に處するの途は多々あるならんも、當面の策として吾人は左の諸項を掲げたいと思ふ。

一、軍隊は國民に對し純眞なる國防に必要なる軍事的知識普及の範圍を越へて侵略的思想を鼓吹せざること

二、新聞紙は國際問題就中外國電報に對し故意に誇張的標題を愼み以て國民の誤まれる排外的思想を挑發せざること

三、小學校教科書の編纂に注意し純正無垢なる兒童の心理に戰爭讃美の意識を涵養せざること

軍事當局者は今尙ほ軍隊を以て國民教育の完成所と唱へ、軍隊の飯を食はざるものは完全なる國民にあらざるが如く考へて居る。然るに軍隊に於て鍛ひ上げられたる在鄉軍人なるもの、思想は、大體に於て前に述べた如くである。治に居て亂を忘れざるは誠に可なるも、治に居て亂を好むが如き國民を養成せられては物騷至極である。新聞記事に對しては重ねて述べず。小學校の教科書に對しては世間既に種々の論難がある。其の或は學校教育に依るか、或は遺傳的先天性に依るかは知らぬが、日本の兒童が戰爭に對する讃美憧憬の情は遙かに歐米の兒童よりも強きは、其の遊戲と嗜好とに依つて略ぼ察知することが出來る軍事當局者は現在の教科書を以て、國民の尙武心を鼓吹するに尙ほ不足なりと云つて居るそうである。一方に於ては戰爭記事が多き過ぎると唱へ、一方に於ては少な過ぎると云ふ。教科書編纂係の苦心に同情する。六週間現役が一年現役となり、完全

なる用具となつて教育に從事するのであるなら、完全なる民主國の出來るは容易ならずと思はれる。

二〇　吾人の對米觀

吾人は妄りに歐米人就中米人を以て聖人君子と爲すものではない。彼等の唱ふる正義人道を無條件に盲信するものでもない。其と同時に吾人は彼等を以て我が國一部人の呪ふが如く、無理由に日本を意地め、無茶苦茶に日本人を苦しめる惡魔とも思はない。併しながら日本人中にも惡人あるが如く米國人中にも惡人はあるであらう、日本人中に侵略主義者のあるが如く、米國人中にも侵略主義者はあるであらう。日本人中にも感情的に米國を憎む者あるが如く、米國人中にも感情的に日本を憎む者もあるであらう。併しながら米國の侵略主義者如何に無謀にして無知なるも、日本を併呑することの愚なるを知つて居るであらう。日本を支配することの不可能なるを知つて居るであらう。更に六千萬の日本人を不條理に激怒せしむることの自國に取りて有害無益なることをも知つて居るであらう。人を呪はゞ穴二つとかで已れ人を欺く者は人も亦已を欺かんかと疑ひ、已れ侵略慾に捉はれ居る者は人も亦侵略慾を有するが如く疑ふは人情の自然である。日本の侵略主義者の心に米國の侵略主義が強烈に濃厚に跋扈するのも亦此の理である。

僕の如きも軍國主義と偏狹なる國家主義とに捉はれ居たる際には、米國の爲す處、言ふ處、悉く不滿に堪へなかつた。然るに人類の目的は平和に在り、平和は先づ國際間の融和を圖るに在りと信じて以來、米國の行動に對しても冷靜に公平に考察考慮するの餘裕を生じ、今日に於ては日本の帝國主義者や感情的排米者の云ふが如く、米國に對して無理解なる不安を感じて居ない。由來多くの場合に於て帝國主義者や侵略主義者は利己主義者でなく、寧ろ過度に熱烈なる愛國者憂國者である。吾人は彼等の思想に對しては時代に後れたる頑迷を非難するも、人間其のものは立派な人が多い樣に思ふ。吾人は是等の人々が一層大所高所に立つて國家の安泰を講ぜられんことを望むものである。

二一　前途に橫はる三大難關

海軍制限協定は、我が國民一部の滿足すると、せざるとに拘はらず、必ず成立するものと確信して居る。否な成立せしめねばならぬものである。併しながら縱令此の協定にして成立するも、混沌たる露國は別とし、少くも獨逸に對する佛國の强壓政策と日米間に蟠まれる感情的相互誤解と、日支間を距つる不思議なる反日とが除却せられざる限り、經濟上の緩和は求め得べきも、

精神的の平和は結ばれぬであらうと思ふ。但し日本としては之に依つて日米間の衝突を避け得るの効果は甚大なるものであることを疑はない。

世界は今平和に向つて一歩を蹈み入れた。更に第二歩を蹈み入るゝか、或は第一歩を再び後に引き退くるかは、各國民の覺悟に依つて決するのである。萬一後に引くが如きことあらば、近き將來に於て再び蹈み出すの機會は絕對に無いであらう。然る時は世界は復た〳〵力の世に復へり、露骨殘忍なる弱肉强食の混沌狀態に陷るを免れないであらう。是れ人類の大不幸にして就中世界に孤立せる我が國の最大不幸であると信ずる。我が國民は今日の此の機會を善用利導するに力を盡さねばならぬと思ふ。

二二 結言

世界平和の妨となるべき軍備は思ひ切つて縮少すべし。戰爭の出來ぬ迄に制限すべし、更に進んで全然徹廢すべし。併しながら苟くも爰に大小を問はず軍備の存する以上、國民は無理由に或は感情的に軍隊と軍人とを呪つてはならぬと思ふ。之と同時に軍隊と軍人とは其の捉はれたる軍事第一主義の思想から脫却せねばならぬ。軍人の軍隊たる謬見を棄てゝ國民の軍隊とせねばならぬ。

(大正十年十二月五日)

結婚改造論

法學博士 森本厚吉

一 結婚改造の必要

時代の勢力は實に偉大なものである、例を軍備縮少問題に採りて考へても、僅かに一ケ年前には、當局は勿論の事、議會でも、社會でも、皆突飛な極端論として顧みなかつた。私自身も國民教育費國庫支辨論に關聯して僅かに軍事費二割減を主張す

るのでさへ、遂に屈服して議論せざるを得なかつたのであつた。然るに、時代精神はワシントン會議の大勢を支配して、我國會議さへ思切つた縮少案に賛意を表されて居る、昨年の議會で、尾崎行雄氏の縮少案を、即座に否決して得意であつた議員諸君も、今日漸く彼等が時代思潮を解しなかつた不明を恥ぢて居る事と思ふ。國家萬能主義の時代から、世界平和時代に、着々と進み行く現代の活動振りを見て、心から快感を覺えずには居られない、個人としても亦國家としても、時勢と共に進歩し得ないものは、現代に生存權を放棄して居るのであるから、社會進化の行程からとり殘されて、衰頽するのは止むを得ない運命である。

斯く考へつゝ、我國現在の社會諸相を研究すると、時勢に逆行して居る事物が、各方面に少からず存在して居つて、世界の日本としての進歩を阻害して居る事が少くない。近來先覺者連が口を揃へて、社會改造の急務なる事を高唱したのは蓋し當然の事である。然り社會を改造し、我民衆をして新時代の精神に覺醒せしむる事ほど、今日重要な事はない。然るに社會改造が叫び出されてから、既に數ケ年を經過して、此一九二二年が生れ出でたのに、其改造成績が頗る不良であるのは何故であらう。

私は信ずる、今日社會改造の論議で、多くの[illegible]は、其改造論は主として、社會又は經濟制度等の、外的改造論であつて、其根本となつて居る内的改造論即ち、動機の改造論はまだ重きをなして居ないが爲めであると思ふ。

動機が改造されるならば、社會運動は秩序正しく徹底的に、行はれるであらうから、必ず家族の改造が問題になる。我が家族生活は僅かに時代に出來た家族制度によつて、今猶束縛されて居るのであるが故に、家族其者が社會改造の原理を裏切つて居る。從つて、社會改造は先づ、社會の單位である家族の改造から始まらねばならぬのである。而して其家族生活の出發點は、婚姻にあるのは云ふ迄もない事である。我國在來の婚姻制度や其習慣は、甚だしく非文化なものである事は、周知の事實であるが故に、是れを時代に適するものに改造する事によりて始めて健全な家族が成立し、夫等が集合して始めて理想的社會が實現されるのである。要するに、社會改造の根本義は動機の改造であつて、其の社會に顯はるゝ結果は先づ結婚改造として表はる可きものである。

二　動機の改造

動機の改造と云ふ事に關しては、私は「文化生活」十一月號

卷頭に近頃次の様に書いたのであるが、議論の順序として今是れを繰返す事を許されたい。

「見よ！見苦しい綱紀の廢頽、風紀の紊亂を。大正の聖代に百鬼續出して文化の生血を吸ふて居るではないか、國民の模範階級に起つた事だけでさへ、東京府、市の疑獄、滿鐵最高幹部の收賄、大學教授助教授の卑賤な婦人關係等を筆頭に大小數人擧げれば殆んど際限がない。

然かも政府當局は深く之を怪まず、社會も亦大喝して之を責むる勇なきは、蓋し國民の良心痲痺して道義心の低級なるを曝露して居る爲であらう歎かはしい事である。

心的文化生活の骨である可き正義人道が、かくまで地におちて顧みられない現代社會であるのに、文化主義の哲理を誇學的に宣傳したり、或る實生活に於ける食、衣、住、社交等を改善した位で、文化生活を營んで居ると思ふものが少くない。勿論これ等も必要な行程ではあるが、眞に現代文化に生くる生活はそんな淺薄なものではない。先づ根本義として、各自進んで個人生活の動機を改造する事に最善の努力を盡し、以て道德的改造の實を自ら擧げ得る様にする事が先決問題である。「人若し自己の魂を失はゞ全世界を得るとも何の益あらんや」である。

顧みれば我國も大戰後漸く「世界の日本」となつて、國際的舞臺に踏み出す様になつた。そして始めて氣がついて驚いた事は、幾百年來我誇りであつた大和民族の文明も、世界文化に比較すると、幾多の缺陷が存在して居ると云ふ事實であつた、夫れがために後ればせながら、先年來各方面に改造問題が提唱されたのは眞に慶賀すべき事であつたが、物事に厭き易き我國民性の短所は又こゝにも現はれ、未だ改造の實が擧つたと云ふでもないのに、早やその改造論がぼつ〳〵下火にならうとして居るのを私は深く悲むのである。

かゝる時に當つて取り殘されて居る重要問題の内で、少くとも動機の改造といふ事だけはこのまゝ葬り去る可きものでない事を近來熟々感ずるのである。勿論、經濟的壓迫は非常に強く且つ未だ精神的方面を取扱ふほどに經濟學は進歩して居ない今日ではあるが、生活の根本問題はやはり「經濟生活の改造ではなく、其動機の改造である」といふ原理をスマートと共に、私共の「第二の思想」として叫ばざるを得ない。

動機さへ改造し得るならば、自然に道德的改造が行はれて、生活は根本的に向上し得るのである。即ち生活を支へて行く消費は無意味な冗費を少くして、未來の富の造り替（レクリエーション）を大にし、又利己的消費が社會的のものに進化する、其結果終には經濟生活の本質が奉仕の競爭となり相互的奉仕の無意識的協力が社會

の基礎となるに到るのである、かくしてこゝに初めて眞の文化生活が實現されるのである。

幼稚な現今の經濟學の立場から論議する物的文化生活論は、心物兩面を有して居る眞の文化生活論に入る必要な第一思想に過ぎない事を決して忘れてはならぬ。云ふまでもなく、今日社會はパンに缺乏を感じて居る、我等は奮鬪して民衆に夫れを豐に與へなければならぬが、矢張り人はパンのみにて生くる事は出來るものではない。改造すれば動機の上にのみ、美しい完全な文化生活は建設される。だから所謂改造の叫びが聲を潛めんとして居る今日こそ、道德的改造が一層高唱されなければならぬ時である。然りマルクスやリカードと共に、再びラスキンやカーライルに學ばねばならぬ時が來たのである。

三　家庭改造と結婚改造

動機が改造されるならば、人は眞面目になつて、順序正しい進步の階段を、上るものであるから、必ず家庭生活の改造が問題になる、如何となれば、我國の家庭生活は封建時代の遺物で未だ因襲から脫し得て居ないから、歐米文明國に比較すると、今猶百年以上も後れて居る。夫れを其儘にして居いて家庭の集りである社會を改造せんとするのは無理な事ではあるまいか。

自己が自分の家庭改造を行はないでも、改造の聲を大にする事は出來やうが、夫れは鳴る鐘や、鐃鈸の類である。自己の家庭がまだ十分にデモクラチックになつて居ないのに、社會のデモクラシーを高唱するのは無意味な事である。内では家庭の女王である可き妻女の人格を尊重しないで、終日高等女中にあらざれば、人形同樣の玩弄物に過ぎない樣な待遇を與へ、外では下劣な醜業婦人と席を共にする宴會に、有頂天になるが如き不合理な生活を營んだり、或は社會國家の重大問題を待合で論じたり、或は眞面目である可き議事の審議が、喫煙や喫茶等と共に仕だらなくなさるゝが如き、或は不經濟極まる二重生活の浪費を敢てしながら、臆面なく社會改良を叫ぶが如きは、皆一種の芝居の所作事とより見る可らざるものであるから、其實績の擧らないのは當然の事である。

エルウード曰く「家族に對する愛着心が發達するのでなければ、より大なる集團に對する愛着心は強くなるものではない、故に、家族的情緒の強い處では必ず強力な愛國心と、社會的同情心が見出されるものである」(Ellwood, Social Problem, p. 199) 家族は自己と社會の中間物であり、家庭生活は社會生活の縮圖であるから、社會改造運動は先づ自己の家庭を實驗品(ラボラトリー)として、其處から始まるべきものである。此の點に注意を拂ふて居

ない外的改造運動が行きなやんで居る今日、私共は此等社會問題の正當なる解決を徹底的に行はんが爲に、先づ家庭建設の中心である結婚問題から論究するのは自然の理である、是れ私が茲に結婚改造論を敢てする所以である。

我文化の最大缺陷は、婦人が男子に比して能力の劣つて居る事にある。而して、現代文化は個人の人格を尊重し、其自由發達を期する事に基調を有するのであるから、各自に各々與へられた境遇に於て自己の生活能力を完全に發揮しなければならぬ、然るに、我國の女子は未だ男子が文化に貢献した程の、努力を盡して居ない事が否む可らざる事實であるのを悲しむ。

私が曾て婦人勞働の實地研究に從事して驚いた事は、女は男より二割内外廉い賃銀をとつて居る事が常であり、男女同一の仕事に從事して同一の能率で其仕事高が同じ場合でも女の賃銀は、男の六割位で滿足して居る事實さへ目撃した。而して其理由としては、唯彼等が女性であるが爲めとの事である。然かも夫れが餘り不思議な事とも考へられて居ない。之れ實に社會も婦人自身も女性を卑下して、其の能力は男の六割位のものと思つて居るが爲めであらう。

私は決して女が男と同一の仕事をして競爭すべきものであるとは思はない、今は分業の世の中であるから、主として女は男と異つた方面に活動する事によつて女の天職を十分に發揮し得られる。假令其活動の方面は異つて居つても、常に男子と同等の地位に女子が立つ事によつて、合力の結果文化の開發を見る事が出來るのである、然るに我國に於ては當然女子のなす可きもの、或はなさねばならぬものに於て、僅か六割位の能力より活用されて居るに過ぎないものがある。主として男子の力によりて築き上げられた我文化は、今殆んど行詰まりになつたかの感があるが、是れを今後更らに開展するには、絶對に女子の活動を必要とする。先進の外國では男女對等で活動して居るにも拘らず、我國では未だ十分に女子が解放されて居ないから、外國の如く一と一と二の力でなく、一と六割即ち一・六の力のみが用ひられて居る、換言すれば彼れは二人で二の仕事をして居るのに、我れは二人で一・六の仕事よりして居ないと云ふ事である。是れでは今後國際競爭場裡に立つて勝を占むる事は至難な事であらう、今や婦人の立つ可き時である、男子も是れが爲めに出來る限りの努力を吝んではならぬ、男子は專横を恣にして女子を僅かに半人前のものに畏縮させて置くのは、男子自身の爲めにも不利益な事である。

婦人の活動す可き領域は種々あるが、其最も手近かなものは時代の進歩に適應する家庭の建設である、勿論男子も是れに責

任を有するのである。是れは主として女子の不節である、女子が百年も二百年も時代に後れた舊式の家庭に今猶蟄居して、囚襲の奴隷となつて居るのは現代婦人としては勿論、男子にとつても大なる恥辱である、而して婦人を現代に活かすが爲には先づ結婚の改造から始まる可く、其結婚の改造をなす爲に先決問題として我家族制度の改造を必要とする。

四　家族制度の改造

我國の女子を無能に陥らしめた強力なる原因は我家族制度である、此制度は家を基とし家長と家族との集團を本體とする制度である、一名是れを戸主制度とも稱する、我民法では戸主の親族にして其家にあるもの及其配偶者は是を家族とすと規定してあるのを見ても、戸主は家族ではなく家族を支配する主體で配偶者等より一段高い地位を占めて居るものである。

故に此制度の下にある家族と、西洋の家庭即ちホームとは大いに異つて居る、ホームは家庭制度の結果、各自は皆家族員で各々自由平等の人格が認められ、妻は妻とし、子は子とし、夫や父と同様に夫々特殊の權利が認められて居るから、ホームの内には特に家長權を有する者は存在して居ない。我家族制度は專制主義の發現で、西洋の家族制度はデモクラシーの發現である、家族制度の行はれて居る間は到底之れに適合した結婚を出來るものでない、從つて此制度の下に現代に適合した結婚を行ふ事は不可能であると云つても過言ではない。但し家族制度が時代錯誤である事は明かで、早晩破る可きものである事に就て梅博士は民法要義親族編の中に次の樣に書いて居られる「我國に於ては、今猶戸主制を存し、戸主は家族に對し一定の權利義務を有し、其間に自ら一の團體をなせり、是れ社會の進歩と同時に漸次廢滅す可き事項なる事は殆ど疑を入れず」此制度は印度民族に最も盛で、羅馬でも一時盛に行はれ生殺與奪の權を父が有して居つたのであるから、子を賣り身代りとなす等の事は普通の事であつた、「ブルータスが其子を殺したのは、刑律によらず人と謀らず父たるによりてなせり」との事は有名な話である。斯かる時代に於て結婚の如きは勿論家長の定むるもので當事者の自由は絶對的に認められて居なかつたのは何も不思議な事でない。

大正の今日斯かる性質の家族制度が存在すべき理由の全然ない事は、此制度の起因は何處にあるかと云ふ事を知れば明かになる、專門學者の説によると、家族制度の起因は二つある、第一は社會上の原因で「草創の世、政治組織未だ整備せざる時に當りては、弱者は到底獨立して生存するを得ず、僅かに強者の

庇護の下に匿れて自己を護衛し、婦人兒子は家長の保護の下に生存を保つに過ぎず……家長が絶對の權力を收め、其下にある家族は一擧一動是れ背かざらん事を虞れ、戰々兢々共命する僅に動きたるは察するに難からざるなり」

第二の原因は祖先教の影響である、「祖先崇拜は未開人の間には最も廣く行はれたる所にして、死靈は人間界の事物に關係すとの信仰に基き其祭祀は是等死靈の歡心を得、其怨を鎭むるを以て目的とす、墓所を大切にし…其共同の祖先の保護の下にある一族は、自ら祭祀を司る家長の下にありて鞏固なる團結をなし、其最も重大事たる祭祀を司る可き家長は、絕對の權力を以て家族に臨めるに至れるものなり」（本莊法學士著經濟史研究三六〇頁）

以上の二原因は今日では共に其必要を認めないのである。時代は其後著しく進歩したのであるから、今となつては梅博士の言の如き當然消滅す可きものであるのに、是れが勢力を逞くして結婚も其支配を受けるのであるから、今日幾多の犧牲者が續出せざるを得ないのである。故に家族制度に更ふるに家庭制度を以てし、家族の各員は互に自由平等の人格を尊重する事によりて、自覺心を發現せしめ、自立自助の精神が活動して各其生活能力を極度に發揮せしめ得る麗はしいホームを建設すべきである。從つて家族制度の精神を無視する事が結婚の改造に必要な第一歩である。

五　婚姻の種類と其發達

如何にして結婚の改造を行ふ可きやと云ふ問題を解決するには、先づ婚姻の過去に於ける事實及其發達の狀態を明かにする事が必要である。古來種々と論議の戰はされた此の問題に關する研究を綜合して考へると、先づ、幼稚な原始時代に於て男女間の性慾關係が頗る亂れて居つた事は想像するに難くない。原始人の腦力が幾分進歩した後に子供の生れる事によつて始めて、男女間の關係が制限されて、一種の結婚が成立する樣になつたのであらう、故に結婚あつて子供が出來るのでなく、子供が出來て結婚が成立したものと想像される。而して其後行はれた結婚の制度や方法は隨分複雜なものであつたが結婚の制度は大體次の樣に三大別にして考へるのが至當であると思ふ、

一、群婚（Group Marrige）と云ふのは男子の一團（普通に兄弟）が女子の一團（普通に姉妹と結婚して、其團體の各婦人は各男子の妻となるのである。

二、一妻多夫（Polyandry）と云ふのは男子の一團（普通に兄弟）が一婦人の夫になるのであるが、是れは餘りに廣く

[illegible]人は普通に三人、ホッテントットでは二人の夫を有するのは能く知られた事實である。

三、一夫多妻（Polygamy）と云ふのは强力で、富んで居る男子が多數の妻を有して居るので、今日でも種々の形式で是れが行はれて居るのを見る、昔ソロモンの榮華はよく后宮七百の王妃と三百の貴妃を容れたとあり、レホボアム王は法律の許す極度の數即ち十八人の妻と七十五人の妾を有せりとあるが如き記事は少なくない。

是等の結婚制度を行ふ方法は大別すると四類とする事が出來る。

一、掠奪婚と稱するもので、永い間盛に異族間の結婚に主として用ひられて居つた方法である。即ち男子が異つた種族から女子を掠奪して結婚するのであるが、此方法によると尙武の精神が養成されたり、異族の血を混じ、又近親婚をさくる事等によつて健康をよくし、或は一部落に於て婦人の缺乏せるのを調整する等の理由で家長が盛んに獎勵したのである。之れ初代のアリヤン人種が最も普通に行ふた方法で今日でもアルーシャン島やカルホルニヤの土人の或部落では類似の結婚が行はれて居る。

二、賣買婚と稱するもので、[illegible]として[illegible]したものである。即ち暴力によらず双方合意の上、相當の賠償物を提供して妻を購買するのである、例へばニューメキシコでは拔群の美人を妻とするには馬十二頭を要し、亞弗利加では安價な妻は牝牛五頭乃至十頭、高價なのは三十頭を要し、又カロリン群島では僅かに若干の果物及魚類を以て容易に妻を求むる事が出來た、又時には父が娘を競賣に附して最高の評價をした男に何等の條件をつけずに娘を渡す場合もあつた、而して娘の價格が餘りに高い爲に一生獨身で暮す者がテッケ、チュルコーマンスで見られると書いてあるが、我國では同樣の事實が今日でも屢々見られる。

三、贈與婚と稱するもので、賣買婚が發達したものである。特に賠償として物資を提供するのではなく、娘の父は夫たる可き男から相當の贈物が提供される事によつて娘を與へるのである、支那及日本等では極く普通に行はるゝ方法である。

四、共諾婚と稱するのは最も發達した方法で今日歐米文明國で普通に行はれて居る、即ち男女各自が互に承諾する事によりて結婚が成立するものである。

現在我國で普通に行はるゝ結婚は、表面は共諾婚であつても事實は賣買婚と贈與婚との雜種である、勿論昔の樣に露骨に金

錢での賣買は行はれないが、結納の交換される事、結婚仕度を重視する事、或は本人の意志を重んじないで、他人が結婚の決定權を有するが如き事等は、皆今日の結婚が商賈化されて居る事を證明して居る。更らに男女間の社會的需要供給の關係が變化する事によつて、花嫁の方から賣るのを急ぐ必要が起る場合もある、其結果として、持參金制度までが起る樣になつた、ウエスターマークが「結婚持參金を有せざる者は現今でも、青年女子が特に力强い引き付ける力を有しない限り生涯獨身で暮す危險を有す」と書いたのは僅か二十餘年前の事で、我國では其の樣な事實が今日少くない。

かゝる商賣的又は壓迫的の結婚が、改造されて共諾婚に進むのである、之は單に當事者同士が互に承諾を與へるのみでなく、夫れが法律で承認される事によりて成り立つ婚姻である、故に法律論としては「婚姻とは當事者双方の合意による一男一女の終身的共同生活關係を法律が承認せるものを云ふ」（穗積博士婚姻制度論ニ依ル）此の定義に基づいて、我國現行の婚姻を批判すると種々の缺陷があるから、現代に活きんとする者は、舊慣を破つて根本的に改造する必要を自覺するであらう。

六　結婚の慘虐史

結婚の歷史は女子が男子から受けた一種の壓迫史の如き觀がある、從つて裏面から觀察を下すと、結婚の發達史は妻の權力發達史に外ならない、今日猶夫は妻の人格を尊重せず、物品取扱にし、妻の地位が夫よりも一段低きものとする習慣のあるが故に、對等の立場で共諾婚を行ひ得ないのは全く過去數千年間の歷史的産物であると思ふ。

今女子が如何に人格を無視され虐待されて居つたかの實例として二三の事實を記述する。

先づラボツクによると、女子は男子の共有す可きものであるのに、若し特に妻を獨占するを欲する者は、先づ一種の代償的行爲をなさねばならぬ、其の行爲とはリビアンのナサモニアンオージレー等に見る如く結婚の當夜は招かれた客に Jus primae noctis の權があるとか、又ペロー國マンタ地方では新婦が先づ新郎の知友親戚の意に從ふて結婚當夜を過す事を條件として結婚が行はれるとか、或はバレークツク島の土人の如く、結婚の當夜女は全く招待客の權利に屬し第二夜より初めて夫の所有物となる俗があるとか、或はブラジル、ニカラガ地方に行はれる樣に結婚の第一夜の權利が酋長或は僧侶にあると云ふ樣な事實は少くない。

以上は極端な例であるが夫等の惡習慣が今猶我國に於て働き

[illegible]何も爲す所なく、又爲す[illegible]ないで、自然の[illegible]行に放任するかも知れないと云ふ想像も行はれるであらう。現に農商務大臣山本氏の如き、物價問題に對して、無爲を以つて、政策の要を得たものであるとし、又首相高橋子の如きは、今日に至つても、尚ほ物價調節を無用視して居る、位沒常識の人物であるからには、失業問題に對しても、全然放任の態度に出るかも知れないとして、其結果は如何であらうか。軍備縮小の結果、經費の上に、二億數千萬圓の金額が削減される。此削減された金額は減稅なり、公債償還なりの形で、民間經濟社會に復歸し、生產資本として活用されるか、其れとも政府の手に留まつて、軍事以外の用途に供されるか、二途の一に就くの外はないのであつて、一旦生產された富が軍事上の經費に供される途を失つたからと云つて、決して其儘消散するものでない。隨つて軍事上に於て從來需要したゞけの勤勞や、物資は必ず平和的方面に起される事業に依つて、需要される道理であり、斯くて生產された富は更に事業に用ひられた曉には、重ねて勤勞や、物資に對する需要は盛にするに至るのである。若しも現在軍事關係の事業に從事して居る勞働者が軍備縮小の結果として、自分の當面に就いて居る仕事を失ふ故を以つて、軍備縮小に反對したとしたならば、其人は目前の利害に拘泥して、永遠の利害を閑却したものであり、[illegible]ならしめることを見て、戰後の[illegible]の[illegible]きさを[illegible]して勞働者の見地から、戰爭を歡迎するのと擇ぶ所を知らない。故に勞働者の如きは、自分の利害から打算しても、軍備の縮少に贊成するのが當然であると思はれるが、然し一方から考へて、軍備縮小と勞働者と利害に於て相一致すると云ふのは、軍備縮小に依つて、軍事上の用途から、解放された資本が生產上の事業に投下されて、生產業の振興に資するには、必ず或る歲月を要する、高橋是清氏や山本達雄氏の如き人が財政經濟の局に當つて居り、所謂自由放任を金科玉條として、何事を爲さないでも、歲月さへ來つたならば、一旦軍事的工業から失業した勞働者も生產的工業に於て、職を見出し得るであらう、唯此轉換に要する幾歲月の間、勞働者を失業の儘に居らしめると云ふことは吾人の認めて以つて弊害とする所であつて、自由放任の如き我國に殺到せんとする失業問題の對策としては、一文の價値すら、之に與へるを得ないのである。殊に軍備縮小が華府會議の議に上りつゝあるが如く、急速に又大なる程度に行はれる場合に於て、尚ほ更ら其然るを認めざるを得ない。

失業と國民思想

私は此論文の冒頭に於て、失業の弊害として、四項の事實を擧げた。然し其れ等は何れも純乎たる勞働經濟上の事柄であり、又何れの國に起つた失業にも適用されることであるが、是等の外に今日の我國に起る失業には大なる弊害が伴はざるを得ない。其れは國民思想との關係である。國民思想が險惡に爲つたとか、又は惡化された思想が社會に横行するとか云ふ官憲者流の説に對しては、私は必ずしも同意を表する者ではないが、原内閣三年間の經濟的施政に大なる過誤が行はれた結果、社會に存在し、對立する階級間の利害に調和を缺き、有產者に對しては無產者、資本家に對しては勞働者の感情が圓滑なるを得ない、無產者や勞働者は原内閣の經濟政策が常に金權者階級の利益を發揚するに急なることを非なりとして居る其際に、急劇なる、又大規模なる失業が起り、無產者勞働者の多くが失業者と爲つて、其生活に脅威を受けるように爲つたならば、彼等の思想は惡化せざらんとするも得べからざる次第である。私は思想の惡化に就ては一知半解の學徒が直譯流の西洋思想を傳播することを恐れるものではない、寧ろ國民の生活難、就職難が彼等を驅つて、矯激なる行動に出でしめることを憂うるのであつて、此點から考へても、失業問題の對策は等閑に付す可からざる次第である。

我國の失業對策―職業紹介所

斯の如く既成勞働組合を利用するとか、失業保險制度を運用するとか、平生から具備されて居る機關を以つて、失業問題を解決すると云ふならば、事は甚だ簡單であるが、今斯る機關の備へられない我國に於て、此問題に臨まうとするのは恰も魚菜を買ひ調へず、調味料を持ち合せないで、客を接待したらとするのと同樣であつて、至難の業とせざるを得ない。然し私は此困難を凌ぎつゝ、左の數策を行ふことを以つて、失業問題を緩和する適當の處理と考へる。

第一、職業紹介事業の擴張。我國の一個工業國である立場から云へば、職業紹介の如きは、國家事業として、國費を以つて經營されなければならず、國家的に經營されるので、全國に於ける勞働の移動も始めて完全に行はれる次第である。此點に於ける我國從來の施政は甚だしく緩慢を極めて居ると評さゞるを得ない。大正十年職業紹介所法は制定されたが、市町村長をして職業紹介に關する事務を掌らせることを原則とし、職業紹介所亦市町村に設置され、纔に中央并に地方に設立された職業紹介事務局に於て、事業の聯絡統一を謀るに止まつて居る。而して此法律も充分に實行されて居らないのであるから、今如何な

る勢で、失業者が我國に襲ひ來つたとした所で、職業紹介所の活動する餘地に頗る乏しいとしなければならぬ。

或は軍備縮小と云ふ一事だけで、軍需品製造業が不測の打撃を蒙り、斯くて失業者を生ずる、然し一般の經濟社會は好景氣であつて、工業も亦繁昌して居ると云ふような場合であれば、失業は詰り社會の一局部に起つた譯であつて、他の一方に於ては、勞働者に對する需要があるのである。職業紹介所が大に勞働の需要と供給とを調節する働きをするのは要するに斯る場合であつて、現實の問題に適用すれば、呉や横賀須の海軍工廠で解職された職工を同じ製鐵なり、機械製造なりの一般工場に周旋して就職の面倒を見て遣ると云ふことは、職業紹介所として、最も自然に行ひ得る所であるが、我國の現在に於ける如く、一般の經濟社會亦不景氣風に吹き捲られて、軍需工業から解職された勞働者を吸收して仕事を授ける餘裕に乏しいとしたならば、職業紹介所には求職者ばかり群集して、之に對する求人者を見るを得ないことゝ爲るであらう。失業の殺到する際に、職業紹介所の事業を振興し、活躍させることは、必ずしも不可なりとしない、唯平生の準備の缺けて居る爲めに、之に對して多くを望み得ないことを遺憾とするのみである。

第二の對策あり

第二、軍需工業者に對する保護。經濟社會に不景氣風が吹き荒んで、商工業の當業者が如何に多くの損失を蒙つたとした所で、其れは損失を蒙つた本人の不明淺慮の致す結果と諦める外に、道はないであらう。蓋し好景氣と不景氣とは糾へる繩の如く或は夜と晝との如く、交互的に循環して、經濟社會を訪れる約束のものである以上は、好景氣時代に事業に相當の利益の擧げられた場合に、其一部分を他日の用に積立てるなり、固定資本の消却に充てるなりして、不景氣時代を凌ぐ用意を施すのが事業經營上の要訣に屬するのであつて、不景氣時代に困厄を訴へるのは、畢竟此般の用意に疎であつたからである。從來不景氣時代に幾ら商工業の救濟を必要とする議論が起つても私が之に對して耳を傾けなかつたのは、大體以上の理由に基いたのである。

然し今回の如き軍備縮小の計畫に依つて、民間の造船所や、鐵工所が海軍の註文を喪失する爲めに、不景氣の狀態に陷るものとしたならば、事情は全く違うのであつて、此種の不景氣は殆ど一種の天災又は不可抗力に屬し、當業者として回避するを得なかつたものと云はなければならぬ。造船所や、鐵工所が從

來海軍の註文を引受けるに就ては若干の註文が出たから、之に應じると云ふ成り行き任せであつたらうか、其れとも斯く／＼の註文を今後或る期間繼續して出すから、之に當るだけ工場の設備を擴長せよとか、改良せよとか云ふやうな條件を付けることはなかつたであらうか。若しも後者の場合に於ける如き條件があり、又條件でなくとも、口約とか慫慂とか、之に類する言動が政府から發されて居るとして、今回の如き國際間の關係上軍備縮小の行はれる結果斯く政府の勸誘なり、命令なりの下に行はれた永久的施設が無用に爲り、工業經營の見地から云へば或る分量の資本が全然消耗廢棄される譯である以上は、國家が當業者に對して、損害保全の責任を盡さなければならぬ次第であり、又斯る約束や、行掛りがなかつたにしても、多年海軍の註文を引受け、之を引受けることを一つの慣行として事業を繼續して居つた民間當業者に對しては、突然の註文廢止に伴つて生じる損害に就て、國家として或る補償を與へる情實が釀成されることゝ考へられる。

失業と勞資兩者

第三、資本家の利益保護と勞働者。以上の處置に依つて、軍需工業に從事する資本家の軍備縮小の爲めに蒙らんとする損害は或は回避されるかも知れない。然し吾人は資本家を救濟すると共に、勞働者を救濟する必要を認めるものであつて、社會の治安を保持する點から見たならば、前者よりも後者を以つて、一層必要なりとしなければならぬ。此目的を達するには如何にしたらば宜しいであらうか。私は國家が一方に軍需品製造業者に前記の補償金を交付すると共に、其補償金の一部は軍備縮小の影響に依つて、解傭される勞働者の解傭手當金に充て、失業後に於ける彼等の生活の安全を保障する道を設ける條件を付する必要を認める。而して民間の軍需工業に於て、斯く解傭勞働者に與へられる手當金が定まつたならば、其れが海軍工廠や、其他の官設工場に於て、解傭される者に與へられ可き手當金の標準と爲る可きは論を俟たない。何れにしても今回の軍備縮少計畫の如く、國家の政策が或る方針に向つて、遂行される結果として、失業を生じ、永久は兎に角、一時、目前の關係に於ては、明に勞働者の生活に脅威を及ぼす以上は、國家に於て之を除却する責任の存するのは當然であつて、今度の失業問題を普通經濟上の關係から生ずる失業問題と同一視したならば、全然勝手の違ふことを知らなければならぬ。斯く考へると、昨今一方に華聖頓會議に於て、軍備縮小の計畫が成立しかけて居るには相違ないと云ふものゝ、何時如何なる早さを以つて、又如何

なる形に於て行はれるかも判明せず、又軍需工業家として如何なる補償を國家に求めて、損失を回避し得られるかも豫測されない今日に於て、我國の造船所や鐵工所などが營業頓挫の結果を見越して、之に應ずるのだと稱し、職工勞働者の馘首を始め出したと云ふが如き、要するに資本家的專制手段を最も露骨に表明したものであつて、我國に於ける資本家が如何に短見であり、又如何に我慾的であり、又如何に弱い者虐めを事とするものであるかの一斑は明に之に依つて推知するを得るのである。

或は彼等は不景氣に襲はれて從業者を馘首しなければならぬ場合に、名を軍備縮小の影響を藉り、馘首の已むを得ざることを彼等に承服させて、解雇手當金を値切らうと云ふような狡策を廻らさうとするのではあるまいか、何れにしても今日から華盛頓會議の決議に備へる爲めに、職工を馘首するなどは餘りに早きに過ぎて、何等の意義を之に認めるを得ない。

救濟的工事の價値

第四、國家の救濟的工事は如何　海軍縮小に依つて、歳計に節約され可き二億數千萬圓の財源は之を如何に處置す可きかと云ふことが、昨今世間の話題に上つて居る。現に私も或る雜誌から例の往復葉書で、質問を受けて居るが　斯の如きは俗に言ふ「[illegible]」[illegible]であつて、[illegible]逆睹を樂んで居る時間を持合せない。然し上記の如く、國家として軍需工業家に對して、或る補償を與へなければならず、其補償金の一部は失業者に對する手當金とも爲り、更に官設軍需工場の失業者に對しても、手當金を交付する必要があるとすれば、歳計に生じた剩餘金の一年分や、二年分は自ら此方面に向つて充當されざるを得ない　軍備縮小に依つて生じた剩餘金であれば、第一に同じく軍備縮小の爲めに不利なる影響を蒙る可き人々の救濟に供されるのが、當然の道理であつて、之を外にして、他に計畫を求めるが如きは、不條理の沙汰である。殊に其計畫に我田引水の嫌あるが如きに至つては、沙汰の限りとせざるを得ない。

以上の見地から更に考を進める。第二項の計畫だけで、充分に失業者を救濟するに足らない。或は失業中に於ける彼等の生活には或る程度の保障を與へ得るとしても、進んで授職の道を設ける工風を付けなければ、所謂佛造つて、魂を入れないと同様の譏を免かれないであらう。然らば國庫に生じた剩餘金を支辨し、利用するに就て、吾人の第一に着眼す可きは如何にしたならば、失業者に授職の便を與へるように、事業を起す財源に振替へ得るかと云ふ點に外ならない、前論の如く自然の成行に

放任したならば、容易に此轉換は行はれない。行はれるにしても、或る歳月を要する。此轉換を最も容易に、又迅速に行はれしめるには、國家の努力を待たなければならぬ。如何にして國家が努力するかと云へば、其一ツは鐵道港灣の如き生産的事業を起して、勞働に對する需要を起すことであり、他の一ツは全國の公共團體に補助金を與へて、交通機關の普通、道路の改修、公共建造物の建築等平生爲す可くして爲されなかつた所を爲さしめるのである。斯る人工的手段で起された勞働に對する需要は固より失業者に對して、其失業前に從つて居つたと同じ程度の又同じ種類の職業を供へるものではない。失業に對して、直に復業を見ると云ふことは、何としても大なる困難であつて、貸すに時日を以つてしなければならぬ譯である。随つて以上の政策に對しても、缺點のあることは勿論であるが、失業者に一時生活の凌ぎを付ける方便を與へる力はあるのである。而して純粹の經濟上の關係から、不景氣の結果として起つた失業であると、之に對して救濟的工事を計畫しようとしても、其事業經營に要する財源を調達するに就て相當の困難の伴うことを免かれないが、軍備縮小から生ずる失業であれば、一方に財源の餘裕の豐なるものゝあることから、幾らでも救濟的工事を起し得るのである。而して我國に於ては諸官廳に於て計畫されて居る諸繼續事業の年度割を改正し、後年度に行はれ可き豫定の事業を前年度に繰上げて行ふこととするのも、確に勞働市場に生ずる失業者の爲めに、職業を與へる道と爲ることゝ思はれる。

勞働權の確立を提唱す

第五、勞働者は勞動權を要求しないのであるか。官設工場の方では未だ華盛頓會議を見越して、職工勞働者を解雇するような輕卒な處行を敢てしない、彼等の或る者を解雇するにしても、其れは事業進行上の關係から來るのであつて、軍備縮小計畫とは何等の交渉を持たない、然し華盛頓會議の決議が成立し條約として批准され、然も遠からざる或る時期に於て、其實行を見るのが必然の情勢であるとしならば、海軍關係の軍需工場に於て仕事に從つて居る職工勞働者が失業の運命に陷るのも、免かれ難き所であつて、彼等の失業は時期の問題たるに過ぎない。而して民間造船業者や、鐵工所主の横暴にして、專制なる、華盛頓會議の進行中である今日から、早くも勞働者の一部に對して、解雇を行ひつゝあるものとすれば、勞働者として之に備へる爲めに運動するのは、當然である。然し彼等は何を目標として、何事を誰れに要求す可きものであらうか。單に生活の安定を或る程度まで謀らうとか、失業の彼等に及ぼす苦痛を緩和

しようと云ふのであれば、其方法は三通りある、（一）國家をして失業者の爲めに職業を周旋させるとか、（二）國家なり地方自治體なりをして救濟的工事を起させるとか、（三）國家をして軍需工業の經營者に對しては補償金を、其勞働者に對しては失業手當金を支拂はせるとか、其れ〴〵の策たるを失はないが、更に私が今日此際我國の勞働者をして、提唱をさせたいと思ふのは、勞働權の主張である。人が懶惰であるとか、身心病弱であるとか、又は生活や行動に不規律であるとか云ふような缺陷があつて、職業に就くことが出來なかつたり、又は一旦就いた職業から直に離れたりするような場合には、經濟上の見地に於て、之を如何ともするを得ない。斯る人は失業者と云ふよりも、寧ろ勞働不適者とし、勞働不能者とするを以つて、當れるものとす可きかも知れず、斯る人に對する救濟には純經濟上の見地を離れ、教育上精神上若しくは醫療上の方面にも亘る必要を生ぜざるを得ない。若し夫れ吾人が普通失業者と呼ぶのは、確に勞働する意思があり、又勞働に堪へる體力も氣力も持ちながら、自ら此勞働力を施すに適した地位を得られない人であつて、即ち意見に反いて、無爲の日を送ることを強要される次第であり、人間に對して此位殘酷なことは、他に其比を見ないであらう。人が健全なる肉體を持ち、相當の仕事に堪へる四肢を備へて居るのに、何の[illegible]せ、日常生活の爲めに消耗し、破壞する富を[illegible]、進んで[illegible]破壞するよりも大なる富を生産して、以つて經濟生活の豊富に資する所あらしめんとする吾人の意に外ならない。勞働者が勞働權を持つと云ふ理據は正に此點に其論據を置くものである。

然るに今日の實際を見れば、失業と云ふことが頻々勞働階級に襲い來つて、勞働者をして自己の意思に反して、懶惰無爲の日を送らしめようとする。斯の如きは今日現に行はれる經濟組織の根柢に大なる缺陷の存する結果としなければならぬ。例へば經濟的循環期に起る失業にしても、資本家が利益の欲求に忙はしくして、經濟社會全體に於ける指導的能力が缺けて居る結果であり、又今回の如き軍備縮小の爲めに、軍需工業から解放される資本や、勞力が圓滑に又迅速に平和的工業に轉換するを得ず、其間に失業の發生するのも、亦經濟社會に統轄的能力が備へられて居らない結果であるとしなければならぬ。然らば勞働者が一身上に何等の缺陷なきに拘はらず、失業の苦痛を荷うのは、實に罪す可からざるに罪されるものであつて、天下に斯く不公正なることはありとす可からざる次第である。國家をして勞働者の爲めに、勞働權を認めしめようとするのは、此社會的不公正を除却する爲めであつて、要するに國家に勞働意思を有

する勞働者には必ず或る職業を授けて、其意思を充させる義務を負う。若しも國家の力を以つて、斯る處置を爲すことが出來ず、勞働者をして失業の已むを得ざるに陷らしめる場合には、國家は其勞働者が勞働に就いて收め得べかりし賃銀と同一額の所得を給與する制度を設けるのである。而して國家が勞働者をして職業に就かしめるに就て、往年佛蘭西に行はれたような國立勞作場の如き制度を以つてするか、又は臨時に國家の必要とする仕事に就かせるか、其れとも仕事と云ふことには重きを置かず、寧ろ失業者に相當の給與を與へると云ふ形で、勞働權を承認す可きものであるか、種々の問題を生じるが、失業問題の解決を煎じ詰めて來れば、結局勞働權の承認と云ふことを以つて、大團圓とするの外はない。我國に於ては從來失業があつても、其程度は甚だしいものでなく、一時失業者が苦痛を忍べば其れで一時の難局も經過したものであるから、其解決に就て、別に困難なる問題にも接しなかつたが、今や一般の不景氣と軍備縮小と相重なつて、失業と云ふ一大波瀾の從來知られざる程度に於て、湧起するのは、勢の免かれ難き所である。政府は例の自由放任で一時を瞞化し去らうとするか、其れとも申譯ばかりに微温的救濟策を講じようとするのか、孰れとも私の知らざる所である。而して一方に民間勞働者の要求する所は勞働權の承認まで行くか、其れとも政府の態度一つで、今少し進んだ議論に接するか、是れ亦私の判斷を下すに躊躇する問題に屬する。

私は或る雜誌から、高橋内閣に何を望むかと云ふ質問を受けて、一日も早く總辭職することを望むと答へて置いたが、斯く勞働問題なり、失業問題なりの解決の面倒に爲つた際に、是等問題に全然理解を有しない高橋内閣などの國政を掌つて居ることは、誠に百害を生ずる所以であつて、私は一刻も早く此内閣の政局を去ることを望まざるを得ないものである。

個人力と社會力

杉森孝次郎

もしわれ〳〵の一人が、神人の時代は遠く逝いて超人の時代が續き、超人の時代も衰微して凡人の時代が興隆しつゝあると考へるなら、その一人は智者であらうか。理想の實現を、絕對不可能の狀態から稀れながらも可能な狀態に改觀し、稀れにのみ可能な狀態から普通に可能な狀態に更らに改觀せんとする努力に於いての考へなら、それは智だ。ヤソの母が處女でなかつたことを信じ、なに人もヤソを先天的、範疇的に師と仰ぐべき義理を持たないことを次いで信ずるに及ぶ論理的進步を內容とする時代變なら、神人時代が超人時代に、その超人時代がまた凡人時代に移り變はることは、歷史的進化だ。ヤソは處女の子であつたと信ずる限りに於いて、ヤソとわれ〳〵とのあひだには無限の本質的距離がある。ヤソを超人だと觀ずるやうになれば、ヤソの脚は、ヤソの頭よりも天に近いものではなく、われ〳〵と同樣に、かれは地から生えた人となる。われ〳〵と同樣に、人間の子として產まれ、育ち、感覺や知覺に於いては、恐らくはわれ〳〵と大差もなかつたらうに、理性、感情、想像、意力に於いて、遙かにわれ〳〵を拔いてをつたらしい事實を認識する瞬間に、ヤソは、われ〳〵の外在理想たる假面を脫いで、われ〳〵の內在理想たるすがほを示す。神人としてのヤソは、超人類的存在だ。人類の可能の延長ではない。舞ひさがる天使のやうなものだ。人類にははねがないから、降誕も、昇天も、まねの試みさへできない。超人となれば、超凡人的ではあるが、超人類的ではない。人類內の現象だ。人類線に起伏があり、凸凹があり、高低があるなら、超人はその起點だ。凸位だ。高處だ。超人と凡人との差は、有資人と無資人との差のやうに有無の差ではない。それは、三本すぢの軍人と一本すぢの軍人との差のやうに多少の差だ。步と金との差のやうに大小の差だ。一本兵が三本兵になりうるが如くに、また步が金になりうるが如くに、凡人は超人になりうる。科學的にはなりえない場合も多からうが、道德的にはすべての凡人は超人になりうる。超人は凡人の

延長として觀ぜられる。神人時代から凡人時代への推移は、原則の別ではなく、方法の異でなくては不健全だ。神といふ絶對善、超人といふ優秀善を、運命的方法に依賴して獲得すべき目的と觀た時代から、創造的方法に依賴して獲得すべき目的と觀る時代への進步的推移でなくては、その推移は不健全であるのだ。けれども創造的方法の有能者は各自己としての各一人だ。一人の意識内容としての他人は、たとひその他人が、自己としての資格に於いては、その一人の自己としての資格に於いてよりは、遙かに〳〵高い程度の創造力を持つてをる場合でさへも、創造力に於いてその一人に劣る。劣るではいひ足らない。有ると無いとの差だ。いかなる天才者でも、庸才者の觀念としてのかれは、その庸才者自身が有する創造力以上の創造力をば決して有しえない。いかなる庸才者でも、かれの觀念としての天才者に比すれば、遙かに〳〵獨創的だ。應擧の虎は、自然の猫ほどにも勇猛でない。各人をして創造力を遠望せしめた時代が神人時代だ。多數人をして少數人の創造力をあがめ誇らしめた時代が超人時代だ。もしも凡人時代がそれに繼ぐ時代であるべきだとするならば、すべての人々が、創造力を各一人的自己に發見する時代が、その凡人時代の意義でなくてはならん。創造力をあがめ奉つた時代からあがめ誇る時代に進み、最後にそれを自己存在の原因として、目的として、手段として、すなはち自己の本質的全體として認識する時代に進むのが歷史の論理的發展だ。創造力を神人や超人に一任せずに、各人が、自己の直接責任として意識したかたちが、不完全ながら立憲代議制だ。進んでは生產者自治の運動だ。

比較的に社會に鋭感であつたミルも、『自由論』の第三章に於いて、個人に對する甚深の理解を示してをる。比較的に個人に集中したカアライルも、『英雄論』の第一講の劈頭近くに、神人時代としての原始的英雄崇拜時代はつひに歸らざるべく往つてしまつたと確言してをる。ミルとカアライルとは、ほゞ同じ時代に、ほゞ同じ社會の空氣を吸つた二人であつた。兩人各は、聰明の差によつてのみ說明される特異色を帶んでゐたのであらうか。性格の別によつて說明される特異色をば言ふに値ひする程度には持つてゐなかつたのであらうか、單なる優劣別であつて、同時に存在權を有する種類別ではさほどなかつたであらうか。兩者の殊差は、同一價値、同一實在の一極と他極とに對する注意の比較的集中の殊差と解すべき部分を、僅に言ふに値ひする程度に於いて持つてゐたとわたくしは判斷する。個人集中的方法は人間生活の求心的傾向だ。社會集中的方法は、それの遠心的傾向だ。本心極と遠心極とは、一原則の兩機能だ。協力を意義

とするものだ。しかも、最後の主張としては、個人は主だ。社會は從だ。社會は個人の內在的完全價だ。正しきかたちの個人集中は、正しきかたちの社會集中の可能的總全をその一部的內容として必然的に所有する。實現する。

ミルの「個性論」の章と、オイケン氏の『現代思潮』のたかの「社會と個人」の章とは、萬人の熟讀を値ひする。なぜ個人は主であつて。社會は從であるかといふに、その答への一部は社會進步の主能力は、明白に個人に存するからだといふにある。そも〳〵社會は生物でない。有心者では無論ない。社會は感覺を有しない。社會は寒暑をも、甘酸をも感じえない。社會には目もなければ、耳もない。社會には感官はない。社會には神經系統が皆無だ。社會は考へる力をも持たない。欲する力をも、意思する力をも、隨つて爲す力をも、行ふ力をも持たない。一と頃持てはやされた「群衆心理」や「社會意思」は、一種の偶像であつたことは、すなはち迷信であつたことは、識者には最初から明瞭であつたらう。社會には意識はない。精神も、靈魂も、あらゆる心的實在は、社會の本質ではない。心的實在が社會の本質だと正當に立言される可能はある。けれども、その場合には、社會は人の本質のある部分だといふ大原則が、先づ認められてゐるのだ。社會は人の現象だ。社會の實體は社會自身には存しない。それは人に存す。

社會の一內容は科學だ。科學の進步は、科學のすくなくともそれだけの進步だ。科學は絕えず進步する。その一事だけから考へても、社會は絕えず進步する。進步は社會の一大要件だ。社會の本質的必要の一大項目だ。然るに、その進步は、たとへば科學方面に於いては、發明的個人によつてその第一原因を形成される。ある一人があるきだす。それから少數者があるき隨ふ。最後には多數者が、その少數者のあとを追ふ。こゝまでくれば、その事實の妥當名は社會進步だ。

クロポトキンは一人の功績を認めなかつた。いかなる發明も無數の男女の功績であつて、どの一人の功績でもないと觀た。ある大いなる智慧と人情の含まつた考へだ。けれども、森林よりも樹木の方が、一層根本的な、先在的な實在だ。萬人の功績を實在視して、各人の功績を非實在視する不聰明が、クロポトキンの判斷にはある。各人の功績を實在視しても、その各人の功績間に殊差を認めないならば、それは個性を認めないと同意義だ。消費者としての各人こそ、大同小異なれ、すなはち個性を示す程度も低けれ、生產者としての各人は、むしろ個性そのものだ。クロポトキンは、消費者としての大多數窮民の必要に全心惻動して、人を消費的實在としてのみ觀る傾向が支配的に

親くなつたのかも知れん。消費者としては、タアナアも、ベートーエンも、ニーチエも、トルストイも、概ね同一人であつたらう。食、衣、住は、種々の個性を通じて大差あるを要しない。資本主義の文人も、社會主義の文人も、筆と、墨と、紙と、机と、椅子と、電燈とを使用する點に於いては一致する。文字を生産する點に於いては、かれらは、時として、およそ二個人が異なりうる限りの最高度の異なりかたをさへも示す。萬人が、同じやうなものを食ひ、き、使うても、そのうちのある者は「自由論」を生産し、他のある者は「英雄論」を生産するといふ一事件について考へて見ても、人が、最も十分にかれ自身である場合は、生産者としてだ。消費者としてのかれは、誰れでもありうるが故に、誰れでもない。類性人であつて個性人でない。淺現象だ。生産者としての一人の方が、消費者としてのかれよりも深實在だ。クロポトキンは、この深實在としての各人を明視しなかつた。消費者としての各人は、實に、生産者としての各人を目的とする現象だ。手段的現象だ。目的を達する人間に於いて消へ去る。人は、消費するために生産するのではない。人は、生産するために消費するのだ。理想的意義に於ける人はだ。衣食住を目的として、學者は研究し、藝術家は創作すべきではない。學者は發明を目的として衣食住し、藝術家は創作を目的として衣食住すべきだ。その發明と創作には、單作ならば一人の、合作ならば各人の、眞自己としての個性、獨特質が支配者をなすべきだ。社會は、ある意味に於いて消費者だ。個人中の個人、眞の個人は生産者だ。その關係に於いても、社會は個人を目的とする手段だ。實在は個人だ。社會は現象だ。現代の産業制度も、生産者の一大部分としての勞働者が、生産を目的として衣食住せずに、衣食住を目的として生産するところに制度的缺陷を有する。現制下に於ける勞働者は、飢寒を恐れて生産する。生産それ自身は、單なる手段として、苦痛として意識されてをる。これは變態だ。不健全状態だ。人といふ人は、例外なしに、生産者としての生活に本質體的自己を發見し、體驗すべきだ。創造が人の本質だ。社會そのものには、衝動も、想像も、感覺も、理性も、意思もない如くに、創造力もない。創造は發明だ。發明が社會進歩の原因であることは、人が社會成長の内的決定力であることゝ同事實だ。

社會には自己決定力がない。自己決定力は、意思能力のないところにはありえないからだ。意思能力は、各人と共に存する。社會は協力の別名だが、精しくいへば意思的協力の別名だが、この意思的協力としての社會は、その存在因を自體に有せずして、協力員としての各人に有する。協力する、しないは、それ

た意思的活動である時には、合意の自由選擇だ。意思的活動にほかならない組合は、實に、その組織自身、本質自身、成り立ちそのものに、意思の直接能力者としての人、すなはち個人に對して從位、屬位に立つ條件を具備してをるのだ。制度と組合は社會內容の重大なる一部だが。そして制度も組合も、多數個人の合意を必要條件とする事實だが、その合意は、それ自身に存在の原因を有する現象でない。合意の原因は、合意する個々人にある。個々人が合意を選擇する限りに於いて合意は存在する。個々人は合意を選擇しない自由をも心理學的には有する。合意は、それ故に、基礎的事實ではない。有假定の事實だ。各人の自由意思そのものは、すなはち自己決定力そのものは、然るに、無假定の事實だ。自己決定力といふ概念組織が、それが無假定的事實であることを明示する。制度や組合は、個々人の意思によつて決定される。個々人の意思は、個々人の意思によつて決定される。

人が自己決定力の單位であることは、現代人によつて、まだ甚だ不十分に認識されてをる。こゝで人といふのは、精確な意義に於いての人だ。すなはち一人だ。各個人だ。二人でもなければ半人でもない。一人以上でないと同時に一人以下でもない。二重人格や分裂人格でないと同時に團體人や群集人でもない。無自覺人や無統一人でないと同時に組合人や制度人でもない。無自覺人や無統一人は、自覺人や統一人を目的とすべき不完全な狀態だ。組合人や制度人は、自覺人統一人を條件とするが、自覺人、統一人の全體でなく、ある部分の代表だ。ある部分だ。自己決定力の一材料となり、一對象となりうるが、自己決定力の中心實在ではない。組合人や制度人が、自覺人や統一人のある部ではあつても、全體ではない說明は、組合や制度は、必然的にある共通人、平均人を內容とするといふ事實に見いだされる。すでに組合であり、制度である以上は、それがいかに少數的な、特異的な、エソテリックなものである場合でさへも、その少數人間のある共通意思を、それは內容として有するのだ。メンシェヴィストとボルシェヴィストとは複數人內の寡多別だ。二人のおのおのの全存在が類同質から成り立つといふことは絕無だ。實在系統に於ける二人の位置の差がすでにそれを不可能にする。單なる空間的または時間的位置の差でさへも多少その力を有する。二人乃至それ以上の數の人に共通な意思は、自明的にその各人のうちのある部分をのみ要素として形成される事實だ。その各人のあらゆる部分を要素として形成される事實ではない。その各人のうちのある部分は、質に於いては相似てゐる。もしくは相同じだ。組合や制度に、多くの人が各有する同質意思の

量的結合だ。いひかへれば、多くの人に遍在する意思の寄せ集めだ。總額だ。量に於いては、それ故に、一人以上たる意義を一面に於いて有すれども、質に於いては、いかなる組合も、制度も、一人以下だ。すべての組合や制度の組織せられたる一全體でさへも、或ひは組織されない雜集ならばなほさらのこと、質に於いては、一人の全體には達しない。なぜかといふに、すべての組合や制度のおの／＼が、ある共通意思のみから出來てゐる。そのやうな意思のいかなる多種多數を網羅しても、一人の特有質はそのあみにかゝらない。個人中の個人は、すなはち個性中の個性は、組合網や制度網のやうな、外延的方法によつては捕獲されない。人の中心實在は、內包的だ。獨特だ。無類だ。この考へは、神秘主義では決してない。各人は、イエスとノーを、すくなくともかれの心的態度に於いては、かれ以外のすべての人またはすべての存在の意思や傾向に反對しても、主張しうるといふ確實なる心理的可能が、科學的自明力をもつて證示する事理だ。

個性の直白は藝術だ。藝術は發表だとは、ワイルドの裏書きを待たずして說得力ある立言であつた。藝術は社會の發表であらうか。藝術家は、かれの論文なり詩稿なりを通ほして、すなはちそれらを手段として、社會を發表する人であらうか。藝術家自身は、單なる取次ぎ役であらうか。藝術家は時勢によつてそのうぶなこゝろに文字を書かれ、その書かれたる文字を、反射的に社會にむかつて書き返へすだけの勞をとる人であらうか「偉大なる人々はかれらの時代の主人であつた。奴隸ではなかつた。十八世紀の後半にたま／＼ゲーテ風の思想が遍在してをつた故に、われらは單に符徵的にかれの名によつて一時代を標示するのであらうか。それともかれの人格が時勢の進運に目的と形成と組織と統一と發展とを寄與したが故に、われらはゲーテ時代を口にするのであらうか。眞實は後の場合であるべきだ」とオイケン氏が述べたのは、極めて平凡な考察かも知れないが、決して陳腐な、無用な、時代錯誤的考察として見棄てらるべきものではない。

社會は、それの最善意義に於いては、天日かも知れん。なほ且つ個人は、レンズだ。焦點を形成する特權を保有する。天日は、レンズによつて增加される。增加されるだけはレンズの創造だ。レンズの功績だ。社會を全有と觀て、個人を皆無と觀る人は、第一に、結果と現象を全存在と考へ、原因と原則を非存在と考へる人だが、第何番めかには、連鎖の一環と、それの第三環とを算へて、途中の一環を算外に置く人だ。個人は、社會から、遺傳、教育、歷史、境遇の種々の通路を通ほして受け、

またこれらの種々の通路を通はして與へるのだが、この受與者としての個人は、受胎、產出の樞要位にあるのだ。個人は受納器だ。社會も、時代も、歷史も、この受納器によつて濾過される必要を、社會、時代、歷史自身のために持つてをる。麥の種子は個人のやうだ。土壤と空氣と光線と水分とは社會のやうだ。麥の種子の一粒は、それらから受けるが、それらに與へる。受けた通りのものを與へるのではない。受けなかつたあるものを與へる。麥莖と麥葉と麥穗とを與へる。人は土壤を食ふことはできない。麵麭なら立派にくへる。麥の種子の各粒と、人の子のおの〱との差は、生物的個體の低級と高級との差に過ぎない。個人は、最高級の受與者だ。創造的受與者だ。かれは、與へるために受ける。受けた以上を與へるために受ける。個人から抽象された社會は、動力なき機械よりも非實在だ。個人は機械の原因だからだ。單なる組合と制度は機械に比すべきものだ。個人をあとまはしにし、かげにし、乃至無視した社會觀は、目的をあとまはしにし、かげにし、乃至無視した社會の觀念だ。社會の目的は、個人だ。個人の目的は個人だ。社會はその手段だ。藝術を知らない人、藝術を持たない人が、社會萬能論者だ。一人が社會萬能論者であるならば、その事自身が、かれが藝術を知らない人、藝術を持たない人であることとの科學的記述だ。藝術の世界に於ての貧民だ、[illegible]萬能論者は、橫列進行の偶像者だ。百人が一隊進行を指揮し、皆なが炬火を手にして踏みだすことを必要と考へる人だ。一人先頭に高提灯を掲げれば、九十九人は、或ひは[illegible]を擔ひ、或ひはテントをかつぎ、或ひは老幼を扶けて從進する便宜もあることを想はない人だ。煮のりは、一度に固まらず、ところどころに大小の中心が出來て、次第に全鍋が糊化する。教育が普及し、人格價が遍認されても、すなはちデモクラシイが發達しても、それは個性の抹殺を意味せず個性の擴展を意味すべきだから、位置の差は不拔の深根柢をデモクラシイの發達と共に幹として枝葉として、花果として、表面と上方へ射だしに射だして、また競ひ射だして、はてしない筈だ。何であらうとも、一個であらうとも、藝術家としての一人は、それを社會の名に於いて落とすことはできない。かれの創作の手は、かれの個性のありかたとして動く。

社會を外觀する習慣が、いまなほ新裝して驕慢に耽る。社會は人のそとにはない。人のそとには物がある。いくたの生類がある。人と人とのあひだには、風が吹いたり、犬の子が走り過ぎたり、ほこりが飛んだり、卓子や壁や牆が横たはつたりする社會は心的實在だ。それ故に各人の意識內容の所屬として存在

する。多數人の協力としての社會は、共通意思の組織としての組合や制度は、外延的形式を保つが、內包的意義を有する。社會の所有者は社會でなくて、各人であるといふことは、社會の創造者は、或ひは製作者は、社會自身ではなくて、各人であるといふ定理の系だ。內外の別は、同一生命の比較的に本質的な、中心的な部位と、それの比較的に偶然的な、末梢的な部位との別だ。社會が外觀される習慣は、たま〱社會の部位を語る。公生活は、私生活の延長として、部分として體驗される時に、その意義を全うする。公生活の缺陷が、不備が私生活なのではない。私生活の充實が公生活だ。さうでない公生活は僞善だ。さうでない私生活は眞惡だ。

藝術は社會主位論、すなはち個人從位論に當然反逆する唯一の衝動ではない。最樞要の衝動でさへもない。その最樞要の衝動はわれ〱の主觀自身だ。われ〱の創造質そのものだ。われ〱の自由意識そのものだ。宇宙の中心は見つからないかも知れん。社會の中心はわれ〱のおの〱だ。宇宙の中心も、われ〱にとつては、われ〱のおの〱として見つかるのだ。われ〱のどの一人たりともが、一指を伸ばすか、屈するかによつて、宇宙のありかたは別にされる。然るに、その一人が、かれの一指を伸ばすか、屈するかは、かれの自由意思の範圍內だ。宇宙は材料だ。各人の意思は、すなはち意思としての各人は形成力だ。素布と繪の具と經驗とが材料であつて、畫家の頭腦と手と刷毛とが形成力であると似た關係だ。各人の品性と人格が、時代の傀儡であつて、その傀儡師でないことは、最後の計較に於いて、不可能でもあるが、反理想でもある。

階級別や種族別が、窮屈なかたちに於いて、理想主義によつてさへも辯護されてをつた往昔にあつては、われ〱が今日意味するやうな社會は未發達であつた。個人の本質價が通認されて來た現代に於いては、協力の網の目はこまかにして繁い。その內容は、分勞主義の發達だ。現代に於いては、いかなる能力者も自給ではない。協力の一結節だ。一接續點だ。全社會は各一人の自己の範圍だが、この事實は、各一人に自治と責任といふ表裏一枚の護符を佩用すべきことを暗示する。社會的結果と個人的動機との間に論理的及び事實的一致が保たれることが現代の一新必要だ。產業革命以來の過去百年間は、要するに、社會的結果を眼中に置かない個人的動機の獎勵と解放であつた。立身主義、成功主義、榮達主義は、その現象であつた。資本家は、私利を唯一の動機として企業し、經營し、投資する。少數者の贅澤欲を滿たすための物品を生產した方が、多數者の最低限必要を滿たすための物品を生產するよりも多利だといふ打算が出來れば、

かれはその多利の途を固執する。市場の物資を獨占にすることによつて、多數者の不幸を顧慮せずに價格の高昇、上騰を圖る。商人は商人で、暴利を貪るに躊躇しない。勞働者は、衣食の窮策として勞働する。經營、生産、分配、いづれもその當事者の動機が純私的だ。然るに、組織者の經營も、勞働者の生産も、商人の分配も、その結果は、その企業者自身、職人自身、仲介者自身に屬するのみでなく、その當事者以外の大多數者すなはち社會に屬する。結果が社會に屬する限りに於いて、その行動の動機は、社會の幸福と利益の保護増進に存すべきだ。人間社會の現象は、意思的協力を原則とすべきだから結果と動機との間に距離があり、間隔があり、背反があることは理想態でない。人間社會の現象は、その原因が動機であり、目的であるべきだ。その現象は、その動機の實現としての結果であるべきだ。その目的の達成としての結果であるべきだ。個人的動機と、社會的結果とのあひだの關係の調節は、倫理の根本觀念、隨つて教育の根本方法の上から、相當の新努力を開始して來なくては企てられない。倫理觀念の改正としては、社會を個人のそとに見ない、妄想しない用意が先づ算へられる。教育方法の改善としては、小學校の最低級から高等普通教育、專門教育の全階程を通じて、進歩的社會學の教授に最大努力を拂ふやうにすることお、この目録の必須的一項だ。

個人的動機と社會的結果とのあひだの距離、背反は現代生活の各方面にいちじるしい。國際生活がもとより例外をなさない。現代に於いては、一國の行動は、その結果に於いては、國際的社會に屬する部分が、實にしばしば多大だ。然るにその動機に於いては、殆んど專ら自國に屬してをる。男女際、長幼際、おのおの同一病弊に、原則に於いてなやまされてをる。社會を知る必要が、その餘地と共に絶大だ。社會の内包として個人を發見し、確認し、體驗し、個人の外延として、外延中の外延として社會を發見し、確認し、體驗する學と術が、史期作成の熱と光りをもつて主張され、宣傳されねばならん。外延中の外延といつたのは、人の直接延長として社會あり、間接延長として自然的實在すなはち社會の外廓ともいふべき宇宙があるからだ。一新紀元が、觀念、隨つて制度の上にいまや開始されねばならん。それは社會的個人の自覺と實現の紀元だ。

個人といふと、量的に響く可能がある。その意味の個人は、衆個人の共存としての社會よりも小だ。小量だ。けれども、個性といへば、比較的に質的に響く可能がある。さらに自由意思といへば明白に質的に響く。從來の多少の量的個人觀に支配されて、個人とさへいへば、社會よりも小さい實在のやうに、價

値のやうに思ふ習慣を、現代人は脱却しなくてはいかん。量は數學だ。質は藝術だ。數學的方法のみによつて人と社會を考察しては手落ちだ。

現代に於いては、制度中の制度といへば國家であり、組合中の組合も國家であるやうに通例思はれてをる。そして國家らしい國家、或ひは國家と云ふ國家はこと〴〵く、個人に對しては權力、强制として現はれてをる傾きがある。そこに國家の本質的特徴があるやうに通例思はれてをる。國家人時代から社會人時代へ轉生するにあたつて、多くの現代人は、かれらが國家に對して從來持つてゐた偶像崇拜をそのまゝ社會に對して持ちなほす。盲目的社會主位論はこゝにもその一存在因す、なはち一說明を有する。この迷信を覺醒するためには、國家以外の組合、殊に單能自由組合の發達が必要だ。從來は、社會關係といへば、國家對個人の關係であつた。今後は、社會關係といへば、個人對組合の關係、組合對組合の關係、組合對國家の關係が、大いに考量されねばならん。それに加へて、國家對國家の關係が考量さるべきだ。多種多數の組合關係を整理し、調節し、組織し、統一し、單純化する努力を拂つたのちに、各一人としての各自己が、社會を内含的に超越する根本實在である事理に現代人は識及するだらう。强制的組合としての國家でなく、自發的組合としての諸般の特殊組合を認識し、體驗した結果として、個人は社會よりも大きいといふ公理を、現代人はいまさらの如くに知り、信ずる人になるだらう。組合は制度の一種だ。こゝでは、それ故に、强制的組合、自發的組合についての立言を、强制的制度、自發的制度にもそのまゝ適用する。組合以外の制度にもそれを適用する目的に於いてだ。

社會の發達は、その一面に於いては、デモクラシイの發達だ。發達した社會に於ては、輿論と制度が個人の意見の發表方法だ。個人の意見は獨創だ。進步力だ。その獨創と進步力は、先づ輿論を形成し、然るのちに制度を新設するといふ順序をふんで實現される。輿論政治、立憲政治といふ語は、事實上やゝ腐敗したが、純粹の語としては、新鮮なる意義を帶びうる。改釋される可能があるのだ。輿論を準備し、憲法を作成する。これが、進步した社會に於ける個人の對社會的方法を象徴する。敎育と立法、或ひは宣傳と設制が新個人の方法だ。新個人の方法は社會的だ。

一九一九年のレーニン氏は、一訪客（ランサム氏）にむかつて、「革命は宣傳には倚繋しない。もしも革命の事情因がなかつたなら、いかなる種類の宣傳も革命を催進することもできず、退止することもできないだらう。歐洲戰はその事情因をすべて

の國々に傳播した。産出した。かりに現在のロシヤが遽かに海に吞まれるとしても、全く存在しなくなるとしても、歐洲のロシヤ以外の部分に於ける革命は依然として進行を續けるだらう。ロシヤを二十年間水の下に置いても、英國のある勞働組合の要求條件はいささかも輕減されないだらう」と對話した。同じレ氏は、他の場合に、一個のレ氏の存亡は、ソヴィエットのロシヤの大局進運になんらの影響をも持たないだらうとも談じた。露は、近代諸國のうちでは、比較的に、デモクラシイの歴史が淺かつたから、一人の意思に盲從する程度は高い方だらう。ザアに集中したやうに、レ氏に集中するといふ一面の事實もあらう。その露でさへ、民衆の力は偉大であるに相違ない。レ氏自身が口にした通りではないと思ふが、それにしても、以前のやうに、一人の力が極大限乃至全有であつて、民衆の力は極小限乃至皆無である實情では、もはやない。十九世紀後半の獨が、どれほどビスマルク一人の力に負ふたかは、なに人も精確に計算することのできない問題だが、一部の英雄崇拜眼に映ずる通りのものでなかつたことだけはたしかだ。一八七一年前後には、獨國民はすでに産まれてゐたのだ。多くの人々は、ビスマルクがその産婆であつた。乃至實に殆んどその母であつたとさへ考へる。しかし事實は、ビスマルク自身すら、新興國民主義の本質と意義に對して、甚だ不十分な理解を持つてゐたのだ。ビスマルクが大勢を促進した功績は顯著にして確實だが、ビスマルクがその大勢の器具であつたことも、顯著ではないとしても確實だ。世紀末から一九一八年の晩秋に至るまでの獨が、その興亡全史をどれだけカイゼル一人の成功と失敗とに歸して説明しえられるかも、難問題だ。しかし、カイゼル尊信者、及びカイゼル憎惡者の多くが考想するほど、かれ一人の成功も失敗も大きなものでなかつたことだけはたしかだ。獨は、無論露の比ではないが、デモクラシイの發達に於いて現代の第一位國ではない。それだけに、一人の力が比較的に大きく、民衆の力が比較的に小さいといふ一面の事實はあらう。英、米の如き國に於いては民衆の力が比較的に大きい。一九一六年の十二月に、ロイド・ジョージ氏が、一種のクーデタアを敢てしたのも、英國の無數の男女の氣質と性格と意思とを、アスクィス氏よりも聰明に理解してゐたからではないか。されば、あの突發した毒矢の企てが成功して、ロイド・ジョージ氏が無くされた場合を假定しても英國民は、多分氏以上にも愛國主戰の強者をその後任に推選して、押し強く戰つただらうと想像される。民主黨時代のアメリカ、そのアメリカの道具としてのウィルソン氏もあつたのだ。共和黨時代のアメリカ、そのアメリカの道具としてのハーデング

氏がある如くにだ。ナポレオン第一世でさへも、かれ自身も隨分意識してゐたのだが、時勢の道具としての一面を實に大きく持つてゐた。革命混亂の餘をうけて、人民は生命、財產、名譽の安固を渇望しあぐんだ。その要求を觀て、ナポレオンは秩序を與へた。これがかれの成功の說明だ。一時歐洲に覇をとなへえたのも、形成されたる佛の國民主義に援けられて、國民主義未形成の獨、露その他に乘り込んだからだ。無人の野を行くの概があつたのだ、かれの晩年の敗績も、一時的被征服國の國民主義の擡頭によつてだ。產業革命がなかつたらマルクスもなかつたらう。さうしたらレーニン氏もなかつたらう。すくなくとも歷山第一世以來の軍國主義がなかつたら、トルストイもなかつたらう。さうしたら一九一七年に、軍隊が左向することもなかつたらう。隨つて革命は成功しなかつたらう。現代の戰爭は國民戰だ。君主戰ではない。現代の社會不安は階級爭だ。一勞働者と一資本家との私爭ではない。民衆の力、制度の力がむしろ表面の力となつて來た。勿論それは、それらの力が、裏面の力でなくなつて來たといふのではない。從來は比較的に、裏面の力として限られてゐたそれらの力が、いまでは表面の力ともなつて來たといふのだ。ニーチエの榔の樹が、蔓性植物のシボマタドルに反逆して、頂上と表面を獨占し、代表せんとする新形勢だ。新時運だ。新時代のプロメトイスが誕生しつゝある。けれども、新プロメトイスは、人間の力、わけても發明、創作の力を、すなはち個性力、文化力、文明力を、地上に幅廣く傳播し、扶植する意思の別名でなくてはならん。底淺くといふ條件がそれについてゐてはならんのみならず、底深くといふ條件が確實に、新プロメトイスには理解されてゐなくてはいかんのだ。幅廣くは數量的發展だ。底深くは性質的進化だ。神人を超人に改生させた人間の智慧と意力は、いまや、超人を凡人に改生させる努力に集中してゐる。神人は唯一人だ。超人は少數人だ。凡人は各人だ。各人の超人化、各人の神人化が、デモクラシイの意義でなくてはならん。

各人を人らしく扱ひ、各人をして、人らしい生活を生活せしめる新社會組織、新產業制度が焦眉の急務ではないかと反問する人があらうとも、それは上說の裏書きであつて、反問ではない。もしそれ、制度力と民衆力とに、すなはち社會力に壓倒され、昏迷し、眩惑して、個性廢用の信念を形成する人は、多く讀んで獨創的でなくなる人同樣だ。それだけの個性の持ちぬしだ。しかし、その人でさへも、かれの學說を裏切るだけの個性をば實は持つてをるのだ。つけ足して置くが、個性は個性であつて、個並や個數ではない。個性の別名は特質だ。個性は個意だ。

音樂私論

法學博士　渡邊鐵藏

（一）音楽の勃興

近來の音樂流行は實に素晴らしい勢である。我々の學生時代には、西洋音樂の演奏と云へば好いものは上野の音樂學校で春秋二回聽けるだけで、其の他宮中雅樂部を中心とした明治音樂會と云ふのが時々演奏會を催して居たに過ぎない。そこで偶に外國の有名な演奏家が渡來すると、天使が來たやうに喜んで聽きに行つたもので、ミセス、マーケンスや、プレミスラブが來た時などは演奏の終る毎に聽衆は足踏みをして喜んだものである。然るに僅かに十數年を隔てた此頃では、音樂會は毎日到る處で、日によつては數箇處で開催され、殊に外來の名家が續々として渡來し、エルマンやシュマン、ハインクのやうな世界的名家まで之れを迎へる事が出來て、而も其の興行が連續五日間と云ふ西洋でも稀な遣り方であるに拘はらず、連日滿員と云ふ盛況で、隨分音樂好きな自分でさへ驚くやうな有樣であつた。

また日本でオペラが見られると云ふ事は、數年前までは我々殆ど豫想しなかつた事で、せい〳〵バンドマン一座の喜歌劇位に接し得るに過ぎないと思つて居たが、大正八年にロシヤオペラが渡來してアイーダ、トラビヤタを始めとして華やかなヴェルディものを中心とした五種の歌劇を上場した。大正十年九月再度渡來した時には十日間マチネーをも併せて十數個の大歌劇を帝國劇場で上場して、而も連日滿員で、殊にカルメン、ミニオン等日本人に名の知れて居るものゝ日には、通路に椅子を並べたり、立つたりして聽くと云ふ盛況で、興行者は此勢に驚いて更に十日間有樂座で再興行をしたと云ふ有樣である。また一度淺草のオペラを覗いて見た事があるが、これも相當にやつて居り、少くとも聽衆は滿員大滿足の樣子である。從來は日本人の音樂會で相當に聽き得るものは、上野の教授を中心としたものゝ他は餘りなかつたが、現在では其の卒業生や雅樂部の連中が大いに活躍して頗る聽くに足る演奏會を屢々開催して居る。然

もそれが何時も盛況を呈して居る。また近來各學校に音樂部が頻りに設けられ、慶應義塾、東京高等工業、九州大學等はかなり古い歴史を持つて居るが、商業大學、外國語學校、中央大學早稲田大學等も亦學生の音學部を設け、京都大學、第一高等學校、及び東京帝國大學も音樂部を設けて、學生が管絃樂團を組織すると云ふ狀態である。之れ等は總て僅に此二三年來に起つた現象であるが、此他に未だ私の知らない方面で同樣の現象が多々あるに相違ない。また最近新聞を見ると二三のものに特に「音樂界」と云ふ一欄が設けてある。一兩年前から「活動寫眞」と云ふ欄が設けられて、而も可なり新聞が之れに力を用ひて居る事を奇異に感じたものであるが、それは私の迂遠のためで、夫れ程に活動寫眞が世人の要求の的になつて居たのである。新聞に近來「音樂界」と云ふ一欄が出來て、毎日西洋音樂に關する催しを報道するやうになつた事は、是れ又何れ程西洋音樂が社會に歡迎されて居るかと云ふ事を最も力強く語るものである。そして數ある音樂會の中には特にショパンの音樂を歷史的に聽くとか、ベートベンの音樂を味ふとか云ふ風に進んだものがあり、又フライシュッツ上場百年紀念祭とか、頗る特殊の意味の音樂會が催される程になつて居る。音樂會が分量的に多くなつた計りでなしに品質的にもよくなり、又漸次分化すると云ふ狀態は明かに我國に於ける西洋音樂の發達を示して居る。

此樣に西洋音樂が急劇に發達するやうになつた原因は、勿論第一には蓄音器の輸入にあるので、西洋の名曲を現代の名家が演奏したものを何回でも繰り返して聽けると云ふ事、又山奥津々浦々までそれが行き渡ると云ふ事は音樂の普及に絕大の效果があつたのである。加ふるに戰爭の御蔭と云つてよからうが、ロシヤ其の他から大演奏家が渡來して、頻りに日本人の耳を驚かし、又音樂學校の卒業生や其の他の方面の人も近來頻りに活躍するやうになつたことは、すべて現在の驚くべき音樂の勃興の原因となつたのである。此勢は日一日と加つて行く事と考へる。

(二) 青年と音樂

老幼男女に拘はらず常に何等かの慰安の欲しいものであるが、音樂は世界到る處其の随一の對象となつて居ると考へる。殊に婦女、青年が之れを求むる傾向が著るしいと思ふ。我國でも近來勃興した西洋音樂は主として青年と婦人の間に愛好されて居るのである。そして青年の方が寧ろ之れに熱中して居る有樣である。日本の音樂は先づ花柳界を中心として發達したものと

二八頁）現在に於ても日本音樂の中で最も普及し一般に[illegible]を中心とした小唄、端唄、浄瑠璃も其の文句自身が花柳界の事若くは少くとも情話を中心とし、演奏の機會も亦[illegible]を手にした席でする事が最も多い。只浄瑠璃には、關西には文樂の如き特に獨立の演奏場もあり、又關東の長唄も近時公開的に演奏される事が増加して來て居るやうであるが、歌詞、曲譜共の物が青年の要求に對して不足な點が多い。青年の要求する音樂の中には、輕快、雄大、悲壯等の感じが要求されるが、之れ等は西洋音樂に求むる外はない。獨逸人、殊に學生や青年が音樂を熱愛する事は周知の事であるが、其の音樂の中には或は愛國の熱情、故郷に對する愛着、戰爭の勇壯、悲慘、友情の發露、過去の回想、自然の讃美、山野跋渉の壯快、曠野彷徨の不安、父母肉親に對する思慕、野人の情調、青春の眼醒め、戀愛の歡喜と苦惱、社交の愉快等頗る種々多樣の區別があつて、種々の場合に、また種々の情緒に適合するやうになつて居る。日本の青年は西洋式の教育を受け、また感情教育も複雜になつて來て居るので、在來の單純な日本音樂、殊に何んとなく卑俗な所のある日本の音樂には滿足し切れなくなつて、滔々として西洋音樂に赴くやうになつた。加之、我國で國民普通教育を普及せしめる手段を執ると同時に、小學兒童に對する音樂の課程としては西洋音樂を取り、[illegible]日本音樂と全く異なる[illegible]西洋音樂に小さい時から[illegible]には、されて居るのであるから、西洋音樂を好むやうになる事は必然である。我國では從來音樂は婦人につきもののやうに考へられて居た。又或る者は花柳界の婦女の弄ぶべきものと考へて居る者もあるやうである。併し西洋音樂は勿論婦人のみの嗜好に適するものではない。否寧ろ男子でなければ之れを正當に理解し又は發表する力が足りないのである。演奏家として安藤夫人が第一位を占めて居られるが、寧ろ夫れは日本丈けの例外で、それは未だ西洋音樂が十分に日本に發達して居ない證據で、當然將來は男子の力に俟たなければ十分の發達をしないものである。現在青年が西洋音樂を愛好するのを見て、一部の人は彼等が勉學を怠つて娛樂に走る傾向と觀る人があるが、さうではないので、青年の要求する一つの大きな、清淨な娛樂が彼等に與へられたがために、翕然として之れに赴くやうになつたので寔に喜ぶべき現象であると思ふ。どうか此傾向を助長して、彼等が益々優れた西洋音樂に接する機會を多く得るやうな施設をする事が肝要であらう。

(三) 家庭と音樂

家庭に慰安がなければ其の殺風景な事は云ふまでもない。食後の談話、かるた遊びなども面白からうが、音樂程美しい樂みはなからう。西洋の家庭では食後一家集つて唄や、ピヤノや、笛を合奏して居る有様を他所目で見れば天國の樂みである。日本の家庭とし此樣な樂みがないではないが、僅かに一部分で、殊に三味線の如きは中流以上の家庭では之れを容れる事を好まない。娘時代に十數年も長唄や、淸元を稽古して來ても、嫁入ると其の儘一度も樂器に手を觸れる事がないと云ふのが多く、姑さんも家庭で唄ふやうな嫁さんは必ず惡口を云ふ。西洋では總體に家庭を愉快にし、陽氣にするため努めて種々の方法を講じるのだが、我國では寧ろ家庭を無趣味、乾燥に維持するやうに努めて居るやうに見受けられる。從つて男は酒盃の巷に走つたり、息子は家を外に飛び歩いたりして團欒の樂みを破る事もあると考へられる。偖、音樂を家庭に入れるとしても、歌詞を如何に變へても長唄、淨瑠璃等は家庭のものにし難い。殊に靑年の樂み、共同の樂みには不適當のやうである。樂器の性質上からどうしても西洋音樂の方が家庭に適合するので、之れなら親子一緒に樂む事も出來る。將來は自然に西洋音樂が我國の家庭に流入するものと考へる。但し家庭に西洋音樂の普及するには矢張り樂器の使用が必要である。それにはピヤノが最も重要な樂器であるが、それが高價のために普及が困難である。之れが三味線や琴と大差のない價格で買へるならば、西洋音樂は只小供が學校で敎る唱歌を家で唄ふ位に止まらず、遙かに早く、廣く、西洋音樂が日本の家庭に普及したに相違ない。ピヤノを地方の家庭でも買ひ得るやうにならなければ、西洋音樂が日本の國民音樂として家庭に用ひられる程にはなりにくいが、併し上流の家庭や、又公開の席に之れが用ひらるゝ事が頗る盛になつた事は明かである。

(四) 東西音樂の比較

西洋音樂と日本音樂の優劣は屢々論ぜらるゝ所だが、大體に於て日本の音樂は、西洋音樂に及ばぬ事は云ふまでもない事である。第一に日本の音樂は主として旋律を味ふので、和聲の美や、變化の妙を味ふ事は出來ぬ。又樂器の點に於て非常な優劣の差がある。樂器として多少の價値を認め得べきものは近世のものでは三味線と尺八位のものである。三味線は音の種類は多いが、あまり美妙な音は出ない。尺八は音色は好いが音の數が少ない。到底西洋の大小の絃樂器や、木管、金屬管樂器の美しい音色や、雄大な音色や、又ピヤノの美妙な音色に比すべくもない。加ふるに各種の樂器を集合調和せしむる點に於て、日本

のでは樂器其の物に餘り價値がない上に、其の數が少いのであるから、到底精緻た音樂、大規模の音樂を奏する事に出來ぬ。此點に於て西洋の管絃樂(オーケストラ)に於ける如き雄大なる發表を味ふ事は出來ぬ。更に我國の音譜表示の方法が不完全であり、寧ろ殆んどないと云つても好い位であるために、あの單純な樂器、單純な旋律を學ぶのにさへも不必要な努力と時間を要する。西洋式に學理的の、又精巧な音譜表示法が缺けて居る事は日本の音樂技術家の力量を簡單な樂器旋律の上にも優秀な力を示す事を困難ならしめて居る。要するに和聲を尊重しない事、樂器の價値の少い事、オーケストラの組織の不完全な事、音譜表示の方法の拙劣な事等が、日本音樂の西洋音樂に及ばぬ所以であらうと思ふ。なほ西洋音樂をやるにしても日本人の體格の矮少な事は特に聲樂の方面に於ては重大な缺陷である。

併しながら日本音樂と雖も勿論捨てたものではないので、殊に樂器よりは寧ろ長唄、清元、其他唄ふ方面に於ては西洋音樂では味ふ事の出來ない美妙な感じが味はれる。西洋音樂の好きな我々でも好い日本音樂を聽けば、エルマンの演奏を聽いたのと殆ど似たやうな滿足が味れる。勿論之れは小供の時から聽き慣れた故で、双方の音樂を初めて聽いた人の耳には勿論西洋音樂の方が感興を惹くに相違ない。併し日本音樂の特長は勿論保存の價値があり、又亡ぼしたくない。過日東京音樂學校で二回邦樂の催しがあつた。一回は雅樂、尺八、能、長唄であり、第二回の時は舞樂、催馬樂、今樣、朗詠、平曲、能と云ふ組合せで、歷史的に邦樂の發達を聽かされたが、之れに依つて大體舞樂の笙雅樂の旋律を基礎として、催馬樂、今樣、朗詠等が發達し、琵琶が輸入されて平曲になると多少の變化を見、結局能の發達を觀たのであるが、大體そこまでは雅樂の旋律が基礎になつて居る。謠と僧侶の誦經の節と似て居るのも當然であらう。三味線が用ひられてから淨瑠璃、長唄等が發達したものであらうが、右二回の邦樂會で受けた感じに依ると舞樂は最も莊重で、自ら宮中の樂であると肯かれた。能樂は沈着、上品で大名の藝術であると感じ、切角の小三郎の長唄が如何にも下品に聽えて何時もの面白さがなく、只町人の藝であると云ふ感じを與へた。日本の音樂は樂器の力よりは寧ろ國民性や、其の時代精神が旋律唄ひ方に現はれて來るために一種の感じを與へて、特に人を引きつける力はあるが、單純に音樂としては矢張り鑑賞の價値少い。謠の如きも能樂を見て初めて或種の價値が現はれるに過ない。長唄は樂器、唄ひ方等最も發達して居るが、それでも只能樂と比べては上品でないと云ふ感じを與へた位で、別に純粹の音樂としての價値を大に認めて從來の日本音樂より優つて居ると

云ふ感じを與へる程でもなかつた。要するに日本の音樂は西洋音樂と全く異つた意味で、雅樂の合奏、能樂、長唄等に莊重、雄大、優美等の趣きがあつて一種の藝術として見ゆるが、西洋音樂の如き樂器を基礎として夫れの複雜な組織によつて大規模の音樂美を發表する力には到底及ばない。

(五) 音樂學校の改良

我國には只一つの官立の音樂學校があるのみで、其の設備も不十分であり、教師の待遇も頗る悪い。又其の經營方針も從來は餘りに保守的であつた。上野の山で春秋二回の演奏を聽く丈けでは僅かに小範圍の、而も同じ人に極くクラシツクな音樂を聽かすに止まつて音樂の普及には効果が薄い。音樂は繪と違つて繰り返し見る事は出來ぬ。一回の演奏限りの効果のものであるから、到る所で演奏をせねば普及せしむる事は出來ぬ。此意味に於て音樂學校の現校長が積極的に上野の山を出て、京阪地方、横濱、仙臺等に上野の樂團を率ゐて出張された事は頗る多とせねばならぬ。教師の薄遇は萬人の認むる所であるが、尚ほ小さい事のやうであるが、分教場で素人を教へる事はいゝが、之れに教授を當らしむる事は藝術家奬勵の道ではない。又民間音樂家の職業の妨げにもなる。分教場を廢止する事は教師の名譽を高め、同時に民間教授者の利益にもなる。

(六) オペラの勃興

私は洋行をする際にオペラの見られる事を一つの樂みとして居たが、初めてそれを見た際には先づ藝術の精華に接した思ひがして最大の歡喜を覺えた。近來我國にもロシヤオペラが二回も渡來して、殊に艶麗なヴエルディーのオペラ其の他を紹介して、我が國民に歌劇に關する知識を供給した事は甚だ著るしいと思ふが、當時の歌劇に對する世人の熱心を見ても既に我國に於てもオペラを組織する時期に達して居るのではあるまいか。曾て音樂學校で三浦環氏が柴田環時代にオペラ、オルフォイスを試演した事があるが、それ以來中絶して居る。之れを再興させてはどうであらうか。併しオペラは俳優的の所作もしなければならぬので、多少音樂學校の直接の任務とも異ふ點もあるが、音樂學校附屬のオペラ研究場を設ける事は最も適當ではないか。或は帝劇が奮發してオペラ歌手を養成するもよからうが、我國では未だ營利業者が獨立してオペラ役者を養成する事は困難であるかも知れぬ。優秀なるオペラ歌手を養成するには音樂學校の施設を俟つのが最も適當であらう。作曲の點に於ては勿論日本人は現在西洋人に比肩する事は出來ぬが、それでも山田

獨作者、其他の作られた曲對は日本人の耳に心地よく響く。又日本語は伊太利、佛蘭西語に劣らず、若くはそれ以上に音樂に適當であるやうに思ふ。先年帝國劇場でトラビヤタを日本語で唄はれたが、日本語は實に耳に心地よく、又日本の女性の聲の優しく美しい事も大いに人の心を惹くに足る。西洋の歌劇を外國語でやると同時に、日本の作曲家が日本の題材に依つて作つた曲を、日本語で日本人が唄ふと云ふ事も遠い將來ではあるまいと思ふし、又それが最も日本人の心に入り易い事と思ふ。

(七) 奏樂堂の建設

音樂の演奏會が東京では日々行はれる程であるが適當の奏樂堂もない。基督教青年會館も借りて居る位である。ロンドンやニューヨークや、パリや、其他ヨーロッパの大都會にあるやうな設備は出來なくとも、近來の音樂熱に顧みて奏樂堂の一つ位はあつてよからう。日本音樂を獨立に演奏する事も在來のやうに寄席に止まらず、劇場で試みられるやうになつたが、西洋音樂は勿論劇場では完全に聽けぬ。特別の奏樂堂を要する。東京大阪の如き大都市に於て一大音樂堂を設ければ、殆ど絕え間なく使用されて市民の滿足する事は此上もなからう。日比谷に行はれる野外演奏の盛況を見ても要求の强さが察しられる。併し或る老博士が音樂のやうな娛樂の事情には、娛樂をする人の手で作るべきだと云はれた。即ち今の青年が自己の資力が出來た上で之れが建設すべきであると云ふ意味である。之れはたしかに最も道理ある言葉である。併しながら現在の社會に活動する人と青年との間に全く趣味の相違があり、而も其青年の趣味は良い趣味であるとすれば、之れを物質的に扶ける事は又適當な事ではあるまいか。奏樂堂建設の事業も、都市の事業として、若くは特志家の寄附に俟つに非れば實現し難い。少くとも音樂學校の講堂を改造する如きは政府としても直ちに着手してもいゝではないか。

(八) 貴族と音樂

藝術は東西共に貴族の奬勵に依つて發達する事が多い。オペラの如きは歐洲の宮中の後援に依りて發達したものである。然るに我國では、劇に對しては、宮中では寧ろ輕蔑の態度をとつて居られるやうであるが、將來は斯くの如き考へも變化するかも知れず、殊にオペラの如きは少くとも、我國の貴族、富豪が後援するに非れば發達し難いと思ふ。貴族中金の用途に困る人もあるやうだが、音樂堂の建設、オペラの奬勵等に力を盡しては如何。之れに依つて國民の藝術的慾望を滿足せしむる事は尠少であるまい。

人及び人の力

醫學博士 永井潜

一

生命は最も偉大なる謎であり、生活體は確かに宇宙の驚異である。土に落つる一粒の種子、たとひ夫れは眞珠の光なく、寶玉の輝きなしと雖も、靜に之を觀ずる時、吾等は其の物に於て、眞珠よりも、寶玉よりも、より尊くより驚くべき或るものゝ存在を認めずには居られない。日濕め露潤ほす時、愛らしき双葉が芽さす。絹の如き白ら根が下ろされる。延びる。太とる。眼も眩めく計り美はしき花を開く。枝もたわゝに實を結ぶ。彼は實に命なき土より命ある物を造る。終に枯死する。さりながら、生殖によつて常に新たなる第二の我を生じて若返へることによりて、永遠に活き延びる。一粒の種子、而して其の中に長しへの命の力を秘めて居るのである。就中あらゆる生物の中、最も進化せる所の人間に於て、殊に其感を深くせざるを得ないのである。希臘の大哲學者ソクラテスは、常に『自分自らを知れよ』と云ひて教訓して居た。實に自分自らを知ること、人間が人間自身を徹底的に知る事が即ち人生の最後の目的であらうと信ずるのである。世の中に不思議の物は尠なくないが人間位不思議な、人間位大きく、人間位尊い物は外にないのである。其意味に於て自分自らを知る事が、人間をして人間たらしむる最も大切なる所以でなければならぬと信ずるのである。獨逸の文豪シルラーは、彼の不朽の傑作なる「鐘の歌」Das Lied von der Glocke の中に、

Den schlechten Mann muss man Verachten.
Der nie bedacht, was er Vollbringt.

即ち『自分がどう云ふ事を成就し能ふかと云ふ事を知らない人は詰らない人である、左樣な人は輕蔑されなければならぬ』と云ふ事を叙べて居る。是亦如何に人間は尊いものであるか、如何に十分自重しなければならぬかと云ふ事を示した言葉に外ならぬのである。若し世の中に「スフィンクス」なるものがあり

其スフィンクスが、いかなる謎を與へたとしたならば、其謎も大なる謎に外ではない、夫れは人間と云ふ謎でなければならぬと私は信ずるのである。

二

今此偉大なる謎、即ち人間を措く物として、物質の研究の立場からして考へて見る時に、如何なることが先づ吾等の眼に映ずるであらうか、人間をして人間たらしむる肉體的の特徴は如何なる點に於て現れて居るであらうかと云ふに、先づ第一に人間と動物との體制の相違は、人が直立歩行をして居ると云ふことから惹き起されて居る，人間に比較的緣の近い動物たる猿、又た猿の中でも殊に人間に緣の近い所の類人猿（猩々）の骨骼を取て、之を人間の骨骼に比較して見ると、どの點が違ふか、と云ふに、第一には頭骨に於て見らるゝ差別である。猿或は猩々等の頭骨に比べると人間の頭骨は非常に大きいことである。此の大きな頭を支へて人間の身體が能く倒れないのは、頭を支へる所の身體の柱即ち脊柱が人間では正しく直立して居るからである。即ち人間の頭骨がよく發達し隨つて又腦髓が能く發達し得た事の大切な理由は、人間が直立と云ふ事の習性を始めた結果であると言はねばならぬのである、更に又た此直立と云ふ事に依つて言ふまでもなく足二本にて歩行して居るに反し、一に類人猿に於ては、時々直立するも僅かに見る短かい時間であつて、大部分の時間は矢張り他の大多數の動物と同じく體は水平に保たれて居るのである、隨つてまた手と足との機能的分業が起らず手と足との骨骼を比べて見るに殆ど等しいのである。其等しい事の能く見られるのは、足の親指と、手の親指とが殆んど同様であることとである。然るに人間に於ては、足の親指が他の小指に比べて非常に能く發達して居て、手の親指と違ふが他の指よりも短いに反して足の親指は其の長さが殆ど他の指と同じ位になつて居る。且つ又身體を支ふべき脚の骨が手に比べると割合に大きく、強く出來て居る。然るに猿或は類人猿に於ては手と脚とでは殆ど其骨骼は變りない。加之往々にして手が脚よりも割合に長く、且つ大きい骨骼を備へて居るやうな場合も見られるのである。之に反して人間に於ては手の骨骼は細く、輕く出來て居て、手の運動の輕快自由が與へられて居る。而して此れ全く直立歩行の賜である。

更に人と猿類との頭骨を取つて比較して見ると、非常な相違がある、即ち腦髓を入れて居る頭蓋部が、下等な猿では非常に小さく、之に對して顏面部は割合に大きい。然るに人間では頭骨が全體として大きくなつて居る上に、腦髓を入れて居る頭蓋

部が非常に大きくて、之に比して顔面部は割合に小さい。此のことは子供に於て特に能く現れて居る。其の他頭骨に就いて尚ほ一二の特徴を擧げて見ると眉弓即ち眼窩の上縁をなせる骨の突起が、猿及び猩々類に於ては非常に著しく目立つて居るが、人間に於てはそれが大變に少なくなつて居る。或は又上顎骨が前に出て居る狀態即ち口吻突出が、猿、類人猿、人間と云ふ順序で段々に少なくなつて居る、即ち口吻、突出は、一般に下等動物より高等動物になる程少なくなつて居るのである。又下顎骨の有樣を見ると、猿に於ては勿論の事、猩々に於ても殆ど頤と云ふべきものがない。然るに人間になると初めて頤部と云ふものが發達して來る、而も此の頤も亦高等な人種と下等な人種とを比較して見ると、其の發達の程度に差があるのである。先づ骨骼に於ての人間の持色の大體は右に述べた通である。

三

已述の如く人間では頭骨就中其の頭蓋部が能く發達して居ると云ふ事は、腦髓が能く發達して居ると云ふ事を意味するのである。而して此腦髓が能く發達し來つたと云ふことの一因は既に述べた如く、直立步行と云ふ習性を人間が始めた結果として能く重い頭腦をも擔ふことが出來るやうになつたことである。一面には又直立步行をすると云ふ事が見ること聽くことと何れも廣く大きくならしめ人間が外界に對する關係を一變せしめたことをも考へねばならぬ。體を水平に支へつゝある動物では其眼は專ら地上に注がれて居るだけであり、隨つて其の眼界は極めて限局されて居るに反して、人間は直立步行に依つて著しく其眼界を擴める事が出來て、色々刺激を餘程廣く又強く受入れる事が出來る。或は又危害が迫つて來た場合、其危害を早く覺つて之に對して相當の處置をすると云ふ事も出來る。色々な習性の上に大切なる影響を直立步行と云ふ事が及したと云ふことを考へなければならぬのである。それから又腦髓が能く發達し來つたと云ふ事と關聯しては、人間の身體に於て毛が少なくなつて來たと云ふ事を思はなければならぬ。人間と動物との骨骼の相違は既に申述べたる事であるが、大體から見て違ふ事は、動物に於ては皮膚に毛が生えて居る。然るに人間には或る限られたる場所を除く外、毛は退化して居る。此皮膚に毛が少なくなつて、さうして所謂小さな細かい毛しかない、此小さい、細かい毛に依つて、人間は動物に比べると、餘程皮膚の感じが良くなつて居る。さうして外界からして溫寒觸痛に關する刺激を受け入れて、敏感になつた皮膚によつて之を感覺する。而して其の感覺した刺激は、悉く之を腦髓によつて處置しなければなら

去、斯くて頭蓋の發達に大に顯著ならざるを得なかつたのである。

一體直立歩行と云ふ事の人間に特有の習性を、唯だ物理的の力の發現と云ふ立場から考へて見たならば、是の直立歩行は不安定の狀態である。何故かならば此の際身體を支へて居る支撐面は極めて狹く限られた大さである、即ち僅かに双の足蹠を以て取圍まれたる面である、而して[illegible]の股關節を結び付けた線の稍々上方で、割合に高所にある、此に非常に重い頭が上方に位して居るからである。隨つて物理學の定則からすれば人體は恰も圓錐體を倒にして居る樣なもので頗る倒れ易い。又人間の身體を動物と比べて見るに、或は敵を嚙むに必要なる鋭い牙とか、或は敵を引掻く所の武器である强い

	體重瓦	腦重瓦	腦重ト體重トノ比例
大鯨	7400000 0	700	1:10571.
小鯨	10000000	2511	1: .4 0.
イルカ	538000	512	1: 105.
印度象	3018000	5412	1: 560.
獅子	1195000	219	1: 516.
パンサー	275000	164	1: 168.
亞細亞產小虎猫	12350	23.6	1: 56.
オラングダン(老牡)	735000	400	1: 138.
同(若獸)	18535	315.5	1: 58.
シンパンジー	210000	345	1: 61.
バビアン	95000	1 0	1: 73.
ギボン	120000	164.5	1: 74.
セルコピテクス	80000	117 0	1: 69.
アテレス	18 50	126.0	1: 15.
セブス	12900	69.5	1: 18.5
イヌサル	3950	23.4	1: 17.
男	632000	1431.0	1: 46.
女	548000	1221 0	1: 45.

爪であるとか、さう云ふものが悉く退化し來たつのであるから、單に物理的の力と云ふ上から言へば、人體は寧ろ他の動物よりも餘程劣つて居る點が多いのである。併ながら人間に於ては其の物質的肉體的の意味に於ける力が退化した代りに、精神的機能の坐位たる腦髓と云ふものは非常に發達を致したのである。是が即ち人間をして人間たらしむる所以の最も大切な點である。

腦髓の發達は之を作用の上から云ふならば、勿論精神の發達と云ふ事にならなければならぬ。今此腦髓が人間に於て比較解剖學上、他の動物に比べてどれだけ優れて居るかと云ふ事を二三學術的に述べて見やう。先づ前の表に示してあるやうに、

先づ腦髓の絕對の重さを見ると、鯨の如きは勿論非常に身體が大きく體重も大である。隨つて七千瓦と云ふやうに非常に重い腦髓を持つて居るのである。象の如きも體が大いから隨つて五千四百四十二瓦と云ふやうな大きな腦髓を持つて居るのである。然るに人間の腦重は男の平均が千四百三十一瓦、女の平均が千二百二十四瓦であつて、鯨とか象等の腦重に比べると遙に劣つて居る。

併ながら今腦重の一に對して其體重はどうかと割り宛て見ると、鯨の如きは腦髓の重さ一に對して體重は一萬五百七十一と云ふやうになつて居る。換言すれば體重の割合には腦重は極めて輕いものであると云ふ事が分る、象の如きも腦重一に對する體重は五百六十となつて居る。然るに人間はどうかと云ふに、腦重一に對して體重の割合は僅々四十五乃至四十六で、身體の重さの割合には腦髓の重さが餘程重いものである。即ち人間では體重の割合から言へば腦髓が鯨や象等よりも比較にならない程大きいものであると云ふ事が分る。

然らば其意味に於て、人間は有らゆる動物の中で、體重に比較して一番重い腦髓を持つて居ると言ひ得るかと云ふと、さう簡單には往かないのである。何故かと云へば、猿の下等な種類アテレス。セブス。キヌザルの如きものでは腦重一に對して體重は十五或は十八・五乃至は十七と云ふやうになつて居る。或はパンサーの如きものでも腦重一に對して體重は五十六となつて其の關係が餘程人間に近いものも見られるのである。是は一體どう云ふ譯であるかと云ふと、先づ同じ種類のものに於て、小さいものと大きい動物に就て同じ樣な比較を致して見れば、小さいもの程絕對の腦重と云ふものは輕いのであるが、併しながら之を體重に割當てて見ると、割合に大きいものと云ふ事になつて居る。例へば同じオラングタングであつても、老牡は腦重は四百瓦 若い獸の腦重は三百十五瓦であつて、絕對の

重さから云へば、身體大きな動物の腦重が重いのであるが、體重に割當てゝ見ると甚しい相違が起つて來る。即ち腦重大きい方は一に對して體重は百八十三であるが、小さい方は一に對して五十八と云ふやうになつて居る。或は猫の類に就て考へて見ましても、獅子、パンサー、それから小猫虎を比較して見ると一番小さい小猫虎では、腦重一に對して體重の割合は五十六で餘程有利になつて居て、人間の一對四十六に餘程近よつて居る。然るに大きい獅子の如きは腦重一に對して五百四十六瓦の體重があると云ふやうな關係になつて居る。斯く考へて見ると畢竟比較的の値に於て人間が最も優秀なる位地を贏ち得ないと云ふ事の理由は、人間は割合に身體が大きいと云ふ事でなければならぬ。一體身體が小さい者は、身體の表面は割合に大きなものである。と云ふのは物理學の法則からしても考へられる如く當は三乘の割合で增して行くけれども、表面は二乘の割合でしか增して行かないからである。隨て物が大きくなればなる程、それに正比例しては表面は增して呉れない、それであるから、大きな物程、比較的には表面は狹いことになる。そこで小さい動物程割合に廣い體表面を持つて居る。玆に於てか、例へば體溫の關係から云つても、子供は大人に比べると、身體が能く冷える。常に溫めてやらなければならぬ、殊に小さい子供に於ては寧ろ多いのである。故に子供は大人よりも早く冷えに障る。さう云ふ事は總て熱と表面積との關係から來て居るのであつて、熱の割合には表面が廣いから子供は冷え易いものであり隨つてそれを冷えないやうにするには、子供の體内では割合に餘計の物質を消費燃燒して多量の熱を作らなければならぬ。隨つて絶對の量から云ふと、子供は新陳代謝の狀態は大人よりも少ないのは申すまでもないが、右述べたやうな理由から、子供は大人よりも體重の割合には餘計の食餌を攝らなければならぬ、又子供は精分を餘計に費して、餘計の熱を作つて居ると云ふ關係にある。

斯樣な譯から、腦髓が外界と交涉して、外界の刺激を受け入れて之を適當に處置して行くと云ふ場合に於ても、矢張り假りに同じ種類の動物であるとしたならば、體重の小さいものに於ては、大きいものよりも比較的大きい腦重を示すことにならなければならぬのである。此點に於て人間の體重は大きいから其の絶對の腦重も非常に大きな動物たる鯨や象を除く外は、殆ど總ての動物の上に出て居るが、腦重體重の比較價からすると小動物中には人間よりも遙かに、良い價を示すやうなものが有り得るのである。

	K	$(\sqrt[3]{K})^2$	H	$H:(\sqrt[3]{K})^2$	H:K
	體重 瓩	體表面積比數	腦重 瓦	單位體表積ニ對スル腦重	體重一瓩ニ對スル腦重
鯉	0.8	0.86	0.93	1.1	1.1
蛙	0.038	0.11	0.095	0.9	2.5
鴕	34.8	10.66	29.0	2.7	0.8
家鶏	1.516	1.32	3.4	2.6	2.2
鴨	1.474	1.29	4.65	3.6	3.1
鳩	0.275	0.42	1.9	4.5	6.9
雀	0.025	0.086	0.83	9.7	33.0
鯨	62250.	1571.	219.	1.6	0.04
小鼠	0.02	0.074	0.4	5.4	20.0
羊	47.	13.4	130.	9.7	2.7
馬	277.7	42.6	520.	12.2	1.9
象	2045.7	161.3	4600.	28.9	2.3
猫	4.1	2.59	32.	12.3	8.0
犬	25.	8.5	100.	11.9	4.0
ブルアツフエ	3.43	2.27	47.6	21.0	14.0
マカツク	7.03	3.69	80.5	21.9	11.4
オランゲタン	53.6	14.2	400.	28.2	7.5
ゴリラ	90.5	20.2	425.	21.0	4.7
人	57.4	14.9	1405.	94.0	24.4

ここで今體重が[illegible]に對して[illegible]して見るとどうなるかが興味ある比較研究である。次の表は最近獨逸のヘレーと云ふ人が右の比較研究して得た所の結果である。

一般に動物に於ては、其體重の立方根を二乘して得た數が丁度體表面積に比例すると云ふ事を發見した。そこで先づ體重を度り、體重から右の計算によつて其體表面積の比例數を算出し、それから腦重を測り、次に腦重と體表面積との割合を比較したのである。即ち單位體表面積に對してどれだけの腦重を持つて居るかと云ふ事を調べて見たのである、最後の欄には普通に行はれ來た樣に、單位體重即ち體重一瓩に對して腦重が幾らあるかと云ふ事を見た結果が擧げられて居る。

そこで其仕方をやつた結果はどうであるかと云ふに、表に示す如く、鯉に於ては單位體表面積に對する腦重は僅かに一、一である、蛙の如き〇、九九、鴻は二、七、鷄は二、六と云ふ割合になつて居て、一番最後に人間はどうかと云ふと、九四、三と云ふ最も高い値を示して居るのである。斯く單位體表面積に對する腦重の割合では人間は群を拔いて居るのである。類人猿のゴリラの如きは二一、オラングタングは二八、並通の猿では二一、犬は一一、猫は一二、象は二八、となつて居る。即ち象は比較的知慧のある動物であることが窺はれる。從來までの遣方の如く[illegible]ば雀の如きに、體重一瓩に對して腦重[illegible]瓦と云ふ[illegible]示して、人間よりも優れて居なければならなくなる。前述の意に、「彼は雀の腦を持つて居る」と云ふ事は、輕蔑の意味であるが、若し斯う云ふ比較を以て正しいものとしたならば、彼は雀の腦を持つて居ると云ふ事は餘程尊敬した意味にならなければならぬ。何んとなれば人間の腦重は體重一瓩に對して二四、四瓦しかないのであるのに、雀に於ては夫れが三二瓦になつて居るからである。然るに今申した體表面積の關係を顧慮して、單位體表面積に對する腦重を求めて見ると、雀は人間に比べて僅々十分の一である。反對に云へば人間は雀に比較して十倍する大きな腦髓を持つて居ると云ふ事にならなければならぬのである。斯樣にしてヘレーと云ふ人は此の體表面積と腦重とを比較する方法が一番正確であると主張して居るのである。

是の點は矢張り人體の一般新陳代謝の値を論ずる上に於ても非常に必要な事であつて、新陳代謝の有樣を單位の體重に對して比較するか、或は單位の體表面積に對して比較するかと云ふ事は頗る重要なる問題となつて居るのである。即ち若し單位の體重に對して測つて見ると、已述の如く子供の方が大人よりも新陳代謝が旺盛であると云ふ事になる。或は又雀の如

きものであると、酸素を取り炭酸を出す量の如きも、殆んど人間の二十何倍と云ふ値が得られるのである。之れに反して若し單位の體表面積例へば體表面の一立方米に對しての新陳代謝の値如何と云ふ事を比較して見ると、子供でも大人でも、人間である以上は同じ様な値が見られるのである。即ち如何に一般に生活體の機能を比較する場合に於て體表面積が體重なる意義を有するかを知れることが出來る。隨つて腦髓の發達如何と云ふ事を斷定する上に於てもヘレー氏の法は最も合理的の遣方であると言はなければならぬ。そこで極く大體の話ではあるが、比較解剖學的の立場から人間の腦髓が拔群の進歩を示せるものであることを的確に斷定し得た譯である。

四

更に又人間の腦髓が非常に進歩して居ると云ふ事の第二の證據を舉げて見るならば、唯だ腦重の比較的研究であるとか云ふ單なる量的の關係のみでなくして質的の關係を顧慮して見ると今下級の動物より高級の動物に遡つて魚類、爬蟲類、鳥類、哺乳類特に哺乳動物の中でも非常に進化せる類人猿と云ふ順序に其の腦髓を比較して見ると、魚類、或は爬蟲類の如きものに於ては腦髓全體が細長く、管のやうな排列を取つて居るのであるが段々高等のものになると、腦髓が全體として比較的丸い形のものになつて居る。斯く下級の動物の腦髓が細長いと云ふことは、元來腦髓は發生學上髓管と云ふ管から發達し來つたるものであつて、隨つて其發達の程度が未だ極めて幼稚なものでは管の原形が其儘維持されて居るからである。即ち發生時に髓管の先端が殊に發達して腦髓となり、後との方が脊髓と云ふ管の狀態で殘つて居るのである。そこで、此脊髓の先きが發達して出來た腦髓の發達が幼稚であると腦髓の各部分が前後に排列されて割合に小さい、殊に前端にある前腦或は大腦と唱へられる部分が、魚の如きものに於ては非常に發達が悪い、又爬蟲類に於てもまた非常に發達が悪いのである。段々高等なるものになるに伴れて、腦髓の腦髓とも言ふべき一番前にある大腦の發達が餘程良くなつて來る。さうしてそれが段々腦髓の他の部分を蔽つてしまふ。是れ即ち階級が上になる程腦髓をして圓くならしむる所以である。哺乳動物の中でも比較的發達の悪い兎とか、犬等に於ては、小腦はまだ大腦によつて蔽はれて居ない、で大腦は前にあり小腦は後にあるのであるが、類人猿になると小腦も總て大腦の爲に蔽ひ隱されてしまふ様になる。

それから又圓くなつて居る大腦の表面を見ると、兎よりも、犬、犬よりも猩々と云ふやうに、段々と襞が多くなつて來る。

皆で人間の腦髓はどうかと云ふと、大腦の發達が甚しくなつて、全然他の腦髓を凌駕し被覆して他の腦髓は殆ど見えない樣になり隨つて小腦も悉く大腦の爲に隱されて仕舞ふ樣になつて來る。斯く人間の腦髓は比較的に大きい、重いと云ふ計りでなしに、形の上からも他動物の腦髓に見るべからざる特色を具へて居るのである。

而して大腦の表面にある襞を見ると他の動物の大腦に於けるよりも遙かに餘計にあるのである。元來大腦に於ては其の表層に、精神なり其他の働をする神經細胞が列んで居るのであつて、隨つて其の表面に襞が餘計出來ると云ふ事は、大切なる其の表層の面積を可及的廣くして、大腦の作用を完全ならしむる爲に外ならぬ。

五

そこで此最後の腦髓の髓腦とも言ふべき大腦に於て、果して如何なる働が行はれて居るかと云ふに知識の入り來る門戸たる眼、鼻、舌、皮膚等にある種々なる感覺器から受容せられた刺戟が興奮となつて、最後に到達する所が即ち大腦である。そこで夫等の感覺を起す中樞と云ふものが腦髓の一定の場所に出來上るのである。即ち此の中央政府に各地から報告が集つて來るのである。斯くて大腦の表面の或部には視覺の中樞、他の場所は聽覺の中樞と云ふ風に、各種の感覺中樞が局在することになる。是れ等感覺の諸中樞の外、自己の意志に隨つて自在に筋肉を働かせて、任意の運動を行ふ働をする運動中樞なるものが出來る。而して人間の大腦の如き高等なる進化を遂げたるものでは、舌の運動とか、眼の運動とか、一々の指の運動とか、夫々細かく分擔せる運動中樞が見られるのである。

更に又、人間の大腦に於ては、他の動物に見るべからざる言語の中樞なるものが發達して來る、夫れは第一に言語を理解する働をなす言語の知覺中樞と、第二には言語を發表する働を行ふ言語の運動中樞との二樣から成り立つて居る。言語發達の順序を見ると子供に於て經驗する如く、先づ第一に他人の言葉を理解する事が出來る樣になり、然る後に始めて自分が言語を發表することが出來る樣になるのである。隨て言語知覺中樞が先づ出來上り、次で言語の運動中樞が發達する。所で他の中樞は大腦の左右の各半球に相稱的に存在して居るけれども、獨り言語の中樞に至りては唯だ一方の大腦半球にしかない。而かもどちらの一半球にあるかと云ふと、右利の人即ち大多數の人に於ては左の大腦半球に發達して來る。併ながら左利きの人では夫れが右の大腦半球に發達して居る。今其の理由を尋ねるに、元

來左の大腦半球が夫れと反對側、卽ち右の半身を支配し、之に反して右大腦半球は、左の半身を主宰して居るのである、隨つて右の身體が能く發達して居る右利の人では、左の大腦半球が能く發達し左利の人では右半球がよく發達して居るのである。卽ち能く發達して居る方の半球に每に言語中樞が發達して來るのである。若し何かの病氣の爲に言語の運動中樞が冒されると人の言語をよく理解し得るにも關らず言語を發表することが出來ない。又た言語の知覺中樞が壞されると他の言語を理解することが出來なくなつて、恰も知らぬ他國語を聽く時の樣にサッパリ意味が通ぜなくなる。又た言語の中樞と聯關して讀書の中樞、書字の中樞が人間の大腦に於ては發達し來る。

所で唯今御話しました運動、知覺に直接關係のある中樞は、大腦表面の全體を占めて居るものではない。是等の諸中樞以外にまだ餘程空地がある、然らば此空地は如何なる働をして居るのであるか、是れが非常に大切な問題である。

六

抑々大腦に於ては各種の感覺を受容し或は運動を命令すると云ふ事の外に、感覺や運動の諸中樞の上に立つて、之を聯合統一して精神的機能を行ふべきものがなければならぬ。而して此の役目をなすのが卽ち此空地である。今是等の空地になつて居る部分を解剖學的組織學的に調べを見ると、大腦表面の他の諸の場所と長短無數の纖維に依つて密接に結び附けられて居る。斯くて或は視覺或は聽覺或は嗅覺等によつて得たられる各種の印象を相互に結び着けて、統一的概念を形ち作る事が出來る樣になつて居る。隨つて其空地を總稱して聯想中樞と云ふのである。此聯想の中樞は唯だの運動、唯だの感覺作用の上に立つて、夫等のものによりて得た印象を更に結着けて、抽象的概念を作り、以て精神生活を行ふものである。此の聯想中樞を其の場所に隨つて前、中、後の三つに區別するのである。

就中前頭葉に位して居る所の前聯想中樞は「我」なる觀念、卽ち澤山の複雜せる印象を「我」なる、統一せる系統にまで纏める作用に非常に深い關係を持つて居るのである。

そこで此の精神生活と直接の關係を保てる聯想中樞の發達を見ると、人間が動物に比して群を拔いて居るのである。人間の腦髓は已述の如く比較的に重いとか大腦が尤も大いとか言ふ計でなく、唯だ運動とか感覺とか云ふ單純な働の上に立つて、今一層高尙なる精神の働きをすると云ふ聯想中樞が殊によく發達して居る。今人間の聯想中樞を見ると、大腦の全表面積の殆んど三分の二を占めて居る。單に前頭葉にある前聯想中樞のみを

調つて見ても、人間では全大腦表面積の一九・八%を占め、猩々の如きは一六・九%、これからシンパンジーの如きは一一・三%位である。斯く同じ猩々類であつてもシンパンジーの方は少ない、普通の猿になると僅かに一〇・一%、犬は六・九%、猫は二・二%である。此の點から見ても、人間の腦髓は、啻に物質的に、啻に運動し、啻に感覺すると云ふものでなくして、今一層それに優れて高尚なる、一段上に立つた精神的官能に關して十分なる働をするものであると云ふ事が能く分るのである。

七

それから今一つ此處に申述べなければならぬ事は、腦髓の發達の狀態である。人間の初生兒の腦髓を見ると、割合に重いのである。即ち夫れは平均三百五十から三百七十瓦位を持つて居て體重の約五分の一乃至八分の一となつて居る、隨つて赤ン坊では體の中頭が一番大きくして丁度體の全體を見ると楔のやうなものになつて居る。そこで出產の時には頭が出さへすれば、直ぐに後は出るのである。斯く初生兒に於ては、腦重は體重の五分の一乃至八分の一と云ふやうな割合に頗る重いのであるが、大人になると前に申したやうに、腦重は體重の四十五乃至四十六分の一となつて初生兒の割合に較べて[illegible]のである。隨て唯だ重さと云ふ事だけから考へて見たならば、子供の方が却て遙かに智慧があるかの如くに感ぜられるのであるが、併ながら事實は決してさうではない。是はどう云ふ譯であるかと云ふと、茲にも亦吾々が、如何に已述の宗地たる前中後の聯想中樞が非常に大切なるものであるかを信ぜざるを得ないやうな結論に到達するのである。獨逸の學者のフレキシッヒと云ふ人が研究した結果に依ると、初生兒の腦髓は、成程體重の割合には非常に重い大きいものであるけれども、併ながらまだ此の大切な聯想中樞が役に立つやうな狀態に出來上つて居ないのである。然らば其の事はどうして分るのであるかと云ふと、此大腦の表面の或る部分と他の部分とを結着けて、其間に密接なる交渉を營んで居る聯想性神經纖維が、子供の生れた時、或は極めて幼稚なる年齡期に於ては、まだ十分出來上つてゐないことから分かるのである。是れは一定の染方をして見て實證された。元來神經纖維の周圍にはそれを取圍んだ髓鞘と云ふ膜がある。其の髓鞘が出來上らなければ神經纖維は役に立つ狀態になつて居ないのであるが、一定の染色法によつて聯想中樞の間を結び付けて居る神經纖維を處置して見ると、其の髓鞘は、初生兒の時にはまだ出來て居ない、生後既に日時が增すに隨つて該神經纖

維が完成して初めて此の聯想作用が行はれるやうになるのである。即ち電線は已に敷設されあるけれども、未だそれに通信をやるべきだけの準備が出來て居ないと云ふ狀態が初生兒の大腦聯想中樞に於て解剖學的に證明されて來たのである。即ち初生兒の腦の如く如何に腦重は比較的に重くても、此聯想中樞が十分に働きをなし得ないなれば、その精神作用の器官としての價値は尠ないと云ふ事が證明されたのである。

又下等動物と人間との腦髓の狀態を比較して見ると、下等動物に於ては、腦髓の發達は比較的早く出來上つて仕舞ふのである。そうしてそれから以後は殆んど腦重が増加しないのである然るに人間に於ては、其關係が餘程異なつて居て腦髓が段々後年になるまでも發達すると云ふ事の證據が擧げられて居るのである。例へば今ま類人猿と人間とを比較して見ると、人間竝びにオヲングタング、シンパンジーの如きものに於ても、二歳乃至四歳の若い時代に於ては腦重一に對する體重の割合は殆ど差別がないのである。然るに年齡を重ねた者に於て比較して見ると非常に相違がある。即ち人間は二歳乃至四歳に於ては腦重一に對して體重は一八、一一六と云ふ割合であるが、同年齡のオヲングタンに於ても、腦重一に對して體重は二一・三の割合であり、シンパンゼーでは二五—二四であつて、さう大した違ひはない。然るに成年に達すると人間と猩々との差が著しくなつて來る。即ち人間は腦重一に對する體重の比が四〇—三五であるのにオラングタングでは一八三となりシンパンゼーでは七五になる。是は腦髓の發達がオラングタンの如きものでは若い時に停止して早く已に停止してしまふ、隨つて體重は段々増すけれども腦重はそれに伴つて増さない結果、年を取ると共割合が惡くなる。然るに人間に於ては年を取ると同時に體重が増し、體重の増すと共に腦重の割合も増して行くから、斯樣な結果になつて來るのである。即ち人間に於ては腦髓が十八歳乃至二十歳迄は重くなると云ふ事は事實見られて居るのである。斯樣にして人間の特色として、先づ身體の上から見て、動物と隔絕し優超して居る點は何れの方面から考察しても確かに腦髓の良好なる發達であり、而して又腦髓の中でも、特に精神機能を營む部分即ち聯想中樞が非常に大切なる關係を持つて居る事が分るのである。

八

以上は專ら人間と動物との身體的の相違に就て述べたのであるが、轉じて機能的方面から申述べて見たいと思ふ。人間と動物との機能的差別ほ一言にして盡せば、人間と云ふものは文化（クルツール）を持つて居るが、然るに動物は自然（ナツール）の狀態であると言ふべきである。抑も文化と云ふものは何ぞやと云ふに人間が自分の意思

によつて自然を左右するの謂である。動物は自然の儘に甘んじて居る。然るに人間は自然の儘に滿足しないで、其上に自己の意思を加へんとする。是れが人間の人間たる所以である。例へば自然は斧鉞嘗て入らざる大森林の如きものである。文化は例へば一木一石悉く人間の趣味を現はせる庭園の如きものである、磊々たる一塊の大理石は自然であるが、文化は其大理石に藝術家が思ふ儘に手を加へて造り出せる立派な彫刻物である。即ち自然の儘を以て足れりとせず自然を支配し、自然を利用しやうとして玆に文化が始まる。是れが人間の尊い點である。

抑自然の出來事は全く定り切つた動かす事の出來ない、型に嵌つた所の規則に依つて支配されるものである。併ながら文化は左樣でない。文化は其處に人間の自由の意志が働き、人間が或る目的を遂ふて自然の上に彼の意思を實現して行くのである。自然界は一大機械であつて、何處迄も自然科學の嚴格なる法則を以て之を律することが出來るけれども、文化は決して爾かく簡單なものではない。文化目的に依つて成立つものであるが、自然は唯だ法則に隨つて動いて居るものである。此點に於て自然科學と精神科學との取扱ふ點が劃然區別されて居るのである。勿論人間は矢張り一種の自然物であつて、人を一つの自然界に於ける現象として、取扱ふ場合には矢張り人も一個の生物である、現象界に適用なる同一の物質、同一の力、同一の法則に依つて左右されて居るのであるけれども、併ながら人間を文化を作る所のものとして、目的の上から價値の上から觀察するに當つては、玆に全然他の自然物と區別して考へなければならぬ事になつて來る。

斯く文化を作る事は人間の仕事であり、文化的生活は人間の努力の結晶である。併ながら其人間の努力、人間の仕事には、種々なる階梯がある。即ち未開人に於ては此努力は頗る微弱で所謂人間固有の文化なるものも未だ〳〵自然其物に餘程近いのである。然るに人間の此努力が漸次に力強くなり、自然を超越して彼の力を自然の上に實現することが著しくなるに作れて、文化が益々高くなつて行くのである。即ち未開人或は自然人なるものに於て、文化が遲々として進まないのは此努力が足りないからである、勿論未開人とても人間である以上、斯の努力が全くない譯ではない。併しながら此努力は、未開人に於ては、唯單に自己を保續して行くこと、就中自分の生命を繋いで行く上に於て直接最も必要なる食物を探し求める事に限られて居るのである。隨つて彼等の精神生活には唯自己と云ふ考、唯だ現在と云ふ考しかない。未來もなければ將た過去もないのである。意識せられたる慾望としては飢餓即ち自己生存があり、意識

せられたる鐵壁としては繁殖即ち種族保續あるのみで、殆んど動物と選ぶ所はない。現代の野蠻人を見ても其生活は全然利己主義である。自己の生命を保續して行く爲には他人の肉を喰つても平然として居る。又年取つた親を埋めても何等それを罪惡と思つて居ない、全く未來がない彼等には又、何等眞の宗教もない。此明日なき人間が現代地球上總人口の$\frac{1}{7}$を占めて居る。

然り而して人間が此狀態を脱却して、漸次に文化に進むのは、決して外からして餘儀なくされるのではない、實に人間本然の要求、即ち人間の心の中にある止むに止まれない衝動が之れに鞭を與へて居るのである、フイヒテ曰く Niemand wird kultiviert, sondern jeder hat sich selbst kultiviert.『誰しも文化に導かれるのではない、自分自身が文化を作るのである』即ち天は自から助くる者を助くるのである。而かも斯く人間が止むに止まれぬ内的衝動に依りて文化を作り出す事は、抑何が其の根柢を爲すのであるかと云ふと、即ち人間の優越せる精神作用即ち已述の如く人間に於て腦髓が特別の發達を遂げ、外に知識構成の直接裝置たる聯想中樞が特別に群を拔いたる發達を遂げた結果として、雜駁なる自然現象に對して抽象的概念を造り混亂より統一に、偶然より意思の自在に移り行とが其の根柢であると信ずるのである。それが抑人間と動物との間に嚴格なる區別を起せし大原因であると考へるのである。而して又此の事は科學の根柢であり、哲學の根柢であり、宗教の根柢であり、道德の根柢であると信ずるのである。

雜駁より統一に、混亂より秩序に移ることが、進化の基礎をなすことは生物學的に生物が下等なるものから段々と高等なるものに進んで來ると云ふ順序を調べて見ても明かにそれの道程を居る事が出來るのである。即ち下級に位せる簡單なる生物に於ては唯だ多數の略同樣の細胞が雜然と相寄つて居るだけであるが、段々と其働きが高等になるに作れて、分化によりて其各部各部分の間に形態的にも機能的にも色々な特色を呈し、而して其間に又之を調和統一すべき神經系なるものが出來、之れに依つて初めて複雜せる、高尚なる働をする、即ち高等動物が出來上るのである。就中人間に於て最も高尚なる神經系の發達に作ふて最も複雜なる生活機能を爲すことが認められるのである。人間一個體の細胞の數は學者の計算に依ると四百兆あると云はれて居る。今假りに秒針の動くに作れて一つ宛數へても四百兆を數へ盡す迄には無慮千三百萬年を費やすのである、此多數の細胞が相寄つて、人體と云ふ一つの纏つた秩序ある、調和を保てる生物を形ち造つて居る事は、移して以て精神界或は一般社會的進步の上に推し及ぼす事が出來ると信ずるのである。斯る立

場から考へて見ても、極端なる自己中心主義、極端なる個人主義は、文化生活の根柢に背馳して居るものである。

更に進んで考へて見ると、文化が段々進むに伴つて、生産の能力が段々増して來るが、是は申すまでもなく、一面分業の力に基くのである。分業の起原を考へて見れば、矢張り一個體が段々發達して行くのと同一の道程を辿る事に依つて、行はれて居る。唯だ一個細胞や、或は何れも同じ様な細胞が寄つて居ると云ふ事だけでは決して機能の進歩は起らないのである。最下等の生物は唯だ一個の細胞が一個體をなして居る。斯るものに在つてはあらゆる仕事、即ち運動にせよ、營養にせよ、生殖にせよ、皆一つの細胞に依つて行はれて居る。隨つて其の機能は極めて拙劣幼稚である。然るに多數の細胞が寄つて其の各細胞の間に漸次に分業が起り、相互の關係に從つて、それ〴〵必要なる機能を專門的に分擔するやうになつて來ると、其の働が巧妙になり、且つ是れと同時に相互間に非常に密接な關係が結着けられる。さうして之を統一する神經系と云ふものが出來て、益々相互の交渉と云ふものが密接になつて、さうして美妙なる機能と調和とを保てる高等なる一個體が出來上るのである。即ち分業の起原としては先づ以て多數の生物が群す居ると云ふ事である。併ながら單に群居すると云ふ事だけでは、未だ分業は起らない。此の群居せる多數の者に分業的の發達を來すべきことが考へられなければならぬ。

之を社會生活に就きて考ふるに、人間が單に飢餓の奴隷となり自己生存にのみ孜々たる時代には唯現在あるのみで過去もなく、況んや將來もなく、時間の觀念も發達しない。單に自己あるのみ、現在あるのみで、他を顧みる餘裕がない。然るに種族保續即ち戀愛が、人間生活に於て重要なる地位を占め、動物の如く單に衝動的一時的の欲望の滿足でなくして理性的永續的の色彩を帶び來り、家庭を造り子女を教養するに至つて茲に始めて博愛、犧牲、同情、從順と云ふが如き道德倫理の根柢が築かれ、而して又產業と云ふ永續的の目的を有せる仕事も起つて來た。念ふに自己の飢を滿すのみならず、進みて一家の餓を滿さんとする冀望が、產業的努力を喚び起す上に最も有力なる動機を與へた。斯くて獵者の生活は牧者の生活に、牧者の生活は農者の生活に移り行つた。さうして眞の產業が始めて堅固なる立場を見附けた。

永續的產業の發達は時の觀念を喚起し、秩序の觀念を喚起し所有の觀念を喚起し、數の觀念を喚起する。而して是れ皆一「努力」の賜物であり文化生活の基源をなすものである。この大なる努力に動機を與へたものは、已述の如く自己のみならず

家族の維持生存である。

エマーソン曰くNo Civilization without snow 雪のない所に文化が無いのは即ち文化が努力の賜物であることを尤も巧妙に言ひ表はしたものである。人間が唯だ大自然の温い懐に抱かれて自分の飢を滿たし唯だ現在に活きるには、食物は十分あり餘るだけある、又た何等の努力をも必要としない樣な狀態に於ては決して産業は起らない、又起る必要もない。併ながら人間が何等か困難と戰ひ、自己及び自己の種族の保續を確實にして行かなければならぬと云ふ必要を感ずると、玆に始めて有力なる刺戟が加へられて文化生活の緒を起す事になるのである。已述の如く人間生活の極めて原始狀態に溯つて見ると、何れも獵者である、即ち唯だ山に登り、野に出て、天然の産物を取つて、さうして自己を生存せしめて行くに過ぎなかつたのであるが、一歩進みて野獸を馴らして偶然の機會に憑らして思ふが儘に食物の供給を受けんとして獵者の生活より一轉して遊牧の生活に移り行く、それから更に一段進んで日と土との力を利用して耕作を始めてから、再轉して農夫となり、安住土着の生活を起した。而して是れが家を營み、部落を作りて社會生活を行ふ端緒をなしたのである。而して是によつて人間は自然の束縛から脱却して自然が不利の狀態の下にも猶ほよく自分の生存を確實ならしむるに至つたのである。舊約全書を見ると、御承知の如く、人間は智慧の實を食つて、それから永久に彼等の額に汗する事なしには、麵麭を得る事が出來なくなつたと言はれて居る。さうして惡魔の誘惑に陷つたエバが神の禁を破つてアダムに智慧の實を食ふべく促すと云ふ事が載つて居るが、是は蓋し人間が原始生活の間に經來つたる生活狀態の變化を譬喩したものであると思ふ。即ち神の禁を破るとは何であるか、即ち自然に背くことの謂である。自然に滿足せずして自然の埒外に出でんとした人間の努力を意味するのである。又婦人の言に聞いて智慧の實を食つたと云ふ事は、詰り人間が飢餓に基づく自己の生存のみを以て滿足せずして、進み、異性との交渉を起し、生物に共通なる最大の衝動たる戀愛に基ける種族の保續に力を竭すことを意味するものに外ならぬと思ふのである。シルレルが言つて居る樣に、生物界を支配して居る此の二大絶對勢力は何んと云つても飢餓と戀愛とである文化的團體生活の端緒を開き分業が起るのも一面には飢ゑざらんが爲の努力であり、一面には戀愛の賜物である。又た戀愛と結び附ける感情生活に於て、人間は兎角自分を他の物から目立たせやう、さうして雌雄淘汰の上に於て自分が優者となつて、自己の種族保續を確實にして行かうとする根強い野望を有つている。

此の慾望は動物にもあるが、殊に人間に於て又それは非常に著明に現れて居るのである。即ち人間が其爲に如何に多大の努力を捧げ浮身を窶して居るかは、例へば衣服の發達を考へて見ても直ぐ分かる。人間は防寒といふ實用上から衣服を着けるよりも寧ろ裝飾と云ふことが主なる動機となつて綺麗な着物を着ようとするのである。と云ふのは現代の野蠻人の中にも衣服を着ないものは澤山ある。例へばホイエルレンデルの土人の如きはさうである。併しながら自分の身體を飾らうとしない人間は殆どないのである。又原始的生活をして居る未開人を見ても、身體に繪具を塗るとか、或は文身をやると云ふ習俗があるのを見て、之を實證することが出來る。

一〇

又人間が文化を作り、産業を興す根柢として最も大切なる事は、人間が器具を作つた事である。器具を作るとは、自然物を利用して、自分の意思に依つて之を支配して自然界に自分の意思を推し及ぼすことに外ならぬのである、更に語を換へて言へば人間が心の中に有つて居る無限を有限の上に現さんとするに外ならぬのである。抑も器具とは何であるかと云ふに、人間が自分の身體を外界にエキステンドした物である。自分の身體を

格闘して強い外物に應[illegible]したのである。[illegible]同じく人間と、動物との相違は、人間は器具を作る點にある。即ち[illegible]すれば『人間は器具を作る動物なり』と云ふ定義を下す事が出來る。其大切なる器具、それによつて人間が自分の意思を最も有效に外界に具象化し得るのである。槌は即ち自分の握られたる拳の延長であり、小刀は、即ち自分の鋭い爪の延長であり、鋸は即ち齒列の模倣であり鑿は切齒に型取つたものであり、鑢は、即ち自分の鋭い指尖の延長であり、鍋は自分の掌を形の上に現したものであると云ふ風に、器具は即ち人間が自分の能く發達せる身體の一部を更に外物の上に型取つたものであると云ふ事が出來る。更に又最も進歩せる所の現在の文明の利器に就て考へて見ても、矢張り同様の關係を見出すことが出來る。例へば顯微鏡や望遠鏡は自分の眼を外界に擴張したものに外ならぬ。或は電話やミクロフォンは自分の耳をエキステンドしたものに外ならぬ。斯く考へて見ると、人間の産業の發達の基礎たる器具、進みては機械は、全く人間が自分の知恵に依つて、自分の身體を外物に推し及した結果であると云ふ事を斷定し得るのである。

斯の如くにして、人間が自分の身體を外界に推し及して、段々と完全なる器械器具を作ると、其反動として今度は人間が却つ

て機械の爲に支配されるやうになる。機械の發達が資本主義を喚び起し、資本主義が貧富の懸隔をして大ならしめ其極激烈なる階級戰を惹き起しつゝあることは現實に吾等の目撃しつゝある所である。此のことは唯單に、形以下に於て言へるのみならず形以上に於ても亦左樣である。人間は自分の尊い精神に依つて、段々と自分の意思を外界に擴充して行くと、其結果、其推し擴げられたるものに依つて、却つて自分が支配されると云ふ事になる。例へば色々な風俗慣習と云ふ如きものは、全く人間が自分の理性に依つて作り、さうして更にそれ等に支配されることになるのである。更に大きく言へば、神とは何ぞやと云ふに自分の持つて居る內部の尊き或るものを、最も完全に具象化したもの即ち神である。斯くて人間は自から神を作り、而して自から神の前に禮拜して居る。

又人間の幾多の知的作用の中、物を數へ、物を量る事は、非常に大切な事柄であつて、即ち現在の科學の根柢を成して居るのであるが、斯の計量と云ふ事も、之を原始的狀態に就て考へて見ると、矢張り人間が自分の持てる所のものを外に移したと解釋することが出來る。由來數の發達は身體の一部分就中、手と非常に密接なる關係を保つて居るのである。

前にも述べた樣に、人は直立步行をすると云ふ事に依つて動物よりも餘程異つたる體制を得た。即ち眼界を廣くし感覺の受容がより大きくされたり頸部の運動が自由になりて一層視覺聽覺に利益を與へたり、胸廓の運動がより自由になつたりする利益があるが、就中其一つとして手の自由を得た。而して斯のことは實に人間文化の發達の上に重要なる意味を有つて居るのである。銳感なる手によつて吾々は外物に觸れ之れによつて其物性質を知るべき最も大切な感覺器官として働く。獨り感覺器官たるのみならず、又吾々が自分の意思を外界に及し、無形の精神を物質の上に有形にする上に於て、手位ひ大切なものは外にないのである。而して又此手は物を量るべき數の觀念の發達と離るべからざる關係を持つて居るのである。先づ手の骨の名から見ても前腕小指側の骨を尺骨と名附けて居るのであるが、斯樣な名稱は、即ち昔からして此骨を人間が物の長さを量る標準として乃ち「エルレ」なる名を附けて使つたからである。或は又「ツオル」(約我邦の八分)と云ふ單位があるが、是は拇指の長さである。又「フース」と云ふ長さの單位は一步の長さである。我が日本であつても、一束と云ふのは一つ束みの事であり、何尋(ヒロ)と云ふのは兩手を水平に擴げた時の左右中指の距離である。斯の如く全く自分の身體を外界に推し及して、物を量ると云ふ事が出來たのである。或は一と云ふ數は何であるかと云ふと、兩

手とか、兩足とか、二つの眼とか、各々さう云ふ對になつて居るものが二と云ふ數を喚起した原因と考へられる。或は又五と云ふ言葉は、手と云ふものに緣が近いのであつて、即ち五つの指である。或は又十進法と云ふものは何から來たかと云ふと、兩方の手の指の數から起つたのである。或は又二十と云ふ數は何から起つたかと云へば、手と足との指の數である。さう云ふ事を言ひ得る證據は、言語學上から二十と云ふ數と、人間一人と云ふ事とは全く暗號して居る場合がある。それから又七と云ふ數は、食指と云ふ言葉と暗號して居る事がある。即ちこれも亦全く無意味ではないのであつて、五、六と、一つ二つを加へると七つになる、是れが七と云ふ言葉と食指と云ふ言葉と符號する所以である。斯う云ふ譯であつて、計量に際しても何れも自分の身體を外界に推し及して居ることが分かる。

二

それから人間の產業上の進化を招徠したる所の理由としては火の使用を見逃すことは出來ぬ。即ち或る意味に於て『人は火を使用する動物なり』とも言ふことが出來るのであるのであつて、動物と人間とは此點に於て嚴格に區別することが出來る。此大切なる火の使用に關しては、色々の國に色々な神話があるが、就中能く知られて居るのは希臘のプロメトイスの神話である。即ちプロメトイスが天界に昇つて太陽の火を取つて人間界に降つて、人間界の不自由をそれに依つて救濟したと云ふ事が言はれて居るのである。隨つて此プロメトイスは希臘の神話に於ては、建築、天文、文學、或は醫術、或は金屬の鍛錬の神様と云ふ事になつて居る。其の外火を神聖視する觀念は何れの國にも見られる、是は全く火が人間の文化を進める上に於て如何に大切なる意味を持つて居たかと云ふ事を語るのである。

抑々人間が、火と云ふものを知り得たは何んであつたかと云ふに、是は如何樣にも考へられるが、其の中最も信に近しと思はるゝことは人間が、自分の身體を外界の物質に推し及ぼすべき最も簡單なる道具として、先づ石器を作つた、而かも此石器を作つた場合には恐らく木も利用したに相違ない。何故ならば石よりも木の方が確かに使用し易いからである。但し木は朽ち果ててしまふが、石は遺つて居るから、恐らく現存せる遺物としては木の器具は見られずして、唯石だけしか見られないのであらう。而して木を使用する場合に、之を擦すると火が出ると云ふ事は當前のことであるから、斯の如くして人間は自分の努力に依つて火を作り、火を使用したのであらう。或は其他火山の噴火の爲に、偶然に火を知つたとか、或は森の樹が風の爲に

摩擦して火事を起して火を知つたとか云ふ事もあり得るだらう。兎に角人間が火を使用するに至つて人間の文化は非常なる局面變化を行つたことは敢て言ふを要しない。

二

更に轉じて精神的文化の最も大切なる根柢を爲すものは、言語である。言語の起原を尋ねると、第一に群居と云ふ事である。群居と云ふことに依つて初めて意思交換の必要を感じ、其の手段たる廣義に於ける言語が起つて來る。鸚鵡を始め群居せる鳥はよく囀るが、群居しない鳥は囀らない。而して群居を促す原因は、力が弱いことである。力が強い猛獸や猛鳥は群居する必要がない、否な群居は却つて妨になる。之に反して弱い動物は、群居によつて始めて相互を保護することが出來、互に利益を享有する。今人間の體を見るに、爪牙の敵を反噬するなく、堅甲の己を護るなく、全く裸一貫の平和的表象である。玆に於てか吾等の祖先は群居の必要を餘儀なくせられ、玆に語の泉が湧いて出た。

言語が發達し次で文字が發達して人間の精神生活は一紀元を開き、玆に全く動物と隔絕し、萬物の靈長たる事を得たのである。ヘルデル曰く「言語は人間の特權である」凡ての人は言語を持つて居る。實際言語位人間の精神生活に大切なものはないのである。此言語が如何にして發達して來たかと云ふ事に就ては色々な說があるが、要するに群居に依つて、意思の交通を行ふ必要が起り、其の手段として種々なる筋肉の運動を行ふ樣になる。筋肉の運動に依つて自分の意思を或る程度まで相手方に通ずると云ふ事は、獨り人間に限つては居ない。動物にも澤山の例を見るのである。尻尾を振るとか、身振をするとか、羽叩きをするとか、凡て是れ意思交換の手段で廣い意味の言語である。併ながら其爲の筋肉運動が最も微妙なるものとなり、更に是が音波の形となつて行はれると云ふ事は、人間の言語の發達の上に非常に大切なる關係を有するのである。如何にして斯なる身振の意思發表運動より、更に一轉して發音の發表運動即ち狹義に於ける言語に進んだであらうか。音に依つて意思の發表をすることは、是は人間ばかりではない、鳥類に於ては最も大なる關係を持つて居ることは何人も知る所である。恐らく人間が發語の作用を行ふに至つたのは、鳥が其原を爲して居るのではあるまいかと云はれて居る。群居せるものを見るに、其意思を發表するに際し、就中危害が生じた場合に、之を澤山のものに知らせて共に此難から脫れると云ふやうなことの爲には、發聲の方が遙かに身振よりも有效である。之を群居せる人間が其の

頭蓋性によつて、[illegible]したものであらうと云ふ事を言つて居る學者があるが、蓋しそれは有り得べきことゝ思ふのである。聲を發すると云ふ事は其原に溯れば筋肉の運動である。人間が自分の意思を喉頭や舌や口唇等の筋肉の上に及して、之を適當に働かす事に依つて發聲や言語が起るのである。即ち呼息が緊張せる聲帶を振動せしめて聲を發し、尙ほそれに加へて、口唇や舌等の筋が微妙なる運動によつて口腔の形を色々に變化し之を空氣が過ぎ行く際に種々なる雜音を發生し所謂言語と云ふものが出來るやうになる。而して此言語に依つて吾々は最も有効に最も簡單に、吾々の心の中に有せる非常に尊い、非常に大なる複雜せる無形の精神作用を有形にすることが出來、又此の有形にせられたる言語に依つて、吾々の無形の精神が相互に握手することが出來るやうになるのである。又言語に依つて、吾々は最も經濟的に吾々の精神を使ふことが出來る。何れとなれば言語は實に抽象的概念の結晶であつて一の言語も、千萬無量の含蓄を有つて居るからである。即ち言語は吾々の思想の尊き結晶であり、此言語あつて初めて人間は、其の偉大なる精神生活の殿堂を作り上ぐることが出來たのである。

此大切なる言語を理解し乃至は發表する働をなす中樞は已述の如く常に能く發達した方の大腦半球即ち右利の人では左の大腦半球に於て發達すると云ふ事は決して偶然でないのである。此腦髓に於ける言語の中樞の發達狀態を見ると、蓋し近世流行と云ふ事が行はれ、このことと言語の中樞の發達とは多大の關係あることが發見されたのである。即ち人間發達の道程から考へて言語の發達は最後に起つたもので、まだ比較的新しいものである。順序上單簡なる視聽其の外の感覺作用や運動作用の中樞が發達したよりも、後れて發達したものに相違ない。何んとなれば言語の作用は單なる運動や感覺よりもより進んだものである。而して最も進んだものは、最も後に現れて來るのが生物發生上の法則であるからである。且つ又人間が太古の祖先から現代の人間に迄發達せし歷史、即ち系統發生は、一個體發生の道程即ち個體發生に際して繰り返へさるゝものであるから、系統發生に於て最後に發生したものは、個體發生の上に於ても矢張最後に現れるものである。而して是のことは子供の心身の發育を見るに單なる感覺運動は早く發育するが、子供が言語を覺え、自由に自分で意思を發表し得るまでには、幾多の歲月を要しなければならぬ事から直ちに證明される。思想の結晶物である言語は、餘程身體の進んだ後に完成するものでなければならぬ。

言語を今一層永久的に、今一層確實に具體化したものが即ち

文字である。已述の如く、器具は人間が自己の身體の一部を外界に擴充し具體化したものである。丁度それに相對的に、文字なるものは、人間が自分の思想を具體化したものに外ならぬ。換言すれば文字は、人間の心の外界に對するプロゼクションである。勿論言語に依つても吾々は自分の無形の思想を有形なるものにして、多數の間に自分の思想を通ずることが出來るのであるが、併し文字を作る事に依つて空時間に時間的に遙に其の範圍を擴大することが出來るやうになつて來た。さうして其文字を、受容認識すべき讀書の中樞、又た文字を發表すべき書字の中樞、なるものは言語の知覺中樞、或は言語の運動中樞よりも更に後れて出來上る、即ち先づ言語の理解及び發表が完全に行はれて、然る後始めて讀書や書字が出來る様になる。是も亦個體發生は系統發生を繰返すものであると云ふ生物進化の大法則を明瞭に證明して居るのである。斯様にして人間が言語を有ち更に進みて文字を有ち得るに至つて、最も完全に最も確實に其の有形、無形の文化を永遠に遺すことが出來る様になつた。斯くて吾等はゴエーテの謂ひし如く瞬間を永遠にすることも出來、又た永遠を瞬間にすると後代に傳へる事が出來るやうになるのであることも出來る様になつた。斯くて又吾等は吾等が個體として遺傳し受授することの出來ない文化と云ふ遺産を、社會生活によりて、より潤澤にし、より豐富にして、世々代々、相受け、相譲り、斯くて現代の小學校の生徒も、二千五百年前、世界の賢き者を集めたる希臘の中で最も賢き人であつた、アリストテレースよりもより賢くなり得たのである。

三

無限より無限に亙る時の海の、細い細い小波として、今や舊き歳は去り、新らしき歳は來らんとして居る。吾等は其の波頭に立ちて、近き過去を顧み、又近き將來を思ふ時、吾等の胸は大なる動搖を感ずる。吾等の眼には自から涙が湧く。さりながら、吾等にして一と度遠き遠き過去を見、又た遠き遠き將來を想ふ時、吾等は其處に大なる諦と、大なる慰と、大なる望と、大なる悦とを禁ずることが出來ない。さうして現代の困惑紛糾せる思想界の混亂を救濟すべく、『汝自からを知れ』と叫びたい。二千五百年前に大聖ソークラテースが夫れを叫んだ様に、

（十一年十二月十二日稿）

現代文化生活に於ける天才主義

大山郁夫

一

一九二一年は、世界の立場から見て隨分多事なる一年であつた通りに、日本の立場から見てもまた甚だ多事なる一年であつた。そして或る意味からいへば、この一年の終りに於てワシントン市で開かれた國際會議が、善くも惡るくも、最近の世界に於て進行して來た事件の流れに、少くとも一小段落を與へたものと見ることが出來る通りに、矢張りこの同じ一年の終りに近い頃に於て我國民を驚かした原首相暗殺事件もまた、多くの點に於て、最近の日本を見舞つた各種の顯著なる社會的事件に、一應の總勘定を附けたものだといふことが出來るのである。が、假りに若し、かうした對比的な物の言ひ方には我々が全然好感が持てないにしても、我々は少くとも、前者が世界の舞臺に於て記念すべき事件であると同じ割合に於て、後者が日本の舞臺に於て記念すべき事件であるとだけは、危ぶた氣なしに言ふことが出來るのである。

かういふ風に、最近の世界に於ける一重大事件と、最近の日本に於けるそれとを、どこまでも並行線上に置いて對照するといつたやうなことは、或る人々には、如何にもわざとらしくも見えようし、また如何にも無益なことのやうにも思へよう。が、しかし、現代に於ては、過去のどの時代に於てよりも、世界の各部に起る社會的事件の間に共通の諸要素の存してゐることが段々と際立つて目立つやうになつて來たといふ事實を認める人々には、かうしたことも全然無意味でないことが考へられよう。兎に角私は、茲では最近の日本に簇出した各種の社會的事件を綜合的に觀察して、そこから歸納的に現代世相の最も顯著なる一面に觸れようとしてゐるものである。がしかし私は、それを單獨に我國に限つての問題として取扱はうとしてゐるのではなく、寧ろそれを、現代世界の大部分――我國を含めての――に共通の文化生活を背景として眺めようとしてゐるのであ

る。そして、私のこの企てが、私をして、先づ本文の劈頭に於て、最近に於ける世界の一重大事件と日本のそれとを、殆んど無意識的に對照して見るやうな態度に出でしめたのであることは、無論である。

それからまた私は、かういふ用意を以て、最近の日本に簇出した各種の社會的事件の上に私の觀察の基點を置くつもりではあるが、しかし私は、右に掲げた原首相暗殺事件が、多くの點に於て、それらのすべての總勘定の意味に於て見られると考へてゐるところから、便宜上、特にこの事件を中心的地位に置いて、そこから私の論述を進めようとしてゐるのである。そしてそれ以外の諸事件に關しては、私はたゞ場合々々の必要に應じてのみ、それら一つを參照する位のところに止めておきたいと思つてゐるのである。

これだけのことを豫じめ斷つておいた上で、私は直ちに私の主題に向ふことにする。

二

原首相暗殺事件の報道は、一般公衆の耳には、靑天の霹靂のやうに響いた。そして、その當座しばらくの間一般公衆は、それから受けた驚愕から醒めることが出來なかつた。それは一つには、事件の性質の異常なためでもあつたが、また一つには、諸新聞紙の記事から出た催眠術的効果のためでもあつた。卽ちその際諸新聞紙が、その日々の紙面の可なりの大部分を、內閣宰相の死を光榮で包むために費したことは、誰れもの記憶の上に尙ほ新たなる事實である。

一體この事件は、我國の政界が少くとも表面上比較的靜穩狀態に在つた際に突發したことではあり、且つまた、その場面の光景が比較的劇的要素を缺いてゐたのであつた。それにも拘らず、それは社會的には、かうまでの大波瀾を捲起したものであつた。それから考へると、若しあの事件が議會の會期中に、しかも或る重大問題の討議が熱した日に、原首相が議院を退出しようとする間際にでも起つたのであつたとしたら、どれほど素晴らしく世間を沸き立たせたことであらう！　といつたやうなことも聯想せられるのである。

しかし、さういふことは想像の領分に屬することであるから、これ以上深く詮議立てする必要のないことであるが、しかし、それに附帶する現實問題として、我々の特別の注意を促す一面がある。それは何であるかといへば、この事件を報道した諸新聞紙が、揃ひも揃つて、筆の力を盡くしてその場面の光景を戲曲化することに努力したばかりでなく、それに關聯して原

首相の一生の經歴を記述する際に當つても、考へ得られる限りの形容詞を工夫して、彼の生涯を神秘化し、彼の人物を英雄化することに腐心したといふ一事である。我々がこの事實の表裏を細心に省察するとき、我々は少くとも現代文化生活上の心理的方面の諸相が、意外の程度に於てそこに反映せられてゐるのを見逃がすことが出來ないのである。

諸新聞紙が當時一齊に筆を揃へて、右の暗殺の場面を多分の戯曲的潤色を加へながら書き立てたことは、それを一般公衆の好奇心に投合する目的から出たものと見る時には、縱しかういふ場合に於ける一般公衆の好奇心の發生に關して或る説明を要するにしても、それを姑らく不問に附することにしさへすれば、一應の解釋がついたものとすることが出來る。しかしながら、これらの諸新聞紙が相競うて原首相の生涯を神秘化し、その人物を英雄化することのために全力を盡くしたといふ一事は、さう簡單に説明し去る譯には行かないのである。

現代文明は科學的文明だといはれて居る。といふのは、曾て人類の歴史を支配したことのある神秘的宇宙觀や、形而上學的世界觀が既に過去のものとなつてしまつて、現代人は最早あらゆる自然的及び社會的現象に對しては、充分に合理的なる實證的説明を得なければ滿足が出來なくなつて居るといふことを意味するのである、少くとも現代の知識人は、かうした傾向に段々と深入りしつゝあるものだと、一般に假定せられてゐるのである。そのうちでも新聞紙は「社會の木鐸だ」とか「時代の先驅だ」とか自稱することに依つて、現代の知識人の間に於けるかうした傾向を最もよく代表してゐるものだと自惚れてゐるのである。それにも拘らず、原首相暗殺事件といつたやうな異常な事件が突發した刹那に於ては、たとへば「政界の巨星隕つ」といつたやうな文句が、恰度昔の占星術を我々に追想させるためかのやうに、若しくはその他の各種各樣の神秘的色調を帶びた表現が、恰度原始宗教の樣々の屬性を我々に追憶させるためかのやうに、今日の新聞紙上に於ても、或はその初號活字の見出しの中に、或はその誇張的調子で書かれた記事の中に、際限もなく發見せられるのである。かういふことが、現代社會に於て、しかも我々の眼前に於て、常に反復されて居るのをまざまざと見せつけられるときは、我々は必然的に、科學萬能を誇る現代人も、その思想感情の奥底に於ては、尚ほ依然として原始時代の迷信を餘り遠く離れて居るものでないことを思はせられるのである。それからまた、この點は、現代に於て新たに起りつゝある一種の「科學的迷信」ともいふべきものに關聯しても考へられるかも知れない。いづれにしても、どういふ種類かの迷信

が人々の心に深く巣喰つてゐるといふことは、現代社會生活の上に於ても、餘りに普遍的に見受けられ得ることであるには相違ないのである。

更らにまた、現代は『民衆の時代』だといはれてゐる。といふのは、人類の社會生活に於て、曾て或る永き期間に亘つて順々に現はれた所謂『神の時代』とか『英雄の時代』とかは、最早永遠にあとに見殘されてしまつて、現代に於ては、街頭の民衆が一切の社會的の事件の進行を支配する形勢を呈する樣になつて來たといふことを意味するのである。そして現代社會に於てかういふ現象が生じたのは、一種の平等感が民衆の間に行渡るやうになつたためだと說明されて居るのである。ところが、矢張り原首相暗殺事件といつたやうな意外の大事件が起つた場合には、平素から『民衆の機關』であることを標榜してゐる新聞紙からが、眞先になつて『巨人倒る』といつたやうなことを絕叫して、一人の死の裡に萬人の死に超越する意味を持たせようとするのである。かういふことを考へると、我々は必然的に、一種の平等感を基調としてゐるものだといはれてゐる『民衆の時代』にも、如何に多量の英雄崇拜氣分が尙ほ殘存して居るかを思はせられるばかりではなく、更らに一歩を進めて、かうした意味に於ける『民衆の時代』の產物として、別に新たなる一種の英雄崇拜氣分が或る過程に依つて釀成せられて來たのだといつた、一見極めてパラドキシカルに思はれるやうなことをさへ考へさせられるのである。この點に關しては、私は後に幾分立入つた省察を試みるつもりであるから、玆では單にそれを一個の命題として記るしておくだけに止める。

三

原首相暗殺事件の場合に於て、各新聞紙が、樣々の神秘的色調を帶びた誇張的表現を案出して、死んだ原首相を『超人』扱ひすることに努力したのは、一面に於ては、各新聞紙がその事件の起つた瞬間に於て、それを驚天動地の一大事變でもあるかのやうに粉飾して、分秒の遲速を爭うて世間に宣傳したといつたやうな、その餘りに大袈裟な遣り口を、それが濟んだあとで如何にも尤もらしく取り繕らはうとしたところから來たものだと考へられないでもない。實際、かうしたとは、個人的自由競爭主義を原則とする資本的經營の下に置かれてゐる今日の新聞紙が、一般に絕えず實行してゐることなのである。

しかしながら、少くともこの事件の場合に於ては、これだけの說明では滿足し得られない理由がある。といふのは、原首相は其生前に於ては、決して世間の衆望を一身に背負つて立つて

目立たない人ではなく、寧ろそれとは反對に、可なり多くの敵を持つて居た人であつて、しかも諸新聞紙は、政友會の機關紙といつた色彩を帶びたもの丶外は、大體原首相の政策を批難する方の側に傾いて居たからである。少くとも原首相は、彼が暗殺された瞬間までは、どの新聞紙に依つても、決して『超人』扱ひにされて居たのではなく、縱し或る點に於て多少普通の人間より優れた才幹とか力量とかを持つてゐたものと見られてゐたにせよ、大體に於ては、矢張り普通の人間並みに屢ば間違ひを仕出來すことがあり得るものと思はれてゐたことは、たしかな事實である。ところが、この原首相が一たび刺客の手に倒れるといふと、すべての新聞紙から一齊に、『巨星』とか、『偉人』とか、『英雄』とか言つた樣な、古代の『半神半人(デミゴット)』を形容するに相應はしいやうな、そして一般公衆に對しては一種の催眠術的効果を及ぼさないでは置かないやうな、あらゆる形式に於ての頌辭を留め度もなく浴びせ掛けられたのである。それは疑ひもなく、死者を讃める分には何等の差し障りがなくて濟むといつたやうな一種の功利的見解から來たものではなく、それは現代人の心の裡にも深く根を張つてゐる一種のセンティメンタリズムから來たものである。そして、このセンティメンタリズムの本質を掴むことは、現代文化生活の根柢に横はつてゐる人々や[illegible]ゐる或る重要なる心理的要素を暴露する。ここに見たものの一つの重要條件を形成してゐるものであるやうに、私には考へられるのである。

四

諸新聞紙の記事に於て死んだ白頭宰相に捧げられた頌德表は、決して單純に一つの型に嵌まつてゐた譯ではなく、その間にそれぞれと多少内容を異にしてゐたものであつたし、また中には少くとも社説欄に於て、流石に平素の主張の手前からだけでも、多少割引的意味の項目を並べてゐたものさへあつたことは、公平に認めなければならないことである。が、しかし、唯ひとつ、それらのすべてに殆んど例外なく共通して居たことはそれらのいづれもが、原敬氏に於て一個の非凡なる政治上の『天才』を認めてゐたといふことであつた。そして、大抵の新聞紙の關係記事中には、この『天才』といふ言葉がその儘に明示されて居たのであつた。しかし縱しそれがその儘に明示されて居なかつた場合でも、それに代はるべき他の樣々の言葉が、間違ひやうのない意味に於て連發されてあつたのである。

苟しくも多少の程度に於て社會心理的現象の研究に興味を持つてゐる程の人々なら、右の暗殺事件以後の新聞記事中に於て

天才』といふ言葉が、原敬氏の人物を性質づけるために、反復使用されてあつたといふ事實に依つて、幾分の注意を惹かれたことを感じなかつたものは、恐らくなかつたであらう。尤も、この『天才』といふ言葉は、それが使用せられる場合の異るに從つて、多少異がつた意味を附與せられてあるといふことは、たしかな事實である。だが、若しそれが社會科學的意味に於て用ひられてあるのならば、それは大體に於て、――少くともそれに關する特別の定義が揭げられて居ない限りは、――或る特殊の個人が或る特殊の仕事に對して遺傳的に常人以上の適應性を所有してゐる場合に、さうした特殊の個、のその遺傳的素質を指してゐるものとして解釋すべきものである。しかしながら問題の暗殺事件以來の新聞記事中に於て、この言葉が原敬氏の人物を性質づけるために引切りなしに使用せられてゐた場合に於ては、決してさういふ冷やかな社會科學的意味に於てでなかつたとは、明かなる事實である。否、それはその場合に於ては、もつと曖昧な、もつと不得要領な、――と言つて不都合なら、――もつと不可思議な、もつと幽幻な、もつと神秘的な、若しくは幾らか宗教的調子を帶びた表現で言はうならば、もつと靈妙な、もつと超自然的な、もつと啓示的な意味に於て用ひられて居たのである。換言すれば、それは、常人の理性を超越したやうな、――若しくは常人の生活から推論することが出來ないやうな――極めて微妙なる或る物を指すものとして用ひられてゐたのである。

無論諸新聞紙が、棺を蓋うて評定まる時の來てゐる原敬氏の場合に『天才』といふ言葉を適用してゐたのは、決して一部の社會學者の所謂『潜在的天才』――potential genius――の意味に於てでないことは明らかである。それは疑ひもなく、『顯現したる天才』といふ意味に於て用ひられてゐるのである。しからば、原敬氏の生活のどういふ方面に於て、若しくは彼の性格のどういふ點に於て、さうした天才の俤が宿つてゐたといふのであるか？ この問題に對しては、無責任なる新聞記事は、唯單に『政治上の天才』と言ひ放しにしただけであつて、少しも明確なる答案らしいものを與へてゐなかつたのである。いふまでもなく、『政治上の』といつたやうな、その含蓄の極めて廣汎なる形容詞を『天才』といふ言葉の上に冠しただけでは、右の問題に對する答案としては、何等の意味をなさないものである。それ故に我々は、諸新聞紙上に於て死んだ原敬氏に適用せられた『天才』といふ言葉が、若し何といふことなしに唯無意味に書き並べられたものだと高を括つてしまはない限りは、それがどういふ意味に於て適用せられたものであるかを、我々自身の

判斷力に依つて選擇しなければならないのである。

五

『天才』といふ言葉の通俗的用法の個々の場合に於て、縱しそれにどういふ意味が附與せられてあるにもせよ、そのうちに『創造的』といふ感じが含ませられて居ない場合は殆んどないといつていゝのである。そして、それは『藝術上の天才』などゝいつた場合に於て殊にさうなのであるが、しかしながら、普通に『藝術』といふ名の下に諒解せられて居る仕事よりももつと一般的の生活に近い仕事に於ける天才――たとへば、『演說の天才』とか、『金儲けの天才』とか、『料理の天才』とか、『裁縫の天才』とか、『野球の天才』とか、『圍碁の天才とがいつたやうな――の場合に於ても、それは矢張り同じことなのである。そして『天才』といふ言葉に關するこの通俗的用法は、それに含ませられて居る『創造的』といふ言葉の解釋次第では、同じ『天才』といふ言葉に關する社會科學上の用法と調和させることが出來ないではないのである。

嚴正なる科學的立場からいへば、我々は必ずしも、この『創造的』といふ言葉を、無より有を生ずるといつたやうな魔術的な仕事の屬性の意味に解釋する必要はない。否、それどころではなく、實のところ、さういふ魔術的意味に於ける『創造的』仕事といふものは、開闢以來今日に至るまで、唯の一度もあつた例めしがない筈である。人間の仕事といふものは、その極度に簡單なものから、その極度に複雜なものに至るまで、すべて皆、各種の既存の材料――それは通俗的に『物質的』と呼ばれてゐるものから、『精神的』と呼ばれてゐるものまでを含めての――に働き掛けることに依つて、或はそれを直接に利用したり、或はそれに加工してその組合はせを變へたりすることから成立つのである。そして、かういふ意味に於ける仕事に於て、或る特殊の人が普通人の企て及ばない程の新機軸を出だしたり、普通人の可能性を超越したほどの技能を示したりすれば、其特殊の人は、少くともその從事してゐる仕事に關しては、『創造的』な働きをしたものだといふとが出來るのである。

次にまた、矢張り嚴正なる科學的立場からは、『創造的』といふ言葉に對して如何なる價値をも附與することは出來ないのである。それは、『創造的』といふことを一要素としてゐるものとして見た『天才』に對しても同じとである。といふのは、科學はその一切の對象物に關して、眞理を認識することを以てその役目としてゐるものであつて、價値を認識することを以てその役目としてゐるものでないからである。それ故に、科學そのも

のからは、『創造的』といふことにも、『天才』といふことにも、直接に價値の問題が出て來るといふことはないのである。さういふものに價値の問題が出て來るのは、科學以外の或る立場――それは科學に卽して居るものにせよ、科學を離れて居るものにせよ、要するに科學以外の或る立場――からである。さうした科學以外の或る立場とは、或る特殊の宇宙觀とか、世界觀とか、人生觀とか、社會觀とか、或る特殊の理想とかを指していふのである。かうした各個の立場から見れば。或る種の『創造的』活動とか、或る種の『天才』とかゞ、大に價値のあるものに見えるのに反して、或る他の種類の『創造的』活働とか、或る他の種類の『天才』とかゞ僅かしか價値のないものに見えたり、若しくは全然價値のないものに見えたりするといつたやうなこともあり得るのである。かういふ譯であるから、價値の問題は、結局は、それぞれに獨自の特殊的立場を持つて居る各個人の主觀の問題に歸着するものである。それ故に、たとへば、恰度『落語の天才』とか、『圍碁の天才』とかいつたやうなものが或る立場を持つてゐる人々には全然無價値なものと見えるのに反して、或る他の立場を持つてゐる人々には非常に有價値のものに見えるといふのと同じやうに、『藝術上の天才』とか、『教育上の天才』とかいつたやうなものもまた、或る立場を持つてゐる人々には全然無價値なものに見えるのに反して、或る他の立場を持つてゐる人々には非常に有價値のものに見えるといつたやうなことも、屢々起り得るのである。そして、科學はかうしたことのすべてを、客觀的事實として認識することはするが、しかしながら科學は、科學それ自身の立場からは、如何なるものに對しても、その價値を裁斷するといつたやうなことを決してしないのだから、從つて科學は、科學それ自身の立場からは、各種の『創造的』仕事とか、各種の『天才』とかを價値づけるといふやうなことをも決してしないのである。

六

餘談が少し長くなり過ぎた氣がするが、要するに社會科學上から見た『創造的』といふ言葉は、私が前段に述べた通りの意味に於て解釋するのが正當であるやうに、私には考へられるのである。ところが、普通一般の人々がその日常の會話に於て、どういふ特殊的立場からといふことなしに、唯漠然とこの言葉に與へて居る意味は、それとは餘程異がつてゐるものなのである。彼等が不用意に『創造的』といふ場合には、彼等はこの言葉に、無より有を生ずるといつたやうな魔術的意味を附與しないまでも、殆んどそれに近き意味を附與するのである。彼等は

この言葉に依つて、神秘的な、若しくは靈妙不可思議な或る物を理解するのである。從つて彼等は、彼等がかういふ意味に於ける『創造的』といふ感じを含ませてゐる『天才』といふ言葉をも、或る特殊の人々をして或る特殊の仕事に關して常人以上の適應性を示さしめる遺傳的素質といつたやうな、幾分散文的な、その社會科學的用法に於て理解することを正當だとは考へないのである。否、縱し彼等がその理性に於てさうするのを正當だと考へるにしたところで、彼等はその感情に於て、さうすることを好まないのである。彼等が『天才』といふ言葉に對する場合は、理性からするよりも、寧ろ感情からするのである。彼等はそれ故に、『天才』からは常に超人的示現を豫期するのである。彼等が多くの場合に於て、生きて居る人を天才呼ばゝりするよりも、寧ろ死んだ人を天才呼ばゝりする傾向を示すのは主として斯ういふところから來てゐるものではなからうか？ それからまた、彼等がどういふ人をでも天才呼ばゝりする際に、多くの場合に於ては、その人が天才呼ばゝりされ得るための明確なる理由を示すことを避けようとするか、若しくはそれを不問に附さうとするかの傾向を示すのもまた、同じ理由から來てゐるものではなからうか？ それは兎に角、簡單にいへば、彼等の『天才』に對する態度には、多分の迷信的分子が混入せられてゐるといふことだけならば、安全に讚成し得られるやうに、私には考へられるのである。

普通一般の人々が不用意の際に『創造的』とか『天才』とかいふ言葉を話す場合にそれに附與してゐる意味は、これらの二つの言葉の通俗的用法中の最も普通なる場合に於て附與せられてゐる意味に該當するものである。私は前段で、『天才』といふ言葉の通俗的用法に於ては、大抵の場合、『創造的』といふ感じがそれに含まされてあるものであることを述べた序に、此言葉に關するかういふ通俗的用法も、この『創造的』といふ意味の解釋次第では、その社會科學的用法と調和させることが出來ないものでないと述べた。いかにも、『天才』といふ言葉に關するこれらの二種の用法は、理論上相調和し得られるものに相違ない。がしかし、事實上に於ては、大抵の場合に於ては、これらの兩者は常に相調和せられて居ないのである。そして、この不調和の原因は何であるかといへば、それは實に『創造的』といふ言葉に附與せられてある意味の兩者の場合に於ける相異の程に求むべきものなのである。

七

死んだ原首相に對して、諸新聞紙が盛に『天才』の稱號を適

用したのは、無論この言葉の社會科學的用法に於ける意味に從つてしたのではなく、寧ろその通俗的用法中の最も普通なる場合に於ける意味に從つてしたのであつた。換言すれば、それは多分無意識の裡に行はれたのであらうが、其結果から見れば、それは彼の生涯を神秘化するために、また彼の死を戲曲化するためにそしてまた彼の人物を英雄化するために行はれたのと同じ効果を發したのである。

諸新聞紙が死んだ原首相に『天才』の頌辭をかういふ意味に於て捧げたものであることは、まづ第一に、彼等が何故に彼を天才視したかの理由を、全然示さなかつたか、若しくは極めて曖昧にしか示さなかつたことに依つても知られるのである。彼等の多くは彼を『政治上の天才』といふ風に性質づけることに依つて、彼の『天才』がどういふ方面に發揮せられたかを示したが、しかし彼等はそれがどういふ風に發揮せられたかを語らなかつた。彼が總理大臣であり、政友會の總裁であつたといふことは、必ずしも彼が政治上の天才であつたことの證明にはならないのである。といふのは、資本的文化がその支配力を及ぼしてゐる現代社會に於ては、――殊に舊來の封建的文化の餘勢が、今日でも尚ほ相當の程度に於て、新生の資本的文化と共同してその支配力を各方面に及ぼして居る現代日本の社會に於ては、――或る個人が或る社會的地位とか、或る政治的地位とか、或る階級的特權とかを所有して居るのは、必ずしも、彼の固有の才能とか適應性とかから來たものばかりではなく、それら以外の諸原因から來たものである場合も、決して少くはないのである。たとへば、それは或は門閥的勢力から來てゐる場合もあるし、或は父祖の遺產の餘澤から來てゐる場合もあるし、或は先輩の引立てから來てゐる場合もあるし、或は親戚緣故の關係から來てゐる場合もあるし、或は阿附諂諛の結果から來てゐる場合もあるし、或は偶然の幸運から來てゐる場合もあるし……といつたやうなことが、際限もなく思ひ附けるのである。殊に我々が、この問題をその裏側から考察すれば、我々はこの點に關する一層明白なる理解を得ることが出來るのである。といふのは、斯うである。現在に於て或る社會的地位とか、政治的地位とか、階級的特權とかを所有してゐるものは、彼が尋常一樣の凡才であるといふ理由でそれを喪失するといふやうなことは、滅多に例のないことである。時としては、彼が偶然の機會から或は精神に異狀を呈したり、或は瘋癲白痴になつたりしたために、さうしたものを喪失する場合があるが、しかし、さうした不幸が生じたに拘らず彼がそれを喪失しない場合もまた、可なり多くあるのである。我々は、時としては、普通の水準以下の

才能を持つて居るにすぎないと思はれる人々までが、或る時期の或る事故から相當に顯要たる官職を帶びてゐる様な場合でも屡ば見かけるが、殊に馬鹿でも華族として仰がれてゐる人々や、低能でも富豪として立てられてゐる人々などの實例となると、我々の日常生活に於て一層普通に遭遇するのである。かういふことを考へると、原敬氏が暗殺せられた當時に於て總理大臣であつたり、政友會の總裁であつたりしたといふことだけでは、彼を一種の政治的天才と呼ぶ根據とするに不充分であることは、一點疑ひを容れる餘地がないのである。

或は原敬氏が青年時代に郷里から出京して、法律學校の學生として筆を振り出してから、或は新聞記者となつたり、或は官吏となつたりして、その波瀾多き生涯を滑り拔けて居る間に、段々と鰻登りに社會的地位の梯子段を登つて行つて、遂にその晩年に於て、政友會の總裁となり、總理大臣となるまでに至つたといつたやうな經歷を楯にして、「それだから彼は一個の政治的天才なのだ」といふものがあるかも知れない。かういふ論法は一方に於ては、波瀾多き生涯の所有といふことを天才の表象として居るものとも見られるし、また他方に於ては、所謂「立身出世」といつたやうな、世俗的意味に於ける「成功」の獲得といふことを天才の表象として居るものとも見られるのである。けれども、波瀾多き生涯の所有といふことが決して必ずしも表象と見られるものでないことは、詳々しく説明するまでもないことであるばかりではなく、所謂「立身出世」といふことにしても、それ自身單獨では、決して天才の表象と見られるものでないといふことも、現代社會に於ける或る社會的地位とか、政治的地位とか、階級的特權とかの所有といふものが、決して其の所有者の特殊の才能とか適應性とかから來たものばかりではない、といふことの當然の歸結として承認しなければならないことである。

八

右の一點を特に原氏の場合に引宛てゝ考へるときは、彼が名もなき一青年としての生活から出發して、遂にあの晩年の地位にまで登りつめたといふことは、彼の政治生活上に於ける才能や適應性やが、水準以下のものでなかつたことを證明するためには充分であるが、しかしながら、それらが水準以上のものであつたことを證明するためには、普通人がたゞ譯もなく漫然と考へてゐるほど、有力なものではないのである。で、若し我々がそのことを證明しようと欲するならば、我々は何よりも先づ第一に、尋常一様の人が、縱しその生涯に於て、原氏が持つこ

とが出來た機會と同じ機會を提供されたにしたところで、彼は決して原氏ほど巧みにそれを利用することは出來なかつたであらうといふことを證明しなければならないのである。ところがそんな證明は、我々には出來ないことである。それは恐らく、誰れにだつて出來ないことであらう。それぱかりではなく、我々は更らに一歩を進めて、たとへ原氏と同樣の機會を惠まれたにせよ、そしてその機會を原氏と同樣に利用し得る能力を持つて居たにせよ、原氏がそれを利用した樣にそれを利用することを好まなかつた人々も隨分あつたらう、といつたやうなことをさへ、一應は考へて見る必要があるのである。換言すれば、政治上の才能や適應性やを原氏と同程度に持つてゐながら、その性癖上、原氏が官界や政界で『立身出世』するために取つたやうな手段を取ることを好まなかつた人々も隨分あつたらう、といつたやうなことをさへ、我々は一應は考へて見る必要があるのである。しかも、かういふ考へ方は、決して不自然な考へ方ではない。官界や政界に於て『成功』することの困難なのは、或る優秀なる特殊の才能や適應性やがそのために必要なためではなく、寧ろその『成功』のために缺くべからざる一必須條件と見做されてゐる一種の『游泳術』が、潔癖な性質の人間には到底堪へ切れないのものであるからである。

官界や政界に於て、如何に優秀なる特殊の才能や適應性やが根本的必須條件を構成してゐないかを知るためには、試みに、小さいところでは、所謂『能吏』とか『陣笠』とか呼ばれてゐる種類の人々の群れの中を覗いて見るがいゝ。彼等の多くが、人間として立つて行くためには餘りに低級な才能とか適應性とかをしか持合せてゐないことは、さまでの判斷力を用ひなくても、容易に認識し得らるゝことである。しかし、もつと大きいところで、國務大臣とか政黨の首領とかいつた種類の人々の群れを見渡したところで、その結論は矢張り同じところに落ちつくのである。すなはち、彼等の多くがさういふ地位に登つたのは、常人の可能性を超越した何かの優秀なる特殊の才能とか適應性とかの所有のためであるよりも、寧ろそれらの以外の諸原因のためなのである。それは、或は縁故のためである場合もあれば、或は引立てのためである場合もあり、或は富豪であることのためである場合もあれば、或は富豪を利用し得る能力(!)のためである場合もあり……と、かういつたやうなことが、際限もなく思ひ附かれるのであるが、さういふものが、いづれとして嚴正なる意味に於ける『優秀なる特殊の才能または適應性』の指標となるものでないことは、いふまでもあるまい。しかのみならず、嚴正なる意味に於ける『優秀なる特殊の才能または

[illegible]に於ける「立身出世」の領域に[illegible]たる場合さへ少くないことは、誰れもが熟知してゐる通りである。假りにさうでない場合があるにしても、さういふ「優秀なる特殊の才能または適應性」が、官界や政界やで「立身出世」することのためには、一種の如何はしき「游泳術」に比して、遙かに微小なる効果しか持つてゐないものであることは、疑ひのないことである。そして、さういふ『游泳術に於ける天才』などゝいふのは、明かに「天才」といふ言葉の濫用もしくは誤用でなければ、その曲用である。それからまた、かういふことは、獨り官界や政界に就いて言ひ得られることであるばかりではなく、教育界とか實業界とかに就いても、或る程度までは言ひ得られることではあるが、それは私が今問題にしてゐることでないから、それに就いては茲では姑らく何もいはないことにする。

九

現に例、右の立場から考へるときには、原敬氏がその波瀾の多かつた生涯に於て、名もなき一書生の身から、だん/\と鰻登りに登つて行つて、終にその晩年に於ける顯要の地位にまで達したといふことは、資本主義的社會に於ける流行物の一つで[illegible]るものでこそあれ、それは決して、彼を眞正なる意味に於ける「天才」と呼ぶための根據にはならないものである。彼を嚴正なる意味に於ける「天才」と呼ばうとするためには、彼が常人の可能性を超越した一種獨特の遺傳的素質を持つてゐたことの證明を提供する義務を負はなければならない筈であるが、さういふ證明は、少くとも私の知つてゐる範圍内では、どの新聞記事にも現はれなかつたのである。

殊に、若し「天才」といふ言葉に「創造的」といふ感じを含ませることが必要であるものとすれば、原氏の生涯の記錄のどのページにさういふ種類の活動が書き留められてあるか？　私は是非ともこの點を確かめたいのである。疑ひもなく、彼は思想上に於て何等の創造的貢獻をしなかつたばかりではなく、この方面に於ては、少くとも外面に現はれた彼の言動から察するときは、彼は寧ろ時代後れであつた點に於て、官僚政治家達とさしたる相異はなかつたのである。彼はまた藝術の方面に於て何等の創造的努力をしなかつた——などゝいふやうなことは、それを言ふことからして が、既に充分嘲笑に値することである。この點に關して、彼が西洋畫の鑑賞家としては邦人間の先覺者の一人であつたとか、彼が好んで俳句を弄んだとかいふやうな

ことを引合に出せば、その滑稽さが更らに無限に倍加せられるのである。それからまた、彼が學藝や知識や機械的發明やの方面に於ても何等の創造的活動をしなかつたことは、同様に明白すぎるほど明白なことである。かういふ風に一々詮議立てをして居ると、どの方面を見向いても、彼が創造的工夫を積んだといふ痕跡が、我々の眼にとまらないのである。

かういふと、新聞記事に於て、死んだ原氏に對して『超人』とか、『巨人』とか、『英雄』とか、『天才』とかの尊稱を奉つた或る記者諸君は、或はかういふかも知れない。――『彼は政治上の天才であつたのだから、彼が創造的活動をしたのも、矢張りこの政治方面に於てゞあつたのだ』と。しかし、若し諸君がそんなことを眞顔になつて固執するならば、私は諸君のその主張を、諸君自身が發した他の言葉で打崩すことが出來ることを斷言する。諸君は、他の或る部分で『彼は現實主義の政治家だつた』とか、『白紙主義の政治家だつた』とか、『彼は大勢順應主義の政治家だつた』とか言つたやうな趣旨を、繰返し繰返し述べなかつたか？　そして、『現實主義』とか、『白紙主義』とか、『大勢順應主義』とかいつたやうな言葉に諸君が附與した意味は、創造的『といふ言葉の如何なる定義の中にも含まれて居ない種類のものではなかつたか？

かういふ風に考へて來ると、諸新聞紙が死んだ原氏に『天才』といふ言葉を適用して居たのは、その夢幻的神秘的意味に於てして居たのだといふことが、極めて明瞭になつて來るのである。

それ故に彼等は、彼等が彼を天才呼ばゝりした際には、多分無意識的にではあつたらうが、成るべく直接にその理由を論理的に表示することを避けて、唯何かなしに習慣的に莊重とか幽玄とか思はれさうな――しかしその實、内容の空虚な――辭句をその周圍に並べ立てゝ、それを聽くものゝ推理力を痲痺すると同じ効果を生ずる手段を取つたのである。偶々彼等が例外的に彼等のこの主張を支持するための理由を擧げると、それは却てそれを裏切ることになるといつたやうな滑稽に陷つたのである。また彼等は彼等のこの主張の傍證を求めるために、原氏の日常生活の隅々までを突つ附いて、或は彼が平民振り(！)を發揮してゐたこととか、或は彼が政治上の様々の文書を熱心に閲讀したこととか、或は彼が温浴に浸りながら國事を念慮したこととか、或は彼が故郷を愛したこととか、或は彼が親戚故舊に厚かつたこととかといつたやうな、その事自身では毫も彼の天才であつたことに關係のないやうなことを、さも關係があることらしく言ひ立てたのである。

要するに、原氏は他の如何なる『美徳』を所有してゐたかは

知らないが、[illegible]か[illegible]彼が眞正たる意味に於ける『天才』であつたことは、我々に承認が出來ないことである。彼が自黨に屬する凡俗政治家連をうまく統率することが出來たのは、寧ろ彼がこれらの凡俗政治家連の代表者としての絶好の資格を具へてゐたことの證明にこそなれ、彼が嚴正なる意味に於ける『天才』であつたことの證明にはならないのである。若し我々が、今日の政黨政治家がその日常生活に於て陰に陽に行つてゐることの實際を知れば、嚴正なる意味に於ける『天才』が今日の政界に留まつて居ることが出來ようなどゝは、我々には到底考へられないことなのである。

一〇

それにも拘らず我々は、獨り神秘的意味に於て原敬氏を天才呼ばりをした諸新聞紙だけを咎め立てすることは出來ないのである。現代社會に於ては、どの方面を向いても、それと同樣のことが盛に行はれてゐないところを見ないで濟ますことが出來ないのである。どこへ行つても我々は、一種の概念崇拜の空氣が我々を包んで居るのをも見るし、またそれに關聯して樣々の神秘的意味を持たせられた言葉が囁かれて居るのをも聞くのである。現代社會に於て行はれてゐる信條やイズムの多くは、皆この點に屬するものと見ていゝのである。現在の我國の社會の一部に於て共鳴者を多く發見してゐる文化主義とか、人格主義とか、或はその他の類似の理想主義の流れとかは、少くとも私の知つてゐる範圍内のものは、いづれも皆この範疇を出でないものばかりである。

かういふ信條なりイズムなりは、大抵は皆嚴密なる科學的檢討の前に破綻を示さないで居られないものである。この點に於ては、それらのものは、原始時代以來樣々の形式に於て人類の生活を支配して來た迷信の變形と見ることが出來るのである。科學の萬能的優越を誇つてゐる現代社會に於て、たとへ變形の狀態に於てゞにせよ、原始時代以來の迷信がかうも廣く根を張つてゐるといふことは、一見不思議千萬なことのやうであるが、しかし我々が、迷信と人間の生存との間の關係を考へるときには、この疑問は容易に消散するのである。迷信の起源が何であるにしても、原始人がそれに依つて生の不安を解決しようとしてゐたものであることは、現代人が科學に依つてそれを解決しようとしてゐるのと、少しも異がつたことはないのである。しかも、生の不安が全然除き去られない限りは、幾ら科學が發達しても、苟くも科學の解決が到達[illegible]ない範圍が幾分でも尚ほ存在する限りは、そこに或る形式に於ける迷信も尚ほ存續

する餘地があるのである。

しかも生の不安の問題は、人間生活を圍繞する自然的及び社會的環境の方面に於て、將來を豫測するための知識や技術が進步するだけづつ減退するものであるといふことは、少くとも理論上承認し得られることである。が、しかしながら、人間生活を圍繞する自然的及び社會的環境の裡には、その本質上永久に將來の豫測を許さない一面があるやうに見えるのである。この點に關しては、社會的環境の場合に於て、殊に顯著に目立つてゐるものがあるやうに思へるのである。いづれにしても、この點からいへば、少くとも或る種の生の不安の問題は、人間生活の本質と必然的に不可分の關係に在るものであるやうに見られるところから、苟くも人間生活が存續する限りは、さういふ生の不安の問題もまた、恰度影の形に添ふやうに、いつまでもそこに存續するであらう、といふことが出來るやうに考へられるのである。

が、それと同時に、我々はまた、人間生活の本質と必然的に不可分の關係に在るやうに見えるところの、さういふ生の不安の問題の外に、尙ほ人爲的なる社會制度の結果として釀成される一種の生の不安の問題が存してゐるものであるといふことをも、我々の考慮の中に加へなければならないものである。原始時代から現代に至るまで、人間はその自然的環境と社會的環境――殊に社會制度――との間に挾まつて、限りなき不安の裡に生の鬪爭を續けて來たのである。そして、自然的環境の上に於ても幾分さうであつたが、社會制度の上に於ては殊に、不斷の動搖變革が支配しつゞけて來たのである。で、少くとも原始時代に於ける移住的征服生活が始まつてからこのかた、人間が社會制度から受けて來た生の不安の脅威は、二重的若しくは三重的性質のものだつたといふことが出來るのである。すなはち、移住的征服生活が行はれてゐた原始時代に於ては、被征服群は征服群に依つて設定せられた社會制度そのもののために、直接に生の安定を奪はれてゐたし、これから征服群は又征服群で、さういふ狀態の下に置かれてゐた被征服群の反抗の豫想のために、同じ社會制度からの間接の不安を感じてゐたのである。しかも、その社會制度の上に大きな動搖變革の兆候が見え出して來た時には、征服群も被征服群も共々に、無論それぞれ異がつた程度及び意味に於てではあるが、一樣に不安の脅威の前に立たされたのである。そして、かういふ關係は、さういふ時代から現代まで、一貫して繼續して來たのである。

二

[illegible]代から時代に至るまでの各時代に於て、[illegible]臆い進化や漸敷的の革命を經て、幾度となく變革を遂げて來たが、しかし右に述べた通りの社會制度と人間生活の不安との關係は、今日に至るまで繼續的に反復されて來たのである。今日の世界の文明諸國の社會生活に於ては、資本文化が絶對の優勝的地位を占めてゐるものであるが、しかし、それは最近に於て、既に或る動搖變革の脅威を受けてゐて、そしてこの傾向は、世界大戰以來、殊に顯著になつて來てゐるのである。かういふ情態の下に於て、原始的被征服群の地位の後繼者である今日の勞働階級は、資本的社會制度そのものの下に於て生の不安の問題に面してゐるしまた、原始的征服群の後繼者である今日の資本階級は、さうした生の不安の問題に面してゐる勞働階級の總括的反抗の脅威の前に、同じく生の不安の問題に面してゐるのである。しかも勞働階級も資本階級も共々に、現在の資本的社會制度の根本的變革の兆候が世界的に段々と明瞭に現はれかけた今日に於て、それぞれ異がつた程度及び意味に於てではあるが、一樣に或る種の生の不安の問題に面してゐるのである。

最近の一年間に於て我國の社會生活の上に發出した各種の重大なる社會的事件のどれを見ても、少くとも、或る點に於て、この[illegible]て、この一年の終りに於て、年内に發出したこれらのすべての社會的事件の總勘定を附けるためかのやうに突發した原首相暗殺事件にしても、無論その例めしに漏れないのである。更にまた、世界の資本的諸國家の最後の——若しくは最後に近き——頽廢の表象とも見るべきワシントン會議の如きは、一層大規模に於て右の世界的傾向を反映してゐるものであるに相違ないのである。

兎に角、現在の資本文化の下に於ても、それ相應に生の不安の問題が存在してゐるのである。それは一つには、科學の進歩が迷信に依つて解決し切れなかつた過去に於ける生の不安の問題を一つ一つ解決して行つた側から、近代生活の複雜化の結果として、また新たな生の不安の問題が、次から次へと生じて來たためだともいへるのである。そして、かうした近代生活上の生の不安の問題が、更らに近代式迷信ともいふべき樣々の信條やイズムを産んだものでもある。これらの信條やイズムの中には一見恰かも近代科學に立脚してゐるやうに見えるものも多くあるが、併しそれらの根柢に於て依然科學的分析を許さない神秘的[illegible]幻的要素——若しくは時としては或る種の理想主義的要素ともいひ得られるもの——を含んでゐる點に於て、それらも矢

張り變形したる迷信だといふことが出來るのである。

無論、かういふ種類の迷信以外にも、現代社會には、原始的形式から餘り離れてゐない各種の迷信があるとは事實である。しかもこの事實は、我々が我々の時代に於ても尙ほ近代科學の啓發を、少くとも、接に受けないでゐるところの――若しくは受けることが出來ないでゐるところの――意外に多數の社會的に不幸な集團があるといふ事を考へるときには、その由つて來るところが容易に理解し得られるのである。けれども、多少とも近代科學に依つて啓發せられたサークルの中に於ても、彼等が近代科學に信頼する程度よりも、原始的形式のまゝの迷信に信頼する程度の方が**より強い**ために、より多く後者に依つて支配せられてゐるものもある。それからまた、原始的形式のまゝの迷信には最早信頼しなくなつて來てゐるが、しかし現在の社會制度の肯定のための迷信の他の形式である一種の哲學に對する執着が振り捨てられないために、近代生活上に於ける新生の生の不安の問題を解決しようとする彼等の誠實なる企てに於ても、近代科學が與へた樣々の知識の斷片を根底的構造として用ふることに依つて、新しき形式に於ける神秘的夢幻的世界觀を築き上げようとしてゐるものもある。かうした神秘的夢幻的世界觀は、私が上に『近代式迷信』と呼んだものであつて、そして、最近我國の讀書界の一部に於て持て囃されてゐる或る種の信條やイズムやは、多くはこの範疇に屬するものである。私が本文の標題中に掲げた『天才主義』といふものも、實はさうしたものゝ一つである。この『天才主義』は、『科學の時代』とか『民衆の時代』とかいはれてゐる現代に於ても、尙ほ、民衆間に一般に流布されて活きてゐるものである。最近諸新聞紙が、暗殺せられた原首相に對して、盛に『超人』とか、『巨星』とか『英雄』とか、『天才』とかいつたやうな言葉を、その神秘的夢幻的意味に於て適用したやうなことは、實はこの傾向に投合したものだと見ることも出來るのである。で、私は本文の執筆の初めに當つて、この近代的天才主義の內容を精細に檢討し且つその發生の原理に關する私自身の意見を提出する積りでゐたのだが、最早私が本文のために用ひ得る時間が殆んど盡きかけたから、私はそれを一先づ保留しておくことにする。

二

私は尙ほ、近代的資本文化の結果として生じた社會生活の機械化が、それ自身に對する反動として一般民衆の間に普遍的に一種の好奇心と挑發した過程を說き、且つ、この好奇心を天才主義との交渉關係をも辿らうと考へてゐた。

私はまた、現代の文化主義は、現代の社會制度を維持する目的から、個人的自由競爭主義を引續き鼓吹することに依つて、民衆の獲得的集團運動の要求を防ぎ止めようとして來た經過を略述し、且つ、この個人的自由競爭主義と天才主義とが、その根柢に於て一體をなして居るものであることを指摘しようとも考へてゐた。

私はまた、創造的活動を生命とするところの、**嚴正なる意味に於ける『天才』の出現が、固定し機械化し切つてゐる現在の社會生活に於て、段々と不可能になりつゝある趨勢に觸れよう**とも考へてゐた。

私はまた、**天才主義は、**所謂『潛在的天才』に向つてその顯現の機會を解放するといふことに依つてのみ始めて意義を生ずるものであつて、そしてそれは同時に現在の社會組織の根本的改造といふことを、その必須條件として伴ふべきものであることを附け加へようとも考へてゐた。

その外尚ほ私は、『天才主義』といふ言葉に關聯して行へ得られる限りの多くの事柄を述べ終つた後に本文を結ばうとも考へてゐた。

しかし、原稿締切時間の切迫は、私をして兎も角今は、これらの多くの企てを見棄てしめるべく、私を餘儀なくしたのである。で、私はまだ多くのことを言ひ殘してゐたのではあるが、仕方なしにこの邊で筆を擱めることにする。但し私は、本篇の續稿を近日中に執筆する積りであることをも、茲に附け加へておく。

一九二一―一二―一二

登録 商標

事務ノ澁滯ヲ來サヾル筆而モ縱横酷使ニ耐フ

◎極品八斗才 壹本 廿五錢 ◎貳號自在 壹本 七錢

氣持ノ善キ光ト漆黑ノ墨而モ芬芳ノ香氣アリ

◎櫻印紅花墨 一丁半形 壹圓 ◎わか菜 一丁半形 貳拾錢

鮮カニ氣持良クのびる繪具而モ色彩絢爛ナリ

◎十二色絞出し 壹圓四拾錢 ◎三號六色入 廿五錢

事務ノ進捗ニ炷ノ薫香而モ終日執務ニ倦ズ

◎梅の香 壹入 四拾五錢 ◎あかつき一把 參拾錢

熊谷鳩居堂

京都寺町 振替—大阪二六三八

東京銀座 振替—東京二〇七〇

目録御報次第送呈

平和思想の普及と徹底の爲めに

平和思想の哲學的意義

文學博士　金子筑水

第一

極端な戰爭主義に幾多の誤謬が含まれてゐるやうに、極端な平和主義にも數多の誤解が含まれてゐる。絕對的な而も常識的な戰爭是認——是認といふよりも寧ろこれを奬勵し神聖視する主張が容易に受容れがたいものであるやうに、たゞ盲目的に戰爭を廻避し、如何なる手段を盡しても單に平和さへ得ればそれで宜いと主張する極端な平和主義にも無數の誤解が含まれてゐる。

所謂平和主義——極端な平和主義、其の中には無論尊い眞理も含まれてゐるが、先づ人類生活を餘り樂天的に感じ過ぎるところに第一缺點が有る。現實の人類生活は全世界を通じて決して洋々たる春の海のやうな善美なものでなく、反對に有らゆる意味に於て險惡を極めた世界である。單純な平和論者が考へるやうに、人間性は純粹な親愛と和平とのみに滿ちたものではなく、同時に——少なくとも同時に有らゆる冒險性や突飛性や殘忍性や破壞性やを包んだ複雜性である。理想的な平和が一時に地上に持來たされる如く想像するは餘りに幼稚な空想であつて、人間性の本然は到底斯やうな空想を許さない。然るに極端な平和論者は、人生の斯やうな暗黑面（現實）には目をつぶつて、人類生活をば餘りに善美的に餘りに樂觀的に觀ようとする強い傾向を有つてゐる。そこに此の主張の第一缺點が有る。

更に第二缺點として普通の平和論は、絕對に言葉どほりの太平無事を目的として、人生をばさながら一種の無風地帶——言葉どほりのうらゝかな春の日影の安息日の如く眺めようとする傾向を有つてゐる言ひかへれば、理想の人類生活をば、何等の緊張も冒險も活動も無く、何等の爭論も苦鬪も競爭も無いやうに考へ易いが、普通の平和主義者の通弊である。即ち彼等は武

世に言ふ戰爭を回避し嫌惡し恐怖する結果、如何なる意味に於ても競爭や軋轢や戰ひやを否定し絶滅させたいといふ傾向を有つてゐる。武器に訴へる以外の有らゆる戰ひ——一切精神上の戰鬪さへもこと〲く罪惡視され蛇蝎視される傾向を有つてゐる。けれども斯やうな考察が果たして類生活の實相に徹底したものであるかは甚だ疑はしい。人生は果たして斯やうな醉生夢死的理想を追求するものであるか、果たして斯やうな無緊張なゆるみを追求するものであるか、甚だ疑はしい。武器に訴へる戰爭は避忌されても、其の他の有らゆる意味に於ける猛進や戰鬪やが、果たして全く人生に無關係な事柄であらうか。平和主義者が最後の根據とするキリストさへも、我れは平和を來たさんがために地上に降つたのではないと說いたではないか。例へば絶對の博愛——所謂無我の愛の理想の如きも、どこまでも他との軋轢や戰ひやを避けて、純粹に暖かい愛の泉に浴することを目的とすると主張されるが、然しながら一歩深く突込んで考へれば、こは大なる愛の力を以て他の罪惡と戰はんことを主張する所以で、觀かたによつては、博愛ほど偉大な武器は無いとも考へられるであらう。事實また愛を以ての戰ひほど苦しく深刻なものは無い。故に普通の平和論者が、ひとすぢに盲目的無事太平を主張するところには、確に見のがしがたい缺點が有る。

普通の平和論の第三缺點は、單に人類の幸福を目的とするといふだけで、其の幸福の內容が甚しく漠然たるところに有る。人類の幸福——それは餘りに常識的であり平凡であり政治的口調であつて、誤謬ではないまでも、少なくとも皮相的であり淺薄である。平和はたゞの無事太平のみではなくして、其の中に大きな內容を包んだ平和でなければならない。無內容の平和は無活動の平和と同じく無意味である。何のための平和か。如何なる理想のための平和か。その深い哲學的意義が明らかにされなければならぬ。平和のための平和は到底無意義である。

第二

私は戰爭主義者ではない。寧ろ平和主義者であり、又眞實な意味に於ての平和主義者たらんことを欲する者である。そして眞實の平和主義の主張のためには、吾々は結局、類生活の實相や乃至は、類生活進步の歷史的意義にまでも觸れなければならぬ。先づ吾々はヽ類生活に於ける戰ひの意義若くは無意義を明らかに會得してかゝらなければならぬ。戰ひそのものが本來人間性に取つて如何なる關係を有つてゐるものであるかゞ明らかに會得されなければならぬ。

戰爭は罪惡であり破壞である。如何なる意味に於てもそは廢止され禁止されなければならぬと。此の場合の戰爭は主として武器に訴へる暴力的戰爭である。此の暴力的又は外的戰爭に對して、別種の精神的若くは內的戰爭が有る。私はこれを茲で便宜上內的な戰ひと名づける。廣く內外の戰ひの意義を明らかにするには、先づ內的な戰ひに就いて――暫く暴力的な戰爭から離れて、其の本質を正して置くが便宜である。外的戰爭は畢竟內的戰爭の發現であつて、內的な戰ひが總ての戰ひの本原であるからである。

そこで極端な平和論者によつて主張されるやうに、總て內的な戰ひまでが平和のためにはことごとく無用有害であつて、須べからく禁止され絕滅されなければならないものであらうか。すべての內的な戰ひは、必しも人間性に必然又自然なものでなく、寧ろ完全に人間性から驅逐され除外され得る又得べきものであらうか。若し世間にかりそめにも斯やうな事を考へる人が有れば、彼れは恐ろしい空想家であり又無智者である。何となれば、道德的には正であれ不正であれ、有らゆる意味に於ける戰ひが人間性に固有な事實又は活動であつて、此の活動や事實を取除いてしまへば、或は人類生活は停滯し休止してしまふかも知れないからである。すべての欲望や、すべての目的や、すべての觀念や、すべての活動や、其等が調和完全に實現されて、そこに何等不調な矛盾も不調和も無いといふは、現實な人間生活には殆ど永久に期待すべからざる事ではないか。

矛盾や不調和や罪惡やが有ればこそ、現實的な有らゆる活動が初まる所以で、何等の矛盾も不調和も罪惡も無いところには、同じく何等の活動も起こるべき謂はれが無い。內的意義に於ける各種の戰ひは、道德的には善にもあれ惡にもあれ、人間性に本具不拔な事實であり活動であつて、總ての戰ひを無差別に禁止し絕滅しようとするは、最初から人間生活を禁止し絕滅しようとすると同じである。

道德的に觀て、明らかに不正であり暴力であると批判される戰ひは、有らゆる手段を盡して防禦され杜絕されなければならないが、人間生活には、個人の場合にも社會の場合にも、寧ろ人生の意義として認めらるべき一種の戰ひが有る。人間生活に於ける有らゆる意味の不正や障害や矛盾や罪惡やに對抗して道德的正義の實現を期せんとする精神的な戰ひこれである。斯やうな道德的又は人生進步の歷史的觀察點から觀れば、人生は其のまゝ最も壯嚴な戰ひである。正しい意味に於ける道德的征服が人生發達の意義である。殊に個人若くは社會の理想が高ければ高いほど、其の實現を妨害する故障や困難や不正や罪惡やはい

よ〳〵多くいよ〳〵大きい。有らゆる意味に於ける無價値や不正やを打破して進むところに人生の深い意義が有る。活動や戰ひやは飽まで人生の意義であつて、それが無いところには人生も無い。絶對の無風――何等の戰ひも活動も無いところには遂に人生の成立する謂はれが無い。

第三

人類生活の實相は斯やうに不調和矛盾に滿ちたもの、そして一種特別な深い意味に於ては、人類生活は直に戰ひそのものであるとすれば、吾々が如何に平和の意義を考ふべきかは、多少こゝから明かに成つてくる。吾々は平和主義者として飽まで外的戰爭――武器に訴へられる社會的若くは國家的戰爭の絶滅を理想とするが、果たして此の種類の戰爭が近い將來に於て根絶されるであらうかは甚だ疑はしい。吾々は飽まで強く平和を希望し、又其の實現に努力しなければならないが、然し吾々はそれがために、空想家妄想家と成つてはならぬ。人類生活に取つて、内的に精神的に各種類の戰ひの存在が事實であるかぎり、そしてまた道徳的に不正であり暴力であり罪惡であるやうな各種類の戰ひの存在が事實であるかぎり、斯やうな内的戰鬪はいつ外的戰鬪と成つて現はれないといふ保證は到底つけられない。内的にさま〳〵な矛盾や突飛やが現はれるやうに外的にもいつ斯やうなものが現はれない限りのものでない。或は最近の世界戰爭は、すべて斯やうな戰爭は一切人類生活の破壞であることを教へたから、此の種類の暴力的戰爭は最早永久に絶滅するものと見て、差支ないと判斷する人も有る。けれども斯やうな判斷は頗る不確實なものであることを忘れてはならぬ。人智の發達は無限である。將來如何なる新らしい國家戰爭が發明されまいものでもない。

こゝから吾々は永久平和の深い意味をも推測することが出來る。所謂永久平和は永久の將來を期して初めて實現される平和の意味をも含むもので、永久的平和が一時に實現されることは到底望まれない。眞の平和主義に取つては、平和は常に理想であつて現實でない。此の理想が全力を致して實現さるべきは言ふまでもないが、完全な實現は遂に永遠の將來に於てのみ期待さるべきである。斯くの如きは決して平和主義に不安と絶望とを與へるものでなく、寧ろ反對にます〳〵大きな元氣と希望とを之れに與へる所以に外ならない。

更に特殊な内的戰鬪が人類生活に取つて深い意味を有つてゐるかぎり、平和といふ事は、假令武力的戰爭の廢止を意味しても、總ての内的戰鬪の廢止までも含むべきでないは明白であ

る。又事實內的戰鬪まで絕滅しようとしても、それは到底實行すべからざる不可能事である。然かも此の內的な戰ひが、假令それは道德的な又は人類の進步に取つて必然なものであつても、外的に武力の形を取つて現はれることは絕對に禁止され絕滅さるべきであるとすれば、斯やうな內的の戰ひは何等か適當な正當な他の方面に向かつて開發されなければならぬ。換言すれば　人間性には遂に絕滅すべからざる戰鬪的本能が有るとすれば、それは武力的戰爭といふ形に於てではなく、人類生活の進步に必然な他の形式に於て發展されなければならぬ。人類生活の進步に必須な他の形式とは果たして何か。これが尙こゝに殘つてゐる問題である。

第四

私は前に平和主義は無內容な平和主義であつてはならないと言つた。無活動無向上の空虛な無事太平主義は決して眞の平和主義の謂でない。然らば平和主義の內容――平和主義をして眞の平和主義たらしめるものは何かといへば、矢張それは嚴密な意味に於ける文化戰爭であると答へざるを得ない。人間性に本具な戰鬪的本能は、これまでの武力的戰爭から非武力的な文化戰爭の上に遷されなければならぬ。人類生活の進步に必然な他の形式とは、卽ち世界歷史の眞義を達成する文化戰爭の一事に外ならない。個人と個人との間にも文化戰爭は行はれるが、私はこゝで主として民族と民族、國家と國家、世界の諸民族、諸國家の間に行はれる文化戰爭に就いて考へたい。言ふまでもなく世界に於ける優秀な民族や國家やはそれ〴〵特殊な文化―嚴密な意味に於ての民族生活乃至民族精神を以つてゐる。個人がそれ〴〵特殊な個性的開發を示すやうに、苟も優秀な本質を備へた民族はそれ〴〵特殊な文化を發達させて他民族と對立する。或者は政治的組織に獨得な傾向を示し、或者は科學的知識に優秀な天賦を有ち、或者は　術や哲學に、また或者は道德宗教に特殊な傾向を示すといふ如く、各民族はそれ〴〵特殊な文化を備へてゐる。世界歷史の哲學的意義は、世界の諸民族によつて造り上げられる世界文化の向上發展であつて、世界文化は卽ち世界諸民族特殊の諸文化の綜合乃至シムフオニーに外ならない。故に世界文化の發達は、人類生存の窮極目的であつて、各民族も各國家もことごとく此の窮極目的の實現と完成とに努力すべきである。世界平和の眞義はひとへに此の點に存する。世界文化の向上を除外しては世界平和は無意義である。世界平和は世界文化によつてのみ存立の理由を有する。

世界の諸民族間に於ける文化戰爭は文化戰爭を意味する。互

に特殊な文化を發達させて、他の文化と對抗し競爭することを意味する。此の場合人間に固有な戰鬪的本能は、主とし各個人や各民族がそれ〳〵高い文化に向つて勇猛精進せんとする努力そのものに適用されて、國と國乃至民族と民族との文化的對抗には、相互の尊敬や謙讓や扶助の精神やが著しくなるべきである。譬へば個人と個人との對立が相互の尊敬と推尊とに存するやうに、それ〳〵特殊な文化の對抗も、矢張同じ精神の下に行はれなければならぬ。さあれ大觀すれば斯やうな莊嚴な文化戰爭も今日に於てはまだ高い〳〵理想であつて、此の理想の實現は今のところ決して容易だとは考へられない。世界平和が高い〳〵理想であると同じ意味で、世界に於ける文化戰爭も今尚高い〳〵理想である、たゞ此の理想は全く實現すべからざる空想ではなくして、十分實現の可能性を備へた理想――又如何なる手段を盡してゞも實現されなければならない必至的運命を備へた理想である。平和主義が斯やうに高く且深い理想であるところに無上絶對の權威が存する。

平和思想の徹底のために

千葉龜雄

平和思想の普及と徹底とを考へるものは、先づ歴史からの超越と飛躍とから出立せねばならない。歴史からの超越と飛躍とは何を意味するかとなれば、それは先づ新らしい文化の權威によつて、我等を拘束する一切の歴史の、法條と傳統を蹂躪し去ることから始まるのである。一切の新文化の權威に奉仕することからのみ、刻々の新しい生命が、始めて現在と當來に向つて創造される。漲ぎる此の生命の神秘を信じ、窮まり無い創造の飛躍を信ずるものにとつては、ヘエゲル一派の、錘子的歴史進化の理法の如きは、何等の權威をも持つことが出來ないのである。

歴史が人生に持つ重大な錯誤の一つは、或ひは偶然であつたかも知れない幾多の相似た現象が起つた場合に、それを直ぐ人生に不可抗力であるところの嚴肅な進化の一理法であると歸納して考へることである。たとへば戰爭である。

ある進化論者は、人性の本能は性慾と共に鬪爭心であると云ふ。性慾の方は種族保存の意志が無意識に現はれたものとして承認することが出來るのであるが、鬪爭心は果して本能と云ふべきものであらうか。もし鬪爭心が本能であるとしたならば、同時に起つて、しかも鬪爭心と對蹠の地位にあるところの、父母兄弟或ひは自分の團集に對する親和性をどう解釋したものであらう。もし父母同胞、或ひは隣人、或ひは自分の團集に親和

を遂げられることが出來るならば、更に同じ理由を他の團集に達する事が出來る筈だ。そして更に其の汎愛をあらゆる集團に擴大することも、そう六づかしい事とせずに、出來る筈であらう。どうして鬪爭心がどうしてもそれに對立せねばならぬと云ふのか。

もしまた鬪爭心が獨立した一つの本能であるならば、彼等は鬪爭を一つの遊戯として、單にそれだけの獨立した目的で到所に悲慘な血鬪を演ずべきである。然るに彼等の戰鬪には、全く戰鬪本能だけに刺激された、無目的な戰鬪は餘りない。もしそれが一人と一人の爭ひであるならば、それは甲が乙の所有を奪はうとした場合か。若くは乙が甲に或る傷害の報償を求めた場合かであつて、決して單獨な爭鬪それ自身の目的から起るものではない。この例はAの部落とBの部落の鬪爭にも引用される。即ちAの部落がB部落と鬪ふまでには、その原因として必ず何等かの憎惡或は怨恨があつて彼等を驅つてそこに至らせる爲である。すれば之れもまた單なる鬪爭本能の結果ではない。つまり此場合鬪爭は、その憎みや怨みを解決する一つの手段であつて目的ではないのである。

概して一の部落と他部落との鬪爭は、大抵の場合、自己の部落に對しての爲に、他の部落を滅ぼし、我に屈服させようといふ鬪爭である。だから其結果から推せば、所謂は自己及び自己の種族を愛する爲の爭鬪であることに還元される。さらば愛こそは却つて其の本能であつて、鬪爭は愛の本能の反證とも云へるのではないか。

すでに鬪爭心が、必ずしも其の本能でない事がわかつた。夫れで居て鬪爭の止まない理由は何であるかとなれば、それは彼等が無知である爲めである。無知であるが爲めに、彼等は生命の價値のいかに重大であるかを知らない。もう一つは未開な單純な彼等の生活には、知識や理知や、道徳の何一つを恵まれて居ない。賦へられてあるものは唯だ暴力だけである。つまり彼等は撰擇のない生活を課せられて居る爲に、暴力以外によつて正義を裁斷する方法が絶對になかつたのである。

更に他の一つは、彼等が理知と道徳によつて正義を解決する方法を知らない爲に、多少の紛擾や葛藤があれば、やゝもするとそれを直ぐ暴力に訴へるめたに、自然と鬪爭の可能性を殖す多くした譯なのである。

斯うして見て來ると、もし彼等にして其生活の理解と愛情がもつと他の途を行つて居たならば、其の現はす結果に於いても、

全く違つた世界が出て來たであらう。そして恐らく充分に愛によつて包擁されてあるべき世界が、彼等が無知で且つ暴力以外を持たなかつた爲めに、徒らに無用の鬪爭と葛藤を惹き起しつゝあつたことを深く理解するであらう。

ところが多數の歴史家は、この見易い誤謬を發見することが出來なかつた。だから歴史の上に、戰爭が引續いて現はれたことは、過去、の無知がそれを敢てせしめたもので、それは決して全然救ふ事の出來ない禍でないに係らず、彼等は何故かその複雜した心理に眼を閉した。そして唯だ夥しい戰史表を一瞥しただけで、鬪爭性は人間進化の必然の過程であり、本能であると斷定した。已にそれだけでも重大な罪惡であるのに、なほ惡い事は、それが人間心理の本能である故に、個人、國家階級の葛藤を解決する手段は、唯一鬪爭の外に無いと云ふ觀念を凡ての人間に養ふ結果を見たことであつた。斯くして戰爭は重大な必要な罪惡（ネセッサリー・イーヴル）と呼ばれたのであるが、考へても見よ、罪惡に必要なものがあつて好い譯のものか。近代人の意識の昏亂は實に之ほどまでに甚だしくなつたのである。そして近代文明の曙と呼ばれる十九世紀の後半期たる一八五四年のクリミヤ戰爭から以來十九世紀最後の一八九九年の第二ボア戰爭まで、世界中の大戰と呼ばれるものが實に十四以上にも及んで居るのである。

だから我等が歴史からの超越と飛躍を唱へるのは、一面に於いて、歴史の蒙昧と迷信からの超越と飛躍を高調するのである。たとへば鬪爭性を人性本能の第一義と假定してもよい。人道愛に沒入し、理知の人間生活に目覺めた我々は、その理知と愛の討檢によつて、たやすく其本能からすらも解放され得るのである。ましてや鬪爭性が種族愛、民族愛、階級愛を完全に保護する爲の一つの作用機關と見做された者に過ぎないならば。そして現代に於いて、鬪爭性などに依賴して愛を保護することは、却つて愛の尊嚴と本質を全然に傷害するものであることを知るならば。そして種族愛、民族愛、個人愛の凡てを渾一して世界愛、宇宙愛を創造することが、現代の人生唯一の幸福であり、目標であり、そしてそれが愛本能最初の出立點でありそして終結の歸着點であるならば、何故我等は人生最後の目的として、この目的の體現に力めないのであるか。此場合鬪爭心などを、荷厄介にする必要は少しもない、それは意識しない中に自分で自己の影をかき消して了ふものだからである。我等の新創造の世界とはそれを指すものである。

しかし鬪爭心を第一義の必然性と認め、戰爭を止むを得ない罪惡と肯定する爲にこそ、平和と人道は弱者の不平と考へられるやうになつた。グスタアヴ・ル・ボンでさへも、そうした心細い觀察を述べて居る。彼れは戰爭を否定すべき四箇條の項目を數へて(第一)戰爭の爲めに酷い目に逢つた國民が戰爭を憎惡する感情、(第二)人道的思想の發達(第三)ますます國民共存を必要とする自覺(第四)最近の科學の發達等を擧げて居るが、第二の人道的思想の發達に關しては、これまで「人道的思想などと云ふものは、それを尊んで居る國民を却つて弱くするやうな傾向を與へて居た。そして其國民は、いつも他方に平和主義などに少しも動かされずに居た他國民の、不意の侵略の犧牲になる事が多かつたのだ」と、說いて居るが、之れは間違ひだ。

戰爭を基調として肯定すればこそ、結論はいつも戰爭での解決へ還つて來なければならない。思ふに戰爭を以て世界を平和にしやうとするのは、却つて步一步ごとに、拔きさしの出來ないほど深い戰爭の渦へ世界を引き込むことでなければならない。丁度阿片の喫煙者のやうなものだ。ますます其の惑溺を深くして行つて、遂には自分の意志で自分が自滅する外はなくなつて了ふ。

戰爭は、それが起つて居る期間だけを考へることに入れてはならない。起らうとする前の緊迫された氣分の世界、終つてから後の、それによつて惹き起された諸種の不安、混亂、悲慘を總括することによつて、始めて戰爭の慘禍の全額が、はつきりと頭腦に印象される。パトリック博士は、世界大戰に先だつ米國國民の心理狀態が、怖ろしく刺激的で不安で落着かなかつた一例として、タンゴ踊と、下劣な活動寫眞の素晴しい流行を擧げて居る。そしてそれはフロイドの潜在意識が教へるところの、壓迫された心理が何處かに逃口を求めやうとする生死の鬪爭である。世界大戰は不可抗の發現であつたのだと結論する。歐洲各國の戰前が、夥しい不安焦燥の雰圍氣に襲はれてゐたことは、フランシス・グリアスンも亦たこれを承認して居る。さてかうした不安の爆發から始まつた歐洲大戰は、その終止の後にどんな新しい慘害を惹き起して來たか。國際戰爭の禍根は少しも取りのけられないのに、一方階級戰爭の深刻さは惡から更に最惡に向つて進んで居る、そして大戰後もう五年になつても、猶ほ混亂の深みへ陷ゐつて行くに過ぎないのである。然も悲慘な戰爭の感化がいくらか稀薄になり、平和の時代が續きさうになると、國民は直ぐ頽廢と自墮落と無節制への生活をむさぼるやうになる。そしてまた其處に戰爭によつて之を解決しやうと云ふ

叫びが起る。何時まで經つても割り切れない循環小數である。際の答である。

それは何故であるか。人類が無知な爲めである。戰爭はいつも、それがあるが爲に、却つてより大きな禍亂を後世に遺産するものであるのに、多數の人類は、それが却つて人類を幸福にするものだと云ふ飛んでもない歷史からの誤想に信賴するからである。殺戮者の亂暴な外科手術に感心して、一時の安心に耽るやうなものである。彼等はまた無知であるが爲に、歷史を運命であると迷信する。だから新しい生命の神秘を信じて新創造の世界に飛躍し得る可能性と希望を持得ない。彼等はまた諸種の葛藤の解決を、直ぐ戰爭に持つて行くところの、單一で野蠻な者への持主である故に もつと人間的な、文化的な、方法に依賴すべき暗示を一度でも感じたことが無い。それは要するに文明が皮相であり、人類が無知であつたからだ。

しかし平和の黎明は遂に開かれずには居なかつた。それは世界大戰の戰慄すべき實物教訓によつてである。思へば人類の無知の惑溺は長過るほど長かつた。そしてこの無明の迷ひを覺ますべき大獅子吼は、先づ人類愛の合理性を基調として、世界愛、國際愛を力唱し、一切の戰爭を否定する自由思想家の群を通して起つて來た。更に他方には熱烈な國際戰爭否定の叫びが、社會一切の特權を否定するところの社會主義者の方面から起つて來た。彼等は先づ我等は何の爲に戰はねばならぬかと自問するのである。戰爭は我等民衆にどんな利福と希望を與へたかと自問するのである。此答案は何であつたか。それは戰爭が民衆の血稅を踏臺にして、資本家階級や特權政治家の所有慾の組織を擴大して行くに過ぎなかつたことを悟つたことである。戰爭はます〳〵非差別の障壁を堅固にして、民衆の悲慘を增加して行くに過ぎなかつた。われ等はこれほどな慘酷な事實に當面しながら、猶ほ何が故に自分の意志を虐げてまでも、彼等の不正を存立させねばならぬのか。

かくして戰爭否定の聲は、殊に此の二つの方面から力强く叫ばれて居る。彼等の背後には死を以てしても動かせない强固な意志と熱烈な人道的精神がある。それは前時代に叫ばれた弱々しい宗教家の神の宣傳ではない。死よりも强い强烈な人類の信念である。それは全く前時代に見られないものであつて、文化の黎明である新時代直ちにそのものの聲である。なるほど彼等特權階級者は昔時の幻想に執着して、今でもどうかすると、シヨウギニズム萬能を振翳すのであるが、たとへ彼等が何ものか

に向つて宣戰したにしても、今日では民衆の誰が彼等の代に戰はうといふのであるか。あらゆる××と××とを意識せずに、それを平等化することを理想とする民衆にとつて、ある××以外にどこに戰ふべき當面の敵人があると云ふのか。もし彼等の戰ふべきものがあらば、それは寧ろそうした××と××の差別を必死に擁護しやうとするところの、そうした無知な×××そのものに向つてであるかも知れない。

かくして世界は、空虚な平和の宣傳に依頼せずに、實質的な、強烈な戰爭否定によつて自然と戰爭の可能性を少なくしつゝある。そしてもしか或る戰爭が開ける場合にあつては、それは自分達の××及び××の××と××を期待することなしに、それを實行することの不可能であるとはエッチ・ジイ・ウェルズの說く所である。

も一つ世界女性の權力と地位が平等に向上される傾向も、自然に戰爭の可能性を減殺する、有力な一つの要素であることを私は信ずるのである。

軍國主義の專制の下には、婦人は其の生活を保障されることが出來ない。何故かなら、男性が市民權を獨占するやうになつた歷史は、彼等が戰爭を市民第一の義務として採り上げた刹那から始まつて居るから。そして國際の殺し合や、黨派での同民殺合や、長い期間の征戰などもいくらか少なくなり、民衆の氣分と理知がもつと人道的に、合理的に、社交的になつた時代に於いて、始めて女權の存在が段々と認められて來たからである。だから女性の幸福にとつて、決して戰爭は其の仲の好い友達ではない。

更にそれを女性本念の愛情から眺めたものは、アウグスト・ストリンドベルグの「獨逸中尉」に現はれて居る世界人的思想である。

そこは世界人的思想の巣と云はれる瑞西の或る一日である。そこでは獨逸の一退役中尉を中心とした、職業の違つた西、佛、英、露の一人づゝの紳士達が墺國其他の夫人達と一緒に戰爭について話し合つて居る。

西班牙人が反問した。「然し、戰爭、——戰爭、——戰爭は決して止まぬものだらうか」

「婦人が投票權を得る曉には、戰爭は段々なくなつて了ふさ。さうぢやありませんか、ね、奥さん」と獨逸中尉が自分の夫人に尋ねる、夫人は尤もだと云ふ風にうなづいて見せた。

獨逸中尉は言葉を續ける。「何故かなら、どんな母が、どんな妻が、どんな娘達が、其子を、夫を、兄弟を喜んで戰場に送

り出すものがあるだらうか。お互ひの間に、人間をいら立たするやうな人間さへないならば、所謂民族憎悪など云ふものは其日から消滅する譯のものぢやないか。

「人間は好いのだ。しかし團集が悪いのだ」と我等の友ジャン・ジャクが言つたが之は尤もだ。何故人々は、此の瑞西のやうな美しい國に居ると、ずつと心持が平和になれるのか。何故彼等は他國に居るよりも、ずつと滿足氣に見えるのか、それは彼等が彼等の上に、支配され、監督される教師を持たないからだ。そして自分自身の意志によつて生活を支配し得るからだ。あらゆるものの上に、彼等は何等の嫉妬したり、煩え悩んだりするものを持たないからだ。ここには、氣の弱い無知者の賛嘆をそゝるやうな、王様の家來もなければ、軍隊の檢閲も無い、またどんな大袈裟な華美な觀物もない。そんなものは皆な見せかけの虚僞に過ぎないのだ。瑞西こそは未來の歐羅巴が建設すべき、小型な縮圖そのものであるべきだ。

　すると西班牙人がひやかして「君は樂觀論者だね」獨逸中尉が答へる。「元はこれでも悲観論者だつたのだが」すると西班牙人は言葉を續けて、「君はすると、たつた三百萬の人口と、三箇國の言葉だけしきや持たぬ此瑞西にそれが出來ると云ふて、全歐洲までが凡て同一に夫れが出來ると信ずるのだね」

　獨逸中尉が一寸答へに躊躇した刹那に、墺國人である一人の貴女が傍から直ぐ答へた。「貴方は歐洲は六七種の國語を持つて居るから解け合ひが六づかしいと云ふのですね。それから澤山の國家が混入して居るから親和が六づかしいと云ふのですね。それなら私は貴方に見せて上げたいものがあります。そこでは有ゆる歐洲國民の代表者を入れ交ぜた上に、支那人、日本人、黒人まで凡て二十箇國の國民を立派に統合して居る或る國民があります。恐らくそれは未來の國際國となるでせうか——そうです、私はそれを私が嘗てすまつて居た——亜米利加——に見たのです。」

　英國人が叫んだ。「ブラボオ！西班牙君負けましたね」

　私はこの偉大な一藝術家の胸に宿つた素晴しい理想を、一つの理想だけであるとしては信じない。

　それにしては我日本である。親愛な日本の友であつたラフカヂオ・ハアンは、嘗て日本は文化の爲に何一つの創造をもして居ないと批判した。全たくさうである。今でも大體そうである。日本は軍備を別にしては、今まで平和の世界に於ける文化

の創造の殆んど何ものにも參加して居ないと云つて宜しい。さらば日本の民衆は、果して戰爭の無意義を提唱するところの、文化の創造に何等の關心をも持たぬのであらうか。

少くとも、ストリンドベルグが信賴して居たところの、女性の人道的理知だけにでも賴むに足らぬのであらうか。最近東京市内の一高等女學校で、軍備縮小についての意見を洽く女學生達に求めたが、其答案として與へられたものはどうであつたらう。却つて擴張論を唱へるものが過半數で、縮小論は驚ろくべき少數に過ぎなかつた。又た一女子大學の婦人教授は米國へ渡航する土產とする爲に、女子大學生達の軍備縮小に關する一班投票を求めた。そして玆でも求め得られた結果は意外であつた。それは擴張論が大變過多で、縮小論が恐ろしく景氣が悪かつた。其爲に折角興味のある其の土產物を中止したと云はれる。さらば愛の女神であるべき我が日本の若い女性達をして、此の矛盾を採らしめた心理は何であるか。それは彼等が教科書として授けられるところの日本の歴史と地理と倫理との浸潤が最も力強いものであると、凡ての思想と經驗を豐富に持つ教育家達は答へる。

さて、こゝに存在する重大な矛盾を我等はどう解決したら好いものか。

強大國自ら率先せよ

文學博士　三宅雪嶺

◇

孔子も釋迦も耶蘇も、平和を說き、寧ろ絶對平和を說き、其れも或る區域内に普及して居つて、平和に續かぬのみか、往々戰亂に次ぐに戰亂を以つてして居る。近頃國際聯盟が起り、關係諸國に於いて聯盟の趣意を普及する事になつて居るが、普及した結果が平和を保障し得るかどうか。其處で思想が實行に何の効力あるかゞ疑問になる。如何に平和の望ましきを知り、之を口にしても、到底戰亂を妨ぐ事が出來まいと云はれる。論より證據、過去の歴史が遺憾なく之を證明するを失はぬ。

併し平和思想が眞に普及して居るかどうか。平和を說きさへすればならぬ、平和で續かねばならぬといふ事は廣まつて居つて居、それが平和思想であると云へぬ。思想でなくて命題であり、題目である。南無妙法蓮華經は題目であつて、思想でない。從來儒教に、佛教に、耶蘇教に說く所の平和は、簡單なる題目でなくても、殆ど題目と選ぶ所が無く、平和とは何であるか、如何に何故にとなつては、特別に說いて居らぬ。十分に說いても、それで實行に力あるかゞ疑はれるが、未だ曾て十分に說いた事無く、

今日でも十分に說かず、十分に說き得るかゞ疑はしい。

◇

一口に平和と云へば造作も無けれど、精しく說かうとなつては頗る難問題に屬する。若し十分に之を說き得たならば、それで平和を保障し得ると云ふて誤るまい。戰亂の絕えぬのは、平和の必要が十分に解らぬのにより、十分に解らすの試みが未だ曾て無かつた。題目ばかり唱へ、題目で事が濟むと考へた。今日一般に平和を唱へながら、何の爲めに唱へるかとなつては、解り切つた事と云ふに止り、其解り切つた事が餘り解らぬので仕方が無い。儒教で仁と言ひ、佛教で慈悲忍辱と言ひ、平和を說くにしても、特別に平和運動といふやうな事ないが、基督教で頻りに平和運動を興し、それでいよ〳〵開戰となれば、敵は敵で神に祈り、味方は味方で同じく之を祈り、左に神を祈るのである。佛教でも頭に佛像を頂いて出るのがある。神は双方から祈られて、如何にすべきであるか。要するに平和の題目を唱へ、解釋は各自勝手に付ける事になつて居る。一々細かく利害得失を說き立て、人が合點し得たならば、濫りに戰ふやうな事あるまいに、左うは行かず、題目のみで濟まし、題目を唱へつつ戰場に出づる事になる。何處からか十分に平和を說き得る者が出ぬであらうか。人が一生懸つて出來るか出來ぬかであり、今日まで題目のみで過ぎ來つたのも不思議は無い。之を十分に說き得る時代は、即ち平和の保障せらるる時代でないか、近い將來の文化程度で之を爲し得さうもない。

◇

今日まで平和は、戰爭に疲れ切つた揚句になつて居る。勇んで戰場に出で、戰死は君の爲の國の爲めであるとし、出來るだけ多くの人を出し、双方取り疲れて平和の相談を初めるやうになる。强い者が弱い者を攻め滅し、平和を望むのは、最早戰ふべきものが無く、面倒が起らぬやうにとの事である。四國と二十幾ケ國と四年半も戰ひ、戰死七百萬人を出し、漸く永遠の平和を圖るとし國際聯盟だの國家聯合だのを企てる事になつた。なか〳〵議論で埒明かず、腕力沙汰でなくては事が濟まぬらしい。喧嘩した後に考へ直し、餘計な事をしたものと後悔したりするが、喧嘩を罷めようと云ふ位では、罷められぬ。矢張喧嘩を面白いとし、喧嘩好きなのが多く、傷付いて痛い目に遭へば、獨り手に喧嘩を控へると云ふ程のものである。勝つか負けるか打ち合つて見ろと云ふ方が早手廻しである。

◇

何が何にしても此大戰役を經、時代を持切れぬといふ國がいくつも出來、此上戰亂が起つては仕樣が無く、何とか締りのつくやうにしたいとの希望あるのも尤もである。さういふ事が無ければ、永遠の平和を望まうとせぬ。然し國際聯盟は中途半端であり、國家聯合は未だ成らず、それが出來上つても、平和を保障し得る事が覺束ない。國際聯盟は中途半端であつても、折角委員が集つて居るので、精しく世界人類の利害を取調べ、如何にするのが最も有益であるか、案を立てゝ見てはどうであるか。事細かく調べ上げれば、列國の有力者中成程と思ふのが少くなからう。並一通りの案では役に立たず、今の國際聯盟だの國家聯合だのは、燒石に水たるに過ぎぬ。現在の國家では何の規約を設けても、武裝平和であり、罷り間違へば直ちに發砲する事になる。期間の永い休戰條約である。奈破烈翁一世は列國を平均し、戰亂の起らぬやうにしようとの意であると謂つたが、自分で勝手に國を大きくし、頻りに奪取りしては、如何に平均しても、自分の爲めの平和であり、歐洲の爲めの平和ではない。

◇

併し今のやうに國に大小があり、大國が小國を威壓して居ては、何としても平和で續きやうが無い。今の國境と云ふものは、戰亂を挑發する主なる原因である。地廣く人少いのがあり、地狹く人多いのがあり、國境で人の交通を妨げては、衝突の起らぬ譯に行かぬ。狹い地球にいくつも關所を設け人を通さぬやうなのは、人類進歩の幼稚なのを示す。行政區劃として國境を存置して置くのは可い。互に相敵視するに至つては、人類に累ひするものに外ならぬ。平和思想は現在の意味に於ける國境を撤廢するに重きを置かねばならぬ。即ち或る區域の法律に從ふ限り、何處の何人でも自由自在に生活し得るやうにするを要する。今日世界で最も勢を得て居る英國及び米國が、最も國境に重きを置いては、平和の保障仕樣が無い。之れからして改めねばならぬけれど、英や米や到底之を承知せぬに定まつて居る。小國が多く聯合して大國に迫るの勢を生ずれば、尙ほ何とかなるであらうが、それも容易に行はれぬ。

◇

併し折角平和運動が起つて居るので、成べく効果の擧るやうにするに若くはない。中心事業として人類の幸福增進、又は世界い文化向上の爲め、列國から割前を徵集し、政府の歲入の多い國ほど多く負擔する事にし、それで廣く世界人類の爲めに圖る

事にしたならば可からう。所得税徴集で收入の多い者ほど多く出すが如く、富國の負擔を重くし、廣く世界の爲めに圖る事にすれば、徒らに聯合するよりも効能がある。大國が大負擔を背じなくては、平和の圖りやうが無い。列國で巨額の金を集め、それで世界人類の爲め國境の意義を變じ、國境の爲めに戰はなくてもいゝ事にしたならば、尙ほ所によつて戰亂を起すにしても。最近世界戰役の如きを再びするやうな事は無からう。米國は時として突飛な事を敢てするが、此處で自ら進んで軍備制限より得る所を、悉くかゝる方面に轉用してはどうであるか。今の米國の勢を以つてせば、他國も習はずに居れぬ。日本で明治維新の初め、强藩 封土奉還を唱へ、他も之に習つた。世界平和の爲め、最も力ある國が率先して自ら義捐する所無くてはならぬ。それが行はれぬならば、如何なる計劃も効果に乏しい。

平和思想の普及と徹底について

本間久雄

どちらを向いても不安である。今にも何か起りさうである。丁度嵐の前の空模様を眺めてゐるやうな心持である。と、いふのが、恐らく、此頃の吾々の心の中の僞らない感じであらう。

日々の新聞でワシントン會議の様子を見てゐると、吾々が世界大戰中に新聞紙の記事を讀んで抱いたより、より以上の不安に襲はれる。世界 類の平和のために各國の代表たちが腦漿を絞つて計畫協議しつゝあることが、不安の念を吾々に抱かせる筈がないわけでありながら、事實はその反對である。國際聯盟が成立して、國際間のことが圓滿にゆきさうでありながら、而もそこに何かしら、腫物にでも觸るやうに、そつとして置かないと危いと、相互に誡め合つてゐるやうな、不徹底な、もどかしさがある。

國際間のことは暫く措いて問はないとして、吾々の手近かな周圍を見廻して見ても、そこには一層の密度において不安な、暗憺とした雰圍氣が漂つてゐる。最近の原首相の暗殺事件の如きも、社會的に見ると、それは決して一原氏對 中岡某の問題ではない、寧ろこの不安な暗憺たる雰圍氣の醸し出した一つの必然的な偶發事と見るべきではなからうか。

かやうにして、吾々は、あらゆる方面において、得體の知れない「不安」に面接してゐる。

しかし、これはいつまでもつゞくべき現象ではない。どうい

ふ方策かで、やがては別な方面に發展さるべき現象であらねばならない。

そしてこの場合吾々が唯一のたよりとするところ——それが即ち本當の意味の平和思想を根柢とした方策によつて、平和思想を一般國民乃至民衆の間に本當に普及させ徹底させることである。

○

平和思想とか平和主義とかいふ言葉は可なり云ひ古された言葉である。從つてそれに盛られた內容の意味にも今日まで可なりの變遷のあつたことは云ふまでもない。

ある時には平和主義又は平和思想は無抵抗主義と解されたこともあつた。例の馬太傳の中の「惡に敵する勿れ。人なんぢの右の頰を打たば亦ほかの頰をも轉じてこれに向けよ」といふ文句を根柢としたトルストイの無抵抗主義などは、たしかにその代表であつた。

しかし、今日吾々の云ふ平和主義はさういふ無抵抗主義ではない。それは所謂ソリダリテイの觀念を基礎とした平和主義である。蓋しこのソリダリテイの觀念に人類愛の感情の裏づけられてゐることは改めて云ふまでもない。

このソリダリテイの觀念が國民の觀念の中心となつたとき、そこに本當の國際主義が生れる。アウストリアの社會學者ゴルドシヤイトは、このソリダリテイを根柢として「愛國的世界主義」といふことを說いた。

世界各國の永久の平和は、たゞ世界各國の「目的合同（パーパス・ユニオン）」によつてのみ可能である。蓋しこの目的合同とは、各國がそれぞれ互に侵略することなく、獨立してゐて、而も各國に共通した利益を目的として合同することであるが、さういふことはソリダリテイの觀念を基礎としてのみ可能である。ゴルドシヤイトはから說いた。そして彼れは偏佚な國家主義即ち自國の利害打算の觀念にのみ囚はれて他國のそれを顧みることを忘れてゐる所謂偏狹な愛國心を基礎とした國家萬能の國家主義を痛烈に批難してゐる。

ゴルドシヤイトの所說は無論肯綮に中る。偏狹な愛國心や偏狹な國家主義が世界平和を攪亂することについてはこゝに云ふを須ゐない。そして又さういふ偏狹な國家主義世界主義を裏づけない愛國心が各國民の間から取り除かれない限りは世界平和が決して保證されないことについても、こゝに改めて云ふを須ゐない。

○

私はこゝで平和主義そのものについての論議を試みるつもりではなかつた。私のこゝで考へたいと思ふのは如何にすれば、さういふ平和主義が實現されるかといふことについてゞあつた筈だ。

ゴルドシヤイトの平和主義は主義そのものとして世界平和を思ふものに取つて恐らく異を樹てるものがないであらう。理論としては、學説としては、今日の人で、もはやこれを承認しない人は恐らくないであらう。しかしそれの實現されるためにはそれが單に理論としてゞはなく、又は單に學説としてゞはなく、本當に感情として氣分として情趣として人々の心に醱酵されなければならない。さうでなければ、その實現されることは斷じて不可能である。前に一言した吾々の國際的不安感なども、結局は、吾々がまだ十分に如上の平和思想を感情として體達してゐないところに歸因する。

○

さて、それならばさういふ平和思想が、單に理論として、學説としてゞはなく、本當に感情として、氣分として、情趣として、人々の心に醱酵するためにはどうすればよいか。これはさま〴〵の方面から研究さるべきであらうが、私は第一に、このことについてまづ婦人の自覺を望みたいと思つてゐる。といふのは、婦人は、その本來の性質として、男よりも、より平和的であるから、從つてその平和本能を十分に發揮することによつて、平和的雰圍氣を創造し得る可能性が男よりも遙かに多いからである。

しかし、在來では、婦人はその平和本能さへ、男のために蹂躪されて來た。これは有名な逸話となつてゐることだが、嘗つてナポレオンがその當時の婦人の一團に向つて、婦人の社會奉仕は、男の兒を出來るだけ多く生んで、國家の干城たらしめることにあると云ひ、その頃の婦人もそれを奉體したと云ふことであつたが、しかし、かういふ軍國主義的婦人は決してその時代ばかりではなく、今日とても、殊にわが國には、恐らく澤山ゐることであらうと思はれる。これは明かに男の鬪爭本能に婦人の平和本能が犧牲になつてゐるからである。

前に擧げたゴルドシヤイトは、將來の世界平和のためには、婦人が軍人にするために子を生まないやうにすること、彼れ自らの言葉で云へば「人間經濟」を實現するにあると云つてゐるが、たしかにこれは意味の深い提唱であつた。

○ゴルドシヤイトの提唱はほんの一例であるが、婦人が平和思想を普及させ徹底させるために採るべき方策は他に極めて多いであらう。數ケ月前の都下のある新聞に、ある有力な女流教育家の三四が相謀つて、小學校女學校の教科書の中から、軍國主義的要素を取除き、これに代へるに國際主義的要素を以てし、世界人としての感情をわが國の兒童に夙くから植えつけようとしてゐるといふ記事が載つてゐたが、それが果して事實だとすれば、平和思想普及のために婦人の取つた方策として、これなどは最も効果的なものゝ一つであることは疑ひない。

私はこの記事を讀んだとき、實際心から喜んだ。といふのは、わが國の婦人も、ごく少數ではあらうが、本當に目醒めて來たといふことを考へたからであつた。さういふ運動をしようとしてゐる婦人は、本當に婦人本來の特質――平和的特質を自覺して來たらしく思はれたからであつた。

少しく注意して檢攷した人には誰にもわかる通り、現に行はれてゐる小中學の教科書には、非常に多く軍國主義的要素や自國尊大的、他國蔑視的要素が含まれてゐる。そしてこれらの教科書によつて養はれた男女が、やがて社會の公人として活動す

な場合に、その多くがいかな[illegible]しも容易に想像し得るところである。

この意味で、上記自覺した女流教育家が、まづその平和運動を、兒童の教科書改善に於て試みようとしたのは、たしかに、最も聰明な仕方でもあり、又有効な仕方でもある。今の時においてわが國の婦人連が、端的に軍備の解除を叫んだり、參政權を要求したところで（無論それは當然な要求でもあり、必要な叫びでもあるが）恐らくそれは容易に實現されない空な叫び聲に終るにちがひない。といふのは、何と云つても環境の力が吾々の想像以上に偉大な勢力を持つてゐるものだからである。そしてこの環境の力を支配してゐるものはいふまでもなく既成道德やら既成宗教やらに身も心も支配されてゐて、容易に破ることの出來ない固い殼を被つてゐる成人である。だから今日の偏狹な國[illegible]主義やら偏狹な愛國心やらに身も心も支配されてゐる成人の造つてゐる環境の力を打ち破つて、平和主義をそこに新しく樹立することは容易なことではない。これに比べると、これからの時代をつくる、幼い、純眞な、若い魂に平和思想を植えつけることの方が、はるかに、有意義でもあり、有効果でもあるのである。

わが國の自覺した婦人連が、こゝに氣がついて來たのは喜ば

しいことであると共に、上のやうな方策は、平和思想普及のそれとして最も効果あるものゝ一つであることは否むべからざることであらう。

○

平和思想と國際關係といふやうな問題から、もつと端的に、吾々の周圍の不安な雰圍氣に、平和思想を適應させるための考察に轉じて見る。そこにも無論、數多くの興味ある考察があり得るであらうが、その中の一つは平和思想を基とした文化的施設の問題である。

私の尊崇する近代の思想家ウイリアム・モリスは人間の情趣を mood of energy と mood of idleness の二つに分けて、この二つが調和して活くところに分けてこの二つが調和して活くところに本當の人間の生活があると考へた。モリスの mood of idleness を充實させるといふことは、最近の社會改造論者の所謂 recreation の主張即ち心的更新の主張と相通ずるものである。

實際心的更新は何れの時代にも必要であるが、とりわけ、不安と危懼との雰圍氣の中にある現代に於て、一層その必要がある。フランス革命を豫想した血なまぐさい時代において、すでにルソーがこのことを力說したが、最近ではロマン・ロオランやエレンケイ等の、眞に平和を思ひ、民衆生活の向上と改善とを考へる人によつて、このことは力强く說かれてゐる。そして例へばロマン・ロオランの『民衆劇場』を始め一般民衆の心的更新のためのその他さまぐの文化的施設が、さまぐの人によつて考案され、實行されつゝある。

翻つて吾々の周圍を見ると、吾々をして心的更新を贏ち得させるやうな文化施設や社會政策が餘りに少な過ぎる。ロマン・ロオランはその『民衆劇場』の窮極の目的を以て「吾々の人をしてより偉大に、より强固に、より道德的に、より美しいものとする」にあると云ひ、「各個人をして更によりよき理解に於て融和せしめ、各個人相互をして、更により深厚な同胞感を抱かしめるものたらしめる」ところにあると云つてゐる。

かういふ平和思想の根柢に立つた文化施設――平和思想の普及と徹底とは一にかゝる文化施設の如何にかゝつてゐる。私は、わが國の有識階級が、この點に留意することを切に望んで止まない。

平和思想徹底の機正に熟せり

法學博士　吉野作造

飯を食べたばかりで腹が一杯になつて居る人に對しては、いくら熱心に說いても食事のことを眞劍に考へさせる事は困難だ。此場合には正面から理窟を說くよりも、運動でも勸めて自然と腹の減るやうに仕向ける方がいゝ。腹が減つて食事のことを考へねばならぬやうになつた時、何を食ふべきか、又食べれば何うなるかと云つたやうな事を說くと、それがしつかりと腹に這入る。單に机の上で理論を捏ねるのなら別だが、天下の大勢を實際に動かさうと云ふなら、何よりも先きに社會の現實の狀況を視察する事が必要だ。平和思想についても同じ事が云へる。平和思想の宣に結構なものである事は疑を容れぬが、之れが普及と徹底との實際問題を考へる時、吾々は先づ社會其物が之に適する狀況に在るか否かを考へなければならぬ。

斯ういふ立場から觀察して見ると、少くとも戰爭以前までの世界の形勢は、平和思想の徹底は勿論の事、其普及に對してすら甚だ不適當の狀態に在つた。[illegible]いふ時代で、謂はゞ弱肉强食といふ有樣であつた。斯ういふ時代に平和論を說くのは、乞食に向つて慈善の必要を勸むると一般、殆ど何の効果も無いと云つて可い。無論斯ういふ狀態を憂ふべしとなして、之を打破するに努めると云ふ者もあつた。斯う云ふ人の眞劍な努力が、又一つの原因となつて、今日のやうな新時勢を造つたとも云へるが、それにしても戰爭以前に於ては、彼等の努力は容易に酬らるべくもなかつた。人々が血氣になつて競爭に憂身を窶し、少しでも隙があらば自分の利益を圖る爲めに他を陷れる事を厭はないといふ時勢に於て、よく〳〵のお人好しでない限り、平和論などに眞面目に耳傾くる事が出來なかつたのである。是等の點は管々しく事例を擧げて說明するの必要もあるまい。

唯一つ予輩の專攻する政治外交の方面から一つの例を引いて戰前に於ける國際社會の如何なるものであつたかを說明しよう。戰前に於いて既成の事實（フエー・タツ・コムプリ）といふ原則があつた。之れは强弱其勢を異にする隣接二國間に適用さるゝ原則だ。例へば甲强國が境を超えて乙弱國内に何等か自國の支配權を延長したとする。乙は之に屢抗議したけれども、弱國の悲しさに顧られない。泣寢入つて數年を經た。甲は侵略に由つて占め來つた地位を更め

て法律的に承認せん事を乙に迫る。乙は固より之を諾はない。けれども諸外國は之を一つの既成事實と見て、甲の言ひ分を後援するのである。斯くして弱い者は結局其の正當なる主張を國際間に貫く事が出來ない。次に之と相並んで權力平均といふ原則がある。勢力相若しく隣接の二國間には既成の事實といふ原則は適用する譯に行かない。同じ様な問題が起れば戰爭になる。其處で斯ういふ兩國間は常に武裝的平和の狀態に在るのである。であるから少しでも相手國が優勢の度を増すと、默つて居れぬから、勢力平均といふ原則を持出すのである。例へば甲國が勢力の劣れる乙國より若干の領土を割取したとする。さうすると甲に對立する丙が新に均衡關係の紛更せられたるを名とし、甲の新勢力と相等しきに至るを範圍として、別に無名の侵略を他の弱國に試みるか、甚だしきに至つては甲に向つて若干の分け前を要求する事すらある。此後者の例は一九一二年の頃、ルーマニアがブルガリアに向つて行つた事がある。少くとも前者の例は勢力平均の原則によつて已むを得ざる事と從來の諸國は認め來つたのである。それでも時としてそれが巧く行かないとすると、新に同盟を結んで對抗の方策を講ずるといふやうな譯で兎も角相手が十の勢力を有てば、我も亦之れに劣らぬ勢力を有たねばならぬといふのが各強國の意氣込みである。而して此目的の爲めにする各強國の行動は、多少弱國の權利を冒す事あるも、已むを得ぬ事として承認されて居つた。斯くして既成の事實といふ事にしても、勢力平均といふ事にしても、之を表向き國際法上の原則と云ふ譯には行かないが、少くとも國際政治を實際に支配する慣例であつたといふ事は間違ひない。弱い國丈けが好い面の皮だ。だから弱い國は又弱い丈けにそれ〴〵方策を講じ、同時に又非常な排外思想をも養成するに至るのである。斯ういふ時代に於いて、どうして平和思想がすら〳〵と普及徹底する事が出來ようか。

それでも少數の眞面目な人は何とかして局面を轉換し、平和な天地を造り出さうとして苦心して來た。之を外にして又平和思想を說く者は可也あつたが、それは實は多く強國の壓迫に對抗する弱國の悲鳴に外ならなかつた。而して平和思想が弱國の殆と唯一の武器として利用されて居る間は、強國が之に殊更らに面を背向けるのは已むを得ない。之れ戰前に於いて強國の責任ある有識階級が兎角平和問題に對して熱情を有し得なかつた所以である。

斯く考へて觀れば、戰爭以前の世界の形勢は、何ら考へて見ても平和思想の普及と徹底とに適當なる地盤ではなかつた。

然るに今度の戰爭を境として此形勢に全く一變した。今度の戰爭が非常な苦痛を經驗せしめた事、其結果として歐米の民心は未だ曾て見ざる程の深刻さを以つて將來の天地を平和的に造り換へやうと熱心するに至つた事、これが主たる原因となつて平和的世界の建設に關する積極的研究の極めて旺盛を極めて居る事、是等の點は本誌の之まで屢說いた所であるから、今また此處に之を繰返す事を略する。謂はゞ戰爭と云ふ一大事變によつて現實の社會狀態が一變したと云つてよい。即ち戰爭は腹の一杯になつて居る者に、大いに運動するの機會を提供したやうなもので、五年も經つた今日彼等はもう腹が減つて堪らない。平和思想が善いのか惡いのかそんな理論的判斷は何うでもいゝ。兎に角あんな苦しみは二度と繰返したくないから、否やでも應でも平和の生活を築き上げたいと云ふのが今日の民心の痛切なる要求だ。之れが社會に於ける一つの不可抗的大潮流をなし、從つて又大いに當局者などをも動かして居る。斯う云ふ風に實際の境遇が變つて來ると、之れに伴つて又前とは違つたいろ〳〵な新しい思想も起つて來る。之れ取りも直さず、今や社會の實狀は少くとも平和思想の普及に最も適當するに至つた結果でなからうか。故に少くとも歐米に於ては平和思想の普及の爲と云ふ事は殆ど問題にはならない。只如何にして之を徹底すべきかを研究すればいゝと云ふ段階にまで[illegible]

我日本も有繫に此世界の大勢に押されて、昨今平和思想は大いに普及して居る。此事については說明を要せず、讀者も既に認められて居る事であらう。が、唯歐米程十分に機運が熟して居ないと云ふ事丈けは殘念乍ら認めざるを得ぬ。一つには戰爭の慘禍を經驗する事が足りなかつた、言ひ換へれば運動が未だ不十分で十分腹が空いて居ないと云ふ點もあらうが、も一つには我國には特別に平和思想の這入り難い理由があるからではあるまいか。さう云ふやうな所から、我國に於てはまだも少し平和思想の普及と云ふ事について劃策努力する所あるを必要とする點がある。

其處で平和思想の普及の爲めに何を爲るがいゝかと云へば、予輩の觀る所では差當り二つある。一つは世界昨今の形勢を如實に見、且つ之を說く事である。世間には戰爭以前の考を以つて今日の世界を觀測する人が少くない。吾々はもつと戰爭を轉機とする世界的形勢の一變に透徹した眼光を放たねばならない。第二には吾々の先輩に特有な反平和思想は如何にして造られたかを反省せしむる事が必要だ。幕末の頃排外思想が如何に強かつたか、又當時外國に留學したものは何を學んで來たか、

斯くして造くられたる彼等の思想が如何なるものであるべきかを考ふる時、吾々の先輩が反平和思想を懷くのを吾々は寧ろ却つて當然とする。併し乍ら彼等の敎育された時代と今日とは違ふ。子供の着物は大人に用は無い。是等の點も予輩は屢他の機會に於て述べた所であるから此處に繰返さないが、要するに是等の點を明かにすれば、吾々は先輩の國際觀から解放されねばならぬ所以、新時代に適當な新見識を啓かねばならぬ所以が明かにならう。斯くして初めて十分に平和思想の普及を圖る事が出來ると考へる。大體に於いて地盤は相當に耕されて居る。平和思想の種子をして十分に生長繁茂せしめんが爲めには、取殘されたる多少の荊棘を取除ければいゝ。

終りに平和思想の徹底については、他の諸國に於る同志と共に尙ほ深く研究を重ねたい。時勢が變つて平和思想の普及に適當な時代になつたと云ふ丈けで安心しては本統の平和は來ない。運動の結果自然腹が減つて來たと云ふ事に委して置いては、遂に暴飮暴食の弊を見ないとも限らぬ。否やでも應でも平和と云ふ事を考へねばならぬやうになつたのだから、之から先きはそれに理論上の背景をつけてやる事が必要だ。平和に對する本能的要求に、更に理論的確信を附與してやる事が必要だ。此點に成功して初めて平和思想が現代に徹底し得るのである。

是等の點に對しては既に論究を要する點が甚だ多いが、幸にして最近何故に吾々は平和を要求せざるべからざるかについていろ／＼の方面からの研究が盛んに發表せられる。之れからもます／＼盛んになるだらう。是等の研究に讓つて此處には述べぬが、只一つ多くの人の說かざる而かも最も重大な一事について一言するに止める。そは何かと云ふに、平和思想の徹底と否との問題は、結局する所人生に對する吾々の氣分如何と云ふ事に歸すると云ふ事である。人をどう觀るか、人間は動物の進化したもので、其本性に於ては野蠻な爭鬪性を有するものである。悧巧な丈けに段々之を抑へて社會に調和を求むるの工夫を建てゝは居るが、結局の本性が此處だと云ふ立場を取れば、平和思想は結局に於て徹底する事は出來ない。平和思想の徹底は人間の本性を理想主義的方面に立つる人生觀とのみ相伴ふものである。人の本性は無限に發達するもの、相信じ相扶け得るものと觀るに非ざる限り、本統の平和を前途に期待する事は出來ない。故に平和思想の徹底の爲めに吾々の結局に於て努むべき所は、人生問題に對する哲學的研究であり、更に進んでは宗敎的情操の涵養でなければならぬ。之に基かざる一切の平和的論究は畢竟砂上の樓閣に過ぎない。

世界平和實現の三大關鍵

安部磯雄

世界の平和と云ふ事と宗教とは大なる關係があると思ふ。元來宗教は其中に十分に平和と云ふ事を說いて居るのであるから、私共は一時は宗教の力によつて必ず世界平和の來る事を考へて居た。然るに其後の有樣を見るに、世界を通じて宗教の力が平和と云ふ方面に餘りに伸びて行かないやうである。寧ろ宗教は政治家の思想に從ふと云ふ風で、時としては政治家の爲す所を辯護すると云ふ有樣で、宗教らしい所が少くなつた。之れは必しも無理はない事なので、現在の世界の有樣は物質的勢力が強く、宗教的生活よりもより多く物質的生活が考へられて居る。個人丈けの生活の立場から云へば宗教の力は相當に強く働らいて居るが、國民と云ふ廣い生活の立場から云へば、宗教の勢力は到底物質的勢力に及ばない。世界各國に於ける政治家、彼等は或意味に於いて二重生活をして居るのであつて、今日の偉大なる政治家の中、多數は皆宗教家を以て任じて居る人で、個人としては熱烈な宗教の信者であるが、政治家としては此宗教の信用の出來ない者に[illegible]居る。是は世界平和と云ふ事に對しては宗教の力を信ずる事が出來ない者であつて、徹底的に世界の平和を來すためには他の方面から進むより外はないと考へて居る。華盛頓會議の今日までの經過は非常に喜ばしい事である。あの位に軍備縮小が出來れば今後に於ては此方面に於ける縮小が益々行はれるやうになるだらう。十年も軍艦製造を休めば、又十年後に期限が終つたとて各國が競つて軍艦を造ると云ふやうな事はないだらう。事實其の十年間に於て世界の人が平和と云ふ事に就いて眞に考へるやうになるに違ひない。華盛頓會議は世界平和に向ふ一歩であり、平和は此十年間に益々世界に擴がり、その時に遂に軍備徹廢の理想に達するであらうと私は樂觀して居る。併し華盛頓會議は決して徹底的なものではない。未だ表面的の事を論じて居る丈けで根本に觸れて居ない。尤も私共が一つ喜んで居る事は軍備縮少と同時に支那問題が研究討議されると云ふ事である。それはさうあるべき筈であつて、支那問題が世界平和に對して今日まで最も多く妨害をなして居るのである。こゝに世界平和の理想と云ふものがあれば、支那問題のために其の理想を遂行する事が出來ぬと云ふのが今日の事實である。軍備縮少の問題が起つた時に同時に支那問題が討議されると云ふ事は當然で、此問題が解決出

來なければ軍備徹廢の理想は實現する事は出來ない。併しながら此度の華盛頓會議が何處まで支那問題を討議するかゞ問題である。それは要するに皮相に止るものであつて決して根本に觸れないものであらうと考へられる。さうなると矢張り今日の平和を脅かして居る根本原因がなくならないから、今日のまゝでは徹底的平和の來る事は望めない譯になる。では何處まで我々は進めば徹底的平和に達する事が出來るであらうか。これに對して今私の考へて居る事が三つある。

第一は人口問題、第二は外國貿易問題で、第三は資本輸出問題である。此三つの問題を世界各國が相談の上、徹底的に解決出來れば軍備徹廢は實現され、世界平和は來ると私は信ずる。現在國と國とが交際して居るが、其の交際の中でも經濟關係が主となつて居るのである。今甲の國から乙の國へ、乙の國から甲の國へ這入つて行くものに三つある。その第一は人間である。第二は物品、經濟的に云へば貿易品である。第三は資本であつて、此三のものが一つ國から他の國へ入つて行き、現に盛に入つて行つて居るのである。その入つて行くと云ふ事は簡單な問題のやうであるが事實は決してさうでない。今此の三つのものが他の國へ入つて行くと云ふ事に就いても國際問題は生ずる。若し此三のものが平和的に他の國へ入つて行くならばそこに國際問題が起る筈はない。平和的にと云ふ意味は此三つのものが甲から乙へ入つて行く時に乙が之れを歡迎する場合を云ふのである。併し乙がどうしても此三のものが自國に入る事を喜ばぬ時がある。人間が這入つて行くのを喜ばないのは日本と米國の場合で、米國は日本人の移住を喜ばない。また人間計りの場合でなく、貿易關係に於ても物品の入るのを喜ばぬ場合もある。人は貿易品が甲の國から乙の國へ這入つて行くと云ふ事態は當然であると云ふかも知れないが、實はさうではないので、物品の入るのを喜ばぬ場合が多くあるのである。殊に資本に就いてさう云へるのである。外國の資本の入る事は不都合でないやうであるが、矢張り國家が喜ばぬ場合がある。かゝる場合に甲の國が自國の利益の立場から、強制的に此三のものを乙の國が不利益な場合でも無理に送り込まうとする事がある。若し甲の國が乙の國よりも兵力と富に於て強かつた時には相手に脅迫を加へてもさうしようとする。此場合に國際問題は生ずる。今強ひて人間や、物品や、資本を他國へ送るとなるとそれは一種の侵掠であり、征服であり、野心の表れである。他の厭がるものを無理に抑へやうとする事は侵掠と征服の意味なしでは出來ぬ。少くともそれは甲の國が乙の國に對して勢力を有つ事であり、即ち甲の國が乙の國を侵掠し、征服する事である。侵掠

とか征服とか云ふと兵隊を遣つたり、植民をやつたりして國を取るやうに思はれるが、さう限つて居るのではなく、物品や資本に依つて經濟的に或る國を征服する事が出來るのである。今日では有力な國は此三のもので弱い國を征服する、少くとも其の國に權力を有ちたいと考へて居る。これが今日の國際問題を惹起せしめる大なる原因である。以下私は此事に就いて少しく詳しい說明を加へて見たいと思ふ。

今日人口問題は國際問題を惹き起す大なる原因となつて居るのであるが、其の實例は著るしく日米關係の上に現はれて居るのである。若し日本に少しも野心がなかつたなら――私は野心がないと思ふのであるが――そして日本がも少し注意深くあつたなら、日本が亞米利加本土と布哇へ送り出して居る日本人に就いてもつと賢い政策を執るべき筈ではなかつたか。それはどう云ふ意味であるかと云ふに、今日本が過剩の人口を外國へ送り出さなければならぬ必要に迫られた時、兎に角外國の中へ人を送るのであるから餘程の注意を拂はなければならぬのは明かで、つまり亞米利加が日本人の入るのを喜ぶ場合は安心して亞米利加に人間を送つても好いが、若し先方がそれを不快に感じる場合には此方は人の出て行く事に制限を加へなければならないので、實際に於て今はさうなつて居るのである。初め日本が亞米利加に人を送つた時には[illegible]しなかつた。あの時若し日本が亞米利加に出て行く日本人に對して、彼の國の生活に同化すると云ふ事、またその生れた兒が法律に依つて市民權を得、そこに本當の亞米利加人として、日本と關係を離れて米國の國旗に對して忠勤を拔きんずるといふ風に、全然米國に同化する政策を執つたならば、今日の排日問題は起らなかつたかも知れぬ。若し日本人が本當に亞米利加に對して同化する事が出來たならば、單に人種が違ふと云ふ丈けでさう日本人を嫌ふ筈がない。然るに今日のやうな不幸を見るに至つたのは、日本人自身に實際同化する性質が少いのかも知れぬが、また一面に於ては日本の先覺者とか指導者とか云ふやうな人達が、外國に於て日本の勢力を擴張するやうに思つて、日本の兒童に對して日本の教育を授けたり、愛國心を鼓吹したりするやうな事をすると云ふ事もあるからである。これでは亞米利加が日本人を歡迎する筈はないのである。で前に云つたやうに外國が歡迎しないのに無理に外國へ人間を送り出すとなると、そこに無理が生じて遂に國際問題を惹き起すと云ふ事になるのであるが、外國がそれを歡迎する場合は敢て差支へない。譬へば南米の如きは移民を喜ぶから幾ら人間が出かけて行つてもかまはない。併し南米とて其中に國があつて各主權があり、たゞ永久

に南米に植民すると云ふ譯に行かないので、さうするためにはどうしても同化政策を執らなければならなくなる。もしさうでなければ又南米に於ても將來排日問題が起る事は明かである。更に手近かな方面では滿洲、蒙古、西伯利に過剩の人口を送り出す事になるだらうと考へる人もあるが、併し私はこれを非常に氣づかふ。さうなると世界の人も疑の眼を以て日本を視るやうになるに違ひない。滿洲は明かに支那の主權の下にある事は日本も認めて居る。蒙古は矢張り支那の勢力範圍と視なければならない。今滿洲や蒙古をあてにして植民地と同樣に考へる事は將來國際問題を惹き起す原ではないか。何故ならば支那自身が人口の過剩に苦しんで居るので、あの國が苦し內政が相當に成功して來た曉には自國の人民を滿洲、蒙古方面に植民したければならぬ必要上、支那は人口の關係から此れ等の土地を自分の國のために殘して置かなければならぬ。若し日本が人間を其處へ送るとするならば、それは支那の喜ばぬ所であつて、假りに支那が承知した上のことであるとしても、それは多少の壓迫の結果でなければならない。さうすると私共は日本の過剩の人口を外へ出すに就いては、南米でも、滿洲でも、其の他何處でも、其處に國際問題の起る恐るべき原因が伏在して居る事に考へ及ばねばならぬ。此事は結局各國が自分で注意して人口制限を行はねばならぬ事になるのである。絕えず人口が增加する結果は必然に何處かに植民地を求める事になり、そこに無理が生ずれば國際問題が起る事は前に云つた通りであるから、文明國はなるたけ自國で養へる丈けの人口に制限してこれを增加しない方針を執らなければならない。或人は人口の增加は國運隆盛の兆と喜ぶが私はさう考へない。自分の國で養へない人口を增加するのは隨分間違つた話で、國運隆盛所かそれは寧ろ恥辱である。一個人に就いて考へるならば、自分の家で澤山小供が生れたら養つて行けないが、さうなれば親戚が養つてくれるだらうと云ふ無自覺な考へから小供を多く産むならば、それは無責任であり、恥辱である。國家の場合に於ても、さうで、國家が人口增加のために外國の厄介にまでならなければならないのは確かに好い事ではないので、斯かる方針は前に云つた意味に於て世界平和の立場から云つてもやめなければならない事だと考へる。

第二は外國貿易の問題で、之れに就いては多數の人が餘り考へて居ないやうに思はれる。人口問題の場合は誰にも分るが、外國貿易が國際平和の妨害を爲す一つの大なる原因である事に就いては考へて居る人が少い。一體私共には外國貿易に對する一種の信迷がある。即ち外國貿易盛んなれば國盛んなりと云ふ考へで、外國貿易に依つて金額の增加する事を無上に喜ぶ人が

ある。併し私共は先づ考へなければならぬが、果して外國貿易が結構なものであるかどうか。私共は第一に外國貿易は利益も大きいが不利益も大きいものがある事を氣づかねばならぬ。私共は外國貿易で金でも儲かるやうに考へるが、個人と一國の場合とは違ふのであつて、外國貿易に於ては私共が外國に賣ると同じやうに外國から買はねばならないから、其の賣買は大概平均するもので、外國貿易で買ふよりは餘計に賣ると云ふ事は間違つた考であるが、私共は斯う云ふ迷信を持つて居るのであるから之れを捨てゝかゝらなければならないのである。貿易品を製造する事は勿論惡い事ではないが、今それを全然廢めるとすれば、外國品を造るも内國品を造るも同じ事なので、私共は國内で要求するものが多くあるから夫れを造る事が出來るのである。併し此物を互に換へると云ふ事は、有無相通ずると云ふ意味に於て寧ろ不利な事ではないが、併し今外國品が互に甲から乙へ、乙から甲へ交換される事が、矢張り人間の場合と同じく無理がある場合を想像しなければならない。甲の國から乙の國へ送る物品は乙の國で本當に歡迎するかどうかは問題である。或人は云ふであらう。外國貿易をやる以上はお互に歡迎するからこそ交換が行はれるのだと。併し總ての物品を歡迎して居るのならば、今日の國家が多數保護政策を執つて居るのは明かに矛盾ではあるまいか、外國品を歡迎して自由に自分の國に入れたら好いので、或品物は歡迎しなかつたり或品物は入り難くする必要はないのであるが、事實は外國品に海關税をかけて夫れの入る事を難くして居るのである。眼に見えぬが神戸とか横濱には高い塀が築かれて居て、外國品の自由に入る事を妨害して居るのが今日の狀態である。日本が外國から砂糖の入る事を歡迎しないのは、我々國民は歡迎するが、國家は寧ろ國内の砂糖を保護する立場からさうしないのである。そこで外國貿易に於ても歡迎される品物と、歡迎されない品物とがある事になる。それは丁度植民の場合と似て居るのであつて、米國では或國の人間は移民としてどし／＼入れるが、或國の人間は自國内に入る事を歡迎しない。それと同じく品物の場合に於てもさうであつて、或品物は喜んで入れるか、或品物は入れないやうにしようとするのである。然るに今賣る方の國から云ふと幾ら先方の國で高い塀を築いて居ても、自分の國の品物を入れたいから苦情を云ふのは當然で　若し先方の國が塀を低くしなければ、此方でも高い塀を築くぞと云ふ風に、復讐的に海關税を増やすと云ふ事になる。これは外國貿易が國際間によくない感情を醸すと云ふ事實を語るもので、今日の外國貿易は確かにさう云ふ狀態にあるのである。此場合對等の國であるとお互に復讐的に

一方が關稅を增せば他の方も關稅を增やして行くと云ふ風で、これで濟んで行くのであるが、相手が弱い國であると、一方の國は自分の國の品物に對しては關稅をかけられては困るから無稅にしてくれろとか、關稅を少くしてくれろとか、何んとか云ひがゝりをつけて結局關稅の引き下げをやり、そこに無理が生ずるやうな事になるのである。でこゝに弱い國があると、他の強い國が其の國に品物を賣り込むために烈しい競爭を始めるのが常である。近頃では餘り云はないが、昔は「商業は國旗の後に從ふ」と云ふ事が平氣で云はれた。商業が國旗の後に從ふのであるから、軍艦を遣つて弱い國を脅しつけて品物を賣り込む事が普通に考へられて居た。斯う云ふ場合に若し國際間題の起る事を避けやうとするならば、結局外國貿易に十分制限を加へる事が必要になつて來るのである。勿論外國貿易は全然廢止する事は出來ない。甲の國が欲しい物をどうしても自分の國で作れない事があつて、乙の國から買はねばならない場合が必ずあるから、外國貿易は或る程度までは制限する事は必要であるが、之れを絕對に廢止すると云ふ事は不可能である。では結局どう云ふ事になるかと云ふと、今日の外國貿易に於ける弊害は個人々々の非常なる競爭によつて、政府の力まで借りてやると云ふ事にあるのであるから、將來は外國貿易は一切政府の事業にしたら一番好いと思ふのである。政府が之れをやる事になれば內國人が外國から買はねばならぬ物は調査して政府が買ふ。そして外國から買入れる一方にはそれ丈けの物を此方から賣り出さねばならぬので、それには外國で如何にやつて見ても自分の國程に出來ないものゝみを政府が賣出すと云ふ事にすれば好い。今政府が外國貿易を管理するやうになれば直ちに好い結果を生ずるのである。先づさうする事に依つて丈けでも、外國の好まぬものを強ゐて賣りつけたり、自國の好まぬ物を無理に買ふと云ふやうな事を避ける事が出來るのである。またさうする事に依つて自ら外國貿易の量が今日よりも減ずる事になるから、それ丈け自國の產業に力を注ぐ事が出來るやうにもなる。斯うなつて來る結果は自ら國際間の平和と云ふ事も保證される事になるのであるが、それ以外に我々は大なる利益を得る事が出來るのである。それは第一に內國の市場が今よりも遙かに安定して來ると云ふ事であつて、今日外國をあてにして多くの品物を作る時に、若し外國が經濟界の變動で此方の品物を買はぬやうになれば、反對に外國のために自分の國が不景氣になると云ふ不利益を防ぐ事が出來るのである。餘りに自國の運命が外國の模様次第で決せられると云ふが今日の有様であるから、從つて國民生活の不安と云ふ事も生じて來るのであるが、さう云ふ事に

なれば假令外國の市場に變動があつたとしても內國のそれは比較的安定を保つて居る事が出來るのであつて、さう云ふ不安も除く事が出來るのである。第二に政府が外國貿易をやる事になれば、今日の如く稅關を設け、外國品に稅をかけたり、旅行者の荷物を調べたりする必要はなくなるのである。今日の文明國に於て旅行者の荷物を調べたり、稅關に長く引留められたりする事は不愉快な事として人の經驗する所であるが、關稅が全廢された曉にはさうした事もなくなるのである。併しながら若し稅關が廢止された曉には、何處の國でも關稅が國家の收入の主なる項目であるから、其の時には其の金はどうするかと云ふ問題が起るが、それは政府が財源を得たいなら外國品を自國の商人に賣る時に相當の手數料を取れば關稅に代る金を得る事が出來るのである。

第三の問題としては資本の輸出と云ふ事であるが、今日資本は絕えず外國に輸出されて居るのであつて、其處に國境と云ふものがないと云ふ有樣である。丁度水の低きにつくが如く、利子の多い處には資本はどし／＼流れ入つて居るので、英佛の如き富んだ國は外國に向つて餘計に資本を出して居るのである。併し今資本が外國に出て行くのに二つの場合がある。第一の場合は資本を外國の政府、會社、或は個人に貸しつけて相當の利子を取ると云ふ方法で、第二は甲の國が自分の資本を乙の國へ持ち込んで或る事業に投資する場合である。第一の場合は今日盛んに行はれて居る所であつて、外國に於て自身で事業を經營して損をする時は損をし、儲ける時は儲けると云ふやり方である。此第一の場合は人が外國に行つて外國の生活に同化するのと同じ事であつて、資本は政府や會社に貸してやつてそれを同化させるのであるから、これは害がないのみならず弱い國を助けると云ふ意味から云つても必要な事である。第二の場合は資本の同化でなくて、資本の征服である。必しも外國を征服する野心はなくとも、多く投資を行へば行ふ程外國に自國の勢力を及ぼす事になるので、それは結局資本で外國の一部を征服するのと同じ事になるのである。此事は何處の國に於てよりも支那に於て最も多く現はれて居るのであつて、今日では世界の有力な國は皆支那に向つて資本を投じて居る。無論第一の方法でも資本を貸して居るけれども、大部分は各國が資本を投じて事業をやつて居ると云ふ有樣である。今日華盛頓會議で支那問題が討議される重大な意味は今云つた事に關聯しての事である。今日支那問題が解決されなければ世界平和は永久に來ないと云つたのは、それは何故かと云ふに、支那に於て露骨なる資本の征服が行れて居るのを見れば分る。今鐵道に就いて云つて見れば

英國は約四千哩の鐵道を有し、それは自らの資本で施設經營して居るのである。日本はどうであるかと云ふに、今既に鐵道を敷設經營して居るもの約千八百哩、今後敷設權を有するもの約三千五百哩で、其他佛蘭西も鐵道を有し、白耳義も少し有つて居る。露西亞も帝政時代に支那內地に鐵道の敷設權を得たいと云ふ野心があつた。米國は控えて居たので今日では鐵道を有つて居ないが、敷設權があつて夫れが約千一百哩ある。これは鐵道に就いて云つたのであるが、未だ〳〵支那のやうな廣い國では之れ丈けの鐵道では足りないので、今日支那には資本がないので外國の力に賴らなければならない事情になつて居るのであるから、各國が競爭して敷設權を得やうとして居るのである。其れ以外にも、日本や其の他の國で鐵や石炭の採掘權を得て居るのであるが、之れ等の事を考へて見た丈けでも、實に資本の濫用と云はうか、資本の侵入と云はうか、若くは資本の征服と云はうか、斯う云ふ事實が今日の支那に公然と行はれて居るのであつて、此現象は明かに世界平和のために許す事は出來ないのである。そこでまた外國に資本を出す事に制限を加へねばならぬと云ふ事になるのであるが、それには各國が相談の上で、政府や會社に金を貸してやる事は好いが、投資の目的で外國に資本を出す事は不可ないと云ふ事にすればいゝ。併し或人は支那には富源があつても今日では未だ支那人がそれを開發するの力がないから、外國の資本で石炭や鐵を掘り、又は鐵道を敷設したりする事が支那の文明を扶ける所以であると云ふかも知れない。併し私に云はせれば夫れは餘計な御世話と云ふものであつて、若し支那人が自分の力で富源を開發する事が出來ないとしても、その富源は決して消え失せて了ふものではないから、次の時代を俟つて、支那の內政が纏つた時にその開發をやつても差支へないのである。今日の如く外國が支那に資本を下して種々の權利を得、鐵道の附近には警察を置いたり、兵隊を置いたりして、其內に獨立國を置くやうな事をするのは支那の主權を無視したもので、支那の利益のためには次の時代を俟つのが一番好いのである。支那の文明を本當に思ふならば、自分が事業をしないでも、支那政府なり會社なりに資本を貸してやればいゝので、支那で資本の運轉が出來ないならば信用ある技師を貸してやれば好い。さうすれば鐵道の經營でも何んでも出來るのである。それで若し根本的に國際問題を解決するためには支那に投資された資本の處置に考へ及ばねばならなくなるのである。將來は各國が他國の主權を重んじて、自らは事業をやらないで、資本丈けは貸してやると云ふ風になれば、支那に於て既に敷設してある鐵道は各國が相談の上で直ちに手を引いて、之

れを支那に賣る事も出來る。此場合支那が其金で支拂が出來なければ公債に見積つてそれ丈けの金を年々に拂はせて行くことにする。さうなれば日本でも喜んで支那に滿鐵を賣り、之れを其の經營に任せる事が出來るであらう。之れは思ひ切つた事のやうであるが、此處まで問題が徹底しなければ、國際紛議を一掃して世界平和の理想に達する事は出來ないのである。要するに國際問題の起ると云ふ事は未だ世界の中に比較的文明に遲れ、其の富と知識の程度に於て劣る弱い國があるからで、此弱い國と云ふものがなかつたら國際問題は容易に解決されたかも知れぬ。一體弱國に對する世界の態度が惡い。相手の弱いのにつけこんで其の國を競爭場とし資本は注ぎ込む、製造品は賣り込むと云ふ風にする。支那の如きは各國の好い得意とされ、日本の如きは人間までも滿蒙に注ぎ込まうとして居る。これが問題を生ずる原なのであるから我々は此政策を改める必要があるのである。

最後に一言したいのは、今日では世界の繩張りが略々決つて居るので、世界平和のためには各國が此繩張りをお互に侵し合はぬやうにする事で、先方が歡迎しないのに無理に此繩張を侵してまでも、人間、物品、資本を送り込む事をしないやうにする事である。併し國に依つては人口が一杯で土地に餘裕がない、一方には米國や濠洲の如き人口が稀少なのに比して廣大な土地を有つて居るものがある。日本のやうな處に外國の多數の勞働者が入つて來る事は此の繩張りを侵す事にもなるが、日本の方から米國や濠洲の方へ出かけて行くと云ふ事は自ら問題が違ふので、廣大な土地を有ちながら我々を拒絕すると云ふ事は餘りに貪慾であり、正義の觀念から云つても間違つて居ると云ふやうな事を云ふ人がある。併しこれは我々の大いに考へなければならぬ點で、今云つたやうな事は勿論理想的だが、今日のやうに我々が所有權を認めて居る以上は此事は成り立たないのである。所有權のある間は我々は外國に殖民する事の問題よりは、內國の問題を考へなければならない。內國にも所有權がある。今日貧民窟で四疊半に家族が七八人生活して居る狀態も、また家族が四五人で召使が十人位も居り、二萬、三萬坪の邸宅に住んで居る狀態も共に事實である。此場合二三萬坪もあれば貧乏人も入れて貰ひ度いと云ふのは當り前であるが、所有權の認められて居る今日では貧乏人は入れないので、つまり此處にも繩張りと云ふものがあるのである。で國家にも繩張り、卽ち所有權があるのであるから、それを誰かゞ侵す事が出來るかどうかゞ問題である。それを一切放棄してかゝらなければならないと云ふ議論は理想としては面白いが今日では儼然として所有

權が確立されて居るのであるから、人はそれをどうしても認めなければならないので、國家の獨立と云ふ事も從つて尊重されなければならなくなるのである。で今各國が互に之れを侵さぬ事を約束する事に依つて、其處に初めて徹底的に世界平和を來す事が出來ると思ふのである。

心的革命の創造

杉森孝次郎

國際平和は、制度力のみによつては完成されない。恐らくは着手だにされない。制度力が達しうる限りの國際平和は、多少の專制と屈從を伴ふ國際平和だ。怨みの劍を吞んだ國際平和だ。その專制は、武力及び經濟力を恃んだ專制かも知れん。相手の無理解故に、相手の眼には專制と映つても、眞實には賢者政治と同原則のものかも知れん。そのいづれの場合も事實上可能だ。しかし、制度が主導力となつての國際平和は、どこかに無理がある。そのどこかがどこであるかは、明確に指摘することができる。論理的にも、具體的にも。

眞の國際平和は、各國民の自發的意思の現象としての國際平和でなくてはならん。制度力は多少國際平和の創設、維持、増進のためにも必要だが、その制度力自身も、理解ある自發的意思を材料としての製作であり、機械でなくては理想的でない。すくなくとも、制度力が自發的意思よりも優勢である部分があるならば、その部分だけは、表面は平和であらうとも、內實は不平不和だ。それ自身悲むべき事實だが、機會をうかがうて爆發する危險もある。強いられたる平和は、殆んど平和の名を値ひしない。猪が退化して豚になるか、鎖繩の緩んだすきまをねらつてあばれだすか、そのうちの一可能が實現されるのだ。

國際平和は、古來いくたびか提唱され、宣傳された。そのたびごとに、いくらかの進運を催起したが、大觀すれば、現代は蠻族爭奪の時代、乃至實に、藪澤獸群の生活狀態からさへも、あまりに離脫してゐなさすぎる。心的改造としての啓蒙を、制度改造と相先後し、相左右して、すなはち縱系的にも、橫列的にも組織して、國際平和の方途に進步させねばならん。宗教といふ語は、多少の誤解を招き易いが、いはゞ新宗教熱とも見るべき忘我脫境の聖的衝動が、一時地上を押し流すやうにしたい。大運動期が切望される。

その大運動期は、しかしながら、弱き者の心にはぐまれる可

能は大だが、弱き者の手によつて達成される可能は小だ。善の主張、わけても平和の主張は、強き者の特權だ。強き者が善の信者であり、平和の愛好者であることが、善の獲得、平和の實現のために最捷徑であるのみならず、恐らくは唯一の有効方法だ。その強き者が、動機に於いて、本質に於いて、善と平和をかれのすべてとして所有してをることが、最も望まれる狀態だ。すでに強きが故に、隨つて善をも惡をもなしうるが故に、その兩可能の間に自由採擇をほどこして、隨分善をもなすといふ狀態は、危險だ。暴君の好機嫌同樣の無主義善だ。力を背景とする平和でなく、平和を動機とする力が貴い。いまの世に、國際間を見わたしても、この貴い力がどの位にあるかは、ほぼ見當がつく。そしてそれは決してその觀望者の理性を滿足させる程度のものでない。聖心雄手が望ましい。雄心聖手、雄手聖顏は、可能が稀貴でないだけに、價値も稀貴でない。前者は、その基調が敎育だ。後者は、その基調が強制だ。敎育は唯心的だ。隨つて創造的だ。生産的だ。強制は唯物的だ。隨つて非創造的だ。不生産的だ。

善の信者、平和の愛好者にもまして、力を必要とする者はないわけだ。善の信者は善の實現を信ずる者でなくてはならん。平和の愛好者は平和の支配を愛好する者でなくてはならん。善の實現と、平和の支配とは、單なる主觀的要求によつては視ることも、聽くことも、觸れることもできない。存在とはならない。眞の意味に於いての戰鬪を要するのだ。それを要せずに經驗されるやうな、また體驗されるやうな平和なら、恐らくは、これあるは、これなきに劣る。生活と文化と價値の總本源たる人格保存を多少犧牲にした形式的平和に過ぎなからうから。善の信者ほど、惡の現實を認識する者はないだらう。平和の愛好者ほど戰亂の現實を認識する者も同樣にないだらう。善の信者と平和の愛好者とは、かれらの目的に於いてこそ惡及び戰ひの要素を淨脫してゐもすれ、かれらの現實は、惡に勝つ善の創造と、そのための苦鬪とに徹上徹下されてゐよう。善惡が兩存する限り、戰ひは、その善と惡との間にもまぬかれない。戰ひは勝利を目的とする。善の勝利を目的とする戰者の方法は、險阪をのぼる者の方法に似てゐる。油斷、怠慢、卑志は禁物だ。

ウィルソン氏が發唱すれば列國が和唱し、ハーヂング氏が發動すれば世界が和動する。これだけの現實を解剖しても、力と善の關係は指示される。ウ氏がいかに國際平和の信者であつたとしても、戰勝の米の代表者としてでなかつたら、あれだけの成績を奏することは出來なかつたらう。ハ氏がいかにウ氏以上の平和作者たる技倆を示さふとあせつても、同じくまた現在の

米の責任政治家としてでなかつたら、列國の和動を、あのやうに快速に惹き起こすことは出來なかつたらう。國際平和は善だ。一大善だ。これを信ずることはどの國民もの義務だ。しかしこれを權利として主張し、主張して成功しうる國は、例を今日に取るならば、少數だ。殆んど唯一だ。殘餘の多數國、乃至全數に近い最大多數國は、善意に於いて必らずしもその少數國や唯一國にまけてをるわけではない。善意に於いては勝つてをる國や國々を假定してさへも、力に於いてまけてゐるならば、かれらは國際平和の權利の主張者としては成功しないのだ。その主張の最適任者ではないのだ。善の實現者は、有力者でなくてはならんのだ。善は言葉や情操だけのものではなく、生活だ。實在だ。それ自身が力だ。生活の目的としての生活、實在の目的としての實在、力の目的としての力が善だ。善に於いて、生活も、實在も、力も、最優質であるのみならず、最多量だ。最優質なればこそ最多量だ。惡の實現にさへも力がいる。善の實現には、それ以上の力が無論いるのだ。善は實在であり、實在は力であり、生活であることを知ると同時に、善の信者の責任が明らかになつてくる。

日本人についていふならば、團結は必要だ。協力は善だからといふ意味に於いてだ。その團結の大きさを増す努力も有用だ。大協力は小協力よりも大善だからといふ意味に於いてだ。しかしその協力各員の心に、善の學と術が完全に準備されることが殊に肝要だ。善の主觀的信者たるにとゞまらず、進んで善の客觀的實現者となるためには、日本人は、優秀なる道德、科學、教育、立法、行政、產業、思想、藝術を常に率先して創造する必要がある。惰力は久しからず、誤解もながく續きはしない。敗殘、不振、無自治、被征服は　その現象が恐ろしいよりも、その原因がなげかはしい。はずだ。善の客觀的實現者となりうる原因に着目して、不斷再生、不斷進步の努力を拂はねばならん。實力に於いて劣つた者は形勢に於いても遠からず劣る。實力のうちに、道德力は命令的位置を與へられて健在すべきだが、その道德力は　眞に道德力でなくてはいけない。力としてはたらく道德でなくてはいけない。國をば形成しても、醉生夢死に近い國民もある。國家をば持たなくても、人類の進步に著大なる貢獻を時々になすユダ族の如きもある。國をなす、なさんは本質的問題ではないが、國をなす以上は、それは、なした方がなさないよりも大善が達せられるからでなくてはいけない。單なる民族的團結は榮華でない。國をなして、しかも國際善に決定的新進路をきりひらかないやうな狀態には、どの一國も安住すべきでない。國際善、國際平和の競爭時代が、いまから猛然

として続け。他力善に、しかし、この場合にも無善に等しい。自力善の發動は、一國に限られてさへも、一國以上を救ふだらう。それが各國にあまねければ、社會の總換骨奪胎が期待される。ハ氏はウ氏ののちに出でてウ氏の遺志を催進した。米國にハ氏の善を小善に示す出藍者がいづることを望むと同時に、米以外の各國に、米國の功績を忘れさせるほどの眞新大善意が發動してくることが望ましい。立國の動機を、權利意識から超脫させて、義務意識に屬させる時代的必要はすでに熟した。國際奉公の誠意を競ふ光景が開展されなくてはいけない。自助しない國民は益友國でないが、濟他しない國民は自救することもできない。

日本の一目的は、隣邦支那の完全獨立に存すべきだ。四億の國際無能力人をして、恐らくは先づ團結の力によつて、國際自治、國際責任、國際創造の必要味と、稀貴味とを切實に知らしめよ。地上に無自治、半自治の民あるは、地上一社會の現代に於いて許容すべき事實でない、深く支那人の自治心に浸達して、國際獨立の衝動を、かれらの內から、決定的運命的意思とまでに擡頭崛起させる可能はないか。歐米先進國の人道主義の炬火は遠く進む。後進諸國民も、せめて自己の足もと近くぐらゐをば、自己の松明をともして、一層安全に進むべきだ。追随主義は、取り殘され主義だ。あまりの無自治者は、やがて自治の國際五人算にかけられる折り々々に、四分される。共存數國民も、屠殺の延長としての肉食する。善を信ぜば、われ先づその發明者となり、發動者となるやうであれ。なつて成功するやうであれ。

みづからが國際なみの品性あり、知識ある國民とならないうちに、比較的弱者を特に善意的に注意する態度は、弱者崇拜であつてはならん。人類の優秀線をなるべく長く張り、つなぐ目的の態度でなくてはならん。ある民族や人種の支配を欲するところは惡だ。今日の奴隷民が明日の支配民となることを欲するこゝろと行ひとはそれだけの心惡であり、行惡である。今日の支配民が有する如き、乃至それ以上の本質的人間的優秀價、優秀力を、明日のすべての國民が、隨つて今日の奴隷民も、有するに至ることが肝要だ。それを欲するこゝろと行ひとはそれだけの善だ。往昔のギリシヤは、自己が信じた自由主義、文化主義、進歩主義を、近隣、遠隣の他國民には信じさせまいと努力した結果として滅落した。善の吝嗇と、善の嫉妬とは、見ぐるしいだけでなく、損だ。

皇太子殿下の攝政を一轉機として内には社會連帶、外には國際協働を理想とする新日本の建設を提唱す

内には一視同仁、外には世界平和を念とし給ふ攝政宮殿下

文學博士　三宅雪嶺

◇

日本では君主の直接に支配した事が少く、宰相又は輔佐が實務を執る事になつて居つた。君主以外に責任者が存在し居つたと言へる。君主自ら事に膺るのは、創業類似の場合であつて、制度が整ふと共に、王朝ならば藤原氏とか、徳川時代ならば老中とか、實務の衝に當るのがあり、君主の智德が關係ないやうであつて、矢張何等かの關係があり、場合によつて著しく顯はれる。明治維新は種々の事情の綜合より成つたにせよ、幕末に天皇の繼嗣が順調、將軍の繼嗣が不順であつた事、與らぬとせぬ。天皇側で光格、仁孝、孝明、明治と順に續き、いづれも御聰明と知れ、將軍側で十一代が無類の子福長者であつたに拘らず、其後繼嗣について面倒が絶えず、中に東西の分別が着かぬやうなのがある。幕府で老中が事を執り、或は大老を置いたりしたけれど、將軍に事故あるので、出來る事が出來ぬのもあつた。早晩皇室の下に諸藩が統一する機運であつても、幕府が見掛け倒しの形を免かれなんだのは、いくらか此邊の事情に由らう。天皇側にも、孝明天皇が御早世あり、皇太子が幼冲を以

つて即位せられたけれど、先づ順當であり、將軍よりも御聰明續きと云はねばならぬ。公卿だの浪人だの、寄つて集つて事を成したやうであるが、十三四代將軍のやうでは、事の纏まりが惡かつたらう。公卿は總じて大名より悧巧と言ひ、共譯でもないが、天皇が將軍より御聰明であつた事を忘れてはならない。

◇

明治天皇は所謂幼冲を以つて即位あらせられ、輔導の人々が盡力したにしても、國運の發展と共に、稀に見る程の英主にならせられた。天皇崩御後、今上陛下が御病身で、臣民の憂慮する所となつたが、皇太子殿下が新に攝政職に就かれ、臣民一統に心を安んずる所がある。殿下も御幼年の頃、御壯健と云へぬのであつたのに、近年見違へるやうに成らせられ、今年御渡歐の際、廣く世間に知れ渡つた通り、御聰明の程、如何にもと欣ばしく思はれる。聖上の御病氣は今後何狀に渡らせられるか、攝政宮殿下の令旨にあるが如く、御平癒を待ち奉るべきであるが、侍醫の發表した所に據れば、攝政宮の御心勞を御煩はし奉らねばならぬやうである。誰が斯かる事を期待したらうか。大正十年と云へば明治五十四年、日本國民が若い皇太子殿下を仰ぎ奉る事になり、若い殿下が萬機を總攬あらせられるのは、何物かを暗示して居るかに感ぜられる。

◇

明治維新以來、長足の進歩と云へぬでなく、何にしても英佛の兵が橫濱に駐屯し、「野毛の山から……」の唄が廣まつてから半世紀で、五大國又は三大國の一として、世界に事を處するに至つたのであるが、之に應じて進んだ事もあり、進むべくして進まず、或は退くの嫌あるのもある。流れが波を揚げるが如く、進まうとして時に退くを免かれぬけれど、其間に頗る注意を要するものがある。半世紀間、宮中と國民一般との關係が何の狀態であつたか。一口に芽出度いと云へば云ふものの、今少しく何とか有りやうに思はれる事がないではない。何事も秩序立つと共に固定に傾き、動もすれば硬化し、骨化しようとする。宮中關係の人達は、皇室に忠誠を擢んでようとする了簡であるけれど、事によつて思ひ違ひせぬでもない。御苑や離宮の門衛が思はぬ事で人に反感を抱かしめるやうな事が、高官にも少ないと云へぬ。何等惡い意が無くて、意思の疏通を缺く。心ある人は何とか改めようと思ふのであるが、それで秩序立つて職務が定まつて居るので、何處からどう手を着ければ可いか、意外な動搖を起しても困ると差控へ、差控へて居る間に自ら之に同化

したゝたゞ調子の變つたゝのを見、驚きの眼を見張らずに居れぬ。あゝいふ者が居ては困る、早く對しめねばどうなるか知れぬと云ひ出し、之に着き從ふ者は、それ以上に矢釜しくし、折角改まり掛つた事が改まらず、いよ／＼億劫にならうとする。日本のみでなく、世界を通じて實にさま／＼の事あり、大國なる露國宮廷では更に一層物事が嚴そかである。獨逸宮廷に特殊の例があり、墺國にも隨分異樣なのがある。日本で別段急いで改めるに及ばぬと考へるに傾く。隨分何處でも貴族を重じ、肩書に注意し、平民主義なんか云つて居れるものでないと云ふやうになる。

◇

所が進むやうで進まぬ代り、進まぬやうで進む事があり、何か彼か爲て居るうち、世界戰役が勃發し、最も貴族を重じた露・獨・墺三帝國が瞬く間に顚覆へり、ヴエルサイユ講和會議に、平民の全權委員がずらりと竝び、貴族の方が肩身狹く感ぜられる。奈破翁戰役後の維納會議は云ふに及ばず、ビスマルクが牛耳を執つた伯林會議にも比べものにならぬ。何處の何者かが粗末な風體で議論するのがあり、僅かの年數で隨分變つて居る。之れとて俄かな事でなく、米國の發展に伴ひ、さしも保守的の英國で、フロツクにシルクハツトを被て、[illegible]にする事になつて居り、米が戰役で力を伸すや、いよ／＼其勢が盛んになり、貴族が可笑しく感ぜられる事珍しくなく、何時など何の爲めに稱するのか譯が分らぬ。其處は英國は自由國、爵が欲しければ頂戴するが可く、欲しくなければ頂戴せぬが可く、世間に上戸も居れば下戸も居る、人の妨げにならねば、好きな事して差支へないとして居る。爵嫌ひから見れば、爵を可笑しく感ずれど、人に多少の芝居氣あるが如く、昔の大名氣取りするのも惡くなからうと、辯解するのがある。何にしても僅かの年數の間に、貴族の相場ががらりと落ちた。露・獨・墺三國で下落したものは、貴族と紙幣とであつて、變れば變ると云はねばならぬ。流れは緩かな事もあるが、ナイヤガラの如く急流に變ずる事もあり、世界戰役と云へば簡單なやうで、意外にも貴族の相場を狂はした事が甚しい。

◇

日本では善い事と思ふて眞似して居るうち、事が變つて終ひ、何うなるのか分り難い。近來人が有難がつた爵は、明治十七年の制定にかゝり、折角値が出たと思ふ頃、遽かに下落と云ふ事になり、狐に騙されたやうな感がないでもない。然し何十

年間で作り上げた有爵關係者に於いて、惰性的に地位を維持しようと努めずに居れず、露・獨・墺三帝國の動亂を夢のやうに聞き、眞逆かと思ふやうな所がある。日本で陸相が議會で獨逸の戰勝を明言した程であつて、近來の事件で變化の見當の付かぬのも怪しむに足らぬ。何うなるか分らぬ所で、皇太子殿下が御渡歐あり、儀式は儀式とし、背廣でソフトの事があり、響きに宮中で考へて居つた所と違ふ事がいろ〱起り、御歸朝になるや、濱尾子が東宮大夫を罷め、珍田伯が之に代つた。老人から老人へ移つたやうであつて、其間に少からぬ違を認めずに居れぬ。濱尾は忠誠の人であつても、思想は隨分妙であり、珍田との距離が可也に遠からう。攝政宮が新に就任された事、少くとも濱尾より珍田に移つたやうな現象がある。併し珍田も僅かの年數の間に世界の形勢の變じた所、一々注意し切れず、事務に忙しく、社會の變化を呑み込んで居るかどうか。或は殿下の方が御諒解あらせられるやうな事が無いか。宮中府中の事は幾多事情の蟠り、簡單に運ばず、性急なものが望むやうな譯に行かぬに定まつて居れど、殿下が御諒解あらせられると云ふ事が、各方面に影響を及ぼさぬとせぬ。一人に及ぶ所の影響が極めて少いにしても、少いのが集つて大きな現象となるべき順序である。急に目醒しい變化ないとし、爵の肩書で特權階級を造り、優越の位置を占めると云ふ事は、根柢に於いて改められるであらう。儀式の末にこそ尙ほ何等かの區別あれ、一視同仁の實が十分に表はれる事と察せられる。外國は外國、國內では左うは行かぬと云ふやうな事は、餘計な考へ方であつて、今の日本は最早さういふ事に拘泥せず、各その職に努めさへせば、國民として職分を果しつゝあるものであつて、貴族に列し、父祖の遺産で暮し、何を爲すといふ事なしに日を送るが如き、國民として職分を果さぬ廉で、頗る責むべきものとする。前には、皇室の藩屛と云ふたりしたが、今は最早左ういふ事なく、國內に藩屛を設けるの必要なく、設けるのが不合理と知られて居る。明治の初め、鎭臺兵は國內の叛亂を鎭壓するを目的とし、今の各師團は外に對し、平和を維持するか爲めとなつて居る。今日貴族を皇室の藩屛とするなど、昔の鎭臺の如く心得て居るのである時として今でも左ういふ事を考へて居るのがあるが、誤るも甚だしい。其邊の事は舊官吏に解し難く、攝政宮殿下と共に新に了解するものが多くならう。

◇

英國皇太子が濠洲シドニーに行かれた時、宴席で傍に洲首相ストーレーが居り、云ふ樣「私は無政府黨員であるので、其御

持つて頂きたい」と。[illegible]、[illegible]に[illegible]に幾人かの無政府黨員に逢はう」と云はれた。何處でも斯ういふ譯に行かぬけれど、英國皇室が社會に於いて何の態度であるかを察し得られる。我が攝政宮殿下は固より御聰明、狹い藩屛のうちに閉ぢ籠らせられる事が、萬々無いと察し奉つて誤る事なからう。殿下は御渡歐で國内に特殊の刺戟を與へられたのみならず、列國にも同じく特殊の刺戟を與へられた。演劇「ミカド」の如く、機で冠被ぶられると豫期したのは、言ふの價値無いとし、人形のやうに上品一方と考へたのが少くなく、世間見ず、世間知らずと察したらしい。所で「殿下ゴルフはどうでせう」と云ふや、「ゴルフは好き」との御言葉で、早速試合と云ふ事になつた。外人が初め考へたのと餘程の違ひである。實は違つて考へて居つた外人の方が誤つたのであつて、殿下は豫め御修養あり、外人と應對など何程の事に思はせられぬ。供奉員中にも殿下サソクの御應對に驚いたのがあるが、之も誤つて居る。さういふ考で之れまで思はぬ邊に何程間違が生じて居るか知れぬ。供奉員の頭が固まり、極り通りの事の外は分らず、殿下は大局から御觀察あり、スラリと分らせられるのである。

、日本も[illegible]つたのに、今後左う行かず、ど[illegible]は[illegible]いか分ら[illegible]に[illegible]る。東洋の普佛兩國と云はれるのは、全く[illegible]無いのでなく、二大戰役を經來つた所、普國に負ふ所少くなく、普が墺に勝ち、佛に勝つた如く、日本は支那に勝ち、露に勝つた。ビスマルクとモルトケとが確かに或る一派の崇拜物であつた。普國は世界の多くの國と衝突し、遂に全敗に終り、日本は之と違ひ、新に乘出さうとするのであるが、最早普國を手本にする譯に行かず、別に進むべき途を求めねばならぬ。何うせば可いか、從來の關係者は間違つて居るけれど、攝政宮殿下は御間違になるまい。既に數回の令旨で察し奉る通り、世界の上に着眼あらせられて居る。現在の人智に限りあり、種々の事情が着き纏ひ、隨分無理な事もあるにせよ、道理を戰はし、正義を爭ふの上で、左う分らぬ事も無く、初め互に諒解しなくても、有りの儘に正不正、理不理を說けば、自ら諒解する所がある。華盛頓會議にしても、初め互に勝手な見解と思ふ所も、十分に話し合つて見れば、左う勝手ばかりでも無く、もとは云へば相互の諒解の足らぬに由る。自分勝手に自分で分らぬ事がないで無く、互に話合ふうち、それが分つて來る。[illegible]餘り無理をする事が出來ぬ。今でも強い者勝ちの勢があり、現在米國が勝

手を振舞ふけれど、米國とて何の爲めに勝手を振舞ふか。勝手をしたとて、大統領の儲けになるでなく、國務卿の儲けになるでない。米人の間に受けが能く、位置を占めるといふやうな事があつても、其爲めに無理に威壓しようといふ程低い文化程度でなく、欠張り餘り無理をしてならぬと云ふ所に落着く。ペテンをするとか、火事場泥棒をするとか、要するに禁物である。お互に狹い地球に棲むで居る人類であり、互に勝手を言ひ募つて、喧嘩をしても仕方が無く、仲善くして此地球に天國を打建てるに越した事ない。十分に話し合ひさへせば、大抵の所で纏りさうである。一二年で纏らなくても、道理が全く通らぬといふ事が無い。獨逸は彼の如く力づくで爭ふよりも別に仕方があつた。日本は曾つて普國に倣つたにしても、何時までも之に倣ふを要せず、日本は日本で爲すべき途がいくらもある。地球の或る部分に位置を占めて居る丈け、それ相應の職分を果せば可い。此邊の事は殿下に於て十分に御承知の事と思はれるが、若い日本では、一般に之を諒解するの傾向があるでないか。自然に其勢の熟するにしても、御聰明な殿下が大政總攬の任に膺らせられる事は、若い日本の臣民を鼓舞するに與る事多からうと信じ、いよいよ希望を囑せずに居れぬ。

中大兄、廐戸二皇子攝政時代の日本と東宮御攝政時代の日本

高 須 梅 溪

(一)

冬の夜は更けた。

私は。六疊の書齋に閉ぢ籠つて、靜かに讀書して居た。貧乏と病氣といろいろの不運とに惱まされながら、僅かに生の喜びを讀書の世界に見出した私は、自分の好きな歴史文學に毎夜のやうに沒頭した。最近、私は西洋史家の手になつた日本史に關する述作を繙いて其處から、新しい暗示を得るのを、一つの樂みとして居た。マードック、クレメント、ロングフオード、デイロン、グリツフイス、ヒルドレス、ケンペル、アストンらの諸家の論述に接して、日本史の新しい領域に觸れた時、其處に貧しい讀書子の歡喜があつた。

東宮殿下が、攝政に就任せられた喜びの日に私は偶然、マー

[illegible]

[illegible]て居た。六百四十五年の改革とは大化革新のことである、
此の改革の中心人物は云ふまでもなく、中大兄皇子と藤原鎌足である。殊に中大兄皇子が攝政時代から、國家的危機と一大轉向點との上に起つて、新たに中央集權の實を擧げることに力めて、半ば成功されたのは、偉大な功勳であつた。

私は、中大兄皇子のことを偲び奉ると同時に、厩戸皇子のことを追想し奉つた。蓋し中大兄が孝徳齊明二帝の下に攝政を勤められて、明治維新の改革に匹敵すべき大化革新の事業を創建されたのは、一面に於て、中大兄に先立つて、厩戸皇子が新文明の先驅者として、推古女帝の下に攝政せられて、略ぼ日本帝國の中央集權主義を實現すべき土臺を築いて置かれたからだ。此の二皇子が生活された時代は、年數に於て、五十年を離れて居る。だが、其の新傾向や、新思想や、新運動の上では、互ひに一脈の連絡を有して居る。厩戸が歩まれた道を知らなければ中大兄が辿られた路を知ることが出來ない。厩戸の内部生活を審かにしなければ、中大兄の政治的改革の根本精神に味到しまゐらせることが出來ない。二皇子は、攝政の地位に起つと同時に、新代を象徴するところの卓越した指導者であらせられた。

今日の日本文化の基礎の一半は、中大兄、厩戸二皇子の攝政時代に[illegible]

[illegible]文化の曙光は、厩戸皇子が[illegible]として採求されたものである。それに續いて[illegible]文化の[illegible]を吸收して、光輝を發揚した新しい日本文化の黎明は、中大兄皇子の努意によつて招來されたのである。それは固有の日本文化の上に大きい變革を齎すと同時に、目ざましい進歩を附與した。此の事は我等が衷心から感謝するところである。

厩戸皇子が攝政となられたのは、二十歳の時である、中大兄皇子が攝政となられたのは、二十九歳の時である。普通の國史には十九歳位の時にして居るが、それは誤謬だ。次ぎに東宮殿下が、二十一歳の今日、攝政となられたのを拜すると、三皇子共に青春有爲の時代に攝政を勤められる點に於て、偶然似寄つたところがある。新代に於ける改革は常に青年や、少壯者の手に依つて成就される場合が多い。それは、新代の潮流や、[illegible]氣や、傾向は、矢張、若々しい、新鮮な思想と漲るやうな新[illegible]の元氣とを有するものが最も直覺し且つ理解し易い本質を[illegible]へて居るからだ。そして改革の實現について、最大の努力を[illegible]ふことを惜まぬからだ。思ふに、厩戸、中大兄二皇子が、政[illegible]革新と文化的飛躍との上に大きい、目ざましい收獲を示されたのは、若々しい希望に燃ゆる時代に進歩的思想と獻身的熱誠と

を以て、すべての事に當られたからだと推察しまゐらせるのである。

また一面から見ると、時代は、正に廐戸皇子の英明や、中大兄皇子の俊邁な御資質を抱いて、政局に起ち給ふことを衷心から渇仰して居たやうに思はれる。換言すれば、行詰つた時代の展開を二皇子の御力によつて、解決されんことを期待したやうに見える。此の時代の點でも、今日、東宮殿下が攝政となられた原因や事情の相違を除くと、彼是似合つた一脈の共通點があるやうだ。時代は東宮殿下の英資を仰望して至純の熱情を捧げて居るのだ。

中大兄、廐戸の二皇子が攝政を勤められた時代と今日、東宮殿下が攝政とならせられた時代とは、年數上、一千三百年に近い距離を隔てゝ居る。けれども國家重大の時機であると云ふ上に於ては、略ぼ一致して變りがないのである。廐戸が勵精された時代は、國史に於ける第一の危機であつた。中大兄が努力された時代は、正に第二の危機であつた。思ふに今日の時勢は、國史上、第三の危機ではなからうか。若し危機と云ふことが穏かでないとしたら、最も重大視すべき一大轉向期にあると云つて宜からう。

現代の文化的に徹底した根本改革を要する趨勢の上にあることは、今更茲に繰返す必要があるまい。それよりも、私等に取つて必要なことは、現代に似て居るところの過古の歴史のうちに新しい暗示と教訓とを見出すにある。對外的にも對内的にも行詰つた現代は、どう云ふ風に今後の行路を歩まねばならぬか、どの方面に新しい運命を開拓せねばならぬか、左様した點に對して、中大兄皇子が執られた方向と躍進とは、殊に有力な暗示に富んで居るやうに思はれる。だが、私は順序上、先づ廐戸皇子の攝政時代から考察を進めよう。

(二)

ロングフオード氏の「古代日本物語」を讀むと、聖徳太子として史上の太陽のやうに輝いて居られる廐戸皇子の事業に就

「彼れは無政府狀態と争闘とを見出したあとに平和を殘した。半野蠻の暗黒界に文明の光りを與へた。未だ何もなかつたところへ藝術及び學術の知識と實現とを齎した。一千年以上に亘つて日本人の性格を形造つたところの宗教の嚴粛な戒律を附與した。」と云ふ意味のことを述べて居る。

思ふにロングフオード氏の云ふところは大體に於て、能く廐戸皇子の事業を約說し得て居るやうだ。廐戸の攝政された時代は、内政に於ても、外交に於ても、文化的に一大改革を要し

て居た。内政方面では、[illegible]して、[illegible]に對する政府の隠民の勢力を一排すると共に、[illegible]的な[illegible]主義の下に[illegible]を創設し、[illegible]術を[illegible]しなければならなかつた。外交方面では、支那三韓に對して、國光を發揚すると同時に、文化の上に於てそれに比肩するに足るべき外裝と内容を具備しなければならなかつた。畢竟、日本の文化は、應神、仁德二帝の時代に於ける大陸文化の移入によつて、表面上、相當の進歩を示したのであるが、未だ本質的に啓蒙作用を有効ならしめる迄に行かなかつたばかりでなく、其の後、次第に停滯して、廐戸攝政時代 は、日本本文化が在來眼下に見て居た三韓の文化發達よりも、遙かに遅れた狀態に定着してしまつて居たのである。

當時、斯うした文化的不振を組成した所以は、支那大陸から來た新文化の空氣を呼吸し理解したものが、少數貴族の極小圏内に限定せられて居たによるのだ。そして左様した進歩派に對して狹い意味の國粹擁護の上から手強い反抗を示した保守派が居たことも文化の進歩を妨げたのだ。當時の進歩派に屬して居たのは、廐戸皇子及び蘇我の一族である。保守派に屬して居たのは、物部、中臣らの一族である。進歩派は、時勢の推移と海外の形勢とを透察して、どうしても、文化的に現狀維持の不可であることを痛感して居た。言ひ換へると、舊文化から新文化へ、[illegible]から[illegible]への[illegible]ろが、保守派は神道思想にのみ[illegible]して、[illegible]て、現狀を打破することの危險と不安とを[illegible]して、停滯と固陋とに甘んじようと思ひつめたのだ。

勿論、保守派は一面に於て、武斷的傾向を有して居た代りに文治的傾向を有した蘇我一族に向つて、政治上からも大きい不滿を感じて居たのだ。そして當面に起つた佛教問題を中心として、それに乘じて、一擧に蘇我氏の勢力を打破らうとして居たのだ。要するに、此の爭ひは、思想的、政治的の兩面に跨つての新舊二派の眞剣な戰ひを意味して居た。そして蘇我氏が倒れるか、物部氏が倒れるか、何れかに決着するまでは鬪爭の止むわけがなかつた。

蘇我稻目の後嗣者で、其の父とひとしく、佛教を崇敬した馬子が、物部守屋と激しく爭ふた時分、廐戸皇子は、未だ十二三歲の少年であつた。そして守屋が馬子のために殺されて、新舊二派の爭鬪が一段落を告げた時分、廐戸は佛教弘通の保護者として、法興寺を建立された。それから推測すると、廐戸は早くから、新代の傾向に共鳴して、新文化を象徴するところの佛教の勢力及び價値を認識して居られたやうに思はれる。

それで、廐戸の政見、思想と馬子の有する考へとは、其の道

步的な點に於て一致して居た。三韓に於ける思想的、教學的、藝術的の進步が主として佛教の弘布に原因することを知つて、互ひに提携して、佛教文化を背景とするところの新政治の開展を實現しようと云ふことになつた。それが廐戶皇子の攝政時代に於ける序幕である。

（三）

茲に一言しなければならぬのは、廐戶皇子の人物、性格のことである。マードツク氏が其の「日本歷史」第一卷に於て「日本に於けるコンスタンチン」の名を以て、廐戶を呼びまゐらせて居るのには、異議があるけれども、「當時に於ける最も偉大な學者だ」と云つたのには同意することが出來る。廐戶皇子はローマに於けるキリスト教の擁護者コンスタンチン帝のやうに殘虐性を政治上に發揮されたことがない。そして主として哲人的、藝術家的色彩を帶びて居られたが、其の主要な本質に於ては、識見の優れた博通な學者であつた。

廐戶皇子が偉大な多角的な人物であつた爲め、いろいろの傳說が行はれて「一時に十人の訴訟を聞いて速座に裁斷された」とか「幼少時代から非常に聰明であつた。」とか記した史書が多くあるけれども、畢竟、それは想像的な附會說に過ぎない。實は二十歲で攝政となられるまで、單に温和な皇子として、誰れも其の非凡の才識や經論を有せられることを知らなかつたのである。だが學者として、內外の典籍を涉獵して、比較的に深い造詣を有せられた點に對して、尊敬の念を捧げて居たものが當時の少數知識階級のうちにあつた。

廐戶皇子は、攝政となつてからも、絕えず學問に親んで、自己完成に向つて勵精せられた。當時主として高麗僧惠慈について佛典を學び、博士覺哿について經書を修められた。「補闕記」や「法王帝說」によると、廐戶が、一つの事を聞いて、十の事を知り、佛教の意義や、眞理に悟入せられたことが記されて居る。そして推古六年には、惠慈の勸めによつて、諸王、貴婦人、臣連、公民らを集めて「勝鬘經」を講ぜられた。斯うして學術の上に於ては、第一流の專門學者に讓らない新知識を豐富に持たれたのである。

廐戶は、以上のやうに卓越した學者としての蘊蓄や、識見を抱いて、政治界に臨まれた。其の聰明な資質は、直ぐに政弊のあるところを看破された。當時久しい間の氏族的專制から大臣、大連たちが、政治の本義を忘れて、恣まに私事に人民を使役したり、國家に捧ぐべき租稅を後廻しにして、自分の收入を增加することのみを考へたりして居たのみならず、君臣の別を忘

れて、[illegible]について、廐戸皇子は、少からず不滿を感ぜられた。また政治上における貴族が、いつ迄も、其の重要の地位を獨占して、互ひに權勢爭奪のことにのみ熱中して、公民や、賤民などの權利を無視して居ることをも不快に思はれた。それ等の現象は國家に取つて、恐るべき無政府的傾向を招來するもので、明かに政治的危機が眼の前に迫つたことを識者に感知せしめた。

斯うして、日本の内部に心腹の病があつた上、外交問題についても亦頭を惱まさねばならぬことが少くなかつた。第一は三韓との葛藤、第二は、支那や、肅愼、(靺鞨とも云つた。今の吉林、滿州地方)との交渉などであつた。三韓のうちで、いつも、日本に向つて根氣よく反抗したのは新羅だ。新羅は、欽明帝の十三年に百濟を攻めて、漢城と平壤とを占領して、高句麗を身方に誘ひ入れた上、一擧に百濟を亡ぼし、任那を陷れようとした。それ以來、日本は、主として、百濟を助けて、新羅と疎隔するやうになつた。

新羅は、日本の武威を恐れないではなかつたけれども、反抗の勢に驅られて、任那を陷れた。日本では、最早それを默過するわけに行かなくなつたので、任那回復の目的で、新羅と戰つた。其の後、任那を回復して、事實上、それを百濟の所管としたが、一度、[illegible]いたこともあつた。其の代りに高句麗を破つて利益の[illegible]を得た。然し此の事件のため、日本の損失は少くなかつた。新羅の反目と抵抗とは、外交上に於ける無用の努力と物資とを多く費さしめた形があつた。

支那との交渉は、當然、改革の機運に入つて居た。在來、わが國では、晉、宋、齊、梁などから封爵を受けて、體面を毀損することを意識しない弊があつた。畢竟、それはわが文化の進歩が、未だ支那に及ばなかつた爲めに、斯うした錯誤を生じたのだ。それは、支那の勢力を畏怖した爲めではなかつた。

内外の典籍に通じて居られた廐戸皇子は日本の體面を毀損する所の、在來の慣例を一排して、對等の交際をすべき必要を認められたのである。また肅愼との關係は、當時、同國の言語を解し得るものがなかつた爲め、國交上にいくらか支障を生ずる傾向があつた。斯うして、外交上、刷新を要すべきことが少くなかつたので、少くとも、體裁の上だけでも、日本文化の躍進を外國へ示して勢力平衡を維持すべき必要に迫られて居た。

如上、内外に於ける弊套の累積は、どうしても廐戸皇子の攝政時代に根柢的に一掃し去らねばならぬ切迫した趨勢の下にあつた。だが此の偉業は、果斷と勇武との資質に缺けて居られた

廐戸皇子に取つて、少からぬ困難を感知せしめたけれども、ある程度まで、攻革と建設とのために、偉大な努力と識見とを示されたのである。

(四)

廐戸皇子と佛教とは、離れることが出來ない關係にあるけれども、單に佛教にのみ專念せられたと見るのは、要するに一面の觀察に留つて居ると云はねばならぬ。勿論、新文化の象徴であるところの佛教宣傳に就てより多くの力を致されたことは事實だが、一面儒教思想にも共鳴せられて、儒教と佛教との長所や特色を一つに融合しようとされた傾向が明かにあつたのだ。此の點から云へば、廐戸は佛教を尊信して、弘布に力められたに留つて、必ずしも、其の心醉者ではなかつた。其の主眼とせらた點は、佛教思想乃至佛教文化の精粹を吸收して、それを政教上に活用しようとされたところにあつた。

廐戸が政弊改革の企圖と中心思想とは、僧慧慈、博士覺哿らの人々を顧問として、愼重な討議と考慮とを加へて起草された憲法の上に表現せられて居る。西洋史家は、日本史家と共に何れも心から此の憲法を賞讃することを惜まない。其處には、明かにトルストイズムや、キリスト教と共通したところの思想が流れて居る。畢竟、此の十七ヶ條の憲法は、民本主義的な政治や、帝政主義の基本や、和協と純愛と信仰との生活などを明示されたもので、無政府的空氣や、閥族的弊套を一排して、有意義な哲人政治、確實な中央集權を實現しようとされた傾向を帶びて居た。廐戸が「國に二君なく、民に兩主はない。率土の兆民は、王を以て、主とするのである。」と教へられ「君をば天とし、臣をば地とする。天は覆ひ、地は載せる。」と論され「和を以て貴しとする。」とか「篤く三寶を敬ふ」とか「忿を絕ち、瞋を棄てゝ、人の違ふを怒らない。」とか「民を使ふには、時期がある。それは古の良典だ。冬月は民が暇を有するから使用して宜いが、春から秋に至るまでは、農桑の時節で、民は忙はしいから、民を使役してはいけない。」と云ふ意味のことを述べられたのを見ると、政治と社會との上に新しい組織と生命とを與へようと力められた心持が、はつきり分明るのである。そして廐戸が、君臣公私の區別を明かにされて、人臣はすべて民衆から、租税を徴收し得ないと決せられたことは、民族專權主義の閥族に對する強い打擊であつた。

けれども玆に注意しなければならぬのは、いつの世にも時勢に先立つた改革者の精神が、必ずしも、其の企圖した通りに實現されないことだ。其處に廐戸皇子の失望と淋しさとがあつた

や[illegible]に思はれる。これに[illegible]時[illegible]いた[illegible]に[illegible]し、一方に、[illegible]相的な[illegible]から、崇峻天皇を[illegible]し奉つた大逆を見ながら、これを糾彈し得ない境遇に立つて居られたことも一つの苦痛であつたらうと推測される。だが國交の上に於て、當時の支那を代表して居た隋に向つて、大使を派遣されて、日本文化の進歩を示すと同時に、對等の地位を占むべき希望を遂行せられたのは、微弱な國力しかなかつた時代に當つて恐らく、快心のこととされたにちがいない。それに冠位十二階を制定して少くとも、形式上だけでも政府の組織を新たに整へられたことは、大きい滿足であつたらう。要するに、厩戸皇子の攝政としての改革事業は、半ば成功したと云つて宜い。

殊に目立つのは、文學、美術科學の著しい勃興である。厩戸自身で、勝鬘經、維摩經法華經の疏を作つて、日本に於ける著述の先蹤を示されたが「日本書記」の起源も、此の時代に發現した。其の他明法學、天文學、醫學、曆術、音樂（伎樂舞）を始め、建築、繪畫、塑像なども、目ざましい改善を示した。施藥療病院の創設の如きは、一千三百年前、既に今日の社會政策の一端を實行したものである。何れの點から見ても、厩戸皇子は、偉大な攝政であつた。今日の國民は、聖徳太子の名で厩戸皇子を[illegible]し、其の[illegible]されて[illegible]、[illegible]に、[illegible]太子の日本文化史上に於ける[illegible]大地位を連想しないものはないのである。

（五）

次ぎに大化革新を實現された中大兄皇子（天智天皇）の攝政時代を回想することは、私の深い喜びである。中大兄は、累代の積弊が、眼の前に山のやうに横はつて居た多難な時に蹶起して、内政の上にも、外交の上にも、有意義な一大英斷を加へられたのだ。直言すれば、當時のわが國家は最大危機に瀕して居た。内政では、族姓主義の弊害が極度に達して、強力な閥族中には、蘇我氏のやうに、皇室を脅威しまゐらせるやうな專横を極めたものがあつたのみならず、地方に於ても、土地と人民とを私有して、殆ど朝威を無視したやうな振舞をする族長が少くなかつた。亂世の徴候が歴々として見えて居た。

其の上、尊い氏族の出身者は、いつ迄も世襲的に官界に於て好地位を占め、卑しい氏族の出身者は、無期限的に不遇な低い地位に居るやうに習慣付けられて居たことは、官界の空氣を單調化し、平凡化して、甚しい停滯を生じた。それは、人物經濟の原則に背くのみならず、下層階級の烈しいい不平を醸し出す

ところの傾向をも伴つた。そしてそれは、民本的政治を行ふ上に大きい障碍となつた。其處に不安な暗い影がさして居た。

だが、茲に注意しなければならぬことは、社會生活の上に於ける競爭から、氏族制度に基づくところの組織が次第に打破られようとし始められて居た趨勢である。それは、氏族本位の政治が爛熟して、其の機能が大分ゆるんだばかりでなく、良姓を誇るところの門閥者中から、生活上の落伍者や、失敗者を出すと同時に、奴隷のやうに侮られて居た賤民中から生活上の成功者を出すやうな傾向が往々あつたところから、自然、双方の間に混合作用を生じた。また戀愛關係からも、良家のものと賤民との融化作用を實現して居た。それ等のことは、最早氏族制度が新代の生活を維持してゆくことが出來ない傾向を豫示して居た。言ひ換へると、斯うした舊組織は、最早其の生命を失はうとして居たのである。それの對策は、どうするか。如何なる新組織の下に社會生活の新局面を開いてゆくか。そして新代に適應した政治を行うてゆくか。時代はそれに關して必然的な解決を逼つて居た。

次ぎに外交上では、依然として、新羅の反抗が一個の難關となつて居た。それと共に、新羅が當時支那を支配して居た唐朝の强盛な兵力を背後に有したことは、日本と支那との衝突を醸し易い危險を伴はぬでもなかつた。肅愼との關係も圓滿に行かなかつた。要するに外交關係は、紛糾して居て、解決を下すにしても、餘程愼重の考慮を要する點があつた。斯うした重大な形勢となつて居るところへ、眼前に横はるところの大きい危險が一つあつた。それは、物部氏らの滅落以來、競爭者が全くなくなつて、ひとり、朝廷に於て、權勢を固執して居た蘇我氏の僭上であつた。天皇弑虐の大罪を犯した馬子の如きは、必然、嚴罰されねばならぬ身でありながら、光榮と得意とのうちに世を去つた。そして馬子の繼承者蝦夷は國家に對して、何等の功勞を有しないに關らず、專ら父祖の功勳を恃んで、其の子入鹿と共にあらゆる冒瀆的な不臣的な言動を續けて、少しも、反省しなかつた。

蝦夷及び入鹿の行動は、茲に一々記さないが、蝦夷が遺詔を矯めて田村皇子（舒明天皇）を擁立まゐらせた功績を誇つて、前後十三年間、國政を專斷したことは、許すべからざる罪であつた。殊に入鹿は、横道な點に於て、其の驕傲な父に倍して居た。彼れは、自家の權勢を維持し、増大するために、古人大兄皇子を擁立しようとして聖徳太子の王子山背大兄皇子を斑鳩寺に於て弑しまゐらせた。彼れは、山背大兄皇子の人望を畏憚して恐しい鐵手を其の上に加へたのである。

入鹿は、[illegible]に門と、其の家を宮門と云つた。彼れが明かに王者を以て自任して居たことは、其の子を王子(みこ)と云つた丈でも明かである。それは、皇室に對して、背逆を極めた行爲で、寸時も寛容して置けない大罪であつた。當時、内政外交上の積弊を一掃し去る前に當つて、第一に鋭い打撃を加へねばならぬのは、蝦夷、入鹿らの上にあつた。入鹿が自己中心の思想を以て、政局を壟斷して居る間は、すべての政弊を一新して、根本的改革を斷行することが出來ないからだ。

中大兄皇子の眼から、入鹿を見ると、單に横逆な臣下と云ふ丈に留らなかつた。一面に於て、政治上に於ける新運動の敵であつた。國家の進運を阻害する專制主義者であつた。また時代の秩序と平和とを無意義に破壊しようとする亂賊でもあつた。何れの方面から見ても、入鹿の存在は、呪咀すべきことであつた。それで中大兄は、藤原鎌足と計つて、蝦夷を自滅せしむると同時に入鹿を誅戮されたのである。

蘇我氏の滅亡は、新時代の到來を豫示した。内政及び外交に對して、一大改革を加へて重大危機の中から拔け出るべき時が來たのだ。此の新運動の首領となられたのは、中大兄皇子である。其の參劃者となつたのは、藤原鎌足らである。蓋し中大兄に、[illegible]として[illegible]政治家として卓越されて居た。マードック氏は、中大兄の改新的偉大を明治大帝とひとしいとして居る。其の識量に於て、勇氣に於て、英斷に於て、組織的才能に於て、民本的傾向に於て中大兄の政治的資質は、確かに卓越であらせられた。厩戸のやうに、文學的、藝術的、哲人的な趣には乏しかつたが、理想の實現については、厩戸よりも、一歩を進められた。

だが、中大兄は厩戸皇子が、政治的に歩まれた道に思ひ到つて、多くの暗示を得られたのだ。厩戸の優秀な思想は、中大兄に對して、深い影響を與へた。唯厩戸は其の理想を表現した丈に留つて、其の實行を遙かに後の人に待たれたのだ。勿論、それは、哲人的な厩戸にいろいろの事情がからまつて居て、一時に英斷し難い點があつたものと思はれる。それのみならず、勇敢に自己の所信を斷行することは、厩戸皇子の長所でないと云ふやうな傾きをも作つて居たのだ。畢竟、厩戸は文化的に政治上の新しい提案を作つて、中大兄の解決を待たれた趣があつた。

（六）

中大兄皇子の大化革新は解體しつゝ舊組織の國家が新組織の

國家に更生したことを意味した。それは分裂と潰亂とに陷らうとした國家が、比較的に統一ある基礎の上に新しく据えられたのだ。當時氏族制度を覆して、郡縣制度を布いた英斷は明治維新の際、新政府が廢藩置縣を斷行したのと略ぼ趣を同じくして居た。唯大化革新の時代には、政府の背後に相應な兵力の充實がなかつたのが、明治維新と異る點である。此の事は、改革上に於ける一つの大きい弱味であつた。けれども中大兄は鎌足らと共に、族長らの反抗や、それから突發するであらうところの內亂について徒らに憂苦しないで、斷乎として、其の所信に向つて猛進された。

蓋し當時の根本弊は、氏族制度にあつたのだから、どんな危難を豫期しても、此の一關を打破しない限りは、改革の徑路を辿ることが出來なかつた爲めだ。國家の基礎を固めることも、朝廷の威光を發揚することも、有意義な新政を布くことも、民衆の苦痛を救ふことも、すべて氏族制度を打壞した後でないと、どうすることも出來なかつた。それで郡縣制度を新しい標識として、氏族制度の廢止を宣言され實行されたのである。其の結果、在來族長の下に從屬して間接に皇室に服從した形となつて居た公民は、當然其の族長の支配から解放されて、直接、天皇の統治の下に置かれることとなつた。勿論、私民や奴隷らは、此の原則の外に起つて居たが、公民は、暗黑から光明の世界へ出たやうに始めて天日を仰いだ。それと共に、今迄族長の手にあつた全國の土地も亦すべて國家に公收することとなつた。此の事は、空前の大變革だ。厩戸皇子が曾て其の憲法に依て明示されたところを茲に實行方面へ移されたのだ。

勿論、一時に族長らの土地を沒收することは彼等の生活を脅かすやうになつて、勢ひ彼等の反抗心を挑發し、惹ゐて內亂を生ずる原因となるから、それに對しては、私領の代りに一般官吏へ食封を與へることとなつた。其の他に於ても、彼等の不平を緩和するについて、二三の配慮を加へられた。そして使を諸國に派遣して、人口を調査した上、公民のすべてに亘つて、租稅を直接に課することとなつた。續いて、始めて族長の集議所とは全く別樣の意義と內容とを有する新政府が成立した。其の內閣には、左右大臣及び內臣を置くこととなつて、左大臣には阿部內麿、右大臣には山田石川麿、內臣には、藤原鎌足らを任用した。そして國博士高向玄理と僧旻とに詔して八省百官を置いた。これが官位令、職員令の起源だ。

次ぎに政府は、人民の生活上に於ける便宜を考へて、班田收授法を設けた。それは、毎戸の人口に割りあてゝ、土地を貸與し、六年目毎に改正する制度である。また彼等が有司の不法な

義務に苦められないやうに、其の室を與へることを考へるやうな施設も出來た。要するに民本主義的な色合が大方、政治の上に加味されたのである。

斯うして、新國家が生れ、帝政主義が成立して、中央集權の實を擧ぐべき傾向を强めた爲め、内政上に於ける危機は略ぼ切り拔けることが出來た。そして外交上に於ては、多年の難關であつたところの三韓を拋棄し、支那と和睦して、主力を集中的に内に向ける英斷を執つたので、最早、海外の問題について累せられる事件が少くなつた。大化革新の要領は、先づ如上に盡きて居る。

だが、大化革新も、一面に於て成功したけれども、其の施設は、概して空文に流れた氣味が少くなかつた。班田制の如きは唐制を參酌して、國家の公有地を平均的に一般人民に分配されることに決定したのは、國家社會主義の精神を表明したもので、當時にあつては、非常に進んだ考へであり、優れた方法にちがいなかつた。けれどもそれを實施するに臨んで、いろいろの除外例や、支障や、一定の制限などがあつた爲め、却て富者を利するやうな結果が後に至つて生じたことは、理想と實行との矛盾、背馳を示した。また族長の手から解放された公民が、事實上、公民としての保證を確實に與へられない爲めに、中央政府に近いところに[illegible]ことに從つて、一重に納めねばならぬやうな破目に陥つて苦んだ。大様したな缺陷はあつたが、萬難を一排して、中大兄皇子が、其の改革の根本的精神をある程度まで實現されたのは、偉大な功績で、やがて其の攝政としての偉大を證明されたのだ。

それに支那大陸に於ける文化の吸收については、廐戸皇子の攝政時代に始められた精神を繼承して留學生の派遣に力を入れ、前後二回、遣唐使を支那に赴かしめられた。第一回には吉士長丹を、第二回には、高田根麿を特派して、共一行に各百二十餘人の學生が隨行した。また三韓へも、學問研究のため僧侶を派遣した。當時の政府が海外に於ける新文化を受け入れる上に如何に熱心であつたかが思はれる。斯うして大化革新と共に日本的精神をより多く中核としてそれへ支那文化を加味した新しい文化の黎明が徐ろに國民中の知識階級の前に近付いたのだ。

（七）

私は、攝政として國家の危機を切り拔けて熱心に國礎を固められた廐戸、中大兄二皇子の人物と時代とについて、共の要領を述べた。思ふに東宮殿下の御英明は、必ず以上の二皇子に劣らない攝政上の偉勳を示されるであらうと拜察する。今や國内

的には、社會連帶の思想、對外的には國際協同の精神が頻りに高調されようとし、されつゝある。要するに、それは、純粹な愛と平和とを源流としたものだ。廐戸も、中大兄も、憎惡に對して愛、鬪爭に對して平和を齎らされたところに、改革の一大契點があつた。私は東宮殿下が、必ず此の博大な愛と美しい平和とを基調とし、目標として新代に適當したところの政治的、社會的の改革を實現されるであらうと豫期しまゐらせるのである。

拜聞するところによると、東宮殿下には、最新の政治思潮や、社會問題について深い注意を向けられ、政治上の御意見に於て、嶄然として卓越されて居るとのことである。其の御見聞の廣いこと、御學問に勵精せられること、萬民を深く愛して極めて平民的な御生活をせらるゝことなどを承ると、其の天資の俊邁に於て、廐戸、中大兄の二皇子に似給へるやうに思はれる。私等が東宮殿下の御攝政の下に、幸福な大正十一年の春を迎へて、新しい希望の輝きを仰ぎ得ることは、滿腔の歡喜である。愛するわが祖國の上に無限の祝福あれ！

國家の躍進と偉大なる皇太子

高島米峰

今上陛下、御惱み未だ御平癒あらせられざるは、七千萬赤子の、等しく深憂し奉るところであるが、しかし、吾が聰明に渡らせ給ふ皇太子殿下が、攝政として、萬機を總攬し給ふことゝなつたのは、上、今上陛下の聖慮を安じ給ふ點に於て、下、億兆をして、一道の光明を仰がしめ給ふ點に於て、眞に重大なる意義を發揮し給ひしものと、拜察し奉らなければならない。殊に皇太子として、攝政となり給ひし、最初の皇太子に在せし聖德太子が薨去し給ひてより一千三百年に相當するこの大正十年、漸く、聖德太子の理想と精神とが、着々として實現せられ、若くは、實現を急務とする時代に於て、此くの如きことあるを見るは、これをたゞ、偶然の遭遇とのみ言ふことが出來やうか。

惟ふに、日本が、國家として大躍進を試みた場合には、何時も、偉大なる皇太子が活動して居られたのである。これを國史の上に見るに、日本が、國家として大躍進を試みたと稱すべきは、推古天皇の時代と、孝德天皇の時代と、桓武天皇の時代

と、明治天皇の時代に比すべきであるといふことが出來る。

推古天皇の時代には、聖徳太子が皇太子に御立ちになり、同時に攝政として、内治に外交に、偉大なる事業を完成して、從來の小日本をして一躍大日本たらしめられたのである。聖徳太子以前の日本の狀態は、國の文化が極めて幼稚であり、國民の生活が極めて低級であつたばかりでなく、氏族制度封建制度の弊が、其の極に達して居て、中央政界に於ては、門閥家柄によつて官職が壟斷せられ、地方に於ては、國司國造といふやうな豪族のために、當然、天皇に直屬すべき筈の、土地と國民とが私有せられ、皇室中心、天皇神聖といふやうなことも、一般國民には、甚だ徹底して居なかつたらしいのである。甚だしきに至つては、大臣あるを知つて、天皇の尊きを知らずとさへ放言するものゝあつたといふ位、天皇の御稜威といふものが、國内にゆき渡つて居なかつたのである。かゝる時代に、聖徳太子は、これを内にしては、冠位十二階と憲法十七條とを制定し、依つて以て、門閥を打破し、人材登用の門を開き、封建制度を覆して、天皇神聖の意義を徹底せしめむと企て給ひたるのみならず、學問宗教藝術産業より、慈善救濟の事に至るまで、自ら親しくこれを研究せられたばかりでなく、これを奬勵し保護して、以て、彼の燦然たる推古時代の文化を、建設せられたのである。

次に、外交の方面に於ては、當時、日本の國威は四隣諸國に、殆ど有るか無しかの狀態であつて、支那の如きは日本を蔑視して、その屬國であるとさへ考へて居た位、日本といふものを、輕く小さく弱く認めて居たのである。然るに、聖徳太子は小野妹子を遣隋使として、二回まで支那に送り、隋の煬帝に對して、互角の國交を結ばれ、一躍して、日本が、世界の強大國としての地步を占めることになつたのであるが、當時に於て、此くの如き世界的地步を占めるといふことは、今日、日本が、世界に於ける五大強國の一つとなつたといふ事よりも、遙に、偉大なる事功と謂はなければならない。

加之、聖徳太子は、廣く智識を世界に求めるといふ事のために、多くの留學生を支那に送られて、直接に間接に、外國の文明を輸入せられたのである。即ち、小さな日本、低級な日本、幼稚な日本であつた當時の日本が、聖徳太子攝政以來、僅に三十年を出でない間に、國の文化の上から言つても、國の制度の上から言つても、國の世界的地位から言つても、全然、面目を一新した所の、大なる日本となり、進步した日本となり、優越せる日本となつたのであるが、これ正しく、皇太子としての聖徳太子の威力が、與つて最もその多きに居たと言はなければ

ならない。

孝德天皇大化の改新は、是れ亦、日本國史上、一新時期を劃するものであつて、國家が、大躍進を試みた時と言はなければならない。この大化の改新は、卽ち孝德天皇の皇太子、中大兄皇子の活動が、與つて最もその多きに居ることは、恰も、推古時代の文化が、聖德太子の威力に依ることの多きが如くである。啻に然るのみならず、中大兄皇子は、主として、聖德太子の遺策を奉じ、聖德太子が、御一代に十分實現し給ふことの出來なかつた理想を、遺憾なく實現せられたのであつて、門閥打破、人材登用はいふまでもなく、封建制度を覆して、郡縣の制を定め、中央集權の實を擧げて、天皇の御稜威を、率土の兆民に徹底せしめられたのである。

又、對外的には、御母君に在します齊明天皇を奉じて、九州まで御出陣になり、唐を親征せられる事になつた。しかし、その戰は、好結果を齎すことは出來なかつたけれども、當時、日本に對しては、先進國でもあり、日本の新文明の本國でもあるところの唐に對して、一歩も讓らないで、敢然として、國を擧げて國光を輝かさうとし給ひし處の、その自信と勇氣とは、聖德太子が、隋の煬帝に對して互角の國交を結ばれたところの、自信と勇氣とに比すべきものと、言はなければならない。

桓武天皇の皇太子は、早良親王と申す方であつたが、奈良から、山城の長岡へ都をお遷しになつてから、天皇は、政治を早良親王にお任せになり、親王も、大にその手腕をお揮ひにならうといふ時に、政争の渦の中へ捲き込まれ、遂に長岡遷都の發議者であつた藤原種繼が、政敵のために暗殺せられた時、親王がその罪に連座して、流刑の餘儀なきに至り、遂に、平安遷都、及びその後に於ける文化の建設に對して、貢献せられることは出來なかつたが、若し、さうした政治上の暗鬪さへなかつたら、早良親王は、桓武天皇の皇太子として、當然、平安朝文化の、建設者としての、勳功著大なものがあつたであらうと、想像せられるのであるが、そのこゝに至らなかつたのは、甚だ遺憾とすべきである。

近く、國家の大躍進は、實に明治の維新である。明治の維新は、言ふまでもなく、王政復古といふことに、最も重大な意義を有するところの大改造であつて、封建打破、中央集權、門閥打破、人材登用、憲法制定、條約締結、外國文明輸入等の、大業を成就せられたのである。然るに、孝明天皇が、慶應二年に崩御になつたために、明治天皇は、御年僅に十六歳で、帝位にお卽きにならなければならないことになつたのであるが、若し、孝明天皇が、なほ御長命でましましたならば、明治天皇は、卽

推古天皇に於ける聖德太子、孝德天皇に於ける中大兄皇子如く、孝明天皇の皇太子として維新の大業に參加し給ふべき順序であつたのである。然るに、御卽位が早かつたゝめ、皇太子と、天皇と、御二人分の御働きを、御一人で成し遂げられたのであつて、そこに、我が明治天皇の、偉大にまし〱たことが、如何にもはつきりと、吾々の眼の前に現はれて來るのである。

推古天皇の御代を距ること二十餘年にして、大化の改新が行はれたことから考へて見て、明治の維新を距る事六十年に垂んとする今日、更に大正の維新といふやうな事が、成就されなければならない樣な氣運に向つて居るといふことは、必ずしも、僕一人の感じではあるまい。否、國家内外の狀勢は、今や正に、大革新を要し、大躍進を要するものがあるのである。そうして、若し、大正の維新といふやうなことが、行はれなければならないとするならば、第二の聖德太子、第二の中大兄皇子、第二の明治天皇とも稱し奉るべき、偉大なる皇太子を、吾等の皇太子として、仰がなければならないといふ事は、當然の歸結でなくてはならない。

然るに、今、親愛なる吾等の皇太子裕仁殿下は、聰明仁慈に渡らせ給ふのみならず、古の偉大なる皇太子と雖も、企て給ふすことが出來なかつた、往昔の皇太子等が[illegible]た學を[illegible]し給ひ、古の偉大なる皇太子が、間接に、狹く知識を世界に求められたに對し、直接に、廣く知識を世界にお求めになつたといふことは、推古の文明、大化の改新、平安の遷都、明治の維新にも優つた、國家的大躍進の基礎工事を完成し給ひしものと、申上げても差支はあるまい。

殊に、海外に於ての御生活狀態は、新聞の報道に依り、活動寫眞に依りて、これを知ることを得たが、これが全く、從來の超人間的、若くは現人神的御生活とは、殆ど雲泥の相違のある、人間としての親愛に滿ちた、御生活振りであつて、路傍に送迎する、異國の名もない少年少女に對してまで、親しく御會釋を賜ふといふ有樣、從來、吾々國民が、求めて〱、しかも殆ど空望に近いとせられた、その人間としての親愛が、遺憾なく發揮せられたといふことは、今後の、吾々國民と皇室との親愛の深さと强さと廣さとが思ひやられて、一種言ふべからざる感激の情に堪へないのである。恐らくは、吾が親愛なる皇太子殿下も、從來の御生活に比して、今後の御生活が、より自由であり、より意義あるものであるといふことを、御感じになつたことであらうと、拜察するのである。此くの如き御生活振りを中心として、宮中にも府中にも、すべて新時代に適應する處の

幾多の革新が行はれるであらうと期待するだけでも、吾々の愉快は、極めて大きいものである。

又殿下御着英の當時は、恰も、炭鑛夫八十萬の、大々的ストライキの行はれて居た際であつて、英國皇帝陛下の吾が皇太子殿下御歡迎の辭の中にも『我國の最も重要なる工業が、峻烈なる爭議に依つて、荒廢しつゝあるを見給ふべし』といふ一節のあつたが如く、殿下は、直接に間接に、此の大ストライキについて、御見聞になつたことが、少くなからうし、且つ、英國の政治家が、此の勞働爭議に對する態度、及び、謂はゆる勞働運動の意義といふやうなことについても、十分にお考へになつたことゝ拜察する。此等が、日本將來の勞資問題解決の上に、幾何の光明となり力となつて現はれ來るかは、蓋し思半に過ぐるものがあらう。

更に、吾等佛教徒として、特に喜ばざるを得ないことがある。それは、吾が皇太子殿下が、オクスフォード大學で、十四人の日本留學生に謁を賜はつた時の事である。留學生の一人、立花俊道君が、殿下のお尋ねに對して、

『サンスクリツトと、佛教とを研究して居ります』

とお答へ申上げた時、

『サンスクリツトと佛教。佛教は、大乘か小乘か、それとも南方か。』

『小乘と申す方であります。』

『小乘。それでは、南方佛教だな』

佛教に、大乘小乘の別がある位のことは、誰でも知つて居やう。しかし、南方佛教が、小乘だといふことは、佛教について、少からざる研究を經たものでないと、突嗟の場合に、浮んで來る諒解ではない。この一事、たま／＼吾が親愛なる皇太子殿下が、如何に佛教に關して、御造詣がお深いかといふことを證據立てるものであつて、此くの如き佛教の御理解に富ませらるゝ皇太子殿下が、大正の維新としての、國家の大躍進大改造の中心となりて活動し給はゞ、必ず、聖德太子が、篤敬三寶を以て、國民の精神的基礎を確立せしめ、その基礎の上に、百般の施設を有し給ひしと同じやうに、大改造大躍進の計畫を樹て給ふに當り、佛教の精神を、採用し給ふといふことが無いとは考へられない。この點は、たゞ想像するだけでも、愉快禁じ難きものがある。殊に、明治維新の際、時の政治家中に、無識にして且つ沒分曉の輩あつて、國民の精神生活の向上が、國運發展の根本基調を爲すものなる所以を思はず、聖德太子以來千數百年間、國民の精神的基礎をなし來りたる佛教を、排佛毀釋の名の下に、破壞し去らむと企て、しかも、何等新なる精神的基

礎を與ふることなくして、逆に、舶來の物質的文明を輸入したる結果、爾來六十年間、國民の精神生活は絶えず不安に襲はれ、從つて、民心の動搖底止するところを知らないのである。この時この際、吾等の皇太子が、此くの如く、佛教に理解を有し給ふことは、實に空谷の跫音とも稱すべき事柄である。

日本の將來は、對外的には或は太平洋問題と言ひ、或は極東問題と言ひ、或は軍備縮少の問題と言ひ、或は人種的偏見の問題と言ひ、對內的には、人口の過剩と言ひ、綱紀の弛廢と言ひ、風致の墮落と言ひ、人心の險惡と言ひ、生活の不安と言ひ、その他、多くの問題に依つて、可成り、惱まされなければならない狀態に置かれて居る。勿論、その內容は、多少相違して居るけれども、事情の切迫は、聖德太子御攝政以前に比し、明治維新の前と較べて、毫も擇ぶところはない。從つて、此等の難關を、巧みに切り拔ける事に依つて、日本の世界的大躍進は、期して望み得られるのであつて、謂はゆる大正維新とは、即ちそれを言ふのである。かゝる時代に、此の聰明にして仁慈なる、皇太子殿下を、吾等の皇太子として、仰ぎ奉るばかりでなく、攝政の大任に就いて、天皇の事を行はせ給ふを見るといふことは、國家の幸慶、國民の榮光、この上やあるべきと、衷心より、歡喜し奉らざるを得ないではないか。（大正十年十一月廿五日攝政御就任に際する大[illegible]）

帝國進運一飛躍の機

法學博士　吉野作造

○今上陛下の御不例のため大政を親らし給ふ能はざるは我々の遺憾此上もなく感ずる所である。之が爲に今度攝政を置かるゝことになつたが、本來から云へば斯ういふ異例は無くて濟むものなら無い方がいゝのである。然るに今度の場合は、實に異例已むを得ぬと云ふ感じよりも、寧ろ國民の全部が誠に喜ぶべきことゝして進んで之を迎へて居るのみならず、日本帝國新文運の一開展機として重大の意義をさへ置いて居るのは如何いふ譯か。是れ新に攝政の地位に立ち給うた東宮殿下の御威德の然らしむる所に外ならぬは言ふまでもない。

○今日の樣な時勢に於て、東宮殿下の樣な聰明な御方を至上の地位に仰ぐことを得たのは、國家國民に取つて大の幸慶である。殿下の聰明に亘らせ給ふことは今始めて之を知るのではないが、其聰明が一層研かれたといふ點に於て、殊に其の活き〳〵した御人格が親しく國民の耳目に映つたといふ點に於て、先般の御洋行は、殿下の御爲にも又國民の上にも大きなみやげ

を齎らしたものである。

○殿下が御洋行に依てどれ丈の智見を擴め給ひ又どれだけの經驗を深め給ふたかは、玆に詳しく之を說くの必要は無からう。殿下が聰明を增し又經驗を深め給ふことは、それだけ國民の聰明を增し經驗を深めることであつて、其自身大きな意味のある事であるが、之は姑く措くとして、殿下の御洋行が更に日本國民の上に與へた大きな精神的影響がある。それは殿下の人間としての活き〳〵した御姿が赤裸々に國民の耳目に映じ、爲に國民が非常な親しみを殿下並に皇室に對して感ずる樣になつたことである。今までとても國民の殿下に對する敬慕の念は深かつた。併しそれは尊嚴窮りなき遠い處の方としての幾分堅苦しい崇敬であつたのだが、今度の洋行を機として國民は始めて赤裸々の人間としての殿下を共儕我々の中の首長として愛着せざるを得ざる樣になつたのである。

○夫れは如何いふ譯かと云ふに、西洋に行かれた爲に殿下の日常の御生活振りが有りの儘に我々に傳へられたからである。從來は何事も畏れ多い事として、事皇室に係るものは悉く國民の耳目から遠けられて了つたのに、今度始めて夫れが撤せられたのである。洋行の爲に此弊習が撤せられたなど丶いへば、宮內省の從來の方針に吾々は遺憾を感ぜざるを得ざる譯だが、兎に角、御洋行を機として、何も彼も有りの儘に報ぜられ、始めて我々は遠くから崇むべき方としてでなく、近く我々の中に奉じて親しむべき方とし、殿下を見ることが出來たのである。申すも畏い事だが、下層階級の者の間にも殿下に對し堪らぬ程の懷しさ親しさを感じて居るものは非常に多いといふことだ。近頃御寫眞や繪端書などの非常に賣れるに見ても明であるといふ。之が國民の精神の上に如何いふ影響を及すものかは改めて申すまでもなからう。

○斯う云ふ事情が又他の一面から宮中の御改革の動機となつて居るといふことも略々察する事が出來る。從來のやり方も必しも惡いとは云へまいが、何分時勢に合はぬやうだ。之等の事どもは今度の御洋行の結果に依つて明となつたので、段々改善さるゝのだと承つて居る。是れ皆皇室と人民との關係をいやが上にも深厚にするもので、殊に殿下の攝政の地位に就かせ給ふを動機として此趨勢の一層促進せらるべきを想ひ、吾人は心私かに大に欣幸を感ずるものである。

○殿下の大位に立たせ給ふことは、啻に宮中の御改革の上ばかりでなく、其他諸般の政務の上にも漸次大なる影響を與へ給ふこと丶考へらる。忌憚なく申せば、殿下の御見識が直接日常の政治の上に重大なる働きを及し給ふこと、明治天皇御在世時代

の如くなるまでには、猶數年の御經驗を積ませ給ふことが必要であらう。併し殿下より出づる道の實際的影響の如何なる種類如何なる傾向のものであるかは、殿下の平民的な御態度によつて今より略々之を察し奉ることが出來る。要するに殿下の聰明と、其仁慈にして平和を愛し給ひ、理義に通じ一光明を憧憬し給ふの態度は、必ずや內政外政兩面の上に今後光明なる展開を與ふるものたるべきは予輩のかたく信じて疑はない所である。

〇今や世界は大戰の後を承け一眞乎の堅實なる平和を建設すべく大に動きつゝある。即ち內に在つては連帶互助、外に在ては國際的協働、一言に約して謂はゞ、世界的正義に一貫する人道的精神に據つて內外兩面の政界を整理せんとしつゝある。而して之等の主義なり理想なりを殿下が日本國民の先達として最も潤澤に有し給ふことは、我々に取つて何たる幸福であらうか。

〇連帶互助といひ國際協働といひ、口で言ふは易い。いざといふと實行上中々困難だが、殊に我國にはなほ未だ封建的島國根性も殘つて居るし、閥族特權の惡夢から醒め切らぬものも可なり多いから、色々の形に於て障害が現れる。而して之等の障害が事理當然の反撥に遇つて動もすれば匿れんとするは、從來九重雲深き處であつた。幸に聖明漫に之を許し給はず、常に國民に嚮ふ所を知らしめ給ふを例とせるも、我が攝政殿下の如く、新しい理想新しい傾向共知の權化の如き方を戴くに於て、國民の安神は測るべからざるものがある。是に吾人が攝政殿下を迎へるを機として、日本の進展は茲に更に一大飛躍を爲すべきを疑はざる所以である。

著者	書名	定價及郵稅	内容大意
文學博士 箕作元八氏編	世界大戰史 全二卷	前篇定價八圓 郵稅廿四錢 後篇定價九圓 郵稅參拾錢	有史以來の大戰の顛末を最も精確に巧妙に敍述したる本書の聲價は世界的なり爰に數十萬部を賣盡して品切の處玆に重版出來
文學博士 箕作元八氏著	フランス大革命史 全二卷	各五圓五拾錢 郵稅各拾八錢	今や世界に磅礴せる民衆的運動の背景たり文化的思潮の母胎たるフランス大革命の眞相を博士畢生の努を以て描出せるもの也
文學博士 瀨川秀雄氏著	增補 西洋通史 全三卷	上中卷各參圓六拾錢・下卷四圓八拾錢・郵稅各拾八錢	人類經驗の總記錄を精叙し遠く上古より近く大戰講和の顛末に至る迄詳細的確最も手頃にして最も徹底せる最新世界全史なり
文學士 高橋俊乘氏著	國民日本歷史	價貳圓八拾錢 郵稅拾錢	淸新なる口語文の敍述と斬新なる編次の巧妙とは洵くが如き好評を博し今や家庭及學校の歷史讀物の最高位を占むるに至れり
小林一氏著	靑年日本歷史	價貳圓五拾錢 郵稅拾錢	弊社の破天荒なる大懸賞當選の傑作なり國民敎育の理想に立脚し輕妙の文を以て靑年子弟に愛國的精神を鼓舞す近來の好著也
文學士 木宮泰彥氏著	おもしろい日本歷史の話	價貳圓參拾錢 郵稅八錢	本書は歷史に持有なるべき微妙の感興を起さしめん事を期し最も興味潑溂たる題材三十を撰び流暢平明なる口語文を以て叙す

發行所 東京神田 富山房 振替五〇一 賣捌 全國各書店

書名	著者	定價及郵税	内容大意
縮刷 作文講話及文範	文學博士 芳賀矢一氏 杉谷代水氏 著	價貳圓七拾錢 郵税拾八錢	正しき文章は如何に書くべきかを懇切平易に常識的斬新の仕組に說き古今内外の代表的模範文を最も豊富に評釋せるものなり
縮刷 書翰文講話及文範	文學博士 芳賀矢一氏 杉谷代水氏 著	價貳圓六拾錢 郵税拾貳錢	氣の利きたる手紙を認めんとする人々の爲に唯一無二の自習書萬人必備の寶典として机上に戸外に本書の効用は今後無盡藏也
現代名家書簡集	芳賀博士校閲 富山房編輯部	價壹圓六拾錢 郵税八錢	現代人の參考に資せんが爲作家の多方面と部門の各樣式に亘り趣味饒かに應用自在の手紙三百餘通を蒐む書翰文講話の別篇也
面白き英語の手紙	桑田春風氏著	價壹圓六拾錢 郵税八錢	新年クリスマスの賀狀より四季折々の見舞應答上品なる趣味變情の書簡に至る迄一々生ける實例により新機軸の講述になれり
習字用書翰文 男子用	大町桂月氏著 日高秩父氏書	定價七拾五錢 郵税八錢	手紙の巧拙は習字の上手下手と相俟ちて一生の名譽運命を支配するのみならず後世の榮辱にも關する本書に就きて其の憂を除け
習字用書翰文 女子用	鹽井雨江氏著 坂正臣氏書	定價七拾五錢 郵税八錢	一代の文豪と筆者とが畢生の心血を濺かれ文章の巧と文字の妙とを謳して實用と優雅を兼ねたるもの字體宛ら肉筆に異ならず

發行所 東京神田 富山房 振替一〇五 賣捌 全國書店



整腸消化劑

ビオフェルミン

—粉末及錠劑あり—

腸疾患の治療と豫防とに

而して特に澱粉を攝取すること多き本邦人の保健の爲にビオフエルミンの服用を推奨す

腸内腐敗制止作用を有する乳酸菌、並に腸内澱粉消化作用を有する糖化菌を共存するビオフエルミンの果効は全世界に承認せらるゝに至る。腸加答兒、小兒消化不良病、綠便、常習便秘、糖尿病、腎臓炎等に對し効果甚だ卓越す。

（說明書郵呈）

製造元　神戸市二番町　株式會社神戸衛生實驗所

發賣元　大阪市東區道修町　武田長兵衛商店

愚庵和尚の一生

相馬御風



一

良寛和尚の生涯と藝術とについての私の味索の折々に、私にとりて何かにつけて懷かしい聯想の對象となつた他の四五の故人があつた。西行、芭蕉、曙覽……そして桃山の愚庵もたしかにその一人であつた。

愚庵和尚について私の知り得たところは、僅に『愚庵遺稿』(明治三十五年七月東京本郷文求堂發行)と、齋藤茂吉氏著『短歌私鈔』(大正五年發行)中の『愚庵和尚の歌』と、愚庵和尚の遺友二三氏の談話及び消息を通してのそれに過ぎない。私は決して自分を愚庵和尚について多くを知つてゐるものだとは思つてゐない。又深くを究めたものだとも思つてゐない。しかもなほ私は將來どうかして此の人の生涯と藝術とをしみ〴〵味つて見たいものだと云ふ切なる望みを持たずには居られない。今かうして其の人についての私の未熟な感想を心覺えの爲めに書き留めて置かうとするのも、さうした切なる願ひがあるからに外ならぬ。

二

『愚庵遺稿』の例言中に生前愚庵と最も交りの深かつた陸羯南が次の如きことを書いてゐる。

『愚庵年少にして亂離に遭ひ、父母及小妹を尋ねて江湖に流

遊する二十年、初め國書を讀み、既にして儒道を學び、時に悲歌の士と交はりて北陬に往き、時に遠征の軍に從ひて南荒に渡り、或は劍客の團に投じ、或は博徒の家に寓し、市井の業、臺閣の氣、冷飯敝衣の生涯、綠酒紅燈の筵席、凡そ人間の苦樂、貧富貴賤都鄙內外の事情一も親炙せずといふこと莫し、一旦豁然悟る所あり、美人白骨英雄黃土を謂ひ、忽ち佛門に入りて髮を剃り、吟風詠月を以て身を終ふ。遺す所の吟稿詠草二卷、同人相謀りて之を梓に付し、名つけて愚庵遺稿と曰ふ。』

波瀾に富んだ愚庵の生涯の輪廓は、此の短かい章句のうちに遺憾なく描かれてゐる。若し人あつて此の章句を讀んで愚庵の名を初めて知つたならば、その人は恐らく何よりも先づ其の波瀾に富んだ生涯に對する好奇心から、愚庵その人の名に惹きつけられるであらう。若くは其の最後の出家隱遁の生活の如何なるものであつたかについての思慕乃至摸索によつて、其の人への何等かのゆかしさ、なつかしさを禁じ得ないであらう。

さなくとも、試みに人あつて何等の豫備知識なしに漫然『愚庵遺稿』一冊を手にして、何心なく其の表紙をめくり卷頭に揭げられた四葉の寫眞に眼をとめるやうなことがあるとする。愚庵鐵眼と銘された中老僧衣の人の凜乎毅然たる其の風貌。「一、金銀米穀ニ不足ナケレバ今日ヨリ一切ノ賄モノヲ受ケ不申候。一、御見舞ノ御方ハ一面ノ後直チニ御引取被下ルガ第一ノ御心切ト存候。一、死後ハ遁世者ノ義ニ付葬式ヲ成スコトヲ得ズ」以下三ヶ條の自筆の遺書と稱せられる文辭の奇雋脫俗。「月上菴松千尺枝、嚴光潭影夜離奇、忽然玉碎金龍走、出定山僧洗鉢時。――愚庵道人」と書かれた墨蹟の雄渾卓拔。さては伏見桃山の愚庵と註された小庵の簡素幽邃な實景。それらの寫眞はおそらく一面ごとに觀者の心に一種崇高なる感銘を與へずには措かないであらう。しかも、それらの口繪の最後の頁に突如として現れ來るあまりに異様な二個の肖像よ。印絆纏に麻裏草履、豆絞りか何かの手拭を無造作に肩にかけ、懷ろにした手の先をはだけた胸のところへ一寸のぞかせた樣子、股から下を露出した足のいかにも芝居じみた格好、凄味を帶んだその眼つき――寫眞師時代の天田五郎と銘をうたれた、此の異様な人物の寫眞は、そも／＼どのやうな關係を前揭數葉の寫眞との間に持つてゐるのであらう。更に今一葉「會社員時代の天田五郎」と註された分別に富んだらしくしてしかもどこかに一癖ありげな背廣姿の人物――此の肖像とても同じこと、そも／＼何の關係があつてこゝに揭げられたと云のであらう。こんな具合にしておそらく其の書の讀者は、開卷早々何よりも先づ愚庵と呼ばれた

一個の人物の人となりに對して、異常なる一種の好奇心を起さずに居ることは出來ないであらう。

まことに愚庵和尚ほど波瀾に富み、曲折の多い生涯を送つた人は、甚だ稀であらう。隨てその點からだけでも、愚庵と云ふ一個の人物の生涯は、興味の豐かな好話題たり得るに違ひない。けれども私達をして愚庵と云ふ人に對して、しかく切なる懷かしさを禁じ得ざらしむるところのものは、決して單にそのやうな變化に富んだ彼の生涯の筋書ではなくして、寧ろさうした變化の多い生活を營みながらも、終始一貫して高持せられてゐた愚庵その人の高貴純眞な心情そのものである。私達が明治時代に輩出した多くの歌人中今日なほ私達の心を惹きつける極めて少數な人々の第一者として愚庵に指を屈する所以のものも、彼の歌がさうした高貴なそして純眞な心情の表現であるからに外ならぬ。彼の多くの友人中で最もよく愚庵その人を知つて居たと信じられる陸羯南も、『愚庵遺稿』の跋文の終りに、

『愚庵の世間一般に知られて居るのは其の剃髮の因緣からでもあらうが、晩年に至つては詩と和歌と書と此の三つで以ての故に知られて居つた。其の他の事は餘り人が知らぬやうである。我輩から見れば彼が孝心深くして父母の行衞を搜したと云ふことは最も感ずべきことである。詩と和歌と書と云ふやうなものには、詩で求むれば愚庵以上のものも澤山ある。それを以て愚庵の價値とすることは出來ないのである。愚庵に取るべきものは彼は四十近くなるまで俗界にあつて有らゆる俗界の辛苦甘樂を嘗め盡くし社會の最も低き階級にまで身を入れてありながら、少しくも墮落せずに、士君子たるの志操を少しも變へず、二十前後まで受けた武士風の氣質と云ふものは種々なる境界を經ても依然として存在し最後に入道して超然俗界の上に立ち世の名流と交つて善く終を遂げたと云ふ一段である、是は尋常の者では出來ぬことと思ふ。』

と云つてゐるが、これは流石に卓見である。羯南の所謂「士君子の志操」「武士風の氣質」などの言葉には少なからぬ語弊があるけれども、私達が愚庵の生涯に心を惹かれる所以のものは其の波瀾曲折にあるよりも、寧ろ波瀾曲折によつて聊かも傷けられたり、汚されたりすることなしに、終始一貫して保持せられた其の純眞高貴な心情そのものであると觀た羯南の見識には敬服の外はない。出家隱遁後に於て愚庵その人の人格が放つたところの不滅の寂光は、正しく此の生涯を一貫して彼の胸奧に藏されて來た純眞高貴なる心情の當然最後に放つべき光であつた。愚庵和尚のあの波瀾に富んだ生涯について考へる上にも、亦かの寂びた底光のある彼の頭について考へる上にも、私達の

結局見逃がすことの出來ない焦點はそれである。

併しその事はその事として、私は先づ「愚庵遺稿」中に收められた「血寫經」（愚庵學人著）を始め、陸羯南その他の愚庵の知友によつて書かれた追懷記、並に福田靜處翁その他故人の遺友の二三氏について親しく聽き得た追懷談によつて、兎に角一通り愚庵その人の閲歷を書き綴めて見ることにしようと思ふ。

三

德川幕府の末期に傾いた頃、磐城國平の城主安藤對馬守の藩中に甘田平太夫と云ふ人があつた。別に傑出した所のある人物ではなかつたが、勤勉な正直者であつた爲めに、徒士目付から勘定奉行となり、祿高も四十五石を得て居た。年六十を越えると彼は家督を嫡子善藏に讓り、自身は隱居して平遊と號し老後の樂しみがてら町家の子弟を集めて讀書算術などを敎へて頗る安穩に暮してゐた。相續者の善藏もまた父に似て律義者であつたので、ぢきに山奉行にまで出世した。甘田一家の生活は、かくして頗る幸福に營まれることが出來た。

甘田平太夫と彼の妻お浪との間には二人の男兒と一人の女兒とがあつた。長男は卽ち善藏、次男は久五郎（安政元年生）、長女はお延（安政五年生）と云つた。次男の久五郎が卽ち後の愚庵和尙その人なのである。

さてそんな風で最初甘田平遊の一家は、さして豐かと云ふほどではなかつたが、兎に角平和な幸福な朝夕を送ることを得たのであつたが、元治慶應の頃から世間が何となく騷がしくなり初め、つひに明治戊辰の兵亂をさへ惹起するに至つて、思ひがけない不幸が彼等の上に降りかゝつて來たのであつた。由來磐城の國は奧州東路の咽喉である爲めに、京軍をここで喰ひ止めようとする奧州同盟の列藩はそれ〴〵多數の加勢を平藩に送つた上に、遊擊隊とか純義隊とか云ふやうな江戸からの脫走兵も之れに馳せ加はつて、こゝ背水の陣とばかりに平の城に立て籠つた。官軍の方でもそれと見て取つて、海陸三面から雲霞の如くに其の城めがけて打ち寄せた。到るところで兩軍は衝突した。民家は官軍から放たれた火に燒かれ、すさまじい砲聲は日夜の別なく山河を震はせた。かくして突如平和の夢を破られた平の町民はいふまでもなく、藩中の家々でも足手纏ひとなるべき老幼婦女子を思ひ思ひに知るべを賴つて、安全な村落へと逃げのびさせることになつた。

甘田一家もその例に洩れなかつた。嫡子善藏が出陣した後で、四人の親子は城下から一里ほど南に離れた中山村と云ふに甚作と云ふ緣故ある農家のあつたを幸ひ、一先づそこへと立退

いた。その時季蓮にもう六十五歳の老體であり、妻のお浪は(當時四十七歳)折惡しく病んでゐたので、十五歳の久五郎と十一歳のお延とがひたすら父の世話や病母の看護に努めてゐた。そして父も母も此の二人の幼い子供を杖とも柱とも頼んで辛うじて其の日其の日を過すことを得てゐた。

しかし、戰爭はそんな事には容赦なく、刻一刻激しさを增し行くばかりであつた。遙に望まれる城下の空は、晝は濛々たる砲煙に蔽はされ、夜は眞紅な兵火に焦されてゐた。悽ましい砲聲が殆んど絕え間なく彼方此方から轟き渡り、逃げ場を失つた老幼婦女子の物狂はしい姿が毎日々々あそこの田圃道、ここの畑中に見出された。そして人々の口からは味方危しの歎息が行き過ふ毎に洩らされるやうになつた。

味方に敗北ありとの知らせは、さすがに老弱者の心にまでも激しい亢奮を與へた。病苦に惱む老妻の枕邊に、不安な朝夕を過してゐた甘田平遊も、かうなつては安閑として戰報を待つてばかりゐることの出來ないやうな焦立たしさを感じないではゐられなかつた。しかし、彼はさうした逸り氣のまゝに動くべくあまりに明らかに自分の老衰を知つてゐた。そして毎日々々自分の腑甲斐なさを憤りながらも、徒らに扼腕をさすりながら口惜涙に咽ぶ外はなかつた。

さらでだに四邊の有様を見、人々の噂をきいて、今日はいさゝかに拔け出して行かうか、明日は父母に打ち明けて潔よく出陣しようかと、晝となく夜となく心を戰場にのみ馳せてゐた久五郎は、それとなく父の心中を汲み取るや否や、もう一刻たりとも躊躇してゐることの出來ない心の亢奮を感じたのであつた。しかし、又一方に家庭の現狀を顧みて、快方に向つたとは云ひながらまだお延の手に縋らなくては步むことの出來ぬまでに病み衰へた母の心中を察したり、かよわく頼りない妹の行末を思つたりして見ると、不覺とは思ひながらも彼の勇氣は挫けずには居なかつた。彼は終日終夜起つたり坐つたりして幼い心迷ひに驅られてゐた。

しかし、そのうちにも戰爭は層一層激烈の度を增して行き、はては兄の善藏が新田山の戰ひで重傷を負うたとか、或は討死したとか云ふやうな悲しい噂さへも、久五郎の耳に聞かれるやうになつた。そして兄についてのかうした悲しい取沙汰は、つひに彼をしてあらゆる心の迷ひを斷ち切らせた。彼は斷乎として意を決した。そしてけなげにも自ら進んで父の許しを乞ひ、口ならずして勇ましい初陣の門出に立つた。

四

老年の父、病み衰へた母、幼くかよわい妹――かうした頼りない家族をあとに残して初陣の門出をした十五歳の少年甘田久五郎は、折々どこからともなく響いて來る砲聲に、ともすれば後ろへ引かれようとする弱い心を引緊め引緊め味方の陣をさして歩みを運んだ。そして最初に彼は自分の親族に當る加藤覺左衛門と云ふ者の固めてゐた谷川瀨村といふ所の陣所を訪ね、覺左衛門に面會して仔細に自分の志を明かし、父の口上をも添へて推擧を頼んだ。覺左衛門は喜んで之れを引受けた。そして公けの沙汰として直に元服を申し付けられた上で、彼はいよいよ城下の東口に當る鎌田と云ふ所の關門詰を命じられた。どうした都合か、間もなく新川町の關門へ詰め替への沙汰に接した。

此の新川町の關門といふのは、正南容地山の衝路で、いつも激戰の場所となつてゐた。隨てこの固めに當つてゐた人々は、いづれも場數を踏んだ勇士であつた。要所には數門の大砲が据え付けられ、矢頃が測られ、暗號が立てられ、寄せ來る敵勢をうまくそこまで引き付けて置いて、一發の砲聲と共に數萬の人數を皆殺しにしようと云ふ計畫が立られてゐた。しかるに敵はどんな謀計をめぐらしたものか七月二日の戰ひから後は、いづれの手も遠く引き上げてしまつて、はかばかしい合戰とては更になく、いづ方も暫く休戰の姿となつてゐた。

二度詰所を替へられた久五郎は、その度毎に重要な地點へと撰び出されたので、我ながら肩身が廣くなつたやうに感じた。そして日一日と彼の勇氣の加はるにつれ、敵の襲來と合戰の開始とを待つ心の焦立たしさをさへ感ずるのであつた。しかるに、敵は杳として姿を見せなかつた。たまに擬勢の發砲に多少のやりとりをする位のことでは、到底彼の心は收まらなかつた。と云つて昔の軍とは違つて、一人拔驅の功名を立てると云ふやうな事も出來ないので、徒らに加はるものは無聊の物憂さのみであつた。

或日、久五郎は退屈のあまり朋輩と伴れ立つて近くの戰地を見廻つた。田や畑はひどく踏み荒され、ところどころに敵兵の取落して行つた武具の斷片などが散らばつてゐた。二人はさまざまのことを語り合ひながら、あちらこちらとさまようた。初夏の天地は滴るやうな綠色に包まれてゐた。二人の少年はいつしか戰場に居るなどゝ云ふことを忘れ果てたやうに、樂しい散歩をつづけてゐた。と、或る瞬間久五郎は踏み出さうとする足先のところに、或る珍らしい物の落ちてゐたのを見つけた。

「や、こいつは面白い」かう思はず叫んで彼はその珍らしい物を拾ひ上げた。それは敵の落して行つた後裝銃の彈丸であつ

た。この頃は味方には未だ後装銃を使用してゐるものは極めて稀であつたので、好奇心の鋭い少年の眼には、それは一層珍らしく面白く感じられたのであつた。

久五郎はその珍らしい弾丸を拾つて、暫くは夢中になつて手の中で弄んでゐた。そして嬉しさのあまりそれを友だちの前に見せびらかした。先程から久五郎のそれを拾つたのが美しさに、自分も一つ拾ひたいものとそれとなく前後左右を見廻してゐた相手の少年は、さうされると同時にもうたまらなくなつた。そして見せびらかすつもりで差出した久五郎の手から、いきなり其の珍らしい弾丸を摑み取つて駈け出した。久五郎は面喰つて追駈けた。そして暫くの間此の二人の少年は畑中をあちらこちらと追ひつ追はれつして、互に一つの物を争ひ合ふのに夢中になつてゐた。

と、いつの間にどこから來たのか、偶然にも久五郎の父の甘田平遊が其の場に通りかゝつた。そして思ひがけなく久五郎の姿を見たので、父は慌てゝ二人の少年の間に割つて入つた。父との思ひもかけぬ對面に、久五郎の驚きと悦びとは非常なものであつた。彼は一切を忘れて父の傍へにぢり寄つた。

二人の少年の争ひは、かうして無言のうちに解決された。そして、久五郎は 朋輩に事情を 打ち明けて 先に陣所へ 歸つて貰ひ、自分は父と共に路傍に生ひ茂つた草の上に腰を下ろして、軍の模様やら家の事やらを何くれとなく語り合つた。父も子も話の間に時々熱い涙に眼が曇つた。久五郎は父から祖母の容態の日に日に快方に向ひつゝあることを聞いた。平遊にとりては嗣子善藏の安否のまだ知れないと云ふことが何よりの心がゝりであつたが、戰ひの形勢が將來味方に有利らしいと云ふ久五郎の物語は明るい希望を與へてくれた。かうして久々に、しかも思ひがけなく相遇うた父と子とは、時の移るのも忘れ、場所柄をも忘れて、それからそれへと話を續けて行つた。

父と子とがこのやうにして話に夢中になつてゐた折柄、そへ一人の在所男が通りかかつた。其の男は鰒をあきなひに行くと見えて、背負つた籠の中にとれたばかりらしい鰒を澤山入れてゐた。それと見るや、久五郎はそれが母の第一の好物であつたことを思ひ出したので、あはてゝ其の男を呼びとめ、鰒を賣つてくれないかと訊ねた。そして男の快い返事を聞いてから、彼は喜んでその中から最も大きなのを三つ買ひ取り、それに糊を通してさげる事が出來るやうにして、それを母への贈り物として父の前に差出した。平遊の眼からは、その時にはもう抑へやうもなく熱い涙が流れ落ちるのであつた。

しかし、それを機會に、父と子とは再び別れを告げずにはゐ

られなかつた。二人はさまざまな情の籠つた言葉を取り交しながら、右と左とへ別れた。が、いよいよ別れようとする最後の瞬間に父は久五郎に向つて、それほど深く母の事を思ふならば、何よりも出陣に際して母の與へた訓誡の言葉を忘れぬやうにと云つた。しかも、父のその言葉は最も鋭く久五郎の胸に響いた。彼の心の奥からは、うかうかとして忘れてゐた母の最後の教訓が、電光の如くに閃めいた。

「人と物爭ひをすな！」

今更の如くにさうした母の言葉が、鋭く彼の胸を挟つた。と同時に今し方までそれを忘れて、徒らに血氣に逸るあまりに、つまらない物一つの爲めに仲の好い朋輩とまであのやうな爭ひを演じてゐた自分の愚かさに對する自省と悔恨とが、幼い久五郎の心の深處から湧き起らずにはゐなかつた。彼は泣きながら、別れ行く父に向つて自分の過ちを詫びた。そして彼の買つてやつた鰒を手にさげながら、片手には細い杖をついて、暮れて行く野路を只一人とぼとぼと歸つて行く父の後姿を見返り／＼陣所への歸路についた。父も幾度か振返つては會釋をした。久五郎の眼はいつしか何もかも見えなくなるまで涙に曇つてゐた。

五

、いら立たしい思ひに久五郎が待ちあぐんでゐた合戰はつひに七月十三日の暗霧深く立ちこめた未明に至り、突如として敵の奇襲によつて開かれた。しかし、幼い久五郎の期待は根柢から裏切られて、味方はつひに音信を絶した無殘な敗北を見るに至つた。難攻不落と信じてゐた平城も、僅に一夜の戰ひで落ちてしまつた。そして其の秋の末には會津の城も陷り、仙臺以下の諸藩も悉く兵を收めて歸順するに至り、冬の半ば過ぐる頃には、諸所に落ち延びてゐた平藩士等に、一先づ舊地に歸り更に朝命を待つべき山の沙汰さへ下ると云ふ有樣となつた。

七月十三日の敗戰以來ありとあらゆる艱難に堪へ、死にも代へがたいほどの屈辱を忍んで、味方の人々と共に逃げ延び落ち延びしてゐた甘田久五郎も、大勢の趣くところ如何ともしがたく、つひに冬の半ば過ぎ荒涼たる山の間を辿つて、彼は再び仙臺の山奥から故郷の平へと歸つて來た。戰運の拙さ、我身の腑甲斐なさを思へば再び故山の土を踏む懷かしさに胸かきむしらるる苦痛はありながらも、年老いた兩親とかよわくしほらしい妹の上を思へば、さすがに故郷はなつかしかつた。

しかし、それほどの苦痛を忍んでまでも懷かしさの一念に惹かされて甘田久五郎の歸つて來た故郷には、ついに再び慕はしい兩親と可憐な妹との姿とは見ることが出來なかつた。不思議

な運命の下に命永らへて、戰爭終結後一藩復歸の事務員として先に立歸つて居た兄の善藏との久かたぶりの對面に、まづ驚かされたのは此の一事であつた。兄の語つたところは次の如くであつた。

——善藏は故鄕に歸つて來ると直ぐに取るものも取敢へずして中山村へ行つて兩親と妹との安否をたづねた。しかし、その時既に三人はもうそこにゐなかつた。人々の語るところによると、七月十三日落城の後は敵の詮議が嚴重なので、平遊の一家三人は晝は山中深く身を潛め、夜分だけ里に出て甚作の家を宿所としてゐた。そして夜が明けると又山に入つて身を潛めた。かうして十七日までその地にゐたが、生捕られた近藤彌一郎が屈服しなかつた爲めに斬殺され、その他の男女の中にも首を刎ねられた者が少なくないと云ふので、平遊親子にも降參して命の助かるやうにと勸める者もあるやうになり、平遊の心も急に動き出した。折も折人夫に出た村の者が立歸つて來ての話に、新川橋で久五郎の射殺されてゐたのを見て來たとのことであつた。實のところ、それは人違ひであつたのだが、それを聞くと同時に平遊はかくなる上はもう仕方がないと、潔く自殺の覺悟をきめたのであつた。しかし甚作は熱誠をこめてそれを思ひ止まらせた。そして翌十八日のまだ夜も明けきらぬ時刻に、人知れずここらに身を隱さんものと、不意に妻と娘とを置いて立つてどこともも知れず出て行つた。それぎり杳として消息が知れないのであつた。

かう云ふ兄の話を聞いた久五郎は、今迄張りつめてゐた心が一時に弛んでたゞもう其場にぶつ倒れて泣き叫ぶより外に何のわきまへもなかつた。何と云つても彼はまだ十五歳の少年に過ぎなかつたのだ。

やがて天下の事全く定まり、天田兄弟の身の上も全く晴天白日の自由を得ることが出來た。そして二人の兄弟は、何よりも先づ兩親と妹との行衞を搜すことに心を合せた。二人は先づ中山村の甚作方を假住居として、日夜の別なくひたすらその事に心を碎いた。しかし、其の年もいつしか暮れて明治二年の春ともなつたが、二人は全く何の手がかりも見出すことが出來なかつた。新たに民政局の名の下に設けられた磐城の政務廳にも歎願して公けの沙汰としての搜索をさへ試みたが、それすら何の甲斐もなかつた。そこで善藏はつひに意を決して自ら身を易者に變じ、諸國修業の旅にかこつけて、關東から越後路へかけての搜索にと志すに至つた。久五郎も是非兄と同行したいと思つたが、兄はむしろ弟にすすめて近いあたりの搜索を續けるやうにと固くそれを拒んだ。

かうして唯一人取殘された久五郎は、結局何とかして自分一人の力を養つて、目的を遂するに努めるより外に道がなかつた。よし、此上は自分も一藝を學んで、心のままに天下を周遊して兩親と妹の行衞を搜すことが出來るやうになるより外に道がない——彼の決意は其の一點に集中した。そしてその決意に力づけられて彼はひたすら修學に心を寄せた。

しかし、彼等二人の兄弟のさうした切なる望みも何等報いられなかつた。大亂後の危險の多い旅の空で、苦しい而も何等得るところのない絕望的な漂泊の永い月日を過した後に、命からがら歸つて來た兄と共に、久五郎はかくして空しく其日其日を送つてゐた。しかも、辛うじて朝敵の罪を免されて靑天白日の身となりはしたものゝ、生活の不如意は日に日に彼等の身の上に加はるのみであつた。さう云ふ間に、善藏は思ふところあつて姓名を天田眞武と改め、久五郎は天田五郎と改めた。そして藩政が廢されて縣治の布かれた明治四年の秋に、五郎はいよ〳〵困りぬいた果てに同學の親友伊藤祐之と共に東京へ出ることになつた。その時彼は十九歲の青年であつた。

以上、私は少年時代の愚庵和尚即ち甘田久五郎の閱歷について餘りにくだくだしく書き過ぎた嫌ひがあるが、しかし愚庵の生涯にとりて此の期間に於ける彼の閱歷が如何に重大な意義を有するかを理解することによつて、私は最もよく愚庵その人を理解することが出來ると信じてゐるのである。複雜多岐な彼の生涯を一貫して彼の內生活の主調を成してゐたところの兩親並に愛妹に對する彼の純眞悲痛な愛慕の至情は、此の少年時代に於ける彼の深刻な經驗の賜ものに外ならぬ。而して此の至情の爲めに彼は自ら求めて世のあらゆる辛酸を嘗めたのであるが、しかも亦彼は此の至情の功德によつて終にかの不退轉なる心靈最後の救濟を得たのでもあつた。彼の此の肉身愛慕の至情は、彼みづからにとりてはさながらにして至心歸命の一路精進に外ならなかつたのであつた。

此の意味で、私は愚庵の一生を通じて最も深く私達の心を惹く期間は、中間の波瀾曲折に富んだ放浪時代のそれよりも、如上純眞無垢な彼の少年時代と、晚年の貧寠幽寂な彼の遁世生活の期間とである。私が玆に特に彼の少年時代の閱歷についてくだ〳〵しい敍述を費した所以もそこにある。彼の此の少年時代の悲痛な經驗を知らないものには、愚庵が此世に遺した多くの優れた詩歌の本當の味はひはわかるまいと思ふ。

六

さて、天田五郎が十九歳の時に親友伊藤祐之と共に上京したのに、彼等の同學の友で猪瀬傳一と云ふ者が前に上京してゐたのを便つてゞあつた。ところが愈々上京して見ると、其の猪瀬は武庫司の官人となつて西國へ下つた後であつた。やむなく伊藤は下谷の大野某と云ふに身を寄せ、五郎は保科保といふ同郷人の世話でロシヤの司祭ニコライの建てた駿河臺の希臘教學校に入ることになつた。しかし、彼の心はどうしても其の教派の思想を受け入れることが出來なかつた爲めに、暫くして彼は人々の世話で石丸八郎と云ふ人の家の食客となり、やがて又石丸氏の紹介で當時正院の大主記を勤めて居た小池詳敬の家に寄寓することゝなつた。『血寫經』によると五郎が始めて小池氏の許を訪ねた時、小池氏は先づ彼に仕官の望の有無を訊ねたが、彼はその時斷乎として自分の念願とするところが天下を歴遊する事の自在な身となつて父母と妹の所在を尋ねることにある旨を答へたと云ふことである。これによつて見ても、自己の純眞なる肉身愛慕の至情に終始しようとする彼の一生の宿願が、その頃既に彼の内部に打ち固められてゐたことが明かである。

五郎は小池詳敬の許にあつてその高潔な人格の感化を受けつゝあつた間に、更に彼は小池の紹介で落合直亮（直文の父）について國學を學び、山岡鐵舟について禪定の學を修めた。此の二人はいづれも五郎を憐れみ愛してくれたが、[illegible]知遇を得たことは五郎の一生にとりては最も重大な事柄であつた。鐵舟は實に彼にとりての最も貴い善知識だつたのである。

しかも又歌人としての愚庵について考へる上に、當時の五郎が落合直亮に師事したと云ふことも、私達には見逃し難い事實である。五郎が國學の師としては後年九州放浪時代に接した丸山作樂がある。愚庵の作歌の上には此の二人の感化が多分に及んでゐるものと見なければならない。それは兎に角、五郎が落合直亮に知られると間もなく、直亮は仙臺の志波彦神社の宮司となり、五郎もその縁故で同神社の權禰宜として赴任することになつた。それは明治六年の春、五郎が二十一歳の時であつた。彼が此の仙臺移住の目的は、自ら衣食の料を得んとするにあつたのではなく、むしろ戊辰戰亂の避難地であつた仙臺に住むことによつて彼はせめて宿願成就の手がかりでも得られようかとの切なる望みからであつた。けれども、彼はつひに何等の光明をも見出すことを得ずに、其年のうちに仙臺を去ることになつた。

其後五郎は小池詳敬に從つて東海道から中國九州の果てまでも巡遊して、ひたすら兩親と妹の行衛を探つたが、やはりだめであつた。しかも、さうした安住を得ない生活の間にいつとなしにつくられた彼の放浪癖は、折柄突發した臺灣討伐軍に知友

葉と共に加はるやうな事までも敢てさせた。陸羯南の『愚庵遺稿』の跋文にこんな事が書いてある。

『愚庵は當時天田五郎と云つて有志家仲間の若手であつた、尤も其頃有志家と云ふのは今の政黨員のやうなもので、天田五郎は先づ今の壯士のやうな者であつた。』

こんな風で一つは彼の周圍の感化にもよつたのであらうが、それよりも寧ろ彼自身の安定のない生活が、いつとなしに彼のうちに變化そのものを好み、移動そのものを喜ぶ一種の放浪癖をつくつたものらしく思はれる。而して此の後天的な彼の習癖と、本來の熱し易い彼の性向とが結び付いて、ますます彼の生活を動搖の激しい方向へと導いたのであらう。

けれども、一面に於て彼がいつしかにつくられた自己の放浪性に動かされて自ら進んで波瀾曲折の多い生活を營んでゐた間にも、他面彼の内部にあつて時により折にふれて荒み果てようとする彼の心にとりての清泉となり白光となつたところのものは、何ものの力を以てしても滅することの出來ないところのかの純眞なる兩親愛慕の至情であつた。まことに此の至情こそは彼にとりては、心靈の故郷であつた。環境の誘惑と動き易い好奇心とによつて、時として彼のたましひは空漠たる曠野にまよひ出るのであつたが、しかもつひに此のまことの故郷の魅力はそれを引き戻さずにはおかなかつた。そしてそこに立ち戻ることによつて始めて彼の心靈はまことの生に甦るのであつた。

天田五郎の此の心内の苦悶の如何なるものであつたかは、『血寫經』中の臺灣征討後に於ける彼の生活狀態を叙した左の如き一章が最も鮮やかに私達に物語つてゐる。

『彈丸雨と飛び砲聲耳を貫ぬく間に身を置きてはしばし父母の所在を尋ぬる事をも忘れたれ東京に歸りて見ればまた其事のみ心にかゝり賴み置きたる友の許を問ひ合せ兄の許へ手紙など出し頻りに其事に奔走せしが臺灣の事よりして清國と隙を生じ兩國兵を以て相見るの場合に迫りしと聞くより五郎は再び功名心に驅られて今にもあれ事起らば眞先かけて北京に攻め入らんなど空想を抱くところに豐前の人河村狂一郎と聞えしは最も慷慨の士なればいかでかは人に後れん我こそ同志を語らひて先鋒をこそ承はらめと此事を五郎に謀れば元より共心の五郎なれば直ちに同意して左らば同志を募るべしと即時東京を打ち連れ立ちて東海道より西京に入り廻りて大阪に出で行く〳〵遊說して遂に九州に下り增田宋太郎、穗波半太郎、中村眞金等と謀り同意の士も多くあれば清國の談判和戰いづれに決するかと待つところに忽ち飛報到來して清國の葛籐は大久保公の力によりて和議調ひたりとありしかば今

使命を帯ぶる事詮なしといづれも思ひ／＼に立分れぬ。

五郎は筑前の博多にありて或時薩摩の人鮫島尚明氏に面會せしに此人は戊辰の役官軍の一將として磐城口に向ひたりとて平の城を攻めたる時の戰状など語り立ちて一場物語るに五郎は今昔の感に堪へず存亡所在定かならぬ父母妹の事を語り出で左る事を話しにも聞玉はぬかと語り出れば鮫島氏はいと哀れにも氣の毒に思ひて一封の書狀に五郎が身の上の事細々と認めて鹿兒島なる桐野利秋に宛て添書として與へける、五郎はそれより鹿兒島に至り桐野氏に身を寄せて久しく吉田の宇殿谷に居たりけり。

兎角するうち明治八年の春ともなりければ五郎は一たび東京へ立歸りまた異所を尋ねんと桐野氏に暇を告げけるに夫もまたよからむとうなづかれぬ二三日して鹿兒島縣廳より出頭すべきよし達しありしゆゑ何事にかと驚きて翌日出頭すれば參事右松五助氏對面の上路費として若干の金子を賜はりぬ有難き事かなと深く其恩を謝し天草を經て長崎に至り夫より東京へ立戻りぬ然るに間もなく不思議の禍こそ起りたれ五郎は同志の者數人と共に幹覰の廳へ引かれ數月の間拘留の上不應爲罪を以て禁獄三十日に處せられたり刑期忽ちに過ぎて再び世の中議くはなりたれど是れ全く己れ此日頃父母を尋ぬる心事らならざりし爲め天より譴の[illegible]へ自から悔ひ慎しみ先づ一たび故郷へ立歸り兄にも面會せんものと思ひ立ちて歸國せしが移れば變る習とてさしも嚴めしかりし城の趾は牛飼場となりて春草離々たる[illegible]趾もなく春知り顔に茶の花の唯一面に咲きにほへるも我が眼には恨めしくて

吹く風は問へど答へず茶の花の何處や元の住家なるらむ

と口ずさみつゝ兄の許を尋ね互に年頃の積る物語りも父母の事の知れぬを悲しむのみ多し。」

かくの如く彼は幾度か迷ひ幾度か躓きつゝも、なほ且歸るべき心のふるさとを持つてゐた。そしてそこへ歸ることによつて、彼の傷ついた心は癒され、彼の汚れた胸は淨められた。彼の書いた『東海遊俠傳』の序文（明治十七年二月）の中で彼と親交のあつた大岡育造氏は次の如く述べてゐる。

「戊辰ノ役兵馬倥偬ノ際父母ト相失シ其死生ヲ審ニセス氏曩天ニ號泣シ誓テ相會合セント期シ單身飄然其間ヲ出ツ爾來十有七年苟モ其蹤跡求ムルニ便ナルアレハ即チ芒鞋負販ノ賤モ敢テ辭セス鬼魅ノ境ニ出入シ龍蛇ノ窟ニ來往シ東北奥羽ヲ究メ北海不毛ノ野ヲ探リ、碕陽隈隅ニ及ヒ遂ニ海ニ航シテ濠洲ニ涉ルニ至ル艱苦辛酸思ヲ覃シ心ヲ悩ハメ人間ノ辛楚備サニ

嘗メサルナクシテ而シテ夢寐ノ間未ダ嘗テ其親ヲ思念セスンハアラス」

愚庵の放浪生活の眞相を私達はかくまで單純に考へたくはない。またさう考へることが必ずしも愚庵の胸奥に持つてゐたあの純美の至情の貴さを示すことだとも思はない。私達はむしろ彼のあの後天的な放浪性と胸奥に秘められた純眞なる人間愛との間の背離葛藤を察することによつて、一層よく彼が持つてゐた心の故郷の貴さを理解することが出來ると思つてゐる。

兎に角、かうして天田五郎の放浪生活は二十年に近い永い年月に亘つて殆んど寧日なく續けられた。冬の北海道で肺病に罹つて命から〴〵東京へ送り返されたこともあつた。東京淺草の江崎禮二の内弟子となつて寫眞術を習ひ、双子縞に前掛と云ふ姿で旅廻りの寫眞屋となつて伊豆から駿遠甲信に入り更に奥州までも廻り歩いて、父母と妹の捜索に努めた事もあつた。山岡鐵舟の紹介で當時天下に名を知られた侠客清水の治郎長の食客となり、東海道の宿場で多數のならず者を相手に茶椀酒を飲む身となつたこともあつた。徳光狐と稱する一種の巫女の占言を信じて、はる〴〵奥州の山奥へまで父母の所在を探り行つて、全くの見當ちがひに絶望の思ひを抱いて泣く〳〵東京に歸つて來たこともあつた。こんな風で殆んど二十年間彼の足の踏むところ、北は北海道奥羽から、西は琉球九州四國、又東海道中國北陸から、南は臺灣にまでも及ぶと云ふほどであつた。しかも、其の永い間の放浪生活の結果として、彼の心はつひに動揺と不安と疲勞と絶望との外何ものをも得ることが出來なかつた。

しかし、前にも述べた如く、彼の此の永い間の放浪生活は、必ずしも彼が胸奥に抱いてゐた父母と妹とに對する純眞な愛慕からの初一念のみに動かされてゞはなかつた。彼の或時代の歌にも現はれてゐる如く、彼は一面純情の人であつたと同時に、他面頗る才氣の勝つた人であつた。中心に何ものをも淨め滋ほはすことの出來る美しい心情を藏しながらも、彼は時として奔放な才氣に身を任せて顧みないやうな傾があつた。後天的に得た彼の放浪癖と、奔放な彼の才氣とが結び付く時に、彼はしば〳〵着實な自分の求めを忘れて迷ひ出た。そしてやゝもすると彼を豫期しない墮落の淵に陷れようとするやうな誘惑がそこにあつた。

けれども、彼はつひにその暗黑への道から救はれた。その救濟を彼に與へたところのものは、之れを内にしては彼の胸奥に最後まで汚されず傷けられずに活きてゐた純眞な至情と、之れを外にしては最もよく彼を理解し、且最も深く彼を愛して常に最も聰明な愛護を彼の上に與へてくれた山岡鐵舟とであつた。

鐵舟の義侠については今更述べるまでもない。たゞ彼が愚庵和尚の前身であつた天田五郎と云ふ一個の漂泊兒を導くに當つて、常に其の後天的な放浪癖を斥けて能ふかぎり忠實に胸奥の純情に奉仕せしめようとすることを専らとした聰明は、特に驚嘆すべきである。

明治十一年何か企つることあつて大阪に放浪中の天田五郎を拉して東海道清水港の侠客次郎長（本名山本長五郎）に托し嚴重な監督を依頼した事の如きも、鐵舟でなければ出來さうもない聰明な處置であつた。『血寫經』によると其の時鐵舟は五郎を叱して「尻輕き尻燒猿」と呼んだと云ふことである。まことに此の尻輕き狂ひ易き尻燒猿を彼の心内から追ひ拂つて、彼をして眞實純美なる人間たらしめることに、與つて力あつたのは山岡鐵舟であつた。此の善知識がなかつたならば、今日私達が愛慕してゐる僧愚庵と云ふやうな一個の人物は此の世に在り得なかつたかも知れない。

かくて、天田五郎は次郎長に見込まれて一時その養子となつて山本五郎（號鐵眉）と名を改めたことがあつたり、立派な紳士風をして千葉縣下で開墾事業の監督を勤めたりしたこともあつたりして、依然不安定な生活を續けてゐたが、明治二十年大阪の內外新報と云ふ新聞の幹事として其地に赴いたのを最後として、急轉直下彼の生活は安住の境地に歸着することを得たのであつた。

七

『血寫經』によると天田五郎（一時清水の次郎長の養子となり姓を山本と改めたこともあつたが故あつて其頃はもう復姓してゐた）が內外新報社の幹事となつて大阪に赴くことになり暇乞ひにとて山岡鐵舟居士を訪ねた時に、鐵舟居士は彼に京都天龍寺の滴水禪師への紹介狀を書き與へて、次のやうなことを云ひ聞かせたと云ふことである。

「お前は大阪に行つたなら、近いことだから時時京都天龍寺の滴水和尚の許に參禪して心力を練るがよい。滴水禪師は今の世には稀な大德である。此の人の感化によつてお前が若し一旦豁然として大悟することが出來たならばその時こそお前の兩親にも居ながらにして對面することが出來よう。お前は今日まで何と云つて見やうのない程の苦心をして兩親の行方をたづねた。しかし、今日となつてはお前のその誠をこめた望も、先づ達せられる見込みのないものと思はなくてはならぬ。そこで殘された唯一つの途は、お前が今日まで辿つて來たやうな外部に向つての搜索を止めて、自分の內部に向つてその人を見ようとする外にない。」

おそらく此の鐵舟居士の言葉が、後日に於ける彼の最後の大決心に最も強い暗示を與へたのであらう。大阪に下つてからの彼の生活も、「北新地や京の祇園町で極俗な交際もやつた」と云つてゐる陸羯南の話や、祇園中村樓はると云ふ女の「天田さんはお客の内で人一倍亂暴で内の者も持て餘した位でしたが」と追懷談の中で云つてゐる言葉などから察すると、依然として動搖し勝ちなものであつたに違ひない。しかし、さうした亂雜な生活裡にあつても、彼の胸奧にはかの純眞な初一念の清泉は絶えなかつた。そして時として彼の心の荒野に貴い濕ほひを與へることを止めなかつた。此の心の濕ほひによつて彼は時々本當の自分の生に甦つた。しかもさうした折々に彼に一層の强い力を與へたところのものは、かの鐵舟居士の力強い言葉であつた。彼はつひに滴水和尚をたづねた。そして和尚に謁見の度重なるにつれて、荒んでゐた彼の心が甦り、その奧底からは純眞なる初一念が日に日に力強く彼を動かさずには措かなかつた。と同時に現在の自分の亂雜な生活に對する厭はしさ忌はしさが刻々に堪へがたさの度を增して行つた。

彼は幾度か迷つた。幾度か躓いた。二十年に近い彼の放浪生活は結局彼に何の安定をも與へなかつた。しかもさうした永い間の放浪生活の終始を一貫して、常に易らなかつたところのものは、行方の知れない父母と妹に對する彼の悲痛にして純眞な愛慕の至情あるのみであつた。此の一念の爲めに彼はあらゆる辛酸を甞めた。此の一念の爲めに彼は激しい心内の苦闘をも經驗した。しかし、結局彼を本當に生かしたものは此の一念であつた。それは彼にとりては永久に失はれざる心の故鄕であつた。此の心の故鄕に立ち戻つて、そこに本當の生活の根柢を据ゑることが、とりもなほさず彼が本當に生きる唯一の道であつた。しかも、それは鐵舟居士の最後の訓誡に於て暗示された如く、單に肉身の父母と妹を搜し出すことのみによつて到ることの出來る道ではなかつた。純眞なる肉身愛着の至情は、直に至心歸命の精進であらねばならなかつた。

しかし、彼はつひに救はれた。釋尊の誕生日に當る明治二十年四月八日に、彼は卒然として一切を捨て去り、直に京都林丘寺に馳込んで、滴水和尚に謁見して髮を剃り、名を鐵眼と改めた。その時彼の年はなほ僅に三十四歲の壯年であつた。その當時の有樣は鳥居素川氏の「愚庵師逸事」と題された文章中の一節によつてほゞ窺ふことが出來る。

「和尙俗人に在はせし時、毎時京都繩手三條下る小川亭に投宿せられき、小川亭は維新の際肥後筑前等の浪士を庇まひ、主婦テイは俠女として名高く、彼の三條池田屋の變に新選組

と同日に死したる宮部鼎松田重助の髮を密かに收め、幕吏の目を忍びて之を寺院に埋めしなど、今に傳へて美談たり、されば勤王に由緒あるもの若くは一種の人物、常に尚小川亭に往來して勤王婆は京の一名物となりぬ。和尚も亦其處に往來せる一人にして老婆と特に心易く、酒間茶話折々出家したきことを申され、若し其の時は老婆に親の名代と爲り呉れとの賴みなりしかど、老婆は眞實とは思はず、「何時にても」と輕く受合へり。和尚屢次修學院村の村丘寺に赴き給へり、老婆其の時までは彼の地に滴水禪師の如き大德ありとも知らず、和尚如何にして斯る遠きお寺に屢次赴かるゝやと思ひ居たり。或日の事、和尚は老婆に向ひ、此度愈出家することに決心し、滴水禪師とも約束を濟ましたり、就ては豫ての約束通り親となり呉れとの事なり。老婆は今更の如く驚き、出家を止まる樣忠告し、既に一人前の男と爲り、髭も生へ眉も太ときに出家とは不量見なりと云へど、既に決心したる和尚は今更思止まる樣もあらず、老婆然らば仕方なしとて、和尚の親たることを諾し、長女ハルに命じて和尚の白垢衣等を縫はせ、寺小屋への弟子入の如く饅頭の大箱を手土産として洋服姿の天田五郎を伴ひ、與に車に乘りて林丘寺へ赴きぬ。滴水禪師は愈和尚を得度せしめ、今迄の俗人天田五郎が愈剃髮して丸坊主と爲りたる時、流石の和尚も頭を撫廻しホロリと涙を零し、老婆も一入の感に打たれて和尚と與に共泣きしたり。滴水禪師は和尚に向ひ『二三日も二階に昇り打臥し居れば總て氣色も直る』と申されき。和尚の得度式も濟みたれば、老婆は分れ歸らんとする時、新入道の鐵眼師之を送りて玄關に至る、洋服紳士を乘せ來りし車夫は姿變りし新入道を見今更に驚き亦共に涙を流したりと。老婆は和尚脱殼の洋服を遺骸の如き思ひして、家に持ち返り兒女の前に投げ出し、再び涙に暮れ『今日の如き辛らき事はない。復と二たび出家するものゝ親と爲るものでない』と泣き臥したりとなむ。尚和尚の洋服其他は其知己朋友等へ夫々頒ち遺りたりと云ふ。」

愚庵と親しい交りのあつた人々でも、此のあまりに急な變り方には、皆ひどく驚かされたものと見える。陸羯南もこんな風に書いてゐる。

「明治二十一年に我輩京都に行つた其の時に天田五郎既に佛門に入つて鐵眼と名を變へて墨染の麻衣を着て修學院村の林丘寺に居た　尤も其の前年の春一片の端書で『三十四年の夢覺めて』云々と云ふ消息はあつたから入道の事は我輩知つては居つたが、始めて變つた姿を見た時は何となしに憐れの感じがした、「思はずも變はる姿を見つるかな背かば我を背くべき

昔に」といふ小澤蘆庵の歌も思ひ出されて涙が出た。それは天田五郎の鐵眼の前身を知つて居るからで、能くもこれだけの姿に變へたものだと思つたのである。昔し屁子帶で東京のアバレ書生の境涯にも居つた天田五郎、又双子縞に前掛で廻旅りの寫眞屋であつた天田五郎、又印半纏腹掛で東海道の宿場に茶椀酒を吞んだ山本五郎、近くは大阪の北新地や京都の祇園町で極俗な交際をもやつた男、よくも境涯をかへたものだと坐ろに感心した。」

愚庵の前生が前生だけに、其交遊は極めて廣かつた。もともと書生時代からの交際が多いのであつたが、その頃には相當に立身した人々が甚だ多かつた。山岡鐵舟、陸羯南、大岡育造、福本日南、國分青崖、猪瀨傳一、伊藤祐之、藤井希璞、丸山作樂、品川彌二郎など云ふ人々を始めとして、至るところに彼の知人があつた。隨て天田五郎京都林丘寺に於て出家剃髮すとの報一たび世間に傳はると、大阪朝日新聞や何かに隨分色々の事を書かれて、一時は京阪地方などで彼の噂が第一の好話題として喧傳されたものだと云ふ事である。しかし、當人は元來あまり名を賣ることを好まなかつた上に、その頃の彼の心はさうした世間とは强ひても背かうとしてゐたので、その當時は努めて人中に顏を出さぬやうにしてゐたと云ふ事である。

なほ彼が出家の動機について陸羯南は更にこんな事も云つてゐる。

「段々話をして見ると、兩親妹の行衛も最早二十餘年經つて分らねば先づ諦めるより仕方がない、此上は菩提の爲めに一生を佛門に委ねるより外に仕方がないと考へたが、其の決心を促したのは又別にあるのだ、それは内外新報に居つた頃に昔の友達で大橋丑次郎と云つて是は越後の人で我輩も一時は同窓であつたことがある、五郎入道鐵眼は其の以前から懇意の仲であつたらしい、其の者は不幸にも頗る零落して大阪に流れ込んで居た、妻子も親もあるに頗る薄給で餘程困難して居つたのを鐵眼見兼ねて段々世話をして居た、其内に本人は肺病を煩つた、それから妻も煩ひ子も煩ひ親も煩ひ色々世話をして見たが充分世話が仕切れぬ位で、其の内に親も家内も一一妻子眷族皆死で仕舞つて、僅か一ケ月の内に皆亡くなつて仕舞つた、同じ新らしい墓は五つも揃つて出來たのにつくづく世の中の墓ない事を感じて急に思ひ立つて……」

或はさう云ふ事もあつたであらう。しかし、あれほど世の波に揉まれて酸いも甘いも嚙みしめて來た天田五郎の立派すぎるほど立派な出家剃髮の原因なり動機なりは、單にさうした諦めや厭世觀ばかりにあつたとは思はれない。よしさうした消極的

心狀に動かされたやうなところがあつたにしても、それはたゞ皮相であつて、眞實奥底から彼に其の決心を與へたところのものは、彼みづからの心靈の底から湧き上つた純眞な靜かな生活に對する中心要求に外ならなかつたと思はずには居られない。

安定のない自分の生活、徒らに外からの刺激に引きずられて動き廻る空虚な自分の生活、とかく迷ひ勝ちであり傷き勝ちである自分の生活、才氣や一時的の好奇心や昂奮の爲めに動搖し易い自分の生活、統一のない無方針な亂雜な自分生活――さうした過去の自分の生活そのものに對して、彼はいつしか堪へがたい不安と不滿とを感じつゝあつたのではないか。そしてそれと同時に先づ鐵舟居士によつて第一の暗示を與へられ、更に滴水禪師によつて第二第三とつぎ〳〵に力强い暗示を與へられたやうな、根柢あり統一のある、しつかりとした、靜かな心靈生活に向つての熱烈な要求が、刻々に力强く彼の內心に燃え上りつゝあつたのではないか。かくてさうした彼の心狀が極度の緊張を示した時に、彼はもう何ものをも顧みるいとまなくして滴水禪師の膝下へと駈けつけたのではないか。さう考へなければ、私達にはどうしても天田五郎の出家の立派さの由來を理解することが出來ないやうな氣がする。それでなければ又僧鐵眼の「頭おろしける頃」と題された左の如き二首の歌と「林丘寺偶詠」と題された次の如き一首の詩との貴さを味はふことも正當に解されないやうな氣がする。

鶯の聲ばかりして山寺の春はしづけきものにぞありける

墨染のあさの衣手朝な朝な手向くる花の露にぬれつつ

林丘寺雜詠 此歲薙髮事無爲考師

陳俯敢掃貴人門、好向山中禮世尊、一榻清風吾欲老、不知是佛是天恩。

月上老松千尺枝、巖光潭影夜離奇、忽然玉碎金龍走、出定山僧洗鉢時。

滿地松花琥珀黃、洞門鶴老不成群、庵中衲子爲何事、日臥空庭半榻雲。

惟ふに天田五郎の出家は、何よりも先づ此の靜寂な生活に對する切實な要求からではなかつたらうか。而して彼をして此の最後の不退轉な救濟を得させたものは、如何なる境遇の變轉に遭つても終始一貫して彼の胸奧に持ちつゞけて來た彼の純眞な兩親愛慕の至情の功德ではなかつたらうか。

八

いよ〳〵出家の大願を遂げてからの鐵眼の生活は、しかしなかなか隨分苦しいものであつたらしい。陸羯南もそれについてこ

んな事を云つてゐる。

「坊主になつてからと云ふものは天龍寺の管長である滴水和尙の弟子で、天龍寺と云ふものは臨濟宗でも名高い規律の立つた寺であつて日々の勤や何かは頗る嚴しい、未明に起きて寺の掃除や其の外の事に從事することは勿論で酒や生臭いものは一切禁斷と云ふ極堅い禪宗である、それに鐵眼は林丘寺の弟子卽ち滴水和尙の膝元に弟子となつたのであるから別して其の規律を守らなければならぬ、人間生れて三十四年其の間に世間のアラユル事をやつて來てさうして俄に有樣の境界に入ると云ふのは隨分難いことである、さりながら鐵眼は志氣の强い男で所謂る節を折ると云ふことは最も長じた男でそれに兩親の菩提の爲めと云ふ孝心深いからでもあらうが能くもじ變たものである。」

まことに「能くも變じたものである」と云ふ氣がする。しかも、彼はよく其の苦行に堪へた。それは彼の求めが切實だつたのからである。文字通りの欣求だつたからである。云はゞ彼は人さげすむ中年坊主であつた。しかも彼の眞摯な修行の結果は、流石の滴水和尙からすらも嘆稱せられて、はては林丘寺の後住に擬せられるまでになつたと云はれる。之れは彼の悟りが他の多くの坊主共のやうな生悟りとは選を異にしてゐたからであらう。

けれども彼の眞に求むるところは、既にもうさうした名聞を重んずる境界を遙かに通り越してゐた。滴水禪師の覺えが年々によくなるのは彼だとて嬉しく思はぬでもなかつたが、「新參の癖に修行もなくて」と云つたやうな他の僧侶達の嫉妬がましい蔭口などのそろ〳〵耳に入り始めるやうになつてからは、彼はもうさうした僧院の生活をすらなほ且煩はしく厭はしく感じないでは居られなかつた。彼は何よりもたゞ靜寂——何ものにも煩はされない靜かな心をのみ求めたのであつた。

かうした切なる要求から、彼は林丘寺に居ること五年にして明治二十五年春、地を淸水産寧坂にトして草庵を結び、文字通りの獨座觀念の生活をそこで營むことにした。庵室の建立は彼の竹馬の友であつた江政敏と云ふ人の喜捨によつて成つた。彼は其の庵を愚庵と名付けた。それは滴水和尙の彼に與へた

打破八識始稱丈夫勿認小智須至大愚

いふ偈によつたのである。そしてそれと同時に彼は自ら號して愚庵と云つた。

前にも述べた如く、彼の知友には多くの立派な人々があつた。わけて彼が出家後頓に其名を世間に喧傳されるやうになつてからと云ふものは、京阪地方の紳士與者と云はれる人々は勿論、全國各地に彼を慕ふ者が日に日に多くなつた。學者、官

吏、裁判官、辯護士、醫者、宗教家等あらゆる種類の人々に知己を得た。そして其等の人々は互に競ふが如くして彼の外護を申出たのであつた。しかし、其の頃の彼はもうそんな事に甘へる彼ではなかつた。むしろさうした世間の聲を聞くことが繁くなればなるほど彼の心はいよ／＼切に貧寒幽寂の境涯を求めた。天地の靜寂に坐して、むしろ最も充ち足りるを覺ゆる彼となつてゐた。

清水に草庵を構えて獨立した後の彼の生活についても、やはり陸羯南が最もよく語つてゐる。

「清水に愚庵を構えて獨立した後は固より是と云ふ極つた收入も何もない、一時は友達の補助を受けたが人の厄介になつてもヒドク迷惑を掛けぬと云ふ方針からして極手近に居る友達十人を選んで其の人どもに毎月白米一升づゝ貰つた、都合一斗の白米を貰つてそれを粥に炊いて、菜は專ら野菜であるがそれは又他の懇意の家から時々蔬菜位を贈られて間に合はして居つた。」

その頃の彼の食事は朝夕僅に二粥のみで、來客があつても飯を供すると云ふやうなゝがなかつたと云はれてゐる。其の生活の簡素のさまが、これだことでもほゞ察しられる。

明治二十六年の秋の彼岸に庵は西國三十三所觀音巡拜の旅に上り、其年の十一月二十一日清水の庵に歸つた。此の西國巡禮の旅の模樣は、「巡禮日記」と題する彼の遺著にくはしく記されてゐる。

「己れ素懷を遂げてより、早や七年と成りぬ、一には父母菩提の爲め、二には衆生結緣の爲め、西國巡禮を思ひ立ち、今年六月、遂に勸進帳を出して、世の淨財を集む、其文に曰

西國三十三番の靈場は、救苦の本願觀音薩埵、大慈大悲の眦を垂れ給ふ、華法皇曾て普く臨幸ましましてより以來、天下順禮の跡を慕ふもの甚だ多し、某身を三寶に委ね其志いよ／＼切なり、今茲秋季彼岸を期して、草鞋を發錫せんと欲す、依て結緣の爲め、敢て普く十方の淨財を乞はんとす、蓋し人に貧福の分ありと雖、勸進の高多き時は則ち結緣の數自ら減じ、喜捨の財輕きに過ぐれば以て歸依の信と爲すに足らず、故に貴賤平等金三錢三厘と定む、是より多きも受けず、是より少なきも亦受けず、嗚呼、善男子善女人、三界の火宅を出で輪廻の苦を免れんと思はゞ早く隨喜の誠を致して、菩提の緣を結び給へかし、穴かしこ。

明治御宇二十六年六月

京都東山清水の片邊に

愚鐵眼　敬白

」

斯くて宿願空からず、百日の内に千五百五十人の隨喜を得たり。中にも本庄安子といへるは新に白衣を裁ちて、東京より送り越しぬ、是れは我が道中着ふるしたるを乞ひ戻して、經帷子にせん爲めとぞ、扨用意の品々は食鉢、墨斗、印籠、地圖道中記、磁石、遠望鏡、驗温器、晴雨計、桐油、把針具、白布、白紙、藥劑、納經帳、隨喜人名錄各一卷、普門品三十三卷、内九卷は山本榮次郎が手寫したるなり、其外着替の衣類等皆袱子に納めて支度やゝ調ひければ、發錫は彼岸の初日と定めぬ。」

から彼はその日記の初めに書いてゐる。此の旅が彼の生活にとりてどれほどの影響を與へたかは『巡禮日記』一卷に收められた彼の數十首の短歌を讀んだゞけでも察することが出來る。少なくとも歌人としての愚庵を知る上に於て此の日記一卷は最も貴い資料である。

しかし、此の長い旅行の後、彼の健康はひどく害された かなり重い腎臟病に冒された上に、永く見なかつた喀血をさへ見るに至つた。法弟等の手あつい看護に再び起き出るやうになりはしたものゝ、其頃から彼の靜寂獨座を求める心は 更に一層切なるものがあつた。そして明治三十三年八月つひに桃山の指月の杜の近くで南向きの見晴らしのいゝ空地に新たに庵を結んで移り住むことにした。清水の愚庵は、今度は桃山の愚庵として知られることになつた。

此の桃山への移住は、愚庵その人にとりてどんなに嬉しかつたかは、その時詠んだ『桃山結庵歌』によつて最もよく察知することが出來る。

打日指京のうちをことしげみ伏水の里に我は來にけり
三吉野の吉野の若杉丸木杉柱にきりてつくる此庵
斧とりて急げ工等久方の雨ふらぬまにつくれ此庵
甍には黄金をふきし桃山の高城の跡に庵すわれは
桃山の高城の跡の礎の千引の石を庭石とせり
工等よ今日の日よりをいたづらに過していつか棟上はせむ
我庵は奇しき庵かも五月雨の梅雨につくれど雨にさやらず
桃山の小松が下の茅刈りて昨日苫葺き今日雨のふる
我庵は誰が來て作る西濱の江崎の子等が來てぞ作れる
わがために江崎の子等が月を經て作れる庵は住みよけむかも
遠山は葛城の山志貴の山生駒の山のいたゝきも見ゆ
ちか山宇治のたか山短か山小幡笠取八幡山崎
青丹よし奈良の都の春日野の春日の山も霞みてぞ見ゆ

しかし、それほど氣に入つた庵にも住むこと僅に五年で、明治

三十七年一月十七日、彼は靜に大往生をとげた。行年五十一歳、無論妻も子もなかつた。彼の法弟筴堂の書いた畧傳に其頃の模樣をこんな風に書いてある。

「三十七年一月一日夜俄に發熱し、呼吸促迫、下瀉數十回、近隣諸士走り至て看護す。醫師村田田中森田三氏投藥、曉に至て病苦漸く退く、日を經て愈快なり。諸士來り見る者、大に悅ぶ。然れども師獨り再び起たざるを知り、笑つて法弟某等に語つて曰く。我十五歳出て藩城を守る、今日新川の戰我軍利あり、今夜某所の戰我軍大に克つと、捷報頻に至る。何ぞ知らん、七月十三日火を本城に放て、皆走る。初て知る、先づ捷報なるもの皆以て信ずるに足らざる事を。今我病も亦然り、曰く浮腫著しく減退す、胸水少しく散逸すと、曰何、曰何、皆新川の捷報のみ。我自ら本城を焚するに、一輕一快、何ぞ悅ぶに足らんや。人皆死期を知らざるなし、只彼の新川の捷報を信じ、終に惑ふのみと。十一日、藤原忠一郎君を招き、委するに庵を以てし、得る所、皆舊知舊友に分送す、書に曰

冥途の旅立につかひ殘したる金子少々平生の御厚意に酬ひ度御笑納被下度候

明治三十七年一月十一日

愚庵

又愛誦春月を借主村西默吃に返還す。」

彼は夙にもう自分の死の近づいた事を明かに自覺してゐたものらしく、前年の暮近い頃からそろ〳〵自ら其の準備をしてゐたとの事である。生來の潔癖からでもあつたらうが、しかし何よりも彼は一切の物質に關する煩はしさから放たれたいと云ふ切なる願ひがあつたものと見えて、苟くも自分の所有と名のつくもの丶悉くの處分法を立派に生前に講じて置いた。一年餘も愛飼してゐた鸚鳥をすら、前年末京都の動物園へ寄附の手續を了したほどであつた。

病勢が革まつてから十三日目の正月十三日の朝、彼は朗々詩吟を始め、それから筆墨を命じて到底瀕死の人のそれとは見えぬ雄渾な筆力を以て左の如き遺偈一首を認めた。

氷魂向水散。鐵骨入苔穿。月下人尋否。梅花白處烟。

翌十四日に彼は更に左の如き一通の覺書を自書した。

一金銀米穀に不足なければ今日より一切の贈りものを受け不申候

一御見舞の御方は一面の後直ちに御引取被下候が第一の御心切と存候

一死後は遁世者の儀に付葬式を爲すを許さず

一叉塔を立つるを得ず
一學術に補益ありとせば解剖するも不妨
一遺骸は二三の法弟に依て荼毘せしめ近親と雖葬送するを許さず

右の箇條何人も容喙するを得ず。

明治三十七年一月十四日
愚庵主人自記

愚庵が臨終の模様は、その當時大阪朝日新聞に掲げられた記事のうちに詳しく書かれてゐる。

「……其夜（一月十四日）十二時過に又發作があつて十五日の拂曉に横身當宇宙の句を微吟し其朝から前日まで六合づゝも飲めた牛乳を全く絶ち藥を斥け午前午後の二度二十名許の看護の人見舞の人に一々手を握つて丁寧に訣別の謝辭を述べた、泣かぬものはなかつた、十六日法弟をして身を拭はしめ滴水傳來の白衣を着し麻の法衣を着した、其夜絶脈二度而して復息十一時過、目を開いて四圍の人々を見一々點呼して嗚呼有難いと云ひ、又イツまでも行かぬなア人々に迷惑をかける事ぢやと云ひ、十七日午前十一時半に至り今度こそ愈行きさうなと云ひ淸水をプーツと噴き出した、其朝苦勸して飲ませた藥水でもあらうかと思はれる、醫師直に注射三回したが感じない、十二時十分莞爾として示寂。」

彼はなほ臨終の床にある間、床頭に瀧和亭畫くところの恩師滴水和尙の肖像を掲げしめ、香を焚いて靜かに師恩を謝しつゝあつたと云ふことである。

何と云ふ尊い死であつたらう。何と云ふ靜かな生の終りであつたらう。

愚庵は又左の辭世歌一首を遺した。

大和田に島もあらなくに梶緒絶え漂ふ舟の行方知らずも

これはいつの日に始めて詠まれたものかわからぬが、和尙の親友の一人であつた福田靜處翁が死の一日前に訪ねた時に、前に掲げた遺偈と此の歌とを枕頭の黒板に白書して示し一二の句は苦心たり如何など語つたとは靜處翁の直話によつて知つた。此の歌は柿本人麿の

もののふの八十氏川のあじろ木にいさよふ波の行方知らずも

の影響を受けて出來たのであらうけれども、しかも全く獨特の感味を以て強く私達の胸を壓して來る力をもつて居る。愚庵その人のおほきさを思はせて餘りある歌である。淺はかな厭世的悲觀などゝは全くかけ離れた深みのある、しかもほがらかな寬

やかな現實觀に根ざした大きな歌である。宇宙の茫寞に對し聊かも動じない心さながらの表現である。生悟りの佛教臭などは寸毫もない。そして此の寛やかなほがらかな靜けさ——それが愚庵その人の最後に到り得たたましひの世界であつた。

九

愚の性格について陸羯南は「容貌は鼻隆く眉濃くして眼光を射ると云ふ樣であるから、何やら怖いやうに見え、其履歴も十五にして籠城したと云ふ位の事もあるので、知らぬ人は怖い人だと思つてゐたらしいが、段々附合つて見ると、誠に深切で愛敬があつて而して如何にも情深い。持前の性質として威張る者が大嫌ひで弱い者を大變面倒見てやる。」と云つてゐるが、其の所謂「情深い」と云ふことがまさしく彼の最も貴い持前だつたのであらう。かの行衛不明になつた兩親並に妹に對して生涯易らなかつた彼の悲痛純眞な愛慕の貴さ美しさについては改めて云ふまでもないが、前に引用した羯南の追懷談中にある大橋丑次郎と云ふ人の一家に對する彼の情誼と云ひ、又『血寫經』の中に書かれた廢殘の小池詳敬やその遺族に對して彼の與へた援助——さうした涙ぐましいほど美しい行爲は、愚庵の生涯にはおそらく幾度となく隱されてゐることであらう。おもふに彼は世にも稀な淳な、こまやかな、美しい、円満たる人間的情愛の持主であつたに違ひない。そして彼はその純眞な人間的情愛の爲めに、自ら求めていかばかり世の辛酸を嘗めたか測り難い。が、それと同時に彼はその純眞な人間的情愛の爲めに、いかなる境遇に置かれてもつひに自らを卑しめ汚すやうな破目にまで陷るやうなことがなかつた。彼はその美しい情愛の爲めに苦しんだが、それと同時にそれによつて救はれた 彼の最後の不退轉の救濟は此の純眞な至情の功德によるものと見なくてどうしよう。陸羯南は彼の追懷談の最後に『愚庵に取るべきものは彼が四十近くなるまで俗界にあつて有らゆる俗界の辛苦甘棃を嘗め盡し社會の最も低き階級にまで身を入れてありながら、少しも墮落せずに。士君子たるの志操を少しも變へず、二十前後まで受けた武士風の氣質と云ふものは種々なる境界を經ても依然として存在し最後に入道して超然俗界の上に立ち世の名流と交つて善く終を遂げたと云ふ一段である』と云つてゐるが、私達はやはりさうした彼の立派さも、その根本は彼の少年時代に受けた教育の力によるよりも、寧ろより多く彼が何ものよりも自己内心の純眞な人間的情愛を貴しとした純情の人であつた事によるのだと思ふ。それは彼と最も親しかつた人々の多くが、いづれも其の一點の故に、最も深く彼を愛し、最も高く彼を評

價し、最もよく彼を理解してゐるによつても明らかである。就中彼にとりて最も貴い善知識であつた山岡鐵舟居士が、あらゆる他の雜念を排して其の一途に忠實に生きさせることが彼をして本當に生きさせる事だと信じつゝ終始一貫彼を援け彼を導き彼を誡め彼を動かし續け、つひに彼をして今日私達の敬仰する如き愚庵和尚と云ふ一個の崇高な人格たらしめた一事は、最も鮮やかに此の消息を私達に語つてゐる。天田五郎の稀有なる父母愛慕の純情は、それが純眞の極致に達した時、即ち同時に至心歸命の救ひであつた。彼は即ち人情の門から入つて人情の太源に到入したのであつた。

「愚庵は弱い心を有つて居たが一面は才華の人である、行く所として可ならざるなき人である」と彼の歌を評した齊藤茂吉氏が云つてゐる。之れは同感である。天田五郎時代の彼は才氣に任せて隨分といろ〳〵な方面に心を走らせ、手足も動かした。折にふれては隨分大きな野望を抱いたこともあるらしい。若し彼にして此の方面に突進したならば、どんな生涯を送つたらうか。うまく行けば世俗的にかなりの成功をしたかも知れない。或はまづく行つてとんでもない憂き目を見たかも知れない。いづれにしても平板な道を歩き得なかつたにちがひない。出家後の彼について見てもかの峨山和尚を助けて天龍寺本堂の再建と云ふ大事業を始めとして、天龍寺と云ふ寺を榮えさせる上に隨分大きな仕事を彼はやす〳〵としてゐる。若し其の調子に乘つて野望を逞しうしたなら、彼はおそらく僧侶としてもかなりな世間的成功をしたにちがひない。しかし、彼は天田五郎としても、亦僧鐵眼としても、つひに其の方向に走らなかつた。これは一つは鐵舟はじめ聰明な恩人知己があつて陰に陽に彼をうまく仕向けさせたからでもあらうが、やはり彼本來の性情のお蔭であつた。此の方向に進んだなら、彼は世俗的には或はかなり目ざましい成功をしたかも知れない。しかし、彼自身の心靈は救はれずに、生涯彼は暗黑な苦惱と、癒しがたい不安との爲めに、なやまされつゞけたであらう。一面に於ける彼の弱い心が傷けられ續けたにちがひないからである。

けれども、彼はつひにそちらへ行かずに、自己の弱き心に從した。そこに最もいゝ意味に於ける彼の聰明があつた。出家前に於ける彼にはなほ自己の才氣の誘惑との鬪ひに於てかなりの苦しさが認められるが、出家後の彼は安んじて自己の才氣を奉仕させてゐる。少しもそれに煩はされてゐない。愚庵は晩年に於て何よりも圓い形のものを愛好したと云ふ事である。圓いものには和らぐ性がある、彼が瓢を愛玩してそれを撫でゝ居れば自然に心が和らぐと云つてゐたと云はれるがいかにも味はひの

深い話である。

更に「愚庵遺稿」の附錄中に彼の逸話が幾つも載せられてゐるが、出家して間もない頃の彼の逸話には、兎角無理に俗を脫したいと云ふやうなぎごちなさが見える。しかし、それが晩年に傾くに隨つて、自然の安らかさの境地に入つてゐる。元策和尚の書いた「逸事數則」の中にこんな話がある。

「愚庵庭前、數箇の大石あり、一徑の寒流其傍を流れ、頗る趣あり。客談水石に及ぶ、曰く一徑の寒流石に觸れ、分れて兩派となり、石の前後を繞り、合して又一となる、尤も趣きありと。師之を諾し、共に鍬を把り、土工忽ち成る。後數日師復舊す。客又過ぐ、說を請ふ、師曰く、子の說く所、奇は乃ち奇なり、然れども奇に過ぎて自然を缺く、我が取らざる所なり、水をして大水ならしめば可、石をして小石ならしめば可、涓々の水、大磐石に觸れて分る、物其の相應を得ず、子が今時に容れられざる亦以ありと、客默して去る。」

よく當時に於ける彼の心境を暗示してゐる。

彼を豪傑だと稱する人がある。又義俠の人だつたと讚する人もある。しかし、私達はむしろ豪傑になるべくして豪傑にならず、義俠の心に富みながら自ら俠を以て任ずることを嫌ひ了せた――その點に――愚の不滅の光輝があり、そこから彼のあの不朽の詩歌が生れたのだと思ふ。

彼の書も隨分いゝ。良寬和尙の書ほどに高古の趣もなければ、枯淡の安らかさもないが、脂氣がなく、寂びて底光りのする、それで居て力の張り切つた、高貴な字である。しかし、それも晩年の書に限るらしい。羯南によると彼は始め山陽流の書に巧みであり、其後鐵舟流の衒氣のある字を書き、更に其後には古法帖を習つて段々本當にいゝ字を書くやうになつたと云ふ事である。晩年の字はどちらかと云へば懷素の流を汲んでゐるところが多いやうである。福田靜處翁の話によると一時彼は獨立を以て任じて居たことがあつて、人若し獨立に似たりなど云へば、獨立我に似たりなど云つて居たことがあつたと云ふことである。けれども、私達の貧弱な知識から考へても、晩年の彼の書はもうそんな處を通り越して居たやうである。たゞ良寬和尙のそれのやうな自然の趣と、うぶな安らかさとに缺けてゐるのは、まだ〳〵彼の前途には修業の餘地がかなりあつたのであらう。これには兩者の閱歷や本來の性格の相異なども考へて見なければならぬ。彼の書については齋藤茂吉氏も穿つたことを云つてゐる「愚庵の書いた書を見ても一時は山岡鐵舟そつくりの字を書いてゐる。普通の禪僧であつたら矢張り其流の字に達磨の一つも描いて一生

を終へたかも知れない」と。これは單に彼の詩についてだけでなしに、一個の人間としての彼に當てはめて考ふべき言葉である。

良寛和尚もさうであつたが、愚庵も出家して佛侶とはなつたが、生涯說法と云ふことをしなかつた。又宗教上の述作などもない。歌を讀んでも道歌式な作は一つも見あたらない。おそらく彼みづからもそんなことをしようとも思はなかつたし、したくもなかつたのであらう。彼の眞實に求めてゐたものは、おそらく彼自らの救濟、彼みづからのたましひの靜けさ以外何ものでもなかつたらう。しかも、それであつたればこそ、彼は多くの人にいゝ感化を與へることも出來、多くの人々から尊崇敬慕されることをも得たのであらう。そこが何よりも私達には貴く思はれるところである。

十

愚は幼少の時から文事の嗜みがあつたと云はれる。しかし、眞に彼の詩や歌が光を放つやうになつたのは、出家以後にあつたやうである。詩を彼は初め大須賀筠軒に學んだ。歌では前にも云つた如く落合直亮と丸山作樂とが先づ彼の師と云ふべきであつたらう。彼はあらゆる方面の多數の名士に交際があつたが、とりわけ當時の詩人歌人などに知己が多かつたやうである。それは彼が淸水庵住當時、愚庵十二勝と云ふものを撰んで先づ自ら詩と歌とを詠じ、江湖にその唱和を需めた時、それに應じた者が詩に於て三十四家（副島蒼海、福田靜處、本田種竹以下）、歌に於て二十家、俳句に於て十三家の多きを算し、しかも其の內の多くがそれ〴〵の方面に於て一家を成して居た人々であつたのに徴しても明らかである。けれども愚庵にとりて私達の敬服に堪へない點は、そのやうに各方面の名家の間に伍してゐたと云ふことであるよりも、寧ろそのやうに當時の文壇に多くの知己を有して居ながら彼自らはつひに文壇の人などにならずに獨り靜かにみづからのさびしい道を步み了せたことである。頭を剃りながら坊主臭くならなかつた彼は、詩を作り歌を詠みながらもつひに聊かも詩人臭くもならず歌人臭くもならなかつた。私達はその點が寧ろ慕はしいのである。

他の方面のことは暫く措き、歌の方面から愚庵の特色を窺ふと、出家以後に於ける彼の歌は萬葉の流を汲んだ純淸蒼古な點に於て、近世の歌人中最も傑出した一人として彼を認めさせるに充分である。愚庵はいつ頃から歌を詠み初めたかわからないが、『血寫經』などに載せてある出家以前の彼の歌はいかにも調子が弱く、淺いものである眞情を歌つたのであらうが、その眞情に力が籠つてゐない。

明治十年(二十四歳)春故郷に歸り昔に變つた郷里の荒廢したさまを詠んだと云ふ

吹く風は問へど答へず菜の花のいづこやもとの住家なるらむ

明治十二年　二十六歳）旅廻りの寫眞師となつて父母の行方を捜索中伊豆川奈濱で[illegible]田直助門下の人々と會した折福西四郎衛門より贈られた返しに詠んだと云ふ

小車のめぐり逢はずに十年あまり歳の三年となるぞ悲しき

明治二十七年(三十一歳)巫女の言に欺かれてはるばる奥州の山奥に父母の行方を探り空しく都に歸る途すがら詠んだと云ふ

父母と見れば夢なり夢にだにその面かげよ消えずもあらなん

花薄招く方こそ床しけれたづぬる人の跡もなければ

などの歌は極めてつまらない。出家後に於ても明治二十五年春(三十九歳)初めて獨立して庵を清水に結んだ頃までは、やはりまだ彼の作歌の態度はいゝところまで行つてゐたかつたらしい。それは左の數首を見たゞけでもわかる。

頭おろしける頃

鶯の聲ばかりして山寺の春はしづけきものにぞありける

墨染の麻の衣の朝なあさな手向くる花の露に濡れつつ

めて托鉢したる時に

今朝いでてほほととはいへど舌たみて初音優しき黄鳥の聲

東山に庵室を結びて

末終に消ゆとも知らで白露の結びそめたる草の庵かな

清水に庵を結んで本當に獨座觀念の生活に入つた翌年、即ち明治二十六年の秋の彼岸に、愚庵は西國三十三所觀音巡拜の旅に出て。同年十二月二十一日に歸庵した。此の旅の間に愚庵は多くの歌を詠んだ。ところが、「巡禮日記」に載せられてゐる其等の歌をよむと　まるで別人の作ではないかと思はれるほどにに掲げたやうな歌とは變つてゐる。

第一に歌の調子が以前の古今集風な綺麗をねらつたのとは前ちがつて。萬葉調の強さを得て來てゐる。愚庵は晩年主として萬葉を師としたと云ふことであるが、おそらく彼が始めて萬葉集をしんみに讀み出したのは此の頃からであつたらうとおもふ。愚庵の歌の傑出したのには、彼が專念萬葉を師として修練を重ねたことが與つて力あることは彼の歌を讀むもの丶誰しも認めずには居られぬところであらう。

しかし、私は愚庵の歌に於ける萬葉集の影響をいかに高く評價するとしても、彼の歌が晩年に於て光を放つに至つた第一の理由は、やはり愚庵その人の生活の變化にあると信じないでは

居られぬのである。明治二十五年春愚庵は初めて衷心からの隠遁の志を得て、淸水に自分の庵を結んだ。その頃は師匠の滴水禪師も其の事を許すほどに、彼の禪機が熟してゐたに相違ない。しかも、初めてさうした本當に靜かな獨座生活に入つた翌年、彼は西國三十三所觀音巡拜と云ふ神聖な旅に出た。かうした事が、彼の内生活の非常な變化を示すものでなくて何であらう。かう觀て來ると、その巡禮の旅以後に於て愚庵の歌風がまるで一變したと云ふ事は、私達には容易ならぬ問題となつて來るのである。

試みに愚庵の『巡禮日記』から最も特色的と思はれる歌數首を拔くことにしよう。

出立の朝しも晴渡りて天氣よかりしに、端なく打曇りて頓て雨降らんとす

久形の天の八千街廣ければ空ゆく雲の足はやみこそ

那智の瀧にて

底つ巖根つきつらぬきて普陀落や奈落も碎け那智の大瀧

將軍道と云ふに迷ひて

新墾(にひはり)の跡をな踏みそ玉鉾の道はふるきによるべかりけり

粉河寺の通夜に

閼伽の水汲まんとすれば巖間より有明の月の影ぞ流るゝ

高野山にて

大空は明けそめぬらし百鳥の塒をいづる聲のさやけさ

高野山の奥の院にて見たる芭蕉の句に。父母の頻に戀し雉子の聲。とありしを、昨日は左迄心に染みても思はざりしか。今思へば誠に名句なり。此上に丹生七社の祠あり。參詣して下り三度紀の川を北へ渡る。渡守年はやうやう十六七歲、何事か打案じたる體なりしが、頓て袂より柑子の稍色づきたるを二つ取り出し、跪きて我に供養せんとす。其樣の殊勝さ賤しき者の子とも覺えず。親ありやと問へば、今日は母なるものの命日にこそと、差しうつむく。あな不便、我れ讀經して得さすべしと云へば手を合せて打拜む。大悲呪、開甘露門等の廻向す、嗚呼芭蕉の句は彌々名句なり、芭蕉はいよいよ名人なりけり。

三室戸寺の通夜に

わが袖も濡れこそ增され足乳根を戀ひ渡す子が櫂の雫に

石山寺にて

霜鴉鳴きこそ渡れ三室戸の山下蔭はいまだ暗きに

老蘇森にて

眞幸くてゐませ父母御佛の惠みの末にあはさらめやは

おなじくは老蘇の森の下かげに宿りて行かな親おもふがに

逆修日記の終りに

三十餘り三のみ山のみ佛に仕へまつらく父母の爲めに衆生の爲めに

三十餘り二つの相ふだらくの光あまねく度したまはな澤ひたまはな

最後の二首の如きを見ると、かの奈良の藥師寺境内の佛足石歌碑の歌のやうな高古の調にすらやす／＼と彼の歌が和するまでになつてゐる。前に掲げた出家前又は出家當時の彼の歌とは大變な相異である。しかも、其の相異は第一には彼の生活そのものゝ變化から、第二には彼が萬葉集を師とした修練から來てゐる。その事はかへす／＼も興味深い事實である。

兩親に對する彼の愛慕の情も不思議なことには彼が一切を捨て去つた出家後に於て、寧ろ切實に表現されてゐる。親を思ふ彼の歌は、古來の抒情歌中にもあまり多くその右に出づるものはあるまいと思ふ。

父母を夢に見て

愛子われ巡り逢へりと父母のその手をとれば夢はさめにき

夢ならば繼ぎて見ましとわがもへど音のみ泣かれていねがてぬかも

夢四首の中に

世になしと思へる親をぬる夜おちず相見つるかも夢のたらちに

臥床四首の中に

世を棄てし我にはあれど病む時は猶父母ぞ戀しかりける

癸卯感懐

ちちのみの父に似たりと人がいひし我眉の毛も白くなりにき

かぞふれば我も老たり母そはの母の年より四とせ老いたり

愚庵はまた動物を愛すること尋常でなかつたと傳へられてゐる。東京へ行くと其用事の一つは動物園に一日を暮すが例であつたと云ふことである。動物ばかりでなく彼は盆栽の植木までもひどく愛しいたはつた、旅行先から留守宅へ向けて「明日天氣よければ床の間の鉢日にあて水をやり可被下候夕方はもとの通り床の間へ御直し可被下候」とか「其後替事なきや梅の花は如何又雪はふりたるか松に雪積りたる時枝をらぬよふに拂ふべし但拂はずに置きても差支へなし」など云ふやうな手紙をよこす程であつたとは福田靜處翁の直話である。動物を歌つた愚庵の歌には、たまらなく懷かしいのが多くある。

春日臥病四首の中に

うぐひすははしき鳥かも我がやもひこやせる窓に來鳴く日毎

に

春の歌の中に

昨日まで鳴きし鶯今朝鳴かず軒端の梅は散りにけるかも

雉子なく小松が下の稚草は人な摘みそね雛の食むがに

鵞歌六首の中に

人皆は正無事してかくるゝをあからさまにも名のる鵞の鳥

うら／＼とてれる春日を鵞の鳥の玉水かつぎ遊ぶよろしも

鵞の鳥を我がうつくしみ今日もかも池のべ去らず見つゝ暮しつ

母雀

ふる雨を若葉の木ぬれぬれそぼち子の餌もとむる親雀かも

立すがり尾羽かきふる子雀を親はめぐしと餌とりくらしも

雛雀

親鳥はいづちゆきけむ雛雀ひねもす庭におり立ちてなく

親を戀ひ泣くか子雀久かたの雨にぬれつつ鳴くか子雀

巣立して幾日か經たる親鳥のうせけむものをあはれ子雀

立ぬれて泣くな子雀我庵の軒端にやどれ雨のふらくにに

子雀はこの降る雨に立ちぬれて親鳥よばふ聲をかぎり

たゞ愚庵の歌の缺點は、前にも云つた如く彼が一面の才氣の人であつた爲めに、時々才氣にまかせて形や言葉に囚はれた歌を巧みに詠みこなしてゐることである。隨て萬葉調と云ふものを單に形の上からだけ見れば、愚庵の歌は實朝や、良寛や、などのに比べて遙かにうまく萬葉調をよみこなしてゐる。齋藤吉氏が愚庵の歌と良寛のとを比較して前者に「聖い稚さ」と「しみ茂じみした妙境」との足りないのを難じてゐるのも、さうしたところから來てゐると思ふ。人間としての素質と修養との相異から來てゐることは無論であるが。

しかし、父母をおもふ切實純眞な心で歌はれた愚庵の歌、晩年に傾くに隨つて寂びた清淡な心境が開けて來てからの愚庵の歌には、不滅の力をもつた作が少なからずある。殊に彼が佛門の修業によつて靈魂の救濟を求めながらも、聊かも謂ふところの佛教臭に囚はれることとなしに、常に朗らかな寛やかな心で直に自然そのもの、現實そのものにぶつかり、そこから生の徹底味を汲み上げようとしてゐた點は、桑門の歌人としては異としなければならぬ。

大和田に島もあらなくに梶緒絶え漂ふ船の行方知らずも

と云ふ彼の辭世歌について見ても、彼は正しく崇嚴な生の寂味に徹してゐたことがわかる。しかしそれは決して冷たい教理などからのみ來たものではなくて、それは小主觀や理智などから超脱した寛かな現實觀に徹した境地であつた。徒らに奇を弄

し、伴を得ひ、嘗くに彼らに事を共にし教を説くと云つたやうな僧侶の境涯に留るべく、彼にはあまりに純真な人間味を持つてゐた。

「明治三十年頃以降才華を包むに寂を以てし、歌に厭味がなくなり、平淡に然かも清新に趣味のある尊い歌を遺すに至つた。かう云ふ天然直寫のうちに自己の生命を表はした歌は愚庵の歌の主な特徴である。」

と齋藤氏の讃めたやうな愚庵の歌も、私は彼が一個の人間として(僧侶としてゞはない)の修行の態度が主となつて得られたのだと思ふのである。萬葉を師としての修練と云ふことも、之れを單に歌作りとしての修練と見るべきでない。

しかし、愚庵和尚の歌のこまかな鑑賞や批評は後日に讓ることにして、私はここには彼の歌の中からとりわけ私の愛誦してゐるいくらかの歌を拔いて置くに留める。

東京の質(羯南?)が許より明日こそは行きて相見めなどいひおこせたりければ

見まくほりわがする君は鳥が鳴くあづまを立ちて明日か來まさむ

など口吟み打喜び居たるに程經て猶來ざりければ待ち詫びていひやりける

[illegible]むと聞きにし日[illegible]

やや

よしある人にやるとて

ますらをや汝は貧むとも昔はむな餓えては人の門に立つとも

大和の佐保川にて

佐保川の名をなつかしみわが來れば千鳥は鳴かず時早みかも

愚庵十二勝歌の中に

青梧の翠すゞしき閼伽の水覗のみためと朝な朝な汲む(碧梧井)

我庵の苔の細道誰待つと楽は落ちし玉敷くがごと

鳴門觀潮歌十四首の中に

淡路島三原松原朝ゆけば衣は濡れぬ松のしづくに

早潮をい行きはゞかり海人小舟撫養の水門に榜ぎはつる見ゆ

沙羅雙樹花開三首の中に

美しき沙羅の木の花朝咲きてその夕には散りにけるかも

朝咲きて夕には散る沙羅の木の花の盛りを見れば悲しも

吉野五十首の中に

吉野川川瀬を淸み川のほり蛙聞きつつ一夜ねにけり

三吉野はかしこき山ぞ那智熊野大峯つゞき道のかよへる

川上の丹生の祝が振る鈴の音のかそけくきこえつるかも

三船山雲立ちのぼる川上の岩屋のあたり雨にしあるらし

岩屋には千々の佛のなり〳〵て自からなる姿をぞ見る

佛ます岩屋の奥の瀧の水源もなし行末もなし

時雨ふる夕暮に詠める四首の中に

夕くれの時雨にぬれて鳴く鴉寒き今宵を宿なしにあはれ

人ならば笠きせましを夕鴉時雨の雨にぬれつつぞ行く

若葉二首

知らぬまに若葉してけり朝夕に見つつなれにし花の梢は

いつの間に垣根の若葉しげりあひて立ちかくすらむ人の往來を

珠數

珠數の緒の玉のあな玉左手の手首にまけば音のさら〳〵

百あまり八の障を玉にぬきて手ならす我に障りあらすな

臥床四首の中に

庭立水驟手小衾踏みはぎて夜べの暑さに風ひきつ我は

若草の嬬もあらねば門邊すむ媼わがため今朝のかしきつ

わが爲めに炊かば炊しげさされ石よなけて炊げ鍋にさやるがに

春歌の中に

八重椿咲きたる山に今日もかも來鳴きとよもすひえとりの聲

壬寅中秋

勝野浦ゆ漕ぎいで見れば朝霧たてり粟庭野のならしの岡に朝霧たてり

伊勢に詣でゝ

大神のみ前かしこみねぎごとも我忘れたり神のみ前に

齋藤茂吉氏は共著「短歌私鈔」の中で次の如きことを云つてゐる

「明治三十年頃は明治和歌革新の運動の勃興した時であるが、今から見れば未だ未だ幼稚である。明治三十三年頃でも未だ斑らで純の境には至らなかつた。竹の里人の歌などでも明治三十四年頃からが純の萬葉風の歌になつたのである。愚庵の歌を見るには時代の背景を考に置かねばならない。」

と。なるほどこれは一わたり考へてく必要のあることである。

明治の短歌史を論ずる人は、誰しも正岡子規を以て萬葉集を宗とした歌壇革新者の第一人とするに躊躇しないやうである。復興は或意味に於て革新である。子規によつて鼓吹された萬葉調復興熱が、明治以後のわが歌壇にとりて一つの大きな革新運動であつたことは、もはや今日では否定することの出來ない事實である。

但し、此の事實を認めると同時に、私達は歌人としての子規の功績の裏には、全く歌壇などゝは沒交渉で獨り靜かに歌を詠んで居た愚庵和尚と云ふ大恩人のあつた事を見のがしてはならない。歌壇の革新者を以て任じてゐた正岡子規は明治三十一年二月『日本新聞』に『歌人に與ふる書』を竹の里人の名を以て書いたのを手始めとして、盛に文壇の表に立つて萬葉集を宗とせる歌壇革新を叫びつゞけた。しかも、その一方に於て彼はこんな歌を世に公にすることを憚らなかつた。

もの丶ふの屍をさむる人もなし菫花さく春の山陰（明治三十一年金州城外所見一首）

とばり垂れて君いまださめず紅の牡丹の花に朝日さすなり

武藏野の冬枯芒婆々に化けず梟に化けて人に賣られたり

普陀落や岸うつ波とうたひつつ柄杓手にして行くは誰が子ぞ

椽の木に烏芽を嚙む頃なれや雲山を出でゝ人畑を打つ

明治三十一年は愚庵が初めて清水に庵を結んでから七年後である。そして彼の歌が萬葉の精髓に觸れて、いよ〳〵底光りを放つ寂びた歌となりつゝあつた頃である。しかも、其頃正岡子規は既に餘程以前から、愚庵と相識の仲だつたのである『子規遺稿』中に愚庵に宛てた子規の手紙が三通載せてある。一通は明治三十年十月二十八日附、一通は其の翌日附、他の一通は三十一年三月十八日附である。其の中の一節にこんな事が書いてある。

「此頃歌をはじめ候處餘り急激なりとて陸翁はじめ皆々に叱られ候へどもやりかけたものなら死ぬまでやる決心に御座候昨夜も湖村氏來訪歌の話に夜の二時頃更かし申候同子も漢語が多過ぎると申て忠告いたし呉候前月末頃は歌のため毎夜二時三時に及び或は徹夜など致し候此頃のよわりも多少はそれにも原因し候ひけんと存候尤も愚見にては漢語を用ひざれば歌にならずなど申にては無之萬葉調などは大に好む所に御座候」

なほ福田靜處翁（俳號把栗）の直話によれば、その頃愚庵はよく歌話のついでに子規の歌を批難し、手紙でも屢々忠言を試みたらしいとの事である。かう云つた風な事をさま〳〵と思ひ合せて見ると、歌人としての正岡子規がいかに愚庵和尚のお蔭を蒙つたかゞ想像されるのである。

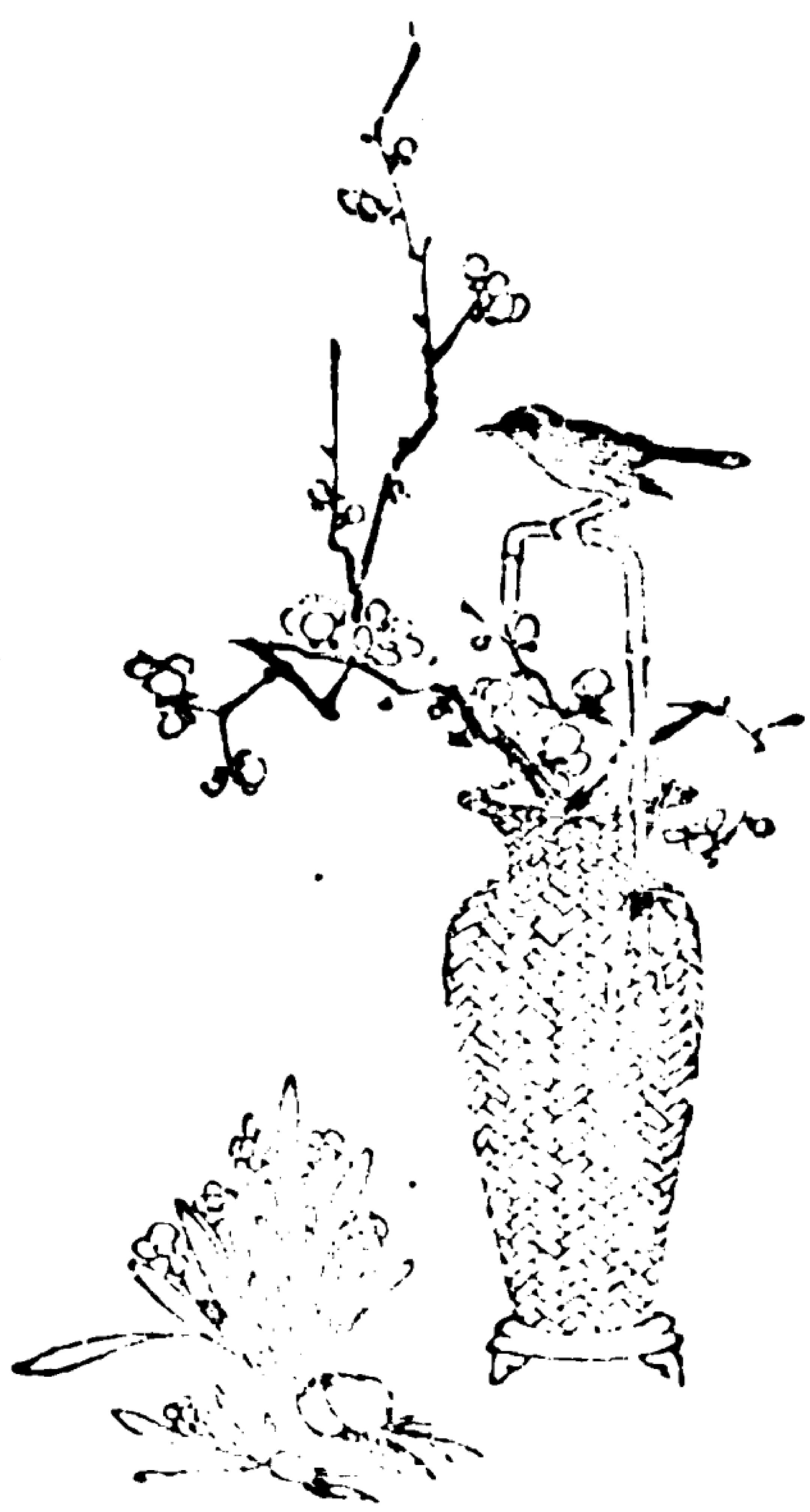
兎に角、正岡子規が萬葉集を楯にして、盛に歌壇の革新に努めて居た時、既にそれよりずつと以前から京都清水の靜寂な庵室裡に孤座して、歌壇などゝ云ふものを聊かも眼中に置かずに、あれだけ生命のある萬葉調の佳い歌を多く詠んでゐた愚庵和尚と云ふ一個の人物のあつた事は、今日から回想して、いか

にも興味の深い事實である。

獨りで、靜かに、力强くみづからの道を歩んだ人の藝術はやはり最も貴い。

十一

愚庵は世の所謂豪傑たるべき素質を持つてゐたと云はれる。しかも、彼はつひに謂ふところの豪傑にはならなかつた。愚庵はまた出家剃髪の身であつた。しかも、彼はつひに謂ふところの名僧にはならなかつた。彼はまた詩もつくり、歌もよみ、書をも能くした。しかも、彼は詩人でも、歌人でも、亦書家でもなかつた。彼みづからも亦凡てさうしたものにはならうともしなかつたし、なりたくもなかつた事は明らかである。然らば結局愚庵は何者であつたらうか。（一先づ完結）



内の十字街

——西田天香さん・倉田百三さんと人生について語り合つた記錄——

山中峯太郎

この地上の生涯に、もしも倘ほ、いくらかの後の日があらうならば、かならず深き印象を、今より其の日に連なり刻まれて、なほ其の深さは、ますく深められてゆくのに、違ひなかるべき印象の當爲的進展を、ほとんど日ごとに感じつゝ、その言を聽き其の事の有りし後に、こゝに五ケ月ほどを、わたくしは過ぎてきました。

六月の十七日でありました。午前十時ごろ、たゞ一室のみの八疊の二階に、かなり大きな三尺あまりの黄いろい方形の机によりかゝりまして、すくなくとも午前のうちだけは、必ず書くことに自分で定めてゐます、二年前からの日課のとほりに、この日も自分は萬年筆を動かしつゞけてをりました。階段のすぐ下にあります臺所の方に、洗ひものゝ食器などが小さく衝きあたる、こまかな硬い音が、すこしまへに止むでしまひ、そこの隣りの部屋の六疊に、後になつて聞きますと、妻は此の時に夜具蒲團の縫ひなほしに、かゝり初めてゐたと言つてをりました。ふたりの子どもたち――尋常三年生と二年生とは、すでに學校に行つてをりまして、門をくゞるときに高く聲をそろへ、「行つてまゐりまあす」と叫びながら、路の上にこまかく走りだしました兄弟の小さな靴音が、すぐに門の前に消えてしまひましたあとの家の中には、郊外のおとなしい初夏の光がひろがりつゝ、障子の紙を透かしてくる暑さの先驅者らしい明かるみが、原稿紙の上に、萬年筆の尖の影を、靜かな重みを載せるやうに、しだいに濃く映してゐました。この親子四人の家族、夫は二階の机の上に原稿を書き、妻は臺所の隣りにすわつて裁縫し、ふたりの子どもたちは小學校の教室に、これが今もなほ日ごとの午前における自分たちのすがたなのでありまして、いつも單場に、

淡く、内にも外にも、さして深き悩みはないのでありました。

わたくしは暫く原稿を書きつゞけてをりました。そのうちに階段の下の玄關さきに、妻の聲の、誰れか訪ねてこられた方と應對してゐるらしく、さうして最後に『……をります』との言が、わたくしに萬年筆を指から離させました。妻の足おとが、階段を昇つてきました。昇りくちの柱のそばに出てきました妻の、いつになく頬がひきしまり、瞳がなほ少からず亢奮してゐますのを　私がみとめますのと同時に、

『西田さまが……』

妻の小さな聲に　胸を正面から激しく搏たれたやうな、ときめく衝動を、わたくしは覺えまして、

――さうか、天香さんが、いよいよ――

――えゝ、玄關に來ていらつしやいます――

わたくしと妻とは互ひに瞳で咄嗟のうちに頷きながら、わたくしは左の手を握つて我れしらず拳を上下に動かし『お上げして……』との意味を妻に見せました。頷くやうにして妻は下に降りてゆきました。

既に長いあひだ與へられてゐる一つの公案が、まだ解けてはゐないそのまゝでゐるのを、冒しがたき權威ある師僧の前に強ひて出てゆき何か答へなければならぬ、怖るべき接心の室へ長い廊下を辿つてゆく其の時のやうな悩みに攫まれつゝ、天香さんの上つてこられるのを、わたくしは胸の躍るまゝにまかして待つてゐました。机のうへの原稿紙などを、すこし脇の方へ寄せなどしまして。

まへの月の、五月二十日に、京都の佛教大學の壬寅會よりお招きがありまして、其處へまゐりました時　東山の一休庵にて小さな集會が催され、その席にて、筒袖を着てをられます一人の青年――西田保太郎さんに、はからずもお眼にかゝりました私は、保太郎さんより、

『天香さんが、是非おめにかゝりたいと、たいそう望むでをりましたが、ちようど大阪の方へまゐつてをりまして、今日はこちらへ上れませんので、どうぞおよろしくと、くれぐ〜も申してをりました。いづれ東京へ近いうちにまゐりますので、その折りにと申してをりました』

とのお言を受けながら、――この方は、天香さんの御親戚なのか、さもなくば一燈園の御同人の方か――と、ひそかに思ひこむでをりました。それには嘗て綱島梁川さんの「回光錄」

のちちに、「三衣一鉢の人となる」と書へられてありました「天香洞主人」——天香さんは、獨身の方なるべき門製を、すでに十餘年前より與へられてをりましたのと、なほ昨年に、お訪ねくださいました栃木の一燈園の富田清さんのお話のうちに、

『天香さんも奥さんとお別かれになつたのは、自分がわるかつたからだと仰しやつたことがありました』

とのことが、天香さんに對する私自身の從前の獨斷を、なほ更に輕卒に肯定させてゐたのでありました。——まことに獨身なればこそ、碍りなしに、奉仕にも、托鉢にも、なほ六度の行願にも、すこしの濁りもなしに體達されて、そこに、イエスは妻子眷族を棄つべきことを明きらかに宣べ給ひ、「捨家棄欲して沙門となり」と「無量壽經」にさへも説かれてあるのが、はつきりとなる。然し、斷ち去りがたき妻子ある人間らしい人間の身にとつて、「救」と「生くべき道」との純擇は、どこにあるのか。踏むに難き道をイエスは宣べ給ひ、親鸞さまは地上の生きかたについては、さまでにはつきりとは仰せられなかつたやうる。人間——凡人にとつて現實の地上生の解決は、ほんたうの生きかに想へたは？　泡のごとき世界として、なほざりにすべく、しかし現在の土の上にも、魂しひは十分に生くべき道を、求めてやまぬ煩悩に就くではないか！——こゝに一生をまとまりを、わたくしは彷徨してをりました。——自分が獨身者ならば、難易はしばらく措いて、往くべき道のみは、あざやかに、はつきりと見えてゐるけれども、さうして、それを踏み得ぬ悩みの綱を、最も近き既往に、おのづから解かれてゐるけれども、然しこゝに、なほ天香さんの歩まれつゝある跡には、やはり斷ちがたき從前の憧がれに惹きがたく胸を動かされる。否な喘ぶやうな刺戟を、とき〴〵に烈しく感じる——こゝに、京都にまゐるにつけましても、天香さんにお眼にかゝりたい結縁の惠まれかしと、ひそかに熱く希念してをりました望みが、保太郎さんのおことづてより、しばらく失はれたのでありました。

『天香さんが東京へいらつしやいます時には、たいがい何處へおとまりになりますか』

『えゝ、中桐さんの方へ』

保太郎さんより、中桐確太郎さんのお宅の番地をうかゞひまして、手帳に私が書いてをりました時に、座敷に入つてこられました眞宗大學の藤井草宣さんより、

『このあひだも僕は話しあつたのでしたが、原稿を書いて、原稿料を貰ふといふことが、わるくはないか、ゆるされないこと

ではないか。これを、だいぶん論じあひました。あなたは、この事を、どういふやうに扱つておゐでになりますか。これをおたづねしようと思つて來ました」

すこし烈しく率直にたづねられました私は胸に制さへきれない動悸をおぼえました。――つらいお尋ねよ。ありやうのまゝは――。

「いたゞくものは頂いてをります。わたくしには子どもを育てなければなりませんし、書かなければ、さうして原稿料とか印税とかを頂かなければ飢ゑますから、たいがいは貰つてをります。子どもが俄かに病氣をしました時にも、診察料をさしあげなければ、お醫者さまは其の次の時には、なかなか來てくださらないではありませんか。しかも子どもたちの病氣は、今までにも不可抗的に起りましたし、親にとつてみますと、お醫者さまなしに、藥なしにゐられません。不時に對する用意も、子どもがあつてみれば、せずにゐられない事實の上の必要を、痛切に感じさせられてをります。天香さんの御生活を聞きますと、到底およばずながらも、ほんたうに羨ましく感激せずにゐられません。しかし、私自身には妻はさておいても、子どもの有ると無いとは、生きかたに大きな差異ができてくるやうに想はれます」

ありのまゝに言ひましたときに、

「いや、天香さんには、奥さんも、お子どもさんも、おありなのです。こゝに來てゐられます。今、挨拶なさつたのが……」

どなたかゞ言はれました聲が、一時に私の内に根柢よりの破綻を感じさせ、おもはず顏のあかくなるのを意識しつゝ愕いて見ますと席のむかふに、保太郎さんは柔かく微笑して、やはり少し顏をあかくされながら、私を見てゐられるのでありました――二十歳あまりの此の丈夫な青年の西田保太郎さんは、天香さんの御令息なのか。さうして天香さんには奥さんも――あまりの意外なことに、

「このお方がですか」

わたくしは想はず小聲ながら叫びました。

「えゝさうです」

席の五六人がすぐに言はれましたときに、なほ烈しい愕きにつゝまれながら、「――それならば、あなたはお父さまについて何ういふ方法で學校教育をお受けになりましたか」と、すぐに聯想されました疑惑の強く催すまゝに、保太郎さんを眺めつゝ自分の聲を忽ち衝いて出ようとする言を、ふと舌をおさへて默りました。この事が、自身の日常の生活の上より、いかにお尋ねしたい強い疑ひであるのにしても、――初めての席に、あ

なりに無躾な質問ではないか。それよりも、天香さんにお眼にかゝつて、直接に伺はう。しかし、子どもの教育そのことよりも、すでに肉身ならざる天華香洞主人その方が、いかにして肉身の血の繋がれる境涯を、矛盾なしに切りぬけられたのか――わたくしは根柢からの動揺を、衷に烈しく感じました。――見よ、烈しくあこがれながらも自分には如實に踏み得ずにゐた道を、天香さんは十餘年も前から、現にこの保太郎さんその他がお行りになつても、切りひらいて歩いてゐられるではないか――

「なにか御所感をお話しください」

隣りにすわつてゐられました河上正雄のお言にも、動かされ得ずに私は、藤井草宣さんに、天香さんの日常のお話しのみを、貪るやうに伺ひました。さうして、一休庵にての座談會の始終は、おほかた天香さんについての草宣さんのお話しのうちに、その次ぎの會の公會堂へ行くべき時間になりました。

――何んとしても天香さんにお眼にかゝらねばならぬ――

さうして解き得ぬ謎の大きな凝塊を抱きつゝ、わたくしは京都から歸つてまゐりました。

「天香さんには、お子さんがおありになつた。去年まであなたと話してゐた縁の悩みは、天香さんの前には成り立たなくなつた――

歸つてきました日の夕食のあとに、私の言ふのを妻は聞きながら、瞳を沈めて私を覗ました。さうして、そのまゝ默つてをりました。名づけがたい刺戟的な大きな壓迫を、二人とも、かすかに感じつゝ、互ひに默つてをりました。

この一週間ほど後に、わたくしの手記の第三集が書物になりました。いかに生くべきかに自分相應に悩み、おのづからなる解決を得しまでの一年餘りの過程を綴りし「生活手記」とも言ふべきそれを、特に讀むでいたゞきたい方が、わたくしの胸に、二人あるのでありました。その一人は天香さんに、「あなたの跡は踏めませぬ是の如き愛執ある一人の弱き凡夫は、そのために悩みつゝも、かくして生きてき、南無阿彌陀佛の生の創造に、凡夫の生をみとめつゝをります。これを、あなたの尊き御體驗の上より御覽になつてお教へください」との意味にてさゝげ、なほ一人の「言葉で突つ込まずに生活で突込むがいゝ」と書かれました倉田百三さんに共感して「決して突つ込むでゐるとは自信されませぬけれども、これより他にはない一人の生活の告白を見てください。さうして許されるならば親しむでください。悅びませう」との意味にてさゝげたく、六月一日に倉田さんをお訪ねしまして差し上げ、三日に天香さんを中桐確太郎さ

んのお宅にお訪ねしまして、御不在のために一冊をお玄關に置いて歸つてきたのでありました。さうして、七日に天香さんより、近いうちに寄せてもらひますとの意味が、書き送られてきました葉書を讀み、

『天香さんが家へ來てくださると、いよいよ』

と、私が言ひますと、妻はこの時に初めて、

『よく考へてから、ほんたうに愼重になさつてください』

と、わたくしを强く視つめて言ひました。二人とも椽がはに佇みつゝ、子どもたちが學校へ行くのを見送りましたあとに、暫くのあひだ天香さんについて話しあひました。

――天香さんも、捨家棄欲、妻子眷族と離れよと仰しやるならば、わたくし自身には、たとひ少しでも心情の破壞は、救はれる道ではなかつた。こゝのところを天香さんに聽かねばならぬ。言のとほりに致しかたなき凡夫の身に、ふさわしい地上の生きかたを、新しく聽きたい。保太郎さん、奥さんと、最初から調和してゆかれたとするならば、その新生涯の第一歩のところを聽きたい――との願ひに充たされて、天香さんを、切に渇くやうにお待ちしてゐたのでありました。

――さながらに鍛へ練られて勁く成熟した健康そのものを深く充たしきつて見える赭がゝつた銅いろの閏い生々とした顏、額には幾すじかの深い皺が然し流れてゐる、みじかく髮のつまれてゐる正しい圓みを帶びた頭、きれの長い眸のうちにおちついて見える男性的の樸直な勁みを含みつゝある黑茶いろの視線、さうして岩のやうな頑い丈夫さに練りあげたごとき全身が敏感な彈力に溢れてゐる中肉の體格、……この印象のすべてが柔かくゆつたりとした氣分につゝまれて靜かにおちつき、そのおちつきのうちに動かしがたい精悍な毅さと銳さとが深くいつぱいに沈むで岩のやうに感じられる、ゐなかの土に生きてゐる日に燒けた素朴な初老の「叔父」に會ひしごとき氣丈夫さと親しみさも感じられる――

天香さんとの初對面の、第一印象の自分の記憶を右に書きましたけれども、これは五ケ月まへの視覺の記憶をたどり、天香さんを離れて眺めつゝ字をならべたのにすぎませぬ。その現在には、

――天香さんに自分は會つてゐる――

この現在の結縁をおもふ感激に充たされて、第三者として天香さんを離れて觀る餘裕は、わたくしに有り得ずに、なほさうし

た[illegible]録をもつべき願望さへも最初より絶無なのでありました。

（それには自分が十五年前に士官學校にをりました時、綱島梁川氏の「回顧錄」を讀み、「吾れ斯くの如くして遂に三衣一鉢の人となる」と傳へられし天香さんの出家の動機に刺戟されて泣きました以來の「天華香洞主人」――天香さんの名と、そこに心をひかれる出家せる其の人の未見の風格とが、遂に忘れ得ずに久しいあひだ殆ど常に胸に住み、殊に自分が少尉になつてをりました時に、家に遺書して大阪より大和の吉野の如意輪寺に奔り隱れてをりました折りなどには猶ほ深く私かに胸に刻みつけてゐました天香さんその人に、今、まのあたりに會ひ、十五年このかたの慕はしい幻想の人と遂に現實に對座してゐる涙ぐましいほどの感激が、わたくしをたゞ强く動かしてゐたのでありました）

天香さんに初めて御挨拶しました自分の言も、天香さんの其れに對してのおことばも、はつきりとは思ひ出せませぬ何か簡單な御辭儀のうちに、机のはしに左の臂をのせて、うすい絲いろのセルの筒袖を着てゐられます天香さんは、なに故か、顏に一面に紅潮して私を、ぢつと近く眺められるのでありました。

――どうして天香さんは、かう顏を赧くなされるのか――　ふしぎに惑つてをります私の前に、さうして直ぐに、天香さんはしきりに部屋のなかを隨意に[illegible]見まはされ、わたくしの後ろになつてをります壁の前の低い貧しい書架の、殊に「世界聖典全集」の並びのところに、かなりに强く氣が索かれるやうに幾度となく其處を隙だつた視なほされる氣色が、――天香さんは、よほど讀書がおすきとみえる。十字街頭に生きてゐられても、たしかに――と、わたくしに是れも不思議なことに合はせられて感じられました。その天香さんの視線が、やうやく私の方に靜かになつて向けられましたときに、わたくしは自身の内に潜でゐました從前の生活上の宿業を、ありしがまゝに、うちあけました。かなりに長い言でありしましたが、つゞまるところは、すべてを遂に棄て得ない、自分の、天香さんの境涯に憧れながらも然く成し得ない愛執からくる弱さを、ありのまゝに愬へたのでありました。――弱い魂しひの自分を、こゝろから恥づかしいと思ひます。弱者の行き得る地上の道を教へて下さい。わたくしには南無阿彌陀佛に生かされて日に新しく白道をすゝみ往く、こゝに現在の生を感じて、自分は生きてをります――天香さんは默つて、左の臂を机のはしにのせたまゝ、聞いてゐられますうちに眼をとぢて、すこし俯向かれ、さきに紅潮してゐられた顏いろが、しづかにさめて、やがて眸を開かれました。半眼のまゝに、おちついた低い聲に、唇がこまかく動き、

『ありのまゝの正直なお話とおもひます。無理のないお話であると伺ひました。ほんたう然うです。しかしな、山中さん、新生涯に出てゆくのは、それほど難かしいことではありません。いちど出て往つてみれば、これほど易いことはありません。易往而無人とも言はれてあるとほりで、往き易くして人なし……』と、よどみなく獨語のやうに言はれましたのが、わたくしを一時に烈しく愕かし、おもはず天香さんの少し俯いてゐられます横顔を私は强く視つめました。――超えがたき殆ど非人間的なものに想はれる難關を、自分は躓いてばかりゐた大きな溝を、障りなく易往而無人とまで言はれる――　さうして、

『それを何やら難かしことのやうに思はせるのは、悪魔のしわざです。なにも難かしことはない、ひとつ打ち破つて突き拔ければ、あとは樂なものです。どこかにひつかゝりが有るやうに思はせるのは、悪魔のこゝろみです』

――これは聞き飽きてゐる空なる言ではない。天香さんその人の體驗のことばである。しかし、それは、さまでに易い道なのか。　自分には未知の世界が、すぐにも傍に易く近く開かれてゐるやうな、しかも自分が久しひあひだ望みつゝ遂に遮ぎられてゐた憧憬の世界が――　世の榮華を悪魔に示され誘はれしイエスが、あざやかに其れを切り拔け給ひしとの聖書の上の記錄が、わたくしに迫るやうに思ひ出されました。『サタンよ退け。主なる爾の神を拜し、たゞ之のみに事ふべし』と錄されたり』とのイエスのみことばと共に。同時に、――「易往而無人」を天香さんは斯う解かれるのか。さながらに娑婆即寂光土といふ如く――そこに「淨土眞宗には、今生に本願を信じて、かの土にしてさとりをばひらくと、ならひさふらふぞとこそ、故聖人（親鸞さま）のおほせにはさふらひしか」との「歎異鈔」のうちの一節が、つゞいて胸に流れるやうに思ひ出されました。――この純他力本願の信仰に生きて、おのづから殼が割れるやうに打開され進展せられ往く道こそ、天香さんの世界へ靜かに破壞なく導かれてゆくのではないか。しづかに化せられて日に新しく白き道を往く。それにしても――

『天香さん、わたくしは獨りで想ひちがひをしてをりました。顏をしかめて無理にでも勞き／＼進むでゆかなればならぬ苦るしい難かしい烈しい道だとばかり獨りで想つてゐました』

天香さんの圓い頰に、やさしい微笑が刻まれ、すぐに、すこし迅い口調に、

『悪魔はあらゆる方法をこしらへて道を妨げます。最後まで妨げます。が、一度、裏に火がついたら、どうしても人はぢつとしてゐられないことになります。最後まで打ち破らんことに

は、悩みがとれませぬ。これを思ひきつて積極に出てしまへば、あとは何のこつちやいといふことになる。易い、なんにもないことです。ただ泳ぎはじめるのには、足をあげねばならぬ。その時に少しは水を飲みます。溺れたら水を飲むでもかまはない。直きに泳げます』 さうではありませんかと、わたくしの顔を視つめて、視線をあはしたまま、絶ち断るやうな力に充ちた小聲の、

『生きるうへに、佛のおひかりが現はれてくださらんといふことが……』 そんなことは断じて有らうことでは無い――と、烈しくも勁い氣勢が天香さんの聲に充ちて、顔に一時に紅潮し、全身の氣あひは迸るやうな剛さに凝つて漲り、

『もし飢え死にをするならば、天香がさきに死にます。十七年……もしも一椀の飯しかなかつたら、あなたに先づ食べてもらひます。わたしが先きに死にます……』 聞きつつ私は唇をしめました。眼をとぢました。

牧師、師僧、さまざまの人々の教へを、わたくしは幼い時より今までに聞きました。しかし、今、天香さんの十七年の不可動の體驗が凝集せられある身をもつての言といはんよりも、それは即時に身にかへてせらるる、然も既に十分に充ちて行はれきたりし『一椀の飯しかなかつたならば』――『先づあなたに』――『天香が先きに死にます』ここに[illegible]わたくしは眼前の肉身の人より受けたのでありました。わたくしは想はず眼をとぢました。忘れ得ぬ愛の問答を、ここに現實に刻まれ、今もこれを書きつつ其の時の問答を思ひます――言をかへたイエスの言ではないか――（なほ今にして痛切に氣がつきます――イエスは言の人ではなかつた――）

『あなたには初めからこんなことが言へます。もう内がはに熟してゐられるので、皮をうすく破ればいい。やつてみねば解りませぬ。……』と天香さんがつづいて言はれましたときに、わたくしは竦然と慄へました。

――言をはさむ餘地は無い。考察すべき隙は無い。往くか、往ぬか。この他には無い――と思ひさだめつつ、わたくしは眼をあけました。天香さんは、すでに隠かに微笑してゐられました。さうして、

『死にきらなければ、死ぬのです。それで生きられます。天國往つたときに、よう働いてきたと賞められた方がいい、小さなままで往くよりも、大きなものになつて往きたい……』と、述懐されるやうな天香さんの、このおことばは、わたくしの心にすぐに頭を横に振らせました。領き得ずに、――山室さんのお話のやうな、このお言は私に承けいれられぬ。大きなものも、

小さなものも、すでに光に往けば一つになるものを―― この咀嗟なうちに、わたくしは天香さんと少しの離隔を感じました。

『子どもには子どもで、やはり大人と同じ新生涯の道が開かれてゆきます。子どもにも用ができてきて皆おなじやうに生きてゆかれます。今はわたしの二人の子どもも、悦んで働いてゐてくれます。前の家内は此の生涯について きてくれま せんでした。これは私が至らぬからで、ついてこられなかつた家内には無理がない。わたしがわるいからです。今はよく両方ともに理解してゐまして、なんの蟠まりもありません。よく會つて障りなく話してゐます。「神の合はせ給ふものは人これを離すべからず」といはれる……、が、この生涯に出てこられなかつたものは、神の合はせ給ふたものとは―― どうして思へようと、獨りで強く頷くやうに言はれました天香さんに、激しく胸に石を投げられたやうな衝撃を私は感じました。――さうだ。神の合はし給ひしものと、ほんとうに誰れが知り得るのか。もしこれを裁くものがあれば、まことにそれは「道」そのものでなければならぬ。「道」は離合を自然に裁くのであらう。夫婦のあひだも、親子のあひだも……。見よ、今までの自分は、あまりに弱かつたではないか、子に對し妻に對し自分の執着に縛られて、……さうだ。往くべきが眞實である以上は、離合は「道」にまかせきつて、自分ひとりで往くべきではないか。ついて來るべきものならば、來てゝ置いても必らず合はう。遂に離るべきものならば、同じ家の中に居て何の價値があらう。さうだ。信仰とおなじやうに、自分の力こそ却つて弱い。他力は強い――それならば、

『新しく出て往きますのにも、一念歸命の信心のさだまるといふやうの、發起する時尅ともいふべき境涯が、内に刻みつけられるのでせうか』 たづねる私の言につれて、天香さんは大きく微笑され、

『それもよく訊かれます。立ちあがつた時が、その時です。すわつてゐて、いつまで待つてゐたところで、時はきませぬ――』との明晰さに、わたくしは直ぐに頷きました。――さう。理くなしに――

『いらつしやる時には、裸できてください。今あるものは散らさずに何處かへ纏めてあづけて……』 一時の發憤のまゝに、むやみな事をしてはいけませんと、思慮ふかき叔父が柔かく訓すやうに、わたくしの顔を視ながら、

『あとで整理が碍りなくできますから……』

と、天香さんは言ひつゝ部屋のなかを、かるく見まはされて、

『京都で足利浄圓さんも、時代が新しくなつてきて、かういふ人が出てきたと、あなたの本を感心してゐられました。眞宗とキリスト教と、ちつとも縺れませんか』

『わたくしの書きますことなどは、どうでもいゝので、書かなくても最初から一つなのですから……』——天香さん、これは今さら言ふまでもないことではありませんか。殊に、あなたには全く頷いていたゞけて——と思はれるそれだけに私の唇をついて想はず強い聲が出ました。天香さんは此の時にまた何故か顏に紅潮され、うつむいて、瞳を凝らし默つてゐられました。

そこに妻が階段を昇つてきまして、障子のそばにすわり、

『なにもございませんが、お晝のおしたくをいたしましたから』

わたくしの顏を眺める妻の視線が、まへとは沈着いてゐるのを、わたくしは見ました。——惜しかつた。天香さんのお話しを、いつしよに承はればよかつたのに——

天香さんといつしよに食事することの悦びにつゝまれつゝ、わたくしは先きに階段をおりてゆきました。後から、天香さんが、

『つい長くなりまして……』

と言はれ、その後から、妻の、

『ほんとに何もございませんので……』

といふ聲を聞きまして、

『天香さんには、なんにも無しにあがつていたゞけるから……』

おもはず私は佇みながら、——すこしの氣がねのない兄が來たときにさへも、然し晝の食事には何を御馳走すれば歡んでもらへようかと、やはり少しは氣になつた。妻も私よりは猶ほそれを氣にしてゐるらしかつた。今、天香さんには、しかも初對面だのに、これこそ氣がねなどは全く無しに、すこしも「お客」といふ感じなしに、さうして、食事していたゞくことに感謝を尊くも感じる。ふしぎなこと。しかし、これこそ當りまへなのではないか——　わたくしは想はず會心して嬉しく微笑しました。

そこの部屋には、子どもたちのために、新しく誂へました小さな二脚づゝのテーブルと椅子とが、床のまへに据えてあります。家でする二人の「おさらひ」のために、小さき魂しひの伸びゆく環境を少しでも整へたく思ひまして、それを新調するには眞に小さな思ひ惑ひの末に、遂に道具屋さんにお賴みした

のでありましたが、出來あがつてきましたそれには、小さな貝殼の飾りなどが側面に嵌め入れられて、總體が美しく塗られ、想ひのほかの小型な華奢な感じをそなへてゐるのでありました。そのテーブルの直ぐ前に二人分の菜食を載せた餉臺がしたくされてありました。天香さんの隣に子どもたちのテーブルと椅子とが觸れることに、胸を壓されるやうな辱づかしさを潜かに覺えながら、わたくしは餉臺のそばにすわりました。天香さんも私のまへに、ゆつたりと正しく坐られつゝ、すぐ横にあります少さなテーブルに、ふと氣がつかれますと、そこから顏を避けるやうにして低くうつむかれ、その顏にまたも紅潮してゐられるのを、辛く見ました私の胸に、保太郎さんと、もうお一人の弟さんのことが、すぐに思ひ出されました。そこに、餉臺の前に、天香さんは頭をさげて、兩肩をまげ樸直なすがたとともに凝然と默禱せられました。それにつれて私もたゞ禱りました。――天香さんといつしよに御飯がいだけます此の御結緣をお禮申しあげます―― おもふともなく胸に現はれました。

頭をあげて箸をとられました天香さんは、わたくしに、

『奥さんは……？』

眸を見はつてたづねられました。

『小さい方が、すこし遲くなつて學校から歸てきますのでいそれといつしよにいたゞきますから』

『さう』

頷いて靜かに茶碗をあげられました天香さんを、わたくしはしみ〴〵視ました。――あゝこれが十何年まへに自分を泣かした天香さんか。「天華香洞主人」といふ美しい名とともに、自分を烈しく慕はせた……――

妻の手製の露のものゝ椀と、フライの小皿と、青い物の小皿とが、餉臺の上にありました。天香さんは露をすゝられ青いものにのみ箸をつけられまして、フライはそのまゝになつてゐました。――天香さんは一汁一菜を守つてゐられるのだらうか？どうかそれも召しあがつてください。わたくしたちのために―― 氣をもみつゝ、自分の前の小皿の同じそれに箸を想はず强く私は突きたてまして、柔かな魚肉を縱横に引き割きました。

『父の家には弟宅おほしといはれてあるとほりですな、わたしの家といふては無いのですけれども、家が方々にありすぎるほどあります……』 おもひ出したやうに言はれつゝ天香さんはフライの上を、ぢつと視つめて、暫くして箸をつけられました。わたくしは潜かに頷きました。さうして、――わたくしも天香さんに此の家に幾夜でも、泊つていたゞきたい、こゝろから―― そこに、しかし「泊つていたゞきたい」との此のこゝ

ろには、この家の自分は主人との氣もちが、すくなくとも主人らしい氣が、明白に自分の内に含まれて蝕つてゐるではないか。自分は主人なのか――わたしの心は烈しく頭を横に振りました。――門の標札には、自分の名それは外の名が掛かゝつてゐるけれども、家の主人の名は南無阿彌陀佛――

そのうちに天香さんも私も一椀をかへました。給仕してゐる妻の横顔を、わたくしは氣にとめて視ました。總じて婦人の性情の内に特に含まれてゐるらしい敏感な洞察性が、はやくも天香さんの内から何らかを著るしく感受してゐるらしい膽の力が、ひそかに緊張してゐながら、それを深く制さへてゐます妻の氣はひを、十年ほどの家庭のうちの習性において、わたくしは直ぐに閃めくやうに知りました。そのうちに、

『出家するの遁世するのなどゝ、えらい言をつかはれるので、家の人がびつくりされます。××さん（忘れました）も、えらい烈しいことを言つて一燈園にこれから行つて出家してしまふと言はれたとかで、奥さんは心配されて、どうなることかと、よほど不安に思はれて泣きだされたところが、そのうちに、かないがお宅へうかつゞて何かとお手傳ひをさしてもらひますと、かうふ事が、これならば私にもできたのだといふことになつて、やつと安心されたといふことも云はれます』

おもしろさうに天香さんが笑ひつゝ言はれ、わたくしも想はず笑ひました。妻は默つて頬をしめて聽いてをりました。

『天香さん、御病氣をなさつたことがおありでせうか』

茶を吸つてゐられる健康さうな歯並みを見あげつゝ、ふと私はおたづねしました。

『さあ、冬でしたが、小此木さんを病院へおたづねしまして、用がすむで外へ出て少し歩きかけると、ふら／＼と眼が昏みました。そのまゝ倒れて小此木さんの病院へかつぎこまれましたが、なにかと思へば、さきに應接室に煖爐があつて、あたりつけないものが共れに温められたので、外へ出ると寒さにあてられてがらにもない腦貧血といつたやうなことで、かういふ時にし少し休ませねばいかんと言はれてから、えらう大事にして、なかなか病院から出してくださらない。そこで宣光社の方の處理をさしてもらひました。からだを大事にするとかへつていけません……』

なほおもしろさうに笑ひ／＼言はれる天香さんの、彈力に充みた靱強さそのものを見るやうな中肉の上半身が、ゆつたりと直ぐまへに坐つてゐられる厚い胸の前に、多血的な豐滿さが動かしがたく溢れてゐるのを、おきらかに私は感受しつゝ、その力

づよさに、ふんわりと厚く包み容れられ、そこに、すが／＼しい打てば直ぐに響應する反射的な謙敬さが、なほ更に信頼さるべき可能性に充實して強く私を惹きつけました。さうして、霜のごとき烈しさの含まれてゐる、練りに練られた親和的な天香さんの、ゆたかに惠まれてゐられる先天的素質が、わたくしに浸み入るやうに偲ばれました。おもはず――あゝさうだ、天香さんは……。何等か如是の異常の體驗を本質的に生みだすべき先天的の人なのだ。生來より凡人ならざる天香さんなのだ。さうなのだ。この天香さんにして初て既往十七年の鍛錬を今まで積みに積まれ得たのではなからうか。選れし先天的有に強きな人稀のればこそ、……待て、然し、言も冷視もゆるされない。かく天香さんを想ふこと共れ自身が一歩の既に躊躇なのだ。躓きなのだ。「やつてみねば解らぬ」が、然し――　跳り旋る渦まきのごとき自分の胸を、わたくしは靜めかねてゐますときに、この日より一週間まへの夜にお訪ねくださいました吉田富翁さん若々しい白い豐かな頬の圓い笑顔が、まざ／＼と聯想されましのた。

吉田富翁さんも筒袖の單衣を着てをられました。二十五歲(？)の方でありまして、幼時よりの生ひたちの昏程を、おほよそ闡かしてくださいました。自活して謂はゆる苦學のうちに乏中學校を卒業の後に、第一高等學校の體格檢査に肋膜炎の徵候があるとして不合格になり、天香さんのあづかつてゐられます宣光社の事業に成る「田ノ澤」の鑛山(富翁さんの鄕里に近い)に入られ、そのあひだに京都の一燈園にも行れて托鉢され、また五年ほど鑛山の中に、坑夫、運搬夫、事務員など、「山」のあらゆる勞働によりて奉仕され、最後に肋膜炎のために餘儀なく山をおりて、「母と妹とがをります家にまゐりましたが、わし(富翁さんのお好きな言)は寢たきりで働けませぬ。米のなくなつてゆく寂しさ、無くなつしまふたことを床の上で動けずに仰むけに寢ながら知つてゐます寂しさは、言ふことができても經驗のない人には知つてもらへませぬ。わしはしみ／＼と思ひました。あゝ奉仕は眞實の道であるのにちがひない。が、けふ日は奉仕ばかりでは生きてゆくのが難かしい。母がある、妹がある、米がない。奉仕ばかりでは、けふ日はゆかぬ。このわしにはゆかぬ。これは、なにもかもない事實なんだ。五年あまりを無一物でやつてきましたわしは、とう／＼行きづまりました。けふ日は奉仕ばかりではゆかぬといふ結論に、事實の上から到着しました。理論ではない事實でございますから、しかたがありませぬ。一時の凌ぎをつけてくれました一人の親友が言ひました「おまへが今までやつてきたことは、嘘だと言はぬ。

しかし、このとほり行けなくなつたぢやないか。倅にもいつまでも助ける力はない。考へなほしたらどうだ」わしは自分の事實の上から、この友だちの言ふことに逆らへません。やつと病氣がなほりまして出てまゐりました。これからは報酬といふものを、いたゞくことにしました。額をいくらと、こちらから望みませぬが、くださる報酬はいたゞくことにしました。もういちど山へ行つて事務を後繼きしましたら、東京へ來まして勞働してゆかうと思つてゐます。なんと言つても勞働はおもしろく、まじめに生きてゆけますから』などゝ微笑しながら言はれました濁りのない聲が、つゞいて思ひ出されました。――天香さんの生涯も明白な事實。富翁さんのそれも事實。たゞ自分には解らぬ。往くならば往け。たとひ饑えて行路病者として死んだとして、その道がまちがひだつたと誰が定めるのか。さうして――　わたくしは翻つて現在の自分を觀ました。――この今の、かうしてゐる昨年以來の悩みなき生きかたが、眞實か虚僞かを。なほまた誰れが定めるのか。さう、たゞ腰をすゑてはならぬ。道は不斷にすゝむ。理くつは無い。方式は無い。範疇はない――と顧み省みつゝ、餉臺の上に茶碗を置きました。食事がすみまして、餉臺も片づけられました時に、天香さんは、すこし顏をあかくせられつゝ、

「子どもは教育したいと、わしは思ひます。が、世には子どもを教育したいにも、できない人が、多勢にあることを思ひますと、自分の子どもの教育はできません。どうしてもできません。……』　わたくしは俯向きました。この言のまへに只だ深く頭がさがりました。一脈の辱づかしさが加はつて胸を壓し、同時に烈しく、――社會制度がわるい。組織惡の罪なのだ――われならぬ義憤性を帶びた呪咀感が強く湧き、――外の組織惡の禍ひなのだ。内に基調のある問題ではない。富翁さんの「けふ日では」躓かねばならぬのも、遂に外よりせられる禍惡なのだ。裏に炎を燃やしつゝも尚ほ十字街頭に立ち得ない人々なは、もとより惡魔の魅惑もあらうけれども、そこになほ大きに禁因になるものには、組織惡の外よりしつゝある緊縛の禍ひが障壁を作つてゐるのでなくて何であらう。いはゆる十字街頭に出立する要なき、そこには「十字街頭」との概念すら不用なるべき組織にまで、内の炎と良く親和し得る健全な世界にまで、破壊なき進化によりて進ましむるものは？　……いかに永き時を前途に想はうとも、それは可能あるひは不可能との容疑なる疑惑を既に超えて、聖旨の天に成るごとく地にも成れかしとの、やみがたき衷なる純眞本能の願ひではないか。絶對愛に救はれて衷に賦與せらるゝ愛の願ひではないか。この衷より觸發せら

る丶他力の祈願に動かされて、「けふ日」なればこそ餘儀なき十字架を悦び負はしめられるのではないのか。外なる組織悪に負けてあきらめる弱さのうちに妥協して腰をすえるな。立て――

『この生涯になりました當時のことで、保太郎が小學校に行つてをります時に、わたしのところへ來て、お父さん、こまつたことが出來たと言ひます。なにが出來たらうと聞きますと、學校でラケットを持つことが、はやりだしてきたので、それを持つてゐる生徒は何やらまあ教場の中でも、はぶりが好いといふことに成つてゐるらしい、それで、わたしにもラケットを買ふてくれと言ふのです。しかし、何分にも金が無い。どうするわけにもゆかぬ。それで、お父さんには金が無いのだ。買ふてあげるわけにはゆかぬ。買へんのだや。しかし生徒がみなラケットを持つてゐるといふのでもあるまい。ラケットの無いもの丶方が多からう。無いものどうしで仲よう遊ぶやうにしなさい。皆の持てぬものを持つのがよいか。持たぬ仲間に入つて、みんなを慰めるがよいか。あんたにも無理がないが、お父さんにも無理がないと思ふがどうだらうと言ひますと、保太郎は泣いてゐましたが、やがてニコ／＼してをりました。さうして二十日ほどしまして、いつも用をさしてもらふ家に行きますと、この中川さんといはれる女の先生が、えらう悦んでござさる、實は家の子供もラケットを慾しがつて困らせてをりましたが、保太郎はんが來やはつて、無いものは無いもどうしで仲よう遊ぼうやないかと言やはるので、家のも、そやそやと言ふことになつてしまふと、それからと言ふものは、ラケットをとんと欲しいとも言ひません。とお禮を言はれるやうな始末で、保太郎は學校へ行つてもやはり、無いものどうしで仲よう遊ぶことを、しきりに宣傳してゐたらしい。さうして面白う遊んでゐる。ラケットの問題は片がついたと思ふてゐると、そのうちに夏休みになつて、中學校の生徒に、ラケットのことが聞こえました。その生徒さんたちがラケットを持つてゐられる。なんぼでも貸してあげようと言ふことで、友だちのラケットまで借りてきて貸して下さる。そこで保太郎もそのラケットを二挺も貸してもらふて、えらく面白く振りまはして遊んでゐました。大事にせんといかんと言ふてゐましたが、……

天香さんの瞳が含蓄に充ちて、にこ／＼と興味をもつて語られつ丶、それと同時に、保太郎さんにたいする血の繋がりの争ひがたき親ごゝろが、圓い微笑の内の底から湧きあがつてゐるのを、わたくしは攫みをとるやうに意識しました。

「手紙や葉書などの音信をいたゞいて、返事を出す金が無いなどとも、保太郎が言ひます。然し、是非に返事のいる音信なら

ば、切手を封入されてくれるか往復におきで來るであらう。こうでなければ、返事を無理をして出すことはいらないではないかと、申しておきました」

聞きつゝ私は顔をあかくして天香さんを眺めました。京都より私が歸つて來ました時に、保太郎さんにあてゝ手紙を書き、天香さんの御上京の時日を問ひあはせつゝ、然し、切手の封入なしに、そのまゝお送りしまして、その御返事を、十日ほど後に、保太郎さんより受けたのでありましたが、――あの緑いろの状袋にも、書簡紙にも、殊に三錢切手にこそ、すこしの濁りなき、供給需用の跡さへもなき尊き融通が、保太郎さんによつて聞くはこばれて來たのであつたか。それにしても、「お返事がおくれましてすみません」と書かれてきた保太郎さんの胸を少しでも傷づけたものは、この自分の心なきしわざなのに他ならぬ。またそれにしても、天香さんの銳さ嚴しさよ――　やがてしまして、

「えらうお邪魔をいたしました。それでは……ちよつと福島の方へ行きますから、いづれ、また寄せてもらひます」と、疊の上に手をつかれました天香さんについて、門の前までお送りしました私は、小さな風呂敷づゝみと赤インキの小瓶とを左手にさげ、ゆつたりと帽子なしに頭をあげて小路を徐かに歩いてゆかれます天香さんの腰の真うしろに、濃いろの太帯の端が短く結ばれてゐるのを、飽かず眺つめながら門の前に暫く佇んでゐました。尊さと、懐しさと、怖ろしさとが、自分の内に溢れるやうに動いてゐるのを、そのまゝ凝然と握むやうに意識しつゝ、門の前の小路の上を、やがていつしか歩きまはつてをりました。うす曇りの日の二時ごろでありました。

この日の午後は、新聞を朝夕に配達してくださる金さんが、朝鮮の人参をもつてこられて、その効能などを暫く話してゆかれましたあとに、従弟の淺次郎さんが久しぶりに見え、いつしよに夕食し、九時ごろに歸つてゆかれ、さうして、神戸新聞に連載中の續きの原稿を、臺所の隣りの部屋に入つて急いで書きはじめました私は、その二三枚を書きなほしつゝ、食卓の上に、萬年筆を投げだしました。おもはず「書けない」と獨りで呟きました。隣りの部屋に蒲團を縫ひなほしてゐました妻が、「天香さんのことでせう」と聲をかけました。

「さう。いろ〳〵十五六年前からの事が思ひ出されてくるし、今日のことも。あなたも二階へ來て、いつしよに聞けばよかつた。どうして來なかつた？」

『わたしは、こわかつたのですもの』

『どうして』おもはず私はをかしく笑ひました。

——恐ろしい人、しかし、こわい人ではない。天香さんは決して——

『でも、天香さんのことは、あなたが前から言つてらつしやるでせう。……あの方こそ、ほんたうにクリスチヤンですわね。あなたは一燈園にいらつしやるおつもりですか』

『行くならば皆で行きたいと思つてゐる。それよりも、まづこの家の中が、このまゝ一燈園のやうにせられてゆくのが、自然だと思はれる。出家するのは家の中に出家する。さうさせられてゐるお育てが感じられる。自然に、……　無理なしに、『自分は自分と妥協してはゐないのか？——

『お子さんたちを犠牲になさつたのでせう。到底わたしは天香さんの眞似はできません。「天香さん、天香さん」と言つていゝのでせうか。もつたいないやうですわね』

——さう。然し、天香さんは餘りに親しかつた。……やはり「天香さん」と言ふ方が、親しさにふさはしい——　さうして、

『天香さんにしてみれば、子たちを犠牲にされたといふのではない。ラケツトのことも面白い、もつたいないやうなお話だつたね。え？』

『あのお話を伺つてゐて、涙がこぼれさうでした。天香さんのおこゝろでは、どれほどお辛かつたでせう。今は奥さまもお子さまたちも皆さまが仲よく奉仕してゐらしても、始めは何と言つてもお子さんがたを犠牲になさるおつもりでなければ、天香さんは今の生活をお初めになれなかつたのでせう。ほんたうに偉い方、今日はほんとうに洗禮を受けた氣になりました。わたしには眞似もできないけれども、天香さんのことを思へば、聖書のことばが、はつきりとなつて、……すこしでも、できるだけのことは仕なければ。さうでせう』

妻がいつも母のやうに慕つてをりますM先生から、洗禮を受けるべく切りに勸められてゐます教會へ、私たち家族四人が或る日曜の朝に行きました時に、「十字架の巡禮」の題のもとに信者は生の巡禮に十字架を負ふべき者との熱のある烈しい說教を聞きつゝ、その牧師さんの激しく腕を振られました左の無名指に、金の指環が燦きまして、——宗教家は、むつかしい——と其の時に思ひましたことが、はからずも想ひ出されました。

『ほんたうに十字架の人ですわね……天香さんは』

『さう。天香さんは涙を隠してゐられる……』……「易往而無人」に涙が無かつたと言はれるならば、……虚だ、それは虚だ

どれほど苦るしい辛い涙を流されたらうことか！　おゝその烈しさ勁さよ——　はげしい吹雪にうたれた時のごとく頭をそむけたいやうに私は想ひました。

『これを縫つてゐたときに玄關で「御免なさい」と言つて入つてらしたので、出て見て、賴むでおいた綿屋から綿を取りに來たのかと思つて、「綿屋さんですか」ともう少しで言はうとするところでしたの。すると「西田です」と仰しやるので、あつと愕いて……』

『どう思つたの』

『玄關ではよくもお顏を見ませんでしたけど、「西田です」と仰しやつて、わたしが二階へ上つて降りてきて、「お二階へ」と申しあげたときに、あらゆる苦勞に苦勞をしつくしていらしたお方のやうに思へましてよ』

『……、たださう思つたの』

『えゝ、お顏にもうずいぶん深い御苦勞が刻まれていらつしやるやうで、ゆつたりとしていらつしやるけれど、さう思はれました』

——女性の觀る直覺の方が深く正しいことが多い。わたくしには然ういつた感じは少しも與へられなかつたけれども——

『さうかも知れない。さうだらう。勿論さうだらう。』——

誰からも賴まれぬ、しかし、せずにはをれぬお苦勞を——

『もう原稿はお書きにならないこと』

『いや、今夜だうに一回分は書いてしまはなければ』

『まあ、十一時ですよ。おさきに失禮してもいゝこと』

『あゝ寢たまへ』

『また夜具を脫いでゐないかしら。おさきへ……』

子どもたちの寢てゐます二階へ、妻は暫くして昇つてゆきました。萬年筆を漸くとりあげました私は、原稿紙を更に幾枚か書き損じました——今夜はだめだ——　そばにあります「眞宗聖典」を開いて見ました。「易往而無人。其國不逆違。自然之所牽」　この一節は純他力による淨土往生の易き趣が最も明白に示さるゝ「無量壽經」の佛語として、既に淺からず私に印象されてゐるのでありましたが、その前後に長く聯なる經文を、わたくしは殆ど少しも記憶してゐませずに、——靜かに、靜かに——と念じつゝ其處を見ました。

「——佛は、彌勒菩薩と、もろ〳〵の天、人等に告げ給はく、無量壽國の聲聞菩薩の功德智慧は、稱說すべからず。また其の國土は微妙安樂にして、淸淨なること此の如し。何ぞ力めて善を爲し、道の自然なるを念ひ、上下なく洞達して無邊際なるを著さざる。宜しく各〻勤めて精進し、努力して自から之れ

を求むべし。必らず超絕して去り安養の國に往生することを得よ。橫に五惡趣を截り、惡趣は自然に閉づ。道に昇ること窮極なく、往き易くして人なし。其の國は逆違せず、自然の牽く所なり。何ぞ世事を棄て勤行して道德を求めざる。極めて長生を獲て、壽樂極まり有ること無かるべし。然るに世人は薄俗にして、共に不急の事を諍ひ、此の劇惡なる極苦の中に於て、身の營務を勤めて以て自ら給濟し、尊となく卑となく貧となく富となく少長男女ともに錢財を憂ふ。有るも無きも同じく然り。憂思は適に等し。屏營し愁苦して念を累ね慮を積み、心のために走使して、安き時あること無し。田あれば田を憂ひ、宅あれば宅を憂ふ——」

——天香さんのおことばと、まさしく一つになつて讀まれるではないか——　强い感銘の力が胸を壓しました。そこに一道の寂しさが刺すごとく迫まつてきました。子どもたちも妻も二階に寢てゐます。地上に一人ゐる自分を、わたくしは視ました。——おゝ人間的には自分は獨りなのだ。今は南無阿彌陀佛のうちに〝神と偕に〟、　孤獨な自分は意識されない。然し同時に、あくまでも自分は世に一人なのだ。いかに肉身の子どもにもせよ、妻にもせよ、それとの愛着には、おもへば寂しい深い隙がある。その間は、いかに濃くても遂に薄い。いかに愛執が强くても遂に底は弱い。自分は寂しくも人間的には地上に前から獨りゐるのだ。これが日常の皮を剝いだ自分の世における欺きがたき眞相なのだ。こゝに妻子眷族の有無に何の關はりがあらう。あくまでも愛着にはたよれない。なにものにも——二階に寢てゐます子どもたちと妻との在るすがたが想はれました。——それは在る。彼れらはゐる。然し、この人間的な獨自の寂寥性を見よ。「子」も「妻」も彼れらみなが各自に一人づゝ同じことではないか。血の繫がりは、この寂しさのまへに、たゞおなじ寂しさを、ひとしを深めるばかりではないか——　このときに、地上の本來の寂寥性が、自分のみが獨り世に現在しつゝある私の自意識のうちに、ひし〳〵となほ浸み透るやうに流れ入りました。さうして同時に、——たゞこゝに大きく實在し給ふ慈心が、眞に親しくこゝにまします。この絕對認識の互ひに照應する自分の自分に於けるよりも裏に親しき如來の名による眞如より來りましゝ一人格が、世の寂しさの充てる裏に、地上のなにものよりも切實に限りなく生きてをり給ふ。「愛」と名づくるさへもどかしく、南無阿彌陀佛の名によりて——「よろづのこと、みなもて、そらごと、たはごと、まことあることなきに、たゞ念佛のみぞ、まことにておはします」親鸞さまのおことば

お、この夜に最も身にしみて頷かれました。「おはします」自分と不一不異にまします人格的實在の、──おゝ自分は遂に獨ではない── なほ同時に、地上の深き本來の寂さに照らされては、この欺きがたき眞相のもとに、──いはゆる子どもゝ妻も、どうして自分のもので有り得よう。たゞ一人ある自分にとつて、どこに自分のものが地上に有るのか。かりそめにも有つとの虚妄さ、顚倒さから解かれよ。しかもなほ、この南無阿彌陀佛の慈光の遍きうちに、自分は今さら何處を出て何處の外に立ち得るのか。家を出て一燈園へ往かう本然的な必要は何處にも、意識されないではないか。見よ。天香さんの天華香洞の世界は碍り無く遍在してゐるのではないか。天香さんは必ずこれを頷いて下さるであらう。……懺悔、奉仕、托鉢、更におもへば此の言は自分には美しすぎる。この自分の本質には何としてもふさはしくない。この言には辱づかしい爭ひがたい感じとともに自分の頭が低くさがる。……然し更に── ある漁夫が沖から歸つてきては、『觀音さまが網に入つてくだされて、わしを今日も養ふてくださる』と言ひしといひ、またある眞宗信者の魚屋さんがいかなる時にも卸値に一割を添へてのみ魚を賣りあるき、『如來さまが一割だけを下さるさうな』と言つてゐたといふ語などが、しみ〴〵と深く聯想されつゝ、──原稿を書くこの自分に、またあらゆる人間的な仕事にも、佛の息がかゝるとき、そのまゝ閃もとより南無阿彌陀佛の生に移されて、裏に新しく生まれし慈光の種子は、外にもおのづからなる懺悔となり、識らざる奉仕となり、偽さゞる自然の托鉢のすがたに化せられ育てられ、魂しひは日々に新しく死につゝ生きて、おのづからなる法爾のうちに淨土へすゝむ。されば見よ、そこに在る家の中こそ既に一つの十字街頭に裏より化せられつゝあるではないか── 「無量壽經」の佛語を、わたくしは再び讀みました。「世事を棄て」──南無阿彌陀佛の魂しひに世事は無い。この原稿、さうして、稿料または印税の名によりて與へらるゝお金、すべてが自分には世事にして世事ではない。この新しき魂しひを日々に磨きたまふ如來の慈心のまへに、世事は世事でなく惠みによつてあたへられてゐる。一凡夫の生の仕事と賜ものとではないか。願はくば私をして、自ら生きんとする妄思より解かれ、自ら給濟せんとする貪心の、有たんとする虚妄に捕くも囚はれず、この身のまゝなる南無阿彌陀佛に生きて、ます〴〵無碍の法爾界へ拓かれすゝみ、惠まれし世諦を成ぜしめよ── 萬年筆をとりあげつゝ『惡趣は自然に閉づ。道に昇ること窮極なし。往き易くして人なし。その國は逆違せず、自然の牽く所なり。何ぞ世事を棄て──』と口に誦みながら、「自然に、

……遁延せず、……自然の牽くところ』と、おもはず強く頷かれ、さうして胸に影なく原稿を書きはじめました。しん〳〵と胸をつゝみし夜氣のうちに、現在する下界意識を超越して、地と天との一つに統攝せらるゝごとき寂しさと溫かさとが、靜かにひろがりつゝ、――こゝに凡人の生がある――萬年筆を指に挾むだまゝ、おもはず私は合掌しました。――あゝ凡人の生は惡魔の合掌に生まれる……

　翌日の朝、家族の四人が食卓をかこみました時に、天香さんのお話を、子どもたちに妻がして聞かせました。『それぢやなに？その伯父さまもエスさまのやうに天へ昇つてお行きになるの？』などゝ尋常二年生が、ふしぎさうに瞳をあげまして私たちを笑はせ、

『あなた達は大きくなつたら何になるつもり』と妻がたづねますと、そばにゐます小さな二つの体が、

『僕は總理大臣。僕は内務大臣』と聲をそろへて言ひました。

私たちは笑ひつゞけました。――いつのまに誰れがこんな功利的な名譽心を幼い魂しひに植えたのであらう？けれども……大きくならうとする本來の願ひに正しき惠みあれ。總理大臣にならうとならば、より博く、より大きく人々に仕へ額づき得べく成れ。――やがて『あなたこの前に倉田さんへいらしたとき、天香さんのお話がありましたか』と妻にたづねられました。私は『さう、少しばかり。どうして？』『天香さんのおことばつきでも、御様子でも、「出家と其弟子」の親鸞さまそつくりですもの。すつかり何から何まで同じですもの。倉田さんは天香さんを親鸞さまにしてお書きになつたのですわね』『さう、倉田さんは一燈園に居られたのだもの』『まあ、さうですか。天香さんが仰しやつて？』『富翁さんが言つてゐられた。しかし倉田さんがどうして一燈園を出られたのか。この次ぎの水曜日にお訪ねしてこよう。聞きたい』『わたし、あなたに聞いていたゞきたいことがありますから、あとで二階へお話しに行きますことよ』と言ひつゝ妻は瞳を俯せながら、子どもたちの立ち上がりました後の食卓の上を片づけてをりました。

　この日の午後、二階の室に机を隔てゝ妻と私とは向きあつてすわりました。なにか言はうとする氣はひに充ちてゐます妻の瞳が、沈みながら澱りきつて私を眺めますのを、わたくしも默つて見ました。やがて、

『あなたは一燈園へ行きたいと思つていらつしやるのでせう』

と、さながらに何かの異常な大事を決めるかのやうな嚴しさに

緊張してゐます妻の聲が、私をもひきしめました。さうして二人は話しました。

『今のところ往かねばならぬとは思つてゐない。もし思ふときが來たら、それは直ぐに往く時なのだから、その時にはすぐに言ひませう。默つて往くことはしないつもりでゐます』

『さうですか。もしも子どもたちや私のために、往きたいと思つていらしても家の爲にお往けにならないのでしたら、はつきりと仰しやつて下さい。子どもたちは何とでもして御心配のないやうにしてゆきます。きつと』

『ありがたう。往かなければならぬものならば、いくら誰れから止められても往つてしまふだらう。往かなくつてい丶のならば、あなたから勸められたとしても往かないだらう。これからのことは解らない』

『けれども今はどう思つていらつしやるのでせう』

『今までのとほりで矛盾が感じられない。天香さんから大きな刺戟を與へられて感動したことは、おそらく生涯のあひだ忘れられないだらう。さうして、わたくしの今の生活が決して矛盾したものでないことも、かへつて天香さんによつて、はつきりと教へられた。この家の中が、このま丶脚もとから、天香さんの魂しひと調和されてゆくやうに想はせられる。この二年ほど以來の私たちを振りかへつてみても。けつして私たちの力ではなしに』

『もしそれが、これから、さう行かなかつたら一燈園にいらつしやいますか』

『さう、然し一燈園には、……もう一燈園といふ建物があるのだし、教團らしくなつてゐるやうに想はれる。汽車に乘つて、その建物のあるところに行つて、奉仕さきをあたへられて托鉢する、それはもうやさしいことではないかと想はれる。天香さんの十七年間が、やさしさを生むで下さつてゐるらしい氣がする。實は昨夜も寢るときに思ひついたことは、もし往かねばならぬときには、ちやんと奉仕し得るやうに出來あがつてゐる一燈園へは往くまい。それは却つて魂しひの保養にでも行くやうな利己的な氣がする。往く以上は、やはり十七年前の天香さんと同じやうに、なに一つも無いところから一人になつて出發するのでなければ、どうしても、はつきりしない。さうして往かなければならぬやうにされた時には、あなたに必ず言ひます。もちろん其の時は、生きてゐれば往つてしまふ時です。然し、今この現在でおもへば、往くと言つて、どこへ出て往くのかと、をかしい氣がする。こ丶で家のなかで、このま丶出家して立ちあがらせられる。同時に出發して始める。元來が衷のこ

と、魂しひのことなのだから』
『今はそれでさうとして、これからさきに、いつ出ていらつしやるかも解らないのでせう』
『さう。そのとほりです。さきのことは解らない』
『さういふことでは、ちつとも、おちついて居らないではありませんか』
『今おちついてゐられゝば、これほどいゝことはない。これほど大事なことはないと思ふ』
『でも宗教は人間の生死問題を解決すべきものだと、増田さんと話していらしたではありませんか』
『生死の不安が解決されて、それから今がおちつけた。しかし生死の解決と今とを離してゐるうちは、どうしてもおちつけなかつた。生死問題の後生の一大事が決定されたから現在のことや生きかたなどはどうでもいゝと言ふのは、まだ大きな缺陷があつた。いくら詮をしてみても、おちついてゐられなかつた』
『それでは今はさうとして、あなたがいつ出ていらしてもいゝやうに、わたしも、おちついて覺悟してゐませう』
二人は冗談の氣もちはなく笑ひあひました。
『さうして、あなたはどうします？』
『天香さんの御生活こそ、どう考へてみても、ほうたうだと思ひます』
『それでは、往きなさい』
『わたしは母ですもの、天香さんのおこゝろで、子どもたちを佛さまのおために育てさせていたゞきます。あなたにも、おなじこゝろで仕へさせてください』
『みんなが仕へあつて往きませう。いつでも、今といふ今から』
こゝろから二人は頷きました。

――すこし縮れのみある黒い澤々しい髮が、櫛のあとなしに、おのづから伸びて柔かさうに縺れ、そのまゝ額の上に厚くかゝつてゐる下に、二重瞼の圓い大きな瞳が、仰むけに臥したまゝ長い睫毛を添へて微笑しつゝ溫かく若々しく輝いてゐる。隆い鼻すぢより豐かな頰へ、黃いろい皮膚が血のいろを融かし透のるやうな澤を帶びて、そこに病ひよりする衰へは更に影さもない心丈夫さを想はせ、柔かみを含むで見える顎に、三寸ほどの長さの髯がたほ柔かく、その尖はほそく伸びてゐる。枕もとの、寢臺の枠に、佛語が漢文のまゝに五六行ほど罫に錄されて、その上の柱時計のしたに、「醫師のすゝめにより三十分以上の談話を禁じられてをります」との意味が半紙にしるされて

ある、そばの榻間に「主の晩餐」の通俗な彩色の大きな額面が、下の寝臺のうへの人を掩ふやうに架けられてゐる。うす黄いろい掛け蒲團の上に、厚い褐色の革に緊めるやうに卷かれた左の腕が、そのために痛ましくも黝ずむで眺められる指をのばして、そこのみに力なさが感じられる。黑みの勝たつ大きな瞳は快活さに柔かく燃えて、うち豁いた氣もちのまゝに、興ありげに――（かく書きつゝ我れならぬ深き懐かしさに私は動かされます）――倉田さんは快く、わたくしのおたづねに應へられ、

『それはね、からでした。僕の健康が許さなかつたことが勿論あります。もう一つは僕があるときに都踊を見にゆきました。そして美しいとおもつて一燈園に歸つてきました。こゝろから美しかつた。この美を鑑賞する……味はふこゝろに、不純なものはない。惡るいことだとは思はれない。眞なもの、善いものや、美しいものに、魂しひが育てられてゆく、それが惡るいとは僕に思はれない。この魂しひの欲求を無くして殺してしまふことは、僕に適はない。美しいものを美しいと味はつて自分が其の方に大きくなつてゆくのは惡るいとは思はれないと、天香さんにたづねてみました。天香さんは言はれる。それはさうだが、都踊りには不純なものがある。金に犠牲にせられた舞ひ子が、虐げられて踊つてゐる。こゝろから人に美しさを見せようとするのでない。見るものにも元より不純な氣もちがある。さうすれば、その舞ひ子の美しさは、ほんたうのものでない。さうでなくて、舞ひ子が自分のこゝろから自分の惠れてゐる美しさを人に見てもらふことに純な悦びを感じ、人もお禮して見てもらふのなれば、わたしも都踊りを見せてもらひませう、と。から天香さんが言はれたので、さう言はれゝば、あの都踊りに愛はない。……人を愛するといふことは、人のうちにあるものを生かすことでせう。僕は僕自身のうちにあたへられてゐるものを生かしたい。できるだけ大きく十分にです。これが惡るいことだとは思はれない。まあ僕のことばで言へば、造りぬしから、僕の造りぬしから僕のうちに與へられてゐるものを生かしてゆくことは、……キリスト教風に言へば、おぼしめしに適ふことなので、その與へられてゐるものを殺すことは、造りぬしのみこゝろにそむく。……せつかく與へてやつたものをといふ造りぬしの悲哀が感じられます。それが僕にしてみれば内にあるものは藝術ですが、眞のもの、善いもの、美しいものを望むで、それに育てられる魂しひを生かし、生かされる、こゝに造りぬしの愛もあり、滿足もあるやうに感じられるのです。つまり、天命を全うするといつた言が、僕のこゝろに、あてはまり

ます。あたへられてゐるもの……天命を、ゆるされるだけ全くして生きたい、この願が、一燈園の生活の中から、外に張み出るのです。それに健康もわかるかつたし、今言たやうのことで、僕は一燈園から出たのです』

口ごもるやうに訥々と卒直に言はれ、すこし九州辯の剛い抑揚が含まれて、暫く話しつゞけながら瞳を張め、

『今言ひました、そこのところが、天香さんと、ぴつたりしなかつた。僕の自分の願ひが、一燈園ではかなへられない。あの生活からは、どうしても、はみ出すので』

言ひつゝ深い息を吐かれながら、それを靜めるやうに瞳をとぢ、しだいに小さく呼吸してゆかれ、

『ね、天香さんは切り抜けてゆかれるから、どこまでも自分を殺しきつてゆかれるから』

獨言のやうに倉田さんが言はれました。

『一燈園にをられました吉田富翁さんといふかたからお聞きしたのでしたが、天香さんの御次男と、あなたと御一緒にゐられたさうですね。御次男がもつと教育を受けさせてくれと言はれて、天香さんの仰しやることを諾かれなかつたといふ事でしたが……』とおたづねしますと、

『さういふことも有りました。今さきに言ひましたやうに、それは僕自身にとつても考へられてゐたことなので、いくども天香さんに願つてみました。ゆるされなかつたので、天香さんは僕に、それはあなたの有つてゐる望み願ひが、あの子にうつるからと言はれました。……天香さんはするどい』

『一燈園の奉仕にしましても、自然の造化と一つになつてゐる大きな藝術だと想はれますけれども、あなたが今もつゞけて一燈園の人たちといつしよに托鉢してをられますより、「出家と其の弟子」そのほかの御本によつて、多くの人々が、惠まれた作品から、魂しひを培はれてゐることを想ひますと、こゝにこそお光の愛が、より大きく、はたらき易く能き、さうして、同時に、あなた御自身の魂しひも生かされてゆくと想れます。私自身にしてみますと、あたへられる原稿料とか印税とか、自分で獲るものとは感じられないで、みな元は讀者をとほしてめぐまれる、おろそかならぬものに思はれます。それによつて妻と私とは生命保險に加入したり、子どもたちの學資貯金もしてをりますことが、實は苦るしく想はれて時々に矛盾を感じます。有つてゐると言ふ意識を感じますと直ぐに苦るしくて、いけない、すまないと思ひます。たゞ子どもたち――小さな人が正しく大きく人々の爲に生きるために、その金を今より將來へ用ひさしてもらふならば、その金は生きると思ひますと、自

分のものといふ感じが少く薄くされます。また實際に自分のものではないのですから、有つてゐるとの感じは、從前の醜い階性が、さう思はせるので、あくまでも此處を切り拔けなければなりませんのですが、しかし、これは蟲のいゝ妥協ではないかと、一方に囁く聲があります。この聲は、しかしまた、ずつと前に自分が共處へ往かうとして往き得ずに、最後に手を離してしまつた聖者の世界から來る聲なのだと想はれます。その聖い世界へ自分の力で易々と往くことができるのでしたならば、今まで自分は決して悩むでこなかつたでせう。その悩みが救はれ解かれて、自分は、自分の生來にあふ職分そのまゝを、あなたの仰しやる天命を、大きく生かすことによつて、いかに貧しいものにせよ人々へのこれがさゝげものになるやうにと、すくなくとも願つてだけはをります。こゝに與へられてゐる職分を全くされてゆきたいと願はせられます。さうして家族四人が決して自分の力ではなく自然に養はれてをります。こゝに凡夫としての自分の生きてゆく道があるやうに想はれます。さうしてかうした願ひが日に／＼進められて、深められてゆきます實感が、虛でゐるとは感じられません。自分の懈怠を嘆きながらも、大きな手が、植ゑ給ひし種子は、その同じ手が猶ほ私の懈怠のうちに一貫して育て給ふのに感謝なしにゐられませぬ。蟲のいゝ妥協ではないかと囁く深い鋭い聲も、實はその高い深い世界へ強くあこがれてゐた時の魂のおのゝきだと想はれます。聞くにつらい聲なのです。その聲は、元來の聲だけに、だん／＼大きく聞こえます。それだけ日に／＼自分は新しく進ませられてゆき、一擧にではなく、しづかに自分の周圍が十字街頭化されてゆくやうに感じられます。既往の自分を見ますと、いやはり妥協して坐りこむでゐるのではないとが顧みられます。生活のうへにも他力が自力になつて下さつて同じ一つに化し導かれてゆきつゝある、こゝに私の現在があるのですが、いかがでせうか。前途はどうなるのか、明日のことは思はれないですが、いかゞでせうか』――友よ、わたくしを教へよ―― 尊敬と懐かしさと、自分の胸をうちあける亢奮とが、わたくしに想はず長く話させました。お訪ねしました最初から既に三十分がすぎてゐました。

『それは僕には答へられないことです。僕自身が、かうして別に不自由なしに生きてゐるのですから、やはり原稿によつて。だから何とも言ふ事ができません。言ふ資格がないですよ。しかし氣もちだけを言ふならば、すまないといふ氣はなければならぬと思ひます。詫びてね。……』

胸の上に柔かく腕を組まれ、倉田さんは息を深く吐きだされ

ました。

倉田さんのお宅より歸つてまゐりました私は、まだお眼にかゝつてゐませぬ友の岡本學さんからのお葉書を、玄關さきで妻から渡されました。

『其後は大變御無沙汰を致しました。今度左記へ移りましたからお知らせ申上げます。昨年は春に母が流感で歿し、夏に父が胃病で逝き、又冬には妻が腸を傷めて他界しました。そして私は肺患で三年越の今日尚未だ幸か不幸か生き存へ幼兒を擁して病褥に呻吟しつゝあります。それで屢々死を傳へられますが、此の書信は決して幽靈が出したのではありません。人間界に在る事をも併せて御報致します』

あまりの慘ましさに胸を衝かれました私は、その印刷されてありますお葉書を默つて視つめてをりました。玄關の上り框のうへに佇みながら。

『この方はどうなさるのでせう。私たちが、もしさうなつたときに、どうすればいゝのでせう。いつどんなことが起きるかもかりませんもの。……大香さんが何と仰しやつても』

なにかを憚つて囁くやうな妻の小聲を、わたくしは聞きました。

『さう、ほんたうに樣々な事實がある。然し、あれを見たり、これを見たりして、まとめようとするならば、際限はない。愚かなことだ。客觀と假想とは縺れるばかりで、なんにもならなかつた。自分の上に眼をあけて、まかしきつて往かう。まかしきつて、手ばなしで』

『でも子どもたちや私たちが、病氣かなにかに成らぬとはかぎりませんもの……』

『なつた時でなければ、なんとも言ひ得ないではないか。わたしに最も愚であつたことは、他のうへを、とやかうと眺めたり考へたり論じたりしてゐて、かへつてそのために自分は動かずにゐることだつた。傍觀することはよさうと思ふ』

自分自身を撫るやうな氣になりつゝ、疊の上に私は上りました。妻はそのまゝ默つてゐましたが、翌日の朝に、

『昨日の玄關のお話ね、あの時ほど、あなたが冷たく見えたことはありませんでしたよ』と言ひつゝ、少し上眼になつて私を眺めてをりました。

一月がすぎました。二階の椽より遠くに眺められます大樹の

[illegible]た、先に[illegible]されて黒い夜空のそらに[illegible]えたり、[illegible]に騒ぎの
く凄いやうに想はれる研た生氣を、うち晴れた空の下に濃く吐いてをりますじ月の、十一日、午前、「中央公論」へ送るべき[illegible]黒[illegible]人についての原稿を書きつゞけてをりました私は、すこし疲れまして机の上に兩臂を載せたまゝ、その下に兩脚をのばし踵の下がわを強く疊の上に衝き立てゝをりました。そこの踵の裏の長い腱が鈍く痺れて時々に痛みを感じますために、ふとそこに氣がつきますと、踵を疊の上に立てゝは旋し動かしてみます。この時も――おまへは大地を踏みしめて歩けない人間なのだ――　踵自身が苦るしみつゝ私の全身に對して不平らしく呟いてゐるやうな空想などに耽りながら、踵をしきりに動かしつゞけてゐました時に、

『山中さん』

ゆつたりとした重い聲が下の庭の方に聞こえました。――おゝ天香さんのお聲だ――　左右の脚を一時に引き縮め、机の下より抜き出しながら胸を後に起して立ちあがりました私は、踵のすぐ上の腱に俄かに激しい疼痛を感じつゝ、階段を急いで降りてゆきました。妻は臺所の裏口の井戸がはに出てゐるらしく、部屋の中にその氣はひの無いことに何となく物たりなさを覺えながら、庭の椽さきに出てゆきました私の前に、天香さんは、白い木綿編みの[illegible]に[illegible]の全身に、烈しい午ちかくの光を[illegible]、[illegible]らし、庭のすみに跣のまゝ立つてゐられました。光潤として圓い[illegible]顔が大きな微笑にみち、さきの日の者のごとき硬さは消けてどこにも無い盡く柔かな悠寛とした立ち姿の、兩手を前に垂たまゝ逍遙するやうな氣分に溢れた天香さんの立像のやうな全身が、椽のはしに坐つてお辭儀をしました私のまへに、音もなく土を踏むで歩みよつて來られました。

『どうぞお上りくださいませ……』

親しさのうちに含まれてゆく悦びに躍りながら迎へます私をなほ深い微笑のうちに包みつゝ天香さんは椽のそばに佇まれ、

『けふはかうして……。けふは此處に……』

言ひつゝ庭の上に、子どもたちが小さな三つの瀬戸の鉢に植えておきました二三寸ほどの櫻の芽生えを眺められますと、その傍に二三歩行つて、土によごれてゐます其の鉢を、うつむいて取り上げられました。椽の下に近く、妻が用ひます小さな雑巾バケツが、水を入れたまゝになつてゐました。天香さんの筋ばつた剛さうな緒い腕が、バケツの中に深く差し入れられ、水をすくひあげては、植木鉢のまはりの土を、洗ひはじめられました。おもはず私は、

『いけませせん、天香さん、……』——この家ではよしてください。さうして、奉仕を受け得る殊勝な家ではない——

唇をついて出る言と胸とに叫ながら、天香さんの手から腕のさきに流れてゐます泥に穢れた水の滴りが土のうへに落てゆきますのを、外科の手術に割かれてゆく自分のからだの傷口を見てゐるやうな激しい痛みを内に感じながら眺めてをりました。

一つの鉢が洗はれました。掃きますよりほかに何の手入れもしてありませぬ庭の土は、小鉢のまはりを殆ど埋めてゐるのでありました。二つめの鉢が、天香さんに取り上げられました。

『どうか、ほんたうにお止しください。それよりもお話しを伺はしてください。お上りください』

天香さんの手をおさへに行かうとして、椽の下を見ました私は、むかふに離れて下駄がありますのに、——自分も跣にならう—— と想ひ椽のうへに坐つてゐます足を立てなほさうとして、踵の腱の忽ち激しい突き刺すやうな痛みに想はず制せられました時に、

『こゝのお家の家賃は何ほです』

私の方を振りむいて言はれました天香さんの充血してゐられる圓い顔に、かすかな苦笑の澁みが刷いたやうに萠しかゝつてゐるのを見ました私は、そのために不意に胸を脈されながら、

『二十五圓です』——大屋さんへのお禮です——

言ひつゝ漸く立ちあがり下駄のある上まで、よろめきつゝ短い椽を歩いてゆき下駄を穿きましたときには、ゆるやかに胸が和げられてゐまして、強いても天香さんの手を制さへようとしました否定的な亢奮は靜かに消えてゐました。すでに三つめの小鉢のまはりを、きれいに洗つてしまはれました天香さんの、すぐ傍に亂れのびてゐます雜草を抜きとつては根を振つて、土くれをおとしてゐられます横に、わたくしは踵のうへの痛さを忍びながら佇むで天香さんの蹲まつてゐられます全身を眺めてをりました。——いけない、いけない、が、どうすることもできない——とりかへしの既につかない事を今さらに申しわけするやうに、私もうつむいて雜草に手をかけました。

この日の五日まへに、銀座の警醒社書店に行きました時、天香さんの「懺悔の生活」が店の上に新しく積まれてあるのを見ました私は、——後の日の記念のために天香さんから頂かう、——と、その一冊を手にのせて、顫へるほどに烈しい讀みたさにそゝられながら、強いてそこに置き、そのまゝ名ごり惜しく歸つてきました。今、天香さんのそばに雜草を抜きとりつゝ、

『このまへ警醒社で、御本の出ましたのを、ちよつと見せてい

たゞいてました。天香さんから頂かうと思つて、貰はずにきました』
『さうですか。よろしうございます』
『美しい綺麗な装釘なので、天香さんの御本にしては何だかお似あひなさらない表装のやうな氣もちがしました』
『はゝゝゝ、本屋さんにな、お任せしてありますので、廣告にもえらいことを書かれて』
『廣告で見まして、どうぞ多ぜいの人に讀まれますやうにと家内もいつしよに願つてをります。私にも御本を少し分けさせてください。私のものを極まつて讀むでくださる人にお分けする爲に圖書組合に入つてゐますから、その人々に御本をお勸めしませう』
『ありがたう……。さうですか、圖書組合に。へええ、春秋社の方にさう申しておきませう』
そのうちに庭の上が拭はれたやうになつてゆきました。拔かれた雑草が、二人の足もとにかためられつゝ、
『すこし外のはうをさせてもらひませうか』
『もうお上がりください』――もう十分です、天香さん――
『さあ、このはうが氣楽です』
門の外の小路にそふ小さな杉の生け籬の下に、天香さんの後について導かれるやうに門を出ました私に、妻がどこにゐるかに惑ひながら、
『みゆきさん、みゆきさん、ちよつと』――來りて見よ――
臺所の方をむいて叫びました。そこの生け籬のはしの裏口に、やがて走るやうにして出てきました妻は、天香さんが低くうつむいて草をむしつてゐられますのを見ますのと同時に激しく胸を搏たれたやうに立ちすくみました。そのまゝ、
『…………』
もの言はずに唇のみを動かし、そのまゝ胸をさげてお辭儀しました。
『このあひだは、えらうお世話になりまして』
『はい…………』妻はしばらく髮をさげて佇むでゐました。
ほそい杉の幹のあひだの堅い土のうへに、もつれあつて密生してゐます小さな草の緑が、天香さんの指さきにむしられて、路のそばに集められ、私もいつしよに眼のまへの草の葉をつみとり、妻もやがて裏口の方に際だつて伸びてゐます長い草の莖に指をかけてをりました。
『天香さん、これができない人にはどうなさいます』
『さあ、人々には、かうしながら道を傳へるなら傳へるのでせうな。キリストもすべてを棄てゝ我れに從へと言はれた、その

キリストは棄てゝゐられた。それで道が傳へられてゆきます。ちつとも議論は無いので……』

よく晴れてゐます眞晝の直射光が、三人の背なかに暑さを流し、私の胸はしつとりと汗に濡れてゐました。

『……議論はなしに、かうしてゐるところから道が自然に説かれてゆきます。もし言ふならば、これが道ですと言ふより他はありませぬ。なによりもかうしてゐる時が、いちばんいゝ氣もちがします。これが私の仕事です。自分の家に歸つてゐる氣もちです。なんとも言へない、ありがたい、うれしい、……』

小聲に靜々と言はれつゝ草をむしつてゆかれます天香さんのそばに、默つて頷きつゝ私も手を動かしてをりました。妻が裏口へ入つてゆき塵とりを持つてきました。三人して草を寄せては塵とりへ入れました。さうして、天香さんが立ちあがられました。わたくしも立ちあがつて天香さんの胸のあたりを見ました。このときに、なにの礙りも無くて大きな自然と一つに融けてゐるやうな人を、わたくしは俄かに眼の前に見ました。

『天香さん、……あなたにこのまゝ抱きつきたい氣がします』

嘆くやうにおもはず私は言ひました。暢びく\と微笑しつゝ天香さんは半眼に私を眺めながら、そのまゝ土にまみれた兩手を垂れて立つてゐられました。

この時に、前夜から家に泊つてゐられました高等商業學校の増田菊松さんが、近くの郵便局から歸つてこられました。それを小路のむかふの上に見ました私は、手をあげて増田さんを招きました。おほきく頷いて増田さんは肩を少し斜めにして、なにが起きてゐるのを訊ねるやうに急いで近づいてこられました。天香さんと増田さんとを紹介しました私のそばに、増田さんは頬に充血して硬く佇み、瞳を俯せて、天香さんの跣足のまゝに脛から下の露れてゐるあたりを、強く視つめてゐられました。その視線に牽かれて私も天香さんの足を眺めました。右の足の指の一つが、尖より半ば斷りとられたまゝに短くなつて、そこに黒い土が、その兩側の他の指さきに挾まれてゐるやうに見えてゐました。その指の切斷部に天香さんらしい特殊な既往の事實が何等か含まれてゐるかのやうに、ひそかに想ひつゝ、

『入りませう』

促すやうに先きに立つて私は門の入口の方へ歩きはじめました。

株のはしに、三人が腰をおろし、天香さんは土のうへに兩脚を垂れ、やがて右臂を株のうへに凭せかけて、上半身を斜めに

懇實と膝のそばに降ろしつゝ、
『あゝ今日は氣もちよく寄せてもらひました。先日から宣光社のはうの用で東京の方々に寄せてもらひましたが、ほんまに火が燃えてゐるやうですな』
『なにの火です……』
『え？炎々と燃えてゐます。ほんまに三界は猶ほ火宅の如しと言はれたとほりですな。大きな邸が二重にも三重にも抵當に入れられてあるなどゝ……。このまへ着てゐましたセル、あれでまあ何ぼ命をちゞめたことやら知れません、軀が動かしにくうなつて、氣隙づかしうて、氣はづかしうて、えらいめにあひました、十七年ぶりにセルを着て、……宣光社の用で實業家の方々に會はせてもらひましたが、まさか跣足で門の外に立つて澁澤さんこゝまで降りて來てくださいとも言はれません。やはり應接室へ連れられて行かねばならん。あのセルは、かないが拵へてくれたのですが……』
わづかな澁い、はにかみが、天香さんの顔に流れました。
──あゝ天香さん、あなたさへも、すでにセルが──　おもはず私は内に叫びました。──まして私には、生きてゆくことは、……かたちの外の十字街頭は、生きるに易くないではありませんか──

『──あれを着て應接室へ連れてゆかれて一燈園のことを訊ねられます時には、一燈園の人々は斯う、してゐられますと言はねばならぬ。セルを着てゐるうちは、ほんまに地獄でした。あんなえらい苦るしいめに會ふたことはありません。なんぼ命をちゞめたことやら……』
歎くやうに述懐されます天香さんの、わたくしの顔を眺められつゝ、さながらに辛い苦笑を今は滿面に帶びてゐられます眉のあたりを、おもはず拜みたいほどに尊く私は見つゞけてをりました。──見よ、天香さんの魂しひと、自分の魂しひとは、かくも違ふ。先天的に違ふとしか思はれぬ。たづねれば誰れも同じものと天香さんは答へられるであらう。然し、違ふ。現實に違ふ。たとひ外の十字街頭へ自分が立つたとしても確かに違ふとしか思はれぬ──　さうして、
『家内は私に十字街頭に行きたければ、すぐにでも行け、子どもたちは引き受けるからと言ひます。わたくしは行くならば四人そろつて行くのでなければ、道ではないと思つて居ります。このあひだ倉田さんをおたづねしまして、教へていたゞいてきましたが、より大きく自分を生かすことが、より大きい奉仕の道ではないかと想はれます。魂しひの内へ十字街を植えつけられます信仰の進展、こゝに凡人の道があるやうに想はれます』

倉田さんのお宅にて言ひました同じことを、さらに言ひつゞけてをります私のそばに、妻が三つのお椀に汁粉を盛りました角盆と、大きな土瓶をさげて椽のそばに出てきました。私が言をきりました。天香さんが、かすかに頷かれて、

『なん時でも家庭ぐるみで一燈園をおつかひください。家庭ぐるみの方がよろしい。今の、内の十字街、外の十字街は、漸と頓とのちがひですな。漸でもよろしいが、いちど頓へ出てから漸へ還つてくるので、はつきりします。頓へ出てみて、ほんまの味がわかります。そこから自然に漸へ還る。さうして漸に還つてゐるうちにも、とき／＼十字街へ立つて頓を味ふ。あなたは漸でよろしいが、いちど頓へ出てから還つてきたのでなくては、かうして家にゐるまゝでは、人が承知しますまい、漸でも障りのないことを、頓のうへから一度でも證據だてんことには。わたしは經濟の方から出たので、生きかたが、はつきりせんことには、得心がゆきません……』

――生きかたが、さう――　強く頷かされました私は、

『え、地上の生に交渉のない信心には、どうしても今まで缺陷が感じられまして……』

と、言ひましたときに、天香さんの瞳が、頷きに充ちた光に濃く輝き、私を抱きこむやうに視つめられて、そこに、

『……………』

なにかを言はうとされながら、そのまゝに動きかけてゐる唇が、開かれるのを一途に私は待ちうけつゝ默つてをりました。その氣はひがそのまゝ緩く消えてゆきました。

『どうぞ召しあがつてください』

『ありがたう……』

『增田さんも』

『え。……』

汁粉を啜りつゝ、天香さんは大きく微笑され、

『中桐さんもしきりに出たいと前から言はれます。けれども、あなたは出なさらないでもよろしいと止めてゐます。漸でもう出來てる方なのだから。××さん（忘れました）も「在家出家」と言はれます。好え言……が、かう行きづまつてゐます不安な時に、漸では解決のつかぬことが、いつぱいに有りませう……』

椀に茶を入れてすゝぎつゝ、きれいに飲み干されました天香さんは、やがて右の臂を再び椽に俯せ、そのうえに上半身を斜めに凭れさせて、午の碧りに燦いてゐます空を、向ひの家の屋根の上に、ゆつたりと仰ぎ、眸を細めて、舒び／＼とした豊かな極めて調和した氣分のうちに、しづかに暫く默つてゐられま

した。――臥像、大きな崇厳な悠寛とした臥像、どこにも圭角なしに圓く彫りあげた―― この感じにつゝまれながら、そこに藝術的な純な鑑賞的情調をも催されつゝ、さうして美しく、天香さんのさうした姿を、しばらく私は眺めてをりました。

――やがて天香さんは、私たちに手がるく暇を告げて歸つてゆかれました。

一時間ほどたちました。私たちは、なほ椽のうへに話しつづけてをりました時に、門の戸をあけ、前のとほりの白い木綿縮みの筒袖すがたの天香さんが、一人の小僧さんといつしよに入つてこられました。

『春秋社からな、本をもつてきてもらひました。とりあへず十冊といふことで……』

『ありがたうございます。早いのですね。天香さん、一冊に何かお書きになつて下さいませ』

『さあ、……よろしい。書かしてもらひませう』

妻が硯箱を持つてきました。椽のはしに腰をおろされ、子どもたちの使つてをります墨によごれた細筆の軸を、靜かに取りあげて磨り残されてゐます墨をそのまゝ含ませ、小僧さんが椽の上に積まれました「懺悔の生活」の一冊をお手にとられ、表紙のつぎの白いページに、

我僧不語　と草書に、年月日と、署名と、私の姓とを一氣に筆を上下して、

『へ、それでは』

顔に充血して笑ひつゝ、それを私に渡されました。――我れかつて語らず、さう、いかにお話をうかがつたとしても、天香さんの世界は私に解らない。たゞ内なる十字街のみだ、わづかに、自身の裏にも周圍にも感じられる。このまゝで碍り無き一道を進ませられて往く如く自分はされてゐる。すくなくとも今のところは―― 「我僧不語」の四字を眺め、更に天香さんの笑顔を私は仰ぐやうに見ました。

門の戸があき、富翁さんの妹さん――つた子さんの圓い瞳が、わたくしを見て會釋せられました。靜かに椽より立ちあがり微笑しつゞけて天香さんが、

『えらうお邪魔をいたしました』

ゆつたりと庭の上に立ち、迎へにこられましたつた子さんといつしよに、門の外へ、さうして小路の上を歩いてゆかれました。門の前に佇みながら私は、天香さんが白木綿の手拭ひをフワリと頭に掩ひ、そのまゝ跣足に土を踏むでゆかれます後姿

を、しばらく見送つてをりました。
鈍き記憶のあやまり、脫漏、殊に、天香さん倉田さんその他につき、獨斷に叙述しましたこと、これらの爲に免れがたき書き誤りもあることを心配しながら、たゞ一篇の報告的告白書として、以上を記憶のまゝに書きました。

生死巖頭

井上啞々

長壽の例を惹くに、鶴の千年、龜の萬年、東方朔の九千歳、島浦太郎の八千歳を說く。之を朝菌の晦朔を知らず、蟪蛄の春秋を知らざるに比せば、壽夭同日の論に非ずと雖も、一度天地の悠久なるに想到せば、生命の倏忽なる、殆ど言ふに足らざる也。誰か息災延命を冀はざる。而も秦始皇は不老不死の靈藥を求んとして得ず。生ある者の必ず滅するの理を知る者は、死を見て歸するの覺悟なくんばあらず。敢て腥坊主の出鱈目を眞に受け、前世の罪を考へ、來世の福を想ふ可からず。身在る處卽ち淨土たり、魂の赴く處卽ち極樂たり。

漢の武帝は少壯幾時ぞ、老を奈何と嘆じ、陶淵明は形を宇內に寓する復た幾時と慨き、蘇子瞻は蜉蝣を天地に寄す、渺たる滄海の一粟、吾生の須臾なるを哀しみ、長江の窮り無きを羨むと大息し、李白は夫れ天地は萬物の逆旅、光陰は百代の過客而して浮世は夢の如く、歡を爲す幾許ぞと詠嘆し、其他和漢の詩人墨客孰も人生の朝露の如くなるを悲み、北邙一片の烟となるを慨き、松柏も摧て薪となり、桑田も變じて碧海となり、功名富貴長へに在らざるを痛嘆せさるなし。何ぞそれ多恨多感なる。而も物外に超然として天命を樂み、徒に焦燥せさる所以のもの、夙に人生の無常を解し、死の逡に免れざるを覺り、而して之を恐さるが故なるのみ。

病は死の先驅にして、醫藥は之を防ぐの郎黨なり、病の毒ゆるは郎黨の功にあらすとせす、而も死を免れたるは蘇生の術あるにあらすして、死期の未だ迫らざる也。薄志弱行の徒、動もすれば生の難きを厭ひ、死の易きに就くは、かの死を鴻毛の輕きに比して御馬前に討死し、或は君辱められて臣死すの義を重んじ、或は身を殺して仁を爲すの類と位を一にすべからず。又法の爲めに火に入り、道の爲めに食を斷ち、誼の爲めに舌を嚙むの類は勇者の行爲にして、生耻を曝すの徒と列を與にせさる也。

自ら强いて死を求るの動機一ならすして、自殺の法も亦擧げて數へ難し。水に投ずるもの、毒を服する者、首を縊るもの、喉を突く者、腹を切るもの、皆その好む所に隨ふ。水に投ずるに海あり、川あり、池沼あり、井戸あり、はた糞溜あり。冬に尠く夏に多きは、死にも仍寒暑を選ぶ人間自然の情嘘ふ可し。毒を服するに鴆毒あり、斑猫あり、岩見銀山あり、黑蜥蜴に蜘取蜘蛛あり、モルヒネ漸く廢れて猫イラズ頓に盛なり。首を縊るに樹の枝を選ぶと、梁を用ふるとあり。喉を突くに短刀あり。出刄あり、剃刀あり。腹を切るに九寸五分あり、切腹に方式あり、左の脚腹に刀の切先を當て、右に引きて刎ね上ぐること一寸許り、これと同時に後に介錯ありて首を打落すと。或は曰ふ刀を腹に當て蚯蚓腫れ程に切るのみと、されば扇子も同じとて扇子腹あり。或は腹を切つて自ら臓腑を引摺り出すの猛者あり。腹を切つて後の長物語、その我慢强きこと勘平の如き正に世界に冠たり。臣の君に倣ふて共に死するを追腹と言ふ。又鐵砲腹あり、鎌腹あり。

自ら命を斷つと、過失に死すとの別ありて其形式同じきあり。溺死も其一也、轢死も其一也、毒殺も其一也。絞殺も其一也。これ法醫學者と雖もその鑑別に苦しむ處なりとす。過つて命を殞す者甚だ多く、其種も亦尠からず。電車、自働車に轢かれ、馬に蹴られ、牛の角に突かれ、犬に嚙まれ 天狗に股を裂かれ、蟒蛇に呑まれ、其他猛獸怪鳥に襲はれて死する等孰れも割に合はぬ死方にして犬死の語當れり。地震の爲めに壓死する、落雷に感電し黑焦となつて死する、安火を轉覆して燒死する、瓦斯の栓を止むるを忘れて窒息する、餅の咽口を塞ぎ、辨當の毒に中り、忽ちにして幽明境を異にする、死生天にありなどゝ諦め難く、定めて三途の川に渡錢貨無く、六道の辻に彷ふなる可し。決死隊に加はりて敵彈に命を殞せば、殊勳者として名を青史に垂れ、年金と金鵄勳章に一家は光榮と安樂に生くるに比し、幸不幸實に雲泥の相違也。醫者の投藥を誤り、注射手術を過まりて死するは、醫の撰擇を忽にしたる自己の不明に基き、古者、

行者の妄説を過信して命を殞すに至つては、愚及ぶ可からず。強盗に絞首を掻かるゝは命の安賣之に過ぎたるはなく、刺客の兇刃に斃るゝは寧ろ死花を咲かすものなり。女と合意の心中を遂ぐるは、二世を樂む空想に生きんとするにて、往生の本義に協ひ、餓死と凍死は貧の極致にして、隱居の湯氣に上り、大講の腎虚に逝くは共に本望なる可し。

その罪を悪んで而もその人を悪むが故に刑罰あり。刑罰の重きを死刑と爲す。打首あり、磔刑あり、火炙、鋸引、牛裂、釜茹の如き孰れも殘虐目を掩はしむ。今は軍隊に銃殺あり、監獄に絞首あるのみ。官の刑に止まらず、人を生埋として意趣を晴らし、鏖殺に憤懣を散ずること、恰も冥土に於ける針の山に亡者を追ひ、血の池に陥るゝ所業に異ならず、地獄は即ち眼前に在り。人を殺すに慘忍獰猛、鬼神を避易せしむるに反し、自ら死刑に臨んで顔色蒼白齒の根合はず、卑怯見るに堪ざるは如何。最後に當りて題目を稱へ、念佛を唱へ、只管佛陀の救ひを求めんとする、亦人間の末緒を露骨に示すもの也。人の將に死せんとする、其言や善しと。善きに非ず、自ら顧みて悔悟に堪へざる也、氣力衰えたる也。

縫針小指を刺し破傷風となりて死すあり。双腕を切られ、兩脚を斷たれて猶命の全きあり。阿彌陀のお迎來らず、閻魔のお召も亦ら來ず、徒に長生して一家の指彈を受くるに反し、一族の期待に背きて夭折蘭摧する秀才佳人尠からず。和漢の英雄九死に一生を得さるはなく、その顯なる者彼に漢の高祖あり、我に徳川家康あり。かの淫を鬻ぐは生か死かその一途を選ぶべき斷崖に立つ也。驕奢淑女の發企せる世帶の會の如き飯事に非ず。人女の賢なるは牛を賣損ひ、女の愚なるは鳶に油揚を攫はる。人の妻を盗む男は稀にして、人の夫を奪はざる女は尠し。緣日の買物を喜ぶは貪婪なるが故にして、晶目を購すは卑吝なるが故也。迷信子を殺して覺らず、淫奔十二にして春を解し、十三にして子を生むを知る。女は生の貴重なるを知らざるが故に死の嚴肅なるを解せず。

死んでも死に切れざるもの、現世に執着あるもの、死して幽靈となり、陰火を作ふて朦朧として出づ。菅公は雷神となり、白石は閻羅王たらんと欲す。憤怒、天狗となるものあり、隱逸、仙人となるものあり、嫉妬の爲めに大蛇となるものあり、[illegible]となるものあり。蝦蟆となつて妖術を行ふ者あり。松、人と顯じ、梅櫻竹柳も亦人と現じ、山氣凝つて人となり、寺の精も亦人となる。抑も人の草木となるか、草木の人となるか。賴豪は鼠と化け、食客は馬となる。白犬は人間に近く、船頭の子は河童の如し。蜘蛛は燭光を偷し、海坊主はお百に憑く。狸の大入

道となり、或は茶釜となるは愛嬌ありと雖も、狐の年數を經て白狐となり、黒狐となり、金毛九尾となりて神通自在を得、人間に仇を爲すは憎みても猶餘りあり、而も葛の葉に姿を借り、忠信、蘭平に身を藉りて人の爲めに誠實なる、その情最も憐む可し。怪猫の魔手戰慄すべしと雖も、女性の怪腕に比すれば遙に及ばざるの感あり。何となれば怪猫人を噛むと雖も、家を滅すに至らず。女性の魔力は城を傾け、國を傾くに非ずや。

古今の史乘を繙くに、殆ど人類爭鬪の事蹟ならざるなし。一家の爭に非ざれば、一族の爭なり、一族の爭に非ざれば一國の爭なり。或は內國と外國の爭也。一家の爭に兄弟相擊つあり。夫婦相戮し、親子相食むあり。相爭ひて相殺さんとするは、卽ち他の利を己に奪はんとする也、利慾に非ずんば色慾也。然れば平和とは畢竟空想に過ぎずして、利害相反するに及んで相戰ふは遂に避く可からず。禍因の裏には必ず女子あり、男の女に鼻毛を延ばすが故也。夏后の國、遂に反つて商となるは、末喜が荒亂の致す處也。妲妃炮炙を笑ひ、聖人の心を剖いて之を見る。幽王は褒姒の笑を買ふて其祀を滅す。玄宗は子の妃を奪ひて胡に奪はる。平家の源氏に滅ぼさるゝは淸盛の常磐に溺れたるが故にして、源氏の正統三代にして絕えたるは、賴朝の政子の尻に敷かれたるが故也。

今の世は親と雖も子を殺さば刑を免れず。昔は我子を殺すは親の勝手にして、妻を切るは夫の自由なり。主君の身代りに肉親を殺すは忠臣の龜鑑として賞揚措かず。臣從を制敗するは主君の隨意にして、臣として君を弑すは大逆として斷ぜらる。惡侍が新刀の初味を試さんとする辻斬は、町人百姓を恐怖せしめ、農學士山田憲が奸商鈴木辨次郎を慘殺し、首と胴と四肢を解斷せるは、世間を震駭せしめたり。忠臣孝子は敵打に一生を沒頭して顧みず、果し合ひは武士俠客の間に行はれ、決鬪は獨逸の靑年に行はる。保險金欲しさに妻を殺し、密通の邪魔に夫を殺し、不義の子を生み、處置に窮して之を壓殺する、或は篤學者を惱殺する、或は無智の少女を悶死せしむる等文華燦然として日に輝き、而も蠻風陋俗の月に滅びざるは如何。

抑も刄を喉に擬して而して死せず、毒を仰いで死せざるあり。朝にビーターを飮みて生を娛み、夕に忽焉として頓死するあり。生死の測る可からざる此の如し。されば常に生死嚴頭に立つの覺悟ありて、始めて悠揚として生を娛み、從容として死に就くの大自在を得ん乎。

父と母との輪廓

大泉黒石

はしがき

さればそも、やがては三十年の昔とならう時代に天の原ふりさけ見れば幽かなる西海の果に清國と云ふ大陸があつて、日本と云ふ國と戰つて敗けたさうだが、その敗ける前々年にそこの太沽港では砲台増築に掛つてゐた。いざと云へば頭から煙火を浴びなければすまぬ目鼻の間にあつた天津と云ふ市に露西亞なる國の領事館があつた。私の母がそこにゐた時分の話を一寸書いて見たのである。戰爭のことではない。(以上)

A

「あの袷はやつぱり盜られたのだ!」

なるほどさうきめるまでには隨分とも探し廻つたり考へ込んだりしたものだがさて、お惠の着物はいよ〳〵確かに盜みとられたに相違ないと云ふことになつて彼女が先づ嫌疑をかけたのは厨房夫の車侯と云ふ老人と何呂と云ふ門番であつた。と云ふのは、このだゝつ廣い邸の中に寢起きする家族がお惠と云へばお惠の夫のステパンと、ステパンの母親のエレーナ・アレキサンドローヴナと、五年も前から傭つてゐる車侯に限られてゐた。そしてそれ以外の人々と接觸する機會と自由とを持たないお惠としてはこの場合に目星をつける誰をも持たなかつたからだ。かくてこの部屋の一隅の洋箪笥の斗抽から放り出された着物、帶、長襦袢、襯衣、露西亞服などが、それは恰もこの支那人の市の祭典の花輿に使はれるところの美しく彩られた大蛇の腸のやうに、彼女の身のまわりに蜿蜒と散らかつてゐる中に彼女は全くがつかりして坐つてゐたのであるが、警戒の嚴重な家の二階にあつた彼女の部屋に外部から忍び入つて持ち去られた形跡はまるでないし、いや、それは到底想像すらつかぬことでもあり、ことにまた彼女がこの家に嫁いで來た日から幾月になるか兎に角一度も戸外へ踏み出すの用のない彼女にそんな油斷と隙のあらう筈がないと考へて來たお惠の心は勢ひ邸うちの人に

して秘かに烈しい捜索を始めたのではあるが、それにしてもほんの五日ばかり前に洋箪笥の中にしかと蔵ひ込んだ筈のものが、どうして失くなつたか？ほんたうに自分はあの着物を此處へ入れたか？置き場所を忘れたのではないか？實はさう考へると彼女は、その着物を手に入れた晩のことから記憶を辿つて今日までの生活のなりきたりをも一度考へ直して見るのだがしかし、それも一體何度くりかへされたことであるか？とお惠は思ひ乍らも、つく／＼考へ直さずにゐられないのであつた。

さるほどにそわつくお惠の目、お惠の心に映るのは、何の支度もなく、一枚の着替へもなくて恐ろしい危険を冒し乍ら此家へやつて來た彼女自身が、その後間もなく、と云つてそれがつまり五日ばかり前の夜になるが、慌しい、しかし、どつと押しかけるやうに襲ふて來た心強い喜悦の中に、彼女の故郷から、その故郷に残された彼女の母親からはるばる送り越した彼女の荷物をほどいた自分の姿であつた。いかにお惠は彼女の彈力のある潤みを帶びて、そうして、「自分は知らぬ土地に、到頭やつて來た！けれども自分はまだ／＼若い年なのだ。女は人間は、若くさへあれば、どんな沙漠のまんなかにゐても、退屈も淋しくもないのだ！」と云ふやうに活々と輝いた目を皿のやうに見張つて、手許に屆いたその荷物を一一調べたか？お惠の部屋の、お惠の卓子の上には彼女が少女時代——と云つて彼女はまだ十五になつたばかりではあるが——からの衣裳や本や小道具や小さい人形までが雜然と列べられた。その時姑のエレーナお婆さんは云つたのである「どうだらう？イヴノヴナ達にもね折角だから見せてやらうぢやないか？」と。イヴノヴナと云ふのはお惠の夫のステパンの書記を勤めてゐた露西亞人の妻なのだ。するとお惠はさも喜ばしさうに「あなたさまのいゝやうに」と云ひ乍ら、おや／＼まあ何と云ふ素張らしい心の緊張だらう？何と云ふ目ざましい幸福なんだらう？——しかし、何と云ふ悲哀がすぐあとから追つかけて來るのかしら？と、そんなことは勿論思ひつかう筈がない——のだから、お惠は姑のエレーナお婆さんが、さて、戸外へ出るのだと、兩方の肩から、胸の上にかけて涎掛け見たやうなびら／＼したレースの白布をかけて、大きな、茸の笠のやうな、下袴を摘み上げ乍らイヴノヴナを呼んで來るのを待つてゐたのであつた。イヴノヴナ夫婦の家はこの邸と日本租界との間にあつた。そこからイヴノヴナの亭主は毎日此處へ通つてゐた。お婆さんのエレートナが出て行くと入れ違ひに車侯と何呂がやつて來た、そのうしろに彼女の夫のステパンがにこ／＼して入つて來た。そして、彼女の荷物を珍らしさうに見てゐた。間もなくお婆さんのエレーナがぶん／＼憤つて歸

つて來たのである。そして、イヷノヴナは亭主と一緒に散歩へ出掛けてゐないと云つた。

「どこへ行つたのでせう」

とお惠が尋ねた。

「紫竹林だらう？あの人達は西洋人よりも支那人が好きなんだからね。」

とステパンが云つた。

「紫竹林だらうが支那芝居だらうがそんなことはどうでもいゝよ。」とお婆さんは折角の親切が張り合ひ拔けして、無駄になつたのを怒つてゐるらしかつた。そして云ふのだ。

「さうさ、あの若夫婦のことだから、ことによると地球の外に出掛けるかも知れないよ。それもいゝがね。あの人達がいつものやうに、あの薄暗い露次の中で何をしてゐるかと思ふと、ほんとうに恥知らずめ！焦げつくほど顔を見つめてやりたい。大體あの夫婦を見ると、いつもさう思ふがね、人間に恥つてものはありしないつてね？いくら結婚したばかりつて、あゝ犬のやうにくつついてばかりゐなくつてもよさゝうなものだ。ほんとに見つともないイヷノフの御面相でございます！」お惠とステパンは「そらまた始つた」といふ風にクスリと笑つた。そして、しかし、何となく擽つたい氣持ちを覺えたが、口やかましい、道徳屋のお婆さんは、それきり默り込んで、そこに廣げてある縮緬の長襦袢などを引ひくり返しひつくり返し丁寧に眺めてゐた。それから、そこに門番の何呂と厨房夫の車伕とが、ニツケルの鼻眼鏡をかけたり脱したりして、さも物欲しさうに立つてゐるのに始めて氣がついたやうに直ぐ追つ拂つて了つた。

それから、

「これはどうです？ステパン」

とお婆さんは、大きな連翹の花模樣のついた派手な袷の袖と袖とを摘み乍ら、自分の體にぴたりと合せてにこ〱笑つた。それは、いゝ！とステパンも云ふのである。すると

「それはさうでせうとも、マツーシユカ。妾が大好きの着物なんですもの」

と云ひ乍らお惠も笑つた。ところで、その荷物は、彼女の夫や姑の目の前で、綺麗に疊み直して一つづゝ洋簞笥の抽斗に入れて了つたのである。そして差し當り必要がなかつたので、今日まで一度も出して見なかつたが、その荷物の中にあつた一本の龜甲の髮釵を、實は門番の娘にやるつもりで洋簞笥をあけた彼女はいつの間にか、その連翹の花びらの縮緬の袷がなくなつてゐることに氣がついた――と云ふのはそれから幾日目かの朝であつた、お惠達は中庭に飼つてある家鴨の鳴聲に驚いて起きた

のである。見知らぬ人間の顔を見ると家鴨は頓狂な聲を上げ乍ら庭中を駈け廻るので、こうした邸にはどこでも番犬の代りに飼つてあつた。それは煙のやうに青い夜霧が邸をめぐる時刻であつた。お惠達は大露臺に駈け上つた。夜明けに泥坊でもないと云ふので安心はしたが、さて大露臺の下を覗いたときに大きな男が掴み合つてゐる有様を目撃して、それが車侠と何呂の二人だと解るまでの數秒と云ふものは隨分とも氣味が惡ひ思ひをしたのである。何呂と云ふのは、車侠の甥で、お惠がこゝへ來る前から門番に傭はれてゐた支那人であつた。そしてこの邸の門と相對して彼にあてがはれた箱見たやうな家があつたのだ。

「看門子！どうしたんだ？」

とステパンが怒鳴つた。何呂はぎよつとしたやうな顔つきで車侠の手を振り切らうとした。車侠はなか〱放さうとしない。すると、ステパンは厨房の戸口からばた〱と駈け出して行つた。そして

「どうしたのだ？」

と云ひ乍ら車侠の肩をどんと突いた。彼は吃驚して跳びのいた。

「大人、何でもないのでございます。」

と何呂は恐縮した。すると車侠がいきなり

「何でもないことがあるものか。實に容易ならぬことを云ふ奴でございます。私は此奴を引つ張つて打官司へ掛け合ひに行くのでございます。さあ來い！」

と車侠は相手の男を捉へやうとしたが、何呂はニヤ〱笑ひ乍ら素早く跳びのいた。「畜生め！宅鬼野郎が太い奴でございますよ」と車侠は地べたに落ちてゐた鼻眼鏡を拾つた。そしてそれをしやくんだ鼻の上にちよきんと乘せて「おや老太太。お早いお目ざめでございます。お陰さまで今日もまあ何と云ふ結構でございませう？太太！とんだお騒がせをいたしまして何とも早相濟まぬことでございます」と大露臺を仰いで挨拶するのである。

それから彼は、その相濟まぬ次第に就て、

「彼奴の娘が病氣なのです。へえ。私が寢込みに彼奴がやつて來まして藥を買ふから金を貸せと云ふのです」と饒舌り出して、ふと相手の顔を見やうとしたが、何呂の方では、きまりが惡いと見て家の中へ引込んで了つた。

「そこで、私が云ふには、ふん、それは心配なことだとね、太太、大人。お聞きなさいまし。」それから車侠の話と云へば乃ち金は貸すけれども、宗旨が惡い。車侠は向ふ見ずの熱心な基督信

者であるから何呂一家のやうな正體の知れない佛徒に藥代を立て替へてやつても要するに病氣には効くまい。それゆゑに、これは一先づお斷りした方がよからうと云つたさうだ。すると、何呂が忽ち怒り出して、お前は西蠻にだぶらかされてゐるからそんなことを云ふのだ。手前の甥の一人娘が唸つてゐるのに宗旨も糸瓜もあるものか。お前達はしよつちゆうその手で支那人をクリスト信者にするのだらう。その目的は信者が死んでから、心臟と目玉を刔り取つて丸藥でも拵へるに違ひない。世間は皆さう云つてゐる。と先づこの邊まで來ると今度は愚直な車侯老人がむきになつて怒り出して、そんならその證據を見せろ！世間の誰がそんな無茶なことを云ふのだ、貴樣は自分や、こゝにお出で遊ばす御主人達に對して實に容易ならぬこと吐したが、それに對する罰は別として、クリスト教が死人の目玉を刔りぬくことが事實なら自分達は嚴重な罰刑をば受ねばならぬし、それが嘘だとすれば、そんな不埒な流說を吹聽して廻る世間をその儘放つとく譯に行かないから公平な裁判をするために官司まで來いと云ひ乍ら肝腎の娘のことはすつかり失念して、お伽噺見たやうな喧嘩を始めてゐたのでございますと云ふのであつた。而も双方とも必死の眞劍で、心臟と目玉に關する姦しい押し問答だつた。それはお惠の夫のステパンが中に入つて納まりがついたのであるが、その何呂の娘が病氣だと云ふのは正に事實であつた。何處が惡いのかまるで、見當がつかないやうなぼつとしたもので、熱の高いところを見ると、半年ばかり前にこの邊一帶に猖獗を極めてゐたらしい疱瘡ではないかしらとお惠達は云ひ合つて、そして、ひどく怖れ出した。

「今のうちにこつそり消毒したらどうでせう」

とお惠は云つた。

「でも、も少し容子を見ないとわかりませんからね。」

とお婆さんのヱレーナは答へた。しかし、流石に、どうもさうらしいやうな口吻を洩らして、彼等の不潔な生活を罵つたこのお婆さんのヱレーナもステパンも露西亞人だつた。ステパンはこの支那人の街に派遣された領事だつた。だから。支那人と露西亞の間に起るところのどんなに些細な、そして取るに足らぬ紛擾にでも、ステパンは口を出さねばならないのである。そんな小五月蠅い仕事の外にも、もつと込み入つた役目を持つてゐた彼は殆んど毎日のやうにさまざまな面倒を擔ぎ込んで來る客に接してゐた。そんなことで、家族の者は何呂一家につまらぬ病氣でもさるれば忽ち迷惑するのである。お惠たちは丁度瀕死の病人が生きるか死ぬかの境に迷つてゐる有樣を見守るときの心地で、いや、それよりもずつと恐ろしい結果の豫想の中に、靜

かに病人の容態を識つてゐたのである。だが、朝は自ら甦になり、自ら夜になり、げにや翌日の晝になるまで警戒は怠らなかつた。何呂は娘の側から離れなかつた。何呂の母親——陳都賽と云つた——このカラ〳〵に乾干びた老軀の五體のどの邊にそんな油のきれた魂があるのだらうと怪しまれる陳都賽はまことに車佚の姉であつた——は干葡萄のやうに潤んだ目を据えて「まあ、とんでもないことになつちまつたと云ふものだ！」と云ふ風な格好をして、竹の寢台に竹の枕に仰向けに轉つてゐる孫の番をしてゐるのである、その何呂が實に悄然として領事館の玄關を訪ねたのは午後二時頃の春の日が、大露臺の柱に絡みつけてゐる野薔薇の花を赤々と染めてゐた頃だから、つまりお惠とお婆さんのエレーナがこのお婆さんの部屋——それは厨房に隣り合つてゐた——で、カチカチカチとミシンの手車を廻してゐた時であつた。

「老太太。」と何呂は慌てゝ出て行くお婆さんのエレーナに云つた。

「私は戸外へ出てもいゝでせうか？」

「何處へ行くのだい？とお婆さんは、それはどんなときにでも保つことを忘れないお婆さんの威嚴を示し乍ら、可なり冷淡に云ふのがお惠にも聞えた。お惠もあるから、のそ〳〵顏を出した。

そこに車佚も出て來た。

「綏雲寺に行きます。娘の病氣の正體が解るやうに和尚へ伺ひに行けとお袋が申します」

何呂は兵卒が上官に向つて報告する時の規律と丁寧とを、取つてつけたやうに現した。そして、お婆さんのエレーナが呆れてゐると、彼はさつさと門外へ出て行つた。ところが彼は暫くすると、蘇つた人間のやうな潑剌さで、また戻つて來た。彼の兩手には、恐らくその前の日に、ステパンがくれた金で買つたに違ひない黃金紙や饅頭や焚香の袋が小山のやうに握られてゐた。そして病人の家にずつと入つたきりなか〳〵出て來ないのである。だが、お婆さんのエレーナの部屋の窓からは、彼が何を始めたかと云ふことはよく見えた。乃ち何呂は、竈の兩側に、いつの間にそんな神樣を買ひ込んだのか兎に角二つの土神——それは美しく彩色された白粉の泥人形——の前に土下座をし乍ら、土産物をごた〳〵と列べて、頻りに黃金紙を燒いてゐた。その紙の烟が娘の方へ這つて行くところに依然として坐つてゐる老婆の陳都賽と大聲で掛け合ひを始めてゐた。そして、時々立ち上つては病人の顏を覗き込むのである。お惠には全く不思議な光景であつた。車佚は戸口に突つ立ち乍ら云ふことが

乃ち
「あの野郞の仕事を御覽になりましたか？あれが哀れな支那人の宗教でございます。」と。
　そしてニッケルの鼻眼鏡を弄くり乍ら、さも、彼自身はあんな支那人に見たくもない文明人だと云ふやうな嘲笑を浮べて、さて、また云ふ。
「絳雪寺の和尚に教はつて來たのでございますよ。乾度。でも可哀さうな奴隷でございます。何しろ黄金紙にしろ焚香にしろ、當節そんな安いものぢやございませんからね。」と。
　だが、馬鹿に元氣づいて嬉しさうに娘の容態を診てゐた何呂は間もなくまた以前の沈だ樣子に還つて、ぼんやりと土神の前に蹲んでゐた、が、突然ふら／＼と立ち上つて、おや！と思つた瞬間に泥人形の神樣をどんと床の上に叩きつけて了つた！ハナナ？と云つた鹽梅に何呂は腕組みをして思案を始めた。
「都妻の具合はどうだい。」
　と車侯が云た。何呂は伯父の方をチラと見た。その顏には、云ひ知れぬ空虚と寂莫と憂愁の影が絕望的に漂ふてゐた。
「お前は和尚にだまされたんだよ」
　と車侯がまた云つた。
「娘がいけなくなつたのでせうか？」

　とお惠は窓の中で呟いた。するとお婆さんのエレーナはそれ見ろと云つた調子で云つた。
「どうしたのかい看門子？」
　その時やつとはじめて外界から聞ゆる聲が自分の耳に應へたらしかつた。彼は遂に涙聲で叫んだのである。
「噯　噯！」と。「ハイ！イヤ！大變なことでございます！私は心配でたまりません」と。
「だからさ、どうかしたのかい！」
「老太太！私は神樣と決鬪します！」
　いかにもそれは腹の底から湧き出る悲痛な響を持つた聲であつた。お婆さんは大きな目を見張つて云ふことに、
「決鬪？」
「アイ、老太太。」
「それは駄目だ。支那の神樣だつて人間よりは强いだらうに、決鬪すれば負けるに決つてゐるだらうに、」
　すると何呂は誰に向つて云ふのだか一寸見當のつかぬ態度でべら／＼と饒舌り出すのである。
「娘の煩ひは私の行ひが氣に喰はぬと云ふ土神が妖精をやつて娘の體を喰ひ破るから起ると和尚が云ひました」
「そんな和尚の話を眞面に聞いてゐると今にほんとうの神樣の

「何を食つて都妻は駄目になるのさ！」

何呂は例の憂欝な上目をつかひ乍ら、内心ひどく怖えたやうに「ほんたうの神様とは？」

と呟いたが、お婆さんのエレーナに、それがそれ、いつも云ふやうだが、天にまします妾どもの慈み深いお父さまだと云ふくだりになると、あゝ、あれか！と云つた。それきり相手にならなくなつた。だが、しかし、頑固な彼も、こうなると、いづれ何處からか、新らしい神様を引つ張つて來なければ、このまゝでは納まりがつかないのである。と云ふのは、何呂はその時、彼が敬ひ恐れる土神に對して憤怒の絶頂にあつた證據として、お惠達の見てゐる前で、土間の天井に釣してあつた燻し肉や葱肉や、そんな煤けた食べ物を片端から引つ放づしては、片端から土神の上に叩きつけた。それから彼は息の押し詰るやうな、生暖く仄暗い悪臭のある滅落し去つた墓場と云つても構はない篭の前に、多分そのまゝ塊になつて了ふかも知れないやうな格好をして蹲つたきり、娘のことに就ては一言半句も云はうとしなかつたのであるが、さてもはやお惠たちの氣にかゝつた娘の都妻に關しては兎角議論はなかつた。どうせ、はじめから彼等が彼等を嫌ふところの西洋人の醫師に診て貰ふことを平に頑健に謝絶したのである。

かくて、都西は何の病氣だか更にいつまでも不得要領だつた。邸の人々が随分困たのは事實だが、實のところお婆さんのエレーナは彼女乃ち娘たちの生命に對して左ほどの同情と憫れみとを持つてゐなかつた、とお惠は考へた。そして、流石に不人情な老婆だ位に思つてはゐたけれども、それ以上お婆さんの態度に就て深く考へもしないのであつた。で、夫のステパンはどうであつたか？彼は病める娘の境遇にこそ同情してゐた——その同情すべき境涯と云ふのは乃ち昔、この市はづれに彼の兩親と共に牧畜に從つてゐた何呂の家に一人の戀人があつたと云ふのだ。それはこの家に買はれてゐた女奴隷の下婢だつた。

戀人達はやがて今の都妻を生んだが彼はそれをひどく怖れて女に墮胎させやうとした。しかしそれは失敗して何呂の知らぬ間に女は再び賣られてしまつた！そしてその墮胎の如何に恐ろしい結果を生んだかと云ふことを、お惠は偶然にも目のあたりに目撃したのである。

と云ふのは、或朝、大露臺にゐたお惠とお婆さんのエレーナは、何呂の家の戸口の前にある古い深い泥池の縁に立つてゐた都妻を發見したのだ。その時「お早う！」と言葉をかけたお惠を、いつも怪訝し相な顏つきの都妻はチラと見て陽炎のやうに儚ない微笑を浮べた。暗い陰欝な家の中に引籠つてゐることの、流石

に退屈なことゝ幽鬱なことに追はれて、珍らしく戸外に出て來たのだと云ふことは、お惠に直ぐ讀めた。そこでお惠はかう云つた。

「都妻。こゝへいらつしやい。お前さんは一人で淋しいのでせうね？」

　すると、お婆さんのエレーナは、とんでもない話だ、乃ち

「いけませんよ！」

と叫んだ。

「何故いけないのでせう？」

「あんな不具者を家に入れるのは不吉です」

「まあ不具者ですつて？マツーシユカ！」とお惠はそれこそ不思議の骨頂だとさてはつゞけて云ふのだ。「マツーシユカはそんな不人情な嘘つきなの？あんな可愛らしい娘を可哀相に！まあ御覽なさい。あの絹絲見たいな艶々した髮を！あの鈕子の下つてゐる恰好のいゝ福々しい耳を！」さうしてお惠はこの支那人の娘に

「さあ／＼お前さん右を向いた！どうでせうあのくつきりした横顏の輪廓は！ちよいとお前さん、後ろを向くのですよ。もちつと！もちつと！そうらマツーシユカごらんなさい。何と云ふ水の泡のやうな、そして蜉蝣のやうな美しい娘でせう。」

と云つた。するとお婆さんのエレーナは、もう我慢が出來ない！と云はぬばかりに、まるで子どものやうな早口で、

「さう／＼。お前の云ふ通りですとも、だが袴をめくつてごらんなさい、お前は何と云ふかしら？」

　さうしてこの押し問答の末に倒頭お婆さんの、負け嫌のエレーナは、このお婆さんに嫌はれ且つ彼女を怖れてゐる小娘を引つ拉つて物好きにも廚房へつれ込んだのである。そして大露臺から駈け足で下りて來たお惠の目の前で、小娘のズボンをまくつたり、いつも袖の中に隱してゐる兩手を引き延したりして、どうだ！と云ふ顏をした。驚いたことに、都妻の足の踵は、殆んと形のないまでに潰れたまゝキチンと纒足されてゐた。兩手の指は十本とも、それは家鴨の水搔きのやうに薄い皮膜で連がつてゐた！ーー都妻は今にも、泣き出しさうに、こうした荒々しい慘虐の前に柔順に屈してゐた。

「どうしたと云ふのでせう？」とお惠はすつかり失望して了ふのである。げにやげにお婆さんのエレーナは天から舞ひ下つた煉獄の、嚴なる大僧正の魂の化身見たやうな物々しい口調で宣言した。

「何出は墮胎をすゝめた氣の毒な大罪人でした。けれどもケイタ！考へて御覽なさい」

と云つた。エレーナやステパンはお惠をケイクと呼んだ。

「神樣はそんな不道德者に立派な智慧をお與へになるわけがないでせう？さうですとも！彼等はどうすればお腹の子どもが下りるか、それすら知らないのでした。母親は毎日毎日自分の腹を何呂に強く揉んだり押したりして貰つたのです。けれどもそれが何になるだらう？赤ん坊は生れた！そしてあの通り立派な不具さ。」

さう云ひ乍ら、何となく身ぶるひしさうな樣子のお惠を見詰めた。

（話はあとに戻るやうだが）さるほどに間もなく癒えた不思議な都妻の熱病は、そんな例がこの土地にはいくらもあるさうだが、都妻の淺黑い皮膚の色を洗ひ落して了つた。孤獨と寂寥とから彼女を愛したお惠の喜びにまで彼女は可憐な容姿を再びお惠の前に見せるやうになつたのだつた。そのあとさきであつた。お惠がこの小娘の年頃にさしてゐた鼈甲の髮釵を都妻にやるつもりで簞笥の中の荷物を掻廻したのは――そしてそこに藏つてある筈の彼女が一等好きだつた連翹の花の縮緬の袷がいつの間にかなくなつてゐることに氣づいたのも――。彼女の心が名狀の出來ない暗い不安と危惧に襲はれたのもその頃からであつた。

車侯と何呂を疑ひ始めたのもそれからであるが、しかし、一體彼等はそんな淺ましく恐ろしい事をするやうな人間なのか？その反對に、少しも怪しむやうなことのない人間なのか？と彼女は考へずにゐられないのである。彼女の知る限りに於ける車侯は支那人に珍らしい基督信者で、男よりも女を尊敬する傾向の正直さうな老人であつた。ニツケルの鼻眼鏡をかけて、毎晩、溜め込んでゐる給料の勘定をすることが唯一の慰めらしい老人だつた。だが、不幸にして車侯や何呂の人物はたゞそれだけでなかつた。考へて行く彼女の心にはげにさまざまの事件が、次から次へと、列をつくつて浮び出る。それは皆彼等にとつては不利な例證ばかりだつた。

それはいつもきまりきつた月の、きまりきつた日の、お惠の體の汚れる朝のことであつた。目醒めたお惠の部屋にはもうステパンはゐなかつた。閉された鎧窓の隙間から流れ込む水色の明りが眞つ赤な帷に映つて、どろんとした影が羽根蒲團の上を蔽ふてゐた。お惠は洋簞笥の斗抽から小さい行李を取り出した。その行李と云ふのは、實のところ、おかしな話もあるものだが、彼女の手から一切そんなことは封ぜられてゐるいろんな

洗濯物のなかで、それだけは流石に隠してゐた汚れ物を一纏めにして一年に三度故郷へ歸へるときに携へて行く(尤もその都度笑はれるところの行李なので、そして同時にこの家族の誰もが知らない筈の)行李なので、彼女は素敏しつこい彼女の動作の中に、また〻く間に、こそ〱と始末をして、一先づ寢臺の下に押しやつたのである。かくてお惠は窓をあけ、帷の紐を絞り上げてから、不愉快な心持ちと萎ざめた顏と、ものうい體とを風呂場へ運んで行つた。風呂場は二階にあつた。そしてお惠の寢室とは三尺ほどの廊下を一跨ぎした隣室であつた。ところが風呂場から出て來た彼女は何を見たか?それは實に意外なことであつた。彼女の部屋のまんなかに、決して入ることを許されてゐないところの車侯が血だらけの手を抱へて突つ立つてゐた。その傍にお婆さんのエレーナが苦々しく控へてゐた、と云ふよりもお惠を待つてゐたやうに、ときに女!この小娘!お前はまた何とした不潔な人間だらう!毎日二度も三度も湯を浴びる癖に!と云ふやうな險しい、しかし、どこかにまた相手を輕蔑して置いて、さてそれからぼつ〱と不憫がるやうな目つきでお惠の顏をチラと見るや否や、「ケイタ!」と云つた。

「こつちへいらつしやい。さあ、これは一體何としたことでせう?」と云ひ乍ら、それはまるで疊の上に粗匆をした尻癖の悪い小猫の耳を摘んでグイグイ引張るやうな格好で、お婆さんのエレーナは、お惠を寢臺の下へ押しやつた。行李の蓋はいつの間にかあいてゐた。お惠の萎ざめた頰には、はづみを喰つたやうに逆上する血色が漲つた。彼女は俄かに重苦しく目眩のする頭を抱へ乍ら、とんだものを見つけられて了つた!だが、どうしたものかしら?と考へ、いや、恐らく何の分別もつかずにぽかんとしてゐた。するとお婆さんのエレーナは、車侯を追つ拂つて、たちどころにお惠を裸に剝いて了つた。そして一反蒸されて來た風呂場の湯氣の中に押出すやうに放り込んで了つた。それから扉を締めたお婆さんのエレーナは、寢臺の下から行李を引ずり出して、こと〱と梯子段を下りて行つた、乃ちお惠にはさう思はれたのである。お惠は三疊ばかりの赤煉瓦の甃の上からもや〱と立と騰る生々した眞つ白い蒸氣の中に頭を抱へ乍ら凝乎と蹲んでゐた。足の裏が可哀さうになるほど燒けついて來るのも覺えずに、ぽろ〱と涙を零し乍ら、名狀の出來ない拘束と不自由とに對する反抗的な憤怒と、人の氣も知らないお婆さんの冷酷な仕打ちに對する小さい呪咒と、そして、車侯から受けた侵入と侮辱との中に鎖されてゐたのであるが、何のために?誰に斷つて?彼ん畜生は圖迂々々しく部屋の中に入て來て、行李なんぞに手をつけたのだらう?そこで乃ちお惠は口

惜いことに決つてゐろ、まつたくがこれは恥かしいのを通り越して涙の出るほど口惜しいのを我慢し乍ら兎に角と彼女は我が身の立ち場を考へた。その結果いつもそこに歸着する結論なんだが、お婆さんのエレーナに、例へばこれから氣をつけます。と、ですから何卒御免下さいと、さう云ふまでに一體どんな面目をして出て行つたものだらう？ほんとに馬鹿々々しいけれども仕方ないと云ふやうなことを氣の詰るほど考へて、部屋の中におづ〳〵と入つて行つた。するとまた、お婆さんのエレーナが上つて來た。お婆さんは一抱えのボール函を小脇に掻い込んでゐた。そうしてお惠を見て、今、自分が生んだばかりの赤ん坊の世話をするやうな仰山な態度で、そのボール函の中に入つてゐた下袴（ユーブカ）やボールカを着せてやつたのである。

「さあ、こつちを御覧！」

さう云ひ乍ら、大きな姿見の前に立たせた。それが濟むと結れて亂れてゐた髮の毛を梳つてやらうと云ひ出した。

「よろしうございます。マツーシユカ。自分で解かします。」

お惠はお婆さんの不思議な心もちをふと考へてクス〳〵笑はうとした。その微笑に氣づいたお婆さんのエレーナは、

「何がおかしいのかい？」

と云つた。そして驚いたことには、その髮がいつの間にか、先刻の棘々しさに變じてゐたのだ。お惠はハツと思つた。彼女の氣嫌はまだ癒つてゐないことを悟つた。

「いえ、何でもないのです。」と云ひかけたお惠は、俄にふら〳〵と、この際、お婆さんのエレーナに、縋りつきたいやうな氣持になつたのである。それはまことに調子の狂つた魂の獨白のやうにお惠はお婆さんのエレーナの兩腕をしつかと捉て云つた。

「マツーシユカ！」と。「もし妾が、マツーシユカ・エレーナと優しい優しい小さい聲であなたの耳に囁いたなら、あなたは屹度今朝のことを誰にも云はないで下さるでせうね？そしてあなたもすぐ忘れて下さるでせうね」と――お婆さんのエレーナの厭な遣い筋は直ぐ忘れることの出來たお惠は、間もなく、寢臺の端に腰掛けてゐた。彼女の頭を頻りに苦しめてゐたのは打ち消さうと努めてゐた車侯の幻であつた。だが、その幻はも一つのことに出逢つて一層强く、一層悄々しげに彼女の目にちらつくやうになつたのである。と云ふのは、げに、その夜であつた、とお惠は考へる。

お惠とステパンはお婆さんのエレーナの目の前ではまるで他人同志のやうに堅くなつてゐた。云ひ替ゆれば、お婆さんのエレーナは勿論この若い夫婦に愛されてゐたが又同時に憚られてゐた。その夜、お婆さんは彼女の部屋に飾られてゐる遠い國

や天國にゐる彼女の子ども兄妹、親たちの寫眞の前に跪いてその人々のことを考へ且つ祈つてゐた。その時お惠の部屋には、お惠たちが寢臺に腰かけ乍ら饒舌つてゐた。やがて、ふと、ステパンは話をやめたのである。そして、淺黄の下袴の上から青白い薔薇色の、しなやかな衣を纏ふて、黑漆のテカ〳〵と光る幅の廣い皮帶を緊めてゐたお惠の姿を見詰めてゐたステパンは大きな嘆息をつき乍ら、心の底からムク〳〵と頭を擡げて來る或る淫蕩な企らみの力にだん〳〵捩ぢ伏せられやうとする感情をやゝはつきりと額の上に表はしてゐたが、さてもその恐ろしい力に抵抗することの、いかに苦しいことか！と云ふやうにそれは微かに聽きとることとの出來る位な聲で、お惠の耳に私語くのである。そして、その心がどう云ふ風に波打つてゐたかよく解つてゐた彼女に、

「え？何ですつて？」

と空呆けられて、さも〳〵恥しいやら不思議やらと無暗に顏を赤らめて彼女の手をしかと握つて自分の胸に押し當て乍ら

「いや、何でもないんだ！」

と叫んだのである。そして、その瞬間こそは、自分の背面の隅々まで微笑をたゝえて、お惠の顏をしげ〳〵と見てゐたが、それはいかにも堪え難い沈默であつたやうに、

「小さいケイター今夜は不思議に私の心を何かしら暖かいものが包んでゐるのを感ずるよ。だが、私は今考へた。おまへはほんとにほんとにいつまでも小娘でゐることだ　そしていづれ私はおまへを抱いて山の彼方に連れて行くことが出來るだらう。そのとき私はおまへのために小唄でも稽古して歌つて聞かせるに違ひない」

さう云つて笑つたのである。お惠も笑ひ出した。そして、その笑ひがお了ひにならうとするときに、ステパンを失望させた賠償に、ふと彼女は相手の體に跳びついて固こい頰を大きな岩のやうながつしりした胸のまんなかに摺りつけたのであつたが、さても哀れなことに、彼等の後ろに突如として聲が走つて來た！

「大人。お待ち遠さま」と！ところで、その聲は決して豫期したものでないのは勿論で、ステパンもお惠も驚いて跳び上つた。かくて後ろを振り返ると、御令孃のやうな小さい奥様、いつもにこ〳〵してゐつしやるデブの旦那様、御安心なさいましあなた方が何をなすつたか、つい拜見いたしませんでしたと云ふ風に、わざ〳〵鼻眼鏡を脫して、それを前掛の端でごし〳〵拭き乍ら、またしても車侯が、へどもどして突つ立つてゐたのである。

で、この時にしろ、朝の場合のやうに實は内心怒鳴つけてやりたかつたのであつたが、お惠はも早、車侯に對して仇を打たうの、腹いせしやうのと、そんな腹は夙の昔に消えてなくなつてゐたばかりでなく、車侯に惡感情を抱かれる結果を考へて自然に心細く柔和に女らしいことばかり考へてゐたので、その時、

「誰も呼びませんよ」

と云つたのである。こんな素張らしい、みじめな經驗から殘つた車侯の印象は決して面白いものではなかつた。お惠の覩る車侯達はこんな支那人だつた。

疑へばまだそこにいくらも疑ふ餘地はあつた。或時お婆さんのエレーナは戸外から歸ると、直ぐさまお惠夫婦に向て車侯の罵倒を始めたものだ。「ね。あいつに限つてそんな眞似はしなからうと思つてゐたが矢つ張り支那人だよ。妾の馬車が英租界の、あの教會堂の裏の曲り角に來ると、ズボン一枚になつて腕をのべ乍ら壁際に蹲んでゐる苦力がゐるのさ。轍の音を聞きつけて、ふとこつちを向とそれがお前うちの車侯だらうぢやないか。見ると彼奴の右の手首がね、地べたに打ち込まれた小さい鐵砧の上に釘づけられて、可なり幅の廣い眞鍮らしい腕環がそこに穿められやうとしてゐたから、あゝ、あんな馬鹿な惡戲をしてゐる、だが、いつの間に家を抜け出したのだらうと其場でうんととつちめやうと思つてゐるうちに馬車がどん〳〵走つて行つた。しかし、あいつ妾の顏を見ると、ぎくつとしたやうに妾の姿が見えなくなる迄凝乎とこつちばかり見てゐたよ。」

そんなことは二三度あつた。車侯が勞働者や、水くみ人足と一緒になつて、塵だらけの食物を食べてゐたとか、苦力を相手に口論をしてゐたとか、看門子の何呂が往來に蹲んで悠々と用を足してゐたり、そうした支那人達が殘してゐる往來の、馬車の轍がすつぽりと埋まるほどの泥濘の兩側に盛り上がつた人糞やら、放ち飼ひにされた豚の群やら、小汚ない大道商人達の間に隱れて、うづくまり乍ら、髮を結つて貰てゐたことなどを目ざとく目つけて來るお婆さんは、その都度彼等を叱りつけたが彼等は何故それがいけないのかと云はぬばかりに直ぐ忘れた。お惠は今そんなことまで思ひ出して見るのである。何呂を「野生」と云ふ言葉で、その性質の全豹を現し得るならば、「非臭い基督信者」を以て自ら任じてゐる車侯は、何年飼ひ馴らしてもやつぱり「喰へない」と云ふより外に仕方のない人間のやうに彼女には思はれた。と云ふも一つの事は、この車侯の仲介で紫竹林の支那町にあつた「不住子古現舗」と云ふ骨董店から双環の古い水缸を一つ買つた。買つたのはステパンで貰つたのはお

惠だつた。お惠は以前からそんなものに解らずなりの趣味を持つてゐた。彼女の父親がまだ故鄕の稅關に勤めてゐる頃、父の手によつて蒐められた物はそつくりそのまゝ現在彼女の整頓した部屋を飾つてゐるやうに父の趣味がそつくり彼女に遺傳してゐるのかも知れないなどと彼女はお婆さんのエレーナやステパンに吹聽したものである。で、その時、買つて貰つた水瓶とても恐らく彼の好奇心を滿足させた。しかし、それが何時頃の物だか、彼女が拂つた金だけの値打ちのものか？それは解らないのである。ステパンの手によつて蒐められた支那瓶のカタローグにも、それに似寄りの木彫りの壺はあるけれども寸法から何から全然違つてゐた、しかし、その重さや腐蝕や色澤や形狀から考へて、それは煬帝時代のものだらうと云ふ朧ろげな判斷をつけて彼女達は喜ばさうとした。その瓶の圓い底には、「通鑑王莽字巨君元右之姪也」と云ふのを冒頭に此マルメロのやうな形をした一種のAmφora甕の由緒を面白可笑く冗々と書いた赤い金泥のついた紙が貼りつけてあつた。その水瓶は水を容れたまゝ寢臺の足もとの棚の上に上げられた。その夜半にふと小さやかな物音に彼女は目を醒ましたのである。あけ放たれた窓から月の光が照り込んで、水瓶の青錆びを鮮やかに示してゐた。だが、滴ちそこに何處からともなくぴちんぴちんと滴るゝ水の音が傳つて來た。その鈍い物音は再び彼女をウトウトとした睡りの中へ誘ひ込んで行つた。しかし朝のめさめの彼女の手にふれた水瓶は、一たまりもなく絹灰の塊のやうにグタリと潰れて水は一滴もなかつた！それは實に驚くべく見事に造られた紙の甕であつたのだ。だが、それを買へと頻りに勸めた車伕にどんな企みがあるのか、それは解らないし、車伕はたゞ申し譯のないやうなことを述べるだけで買つた店へお歸しなさいとも云はないが、兎に角車伕に對する彼女たちの心もちは決して面白いものではなかつたのである。だが、お婆さんが彼等に對する態度はまた別だつた。お婆さんは彼等（その中には勿論お惠が愛する都妻も含まれてゐる）の皮膚が誑染めの唐銅いろであるやうに、彼等の信心がさうだつたことをひどく毛嫌ひした。そしてあまり近づけなかつた。

彼等を疑ひ始めた彼女は、さうした事の一切をお婆さんのエレーナに打ちあけたものか？隱して置いたものか？と次にお惠は惑ふのである。その婆さんと來ると、彼女の一身に關することなら何一つでも隱されてゐることを愉快に感ずる婦人でないことを彼女は知つてゐた。お惠の髮の毛が幾筋あつて、お惠の足

の爪が今日はどの位美しく磨かれてゐるかと云ふことまで心得てゐなければ安心の出來ないお婆さんであつた。お婆さんのエレーナが疑ひ深い性の、口やかましい、おせつかい屋だと云ふことを發見したのはお惠とステパンが結婚しないうちからであつた。その時分お婆さんのエレーナはステパンと共にお惠の故郷に來てゐた。その故郷は九州の西の果の可なり古ぼけた港であつた。港の中に、それはいつもその頃露西亞の貴族達が逗留してゐたホテルがあつた。お婆さん親子は、彼等が偶然にも支那の官吏だつたことから或る露西亞の皇族のお供、と云ふのか案内役と云ふのか、兎に角そんなことで此港のホテルに泊つてゐた。ところでお惠がステパンと夫婦になる動機が、單に彼女の姉——それは彼女よりもずつと老けてゐた——がホテルのお神さんの友達だと云ふこの以外にまだあつたかも知れない。しかし、そんなことはお惠の元來の許嫁に隠れて、十五になつたばかりの娘としては可なりの冒險と迫害を意識し乍ら天津——そこに今彼女は住んでゐる——へ突つ走つて了つた時の恐怖や、いよ／＼さうなるまでに事を運び乍ら、お婆さんのエレーナが、お惠のそれまでの生活とか血統とか周圍の事情に對して刑事のやうな態度をとつていつまで愚圖々々時日を延してゐたときに覺えた憤怒や、そんなものは黄海の波の底へサラリとうつちやつて了つた！かくて日本の九州の港に殘された一切の紛雜と情實とから緣を斷たれて了つた彼女は、彼女が空想した自由な幸福な生活の創造主となつたか？と云へば實に心外でならないことがある、と云ふのは乃ち忽ちお惠は彼女にあてがはれた一つの部屋にぽいんと放り込まれて了つた！お惠はその部屋の中で長い長い間、故郷のことを考へたり、自分の無謀と輕卒とを悔ゐてゐた。ところが不思議なもので、いつの間にか故郷の幻は彼女の心を棄て、後悔は逃げ去つたのである。彼女とてもそんな幽靈には飽き飽きして來た。だが、何故彼女の姑や夫は自分を部屋の外へ出さないのか？するとお婆さんのエレーナはさも／＼親切さうに、たゞ戸外へ出ることの危險を説くだけで何の慰めも與へてくれなかつた。そして彼女の部屋つゞきに中庭へ突き出てゐる大露臺に籐椅子を持ち出しては日がな一日お婆さんのエレーナはそこに坐つてゐた。恰も檻の中に飼はれた木鼠のやうに——何と云ふ奇妙なお婆さんだらう？何と云ふ不思議な運命だらう？或時お惠は夫のステパンは何故自分をこんな窮屈の世界から救ひ出しに來ないだらう？げに、彼女はそこに押し込められてから朝晩にチラとステパンの顏を見るだけなのだ。かくてお惠は怖るゝ怖るゝお婆さんのエレーナに尋ねたのである。

「お婆様！ステパンは毎日何をしてゐるのでせう？」
ところがお婆さんのエレーナはどんな返事であつたか？
「パプシユカではありません、お母様です！」と。それから間もなくステパンは時々やつて來た。大露臺の上のお婆さんは厭な顔をして、
「ステパン！お前さんの仕事はもうお了ひですか？」
と怒鳴つた。
「お前さん閑はなか〱忙しいのでせう」
と云つた。
「用がすんでからお話しにいらつしやい！」
　かくてお惠の夫は善人の笑ひを失つて、にこにこと追つ拂れた。その用がすむ頃はもう日が落ちてゐた。かうした「奇怪な現實」は一切が、この若い時に夫を失つて子供ども達（ステパンの外にも露西亞に男の子が居た）を育て上げた白髮の老女のギリシヤ正教徒的の生活に導かれ馴らされた性情から、その中にはお惠も含まれてゐる自分の愛する子ども達を躾けてやらうと云ふ考へと、今一つは彼女がお惠を奪ひ返されると云ふやうな臆病心から割り出されたことだと云ふ事は、やがてお惠がその生れると同時に死なうとは思はなかつた女の子を生む頃であつた。と彼女は實に尤もらしく考へたものだ。その死兒を抱いてひどく嘆たところのお婆さんのエレーナは、存外氣の弱い涙もろい親と云ふよりもやつぱり祖母と云ふ感じのする心の美しい優しい老女であり且つ口やかましい偏狹な道德家であつた。お惠の目に映つたお婆さんは白鳥のやうな感じがした。彼女はそれが火箸の先で摘むのもいやな動物の支那人は勿論のこと、すべての男を嫌つたのである。かくてお婆さんは七十幾つになる車侯すら女たちの側にはあまり近づけなかつた、とお惠の考へるには、——そんな調子の胸の狹い嚴しいお婆さんに盜難を訴へて、さてもその結果はどんなにあさましい波紋を畫いて行くか？と。すると彼女の目の前に影のやうな一人の泥坊が縮緬の袷せを引つ抱へて忽然として現はれた。現はれたかと思ふとすぐふん捕つた。
　ところがそれは、また意外にも車侯であつたのだ。
「人間は皆泥坊です。正つ直ぐな善人だとばかり考へてゐらつしやつた私をごらんなさい。この通りでさあ。」
　と云ひ出した。すると又忽然として車侯の顏の造作が一變した。それに何呂の面相が飛び出した。そしてこれも又口を利くのである。
「今、車侯老爺が云つた通り、人間は七十になつても八十になつても、死んだ先でも泥坊根性だけはのこつてゐます。」

さう云つたかと思ふとまた忽然として一人の首斬り役が現はれて到頭彼等の首を刎ねて了つた！お惠はずいんとした。するとその首斬人が血刀をぶら下げてチラと彼女を見て、「何故お前は自分の物を盗まれて默つて隱してゐるのだ？」と云つた。その頸は意外にもお婆さんのエレナーでなかつたか？翌朝お惠はそれとなく車侯の部屋を調べて見た。それは厨房の屋根裏だつた。けれどもそこには木で造つた跛足の寢臺の外に何一つないのである。あるものは悉く低い壁にぶら下げてあつた。次にお惠は秘かに何呂の部屋を覗いて見た。それは「露西亞領事館」と云ふ看板のある石柱の門際にくつついた門番小屋だつた。だが、受付用の卓子と椅子の外に何呂を罪人にすべき何物も發見されなかつたことに彼女は彼等のために大きな安心と、慚愧とを覺えたのである。かくてあるべきものゝの無い不愉快と不安とは、そこに彷ふてゐるお惠の心をその日の夕刻まで捉えて放さないのであつた。

B

動揺し且迷つてゐるのはお惠の心一つに過ぎなかつた。萬

物一切は彼女が始めてこゝへ來た時に認められた生命の中に彼女をめぐつてゐた。たゞ變つたと思はれるのは、彼女が退屈な生活に馴れて來たことゝ、言葉がめつきり旨くなつたことゝ、お婆さんのエレーナにも夫のステパンにもだん〳〵と深い親みと愛とを覺て行くことであつた。はじめの間、淋しさの餘りに湧き出でたに違ひない支那人の小娘の都妻に對する愛は、げに雛鳥達が育つて行くにつれてだん〳〵遠ざかるやうな具合に離れて行くのである。どれほど淋しがつてゐるだらう都妻は、以前のやうにお惠を戀はなくなつて了つた。かくてお互に顔を見ない日が多くなつてゐた頃の、日の、夕刻であつたのだ。

お惠は大露臺に彳んでゐた。

一月ばかり前に解氷した白河が目の前の丘の下に、火車站の停車場を脊負ふて見えた。いくつも荷足船や帆船が停泊する廣々とした水面を蔽ひつくし、そこから煙あがる龍神の吐息のやうに青味がゝつた薄靄が、すぐそのほとりから丘へつゞく楽竹林の支那町へ這ひ寄つてゐた。些間だと、壁の中に塗り込められた高粱の幹が露出してゐる灰色や朱いろの泥家も朧ろに隱れてゐた。そして、いつもその邊一帶の道路――ぬかるみの泥路に大きな鋲をあてゝ歩く支那人の影も見えなかつた。かくて間もなく良夜とはなるべき無限の廣さを湛へた水色の空に、茫

と掃き散らされて顫動し明滅する銀泥のやうな星の群はそろ〳〵煌き出やうとしてゐたのである。お惠は彼女の健康な肉體が、春のめざめに先立つて何時も感ずる甘い懶さと、その懶さの充ちわたるときに感ずる輕い快よい疲勞とを覺えずにゐられないのである。そして、その瞬間の、生々した脊のびとともに、彼女の二つの腕が、ふと、彼女の捲毛の項に觸れたときに彼女は、胸一杯に濕つた夜氣を吸ひ込んだ。その時の彼女としては勿論それは極めて短い時間ではあるけれども、着物の事も支那人達のことも忘れて了つた。そのまゝ氷久に忘るべき筈なのを、いかなればかくも烈しく突然にと――云ふやうに、お惠の心臟は不意の駈け足を始めたのである。おや！と云ふ風な月つきで手すりに摑まつて、及び腰で、いつの間に彼女は中庭の隅の、何呂の家の窓を覗くやうに見下ろしてゐたのか？赤つちでザラ〳〵と塗られた圓い暗い窓ぎわには、久しく見なかつた都妻が立つてゐた。實にお惠は小娘の姿を發見したときに

「都妻！」

と、さも驚いたやうに叫ばうとしたのである。それほどにお惠の魂を奪つたのは、彼女が嘗て彼女の肌――彼女の不思議な熱病の後に、さてはその煉りミルクのクリームのやうに、いや、もつと艶々しく柔らかに脫け上た小肌の上に、見たこともない――されば夢にも見ることを豫期しないところの眞つ白な――連翹の花びらを二つ染め拔いた縮緬――の着物ではない可愛らしい袢子を纏ふてゐたからである。都妻はやがて靜かにその陸に花をつけやうとする白樺や柳の中の窓框に腰かけた。お惠の動悸はなか〳〵止まなかつた。彼女の目は都妻の姿にぴたりと釘づけられて了つた。何呂はどこにゐるのか？恐らく市へでも行つたのだらう？然らば車侯は何處にゐるのか？一――二――三――四と屋根裏の部屋から金を數へる呟きが聞えてゐた。するとお婆さんのエレーナは何をしてゐるのか？カチカチカチカチとミシンの手車を廻す響が傳つて來た。その寂かなる物音の中に、美しき水魔のやうな都妻は、銀色の袴につゝまれた片足をあげて、窓框をまたぎ乍ら、中庭へ跳び下りた。そして、その頭の上にお惠が突つ立つてゐることなどは、どうでもいゝではないかと云ふ足どりで、池のほとりをぐる〳〵廻つてゐたがその突然の光景こそはまことに彼女の心に不思議な痲痺を與へたものであつた。お惠はやがてそこに窺ひ寄る夜の小闇のへだてがなかつたならば、冷たい、やゝ棘のある微風のために黑い瞳のまわりに淚をためたまゝ、その微風のなかに、冷い眞つ白い肉體を透して、焰々と燃えあがる赤い魂の輝きの光に自身も燃えつき熔け果てゝその冷やかな大空の下に沈んで行つたかも

知れなかつた。「何と云ふ美しい世界だらう！」彼女は部屋の中でさう呟くのである。

「可愛い〻都美？」何と云ふお前の美しさだらう？と彼女の目にはたゞ、いつまでも水煙のやうな、青玉のやうな、それとも緑玉石のやうな靜かなる恍惚と魅惑とが黄金の翼をひろげてゐた。彼女は遂に都美――でなければ彼女の父――が、かほどまでにお惠の心を幽鬱に鎖した一枚の着物の、秘かなる持ち主であることを偶然に發見すると同時に永久に忘れて了つたのである、でなければ――（お惠はこんな考への片端しにすら足をかけまい？）――恐らくその一枚の袷と共により以上の滿足を見出したと云ふのは何故ならば、盜まれた一枚の着物はやつと置かるべきところに置かれてゐるからだと――。

その夜である。老人の車侠が悄然として扉の外に立つてゐた。やがて扉を叩いた。そして入つて來た。それは今まで絶へてなかつた例しなので、お惠はどうしたものかと惑はざるを得なかつた。すると、車侠は、まるで粗忽をした犬が尾を垂れて頭を摺りつけに來るやうにおど〳〵した態度で、實に相濟まぬやうな低い聲で、

「太太！」と呟いた。「あなたは先刻都美が池のふちに蹲んでゐるのを御覽になりましたでせう？」

お惠は頷くのだ。

「あの着物を御覽になりましたでせう？」

お惠はまた頷く。

「あの着物のことに就て貴女が先日から心配してゐらつしやることはちやんと知つてゐました。そのために貴女は私や何呂の部屋をお探しになつたでせう？それもよく存じてゐます、そして私の潔白をお目にかけたいことも承知してゐるのでございます、しかし、さうすれば、何呂一家が路頭に迷はなければなりませんし、彼等は私と血を分けた者で、私にはその勇氣がないのでございませうか、彼奴を突き出してやらうと幾度決心しても直ぐ鈍るのでした。けれども私は神樣につかへてゐる人間でした。これだけ申し上ぐれば何も彼もお解りでせう。お悧巧なお慈悲深い太太！」ひどく口訥り乍ら老人は告白するのである。

「でも太太。人間は本當のことを云はなくては駄目でした。何呂は哀れな下賤です。貴女の大切なのはあの着物でございます。そこで、私は大露臺にゐらつしやる貴女をチラと見て、とんだことになつたものだ。太太は直ぐそのことを老太太にお告げなさる？ね。さうでございませう？」

と車侠は恐ろしい罰の下るのを待つもの〻やうに蒼さめてゐるお惠の顏を盜むやうに窺ふのである。だが、お惠としては妓

早勿論その決心はついてゐた通りを云ふと、車侠は、彼女の罪を許すと云ふ微笑に出逢つて、兩方の眼を奇妙にしばたき乍ら、感謝の念に襲はれて暫く口が利けなさうに俯向いてゐたが、お了ひには、やつと安心したと云ふ風に、しかし、それは涙聲で
「おかげさまで助かります。そして仕事をやらせて頂いて仕合せに物を食べられます。」そして、車侠は甥の振舞ひを嚴しく責めつけること、またとこんな眞似をしたら追出すことなどを堅く約束してこつそり引あげた。けれども、どんな隙を見て盗み出したのか、それは口をつぐんで何とも云はなかつた。日は重なつて行つた。何呂は依然としてまめ〳〵しく働き、車侠は依然として毎夜一――二――三――と給料の勘定をしてゐる。

それはこの忌はしい盗難のことが恰も夢のやうに忘れられて了つた頃のある日の午後であつた。恢復されたお惠の心の平和と、その日の晴れ晴れしさとは、長い間家の中に閉ぢ籠められてゐたお婆さんのエレーナとお惠とを籠から放つやうに戸外へ出した。二人は珍らしく租界を驢馬に曳かれて廻つた。そして、邸に何が起つてゐるかも知らずに戻つて來た。
「あ。また喧嘩だ！」とお婆さんのエレーナが門口で突然呟いた。お惠の目にはイヴノーフとステパンがぼんやり立てゐる池の端に、車侠のために辮髪を捉へて引き摺られてゐる何呂が、後ろへ手を廻して自分の髪の根本をしかと握り乍ら必死に抵抗する有様がすぐ映つた。それは實に側からは手もつけられないやうな烈しい格闘なのだ。お婆さんのエレーナとお惠は馬車を棄てた門際にぼかんとして急に中庭へ入りかねたやうに、眉をひそめ乍ら、佇んでゐたのであるが、車侠よりも幾つか若いか知れない何呂は、何分辮髪をとられてゐるために、池の縁へずるずると一ぽづゝ足場を失つて行くのである。跣足になつた何呂の踵や爪先は赤い土にもぐり込んで、池の中へ突き落されることだけを辛うじて絶望的に防いでゐるやうに見えた。ステパンやイヴノーフが何か云つてもまるで耳に入れない車侠の鼻の穴からは、だら〳〵と血が流れてゐた。そしてこの二人の赤土だらけの上衣やズボンの彼方此方にくつついてゐた。そんなことには無頓着なほど車侠の鼻息は荒々しく見えたのである。
「何でせう？どうしたと云ふのでせう？」
とお惠は半ばそこに近づくのを怖れてゐた。
「何呂が泥坊したと云ふのだよ。」
とステパンが云つた。
「だからどうしようと云ふのかい？」

とお婆さんのエレーナは、さう、それだけは、いゝ具合には、五分間も堪へられないと云ふ風に云ふのである。お恵はハツと思つた。直ぐ彼女の盗まれた一枚の着物のことを思ひ出した。そして、到頭お婆さんや夫に知れねばならぬ時が來た！と思つた。

「池の中へぶち込もうとするのです？それで止めやうとしますが、どうしてあの通りですからね」

とステパンは云つた。

「お母様(マァーシュカ)！よろしいからうつちやときなさい」とイヷノーフが微笑した。

「いけませんよ。お前さん達は何の權利があつて見殺しにするのです？泥坊にはちやんと法律と云ふものがあるぢやないか？」

とお婆さんのエレーナはもどかしがつた。

「えゝ。さう云ひますが聞きませんのさ。生死の力を脅かす者は法の守護者に對する無上の叛逆だつてね」

とイヷノーフがまた云ふ。

「そんなことを云つてゐる暇に止めてやることとです！早く早く。」

さう云ひ乍らお婆さんは、例の涎掛けのやうな四角なレースのついた胸を突き出し乍ら、犬を追つ拂ふやうな格好で、洋傘を盗み出させた。そして、それは、いゝ具合に、泥だらけの池の中へ落ちやうとするのをハラハラして眺めてゐた。するとイヷノーフは兎のやうに跳ねて逃げ出した。

「法官(マジストレン)は自分達のポケットから一ペンスでも盗まれるか、そんなことばかり考へてゐるから、自分達は自分の力でやらなくつちや駄目だと云ひますから、そのために法律を破るとは出來ない。ほんたうの基督信者が人を殺した話はまだ聞かないと云つてやるのですが――」とお恵の夫はもじもじしてゐた。お婆さんのエレーナはもはや我慢の餘地がないやうに、

「殺す譯はない！泥坊なら泥坊で、追つ拂へばいゝ！」

さう呟き乍ら、ステパンを追立てた。さうして、到頭どうにかこうにか二人の仲を割つて了つた。そのお蔭で赤土にまみれた上衣をもて餘し乍ら、ステパンは此問題の起りを訊して、さう云ふ場合にいつも、あまり寛大でない、悪く云へば氣の小さい手厳しいお婆さんと相談の上で、何の容赦もなく何者を追放するとに決めた。そのときに「そのことですとも！そのことですとも！」と云ひ乍ら池の端に、もうすつかり覺悟して了つたやうに後ろ向きに蹲んでゐる何者をじろりと睨みつけたお婆さんの足もとへ、まるでころころと轉る様に家の中から何者の母親の陳都要が駈け出したときは、流石に、おや！と思つたやうにさ

つと顔色を變へたのである。お惠は彼女の部屋で樣子を聞いてゐた。すると老婆の陳都賽は、お婆さんのエレーナに縋りつくやうに、自分の悴が盜んだものは只今お戻ししますからと叫んでゐた。「妾はいつ死ぬか解らないのに、誰が死んだ後の祠りをしてくるでせう?」と云ふ聲もはつきり聞えてゐた。けれども、お惠は、彼女達の有樣を見る勇氣すらないのであつた。

「何故あの老人は今になつて秘密をさらけ出したのだらう?」と思つたお惠は自分の迷惑をはつきり感ずるのだ。やがて、中庭にひろがるのは、暴風のあとの沈默であつた。それは誰の心にも手強く寄せて來る沈默に違ひないのである。かくて、その結果はまことに哀れな緊張となつて現はれねばならなかつた。老婆の唇の戰きや、がく／＼と打ち顫ふ膝や、乾葡萄のやうな目の奥に、今や押し出さうとする僅かばかりの涙や、糸のやうに弱々しい言葉は、エレーナとステパンの心に先祖代々から遺されて來たある力強いものの前には何の力もなかつたのである。その威力ある祖先の遺產とは何であるか?!恐らく彼等自身すら知らないに違ひない。邸の人々は實に見ごとな峻嚴さの上に自らを築いて毫も態度を崩さうとしなかつた。何呂はいよいよ追はれることになると、いかにも支那人の言葉をいくども繰り返したのである。乃ちと。

「大人!あなた方は私がゐなくても私の母や私の娘の面倒を見て下さるでせうか?」

ステパンもお婆さんも、そのことなら確かに承知したと云つた。すると何呂は、靑ざめた唇をぶる／＼動かして、黄色い齒を見せて、何かぶつ／＼と呟き乍ら、血まぢりの唾をペッペッと吐散らして門の外へ出て行つた。恐らくそれから五分も經てば、どこかの路上でのんきな鼻唄でも唸り出すに違ひないゆとりを持つて——そして、陳都賽の蔭にちゞこまつてゐた娘のことも忘れ果てゝ——。

だが、不思議なのは何呂の竊盜がばれたことに當然かゝり合ふ筈のお惠には、誰も何事も云はないことである。かくて、少なからぬ躊躇の後にお惠は車侯に尋ねたのであつた。

「お前は何故あの男が妾の着物を盜んだなんて云つたのです?そして今更のやうに彼を追ひ出したのです?」

ところが車侯の返事は實に意外なものであつた。正直な彼は、まづお惠の言葉には失禮乍らまるで覺えがないと云ふ樣子を見せた。自分の甥が誰の着物を盜んだのだらう?と云ふ風だつた。そして云つた。

「あなたの仰有ることは私にはハッキリ解らないけれども、彼奴を叩き出したのは私の隙を見て私の部屋に忍び込んで金を盜

つて出やうとしたのを私が見つけたのでしたが、あいつはそんな人間ではなかつたのでございますがね。」

おや！着物の事にもう忘れたのかしら？さう思ふた彼女は、いくら盗つたのだと尋ねたのだ。すると車侯は、さう云ふ話はしい質問を受けるのも、何物のために可哀さうだと云ふ様子で、「五錢とりました」と云つた。この驚きの中にお惠は、まあよかつた！と云ふ大きな安堵を覺えずにはゐなかつたのであつた。かくて彼女は心の底から呟くのである。

「あゝ。その五錢こそは車侯が永遠に忘れることの出來ないものだ！」と。

（終）

微笑巡禮

佐々木指月

□

「チヤン、チヤン、チヤン、チヤン、」

チヤン、チヤン、チヤン、チヤン。

うオ――――、うウ――――、

うオ――――、おオ――――。

三つ半鐘では區内だが近くはないと思ひながら、夜の三時頃の夜具の襟から顏を出す。動物園の牝獅子が月に感じて遠吠えをするやうな聲を出して、蒸氣喞筒がすぐ私の家の横手を通つてゆく。

日本の火事もだいぶ近代化して來たものだ。暗いなかであの音を聞いてゐると、なんだかまはりには煉瓦造りや石造りの四階建ての家がならんでゐるやうな氣がする。が、實際はさうではない。火に逢へば一とくべの木造りの家だから、なんのことはなく薪をかさねてそのなかで燒けるのを待つてゐるやうなものだ。さうしてそれがいつ燒けないとも限らない。考へて見ると

この都會の人はなかなか度胸がすわつてゐる。

チヤラ、ヂヤラ、ヂヤラ、ヂヤラ、ヂヤ、ヂヤ、ヂヤ、ヂヤ、ヂヤ、ヂヤ、ヂヤア。擦り半鐘だ。おや、火事は近いと飛び起きて、裏の雨戸をがらりとあけると、ぱツと一面に赤い。私は二階に寐てゐるのだが、下からも子供たちが馳け上つて來て、一枚くりあけた雨戸のなかゝら首を出す。

火は一丁ばかり先の立ち木の蔭の二階屋からのぼつてゐる。ぱちぱちと木口の燒ける音。人の叫ぶ聲も手に取るばかりで、見てゐるうちに火はその隣りへ燃えうつる。また一としきり黒い烟が立ちのぼつてそれが一度に火になると、その勢ひでまたその隣りは白い烟に包まれる。起ツてゐる炭に水をかけるやうなもの音は、木の葉のやける響だ。一本高くぬけ出してゐる欅の木は、火柱をつくつて、さツと燃える。火が幾段にも途中から切れて、大きな赤い包みをつぎつぎに夜の空へ送り出す。その下から、喞筒が築く水の塔が火の霧となつて崩れる。

うオ―――――――うウ―――――――、

うオ―――――――おオ―――――――。

またどこからか一臺の自働車喞筒はやつてきた。火事見物の觀覽席にあたつてゐる私の二階は大入りだ。子供たちはがたがたとふるへてゐる。ちやうど泊りに來てゐた遠縁の、今年十九の信ちやんは、その兄さんと一緒に窓で見てゐたが、寒いと云つて兄さんの着てゐる褞袍を剝ぎとつてそれにまはるくるまつた女優卷がほつれてゐる。

『こつちへ燒けて來ない？』と、信ちやんがきく。

『燒けてくるもんか。風はあツちへ吹いてゐる。』とその兄さんが云ふ。

するとその時、私の家の、今年九つになるお生ちやんと云ふのが、燃え上る火の手を眤ツと見てゐたが、

「お星樣はよく熱くないねえ。」と、云つた。

なる程、空には星がある。ちやうど燃えてゐる火の眞上に一つの紫色の星がぴかりと光つてゐる。信ちやんは、お生ちやんの云つたことが、をかしいと云つてころげて笑ふ。その笑ひかたはおほぎやうだ。寐お白粉の顏を褞袍の襟にこすりつけて笑つてゐる。

『信ちやんたらなにがそんなに、をかしいの？』と家の大きな男の子が、あきれ返つてながめてゐる。

信ちやんの笑ひはなかなかとまらない。その兄さんと私とは思はず顏を見合はした。

兄さんのちよんぼり髭はのびてゐる。兄さんはそれをつまみながら、

『またそんなに笑ひ出して。いつかのやうに顛でも起されると困るから、早く行つて寐ろ寐ろ！』と云ふ。

火事は、また燃えひろがる。信ちやんはたゞもうころがる。私と兄さんとは、また顔を見合はせてにつこり笑つた。

□

牛鍋のなかの白瀧がふるへてゐる。豆腐はじはじはと狐いろに揺れてゐる。

『こいつは豪氣だなア、どう、ちよいと箸を貸してくんねえ』

と、云ひながら、その一と切れをぺろりと口に入れたのは、當年とつて三十と七才ぐらゐな、でつぷり肥つた赤ら顔の、青髭の、どう見ても博徒としか見えない男　その名は勝沼の源次。ちよん髷に結つてゐる。

が、少しも不思議はない。こゝは久松町、明治座の樂屋だ。今、ちやうど、鈴木泉三郎氏の書いた高橋お傳の序幕が明からうと云ふ五分前だ。

源次に扮した小堀誠は、尻をからげて上草履で、三階の藤井六輔の部屋へやつて來た。私はそのあとからついて行つた。小堀は樂屋のなかからもう源次になつてゐる。ものゝ言ひ方といひ、身のこなしと云ひ。前幕の城に出た農學博士のときとはまるで違つてゐる。樂屋のなかで話すのに、舞台では大きな声ではなすからこちらもものゝ云ひ方を換えなければならない。俳優と話しをするのは、ほんとうに忙がしいものである。

小堀の源次は立つたまゝでこごみ加減になつて、左の肩の手拭を右の肩に置き直し、

『えツ、莫迦にうめえなア』と、また一ときれ、『これで一ぺいありやア申し分はねえんだが。』と、云つてあたりを見まはす。樂屋の明るい電氣燈は、砥の粉を塗つたその顔にてらりと光る。

すると同じ部屋にゐた藤村秀夫が、くすりツと笑つた。

『おや、こいつア、隠しやアがつたな』と、小堀の源次は墨眉を入れた目で、じろりとそこの鏡臺のあたりを睨む。居合した人たちは、大笑ひ。

『おい、出しねえ、出しねえ』と、小堀は腰をひねつてふりむく。

別な火鉢の鐵瓶は、白い湯氣を立てゝゐる。部屋の隅にすはつてゐる一人の書生さんのどうも様子がへんだから、見ると書生も私を見る。一番目の死線を越えての仕出に出たものと見えて、貧民の着つけをまだ脱がずにゐる。書生の手はうしろへまはつてゐる。私は洋服の膝をのばして

少しはなれてはゐたが、烱德利はあすこにあるのだと思つた。私が知つたといふことは、書生も知つた。源次はまだ氣がつかない。

書生と、私は、につこり笑つた。

□

『なに、刑事が來てゐる?』と、苦みばしつた顏で云つたのは、島村民藏先生の書いた城に出る運轉手金澤佮太郎の顏をこしらへてゐる松本要次郎だ。

この部屋には、小堀と、花柳章太郎と云ふ女形と、それからこの松本要次郎がゐる。三つの姿見に六つの電燈。部屋のなかは明るい。姿見のなかには一人一人の俳優の顏がうつツてゐると云ひたいが、女形の花柳は病氣で來ない。廊下からはひつて來た松本の弟子が、

『いま、そこの入口に刑事が立つてゐます。何でも、若い娘が千圓ばかりの金をふところに入れて樂屋へ入り込んでゐると云ふので、多分、女形の部屋だらうと刑事が見込みをつけて、河合さんの部屋の前に來てゐます。』と、云つた。

『そんな娘が樂屋へ入り込んでゐるかなあ、誰れか見たのかい?』と、小堀がきく。

私と小堀の書生は顏を見合はした。では、あれだと私は思つた。

『えゝ、一人、娘が來てゐます。』と、小堀の書生は答へる。

私は一人の娘に奈落で逢つた。その娘は花道の揚幕のところへ來て、私と一緒に三ツ越カフエーの場を見てゐた。

『どんな娘だい?』と、松本がきく。

『まだ十六七ぐらゐの地味ななりをした娘です。』と、書生が云ふ。

黑ツぽい縞の着物を着て、赤い帶をしめて、銀杏返しに結つてゐたが、私と暗い揚幕のうしろに立つてゐた感じがどうも處女ではなかつた。

『柄は小さいけれども、何だか氣を持つてゐるやうな娘でしたつけ。』と、私は云つた。

『ぢやアそれに違ひない。だが刑事が女形に目をつけるとはをかしいぢやないか?』と、小堀が笑ふ。

『誰かにいくらかやつたんだらう?さもなければそんな娘が揚幕へなんか、はひれるはずはないんだから』と、松本はもう化粧をすましてしまつて、そこにゐた書生たちを見かへりながら、『おまへたちは腕がないなア、さう云ふのを一つこしらへたらどう云ふものだ。』と、からかつた。

『いゝぜ、飯の好くのを待つてゝ[illegible]こいらの小料理屋か何んかで。だがそんな若い娘だと、うつかりすると誘拐罪に問はれるぜ。』と、小堀は羽二重を頰にあてながら云ふ。

『しかし、十六七になればもうたいてい大丈夫だらう？』と、松本もよくは知らない。

『うム、大丈夫だらうよ。』と、小堀の話はそれてゆく。

　私と二人の書生たちは、顔を見合はして、につこり笑つた。

□

　私の乗つてゐた電車は、お茶の水を走つてゐる。ニコライの青い塔には午後の日があたつて、冬の空は晴れてゐた。

　電車は珍らしくすいてゐる。私と筋向ひに一人の女學生がかけてゐて、何か本を讀んでゐたが、車掌が切符を賣りに來たので、女學生は五十錢のお札を出して往復を買つた。ちやうどお茶の水橋の停留場が近づいたので、車掌はあはてゝ戸をあけて、鈴をひきに出ていつた。

　この女學生のつくりは人と變つてゐる。髮の結ひ方は七三だが、目の下にうす青い曲が入れてある。さうして衿をきつちりと頸のうしろへ引きつけて、前の方は半襟を重ねないで、胸高に結んだ帯の[illegible]たあたりに見えてゐる。のみならず、そのまんなかに乳と乳とのふくらみを合せたほそい線がある。

　なる程、これはハイカラだ。多分、西洋の女のウエイストの胸がＶ字形に明いてゐるところを眞似たものだらう？それにしてもお乳の間にやはらかい線を見せたところは、どうして男の目を引かうかと苦心してゐるこの娘の心が見えて可愛らしい。私はその心をうけ入れて、その一と筋の線を倦かず見つめた。

　女學生は黑海老茶の袴の上で、さつきの本を閉じてゐた。本の金文字を見ると、マイ、ニユーヨルク、プレイとしてある。この娘は紐育の女優物語をその原文で讀んでゐたのだ。

　すると女學生は、私の持つてゐた雑誌に目をつけてゐる。これは、サタデイ、イヴニング、ポストだ。見たければ御覧なさいと云ひたいが、見ず知らずの娘に聲をかけるのも悪るからうと思つて、私はだまつてゐた。

　お茶の水橋の停留場を電車はもう離れてゐる。電車は勾配のある道を松住町へと下つて行く。やがて車掌がはひつて來て、先程のおつりを渡す。女學生は貰ふのを忘れてゐたものと見えて、ぼんやりと車掌の顔を見上げてゐたが、急に思ひ出したや

うにそのお札を受け取つて、ぱつと顔を赤くした。

車掌は前の方へ行つてしまう。女學生がおつりを貰ふのを忘れてゐたそのわけは、何か娘の心を亂したものがこゝになければならない。このサタデイ、イヴニング、ポストか？いやいやさうではあるまい。それは今から一分前に、娘の胸の線のなかへ喰ひ入つた、私の目にちがひない。

おつりを帶の間にはさんだ女學生は、盜むやうに私を見た。とたんに、私が、につこり笑ふと、女學生も、につこり笑つた。

□

私は本郷眞砂町を歩いてゐた。左に赤い煉瓦塀があつて往來は緩く右に曲つてゐる。坂を降りれば春日町だ。大塚ゆきの電車がもう夕方の灯をつけて鈴を鳴らして過ぎて行つた。

女學生が三人、往來に並んで歩いてゆく。何かしきりに話しながら歩いてゐるので足もとは定まらない。あつちへ押したり、こつちへ押したり。冬の日の暮れるなかでも、それらの袂のうらは赤い。

私の足は早いから一歩一歩に追ひついたが、うしろから自轉車に乘つて來た印絆纏の男が、チリン、チリンと、ベルをならして右に通りぬけやうとすると、女學生は右による。左に通りぬけやうとすると、女學生は左による。自轉車は行き詰つた。男はハンドルを右にまはしたが、うしろからまた一臺の電車が來た。氣をいらつたのは印絆纏の男で、倒れるやうに左にまはつて、一番はじの女學生の袂をかすめてはしりながら

『このすべたども、ほんとうにひき殺すぞ！』と、振り向きざまに罵しつた。その顏には、あばたのあとが一ぱいあつて、片方の目はひきつつてゐた。

罵られた女學生は、どう思つたか三人ながら振り返つた。おほかた『このすべたども』と、云はれたのがきまりが惡くつて、誰かうしろでこれを聞いてゐはしないかと思つて、ちよいと振り向いたに違ひない。三人の目は、ちやうど私にあつまつた。

私はそれがをかしいから、につこり笑ふと、女學生も三人ながら、につこり笑つた。

□

これは弓町の日本評論社の事務所だ。事務のすんだ晩方の電燈は、弘さんと云ふ三つばかりの男の子を中心にした樂しい團欒を照らしてゐる。

若いおッ母かさんに抱かれた坊ちやんの、若いお父つさんに、本や帳簿のちらかつてゐるテーブルの上に頬杖をついて、子供の顔をながめてゐる。ほかに人が二三人。私もそこへ割り込んでゐた。

「このお子さんをにつこり笑はして見ましやうか?」と私が云ふと、若いおッ母さんが、

「えゝ、笑はして御覽なさい。」と答へた。

この弘さんは前から私をこはい小父さんだと思つてゐる。私の様子が少し人とはちがつてゐるものだから、私を見るといつでもべそをかいてしまう。それは皆んなも知つてゐる。

子供と云ふものは無邪氣なものだから、私がもしも無邪氣になれたら笑はないことはあるまいと、かう私は考へた。然しこれは、私には大きな問題だ。果して私が無邪氣になれるかどうかは由々しい心の試みである。

私は兩手をさげて、體を前へ運んで、凝ツと子供の顏を見た。弘さんのまはるい目は、私の顏にそゝがれた。私はそのまゝ見入つたが、心もち顏を左右に振りながらにつこり笑ふと、弘さんは、みんなの見てゐるそのなかで、釣られたやうに、につこり笑つた。

はははツと事務所のなかは大笑ひ。その聲に驚いた弘さんは、[illegible]に、[illegible]した ので、こんどはみんなが、につこり笑つた。

□

石の建物の角を曲つて、右手のドーアを押してはひると、つき當りに大きな下駄函がある。スリッパと赤緒の草履が魚のやうに左手の階段の下に並んでゐる。附木の正札はついてゐないが御客用と云ふ焼印が押してある。階段はぐるりとまはつて右にあがる。あがる先は長い。どこ迄あがるのだかわからない。下からのぞくと限りがない。

「これを押して下さい。」といふボタンがそこの柱にあるから試みにそれを押すと上の方でベルが鳴る。私はそのボタンを押して待つた。これはほかの處ではない。中央公論社の入口である。

やゝしばらく待つてゐると、上から人の足音がする。曲つて見ると一人の若い婦人がおりてきた。これは見馴れた婦人であるが私はいまだに名を知らない。血色のいい、丈のたかい、着物の上から見ただけでも、いいポーズを持つてゐて、目は眞ツくろに光つてゐる。服を云へば、いつでもその前髪があんまり大きすぎるのと、もう立派な御良人があると云ふ、たゞそれだけ

である。なんでもこの人はこゝの婦人公論の婦人記者であるわけだ。

若い婦人は上から下をのぞいてゐる。私はその時さう思つた。この婦人はあんまり笑ひ顔をしない人だが笑はして悪いと云ふ事はないはずだ。一つにつこり笑つたお顔を拝見し樣とかう考へてちやうど靴をぬぐために體を前にこゞめてゐたからぐつと顔を横に向けて下から見上げるやうにすると、向ふも私と氣がついた。そこで私がにつこり笑ふと、向ふでもにつこり笑つた。

□

下町は追ひ羽根が早い。新片町の細い路地を通ると、見知り越しの半玉たちが羽子板を重ねて通せんぼうをする。

兩側に藝者屋の格子の多い、しめつた空氣の流れてゐる、晝でも暗い路地の向ふから一人の藝者が湯に行くのだと見えて、手にはお化粧道具のはひつてゐる籠をさげて、大きな白いタヲルをかゝえてやつてくる。それがまた髷揚げで兩方の鬢を笠のやうにひらいてゐるので私の目にはをかしい。

藝者が來たので半玉たちの羽子板の關所を通りぬけることの出來た私は、藝者のさしてゐる髷揚げ櫛につき當りはしないかしらんと心配して、通りすがりに體を曲げた。藝者はすまして行つてしまう。ふり向いてうしろからながめると、髷に羽根がはえてふはふはと飛んで行くやうである。私はあきれて立ちどまつた。

藝者なぞと云ふものは、座敷着を着たときの自分ばかりを本當の自分だと思つてゐるから、不斷はどんな恰好をしてもいいと思つてゐるらしい。まして湯に行くときには、これから、もとでのおつくりをしに行くのだから、まだ人に見せるための自分ぢやないと思つてゐるに違ひない。さもなければあんな莫迦氣た髪をしておもてをあるけるものではない。

と、かう思ひながら私がぼんやり見とれてゐると、半玉たちは、何を見てゐるのかと、私の眺めてゐる方を見渡した。長い路地には今の藝者が歩いて行くばかりである。半玉たちは二度三度、私と藝者のうしろ姿をくらべて見たが、やつと、藝者が髷揚げで上げた髷の出ッぱりに私が驚いてゐると氣がついたものか？さうしてそれが自分たちにも今更をかしく見えたものか？半玉たちは羽子板をそのまゝ自分の髷へあてゝ、もう見えなくなつてしまつた藝者のあるく眞似をして、路地を向ふへ歩いたが、そろつて私を振りかへつた。

さうして、私と半玉たちは、につこりと笑つた。

□

するとうしろの格子が明いて、

『おや、いらつしやい。』と、私に聲をかけたのは、德松川屋の德二と云ふ姐さんだ。いつものやうにハイカラに結つて、羽織なんかを着てゐる。顏にはお白粉の氣もない。格子につかまつてゐる左の指には、新しく買つた千圓のダイヤモンドが光つてゐる。

あがれと云はれたわけではないが、あがるにきまつてゐる家だから、私はあがり込んで長火鉢のこちら側で洋服の足をのばした。一本になつたばかりの、お光坊が脇息を持つて來てくれた。私はそれに凭りかゝる。火鉢の向ふへすはつた德二ねいさんが、お出花をついでだす。私は先づ優待されてゐるわけだ。

すると、次の部屋でお化粧をしてゐた、お梅藝者。これは公園をよしてこの柳橋へ出てゐたが、こゝでももう廢業して今では素人になつてゐる。それが、鏡臺を抱え込んで二階へ上つたまゝ卸りて來ない。それには德二ねいさんは氣がつかない。

『ときにねえ、何か御馳走しやうか？』とねいさんが云ふ。

『また西洋料理か？日本の西洋料理はたべる氣にならないからなア』と私が云ふと、

『どうせお前さんはハイ[illegible]』と、[illegible]でもりさうに、德二姐さんは次の間をのぞき込んで、

『ハイカラさんてば、うちのハイカラさんはどうしたへ。いままでそこにゐたぢやないか？』と、そこで雜誌を讀んでゐるお光坊に訊く。

『いま鏡をもつて二階へ上つたことよ。』と、お光坊は答へた。すると姐さんは天井を向いて大きな聲で、

『おい、御令孃どうしたんだね。卸りてお出でよ。おつくりをするんなら下でしたらいいぢやないか？』と、云つた。二階から聲がして、

『でも、榮太さんが來てゐるから』と云ふ。

『榮太さんが來てゐたつていいぢやないか？勝浦くんだりまで行つて時鐵を喰はして置きながら、今更氣取つたつて駄目だよ。』と、德二姐さんはすつぱぬく。

お光坊も、そこで針仕事をしてゐた千鶴子さんも、半玉のお文ツ子も、みんな私の顏を見て、につこり笑つた。

□

藝者屋の晝は靜かだ。建て込んだ下町の、明り取りの惡い家のなかは、氣が滅入さうだ。

藝者たちは皆んな、くる晝の華やかな座敷の事でも思つてゐるのか？それともやかましい待合の女將の御意見を、どう云ひのがれやうかと、そんな事でも考へてゐるのか？みんな默つてものを云はない。私はそのなかにまざつて、千鶴子さんの針仕事の二尺の物指を手に持つて、それを撓はしたり、爪でその目をひツかいて、細い音をたてたりしてゐた

『あたし、子供が欲しいわよ！』と千鶴子さんは、だしぬけに云ふ。

『欲しければこしらへたらいいぢやないか？』と、私としてはこれよりほかに云ひやうはなかつた。

『だつて出來ないんですもの。』と、千鶴子は云ふ。

『出來ない？なぜ？なぜ？』

『なぜでも』と、千鶴子さんは云つた。

私の腦のなかには、或る想像が、ひらりツと、鳥影のやうに描かれた。

『うム』と、私はだまつてしまつた。

あたしはその時、新聞を手にしてゐる德二姐さんを見た。雜誌をよんでゐる光子を見た。私のためのお料理をあつらへに行かうとしてゐる文子を見た。さうしてまた千鶴子を見まもつた。もう廿四五にならうとしてゐる千鶴子を、性の世界のうちに置いて、また愛の世界のうちに置いてながめた。千鶴子の爪はそれにしても靑かつた。

『ぢやアしかたがないぢやないか？』と、私は云つた。

『だからさ、あなたがどこかでこしらへて來て、あたいに頂戴よオ』と、千鶴子が云ふ。

『本當にお前さん。どこかで一人こしらへておいでよ。澤山貰ひ手があるから』と德二ねいさんも口を出す。

『生憎、相手がないのでねえ。』と、私は云つたが、然し私だとて、人間の生活をしてゐる以上は、いつなんどき、どこでどんな間違ひをしないとも限らない。さうした時には、そのてゝ無し子は、かうしたところで活きてゆかなければならない。さうして活きて行つた末が、女の子ならば、また男の子ならば、と丁度自分にさしかゝつてゐることのやうに、そのてゝ無し子の運命の、末の末まで考へた。

私の目には、緣起棚のわきの硝子戸棚のなかにある、二つの大きな人形が映つて來た。

『あれは誰れの人形だえ？』と、私が聞くと、

『あたしのお人形さんよ』と、千鶴子が云ふ。空な命を盛られてゐる人形は、誰れをながめてゐるともなく、その黑い目を瞶つてゐた。

人形を愛してゐる千鶴子さんと、千鶴子さんを愛してゐるお人形。若しもその淋しい心のほんとうの姿を、お互ひに見ることが出來たならば、そのまんまでは一日も活きてはゐられないだらう？

『その物指を、ちよいと貸して頂戴な。』と、千鶴子さんが云ふ。

私は、それを千鶴子さんに渡した。千鶴子は向ふのはじを持つて引かうとする。とたんに私が引き返すと物指は、私と千鶴子の間にあつて、冷たい二尺の隔りを同じ竹のまんなかでつぎ合はした。

私と千鶴子さんは、につこり笑つた。

□

お光坊は十八だ。この間までは友禪に赤半襟のお酌さんだつた。一本になると直ぐ重い病氣にかゝつて命の瀬戸ぎはまで行つたが、直つてのちはめつきり老けた。好物の蜜豆は講談倶樂部に變つてしまつた。

いつになく銀杏返しに結つてゐるその髮たぼのふくらみが、丸顏によく似合ふ。こゝの家ではこれが一番の美人だ。肩あげのあとのある袂の長い柔ものを着卸して、それでも勝手元のお手傳ひはしなければならない。私のための御料理のこゝろひまを臺所でお葉漬を出してゐる。手を水に漬けて膝を洗ふのが冷たいと思つたか？鐵瓶のお湯を取りに、長火鉢のところまでもどつて來た。長い袂の紅絹の裏が、私の顏をかすめて行く。

私はその先をにぎつた。鐵瓶を取らうとするお光坊は袂が重いからふり返ると、その先は私の大きな手のなかにかくれてゐる。二三度かるく引いて見たが私がなかなかはなさない。今迄に、こんなことを、私にされた覺えのないお光坊は、まだ幾分か娘ごころが殘つてゐたと見えて、さツと、顏を赤くした。

ところを私ににつこりと笑はれて、さもきまりが惡るさうに、につこり笑つた。

□

水口の戸が明いて、お文ツ子は歸つて來た。

『たゞ今。あの、すぐ持つて來ますツて。』と、云ひながら板の間へ手をついて、雜巾で足の裏をこすつてゐる。なんぼ下町の子だからツて、この寒いのに足袋もはかない。簪の赤い總が引き窓からさしてくる光のなかにゆれてゐる。

『御苦勞さま』と、私が云ふと、

『どう致しまして』と、云ひかたが輕い。

「お文ちやんもこの頃は、なかなか愛嬌が出て來たねエ」と、私がほめると、

「どうもありがとう。」と、御祝儀でも貰つた時のやうな調子で云ふ。

そこを私がにつこり笑ふと、向ふでもにつこり笑つた。

□

ちやうどその時、徳二姐さんが、新聞の小說を見てしまつて、顏をあげたが、烟草を吸はない姐さんは、ちよいとぼんやりしてゐた。

そのうちに姐さんの指は、長火鉢の引き出しの摘にかゝつたが、それをずるずるツと引き出した。姐さんは、そのなかゝら小さな圓い紙切れや、四角な色のついた紙切れを出した。さうしてそれをちよいと見ては、またちよいとふせて、何か口のうちでぶつぶつ云つて考へてゐる。

私は、笑はないわけにゆかなかつた。なぜならば、その紙切れと云ふのは、それは舶來の化粧品の入れものや壜のおもてに貼つてあるレツテルで、徳二姐さんは、但しどこかの奧樣のやうな風をして、三越や、白木屋や、資生堂へ、化粧品を買ひに行くたびに、レツテルの横文字が讀めないで、いつでも賣子に恥をかゝされるさうである。それがくやしくツて、近頃では、私から、せめてそのレツテルの文字だけでもいいから讀めるやうになりたいと、その御稽古をしてゐるのである。

ポンピアン、ビユーテー、パアダアは、もうとツくにあげて、今では、コンビネーション、クリーム、ジヨンテールと、それから、ビユーテー、アツト、ユーア、フインガア、チツプス！。美人におなりになる方法は、あなたの指の先に御座います。と、云ふ、その標籤を暗誦してゐるところである。姐さんが讀み上げると、淋しい顏の千鶴子さんまで笑ひ顏になる。

「それはさうと、二階のハイカラさんはどうしたえ、また泣いてゐるんだらう？おまへ一寸いつてごらんよ。」と、徳二ねいさんは、お梅ちやんが氣になつて、千鶴子藝者に云ひつけた。千鶴子は立つて階子段の上り口から、

「お梅ちやん！どうしたの？おりていらつしやいよ。」と云ひながらのぼつて行つた。

二階では、がつたりとも音がしない。廢業してからその後のお梅ちやんは、どこが惡いと云ふ事もなく病氣である。それは想像の出來る病氣だ。

二人は揃つて階子段から降りて來た。お化粧は出來上つてゐたはずの、お梅藝者のその顏は、洗つたやうになつてゐた。の

みならず目は潤んでゐた。相變らず七三に髮を分けて、素人くさいなりをしてゐるお梅ちやんは、長火鉢のわきへ來てすはつた。たゞそれもなんにも云はない。千鶴子はまた、針仕事をしだした。姐さんはジョンテールを操り返してゐる。

『どうも、お待ち遠うさま』と云つてはひつて來た、御料理を、お膳の上にならべるので、お光坊と、お文ッ子は、台所で忙がしい。七軒町の一高女を卒業した令孃藝者を私はつくづくと見守つた。

廿にしては老けてゐる。遂いこの秋まで色つやのよかつた顏は、どことなくすさんでゐる。私の目とお梅藝者の目は、避けやうもない同じ視線の上で逢つた。

私は氣がついてゐる。それは全く私の體そのものに義理をたてゝくれたのだらう？

お梅藝者は、私の顏を見つめてゐる。何にも云はないけれども。若しさうであつたとしたら私が感謝してゐると云ふことは知らないだらうけれども？

『なんだねえお前さんたちは、喧嘩するのかい？』と、徳二ねいさんは云つた。

私と、お梅藝者は、淋しげに、につこり笑つた。

□

ピストルの音がする。七八人の若い女の叫び聲がする。一發、二發、三發、四發、女の叫び聲がする。男の怒鳴る荒々しい聲がする。それが、ぱッたり靜になる。

そのうちちに女と男の合唱の聲がきこえて、オーケストラの音がまざつて、やがて、大勢の人が拍手したり口笛を吹いたりする音がちやうど地獄の騷ぎのやうに下の方から聞こへて來る。私はいま早稻田座の樂屋の廊下に立つてゐる。舞臺ではオペレツト女の力を演じてゐるところである。

障子を立て切つた小さな部屋は、そのなかに明るい灯を包んで、廊下の片側にいくつも並んでゐる。廊下のつき當りにもやつぱり同じやうな部屋がある。その前に大きな角火鉢があつて印絆纏を着た一人の老人が、私の方へは後ろをむけて、何かに腰をかけて、小さくなつて火にあたつてゐる。

つき當りの障子はぴつたりしまつてゐる。なかの明りが、それに輝くオレンヂ色を反射してゐるから、老人の後ろ姿は、はなれてゐる私の目には、動きもしない黑い塊りになつて見えた。私は何氣なくそれを見てゐた。

すると障子に人の影がうつる。なかからうつる人の影絵は、

はじめは男だか女だかわからなかつたが、なかの人がだんだん障子に近づくと見えて、影はだんだん小さくなつて、その輪廓をはつきりと見せて來た。髮と云ひ袂と云ひそれは女の影である。なかの明りに向つて立つてゐる影繪である。それはたしかに女優である。

影からは長いものがほぐれて落ちた。蛇のやうな長いものが、うねうねと落ちた。それは女優がしめてゐた帶をほどいたのであらう。

そのうちに影が左右にひろがると思ふと、そのひろがつた影は音もなく、ふはりと落ちて、落ちたあとには、形のいい一糸かけない影繪の裸體があらはれた。影繪はこゞんだ。影繪は横向きになつた。

障子の前に縮まつてゐた黑い塊りは、その石のやうな靜かさから動き出した。火鉢に當つてゐた老人は、ぬつと頭をあげた。あげた頭はそれツきり動かなかつた。明るいなかで美しい影繪が、美しい線を描くその前で、暗い冷たい醜いものは、一度動いたツきり、もう固くなつてしまつてゐた。

然し長火鉢の火は、あの老人を暖めてゐるだらうと私は思つた。

私のうしろのドーアが明いて、外國にゐたときからの友人の畑中蓼坡が出て來た。畑中は私のうしろに立つて、私が見てゐるのと同じものを見た。

『何を見てゐる？』と云ふから、

『あの、火鉢で股をあぶつてゐる老人を見てゐる』と、私は答へた。

さうして私と畑中は、顏見合はせて、につこり笑つた。

□

舞臺からは女の力の最後の合唱がきこえてゐたが、それがやがて喝采の聲に變つたと思つてゐるうちに、階子段の向ふから一團の女優の群を先にして、野蠻人に扮した男優たちも上つて來た。女優はみんな青い目曲を目のまはりぢうに入れて赤い毛の鬘をかぶつて西洋のガールスの着付を着てゐる。莫迦々々しくもあり綺麗でもある。女文士ブロークン、ブラッサムの顏も、音樂家アリス、エリオツトの顏も、タイピスト、アンナ、スチユアートの顏も、私にはみんな同じに見えた。

部屋々々の障子は明いた。廊下には明りが流れて俳優たちが行き來して急に賑かな笑ひ聲がきこえ出した。石井漠の部屋をのぞくと漠さんは、舞踊詩、默禱に出る、男性の扮裝をしてゐた。エヂプト式の衣裳の上に青い珠や黑い珠をかけてゐた。今

幕が明かうとしてゐるチプシイの流れに出やうと云ふ杉芳夫は、お鼻の低いのをつぎたした付け鼻が、いつの間にか落ッこちて、どツかへなくなッてしまツたと云ッて大騷ぎやつてゐる。それからまた片方の女優部屋をのぞいて見ると、ボツカチオの一幕に出やうとしてゐる年若の女優たちは、赤と青との華美なローブのその下に肉色の絹メリヤスを腿にも脛にもはちきれさうに穿き込んで、踵の高い編み上げの女靴をその足に入れやうとしてゐる。あたりは、脱いだ衣裳や、ほぐれた鬘や、白粉や、鏡や、刷毛や、小道具が、亂脈に散らかつて足を踏み込むところもない。女優たちの白い顏と赤い唇と黄色い聲の話し聲は、部屋中を照らす電氣燈のなかで、渦を卷いてゐる。

ふと、私は自分の立つてゐる足もとに、小さな机を据えて、小さな鏡をその上へ置いて、小さなお白粉壺からお化粧をしてゐる小さな女優のゐるのに氣がついた。頭には赤い毛の鬘をかぶつてゐるが、着てゐるものは垢に縞目もわからないやうな木綿の筒袖。それを着流しにした下へ、赤い短かいスカートをつけて、よごれくさつた白い木綿の靴下を、それも皺だらけにして、穿いてゐた。さうしてそこへはきらびやかな明りもさゝない。暗い陰はこの小さな女優を廊下の隅で、部屋のなかとは違つた淋しい空氣のなかに消してゐた。

そこの机の前の壁には、この十四か十五になる、小さい娘の藝名を書いた紙切れが貼つてあつた。こんな小さな娘でも、女優としての名を持つてゐるのかと、讀むともなしにそれを讀むと、横山鶴枝と書いてあつた。運命は不思議なものだ。これが未來の大女優の名でないと誰が云へやう？私は横山鶴枝の顏を見た。鶴枝は赤い細いリボンをその鬘に卷いてゐた。

綠の凹凸を入れた目で、鶴枝は私の顏を見上げた。顏にくせのない、目のさつぱりしたいゝ子だつた。

私が、しみじみと見詰すと、そこには何んにも意味はない。この小さい女優は、につこりと笑つた。

□

十六夜と云ふ花魁と、私は顏を見合はせてにつこり笑つた。白いうすいやはらかい花びらのやうなものは、花魁の口に吸はれてそのほそい指さきにからまつて、人肌のぬくもりに甘い薫を包んでゐるびろうどの襟のなかにかくれて行つた。

その笑ひは用もないのに二人が甁を地に落して割つたその時の笑ひだつた。お互ひにつまらない事をしてしまつたと云ふ笑ひだつた。につこり笑つた笑ひには違ひないが、いやな笑ひだつた。しかし人間としてお互ひに笑はなければならない笑ひだ

つた。

十六夜の心持は、がつくりと傾いた兵庫髷のふるへとともに、硝子に感じる光のやうに、その幻影を私の胸に燒きつけた。けれども同じ瞬間に、私の心も、もう朝の部屋の障子にさしそめた日影をこめて、十六夜の胸の鏡に映つたに違ひない。

水戸で藝者をしてゐたと云ふ十六夜は、まだ枕もかはさない初會の客の私に、お部屋の借りをかき口說いた。私はその時ひやゝかに笑つた。ひやゝかに笑ふよりほか、しかたはなかつた。この花魁に答へ得る、それが私のせめてもの眞實だつた。

女としてのどん底の生活を續けて來た十六夜には、私のそのむき出しの眞實は、わけなくわかつた。十六夜は、もう借金の積つた話はしなかつた。さうしてほかの座敷で夜つぴてならす鼓や太鼓や三味線の音や。藝者や客が歌ひ明かす歌の聲や。部屋の外の長い廊下を、しツきりなしにばたばた通る草履の音や。耳に一ぱい聞こえて來るさまざまな物の響きを聞きながら、もう拋げ出すよりしかたのない、そのからだを横たへて、緣もゆかりもない私に人間の見るべき夢を結びつけて寢たものだ。そこには嘘も僞りもない。拋げ出す心は私とても同じことだ。人間として持つてうまれた約束にしたがつて、その十六夜と並んで寢た。かうした女の持つてゐる拋げ出した心持は、どう活きても一生は同じことだと思つてゐるかうした男の胸のなかでは溶けやすかつた。

騷々しかつた一夜はすぎて、吉原の、ひつそりとした朝が來た。活かすとも殺すとも勝手にしろと拋げ出した二つのからだはまた朝の明るい夢のそのなかに並んでゐた。

見ても見なくつてもいい夢を、見たツて何のやくにもたゝない。だが、見てしまつたものをしかたがないと云ふ心持が、十六夜のにつこり笑つたその笑ひのなかに讀まれた。

割つても割らなくつてもいゝ甕だ。その酒を貯へて、その香ひを貪む必も惡くはない。けれどもその甕を手から落して、貪い酒を地のなかに吸ひこませるのを罪だといふのは、地に活きる生を呪ふた人々のさもしい誇に過ぎないのだ。私はたゞ、その甕を割りたかつたから手から下へ落したのだ。甕は割れた。酒はこぼれた。どうなるものか。私は、につこりと笑ふよりほか何んとしやうもないではないか。

新造たちは次の間で、十六夜と私のたべる朝餐の用意をはじめてゐる。八端の部屋の褞袍をうちかけられて、立つて見る不二樓の中庭は、ひろびろと光つてゐた。

歳首歳晩俳諧言

田中貢太郎

一

『蝸牛角上何事を爭ふ。石火光中に此身を寄す。富に隨ひ貧に隨ひ且ツ歡樂せん。口を開きて笑はざるは是れ癡人。』と白樂天は云つてゐる。どうせ石火光中にゐる體だ。いつなん時、南無阿彌陀佛になるか判らないから、金があれば金があるやうに、貧乏なれば貧乏のやうに、悠悠と眼前の現實を樂しむのが吾輩の主義であるから、歳の暮が來ても新年になつても、別に嬉しいとも悲しいとも思はないが、歳の暮になると忘年會、新年になると新年宴會と云ふやうに、酒の日が續くので、宿醉の苦しみは思ふてみるのも厭だが、酒徒として多少の思出を持たないこともない。

『九街の雞唱瑞氣新なり。簪笏朝正紫宸に簇る。誰か識らん席門高臥の者。木綿衾裏亦た春を生ず。』とは頼山陽の歳首に對する感慨である。都大路に新年が來て、百官が紫宸殿に簇るなど、新年は貴人の獨占のやうな感じがするが、顯貴に媚びずに席門に高臥してゐる高士の、木綿の夜具の中にも新年が來たと、痩我慢の中に布衣の氣概を見せてゐるが、酒は劍菱でなくては飲まないなどと大きなことを云ひながら、その實、赤鰯で酸つぱい酒を飲んでゐた山陽の氣概だと思ふと甚だ頼母しくない。しかし、詩としては吾輩の趣味にあつてゐる。何時であつたか桂月翁が、濱名湖畔で越年した時、年賀の端書に、兎のやうな耳をした男が蒲團から首を出してゐる繪を畫き、それに赤鉛筆で旭日にした圓い輪を添へ、「蒲團から頭だけ出す初日かな」と、云ふ句を書いたのを送つて來たことがあるが、木綿衾裏亦春を生ずの句と一脈相通ずるものがある。

『去歳荊南、梅、雪に似たり。今年薊北、雪、梅の如し、共に知る人事何ぞ嘗て定まらん。且つ喜ぶ年華去つて復た來る。邊鎭戍歌連日動く、京城の燎火、明に徹して開く。遙遙、西、長安の日に向ふ。願くば上(たてまつ)らん南山の壽一杯。』とは張說が幽州

の作である。その時、張說は幽州の都督となつて得意であつたから、その調も飽滿である。去年荆州の南にゐた時は、罪を得て貶謫せられてゐたが、その土地は暖い土地で、梅花が雪のやうに見えた。今年は薊州の北、則ち幽州に都督となつてゐるが、寒い土地で雪が梅花のやうに見える。人事はすべて定まつてゐない。かく土地は荆南と薊北との相違はあつても、春が時を忘れずに復た廻つて來たのは喜ばしい。僻遠の地では、戍兵の軍歌が每日のやうに聞えて殺伐であるが、京城の地では、朝庭の庭火の光が朝まで照らして、百官が朝賀するであらう。吾も遙かに長安の日を拜して、南山の壽杯を奉りたいと得意滿腹の詩であるが、もともと貧富一如、生死一如の吾輩の眼から見れば、山陽の木綿衾裏の新年も、都督府中の新年もそれぞれ面白い。徒らに富豪貴顯の新年を罵倒するのは、嫉妬妄執の致すところだ。吾輩に云はすると酒が足りないからだと思ふ。

かうした眼から見ると、王安石の『爆竹聲中一歳除す。春風暖を送つて屠蘇に入る。千門萬戸曈曈の日。總て新桃を把つて舊符を換ふ』と云ふ詩でも、林季謙の『燈を焼いて城市又新年。璧月樓臺萬管絃。獨り廣文の窮相眼有り。一窗の燈火殘編を照す』と云つたやうな机の上で出來た微温的な叙事詩でも、それぞれ趣がある。陸放翁の『今歳晴和歷歲無し。江城歌舞通衢に遍し、天心只だ人心に向つてトす。用ゐず殷勤紫姑に問ふを』の詩も面白い。

歳首の感慨は、歳も運命もこれから改まると云ふ迷信から、光明をともなつてるが、歳晩の感慨は、おし詰つた暗黒をともなふた悲痛なものが多い。『旅館寒燈獨り眠らず。客心何事ぞ轉た凄然。故鄕今夜思ひ千里。霜鬢明朝又一年』は高適が除夜の作であるが、それは旅館の燈火は寒く、旅人となつてゐる私は淋しくて眠れないが、故郷では今夜千里の遠くにをる私のことを思つてくれてゐるだらう。その私は明朝又一ツ年を取るのであると云つて、志を得ずして空しく道塗に老ゆる悲しみと、旅中の悲哀を綯ひ交ぜたものである。かう云つたやうな旅で歳晩に逢ふた詩は非常に多い。蘇東坡が除夜に常州城外に宿した詩に、『行歌野哭兩(ふたつ)ながら悲むに堪へたり。遠火低星漸く微に向ふ。病眼眠らず歳を守るに非ず。鄕音伴(とも)無く苦(しきり)に歸を思ふ。重衾、脚、冷やかに霜の重きを知る。新沐頭輕くして髪の稀たるを感ず。多謝す殘燈客を嫌はず。孤舟一夜相依るを許す』と云ふのがある。これは常州城外の細民が饑饉に苦んで、行歌夜哭する容を見ると悲しみに堪えない、そんなことで寝られないので、遠近に眼をやると、遠くに見えてゐた火の光も、傾いた星の光も何時の間にか曉の景色になつて來た。しかし、この眠られ

ないのは病のためで、歳を守つてゐるためではない、のみならず故郷のことを話しあふ友もないので、頻りに故郷のことが思はれて歸りたい、この宿は城外の地であるから夜具を重ねても霜がおりて脚が冷たい。又頭に櫛を入れてみると、頭が輕いので髪の毛の薄くなつたことが判る。かうした悲哀の中で親しくしてくれるは、燈火のみであると云ふ心細いたよりない詩である。戴叔倫が石頭驛に宿した時の『旅館誰か相問ふ。寒燈獨り親しむべし。一年將に盡んとするの夜。萬里未だ歸らざるの人。寥落前事を悲しむ。支離此身を笑ふ。愁顔と衰鬢と。明日又春に逢ふ。』と云ふのも、これと同巧異曲であるが、要するに皆あまりに功名に齷齪した油臭ひ句があつて厭である。頼山陽の『一たび郷關を出でて歳再び除す。慈親消息定めて如何。京城の風雪人の伴ふ無し。獨り寒燈を剔つて、夜、書を讀む。』の詩は、あまりに書生さんらしい。

由來漢詩は、誇大で外面的に流れるものであるが、そのかはり的確な文字を用ゐたとなると、短言寸句の中にも天地宇宙を藏することが出來て、歳暮歳晩などの感慨を述べるには、高雅で莊重で非常に適してゐるが、人の肺腑を剔ると云ふやうな皮肉な旨がない。そのないところが又漢詩たる所似でもある。

二

話が岐路へそれて漢詩の註解のやうになつたから、これから本道へもどつて話さう。いつたい石火光中の人間の世の中に、盆とか正月とか云つたやうな區劃のあるべき筈のものでない。人間の區劃と云へば、人間がこの世に初聲をあげた時から、うんと唸つて阿彌陀佛になるまでの間が一區劃である。それを彼れ是れ云ふのは、人間が狡猾になつて、慾と慾とが突つ張りあひ、それが爲めに有無相通ずる物品の交換に勘定日が出來て、それが年に一度となり二度となつて、盆とか正月とか云ふことをやかましく云ひ出したものだ。盆と正月の意味は、借りた物を拂ひ、貸した物を貰つて、有無を平均して、これから次の期間までの新らしい生活を營まふとするところにあるらしい。

今はもう盆と正月の二期拂の習慣も廢れかけてゐるが、地方によつては、まだ依然として古のままで行はれてゐる所がある。現に我輩の郷里などでも、總てとは行かないが、それでも盆と正月の二期が勢力を占めてゐる。もつとも一口に盆と正月と云ふものの盆にはまだ正月と云ふ最後の勘定日が控へてゐるから、二期拂と云つても一期拂のやうなもので、從つて正月の方に意味もあるし、人の頭を支配することも強いので、正月が

一番やかましい。だから吾輩のやうに年に十二回の正月をしてゐる者でも、十二月になつて、月を越す借金でもあると、不心得な商人の中には、『お正月ですから』と云つて來る者があるから、『吾輩の家は、毎月盆と正月をやつてるから、特別に盆と正月はしないよ』と云つて叱つてやる。それからそれとある忘年會の小使ひが重んで、それが爲めに勘定を延ばされる酒屋や米屋も、考へて見れば辛いことは辛い。

何時であつたか明治三十六年頃であつたやうに思ふが、吾輩が高知市にうろついてゐる時分のことであつた。その時分は無論二期拂の上に大晦日が二度あつた。と云ふのは、官衙銀行會社學校などでは、外面的に大陽暦によつて正月をしてゐたが、一般的にはやはり陰暦の方でやつてゐるので、外面的な正月と本質的な正月と二度正月をすることになつてゐた。ところで、料理屋とか酒屋とか云ふやうな所では、それを好い口實にして、二度大晦日を拵へて借金の催促に來たものだ。さうなると一番困るのは、酒ばかり飲んで、うろついてゐる浪人の手合だ。其所で吾輩と、安岡夢郷と云つて、その時分高知の新聞あたりへ小説を書いてゐた男と二人で、第二の大晦日をはぐらかす爲めに徳島へ旅行することにした。

今は高知市から定期の自動車があつて、池田と云ふ町まで自動車で行き、其所から汽車に乘るので、朝、高知市を出發すると、その日の夕方には徳島へ行くことが出來るが、その當時は、乘物と云へば人力車ばかりで、汽車は池田から十里手前のシボウと云ふ所までしか來てゐなかつたから、車で行くにしても二日三日はかかつた。それに僅な借金でさへ延ばさうと云ふ旅行であるから、二日も三日も高い車を雇ふやうな金の有らう筈がない。そんな金があるなら、第一徳島くんだりまで寒い日に逢つて旅行はしない。

其所で二人の懐を合せて十圓足らずの金を拵へた。その拵へるに就いても、安岡君が社でもう三月程向ふの月給の内から十圓前借して、その内から細君に當座の小使ひを渡した後が六圓ばかりと、吾輩が一圓、五十錢と算段した金が三圓ばかりかと云ふ、誠に情ない旅費の拵へ方だ。ところで、いくら物が安い當時でも、四五日の旅行であるし、二人とも酒徒と來てゐるから、どんなに倹約しても、徳島へ着けば一文なしになると云ふことは判つてゐるので、其所は二人でちやんと胸算用を立ててゐた。先づ徳島の新聞へ行つて、何か短い物を書かして貰つて二三日の滯在費を拵へ、その上で撫養で小官吏をやつてゐる安岡君の友人の所へ行つて、其所を二三日の無錢休養所にし、鳴門をはじめその附近を見物してから、それからその友人に神戸

へ渡る船賃を拵へさして、神戸へ渡り、又神戸の新聞社にゐる安岡君の友人から船賃を借りて、其所から土佐行きの汽船で歸つて來やう、さうするなら、債鬼は見事に遁がれる上に、僅か十圓足らずの金で面白い旅行が出來て、一擧兩得だと云ふ、頗る蟲の好い考であつた。しかし、徳島の新聞社には、二人とも知つた者がないので、徳島新聞の主筆の知合の男から紹介狀を貰つてゐた。

高知市から徳島へ行くには、市の北方から北へ北へと國道を歩いて行けば好かつた。はじめ三四里の間はガタ馬車が往來してゐるので、二人はその馬車に乘つて出かけた。馬車は二時間ばかりで領石と云ふ所へ着いた。其所からは登り一里の勾配の急な山坂になつて來る。國道はその山坂を入口にして、二十里あまりの間皆山路で、吉野川の谿間を通つて行く。二人はその山坂をとぼとぼと登つて、吉野川の支流になつた穴内川と云ふ谿川に沿ふて歩いた。そして三里ばかり行つたところで、もう夕方になつたので、小さな木賃宿を見付けて這入つたが、まだなんと云つても十圓近い金があるから、

『山の中も惡くはないね、俗界を離れてて、』

などと好い氣になつて勝光を飲んで寢た。

翌日は宵から催してゐた雨氣の怪しい空が雪になつて、一里ばかり行つたと思ふ頃から、ちらちらと降つて來た。四里ばかり行つて、杉と云ふちよと人家の並んだ小綺い趣のある所へ行つた頃には、晝飯時分になつて來たし、寒くはあるし、一杯やらうと話しながら、這入るべき家を物色して歩いてゐると、店先に馬肉を釣した穢い飲食店が見付かつた。

『好い物がある、此所で一杯やらうぢやないか、』

と吾輩が云ふと、

『馬の肉とは、この際、ちと皮肉だが、好いだらう、』

と、安岡君が同意するので、門口で帽子から羽織にかかつた雪を振ふて、中へ這入り、馬鍋をして貰つて、二合づつなら好いだらうと云つて飲んでゐると、すつかり好い氣持になつて、二合が三合になり四合になり、とうとう二人で一升あまりの酒を飲んで出かけたが、その内に二人は出鱈目な歌を唄ひ出した。そして、車力を見付けると押してやつたが、やつてゐる内に吾輩は宙を歩いてゐるやうな氣になつて來たが、それも判らなくなつて、今度氣が付いた時には、小さな木賃宿の二階に寢てゐた。見ると傍の蒲團に安岡君が寢てゐる。日が暮れて宿屋へ這入つた覺えはないが、いつたい何時の間に宿へ着いたらう、そして、もう何時だらうと思つて、枕元の障子の方を見ると、薄赤い陽の光がかかつてゐる。それではもう朝になつて陽

が出たところだらう、ぐずぐずしてゐては歩けないから、早く安岡君を起して出かけやうと思つてゐると、

『君、眼が覺めたかね』

と、安岡君が此方を見る。

『覺めたよ、もう何時だね、早く出かけやうぢやないか、』

と云ふと、安岡君が笑ひ出した。

『おい君、夕方だよ、君が醉つ拂つて崖の傍で踊りだすもんだから、仕方なしに此所へ泊つたよ、まだ陽は暮れない、』

其所は穴内川が吉野川の本流に合した所であつた。二人はその本流の渡しを渡つて磯谷と云ふ所に泊つてゐた。

馬鍋で豫算が狂ふた上に、とても三泊で徳島へ行けさうにないので、今晩は膳先も一合づゝと云ふことにして、一合づゝ飲んで寢て、翌日宿を出てみると、雪が五六寸も積んでゐて寒いこと夥しい。しかし、それよりも苦しいのは、もう二圓ばかりしか殘つてゐない懐の寒いことだ。やがて晝になつて、宿から貰つて來た燒き飯を喫ふことにして、茶店へ寄つてみると、他に二人ばかり先客があつて飲んでゐるので、それを見ると飲みたくて仕方がない。で、一合づゝなら好いだらうと云つて飲んだ。その時、一合の銚子が一本十錢くらい、高い所で十二錢であつた。

二人の考へでは、その日の内に池田まで行つて置けば、後は徳島へまで二十里ばかりであるから、汽車に乘れないまでも、穢い木賃宿にも一泊するなら綺麗に徳島へ行ける。徳島へ行き着けば酒にも飯にもありつけるから、その日の晝飯ぐらいは食べなくつても好いと思つてゐたから、その日は道草も食ずに歩いたが、雪があるので道がはかどらない上に、吉野川の谿間から吹きあげる氷のやうな風が顔へ當つてまともに歩けない。仕方なしに國境を過ぎたばかりの所へ泊つたが、聞いてみると池田まではまだ六七里ある。さうなるとても懐に持ち合せてゐる金では、徳島へ行けない、で、池田へ行つて着物を一枚づゝ脱いで、それで旅費を作ることに定めた。さう定めてみると、却つて氣が落付いて來て、その晩も一二本づゝ膳先を飲んだものだ。

その日の晝飯は、池田から三里ぐらい手前の川口と云ふ所で食つた。其所は國道筋の小都會であつた。町の入口の穢い茶店へ這つたが、まだ二人の間に金が五六十錢殘つてゐるので、例によつてまた一合づゝ飲むことにして、つけて貰つて一杯飲んでみると、酒が好い。

『この酒は好いな、何所で出來るかね、』

と云ふと、宿の亭主が、

『これは此所で出來る酒だよ、惡くはありますまい、』
と、自慢をする。其所で懐勘定をしいしい、一本十錢の見當にして、金のあるだけ飲んでしまつて、一錢なしになつて、池田の町へ這入つたが、それはもう七時頃であつた。

それから着物を處分して、金を拵へなくては宿屋へは這入れない。着物を處分すると云つても勝手が判らない。假令古着屋か質屋かが見ツかつたにしたところで、怪しい旅人からは、買ひも預かりもしてくれない、こんな場合には警察へ行つて事情を話して、警察から聲をかけて貰ふより他にしやうがないと云ふことを、二人は道道話し合つてゐたので、池田へ這入るなりすぐ警察へと行つた。

警察では刑部か巡査部長か平巡査ではないらしい警官が一人事務を取つてゐたが、夕飯の時、一杯やつたものと見えて赤い顔をしてゐた。二人は平常の調子で警官を怒らしては宿へも這入れないと云ふ怖れがあるので、恭しく頭をさげて、まヅ安岡君が、

『私は高知市から、徳島市へ行くもんですが、旅費がなくなりましたから、着物を賣りたいと思ひます、警察の方で保證をして戴きたいですが、』

と云ふと、警官は迂散臭さうに二人の姿をぢろぢろと見はじめた。よれよれの銘仙の羽織を着た、二人とも揃ひも揃ふて胡亂な顔をした、それでゐて、書生でも勞働者でもない風態を職掌柄怪しむのも無理はない。警官はぢろぢろ見た後に、

『いつたい、君達は、何だい、』

と、頭ごなしにやつて來た、平常であつてら決して默つてゐないが、うつかりすると一晩寒晒しになる怖れがあるので、なかなか怒らない。住所姓名職業まで名乘ると、

『君達もさう云ふ職業をやつてゐるに似合はないぢやないか、いつたい高知市から徳島市まで幾日かかると思つてるんだね、此所へ來て旅費が一文なしになるなんぞは、はじめから徳島へ行くつもりぢやなかつたらう、どうも君達は怪しい、確に高知市から徳島市へ行つてると云ふ證據があるかね、』

と、もう罪人扱ひだ。惡くすると浮浪罪でこの警察の留置場へ投り込まれて、高知市の方へ問ひ合せをするまで置かれるではないかと思つて心配してゐると、安岡君が好いことを思ひついた。それは徳島の新聞社の主筆に宛てた紹介狀であつた。

『紹介狀があるんです、』

警官はその紹介狀を開けて見てから、二人に對する不審が晴れたと見えて態度も變つて來た。

『警察から保證してあげる譯にいかんが、君達が此處へ來る

時に、右側の角にあつた宿屋へ行つて、警察から敎へられて來たと云つて、主人に相談するが好い、宿屋から聞きに來たら、好いやうにしてやる、』

其所で二人は警官に敎へられた宿屋を搜して行つた。搜して行くに就いても金がないやうなふうをしてはあげてくれないので、昂然と這入つて行くことにして、這入つて行くなり、安岡君は、

『今晩、厄介になるが、室があるかね、』

とやつたものだ。云ふことを忘れてゐたが、安岡君は長く東京にゐて、東京言葉を使ひたい病氣があるので、そんな時には非常に都合が好い、時間は警察で手間取つて八時を過ぎてゐた。其所で二階の室へ通されたが、金の方法がつかない限りは、無錢飲食になる怖れがあるので、夕飯を安心して喫ふことが出來ない。それにはすぐ主人を呼んで着物の處分のことを相談しなくてはならんが、そのすぐ主人を呼んで相談すると云ふのが體裁が悪いし、悪くすると面倒だと思つて宿をことはられる怖れがあるので、川口で遲く喫つた飯がまだ殘つてゐて別に空腹じくもないから、今晩は諦めて寢た上で、朝になつて徐ろに謀をめぐらさうと云つて、飯はと聞きに來た女中に、道で濟まして來たと云つて、そのまゝ床をとつて貰つて寢たものゝ、其所は料理屋と旅館兼業してゐる家で、隣の室へは二三人の客が來て、女を相手に騒ぐので、忌忌しくて仕方がなかつたが、閨の中が温まると共に、雪の中を長く歩いた疲れが出て來て眠つてしまつた。

朝になつて顔を洗つて、これから主人を呼んで着物の始末を頼まうと思つて、二人で相談してゐると、もう女中が飯を持つて來た。しかし、金が出來るやら出來ないやら判らないに、飯を喫ふのは面倒だから 思ひ切つて、

『主人にちよと逢ひたい、今すぐ呼んで來てくれないかね、』

と云ふと、女中が出て行つて主人と入り代つた。

『旅費がなくなつて、着物を賣らうと思つて、昨夜警察へ行つたところが、君の家へ相談するが好からうと云つて敎へてくれたから、やつて來たが、どうかならないだらうか、』

と云ふと、

『質に置くがよろしうございます、困つたものはよく置きますよ、』

と事もなく云ふので、二人は安心して二枚重ねてゐた着物を一枚づつ脱いで、主人に渡して飯を喫つてゐると、一圓八十錢になつたと云つて金を持つて來てくれた。

其所で六十錢を二人の宿賃に拂つて出發した。その日が舊の大晦日で、かけ取りらしい人が家家の門口を出入りしてゐた。道にはまだ雪がいちめんに殘つて寒かつたが、薄陽が射して風がないので、歩くには都合が好かつた。晝飯も喫はずに、その一圓の金を大事に持つて行けば、德島までは行けないかも判らないが、市の傍まで行けるだらうと云つて、はじめは晝飯も喫はずに停車場のある所へ行つて、夜行の汽車に乘ることにしてゐたが、晝頃になつて一杯欲しくなつて來ると、どうせ德島までは行けないから、一泊して、明日ゆつくり行かうと云ふことにして、また茶店へ這入つて、二人で二三本飲んで、その日は豫定通り十里の道を歩いて、停車場もよりの木賃宿へ行つて泊つた。

その時、殘つてゐた金が九十錢ぐらいあつた。二人の泊り賃だけなら七十錢あれば好い、後の二十錢で二本飲まうと云つて、二本飲んで朝勘定を取つてみると、一圓になつてゐて、十錢足りない。吾輩もまだ若かつたし、ただ金が足りないとは云ひたくないので、まだ安岡君が女中に金を拂つてゐる時、下へおりて來て、店先にゐるお神さんに、

『金が十錢足りないですが、もつとも汽車賃の方からそれを取ると好いが、取ると今日中に德島へ行けないやうになりますから、濟みませんが、十錢貸しておいてください。』

と、變な見榮を張つて云ふと、

『今日は目出度い元日でございますから、へえ、もうよろしうございます。』

其處へ安岡君から金を受け取つた女中が、とんとんと二階からおりて來た。

『お客樣は金が十錢足りないと云ひますが。』

と云ふので、吾輩は氣まりが惡くなつて、履かうとした草鞋を持つたなりに外へ出て外で履いた。

それから二人は德島へ向つて歩いたが、もう晝飯も喫へないので、雪を喫つてみたり、路傍の畑に取り殘されてゐる蕪を引いて噛つたりして、やつとその夜の八時頃、德島市の稻荷町であつたか町の名は忘れたが、其所の宿屋へ澄ました顏をして這入つて行つた。しかし、その晩は腹がペコペコなつてゐるし、新聞の主筆に會へる望みがあるので、無錢飮食のことは忘れて、膳の來るのを待ちかねて、酒を飲み飯を喫つたが、矢張り弱點があるので、空腹である割に旨くはなかつた。これはつまり、一種の詐僞的行爲のために、精神が萎縮してゐたからだ。利益や賣名や見榮や有りとあらゆる惡德を行ふ者に、精神の緊張した、そして赤子のやうな純な心を持つてゐる者はない。人

間としての修養は此所なんだ。孟子は浩然と云ふことを云つてゐる。この浩然の氣は、至大至剛、直きを以て養ふて害することとなければ、天地の間に塞がると云つてゐる。孟子はまた自から顧みて直ければ、千萬人と雖も吾れ行かんと云つてゐる。つまり精神を萎縮させない方法を説いたものだ。すこし道草になるが、『氷河淸話』であつたか、勝海舟の經驗した話がある。海舟が少年の時、お父さんに云ひつかつて、邸内の畑に出來た蕪や大根を、知合の山伏の家へ持つて行てやつた。ところがその山伏は、もと祈禱が上手で、大變に繁昌してゐた者であつたが、どうしたものかその時分は、もうさつぱり流行らなくなつて、裏店へ引つ込んでゐた。海舟が行くと、山伏は大變喜んで話してゐる中に、

『大變、あなたは、人相が好い、屹とあなたは出世なさるから、體を大事にせんければいかん、それに就いて、私が一つ云つておきたいことがありますから、忘れずに覺えてゐらつしやい、お宅の旦那は御承知でございますが、私は大變祈禱が流行つて暮しに不自由をしませんでしたが、妙なことがあつてから、さつぱり流行らなくなりました。それは他でもありませんが、ある時、綺麗な女が私の許へ祈禱を頼みに來ました。それは夫に富籤が當りますやうに祈禱してくれと云ふ頼みでありました。ところで、あまり綺麗な女だもんだから、つい悪戯をする氣になりました。女はそれで歸つて行きましたが、數日するとまたやつて來ました。私はまた悪戯をしようとすると、女は大變に怒つて私を睨み詰め、この前は、亭主に富籤を取らしてやらうと思ふので、默つてをりましたが、今日はお蔭でその富籤が當りましたから、お禮に來たところで、あなたのお相手に來たんぢやありません、と云つて出て行きました。その時分から、私の祈禱が、どう云ふものか利かなくなりました。それにも一つ、正覺坊を喫はうと思つて、生きた正覺坊を買つて來て、料理しやうとすると、正覺坊があの大きな眼を恨めしさうにして、私の方を見ました。私はこんな山伏と云ふやうな荒行をやりますから、精分をつけるために、ときどき正覺坊を自分で料理して喫つてをりますから、平常はなんとも思ひませんでしたが、その正覺坊に限つて、變な氣を起すやうになりましたのが、やつぱり心に疚しいところがあつたからでせう、世の中のとは自分の心にさへ疚しいとがなければ、怖れることはありません。あなたもこのことを好く覺えてゐらつしやい。』

と云つたことがあるが、やつぱり心に疚しいことがあれば、その精神は萎縮するものだ。

三

さて德島の宿屋だが、安岡君の方は、それまでにさんざん世の中を見てゐるので吾輩と心の持ちやうも違つてゐれば、餘裕もあつたが、吾輩はさうは行かなかつた。

朝になつて安岡君が勘定の來ない內に、新聞社へ行くと云つて出かけ、向ふの主筆に逢ふて原稿の相談をする、もし金が出來なければ、宿屋へ保證をして貰つて、その內に撫養の友人から金を拵へて貰つて、二人で撫養に行かうと言ふ相談が出來てゐても、人の懷を當てにしてゐることであるから、不安で堪らない。うろうろしてゐる內に、勘定をつきつけられて、それが拂へないとなると、追ひ出して鹽でもぶつかけてくれるなら上の部だが、そんなことにならずに無錢飮食でつき出され、まだその上で浮浪罪にやられでもすると大變だと思ふので、ゆつくりと眠らない。とろとろとしかけたと思ふと厭な夢を見る。枕頭に釣した有明の五分心のランプの光で見ると、安岡君は安らかな鼾を掻いてぐうぐうと眠つてゐる。

『横着者だな、』

と腹が立つが、考へて見れば、その際なんと思つたところでどうなるものでない。其所が修養だ。刻刻の現實を樂しんで、俳句でも考へてゐれば好い男だが、やつぱり吾輩はなつてゐなかつた。中江兆民が一年半の壽命を宣告せられてから「一年有半」の文章を悠悠と書き、その間に濱寺の公園を散步したり、ある時は細君と一緒に果物を買つて歸りながら、細君と冗談を云つた氣持ちなどは、今の思想家なんて云ふ書生さん達には判らない。

心配しながら朝になつて膳の前に坐つたところで、安岡君は酒の注文をした。こんな場合、酒を飮まなくても好いだらうと思つたが、反對する譯にも行かないので、一緒になつて旨くない酒を飮んでゐた。其所が安岡君の考へのあるところだ。そして悠悠と酒を濟まして、飯を喫ふと女中がまだ膳をさげて行かない內に、

『これから、新聞社の主筆に會つて來るからね、』

その間、間髮を入れないと云ふ敏捷さで、二階をおりて行つた。もし勘定が來たなら、金はあの男が持つてゐるから、歸り次第拂ふと云つて、その場を逃げることになつてゐた。吾輩は安岡君が旨く出て行つたので、やや安心したが、後からすぐ勘定が來さうだから氣味が惡い。そして、安岡君が金の工面をして早く歸つてくれれば好いが、とそれを待つてゐると、女中が這入つて來た。果して女中は、盆に宿泊の宿料を記入した書付を

持つて來てゐる。

『勘定をお願ひします。』

と來た。吾輩は強いて平氣を裝ふて、

『勘定かね、勘定は、今出て行つた男が金入れを持つて行つたから、歸つて來たらすぐ拂ふよ、新聞社へ行つたから、』

と云ふと、女中は本氣にしたのか、そのままおりて行つた。吾輩は、さあこの間に安岡君が金を拵へて歸つて來れば好いがと待つてゐたが、なかなか歸つて來ない。その內に晝に近くなつた。ところではじめの女中がまたやつて來た。また催促に來たらうと思つてゐると、

『お晝の御飯をあげませうか。』

と云ふので、吾輩も安心して、

『あの男は、久しぶりに友達に會つたから、御馳走になつてゐるだらう、その內に歸つて來たら、また貰ふが、今は一人分で好い。』

間もなく膳が來て晝飯を濟したが、安岡君はなかなか歸つて來ない、待ちかねてゐると、ランプの點く時分になつて、飯は來ずに宵に來た亭主が這入つて來た。いよいよ風向きが惡くなつたと思つてゐると、

『お連さんは、いつたい何所へゐらしたんでせう。』

と、もう疑つてゐるらしい。

『〇〇新聞の主筆に會ひに行つたんですが、今日は舊暦の元日だし、一杯飮んでゐるかも判らないです、歸りましたら、歸り次第、宵の勘定は拂ひますよ。』

吾輩の言葉が知らず知らず恭しくなつて來た。主人は吾輩の顏から風體をじろじろと見てゐたが、それ以上づゝこむことが出來ないので、冷然とした同情のない顏をして出て行つた。吾輩はいよいよ疑はれたと思つて考へ込んでゐると、女中が飯を持つて來たが、これも冷然とした顏をして給仕をして行つた。もう酒のことも思はなければ、云つたところで持つて來やう筈がない。

吾輩はその後で火鉢の火を消えかかるのも知らずに、つくねんとして坐つてゐると、女中が端書を持つてあがつて來た。それは安岡君からの端書であつた、すこし都合があるから、撫養の方へ行くが、明日の晩は歸れるから、それまで待つてをれと書いてあつた。

『姐さん、一人の男は急に撫養の方へ行つたから、明日の晩でないと歸らない、旦那にさう云つておくれ。』

と、吾輩はその端書を女中に持つて行かしながら、屹とまた亭主が文句を云ひに來るだらうが、撫養の友人の所へ行つたと

すれば、却つて安心だ、明日の晩には金を持つて歸つて來てくれるだらうと思ふと、心が丈夫になつて來た。其所へ亭主が果して女中に渡した端書を持つてあがつて來た。

『お客さんが、撫養へ行つたさうですが、なにしに行つたでせう、』

『二人は大坂へ行くことになつてるから、それで、早く行つて逢つとかないと、逢へないと思つて、ずつと廻つたでせう、大丈夫ですよ、』

と、吾輩の言葉はやつぱり何所か恭しい。すると亭主は、

『御用なれば何所へゐらつしてもよろしうございますが、私の家は、どんなお客さんにでも、朝朝勘定をして戴いてをりますから。では、あなたからお拂ひして貰ふことは出來ますまいか、あなたがたは、そんなことはありませんが、よくこんなことで間違ひが出來ますから、』

亭主はもう無錢飲食と定めてゐるらしい。

『僕はあの男に一切金を渡してあるから、一錢もないが、なに大丈夫ですよ、まかり違へば、新聞社の主筆から金を借りますから、大丈夫ですよ、明日の晩、あの男が歸つて歸たら、すぐ拂ひますよ、』

吾輩は不審に思はせないやうにと思ふて、それからも安岡君が偉い小説家であると云ふやうなことを云つたが、その結果、明日まで待たうと云ふことになつた。吾輩もその端書を信用して、翌日の夕方を待つてゐると、五時頃になつて電報が來た。その電報は、都合あり神戸に渡る委細文、とした電報であつた。女中に呼ばれて梯子段の下までその電報を受け取りに行つて開けた吾輩は、しまつたなと思つた。

『お客さんは、どうなすつたです、』

と、傍に迂散さうに立つてゐた亭主が云つた。

『都合が出來て、神戸へ行くさうだ、委細文とあるから、金を送つて來るだらう、明日の朝までには、撫養からなら着くだらう、』

と云つても、亭主は返事をしない。吾輩は背が濕いので、そのまま二階へあがつて、自分の室へ這入ると、亭主が追つ駈けるやうに這入つて來た。

『どうも、あのお客さんは、怪しいですね、あなたが金のないことを知つてるし、どうもおかしい、いつたい、あなた方は、何しに德島へ來ました、』

と、もう客の權利を剝脫してしまつてゐる。『あの男は呑氣な男だから、ふら〳〵と一人で行つたもんだ、まあ、手紙の來るまで待つてください、』

やつと亭主を追ひ返して、朝の郵便を待つてゐると、翌日十時頃になつて手紙が來たが、その手紙には、新聞社も撫養の友人の所も都合が悪いから、やつと船賃だけ拵へて貰て、神戸へ渡る、宿賃は神戸で拵へて送るから、待つてをれと云ふ手紙だ。吾輩も安岡君の立場に同情してゐたが、自分を人質に殘して置いてぶらぶらと歩ゐてゐるやうに思はれて癪にさはつて仕方がない。其所へ主人が這入つて來て、

『お金が來ましたか。』

吾輩は仕方なしに、友人が神戸へ渡つて、神戸から金を送つて來ると云つて來た、と云つたが、手紙は見せなかつた。しかし、もう、信用はすつかり落ちてしまつた。亭主は赤裸裸に、

『お前さん達は、金を持つてゐないでせう。金を持つてゐなければ、無錢飲食ですよ。』

と怒り出した。吾輩はもう恥も外分も忘れて哀願した。そして、もし友人に間違があるなら、自分の家へ電報を打つて金を取り寄せるから、友人の後の手紙が來るまで待つてくれと云つて頼んで、神戸からの手紙を待つことにした。が、その後で亭主は、

『今からもうお客さんとしてお扱することは出來ませんから、下へ來て、皆と一緒に御飯を喫つてください。』

其所で吾輩は、そのお晝の飯から、女中に聲をかけられて下へおりて行つた。臺所の板の間へ女中達の膳を据えてある傍へ、小さな盆に茶碗と芋の煮たのとを乘せてあつた。吾輩は仕方なく女中に、

『濟みません、』

と云つて、三杯の飯を入れて貰つた。そして四五日そんなことをしてゐると、安岡君が高知から出した手紙が來て、中へ爲替が入つてゐた。

四

吾輩が、今、勝海舟のことを話したが、あの海舟にも、歳晩の逸話が一つある。やはり少年の頃のことであつたが、その時分、海舟の家は、非常に貧乏で、米も玄米を三合五合と買つて、徳利の中へ入れ、薪のやうな木切れで、それをこつこつと搗いて、それでお粥を焚いてゐた。薪がなくなると、家の根太板を引つぺがして來て、薪の代りにした。さう云ふ境遇であつたから、正月が來ても餅一ツ搗くことが出來ない。何所か本所あたりにゐた親類が、餅をやるから取りに來いと云ふので、夕方、貰ひに行つて、布呂敷に包んで歸つてくると、兩國橋であつたか、廐橋であつたか、その橋の上で結び目が解けて、ばら

ぽかりと落ちた。ところで、ちようど其所に橋板の破れ目があつたので、餅はその穴から川の中へ落ちてしまつた。海舟は残念で堪らないので、暫く橋の破れ目を恨めしさうに眺めてゐた。

勝海舟の話をしかけたから、も一ツ海舟に關係のある話をしよう。それはもう海舟が功成り名遂げて、明治政府の大官となつてゐた時のことらしい。暮に押し詰つて、平常行つてゐた八百松へ飯を喫ひに行つてみると、店の若衆は皆新しい半被を着て威勢よく働いてゐた。海舟は相手に出て來た八百松の主婦に向つて、

『もう正月になつてゐるな、何時も繁昌で結構だ。』

と云ふと、主婦は、

『有難うございます、お蔭様で。』

と、紋切形の挨拶をしてから、

『實は旦那、旦那だから申しますが、今年はどう云ふものか、商賣が旨く行かないので、動きがとれませんが、威勢よく世間體を作つてゐないと、猶更店がさびれますから、半被なんかもあして拵へて著せてをりますものの、四苦八苦でございますよ。』

と云つた。海舟はすつかり主婦の心掛けに感心して、

『では、すこし金をどうかしてやらうか。』

と云つて、金を出してやつた。ところが、それから一年目の暮になつて、主婦は海舟の家へやつて來て、預かつてゐた金を出して、

『お蔭様で、あの翌日から、新年宴會の口がかかつて來ますし、すつかり景氣を持ちなほしました、有難うございました。』

と云つた。海舟はその金を押し返して、

『この金は、お前さんにあげるよ、わしは、お前さんから好い教訓を受けたから。』

と云つて取らなかつた。

頼山陽にも大晦日に金に困つた話がある。山陽は雲華院大含と友達であつたが、三十兩の金がなければ、年が越せないので、門人の淺田宗伯に手紙を持たして、大含の許へやつた。大含は手紙を讀むと、

『馬鹿、大晦日の夕方になつて、金を借りによこす奴があるか、金が入るなら二三日前に何故云ふて來ない、駄目だと云つてくれ。』

大含に叱りつけられた宗伯は、仕方なしに門を出て來ると、大含が後から追つ駈けて來て、

『待て、待て、折角の友人の頼みを、斷るのも氣の毒ぢや、これを木屋町の質屋へ持つて行つて、御講者様がおほせられたと云ふて、三十兩借りて行け。』

と云つて、珠數を宗伯に渡したので、宗伯は云ひ付け通り木屋町へ行つて金を借りて歸つた。

井伊直孝がある年の大晦日の晩になつて、急に老臣を呼んで、家來へ加祿すると云ひ出した。老臣達は、

『加增のことは誠に目出度いことでございますが、今晩加增の沙汰を致しますと、今年分の祿をやらねばなりませんし、また大晦日になつて、加增をした例がありませんから、正月になつて沙汰をしては如何でございます、』

と云ふと、直孝は非常に不機嫌な顏をして、『俺は一度かうと思ひ出したら、すぐそのことをやらうと決心してゐることがあるから、それはいけない、昔、俺が馬の口取りに、心がけの好い者があつたから、十分に取り立ててやらうと思ふてゐる內に、大阪の御陣が起つて、その者は、ある大名の臣と口論の末、爭鬪に及んだので、相手は、その主人から叱りを蒙むつただけで濟んだが、あれは小者と云ふところから、仕方なしに打首にした。もし早く十分に取り立てて置いたなら、あれの命を助けてやるとが出來たらうに、思ふたなりにぐづぐづしてゐたから、そんなことになつた。その後俺は、何事によらず好いと思ひ出したことは、即座に行ふことに定めてをる、』

と云つた。老臣達は主人の言葉の通り加祿の沙汰をした。

歲晩の悲喜劇も生死一如、貧富一如の眼から見れば、俳味があてつ面白い。貧乏人の吾輩も、その俳味を厭と云ふ程味はふてゐる。今となつてみれば、笑ひ事であるが、その場合には、やはり人間並に苦しみもすれば、悲觀もした。東京では暮に押し詰つて、一二回必ず雪が降る。その雪の中を、ちびた足駄で濟いで、本屋や先輩の所へ金の工面に行つたものだ。

ある時二三人の仲間と桂月翁の著述の手傳ひをしたので、暮の三十日、皆で桂月翁の許へ集つて、本屋の原稿料を持つて來るのを待つてゐたが、夕方になつても姿を見せないので、今晩はもう遲いから明日の朝でも來るだらうと云つて、その原稿料を當にして、近くに棲んでゐる知人から金を借り、貧弱な晩餐會をやつた。その時も雪で、歸りには足駄の齒を折つた、そして、翌日また集まつて、本屋の來るのを待つてゐると、夕方になつて、速達で、來春に延べてくれと云ふ斷りの手紙が來た。泣くにも泣かれないとはこんなことを云ふのだらう。

ある時は、大晦日の日になつて、桂月翁と二人で朝から金の工面に行つて、夕方になつてやつと拵へて歸りかけたが、二人とも金を見てはそのままでは歸れない病氣があるので、ちよつとなら好いだらうと云つて、這入つて飲んでる內に、十二時に近くなつた。その時は、桂月翁も一層困つてゐる時で、その金が

なければ、[illegible]の請を貰へないと云ふ場合であつた。其所で驚いて桂月翁の家へ歸つてみると、奥さんは諦めて、正月のかまへもせずに寢てゐた。

松本道別君と二人で、桂月翁の名で作文書の編輯をしたことがあつた。暮の三十日になつてやつと拵へて、本屋へ持つて行つてみると、原稿が出來た時に原稿料の三分の一を渡す規定になつてゐると云つて、六七十圓しかくれなかつた。二人は仕方がないので、それを半分分けにして、小さなバーで酒を飮んで別れた。後で聞くと、道別君、その夕方から戶をぴつしやり締めて、商人が來ると。

『今年は金がないから、もう、來年、來年、』と云つた。商人は家へ這入つて、すこしでも出來さうと思つて、

『ちよと家へ入れてください、話もありますから、』

と云ふと、

『這入つたつて、無い者はない、駄目　駄目、』と云つて開けなかつた。

その道別君と二人で仕事をしてゐる時に、大晦日の夕方、餘分に金が這入つたことがあつた。二人は先づ神田あたりで一杯飮んで、それから吾輩の家へちよつと寄つて、またそのあたりをぶらつかうと云つて、電車に乘り、竹早町でおりかけた時

に、吾輩と車掌とが[illegible]をはじめた、[illegible]つてきりのない大晦日の忙がしい人達が、電車の後れることを惡くんで、車掌に加勢する者があつた。すると、車の眞中にゐた道別君の怒聲が聞え出した。

『理窟も判らずに、車掌に加勢する奴は、何奴だい、俺が相手になつてやる、』

さうなると加勢してゐた者は默つてしまひ、車掌が謝り出した。其所で喧嘩も一段落ついて、二人で電車をおりてみると、

『今日は矢でも鐵砲でも持つて來い、』

と云つて、道別君が笑つた、電車將軍松本道別君は、赤子のやうに無邪氣な男だ。

大晦日の晩になつて大雪の降つたことがあつた。遲くなるまで桂月翁と酒を飮んでゐて歸つて來たが、鼠坂をあがつて、茗荷谷の交番の近くへ來た時、巡回してゐる巡査に行き逢つた。

『あなたは、何方へ行くんですか、』

と巡査が云ふので、醉つてゐる吾輩は、

『自分の家へ歸るんです、僕は茗荷谷九十九番地の何某だ、僕は此所にもう五年も六年もゐるが、僕を知らんところを見ると、あんたはまだ新米だな、』

と云ふと、巡査は癇に觸つたものと見えて、『新米とは何です、そんなことをおつしやらないが好いでせう、』强いて云へば警察へ連れてでも行きさうな權幕なので、吾輩飄然と態度を改めて、

『すこし醉つてますもんですから、ちよいと、その、寒いですな、』

とやると、巡査も笑ひながら行つてしまつた。

大晦日に聞く除夜の鐘は、ちよと俳味を帶びたものだ、吾輩はその鐘をときどき椎月翁の許で聞く。

五

歳晩は凡夫の地獄であるが、歳首は極樂である。これは、はじめにも云つたやうに、歳晩は凡夫どもが押し詰つた暗黑な雰圍氣を拵へるが、歳首は一陽來復で、これから年も運命も改まると云ふ迷信から、明い駘蕩とした雰圍氣を拵へるからである。

生意氣なことを云つてゐても、吾輩もはやり凡夫だ。一昨年の元日であつたか、年賀に出て、日が暮れて友人の所へ行つてみると、大坂の益友の話が出た。その結果、東京で惡い酒を飲むよりは、灘の好い酒を飲まうと云つて、そのまま家へも歸らずに、二人で大坂へ行くことになつた。友人は小さな通信社を經營してゐたが、社員にやる物をまだ遣つてなかつたのが、年始に來て酒を飲んでゐた腰ぎんちやくの社員の一人に。

『大坂から送つて來るから、待ち給へ、』

と云つて苦笑した。

『ほい年末賞與を貰ひに行くのかい、あいつは金があるから、うんと取るが好い、俺は歸りに靑切符を買はしさへすれば好い』

二人はそれから東京驛へ行て汽車に乘り、朝早く大坂驛へ着いて、東區の内本町にゐる友人の所へ行つてみると、その友人は病氣で、細君と一緒に城崎溫泉へ行つたと云つて、書生と女中が淋しさうに留守居をしてゐた。しかし、二人の目的にしてゐる友人は、それでないので、二人は平氣なものだ。其所で書生に云ひつけて、天下茶屋の方へ電話をかけさせると、電話へ細君が出て來て、堺の大濱の某料理店へ行つてくれと云つた。その料理店はもう數回益友をいためつけたところだから、勝手はよく知つてゐる。其所で二人は出かけて行つてみると、友人が來て、もうそのあたりの藝者を七八人も呼んで、二人の來るのを待つてゐた。

二人は大濱の料理店を彼所此所と飲み歩いて、四日目の晚、

貴び花を買ひにして歸つて來た。

桂月翁と正月二日の朝早く、伊豆山温泉から熱海へ行つたことがある。ちようどその時は、東京市の電車が市有になつて、從業員に慰勞金を渡したところ、その分配方が不都合だと云つて、車掌と運轉手で同盟罷業をやつた時であつた。二人は市内の電車が乘れないので、目白から市外線の電車に乘つたが、同盟罷業の影響で、來る電車も來る電車もひしこ詰めの客で、非常に困つたことを覺えてゐる。

その日は伊豆山温泉の相摸屋に一泊して、千人風呂に浴し、翌日熱海梅園へと行つた。梅はもう滿開であつたが、若木で枝ぶりに面白いところがないので、金色夜叉を讀んでから好奇心を持つてゐた吾輩は、非常に失望した。しかし、一條の谿流が梅を穿つて流れてゐたのは、いくらかその失望を補ふものがあつた。

園を這入つて、土橋を渡ると、蜜柑の荷を据へてゐる老人がゐた。二人は酒にほてつた咽喉をうるほすつもりで、傍のベンチへ腰をかけて、老人の取つてくれた蜜柑を喫つた。

『お爺さん、此所は何時もこんなに梅が早いかね、』

と、桂月翁が聞くと、老人は云つた。

『今年は、この二三日の南風(みなみ)に、皆咲きましたが、平生は、もうすこし遲れますよ。平生よりは十五日くらいはやいでございます、その代り、花の早い時は、實がありませんから、今年は、一升が二十錢もしませうよ。』

二人はそれから撫松庵と云ふ茶店へ行つた。それは桂月翁が一二度行つたことのある家であつた。此所でその家名物の鮒の[illegible]苔の酸にしたものを肴にして酒を飲んだ。

その晩は熱海に一泊して、また伊豆山へ歸り、相摸屋で數日飲んでゐたが、吾輩はちよとした編輯物があつたので、桂月翁を殘して一人東京へ歸つてゐると、桂月翁から手紙が來て、その端に『桃葉兒を嘲る』として俳句が書いてあつた。

松の内をそはそはしたる男かな

桂月翁のことを云ふと十返舍一九の飄逸を思ひ出す。その一九は、ある年の正月、年賀に行かうにも着物がない、此所で一策を案じて、大晦日の日、知人の家から風呂桶を借りて來、朝早く起きて燒いてゐると、ぼつぼつ年賀の客が來はじめた。一九はその客の一人を呼びあげて、屠蘇を勸め、それから頻りに湯に這入れ這入れと云つた。客もあまり勸めるのでその氣になつて、着物を室へ脱いで桶のある所へ出て行つた。一九はその後で、客の着物を着て、二三軒の年禮を濟まして歸つて來た。

年賀と云へば服部南郭がある年、元日に物徂徠の所へ年賀に行つたことがある。徂徠は髪もかかず、穢い着物を着て、机に倚つて孫子を讀んでゐたが、南郭の顏を見ると、正月のことは知らないふうで、兵法の話をしてやめない。南郭も仕方なしに祝詞を口に出さずに歸つて來た。

『福翁自傳』を讀むと、福澤諭吉が長崎へ行つて、山本物次郎と云ふ砲術家の食客をしてゐる時分、節分の晩に、法螺の貝を吹き、お經のやうなことを出鱈目に唱へて市中を廻はると、家家で錢や米をくれるので、自分達もそれに出かけたが、相手の杉山と云ふ男が法螺を吹いて、自分は天地玄黄王戎簡要などと蒙求や千字文の文句を、口から出まかせに調子をつけて怒鳴つたと云つてゐる。もつともこの行事は、節分の行事であるが、正月の行事といつしよにしても好い性質のものであるから、正月の行事に入れて話さう。かうした習慣は、長崎に限らず、地方到る所にある。中にはとうに無くなつたものもあるが、小松曳き、左義長、粥杖、綱曳き、さう云ふ古代からの風習が、古のままで、あるひは變形して殘つてゐるのを往往にして見受けることがある。吾輩の郷里の土佐あたりにも、かいつりと云ふものがある。それは元日の晩からやつたり、十五日の晩からやつたり、所によつてすこしづゝ日に相違があるが、その晩になると村の若い男が變裝して、顏を見られないやうに、布呂敷や首巻ですつぽり包み、若い娘のある家へやつて行く。娘の家では、酒肴をかまへてゐて御馳走したり、餅をかまへてゐて、その餅をくれたりする。變裝の若い男は、知合の娘の家へ一人二人で行つて、その娘に知られないやうにと、變な啞のやうな言葉を出して、巫山戯たりするのもあれば、五人十人と隊を組んで、三味線や胡弓を持つて、他村にまで歌を唄ひに行くのもある。中には男ばかりでなしに女も行く所がある。

その變裝者をめんと呼ぶ所がある。そのめん同士は、向ふの家へ行くと、

『あいや、あいや、』

と仲間を呼ぶ。皆啞の唸るやうな變な聲である。

『このめんさんは、何も云はんよ、何か云ふてごらん、』

娘の家の者が、變裝者を知らうと思つて言葉をかけると、變裝者は、

『判るから、云はれん、云はれん、』

などと云ふやうなことを云つて、頭をふる者もある。

『判つた、判つた、前の――さんだよ、さうだらう、剝いで見せやうか、』

と、娘の爲めにすつぽりと顏の包を取られる者もある。いく

ら變裝してゐても、門口を這入つて行く時に、[illegible]足音で知られる者がある。
『無益ぢや、無益ぢや、足音でちやんと判つてゐる。』
と、娘の父親などが次の室から笑つたりする。かいつりの行はれる月齢に、十日くらゐの間[illegible]所もある。もつともこの行事は、陰[illegible]の行事であつて、今はその風習が廢たりかけてゐるが、頑敵ぢやないが、このかいつりも盆踊と共に保存したいものである。

我大に笑はん君また笑へ

生方敏郎

大都會の盛り場は、北風身に浸む冬の夜もいつもお祭りの樣な賑ひだ。夫婦で子供を連れ夕食後の散歩に出かけて來るのもあれば、新たに世帶を持つたばかりの共棲生活者等が、手をつながり合つて買物にと出かけて來るもあり、娘同士學生同士で漫ろ歩きのものも有り、その賑ひを傍から眺めて樂まうとして、下宿の二階から脱け出して來る獨身者もある。彼等は、商店の花やかな店飾りや、行き交ふハイカラな美人にその眼を樂ませ、時に財布を開いて買物慾を滿足させ、歸りにはそれ〴〵カフエーに一寸腰かけて熱いコーヒーやホットウヰスキーに咽をうるほす。こんな事が都會に住む者にしみ〴〵幸福を感ぜしめるのだ。

さういふ街は、都のあちこちに有る。賑かな街が數丁つゞくと、その前後左右は暗い淋しい通りに成る。その周圍の淋しさが、盛り場をして一層にぎ〴〵しい處に思はせる。

さういふ盛り場から角をちよつと曲つた暗やみの、電信柱の蔭に人々が輪を作つて立つてゐる。そして中からヸオリンの音に和して、男の唄をうたふのが聞えて來る。

その輪の中へ割り込めば、そして若し丈の低い方であるなら少し脊伸して覗くならば、諸君はそこに二人の若い男を見出すであらう。薄暗くて着物の縞柄や物だちの細かしい點は明かに

見えないが、一人はヰオリンを持ち、他の一人は薄つぺらなパンフレットを幾冊も手に持つてゐる。ヰオリンを持つた方の男は中肉中背の色白で鳥打帽子を冠つて居り、パンフレットを持つた方の男は、色黒く、のつぽらで、頭をいが栗に刈つてゐる。私はこの二人の對話を寫す爲めに、ヰオリンを持つ男を假にAと呼び、パンフレットを持つ男を假にBと名づける。今、恰度、一くさり唄ひ終つたところである。

A（ヰオリンをかついだまゝで）寒いなあ。

B お前のふところかい？ ほんとに可愛想になあ！

A バカ！冗談いふない。皆さんが本當にすらあ。僕は體が寒いんだよ。ふところは毎も暖かだ。

B 懐爐が忍ばせてあるからさあ。諸君！ 見物人諸君……

A お話中だけれども、ちよつと。オイ〳〵、皆さんは忍び泣くやうな僕のヰオリンを聞いてゐて下さる方々だ。だから、見物人諸君なんて、呼びかけちや、いけない。これからは宜しく聽衆諸君とやれ。音樂の聽衆ほど世に尊い人々はない。何故なら、人は音樂を聽く時ほど、無我で博大で恭謙な心を持つ瞬間は無いのだから。

B お前のヰオリンを聞いて下さる？ あはハハ…………お前のヰオリンは聞くのぢやなくつて、聞こえるのだ。耳の孔の明いてる限り傍でブウ〳〵彈かれりや誰にでも聞こえるだらうぢやないか？近頃流行のピヤのやヰオリンを聽く人は、敬虔の心を持つのではない。慈善事業の好きな人達である事を證據立てゐるのさ。慈善事業の心持を離れて音樂を聞いてる人は、そりやあ聞いてるのぢやあなくして、見物してゐるんだ。たとへばお前みたいな人類は廿世紀の産物としても、よほど珍品の方だらうからなあ。さて、そこで諸君、見物家諸君……

A バカ！ 見物家つて家があるか？ 見物の諸君と言ひなほせ。

B いやに他人の言ふ事に干渉するなあ。お前は此頃の警察のお巡りさんか、やきもち燒きの細君みたいだ。うるさくつて仕様がない。

A オヤ〳〵、一人前のことを言つてるぜ。お前みたいな穢い亭主でも、細君からやきもちを燒かれる經驗が有るかい。お前は、何處の工場で働いても、人員淘汰の時は、屹度誰より先におつぽり出される。諸君、大正七年の冬、此男は人並に流行感冒をわづらつて、一遍死んだのですが、あんまり貧乏なので、お經を讀んでくれる坊さんが市内に一人も無かつたのです。それで極樂へ行きそこなつて、又蘇生したのだ相です。地獄へで

すか？　それに極楽へすら行けないほどの貧乏人ですから、無論地獄へやられるだけの資本を持たなかつたのです。地獄は常に赤い口を開けて、一等切符の亡者を待ち設けてゐるのですから。安田善次郎翁は丁度、針の山へ無事到着したとやらで、驛前の赤鬼局のスタンプのある繪葉書が、横網の本邸へ今朝屆いた相です。明日いよ〳〵釜ゆでの刑の執行を受けるのですつて。

B　諸君、この先生のいふ事は、全部出鱈目です。一つも信用なすつちやいけません。この男に浮つかりかゝり合ふと、屹度損をさせられますから御用心なさい。表面、生白い、優し相な顔付を呈して居りますが、實は存外不良な男です。曾て私を教唆して曰く「君、今夜貧乏人の家へ强盗に押し入らうぢやあないか。」といふんです。なぜかねもちの家へ這入らない？と訊くと、こたへて曰く「資本家のものが我々風情の細腕で取れるものか？　資本家にかかり合ふと、アベコベに此方の方が搾取されるかも知れない。だから貧乏人の家へ强盗に這入らう」といふのです。

A　この野郎、バカな事を言ふない。

B　バカでも本當の話なら仕方がない。けれども、元來正直一圖に生れついてゐる僕は、彼の提唱に絶對的反對を稱へました。

A　なあに、それは彼がたゞ臆病であつたからです。正直は常に臆病の登錄商標に過ぎませんから。この男は、お巡りさんが怕くつて、尻り込みしたのです。

B　その時、この男の曰く「なあに大丈夫、立小便をしてゐます、と警察へ電話をかけると、お巡りさんは直ぐ捕まへに來るけれども、强盗が這入りましたから、と言へば、お巡りさんは屹度夜が明けてから來る。だから東京では立小便は浮つかり出來ないけれども、强盗の方なら、そんなに危險なことはない。何なら試しに警察へ電話をかけて見ろ」とまで、僕を煽動しました。時に、聽衆家諸君……えゝ、先刻何を言はうとしたのだつたか？　傍からチョイ〳〵混ぜつかへされるので、皆忘れてしまつた。

A　忘れるほど結構なことは、世の中に無い。たゞ忘れられることを除けば。とオスカアワイルドが言つてるよ。だが、聽衆の皆さん。教科書をお求めになることを、忘れてはいけませんよ。一部がわづか大枚二十錢です。二十錢で今年流行の鴨緑江節が覺えられる。これを覺えて置いて、即ち豫め豫備智識を備へて置いて、藝者買ひにいらつしやる。すると早速藝者にモテる。町内で唄へば町内の新造諸君にモテる。鴨緑江節の上手

なあの人でなけりや、他の人と一緒に成るのはいやだわよう、と仰言います。尤もこれは祖父さんの前で唄つてはいけません。何となれば祖父さんにモテた日には、それこそ大變なことに成るからです。うむ、お前は若いのに唄が上手だとは感心な息子だ。これから私と一緒におばあさんのお墓まいりに連れていつてやらう。なんかんとおいでなすつた日には、刺客に見舞はれる以上の災難ですからねえ。

B、へん、きいた風な事ばかり言つて。いつこの人が刺客に見舞れたでせう。見舞ふのは毎日借金取りと高利貸の手代だけぢやあないか？　刺客といふものは、昔から豪い人ばかり訪問すると極つてゐる。

A　だから、僕は豪く成ることを斷念したのさ。家から學資の來る時分、マジメに勉強して置きさへすりやあ、一高を經て東大法科の銀時計、お定りの金持の娘の婿に成つて、外交官、それから先きはトン／＼拍子で大政黨の領袖さ、そうして、今度原さんが暗殺され、何うも達磨宰相ぢやあ、借金の斷りを云ふ時許りは、達磨にお足が有るものか？　と來て、多少都合がいゝかも知れないが、面倒な事件が突發したら何うにもトボケきれまい。此處は一ばん貴君に出馬して頂いて、大宰相に成つてもらうより他に道はない、と今頃元老共が頭をうな垂れて、僕の門前へ歎願に來てゐるところなんだ。だが、さうして僕が國家を泰山の安きに置けば、屹度刺客が飛び出して來て、この肥つてもゐないドテツ腹をヅブリとやるに違ひない。さうして捕へられて投獄される。警部長は辭職する。警視總監はベソをかく。橋本助役はフン縛られる。さう多數に迷惑かけても氣の毒だから僕は人助けの爲めに勉强を止めて、豪くなるのを辭退したのさ。何うだ。此博大な心理情態は、お前なんどには分るまい。古人曰く、燕雀安ぞ鴻鵠の志を知らん哉、だ。

B　いや、その志なら知つてゐる。この町の五丁目の角に棺桶屋が有るだらう。

A　有る。それが何うした。あすこの家に美しい娘さんでもあるか？

B　バカ！　この男は國家の大事を論ずる時でも、二タ言目には、直ぐ女が出る。先づお聞き。あすこに禿頭のピカ／＼照り返す親父が毎も店に坐つてゐるだらう。

A　ゐたかしら。天下の老人は僕の眼中に無いから、山縣公とさへ僕は年賀狀の交換をしてゐない。

B　あの親父が君の所謂人助けをやつてる。

A　ふん、そりやあ感心、鴨緑江節の二十冊も一ぺんに買うかも知れんな。

B　あの親父は三十圓の檳榔を百圓で買つてゐる。君もさうボられちやあ堪らんから、錢の無い者は浮つかり死ぬことも出來ない。そこで皆警戒して仲々死なぬ。何うだ、豪い人助けぢやないか？

A　ところが、この一丁目にも人助けの醫者がある。

B　ぢや、早速お前のバイ毒を療治して貰ひな。早く鼻が落ちない中に。

A　まあ、聞け、いや聽衆諸君もお聽下さい。何うも無駄ばなしに花が咲いて、長くお待たせして濟みません。もう直き鴨緑江節に取りかゝります。それまでしばらくの間の御辛抱。ところでその醫者は藥價も安い代りに、患者は大抵成佛するが何うだ。この人助けは？

B　ちつとも人助けに成つてゐないぢやないか？　それでは人殺しといふものだ。

A　おかげで、坊主が助かる。

B　何だバカ〳〵しい。さあ、唄はう。皆さんがお待ち遠さまだ。

A　よし來た。だが、唄ふ前に、お前さん一つこの鴨緑江節の紹介をしておくれよ。

B　なに？　紹介を？　面倒臭いなあ。

A　面倒臭いてえ奴があるものか？　他に於いては自分を紹介すること。それが現代式といふものさ。況んや、我々の藝術を皆さんに御紹介するのに、何の遠慮が要るものかな？

B　えへへ、況んや。とおいでなすつた。我々の藝術とおいでなすつた。えへへ、鴨緑江節が、藝術は恐れ入る。

A　バカ！　バカな奴だなあ。こいつは。マサカ恁う迄愚かとは、昨日の晩まで知らないものだから、飛んだ奴を同人に加へちまつた。ヤイ、この野郎。我々の商品を藝術と云つたのが、何處が違つてる？　他人の藝術なら、これを商品と命名してやらあ。事いやしくも自分のものだよ。現代のヘボ小說が藝術なら我鴨緑江節は勿論藝術に極つてるぢやないか？

B　よろしい。そこで。

A　オヤ、いやに、こん畜生落ち付いてやがるな。

B　落ち付くと氣味が惡いかい。ぢやあ、これから勞働運動みたいに騷ぎ立てやうか？　その方なら、すゐぶん馴れたものだ。

A　お默り。何故、今日は自分の藝術を紹介する必要があるか、今から言つて聞かせてやらう。もう一寸五分ばかり前へ出な。今日ではな。藝術の偉大さは、その廣告の偉大さと反比例してるんだよ。

B ぢやあ、結構ぢやあないか。

A ところが、藝術家の豪さ加減は廣告と正比例してるんだ。

B お目出度いな。へボ藝術家にとつては。

A その理屈が分つたら、早速、鴨綠江節の紹介をしなさいよ。

B でも、先刻、貴殿は何と云つた。現代は自己を紹介する事が第一に必要だと言つたらう。

A 云つた。が何うした。貴殿だなぞと開き直つて。

B 何うもしない。その自己といふものから、紹介してもいゝか？ といふのさ。

A へえ。お前さんがかい？ お前さんといふものの中に、世間さまの前に御紹介申すやうな分子を、少しでも持合はせてると思ふのかい。成程、私はそれでも人間ですとだね。或はもう少し大きく出て、私はこれでも藝術家ですとだね。或は更にもつとずつと大きく出て、私は天才的な藝術家ですとだね。よろしい。僕がしてやらう。友人の提灯持をするのは、近頃日本の藝術家の唯一の藝術だ。ぢやあ一つやつつけやう。

えゝ。皆さん、この私の友人を御紹介申ます。この人の持つてゐる藝術は、彼の持つてる徹底した人生觀藝術觀を、そつくり浮彫にして見せてくれるもので、この大正十一年の我藝術界も彼の爲に、我々は心強く感じさせられてゐます。オイ、今度は、君の番だぜ。一つうまく紹介してくれ。

B えゝ、現金な奴だな。それぢやあ、まるきり此頃流行の小說作家の遣り口だ。よし、では、一つ君を紹介しやう。えゝ、皆さん。御紹介します。この男は今の藝術界で最も高いところに置かれるのが、彼に對する公正な待遇だと考へます。

A うまい。序でにその呼吸でもつて鴨綠江節の紹介をしてしまひたまへ。

B それから、この天才的藝術家のお父さんは誰だと思ひなす。非常に豪いお方ですから道を歩いてると、皆さんが除けて通ります。ちよつと恁ういふ風に鼻をつまんでね。

A バカ、友人を侮辱するな。皆さん。僕が本當のことを告白します。近頃、事件を惹き起した婦人達は屢ば新聞や雜誌の上で、本當の事を告白しますが、僕もあの調子で本當のことを告白します。僕の親父といふのは、唯今それと私の口から名宣るわけに參りませんが、目下小田原の古稀庵に小さく成つてゐる八十以上の耄碌爺でして、別だん政治家といふ柄ではありませんが政權慾の強い男です。何か政界に動亂が起ると、政治に野心の有る奴等は、どいつもこいつも小田原へ出張し、親父のところへ伺候して米搗バッタを極め込みます。陰では、やれ超然

至内閣にいかんの、元老が揃つたの、長閥が轉んだの起きたのと、民衆の前で盛んにメートルを上げてる連中も、こんな時には迚も内の耄碌には頭が上らないから、滑稽です。僕も大人しく内にゐさへすれば華族さまの御曹子でゐられるのですが、新時代に對して少しも理解の無い耄ろくとは、意見が合はないから、家を飛び出し、この通り白眼にして世を嘲けつてゐる次第です。どうです、諸君、感心だと思し召したら、僕を聟さんに貰つては？、お金持ちで兩親が死んでゐて、娘が別ぴんさんで貞女であるなら、今からでも結婚して上げます。遠慮には及びませんよ。

B　華族さんとの縁組は當分お斷りだとさ。色男をこしらへた上に、新聞へ絶縁状なんか發表されて世の物笑にされちやあ、平民の面目が立たないからね、實はこつちに今すこぶる付きの良縁が有るのだけれどな。

A　そいつは耳寄りな話だ。美人かい。

B　すてきな代物だ、だが、貴公にはくれられまいよ。結婚といふと、直に「美人かい」ときやがる。さふいふ男は、浮氣に極つてゐるから。

A　いつ僕が浮氣をした。僕は浮氣をした覺えはないよ。

B　男が浮氣をしないのは、金が無いからだ。恰度女が貞女で

あるのは醜婦である爲めなのと、周囲にたる

A　財産が有るかい？

B　まあ、可也有るな。

A　無論まだ處女だらうな？　近頃、都會の娘に處女が少くなつた。若し有つたら、掘り出し物だ。

B　ところが、處女だ。固く保證する。

A　美人で處女とは、いよ〳〵珍だ。で、年齢は？

B　少し若い。

A　若けりや、いよ〳〵妙だ。いくつだい。

B　君にはチツト若すぎるかも知れん。

A　若すぎるといふ年齢は世の中に無い。今や醫學の方面からも若返り法が研究せられてゐる位で、若いといふ事が人生の最も幸福なことゝされてゐる。一たいその女は幾つだい。

B　若すぎるから困るなどゝ後から取消しはしないだらうな。

A　言ふにや及ぶだ。他のことなら或は結構すぎて困る場合もあるだらう。女があんまりお金持過ぎたり、あんまり學問がありすぎたり、又はあんまり賢婦であり過ぎたりすると、山内一豊みたいにあの人はお内儀さんのおかげで大名に成れた、と末代迄修身教科書の材料にされるのもいさゝか閉口する。殊に自慢ではないが、僕なんかは、將來必ず世界の表面に雄飛する大

英雄に成る筈だから、その時の名譽を細君の內助の功とやらに、奪はれてしまひ度くない。又は細君の學才の譽れが高いために、亭主はそこの書生かなんぞのやうに、いつも玄關へ取次ぎに出るものと思はれるのも氣が利かないや。だが細君が若すぎても、少しも主人の不名譽に成ることは有るまい。

B　不名譽には成らないが、細君は若いと我儘に成るよ、そして貴殿の折角の名譽を尊重して、大に內寄の功をあげ、思ふ存分社會のドン底へ落ことすぜ。君をして落伍者たるの成功を擔はせるだらう。

A　恐ろしくおどかしたものだな。そうして、一たい、その娘の年は幾つだ？

B　今年やうやく三つだ。まだお袋の膝へ時々おしつこを懸けてゐる。どうだ、十分若いだらう。

A　何だ、バカ〱しい。お前の話はいつも之だから、マジメには對手に成れない。

B　それで、この求婚は取消しかい。貴殿も矢張二枚舌使ひだな。それだけでも十分大臣に成る資格がある。

A　あはハハハハ、僕が大臣に成り、お前が元老の坊ちゃんといふところまで、話が進んだから、まづこゝいらで一つ唄ふことにしやうよ、ところで、其前に皆さんに、御紹介申します。この鴨綠江ぶしは、もと支那と朝鮮との間を流れる鴨綠江に筏を棹す船頭さん達が、悲愴な聲で唄つてゐたのが、いつしか朝鮮を通り馬關を過ぎ大阪を經て東京に入り、ついに全國の流行唄と成りましたもので、日本人と生れて誰もこの唄を知らないでは、到底婦人問題も勞働問題も論じることは不可能であります。

B　オヤ〱、これは大變なことに成つたねえ。皆さんがこの唄を覺えないと、婦人問題も勞働問題も論じられないとね。これは然ぢやあない、皆さんがこの唄を覺える爲めにこれらのパンフレットを買つて下さらないと、我々二人がもくちんホテルへ歸つてから濁酒をあふりつゝ、婦人問題も勞働問題も論じる元氣がありません、といふ方が論理的に正確のやうだな。

A　これ〱半分聞いただけで、橫から口を出してはいけない。私達の賣らうとするパンフレットには附錄がついてゐる。お嫁さんにお土産が付くと大變な騷ぎだが、この附錄は決してそんな危險な怪しい物ではない。たゞ、作者不詳といふだけが、一寸お嫁さんの附錄に似てゐるよ。これは濱田榮子さんを悲む唄、といふのです。榮子さんが、亡き博士のお寶さんと呼ぶほどの秘藏娘であり、蝶よ花よと育てられた幸福な身であり乍ら、行末永い蕾の花を夜半の嵐に散らしたのは、抑も何の爲

めと思ふ？、戀と財産の爲めではないか？　次に、皆さん、もう一つ更に附錄があります。これは安田善次郎暗殺の唄、といふので二億萬圓の大富豪安田善次郎翁が、九月幾日かの朝まだき、兇漢朝日平吾の爲に……

B　朝まだきかい？　もう九時位には成つてゐたらう。

A　九時や十時は、文明國では朝の中さ。苟も一國の文明を代表する我々藝術家や淫賣婦は、まだその時間には寢てゐるのだ。八時や九時から割引電車で出懸けるところは、憫れなる腰辨階級に屬する者ばかりだ。昔から、早起は三文の德と云ひ、朝早く起きて表の通りを掃いてゐると、三文くらゐは拾ふといふが、あれは、それよりもつと早く起た奴が、そこを通つて落して行つたお鳥目なんだ。今日でも、その證據にやあ、五時六時から起きて騷ぐプロレタリアートは毎朝三文づつ落して、朝寢のブルジョア共に拾はれてるのさ。我安田翁も、あの時間にまだ朝寢をして寢てござれば、決して金と鉛の交換をせずにすんだのだ。

B　だが朝寢坊で有名な原大宰相閣下は、夜汽車に乘るところで、やられたから朝寢の効能もあんまり當にはならないよ。

A　なあに、あれは、もつと朝寢を繼續して、翌朝まで旅行を延期すればよかつたのだ、それでもいけなければその翌日にするろ。朝寢と狙擊の根氣較べだ。それが偶々一致さ。九月幾日かの朝まだき、處は大磯の天下山の贅を極めた別莊に於いて、無慚や朝日平吾の爲めに暗殺せられました。それを唄つた本が一冊、都合三冊で二十錢でございます。この榮子さんと安田翁と二つの附錄を熟讀玩味なさいましたら、世のあらゆる經濟問題、及び婦人問題は、立どころに氷解いたす次第でございます。さあ〳〵、皆さん御遠慮なくお買ひ上げ下さい。

B　大分熱心だね。その分なら澤山賣れるよ。さうしてお金持に成る。高利で貸して二億萬圓に引き延す。そして殺される。何うも、こりや唄の本なんか賣るのは止した方がいゝね。成功して殺されちやつまらないから。

A　そこは調節の道がある。取れた金を色と交換すりやいゝのさ。こりや金と鉛の交換ぢやあなくつて、金とダイヤモンドの交換だ。安田式處世法で儲けた金を、榮子式人情法を以て戀に淨化するのだね。

B　さうだと、吉原で捕へられる盜人のやうだ。こいつは、面白い。

A　お默り。この高遠にして幽玄な眞理は、お前なんかには分らないから。

B　では賄賂で儲けて待合で使ふと言ひ直さうか？　成程、そ

れなら、悲劇にはならない。捕へられたところで、常識の捏ち上げた法律の制裁があるだけのものだからな。凡人は、誰もみなやつてゐる。

A　さうすると、安田翁や榮子さんは非凡人といふ事に成るな。だが、非凡人に成つても、あの最後では困る。

B　だが、若し、非凡人がゐなかつたら、新聞屋が困るだらう。新聞屋の困るのはいゝとして、差し向きお前と僕とが困る。

A　そりや非凡人ばかりのことぢやあない。凡人諸君がゐなくつても、我々が困るのは同一だ。人が病氣をしてくれる。そこでお醫者さんは息をつく。人が死んでくれる。そこで坊さんは飯が喰へる。人が泥棒してくれる。そこで刑事は生活出來る。今や軍備縮小の爲めに海軍々人は大マゴつき、造船所の勞働問題までも起りかゝつてゐるけれども、若し今社會主義の危險思想連が悉く變節して太平の逸民に成つたら、一ばん先きに馘首の運命を悲まねばならぬのは、刑事課高等係の先生達だ。恁うなると刑事に米を食はせてゐるのは、警察だか危險思想だか、分らなくなる。それは恰度、ブルジョアの專橫が勞働運動家、社會政策家の飯の種子に成るのと同樣だ。お互ひに敵が、こつちの米びつなんだ。

B　さうだと、さしあたり、お客さまは僕等の仇敵といふわけかね

A　こいつ、役にもたゝんたは言を言ふな。お前みたいな半疊を入れると、折角面白く聞いてゐて下さるお客さんが氣を惡くすらあ。皆さんは、我々がこんなに喧嘩をするのを見て、何の因果で彼奴等はあんなに毎日いがみ合つてばかりゐるのだらう。AとBとは前世から運命づけられた仇敵同士かなあ、と仰言るだらう。

B　ところが、實は諸君、さうではないのです。この口論はこと〲く八百長なんですから、御安心なすつて聞いてゐて下さい。恰度、議會に於ける政府委員に對する政友會の陣笠共の質問演説みたいな性質のものです。どんなに小ぜり合つても、決して物別れに成る氣づかいはありません。最も簡潔に解すれば、議會全體が八百長ですな。政友會と憲政會國民黨と無所屬と、何れもブルジョアの代言者ばかりで、彼等は甲の富豪のお傭ひに非れば、乙の地主の傀儡です。彼等は表面爭つてゐるやうでも、その爭ひやお茶番です。この方が怪我が無くつて、結構です。大阪相撲がこの八百長が大變上手だ相で、東京の相撲協會からも年々研究の爲め留學する相ですから、追々その研究が發表せられる事でせう。

A　オヤ、お前大層通らしい口吻を洩らすねえ。僕はお前が

國技館へ行くのを未だ曾て見たことさへないが……お前のお父さんは相撲の呼び出奴だつたかねえ。さう云へば、あの變てこな格好で出る呼出しに、お前によく似たのがあるぜ。

B けしからん事を言ふね。貴殿は他人の身元を洗ふなら、もう少し丁寧に正直におやんなさい。それぢやあ、まるで興信所のやうな遣り口で少しも信用が置けない。

A してみると、お前の相撲通は新聞を通して見物する活字相撲の通なんだな。恰度、ローマ字の活字の行列を見て、西洋の勞働問題に通じたり、大都會の貧民窟を散歩して日本のプロレタリアートの情勢に通じたりするやうな、學者流のやり方だな。その點だけは、僕もお前の方法の賢明なのに感服するよ。新聞で見物してゐると、角力の手捌きまで細かく見えていゝ。そして時間も金も經濟だ。近頃の青年は新聞雜誌のおかげで、貧乏の味さへ覺えたといふから。何でも、新聞を讀みさへすれば天下に分らないものは一つも無いらしい。

B 貧乏といふものは、實は僕も知らなかつた。ところが最新の流行は貧乏主義の宣傳にあるといふので、親類の伯父さんが、B公手前も是非大に貧乏を知つて置け、この頃は貧乏の知識で飯が食へるやうに成つた、といふから、實は身を墮して貴殿の仲間と成り、この光榮ある顏を市民諸君の前に曝してゐるんだ。僕の友人には、大學を出て官費で貧乏の[illegible]を研究した博學の士がある。

A 官費で貧乏の研究かい？ はゝあ、世の中にはずゐぶん幸せな人間もあるな。

B 社會政策の論文を發表して博士に成るのさ。

A 成るほど、〳〵、學者の知識は尊敬すべしだなあ。あハハハハ。僕等の周圍には私費で貧乏に造詣の深く成つた人間が多くつて困つてる。時に、お前のお父さんか兄さんかは、失禮作ら芝居に關係してはゐなかつたかな？

B 芝居者にもいろ〳〵あるが、貴殿は何處で出逢つたかね。僕は貧乏研究に志してから兄弟にも悠くり會ふ機會が無くつてゐるが、殊に依つたら歌舞伎座へでも出てゐるか知れない。

A あゝ、その歌舞伎で見かけたのだよ。

B 何といふ役者に成つてゐるね、まだ大根だらうがなあ。大根でも役者は金には成る相だね。お座敷の方の收入があるから。貴夫人を自由にしたり金を儲けたり、世の中にこんなうまい商法は又とあるまいさ。そして、親父の藝名は何と行つたね。

A いや、それが役者ぢやあなかつたんだ。

B はゝあ、それぢやあ、常盤津の出語りかな。ばかに聲がい

ゝ方だつたから。

A　いや、出語りぢやあなくつて、出方のやうだつた。べんとうだのお菓子なんかを、せつせと桝へ運んでゐたよ。その時、僕は失禮な言ひ分だけれども考へたねえ。恁ういふ容貌の人物を、こんなところに置くのは惜しい。内のB公によく似てゐるが、とね。

B　ふゝん、ぢやあ、何の方面へ使つたら宜いかね？

A　落語家の前座にして、寄席へ出すのさ。さうしたら、押し出しがいゝやね。近來落語界に、お前のお父さんみたいに押出しのいい人が無くなつた。近頃では、頭をコスメチツクで固めたやうな通俗な付顏の奴ばかりだから、正月が來ても寄席へ這入る氣がしない。

B　貴殿の顏付だつても、あんまり通俗な方ではなさ相だぜ。第一さういふ風に、髮を上の方へ長く延ばして撫で付けた人間は、危險思想の持主らしく見えるから、何處へ行つても雇つては呉れまい。その上、不良性も一人前以上と來てゐるのだから。

A　不良性といつても、我々青年が女子を誘惑したりされたりするのは、むしろ人間性といふものだ。つまり、人間らしい人間ほど、より多く不良性を含有してゐるわけなんだ。それから一人前以上といふ言葉を聞くと、僕はいつもお前の食慾を想ひ出して、讃美信仰の念を禁じ得ないよ。

B　いくら一人前以上でも、食慾には不良性を伴はない。食慾はその中に少しも虛僞を含まない本能だからな。

A　性慾にだつて、少しも虛僞は有りはしない。たゞ、それを滿足させやうとして、容易に得ざる時に、それを滿足する手段として、樣々な技巧が用ひられるんだ。食慾も同樣に、一人前以上に出ると、罪惡を生むよ。

B　この頃食物屋の一人前は、バカに分量が少くなつて來た。壽司でも親子丼でも、あんな一人前では、誰にだつて不足だ。僕等は二人前若しくは三人前を要求するね。

A　食慾で世を樂しむ者、性慾で世を樂む者、皆それ〴〵生れ付きなんだ。天から許されて、お前のやうな大きい強い胃袋を持つてゐるんだ。面付から考へると、ずゐぶん因果な生れ付きに見えるが、僕の知らないところに幸福を持つてゐるから、妙だ。そこで、僕の顏を見たまへ、何うしても藝術家らしく出來てゐるから、

B　何のそんな不細工な顏で、藝術家になれるものか？　さういふ人相のものは、たとへ繪を描いても帝展で陳列をお斷りする。その顎の長くて眼のへつこんでゐるところなんか、何う商

價に踏んでも、展覽會で拒絕されました、といふ面だ。

A 果して、僕の顏が、お前の云ふ如く不細工であるとすれば、それは通俗的ではない。藝術的だ。又若し非藝術的だといふなら、それは民衆的だと言へる。秀でた人間の顏は、常にこの二方面の中の何れかに屬してゐる。大臣にまで成る人間は、大臣らしい顏の持主でなければならない。お前の顏なんかは、到底區會議員にさへも覺束ない。まあ、代議士のお供をして議會へ彌次りに來る壯士の下廻りといふ顏だ。

B やい、〳〵、顏の講釋もいゝ加減にして置かないと、お里が知れるぜ。夏頃まで、雷門前で人相見をしてゐたのは、貴殿の叔父さんだ相だね。叔父さんは健在かね。

A 有難う。僕は人相も見れば星うらないもやる。皆さん。何でも本當に見て上げますよ。唄の本をお買ひ上げ下さるお方には、人相の方はお景物に致して置きます。併し、この景物は普通の家で出す賣出しの景品と違ひ、圖ではありません。人相の圖は、皆さんが生れる時既に引いて來たので、僕は唯その說明をして上げるだけなのです。仰も、人間の顏はその運命の假面であります。盜人をするものは、その盜人がチヤーンと顏に描いてある。だから、彼は平生盜心を持たない男であつても、何かの機會に一寸した機みで盜みをする。またB君の前ですが、このBの樣な顏は一寸見ると滑稽で、よく〳〵見ると盜人でもし相な兇惡な顏付をして居りますが……

B オイ、〳〵、何を言ふのだい。君は？ 人が大人しく默つて聽いてゐれば、如何に舌に稅がかゝらぬからと云つて サン〳〵私の顏の棚下ろしをした上句に、それでも足りずに、盜 の樣な兇惡な顏とは、あんまり人を誹謗した話だ。公衆の前で誹謗すれば、事實の有無に拘らず誹謗罪が成立するとは御存知か？

A 兇惡とは言つたが決してお前を罵つたわけぢやあない。その證據には、兇惡な顏をして居ります、と言ひ切らずに、兇惡な顏をして居りますが、とチヤーントがの字を入れて置いたところが、僕の用意周到な點さ。ところで皆さん。兇惡な顏をしてゐてもこのBは本當の盜人の相ではありません。ギリシヤの大哲ソクラテスは兇惡な顏をして居た相です。見て來たわけでは有りませんが、又達磨大師など餘り香ばしい人相ではありません。三十二相具へたものを美人と申しますが、達磨さんは最つと多くの相を備へてゐたのでして、多分このソクラテスに似たところがあつた樣です。ローマでキリスト敎會の巨人セント・オーガスチンは怖ろしい顏をしてゐます。豪膽なビスマークとても、オーガスチンと睨めくらをさせたら、怖毛をふるつて逃げ

だすでせう。近代に至つてトルストイでもイブセンでも仲々怕ろしい顔をして居りまして、哲人は何れも人を喰べ相な顔付です。之に反して政治家や實業家にして成功する者は、何れも人を宥め相な顔をして居ります。薄つぺらでテラ／＼してゐてツル／＼してゐて、花柳界の婦人に持て相な容貌をしてゐます。その或者は人形の様に、その或者は殿様のやうに見えます。之に反して哲人や聖人は藝者に持てる容貌では有りません。尤も婦人に持てざるが故に、或は聖哲と成り得たものとも云へませうか？ 若くして美しき女は貞淑だらうとして得ず、老いて醜く貧き者は聖人たる事を希ずして止むを得ず聖人と成る。その原理から推せば、このB君の如き、正に止むを得ずして聖哲と成る人相を備へて居ります。何うだ。お前は聖人に成るのと藝者にモテるのと何方がいゝ。

B　そりやあ、兩方ともいゝな。

A　慾張つてやがら。併し、その一つを選べと言はれたら、何うする？

B　女に持てる方が好さ相だ。生きてる間は女に持て、死んだら聖人の方へ廻されるといふ方法はあるまいか？

A　さういふ便利な方法はまだ發明されてゐないが、之に類したことが少しは有る。政治家といふ奴は、生きてる中さんざ我田引水をやつて置いて、死ぬと如何にも高徳らしく御用歴史家に書き立てさせる。これは獨り徳川家康と限つたことぢやあない。そして歴史家に一人として御用歴史家でないのはない。多少なりとも御用をつとめなかつたら、發賣禁止は早速だからな

B　さうすると歴史家ばかりぢやあるまい。貴殿の様な天才も御用天才と成る理屈だね。御用を勤めない者は、謀反人だから。

A　だが、人相見には御用はない。

B　その代り、始終はづれるのだらう。

A　ケチを付けずに終ひまで聞きなさい。政治家にして大臣まで登る者は、皆好男子に非されば偉丈夫であります。丈も高い方でせう。聲もいゝ方でせう。何となれば、政治家は役者だからです。彼等の行ふところは、悉くお芝居であります。原さんなぞは、ジュリアス・シーザアのやうな大詰の幕までやつてしまひました。

B　よう／＼演說口調！

A　矢釜しい。だまつてろ。ところで、皆さん。政治家が役者とすれば、その脚本は誰が書くと思ひます。浮世の脚本を書く者は思想家であります。政治家や軍人は、思想家の書いた脚本通りに操られてゐる人形に過ぎないのです。

B　さうすると、見物人は誰なんだい？

A　見物人はバカと醜い女と貧乏人とであります。之までの世のお芝居は、貴族と金持と美人との芝居でありました。醜い女や貧乏人はいつも舞臺の外にゐて見物してゐた。併し最近の模樣では、貧乏人もだん／＼役者の仲間入りをして來さうな形勢に成つてゐる。プロレタリアートとブルジョアとのお芝居の序幕がそろ／＼開きかけて參りました。僕は皆さんが何方らでも上手に演じた方の役者へ、花輪をお贈りなさいますことゝ想像して居ります。

B　それで、醜い女とバカは永久に取り殘されかい？　思想家達の筋書では？

A　醜い女とバカもそろ／＼舞臺へ出かゝつて居ります。大方しまひには賢愚邪正貧富美醜みな合同して一大オーケストラを奏し、おもむろにヒューマニテイーの幕を閉ぢることでございませう。

B　默つて大人しく聞いてゐれば、まるで大本教のお筆先のやうなことを言上に及んでゐるよ。お客さまも、大に中られたらう。唄の本の賣上げが不足すると、今夜から寢てゐる蒲團をめくり取られる身の上で、よくまあ貴殿はメートルを上げるなあ。

A　恁うして嘘でも本當でも大きな事で面白く喋り散らして、ブラ／＼歩きのお客さまを引き付け寄せ集めて、唄の本を賣り付けるのが我々の商賣だもの。商賣は神聖なりさ。

B　へい、商賣が神聖とあると、戰爭も神聖、犬ころしも神聖、高利貸も神聖といふわけかね。資本家は、永い間、勞働は神聖也、との標語を用ひて勞働者を驅使して來たし、戀愛詩人は戀愛の神聖を高唱した。して見ると、自分に飯を食はせてくれるものは、皆神聖といふことに成るね。

A　さうだよ。それだから女にとつては貞操が神聖なのさ。女はそこで糧を得てゐるのだからね。貞操の無い女を、誰も養ふコケは有りはしない。貞操が無くして養はれる女は、貞操を賣る女ばかりだ。

B　僕も願くは貞操を賣つて飯が喰ひたいものだな。

A　その細でかい？お前は若し牛に生れて來たら、志望通りに行つたらうよ。赤城山の牧場へ行つて種牛に成るのさ。それこそ貞操を賣つて生活出來らあ。あハハハ……

B　いや笑ひごとぢやあない。僕は牛に生れりやよかつたと思ふよ。赤城山は廣々してゐるし、そこには生活問題も經濟問題も煩はしいものは何も無いからなあ。僕が行きさへすりやあ、誰が行つても自分に餌を呉れるものと考へて、柵の傍まで走つ

て來るところなんざあ可愛ちやないか？　實に天眞らんまんなものだぜ。

A　牛でなけりやあ犬でもいゝだらう。猫でも一條天皇の飼猫は命婦のおもとに叙せられたぜ。命婦と云へば五位だからなあ、大した威勢さ。

B　その代り思ふやうに浮氣は出來まい。

A　いやな奴。それほど冥加に餘つても、まだ浮氣がしたいのかね。

B　浮氣もしたいさ。併し、僕は食ふ方も思ふやうに食ひ度し、兎に角何事に依らず、自分の思ふやうにやり度いのだ。つまり自由が得たいのさ。パトリツク・ヘンリーの言ひ分ではないが、我に自由を與へよ。しからざれば寧ろ死を與へよ。なんだ。

A　オヤ〱、死ぬと言つて脅すところなんざ、ふてくされな女房でも言ひ相な文句だね。死を與へよ。と言つたつて、オイ來た、勝手に死ぬがよからう、とも言へまいよ。

B　ではいよ〱自由の方を與へるかい？　やあい、降參しやがつた。態あ見やがれ！

A　何も降參しやしないよ。死も與へないし、自由もまた與へられやしない。そりやあ、何方も無理な註文だ。何處のだれだい？そのパトリツク何とかいふ小父さんは？

B　アメリカの人さ。獨立戰爭時分に宣傳をした辯士だらう。歷史の言葉で言へば志士といふものさ、

A　僕も大方然うだらうと思つたさ。何うもアメリカ人は洒落つ氣が有つて頼母しいよ。いつも無理な註文を合理的な言葉で出して來るからなあ。對手はアツとおどかされるのさ。民族自決、國際聯盟、軍備縮小、何れも世界の歷史を引繰り返すやうな注文だ。

B　へえ、そんな事位がそんなに驚く可きことか知ら。僕の考へだと、それらは何れも皆行々は實施され相なことの樣だが。絕食聯盟といふのでもないからなあ。婦人でさへも拒婚同盟を提案する世の中ではないかね。

A　それは、恐らく既婚婦人から言ひ出したことだらう。一ぺん結婚して歷とした亭主があれば、まさか二度目の求婚は拒絕してもそんなに苦しくはなさ相だ。さうでなければ、それは醜い婦人のいつたことだらう。大概の娘はそんな聯盟には加盟しないよ。それに加盟するのは、一度に何人からも愛せられたいコケツトだけさ。だが、軍備縮小くらゐは、實行されてもよさ相にとは、僕も考へてる。實行され相も無い、といふ事と、實行され度くない、といふ事とは全く別物だからな。僕はむしろもつと大きく軍備撤廢と來なけりやあ嘘だと思つてゐる。今に

見ろ、人間がもつと悧巧に成れば、軍備は撤廢に極つてる。わづか五萬やそこいらの造船職工が失業するからとて、軍備縮小にベソをかくやうぢや、全くアメリカに甘く見られるよ。

B　何だか矢張僕の説に屈服したらしいな。

A　自由を與へよかい？　いやその方は浮つかり與へられないね。お前なんかに自由を與へた日には、社會は何んなことに成るか知れやしない。何しろ、赤城山の種牛に成り度いといふ人だもの。そりやあね。足腰の立たない病人にならば、少しも躊躇無しに、自由を與へるよ。與へるどころの話か、是非自由な體にしてやり度い。だから自由を與へるのも人に依りけりさ。少し多人數集ると、直ぐ不穩の演説をしたり、電車の中で乘客の迷惑もかまはずに革命歌を高唱したり、お巡りさんと口論して大得意に成つてるやうな淺薄な手合には、自由の與へられないのは當り前さ。オヽ、さういへばお前も時々共産主義に成るやうだね。

B　もう止したよ。ありやあ損だから。

A、お袋から臍くりを送つてくると、お前は直に「今日から俺は資本主義だよ」と云ふ。そうして一人でそれを使つて買食なんかやつてゐる。それがすつかり無くなつちまうと、「今日から俺は共産主義だよ」と宣言して、僕の財布を當にする。自分の懐都合で、一日の中に何度も〳〵共産主義に成つたり資本主義に成つたりする、さういふ我儘な人間に自由なんか與へた日には、世の中は一たい何う成ると思し召す。

B　だつて、誰だつて、そりやあ、貧乏すりやあ共産主義、金が出來りやあ資本主義よ。損はしたくないからなあ。要するに、お金がありやあ、何も問題は起つちやあ來ないんだ。

A　ウム、旨いことを言つた。誰も皆お金があれば問題は起らない。若しくはその反對に、誰も皆お金が無けりやあ、つまり世の中にお金が無けりやあ、問題は起らない、といふのだらう。

B　さうさ。お金がありやあ、僕は東京中のうまい物を喰べさせる家をすつかり廻り歩くよ。もうこんな寒空で唄なんか唄ふのは、今すぐにも辭職する。

A　さうさ。お金が有れば、車力は車を引くことを辭職し、牛殺しは牛を殺す事を辭職するよ。おあい屋さんなんか誰より先に辭職するだらう。買物をしに行つても、商人は高く止つて賣つてくれない。その時は何うする。

B　そんな事があるものか。高く買ひさへすれば賣るさ。商人の目的は唯賣る事ではなく、高く賣つて儲ける事なんだからなあ。

A　併し番頭も小僧も女中も、皆な金持に成つて、辭職して自分の家へ歸つちまつたら、何うする。商店は商が出來なからう。品物を運んで來る馬方も辭職したんだよ。品物を製造する職人も無期休業だよ。ね、世の中は死んだ樣なものぢやあないか？　だから、誰もみんなお金持に成ると、困ることに成るんだよ。有る者もあり無い者もあるから、そこで無い者は餘儀なく働かせられるのさ。そうでもなくつて、仲々人間といふ横着者が汗水たらして働くものかね。みんなお金持に成るのは、みんな貧乏人に成つたと同樣な悲慘事だ。いやな仕事は仕手が無く成る。

B　でも、恁ういつ迄も小唄を唄ふ境涯も感心出來ない。何とか容易に自分だけ金持に成る法はないかな。

A　とう／＼兜を脱いで、共産主義から資本主義へ降參したな。まだ、その位で降參しちやあ早すぎる。そんな事だから、木賃ホテルへ歸ると直ぐ又ぞろ共産主義の夢を結ぶんだ。金持以上に金の事を思ふ階級が、唯一つある。それは貧乏人さ。と或人が言つた。お前なんぞ始終、金と食物と女の事ばかり考へてゐる。だが、お前には、一生かゝつても到底金は出來ないよ。

B　何故、成金は初めは誰しも歩だよ。初めから金なら成金とは言はない。

A　そりやあ、そうさ。だが今朝お前の火鉢の火を起してゐるところを見て、僕はさう考へた。火を起すのと金をためる事とは、天才の仕事だ、とさ。火があんまり少いと、いくら吹いても消えてしまう。金もあんまり少いと、いくら働いても溜りはしない。資本を持たない者の金儲の努力は、結局骨折り損の草臥儲けだよ。

B　僕の友達には、マチ一本で火を起すといふ火起しの天才がある。

A　金儲けにも、その天才がある。殆んど無一物からはじめて巨萬の富を造る者が稀にはある。併し、言ふ迄もなく、それは極めて稀だ。少し起りかけてくると、火は造作も無く起る。捨てゝ置いてもカツカツと起る。火自身の力で火を起す。恰度金もそんなものさ。金自身で金を産む。そして火が餘り大きくなると、遂には火事と成つて災害を及ぼすやうに、金も所謂暴富を致すと、金の爲めに災害が起る。

B　よく知つてるなあ。

A　これ／＼人の話を茶化すものぢやあない。貧乏人に金の話をするのは、鰻の蒲焼の匂ひだけ嗅がせるやうで可愛相だが、ちと說法してやらう。

B　そこで金の大事が起つたら何うする？　何から先へ逃げ出す。

A　その時は命さ。平和さ。今の富豪がシヤボン玉を膨らますやうに、いゝ氣に成つて身上の肥つて行くのを樂んでゐると、いつかパチンとはじけてしまう。イソップ物語の中の牛の眞似をした蛙の話を、皆さん、御承知ですか？　蛙が牛の大きさを仲間の蛙に話さうとして、こんなに〳〵と言つて腹をふくらませてゐる中に、パチンと腹がはち切れて死んだ。といふ話さ。だから、はち切れて死ぬのがいやだつたら、金持もあんまり大きく成らない方がいゝ。

B　さうすると、恰度僕位の富豪がいゝところかな。

A　さういふお前は、幾ら持つてゐる？　今日また資本主義だな。

B　一圓五十錢持つてら。その上、聽衆の皆さんの懐に幾らかづゝ、預金してある。皆さんは屹度一冊づつお買ひ上げ下さるだらうから。

A　づう〳〵しい奴だな。だが、その考へは尤も確だ。銀行を見たら、いつでも自分の預金がして有ると思へ。稼げばいつでも引き出せるからな。このバイオリンは小切手帳だ。この體は通帳だ。誰の懐に在つたつても、金は金だ。しばらくすると、自分の方へ廻つて來るさ。金ほど[illegible]しい奴はない。身分も人種も問はず、人々の手から手へ渡つて歩くよ。それを皆さんが可愛がつて、肌身はなさず懐中に入れて置くところが可笑しなものだぞ。何うです？皆さん、その不貞な金なんか懐から追放して、この鴨緑江節をお買上げ下さいませんか？　たつた二十錢で、他に濱田榮子さんの唄と守錢奴安田善次郎の唄と二冊の附錄があります。何うもありがたう。ありがたうございます。いや、とても澤山賣れたぞ。やい、B公、一つお正月氣分のする面白いところを唄つてお耳に入れやうぢやないか？

B　〽東京で、一番强いは栃木山
　土俵のよいのなら、アラ大錦ヨイシヨ
　程のよいのはヨ、アラ大門若ヨ
　色は又
　福柳に常の花チヨイ〳〵

（完）

新春遊戯雜記

村松梢風

はしがき

幾ツ位の時だつたか覺えてゐないが、奥の座敷で姉と二人で机を並べて書き初めをしてゐた。私の國の方では元旦試筆のことを「としとくさま」といふ。ふだん眞黒い草紙へばかり書いてゐるのが、年に一度の半切の唐紙へ向ふのである。緊張せざるを得ない。私は一生懸命で書いてしまふと、まづやれやれといつた氣持で筆を握つた儘、うまいのか拙いのか我乍ら判斷の出來ない字を凝と眺めてゐると、ひとあし先きに出來上つてゐた姉が私の背後へ廻り込んで來てジロジロ見てゐるから其處で私も一寸得意になつて「どうだい、うまいだらう?」と云つた。すると姉は鼻のさきでフヽンと嗤つて、「ちつともうまかない、そんな字、至ツ下手だわ」と、うすい脣の裏を態と突き出すやうにして云つた。私は甚だ敷く藝術的自尊心を傷けられたので非常な不愉快を覺えながら、

「何處がまずい?」と喰つて掛かるやうに云つた。

「みんなまずいわよ、第一お前のは頭でつかち尻つぼみで可笑しいわ」と云つて姉は面白さうにホホホホと笑つた。

成る程。さう云はれて見れば私のとしとくさまは、最初の二三字を莫迦に大きく書き過ぎてしまつたために、しまひの方へ來次第小さく細つて來て、てうど繪に書いた幽靈みたいな恰好になつてゐる。だから笑はれても仕方がないが、併し不愉快だ。女に馬鹿にされて引つ込んでは居れん。

「要らんお世話だい、女郎!」と私は呶鳴つた。

「何んだいチビのくせに、馬鹿」と姉も負けてゐない。

「此奴!」私は猛犬のやうに姉に飛び掛かつた。三つ違ひだから、字では敵はないが喧嘩なら負けやしない。私は手にあつたどつぷり墨を含んでゐる筆でもつて、是れから拜賀式へ行くので綺麗な髪を結つて、眞つ白に白粉をつけてゐる姉の顔へベタベタと墨を塗つて遣つた。すると姉は「ヒイー」と首を斬られ

たやうな聲を出して座敷の内を逃げ廻つた揚句に、表へ向つた障子を明けるが否や裸足で外へ飛び出した。私も續いて飛び下りて、もう恁うなると自分も半分泣きながら追ひ掛けた。其の元日は雨降りだつた。農家のことで表は廣い。粘土のつるつるした處で滑つて姉はすてんと轉げたので、今度こそ大泣きに「わあッ」と泣き出した。親達と下男が吃驚して門先きへ飛び出して來たが、此の體を視ると父は恐ろしく怒つて、いきなり私の襟がみを摑んで軒下迄曳き摺つて行くが否や、いゝやといふ程頬つぺたをはりとばした。私は釣り鐘が破裂したやうな聲を發して泣き出した。

　正月の思ひ出にろくなことはない。恥の掻き序でにもう一つ莫迦々々しい話を書かう。

　數年前、と云つた處でさう舊い事ではない。何うにも遣り切れなくて或る家に居候をしてゐたわけだが、其處も永くなると居辛いので大晦日といふ日に貸し間を探しに出ると、其の頃は世の中が不景氣で、下谷數寄屋町の仕立屋の二階に張り札が出てゐたので早速それを借りることに極めて、其の日のうちに引き移つたものだ。

　偖、元日の朝、と云つてももう十時頃だが、下へ顔を洗ひに降りてつて見ると、昨夜遅く迄商賣をしたからだらうが、仕立屋の夫婦はまだどちらも寢てゐるのである。賄附きで下宿をしたのだから、仕方がないので二階へ戻つて二度寢をしてゐると、漸う二時頃になつてかみさんが起しに來た。何にしろ腹が減つてゐる。いくら下宿人でも三ケ日位は雜煮に有り付けると思ふので威勢よく下りて行くと、亭主は錢が突つ込んであるちやちな角火鉢へ小鍋を掛けてねぎまか何かで一ぱい始めようとしてゐるところ、「まあ元日ですから一つ」と云ふ。私は性來の下戸だから、空き腹へ二三杯やると忽ち酸漿のやうになつてしまつた。が雜煮はいつになつても出さうもない。かみさんはと見ると、味噌汁に干物で御飯を食べてゐる。

「うちぢやアあつしが此の方專門ですから」と亭主は有難さうに德利を振つて見せて「餅氣の物はまるでやれませんが、嚊アも女のくせしやアがあつてあんまり餅を好かないもんですから、滅多に雜煮はしないんです。併し先生、あなたは餅がお好きですか？お好きなら買つて來てこしらへさせますが」

　と云ふ。私はがつかりしてしまつた。好き嫌ひはさて置き、日本人だから元日には雜煮を食ふものと極めてゐるのだ。が、來匆々我儘も云へないので、情ない思ひをして味噌汁と干物で御飯を食べた。

其の仕立屋は夫婦暮しだつた。亭主は卅五とか六で、五尺六七寸もある大男でよく肥つた體をしてゐたが、貌立ちはまことに柔和で、氣性も其の通り優しかつた。細君の方は廿二三で、色は淺黑いが、眼鼻立ちのきりつとした、なか〳〵美人だつた代りに性質もお侠だつた。

亭主は、東京中で五本の指に漏れないほどの仕立物の名人ださうだが、恐ろしい呑んだくれの怠け者なのでどうにも活計が立たないのであつた。諸方の藝者屋から拜むやうにして拵らへて呉れと云つて來る仕立物を何時迄もすつぽかして置いて、活動寫眞を觀に行つたり、お花の友達の處でも廻つたり、さうして金さへあれば朝から呑んでゐるので、正月だといふのに羽織も無くて、かみさんとても鯉口袢纏の着たきり雀だつた。そして、偶に裁ち板の前に座つたと思ふと、一日一夜に羽織なら七枚迄仕立て上げるといふ駭くべき技術を發揮するのであつた。が、一と晩でお花に負けてしまふので、あしたから煙草を買ふ金もなくなるのだつた。「先生、濟みませんが一ぷくよんで下さい」と云つて、煙管だけ持つて日に幾度びとなく二階へやつて來た。亭主は私のことを「先生々々」と云つてゐたが、是れは勿論尊敬を意味してゐるのではなく、大體彼は初手から私の姓名も尋ねたことはないのだつた。

「仕立屋位厭な商買はごわせんよ、あつしあ郵便配達にならうかと思ふ」

などと云つて、冗談かと思ふと淺草郵便局迄願書を持つて出掛けて見たり、牛のやうにのたのたして時間を潰しながら「あゝあ、男妾に行き度い」などと云ふ。

「馬鹿、鏡を見て物を云ふがいい」と、かみさんが叱り付ける。

仕立屋の生活は日増しに窮迫して來て、時々私にも飯を呉れないことがある。私は疾うに一ケ月分の下宿料を前渡しに遣つてあるのだつた。

其の月末に突然かみさんが何處かへ逃げてしまつた。亭主は青くなつて探し廻つたが居處が知れなかつた。亭主も困つたらうが私も弱つた。名人の仕立職人と文章の賣れない文士とが、一週間ばかり共同生活をしたあとで、數寄屋町の其の家は解散したのだつた。

恁んな事をいつ迄書いてゐると編輯者からも讀者からも憤られるから、こゝらで目出度さうな顏をして、初春のお慰みは吉例により、表題に因んだ話に取り掛ることにしよう。

獨樂

小供の時分正月の樂みと云へば、雜煮を喰べることと獨樂を廻すことだつた。雜煮でうんとふくれた腹が、終日當て獨樂をして遊んで來るとからくに減つてしまつた。私の郷里は非常に餅を食する土地で、農家では正月の元日から三月の節句過ぎ迄朝は必ず雜煮である。が、近年は獨樂を廻さないせいか好きな雜煮も澤山はやれない。柳里恭は雲萍雜志で「餅は食滯するものなり。多く食すべからず。餅に食傷したるは救ふべき術なし。口は病を入て禍を出すの扉なり。かゝれば一言以て智とし、一言以て不智とす。人心の表なり。心に思はざることはいはずといへども、みだりに思はざることをいふは、心を表裏す云々」といつて、何に依らず物の少きは、長久のもとであると戒めてゐる。味はふべき言葉であることに異議はないが、柳里恭もてつきり胃が丈夫でなかつたらうと私は觀察するのである。

當て獨樂といふ遊戯は痛快だ、下の者が上の者を殪して最後に天下を取らうといふので、何處迄も戰鬪的氣分で徹底してゐる。一番上が「天下」で次ぎが「家老」である。家老だから天下を翼贊するのかと思ふとさうではなく、機に乘じて天下を殪して其の地位を簒奪しようといふのだから、常に虎視眈眈としてゐる。天下を落された者は、急轉直下一番びりつこけに滑り落ちるのである。戰國時代を其の儘の遊戯であるから、桃太郎を軍國主義だといつて攻撃するやうな平和論者や人道主義者達にはお氣に入らないかも知れないが、私は今でも大好きだ。

獨樂に大小の差はあるが、形は大體二種で、胴が漏斗形で介厚な鐵胴を嵌めたのと、稍間味をもつた胴で幅廣の薄い鐵胴を嵌めたのとあつた。前者を東京獨樂と云ひ、後者を西京獨樂と稱へた。東京獨樂は當てる場合に强味が多く、是れで一つコツンとやられると、西京獨樂は一撃の下に潰えてしまふ。が壽命競べになると東京獨樂は彼の敵でない。獨樂までがよく東西の氣分を代表してゐるから面白い。

當て獨樂のほかに、鞭獨樂といふものも廻した。是れは、軸も鐵胴もなく、胴が長くて底が尖つてゐる。それを、短い紐を附けた鞭で廻すのである。其の後から鞭の紐で巧みに叩いて壽命を保たせる遊びである。恁んな獨樂は勿論私達は手製で拵らへた。

獨樂といふ物は餘程ふるくから日本にあつたものと見える。和名抄には「獨樂和名古末都玖利、有孔者也」としてある。古書などには、狛とも書き、或ひは又「こまつぶり」とも書いて

ある。和名抄の有孔者也といふところから考へて見ると、往古の獨樂には孔が明いてゐて、廻すと音を發したものだらうと思はれる。現今でも唸り獨樂だの、ごんごん獨樂などは音を樂む獨樂である。獨樂に鐵胴を箝めるやうになつたのは極く近世、天保前後に至つてから關東地方で行はれ始めたのである。まだ此のほかに、博多獨樂、釘獨樂、錢獨樂などといふ種類がある。博多獨樂や釘獨樂は木胴鐵軸で曲廻しなどに使ふ獨樂である。

曲獨樂の本家は松井源水である。現今寄席へ出てゐる源水は何代目に當るか知らないが、代々淺草に住んでゐて、昔は奧山で曲獨樂を廻して人を寄せては齒磨きを賣つてゐた。淺草名物の一つだつた。將軍の世子が淺草邊へ御成りの節には、第一に御覽に入れるものが源水の曲獨樂と極まつてゐた。又山王御祭禮にも必ず出て上覽に入れることになつてゐた。將軍が召し上る薩摩芋でさへ警蹕の聲を掛けて道中した時代のことだから、源水の家柄はなかなかやかましかつた。同じ齒磨き賣りに名前まで似た松井屋源左衛門といふ者があつた。が此の男は居合拔きが表藝だつた。眞鍮の金物を打つた黑塗りの箱を重ねた高荷を兩掛にして、小者に持たせて赤坂見附下の廣小路に出て場を取り、高荷を兩方に構へて三尺の刀で居合拔きをして見せたが、手練目を駭かすばかりだつたと、「賤のをだ卷」の作者が書いてゐる。序でに、居合拔きには、更に有名な藏前の長居兵助といふ人物がゐた。是れも矢張り居合拔きで人を寄せて、齒拔療治を始め揚子齒磨きを商ふのが渡世であつた。

錢獨樂は、元祿の末から寶永の始め頃、何人かが工夫し出したもので一時大變流行した。俳諧の點者鷺水（京都の住白梅園の著はした「新玉櫛笥」の三の卷に、香山梅之助といふ人があつて常に獨樂を翫んでたのしみとしてゐたが、或る時文錢を六つ七つ繫いで筆の軸を貫き、別に心木を通し糸を卷いて回轉させる仕掛けにして、ひたすら是れを愛し、獨樂の爲めに記を書いたといつて、其の全文が引いてある。

「諸分床軍談」といふ洒落本（作者不詳正德の頃）の五の卷、大阪新町のことをいふ條に、勘七といふ太皷持が、紙入からはした錢を出し、金入の煙草入を切つて早速錢で車をこしらへ、奧座敷へ持つて來て禿をまねき、「此の車は京で錢獨樂江戶では錢車といふ、いまだ此所へは（大阪をさす）今がはじめておや、女郞さま方に、から緘をかけて から廻してお目にかきや、此の舞ふうちに三味線ならすがゞき三遍引く間、淨瑠璃なら道行一つかたる間、たしかに舞てゐるほどに、お慰みにしてごらうじませ」と云ふことがある。小兒の翫弄のみならず、酒席な

どへも持ち出して興をそへたものと見える。

享保三年正月山村座で出した狂言「若緑勢曾我」に二代目市川團十郎が外良賣を勸めて大當りを取つたが、其のときの詞に「まづ一粒めしあがつてごらうじませい、口の中の涼しさが格別な物、さるによつて、舌のまはる事が錢獨樂が裸走で逃げる」といふことがある。して見れば享保の頃迄はまだ翫ばれたものと見える――と、是れは柳亭種彦の隨筆「用捨箱」から用捨なく拔き取つた話である。

紙鳶

東京の子供はおもに正月凧を揚げる。昔は二月から三月へ掛けての遊びだつたさうだ。尤も近頃は凧に限らず何事でも季節お構ひなしの世の中になつて來たから、揚げたい者は春でも秋でも揚げてゐる。私の生れた遠江國あたりでは、凧は五月の節句の物と極まつてゐる。男の兒が生まれた家では、初の節句に「凧揚げ」をして祝ふのである。村の人をみんな呼んで酒を振るまつて、小さくて西の内二十枚位から大きくなると四五十枚、或ひは百枚位の凧に、鯨のうなりを三挺位脊負はして揚げるのである。糸も細引程のを用ゐる。こんなやつが青空へすさまじい唸りを立てゝ揚がつて行く有様は爽快無類で、都會の子供に見せてやりたいと思ふ位だ。雄凧と雌凧とあつて、何ちらも四角だが、雄凧の方は稍平たく、骨は僅か五本で、是れに上下二本の糸目を附け、其の長さが一丁位に及ぶ。繪は天地の二隅へ龍虎を畫いたのが普通である。雌凧は細い骨の障子張りで、形は雄凧と反對に少し縱へ長く、太繩を五六すじ一緒にした尾を附け、糸目は短かくなる代りに數十本附けるのである。是れは全體を眞赤に塗り、白拔きで鶴龜か高砂の繪が畫いてある。雄凧のことを「ぶか」と云つて、雌凧の方を「尾凧」と稱へてゐる。

私は子供の時分から凧狂人といふ位凧が好きで、廿を過ぎて郷里にゐた頃でも毎年自分で凧を作つて揚げた。「ぶか」といふのが一番六か敷い代りに揚げて面白く、大きさは十六枚位のが獨りで始末が出來て大人の遊びには頃合である。凧は面白い筈だと私は思ふ。由來、人間の悲みは飛べないことである。憧憬の世界は空である。それが、凧を揚げて糸尻を緊りと持つてゐると、自分の精神が凧に乘つて大空に飛翔してゐるやうな氣持になるものである。日暮が近付いて、下界の近くは風がばつたり死んでしまつて木の葉のそよぎさへ無くなつてゐるのに、上空にはまだ風があると見えて、黄色く色づいた空へ高く〳〵揚がつて低い唸りを立てゝゐる凧を凝と眺めてゐると、不識〳〵

神秘的な氣分に沒つていつて泪ぐましくなつてくる。

例に依つて少々詮索を加へて見ると「たこ」は一名「いかのぼり」と云ふ。尾のある凧は、蛸にも烏賊にも似通つてゐるところから、どちらの語も起きたものであらう。「いかのぼり」或ひは「いか」といふのは上方邊の言葉で、關東では昔から「たこ」と言つてゐる。

紙鳶、風箏、風禽、紙鴟、鷂兒、皆凧のことである。和名抄には「紙老鴟、世間云、師勞之云々」とある。古代には凧のことを「しろし」と稱へたのである。我邦には何時の時代から凧といふ物が始まつたか詳かでないが、餘程古くからあることはあつたらしい。西洋ではプラトンの友人のアルキタスが紀元前四百年頃發明したとも云ふし、又東洋から移入されたものだといふ說もある。戰爭の時人が凧に乘つて揚がつて敵狀を偵察したといふ話は支那にも日本にもあるが、是れを學術上に應用したのは、西曆一七四九年、エヂンバラの天文學者アレクサンドル・ウイルソンといふ人が、凧に寒暖計を附けて飛ばして空中上層の溫度を計つたのが始めである。嘘か實か知らないが名古屋では凧に乘つて金の鯱の鱗を盜んだ惡者があつたといふ話がある。

岩瀬京山の「蜘蛛の糸巻」に「凧も二枚張、四十八文、絵は杉の立木に片鳥居、浪に日の出、雲に雛鶴の羽など、いかにも粗末なる絵なり、こはおのれが七八つの時なり。（安永四五年）其の後十二三の比（天明元年）に至りて、字凧と唱へて、龍、鬪、鶴、の字など、雙鉤字のめぐりを藍、又は紫に色どりたるを、珍とし寳として喜びけるに、今の字凧は下品として子供等ばず」と記してある。森山閑窓の「賤のをだ卷」（享和二年刊）にも凧の話が載つてゐる。此の人は幕府の直參で、四百俵を賜はり、赤阪淸水谷に住つてゐた。寛政年中小普請組頭から追ひ追ひ出世して目付に拔擢せられ、盜賊改加役を兼ねてゐた人である。此の人が子供の頃（延享寛延）には江戸でも可成り大凧を揚げたもので、自身も西の內十六枚張りの凧を揚げたことや、齋藤鞍負といふ人の所では二十六枚張りの凧を拵らへて揚げたことなどが記してある。そして、其の末に「其の外八ツ花九曜のほし蜈蚣などいふ絵だこをよく拵へて、家々にて上たり。鈎合六ケ敷凧を上手にしたり。中〳〵今の子供の如く、おとなしく一二錢の袖凧烏だこを買ふて、子心に上りもせぬに、ひとり缺廻りて樂しみ、日を暮す樣のことにてはなかりき。次第に人の心利辨にさとくなりて、二十年來中々不用のものを費して、たこなんどに金錢を遣ふことはなし。是等は人情のおとなしく成たるか、又おとろへたる歟、はかりがたし」と云つて、兒

寺の門に參詣の氣が次第に乏しくなつて來たのを嘆じてゐる。

風來山人平賀源内は、戯號を紙鳶堂と稱した。或る時源内の所へ數人來客があつたが、其の中の一人が主に向つて「先生の紙鳶堂といふ號の由來はどういふわけですか」と尋ねると、源内は笑ひながら、それに就いて恁んな話をした、

一年彼が越後へ旅行した時のことである。すると或る一村で、全村擧つて門徒宗の信者になつてゐる處があつた。丁度其の頃はおかげ詣りが流行してゐる時で、何處でも彼處でも伊勢參りが盛んであつたが、此の村ばかりは前の理由で參詣する者が一人もなかつた。それを聞くと彼はふとある惡戯を思ひ付いた。そして三文御札といふ小さな大神宮の御拔を澤山求めて來てそれを凧に附けて高い山へ上つて、風向きを見て凧を揚げて一村落へ蒔き散らした。すると山の下の其の村では、屋根の上に御札が落ちてゐたり、高い杉の梢に掛かつたりしてゐるので「神業に相違ない」と云つて俄かに餅を舂くやら御酒を供へるやら大騒ぎをして、到頭一村擧つて大神宮へ參詣した。是れに因んで彼は紙鳶堂といふ戯號を用ゐるやうになつたのである。

此の話を聞いて一座の人は大笑ひをした。

「だが、信仰といふものの起原は大抵そんなところから始まつてゐるのだから――」

究理學者で絶對無神論者であるところの源内は、「だからお前達も餘り笑へた仲間でもあるまい」と云ひ度さうな皮肉な顏をして云つた。

羽子板

羽子板は一名胡鬼板といふ。其の創製の時代は審かでない。文安年間の撰になつてゐる「下學集」及び「壒嚢鈔」に其の名が見えるさうだから、尠くも足利時代には既にあつたものだらうと云はれてゐる。

我邦古來の風習として、小兒の玩弄物のやうな物でも、必ず祓とか祈禱とかいふやうな意味を有つてゐる。羽子板が矢張りそれで、古禮として、男子初生の春には濱弓濱矢を、女子初生の春には羽子羽子板を、外戚及び乳母などから贈ることになつてゐる。濱弓濱矢の意は、彦火火出見尊が皇子を海濱にまうけられた吉兆に基くのであるか、或ひは破魔弓破魔矢の文字の方が其の意に中つてゐるのであらうか？　羽子板に關する說も未だ聞かない。

羽子板のことを記してある古文書はまことに乏しい。跡部光海といふ人の書いた「羽子板圖說」といふものが僅かに殘つてゐる。それは齋部家古傳の羽子板の圖を載せて、それに解說を

加へたものであるが、其の圖を見ると、羽子板の表面には五體の神像が畫いてあつて、裏面には山の形が畫いてある。極めて簡撲な繪である。五體の神像は、上方右が素戔嗚尊左が奇稲田姫、中央が瓊々杵尊、下方右が翁手乳、左が媼足摩乳であつて、裏圖は日向國高千穂峰の圖であらうと説明して、「祓二邪氣一且避二泥虫災一之神教也」と云つてある。

羽子板に精巧な意匠を施した物が用ゐられるやうになつたのは、貞享元祿以降のことだ。正月の女子の遊戯として手鞠と共に羽子をつくことも其の時代から流行した。「遣り羽子は木槵(むくろ)子に羽毛を付けたるを平板もて打ちて空に上ぐるもの。幼きもの蚊に食はれぬまじいなり」と歳時記などにも書いてある。

元祿時代の羽子板は主に内裏羽子板と稱する物で、是れは京都の特産で、表には殿様かみ様といつて、衣冠を着けた男子と、垂髪の女子を美しく畫き、裏面には左義長を畫くのを通例とした。大名の奥向などには金銀の彩色に細工の精を盡し、金紋を添へたりして華麗を極めた物もあつたけれど、此の時代にはまだ民間に用ゐられてゐた物は概して質素で、木地に粗畫を畫き、漸く彩色が施してあるくらゐなことに過ぎなかつた。帝室博物館には徳川時代の羽子板が二十數點陳列されてある。其の中で前記の大名奥向で用ゐた羽子板は、胡粉繪の具を分厚に盛り上げ、金銀の箔を置き、圖は源氏物語或ひは其の他に依つた内裏御遊の有樣などを寫したものが多く、精巧を極めてゐて、實に立派な美術品である。內十枚ほどは羽子板の上部に三つ葵の定紋が置いてあるから、徳川の大奥か又は其の一門の家で用ゐたものに相違ない。地方の古代羽子板も二三點觀た。それらは何れも板へ簡素な胡粉繪を畫いてあるだけに過ぎないが、圖其のものに非常に風韻があつて、是れ亦捨て難い藝術味を有つてゐる。好事家は是非一覽すべきものである。

羽子板に押繪を施すことは後代の好みである。幕末頃から、歌舞伎俳優の似顔を押繪にすることが始まつた。人氣俳優の當り狂言を撰んですることは今も昔も變らない。十二月の歳の市を飾る随一の景物は羽子板である。淺草が初市だけに一番盛んである。其の日は、仲見世から仁王門の內迄兩側が全部羽子板店になつて、向う鉢卷の頭が高い處で聲を枯らして呶鳴つてゐる。市の羽板子店は掛小屋で、有り丈の羽子板が一眼で見られるやうに掛けて並べてある。大きなのになると三尺から四尺位のがある。恁んなのは花柳界の人達でもなければ買ひ手はない。勿論羽子をつくための品ではなく、飾り羽子板である。試みに價を聞いて見玉へ、駭くやうな高いことを云ふ。それが向ふ鉢卷の威勢のいいのであるから、浮つかり負けろの何んのと

云つたら擲られさうな見幕だが、こわ〲半値にでも付けて見ると忽ちボカリと負けられてしまふ。近頃でも十軒店や白木三越などで賣つてゐる物の中には可成り精巧なのがないでもない。が、全體に細工人に良いのがゐないのと、又昔ほどには思ひ切つて金が掛け切れない關係もあらうが、美術品の部へ入れられるやうなものは見掛けない。一體に俗惡である。誰れか進んだ頭腦とよい腕を有つてゐる美術家が、飛び切り贅澤な羽子板をこしらへて見ると面白いのだが。

現今花柳界の婦人は、正月には新しい羽子板を飾らなければならないことにしてゐる。是れは吉原から始まつた習慣である。昔の吉原では、元日二日は仕着日格に從つて遊女に小袖を出した。家々の遊女は是れを着て極く古くは揚屋へ、後には仲之町の引手茶屋へ年始に出た。其の時禿は、木綿の衣服に若松の染模樣を着て、大羽子板を袖口で抱へるやうにして持つて花魁に附き添つて出るのが慣例であつた。其の風は明治年代には最早廢つてしまつたが、起原は餘程古く、「近世奇跡考」には高尾の所持した羽子板の記事が出てゐる。座敷の飾りの羽子板でも、以前は役者の似顔繪のは蓮葉に見えると云つて良い處の花魁などは見識を重んじて持たなかつたものだが、近頃の花魁や藝者と來ると、ろくに芝居小屋の見當も知らない連中が、やれ六代目がいいことの、やれ福助の似顔に限るのと、臆面なしに言ふから恐れ入る。松の內藝者町など通ると、お座敷から歸つたばかりの半玉が、扇の替りに羽子板を持つて表へ驅け出して、朋輩同志で遣り羽子をして遊んでゐるのを見掛けるのは、初春らしい風情である。

舊幕時代に、正月子供がうたつた童謠に恁んなのがある。

殿さん、かみさん、さんしやうさん、
椽から落ちた御乳人

是れは羽子板に關する童謠で「殿さん」「かみさん」とは男女の內裏を指していふ言葉。「さんしやうさん」といふのは何んのことか知らないが、「御乳人」といふので、前に記した羽子板圖說中の翁手乳、媼足摩乳を意味することと思ふ。

最後に、羽子板で思ひ出した罪のない話を一つ書き加へることとしよう。

私が高等二年の時だつたから、十一か十二の正月だつたらう。私の村には尋常四年までしかなかつたので、私達は家から一里ばかりの町の高等迄通つたものだ。町と云つても私の村より更に山寄りで、鐵道が開けて以來とんと世の中から見捨てられてしまつて、町全體が屋根裏のやうに煤びて見える哀れな廢驛であるが、それでも町は町で、同じ生徒でも町の子供は幅が

利くが、私達在郷から通つてゐる者は何彼につけて小さくなつてゐなければならなかつた。學校は町の裏手にあつて、郡役所や御料局の建物と並んでゐた。校長は赧ら顔のでつぷり肥つた人で、菊石はあつたけれど、其の頃教員が着た緣取りの詰襟服や古びたフロックなどを着た樣子が堂々としてゐた。よい校長だつたが、惜しいことには大酒家だつたので、其の後間もなく腦溢血で亡くなられてしまつた。男生の教室と女生の教室とは棟が違つてゐて、其の間には狹いけれども女生徒の運動場があつた。其處には古い柳の樹があつて、夏だと髮を振り亂したやうに青い葉を擴げてゐた。私達二年生の教室は、其の女生徒の運動場に面してゐた。

　女生徒の中に、町のお醫者さんの娘で姉妹二人揃つて通つて來る子供があつた、腹違ひの姉妹で、上の子は三年で妹の方は私と同じ二年だつた。家が裕福でもあり此のふたりの子供は何時でも一番奇麗な姿をしてゐた。顏立ちも女生徒の中でずばぬけて眼に付いた。其の頃の女の子は大概稚兒輪といふ髮に結つてゐた。髮を詰めて結ふ髮だが、前髮を斬つて兩脇を長く垂れてゐるので、紅い耳朶が半分隱されたり、伸び過ぎると房々した前髮の下から直ぐに黑い眼が覗いてゐたりして、見た眼が可愛らしかつた。此の姉妹も矢張りさういふ髮に結つてゐた。顏は、腹違ひだから餘り似てゐなかつた。姉の方は圓顏で、妹はおもながだつた。姉の子は色が白くて、きめがこまかで、其の張り切つてゐる頰が昔のお雛樣の顏のやうにつるつるしてゐて、全體に非常に愛嬌のある子だつた。妹の方は、すこし赧ら顏で、眼尻がぴんとはねてゐて、いつでも取り澄ましたやうな容子をしてゐた。が、どういふものだか私は妹の子の方が好きだつた。愛嬌は乏しいけれど、其の潤んで底が深いやうに見える眼付きや、紅をさしてゐるやうに紅く笑つた口許から白い糸切齒がチラと覗いたりするのが、私の心を強く惹くのだつた。私はずつと其の前にも一度、尋常二年位の時好きな女の子があつて、教場で其の子の顏ばかり見てゐて先生に叱られたりしたが、間もなく其の子が父に伴れられてよその土地へ行つてしまつたために、ついそれきり忘れてしまつて、「自分は何故あの子が好きなのだらう?」といふ意味をもつて考へて見る機會がなくて三四年過ぎたのであつたが、もう此の時にはそれが自分でもよく分つてゐた。私は放課時間にこつそり教室へ忍び込んで、窓の處から女生徒の運動場を覗てゐた。ある時倦んだ夢を見た。私が友達と別になつて獨りで學校から歸つて來る道で俄かに雨が降り出して來た。私は書物の包みを腰へ卷いて、尻を端折つて、裸足になつて縣道を驅けて來た。村の中ほど

に、金比羅様の社へ行く道があつて、其の入口の坂道の傍らに木の鳥居が建つてゐた。其處迄私が駆けて來ると、自分の前を蛇の目の傘を差して歩いて行く女の子があつた。私がもう少しでそれに追ひ付かうとした時、蛇の目の傘がぐるりと向きを變へて「濡れて來たの？これに入れてつて上げるわ」と、傘の中の子が云つた。それがお醫者さんの□娘だつた。私は、何故この子が恁んな處を歩いてゐるのか不思議でならなかつたが、嬉しくてそれが訊けなかつた……

正月には、女の子供は學校へまで羽子板を持つて來て運動場で盛んに羽子をついた。かちん／＼といふ悶く冴えた音が氣持よく響いた。私は例に依つて窓際から眼ばかり出してそれを見てゐた。すると、私の戀人の突いた羽子が横へそれて、私が立つてゐた側の窓から教場の中へ飛び込んで來た。そして、黒光りに光つてゐる机の上へ行儀よく載つかつた。私は急いで其の羽子を手に取つて見た。眞黒い頭から白と赤の羽毛が生へてゐる其の小さな物が、何故か其の時私には、お醫者さんの妹娘の魂か何んぞのやうに思はれた。私は慌てゝ羽子を懐ろへ捻ぢ込んだが氣懸りなので、今度は自分の机の奥の方へ隱してしまつた。其の後へ他の生徒が三四人一度に入つて來たので、私は何喰はぬ顔をして其の仲間と話してゐた。すると其處へ、女生徒の受け持のT先生といふ老人の先生が□□□□て來て、教壇に向つて「今此處へ羽子が飛び込んで來やしなかつたか？」と云つた。一同は即座に「知りません」と答へた。私も矢張りさう云つたが、盗みをして隱してゐるやうな氣持がして、胸が怪しく顫へた。T先生は笑ひ眼で一同を睨みながら「誰れか隱したな」と云つて机の蓋をバタン／＼と一つづゝ上げて調べ始めた。直ぐに、私の机の中から羽子が現はれた。私が赤くなつて顫えてゐると、T先生は案外にも莞爾々々しながら私の顔を見て、「悪戯をするぢやないぞ」と云つたばかりで、私の大事な彼女の魂をば掌の上でおもちやにしながら出て行くのだつた。

歌がるた

歌骨牌の始めは、足利の末期にポルトガル人が傳へた西洋の骨牌から出て、是れに古への貝合（かひあはせ）の遊戯を移したものだ。歌留多といふ言葉も、イスパニヤ語の Carta と全然一致してゐる。英語の Card はそれが轉じたものだらう。一説には古語の「かりうち」の轉であるともいふが、是れは寧ろ信じがたいと思ふ。初期の時代には、百人一首、源氏物語、伊勢物語、古今集、其の他何んでも書き付けて、和歌の稽古の一助として行はれたものだが、後世に至つて全然遊戯と化したと同時に、歌がるた

と云へば百人一首に限るやうになつてしまつた。元祿十一年刊の「壺の碑」に「歌骨牌は當時百人一首に限りたるものとす」と出てゐるくらゐだから、餘程古くからさうなつたものと見える。

小倉百人一首は定家卿の撰で、小倉の山莊の障子（襖）に押された色紙の歌である。是れに就いては古來說があつて、新古今集の撰をする際に定家卿は父の喪に服してゐたために力を添へることが出來なかつた。處が、新古今の撰が成つて見ると、其の歌はすべて花に過ぎて實が乏しい。それを定家卿が慨嘆して、更に自身で古來の實のある和歌を百首撰んで、右の如く小倉の山莊の障子へ色紙に書いて押したのだ、といふのが普通の說である。定家卿の沒後子の爲家卿が是れを取り集めて更に作者の名前を書き加へたものだ。此の色紙が所謂有名な小倉の色紙で、後代に於て偶々其の一枚があると好事家が無類に珍重するのである。

極く古くは細川玄旨法印藤孝の抄として上中下三卷の小倉百人一首の講義があつて、當時の連歌師共は是れを以て二條家の歌の精髓であるとして尊んでゐたものだ。德川時代には、更に是れに關する書物が澤山出來てきたが、同時に、定家卿の撰としては甚だ精撰を缺く憾みがあるといふので、種々な點で疑問を抱く學者もすくなからずあつて、結局、定家卿が色紙に書かれたことは事實としても、あながち古來の秀歌を撰んだといふわけではあるまいといふ說が、大體に於て勝ちをしめて來た。現代では、歌學思想が一變したために、殆んどさういふ意味では問題にもしなくなつた。私は和歌は門外漢だから、是れに就いては沈默を守るの外はないが、定家卿が色紙へ書いて障子にまで押されたとして見ると、氣に入らない歌をわざと撰まれる道理はないと思ふ。小倉の山莊とは嵯峨の淸凉寺の西に當る厭離院のことである。當時の搢紳が此の山莊に雅會を催したことは繁かつたから、定めて此の百人一首のことが一世の話柄にのぼつたに違ひない。だから勿論當時としては、歌聖定家卿の權威に影響するやうな歌ではなかつたと見てさしつかえないだらう。私などの見るところでは矢張りよい歌が澤山あると思ふ。一體藝術を評價する場合に時代を土臺に置いて掛からないのは間違つてゐる。時代を解することのできない人間には、其の時代の藝術を批評する資格はない筈だ。處が近頃の人は實に亂暴だ。自己の、現在の思想に適はないものだと直ぐに無價値だと來る。歌人でも、下宿屋にゐると下宿の拂ひが出來なくて困るやうな歌でないと駄目だと來る。勞働をしてゐる人だと、車が重いとか八時間制度にしろとかいつたやうな歌でないと生活に觸

れないからでらんと云へる、どうも莫迦げた樣な話しだが、時世とあれば是れも仕方がない。

餘談は偖置き、百人一首の起原はあらかた右の通りである。其處で、百人一首といふ名稱の讀み方であるが、是れは古來の法としてあらはに四字を讀ます、一の字を人の字にふくんで「ひやくにんーしゆ」と、しかと聞こえぬやうに吟ずべきである。

小倉百人一首の外に、足利將軍義尚の撰になる「新百人一首」とか、「武家百人一首」などいふ種類も後に出來て來た。が勿論是れ等は廣く行はれたものではない。江戸の中興には「娘百人一首」といふものが現はれた。寸錦雜綴といふ隨筆に其の事が悉く記してある。「明和六巳丑大江都に名高き妓女或は茶店の小女を集めて、見立三十六歌仙」と云ひて賣り歩きしとなん」是れは勿論名前だけの百人一首で、性質は全然別物である。

和歌の研究の一助として始まつた歌骨牌が、漸く遊戯化すると共に廣く民間でも婦女子の娯樂として行はれて來た。が、徳川初期の頃にはまだ、武家方や遊女などの間に多く流行してゐたに過ぎなかつた。明治大正の今日に及んでは益盛んで、正月の遊戯としてあらゆる階級の家庭に缺くべからざる道具となつた。多少智識的であると共に藝術的でもあつてまことに理想的の遊戯である。更に近來は家庭の娯樂といふ範圍を脱して、都會には數多何々會といふ歌留多の會が出來てゐて、各々選手を出して他の會と試合勝抜をやる。これまた太平の瑞祥として賀すべきことの一つである。

私は、性來働くことが嫌ひな人間である代りには、遊戯とか勝負事とか名の付くものなら何でも御座れ大好きだが一生まれつき動作が牛の如くに緩慢で、圍碁將棊などの場合だとよく考へられて却つて得策であるが、歌留多の如き專ら敏活を要する遊戯になると甚だ不得手である。だから殆んど歌留多などに出席したことはないと云つていいくらゐだが、ただ一度だけ、今から十五六年も前に田舍の中學を了へて東京へ出て來た最初の正月に、同宿の醫學生の人に誘はれて歌留多會へ行つたことがある。行つた先きも矢張り醫學生の家で、なんでも六疊二間位の小綺麗な長屋だつたが、其の狹い處へ男は無論女學生や若い奧さんといつた人達が二十人も目白のやうに押しかたまつてゐた。こちらは今いふ山出しではあり野呂間で札は取れずどうにも恰好が惡くて弱つてゐると、其の中に束髮の細君風の綺麗な人がゐて、隣りへ座つて何呉れとなく深切にしてくれたので嬉しかつたことを覺えてゐる。たゞそれだけの話で、其の後其の妻君と道でばつたり出會つて遊びに來いと云はれたわけでも何でもないから、小説にも物語にもなつたことではないが、思ひ

出したから記したまでゞある。歌留多會といふものは男女交際の有力な機關で、芋書生の私でさへ今云ふ通り幾らか感電したくらゐだから、世間には是れに關して定めて面白い話が澤山あることだらう。徳川時代の文學では一寸思ひ付かないが、近頃の物では、確か谷崎精二氏の小説だつたと思ふが、歌留多會の場で多少どうにかして、それから其の女と一緒に夜更けの町を歸つて來るといつたやうなことを書いたものがあつたと思ふ。が、何んと云つても代表的なものは「金色夜叉」である。是れは諸君の方がよく御承知の事だから贅辯を費すことは止めにして、此篇の附録として、百人一首の作者の中から閲歴や逸話の面白い人を二三拾ひ出して來て、御紹介することにしよう。

僧正遍照

「天津風雲の通ひ路吹きとぢよ乙女の姿しばしとどめん」の作者である僧正遍照は、もと右近の少將良峰の宗貞と云つた殿上人であつた大納言安世と云つた人の子で、仁明天皇に仕へ奉つて藏人の頭に任ぜられたが、非常な才人だつたところから天皇が大層御寵愛遊されてゐた。それだけに人から嫉まれて蔭では惡くも云はれてゐた。此の頭の少將は頗る美男だつたので、宮廷官女の間に澤山の浮名を流した。小野小町も其の相手の一人だつたのである。

是れは小町か誰れかは判然しないが、同じ内裏にゐて時々忍んで逢つてゐる女と、或る時頭の少將は今夜必ず逢はふと云つて約束した。女は十分に化粧して待つてゐたところが、何時迄經つても男が來ない。兎角するうち丑三といふ時を知らせる聲が聞こえたので、腹を立てゝ男の許へ恁う云つて使を遣つた。

　心うしみつ今はたのまじよ

頭少將はついうつかり寢忘れてゐたところを起こされて駭いたが、

　夢に見ゆやとねぞ過ぎにける

と即座に附けて歸して遣つた。

この一代の寵兒であつた頭の少將の身の上に一大變事が起きた。其の起りは天皇が崩御遊されたからであつた。春宮が御位に即かせられて、先帝の葬送の夜、其の御供先きから頭の少將は行方を晦ましてしまつた。妻子や家來の者などは悲嘆の涙にくれて、若しや淵川へでも身を投げたのではあるまいかと云つて諸々方々尋ね求めたが、どうしても分らなかつた。

都を夜の闇とともに紛れ出た少將は、鞋を掛けて比叡山へ登つた。比叡の頂上の横川の北の谷迄登ると、大きな杉の木の洞の中で一人の老僧が机に對つて經文を誦いてゐた。それは慈覺

大師であつた。少將は、其の聖者の法弟となつて頭を圓めたのであつた。髪を下す時に少將は偲ふ口吟んだ。

たらちねはかゝれとてしもむばたまのわがくろがみをなでずやありけん

宗貞朝臣は、名を改めて遍照と名乘つた。彼は懃に佛道を行つてゐた。兎角するうちに、先帝の諒闇も畢てて、世間の人々は喪服を脱ぎ捨てる時が來た、それは彼には哀しい涙を誘ひ出される種であつた。

みな人は花の衣になりぬらんこけのたもとはかはきだにせず

と遍照は獨り言に云つた。

幾年か過ぎて、或る年の十月講に笠置の御寺へ詣でて、只獨り本堂の片隅に簑を敷いて行つてゐると、其處へやつて來た一組の男女があつた。主と見える女が一人、女房風の女が一人、侍が一人、それに下の男女が二三人ゐた。丁度、遍照が座してゐる場所からは二間ばかりしか離れて居らず、向ふは御燈の側にゐたがこちらは暗がりにゐるので氣が付かないと見えて、主の女が佛に申す言葉を耳に挾むと「行衛の知れぬ夫の有樣を知らせたまへ」と云ひつゝ哀れに泣くのであつた。其の聲にどうやら覺えがあるのでよく／＼見ると、自分が都に捨てゝ來た妻であつた。遍照は胸が迫つて來て耐えられなくなつた「お前の尋ねる人は玆にゐる」と何遍も聲を出したくなつたのを彼は耐らえた。そして、ひたすらに口のうちで經文を唱へてゐた。曉方になると此の人々は起つて本堂から出て行くのを見ると、侍の男は自分の乳母の子で、其の背中に七八つばかりになる男の子を負つてゐた。女房は四五歲になる女の子を抱いてゐた。彼が家を出た時には、其の女の子はまだ生まれたばかりだつた。人々は霧の中を彼方へ歩いて行つた。遍照の眼からは、涙がしぼるやうに出た。

頭の少將の行衛を探してゐたのは彼の妻子ばかりではなかつた。先帝の皇后であつた五條の后宮もおなじく內舍人を御使にして方々尋ねさせられた。內舍人は最後に少將を探し當てた。「宮よりの御使で御座います」と云つたので遍照は仕方なしに草の庵から出て對面したが、先帝が隨一の寵臣として殿上に時めいた時分には、耀くやうな美貌の持主であつた少將が、今は枯草のやうに見る影もなく衰ろへてしまつて、素肌の上に簑を着てゐる姿を見ると、內舍人は何んにも云はぬさきに男泣きに泣き出した。

「たとへ山に隱れたにもせよ、消息ぐらゐはしてもよさゝうなものである。御里へも便りがないので、人々の泣き悲しむの

がまことにあはれでならない。何故其の樣に無情な仕方をなされるのだらう」といふ宮の仰せを傳へると少將も涙を流して「仰せ事はたしかに承りました。帝がお崩れ遊ばして、お側に仕へてゐただけに、おはしまさぬ世には暫らくもとどまる心になれませず、斯樣に山へはいりましたが、佛の力で未だに死なずに居るだけで御座います。勿體なくもお訪ね下された御心も、里に童(わらべ)のあることも、決して忘れたことはありませぬ」と云つて、

かぎりなき雲井のよそに別るとも人をこころにおくらさむやは

「后の宮に申し上げて下さい」と少將は云つた。

内舍人は立ち歸つて、人を以て右の由を宮に申し上げた。后宮は勿論、お側にゐる人々も是れを聞くとみんな激しく泣かされた。早速宮の御文や里の妻からの消息を持たせて再び内舍人を使に遣ると、もう其處には遍照は居なかつた。

其の後のこと、小野小町が正月清水寺へ詣でて、御堂の内にゐると、彼方で誰れかが何んとも云へない尊い聲で陀羅尼を讀んでゐた。小町は怪しく思つて、それとなく覺られぬやうに人を側へ遣つて見させると、其の者が戻つて來て告げるには「蓑をたつた一つ着たばかりで、腰に火打筒を附けてゐる法師が一人居ります」と云ふのだつた。暫らく其の聲を聞いてゐて見ると、たとへやうもなく尊い氣持になるので、是れはただ人ではないと思つた。小野は、若しや其の法師が頭の少將ではあるまいか？と考へた。其處で、どう答へるか試して見ようと思つたから、人を側へ遣つて「此の御寺に詣でてゐる者で御座いますが、寒くて困りますから、御衣を一つ貸して戴き度う御座います」

いはのうへの旅寢をすればいと寒し苔のころもを我にかさなむ

と云つて遣ると、其の返事に

世をそむく苔の衣はただひとへかさねばうとしいざふたりねむ

と云つてよこした。「矢つ張り少將であつた――」小町は胸を轟かせて、逢つて話しをしやうと思つて其處へ行つて見ると、法師は早くも闇に紛れて姿を消してしまつたあとであつた。

中納言朝忠朝臣

歌人(うたびと)と云ふと何となく瀟洒とした貴公子ばかりのやうな氣がするが、事實はさうばかりではないことは、昔も今も變りがない。現代の歌人では、私の知れる限り窪田空穗氏などは先づ歌

人らしい風采を具へた歌人だが、其の弟分の松村英一氏などと來ると年中無精髭が生へ方題だ。島木赤彦氏も一見豪傑の相を具へてゐる。北原白秋氏でも、あの美事な長髮を刈り取つたら軍服の方がうつりがいい。太田水穂氏は體操の先生といふ格で、金子薫園氏は誰れが見たつて村長樣だ。恁んなことを云つても悪る口でない證據に「あふことのたえてしなくばなかなかに人をも身をもうらみざらまし」の作者中納言朝忠朝臣といふ人は、以上の諸氏を遙かに凌駕する豪傑であつたことを御紹介しよう。

此の人は、三條の右大臣定方卿の子で、三條の中納言と世間から呼ばれてゐた。非常なる才人で、和漢の學によく通じてゐたうへに、度胸が太くて、萬事にかけて氣力の旺盛なことは無類であつた。笙を吹くことも極めて上手だつた。彼は一見さういふ性格に適はしい風貌を具へてゐた。長けが高いところへ無闇に肥つてゐた。頬でも、手首でも、足くびでも圓々と肥つてゐて、腹は太鼓のやうに突き出してゐた。が、餘り其の樣に肥り過ぎるので、苦しくて、自分ながら我が體を持て餘してしまつた。で或る時出入りの醫師の和氣の重秀といふ男を呼んで、

「恁う肥つて困るが、如何したならば痩せることが出來るだらう？起居をするのに身が重くて苦しくて敵はん」と、中納言は便々とした腹を撫でながら云つた。

「左樣で御座いますな。お肥りを減らしますには先づ食物を御注意遊ばすことが一番肝心で御座いますが、――冬ならば湯漬、夏は水漬で御飯を召し上つて、成るべく淡白な物ばかりをおとりになるが宜敷う御座います。左樣になされましたなら、一年も經つうちには餘程お肥りが取れるだらうと存じます」と重秀は云つた。

「左樣か、では今日からさうして見よう」

爾來中納言は、醫師の言葉を守つて、夏中は水漬、冬中は湯漬を食して、成るべく淡白な食物ばかりを食膳に上させるやうにしてゐた。が、一年經つても更に痩せが目立たぬばかりか、何んだか以前よりも餘計肥つて來るやうな氣がするのだつた。で又もや重秀を呼んで云つた。

「其方の申す通りにして見たが、一向痩せんが如何したわけだらう？」

「はて、それは不思議で御座いますな、痩せない筈はないので御坐いますが――併し、御前は一體どんな風にして御飯を召し上られるので御座いますか？」

「其方の申した通りにしてゐるのぢやよ。おれは丁度是れから食事をしようと思つてゐた處だから、暫く待つて居れ、茲で

水飯を食べて見せようから」

中納言は侍を呼んだ。侍が一人出て來た。中納言は「いつも食ふやうにして水飯を持つて來い」と命けた。暫らく經つと、一人が大きな食臺を持つて來て中納言の前に据えた。臺の上には箸ばかり載つてゐた。續いて一人が盤を運んで來た。其の盤に入れて來た器を臺に据えるのを見ると、一つの器には三寸位の干瓜が切らずに十ばかり盛り上げてあつた。も一つの器には、鮎鮨の大きなのが三十ほど頭と尾とを揃へて堆く積み上げてあつた。それに、鉢ほどもある鋺が添へられた。悉く臺へ取り据えた處で、又一人の侍が大きな銀の提に銀の匙を立てゝ重たさうに持つて來て前に据えた。其處で始めて中納言は鋺を手に取つて差し出して「飯を盛れ」と云つた。一人の侍が匙ですくつて山盛りに飯をそれに盛り込むと、も一人の侍が横から柄杓で水を汲んでそれへさツと掛けた。中納言は、先ず干瓜を三切位に食ひ切つて三つばかりもりもりと食べて、次ぎに鮎鮨を二た口位に食ひ切つて五つ六つぺロりと平らげた。それから水飯を引き寄せて、二度ばかり箸を廻したと見る間に、飯は失くなつてゐた。中納言は又「盛れ」と言つて差し出した。瞬く間に、銀の提の飯も、鮎鮨も、干瓜も、悉く失くなつてしまつた。中納言はケロりとした顔をして「恁ういふ具合だ」と云つたやうに重秀の顔を見た。

「是れではとても痩せない」と醫師の重秀は呆れをなして逃げ出した。

藤原實方朝臣

「かくとだにえやはいぶきのさしも草さしもしらじなもゆるおもひを」と詠んだ藤原の實方朝臣は、氣の毒な運命をもつた人だつた。併し、さうした運命が前途にひかへてゐようとは、自身も人も豫期しなかつた。彼は左大臣師尹公の孫で、中將に昇進して、帝の御覺えもめでたかつた。

或る年の春、殿上人ばかりが大勢で東山の櫻狩りに行つた。すると、行樂の眞最中に俄か雨が降り出して來た。人々は慌てふためいて雨宿りの場所を求めて驅けた。其の時實方中將だけは唯ひとり、櫻の木の下に立つてゐた。そして恁ふ口吟んだ。

櫻がり雨はふり來ぬおなじくはぬるとも花のかげに宿らん

雨は劇しく降つて、實方中將の衣服をひたぬれに濡らした。

此の事は無論評判になつた。大納言齋信卿がそれを帝に奏聞した。大勢の廷臣が其處には居つたので、實方中將の歌や態度に關する批評が湧いたが、みんながそれを讃めた。處が、唯一

人大納言行成卿がそれをくさした。「歌は面白いが、實方は馬鹿の振る舞ひこそ烏滸がましい次第である」と行成卿は云つた。「成る程、さう云つて見れば、そんなものだ」と人々は、行成卿の一言に依つて考へ方を變へるやうになつた。直きにそれは實方當人の耳にもはいつた。實方はそれ以來行成卿に對して私かに含む處があつた。行成卿の方ではそんなことがあつたことも忘れてしまつてゐた。それから餘程間が經つてからのことだつたが、或る時實方中將と行成卿は、殿上で些細な言葉の間違ひから口論を始めた。すると實方はいきなり笏で行成卿の冠を打ち落した。其處は主上が在しますところからさう遠く離れてはゐなかつた。打ち落された冠はころ／＼と庭前へ落ちた。行成卿は殿守司を召して冠を取つて來させて、顔の色も變へずに靜かな調子で實方中將に向つて

「どういふことでせうか？突然行成がかほどの亂冠に預かるといふのは？自分には覺えがありませんから、先づ其の仔細を承はつて見たうへのことにいたしませう」と云つた。

實方は、感情に委せてしたやうなもの〻、流石に荒過ぎたと氣が付いた。そこへ、相手に餘り落ちついて出られたので、今更返す言葉がなく、自分から顔を赧らめなければならなかつた。

「行成はゑらい男だ」

主上はそれを御覧になつて、お傍の人に向つてさう仰せられた。

此の事件は、公けの場所ではあるし、殊に主上の御眼にも留まつたので穩便には濟まなくなつた。實方は勅勘を蒙つて中將の官を召し上げられた上に、「歌枕を見てまゐれ」とのお言葉で、陸奥へ追ひ遣られた。それとは反對に行成は叡感に預つて、益々實方が望んでゐて得られなかつた藏人頭に補せられた。

身から出た錆とは云ひ乍ら實方は昨日に變るみじめな境遇であつた。彼は陸奥の配所に悲しい月日を送らねばならなかつた。最初の五月の節句が來た。其の日は軒に菖蒲を葺くのが都の慣ひであつたが、此の陸奥には菖蒲といふものがなかつた。實方は菖蒲のかはりに、安積の沼のかつみを採らせて軒に葺いた。それ以來此の國では五月の節句に軒にかつみを葺くのが慣ひとなつた。

實方は歌枕を見て歩いた。そしてそれを消息にして京都へ送つてゐた。恁うしてゐたならば直きに勅勘もゆりるであらうと彼は思つた。歌枕も諸所見たけれど、どうしても在りかの分らないのが「あこやの松」だつた。彼は三年の間「あこやの松」を尋ね廻つた。それでもまだ諦めずに方々探して歩いた。或る時も其の事で鹽竈邊の土地をさ迷ひ歩いてゐると、道で一人の

翁に行き逢つた。

「あなたは大層物案じげな容子をして居られるが、一體何を歎いてゐらつしやるのですか？」と翁が云つた。

「わたしは此の陸奥にあるあこやの松を尋ねて歩いてゐる者だが、未だに其の在りかが知れないのです」

「それは近頃殊勝なお心掛けぢや。古歌にある、みちのくのあこやの松の木高きにいづべき月のいでやらぬかな——のあこやの松をお探しなされるのだらうが、併しそれなれば、幾年この陸奥を廻られたとて行きあふ道理はありません、何故かと云ふと、この陸奥といふ國は昔はもつと大きな國だつたが、餘り大き過ぎるので二つに分けて、出羽の國としたのです。であなたがお尋ねになるあこやの松の在りかは、今では出羽の國になつてゐるのです」

と云つて翁は更に詳しく其の位置を教へて呉れた。實方は、三年越しの宿志を遂げることが出來た。其の翁は鹽竈明神の化身だつたに違ひないと、後の人は云ふのであつた。

實方は恁うして幾年かを陸奥で送つたが、勅勘は何時になつてもゆりなかつた。彼は陸奥の土となつてしまつた。

後年、西行法師が陸奥に旅をした時、或る土地を通ると、野中に目立つ塚があるので「是れは何んの塚であるか」と里人に問ふと、

「この塚は中將の墓と云ひます」と里人は答へた。

「中將とは誰れのことなのか？」

「實方朝臣のことです」

さう云はれて西行は始めて腑に落ちた。冬のことで、塚の上にも、周圍にも、霜枯れの薄がほのぼのと見え渡つて、見るからに物寂しい景色だつた。西行は墓に向つて經を誦した。そして

朽ちもせぬその名ばかりをとどめ置てかれ野のすゝきかたみとぞ見る

と、口吟んだ。

相撲

相撲を遊技だと云ふと、そこらから苦情が出さうなくらゐ、眞劍を極めた遊技だ。が、柔道の如きとは、徹頭徹尾目的を異にしてゐて、何處迄も遊技であるには相違ない。而も新春の人氣を脊負つて立つ筆頭の遊技である。と、恁うは云つて見たものの、實は私も餘り相撲は觀たことがなく、例も新聞相撲で力瘤を入れてゐる仲間であるから、彼の大鐵傘下の土俵に角逐して龍攘虎搏の狀を寫し、眼の醒めるやうな記事を作ることは到底

覺束ないから、例によつて古めかしい話で物語りぶることにして、相撲の好きな人は國技館へ出掛けること。早くしないと、ソレ、櫓太鼓の音が聞える〳〵。

相撲の起原に關してはなかなかやかましい說がある。抑々相撲の始りは、天竺に於ては釋迦牟尼佛未だ悉達太子と申されたる時、御父淨飯王の弟白飯王、提婆達多摩耶大臣と角力ありしこと法華經に見えてゐる。唐土にては六國の時角觝始まり、秦の皇帝甘泉宮に於て武を講ずる戲樂として角觝あり、蓋し其の名の起りは、漢の武帝の時蓋牛の角をかつぎ、勝負を爭ひ角觝と名づけたのに出るのである。本朝にあつては更に遠く、神代に源を發してゐる。建御神御名方神角力を取り給ふ。多力雄尊拍手をうち力足を踏み天の磐戸を千里の表に投げ給ふ、力神の祖神にして信州戸隱大明神とあがめ奉る御神である。と「相撲起顯」といふ古書に載つてゐる。

玆で、つら〳〵と考へて見るのに、相撲といふものは、人類が始まると同時からあつたものに相違ない。何故かと云ふと、相撲といふものは大體人間が裸で取つ組み合ふものだ。恐らく是れ位原始的な遊戲は他にはあるまい。行司だとか、四十八手の裏表だとか、塵手水化粧立ちなぞと云ひ出したのは後の後のことである。最初はただ取つ組んで張り倒すなり蹴倒すなりしたらよかつたのだ。智恵も學問もいつたわけでない。だから人間といふものが出來て、丁度狗ころが日なたでふざけるやうな調子で取つ組み合ひをして、勝つた方と負けた方と出來たら、それが相撲の始まりである「すまひ」といふ言葉は古語で「あらそふ」ことで、猶詳しく云ふと、自分の體に對して他から加へられる力を斥けようとすることを意味してゐるのを見ても、知ることが出來る。

此の原始的な力競べに、一定の方式が立てられ、それに伴ふ見物なるものが出來て來たところで、始めて相撲といふものが嚴密な意味に於ける遊技となるのである。處で、何時頃から相撲がさうなつたかといふことは明瞭とは分つてゐないが、記錄にあらはれたところでは、聖武天皇の神龜三年七月、諸國の供御人をして禁庭に於て始めて相撲を取らしめたのが濫觴である。此の御宇より已來、代々の天子が、相撲の節會と名附けられて、例年七月叡覽になつた。相撲が公事になつたのは右の時からであるが、其の前から民間では盛んに行はれてゐたに相違ない。日本書紀第六に、人皇十一代垂仁天皇の七年の秋、當麻の蹶速と野見の宿禰と相撲を取らしめた記事がある。是れは古い處では一番有名な話で、普通是れを以て相撲の濫觴であるとなし、相撲道などでも野見の宿禰を祖神としてあがめてゐる。

が、此の時の相撲にはまだ方式といふものがない。事實は寧ろ決闘である。無論遊技ではない。いかに蹶速が曲者にもしろ、いきなり肋骨を折つて蹴殺すといふ亂暴な相撲があつて溜るものぢやない。野見の宿禰は菅原道眞の先祖だが、恁んな亂暴者を相撲道で祖神としてあがめてゐるのは大間違ひだ。

古代の防人とか部領使とかいふのは或る意味で職業的相撲取である。雲圖抄に「相撲の節供御人とは、相撲奉仕の人なり、則諸國の防人なり、先二三月の比、大將以下陣の座におゐて、相撲使の事を定、關白大將隨身陣官賭弓矢數の者等を、諸國七道に遣はして相撲人を召すなり」としてある。相撲の節會が如何に盛大な催しであつたかを推し量ることが出來る。萬葉集に大伴家持が防人悲別の心を痛んで歌つた歌がある。

麻須良男能由伎等里於比天伊氏田伊氣婆、和可禮乎々之美
奈氣伎牟都麻

禁裏の節會の相撲は可成り進歩し、完全してゐた。所謂相撲の故實なるものも多く其處から出てゐる。詳しい事は玆には畧するが、順序は大體現今の相撲と大差はない。只一見奇異に感じることは、裸體に褌をしめて烏帽子を冠つてゐることと、土俵といふ物の境界が無いことだ。土俵が出來たのは遙かに降つて天正年中のことだ。それ以前の相撲は境界なしで、相撲を取る場所を五六間あけて、餘の者が東西に別れて陣取つてゐた。土俵を設けたことは相撲道最大の革新時期で、それ以來相撲の技術が非常に複雜になり、急速の進歩を遂げたのである。猶古代の相撲に「最手」「助手」といふ名稱がある。最手は今で云ふ大關のこと、助手は關脇のことである。

相撲の節會は可成り久しく續いたが、安元年間から絶えてしまつた。「その名のみ聞く、くちをしきことなり」と、古今著聞集の作者は、餘程相撲好きだつたと見えて云つてゐる。處で、其の著聞集に、相撲で面白い話が出てゐるから、あひの手に一寸御紹介しよう。

越前國の佐伯氏長といふ相撲人が、始めて相撲の節會に召されて京へ上つて來る時、近江國高島郡石橋といふ處を通ると、若い綺麗な女が川の水を汲んで、桶を自分の頭の上に載せて行くのにいき逢つた。氏長も若い男のことではあるし、それに丁度通りを通る人もなかつたので、一寸ふざけて見たくなつて、女の側へ寄つて桶を支へてゐる眞白い腕を指でちよいとつついてやつた。すると女はにこりと齒を見せて笑つただけで別に憤る樣子もなかつた。氏長は急に其の女が可愛くなつた。そこで今度は腕をぎゆツと握つてやつた。すると女は握られた方の手を桶から離して、氏長の手を自分の腋の下へ挾んで連れて行く

のだつた。氏長は面白くなつて其の儘女と一緒にあるいてゐたが、不圖自分の手を外さうとした時、彼は駭いた。女の腋に挾まれてゐる手がどうしてもぬけなかつた。女はじつかと挾んだ儘澄ました顔をしてあるいてゐた。氏長は、どうなることかと思ひながら、おめおめと女に曳き摺られて行つた。やがて女の家へ行つた。女は桶を下に置いて、手を外して、笑ひながら

「なんであんなことをなさるのです？」と云つた。

其の樣子は、非常に優しくて、到底あんな力の出さうな女とは思はれなかつた。氏長は、女に訊かれたので「わたしは越前の國の者だが、今度相撲の節會に召されて京へ行くところです」と話した。すると女は二三遍うなづいて「それはあぶないことです。都は廣い處ですもの、幾らでも大力の人が居りませう。あなたもまるで甲斐なしではないけれど、とてもそんな大事な場所へ出るお方ではありませんわ。恁うしてお目に掛つたのも深い緣でせうから、其の節會迄にまだ日があるんなら、せめて三七日も茲へ御逗留なさいまし、わたしが其の間に少しは力が出るやうにして差し上げますから」と云つた。節會まではまだ日數もあることだし、第一氏長は女を捨てゝ行き難くもあつたので、其の言葉に隨つて留まることにした。すると女は其の夜から非常にこわい飯を握り拳位の大きさに固く握つて、氏長に食はせた。けれども餘りこわい飯なので氏長には齒も立たなかつた。始めの七日といふものは皆目飯が嚙み碎けなかつたが、次ぎの七日目には漸う少し宛嚙み碎けるやうになつて、第三七日目になると、不思議にもそれが樂々と嚙みこなせるやうになつた。

「もう都へお上りになつても大丈夫です、滅多にひけを取るやうなことはありません」

三七日が經過すると、女は恁う云つて氏長を都へ立たせた。其の年の相撲の節會で、氏長は多くの相撲人を相手にしたが一度も負けなかつた。彼は、曾て自分で覺えのないやうな力が出るのだつた。

怪力女と云へば古來巴御前と板額が筆頭に推されてゐるが、廣い世間にはまゝ恐ろしく强い女もあると見える「義殘後覺」といふ隨筆の中には、京都の內野七本松で勸進相撲を興行した時、廿位の比丘尼が飛び入りをして來て、大勢の關取を一人殘らず投げ飛ばしてしまつたといふ話が詳しく書いてある。是れなども珍らしい話だが「義殘後覺」の著者も不思議に感じたと見えて「葛城山の天狗だらう」と書き加へてゐる。

序でに女相撲のことを少々書いて置く。抑々日本で女が相撲

を取つた始まりはと云ふと、雄略天皇の十三年秋九月のことで、天皇がそぞろ歩きを遊ばしてゐると、向うで木工猪名部眞根といふ男が石の上で木を割つてゐた。それが餘り巧みなので天皇がおほめ遊ばすと、止せばいいことに眞根が「どんなことがあつても打ち外すことはございません」と自慢をした。すると天皇は大勢の侍女を其處へ連れて來られて、裸にして相撲を取らせた。眞根先生それに見恍れたばかりに思はず木を割り損じて石の上に打ち下ろした。爲めに忽ち逆鱗に觸れて、危く死刑に行はれ掛けた話が、日本書紀にあらはれてゐる。

私達が子供の時分迄は、田舎の祭禮などを當て込んで專門の女相撲の興行があつたものだが、近頃は其の筋で許さぬのか、それとも女が利口になつて志願者が無くなつたのか、とんと噂も出かなくなつた。寺門靜軒の「江戸繁昌記」を見ると怎んな記事がある。

「明和間、婦人相撲大行、與趙宋之世、上元或設此戯同一奇、而聞近日兩國觀物場、聾者與婦人角レ力、可謂更奇」

嬉遊笑覽にも「座頭すまう女すまう觀場にあり」としてある。座頭相撲とは珍物で、流石は江戸兒が考へさうなことだ。寛延寶暦頃から明和年間迄の世の流行り物を集めた江戸名物鑑にも座頭相撲女相撲の事が載つてゐて、而も次ぎのやうな狂句まで採錄してある。

座頭相撲

のばす手はなでるやうなる櫛かな（風湖）

女すまう

男より勝色ありや女郎花（梧英）

先般お茶の水で開かれた度量衡展覽會に體量デーといふ催しがあつて、女では築地の何んとかいふ待合の女將が一等に入り寫眞などまで新聞に出てゐたが、文化年間には江戸に途方もない大女が現はれた。それは文化四丁卯二月の頃から品川橋向うの鶴屋といふ旅籠屋に現はれた飯盛女で、出生は上總國小金村百姓新七娘つた、當年二十三歳、身の丈六尺二寸あつた。大評判で、此の大妓を見に行く客が晝夜絶え間なく、鶴屋では最初片輪扱ひにして給金も安くて抱へたところが此の繁昌なので意外の大儲けをした。此の妓は後に大女淀瀧と名乘つて江戸中諸所へ力持ちの見世物に出た。是れは寛政から文政年間迄の江戸の巷説を集めた街談文文集要の記事である。

小石川音羽町に遊女屋があつた頃の話である。其處の茶屋石見屋とい家の女房におしげといふ女があつた。以前此の土地で勤めをしてゐた者だが、縹緻もよく氣だても大層温和しい女なので石見屋で嫁にしたのだつた。處が、このおしげは見掛けに

依らず大の力持ちだつたが、決して其の力量を現はさないので世間では知つてゐる者もなかつた。すると、同じ音羽町のうちに相撲の年寄で音羽山峯右衛門といふ者が住んでゐて、其家には大勢若い弟子がゐたが、或る時其の相撲取どもが三四人連立つて、一杯機嫌で近所を白雲ぞめいて歩いてゐたが、折ふし七丁目の蓮光寺といふ日蓮宗の寺で、萬巻陀羅尼の修業があつて、參詣人が夥しくあつた。其所へ件の相撲取どもが遣つて來て、若い女など見ると揶揄つて人が困るのを見て面白がつてゐた。石見屋のおしげも參詣に來てゐたが、小女を一人伴れて、客殿の椽側通りに座つてゐた。其處へ相撲取が一人遣つて來て側へ割り込んでおしげの尻を撫でた、それでも知らぬ振りをしてゐるので相撲取は益い氣になつてふざけかけると、おしげはいきなり其の手を取つて膝の下におしかつて、うんと力を入れて壓へ付けた。まるで大磐石で壓へられたやうで、件の相撲取は「あッ」と云つた儘聲も立てられず、其のうち腕がひしやげてしまひさうで、見る〳〵顔の色は眞蒼になり、額から冷汗を出して、沮ぐんで顔をしかめて苦しがつた。おしげは澄ました顔をして懐ろから水晶の珠數を取り出しておし揉み乍ら口のうちでお題目を唱へてゐた。聽てあたりの人が騒ぎ出して、其處へ講中の世話役で麻上下を着た人々が來て、なり代つて詫びをして吳れたので、相撲取は漸う命を助けて貰ひ、這々の體で逃げ出した。是れは馬文耕の當世武野俗談中の一節である。

偖、話は以前へ戻る。世繼の翁物語といふ古い書に、宇多天皇が在原業平と相撲を取つて天皇がお負け遊ばして、高欄が破れたといふ話が載つてゐた。業平と云へば人も知る色男の開山だから、風にも耐えぬ優男とばかり思はれるが、是れで見るとなか〳〵力もある。山岡鐵舟が明治大帝と相撲を取つて、陛下を抛り投げたといふ話と好一對の話柄である。

王朝時代は偖置き、鎌倉から戰國時代へかけても相撲はなか〳〵盛んだつた。此の時代の武士は皆相撲の嗜みがあつた。何故かと云ふと、戰場で敵と渡り合ひ「打ち物は面倒なりいざ組まん」と云はれた時「それはいやだ」とは云へない。當時はまだ柔術といふものはなかつたから、武士は是非相撲を稽古した。柔術は徳川の始めに至つて工夫された武技で、紀州の家臣關口柔心を開祖とする。其の子八郎左衛門は稀世の妙手で、其の弟彌太郎も亦父兄に讓らぬ名人だつた。柔心の高弟澁川伴五郎は廿四歳の時江戸へ出て、後に澁川流の一派を編み出して其の術を世に廣めた。

鎌倉時代で名高い相撲の話と云へば、古今著聞集に、畠山庄司重忠が右大將の御前で長居といふ相撲取と組んで相手の肩骨を

おつぺし折つてしまつた話が載つてゐるのを筆頭に、源平盛衰記小坪坂合戰の條(くだり)で、三浦大助義明が孫和田小次郎義茂が、東国無双の相撲の上手と云はれた綴(つゞき)の太郎と組んで其の首を擧げた話、曾我物語の、赤澤山の狩りくらの節、河津三郎祐泰が俣野五郎景久と相撲を取つて勝を得た話などが、先づ主なところである。

それより降つたところでは、太平記に出てゐる妻鹿孫三郎長宗は、十六歳の頃より好んで相撲を取つたが日本六十餘州の中につひに片手に掛る者もなかつたといふ話。同じ書に、新田義貞の四天王畑六郎左衛門時能は、無双の強力で好んで相撲を取つたが、坂東八ヶ國の間に更に手に立つ者がなかつたと書いてある。尼子十勇士の隨一山中鹿之助幸盛も相撲の達人だつた。講談などでは幸盛は一見婦女子の如き美男としてあるが、實際は大違ひで、彼は身の長け七尺六寸、容貌魁偉の豪傑で、廿六歳の時までに五十六度び槍を合はせたと傳へられてゐる。

織田軍記を看ると、元龜元年二月廿五日、信長公近江國常樂寺に着き玉ひ、翌日より國中の相撲を集めて御覽になるとしてある。豊臣秀吉も相撲は非常に好きだつた。それについては恁んな話がある。

其の頃伊豫の徳猪之亟といふ大力無双の男があつたのを、秀吉は二千石で召し抱えた。彼は自分の家來の徳猪を以て日本一の強力として自慢してゐた處が、元利輝元の家臣に入江大藏之丞といふ無双の強力があるといふ話を聞いて心中安からず思つてゐた。そこで或る時聚樂へ諸大名を召して遊樂を行つた砌り輝元に所望して、徳猪と大藏と相撲をとらせて見物することになつた、兩名の力士は關白以下諸侯綺羅星の如く居並んだ庭前へ出て、双方裸になり、先づ力比べをして見せた。徳猪は身の長け六尺七寸、大藏は六尺八寸あつた。最初其處へ大竹の周り一尺五寸位のを枝も拂はずに持つて來た。徳猪は其の竹の枝を無造作に拂つた後、手で其の幹をバリバリとしごいて帶に卷き付けた。大藏も同じやうにやつた。すると今度は、徳猪は、力足を踏み、拳を固めて「やツ」と云ひ樣大地を目がけて突いたと思ふと、其の腕が肘のあたりまで地の中に這入つた。大藏は、二間ばかり向ふから驅けて來て、おなじく掛け聲をして大地を突いたが彼のは肩まで地に這入つてしまつた。見物人はみんな顔の色まで變へて駭いた。豐公は「勝負をするには及ばん」と云つて差し留めた。

勸進相撲

勸進相撲といふのは、最初は社寺堂塔の建立或ひは資金を集

めるために木戸錢を取つて興行する相撲のことを指して云ふ名稱であつたが、後にはただ木戸錢を取つて興行する相撲のことを意味するやうになつた。江戸に於ける勸進角力の起りは、寬永元年明石志賀之助が「寄相撲」と名付けて四谷鹽町で晴天六日の興行をしたのが始まりであるといふことになつてゐる。爾來江戸でも方々で相撲興行があつたといふことを看るために、慶安元年二月の御觸書（おふれがき）といふものを拔萃すると、

一、辻相撲取申間敷事

一、勸進相撲とらせ申間敷事

一、相撲取共下帶絹布にて仕間敷、屋敷方へ被呼候共木綿の下帶可仕事

といふ事がある。相撲が流行して弊害が生じたことが一目想像される。それにしても、褌にまで干涉する處は德川幕府らしくていい。參考のために、記錄に上つてゐる元祿以前の大力士の名前と丈の高さを記して見よう。

江戸　明石志賀之助（八尺三寸）
江戸　仁王仁太輔（七尺五寸）
紀伊　鬼勝象之助（七尺三寸）
出羽　山颪嶽右衞門（六尺六寸七分）
加賀　白山新三郎（六尺四寸五分）
因幡　兩國梶之助（六尺一寸五分）
江戸　御用木無女右衞門（六尺四寸五分）
仙臺　丸山權太左衞門（六尺五寸、四十五貫）

降つて天明の頃釋迦ケ嶽といふ大男の相撲が現はれた。雲州の產で身の長け七尺一寸六分あつた。「賤のをだ卷」にも其の事が載つてゐるが、其の書の作者が若い頃の話で、糀町五丁目邊を歩いてゐると向うに大勢人が群集してゐるから近附いて見ると、其の中でただ一人腰から上が人の頭の上に出てゐるから、さては馬に乘つてゐるだらうと思つたところがさうではなくて、相撲取の釋迦ケ嶽が歩いてゐるのだつた、後を隨いて行つて見ると雲州侯の裏門へ這入つた。と書いてある。

維新前迄は、幕の內の相撲取は大概出生地の藩侯から扶持を貰つてゐた，そこで相撲取は天下の力士と號してなか〳〵幅を利かした。藩侯から拜領した五ツ紋の羽織を着て往來を濶步した。勇ましかつたに相違ない。處が近頃の關取衆と來ると、大島紬にセルの袴をはき、二重廻しに中山帽子などかぶつて步いてゐるのを折り〳〵見掛ける。言語道斷の醜態である。前に記した元祿の力士兩國梶之助は櫛を差して步いた。すると鬼勝象之助も是れに直似て更に二枚櫛を差して步いた。髮の亂れを撫で付けるためだといふのだが、柔弱のやうに聞こえてなか〳〵

さうでない。風情のあること、到底帽子の段ではない。

寛政三年六月十一日、吹上御殿に於て相撲の上覽があつた。力士百六十六人、勝負八十三番、三卿を始め宿老以下の諸役、布衣以上以下悉く陪観を許された。相撲道空前絶後の盛観だつたに相違ない。此の事は彼の甲子夜話の作者も書いてゐるが、成島峯雄の相撲御覽の記には、さながら當時の光景を彷彿せしめるまでに事こまかに寫されてある。此の時東の大關は小野川喜三郎、西の大關は谷風梶之助、行司は相撲の宗家吉田追風が遙々熊本から上つて來て勤めた。最初行司がまだ團扇を引かぬうちに、小野川はあせつて「やッ」と突つ掛かつた。谷風が受けようとすると、行司は双方を押し止めて、再び取り直させた。双方十分に見合つた處で行司はさつと團扇を引いた。谷風は立ち上つてつゝいと寄り掛けた。小野川は二足三足後へ退つて「待つた」と聲を掛けた。すると行司は團扇を谷風に上げた。後に追風に向つて「何故勝負が付かぬうちに谷風に團扇を上げたのか」と尋ねた人があつた。追風が答へるには「此の相撲は谷風の方に强味があることが判つたから、勝負を付けさせずに谷風の勝としたのだ。すべて上覽相撲の如き場合に、行司が團扇を引いた以上「待つた」などと申すべきものではない」と云ふのであつた。

谷風といふ相撲は古今の名力士だつた。彼は我邦の相撲史を飾る第一人者である。谷風を出した仙臺の郷黨が「わしが國さで見せ度いものは」と自慢したのも無理はない。谷風は身の長け六尺二寸五分、體量四十三貫、肩幅が三尺、色が白くて眼が長く切れ、容貌は頗る柔和であつた。膂力絶倫で、當時彼に匹敵し得るものはなかつた。彼の對抗者としては東の大關小野川がゐたが、併し小野川が谷風を負かしたことは僅か數へる程しかない。それは天明二年寅三月二十八日、淺草藏前八幡社内の相撲で勝つたのが最初であつた。此の勝負は滿都の人氣を沸騰させたものと見えて朱雞菅江と蜀山人の狂歌が出來たぐらゐだ。

手練せし手をとろろうが小野川やかつと車のわつといふ聲――菅江――

谷風はまけた〱と小野川がかつをよりねの高いとり沙汰――赤良――

講談などでは、谷風が小野川の孝心に感じて勝を讓つたやうに云つてゐる。が、事實はさうではなく、小野川が故意に數回の「待つた」をして、肥滿してゐる谷風が十分疲れが出た處を見すまして不意に立つて敵の胸を頭で突いて勝を得たのだ。是れは卑怯なやうでもあるが、力量が上の對手に向ふ場合として

は止むを得ないことである。當今の相撲でも「待つた」が多過ぎて無駄な時間を費すと云つて非難する人が往々あるがあれは無理だ。本場所で立つからには命の遣り取りも同前、必ず勝つといふ成算が立たないうちは立つわけにはいかない。苦しい處だが其處に勝負の面白味がある。大體相撲を看に行く程の人が、時間の經濟を云々するのが了簡違ひだ、日が暮れやうが夜が明けようが、家のことも借金のことも忘れてゐるやうでなければ本統の相撲好きとは云へない。

小野川喜三郎も名力士だつた「彼は江州大津の產、身の長け五尺八寸あつて、無双の美男だつた。始め大阪相撲に入つて小野川才助の門人となつたが、安永七年廿一歲の時江戸へ出て來て到頭東の大關と迄出世した。久留米のお抱へ相撲で、怪猫を退治した話は有名なものだが、勿論事實は保證の限りでない。

寛政六年谷風は横綱免許を受けた。相撲道最初の横綱である。横綱免許は古來熊本の吉田追風家から出るものとなつてゐる。吉田家は相撲の司で、先年國技館の土俵開きの際にも當代の追風氏が東上して式を司つたが、同家は鎌倉時代からの行司の家柄ださうである。寸錦雜綴といふ書に、谷風の横綱免許狀の寫しが載つてゐるから再錄して置く。

一、横綱之事

右者谷風梶之助、依二相撲之位一令二授與一畢以來片屋入之節迄、相用可レ申候、仍如件、

寛政六丙年十一月十九日

本朝相撲之司御行司

吉田追風判

一體横綱といふものはどういふ由來をもつてゐるものかと調べて見ると、嵯峨天皇の弘仁元年、攝州住吉の神事相撲の時、近江國の住人ハジカミといふ力士があつて、天下是れに敵する者がなかつたところから、當時の行司志賀左衛門といふ人が、住吉神社の注連繩を取つてハジカミの腰に纏はしめ、對手の中に是れに手を掛ける者があらばハジカミの負けと定めて勝負を決せしめた處が、一人として手を掛け得る者がなかつた、といふ故事に出るものだとなつてゐる。詰まり强勇無双の力士を象徴するものである。それにしては此の頃の横綱は弱過ぎる。近年では太刀山だけが大力士で彼の褌に手を掛けうる者がなかつた處は、古へのハジカミもかくやと想はれて勇壯を極めたが、其の他の誰れ彼れのやうに、不見轉藝者ではあるまいし、矢鱈にコロ〳〵轉げたのでは、横綱の品位を毀ふこと尠なからずだ。

谷風のことで一寸お愛嬌の話がある。或る時谷風が小角力を

供につれて日本橋本船町邊を通ると、魚屋が松魚を持つて來たから買はふと思つて價をきくと非常に高いことを云つたから、供の者に云ひ付けて「負けろ」と云はせて自分だけ行き過ぎると、魚屋が呼び留めて「關取が負けるといふのは縁喜が惡くはありませんか」と云つた。すると谷風は慌て丶立ち戻つて「買へ／＼」と供の者に云つて買はせた。御幣を擔ぐところが角力取らしくて面白いが、併し是れは谷風が負けるのでなく、魚屋を負かすのだからさのみ忌むべき事ではないのに、「買へ／＼」と云つたのは、流石の谷風關もちとせき込んだと見える――と、假名世説の作者太田南畝が、自身の若かつた頃の實地の見聞であると斷つて記してゐる。

谷風の弟子に雷電爲右衞門といふ相撲があつた。信州の產で身の長け六尺五寸、雲州侯のお抱へ力士だつた。雷電と云へば寧ろ谷風小野川以上に有名で、其の強味は古今無比と稱されてゐる。彼は前後十六年間大關の地位を維持してゐた。享和元年春興行から文化七年冬興行迄、廿回の興行中、負六回、預六回、無勝負三回、引分一回、其の他は總べて勝ち放しといふ成績だつた。彼は一度張り手を用ゐて對手を張り殺したために、生涯土俵で張り手を封じられたが、其の後又もや貫木で閂（くわんぬき）をおつぺし折つたので、此の手も封じられてしまつた。雷電が相撲を引退してから餘程經つた時分の話だが、或る時阿武の松といふ當時の横綱が雷電の家へ遊びに行くと、折柄雷電が寒さうに炬燵の火にあたつてゐたので、阿武の松が冗談に「爺（おやぢ）も意久地がなくなつたな、昔は強かつたか知らないが、今なら俺だつて負けないわさ」と云つて冷やかすと、雷電が躍起となつて「なに、此の小僧が、幾ら齡を取つても貴樣などに負けて溜まるものか」と云ひ返して、到頭ほんたうに土俵へ出て相撲を取つたところが、三番共阿武の松が負けてしまつたといふ話が傳はつてゐる。阿武の松といふ横綱は徳川幕府時代を通じて一番弱かつた横綱ださうだが、それにしてからが横綱だ、さう弱いわけはない。雷電の強勇眞に推し知るべからずである。

文化二丑年二月、芝神明社内に於て相撲取と町火消との間に大喧嘩が起つた。是れは有名な「め組の喧嘩」である。後に此の事が狂言に仕組まれて、當今でも春芝居の出し物として屢々諸所の劇場で上演する。角力に火消に喧嘩と云ふと三題噺しめくが、兎に角初春らしくて威勢のいい話である。此の時の相撲番附を見ると、東の大關が平石七右衞門、西の大關は雷電爲右衞門と出てゐる。喧嘩の發頭人は相撲方が四ツ車大八（前頭四枚目）に九龍山屏平、（二段目六枚目）火消側はめ組の辰五郎に其乾分の長次郎等である。此の顚末は例の街談文々集要に詳し

く記載されてゐるから、極く掻いつまんで記して見ると、二月十六日のことで、相撲は丁度八日目にあたり、十日の内一番の好取組が揃つてゐるので早朝より見物が押し掛けて棧敷も追込みも滿員であつたが、折柄見物に來てゐた鳶の者と見廻りの九龍山といふ角力との間に爭論が出來たのを、附近に居合せた九龍山の兄弟子の四ツ車大八も其處へ來て相撲二人で鳶の者を場外へ抓み出してしまつたのが原因である、此の鳶の者はめ組の頭取辰五郎と乾分の長次郎だつたので、直ぐ樣仲間を引き連れて手に手に梯子や、鳶口を持つて再び相撲場へ取つて返して來て、木戶を打ちこわして亂暴した。見物人は大騷ぎになつて右往左往に散亂した。相撲の方では四ツ車と九龍山が、もともと自分達から起きた事だから最先に飛び出して、小角力共を引きつれて鳶の者と闘つた。四ツ車は棧敷の隅にあつた三間の梯子を持ち出してりゆう〳〵と振り廻して働いた。火消側も是れにはたじろいで鳥居外迄追ひ捲られたが、鼓迄來ると鳶の者は大勢商家の屋根へ登つて瓦をめくつて雨の降るやうに投げ付けた。力士の中にも其のために怪我人が澤山出來た。四ツ車も瓦で眉間を割られたが物ともせずに働いた。大兵で色白の美男だつただけに、血汐がタラ〳〵流れて面部を染めると、美しくもあれば物凄くもあつた。結局此の喧嘩は、此の近邊に住まつてゐた清五郎といふ若い者の仲裁で双方一時引くことは引いたが、内濟にすることは四ツ車の師匠相戶を始め年寄雷權太夫等が承き入れなかつたために、到頭公け沙汰になつて、相撲方は寺社奉行松平右京亮へ此の趣きを訴へ出で、火消方は南町奉行根岸肥前守へ届け出たので、双方呼び出されて入牢仰せ付けられた。同年九月廿一日、北町奉行小田切土佐守其の他掛りの役人列座の上、四ツ車九龍山火消辰五郎長次郎を始め關係者一同四十五人一度に白洲へ呼び出され、銘々の意恨より市中を騒せ爭動に及びたる段重々不屆とあつて嚴しく叱り置かれ、前記の四人は何れも江戶構仰付られ、其の他の者もそれぞれ御咎があつて、漸く一條落着を告げた。

有名な半鐘の事に關しては、此の作者は何んとも書いてゐない。それは此の騒動を大きくした原因は、喧嘩の最中に半鐘が鳴り出したので火消が殘らず繰り出したためだが、併し此の詮義を始めると容易ならぬ罪人を出さねばならぬところから、半鐘が獨りで鳴り出したといふことにして、重々不屆なる半鐘とあつて三宅島へ遠島仰せ付けられたといふ、舊幕時代珍裁判の一つとして人口に膾炙してゐる話である。

私は先年物好きに神明前の宿屋へ下宿して半歳ばかりあの土地に住んで見たことがある。其時分にはまだ例の東京新繁昌記

にも紹介されてゐる有名な矢場と稱する魔窟が彼處にあつて、なか〳〵繁昌の土地だつた。あの矢場のあつた場所が昔の相撲場だつたのである。處で、あの界隈に聞えた舊家が二軒ある。一の鳥居をはひつて行くと左側で今では汁粉屋だが太々餅といふ餅屋と、日蔭町通にある大丸といふ呉服屋と、此の二軒だが、是れは何ちらもめ組の喧嘩以前から神明前で暖簾を張つてゐる家だとのことで、芝居でする時でも、喧嘩場の書割か大道具で必ず此の家をあらはすことになつてゐる、大滑が此の屋根へ登つて瓦を投げるのがお極りになつてゐる。太々餅の家は近年の建築だが、外構への形は芝居の大道具で見るのと同じやうに造られてある。大丸の方は平屋建ての非常に古い建物である。眞逆め組の喧嘩當時かの建物といふわけでもあるまいが、兎に角東京市中でも町家では類がないくらゐ古風な店構へだ。私はよくあの邊をぶら付きながら、四ツ車大八とか、め組の辰五郎とかいふやうな、今では私達の心の中で詩になつてしまてゐる人物のことを眼に置いて見るのだつた。

——終り——



支那趣味の研究

呉昌碩などを持てはやす人があるが、清末から民國へかけては或は上手な部であつたかも知れぬ。日本には腐るほどある。セザンヌが尊ばれると、其の摸倣者が巾をきかす。セザンヌから見ると、自身の摸倣者ほど嫌なものはなかつたらう。南畫を新たな目で見る人があつて、其の長處を摘出する、、田舍の宿屋の張り交ぜまでが美術品となつて化けて出る。幕末明治の南畫の爲に、眞の南畫までが累を蒙つて其の價値の吟味が放置されて居たと云ふ事は、既に忘れ去られて居る然らば南畫は本場が好いかと云ふに、悉く然うも行かない。清代康熙乾隆の盛世を以てしても、尊ぶべき藝術家は數ふるに多くない。四王呉惲は人のすべてが先づ指を屈する大家であるけれども、六人の中にも等差を認め、又六人惣體を見ては、慣用手段が甚だしく目立つ。共通の手段を只少しく巧みに使つたか、否か、と云ふ邊で、是を前代の明に比べ、元に比べては著るしく落ちて見える。寧ろ歸化人郎世寧の堅緻を認め、羅牛仙錢叔美に贊成したいと思ふ。然う云つてから考へれば、郎世寧は元より外人、後の二人

唐土雜觀

小杉未醒

錢叔美の翁は、苦がい顔をして、女のそばから身を退く。髪の匂ひを嗅ぐと、吐き氣を催ほすと云ふ。若い時は相應の道樂者であつたが、老來とんと女が嫌ひになつた。此の老人の敏感さは、律僧の嚴格を思はしめず、却つて病的な近代人の神經過敏を思ふ。人の說に、五根のうち、目と耳との發達は卽ち文化人の發達、味感より嗅覺に、觸覺の發達にまで極まつたものは、後退して變化するより外はないと云ふ。かゝる官能の發達は、實は支那人が世界一かも知れぬ。支那の民族も、今迄幾度か後退しかけたことであらうが、易世革命の變每に、馬上の胡族などが混入しては、取り置きの物菜に火を入れたやうに、持ち直したものかと思ふ。清朝の末は正しく後退變化に近いのだ。今頃

者にも西洋畫術の影響が多く現はれて居る。南畫の常套手段が行く處へ行き止まつてしまつて、別路を取るべくは、西洋畫術の直接自然法が氣に入つたのであらう。此の系統を斜めに引張ると、今の新らしい日本畫家の、逐條描寫の細密畫にまで及ぶ。此處まで來て見たら、須らく首を回らすべきであるが、龍錢の二人者の仕事には好いものが殘つて居る。さりながら、清朝と德川期とは丁度同じ頃に、同じ程の年數を經た。どちらが藝術の花をより多く咲かしたかと比べると、是は殆んど角力にならぬ。宗達光琳大雅堂、此の三大人の一人にも及ぶものが清朝に出來て居たらうか。尙此外に浮世繪と云ふものがある。浮世繪は、德川期のみならず、日本全體の藝術史を飾る明星で、又東西藝術の比較のゲームに於ける、有効な切り札であらねばならぬ。思へば德川期と云ふものは稀なる彩華爛漫の時代であつた。

芥川龍之介君は、雲林六墨の帖を開いて見つゝ、こんな峻嚴な空氣の中に、呼吸器の弱いものは棲み得まいと呟やく。雲林などこそは、支那の寶であり東洋の星である。一個の石と一本の松の樹、その整正と嚴重は、實に此世の物とも思はれぬ。清朝の四王呉惲の徒の、重疊の山岳渺森の江水も、此の石此の松に出會つては、一たまりなく崩壞し去るであらう。雲林は景中に人を點じない。それを摸倣したにしても尙一種の共通性があるか、髯半仙も點景人物を用ひない。極度の潔癖、叔美の髮臭と相似たものかも知れぬ。究竟するに東洋の藝術家は、各々其の淨土を描かうとして繪を作る。胸中萬里の山水は、卽ち念頭の淨土である。淨土は永劫の寂靜、雲林は此の寂靜を押し詰め押し詰め、遂に其の淨土から人間を追ひ拂つたらう。古日本の畫家は、常に支那を憧憬の夢幻境とした。幾多の南畫家は、頻りに見もせぬ樓閣山水を描き、幾多の狩野派は、筆を把れば必ず唐人物を現はす。見ぬものを描くが必ずしも惡しとは思はれぬ。力足らざれば見た物をさへ寫し得ぬから、況んや見ぬもろこしの繪に上作のありやうもない。池の大雅に到つては、見た日本の富士山の姿よりは、見ぬ瀟湘八景の方に其の大手腕を恣にし得た。彼の力が彼の空想の翼を障りなく動かすに足りたからである。大雅の筆は撲茂潤澤、又彼の雲林などの流と、相對して異つた世界を開くものであらう。大木と雜草と交はり、大きな岩が思はぬ邊から顏を出し、肥つた脂切つた、併しながら俗ならざる人物が動いて居る。大雅の淨土は何人も入り得る淨土であつて　何人も作り得ざる淨土である　一通りに考へれば、潔癖性ありと云はるゝ日本に雲林が生れず、大雅の風格却つて唐人に似るを奇なることにも爲し得る。よくよく思へば支那は大國で、分らぬ國で　神秘な國で、極端

な潔癖と驚くべき不潔と同居し、過敏と遲鈍とが同一人にさへも並存して居る。遠い佛蘭西伊太利の藝術の尊さも、人の偉らさも、いやな處好もしい處、どうやら私にも解し得るやうな心地がする。近い支那は割り切れない。昔の日本繪師は、實在の淨土の如くにも思つたらう。汽船と汽車で、遂隣りの國にされてしまつてからは、誰も行き彼れも行く。私も二度程足を入れて見たが、さすが淨土とも思はぬけれども、どうも分らぬ處の多い、不思議な味を持つ夢幻境たる事を感ずる。秦淮の歌吹海に、南京蟲を連想し、伯牙の琴臺にどぶ泥と豚とを覺えて居て、さてそれが決して幻滅の材料とはならぬ。

華玉川と云ふ廣東人が、寄席に出て片言交りの都々逸などを唱つて居た。しばらく見えないと思つて居ると、太鼓持ちとなつて紋付きに辮髪の姿で現はれた。酌をする右の腕の手首に近い處に肉瘤が物の双の如く付いて居た。何だと訊いて見ると拳法の手刀の擊ちを入れる練習から出來た胼胝だと云ふ。此手刀が存分に利くと人の額を打割る。五指を揃て戟となし、砂の桶へ突き入れ突き入れする。爪と指端の肉とが鐵の如くになる。往時拳匪の亂と云つた、其徒も此類の武藝の習熟者であつたらう。日本の武藝は、氣合の充實と運動神經の敏捷を貴ぶ。未だ人の肉を鐵にするに到らない。此の長く鍊つて飽かざる性來の根氣が、支那の工藝品に善く現はれて居る。細部の限りなき繰り返しがそれである。如何に細工が精緻を極めたとて、畢竟職人の工藝に過ぎない。此の職人的工藝が、清末に到つては繪にもある。彫刻にもある。繪や彫刻に現はれた時は、則ち後退變化の時期で、頭のない手ばかりの人の作物となる。一方に墨を惜む事金の如しと稱する。尺幅に乾坤を盛らんとし、一抹に重山を表はさんとする。前者後者は寸分の高下とばかりも思はれぬ。二つの異れる人種かとさへも思ふ。伯牙を愛し、琴臺を建つ。是が上流人。琴臺に豚を飼ひ、蓮池を糞土にする。是が下級人。支那は國が古いので、階級が　液をも別にし、上流人と下級人とのみの社會となつて既に久しいのではないか。支那の藝術は、或は世界中で一番貴族的であらうも知れぬ。人が瀧を見る。題して高士觀瀑と云ふ。我々ならば、瀧を見る必ずしも高士に限るまじきと思ふ。人が竹叢裡に在る。竹林清談と云ふ。清談は下級人の事ではない。玉堂富貴、松壽萬年は暫く措く。支那人は隱逸を貴ぶ。支那人の隱逸の幻影は、物質の富貴以上なるが爲の隱逸である。手の尖の肥料臭く、女房の下品なる事彼の柏原の一茶の如くなるとは撰を異にする。隱逸なりし文人の間にも、陶潜一人を別にしては、皆是れ系圖の一卷、傳家の寶刀一口ありての隱逸である。又貧に居り不遇に沈み、世を嘲

り倣をいふものがある。形は農夫の如く漁夫の如くにして、心は卽ち士大夫である。繪にも農夫を描き漁夫を寫す。農夫も漁夫も士大夫の變形でなくば已まない。一場の漁樵問答には、必ず高論卓說が出でさうである。眞に農人の愚を愛し漁夫の味を貴しとするわけではないと思ふ。是を私は攻擊しやうとはして居ない。此の貴族趣味は人間の具足して居る性分の半面である。墨を惜む事金の如し。段々煎じつめて此處まで到達する文化人の凝り性である。金碧山水と云ふ畫樣があるが、それなどには餘り目をくれない。第一級の硯石、數百年の古墨を以て彼等は極度の省筆を爭ふ。金を捨つる事泥の如き成金藝術と譯が違ふ。

我々は書籍に於て繪に於て、常に此の上流人にのみ接する。數に於ては優る彼の下級人等の、愛す可き處、無氣味なる處、葛天氏の民の如き處、半獸の怪人なるが如き處に屢々接して居ない。一つの國民は、大きく見て一人の人と思はれる。一人の人の朝暮に、神に近づき又鬼に近づくがやうに、一の國民も時代時代の群衆心理があらねばならぬ。上流人も下級人に化される時もあり、下級人も文化的な聖世に會ふ事もある。乃至彼も此も一個人の胸の內に共同生活をして居るでもあらうから。結局いつまでも我々は劃然たる了解を付し難い。只私は、自身の目に映つた上海廣東の苦力、長江洞庭の漁夫の、長大な骨格小さい頭、骨格のうちに不思議な永續的の力量を思はせ、顏には反省の苦痛なく、目は宿命的なあきらめと盡きざる體慾に濁りながら、さりとて彼の南洋の土人の如く單純に懶惰ならず單純に殺伐ならざる、彼等の性根に少からぬ興味を持つ。處で日本はどうであらう。九尺二間の車夫の家の、方三尺の庭にも朝顏の鉢が並ぶ。村の鎭守の額には、田園詩人の發句が揭げられる。民の悉く賢なる事日本の如きは稀であるかも知れぬ。皆必ずしも眞ではないから、輕々しくは他に向て誇り得ないけれども、下級人も藝術の法樂を味ひ得ることは支那と違つて居る。病草紙餓鬼草紙の出た頃の歷史家は、庶民の生活に筆を着けずして、公卿と武家との政權の移動のみに力を入れて居るが、繪の上には都の巷の平民の狀態も寫され、小路の汚穢もそのまゝに殘されて居る。高士觀瀑竹林淸談の支那の繪師と比べては、著るしく寫生的であり記錄的であり、下級民的である。此處に又私は西行と芭蕉とを思ひやる。芭蕉は身を以て農人と市人との間に混じ、西行は草木風露の下に魂を拋つ。西行はどう變つても西行で、墨の衣を引拔いて、天下取りの謀師にもならず、高德の祖師にもならぬ。芭蕉の正風は農人も市人も、さびを思ひわびを願へば隨處に詩句をなす。雲林の二石一松樹は、煎じつめた

文化的上流人の省察で、芭蕉の十七字は殘山剩水の間に興を寄せる。西行芭蕉の、あはれとさびとわびとばかりは、私に日本のみに出來て、支那隱逸者流にも歩く、殊に西洋の人の未だ嘗めさる持ち味と思ふ。

私は來年の秋あたり、三たび支那に遊んで長江を溯り、三峽を上つて見やうと思ふ。寫眞のレンズと云ふものは、あれは感情も想像も持つて居ぬ奴であるから、高い岩と思つて撮つても、存外凡岩であり、廣い淵と感じても、そのやうに廣くも現象し來らぬ。その寫眞で見ても、三峽の高峻さ廣大さは、日月を驚かすばかりである。くら闇の象の如き、茫然また渺然たる彼の楊子の流れの上には、此の鬼窟の如き畏怖すべき山河の戰が不斷に戰はれてある。漢詩人は誇張に巧みだと人が言ふが、支那の實景を見ては、誇張とは思はず、實寫にあらずとも實感であることを覺ゆる。日本の漢詩家が利根川に平江千里と云ひ、耶馬溪に高山大澤と驚ろかすのを滑稽に思ふ。さて彼の楊子江を大筏が下つて來る。遠くから見れば嶋かと思ふ。嵐山の筏師は小意氣な四條派の點景である。此の大筏は一村の移動である。アンペラの小屋が蒲鉾なりに數十も連る。各家族の住宅である。畠があつて青菜が出來、鷄が鳴き豚が歩く。之を導くものは大船二艘又三艘。江流の爲に岸に膠するを防ぐとて、航路を示すに筏頭に矢倉を組んで、大太鼓を打鳴らし色々の旗を振る。水勢の急なる處、航路の轉ずる處に及べば、太鼓鳴りしきり人叫喚し船戰ではないかと驚かれる。幾月幾日筏が着いて、材木の取引をするには、アンペラ小屋の四隅を持つて、砂原の上に運んで行つて假の一村を作る。材木を賣るは元よりながら、このアンペラも錢に換え、豚も賣り鷄も賣り、子も賣つて故郷を指して歸ると云ふ。此の子も賣つてを聞くに到つて、私は徹底せる彼等下級民のふるまひに舌を捲いた。楊子江の流域は、南宋平遠山水の題材場であり、又流詩人の感傷の舞臺である。或は絕句或は長詩、彼等は玆に其の貴族的の態度を以てして、風月を咏じ古を懷ひ世を恨んで居た。平氣で子を賣る江民は、其の頃も今も、同じやうな無氣味な呑氣な生活を續けて居るであらう。くら闇の象の如き、大まかな譯のわからぬ大江は、點ずるに峨冠大帶の高士官人をのみ以てせず、新らたに點ずるに此の無氣味な呑氣な一人種を以てした繪なども欲しては居まいか。

京漢鐵道で私は支那の中原を通過した。北京着の時間を客室のボーイに訊ねたら、妙な言葉で答えて呉れた。段々考へて見ると夫れが佛蘭西語であつた。佛人との合辦事業である爲か、古の豪傑が、鹿を爭つた中原を、汽車の車輪がパリジヤンの發音を響かせて驅けて行く、と冗談に思つて見ておかしくもなつた

が、私も其の汽車の如く中原を素通りして、洛陽長安の跡をも見得なかつた。支那の文化は何と云つても中原を以て壇場となす。中原に咲いた花の中では、私は尤も唐代を盛なりとなす。初唐は英雄の時、盛唐晩唐は才人の時、外夷の朝貢數十國に及ぶと云ふから、アラビヤ人波斯人、乃至は羅馬人の姿も此の黄金時代の宮廷に見るを得たらうか。阿倍の仲麿は、逆に行つた小泉八雲のやうに、目に珍らしい物を見、耳に珍らしい音を聞いて歸りを忘れたであらう。李白が日本の裘を着て得意になつたと云ふ。それは如何なる大和の草屋の主の縫つたものであつたか。清の乾隆帝は繪かきの大パトロンであつたらうが、畫が御自慢で、各畫の上に頻りに題書し、大きな印をピタピタと捺される。時には嫌味な人にも受けられる。唐の玄宗は通り物で、酔つぱらひの詩人を、細殿廡から擔ぎ出させて、水を打ち掛かけて本性付け、惚れ拔いて居る御姿の美しさを詩に作らせて喜ばれる。樂器を胡北からまで召させて、自ら曲を作つて、梨園の女弟子共にオーゲストラを奏させる。まことに貴族的藝術の黄金世界であつたと思ふ。貴族的ではあつたが、官僚的でなかつたのが好もしいと思ふ。繪畫にも王維が南宗の始祖を稱したり、曹將軍が延廷に駿馬を寫して、須臾に九重神龍出づと驚かしたり、嘸名品もあつた事であらうと思ふ。馬さへ寫させた事であるから、御姿の繪姿も出來たらう。支那上流の男女に屢々見る處の、白茶色或は淡金色とも名付く可き皮膚は、あれは永代かゝつて、日光と塵埃とから避け得た深宮養成の皮膚に相違ない。日本には稀にしか見受けぬ。朝鮮にも少しはある。琉球の辻第一の美妓と稱した女に其の皮膚があつたと記憶する。色白ながら仇白からず、櫻色ならず、靜かなほのかな黄色を沈めて、手觸りの肌目はさぞと思ふ。此の稀有な觸覺などは、日本に於て先づは西鶴にでも寫して貰はねばらちが明くまい。楊貴妃の如きは確かに其の皮膚の持主であつたらうと思ふが、どうであらうか。美人も英雄も名山も大水も、不朽に藝術の冴えを留むる名作となつて、殘つて居るべきでありながら、支那は革命毎に例の無氣味な呑氣な下級民が、兵となつて其の獸性を發揮するから、或は炎上或は潰滅、造形美術の長く持ちやうもない。美術品の潰滅と云へば、或る富者が死んで、二人の子が跡を貰つて、何物でも平分した。幾百の名家の畫圖は大小新古があつて、數の平分が面倒であつた。そこで量の平分にした。卽ち重ねて置いて、寸法を取つて、眞ン中から切つて分けたと云ふ。此の根性の撤底さに私は再び舌を捲く。

私の支那趣味觀

工學博士　佐藤功一

十年程前に逝つた私の極めて近しい關係の老人にたいへん支那趣味の人があつた。安井息軒門下の立派な漢學者で、長く司法官を務めた人だつた。明治十四五年頃、任に長崎に在つた事があるから、恐らくは其の頃から此趣味を持つやうになつたものだらう。邸內に支那室と云ふものを造り、其處に支那の器物や書物などを集めて樂んで居たものだ。此支那室の意匠が中々振つて居る、恐らくは禪宗寺や支那畫の樓閣などから暗示されたものだつたらう。石壇を作つて、壇上には木の圓柱を連ねた柱廊が設けられ、軸ずりの樓唐戸を開ければ、柱廊から一段高く黑い瓦を敷き詰めた二間半四方程の室があつて、光線は卍崩しの組子の硝子窓から取つてあつた。唐戸の突き當りが両側に柱を出して、丁度龕のやうになつて、其處には大香爐の乘つた長い紫壇の卓子が置かれ、龕の壁には、時によつて、書だの漢帝の畫像だの梅道人の竹の繪などがかけられた。其左手の壁際には臥榻が置かれ、右手の壁際には龕に近く曲彔が置かれた。中央には四角な大卓子を圍んで紫檀製の椅子が並んで、其右手曲彔の手前の小卓子には唐本や文房具などきちんと置かれた。格天井の中央から南京玉で飾られた六角の吊燈籠が丁度大卓子の直上に下がつて居つて、柱には聯が掛けられ、龕の左側の壁には種々の樂器が吊り下げられて居た。

客は榻や支那甕などを置き並べた庭先きから這入つたものである。年に一回孔子祭を行ふて、龕に孔子の畫像を掛け、其前の卓子には豚の片股などを乘せて、嘗て息軒門下の同窓の人などを招いたものであつた。二階は疊敷にしてあつたが、戸の手摺などは卍形にして、檐の四隅に風鐸などを吊して、外から望めば南畫などに見る亭のやうな形をして居た。老人は私などが訪ねるとどんなに喜んで此の所謂支那室で歡待したか。なんでも泌々と支那の情緒を心に畫いてそれに浸つて居るやうに見えた。これは確かに徳川の中期以後に興つた、長崎を通して支那から這入つて來た文人趣味、南畫趣味、煎茶趣味の流れであつた。老人の行き方は割合に極端なやうに思はれたが、老人が漢學者であつて根本的に支那文化を尊んで居つた所へ加へて、一面から強く藝術的に文人趣味に感じた事から斯う云ふ風になつたものだらう。

私の知つて居る所によると、明治二十四五年あたりの清樂の隆盛は實に驚くべきものだつた。當時は子供の事だつたし、殊

に田舍に出つたので他の支那文藝の流行がどうだつたかは知らないが、これを以て當時非常な支那趣味の流行と見てよからう。清樂の流行は日清戰爭當時から殆んど後を絶つて了つた。併し德川中期以後の此煎茶趣味即ち近代支那藝術の趣味は其後も長く引續いて今日に及んで居る。

そして明治の半頃から頭を擡げて來たものに別に古代支那の趣味がある。勿論日本の文化は各時代とも支那文化の影響に依つて進歩し來つたものであるが、それは悉く吸收消化されてしまつて、取り立てゝ支那趣味として殘つて居るものもなく、また古代支那文化の秩序的の研究もなかつた、所が此の頃から其研究が始まつたのだつた。最初は六朝と唐とに行つたやうである。更に一方は後に漢周と行き、一方は前に宋元と來て居るやうに見える。そして其れ等が在來いふた支那趣味即ち近代支那のものとは異つた所もあるといふ事に注意さるゝに至つた。今日では知識級の人々には大體に於て之れ等の差別が理解されて居るやうだ。

同じ支那趣味と云つても時代によつて違ふ事は勿論であるし又地方によつて異る事は勿論である。支那は風俗の點に於ては地方によつて統一がなく、此點に於ては一國と云ふよりも寧ろ一大陸と見做す方がよいのだらう。

併し是等歴史や地理に依つての支那文化の深い研究は他に讓るとして、私のは支那に關する書物を讀む事も鮮いし、旅行も大正六年の春に約一箇月間滿洲から北京に、北京の近郊を見てから京漢鐵道の沿線を見物し、漢口を出て長江を下り上海附近を見た丈けなのであるが、まづ大體に於て此の旅行から得た知識を話す位のものだ。

斯う云ふ話がある。「昔大へんに學問のある、併し少し眼の惡い植物學者が遠い國を旅行した。其處で高い樹の立並ぶ大原生林に道入つた。そこに枝を四方に張つた大木を見出した。その木には樹質の分らぬ程にもいろ〳〵の蔓草や珍らしい植物が纒つて居た。それが此學者には頗る珍奇な樹木に思はれた。そして枝に絡みついて居る蔓草や寄り木の葉と花とを集めた。之れ等の花や葉が此大きな木のものでないと云ふ事に氣がつかなかつたのだ。そしてそれを大切に本國に持ち歸り、書物に照して、長い拉典名を附けて其發見を公表した。そこで彼は偉い發見者として高名になつた」と。急ぎの旅行者の觀察の如きは多かれ少かれ此植物學者と同じやうな結果を來すものでないかと思はれてならぬ。併し此話の第二段に於て「此事があつてから殆ど百年も過つた、此學者の本國で造船事業が隆盛になり、大きな木材が澤山に必要だつた。或人が古い書物から此學者の記

事を發見して、其遠い國に人を送つて、國王と契約を濟し、其森林を伐採した。所が其木は本國にもあるもので、そんなに珍らしいものではなかつたが、造船事業には大へん役に立つた。」と云ふ事があるのを見れば、どんな話でも役に立たぬものはなくなる筈だ。實は私が今此の話を玆に引用したのは、話其れ自身が既に老莊哲學趣味になつて居るからなのだ。

自分が鴨綠江の百十六間餘の大鐵橋を渡り、滿洲に入つたのは五月三日の夜であつた。安東縣で奉天行に乘り換へた。こゝに來て見ると車中にも、プラットフオームにもあの柔かい白い朝鮮服が全く見られなくなつて、それに代るものは淺葱色の、極めて引き縮つた衣服を着けた支那の男子と、油で練り固めた頭に、臙脂を塗つた顏で、黑色のピカ〳〵光る上着に、趣きのない細い袴を穿つた滿洲の女とであつた。中には唐人髷のやうなそしてあれよりも高く突き立つた樣式の髮を持つた女もあつた。これは滿人特有の髮だと云ふ事だつた。男にも尻尖兒（カンチエル）と云ふ長いチョツキのやうなものを着たのが交つて居た。之れ等の人々の動作は今迄見て來た朝鮮人よりはズツと活潑で、服裝の形も色も亦ズツト强い人間味を示して居るやうに思はれた。之れ等に交つて日本人は、洋裝の者も居るが和服の者も多い。それから大阪風のあの厚子姿の雇人風の者も交つて居る、一番統一のとれないのが日本人の姿だ。之れに反して此廣い滿洲で而も其い旅をしようとするのに、不相變丸髷や銀杏がへしで、世界一の美術的服裝と云ふ事に自ら誇りを持つらしく、模樣ある下着を蹴開く世界一の非活動的の裝をして居る。日本人の風俗はこのやうに復雜ではあるが、しかもそれを一つ〳〵見るときは其所には明晰な單純さがある。

此の安東縣はたしかに是等三國人の各個の趣味を比較研究するのに最も便利な所と思はれた。こゝから奉天に至る沿線は只のべつに廣く何等の趣のない滿洲平原に於て特に風光の美しい處であると云ふ事だが、夜行列車ではそれを見る事が出來なかつた。眼が醒めてあたりを眺めた時には、夜の隈は物陰に影を潜めかけて、車窓には靑白い明りが射して居た。時は午前四時を過ぎて、風景は昨日までとは全く異つて、何處までも果しのつかぬ耕地で、殆ど家を見ない。四時半頃此曠野の果から太陽が昇つた。ふと三四里向ふに小山が一寸姿を見せたが、直にそれも其あとを沒して、後は矢張り果しも知れぬ眞黑な土の畑の連續だ。これが秋になると人の背を沒する高粱畑となるのであらう。何處に村があつて、何處から出かけて來るのか知らぬが、滿洲の百姓は此早朝を白い息を吐き乍ら馬を使つて耕作に餘念がない。何と云ふ勤勉な人達だらうと思つた。此地勢が生む國

民性は、至る所樹木の茂つたそして高低の烈しい地勢の國で育つた吾々には中々理解のむづかしものだらうと思はれた。これが先づ第一に浮んだ支那の事物に對する最も強い感想だつた。

奉天から旅順に至る間は所謂遼東半島で、日本の風景とよく似て居たが、奉天から北京間がまた山一つ見えない、何等の樹のない耕地だつた。萬里の長城の渤海灣への終點である山海關への手前、興城あたり、砂塵に濁つた空氣に夕日が眞赤に色づいて、處々の烽臺を背景にして緩い曲線をなした丘の羊の群れて居るあたり、一團の柳樹が夕風に戰いで、遠く苦力の掛け聲の聞えると云ふやうな處もないではなかつたが、概して荒寥と云つてもいゝ、果しもない平野であつた。又北京の郊外萬壽山に行く途中の風光などには多少關東地方の平原に似て居るやうな處もないではなかつたが、北京から漢口に至る間の横斷に殆どのべつに廣い、樹木の極めて少い、乾き切つた土地の連りであり、揚子江近くになつて樹木も茂り、山のたゝずまひも日本のやうな感じの處に出たが、やがて揚子江に出て了ふと、たゞもうだだつぴろい濁水の入江としか思はぬ程も廣大な水量で、其兩岸がまた長い茅原になつて居る光景は、先きののべつに廣い平野と共に、此の如き自然の廣大無彊に對して人力の如何にも小さく感ぜられて、自ら虛無的の老莊思想の生れ出るのも當然の事のやうに思はれた。支那人は日本の水流を見て、日本には河がなく、山間から流れ出る水が僅かに溪をなすに過ぎず、直ちに海になつて了ふと云ふ事を云ふさうである。

支那内地には到る處に竪穴、横穴の穴居の民が見られる。さうかと思ふと非常な見事な宮殿がある。甚だ原始的な生活をして居る者があるかと思へば北京の中央公園(元の社稷壇)の如き歐洲の最も整つた公園にも負けないやうなものがある。開港地へ行くと又其所には素晴らしく現代的な風俗が見られる。現代的と云ふ點に於て到底日本などの比ではない。太平洋會議の支那の大使の顧維鈞が各國の大使の中で最もアップトゥーデートの姿をして居ると云ふ話である。私が天津から北京に行く一等車に乘た時に、車内で斯う云ふ光景が私をアッと云はした。私の向ひの一番右の端に居つた、兩耳朶に眞珠を下げて、兩手首に赤と綠の寶石の入つた腕環を篏めた、顏に粉黛を凝らした若い支那服の女は、此室に敷き詰めた、日本の列車などでは夢にも見られぬ、赤と紺と青と黄の模樣の見事な絨氈の上に、黒の裙子(スカート)の下から現れた薄綠の靴下に、先の尖つた、そして勳章の綬のやうな眞赤なリボンのついた、華奢な紺の絹靴の足摺りをしながら、右隣の髮を角刈りにして額際を一文字に剃りつけ、緣なしのキラ〱光る眼鏡をかけた、高襟な袍子の青年の肱掛ー

に凭せた腕の上を、指で輕く叩きながら、首を傾けて何か囁いては笑つて居る。其男の右隣の、袍子の上にこれと對の馬掛子（マコワズ）を着て、頭髪をオールバックにして、今湯から出て來たやうな顔をした男の指には、二つの指環が燦いて、其一つはダイヤモンドの素晴らしく大きなものである。其の又隣が、頭髪を短く刈り質素な袍子を着ては居るが、ボーイを呼んで炭酸水を命じ半分だけコップに注がして後は持ち歸らすといふ行き方であつた。

支那には此のやうに穴居の民から現代の最も新しい風習迄が殆ど歴史博物館のやうに並んで居る。これ等多様のものから一貫した趣味を見出さうとする事が一寸考へると困難のやうに思はれるかも知れぬ。

支那歴史は先づ大體に於て、商、周あたり以後をたしかと見るのだろう。

商、周時代以後の古器物に關する著書の最古のものは、宗時代の呂大圠、李龍眠共著の「考古圖」であり、次いで徽宗皇帝の編纂せる「博古圖錄」清朝の乾隆帝の「西清古鑑」、次いでは阮元著の「鐘鼎彝器款識」、尙ほ下つて「金石索」などであるが、之れ等の書物によつて周以前の藝術品――それは孰れも銅器だが――を眺めるに如何にしても其の不思議、形ないに驚

かされる。フェノローサは此種のアートを太平洋式と名付けて、之れを新西蘭の彫刻物やアラスカ人の織模様など、對立さして居るが、確かに其の似寄りを見出すことが出來る。メキシコやペルーあたりの土俗藝術がまた甚しく之れに似寄りを持つて居る。世界到る處石器時代から銅器時代の模様には之れに似寄りのグローテスク――クグローテスクの文字がルネサンス時代に古代羅馬の遺跡を發掘した時に、其建築裝飾の唐草のさきが鳥や獸や人間などになつて居る其奇異な有様に穴式（グロット）と名付けた事から來て居るのであつて、これはこれらの原始藝術などよりはもつと明晰な、クラシカルなものに名づけたもので、此文字を以て之れ等の原始藝術の特性を呼ぶには餘りに弱くて、不似合であるが、兎に角此文字を用ひるとして――さを持つて居るので、フェノローサの太平洋式と云ふ言葉が當るか當らぬか知らぬが、兎に角ペルーや、メキシコや、支那の此原始藝術は、世界中で最も強い奇怪さを持つて居るものである。中でも支那のものが最も甚だしいやうだ。例へそれが根元に於て、漢族渡來以前の原住民たる苗族固有の藝術にした所が、全く漢人のために吸收消化されて、これが銅器に表はれ來つたものである。是等の藝術の形式は私に取つては餘りに強く不明瞭で不可解である。或はこれは獨り私ばかりの問題でなく、根本的に明

るい頭腦の持主なる日本人の多くには同じやうに感じられるに相違ないと思ふ。是等銅器其のものの形にも随分奇怪なものもあるが、今自分の茲に述ぶる所は全般を通じて銅器の表面にグリ〱と出崩しを隙間もなく施して、其間に怪物の顔や、怪物の形をあしらつたものを指すのだ。就中いやらしいものは「饕餮(タウテツ)」「夔(キ)」「兕(ジ)」「螭(チ)」などの怪物である。そして是等の藝術の系統は支那に於て永く脉を引いて居るので、今日の建築物の装飾や、織物の模様などにもたしかに其の傳統と認められるものが中々多い。

漢時代の藝術になると餘程明るく、分り易くなつて來て居る。それでも尚ほ不可解な意味のものが澤山ある。漢時代の藝術はメソポタミヤの藝術の影響を受けたものだといふ事だが、元來メソポタミヤ藝術そのものが又餘程晦澁(ワフムシー)のそして強い感じのものだ。埃及の藝術を幾何學的な明瞭さを持つて居るものとすれば、此方は代數的な錯雜(コントリカシー)を有つて居るものと自分は考へる。これが支那に入つて、在來の藝術と交り合つて生じたものには、矢張自分にとつては不明瞭な域を脱し得ないものが頗る多い。これを以て見ても、既に發生的に支那人そのものゝ趣味がどんなものであるかといふ事が想像されるではあるまいか。

北京で天壇に遊んだ時に、此建築物が私の頭をまた大へんに混がらかした。第一の高い塀で圍まれた敷地の、第一の門を入ると、其所はたゞのぺつに廣い眞平な平地であつて、そして第二の門に近く老槐樹の森が茂つて居る。第二の門を入ると、曲りくねつた檜柏の老樹が欝然と茂り合つて、其間からかん高い鳥の聲が聽える。其樹下の薄暗い處をぬけると第三の塀があつて、其の内に天壇の建物があるので、此の第三の門を入ると急に明るい氣持になる。それは眼を眩ますやうな純白な大理石から反射する光線によるので、先づ自ら四級に別れて居る數十段の大理石の階段を上ると、同じ石で敷きつめられた壇上に出る。此の壇上から圓筒形の建物が突き立つて居るのだ。そして此の建物は圓錐形の三層の屋根を持ち、一番上の屋根が傘のやうに中央につぼんで、頂上には丁度辣韮を倒にしたやうな球が附いて居る。眞白い大理石の反射、屋根からの深い陰を通して朧ろに見える檐先きの極彩色、中心に向つてつぼまつた黄瓦の輝き、其の屋上の辣韮形の球が如何にもづぼんとして、何とも云へない不思議な感じを與へる。若しこれが西洋人や、現代日本の建築家であつたならば頂上を斯くの如く鈍く取扱ふ事はしまい。きつと突立つた劍先きのやうたものを附けるだろう。しかも此の辣韮形が全く天壇の文章に最も肝心な句讀點を打つて居

るものと思はれた。森の中からの高い異禽の囀り、周圍の森から遠く連つて西北の方北京の街上を透して塵埃の霞の中にほの見ゆる遠山、其地域の廣大な素晴らしさと相待つて、此の建築的景色に對して、自分は未だ直ちに心を取り纏め得る丈けの修養を持つて居なかつたと云ふ事をつくづく感じた。支那の天帝は、日本の天神の如く透明な屬性を有つたものでなく、何處までも大きな強い、そして複雜な意味を持つものゝやうに感じられた。

日本人は彼等の形作る租界に於ては、大抵の場合大神宮を祭るものである。奉天に於て私は宮殿や北陵を見て後に、此の白木作りの小さい大神宮に詣でたが、其の餘りな單純さに一種の感を引起す事を餘儀なくさせられた。此等建築物に表はれた相違こそ、自ら支那人と日本人との趣味の相違を物語るものではなからうか。

北支那の田舍を歩いて民家を見ると、民家の壁は普通泥土から作られて、內部は左右對照的に房室が配置せられ、家の前には庭を取り、正面に門を置いて邸の周圍を土塀で取圍む。家族が多くなつて分家が出來れば、それがおも家の前面に左右兩側に對照的に並び、其全部が一つの土塀で圍まれる。此の總てが對照的に並ぶといふのが此地の建築の特色で、室內の調度裝飾がまた同樣な行き方だ。例へば卓子を置くにしても、壁に接して中央に据へ、椅子卓の兩側に壁を背にして置く、寢臺でも聯でも皆斯のやうにおかれるのだ。對照（シンメトリー）は人間景で平衡（バランス）は自然景だ。

家が斯うして漸次に增して行て數十戸の村里をなせば、また其の全體が牆壁を以て圍まれる。北支那地方によく何家屯、何家店などゝあるのは皆斯して生じた村なのだ。更に人家が增加して一つの都邑となると、其の都邑がまた城壁を以て圍まれる。初めは泥の家に泥の塀だが、やがては煉瓦の家に煉瓦の城壁にもなる。あの萬里の長城と云ふやうなものが、此意味から全國家を一つの城壁を以て圍んだものと見做してよいのだらう。

大きな都市を遠くから眺めた時、近づいて前面に立つてすら、それが只一つの廣大な城壁のみで、中にどんな街があるかと云ふ事が想像せられぬことが澤山ある。只如何にも廣い平地の中に、幾何學的な大きな箱が靜かに立つて居るとしか思はれない。城門を這入つて見て初めてこんな繁華な街があつて、そして人がこんなに居るのかと驚かされる事がある。最もこれは獨り支那の都市のみでなく、歐米の中世紀の都市でも外觀はそうであつたろうし、また日本だとて封建時代の都市はそうであ

つたに相違ないが、バビロニヤやエクバタナの昔は知らず、他所に於ては今日支那に於けるやうな此んな大きな城壁は到底見られぬ事だらう。南京の城壁は自然の地勢に沿ふて蜿蜒九里餘高さは五十尺より七十尺に至り。北京のものは大體に於て直線形をなして直角に交り、延長六里餘、高さ六間、壁上の濶さ八間餘もある。北京城に付て述ぶれば、內城丈けで九門が開かれ、孰れも巍然たる木造二層樓をなし、壁の四隅には又角樓が高く聳え、城壁のたゞ單純に平面なのに對して色彩の美を遺憾なく表はして居る。門の入口のアーチの大きな事、其の條鐵入りの扉がまた極めて頑丈なものだ、一番すばらしい門が正陽門の所の前門だ、下から上迄一面に灰色の石で積み上げられ、方形の窓が横に十三宛三段に高く開いて上に庇があり、庇上の壁に又同數の窓が一段に開いて、その上が深く入込んだ軒飾りになり、入母屋形の屋根を頂て居る　柔かな灰色の壁と深く蔭になつた軒先きの紫と青が勝つた、そして所々に赤と金をあらはした色彩とが、其の全體の如何にも嚴丈に廣大なのと相待つて何とも譬えやうなき美しさを見せて居る。斯う述て來ると、如何にも天壇の記事と似てしまうが、これが支那に於ける此の種の建築の特性であつて、これより外他に形容の言葉がないのだから致し方がない。もう餘りにうるさいから、紫禁城內の北海の瓊華島に上つて東西南北幾里とも知らぬ樹木の門に黃瓦綠瓦の殿樓門塔の整然と列をなす壯觀に對しては述べぬことにしやう。

日本は古來此の如き宮觀の壯麗などといふ事に付て、注意を拂ふ事が少いのは事實だ、如何に古い平安朝の建築が宏壯であつたからとて、それは到底比較になるものではない。それは國が小さいのだから止むを得ぬとしても、それより外になほ日本の山水の美しいといふ點が、日本人をしてより多く自然に親しませたといふ大きな原因がありはすまいか。

私は奉天の宮殿で天子の寢殿を見たとき、こんなに對照的に配列された建築で、外は牆壁を以て圍まれ、庭はすつかり石で疊まれた、斯う云ふ中に住まつては、仰いで望み得る日月星辰の外は全く自然を――一木一草すらも――見得ないのだらうと考へたのであつた。

南支那に行くと、住家の樣子なども餘程日本のやうに柔くなり、牧童がのどかに牛の背に乘つて笛を吹いて居ると云ふやうな、南畫に見るやうな景色や、麥畑の中を白帆が行くと云ふやうな風景が見られる。けれども蘇州で留園といふ名園を見た時、これは明時代の東の園の故趾で、近く「盛宣懷」によつて修築されたのだそうだが、其の庭の大部分が煉瓦で疊まれた壁の中にたゞ奇石怪巖が並べてあるといふ行方なので、これまた自分に

甚だ不可解な庭園であつた。斯くの如きは房を分つて妾を畜へ、油でいためたものを食ひ、頭をべつたりと油でかため、緞子の着物を着て、子女の足を小さく纒足し、玉類の裝身具を簪び、耳環や腕環をつけ、强い聲を發する小禽を飼ふ人たちでなければ了解の出來ない庭で、刺身とすまし汁に陶然として浴衣に庭下駄で下り立つ庭ではないと思はれた。あの小栗宗栗や小堀遠州の名に依つて呼ばれる、大德寺方丈の俗にいふ虎の子渡しの庭や、同大仙院の相阿彌作の庭なども石組の庭には相違ないし、もとは支那から輸入した方式のものだらうが、それとこれとは雲泥の相違だ。

支那人のは言葉すらも、上聲去聲上平下平の四聲と、有氣無氣捲舌音や尖音喉口音などの組合で、耳ざはりが極て複雜なものだ。彼等のいふ枯淡の趣味は日本人の意味する枯淡とはたちが違ふ。例ば一方は紫檀のよく枯たので、一方は桐の木のよく枯たのだ。日本のは素燒きの淡さで、支那のはエナメルの淡さだ。

回教の會堂を支那では淸眞寺といふ。天津では友人S君が貧民部落の間にある淸眞寺に案內して呉れた。其途上で斯ういふ話をして呉れた。支那では淸眞寺のやうな不思議な雰圍氣を持つた寺はない、其處に這入ると何となく落着いて、心の空虛が充されるやうな氣がするので、よく獨りで此處へ來るのだと。

S君は現實主義の敏腕な事業家で、藝術の方面にはなか〱趣味のある人なのだ。其S君から斯ういふ話を聞いたので、少からず好奇心が頭を擡げて來た。近づいて見ると寺は大きな中庭を通つて本堂に入るので、堂は內部が前後に內外二陣に別たれ內外陣とも天井から角形の燈籠が無數に吊されて、外部の赤く塗られて居るのに對して、內陣は、壁も柱も天井も床も皆白く光線は屋蓋の塔から導いてある。其柱間を通して奥の强い色彩の祭壇を望み見た時、なるほど周圍の貧民窟の騷がしさから閉されて、S君の云ふやうに一種の壯嚴と神秘さを感じた。それは甞て君府やカイロ府で出逢つた回教寺の趣と全く異つた感じであつた。君府やカイロにあつたもの丶方が、まだずつと明るく冴えた氣持を與へた。アラビヤ藝術は複雜ではあるが明晰で透徹して居る。

S君のいはれるには、支那の寺や廟なぞでは此樣な氣持は到底味はれない。只總ての淸眞寺丈けが斯くの如き感じを起さしめるのだと。

此所を出てからS君は自分を回教徒の料理屋へ案內した。回教料理では決して豚肉を食はず、羊肉を食ふのだと云ふ話であつた。料理の注文に應じて、給仕人が高い聲を出して帳場へ通ずるのが、丁度日本の蕎麥屋や牛肉屋で御何番さん御酒に何な

ど丶吹鳴るのと同じであつた。もつとも日本も同じだが料理屋の總てがこれをやると云ふのではない。支那料理が自然に會得した衛生術のために、何んでも十二分に沸煮すると聞いて居たが此處では生の芝蝦を食はせるのには驚いた。食事をとりながらS君の話されるには、支那人は大へんに體面を重んずるので、よく面子（ミエンズ）と云ふる事を云ふ。面子に拘はると云ふ事だと何うしても容捨しないのだ。それで妓などに酒を飲ませるによく俺の面子によつてと云ふ事を云ふのだと。なるほど誰かに斯いふ話を聞いた事があつた、それは神田あたりの下宿屋で、支那人の宿料が溜つて、どうとも困つて立ち退いて貰ふ時に、その人の机なり何なりを預て置くと、いつか借金丈けの金を持つて、きつとそれを取に來ると。S君は尚ほ言葉を續けて、「君もこれから家を見て行くだらうが、個人の家でも表構は堂々たる邸宅だが、表に比して內部はそんなに立派ではないよ。そして人を招く時なども、珍藏の美事な植木鉢などを表には堂々と飾り立てるが、日本のやうに床しい奧庭など丶云ふものはないのだ。これは例の面子の關係だらう。廟などでも同じ事だよ。孔子の廟などは外觀はそれは立派にしてあるが、內はガランとしてつまらぬ木像などが並んで居るだけだよ」とこんな話をしてくれた。なるほど孔子の廟などには殆ど形式のみで精神の入つて居ない事はたしかだ。併し關帝廟などはこれと異なり、いろ〱な供物などが賑かに飾られて居た。道教の御寺の道觀には中々立派なものがあり北京の白雲觀はその最も壯大なものださうだが、自分は終に一つもそれを觀る機を得なかつた。

個人の家で表の特に立派なのは成程S君の云ふ通りであつた。北京では同君の世話で大きな邸宅を其の事務所に宛て丶居る日本の某商社に厄介になつて居たが、たしかにさう云ふ氣持があつた。

一般の宿屋などにもさう云ふ氣持ちがある。宿屋でよかつたのは洛陽の鴻運東棧であつた。此の宿はそんなに表構丈けのものではなかつた。私が洛陽の停車場へ着いた時、丁度此地に羊毛の購入のために滯在して居たC君が、折よく停車場へ來て居て、未知の自分をいろ〱鄭重に世話してくれた。そして停車場の附近の宿屋は悉く馬斑兒（マーパル）と呼ばれる私娼が滯在して居て、旅客を相手にするのでやかましくて休息も出來るものでないと云ふので、停車場とは大分距つた城內の靜かな此の宿屋へ案內してくれたのだ。宿の表には大きな門があつて、門は二段の石段を上る壇上に立つて、門口は八尺ほどの半圓形のアーチから成り、アーチの緣だけを黑い煉瓦で積み、他の全體の壁は眞白に塗られて、そこに鴻雲東棧と大文字で書かれて居た。門戸を

潜れば屋根裏の赤い装飾梁と、黄色の扉とが壁の白と、アーチ縁の黒とによい調和を持つて居た。左側の壁の前には椅子が三脚ほど並んで閑人がこゝから門口を通して表を眺めて居た。右手には門とつゞいて門衛があり、其の前室の床には眞紅の卓子を挾んで椅子が二つキチンと並び、此處に細い〳〵豚尾に結つた上品な老番頭が居て着いた旅客の世話をしてくれる。門内は塼を敷き詰めた中庭で、右手には三つの客室が一棟に並び、之れに對して左手の厨房の側から槐樹の巨木が大きく枝を廣げて中庭の半ばを蔽ふて居る。そして其の下には大きな金魚鉢や蓮を植えた大鉢、柑子、香閑、桂花、夾竹桃、薔薇などの大きな鉢物がづらりと並んで居る。之れ等の列を一々眺めながら行くと、更に兩側に客室を有する第二の門があつて、門前には左右に低い煉瓦塀が前に突き出して、上には石榴や薔薇の鉢が乗り、其の脚もとには低い寒竹の植込があつた。

此の第二の門を潜ればやはり塼を敷き詰めた第二の中庭の三方に客室が並び、客室の柱が庭に面して柱廊になつて居る。その中庭の一方に片寄せてあんぺらの日覆が出來て居て、其の下で二三の若者が將棋を差して居た。建物の壁は地上から三四尺ほどまでの高さが煉瓦張りで、それから上は悉く白く塗られ、柱廊の柱は黒塗で、垂木鼻が青く、瓦と垂木との間の厚い茅負が赤かつた。

中庭のつきあたりが私にあてられた室であつた。石段一つ上つて柱廊に立つて戸を開けば、そこが二間四方ほどの居室で、何等の煩さい裝飾もなく、木部は何れも黒塗一面を細く赤く塗つて如何にも上品な室である。つきあたりの壁に接して卓子が置かれ、其の兩側に壁を背にして椅子が並んで居た。もしこれが宿屋でなければ卓子の上には何等か掛物が掛けらるべき筈だ。左手の壁には黒地に金文字の「小作爲佳」と云ふ板額がかゝり、右手の寢室の入口の上には同じ大さの「既安且樂」と云ふ板額が掲げられて居た。寢室に入るとつきあたりの窓の下に例によりて二脚の椅子に挾まれて卓子が置かれ、更に兩椅子の隣には籐を張つた木の寢臺が二つ置かれてある。これが自分の室であるが、此外に第二の中庭の右手の門を出て、此寢室の窓の下を通つて裏に行けば、また第三の中庭があつて、其の周圍に客房が廻つて居る。寢室にあつて組子障子の窓からの柔かな午後の光線で茶を飲んで居ると、中庭の隅の井戸車の水をあけてカラ〳〵と綱を落す音と、庭で將棋をさして居る若者たちの笑聲が遠く聞える丈けで如何にも靜かな光景であつた。C君は此家の料理は甘くないだらうと云つて他所から料理を取り寄せて、居間の卓上で馳走をしてくれた。それは洛水の鯉の飴煮であつ

た。食後表の門の椅子に凭つて外を眺めると、割竹の拍子木を兩手に持つてカチ／＼鳴らしてくる物賣りがあつた。

開封の名金台棧は此宿よりももつと彫刻的裝飾があり、扉に蘭の繪などを彫りつけた表構への宿屋であつた。此所では四つの中庭を過ぎて一番奥の亭に通された。洛陽の鴻雲棧台でもさうであつたが、譬へ僅かの日數でもこれが自分の住ひであるかと思ふと愉快だつた。日本人が住居を椅子式にするにはわざ／＼西洋の不馴れな裝飾的樣式を學ばずとも、此式で行くのがよいではないかなど〻思つた。近代式住居の方式に移るには支那式を媒材とするのが一番よいではないかなど〻考へた。こんなにい〻宿屋でありながら、洛陽の宿も此宿も寢に就いて燈を消すとぞく／＼臭蟲が出て來て眠を妨げられた。

概して中部支那の建築は北支那のものよりも淡泊な氣がする、南支那のものは更にそうの樣に思はれた。

此地方へ來ると黄色い瓦は見られない。何故と云ふと黄瓦は王者の建物丈けに用ひらる〻ものであるからだ。黄色は一般原始民族や、古代の文明國民間で最も尊重されたものだ。それは全く太陽崇拜から來て居るのだ。帝王が太陽神の後裔と見做された事から、支那でも此關係から黄が帝王色となつたので、宮殿の屋蓋が黄瓦を以て葺かれるのは此理に基くのだ。西洋でも羅馬帝政時代までは、黄は總ゆる民族によつて尊重されたものだが、基督教勃興以來、此宗教が在來の異教に對して挑戰したと同時に、黄色をも惡魔色として排斥した事から中世紀の間には全然之れを忌む風習を馴致したのだそうだ。併し支那には古代から今日まで此風俗が殘つて居るのだ。支那人は斯う云ふやうに黄を尊び、紙類や器物などにも此色を喜んで用ひるが、衣服に丈けは用ひる事はしない。これは喇嘛僧が必ず此色の衣を着用するために、初めは謙遜して避けたものだらうが、日本人が蓮の花を佛教の花なる事から死者を聯想して、ついにこれを忌むに至ると同じく、黄衣を嫌ふに至つたのだらうと思ふ。私は南畫の墨繪などの黄の表裝を好むものだ。たしかに中の繪なり書なりが一層躍動して見えるやうな氣持ちがするし、又其幅のバックになる大體の壁の色にもうつりが好い。私の友人に此色を廢頽の色だと云ふ人があつた。何故さう云ふのか聞きたゞしもしなかつたが、スペクトラム色に於ける配置からしても、我々の實際の感じからしても、寧ろバイオレットこそ廢頽的な色ではなからうか。

私は色に付て餘りに多く說明し過ぎた、併し、如何なる藝術も色を除いては語り得ぬが、支那建築に於ては殊にそうだ。支那のやうな單調平板な風土には色彩の建築を生じ、日本のやう

な山紫水明の景色には清楚な建築が生れるではなからうか。

本當の支那趣味は、支那の文藝に親しんで見なければ解らぬものかも知れぬ。併し自分にはこれを讀む暇もない、時々稀な飜譯物などで味ふに過ぎぬ。

概して支那趣味は複雜だ。日本のものは僅かな材料を用ひて、簡單清楚で然かも完全なものを求めやうとする。明晰典雅、素朴恬淡の趣味だ。支那のものは反之、複雜なものゝ綜合に依つて重厚なものを求めやうとする。迂餘曲折、强烈濃艶の趣味だ。

最初に述べた私の老人の支那趣味には、此の色彩と錯綜とに缺くる所があつた。併しそれは止むを得ぬ事だらう。それは既に日本人に依て選擇せられた支那趣味なのだから。日本人の煎茶趣味が總て此の行き方だ。材料には隨分思切つたものが用ゐられるが、其の綜合は結局平明だ。

抹茶趣味は古く這入つた丈けに、全く日本的に統一されて、長い間上流社會の手に依つて取扱はれたために、一種の固い方則を生み、貴族的でセリース式になつて居る。煎茶趣味は反之這入つて來てから未だ日が淺いのと、自由思想の中流社會の手で取扱はれた爲めに、平民的でパラレル式だ。

近來、支那器物の輸入が驚くばかり多い。煎茶趣味――支那趣味の同意義の文字と！・ゝ流行の前夜ではあるまいか。私の老人のやうに椅子式の新煎茶趣味が、生活改善と結付いて起ろうも知れぬ。老人は地下で喜んで居りはせぬか、老人が支那鉢に佛手柑を盛つて卓上に飾つて居る様子が目に見えるやうだ。何といふ佳い色だ此の果物の黄色は、なぜこれを廢頽の色といふのだらう。

（終）

住宅から見た支那

工學博士　伊東忠太

一、リットン氏の支那觀

今は早十八年の昔となつたが、我輩が支那旅行中雲南省の騰越で英領事リットン氏の許へ尋ねて行き、三日間客寓して種々支那事情の話を聞いた。その一言一句は今もなほ昨日の如く明かに腦底に殘つて居る。

リットン氏は少壯政事家で兼て事務家であり、相當な學者でもあつたが、我輩の質問に應じて隔意なき意見を述べられた。その一節を綜合して次に紹介して見よう。

「自分は支那に在住してから約十年になる。その間努めて支那人と交はり、支那の國土國民の研究をした。一と通り歴史も調べた。今後の支那の運命に就て畧ぼ考察の材料も得た。自分の第一に感じて居ることは支那は十年來依然として少しも進歩せぬことである。若も進歩した點があれば、夫は後の方へ進歩して居るのである。これは支那の國運の窮まる所である。何人の力を以てするも如何ともすることが出來ない。今後も決して進歩はせぬであらう。支那の事物は何によらず皆斯の如くである。依然として數千年前の文物のまゝである、

「支那人と交際して見て第一に感じて居ることは、支那人が强烈なる自己本位であることである。自己の利益の爲には甚だ鋭敏であるが、理義の前には頗る迂鈍である。所謂支那第一流の人物と稱する名家にも會つて見た。夫は一言にして言へば權謀術數を弄する者で公明正大、誠意誠心の紳士では無い。よく辯じよく論ずるが、夫は筋道の立た議論ではない。彼は無雜作に無頓着に無法なことを言ふ癖がある。始めて之を聞く正直者は煙に捲かれるが、彼の性癖をよく吞み込めば至て與し易い。

「學問藝術のことは自分は餘り深くは分らない。併し上述の如き國情の下に於ける上述の如き國民であれば、その學問藝術も亦知るべきのみであらう。學問も藝術も古今進歩發達して居ないのではあるまいか、將來も發達を望むことは出來ないのではあるまいか。

これはリットン氏の十八年前の感想である。今日果して如何なる感想を懷かるゝか、氏は既に十數年前に於て歸らぬ旅路に就かれたので之を聞くことを得ないのは甚だ殘念である。我輩が爾來數次支那內地を旅行して得た印象も亦甚だリットン氏の所懷に似て居るものが有るが、今日之を發表する限ではない。今日玆に述べんとする所は、支那藝術の一部としての住宅觀で、住宅を通じて支那國民の趣味を考へ、之に出て支那國民の性癖を考へ、彼のリットン氏の感想と照し合せて聊か我輩の所感を述べて見度いと思ふのである。問題が可なり擴大される傾向にあるので、よく話が纏まるや否や甚だ疑はしい、或は無雜作に無頓着に無法を云ふ者と思はれるかも知れぬが、自分では公明正大の積りである。

二　北支那の住宅は代表的

さて支那の住宅に就て所感を述るのであるが、その前に一言して置くことがある。夫は住宅なるものが極めて明確にその國民の趣味性癖を表はすものであると云ふ事實である。凡そ國民

の衣、食、住その他言語、文學、藝術、宗教等、何れも國民の趣味性癖を表はさぬ者はないが、就中住は最も明確であると思ふ。衣や食は一時の感興に出て正しく趣味に合しないものでも試に之を攝取する場合があり、文學藝術も氣まぐれに脱線的な物を作る場合があるが、住は必ず常に眞劍に日常生活に適し趣味嗜好に合ふ樣に造られる。一時の感興や氣まぐれに大金を投じ長時日を費して住居を營む者は先づ有り得ない。是故に其國民の住を觀察することは即ちその國民の眞の性癖や趣味を研究する所以である。

支那の住宅を說くには本來其發生の理論から出發し、歷史的にその發達の順序を敘することが最も學術的であるが、玆にはその正道に由らずして、直ちに現今に於ける支那住宅の一般の性質を述べ、この性質が即ち支那國民の性質の反映であることを說き、この性質が古來殆と少しも變化することなく、數千年來一貫して來たことを論じ樣と思ふのである。

併し支那住宅と一口に云ても、夫は實は甚だ不得要領である。何となれば支那（勿論支那本部即ち十八省及滿洲の三省のみを指す）の國土は南方亞熱帶の地方から北境黑龍江流域の沍寒の地方まで廣がり、高山峻嶺を以て充塞された西南地方、千里の沃野を以て蔽はれた河江の下流地方、荒漠たる原野相連なる北西地方と云ふ樣に、土地の氣候地質に甚だしい相違がある。元來土地の氣候風土に應じて發生發達すべき住居は當然亦た到る處にその構造樣式等を異にせざるを得ぬ。然らば玆に所謂「支那の住宅」とは抑々支那の何處の住宅であるか、先づこれから定めてかゝらねばならぬ。

我輩の玆に所謂支那の住宅とは北淸の住宅を指すのである。北支那とは黃河の流域に屬する地方で、即ち支那文化の發祥の地である。邈たる太古から既に見るべき文化があつたと考へられて居る、周以來の文化は王室の都城であつた長安洛陽を始めとし、周末諸侯の國土は殆んど皆今の北支那である、秦が四海を統一してより文化は漸く南方に推移し、南北朝以來南支那の文化が發達したことは遺蹟の證明する所である。即ち支那古來の文化が今日に保存されて居るのは主として北支那である、支那固有の趣味を最もよく發揮して居る所の住宅は北支那の住宅であらねばならぬ。我輩が今支那住宅の代表として北支那の住宅を取らんとするのは之が爲である。

三、北京上流の邸宅

今日現存する北支那の住宅の標本として、玆に北京の舊士族の邸宅を擧げることにする。

其邸宅は原則として、若も事情が許すならば南面を理想とする。敷地は牆を以て圍まる。南面に先づ第一門が開かれる。門前に上馬石がある。これは馬に騎る時の足場である。門扉には神荼、鬱壘の像を畫く代りに、赤紙を菱形に貼てそれに神荼、鬱壘と墨書するを普通とする。門柱には一對の聯を懸け、それに對句を刻し又は書くのである。例之ば「忠孝傳家久」「詩書繼世永」の類である。門の左右には門房がある、これは門番や下人等が居る所である。

第一門を入れば中庭がある、中庭のことを院子と云ふ。中庭を通つて第二門に達するのであるが、第一門と第二門とは一直線内にあらずして屈折して居るのが多い樣である。この場合には第一門から一たび照壁に突き當り、折れて院子に入り、又折れて第二門に達するのである。

普通はこの第二門が最終の門で、垂花門と呼ばれて居るが、高級の家では更に第三門がある、最終の門を入れば美しい石敷の院子があり、突當りに主人公の居間なる大房があり。左右に眷屬の居る廂房があり、左右全く均整である。大房と廂房とは遊廊を以て連結せらるゝ。大房の後に後房がある。これは夫人及侍女の居る所である。この四房が即ち一家の主要なる建物で、我が平安朝時代の寢殿造りとよく似て居る。即ち大房が寢殿に當り、廂房が東西の對屋に當り、後房が北の對屋に當るのである。之に附屬して厨房がある、更に必要に應じて幾つかの雜舍がある、車、馬を備ふる人の爲にはその置場もある。家族は銘々にその所屬の房に住ふのであるが、食事の際には大房の前の院子に食卓を置て一家團欒の樂を取るを普通とする。

敷地の後に空地を取り、或は蔬菜を作り或は果樹を植へ、或は池を穿ち山を築き、樹林を配し花等を栽ゆ、即ち後園である。房の前なる院子には多くは盆栽などを陳ねる。即ち前庭である。屋宇は總て瓦葺で、木造であるが甎を混用し、殆んど常に色彩が施されて居り、間々彫刻を以て飾られて居るので、一見頗る立派に見へる。

以上は極めて概畧なる北京邸宅の實例の記載であるが、次には邸宅の各項に就き、今少しく詳細に所感を述べ、支那家屋が古來多く變更することなくして今日に至た事を論じて見度と思ふ。

四、左右同形の配置

以上記述した通り、支那の標準住家の性質は極て特殊のものであるが、先づ第一に注意すべき點は其左右同形の配置である。

凡そ何の國に於ても、其初發時代の住家は單純な一塊の建築物であるが、漸次に發達するに從て複雜となり、單調が破られ

て變化を生ずる。只夫が儀式的建築、例之ば天子の宮殿とか公共的建築などに在ては體裁上何時までも左右均齊な配置を保存して行くものである。然るに支那の住宅に於ては、太古より今日に至るまで依然として左右均齊の配置を固守して居るのは實に不思議な現象である。

周禮によれば周の宮室の配置などは極めて嚴正な右右均齊の配置であつた。日本に於ても平安朝に大成した寢殿造りと稱するものは、元來支那の摸倣から出たもので、正しく左右均齊の配置になつて居るが、鎌倉時代の武家造、足利時代以後の書院なるに從てこの配置が漸次に變化し、終に今日の吾人の住宅の造と如き不規則な形となつた。この不規則となることは即ち生活の變化に從ふ。便利の爲、又は趣味の變化に從ふ體裁の爲に由るので、即ち進歩發達の徵であるが、支那に於て太古以來この配置の變化しないのは即ち支那國民の生活狀態も、趣味も毫も變化しないことを適切に物語るものである。

要するに支那人は生れながらにして左右均整を好むの性癖がある樣である。獨り住宅の配置斗りではない、何事にもこの調子が發露する。例之ば入口の左右に一對の聯を掛ける。その聯の文句までが左右相對である。詩文にも盛に對句を賞用する。建物が左右相對に立つとき、其建物の名までが相對である。これは日本でもこの例に倣つて古來盛に用ゐて來た。例之ば京都御れ所の東西に日華門月華門があり、古への八省院の大極殿の左右て蒼龍樓白虎樓があつた樣なものである。

五　門墻

住宅の周圍を墻を以て繞らすの風俗も太古から行はれて居た。之は自家防衛の爲で、盜賊等に備ふるが爲と、外から家の内を見透かされない爲である。夫は生活の狀態を秘密にする必要があるからで、若も資財が豐かであると見られると官憲から強壓的に誅求さるるのである。

墻壁は下等な住宅では泥土で築き、上等な家では甎で築いた、そして仕上げには色漆喰を塗つたものと見へる。周禮に據れば殷の時既に白盛と云ふ白堊で塗つて居た、所謂粉墻と云ふのである。孔子の門人の宰予が晝寢をしたとき孔子に「朽木不可雕也。糞土之墻不可杇也」と叱られた。これは普通の墻ならば杇るものと極つて居るが糞土の墻では杇られないとの意である。又孔子の門人子貢が或人に「君と先生とドッチが偉いか」と問はれたとき、彼は師の德の高いことを稱へて「之を宮墻に譬へれば我輩の墻は人の肩位の高さであるから外から室内の樣子が見透かされるが、先生の墻は數仞の高さで、其門に入らなけれ

ば宗廟の美百官の富は見ることが出來ない」と云つた。即ち平民の家の牆は高さ四五尺位であり、天子の宮室では數仞即ち三四間位もあつたのである。周の一仞は七尺で、一周尺は我が七寸五分位であつた。

今日の北支那の民家の牆も低いのは五六尺、北京の皇城や紫禁城の牆は三四間に出入して居るから、牆の高さも古今大なる相違はない、只表面の仕上げの色は高級のものは赤色であり、その他は灰色のものや暗黑色のものなどもある。

支那に於て古來門と云ふ字が色々な方面に使用されて居るのを見ても如何に門を重大視したかが分る。身分が高ければ高い程門の數が多いを原則とする。門の形式構造も身分に由て互に異なる。昔し紳縉の邸には門に目隱しの障壁があつた、論語に「邦君樹して門を塞ぐ」とあるが、今日の官衙などの門前にある障壁や、紳士の邸の門内にある照壁と云ふものが之に當ると思ふ。

六　房室

房室の制は既に周禮にも記されて居る。詳細のことは分り兼るが今日の制と大差ないものと見て差支ないと思ふ。今日の普通の住宅の制は、原則としてその主要なる大房即ち主人の居室は南面して中央に立ち、東西に長い長方形で、普通中央及左右の三室に區劃せられ、中央の室が應接間で、左右が居間又は寢室である。正面からこの大房を見た形は、中央の入口に唐戸が裝置され、左右の兩室には普通窓が開れ、全く左右均整の姿勢である。大房の側面は窓がない。北面には窓又は高窓が開れる。中央の應接間の突き當り、即ち北壁の下に炕が裝置され、主客の坐に適用される。左右の居間は南の壁に接して窓の下に高く床が設けられ、寢床又は仕事の場所に用ゐられて居る。廟房に於てもこの原則は少しも異ならない。この制度は古來連綿として少しも異らないと思はれるのは、論語に孔子が冉伯牛を訪ふたときの記事があるが、夫が全然現今の住家の有樣と符合するに由ても推知されるのである。論語の文は「伯牛有疾、子問之、自牖執其手、曰、亡之、命矣夫、斯人也、而有斯疾也、斯人也、而有斯疾也、」とある、これは當時の風習として病者は北牖の下に臥すのであるが、主君が見舞に來られた時は床を南牖の下に移し、主君をして南面して患者を見せしむるのであつた。伯牛の家では師の孔子が見舞に來られるので、患者を南牖の下に移して待て居た處が、孔子は南の正門から入り來り、北に向て大房の前に來たが、中央の入口から室内に進む代りに、直ちに戸外から、立つた儘で手を牖にさし入れて伯牛

の手を執つたのである。これで伯牛の病床の高さと窓の高さとの關係がよく分るのである。

房室は日本の如き戸棚、押入も無ければ床や棚の設備もない、只物を入れる爲には箪笥や函の類があり、物を載せる爲には卓や臺の類がある。軸物は直ちに壁面に懸ける。要するにの生活風は大體に於て我が日本には似ずして却て歐風に近いのである。支那人の性癖が何によらず歐米人に類して却て我に似ないことは吾人の大に注意すべき點である。

七　屋根

支那の家屋の屋根は最特色あるものである。あの凹曲線を描いた屋根の流れ、あの兩の反上つた軒の輪廓は支那各種の建築に共通する特性で建築界の異彩である。多くの歐米人は之を觀て只その不思議な形狀に驚いて居るのであるが、日本に於ては古來この形式を傳習して居り、久しく見慣れてるので別に怪まない斗りでなく却て一種の美を感じて居るのである。

この曲線形の屋根が如何にして發生し發達したかは建築學上の興味ある問題であるが、玆には之を詳論する時がない。要するに或る學者は之をテントから出たと云ひ、或る學者は構造の必要から起つたと云ふ。併し兩說共に未だ吾人をして首肯せしむることが出來ない。我輩の觀る處では、これは必しも六ケ敷い理屈から出たのではなくして、畢竟支那人の趣味から生じたものである。比較的大きい、軒の深く出た、强い勾配の屋根を成る丈け輕快に見せる爲には凹曲線の流れと、隅を反り上らせた軒の形を取ることが有利であらねばならぬ。歐米人が之を評して往々不自然な形だと云ふが、夫は古來自國で多く見慣れない形であるが爲で何等根據ある評論ではない。我輩は寧ろ之に由て反て一種の奇警にして偉麗なる趣味を感ずるのである。

屋根には又種々な奇妙な裝飾が附加せらるゝを常とする。先づ大棟の兩端には多くは動物の形が置かれる。之を吻、又は正吻と云ふが日本では蚩吻、鴟尾、沓形、鯱など云ふて居る。下棟の先にも類似の動物がある、之を旁吻といふ。隅棟の上には小い怪動物の行列が滑稽趣味を發揮して居る、之を嘲風又は鬼龍子と云ふ。歐米人の中には之を評して兒戯に類する低級趣味だと云ふ者もあるが、我輩は反て得も云はれぬ面白さを感ずる。要するに屋根の處分に斯くの如く意匠を盡すのは、卽ち屋根が建物の主要部分であるが故に、こゝに人目を引き付ける趣向で周漢時代に既にこの考案が發達し、爾來時と共に益々發展して今日に及んで居るのである。

八　裝飾

建築の細部、即ち戸、障子、欄間、窗、破風、等から階段、敷石、牆壁、さては柱、長押、垂木、天井、枓栱等建築を形くる各部分を裝飾と云ふのは明代の編著にかゝる奪天工と云ふ書物に據たのである。この裝飾の變化の多いことは支那の住宅の一特色であるが、夫が往々極端に無理な變化を試みたと思はれる程のものがある。それは一面に於て好奇心から出たものであるが、他の一面には何等か宗敎的因緣や、歷史的因習や、迷信的約束などに制せられる結果もある樣である。玆には一例として窗に就ての所見を述べて見よう。

我輩は曾て支那内地旅行の際、住家及廟祠等に於ける窗牖の格や狹間の種類を集めて見ようと思ひ、試に異例を見るに從て寫生して見た處が、瞬く間に二百餘種を得た。實際現今支那に於ける窗の格や狹間の種類は何千あるか何萬あるか見當がつかない。日本では精々五六十種位であるに比して實に雲泥の相異ではあるまいか。その格や狹間の意匠を分類して見ると中々面白い結果が現れて來る、今一々述べる機會でもないが、先づ最特殊なものは文字崩でこれは、福、壽、喜等の緣起の善い文字を崩して格に適用したものである。大多數は勿論幾何學的直線文樣であるが、往々アラビア文樣と密接な關係を示して居るのがある。或は曲線を配したのがある。半寫生的の草花などを充塡したのがある。氷文と唱へて不規則な龜裂狀の格狹間を入れるのがある。蝙蝠、蝶、虬、等の動物を鉄用したのがある。千種萬樣到底端睨すべからざるものがある。

これは窗に就ての一例であるが、その他の物件も亦皆斯の通りである。歐米人の或る者は支那の家屋は千遍一律で毫も變化がないと云ふが、夫は大體の形式丈けを見て細部を研究して見ないからである。彼の山東省武梁祠の石刻に見へたる殿堂屋舍の圖にも既に數種の屋根の葺き方、數種の枓栱、數種の柱及礎石等が表はされて居り、宋代の著作營造法式や彼の奪天工などには澤山の裝飾類例が圖解されて居る。要するに支那に於ては古代から建物の細部に縱橫無盡の變化を試むることが行はれて居たものと見えるのである。

九　色

支那の家屋は全部色彩を以て塗られて居る。其最低級のものは普通辨柄塗であるが上級のものは極彩色である。家屋に彩色を施すことも亦太古から行はれて居たものと見え、既に論語にも之に關する文字がある、夫は孔子が魯の大夫臧文仲が卜筮に

用ふる龜を置く所の建物に、枓栱に山を彫刻し、梲即ち梁の上の短柱に草花文を畫いたのを指摘して僭越の沙汰であると叱られたのである、其文は

子曰臧文仲居ㇾ蔡、山ㇾ節藻ㇾ梲、何如其知也

とある。これは單に梲のみに彩色文様を施したのではない、山節藻梲とは修辭上韻を押す爲に用ゐた文句に過ぎない、節、梲共に屑の韻である。即ち建築物の表面に一面に彩色を施したものと解釋することが適當である。

何故に支那に於て建物に彩色が施されたかは面白い問題である。我輩の考ふる所に由れば、支那は元來美しい木材に乏しいので、多くは節だらけの見苦しい材を用ゐた、此の見苦しい肌を隱す爲に色彩を施すの必要を生じたのであらう。又一つには支那固有の陰陽五行說から割り出して五色を五行に配當し、赤は南方火を司るもので幸福を意味し、靑は東方木を司るもので平和を意味し、黃は中央土を司るもので高貴を意味し、白は西方金を司るもので悲哀を意味し、黑は北方水を司るもので破壞を意味すると考へたので、最も好んで赤を用ゐ、之に次で靑を賞用し、黃は天子の色として庶民は之を遠慮したのである。支那人は只に家屋のみならず、何物にも好んで赤を用ふるの風がある。室內の調度、卓子掛け、扁額、聯、さては名刺まで赤色を用ゐて居る。靑の系統に屬する色、即ち綠、藍、群靑、等も亦盛に用ゐられて居る。要するに主として强烈なる原色を賞用するので、二次三次の間色は餘り多くない。我が奈良朝時代の彩色にこの種の手法が多いのは畢竟唐代の摸倣で、即ち支那趣味の直寫であるが爲である。この性癖が太古から今日に至るまで連綿として繼續されて居るのは即ち支那人の色に對する感覺が古今變化せざる所以である。

十　材料と構架

支那家屋の材料構造も一種の特性を有する。太古に在ては勿論木材を以て家を作つたに相違ない。唐の杜牧之の阿房宮の賦に六王畢。四海一。蜀山兀。阿房出。とある。これは蜀即ち今の四川省の山から木材を伐り出して阿房宮を造つたことを言ふたので、この大宮殿を造る爲に蜀の山林が伐り盡されたと誇言したのである。されば阿房宮が項羽の爲に燒かれた時、火は三ケ月に亘つて消へなかつたと稱せられて居る。

併し北清一帶の地は早くから木材に缺乏を來したので夙に煉瓦即ち甎を作ることが發明された。甎は既に殷代に行はれたと考へられて居る。夫は殷墟から周以前と思はれる甎が發見されて居るからである。

要するに支那に於ては遼たる上古から木材と甎とを混用した家屋が行はれて居たと考へることが出來る。石材も亦同時に特殊の場所に用ゐられたと考へられる。此種の家屋は今や支那全土に普及し、世界の建築界に一異彩を放つて居るのである。木材と甎の混用法は建築の專門に深入りする嫌があるから玆には詳說を避けるが、要するに木の柱の外を甎で包んだものが多い。構造の方式は單純で幼稚である。矢張り古代の式をその儘襲踏して居るので科學上から見れば甚だ不完全である。これ總て支那に於て物理學や力學の知識が古來進歩發達しなかつたことを證明するものである。併し石を以て桃を架け又は穹窿を造るの術も亦太古から知られて居り、軒の反り上つた構造を巧みに取り扱ふことも出來たのであるから、古代に於て既に相當に發達したものと言ふべきである。

要するに支那の家屋は木と甎との混用であるから半耐火的で半永久的である。そして終に純耐火的、純永久的に進まなかつた。畢竟支那建築は體裁の建築で能率の建築ではない。藝術的建築、科學的建築ではない。或る歐人は支那建築を評して非藝術的だと云つて居るが夫は未だ當らぬと思ふ。

十一　古來一貫せる性癖

以上述べ來つた如く、支那の住宅には極めて顯著なる特性があるが、その特性は既に太古に於て充分に發達したもので、數千年間殆んど變化なく繼續して今日に及んで居るのである。換言すれば支那の住宅は五千年來殆んど進歩發達することなくして今日に至つたのである。

我輩は支那の總ての文物が大體に於て矢張り古來大なる進歩發達を遂げずして今日に至つたものと考へるのである。例之ば藝術に於ても繪畫は六朝及唐に於て圓熟し、爾來幾多の流派を生じたがその藝術的價値に於て進歩の跡を見ない。彫刻に於ても同樣である。工藝品に於ても同樣である、殊に銅器の如きは周漢に於て既に驚くべき發達を遂げて居る。文學にしても遠く周代に於て萬朶の花が一時に開いたかの如き盛運に達して居るが、爾來却て振はない。要するに支那の文化は數千年の昔に於て既に一定の型を大成したので、爾來自發的又は外國の影響の下に多少の變化はあつたが、根本の性質は移動しないのである。

何故に支那が數千年來斯の如き狀態に在つたかは興味ある問題である。我輩の信ずる處を以て見れば、支那が周代に於て既に優越なる文化を有して居た時、其四隣なる異人種は何れも未開なる低劣なる民族であつたので、漢人は之を侮つて夷狄禽獸と見縊り、殆んど人間扱ひをしない位であつた。即ち漢人は世

界中己れよりも劣り己れよりも優れる者は無いと確信し、氣驕り心恰つて復た文化の向上に努めようと思はなかつた。この心理が子々孫々に遺傳し來つて今日に及んだので、假令その間に少數の覺醒者が現はれても終に之を如何ともすることが出來なかつたのである。

要するに支那の文化は古代も現代も大差は無いと思ふ、從て今日を以て古へを推し、古へを以て今日を律することも不可能とは思はれない。この見地から吾人は支那現代の住宅を觀て古代の住宅を聯想し、以て支那國民の數千年來一貫せる性癖を知るのである。乞ふなは少しく之を說かしめよ。

十二　其作品を見て其人を知る

我輩は常に其作品を見て其人を知るを得べしと信ずるものである。早い話が伏見桃山の遺構を見ては豐臣秀吉の豪宕な氣魄を知り、日光東照宮を見ては德川家光の强烈なる氣質を悟り、空海の書を見て彼の縱横なる覇氣を知り、北齋の畫を見て彼の奇矯なる氣を知る。吾人は支那の住宅を通して亦た支那民族の特有の性質を看ることが出來ねばならぬ。

支那住宅が古來左右同形の配置を墨守して毫も之を改竄せざるは、支那民族の生活狀態が古今殆んど變化せざるが故に之を改竄するの必要に迫られざる爲もあるが、また一たび作り上げた型は假令多少の必要があつても之を變更することを好まない性癖に由るのであろう。古人の作つた物は之を尊重して容易に變更しないものとするの心理であろう。其左右同形の配置は外觀の體裁に重きを置くの心理であろう。

門を堅くし牆を高くし、宛然城郭の如き構へを作るのは自家防衛の爲とは云ながら、個々互に獨立して自己の便益を主とし公共的社會的の觀念の乏しきを示すものではあるまいか。國家の休戚よりは自家の安否を慮るの心理ではある　いか。屋根の形狀裝飾に憂身を窶すは遠く之を望んで立派に見へることを考へるからで、近く就て之を見たとき夫が如何樣であつても深く顧慮しない方針である。

裝析に變化の多いのは、大體の根本の型が固定して變化を試むるの餘地が無いので、勢細部に亘つて技葉を弄つて見るの心理であろう。支那の學問が矢張りこの調子で、先哲の說いた根本には多く改竄を加へないで、その技葉を議論して喜ぶの風がある樣に思ふ。要するに獨創（オリヂナリテー）は無いが、變形（モデフイケーション）は甚だ多いと云ふことになる。

色を適用する風は何れの國民にもある常習であるが、支那の如く强烈なる色、殊に赤色を賞用し來つて今日に至た民族は

珍らしい。亦は挑發的刺戟的の色で、强烈に過ぐるの嫌があるが、一面に於ては極めて活氣ある熱情なる色である。支那人が之を好むのは一は一種の迷信に由るが、亦た弱い淡い色では滿足し得ない心理に由るのであろう。例之ば飲酒を常習とする者が普通の酒では滿足が出來ず、火酒の如き强烈なものを要求するが如きであろう。總て支那民族は何事も極端に走る性質がある、或は極端に殘酷であり、或は極端に利己であり、或は極端に執拗であり、或は極端に無頓着である。色に對しても亦極端であるは毫も怪むに足らぬ。

數へ擧れば際限は無いが、要するに吾人は支那住宅を通して略ぼ上述の如き支那國民の性質を卜知し得るのである。それは大體に於て餘り賞讚することの出來ない性質である。併し我輩は之を以て直に支那國民の性質が悉く劣惡なりと極言するのではない。支那建築の中にも一種の面白い優良なる趣味を感得することは爰に言明を吝まぬ所である。夫は抽象的に言へば、堂々として威儀のあること、悠揚として迫ざること、意匠の豐富にして端睨すべからざること、大局に着眼し些末に拘泥せざること。何處にか稚氣の愛すべき點があること、何處にか無頓着にして天眞爛漫の點があること等で、これ等は他山の石として大に研究を要すべき點である。彼の英領事リツトン氏の支那觀は今に於て果して如何、我輩が支那の住宅を通して觀た感想は大體に於て洵に善く彼の所感と符合する點がある。併しながら我輩は支那住宅なほ廣く云へば支那の建築を以て必しも或る歐米の論者の如く低級とするものではない、又必しも之を愚劣なるものとするのではない。否、慥かに世界の藝術界裡に一種の異彩を放つものとするのである。

翻て我日本國民の住宅の現狀を見れば、其殆んど全部は見るも憐れな貧弱極まるもので、古來進歩の蹟はまことに少ない。リツトンをして我が住宅を批評せしめたならば、彼は果して何と言つたであろうか。支那住宅觀を草するに當りて、自ら省みて忸怩たるものなくばあらず。（了）

支那文人と文房具

後藤朝太郎

本篇は冬の北京行數日前の口演に係り速記に十分の補足をなす暇なかりしも近く續稿を草するの機に更に詳述する考である。

一　支那文人と支那の自然

古來日本では支那の文人と云へば、特別な文人社會が存在して居つて、支那の實際社會と全然離れて特色を有つて居るものの如くに考られて居る。是は隣國とは申しながら本と支那の實際社會が互に殆ど何等理解の無い事から考へて見れば、日本人の所謂文人と云ふものが斯樣に想像されて居るのは無理もないことである。吾々も實際の支那を知らないで、單に筆の上に書き現された所謂文人と云ふものを想像して居つたときには、矢張超越的な支那文人を腦裡に描いて居つた。所が實地五六回も支那に遊んで、其間多少支那文人の面目を見て、種々な感想に至つたのである。其中でも殊に此處に力說して一般讀者に紹介したいと思ふのは、支那文人の生活と支那の天然自然の感化を得る力と云ふ點である。

抑々日本の如き箱庭式の山水の下に永き歷史を有して居る日本民族の生活からすれば、日本の如き狹い土地に於ける文人の實際と、所謂支那文人と云ふ者との間には著しき懸隔があるのである。是は何と云つても自然の力の致す所である。別段箱庭式の自然の間に生れた文人が惡くて、支那の如きのんびりした自然の間に生れた文人の方が宜いと云ふやうな優劣を今此處に論するのではない。併ながら文人本來の特色として矢張大地自然の悠久なる力の下に自から湧出た所の其支那文人こそ、吾々の所謂文人の條件を多く備へて居るやうな氣がするのである。支那の自然の偉大なること、其偉大なる力が又支那各般の人事界の現象を起して居ると云ことは、誰しも否ことは出來ない。支那文人も亦此支那の偉大なる自然が產出した所の一の產物である。それ故に文人自身の氣質と云ひ、其性癖と云ひ、又其日常生活と云ひ、其不斷の行動と云ひ、如何にも所謂大陸的であつて、悠々迫らない所に一種の韻を出現して居る。否是は獨り特別の文人社會と限られた範圍に見出されるのみならず、支那人全般に此傾向が程度の相違こそあれ、確に認識することが出來るのである。露骨に言へば日本人の趣味生活は甚だ質朴單純であつて、寧ろ淡白な、そうして率直な方面に發達するを以て

美と考へ、大凡そ物の複雜して居る現象は、どつちかと云へば之を忌嫌ひ、面倒がる傾向を有つて居る。之に反して支那民族は一般に複雜濃厚なる趣味を有し、卒直なるものよりも、寧ろ紆餘曲折の多き事を以て彼等の趣味に合するものとして之を受入れ、又其考ふる所、計畫する所、總て日本人の常識以上に文化的の心事を發揮せんとして居るのである。日本では寧ろ裝飾の無い荒削りのもの又は瀟洒たる趣を喜ぶに反して、支那では是等のものは價値無きものとして、寧ろ出來得る限り裝飾の有り、さうして濃厚な複雜せる取合せを以て彼等の趣味に合ふものとして居る。而も其間に自から自然の調和を得た所の風韻を見出し、之を以て彼等の本性に適ふものとして居る。それ故に支那人の眼からすれば、日本のものは極めて簡單質朴、其結果原始的に見えるやうなものを日本では尊ぶ傾向があるに反して、支那では手の掛つた濃厚な風韻の見出されると云ふやうなものを好んで居るのである。總ての支那民族一般の性質より見ても、何となく支那民族の間には永い歴史の間に文人的の素質が養はれて居る。是は支那の老大國として特に著しき現象として見られるのである。それ故に特別の支那文人と限らなくも、一般の支那民族が既に其文人的の傾向を有して居るのである。是が文學の上に或は美術、彫刻、音樂等の藝術的方面にも現れて來るのである。斯樣にして支那文人の特徴は一般に民族的の傾向として吾人は之を認識せざるを得ないのである。斯の如き藝術的な文人的な傾向と云ふものは決して偶然に備はるものではない。遠き昔にあつて其歴史以前の時代からして彼等を感化する所の支那の自然の力と云ふものを此處に認めなくてはならぬのである。所謂支那の文學に於て白髮三千丈式の誇張的偉大なる形容語を使ふと云ふことも、是れ支那の自然又は支那の偉大なる社會が斯の如き高調なる言語を生出さしめたものと考へることが出來る。其他すべて支那一般の社會的の事業、又歴史的の偉大なる事業と云ふやうなものが、其計畫の單位の偉大なることは是亦支那の自然の宏大無邊なる威力の結晶として吾 は認めるのである。斯の如き觀察よりすれば、支那に於ける地理的の影響が悉く民族としての支那人の性行の上に遺憾なく現れ來たると云ふことは當然の歸結であると見なくてはならぬ。誰しも認める所の支那の儒教の如きは、是は支那の如き纏りの悪い社會にありては何か形式的に拘束する所の偉大なる禮儀を確立する必要があつて起つたものである。併しながら又其餘りに極端に形式的の壓迫が彌漫するときには、其反動として斯の如き拘束を打破つて、さうして天然自然無爲にして治まると云つたやうな態度、即ち老莊思想と云はうか道教の自然無爲の精

動的發動が此處に現れて來るのである。是は支那の如き大平野に國を成す所の民族にあつては、人爲的のこせ〳〵した事柄と云ふものは、要するに結局駄目なものである。決して人爲的の拘束を以て社會又は自己の生存と云ふものは全うすることが出來ない。窮極は駄目なものである。それ故に自然に委すのが天地宇宙の理法に合するのであると云つたやうな態度に出る。是亦自から支那の地理的影響の結果である。日本の箱庭式の天地に跼蹐して居る者からは、到底想像も付かないやうな極く自然天然の力に魅せられて斯の如き反動的の結果を得んとして居るのである。支那文人が日常の行動を見るに、寧ろ支那の自然の影世事に齷齪せず、全く超越したる態度を持し、その日常生活が響として所謂風流韻事を樂しみ、さうして無心のうちに人生の偉大なるものに觸れると云ふことを以て能事として居る。そこが誠に其支那式の文人生活の特徵として見られるのである。支那文人の面目の躍如せる所を見んとすれば、どうしても支那の天地自然の實際を見、其偉大なる力を了解したる後に於て、初めて支那文人の意味を理解することが出來るのである。

二　支那文人と支那社會の現狀

支那文人は上に述べたるが如く特に支那の社會から離れて別に存在するものでなく、支那民族全體が既に文人的色彩を帶びて居ると云ふことを、先づ此處に前提として述べて置かなければならない。從來支那文人の經歷を總括的に考へて見ると、所謂支那の自然を呑込んで、さうして偉大なる自然と合致したる生活を行ふ事が根本義であることは無論であるが、從來の多くの文人少くとも世間に能く知られて居るやうな文人は其生涯の前半が多くは官吏生活にあつた。無論支那の社會に於て官界に出ることは、古く歷史の證明するが如く、所謂科擧の試驗に及第したものであつて、其試驗の科目は所謂古來の文學的作品を諳んじ、又其自己の修養し來つた所の文才を以て之に應ずるのである。無論其裏面には賄賂運動等のことは素よりあつたのであらうと思はれるのであるが、兎に角其詩文に通じ、古來の文學經書に通じて居ると云ふことが、第一の條件となつて居つたのである。それ故に官吏上りの文人と云へば、素より一種の文學的素養のある人であつて、決して後世考へる如き事務官的の役人ではなかつたのである。近頃まで支那の衙門に勤めて居た舊式の役人の事務室又は應接室等に通つて見ても、宛然それが文人又は學者の書齋に通されたやうな感がして、部屋の壁は殆ど全部書棚で以て埋められて居て、さうして机の上には詩文を弄ぶ所の材料が所狹い位に列べられて居る。さうして机の周圍

には紫檀の彫刻で贅澤らしく見ゆる所の腰掛がズラリと列べられて居る。さうして其腰掛と腰掛の間には小さき「テーブル」がある、その上で水煙草を喫むと云つたやうな仕組に出來て居るのである。それ故に衙門の各房は宛然文人向きに出來て居るのである。また役人上りでない一般の文人であつても無論其の風流韻事を友として、自己の社會的存在に對しては決して韜晦して居るのではない。

一體支那の社會は日本現時の社會とは全く違ふ。或は日本よりも百年も二百年も時代が後れて居る。日常生活もゆつたりしたもので呑氣である。全く生活問題などは見樣によつては左程に迫つては居ない。今日の支那の都會又は田舍に於ける生活狀態と云ふものは、決して吾人の想像するが如きものでなく、頗る暢氣極まるものである。一般の支那社會が暢氣であるばかりでなく、此の文人社會と云ふものの特に悠長に日常生活が見られることは、一たび其社會に足を入れ交を結んだ者は、誰しも否むことは出來ないのである。本來其社會の組織は頗る暢氣に出來て居つて決して悠々迫らないのである。全く如何なる事を其職業にして居るのであるか、殆ど外國人の吾々には分らないやうな人が實に澤山ごろ／＼してる居る。無論是は生活が容易い爲でもあるが、斯の如く暢氣にして居つて、而も無爲徒食して居られる者が甚だ多い。隨つて其間に思想感情の上に自ら餘裕が有ると云ふことゝそれと本來の趣味嗜好が文學的に傾いて居るといふことで、一層其文人的の面目を著くし現はして居るのである。一般支那人の家屋の構造の點から見ても、其建築は概して頗るのんびりと出來て居る。所謂文人畫にあるやうな庭園の趣は中流以上の家であれば常に見出されるのである。又中流以下の家であつても日本人の眼から見ると、これが何となく文學的の趣を添へて居るやうに見える。所謂牆壁の間に圓い出入口を繰抜いて其の口を出れば牡丹芍藥が栽培されて居る。或は丈高き芭蕉が植えられて居たり、又大湖石を庭に高く積上て、其傍に風流な亭が造られ之に聯を掲げて、さうして文學的の趣を現してる。これは、特に殊更ら作立つるのでなくして、自から永い歴史的習慣から其光景が自然に見出されて居るのである。是が支那の都會に於てよりも、田舍の方に於て一層其趣を味ふ場合が多いのである。吾々が支那の田舍を旅行して見ると、吾人の所謂南畫に於て「樓閣山水」であるとか或は「高士觀瀑」であるとか云つたやうな繪畫的風致と云ふものゝ常に見出すことが出來るのである。是は繪畫としての題材に最も恰好なる光景であるが、併し見樣に依つては支那の田舍で見る所のものは事々物々畫題とならざるはなしと云ふやうな感を抱かしめるのであ

る。支那の社會は今日の狀態を以てすれば、如何たる僻陬の地にも共の老大國としての面目が現はれて居つて、如何にも共村落なり都市なり　古くから歷史の在つたと云ふことを思はしむるのである。殊に其文學的に日本などで紹介されて居る所の支那風趣は實地に見て熟々感を深からしむるものである。

斯樣に觀て來ると單に支那社會の現狀のみならず、古代の支那社會の狀態も亦今日の實際を基として遡つて考へることが出來る。家の構造、村里の光景或は牌樓の如き或は村里の門閭の光景の如き、或はその小川、古池で洗濯に餘念なき村女の光景の如き、又其の老翁の悠々と四五尺もある長き烟管を右手に、團扇を左手に翳しつつ田舍路を步いて居る其姿の大陸的なる、一々是が畫題の材料とな　ないものは　いのである。而も是等の風俗上の歷史と云ふものは、大凡今日の現狀を以て昔を或程度まで察することが出來るのである。又十二三歲の牧童が千、二千、三千と云へる多くの白羊或は白鵞を三尺の竿一本で指揮しながら黃昏の時刻に我家を指して歸路に就いて居る其の光景の如き、是亦古の風俗と今のそれとの間に何等差の無いものとして觀賞することが出來る。其他又小さき牧童が大きな菅笠を阿彌陀に被つて水牛の背に橫乘して手綱も緩く長き畦路を悠々と縫うて居る所の光景は、殊に共背景に何等眼を遮るものもなき、宏大無邊の田圃續きの地平線上に此光景を見るときには、何とも言へぬ大陸的ではあるが柔か味のあるこの大きな氣持を感受することが出來るのである。是亦昔の文人畫の示さんとし　ゐる氣韻と何等違ふ所が無い。斯の如き趣のある實際の光景と云ふものは、今日の支那に於て數限り無く存在して居るのである。上は宮殿生活を爲して居る各地方の土豪よりして、下は貧民社會の日常生活の末々に至るまで、之を藝術的に觀察し來るときには、一の系統ある文人生活の面目を捉へ來たることが出來るのである。此故　吾人は特に支那に於て文人生活　るものを社會から取離して考へるとをしなくとも、支那社會の現狀其ものの中に自　ら支那文人の氣持を味ふことは十分に出來るのである。吾々は支那趣味に對しては一　の辯が有るのかも知れないが、一度支那大陸に渡つて共都市村落の間を徘徊する　及んで、共都會に於ては城壁を見、又櫛比せる支那家屋の間に老若男女の往來する有樣、又肩摩轂擊の雜沓せる市井の巷の光景を見ても、或は田舍で小川の水を龍骨の仕掛で田圃へ引揚げて居る百姓の光景、或は又秋の收穫時に稻を束ねて大函に　ち當て、籾を取つて居る姿にしても、總て是れ文人生活の材料として見　れないものはないのである。それ故に吾人は支那の文人生活を本當に味はんとすれば、今日支那の都會なり田舍なりに行つて、

其現狀を目前見ると云ふことが何よりの研學となるのである。

三　支那文人の特色

支那文人の特色として吾人の見る所では次のことを第一に數へたい。それは支那文人は支那の天地自然が産出したものであると云ふ其原則に照して、支那の地理的に最も藝術的 興味をそゝる所の偉大なる山水、其山水の靈氣に文人が觸れて、かうして其靈氣と文人とが合致すると云ふやうな、さう云ふ境涯に於ける文人の氣持を味ふと云ふことが、支那文人の最も理想として居る所ではないか、人事界に於ける事は之を超越しなくてはならず、又人事界の事は之を高處大處から達觀して、さうして之に超越した所の態度を以て、人事界の事を下界の細事たる現象として概括的に風流に取扱ふことが、矢張文人の面目を顯ふ上の必要の條件と考へられる。果して是等が文人の特色を示す必要條件とすれば、地理的に言つて所謂泰山廬山の如き名山の一種言ふべからざる天然の偉大なる力と言ふものを實地に見ることが大事である。又人事界の事にしては、所謂市井の港に於ける社會的現象の機微に觸れた觀察をしなくてはならない、而も支那の文人は是等の兩方面に於ける消息と云ふものを十分に了解し、又世間の空氣を吸うて、さうして之を我文人生活の材料として取扱ふと云ふことが必要なことゝ考へられる。

然らば支那の文人が地理的に於て如何なる山水を以て其材料として居るかと云へば、是は言ふまでもなく北の方にあつては山東省の野に巍然として聳えて居る天下の名山泰山である。泰山が今より三千年の昔から支那の國民性を形成する上に於て恰も富嶽が日本の國民性の陶冶に與つて力ある如く、泰山の其歴史的又は民族的の偉力と云ふものは實に偉大なるものがある。又南方にあつては千五六百年以上には遡られないけれども、六朝の頃より所謂匡廬として、又後に所謂廬山として其名も高き名勝地廬山ぐらい又一般の文人墨客を各時代に引付けて居る名山はないのである。廬山の最高峯五老峯は唐の時代より既に其名も頗る高く、所謂廬山の東南五老峯と云つて詩人文人の間に謳はれて居る。又廬山の中には白樂天の簾を掲げて香爐峯の雪を見ると云つた所の名山もあれば、又李白の瀑布もあり、或は陶淵明の醉石とかまた虎溪三笑の虎溪橋の址であるとか又王羲之の墨池或は朱子の白鹿書院の如き、文學に因んだ所の名勝舊蹟が頗る多く、若しそれ含鄱嶺の上より五千尺の崖下、急轉直下のあなたに遠く鄱陽湖を望む時の其光景或は北の方白樂天の潯陽江を望んだときの鳥瞰圖の如き、或は又仙人洞、天池寺、黄龍寺の廢境など、一として文學的又は藝術的の題材とならない

ものはない。それ故に此廬山位古來文人を引付けた所の名山はないのである。其山容は到底妙義山や耶馬溪の比でないのである。素より日本に於ても妙義、耶馬溪或は甲州の昇仙境の如き名勝地として立派なものもあるが、其規模の點に於ては廬山に比べて到底及ぶべきものではない。又其絶壁の間に雲松の蔵雜して居る所などは、古來歴朝の文人墨客が天才的の筆もて形容して居る以上に、其趣を添へて居るのである。斯の如き名勝地なるが故に最近にありては其山の頂上の近き谿間の高原に美事な避暑地牯嶺と云ふを作つてゐる。英米人を始め露西亞人等の東洋の天地に來つて活動して居る者共、此處に一大租界地の如きものを設けて、さうして展望を恣にし得る山頂山腹の地形を選んでゐる。白樂天や李白や陶淵明などを一望の下に集めて或は揚子江を遠くに眺め瀑布を下に見、谿流を聽きつゝ、彼等がこゝに避暑生活を爲して居るのである。さうして今や「テニスコート」水泳場等は二十幾つも設けられて居ると云ふ盛況であつて、近くは「ケーブルカー」の設計をやると云ふことに聞いて居る。誠に此廬山は仙境の趣のある山である。自分達は約十日ばかり畏友小室翠雲畫伯、井上靈山翁等と共に匡廬に登り是等の仙境を跋渉して見た。なるほど古來文人墨客が之れを中心地點となし、又現に今日歐米人は西藏より、或は蒙古より、或は滿州より、又南洋より、日本より之に蝟集し來たり之を避暑地としてゐると云ふこととの偶然でないことが深く感ぜられたのであつた。支那文人が早く此廬山に目を着けて、之を文學的又は藝術的の題材として廬山の眞面目を描かんとした、其捉へ所は洵に急所を突いた感がする。吾々は此廬山を以て支那文人の面目を包藏してゐる名山であると言ふことを痛切に感じたのである。其中でも所謂南畫家が描く所の所謂山水の典型は、此廬山の五老峰又は香爐峯等を其自然の儘に寫生すれば、それで自から既に繪畫になり、又李白或は陶淵明の瀑布を其自然の儘に描き來たるときには、所謂雲烟の間に高士觀瀑の趣を傳へることも出來ると云ふやうに感じたのである。吾人は支那文人の特色と言ふものは、此廬山を主眼として最も顯著に現れて居ることを感じたのである。

其他蜀の峨眉山であるとか或は蜀の棧道又河南省の嵩山或は安徽省の九華山の如き其山容又は山氣の文人に適した特色を備へて居るものは、殆ど枚擧に遑ないのである。

又水の方面から考へて見ても揚子江の滾々として盡きざる其の趣、又水光天に接する所の長江の其偉大なる趣、又杭州の西江、九江の潯陽江、又浙江の錢塘江、又南京の秦淮の如き大河、又は湖水が文學的材料となつて居るものが實に多い。蘇東

坡の赤壁の賦の如き、今日見る長江の所謂東坡赤壁の遺跡が果して昔の歴史に見えるそれであるかどうかは判らないけれども、兎に角其楊子江の東坡寺の邊りの趣に富めることは申すまでもないのである。

其他長江を尙ほ遠く遡つて洞庭湖に出でんか、其の洞庭の秋月を始めとして、所謂瀟湘八景の趣が遠浦歸帆にしても、又山市晴嵐の如きものにしても其の水を主たる題材として、如何に大きく又柔かな偉力を現はしているか。實に千古の藝術的價値ある光景として、吾々は之を認めざるを得ないのである。實に楊子江を遡つて洞庭湖にまで入つて見ると、全く河から海に出た感がする。其の月が水より出でて水に沒すると云ふ漫々たる水上の景趣は其湖上を流れ下る所の六十餘間の大筏を得るに於て、尙ほ其の風致を添へて居る譯である。是等の水の光景と云ふものは、山の光景に比して決して劣らない。是れ亦古來文學上に又繪畫の上に其の無上の景趣を添へて居る點である。

支那文人の特色は是等山水を我物として之を消化し、さうして其自然が既に藝術的價値の有る上にそれを美化して現はさんとする、其處に其面目が現れて來るのである。尙ほ支那民族の都會生活に於ける其文學的描寫は所謂市井の巷の光景として、人事界の複雜せる狀態又蕭逸なる情趣等を採り來つて或は小說に或は劇に又詩文の題材として、之を自由自在に取扱つて居る者もある。而かも夫等の取扱方が之を文學の上に、又は音樂の上に、其外彫刻の上に、又は織物の上に現し、夫等と互に相調和し合つて、玆に文人的の面目を躍らせて居るのである。支那文人の特色と云ふものは斯の如くにして吾人は其藝術的の活動を趣味を以て認識したいのである。

四　支那文人の書齋

支那文人の書齋に就ては是迄多少說明的に日本に紹介されて居るものもあるが、自分は此處に實地支那南北各地方で見た所のものを總括して、吾人の印象を述べて見たいと思ふ。

一體支那の建築は大體に於て殿堂建築が基になつて居ることは、伊東博士を始めとし專門家の常に口にせらるる所である。けれども文人の住宅、殊に其書齋は夫れ程やかましく殿堂建築の特色を發揮して居る譯でもない。併しながら上流の家庭に入つて其門を入り左右の各房を見、又主人の部屋を見、又或は客廳を見、さうして庭を拜見して其書齋に通ると云ふやうな場合には、其書齋の趣と云ふものが周圍の光景と相調和して如何にも文人氣分を發揮して居ることを痛切に感ずるのである。支那

も文人又は學者の書齋には、其書齋も色々階段はあるけれども、大體に於て壁を殆ど餘さず、總て書棚で以て一面に埋めてしまひ、さうして餘地があれば、それには軸物を掛ける。さうして

其中央に机を置いて、主人は書齋の中に埋つて居るのである。

書齋と云つても一部屋である所もあるし、二部屋三部屋と持物の多いければ多いだけ、種々の違ひはあるけれども、大要其書齋の面目は略ぼ一致して居る。それで書齋には又別に書棚以外に種々な趣のある棚を作つて、所謂紫檀細工などで複雜なる構造の棚を作つて、之に燒物、彫刻物、主として玉器其他文房具、又細々した各種の古玩物を陳列して、宛然骨董店の店頭のやうに飾つて居る者がある。さうして其書齋には主人の腰掛以外に數多の腰掛を用意してあつて、趣味の友が來れば相寄つて、さうして風流韻事を談ずると云ふことに便利に出來て居るのである。無論部屋は腰掛本位であるが、又書齋に依つては其處に主人の身體を休めて横に臥るやうな寢床が用意してある所もある。さうして其寢床は四本柱があつて、其一方に小さな棚が設けられて、之に印譜であるとか、或は詩集其他小冊子、諸畫狀などが備へられて居るものもある。之に通されて見ると矢張一種の趣を感じ、溫い氣持がするのであるが、書齋を外に出て眺めて見ても、相當に風流な趣のある拵へに出來て居る。さうし

て庭の眞中の一部分に[illegible]られて居るのである。無論書齋の入口には有名の聯に對聯を掛げて、種々な文學的の良い句が書かれてある。日本では此學者又は文　らしき人の書齋と云ふものは、應接間を兼ねて居るか、支那にも此書齋が應接間となつて居るものもあるし、又書齋が別に造られて居るものもある。併し中流以上の家屋にあつては、書齋は無論別になつて居る。さうして書齋に通れば無論茶が出、又其談が文學のこと、又學術のこと、或は文　のこと、文藝のこと、種々多岐に亘つて話が交換されるのであるが、之には筆談のこともあるし、又直接話をすることもある。又通譯を使ふこともある、それは自由である。唯文人と云つても日本の學者文　方面と異つて、所謂初對面の機會を得るのが中々容易でない。支那は其社會上に種々な事情故障があつて、いきなり人に會ふと云ふ譯でない。舊知の間であれば兎に角、新しい者が是から文人に交際を求めると云ふときには、相當な紹介者がなくてはならぬ。是は言ふまでもないことであるけれども、支那では特に其　必要がある。紹介者さへ宜ければ、誠に一見舊知の如き態度で相接して吳れて、種々な珍貴な物も容易に見せて吳れるし、又其一體の　持、接待などと云ふ　のも、頗る行き屆いたものである。無論一度や二度で本當の所を

談りな本當の所を打明けると云ふやうなことはあるまいけれども、併し其の愛想の好いことに於いては、到底日本の學者の遊び顏付をして居るのとは全く變つてゐ、誠に氣持が宜しいのである。

文人の書齋と云ふものは其外に此方に詩文の嗜みがあり或は繪畫の趣味があれば、種々なる材料を出して之を見せ、又批評もし、さうして互に讃辭を呈し、又之を箋に書付けて其興味深き交際をなすことが出來るのである。唯併し日本人で一通りの支那の學問があり、文才があるからと云つて、容易に之に太刀打が出來るかと思ふて居ると飛んだ間違である。日本での學問、日本での詩文の嗜み、又日本での繪畫の修錬と云ふものは、其點に掛けては兎に角本場であるから、支那文人の書齋に足を踏入れた場合には、其間に餘程周到なる注意が要るのである。書物にしても中々廣く且つ深く讀んで居るし、又詩文にしても即席で幾らでも平仄を合せて連發し得るのである。それ故文談をすると云ふやうな場合には、支那の人は即席で極めて自由自在に行くけれども、之に對して向ふと對等の御對手をすると云ふには、中々骨が折れるのである。況や其言語の點が日本では顛倒讀みにして詩文を組立てやうとするし、支那人は發音本位で行くのであるからして、其點のみから云つても中々むづかしいのである。夫等を考へると支那文人の書齋に於ける日本の文人學者の之に太刀打の出來る人は寥々たるものであるまいかと思ふ。繪も書も詩も人物もすべてが出來てゐなくては相手になれない。此點に就ては種々な珍談もあるが今暫く預つて置かう。

五　支那の文房具

日本の文房具は古くより支那から傳り、今日奈良の正倉院に遺つて居る物を見ても、其起源が支那唐代のものであることは、歷史的に證明されるのである。文房具の本場が支那であると云ふ以上は、其文房具が又支那の文人の嗜好から湧出で、又支那の文房具相互の關係からして最も適當な物が自ら造出されて居ることは申すまでもない。支那の文人に限らず一般の人々が此文房具に對する感じと云ふものは實に鄭重を極めたものである。決して文具を粗末にすると云ふやうな感じはない。文字を尊ぶ國であるからそれは當然の譯であるが、實地に支那の日常生活に於ける文具又は殊に其書齋に於ける文具と云ふものを見るに至つて、其支那に於ける文房具の發達の偶然でないことを痛切に感ずるのである。

又支那の文房具とは可成り其意味が廣いのであるが、先づ其

文房具の王として唱へられて居るのは古來硯である。硯の外に墨があり、紙筆あり、又墨床あり、文鎭あり、筆架あり、又印材あり（支那にては印のとを圖書と云ふ。）印矩あり、肉印あり又腕枕あり、而して是等が總て支那文人の生活に適合したやうに發達して居るのである。尚ほ支那文人生活を離れては更に別に墨池（多く眞鍮などにて造られた圓形、楕圓形、方形のもの）あり、又筆を縦に差込んで置く箱などもある。種々な物があつて、これらが文人生活に無論缺くべからざるものとなつて居るのである。古くは墨の發達以前に於ては漆が使はれて居つたこともあるし、又筆の發達する前には小刀も使はれて居つたこともあるし、又紙の製作の前には木札、竹の札、又絲帛等も用ゐられて居つたこともある。併し此處には今歴史に遡らないで、現在のものを主にして述べたいのである。

今日高襟の連中は鉛筆を使ひ、萬年筆を使ひ、時勢の進運と共に文具を變へて居る者もあるが、併しながら支那社會では殆ど全部舊來の文具を用ゐて居るのである。而して是等の文房具の製作は、今日の支那に於て相當に盛んである。支那では古來其産出する方面に就ては次のやうな言葉がある。李廷珪の墨、澄心堂の紙、龍尾の硯と云ひ、今日では筆と墨に就ては之を湖筆徽墨と云ひ、又紙は北京邊では紙屋のことを南紙（と云ふ位で、南方の産出になつて居る。硯は端渓、歙州などと云つて居る。無論何れも各地方に殆ど、事に違ない位産出する所があるが、大體さう云ふやうな言葉が行はれて居る。文具殊に筆などの製作に就ては日本では弘法大師が一番能く研究して居つたことは、空海の性靈集に詳しく述べられて居る。又一般文具に就ての記録は、此頃上海から出版されて居る美術叢書の中に詳しく散見して居るのである。其他文房肆考であるとか又墨經であるとか、端渓硯誌であるとか一つ〳〵に就ての文具に關する書述は其數數百種に上つて居るのである。今左に印材のことより述べて順次硯、墨、筆等のことに及ばう。

六　支那の印材と篆刻

支那の印材として從來用ゐられて居るものは二十二三種ある。今左に之を列擧すれば次の如くである。

麥山石、麥山石白凍、麥山凍、昌化石、鷄血石、
靑田石、田黄石、田黄凍、山黄石、登菜石、魚腦石、
大松石、靑花瓷、靑瓷印、昌　印、白瓷印、玉　印、
竹根印、鐵　印、芦根印、銅　印、銅　符、牙　印、
紫泥印

是等の中で最も珍重されて居るのは田黄である。田黄は福建省

より出るもので、是には極めて純良なるものと、左程でないものと、其程度の差は色々で非常に複雑である。又鷄血石の如き最も珍重せられるし、其他玉類であれば尙ほ翡翠の如き、或は琅玕の如きものも相當に珍重せれらて居る、けれども一般に最も多く用ゐられるのは壽山石である。或はモツと廣く通俗に使はれて居るのが蠟石である。而して此上に列擧せるものの中で、玉又は石以外では銅印が最も珍しい、銅印には漢銅印が最も珍とされて居るし、後世のものにあつては支那の文字の如くにして、而して其實さうでない、所謂符牒のやうな圖案的の文字の鑄造されて居る綠卷印もある。

支那の印材は斯の如く多方面に亘つてあるが、是等の玉にしても、石にしても其他燒物又木、竹、牙、泥等各種の材料もあるが、是等の印材に對する支那人の趣好と云ふものは餘程面白い。文房具の中で最も愛するものは硯であると云ふことを言ふが、併しながら實際支那人は又此印材を非常に愛翫するのである。是は印材其ものに對する愛著の念と、それから其篆刻の妙味と、刻者に對する一種の尊敬の念――尤も之には僞物が隨分あるけれども、刻者の紀念に非常な興味を有して居る。又其印材の鈕の樣式に就て多大の興味を拂つて居るのである。此印材位支那の文人の面目を發揮するものはないのである。其印材の材其ものよりも、其篆刻の字の配合の按排、又圖案の樣　、或は鈕の獅子であるとか其他の動物、例へば子丑寅卯に因んだ十二支の鈕であるとか、其外葡萄其他の植物模樣の彫刻であるとかと云ふやうなものは一々其支那文人の趣味に最も適合したもののやうに出來て居るものである。其形、大さ等も千變萬化である。又獨立した印材でなく子母印と云ふて幾度か中へ嵌込みになるやうに出來て居る鑄印もある。併しながら普通に所謂印材は日本でも御定りのものとして考へられて居る通り關防印と白字印と朱字印の三顆、それの印材を以て本式のものとして居る。さうして其印刻の所謂印面の形式には既に文人の間で能く珍重されて居る通り規矩準繩に嵌つたものでなく、自然石の儘の輪廓が餘程愛されて居る。所謂遊印は多く之を用ゐて居る。尙ほ變り物には茄子の蔕、南瓜の蔕などを用ゐて居るものもある。自分達は新年の端書などに特に變り材を使つて薩摩芋を輪切にして之に篆字を刻して、時々友人から其印材の何物であるかを尋ねられて閉口することがあるが、凡そ印材には如何なるものを用ゐても、此篆刻さへ之に爲し得るものであれば、何でも宜しいのである。兎に角此趣味の方の上から、支那人の印材に對する愛着の念と云ふものは、恐らく自分は硯以上の價値のあるものとして居りはしないかと考へるのである。日本で今日用

ゐて居る黄楊だとか又は護謨印の如きものは、今此處には特に省いて置く。

七　支那の硯材

硯の材料は墨が能くすれると云ふ最小限度の條件からすれば其質が石であらうと瓦であらうと練物であらうと木竹であらうとを論ぜず、單に實用の目的を達すると云ふだけであれば、如何なる材料でも宜しい譯である。實際又支那の漢あたりの瓦を取出して、之に漆を施して硯材としたものがあるし、又旅行用の携帶に便であると云ふ關係から、桐の木に金剛砂などを塗つて硯としたものもある。材料は特に何と定めなければならぬと云ふ必要はない。併しながら支那では此歴史に見える範圍に於て唐宋の時代より硯材、著しく文人の間に愛翫されて來たことが見える。其中でも蘇東坡が羅文傳と云ふものを著して歙州硯と端溪硯との鍾愛を爭ふ所の面白き文章が公にされて居るのでも判る通り、所謂歙石と端石がその時代より頭を擡げて來た、無論歙端二石の傳説は最初獵人が其山に深く入つて狩獵の傍名材を得て、之を硯に造つて其發墨の妙趣を認めたと云ふことから始つて居るのであるが、兎に角其實用硯として多く採掘されるやうになつたのは、宋の時代と見られる。端溪には宋代の端溪と、明、萬暦以後清朝の間に多く採掘せられたる端溪の二種類がある。殊に明以後の最近の硯材には水巖と稱して大西洞より出るものが最も名硯であると云ふことになつて居つた。歙州には龍尾と羅紋の二種類があるが、是亦孰れも各々其特色を有して居つて、其磨墨の妙味は端溪の水巖とは異つた趣があつて、何れを是とし何れを非とすると云ふやうな優劣は容易に定めることは出來ない。端溪は廣東省より出で、歙州は安徽省より出る。其他山東省より淄州石が出で、又山東では唐の時代より天下の第一等の良材として知られたる紅絲石が出る、又陝西省よりは洮河綠石とへ云る良材が出で、又福建省よりは福州興化石と云へる硯材が出る、又湖南省よりは瀏溪石と云へる硯材が辰州方面より出で、又其近くの桃源より桃源石が出る。又洞庭湖の南方より相州石が出で、東方より劉陽石が出る。其他四川省より蒲江石が出て、湖北省より大蛇石が出る。其他直隷省より梅山石が出る。又遠くは滿洲松花江方面より美しき綠石が出で、滿洲馬天嶺の近く南汾より高麗石の名で知られた紫石が出る。其他細かく調べると七八十種の硯材が古くより文人學者の間に知られて居る。之に就ては宋の時代に既に硯材として用いらるるものを杜綰が『雲林石譜』と云へる書物を著いて、其中に是等のことを述べて居る。硯材は單に支那ばかりでなく、尙

ほ朝鮮、滿洲及び日本内地からも幾十種のものが出るが、是は後で述べる。

要するに硯の面目は種々な條件を付して吟味されるのであるが、吾人硯の研究の立場からすれば、先づ第一に硯材の質の如何、質の出來不出來と云ふことを第一に考へたいのである。此點に於ては地質鑛物の新しき科學的の知識を根抵にして、何故に良材が硯として適當であるかと云ふことの徹底的の觀察に出發したいと考へて居るのである。素より是は甚だ文人墨客の趣味からすれば沒交渉のこととなるかも知れぬけれども、併しながら所謂文人が繪を描き、書を書くに當つて、其墨を持つて硯の磨面を磨する場合に、其磨墨の感じの快いと惡いとは觀面に其繪畫なり書なりの出來榮に直接影響をすると云ふことが事實である以上は、此硯材の良否を確めることが第一着として必要であるのみならず、其書なり畫なりの墨色に於て硯材の良否と云ふものは避くべからざる關係を有つて行くのであるから、吾人は名硯の名硯たる第一條件には是非共硯材を吟味することを必要と感ずるのである。此點は支那に於ける各地の愛硯家を實地に訪ねて見ても、吾人の見解と同じ立場の上から矢張硯を談じて居るのである。又硯の集藏家なども其意味に於て名硯を集めやうとして居るのである。それ故に日本に於て此硯の材料を吟味すると云ふ傾向は東亞共通の傾向であると見て差支ない。古くは唯單に古色蒼然たるもの、或は持主が良かつたと云ふやうなことで、其硯の藝術的價値を認めて居つたのである。今日は既に其時代は過去つたと思ふ。中には硯材の如何に拘らず、唯之を秘藏して居る、人に見せないと云ふことを以て誇りとして居つた時代もあつたが、是亦今日の時勢では斯の如き態度は吾人の採らない所である。又茶人趣味の方面から茶席に飾付すると云ふ方面の用に立てると云ふだけの立場から、硯の良不良を品評する者もある。是亦一種の見方であつて、無論飾付にするのには種々な條件が必要であらうけれども、其條件を充たして居る上に、更に硯材其ものが申分のないものであれば、一層其名硯の名硯たる所を發揮する譯にならうと思ふ。それ故に吾人は支那の硯材を取扱ふ場合には、兎に角にも新しい見方を以て硯を鑑別したいので、それに就て吾人の特に注意して置きたいのは、切めて其墨を磨る所謂磨面だけでも其本來の生地の儘を現して置きたいのである。古色本位の硯家は汚く穢れてあつたり、或は周圍に漆を塗り蠟を塗り、手垢を付けて、さうして總て實質が着物を着せられてしまつて居る。さうして本質の毫末も見えないやうにして居るのを尊ぶ傾向があるが、是では吾人の所謂硯材の良不良を鑑別する方法が付かない。それ故に

切めて磨面だけも能く砥石で露して磨つて、さうして其磨面の鋒鋩、密度、又其硬度は果して磨墨適するや否やと云ふことを十分確めたいのである。それには其磨面其ものを度々洗ふことが必要である。支那の愛硯家は常に此洗硯と云ふことに注意をして毎朝自分で頻々洗ふときには、必ず又硯を毎朝洗つてやると云ふことにして居るし、又趣味の友達に硯を見せると云ふときにも、水中に石を入れて、さうして之に太陽の光線を直射させて、其磨面を調べつつ之を愛翫して居るのである。斯様に見來たるときには、硯材其ものの表面に見え所の斑紋、其ものの特色に就て少からぬ研究調査を積んで、さうして其名硯であればあるに伴ふ所の斑紋其他の條件を具備して居なくてはならぬと云ふことに進んで來て居るのである。

八、支那名硯の特色

名硯は必しも支那の石に限つた譯ではないが、此處では支那文人の愛する硯のことを述べるのが本位であるから、隨つて支那石のみに就て述べるのである。

上に述べた如く支那の硯に就ては材質を第一條件と爲すのであるが、併しながら名硯の名硯たる特色は、更に其藝術的の價値所謂其大さ、又形狀竝に彫刻、斑紋、愛翫者の銘の彫刻の有無等が、其名硯の藝術的價値を上下せしむる所の必要條件となつて居る。如何に材質其ものが天下第一位に居るべきものであつても、其藝術的價値に於て劣るときは、最早第一位を占めることは困難な立場になるのである。これ故に其形狀、彫刻等はどうでも宜いとは云ふものの、矢張り或程度をまで之を重く見る必要があるのである。併しながら此處に吾人の注意すべきことは其硯に對する歷史其ものである。名硯の條件の一つに其傳の來歷を算ふべきことは言ふまでもないが、併し其來歷が重きを爲すが故に、僞りの歷史を之にクッ着けるものが多い。所謂蘇東坡先生の遺愛の硯であるとか、文徵明の硯とか王羲之の硯であるとが、又朱竹佗ので硯あるとか、その他黃莘田の硯であるとか、或は又金冬心の硯、阮の硯と云ふやうな、堂々たる學者文人等の名前を刻して、さうして其歷史的の價値を高めやうと人爲的に努める者がある。斯の如きものは多くの場合に於ては徒に名前が品物よりも勝ち過ぎ却て其銘はあらずもがな思はしむるものが多いのである。是等の僞の歷史的價値と云ふものは吾人は取らないのであるが、併しながら縱令其眞物ではないにしても、併し石其ものが良くしてさうして藝術的の價値が有る場合には、恐らく蘇東坡又は朱竹佗或は金冬心等の程度の人が用ゐた硯であつただらうと云ふ位な程度に考へることは

差支ないと思ふ。

支那の名硯として吾人が是迄幾萬の硯を東洋各地方の愛硯家の所で拜見した結果、吾人の印象に殘つて居る所を述ぶれば、先づ古い所では硯石としては宋の時代のものに相當逸品がある。歙州硯の宋時代のものにあつては其特色が極めて明瞭と云ふ譯にはいけないが、併し端溪の石にかけて宋時代の石質と、それに伴ふ所の當時の樣式と云ふものが略ぼ定つて居る。それ故に端溪歙州の兩者にありては、宋代の特色を髣髴せしめる所のものを吾人は時々見ることが出來る。是には素より堅石の場合もあれば、仔石の場合もあるし、さうして石其ものの特質を考へると孰れも水成岩の系統に屬して居つて、火山岩の間には出ない。さうして其水成岩中に時々硫化鐵又は硫化銅或は黃鐵礦の如きもの、或は時に孔雀石の結晶又辰砂の朱點の如きものを含んで居る良材があるし、又昆蟲の化石の痕跡を殘して居る所の所謂眼の如きものを認めることもある。又鐵の熔解した所の暗紫色の焰の姿を認める。所謂專門家の間で火捺の斑を見出すこともある。是は端溪に於て著しく見えて居るのであるが、此火捺の存する石は多く蕉葉白を有する端溪水巖大西洞の硯材に之を見出すのである。端溪の良材に就ては尙ほ其斑紋が靑花紋、魚腦凍、天靑、氷紋、火捺、馬尾紋、胭脂暈、翡翠紋、麻雀斑、[illegible]子斑、油涎光、黃龍、玉帶、金銀、其他五采釘、硃砂釘、砂釘、蟲蛀など、斑紋及び石瑕、鸜鵒斑のあるものは概して珍重されて居る。殊に又眼には中心のある所謂活眼及び中心のなき所謂死眼があり、又甚だ鮮明を缺く所の所謂淚眼などあり、其活眼の中では鸜鵒眼、鸚哥眼、鷄翁眼、猫眼、菉豆眼などもある。此中一つの中心に對して同心圓を五度も七度も取卷いて居る所の鸜鵒眼を以て最上のものとして居るのである。是等は端溪の水巖中の名品に多く見られるのであるが、併しながら是等何れもの斑紋石瑕は必しも必要缺くべからざる條件とはしないのである。殊に其石瑕が磨面に横はるときには、甚だ磨墨の邪魔になる。それ故に硯の景色を添へる上には必要であつて、殊に眼の如きは其眼の特色に從ひ、或は鳳凰を刻し、或は孔雀を刻し、又其眼を目立てゝ猫の形に刻すると云ふやうな藝術的の助けを爲す場合も多いのであるが、併し必要條件とはしない。大體より觀て端溪の名硯と云ふものは、蕉葉白の通つて居るものが一番宜しい。是は大西洞の石に限るのである。

それで斑紋の方から言へば前に述べた靑花紋、此靑花紋の中に微塵靑花であるとか、或は蟻脚靑花であるとか、或は雨淋墻靑花であるとか、[illegible]靑花であるとか云ふやうな、色々の斑紋の非常に鮮かなものが現れて居る。[illegible]等の靑花紋を有するも

の、或は火捺、馬尾紋等を有して居つて、さうして其中央に魚腦凍を有するものが名材として甚だ尊ばれて居る。概括して端溪の名材を見るときには、單に其の磨面の趣が宛然新しき羊羹の切口の如くに見えて、潤澤があり、さうして鋒鋩濃かであつて而も鋭い、さうして其色は專門家の間には猪肝色と云つて居る。所謂暗紫色又は蒼紫色のものであるものに良いものが多い。併し宋時代の端溪になると、其面の色が所謂馬肝色で、稍々黃褐色を帶びたものに名材がある。

次に歙州硯の方では其龍尾たると羅紋たるとを問はず、端溪と異なれる磨味のすることは言ふまでもないが、龍尾の漆黑材に至つては、最も妙味を感ずるのである。此漆黑の龍尾には銀星龍尾又は金星龍尾があり、又是には玉帶或は金線の通じて居るものがある。又羅紋の方には細羅紋、粗羅紋、暗細羅紋、松紋羅紋、角浪羅紋、金星羅紋、刷絲羅紋、卵石羅紋、眉子羅紋、棗心羅紋、細棗心羅紋等がある。是は何れも端溪に無い斑紋であつて、其斑の趣は全然端溪のそれとは異つて居る。それ故一見して安徽省の硯材は端溪のそれと區別することが出來るのである。併しながら其共通の味を此處で綜合して述べて見れば、恰も蠟を以て拭いた鋼の上を圓く渦形に擦つて見たゞ其時の感の如何にも歎味があつてさうして粘氣を感じさうして其磨いた最後の墨を上に引上げるときに、[illegible]上へ[illegible]上げるやうな場合のものを以て、最も磨墨の上々と爲すのである。

上に述べた端溪、歙州の外に湖南の石、福建の石、又、東の石、或は陝西省の石、其他滿洲方面の石と云ふものも其名硯としての名を辱しめないだけの味はする。併しながら今日殆ど端歙二石が硯石界の大立物となつて居るが故に、他の石は珍とする價値は有つても、夫程に此硯石界を賑はして居るのではない。唯紅絲石等が二萬四千圓と云ふやうな記錄破り（レコード）の評價で入札などの事があつた爲に、無暗に硯の相場を釣騰げて居るけれども、其紅絲石其ものの價値と云ふものは、單に此黃色の硯材に紅の絲目が通つて居ると云ふことと、其磨墨が潤澤のある硯材に至ると、端歙二石の壘を摩して居ると云ふ點以外には他に其價値を認めないのである。それと今一つは最も古くから天下の大逸硯とされて居ると云ふ點に、歷史的價値が附隨して居るものと考へられる。

上に述べたものは其硯材としての實用上の資格條件に就て考へたのである。今日其材質其ものに重きを置いて居るのは、從來の非實用的の所謂骨董的傾向を打破したい爲の一種の方便であるけれども、併しながら硯材其ものの第一條件は、又此磨墨の

上に存しなくてはならぬと云ふことは、誰人も疑はない點であらうと思ふ。無論其歷史、其藝術的價値と云ふこともそれは聯關して尊重すべきは言ふまでもない。所が其彫刻、樣式等に於て甚だ俗惡なるものが近來頗る多く、又徒に名のみやかましくして、其舊藏家の名前など、麗々しくいやな書體で彫刻されて居ると、又は雲、龍、浪等が餘りけば〳〵しく刻まれて居ると云ふやうな點である。風流文人の間では却て夫等の彫刻及刻名を磨滅らしてしまふと云ふやうな傾向が一面にはある。さうして寧ろそんな餘計な彫硯は一切之を磨つて削り取つてしまふ。さうして單なる板として所謂硯板の儘で之を愛翫し、硯板に僅かに小池を掘るとか周圍の土手を造ると云ふやうな事をして殆ど硯板其もので以て其材質の妙味を味ふと云ふやうな傾向を先づ生じて來て居る。吾々は硯材本位の翫賞を爲して居るのであるが、世には時々吾人を僞らんがために端溪歙州以外の盆石を以て之に漆等で誤魔化さんとする者が少くない。時には石灰石などを硯の形に造つて、さうして名硯の如く見せ掛けて居る者がある。是等は硝酸又は硫酸を試みに一滴滴下して見ると、忽ち泡が生じて臭氣紛々として鼻を衝く、さうして其處に化學作用を起して深く凹みが出來る。是等は僞物であると云ふことも證據が擧つたものであるから、是等のものは文人の机の上から仲間入を拒絶するのである。此故に吾人が時々過激派の名を蒙つて居るけれども、事實防衞策として仕方がないのである。

支那には此名硯の舊藏家の中には、例へば高南村の鳳翰の如きは自ら刻した所の端溪、歙州の美硯から一々拓本を取つて之を石譜に作つて居る。是は頗る面白い。又其石譜を材料として後世吾々が高南村の彫刻及び其樣式を考へることが出來るので、研究上誠に都合の好い材料である。其他乾隆頃に出來た石譜は少くない。又宋時代の硯の形式を版にしたものもあるし、古來硯の形式、彫刻と云ふことに就ては多大の注意を愛硯家は拂つて居るのである。是亦硯材の研究と同時に是等樣式彫刻の研究と云ふ事は、相當に硯家にあつては能く注意したい點である。

九、支那硯材の實地踏査

前に支那を旅行する傍、自分は硯の山に實地踏査を試み、さうして今日如何なる狀態に於て硯材が採掘せられつゝあるか、又其山の狀態は如何と云ふやうなことを、慰み半分に見て居るのである。今其中歙州石の出て居る安徽省即ち徽州に先年入つた。是は揚子江を遡つて、蕪湖或は大通等から入るのが順路であるが、自分は大通から入つた。其處から青陽、石埭、それから黟縣屯溪に寄つて徽州府に行つた。これが古の歙縣である。徽州

府より河を下つて浙江省に出で、嚴州より錢塘江に出たのである。硯の出る範圍は九華山よりして南の方石埭を越へ、さうして徽州府に至り、更に南の方婺源に出で、更に南に進んでさうして江西省の玉山に至る數十里の間からして其硯材が出る。さうして今日尚ほ其方面の山谷渓流を行けば、雜紋は累々として渓の兩岸に聳え、さうして渓流の岸を嚙んで居る。其雜紋の美斑は實に鮮かである。縱令風化作用は受けて居るけれども、其斑紋の實に美しきには驚くのである。又其峯の中に羊山嶺と云へる所には幾千の石が悉く是れ雜紋の美石を以て積重ねられて居るのである。之に金星雜斑あり角浪雜紋あり、其斑紋の美は殆ど形容することが出來ない。自分は餘りにその美材に出會したときには、之を持運ぶことが出來ない爲に、暫く其硯石の上に坐して、其紀念に石の肌を撫つて居つた位であつた。如何せん交通の不便な山で、而も三十六峯あると云ふやうな處であるから容易に今日之を得ることは困難なのである。尤も南方に出て、さうして之を川船の便に依つて出すより方法がない。詰り浙江省の杭州の方面に出すのが最も順路である。揚子江方面には割合に出し得ないのである。併し今日は昔の如き良材は出ない。多くは硬くして、さうして建築材にして居る、其方が寧ろ用途が廣くして、さうして經濟的にも有利なものであらうと思はれた。長さ三間四間と云ふやうな大材を以て橋梁の材に使つて居る處も少くなかつたのである。是等の美材をあたら建築橋梁に用ゐて居るのを見ると、誠に硯の方面から云つて勿體ないやうな氣もした、相當に其山奥に行つて見れば硯屋もあるし墨屋もあるし、歙縣の城内と云ふもいには此文房具の店が軒を列ねて居るのである。

十　硯と墨との關係

硯と墨の關係は、之を是迄無干渉の如くに考へて居つて、支那の硯に對して日本の墨を用ひ、又日本の硯に對して支那の墨を用ゆると云ふやうなことを平氣でやつて居つた。併しながら能く考へて見ると支那の墨、例へば支那で第一流の墨と言はれて居る所謂安徽省の徽墨と云ふものは古く先年以來其山から出る石材である硯に合せて、其山に生ずる所の赤松の材を取つて之を焼き、其油煙を以て其歙州の硯石に適當する程度に膠を用ひ其煉り方も中々の苦心を要して居るので、香などはどうでも付けられ得るのであるが、其硯の質其ものに調和すべく墨の製法が永き經驗に依つて造られて居ると云ふことを思至ると云ふと、吾人は支那に於ける墨と硯の密接なる關係の偶然でないことを痛切に感じたのである。實際歙縣に行つて胡開文、胡正

文或は胡等文等の墨屋の工場をそれ〴〵歴訪し其職工と共に墨の煉方、又墨の團子を型に入れて同時に澤山歴へ付ける、さうして乾くのを待つて、其文字の彫刻してある所へ金粉を塗込むと云ふやうな、其製法を熟々見ると、彼等の墨の製法の頗る大々的であつて、さうして支那四百餘州に供給して居る其元祖の工場と云ふものに吾人は偉大なる尊敬を拂ひたいやうな氣がする。殊に支那の墨には其小口に以て行つて頂煙或は貢烟或は超頂煙又は正頂烟等の各種の符丁が付いて居るが、是は煙突の極く高い部分から取つた所の細やかな油煙で以て造られた墨が頂煙と言はるるのであるが、是等極めて微妙なる油煙の區別がそれ〴〵墨に現れて居るのである。して見ると夫等の墨が硯の面と密接の關係を有すると云ふことは偶然でないのである。尚ほ墨には支那で曹素功の墨が胡開文の墨と相並んで名墨と唱せられて居るが、是は徽州府に行つて見て本店を調べたが無い、上海の城内に歸つて曹素功の店で尋ねて見た所が本店は福建省に在ると云ふことを聞いたのである。併しながら賣品としての曹素功の墨には、矢張徽州と云ふ銘を入れて居るけれども、是は商略の上からして居るものと察せられる。

十一、支那と筆と紙、墨跡、文鎭及筆架

支那の筆は古來湖筆と稱し浙江省の湖州より出るものを以て一番良筆として居る。無論安徽省からも澤山の筆が出る。さうして是等の材料は狸、羊、貂、山馬等の毛の中で、其毛皮の中から極く強くさうして光つて居る命毛を特に拔取るのである。それ故良筆であればある程一匁が幾らと云ふやうな高い値段をして居る。さうしてそれ〴〵楷書、草書、隷書等其書體の異なるに從て長穗、短穗、又は雀頭等の種々なる形式的の筆を造るのである。日本では筆に多く心になる毛を入れることを得意として居るやうであるが、支那では餘り心と云ふことには重きを置ないのである。筆管にも頗る周到なる用意を爲して居つて、其竹には斑竹を用ゆることもあれば、又文竹を用ゆることもある。或は紫檀などの木材を用ゆることもある。又變り物には瀬戸物、玉等の材を用ゆるものもある。

紙は支那では頗る發達が鈍いと云ふことを言はれて居るけれども、併しながら李後主が澄心堂の紙を賞してゐたが原來その紙の種類の多いことに於ては驚くべきものである。さうしては多く藁を用ゐて居る爲に、其生産費の安いことに於ても亦驚くべきものがある。昔は紙は絲屑網屑等の材料を用ひて煉つて居つたものである。それ故に紙の字の左半に糸偏が付いて居る。是は矢張絲に關係の有つたことを證明するものであるが、

漢末、六朝頃より後世に用ゐるやうな紙の製造が段々良く行はれるやうになつて、それで今日の所謂支那紙なるものも發達されて居るのである。古い時分の紙で今日殘つて居るものは所謂麻紙と稱し佛教の經卷等に用ゐられて居るものは、今日支那の西方諸地方から發掘される品物の中に見出されるのであつて、親しく見ることが出來る。今日支那の新聞などに用ゐるやうな材料は多く日本から輸出されるのである。全體からして支那は筆の製法の進んで居るに拘らず、紙は寧ろ幼稚な狀態にあるのである。併しながら文人書畫の方面に用ゐられる紙としては其漉き方に一種獨特のものがあつて、二枚三枚の剝げる紙がある。是は昔の名筆の書などを同一の紙で幾枚にも同一に剝取ることが出來るので、頗る便利なものとして考へられて居つた。

墨牀は日本では左程に珍重しないが、支那では紫檀、黑檀、燒物、硝子、玉類等を種々な風雅な形に造つて之を墨の臺にして居る。又文鎭には動物の姿、其他細長きものでそれに龍或は風流な言葉などを刻して文鎭として居るものが、頗る數多くある。其他筆架に於ては燒物、玉類、石等是亦種々樣々である。唯吾人は支那の文人の書齋に通つて見て日本と違ふ所は硯匣といふものを用ゐないことである。机の上には硯を置き、繪具皿を置き、或は墨牀を置き、其他筆筒などを置いて居るが、併し一向硯匣と居つたやうなものはない。又文人の机の上には到底硯匣の如き窮屈なものへ總て物を纏めて置くといふことは事實に於て不可能であるから、自から是は發達しないものであると思ふ。

十二　文房具の取扱方及保存法

文房具の中硯は支那では日本の如く餘り損ることは少い。併ながら幾年も用ゐないで仕舞つて置くといふことは、石の爲に宜くない。理想を言へば毎日洗ふことであるが、併しながらさうでなくとも、時々出して矢張水で洗ひ、其磨面の惡く風化作用を受けない程度に於て是が保存法を講じてやる必要がある。支那人はそれに對して蓮の實の中の綿のやうな部分を取出して水で洗ふ。是は「ガーゼ」綿或は大根又は澤庵乾大根などを用ゐるが適當だとされて居る。さうして硯は之を日向に置くことを嫌ふ。蓋し潤澤の損せられることを忌む爲である。さうして磨面には成べく手垢をつけないことが宜い。殊に手の脂がつくと云ふことを嫌ふ。それだからと云て石全體を餘りに鄭重にして殆ど絹の布でなければ取扱ないと云やうに窮屈にすることは吾人は取ない。矢張實用のものであるから或程度までは實用的に取扱べきものである。無暗に之を骨董視することは、吾々は贊成し

ないのである。唯硯にあつては其潤澤の損することを防んが爲に紫檀又は軟な石材であれば、之に鐵刀木の匣を造る。是には上下二つの匣で以てピッタリ密閉する場合と、それから輕く上と底とに對して、所謂天地蓋と云ふものに依て之を入れられてある。併しながら日本の古硯家が爲す如く、或は御茶人が爲すが如く之に二重匣又は三重匣を造る、或は緞子などの袋に入ると云ふやうなことは殆ど見ない、又筆は之を空氣に無暗に曝すと云ふと、自ら毛が脱てしまふ、嚴重に密閉して中に「ナフタリン」樟腦を入れることが必要である。併し大體に於て筆の保存法は全然さばいた儘或は水で洗つた儘で置くことは宜しくない、多少なり墨、膠が着いて、軸の付根の所が多少固つて居る方が、筆の保存には宜しいと云られて居る。支那人の中の或特殊な人は筆尾に持つて行くことがある、是は筆の毛が大分損した場合に足毛をして貰ふのである。或は筆管の良いものであるときには、筆の穗を幾度も取換へるのである。さうして自分の氣に入つた良い軸管を何時までも保存するやうにする爲である。又紙は是は保存の方法に依つては中に裂目を生じて來る。殊に唐紙の如きは頗る其破目が入り易いので、俗に唐紙が風を引くと云ふやうなことを言ふが、是は其保存の方法、濕氣の程度等に就て細心の注意を拂ふべきものである。又墨は普通三十年乃至五十年位の年代が經つて居るものが、最も黒色の良いとされて居るが、併し是は膠の程度にも因る。支那の墨は日本の墨程膠を多く用ゐない。併ながら唐墨には多く龜裂を生じ、殊に明墨あたりになると殆ど用に堪へない位になつて居るものがある。今日明墨は薄くて使へないと云ふて飾墨にして居るものがある。それには圓形或は扁平のものや種々な姿形のものがある。是は餘り空氣に曝すと所謂風化作用を受けて、どうも質が早く悪くなるらしい、空氣にも亦光線に曝さないやうにして密閉して保存して置くことが一番宜しい。併し又餘りに濕氣の強い處では時々出して乾す必要がある。

十三　朝鮮、臺灣及日本内地に於ける文房具

附名硯産出の分布地圖

今硯に就て朝鮮、臺灣及日本内地に於ける材料を大略說明しやう。

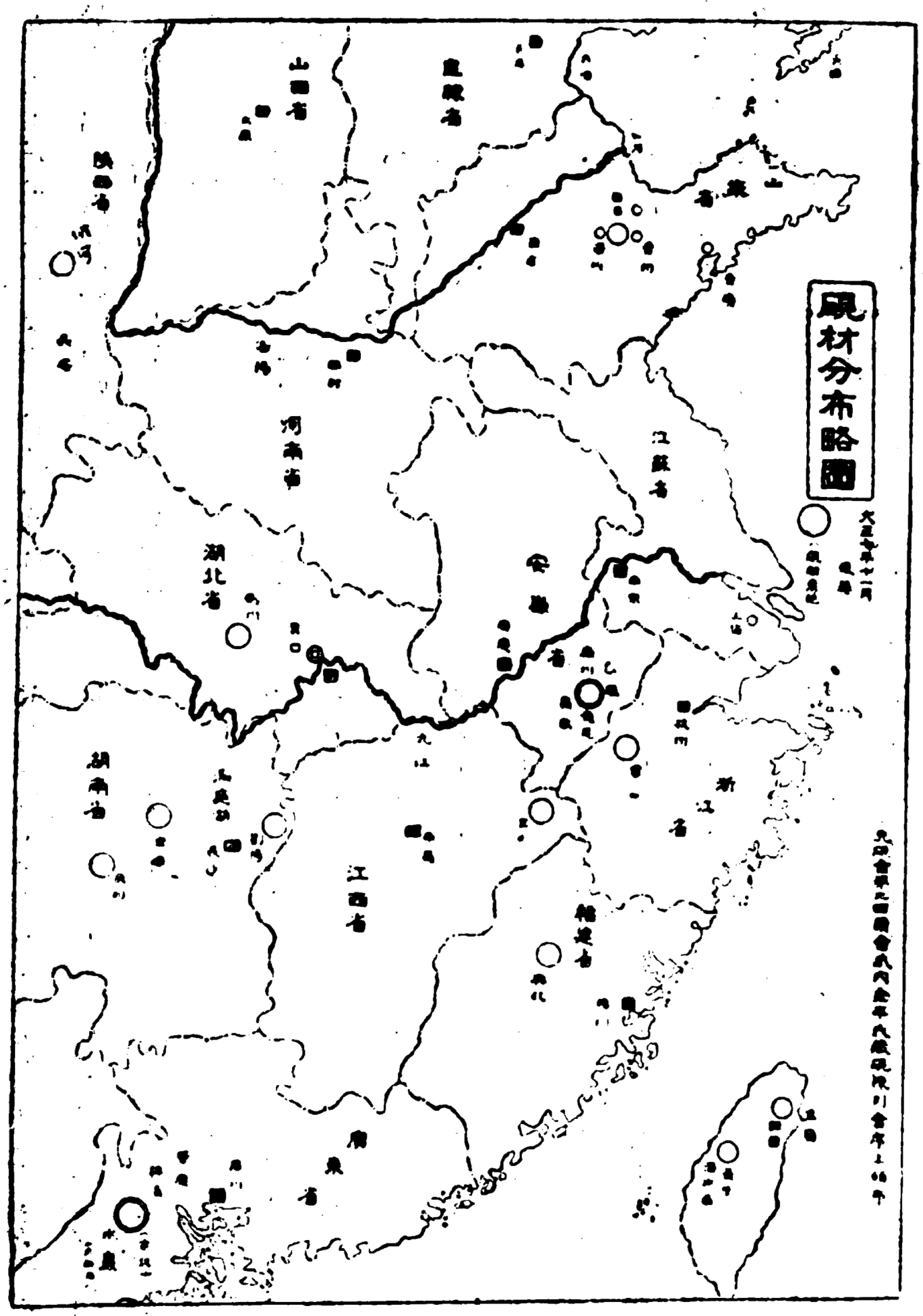
朝鮮では北部からは豆滿江の流域より鍾城硯の黒石が出る。又鴨綠江の方面よりは渭原より紫石が出る。又忠清南道の方面からは藍浦の烏石など、現在も出るが、昔にあつては高麗朝時代の墳墓の中より出る所のスレート式の硯石が、其姿も床しき唐宋時代の古硯として尠からず發見せられて居つた。唯併し朝

鮮に近代出る硯代は其質が細かくして實用には宜いが、潤澤の點に於て少しく缺くる所があるかと思ふ。今日朝鮮の李王家の美術製作所に於ては、尠からず是等現 の石材を細工して居るのを見る。

臺灣にあつては臺中の南方濁水溪、殊に西螺溪の水底より出る所の黑紫青、或は虎斑等の硯材が出るが、孰れも其質は頗る緻密にして、殊に 黑石に至つては最も磨墨に宜しい。近來此四五年には其材が大分東京にも來て居るし、臺灣唯一の石材として今日知られて居るのである。其外臺灣の蕃地には「スレート」が數多出るので、是が相當に硯材として見込があらう。又東の海岸で宜蘭の東北で山間の山中から出る黑石も是亦硯材として適當して居る。

日本內地にあつては今日七十餘種類の硯材が出て居る。其中主なるものを申すと、西の方では對州の若田石、熊本の龍領石、鹿兒島の冷泉石、日向の江溪石、豐前の葡萄石、菊花石、それから田の浦石、赤間關の赤間石、美作の高田石、丹波の石王寺石、伊豫の虎石、山城の月輪石、鳴瀧石、加茂川石、近江の虎斑石、若州の鳳足石、伊勢の赤石、美濃の養老石、三河の鳳來寺石、駿河の青石、甲斐の雨端石、下野の日光石、陸前の玄昌石、(乙女雄勝三石、)陸中の水澤の紫雲石、など枚擧に遑がないが、此中で是迄最も有名なのは赤間石、若田石、及び雨端石であつた。最近に至て仙臺から出る所の玄昌石、俗に所謂仙臺石といふものが學校用品の硯として多く出て居る。又尙ほ學校用品としては伊豫の虎石が相當に又多く出て居つた。それから京都では山城の月輪、鳴瀧、或は近江の虎斑石といふものが京都の歌人の間其他文人の間に是が古くから知られて居つた。又豐葡萄石は古く慶長年間より知られて居つて、今尙ほ其山を採掘前のして居る。又甲斐國の雨端も是亦盛んに採掘されて居る。雨端には是迄黑石としてのみ知られて居たのであるが、近來は其外に青の石材が出て居るのである。併ながら今日の和硯の中では若田石は少しく硬きに過ぎる。又赤間石は近來此以上の名品が澤山出て來たので、稍々其實用的價値が落た。今日最も弘く行はれて居る名石は仙台石である。併ながら主に建築材とし後一て、或は石碑などに於て多 行はれるので、硯の材としては今段の努力を要することと思ふ。甲州の雨端は元祿以來吉 採掘されて居るので、今後尙ほ雨端の材を出す計畫になつて居るが何分にも鰍澤十數里の山奧に之を得るのであつて、其運搬が容易でない。けれども其硯としての價値は頗る佳良である。最後に三州鳳來寺から出る石は、其質が支那の歙州竜尾の銀星のものと殆ど相讓ない位の名材であつて、其點に於ては日本獨步

と思はれる。自分は最近に貴族院議員加藤恒忠翁の甲州の雨端石を探ね、又三州の鳳來寺に至つて、鳳來寺の硯究を探ね、湖田久次郎氏及び其土地の丸山善兵衛、畑野才吉、名倉莊三諸氏とそれ〲其硯材の出る坑區を確めた所が、各其美材を出た、それでそれ〲其硯材に對して吾人は鳳鳴石、金剛石、煙岩石、金鳳石、寺林石等の命名を試みた、此中寺林石は最も鋒鋩が強く、且つ銀星を有して居る點に於て歙州石に劣らないことを確めた。吾人は鳳來寺の丸山氏及び雨端の雨宮彌兵衛兩氏に依つて、是等の硯材が一層世に出ることを希望して已まないものである。



以上述ぶる所に依つて支那の文人生活及支那の文房具の事に就て大要述終つたのである。素より吾人は日本の文房具の將來に就ても考ふる所があり、又支那の文房具の將來並に將來に就ても大に攻究したいのである。最早世の中の人が萬年筆本位になつて來て、從來の文房具は孤城落日の狀態に陷ると云ふ風に考へる人もあるけれども、苟くも支那の文字の行はれて居る間は、まだ此在來の文房具の命脈は續くものと見て差

支ない。大なる銀行會社に於ては額面は廢せられ、「ペン、インク」の時代となつたやうではある。併ながら吾人は東洋の文房具の保存の意味に於て、出來る限り此方面の研究を盛んにしたいと云ふ至情から、此處に文人生活に因んで支那の文房具の如き其研究の一端を述べたのである。

最後に支那名硯産出の分布地圖を掲げて研究者の參考に供したいと思ふ者である。

支那趣味と云ふこと

谷崎潤一郎

支那趣味と云ふことは、單に趣味と云つてしまふと輕く聞えるが、しかし案外われわれの生活に深い關係を持つてゐるやうである。われわれ今日の日本人は殆んど全く西歐の文化を取り入れ、それに同化してしまつたやうに見えるが、われわれの血管の奥底には矢張り支那趣味と云ふものが、思ひの外強い根を張つてゐるのに驚く。私は近頃になつて特に此の感を深くする者である。私もその一人ではあるが、曾ては東洋の藝術を時代後れとして眼中に置かず、西歐の文物のみ憧れてそれに心醉した人々が、或る時期が來ると結局日本趣味に復り、遂には支那趣味に趨つて行くのが、殆んど普通のやうに思はれる。特に洋行して來た人々には一層それが多いやうである。私は主として藝術家の場合を云ふのであるが、しかし今日五十歳以上の紳士で、多少教養のある人々の持つ思想とか、學問とか、趣味とか云へば、大概は支那の傳統が基調を成して居る。政治家、學者、實業家の古老などで、拙劣な漢詩を作り、書道を學び、多少なりとも書畫骨董に親しまない者はないと云てよい。彼等は皆子供の時分に彼等の祖先が代々學んで來た支那の學問で育てられた、そして一時は西洋かぶれした時代もあつたが、歳を取ると共に再び祖先傳來の思想に復歸してしまふのである。「今日、支那藝術の傳統は最早や支那では滅びてしまつた、それは寧ろ日本に殘つてゐる」と、或る支那人が歎じたと云ふ事を私は友人から聞いた。その言葉はたしかに一面の眞相を穿つて居る。が、支那自身と雖、今では支那の智識階級全體が恰も日本の鹿鳴館

時代の如く、ほんの一時の歐米心醉に囚はれて居るので、やがては國粹保存主義に眼醒める時があると思ふ。支那の如き獨特の文化と歴史を持つた、保守的な國柄に於いて、それは一層明かな事だと考へられる。

私は、斯くの如き魅力を持つ支那趣味に對して、故鄕の山河を望むやうな不思議なあこがれを感ずると共に、一種の恐れを抱いて居る。なぜなら、餘人は知らないが私の場合には、その魅力は私の藝術上の勇猛心を消磨させ、創作的熱情を痲痺させるやうな氣がするから。――此の事は他日精しく書く時もあらうが、支那傳來の思想や藝術の眞髓は、靜的であつて動的でない、それが私には善くない事のやうに思へる、――私は、自分が、特に誘惑を感ずるだけ、尙更恐れて居るのである。私も子供の時には漢學の塾へ通つたし、母は私に十八史略を敎へたものであつた。此の頃の中學校などで無味乾燥な東洋史の敎科書を敎へるよりも、あの面白い敎訓と逸話に富む漢籍の方が、どんなに子供の爲めになるか知れないと、今でも私はさう思ふのである。そして其の後、一度は支那へも遊びに行つて來た。私は支那を恐れながらも、私の書棚には支那に關する書籍が殖ゑて行くばかりである。止さう止さうと思ひながら、私は時々二十年も前に愛讀した李白や杜甫を開いて見る。「あゝ、李白と杜甫！何と云ふ偉大な詩人だらう！沙翁でもダンテでも、果して彼等よりえらかつたらうか？」と、讀む度毎に私はその詩の美に打たれる。横濱へ移轉して來て活動寫眞の仕事をし、西洋人臭い街に住まひ、西洋館に住んで居ながらも、私のデスクの左右にある書棚の上には、亞米利加の活動雜誌と共に高靑邱や吳梅村が載つて居る。私は仕事や創作の爲めに心身が疲れた時、屢々それらの雜誌や支那人の詩集を手に取つて見る。モーション・ピクチュア・マガヂンや、シャドオ・ランドや、フォオトオ・プレエ・マガヂンなどを開く時、私の空想はハリー・ウッドのキネマ王國の世界に飛び、限りない野心が燃え立つやうに感ずるが、さて一と度び高靑邱を繙くと、たつた一行の五言絶句に接してさへ、その閑寂な境致に惹き入れられて、今迄の野心や活潑な空想は水を浴びたやうに冷えてしまふ。「新しいものが何だ、創造が何だ、人間の到り得る究極の心境は、結局此の五言絶句に盡きて居るぢやないか」と、さう云はれて居るやうな氣がする。私はそれが恐ろしいのである。

此の後の私はどうなつて行くか、――今のところでは、成るたけ支那趣味に反抗しつゝ、やはり時々親の顏を見たいやうな心持ちで、こつそりと其處へ歸つて行くと云ふやうな事を繰り返してゐる。

詞華

落葉抄

―民謡百章―

北原白秋

目次

初冬短曲　十二章

あらはに

あらはに透いて冴ゆるは
高いけやきのやどり木、
丹澤山の北風。

薄い日ざしに

薄い日ざしに明るは
山でかやの實、
蘇枋の實、
くぬぎ林のくぬぎの實、
栗の根元のおち栗。

かやに

かやにかやの實、
椎にしひ、
ええ、さて、どんぐりの木にはどんぐり、
てもさても、どんぐりの木にはどんぐり。

けやき

欅、ひよう〳〵、
ばら〳〵、くぬぎ、
山はから〳〵、冬のかぜ。
啄木鳥こつ〳〵、晝の月。

色の黄なのは

色の黄なのが女郎花、
さて、しろいのは男郎花、
ええ、それ、さりとは誰がきめた、
ええ、それ、さりとは何時きめた。
　　　　しよんがへ。

萱は

萱は枯れても
陽はかげつても
せめて、龍膽の花なりと、
ええ、それ、せめて龍膽の花なりと。

岩から

岩から岩へとかげる陽
しばし渚に、留まりて、
高く吹かるるさびしさ、
高くかがやくさびしさ。

ひと時

ひと時明る松が根
その根にそよぐ穂薄、
通りすがりに見上げて、
山坂のぼる、日の入り。

山みちに

山みちに
目につく花は松蟲草、
冬の日の入り、松蟲草。

薄は

薄は薄、
蘆は蘆、
冬の風なりや音も立てましよ、
ええそれ、冬の風なりや音も立てましよ。

松の生木で

松の生木で、生木で、
そぎつぱなしたおもちやの小雉子、
風の吹く日は、
父々戀しや、

母者戀しや。

からまつは

からまつは、
風も無いのに、
つい、ほろり、
ほろり、はら〳〵、
風も無いのに、ほろり、はら〳〵、おもしろや。

焚火　五章

一

落葉焚けばおもしろ、
櫟の葉はふす〳〵、
萱の葉はちよろ〳〵、
松の枯葉はぱち〳〵。

二

ひとりで焚く落葉を
ひとりで嗅げばおもしろ、
山のにほひがする、
あの頃のにほひがする。

三

落葉焚き焚き、
ひとり遊ぶ心の
何か果敢なくなりけり。
もひとつ強く燃さうか。

四

落葉焚き焚き、
なぜにうしろ向くのぞ、
いえいえ、龍膽の花が咲いてゐるゆゑ。

[illegible]

[illegible]

萱がよう燃えるが、
あたたかいぞ、
あたたかいぞ、
と、云うてはゐれど、やつぱりさみしい。
默つてばかりゐずとも、何か云へ、お前も。

落葉林 四章

あひびき

あひびきしましよと、
丘まで出たが。
欅ばかりが
さえざえと。

遠くで、かたごと、水ぐるま、
近くで、ちいぴいぴい鵯のこゑ。

落葉ばかりが
はら〳〵と
風に落葉が、
はら〳〵と。

風の鳥

合圖しましよか、
鳥射ちましようか。
鳥は筒鳥
風の鳥。
山へ出て見りや、
枯山ばかり。

里へ下りても
萱ばかり。

風の筒鳥

風の筒鳥
筒抜け鳥か、
飛んで行たきり、
逃げたきり。

落葉栗かよ

落葉栗かよ、
山田の畔に、
待てば薄陽もきえぎえと。

風よ、吹くなら
ひようひようと吹きやれ、
どうぞ、木がらし、
冬のかぜ。

落葉松　五章

一

浅間千ヶ瀧、
からまつ原よ
下は追分、
合の宿。

二

駒の沓掛、
追分手綱、
唄もいそいそ、
輕井澤。

三

風も吹かぬに
からまつ林は、
いつも松葉が、
はら／＼と。

四

誰も通れど、
山道、小道、
寒むや、からまつ、
遠日射。

五

雨にからまつ、
谷間にや狭霧、
せめて顔出せ、
かんこ鳥。

旅人の唄　六章

一

今日も吹かれて
明日また何處へ、
うしろ向かるる
風の旅。

二

一人旅すりや、
つれないものよ、
空ははるばる、
途ひとつ。

三

明けりや野あるき、
山川越えて、
暮れりや旅籠の
溜火達。

四

一夜泊りの
ゐろり火なれど、
寄れば燃えます、
枯眞柴。

五

明日は明日はと、
幾山越えて、
いつが涯やら、
をはりやら。

~~~

六

山のあなたの
權現さまよ、
山は幾山、
雲幾重。

北國調　十一章

伊那

一

信州、伊那の谷、
木瓜の花盛り。
春蠶かへそか、
(春蠶かへそか、)
婿とろか。
~~~

二

伊那は夕燒、
高遠は小燒。
明日は日和か、
(明日は日和か、)
繭賣ろか。

御嶽

一

空が近いか、
御嶽さんは、
いつも高風、
高吹雪。

二

じ 星見りや、
まだ夜は夜中、
雪の御嶽、
雪明り。

三

與那の雪見て
御嶽見れば、
まだも遙かや、
越の雪。

木曾の御嶽
朝燒ござる、
着けて出やんせ、
簑と笠。

諏訪

一

諏訪の明神、
おなさけござる、
氷張りやんせ、
(氷張りやんせ)
また逢ひに。

二

上と下では
一目で通ふ、
篝火つけやれ、
(篝火つけやれ、)
諏訪の湖。

三

上げよ、鹿の角
九十九と一つ、
願かなへて、
(願かなへて、)
諏訪の神。

四

諏訪の明神
法しよの兜
守りたまはれ、
(守りたまはれ)、
この戀路。

飛驒の高山

飛驒の高山、
吹雪か、
雨か。
せめて、美濃路よ、
せめて、美濃路よ、

柿日和、

續北國調　三章

寒雀

はやも、お目覺か
裏笹籔は、
今朝は北風、
向ひ風。

向ひ風でも
はら〳〵、雀、
明けりや飛びましよ、
聲立てて。

別れ霜

西伯利亞颪の
鳴くこえきけば、
早やも朝霜、
別れ霜。

ちろりちろりと、
ちろめく星よ、
さらば、朝霜、
別れ霜。

山と山との

山と山との
谷間なれば、
人も來もせず、
音もせず。

千兩萬兩も
日蔭の鉢よ。
鵯も來もせず、
聲もせず。

山がつの唄

八竄

渡り鳥

遠く鶫の
飛ぶ空見れば、
冬も末かよ、
ちりぢりと。

渡り渡りの
みな、風の鳥、
いつか吹かれて、
ちりぢりと。

二、ちび鶸

一

暗いうちから
わしや、山かせぎ。
「腰には水筒、山刀、
肩には鳥網、簑と笠、
えさえさえつさ、えつさつさ、
水禅か、かみ、九十九折、
北風びゆう〳〵、すつ飛んだ。」
これも誰ゆゑ、
アリヤコノ、ちび鶸。

二

かうと、網張りや、
もう、手のものよ。
「鳥屋にはゐろり火、自在鍵、
徳利に濁酒、山の薯、
ちろりや、ちろりや、ちんちろり、
山鳥やほろほろ、雉子けんけん、

「夜明の明星、ちんちろり。」

逃がしやせぬぞへ、
アリャコメ、遊び鶫。

饑ゑ山鳥

饑ゑ山鳥、
ひよろひよろ小雉子、
せめて長かれ、
尻尾でも。

その日ぐらしの
かりうど、わたしや、
せめて長かれ、
火繩でも。

嘘つき鳥

明日と云はずに

持て來てたもれ、
壁の山鳥さんよ、
木葉金。

また

どうせ、正なら
持て來てたもれ、
馬の鼻杭、
牛鞦。

どぎまぎ

馬が角振る、
さあ逃げ、牛よ。
ひんひん、そんならまゐりませう、
何處まで逃げたらようござる。
鹿のお宿が向にある。

馬賣り

泣けてしまへど、
いとしの黒馬よ。
明日は馬市、
汝賣りに。

仔馬見せよか、
燕麥やろか。
せねて、月夜の
きりぎりす。

無宿者の歌

山に山猫、
穴には狸、
谷はこたらか、つぼ菫。

「かあかあ啼くのは禿鴉、
ちゆうちゆう啼くのは餓雀、
木では山藤、下り藤、
お里へ下りれば、犬の聲、
鶏やこけこに、鳩くうくう。」

どうせ、宿無し、羽根も無し、
何處まで飛ばりよか、
ええ、このどぶ、どぶ、どぶ鼠。

函嶺 十章

ここらあたりか

ここらあたりか、
御機嫌さんか、
軒に唐黍
唐辛子。

*

ここらあたりか、
御機嫌さんか、
背戸に柿の實、
鵯のこゑ。

いとし野山の

一

いとし野山の
薄紅すすき。
「ついだち二日は晝の月、
せめては、三日月宵なりと。」
早やも、穂に出て
エエソリヤ、そよそよと。

二

今は野山の
霜枯すすき。
「初夜後夜過ぎては曉の月
せめては、二十日の月なりと。」
風に手招く
エエソリヤ、影ばかり。

北山時雨

一

榧の梢と檜の森は
いつも時雨にすくすくと。
囃子「北山時雨がお好きなら

釣棹かたげて鮒つりに、
その鮒買ひましよ、いくらです、
一貫五百にまけておこ、
それでも高いと突つぱなす。」

今朝の、サイサイ、寒さは身に染みる。

二

櫟林の鳥の巣見れば、
いつも游陽にさえさえと。

囃子「北山時雨がお好きなら
釣棹かたげて鮒つりに、
その鮒買ひましよ、いくらです。
一貫五百にまけておこ、
それでも高いと突つぱなす。」

早やも、サイサイ、日暮の鐘のこゑ。

野焼のころ

一

山は野焼か、
まだ春寒か、
逢はず歸るか、
夜のふけか。

二

野火のちよろり火
一山越して、
燃えて行たやら、
消えてやら。

三

野火の火立の
薄れた頃か、

明けの鳥、
ほろと啼く。

鐘が鳴ります

鐘が
鳴ります、
かやの木山に。

山は
寒空、
遠茜。

一つ星さへ
ちらつくものを

なぜに
ちらりとも、
出て見えぬ。

相模の海　六章

鰤網

一

明日は大漁か、
夕燒ござる、
伊豆の大嶋
えんやら、茜雲。

えんやら、えんやら、えんやらほ、
えんやら、えんやら、えんやらほ、
舟なら四梃目、八梃櫓、
腕なら男の若盛り、
えんやら、えんやら、えんやらほ、
えんやら、えんやら、おゝやらほ。

二

またも時化かよ、
あの風雲は、
なまじ沢城の
えんやら、朝の虹。

えんやら、えんやら、えんやらほ、
えんやら、えんやら、えんやらほ。
どうでもこいつは命がけ、
板子は一枚、底奈落、
えんやら、えんやら、えんやらほ、
えんやら、えんやら、えんやらほ。

三

惚れりや、ねこそぎ
西濱がよひ、
失敗りや、鰤網、
えんやら、東沖。

えんやら、えんやら、えんやらほ、
えんやら、えんやら、えんやらほ。
網主大事か、こちとらか
どうでも食はれにや同心棒。
えんやら、えんやら、えんやらほ、
えんやら、えんやら、えんやらほ。

四

鰤か、鯖か、
あの潮色は、
虹の七色、
えんやら、大漁いろ。

えんやら、えんやら、えんやらほ、
えんやら、えんやら、えんやらほ。
網主一人が神さまか、
こちとら裸か、雑魚か。

えんやら、えんやら、えんやらほ、
えんやら、えんやら、えんやらほ。

五

北は大山、
南は嶋よ、
東、房州、
えんやら、西、天城。

えんやら、えんやら、えんやらほ、
えんやら、えんやら、えんやらほ。
大漁だ、大漁だ、また大漁、
舟主、網主、網の雜魚。
えんやら、えんやら、えんやらほ、
えんやら、えんやら、えんやらほ。

遠漁火

雨夜、星の夜、
いづれとないが、
月の夜さの
遠漁火。

宵は　ちら／＼、
夜中は　ぽつり、
明けりや、ほんのり、
浦漁火。

どうで、外海、遠漁火、
點いても消えても、
此方や、しよんがいな、
ええ、しよんがいな。

關西の秋　二章

かやの實ひろひ

かやの實拾ひに行きやせぬか。
いえいえ、そちらは栗山や。

栗の實落しに行きやせぬか。
いえいえ、そちらはかや山や。

どんぐりばつかり

あら、まあ、どつしたことかいな、
どんぐりばつかり拾よつて。

どんぐりばつかりある山や、
どんぐりばつかり拾うたて、
ちともをかしかあらへんが。

へえ、まあ、さうしたことかいな。

筑後柳河　六章

一

筑後、柳河、
柳に燕、
水にや鳰鳥、
かきつばた。

囃子「鳰鳥の頭に火ん點いた、
潜んだと思つたら、けえ消えた。
よか、よか。」

二

筑後、柳河、
阿蘭陀なまり、
街は朱欒の
花盛り。

囃子「祇園守りは殿の紋、
御紋は十字架の花くづし。
よか、よか。」

三

筑後、柳河、
てれつくてんの囃子、
娘御詠歌に
風流舞。

囃子「菜の花盛りは狐つき、
河童に、菱賣に、櫨紅葉、
よか、よか。」

四

筑後、柳河、
そりばつてんが、よかの、
のうも、めすかんも、
ちいん、くさん。

「ウンテレガンのあん情人ふたごころ、
俺や、そりばつてん、ひとすぢに。」

註、そりばつてん。「然しながら」。阿蘭陀なまり。
のうも。「あのネ」である。
めすかんも。なさいますか。「おいでめすかんも」は「おいでなさいますか」である。いつも語尾には、んもを使ふ。断定の時にはばんも　疑問の時にはかんも。めす、めせ、めした。いつも語尾に使ふ。
ちいん。「ちつとも」である。「ちいんからん」は「ちつとも借りない」と云ふことである。凡て語尾にはんがつく、極めて音楽的で、鳴物の音で話してゐるやうである。
くさん。「ネ」である、「あのくさん」は「あのネ」。「あのくさんも」は少し品がよくなる。
ウンテレガン。支那語か阿蘭陀語かわからない、長崎風である。愚図六でも無し、ならず者でも無し、ぐでんぐでんの酔つたんぼでも無し。その中間であらう。いやな奴。軽蔑的に憎しんで云ふ時使ふ。

五

筑後、沖の端、
水天宮の祭、
潟にや不知火、
六騎舟。

「トンカ・ジョンにチンカ・ジョンに、よかオンゴ、
アゲマキ、ムツゴロ、青メリクジヤ、
よか、よか。」

註。六騎その他。 この町の漁師はもと平家の落武者六騎の子孫である。それで、漁師を六騎（ロッキユ）と云ふ。ここの瀉は有名な筑紫瀉である。貝類は日本で一番珍らしいものがゐる。アゲマキもさうである、メクジヤもさうである。ムツゴロは鯆に似た瀉に棲む魚で、前世紀の殘物ださうである。

六

高麗鴉（コウゲガラス）に、蜘蛛絲（コブナエ）、蝦蟇（ワクド）、
虹（ヂユウツ）、女郎（ノスカイ）、支那人（アトヤ）、絲毫（ペンコ）。
「耶馬臺（やまと）言葉に唐（カラ）なまり、
阿蘭陀（おらんだ）附木（つけ）でひつつけた。
よか、よか。」

註。高麗鴉。 黒と白の羽根のある鴉である。柳河地方だけにゐる鴉であらう。朝鮮から來たと云はれてゐる。
コブナエ、日本の古語か。
ワクド。 琉球ではワクビと云ふ。これも日本の古語らしい。
ヂユウツ、阿蘭陀渡りか。
絲毫。 ペンクの訛りが、同上。
耶馬臺。 筑後山門（ヤマト）は倭女王のゐた處だと云はれてゐる。
阿蘭陀附木。 マッチの事を云ふ。

マンドリン夜曲　十章

月は桃色

月は桃色、
宵の月、
窓に腰かけ、街（まち）の月、
どうで逢はれぬ戀ならば、
せめて爪彈き、マンドリン。

*

月は桃いろ、

燈はともる。
ちよいと出ましよか、寄りましよか、
どうでせくせぬ戀ならば
いつそ珈琲の濃紫。

雪は紫

雪は紫、
宵の雪。
窓から、チラチラ、遠燈、
どうで逢はれぬ戀ならば、
せめて遠目にマンドリン。

*

雪は紫、
圓弧燈、
泣いてゐましよか、掛けましよか、
どうせ添はれぬ戀ならば、
いつそこのまま小夜吹雪。

あれは濠端

あれは濠端、
春の月、
水には、チラチラ、遠燈、
逢ひに出ましよか、止しましよか、
小さい電車も馳ります。

オペラ戻り

オペラ戻りの小夜ふけて
空には二十日の月の暈、
狐いろした月夜でも
たまにや萠黄の雨もふれ。

*

夜ふけて歸れば歪み屋根、
空には弓月、狐いろ。
鍵も合はねば、戸もあかず、

どうせ、降られた一人もの。

*

椅子は椅子とて壊れ椅子、
卓子は卓子で腰曲り、
紅いボルドオは瓶ばかり、
男やもめにや、雲脂ばかり。

*

蠟燭一片、酒は無し、
せめて灯だけも點けましよか。
「おや、おや、壊れ卓に壊れ椅子、
　これでもピアノに見立てましよ。」
さあさ、ショパンの愁夜曲、
青い月夜になりまする。

*

紫睫毛の目ばたきと、
紅い唇、
そればかり、

いえいえ、首すぢ、うしろつき、
名さへ知らねば、しよんがいな。

オペラ夜曲　八章

紫まつげ

ひたと瞠つた
圓ら眼ばかり、
緑の睫の濃紫。

*

紫まつげと
圓ら眼の瞳、
孔雀玉とは誰が云うた。

*

少しうつむきや、
あの横顔の

長い睫の濃むらさき。

*

長い睫の
かはいの露よ、
ほろと落ちそで、まだ落ちぬ。

羽根帽子

おまへ、かはいい
おはねの帽子よ、
うしろ向いたで、なほかはい。

*

おまへ、お連れか、
おとなりさまか、
猶太の鍵鼻、革嚢。

*

おまへ、かはいい
紫ほぐろ、
つんと横向く羽根帽子。

*

口笛吹き吹き、
そしらぬふりよ、
かはい、小憎らし、羽根帽子。

都會の片隅　五章

乞食學校

校長は乞食の親子、お羅ぐるみでゾロりとした風、八字髭、金鎖を帶にまきつけてゐる、座つて拍子木をたたく。
教師は親方の女房、小意氣な姉御風。これも上手に座つて三味線を彈、美しいが權のある顏。
かういふ小學校は事實本所邊にある。この唄は「茄子かぼ」のやうな節。

さあさ、來た來た、ひよつこ〱、飛んで來た、
跛どんのお稽古だ、びつこ〱曳いて來た。
お囃子に合はして、お腰を一寸と振つた。
右の肩落つことして、左をぴよつこり振つて、

それこそ可哀相に、片足ひよつこ〱。
うまいぞ〱、その足、その足。

さあさ、來た來た、のつそのそ、匍つて出た。
足蹇どんのお稽古だ、兩手で匍つて出た。
お囃子に合した、お尻であるいた、
右の足投げ出し、左は折り曲げて、
それこそ、みじめに、泣く泣く見上げて、
うまいぞ〱、その眼だ、その眼だ。

さあさ、來た來た、こつつ〱、やつて來た、
小盲目どんのお稽古だ、眼塞いで出て來た、
お囃子に合した、お杖で探した。
時々眼あけて、慌てて塞いで、
それこそ困つて、途方に暮れましよ。
うまいぞ〱、その杖、その杖。

さあさ、來た來た、ぶる〱、ふるへた。
お袋どんのお稽古だ、赤んぼ寢かした。
お囃子に合した、お乳をはだけた、
赤んぼあやして、お尻から捻つて、
それこそ、ひいいひと、泣かした〱、
うまいぞ〱、その手だ、その手だ。

尺八のながし

どうぞや〱、ほうほろり、
あはれなものでしよ、ほうほろり、
どうぞや〱、ほうほろり、
右やひだりや、ほうほろり。

バアの主人

七日のお月さまオリブ色。
お鳩もぽうぽう、啼きましよで、
今夜お光來を願ひます。
先のお貸しもおついでに

橋の下のお狐

ここは橋の下、お茶の水
萌黄のお月さん、雨あがり、
秋刀魚焼かうか、
接吻しよか、
此處はヴェニスか、セエヌ河。

ニシリスト

ああ、あの金持も殺された、
ずゐぶんお金は溜めてたろ。

ああ、あの政治家も殺された、
權力が賴りでやつてたが。

ああ、あの哲學者も心中した、
戀に命を投げ出した。

ああ、あの夫人も家出した、
歌もさほどぢや無いんだがな。

ああ、あの人もふるへてる、
名まへばつかり恐れてる。

とにかく、皆さん、仕合せさ、
なにかに賴れりや仕合せさ。

ああ、ああ、わたしは
何もかも、もう、おさらばだ。

以上百章

大正十年十一月二十六日より十二月三日に至る、八日間の凡ての創作の中、民謠風のもののみを抄出したるものなり。

大正十一年

謹賀新年

中央公論編輯部

一月一日

想華

寫生紀行

理學博士 吉村冬彦

去年の春頃から油畫の稽古を始めた。冬初め頃迄に小さなスケッチ板へ二三十枚、六號乃至八號の畫布へ數枚を描いた。寒い間は休んで今年若葉の出る頃から此の秋迄に十五六枚か、事によると二十枚程の畫布を塗り潰した。此等のものゝ大部分はみんなうちの庭や建物の一部分を寫生したものである。

靜物も描かない譯ではなかつた。併し花を活けて寫生しやうと思ふとすぐに萎れたり、又此に反して勢のいゝのは日毎の變化が餘りにはげしくて未熟なものゝ手に合はなかつた。壺や林檎も面白くない事はないが、折角「生きた自然」の草木が美しく、其れに戸外が寒くなくて好い時候に室内の「死んだ自然(ナチュールモルト)」と首引をするのも勿體ないやうな氣がした。靜物乃至自畫像などは寒い時の爲に保留するといふやうな氣もあつて、暖い内はなるべく題材を戸外に求める事に自然となつてしまつた。尤も戸外と云つても唯庭をあちらから見たり此方から見たり、或は二階から近所の屋根や樹の梢を見た處など、もしこれが本當の畫家ならば始めからてんで相手にしないやうなものを、無理に拾ひ出し、切り取つては畫布に塗り込むのであつた。それだから、どの繪にも〳〵同じ四つ目垣の何處かの部分が顏を出して居たり、同じ屋根が

何處かに出つ張つたりして居る事になるのは免れ難い。

其れでも私に取つては矢張面白くない事はなかつた。例へば四つ目垣でも屋根でも芙蓉でも鷄頭でも未だ甞て此れで稍滿足だと思ふやうに描けた事は一度もないのだから、いくら描いてもそれはいつでも新しく、いつでもちがつた垣根や草木である。恐らく一生描いて居ても此等の「物」に飽きるやうな事はあるまいと思ふ。――描く事には時々飽きはしても。

さうは云ふものゝ、展覽會などで本職の人の繪を見ると、いろ〳〵面白い、たまらない程美しい草木や地形や建物やが惜氣もなく材料に使はれて居る。自分から見ると此等の畫家は實に羨ましい有福な身分だと思ふ。世の中に何が贅澤だと云つて、此のやうな美しく貴重な自然を勝手自在に我物にして使用し、時には濫費する程の贅澤は少ないと思ふ。此れに匹敵する贅澤は恐らく唯讀書位のものかも知れない。

そんな繪を見ると、屹度自分も門から外へ出て描いて見たくなるのである。一歩門を出さへすれば、つい其處の路次にでも川岸場にでも電車停留場にでも、兎に角うちの庭とは比較にならない程いゝ題材が、勿體ないやうに無雜作に、顧みられずにころがつて居る。わざ〳〵旅費を出して幾日も汽車を乘り廻はす必要はないやうに思はれた。しかしどうも此の東京の街頭に畫架を据えて、往來の人を無視してゆつくり落着いて、目を細くしたり首をひねつたりする勇氣は――やつて見たら存外あるかも知れないが、考へて見たゞけではどうもなさゝうに思はれた。せめて郊外へでも行けばさういふ點で工合のいゝ場所がいくらでもあるだらうと思つたが、併し一方で又餘り長く電車や汽車に乘り、又重いものをさげて長途を歩るくのは病氣に障るといふ掛念があつた。

今年の秋になつて病氣の工合が大分よくなつたし、醫者も許し且つすゝめてくれたので何處かへためしに行つて見や

うと思ふと、生憎時候外れの霖雨がつゞいて中々適當な日は來なかつた。やつと天氣がよくなつて小春の日光の誘惑を感ずる頃には、子供が病氣になつて居て、どうもさういふ心持になれなかつた。

十月十五日。朝餘り天氣が朗らかであつたので急に思ひ立つて出掛ける事にした。此間T君と會つた時、いつか一處に大宮へでも行つて見やうかといふ話をした事を思ひ出して、兎に角も大宮迄行つて見る事にした。繪具箱へスケッチ板を一枚入れて、其れと坐蒲團代りの古い布切れとを風呂敷で包み隱したのを抱えて市内電車で巣鴨迄行つた。省線で田端迄行く間にも、田端で大宮行の汽車を待つて居る間にも、眼に觸れる凡ての者が今日に限つて異常な美しい色彩で輝いて居るのに驚かされた。停車場の燻ぶつた車庫やペンキのはげかゝつたタンクや轉轍臺のやうなもの迄も小春の日光と空氣の魔術にかゝつて名状の出來ない美しい色の配合を見せて居た。其れに比べて見ると、そこらに立つて居る婦人の衣服の色彩はなんとなくこせ〳〵した不調和な繼ぎ合せのやうに見えた。こんなものでも半年も戸外に吊して雨曝しにして自然の手にかけたら、少しは落着いたいゝ色調になるかも知れない。實際洗ひ曝しの鐵道工夫の青服などは適當な背景の前には綺になるものゝ一つである。ヴェニスの美しさも半分は自然の爲によごれ曝されて居るおかげである。

乘り込んだ汽車は何處かの女學校の遠足で滿員であつた。汽車が動き出すと、一團の生徒等は唱歌を唱ひ出した。それは何だか分らないが二部の合唱で、靜かな穏かな滑らかな感じのする歌であつた。汽車のゴー〳〵といふ單調な重々しい基音の上に、澄み切つた二つの音の流れがゆるやかな拍子で合つたり離れたり入り亂れて流れて行く。窓の外には更に澄み切つた空の光の下に武藏野の秋の色の複雜な旋律とハーモニーが流れて行つた。

大宮驛で下りて公園迄ぶら〳〵歩いた。驛前の町には「釜五家寶」といふ御菓子を賣る店が並んで居る。此の「五家寶」といふ名前を見ると私の頭の中へはいつでも埼玉縣の地圖が擴げられる。そうしてあのねち〳〵した豆の香を嗅ぐ

やうな思ひがする。

或る町の角をまがつた左側に蠟細工の皮膚病の模型を並べた店が眼についた。人間の作つたあらゆる美しくないものの中でも此位美しくないものも稀である。今日のやうな日に見ると其の醜くさが更に强められる。此れや菊人形などに比べると屠牛場の內部の光景はまだいくらか美しい位だと思ふ。

惡い醜い病を治す藥を賣る爲に、病の醜さを世間に示す、此のやり方が今の新聞や婦人雜誌のやり方によく似て居る。其の主旨は甚だめで度い。併しさういふ方法で果して世の中の醜い病が絕やされるものであらうか。藥はよく賣れても、恐らく病の方は却つて益々擴がりはしないだらうか。もう少し積極的なものゝ力で病にかゝらない素質を養ふ事は出來ないものだらうか。

公園の入口迄行つて一寸迷つた。公園の中よりは反對の並木道を行つた方が私の好きな「繪」が多いらしく思はれた。併し折角此處迄來て、名高い、自分には始めての此公園を見ないのも世間といふものに申譯がないと思つて大きな鳥居をくぐつてはひつて行つた。いつの間にか宮の裏へ拔けると可成廣い草原に高く聳えた松林があつて其處にさつきの女學生が隊を立てゝ集つて居た。遠くで見ると草花が咲いて居るやうで美しかつた。

腹が空つたので旗亭の一つにはいつて晝飯を食つた。時候はづれで、休日でもないせいか、他にお客は一人もなかつた、わざ〳〵一人前の食膳をこしらへさせるのが氣の毒な位であつたが、しかし靜で落着いて大變に氣持よかつた。小さな坐敷の窓には柿の葉の黃ばんだのが蠟石のやうな光澤を見せ、庭には赤いダーリアが燃えて居た。一つとして繪にならないものはないやうに見えた。

飯を食ひながら女中の話を聞くと、此公園を先達つて何とかいふ博士が見に來て、此れはいゝ處だから此の形勝を保

存しなければいけないといふ事になり、更に裏手の丘迄も公園の地域を擴張する事になつた。『さうなると私どもゝ此處は立退かなければなりません』といふ。非常に結構な事だと思つた。近年急に襲ふて來た「改造」といふ嵐の爲に我邦の人の心に自然なあらゆるものが根こぎにされて、其の代りにペンキ塗りの思想や蠟細工のイズムが、新開地の雜貨店や小料理屋のやうに雜然と無恰好に打建てられて居る、最中に、それ程とも思はれぬ天然の風景が方々で保存せられる事になるのは、せめてもの事である。ならう事なら精神的の方面でも何處かの山や森に若干の形勝を保存して貰ひ度い。とついこんな事を考へながら一椀の鯉こくをすゝつてしまつた。

「繪をおかきになるなら、向ふの原つぱへ御出になるといゝ處がありますよ」と敎へられた儘に此の方へ行つて見る。近頃の新しい畫學生の間に重寳がられるセザンヌ式の切通し道の赤土の崖もあれば、舊派向きの牛飼小屋もあつた。所謂原つぱへ出ると南を向いた丘の斜面の草原には秋草もあれば櫻も紅葉もあつたが、どうも丁度工合のいゝ處を此處だと思ひ切りにくいので、とう／＼其原つぱを通り越して往還路へ下りてしまつた。道端には所々に赤く立枯れになつた桑畑が暗い森を背景にして、さま／＼の手頃な小品を見せて居た。併しもう少し好い處をと思つて歩いて居る中にとう／＼ぐるりと一廻りして元の公園の入口へ出てしまつた。

入口の向側に妙な細工ものゝやうな庭園があつて其の中に建てた屋臺作りに活人形が並べてあつた。鞍馬山で牛若丸が天狗と劍術をやつて居るのがあつた。其人形の色彩から何からが何とも云へない陰慘なものである。此小屋の上に聳えた美しい老杉までが其の爲に物凄く恐ろしく無氣味なものに感ぜられた。何の爲にわざ／＼こんなものが作つてあるか全く分らない。

秋の日が段々低く落ちて行つた。餘りゆる／＼して居ては、折角此處迄來たのに一枚も描かずに歸る事になりさうな

ので、行き當り次第に並木道を左へ切れて行つて、そこの甘藷畑の中の小高い處に兎も角も腰をかけて繪具箱をあけた。何となしに物新しい心のときめきと云つたやうなものを感じた。それは子供の時分に何か長く欲しがつて居た新しい玩具を手に入れて始めて其れを試みやうとする時、或は何かの研究に手を付けて、始めて新しい結果の曙光が朧に見え始めた時に感じるのと同じやうなものであつた。天地の間にあるものは唯向ふの森と家と芋畑とそして一枚のスケッチ板ばかりであつた。

向ふの小道を稀に百姓が通つたが、わざ〳〵自分の處迄覗きに來る人は一人もなかつた。

どれだけ時間が經過したか丸で分らなかつた。唯律義な太陽は私にかまはず段々に低く垂れ下つて行つて景色の變化が餘りに急激になつて來るので、いゝ加減に切り上げてしまはなければならなかつた。輕く興奮してほてる顏を更に强い西日が照りつけて、丁度酒にでも微醉したやうな心持でそしてからだが珍しく輕快で腹がいゝ工合に空つて居た。

停車場迄來ると汽車はいま出た許りで、次の田端停りは一時間待たなければならなかつた構外のWCへ行つて其處の低い柵越しに見ると、丁度其向側に一臺の荷車があつて、人夫が二人其上で材木などを積み込んで居た。右の方のバックには構内の倉庫の屋根が黑く聳えて、近景に積んだ米俵には西日が黄金のやうに輝いて居り左の方の澄み通つた秋空に赤や紫や色々の烟が渦巻き昇つて居るのが餘りに美しかつたので、いきなり繪具箱を柵の上に置いてWCの壁にもたせかけ、大急ぎのスケッチをしやうとした。板は唯一枚しかなかつたから、さつきの繪の裏へ極めて大まかに描き始めた。

場所が場所だけに見物人が段々背後に集まつて來た。車夫も來れば、學生も來て居るやうであつた。しかし、大急ぎで此の瞬間の光彩を捉まうとして藻搔いて居る私には、とてもそんな人達にかまつて居るだけの餘裕はなかつた。それでも人々の言葉は時々耳にはひる。私が新しくブラシを下す度に、「烟だよ」とか「電柱だよ」とか一々説明してくれる

人もあつて、何だか少し背中や頸筋の邊がくすぐつたいやうな氣持もした。さういふ人の同情に價する爲には私の繪がもう少し人の目にもうまく見えなければ氣の毒だと思ふのであつた、

ほんの大體の色の見當をつけた許りで急いで繪具箱を片付けてしまつた、さてふり返つて見るともう誰も居なかつた。人々の好奇心の目的物はやつぱり此の私ではなくて「繪を描いてる何處かの人」であつたのである。此分なら東京の町中でもどうやら寫生が出來さうな氣もした。

行きに一處であつた女學校の一團と再び同じ汽車に乘り合せたが、——生徒達は往きとは丸で別人のやうに活潑になつて居た。あの物靜かな唱歌はもう聞かれなくつて、賑かな寧ろ騒々しい談笑が客車の中に沸き上つた。小さなバスケットや袋の中から取り出した最後の鹽煎餅やサンドウィッチを片付けて居た生徒達の一人が、さういふものゝ包紙を細かく引き裂いては窓から飛ばせ始めると、風下の窓から手を出して其れを取らうとするものが幾人も出て來た。窓際に坐つて居た若い商人風の男も一處になつて其のやうな遊戲を享樂して居た。此の暖い小春の日光は矢張り若い人達の血のめぐりをよくしたのであらう。此のやうな血のめぐりのいゝ時に、もし本當の教育——人の心を高い境地に引上げるやうな教育が施されたら、どんなに有効な事であらう。

元氣のいゝ人達の中には少數の沈んだ顏もあつた。喧嘩でもしたのかハンケチを顏に押しあてゝ泣いて居るのもあつた。此れも小春の日光の効果の一面かも知れなかつた。

途中から乘つた學生とも職工とも付かぬ若い男が、ベンチの肱掛けに腰を下して周圍の女生徒にいろんな冗談を云つて笑はして居た。「學校は何處……小石川？、〇〇？△△？…」などと女學校の名前らしいものを列擧して居たが生徒の方では誰れもはつきりした答を與へないで唯笑つて居た。どうして小石川といふ見當をつけたかが私には不思議に思は

れた。それ〳〵のエキスパートが品物の產地を云ひ當てるやうに、此男には矢張り特別な眼識が具はつて居るのかと思はれた。さう云はれると成程何となく小石川らしくも思はれない事はなかつた。

田端へ着くともういよ〳〵日が入りかけた。夕陽に染められた構內は朝見た時とは丸でちがつた更に〳〵美しい別の繪になつて居た。數多い展覽會の繪の中で一枚も此の光景を描いたものを見ないのが不思議に思はれた。鐵道院の方で寫生を禁じるゆはれも考へ得られなかつた。

＊　　＊　　＊　　＊　　＊

十月十六日、日曜、昨日の漫步が身體にも精神にも豫想以上にいゝ効果があつたやうに思はれたので、今日も出かける事にした。昨日汽車の窓から見ておいた浦和附近の森と丘との間を步いて見やうと思つたのである。昨日出る時には殆んど何のあてもなしであつたのが、唯一度の往復で途中に數へ切れない程の目當てが出來てしまつた。自分等の硏究の仕事でもよく似て居る。唯空で考へるだけでは題目は中々出て來ないが。何か一つつゝき始めると途中に無數の目當てが出來過ぎて困る位である。興味があるからやるといふよりは、やるから興味が出來る場合がどうも多いやうである。

今日は日曜で汽車は不合理な不正當な滿員であつた。出る時に出られるかどうかと思ふ位であつた。繪硏に繪具箱をのせる空所もなかつたのでベンチにのせかけて持つて居るうちに、誤つて取落すと隣に立つて居た老人の足に當つた。老人は一寸怒つたやうな顏を見せたが、あやまつたらすぐに心が解けた。私はこんな時にいつでも思ふ事がある。自分は何故平氣ですまして居て、もし面と向つて怒られたら、そんな處に足をもつて來て居る奴があるかと怒鳴りつける丈けの勇氣がないのだらう。此の勇氣がなくてはとても今の世間をのんびりした氣持では渡つて行かれない。昔は命

を的にしなければ、うつかり誤つてゞも人の足も踏めず、惡口も無論云はれなかつた。私の血族の一人は夜道で誤つて衝き當つた人と切り合つて相手を殺し自分は切腹した。今では法律に觸れない限り、自分の眼鏡で見て氣に入らない人間なら、足を踏みつけておいて、逆様に罵しる方がしつかりして居て男らしくていゝのである。さういふ事を道樂のやうにして歩いて居る人格者もある。自分の子供等の行末を思ふなら、さういふ風に敎育しなければさきで困るのではないかと思ふ事も屢々ある。

『赤羽で今電氣を焚くところをこさへて居るが、其れが出來るとばや……』こんな事を話して居る男があつた。電氣を焚くといふ言葉が面白かつた。日本語もかういふ工合に活用させる人ばかりだつたら、字を見なければ分らない或は字を見ても讀めないやうな生硬な術語などをやめてしまつて、もう少し親しみのあるものに代へる事が出來さうである。國語調査會とかいふものでかういふいゝ言葉を調べ上げたらよささうに思はれた。

浦和の停車場からすぐに町外れへ出て甘藷や里芋やいろ／＼の畑の中をぶら／＼歩いた。とある雜木林の出つ鼻の落葉の上に風呂敷をしいて坐り込んで向ひの丘を寫し始めた。平生は唯美しいとばかりで不注意に見過ごして居る秋の森の複雜な色の諧調は全く臆病な素人繪かきを途方にくれさせる。未だ眼の鋭くない吾々初學者に取つては恐らく此れ程いゝ材料はあるまい。しかし黑人になれば多分唯一面のちやぶ臺、一握の卓布の面の上にでも矢張これだけの色彩の錯綜が認められるのであらう。それ程になるのも考へものであるとも思ふが、併し假令樂しみ事にしろやつぱり其處迄行かなければつまらないとも思ふ。

畑に栽培されて居る植物の色が一切れ毎にそれ／＼一つも同じものはない。打返されて露出して居る土でも乾燥の程度や遠近の差でみんなそれ／＼に違つた色のニュアンスがある。それ等の可也に不規則な平面的分布が、透視法（パースペクチーヴ）といふ

原理に統一されて、其處に美しい幾何學的の整合を示して居る。此等の色を一つ取りかへても、線を一つ引き違へても、もう駄目だといふ氣がする。

十歳位の男の子が二人來て後の方で見て居た。「いゝねえ」「いゝ色だねえ」などと云つて居るのが矢張子供らしい世辭のやうに聞こえた。遠慮深い少さな聲で云つて居るのであつたが、流石に大宮の車夫とはちがつて畫の中の物體を指摘したりしないで「色」を云つたりする處がそれだけ新しい時代の子供なのかも知れない。

此處はいゝ加減に切上げて丘の上の畑の中を歩いた。黍を主題にしたのが一枚描き度かつたがどうも工合のいゝ背景が見付からなかつた。同じ畑の中を何遍も往復して居るのを少し離れた畑で働いて居る農夫が怪しんで居るやうで少し氣が引けた。自分が農夫になつて見た時に此の繪具箱をぶら下げて歩いて居る自分が如何にものらくら者に見えるので心細かつた。とう〳〵鐵道線路の傍の崖の上に腰かけて、一枚ざつとどうにか書き上げてしまつた。

＊　＊　＊　＊

十月十八日。火曜、午後に子供を一人つれて、日暮里の新開町を通つて町はづれに出た。戰爭の爲に出來たらしい小工場が到處に小規模な生産をやつて居る。兎も角も自分の子供の時にはみんな貴重な舶來物であつた品物が、ちやんと此處等のこんな見窄しい工場で出來て、奇麗なラベルなどを貼られて市場に出てくるのであらう。其れだけでも日本がえらくなつたには相違ない。此れでもし世界の他の國が昔の儘に足踏をして、日本の追付くのを待つて居てくれるといゝだらうと思つた。

町はづれに近く青いペンキ塗りの新築が目に付いた。それを主題にしたスケツチを一枚描かうと思つて適當な場所を捜して居ると、ちやんとした畫學生らしいのが二人同じ青い家を取入れて八號位の畫布を描いて居るのに出合つた。一

人は近景に黍の行列を入れ、一人は溝に架つた板橋を使つて居た。一人のは赤黒く一人のは著しく黄色つぽい調子が目に付いた。

私は少し行過ぎて、深い堀割溝の崖の縁に坐つて溝渠と道路のパースペクチーヴを眞中に入れのたを描いた。近處の子供等が入り代り何人となく覗きに來た。此邊の子供には大分專門的の智識があつて「チューブ」だの「パレット」だのといふ言葉を云つて居るのが聞こえた。そして浦和邊の子供とは凡ての質が違つて居た。

歸りに、腰に敷いて居た大きな布片の塵を拂はうとした拍子に取り落した。それが溝の崖のずつと下の方に引つかゝつて容易には取り上げる事が出來ないので、其儘にして歸つた。此の布切れが今でもやつぱり引かゝつて居るかも知れない。此日かいた繪を見ると、繪の下の方に此の布切れがぶら下つて居るやうな氣がして仕方がない。そして此の心持は、人殺しをした人間の或る場合の心持と何處か似たものだといふ氣がするのである。（中略）

* * * *

十月廿九日。土曜。王子電車で小臺の渡迄行つた。名前だけで想像して居た此の渡は武藏野の尾花の中を流れる川の岸の淋しい物哀れな小驛であつたが、來て見ると先づ大きな料理屋兼旅館が並んで居る間にペンキ塗の安西洋料理屋があつたり、川の岸にはいろんな粗末な工場があつたり、そして猪苗代湖の水力で起した電壓幾萬幾千ボルトとかの三相交流が河の高い空を跨いで居るのに驚かされた。

先月からの雨に荒川が溢れたと見えて川沿の草木はみんな泥水をかむつたまゝに干上つて情ない灰色をして居た。全色盲の見た自然は或はこんなものだらうかといふ氣がして、不愉快であつた。

高壓電線の支柱の處迄來ると、河から堀り込んだ溝渠があつた。此れに沿ふて二條のトロの鐵軌が布いてあつて電車

通の神社の脇に通じて居る。溝渠の向側には小仕掛の鐵工場らしいもの丶廢墟がある。永い間雨曝しになつて居るらしい鐵の構造物はすつかり赤錆がしてそれが青いトタン屋根と美しい配合を示して居る。烟突なども倒れかゝつたまゝになつて何となく荒れ果てた眺めである。此の工場の爲に堀つたかと思はれる裏の溜池には堀割溝から河の水を導き入れてあつた。其の水門が崩れた儘になつて居るにも趣があつた。池の對岸の石垣の上には竹籔があつて其中から一本の榎が聳えて居るが、其梢の紅や黄を帶びた色彩が何とも云はれない美しい。樹の影には他の工場の倉庫らしい丹塗りの單純な建物が半面を日に照らされて輝いて居る。其の前には廢工場の汀に茂つた花薄が銀のやうに光つて居る。

溝の此方に畫架を据えて對岸の榎と赤い倉庫と薄との三角形を主題にして描き始めた。

描いて居るすぐ傍には新しい木の香のする材木が積み重ねてあつた。又少し離れた處には大きな土管がいくつも砂利の上にころがしてあつた。私が其處へ來る前から、中學の一年か二年位と見える子供が唯一人材木の上に腰をかけて居たが、私が描き始めると傍へ來て大人しく見て居た。そして何時迄も其處を離れないで見て居るのであつた。

其内に土方のやうなものが二三人後の方へ來て材木の上に腰かけて何かしきりに話し合つて居た。誰れか其處に來る筈の人――それは多分親方か何かゞ未だ來て居ないのを待遠しがつて噂をして居るらしかつた「繪を描いて居る男」などは全で問題にならないらしい程熱心に話合つて居た。

其中に荷馬車の音がして大勢の人夫がやつて來て、材木を轉がしては車に積み始めたので、私はしばらく畫架を片よせて避けなければならなかつた。そして少し離れた土管に腰をかけて烟草を吸ひながら描きかけの繪の穴を埋める事を考へた居た。

人夫等の中には繪を覗きに來るのもあつた。そして色色人を笑はせる目的から粗暴な或は卑猥な言語を並べたりし

た。「あの曲つた烟突をかくといゝんだがなあ」などゝいふ者もあつた。「文展へ行つて見ろ、島村觀山とか寺崎廣業とか、あゝいふのはみんな大家だぜ。こんなのとはちがわあ」「あれでも何處かへ持つて行きあ、三十圓や五十圓にやあ、なるんだよ」などいふのも聞こえた。

さつきの子供はいつ迄も其處いらを離れずにぶら／＼して居た。遠足にしては唯一人といふのも可笑しかつた。餘程繪が好きなので、かうして油繪の出來て行く道筋を飽きずにおしまひまで見屆けやうとして居るのかと思つても見た。

一度去つた荷車と人夫は再び歸つて來た。彼等の仕事しながらの話によつて、對岸の廢工場が某の鑄物工場であつた事、それが漸く竣成して、いよ／＼製造を始めやうとする途端に經濟界の大變動が突發して其儘廢墟になつてしまつた事などを知つた。

繪具箱を片付ける頃には夕日が傾いて廢墟の汀の花薄は黄金の色になつた。其處に堆積した土塊のやうなものはよく見るとみな石炭であつた。溜池の岸には子供が二三人釣を垂れて居た。熔爐の屋根には一羽の鴉が首を傾けて何かしら考へて居た。

繪として見る時には美しく面白い此の廢墟の影に、多數の人の家の悲慘な運命が隱れて居るのを、此の瞬間迄私は少しも考へないで居た。一度氣が付くともう眼の前の繪は消へて其處にはさま／＼な悲劇の場面が現はれた。

利慾の外に何物もない人達が戰時の風雲に乘じて色々な際どい仕事に手を出し、それが殆んど豫期された筈の變動の爲に倒れたのはどうにも仕方がないとしても、さういふ人の妻子の身の上は考へて見れば氣の毒である。

突然すぐ前の溝の中から呼びかけるものがある。見ると河の方から一艘の荷船が何時の間にかはひつて來て居る。市中の堀などでよく見かけるやうな、船を家として渡つてゆく家族の一つである。舳に立つて居る五十近い男が今呼び

かけたのは私ではなくて、さつきから私の繪を見て居た中學生であつた。

子供に關する凡ての事が稻妻の閃めくやうに私の頭の中に照し出された。今日は土曜で、市の中學から恐らく一週間ぶりに歸つた子供は此一夜を父母と同じ苫の下で明かさうとするのであらう。其れを迎に來た親と、待ち草臥れた子供とが、船と岸とで默つて向合つて居る淋しい姿を見比べた時に、何だか急に胸の邊がくすぐつたくなつて知らぬ間に涙が出て居た。何の爲の涙であつたか自分でも分らない。

繪の世界は此上もなく美しい。暫く此の美しい世界に逃れて病を養はうと思つても、繪の底に隱れた世の中が少しの心の隙間を覗つてすぐに眼の前に迫つて來る。此れは私の繪が弱いのか世の中が强いのか、どつちだか此れもよく分らない。

一つの工場が倒れる一方に他の工場は新たに建てられて居る。さつきの材木も矢張何處かの工場のである事が人夫の話から判斷された。工業が衰へた譯でもないらしい。個體が死んでも種(スペシース)が榮えれば國家は安泰である。個體の死に附隨する感傷的な哀詩などは考へない方が健全でいゝかも知れない。

工場のみならず到處に安普請の家が建ちかゝつて居るのが此間中目について居た。一と頃騷がしかつた住宅難の解決がこんな風にしてなしくづしに付いて居るかと思はれた。未だ荒壁が塗りかけになつて建具も張つてない家に無理無體に家財を持ち込んで、坐敷の眞中に築いた夜具や簞笥の胸壁の中で飯を食つて居る若夫婦が目に付いたりした。

新開地を追ふて來て新に店を構へた仕出し屋の主人が、店先に頰杖を突いて行儀惡く寢ころんで居る眼の前へ、膳椀の類を出し並べて賣り付けやうとして居る行商人もあつた。其處らの森陰の汚ない藁屋の障子の間からは端唄の三味線をさらえて居る音も聞こえた。かうして我大東京はだらしなく無設計に横に擴がつて美しい武藏野を何處迄もと蠶食し

へ行くのである。こんなにしなくても市中の地の底へ何層樓のアパートメントでも建てた方がよささうに思はれる。さうしないと、おしまひには米や大根を地下の棚で作らなければならない事になるかも知れない。

伯林の郊外で未だ家のちつとも建たない原野に、道路だけが立派に磨いた土瀝青張りに出來上つて、美術的なランプ柱が行列して居るのを、少し馬鹿々々しいやうにも感じたのであつたが、やつぱりあゝしなければかうなるのは當り前だと思はれた。

想ふに「場末の新開町」といふ言葉は東京市の殆んど全部にはまる言語である。

＊　＊　＊　＊

十一月二日。水曜。澁谷から玉川電車に乘つた。東京の市街が何處迄も〳〵續いて居るのにいつもながら驚かされた。

世田ケ谷といふ處が何處かしら東京附近にあるといふ事だけ知つて、どの方面だかはついはつきり知らずに居たが、今日通つて始めて知つた。成程兵隊の居さうなといふ事が町に並んで居る店の種類からも想像されるのであつた。

東京天文臺が駒澤村といふへ移轉する事はずつと前から知つて居たが、其の駒澤らしい駒澤が矢張り此の線路にある事も始めて知つた。頭の中で離れ〳〵になつて何の連絡もなかつた色々の場所が丁度珠數の珠を絲に連ねるやうに、電車線路に貫かれてつながり合つて來るのが一寸面白かつた。

學校で教はつたり書物で讀んだりして得た知識も矢張り離れ〳〵になり勝なものである。唯自分が何かの問題にまともにぶつかつて、其方の必要から此等の知識を通り拔ける時に、凡ての空虛な智識が體驗の絲に貫かれて始めて活きて連結して來る。此れと同じやうなものだと思ふ。

農科の實科の學生が二三人乘つて居た。みんな大きな包のやうなものを携へて居る。休日でもないのに何處へ行くだらうと思つて氣をつけて居た。すると途中からもう一人同じ帽章をつけたのが乘り込んで、いきなり入口に近く腰掛けて居た一人の肩をたゝき、「オイ、どうした」と聲をかけた。其の言葉の響の或る機微な特徴で、私は此の學生が國有の日本人でない事を知つた。氣を付けて見ると、つい私の隣にかけて居る一人の讀んで居る新聞が漢字ばかりのものであつた。容貌から見るとどうも支那ではなくて朝鮮から來た人達らしく思はれた。

玉川の磧では工兵が架橋演習をやつて居た。あまりにきら〳〵する河原には私の搜すやうなものはなかつたので、河と此れに並行した丘との間の畑地を當もなく東へ歩いて行つた。廣い〳〵桃畑があるが、もうみんな葉をふるつてしまつて果實を包んだ紙の取り殘されたのが雨にたゝけてくつゝいて居る。少しはなれて見ると密生した梢の色が紫色にぼうと烟つたやうに見える。畑の間を縫ふ小道の傍の處々に黄ばんだ榛の樹の梢も美しい。

丘の上へ登つて見やうと思つて道を搜してると池のやうなものゝ傍に出た、漣一つない池に映つた丘の森の色は又なく美しいものである。汀に茂る葭の斷間に釣をして居る人があつた、私の近づく足音を聞くと振返つて何だかひどく落ち付かぬ風を見せた。もし此の池で釣魚をする事が禁ぜられてゞも居るか、さうでないとすれば、此の人は矢張り自分のやうなたちの、据りの惡い良心をもつた人間だらうと思はれた。そして惡い事をして居なくても、人から惡い事をして居ると思はれはしないかと思ふと同時に、實際惡い事をして居ると同じ心持になるといふたちの男かも知れないと思つた。そして同病相憐む心から私は急いで其處を通り過ぎねばならなかつた。

漸く丘の下の往還に出ると、丁度其處から登る坂道があつた。登りつめると奇麗な芝を植えた斜面から玉川沿の平野一面を見晴す事が出來た。併し其れよりも私の眼を牽いたのは、丘の上の畑の向側に柿の大木が幾本となく並んで其の

葉が一面に紅葉して居るのであつた。其向ふは一段低くなつて居ると見えて柿の梢の下にある家の藁葺屋根だけが地面にのつかつて居るやうに見えて居た。此處で畫架を立てゝ二時間餘りを無心に過した。

崖を下りて停車場の方へ行く途傍には滑らかな小流が音を立てゝ流れて居た。小川の岸に茂る色々の灌木はみんなさま〴〵の秋の色彩に染められて居た。小川と丘との間の一帶の地には、別莊らしい家が處々に建つて居る。後には森を背負ひ、門前の小川には小橋がかゝつて居る。何となしに閑寂な趣のある好い土地だと思ふ。併し此の小川の流が衞生の方から少し氣になる點もあると思つた。

電車は小學校の遠足のかへりで一杯であつた。據なく車掌臺に立つて外を見て居ると、或る切通しの崖の上に建てた立派な家の庇が無殘に暴風に毀されて其儘になつて居るのが目についた。液體力學の敎へる處ではかういふ崖の角は風力が無限大になつて壓力のうんと下がらうとする處である。液體力學を持出す迄もなく、かういふ處へ家を建てるのは考へものである。しかし或は家の方が先に建つて居たので切通しの方が後に出來たかも知れない。さうだとすると、電車の會社は此家の持主に明白な損害を直接に與へたものだといふ事が科學的に立證される譯である。此れによく似た場合は物質的並に精神的の各方面で到處にあるが、損害をかけた人も受けた人も全然其の場合の因果關係に心付かない事が多いやうに思はれる。其のおかげで人々は枕を高くして眠つて居られる。そして言論や行動の自由が許されて居る。春秋の筆法が今は行はれないのであらう。さうでなければ私もこんな事は云はれない。

世田ケ谷近くで將校が二人乘つた。大尉の方が少佐に無雜作な言語使ひでしきりに話しかけて居た。少佐は多く默つて居た。其人の胸のボタンが一つはとれて一つはとれかゝつて居るのが始終私の氣にかゝつた。

小學生を見ると、勿論みんな違つた顏であるが、其れで居て妙にみんなよく似た共通の表情がある。軍人を見てもや

つぱりさうであるらしい。此れがどうしてさうなるかを突きとめる事は或る人々に極めて重大な問題であると思はれる。吾々の見た蟻や蜜蜂のやうに個體の甲と乙との見分けが付かなくならなければ其の集團はまだ本物になつて居ない。

＊　＊　＊　＊　＊

十一月十日。水曜。池袋から乘換えて東上線の成増驛迄行つた。途中の景色が私には非常に氣に入つた。見渡す限り平坦なやうであるが、全體が海拔幾メートルかの高臺になつて居る事は、處々に凹んだ谷があるので始めて分る。さういふ谷の處にはきまつて松や雜木の林がある。此の谷の開けて行くさきには河のある事を思はせる。畑の中に點々と散布した民家は、きまつたやうに森を背負つて西北の風を防いで居る。なる程吹き曝しでは冬が凌がれまい。

私の郷里のやうに又日本の大部分のやうにどちらを見てもすぐ鼻の先に山が聳えて居て、僅の低地には水田ばかりしかない土地に育つたものには、此のやうな景色は珍しくて、そして如何にも平和にのび〳〵した感じがする。此れと云つて特に指すもののない爲に、一見單調なやうに見える中に、何也複雜な、しかし柔かな變化は含まれて居る。餘りに強い日常の刺戟に疲れたものゝ眼には此のやうな眺めが又なく難有い。

米を食つて育つて居ながらかういふ事をいふのはすまないが、水田といふものの景色は何故か私には陰氣な不健康な感じを與へる。又いくら廣くても其の面積は吾々の下駄ばきの足を容れる事を許さない爲に、なんとなく行き詰まつた窮屈な感じを與へるが、畑地ならば實際何處でも歩いて行けば行かれると思ふだけでも自由な舒やかな氣がする。

葱や大根が到處に青々として、麥はまだ僅に芽を出した處がある位であつた。此間迄青かつた筈の芋の葉は數日來の霜に凍てゝすつかりうだつたやうになつたのが一つ〳〵丁寧に結び束ねてあつた。

[illegible]で下りて停車場の近くをあてもなく歩く中に、谷を下つて曲りくねつた道路と其の道傍に[illegible]に染まつたのを主題にして稍複雜な地形に起伏する色々の畑地を畫布の中へ取り入れた。

歸りに汽車の窓から見た景色は往きとは見違へる程に一層美しかつた。凡てのものが夕日を浴びて輝いて居る中にも、分けて谷の西向の斜面の土の色が名狀の出來ない美しいものに見えた。線路に沿ふたとある森影から青い洋服を着て、ミレーの種蒔く男の着て居るやうな帽子をかぶつた若者が、一疋の飴色の小牛を追ふて出て來た。牛の毛色が燃えるやうに光つて見えた。それはどうしても此世のものではなくて誰れかの名畫の中の世界が眼前に活きて動いて居るとしか思はれなかつた。

殆んど感傷的になつて見惚れて居る景色の中には、こんなに日が暮れかゝつても未だ休まず働いて居る農夫の家族が幾組となく居た。赤兒をおぶつて、それをゆさぶるやうな足取をして、麥の芽をふんで居る母親達の姿が哀れに見えた。かうして日の暮れる迄働いておいて、朝はもう二時頃から起きて大根の車の後押をして市場へ出るのであらう。

市に近づくに從つて空氣の濁つて來るのが眼にも鼻にも感じられた。風のない市の上空には鉛色の烟が物凄く棚引いて居た。

若しも事情が許すなら、私は此の廣い平坦な高臺の森影の一つに小さな小家を建てゝ、一週の中の或一日を其處に過ごしたいと思つたりした。此れ迄色々の所謂勝地に建つて居る別莊などを見ても、自分の氣持にしつくりはまるやうなものはこれと云つて頭に止まつて居ない。海岸は心騒がしく、山の中は物恐ろしい。立派な大厦高樓はどうも氣窮さうに思はれない。賴まれてもさういふ處に住む氣にはどうもなれない。しかし此の平坦な野の森陰の小屋に日當りのいゝ椽側なりヴェランダがあつて其處に一年の中の撰ばれた數日を過すのはそんなに惡くはなささうに思はれた。

ついそんな田園詩の幻影に襲はれた程に今日の夕陽は美しいものであつた。

*　*　*　*　*　*

永い間宅にばかりくすぶつて居て、適々此の好い時節に外の風に吹かれると氣持はいゝやうなものゝ、自然と世の中の刺戟が病餘の神經には少し利き過ぎるやうである。もうそろ／＼寒くはなるし、寫生行もしばらく中止していよ／＼靜物でもやり始めなければなるまいと思つて居る。

冬景叢書

室生犀星

立冬

寒さに向ふといふことは、粗い、悲しげなものを空氣のきめから感じるものである。場末の旅籠屋に居て、着衣の調度や、忙しげな冬仕度を考へながら、茫然と道路につツ立つて的もない人通りを（その實どういふ人人が通るかもはつきり見きわめられずに）眺めてゐる時など、寒さに向ふ感じが濕り氣のある人家の屋根からも、通行人の裾のやうなところからも感じるのである。

それは又人を訪ねるとか、讀書をするとか、さういふ氣が起らずに、實に所在ない、ぼんやりした時間に於て多く感じるのである。何をしていいか、何を考へていいかさへ分らずにゐる時に、忙しく又影繪のやうに往き來の人人が悲しげに映じてくるのである。この心持ちは何と云つていいかわからない。やはり風に吹かれ、すこし寒さを感じることに於て起る氣持である。

ほんとうに所在なく私はどれだけ多くのこんな日を送つてゐたかも知れない。さまざまな物賣りの聲のおこる町を窓障子でぴつたり閉め、閉めた外側に瘠せ煤まみれな枯木の変形をながめ、そして何故となく自分の身を持てあますやう

な時間に迫られるのであつた。睡るとか歩くとかといふ氣もしなければ、横になつても立つてゐても落付かない、そはそはした氣がしてゐ、それでゐて決して一つの物を靜視してゐるわけにゆかない慌しい氣持ちがつゞくのだつた。

さういふ藍ばんだ何處かに泥濘の悪い道路を考へさせるやうな晩方を、私は私の硬い机に間もなく縋りついてゐなければならなかつたのである。

だが今のわたしにも、やはりさういふ、寒さに向ふ悲しいやうな氣もちが殘つてゐ、このごろ、脚氣のやうに起りはじめるのだつた。客もなく執筆も散歩もしないとき、やはりむかしのやうに懐手をしながら、ぼんやり門の前に立つてゐなければならなかつた。さうして偶にしかこない通行人をちらりと一と目ながめると、又つぎの通行人を、なにが故にそのやうに見なければならないのか、自分でさう考へながらも矢張うそ寒く立つてゐなければならなかつた。自分はまだ獨身で、子供がなくて、家のないやうな氣を何時の間にか感じ、それゆゑ、十年前に立つた姿と同じいへんなむしられた干物のやうに、吐きつけられたやうな佗燐のしたに立たなければならなかつた。だが氣持はちがつてゐる、と、さう考へても結局あのころはからだが輕く、いまは重いものを背負はされてゐるやうで、うごきがとれないやうな氣がした。

これも矢張り晩方にちかい、うそ寒い日だつたが、私はぬかるみを拾ひ拾ひ歩きながら、さきにゆく髮のそそけた筒袖のどこかのお内儀さんが、青いいやに光つた下卑た魚を一疋提げ、さむさうに小刻みに走つてゆくのを見た。どういふものか、道路が坂になつてゐて、家と家とにしきられた三角形の空か、その身窄らしい女房の姿から目を放したときに、鋭どく光つて見えた。灰だみた白い一色で、硬さうだつた。それほど佗しい氣のしたことはなかつた。

時　雨

狐色に芭蕉の葉さきが焦げ枯れ、それを吹かすことのない時雨が、まい日、窓障子のことをう云ふうした。時雨、柚味噌・頭巾、さうして炬燵などがつい聯想されてくる。藪蔭の竹を囲ふ、松葉敷き二霜除けをする、温かい葉からはじく冬ばらを珍らしく眺める。火桶、鐵瓶など懐しくなる。心にたえず幽邃な冬の囁きをかんじる。それが詩的でない意味で、實際カラリと底ぬけした空を見るだけでも幽遂で寂寞たる感情になるのである。

暗い郊外の自分の家で、日暮れ、食事をし、部屋にはいつてしばらく本をよみ、ふいに町へ出てゆくと、實際歳の市のやうに冴えた明るい賑やかな電燈が、目に一どきに映つてきて、しばらく茫然とそれらの燈火をながめることがある。子供のとき暗い道をどこからどう歩いてゐるか分らない背中の上から、一度に明るい街へ出たときの感じに似てゐた。冬は、さういふ遠隔にある氣持ちを時々とり戻してくれるやうな氣がした。いつも灰と白との一色で、しかも莫大小のやうに柔らかく冷い感じのする空工合が、すこしのばら色を交へずに永くつづいてゐるのである。

外からかへると、着物の裾や外套なぞに、時雨に濕つた匂ひがして、寂しい氣がすることがあつた。私はさういふ匂ひをも、かなり落着いでかぐことができた。——いつだつたか、裏町に人をたづね、濡れた柚子の黄ろい膚の、にぶいが強い芳ばしい光をもつてゐるのを眺めて通つたことがあつた。茶褐色の屋根の上にまで覗いて出てゐた一枚が、たわわになり、うすら寒い風にゆれてゐるのを佗しいものに今だに忘られなかつた。

私の家では、篠竹のしげみのなかに、木賊と鷄頭にかこまれ、篠竹の七八枚ばかりの小枝に覆はれたつくばゑがあり、このごろの雨季には一層若く、一二三の落葉を底の方に沈め、冷たさうに見えた。雨がくると、すぐその篠竹にさわ

る音がして、静かな、客のないときなぞ机に坐つてゐる私の方にきこえた。この夏、いつもくる植木屋がぜひ買つて呉れと言つて勸めたものであるが、あとでその内儀さんが二十圓なにがしの勘定書をもつてきて

「とうたうつくばえも賣つてしまひましたさうで――ちやうど私が田舍へ行つた留守の間だつたものですから。」

さう言ひ、毎日水をかけ十五年近く持つてゐたつくばえの、落ちついてその半分を土に埋めてゐるのを眺め、懷しげにして去らうとしなかつた。植木屋は是非買つて呉れと言つてきかなかつたのである。では持つて行つたらいいだらうと言ふと、お庭にあれば、時時見に來られるからと言つて、水に指をしたしたりして歸へつて行つた。朝晩の水仕事のひまひまに水を遣つたりしてゐたのを、しかも十五年近くも持つてゐたのだから、賣り惜しみする心持ちも讀め、私は佗しく苦笑してゐた。どちらにあつても同じいことながら、自分のもので無くなつたことは寂しいだらうとも考へてゐた。

鶯

庭の奥の方にある枇杷の老樹が、このごろ蒼白い花を着けた。糀のやうに寂しい花である。朝といはず午後過ぎといはず、たくさんの三十三才が啼きに來た。おそらく花を啄つきにくるのであらう。

佐藤春夫の「春淺き日に」のなかに

この森の路に沿うた篠原では姿の見えない雌鶯が、チヤ、チヤ、チヤチヤチヤと鳴きながら篠原を動かしてゐる。路の上に高く差し出た雜木の枝から雪のしづくが時々、ぽたり、ぽたりと落ちてくる。

といふ笹鳴きの一章がある。佐藤氏らしいあかぬけした名文である。歳時記をみると、笹鳴、三十三才、冬鶯とある。

實際、くろずんだ茶褐色をした、瞬きをしてゐるひまに移り動りする姿の速い鳥である。[illegible]日の影を一層つめたくするやうな鳥である。

わたしの郷里の古い家などには、よい鶯を飼つてゐるのがゐる。二三月ころになると、行人の歩みをとどめる程である。それゆゑ、お屋敷町の垣根に踞んで、啼きをつけるために、籠を持つて、幾日も聲を習はせにでかける鶯飼ひがある。鶯といふ鳥は、習はせると啼きをおぼえるものである。垣根に籠を架け、そこから二三間隔てて終日踞んでゐる人々をよくわたしは見かけたものである。

去年の春、谷中をあるいてゐて、小綺麗な盆栽屋で、吊籠を一つ買つた。そこの店を出やうとすると、いきなり美しい鶯の聲が奥の間から起つた。おたくでお飼ひですかとたづねると、さうですと答へた。古くからですかといふと、三四年になりますと、小白いおかみさんが微笑んでこたへた。お譲りしてもいいんですが、この春もう一度値をつけてみたがつてゐると主人がいつてゐるんですよと、やはり微笑んでこたへた。よくきくと去年の春、ある會で百圓だつたといふことを、おかみさんは答へた。

そこから出て、二三軒すぎたころ、また、朗らかな聲が起つた。わたしは踏みとどまり、耳底を去らないうららかな聲音にきき恍れた。

――わたしの父がやはり鶯を飼つてゐたことを今でもおぼえてゐる。太平の加賀武士であつた父は、南晴れの縁側で、よく磨り缽のすりこぎの音を立ててゐたこと、麻蟲の白いうぢうぢしたのを鶯にあたへてゐたことを今でもおぼえてゐる。麻蟲といふのは、麻の根に巣をくふてゐる蛆で、鶯の大の好物なのである。それを食べた朝は、わけても聲が澄み透つてゐるさうである。

かういふ無駄書きをしてゐる間にも、冬鶯がしきりに啼いてゐる。よくきいてゐると、チヤ、チヤではなく、クツ、クツといふやうに聞える。すぐ机から三歩を隔てないところに、篠竹があり、あまりに近くきこえるからである。すこし隔つてゐるところは、チヤ、チヤときこえる。垣から垣へ移り、姿の速いことは餘程注意せぬと見落してしまふくらゐである。

竹に關すること

わたしは寒竹が好きである。庭後にその名に洩れず、このごろ寒竹のほそい茜いろをした優しい白根が、筍になり、すくすく伸びて出た。爾來寒竹なるものは、ほつそりした弓なりのかがみ込んだ優姿をもち、纖巧な葉並は、淺緑で、日高のやうに生きがよいものである。その筍は小春の返り咲きみるやうに、暖かい懐げな楚々としたほそさと柔らかさをもつてゐるものである。

孟宗、篠竹、矢竹、熊笹、おかめ笹、小熊笹、めだけ、草笹、ほうちく竹、などある。支那には煙管の筒にする美しい女竹がある。朱に塗つて遊女などが、手にもたれる。篠竹は畫で見てもよいが、四季とりどりに趣味が多い。一枚一枚の葉なみが舟遊のかたちをしてそよ風を迎へ、そしてさわりの涼爽な音をたてるものである。矢竹と同じである。維新前に幹皮を敲いて火縄としたものは、孟宗竹である。

ほうちく竹といふのは、非常に數がすくない。高さ一間から一間三尺くらゐに伸び、枝垂れ、密葉、毛皮のやうに濃緑で、ふさふさした感じをもつてゐる。孟宗の聳立したのにくらべると、雅びやかである。文人畫に多い。

篠竹の繁みには、春の終りから秋にかけ、ふしぎにほそい絶え絶えな聲をもつてゐる蟲がゐて、しよつちう、じいい

じいいと呟いてゐる。わたしはそれを目付けやうと氣をもんで氣をつけてゐるが、どういふ聲であるかわからない。あるひは衍時からくつついたままの表皮が、風のかげんで風鳴りをするのかも知れないと思つて注意してみるが、さうでもないらしかつた。低い、實に低い、滅入るやうな聲である。いまだにわからない。庭に出るごとに注意してきくほど、どこに居てないてゐるのか分らない。

深い鋪だたみなどで、竹林のささやきを聞くのは、日本人より支那人の方がよけいに注意してゐるやうである。時さの調和や、ひやりとした一脈の冷氣や、その針葉の幾億とない儚音の裡にゐると、全くよいきもちになれる。——十年程前に京都へ行つたとき、山科あたり汽車が通りかかり、ところどころ竹林があつたのをおぼえてゐる。山科と竹林とがよい趣きをもつてゐるのを感じた。竹深留客庭といふ氣持ちはわたしどもより支那人の方に多いのである。

會津東山

一枚も葉のない柿が星なりに捺みついてゐて、たがひの円みある美しい調和が、空のなかほどへ跳り上つて展がつてゐるのが、非常にみごとに眺められた。十一月十六日といふのに、雪がもう二度も降つたといふことだつた。それゆゑ、溫泉からあがつて、冷たい柿の皮に舐りつくと、冷透、はらはたに沁みてうまかつた。

庭へ出ると、雨のふらないのに、納屋のやうな藁屋根からしづくが、ぽたり、ぽたりとおちてゐた。木をみると、その肌はぬれ、日南のほうは白く乾いてゐる。藁屋根のしたの地面は、しめつて微かな溝をつくり、時無草が眞青だつた。

瀧の方の岩石にしやがんで、溫泉の小者であらう、しきりに家鴨の毛をひいてゐた。引かれたやつが水で洗はれ、寒々と濡れてみえた。瀧のよどみを込んだ下流れの底は、落葉が沈みながら穧りなしにながれて行つた。重い鐸ひかたを

して――さうして時々きいろく光つて覗かれた。

どこの宿にも、乾いた三味線がおこり、おさらひをしてゐるらしかつた。それが寒くかじかんできこえた。朝ごとにもんぺい袴をはいた娘だちが、溫泉宿の前軒で、東京でいふ堅炭といふのを秤つてゐるのが、山ざとの風情をあちはにして見せた。ことに俵から取り出して秤つてゐるのが、人情の或るきびしさを剝き立てて見せた。よくきくと、會津は柿の本場で、搖ぎ立てのやつに燒酎の霧を吹きかけ、和えるやうにサワすといふことだつた。

ところどころにたまる雪、柿かじる

といふ一句を繪はかきにかいたが、出さずに置いた。拙い氣もしたからである。二晩ばかりゐるうち、三味線と女たちの騷ぎで、何もかけず、いらいらして、鹽原へ電報を打ち部屋をあけてもらふやうに托み、會津を發つた。

會津から鄰山までの山々は、どういふ小さい草までも、色をつけ、赤みを帶び、凋落つたものは既に肅々としてそよいでゐた。雪がところどころにあつた。

鹽原も寂れきり、かじかは石裏にひそみ、毎日、しぐれが大根畑にあをあをとそそいでゐた。宿の女中も番頭もみな「わたり」をつけ、伊豆の方へ稼ぎに出たあとだつた。溫泉も、風のつよい日はぬるくなり、風のおちた日はすこし溫かつたが、あがると、うそさむかつた。

それに高々と晴れてゐるにかかはらず、粉雪がふつてゐて、ちらちら光り、ちよいときれいだつた。時雨のあめが途中で凍えて、こな雪になるらしかつた。茜いろをした山々の肌のくらみに、雪のふきつけるのが限りもなく廣々して、急に近くの山がぼんやり白くかすんで行き、浮き上つてゆくのが、その裾にある雜木林の上にかつきりして見えた。

茶の花

十四五の頃、始めて舊派の宗匠に俳句を見て貰つた。なんでも椿の花が葉の裏に咲いてゐるといふやうなことを詠んで、蝶印をその句帳の上に點されたことがあつた。萬年炬燵にゐるやうな老人で、何が嬉しいんだか鳥渡わかりにくい老齢者によくある形の人だつた。蕉風庵十逸といふ名前だつたが、もうそのころ六十以上だつたから、勿論亡くなつたらうと思ふ。そのひとの事が折にふれ、よく思ひ出され、郊外の靜かな住宅で、俳句でもつくりたい氣になることがある。

俳句といへば、もう十年も書かない。この間、友人の家で、わざわざ扇子をつきつけ何んでも書けといはれた。そこでふいに思ひ出して

いなごはみなちんばなる

さういふ一句を黄色の澁うちはに、はづかしくもなく書きすてたが、それでも俳句になつてゐるやうな氣もした。

笛と太皷

子供ができてから半年ほど經つと、國の母から小包がとどき、ひらいてみると、小さい太皷と笛とが入つてあつた。太皷には六十錢といふ赤緣の正札が貼られたままあつた。巴の紋のついた皮張りで、叩いてみると、まだ新らしいだけよく鳴るのである。無器用な作りを見せた笛にも、やはり田舍らしい、暗ずんだよい音いろがあつた。

片町といふ目ぬきの田舍の市街に、中島といふおもちややがあつた。風船、ゴム玉、汽車や刀や、さまざまな珍奇な

お弄品が、ところ狭いまでならべられ、サアベルや鐵砲の錻力の光つた色が、ちかちかしてゐた。そこの店さきに立ち、あれでもない、これでもないと、擇り急いでゐる老ひた母の姿が、じくじくした時雨つづきの、どうかすると霰でも來さうなうそ寒い日和と一しよに、やさしく、目にうかんでくるのである。

太鼓は毎日よく鳴るのである。とんとんとことんといふふうに、それを部屋にゐて机にかじりつき、あたまが濁り惱へかねてゐるときにも、知らず識らず私はほほ笑むやうな氣になり、やかましくても叱るわけには行かんのである。遠いやうにも聞へ、また近近と頭にひびきもする。しまひにはペンを投げ出し、いらいらした額と目をこすり、こすることによつて一度に草臥れた私は、子供のそばへ行き、かんかんと太鼓を叩くのだつた。あたまは徐徐いたむが、座り込んでさうしてゐると何んだか優しくなれるからだつた。正札だけは人がみてもおかしいから除つてしまひたせうと、女が六十錢とかいた四角な正札に指さきをつけるのだ。さうして置いてをけ、いや剝いだ方が、いいかな、いややはりその儘にしてをくんだと自分でもわかり兼ねるやうに、この小さな太鼓をみつめるのだつた。

朝は朝晴れのなかに太鼓の音がひびくのである。勉強部屋へはいらぬ前に、こんな音をきくのは、頭の調子をわるくするとは知りながら、疲れた頭になつて泣くな泣くなと太鼓を叩くのである。それゆゑ、つい書きもののとつつきが遲れ、ぼんやりと庭をながめてゐるやうな日になることが多かつた。

石燈籠

庭の奧にぜひそれがなければならないやうに、つい石燈籠を暗い垣根と枇杷の葉かげに据ゑて見た。笠には青みがかかつてゐたが、眼はやはりぼんやりのやうに灰白かつた。水を打つても一年や二年で青くなるものではないと知りなが

ら、やはりそれの手習をくりかへしてゐるうち、黒田、上野東照宮のあたりをあるき、そこに寄進された時代古からの献燈を見た。みな慶長年間のもので、どれだけも古色が沁みてゐなかつた。なかには、まだ建てつけたばかりの新しさを帯びてゐるのもあつた。

私は一々燈籠にそひ、仔細にその基附や笠を眺めてあるいてゐるうち、不思議な暗みと寂さとが籠つてゐるのをながめた。それは得がたい古陶などに用ゐられた暗淡色の土色のやうに、とうてい一年や二年でかうなる色ではないことに氣がつき、去らず感歎した。ちよいと見には新らしく、眺めてゐるうち分泌されるやうな古色蒼然の味到は、いまさらのやうに私の情景を打ち挫いでくれた。

谷中から日暮里臺へかけて散らばつてゐる諸々の古い寺院の境内には、寺ごとに古い石燈籠があつた。寛永や文化なぞはさらにあつた。樹のかげにあるものは一層凄かつたが、それよりも日南で苔みがかつたものは、暗色を帯び、底艶を含み、渺然たるひびきがこもつてゐるやうで、樹下のものより一層好ましく感じた。それよりも、燈籠には附物である燧火石など、かなりに土を食ひ込んだ大物が多かつた。燈籠が三百や五百するのは當り前のやうな氣がしたのである。

時論

法學博士 吉野作造

四國協商の成立

日英米佛の四國協商は西電の頻々として報ずるが如く、其成立に於いて殆と疑を容れない。本誌の讀者に見ゆる頃までには多分完成を告げて居るだらうと思はるゝが、之を書いて居る今日でも、之は只時の問題に過ぎないと云つて可い。何れにしても予輩は本協約の成立を心から祝する者である。

此協商の如何なる條件から成つて居るかは今の所未だ精密には分らない。分つたとしても一々之に細目の説明を附するが如きは他に自ら其人があらう。今暫く新聞の傳ふる所に據つて之を概觀するに、要するに太平洋並に極東に於ける國際的交渉問題は今後互に胸襟を披いて相談し合ふ、單獨の行動には出でまいと云ふ事を約束したのである。此處に予輩は非常に重大な意味を認むるのである。

從來でも太平洋及極東の問題に關しては、所謂國際的協約と云ふやうなものは澤山あつて、表面の目的は各自の權利を防護し、東洋の平和を確保すると云ふては居るが、其所謂平和とは、謂はゞ自國の利益の侵されざる事、更に進んでは自國の勢力發展の他より遮げざらん事を意味するに外ならず、其自國の利益なり又發展なりが、大局の平和の上に如何なる關係があるかは、表向きは何と云つても事實に於て殆と顧みられなかつたのである。例へば日英同盟にしろ或は日露協商、日佛協商乃至日英共同宣言にしろ、大局の平和と云ふやうな事は殆と附けたりで、主たる目的は互に承認せらるべき各自自由行動の範圍を定めたものと云つて可い。各自の繩張りを定めると云ふ事は、其等の人々の間に辛じて一時的の平和は保ち得るかも知れないが、それ丈けでは到底大局の安定は得られない。何故なれば、虐げられて居る者の地位は、どの協約に於ても依然として變らないからである。而して戰争以前のやうな武裝的對立の世界に在つては、到底之れ以上の協約の實現を見る事は出來なかつたのである。強い者も弱い者も一樣に其堵に安んじ得べき大局の平和を確立

するが爲めには、根本の氣持から變らなければならない。而して予輩の數々說けるが如く、今や世界の人々の是等の問題に對する氣持は根本的に變つた。彼等は今尙ほどうすれば自分の利益を支障なく伸張し得るかを考へないではない。けれども又同時にどうすれば大局の安定は得らるゝかをも痛切に考へて居る。而して此の第二の目的の爲めには、第一の點に多少の犧牲をも忍ぶ事を辭せないと云ふ態度に出て居る。どうして斯う云ふ變化が來たかについては、屢々述べたから此處には繰返さない。兎に角斯う云ふ風に氣分が變つたとすれば、其間から一つの新しい協約が出て來ると云ふのは當然であらう。四國協商の成立は斯くして華府會議の當初から既に豫想せられた産物だと云つて可い。

四國協商は世界人心一變の結果として生れたものである。而して世界の平和的進步の上から見て、此氣分の一變が肝要な出來事で、協商其物に重きを置くべきものではない。但氣分の一變と云ふやうな事は謂はゞ吾々の感得で、眼や耳で之を指示する事の出來ないものであるから、一つの歷史上の出來事としては、四國協商の成立並に其運用と云ふやうな事實に之を徵するの外はない。此意味に於て今度の協商は斯う云ふ新しい時代の特徵を語る一の明白な標幟として重大な意味があると云ふのである。

尤も四國協商の條文其物が完全に理想的要求に合するか否やは、明白でない。書いた文字はどう云はれやうが、唯だ云ふものを出來しめた根本の氣分、即ち銘々獨特の希望要求を抑へても、東洋の問題を隔意なき協商を遂げて處理しようと云ふ氣分の、今日を端緒として將來に發展する事の上に重要な意義を認めなければならない。胸襟を披いて相議すると云ふ事は、取りも直さず自分の都合ばかりを主張しないと云ふ事を意味する。自分の都合ばかりを主張しないと云ふ事は、今後起るいろ〳〵の問題は凡べて理に基づいて整へて行かうと云ふ事を意味するに外ならぬ。道理に基いて凡ての問題を整ふと云ふ事になれば、小弱國の要求も亦漸を以つて強大國の認る所とならう。道理の前には強弱大小を區別しないからである。

次ぎに四國協商の成立の我國の思想界に及ぼす影響を考へると、又一層大きな意味がある事を思ふ。從來我國の識者階級には、東洋問題の解決に他國と共同するを厭ふと云ふやうな風があつた。例へば支那の問題について之を觀ても、特殊地位の承認を迫るに急にして列國共同の活動を避けた例は幾何もある。相手方の誠意を十分に信用する事の出來なかつた時代には之も致方は無いが、其外東洋の事は俺が先達だと云つたやうな自負

心、東洋に外國の手の伸びるのは、即ち我國に對する脅威だとか云ふやうな謬想も手傳つたのであらう。支那の財政の共同管理とか、東洋鐵道の國際管理とか、皆んなで一緒にやらうと云ふ問題になると、何時でも頭を背向けるのであつた。何でも自分一人でやらねば承知が出來ないと云ふ風であつた。それを今度の協約で一轉して共同的態度に出でたのだから、此處に大いなる氣分の變動を認めない譯には行かない。蓋し我國が此協約の仲間に入つたのは、暫く一歩を譲り、周圍の形勢に迫られ已むを得ずやつたものとしても、之を機として國民の國際的精神を大いに振ひ起す事を得るに於ておや。予輩は四國協商の成立の報を聽いて東洋の平和の爲めに欣び、更にもつと强い程度に於て、日本自身の爲めに欣ぶ者である。

附記

本稿を草し終りて後、四國協約成立の西電に接した。其條文の内容略々從來傳へられたものに異らない。之等の點に就ては追てまた論究するの機會もあらうが、茲に一言讀者と共に考へたいことがある。(一)成立に至るまでの内情を兎や角悪意を以て解釋せざること、(二)今後批准に至るまでの經緯にも神經を惱さぬこと、是である。今日の文明人は、事を決するまでは十分腹藏なく異見を戰はし、云ふべきことも言はずに遠慮するといふことはないが、其代り一旦事が定つたら、相懷之を遵奉して光風霽月の如き態度を常とする。口矢釜しく議論をしたから後で事がきまつた時氣まづいだらうの、又這んな風に腹を見らるゝが嫌だから言ひたいことも言はずに置くといふ樣なことはない。我々も亦こんな女性的態度をすてゝ男性的に堂々と出たいものだ。兎角我國には國際問題になると女性的態度に出づるものが多く、既に四國協約成立に關する政治家の漫評の中にも、こんなのが見へたから序に茲に一言して置くのである。

支那問題概觀

今度の華府會議で實質上一番得をして居るものは、何と云つても支那だ。支那の得は或る意味に於いて日本の損失であるが、此事は毎日の電報で頻りに日本の讓步又讓步を報道し來るのでも分る。

之れにも拘らず、支那では華府會議の經過に對して甚だ憤慨たるものがあるやうである。之れ怪しむべきが如くにして實は

怪しむに足らない。支那で昨今問題として居るのは、實利よりも名だ。實利は支那自ら請求しなくとも、平和の名に於て諸國が皆與へて呉れる。之は支那の働きによるのではなくして、各國が漸く從來の侵略的態度を後悔せる事の反映だ。斯くして實利は期せずして支那の懐に入つて來るが、名はさうは行かない。各國は未だ支那に自己の問題を解決するの能力を認めないのである。それを支那は頻りに得ようとする。自分に無相談で自分に關する事を極めるのを承知が出來ぬと云つて、激しく四國協商にも反對して居るやうだ。面目として斯う云ふ不平の叫びを發するのは大いに同情に値するが、今や列國の態度は不平を云つたからとて支那の言ひ分を通しさうに見えぬ。不平を言はないからとて、支那の實際の利益を無視すると云ふのでもない。支那の態度の如何に拘らず、華府會議を指導する諸大國は、支那自身の實際的利益は十分に圖つて居る。其點にも予輩は華府會議を通して表はれて來る時代の新精神に多大の興味を感ずるものである。

然らば何が所謂新精神かと云ふに、支那のやうな實力を伴はない國に對する取扱方が變つた事を意味するのである。戰前に在つては是等の國に臨む列國の態度は侵略であつた。又是等の國を前にして各強國の取る所の態度は競爭に外ならなかつた。競爭力の均衡上纔かに小康を得る事はあるが、要するに實力を持たぬ悲しさ、正義も道理もあつたものではない。然るに之が今度の會議に於て明白に捨てられた事に、吾々は多大の注意は拂はずには居れぬのである。例へば見よ、租借地も夫れから捨てよう、郵便局も撤退してやれ、關稅も進んで増してやれ、金が要るなら皆で相談して借してやらう、それについては或る一國の乘じて私を計るやうな事の無いやうに工夫してやらうと云ふではないか。絕對的に云へば、支那の爲めに圖つて至れり盡せりと云ふ事は出來まいが、相手方の援け無きに乘じて、之に毒牙を磨くと云ふやうな態度を罷め、更に親切な伯父伯母が親類の孤兒の面倒を見てやらうと云つたやうな態度に出て居る丈けは疑を容れない。即ち實力無き者に對して徒に野心の手を引込めるばかりでなく、進んで發達の機會を與へようと云ふ所に今度の會議の特色があるのではなからうか。而して之は新しい時代の精神が促すので、支那が之を如何に受け入れるかは問題とする所ではない。支那の爲めにやるのではなくして、時代の良心の滿足の爲めにやるのだからである。

從つて支那が是等列國の態度をどう見るかは、列國自身の深く問ふ所に非ざるのみならず、新時代の精神も亦多く影響する所あるべしとも覺えない。支那が時代の円滑に關れて、徒らに

隴を得て蜀を望むの態度を逞しうするのなら、彼の要求は早晩輿論の制限を受くるに至るだらう。之に反して支那が名實共に自主の民族たり、自主の國家たらんとして、其要求を正當なる範圍に限らんか、彼の要求は其實力の發達するに伴つて、頓て列國の快き承認を得る事とならう。戰爭以前に在つては、支那の一進は即ち列強の一退であつたから、列國は理が否でも一旦は支那の要求を抑へんとしたけれども、今は彼等の能力に應じて常に相當の機會を提供するに吝でない。即ち支那の前途には希望がある。彼が漸次實力を養つて來れば、其求むるが儘に何時でも渡すと云ふ態度を取つてゐると云つて可い。そこで支那も奮發の仕甲斐があると云ふもの、此處にも國際的デモクラシイの精神の躍動を看取する事が出來る。吾人は切に隣邦の友人の自重を望まざるを得ない。

外交に於ける國民的示威運動の價値

華府會議に於て支那の言ひ分が十分に通されないと云ふので北京上海を初め各都市に於て例の國民的示威運動が始まつて居るやうである。あゝ云ふ運動は今日の外交上の駆引きの上にどれ丈けの値打ちがあるものだらうか。

同じ様な事を日本でやつた者もある。海軍比率の七割六割の問題について、何とか云ふ會が國民大會の名に於て電報を米國に送つたが如き、即ち之れである。斯くする事が我國の全權を奨勵し、併せて他の外國の全權使臣の感情を動し、以て問題の解決を我が有利に導き得べしと思ふならば、それは大なる誤りである。

尤も斯うした方法が全然無効だと云ふのではない。けれども斯うした運動の最も有力に効果を奏したのは稍古い時代の事だ。凡べて國際會議と云ふものが骨董の商賣のやうに、双方の駆引の上手下手で安くもなれば高くもなると云ふのならば、味方危しと見た時に俄かに大々的に輿論の聲援を與ふるも可い。然し今は國際問題を駆引きによつて定める時代は過ぎた。商賣で云ふなら誰が見ても相當とする正札でなければ通らない時代だ。全然駆引が無いとは云はないが、兎に角昨今の國際問題處理の標準は、凡べての國に通ずる道理である。道理は聲援によつて枉ぐる事は出來ない。此點に於て國民大會の示威運動の如きは、一圓の正札の物を五十錢に買はうとして、其子分達がぞろ〳〵主人公の後に隨いて三越に押懸けるやうなものである。

が予輩の之を如是に説くのは、國民的示威運動が無駄だと云の點に主點を置くのではない。之を無駄だとするに至つた時代の變遷に讀者の注意を喚起したいのである。兎に角今日は相當に道理が幅を利かす世の中だ。力無き正義は役に立たないと云つたのは戰前の事で、今日は道理を內容とせざる力の誇示は反感を挑發せずんば、少くとも物笑ひの種となるに過ぎない。示威運動其物は馬鹿氣て居ると云ふのではない。やるならば理を極め義に仗つて正々堂々とやるが可い。輕擧妄動は寧ろ事の成功に遮げになる。

小題小言六則

●政治家の料理に委かされた軍備制限案

總ての社會的政治的問題は、民間の輿論と云ふやうな形で思想家から取扱はれて居る場合と、それがいよ〳〵政治家の手に渡された場合とを區別して考ふる必要がある。殊に這の必要は我日本に於て多い。何故なれば思想家の頭と政治家の頭との隔りは、我國に於て非常に遠いからである。例へば普通選擧の問題にした所が、民間の輿論としては殆と疑問が無くなつて居るのに、一度び政治家の手に渡されると、未だ早いとか、或は獨立の生計と云ふ條件が必要だとか、いろ〳〵の異論があつて、其間にかなり大きな妥協を許さないと實行に一歩を進むる事が出來ない。妥協するのが可いか不可いか、それは姑く別問題として、政治家が實際上何とか之を落着けようと云ふ必要に立ち至ると、必ず妥協と云ふ事になる。之れが不都合だと眞劍になつて怒れば、所謂迂儒時務を知らずと云ふ事になるのであるが、又まるで理想的要求を顧みないと云ふのでも困る。何れにしても單純な理論の問題としてはどう、實際政治の問題としてはかう、と其間に區別して見るでなければ、所謂事情に通ずる者と云ふ事は出來ない。之と同じ理窟でかの軍備制限論の如きも、亦之を純理論の立場よりすればどう、又華府會議に於て實際政治家の取扱ひに上ればかうと、二つに分けて議論する事が必要である。純理論から云へば、どうせ平和の理想を實現しようと云ふのなら、軍備撤廢まで行かなければならぬ、と云ふ論が一番徹底的だ。けれども若し此見地から、ヒユースの制限案が甚だ理窟に合はないなどと論ずるならば、それは取りも直さず甲の立場によつて乙の立場を論ずる者である。制限に伴ふ比率の問題をそれ〴〵の國の國防的見地から議論すると云ふのも、やゝ此嫌ひは無いか。どうせ華府會議の制限案は平和論の理想的要求に

促されたものたるは疑が無い。然し現在の場合に於て、其理想的要求の其儘實行し難きは、丁度阿片吸飲の禁を直ちに中毒者に適用すべからざると同一である。現實に着眼する政治家の立場としては、最後の理想を着眼しつゝ、現實に一番行い易い方法を工夫するの外は無い。其處がヒユースの覗ひ所であり、又吾々の議論の標準でなければならぬ。惟ふに最近各國は共に殺伐なる武裝的對立の形勢に倦んで居つた。其際限無き財政的負擔に苦しんで居つたのは第一回萬國平和會議以來の事である。然し如何に苦しいからとて軍備の制限は獨りでは出來ない。獨りでも擴張するものがあれば、如何に苦しくとも之れに作れ一自家の安全の爲めに闘らなければならない。それが堪え難き苦痛であるとともに、又甚だしく戰爭の危險を挑發するものであるから、若し各國の間に滿場一致の協定を見る事が出來るなら、皆で約束をして此苦しみを拔けやうと云ふのが、最も卑近な制限の動機だ。政治家は先づ此處に着眼する事が必要であるのみならず、又此着眼點からする制限案が一番實行し得べきものである。斯う云ふ立場から云へば、何も理窟なしに何割減と云ふ風に天引きするのが最も理想的の案だ。只此際一割引にすれば、甲に都合好く乙に都合惡しき事あり、二割引にすれば、乙に都合好く丙に都合惡しと云ふやうな事が有り得るので、出來る丈け多くの國の承認し得る程度の割合が何處に在るかを發見するのが、卽ち政治家の手腕に待つ所である。若し之を純粹に理論家が理窟に合はないの、機械的に過ぐるのと云ふならば、そは甚だ政治に盲目なるの譏を免かれない。華府會議に於ける討議の模樣がどうのかうのと云ふ譯ではないが、只世上の評論のうちには此理論的見地と政治的見地とを甚だ混同する者があるが故に、此處に一言せる所以である。

◉陸軍の縮少は奈何

華府會議が主力を海軍縮少に置き、陸軍の方は將來の討究に貽さるゝであらうとは、初めから豫想された事であつたが、今までの所果して　通りになるやうである。但之を以つて各國に陸軍制限の希望が無いと云ふ風に觀ては間違ひであらう。之れも理論的見地と實際政治の見地とを混同しては不可い。華府會議が更に將來に繼續さるゝかどうかは分らないが、陸軍制限が遠からず討議さるべき一大國際問題たるべき事丈けは疑を容れない。而して陸軍の大いに縮少せざるべからざる所以、特に我國に於て縮少するを防げざる理由は今一々之を說くの必要も無く、又其遑も無いが、近頃さる陸軍の友人より一つの大いに參考になる新事實を聞いた。そは今度の戰爭の經驗によつて、各中隊が戰闘單位としての能率を十分に發揮するには、今迄の人數では多過ぎる。あんなに

大將でも、別に邪魔にならぬとしても必要は無い。問はど內和戰鬪上に人間が多過ぎると云ふのである。然らばどの位まで減じて可いかと云へば、凡そ半減と云ふ所だらうと云ふ事である。して見れば現在の戰鬪力を、假令維持しなるとしても、少くとも人數に於て半減する事が出來る譯になる。固より之に基いたいろ／＼な準備も必要であらうけれども、更に何共等の新事實は吾々門外漢も熟く知つて置く事が必要であらう。何にしても海軍縮少に多少の成功を見た吾々は、更に大いに力を鼓して陸上軍備の世界的一大減縮に突進しなければならない。

◎勞働時間の問題

先頃或る勞働者が遊びに來ての話に、自分の女房が或る紙漉きの小工場に働いて居るが、工場が火事で燒けたので一時自宅で仕事を請負ふ事になつた。請負へだから一生懸命に働いたのは云ふ迄も無いが、やつて見て驚いたのは、工場に居た時朝の八時から夕方の六時まで打つ通しで働いた丈けのものをたつた四時間足らずで立派に出來得る事であつた。こんなに働ける筈が無いと女房の奴も最初不思議がつて居ましたと、彼はつく／＼述懷して居つた。それから色々と話し合つたのであるが、四時間足らずでやれる所を一日掛ると云へば、如何にも怠けて居るやうに聞えるがさうではない。監督の目が矢釜しいのでかなり一生懸命になつてゐるらしいのだ。只働くのに疲れたと云ふ事があるので、監督の目が緩むと休むのは緩む。緩めたからと云つて監督に見付かるまいかと心配するから、頭の休養には少しもならない。つまり八時から六時まで手も頭も打通し働いて、而かも四時間足らずの能率しか擧らないのだから、雇主に取つても得な話でないが、國家全體としても非常な勞力の浪費と云はなければならない。而して此事は何を語るかと云へば、勞働時間の短縮と云ふ事は、今の儘では特別勞働者の休養にもならず、能率を擧げる所以にも固よりならない。凡ゆる勞務の要は賃銀制度其物に在る事を語るものである。

◎役人の怠惰

四時間で濟む仕事を十時間も掛かるのは之は怠けるのではなくて制度が斯くするのだ。之に反して役人などの中には、三日で出來る仕事を十日も二十日も引張ると云ふやうな例が少くない。一つには斯くして私の利益を圖ると云ふものもないでは無からうが、主としては繁文縟禮の結果であらう。ある國際會議に列席すべく佛蘭西に行つた軍人の友達から、次のやうな意味の手紙を貰つた。會議は正味十日であるが、其報告を自分に作くらせるなら四日で出來る。それを主任の役人は五十日懸つてやつと復命書なるものを編纂した、と云ふのである。多額の日當を貰ひたいからだと云ふのは皮肉であらうが、詳しい報告さへ出せば十分働いたやうに見られると

いふ、下らない弊風が我官海に濃厚である事丈けは疑を容れない。友人の私信を利用してこんな事を云ふのは甚だ不本意であるけれども、斯うした弊風は相當にあると、豫ね〴〵憂へて居るから、此處に一つの動かすべからざる一例を以つて、敢も雄辯に警告せしむる所以である。

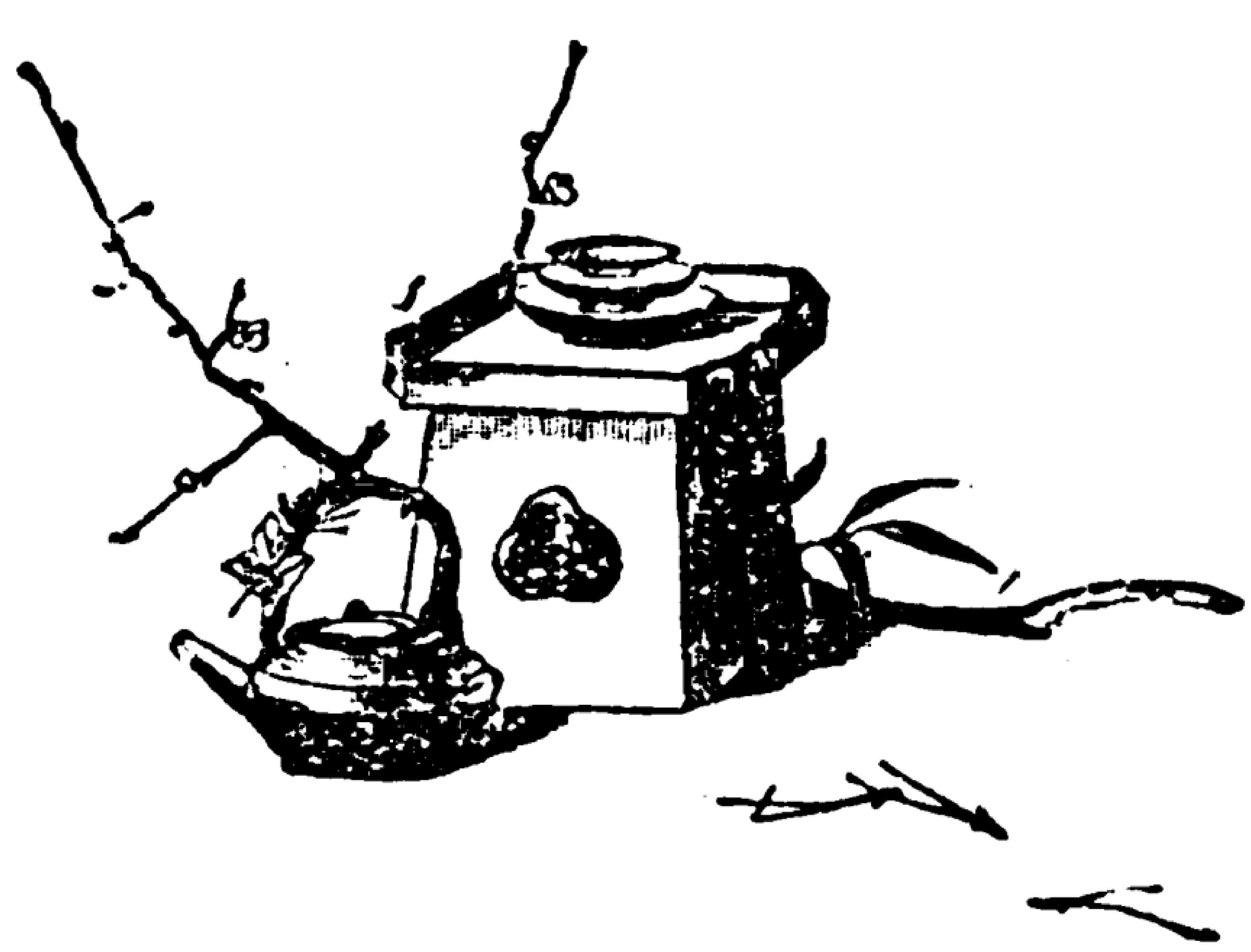
◉**華府會議を中心として漾ふ平和的氣分**　凡べて華府會議のやうな國際的會合の世界の將來に及ぼす効果を考へるには、正式の會議其物の成績の外に其會合を中心として新にどう云ふ雰圍氣が形成されたかを見る事が必要だ。會議の成績其物も世界の進展の上に重大な關係が無いではないが、然し之は固定して居る。それよりも吾々はかゝる成績を擧げしめたもの、從つて更に將來に尙ほ新たなるものを作らんとする其生きた氣分を攫んで見ないと、本統の形勢は分らない。今日のやうな兎も角も輿論の勢力の強い時代に於ては、華府會議のやうなものの仕事は、其處に集つた表向きの全權丈けの仕事と見ては不可い。裏面に之を促し、之を押進める所の大きな輿論の勢力がある。只此勢力は大きな威力ではあるが、會議の實際に仕事は政治家の手によつて爲さるゝ丈け、其處に大きな現實の制限と云ふものが懸つて來る。丁度病氣が癒つたと云つても、久しく床に就いて居つたと云ふ現實に顧慮して、當分のうち粥を食ふと云ふやうな譯であるから、會議の成績其物丈けで將來の形勢を判斷するのは、更に完全に健康を恢復しても、食べ物は粥に限ると云ふやうなものである。斯くして吾々は今度の華府會議の本統の意味を諒解するには、表面の成績ばかりでなく、其裏面に働く所の氣分を熟く視なければならないと考へる。是等の點は尙ほ他日十分に論究せんと欲するが、只一言讀者と共に考へて置き度いのは、世界の人心が著しく平和的世界改造の事業に積極的になつて居ると云ふ點である。昔だつて多くの國際的會合は平和の實現を標榜したものであつた。けれども何となく奥齒に物の挾まつたやうな感なきを得なかつた。丁度政府の勸誘によつて富豪が已むを得ず公共事業に金を出す場合のやうに、名義が立派だから出さぬ譯には行かないが、然し腹は出したくない。少くとも餘り熱心が無い。出來るだけ少額で濟まさうとする所から頻りに他の顏色を伺ふ。一にも二にも他との振り合ひと云ふ事を考へる。金を出すには出しても、もともと熱心が無いから、先き〴〵の事などは餘り考へない。斯う云ふ風だから、結局の成績は擧らなかつたのだ。然るに今度は此點がまるで面目を一新して居るやうに思ふ。即ち仕事の性質を諒解し、是非共之を成功ささうと云ふ熱情があるから、場合によつては他に構はず獨りでもやつて退けようと云ふ意氣込みが

期せずして合致した。之が當業の間に習へるなら、丁度獨りでもやらうと云ふ傭け仕事で、皆んなで熱心になつて出來さうと熱中して居るやうな有樣だ。其割合に華府會議其物の成績には多少遺憾の點は無いではないが、只之を取巻く雰圍氣の中に吾々は非常に力強い積極的な意力の動いて居るを認めざるを得ない。華府會議に對して特に日本の立場と云ふやうな事を考へる時、又別種ないろ／＼の考も浮ぶが、大體論として予輩は其前途に光明を認むるに躊躇しない者である。

○美濃部博士著「日本憲法」其他　先頃友人より其の新刊の著書の寄贈を受くること頻繁にあるが、最近贈られたものゝ中、最も注目すべきものは、美濃部博士の「日本憲法」第一巻と佐々木博士の「日本行政法論」總論とである。美濃部達吉佐々木惣一兩博士の我が公法學界に於て卓抜の地位を占めらるゝは今更贅言を要せぬが、兩氏が圓熟せる學殖を傾けて今や專攻學理の大成を期せらるゝといふ點から見て、兎も角前記の兩者は斯界のオーソリタチーヴのものと謂はねばなるまい。分量から觀ても前者は五百頁を超へて僅に全六編の一編であり、後者は總論だけで既に千頁に近い。之等兩氏と其立場を同うする者と否とに拘らず、今後公法を論ずる者は、爾今必ずや此兩書を引用せない譯には行くまい。此意味に於てもこの方面の學に

志するものゝ必ず一讀を價ふべきものである。私は公法の學問には謂はゞ門外漢であるけれども、多少私の專門に交渉する點もある。此方面からも少し精讀した上他日更に簡單なる評論を試みて其内容の大様なりとも讀者に紹介したいと考へて居る。法律の方面で最近また大に注目すべき著書は、穗積重遠博士の「民法總論」上下二卷と末弘嚴太郎博士の「物權法」上卷とであらう。之は美濃部佐々木兩博士の著の如く浩瀚なるものでは無い。著述の目的も學界のオーソリテーたらしむるに在るのではないやうだ。法律の理窟を分り易く説いて一般民衆の知識たらしめやうといに在るらしいが、此意味に於て此兩書は十分にその目的を達してゐると考へる。而して法律の社會化といふことは、法律の理論を民衆の常識たらしむるといふばかりでなく、更に民衆の常識なり社會の新しい習俗なりに法律其ものを順應せしむるといふ方面もあるものとせば、穗積末弘兩博士の著はこの兩面の目的を共に十二分に達せるものと觀ていゝやうだ。私は私法の方には全く門外漢だから餘り大きい事はいへないが、夫れでも之れ丈はいへる。前記の書の如きは、法律の深遠なる理論に勿論最近の時勢等にも十分に通ずるものでなければ書けぬものだと。果して然らば兩氏の此書の如きは、形は通俗の書の如くにして其實頗る深い新しい理論を背景とするものであると謂はね

ばならぬ。學界のために喜ぶと共に民衆の文庫に一の新しい好資料を增加したといふ點を更に大に喜ぶ所以である。猶序に一言したいのは、今後私は先輩友人の寄贈に係る新著の中、之を讀者に告げて大に益ありと考ふるものを本誌上に於て時々紹介の勞を取ることにした。斯く考へて見ると書きたいものは澤山あるが紙面に乏しきを以て本回は之れ丈けにした。次號以下には段々之に力める積りである。



露西亞現代文豪傑作集

洋裝菊半截判函入美本全六册各編定價金貳圓貳拾錢書留送料金十八錢

昇曙夢譯

東京日本橋通一丁目角　（振替口座東京二一三八　電話本局二四〇四・四一四）　大倉書店發行

第一編　アンドレーエフ傑作集

霧・深淵・獸の呪ひ　霧の中・地下室・我等が生活等是れ凡て作者代表的傑作、日常生活の中に驚異と恐怖と神祕とを求め、或は生の惡夢を歌ひ、戰慄の詩を綴る。作者死して一週年に相當す彼の文勳を傳ふる唯一の紀念は本集あるのみ。

第二編　クープリン　アルツイバーセフ傑作集

生活の河・泥沼・閑人・囈言以上はクープリンの傑作集。妻・戰慄・夜・笑ひ・アリマフエヤ兒の尙附錄として日夜・三命八等を收む、何れも兩文豪の短篇傑作中の白眉、愛の哲學若き戀の惱み等の諸想を捉へ來りて深刻解剖鋭利を極む。

第三編　ザイツェフ　ソログープ傑作集

靜かな曉・客・姉・妻君・狼以上はザイツェフ・かくれんぼ・毒の鬪・白い犬・白いお母樣・死の勝利外附錄として夜の叫び・嫉妬・一刹那・奇蹟等はソログープの傑作を集む內容は何れも醜き生の呪咀と美しき死の讃美とを特色とし巨擘がなる筆蹟はロシヤの靑年男女を惑はせり。

第四編　ゴーリキイ傑作集

零落れた人々・惡魔・退屈まぎれ・どん底等はゴーリキイの代表的傑作を集めたるものにして就中どん底はプロレタリヤ劇として世界に有名なり若し新時代唯一の社會劇として新生に目覺めんとする者の絶好の指針なり。

第五編　チェーホフ傑作集

本編には長編傑作として有名なる『曠野』を收む。南露曠野の美と神祕と傳說と恐怖と憂鬱と魅力とを傳へて其の自然描寫の妙巧を極めし作品なしと言はるゝ一大名編。附錄（露國現代諷刺小說集）と相待つて新春文壇に於ける興味の中心たらん。

第六編　露國現代詩人傑作集

近刊

廣津和郎氏著＝最新刊＝

創作集 二人の女

現文壇に於ける廣津氏の藝術の價値は世既に定評あり。本集に收むる「二人の女」より「寂しき影」に至る創作十篇、悉く氏の深刻にして透徹せる理智と豐麗多彩なる筆致を以て人間心理の秘奥を描きたる物、各篇悉く苦心の大作

四六判上製箱入
全一冊三七〇頁
定價貳圓廿錢
送料廿二錢

宮地嘉六氏著＝最新刊＝

長篇小說 群像

日本のゴールキーと呼ばるゝ宮地氏が苦心半歲にして成れる長篇小說也篇中日本社會黨首領あり花の如き可憐の愛孃と青年革命家の一團あり民衆あり警官あり勞働者あり最も描寫の精致を誇せるは結婚恐怖病的主人公の心理也その透徹せる人生批判深刻にして淸新の表現正に作者の全力的傑作

四六大形上製箱入
全一冊四五〇頁
定價貳圓五十錢
送料廿四錢

宇野浩二氏著＝最新刊＝

創作三篇 苦の世界

奇想妙文を以て現文壇の人氣を獨占せる著者が嘗つて世評の最も高かりし「我る女の境涯」尾上半二の結婚「二青年」の三篇を收めたるもの各篇に現れたる所謂宇野式人物の性格は皆著者の體驗なり。然も其大膽なる告白は精到細緻深刻を究め奔放自在の域に達す「苦の世界」以後の傑作たるを疑はず

四六判上製箱入
全一冊三七〇頁
定價貳圓廿錢
送料廿貳錢

■ 里見弴著 長篇小說 桐畑 全（忽四版） 定價二圓二十錢送料廿二錢

■ 中戸川吉二著 創作集 青春 全（好評再版） 定價二圓二十錢送料廿二錢

■ メーテルリング著 高田文學士譯 永遠の生命 全（好評再版） 定價一圓五拾錢 送料八錢

■ 鈴木啞鈴子著 教訓童話 赤い風船 全（新刊） 定價五十五錢 送料四錢

■ 鈴木啞鈴子著 教訓童話 王女とお友達 全（新刊） 定價五十五錢 送料四錢

■ 鈴木啞鈴子著 教訓童話 森の白猫 全（新刊） 定價五十五錢 送料四錢

■ 鈴木啞鈴子著 教訓童話 はたらき兎 全（新刊） 定價五十五錢 送料四錢

■ 鈴木啞鈴子著 教訓童話 のんきな影法師 全（新刊） 定價五十五錢 送料四錢

■ 文部省 內務省 選定 學資貯金法 全（再版） 定價一圓八十錢送料八錢

東京市神田區表神保町九番地 太陽堂書店 振替東京三一七二五番 電話九段一九四四番

死線を越えて 中巻出づ

太陽を射るもの

賀川豊彦著

待たれたる一書—「死線」の中巻は本日發賣す。前編の賣行は我國空前の盛況を呈した。其後の賀川氏の深い感激は茲に血となり、涙となり、遂に、本書となつた。

彼の戀に對する情熱、愛に對する感激は一層宗教的深刻味を加へ、貧民に對する限りなき愛着には鬼神も泣く、婦女も泣く、本書を手にし感激の涙に咽び泣かぬ者があらうか。

定價貳圓八拾錢
送料十九錢

死線を越えて（前編）貳百五版

定價金參圓
送料拾八錢

東京芝櫻田備前町　改造社　振替東京八四〇二

◇泰西名畫家傳◇

第九編　マネエ

石井柏亭著　（新刊發賣）

代表作三十二葉
中判三百頁函入美本
定價參圓　送料拾貳錢

エヅアール・マネエの長からぬ生涯は守舊派と俗衆とに對する苦闘を以て終始した。而かも彼れが『繪畫の爲めの繪畫』の主張は廣汎なる感化を近代の繪畫に與へたクールベエと共に彼れは實に近代繪畫の父祖であつた。著者石井氏はチユーレエ氏の著書から其傳記を譯すと同時に、別に『マネエの藝術』なる一篇の論文を草して縱横に諸家の言説を評し又自家の創見を述べて居る。今日本に於けるマネエの評傳者として石井氏以上の適任がある可くも思はれない。

第拾編　ドオミエ

足立源一郎著　（新刊發賣）

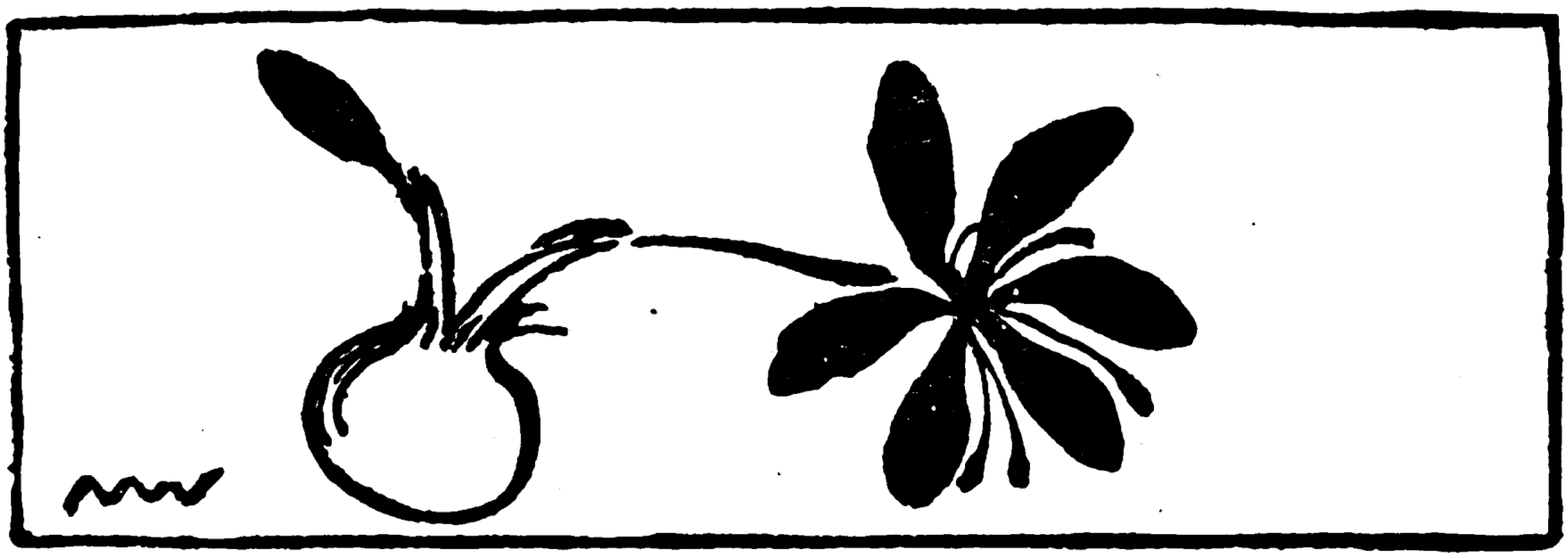
中判二百八十頁美本
代表作三十一葉
定價參圓　送料拾貳錢

バルザツクをして『彼は皮下にミケル・アンジエロを抱き込むでゐる』と驚歎せしめたオノレ・ドオミエは十九世紀フランスに燦然として輝いた藝術革新の曙光である。三十年派の一人としてミレー・ルツソオ・コローなどゝ共に、自然の生々しい本體への復歸に覺醒した畫家である。自由と正義に對する熱情と、彼が生れた南國の光の如き慈愛と淸朗な心によつて、舊巴里を背景として描出された多趣多様な生活の實想、「人類動物（アニマルユマ）」の展觀こそは久遠に變りなき人性本然の姿である。

東京本郷湯島六丁目　日本美術學院　振替東京五八八六

中央公論第卅七年新年號創作

- 小說　或る女の話……野上彌生子
- 小說　寅號金庫……上司小劍
- 小說　監禁……正宗白鳥
- 戲曲　墮落……谷崎潤一郎
- 小說　女の生活……廣津和郎
- 小說　二人の青木愛三郎……宇野浩二
- 小說　續その日暮しをする人……佐藤春夫
- 戲曲　時勢は移る……菊池寛
- 小說　虎から豹へ……長谷川如是閑
- 小說　魚になつた興義……室生犀星
- 戲曲　心ごゝろ……久保田万太郎
- 小說　或る女の死……德田秋聲
- 小說　俊寛……芥川龍之介



或る女の話

野上彌生子

おせんは十五の時にはもう人の妻であつた。春、町の高等小學校を卒業すると間もなく、同じ町の太物屋の二十二になる總領息子と結婚した。丁度日清戰爭の始まる前の年のことであつた。九州の暖い地方では、斯んな話はまだその頃までは決して珍らしくはなかつた。十三でお手玉を取りながら、それで子供に乳を飮ませてゐる友達があつた、と云ふやうなおばあさんたちの昔話こそは、流石に娘たちを笑はすだけであつたけれども、その娘たちだつて高等小學校を出れば、自分たちが土地の若い息子を持つた母親たちからどう注意され、どう評價されるかと云ふことは十分に心得てゐた。彼女たちは春の袷を脫いで白い夏着に變はる時分から皆んな申合せたやうに――中には實際申合せて――肩あげや腰あげを取つた。腰あげの代りにする腰帶を赤いきれでくけた。而して俄かに大人びた肩つきや、くすぐつたく窮屈になつた腰のまはりをおかしがつたり、また、今までの圓い坊主枕と取り代へられた木枕の堅くて寢にくいのをこぼしたりしながら微笑し合つた。この微笑は自分たちがもう決して子供でな

いことを許し合ふ承認であり、おとなしい、善い、而して美しい娘であらうとする誓でもあつた。斯うしてお裁縫を習ふとか、琴三味線を稽古するとか、茶の湯活花などで高々一年一年半の時間を紛らしながら運命が自分たちの上に振り當ててくれる籤を待つと、それが彼女等の唯一の生活であり、希望の全部であつた。たまに百人か二百人に一人位上の學校を志して、彼女等から離れて都會へ出る娘がないこともなかつた。けれどもこの例外の娘は大抵の場合、多くの母親から冷笑で見送られた。――斯んな娘は屹度非常に醜いか、でなければ、あばずれであたつから。美しくておとなしい娘には何んにも附け加へる物はない、と云ふのが町の一般の母親たちの意見であつた。でも娘たちだけは、ちよつと刺戟を受けずにはすまなかつた。高い知識が得られる美ましさよりは、賑やかな珍しい土地を見に行くことの美ましさではあつたが。すると彼女等はめい〳〵の親たちから新たな教訓を貰つた。氣候がよくつて、景色がよくつて、ものが安くつて、お肴がおいしくつて、身のまはりを飾るに不自由しない呉服屋と小間物屋があつて、その上に大阪の千兩役者が來ても恥かしくない劇場を持つてゐる。斯んな結構な住み心地のよい土地がまたとあるものではない。仕方がなければこそ人は出て行くのだ。あんな人は不幸な人たちだと。娘たちはこれ等の言葉に従順に耳を傾けた。さうしてそれを正しい意見だと信じてゐた。親の云ふことであつたから。――彼女等はまだ『我』と云ふ言葉を知らなかつた。知らうとさへしなかつた。斯うして彼女等の眠はまだ何處までも深く、穩かで、その夢は歌麿や春信の娘の夢とあまり違はない夢であつた。

　おせんはその最も代表的な一人であつたと云つてよかつた。けれどもそれは彼女が一番美しい娘だと云ふ意味ではなかつた。容貌だけから云ふなら、まだずつと美しい娘が幾らもあつた。にも拘はらず彼女はどの美しい娘よりも多くの人の注意を――殊に息子によい妻を探し出さうとして常に熱心に娘たちの群を眺めてゐる母親たちの目を引いた程の著し

い或物を持つてゐた。それは彼女が何處から何處までも純粹な女らしさで蔽ひ包まれてゐる點であつた。髪毛のただ一本だけでも、小指の爪一つでも、どうしても女だと云はなければならないやうな優し味と匂に溢れてゐて、それで決して、ませてゐない初々しさの溢れてゐる樣子が獨特であつた。顏は完全な楕圓形をしてゐた。それに色の白いのと、皮膚のこまやかなのとで、眉が少し薄かつたり、目が小さ過ぎたりする缺點を償つてゐた。口は美しかつた。下唇がふつくりとゆたかな弧線を描いてふくれ出てゐるに反して、上唇は赤い色が見えない位薄く引き締まつてゐた。而して上下の唇が左右でくくれ合つて、圓い頰の下部に溶け込んでゐるところに、へらで壓した程の窪が出來て、それにいつも小さい蔭がさしてゐた。それが顏全體を非常に可愛くしてゐた。脊は大柄な方であつた。けれども見た人には小さい感じを與へた。學校の成績は中位で圖畫と裁方にすぐれてゐた。裁縫は下手ではなかつたけれども手がのろかつた。早縫でいつでもおくれて損な點を貰つてゐた。

　太物問屋から結婚の話があつた時も、せめて一年だけでも裁縫に通はしてからにし度いと云ふのが母親の希望であつた。けれども太物問屋の方では裁縫なら貰つた上で幾らでも稽古はさせるからと云つた。急なことで何んにも支度が出來ないと云ふと、ただ身體だけを貰へばよいと云つた。太物問屋は町で指折の金持で、おせんの家とは家の格式が違つてゐた。それにおせんの母親は後妻で、二人の兄と、二人の姉があつて、二人とも姉は近くの商家へ片附いてゐたが、母とは義理ある間柄である上に、父親は亡くなつてゐたので結句母親には何んにも云ふ力がなかつた。それに兄姉たちをはじめ親類の者は誰一人この結婚に反對するものもなかつた。あんな大家からこれほどまでに懇望されることは名譽だと信じられてゐた。それで目出度く話は纏まつたのであつた。假にこの結婚の申込が太物問屋の代りに、その隣の、もつと金の少ない瀬戸物屋からであつたとしても、同じく贊成されたに相違なかつた。長兄はもう結婚して小さい子供まで

あつたし、二番目の兄も結婚するばかりの時期に達してゐたから。――おせんの坐る場所は、誰が見てもその家にはなくなりかけてゐたのであつた。

『兄さんたちは何處であらうと、お前の貰はれるのを待つてゐたのだ。』

母親は不平らしく斯んな言葉を洩らしたこともあつた。やつと咲かせた花を眺めて樂しむ暇もなく奪ひ去られる氣がしたと共に、貰はれたのをよい幸ひにしてゐるこちらの心持を先方に見透かされるのが、娘のために肩身狹く感じられるのであつた。それはそれとして、さすがに、自分の娘がどの娘にも先んじて、人に羨まれる結婚をすることだけは、自慢しないではゐられなかつた。

『まだ丸つきりの子供で仕方がないのですけれども、先樣であゝまで仰しやつて下さるものですから。』

人の前で斯う話す時には、母親の顏は得意で輝いた。殊に、相手が同じ年頃の娘を持つた人であつた場合には一層際立つて見えた。

けれども結婚して、頓て髮を丸髷に直したおせんは、誰が見ても十五の女とは見えなかつた。見かけがさうであつたばかりでなく、することなり云ふことなりがすつかり人妻らしい骨にかなつてゐた。敎へられもしなければ、習つたのでもないのに、おせんは自分の夫をどう愛すべきか、また夫の愛をどう受け入れるべきかを本能的に知つてゐた。彼女には何んにも分らないこともなければ、むつかしいこともなく、すべて自然に出來てゐた。それで善良で、從順であつたから親達からも可愛がられれば、小さい弟妹たちからも親しまれた。

『お前はおれの家へ來てよかつたと思ふかい。』

『よかつたと思ふわ。』

『何故。』
『何故だか分からないけれども。』
『來ない前におれを見たことがあつた。』
『一遍もなかつたわ。』
『それでおれの妻になつて變な氣はしない。』
『變な氣なんかしないわ。誰だつて知らない人のところへ行くのですもの。――』
『おれが浮氣者で、いけない男だつたらどうする。』
『そんな筈はないわ。』
『どうして。』
『それならお母さんや兄さんがお出と云ふわけがありませんもの。』
『のんきだなあ。』
『のんきぢやないわ。私はただ信じてゐるだけだわ。』
『何を。』
『女はどうせ何處かへ行かなければならないのですから、此處へ來たのは私が持つて生れた緣なのだと思つて。』
この信仰もまたその緣と等しく持つて生れたものらしかつた。而して單純なだけ、强い疑心のない動力となつて、十五の妻の全精神を可愛らしく支配してゐた。彼女が一生懸命に夫を愛さうとしてゐるのも、舅と姑に出來るだけ優しくしようとしてゐるのも、小さい弟妹たちと胸を打ちひろげて親まうとしてゐるのも、その一つの信仰に勵まされて動い

てゐるに外ならなかつた。

けれども彼女の幸福は僅かしか續なかつた。その時、全く思ひ及ばない驚くべき事件が起つて、彼女の可愛らしい生活の基礎を根底から覆した。日本と支那が戰爭を始めて、それがために、徵遁れで兵隊に行かないですんでゐたおせんの夫は召集されて、出征すると間もなく戰死を遂げたのであつた。結婚して八ケ月であつた。その時の戰爭は外にも澤山な不幸な人を同じ町に作つたし、夫を亡くしたのはおせんばかりではなかつた。けれども誰よりも氣の毒がられたのはおせんであつた。

「あの若いおかみさんのことを思ふとほんとうに可哀想で。」

近所の年とつた女たちは寄るとさわるとその話をして、自分たちのことのやうに淚を見せた。考へて見ると、星廻りがよくなかつたのだと云つて怖ろしがる人たちもあつた。けれども、これ程彼女に同情は寄せても、この先あの若い未亡人がどうなるだらうかと云ふやうな心配を口にする人は誰もなかつた。彼等から見れば、それは問題にするまでもない餘りに明白なことであつた。太物問屋には兄と二つ違ひの弟があつた。さうして若い未亡人は十分に舅姑たちの氣に入つてゐた。――

その弟は町から二十里ばかり離れた縣廳所在地にある甲種商業學校に入學してゐたが、兄の死と共に呼び戻されたまま再び學校へは歸らされなかつた。彼は制服を脱がされて、兄の殘した前掛をかけさせられ、兄が兵隊に出る日まで坐つてゐた店の帳場格子の中に坐らされた。その他三度の食事の時の居場所でも、兄の場所が今はその儘彼の場所であり、鞄とか、帽子とか、煙草入とか云ふ所有品でも、すべて兄の持物が彼の持物であつた。而して當然の蹈襲として誰もそれを怪しまなかつたと同じ理由で、兄の殘した大事な物を最後にその弟が受けつぐことは、極めて自然だと此町の人人

には信じられてゐた。姉と妹の場合でも同樣であつた。六ケ月たたないで亡くなつた兄の妻が弟の妻に代つたり、姉の夫が妹の夫になつたりしても決して非難は受けなかつた。よい都合になつてお目出度いと祝はれる位で、反抗したり、異議を云つたりする者があれば、その方が却つて我儘者扱ひにされた。

　太物問屋の場合は亡くなつた人の死が尋常でなかつただけ、割合に長く遠慮されてゐた方であつた。それでも一週忌の法會がすむと、いよ〳〵適當な時期が來たと誰からも考へられた。

『おせんや、ちよつと離室まで來ておくれ。』

　或日舅に斯う呼ばれて案內するやうに先に立つた後から部屋へ入つて見ると、舅が改まつた態度で、前に煙草盆を置いて上座に控えてゐた。おせんは今更のやうにわく〳〵した。何が話されようとしてゐるかは、分かり過ぎるほどよくおせんには分かつてゐた。而してまたそれに對して自分がどう返事をしなければならないかも。――夫の死に注いだ涙が漸々に收まりかけた時分から、それに代つて彼女の胸を一杯に充たしたものは、その惱に外ならなかつた。彼女はもとよりこの結婚を望む氣などは毛頭もなかつた。と云つて拒絕する理由も知らなかつた。彼女は純粹な此の町の女で、この町が持つてゐる古い習慣と道德以外に、別な習慣や道德を想像することは出來なかつたから。而してそれに從へばその結婚はすべての人々から當然とされてゐるものであつた。殊に實家の母親が、亡くなつた夫に代られる夫が同じ家にあると云ふ一事のために、悲しみの中にもほつと息をついてゐることは、おせんの從順な決心の重な原因であつた。

『何分とも皆さんのよろしいやうに。』

　これだけの返事を殘しておいて離室を出ると、おせんは自分の居間に駈け込んで、隅の簞笥のかげにうつ伏したまま長い間泣いてゐた。何を悲しんで泣いたのか。夫にすまないと思つたのか。――決してそれは彼女の思考の中に起り得

られない心持であつた。――彼女自身にも恐らく何が悲しいのかは分らなかつたのであらう。

二三日すると太物問屋の大廣間には親類や出入の者が集まつて、内輪の祝ひ酒が汲み交はされた。而してその日を限として、兄の遺物は完全に弟の物となつた。

どんな不自然な仕事でも、完成すれば不思議と自然らしくなるやうに、この新しい夫婦も直ぐその境地にまで行きついた。彼等は仲がよかつた。兄に較べるとずつと快活で、その上旅に出てゐて人づきあひにも馴れ、話も多く持つてゐた弟は、夫としても面白い氣の利いた夫であつた。おせんは不幸ではなかつた。

『亡くなつた兄貴と僕と、どつちがいいかい。』

『いやな人。そんなことを聞くものぢやありません。』

『外の人が聞くのぢやない。僕が聞くのだから構はない。』

『知らないわ。』

『來る前から兄貴が好きだつたのか。』

『顏も知らなかつたのですもの。好きだか好きでないか分る筈はないわ。』

『ぢや僕は。』

『あなただつて分かりはしなかつたわ。』

『今のことを聞いてるのさ。』

『佛樣と較べたりしては勿體ないぢやありませんか。』

一年の日が平和に流れ去つた。おせんは夫しさで夫の深い愛をかち、優しさで年取つた兩親を滿足させてゐたばかり

でなく、こだわりのない、さつぱりした氣性と素直な親切な心で、親類や出入の人たちや、また町の一般の人たちの間にもよい評判を取つてゐた。たゞ一つ不足とせられてゐることは、彼女がいつまでも母にならないことであつた。このことは取りわけ年寄たちを心配させた。姑や實家の母親は鬼子母神樣に願をかけて、神のお惠で若し彼女に子供が授かつたら、毎年十づの柘榴を捧げよう、と云ふやうな誓までも立てた。その他あらゆるお寺やお社に手を廻して取りよせた物を二人して競爭のやうに交る〳〵差出した。夫は笑つたけれども、おせんは疑はなかつた、而して二人の母親の云ふままにおとなしく、妙な紙ぎれや、水や、灰を飮んで厭はなかつた。子供を欲しがる心は誰にも負けはしなかつたから。——けれども、いゝしるしは一向現はれなかつた。若し、太物問屋の長女で、養子を貰つて分家してゐる姉に、小さい男の子が澤山なく、またおせんが今の半分位しか舅や姑の氣に入つてゐなかつたとしたならば、この問題はもつと重大に論議されたかも知れなかつた。この町の結婚は夫の愛のみでは安心出來ない場合がいろ〳〵あつて、殊に子供のないと云ふことはその嫁が餘程年寄たちに好かれてゐない以上、直ぐでも離婚の決定的な理由になるのであつた。

おせんが十八の春のことであつた。夫が風邪を引いて少し長く寢てゐた後でいつまでも咳をした。

『肺病になつたかな。』

冗談ずきな彼が斯んなことを云ふのを聞いて、兩親はいつか本氣に心配し出した。さう云へば顏色も本統でないやうだから、一度よい醫者に見て貰はなければいけないと云つてやかましく云つた。これは縣廳所在地にある縣立病院へ行つて縣に一人しかゐない醫學博士に診察して貰へといふ意味なのであつた。餘り大げさな騷になつたので彼は相手にもしないでゐると、老夫婦はおせんに命令して、お前もついて行くのだと云つてずん〳〵旅支度をさせた。附近には或る有名な溫泉地があるので、若し病氣が大したことでなかつたらば、その溫泉で暫く保養して來るがよい。おせんの身體の

ためにもきつとよいに相違ないから。――斯うまで云ふ年寄たちの言葉を背くわけには行かなかつたので、年が明けると彼は終に出かけることにした。供には小女が一人ついて行つた。けれども彼等は運の惡い時に行き會はせた。當にして待つた院長は、丁度東京で開かれてゐる或る醫學上の集會に列席するために上京した後で、十日もしなければ歸らないと云ふことであつた。それで彼等は計畫を前後して、温泉地の方へ先に行くことにした。幾つかの圓い山を後に負うて、前には瀬戸内海から續いた綺麗な入江を控え、また至るところに、無盡藏に地の下から湧き出る熱い湯を持つたその一廓の土地は、夢のやうな美しさと、お伽話の國のやうな不思議を以つて蔽はれてゐた。或る山の谷合に眞青な沸る海があるかと見れば、或る山の頂にはふつ〳〵と音を立てて、眞赤に煮え返る血の池が口を開いてゐた。池の汀の泥に卵を入れると、魔法使のお婆さんの家の火のない竈に入れられた卵のやうに、瞬く間においしい半熟になつた。おせんには、併しこの温泉は初めてではなかつた。小さい時に二度來たことのあるのを覺えてゐたけれども、その時はほんの湯に入つて町を歩いたり、海岸を散歩したり、名物の竹細工の小籠を買つて貰つたりしただけに過ぎなかつた。それ故に四五日して夫が温泉廻りをしようかと云ひ出した時には珍らしがつた。が、彼の旅行の目的を忘れるほど自分の樂しみに夢中になりはしなかつた。

『もしかお身體に觸るといけませんわ。』

『お前までそんなことを云ふのか。僕は病氣ぢやないよ。』

『とにかく院長さんに一度見て頂いてからのことにしませうよ。』

『馬鹿だね。斯んな時に思ひきつて行かないで、いつまた二人で遊んで歩けると思つてゐるのだ。』

この言葉は若い妻の胸を刺戟して、それに贊成させるに足りる強い力を持つてゐた。實際彼等はこの頃のやうに二人

きりで食事をする生活さへ、今までは殆んど知らないことで、殊に野山を一緒に連れ立つてのんきに遊んで歩くなどは想像も及ばないことであつた。故郷の町にゐる時は、親類に客に呼ばれるとか、神社に參詣するとかで同じ場所をさして行くにしても、別な道を行くとか、時間を違へるとかしなければ行かれなかつた。若し夫と妻が日中連れ立つて歩いたりしようものなら、毛唐人のやうだと云つて町ぢうの評判になつたであらう。

朝小早に支度をして彼等は出かけた。小女は宿屋に殘して、その代りに山の中にある別な湯の宿から、念のために駕籠を出せるやうに用意を頼んで貰ふことに打ち合せておいた。が、おせんは達者に歩いた。羽織も着ないで極く身輕な支度をしてゐる上に、宿屋の娘から借りた紫の脚絆で足を堅めてゐたので、實際何里歩いても困らなささうであつた。お天氣も申分のない日で、風がなく、穩やかに晴れた空は、春に劣らない暖い空氣に充ちてゐた上に、時候だけに遠望を邪魔する霧や霞もなかつたので、目の下に擴がつて行く景色が何處までもかつきりと透き通つて見えた。海の色は殊に美しかつた。而して平日はめつたに姿を現はさない四國の山々が、珍しくその赤褐色の長い腕を遥かの沖にさし伸べてゐたことは、このが日どんなに稀な好天氣であるかを證明するものであつた。二人はこの上もなく滿足した。取りわけおせんは遠足の女生徒のやうに嬉しがつて、最後まで歩いたことを自慢したいために、約束の駕籠を斷つた程であつた。而して小さい流があると、中に置いた一つの飛石をわざと避けて夫と競爭で飛び越えたりして、聲を立てて笑つた。眞實の太陽の下で斯んなことをしてはしやいでゐる妻は、うす暗い商家の奥の間でおとなしく縫物をしてゐたり舅や姑やその他大勢の召使たちの間で、一と言夫に話しかけるのにも控え目にくと心掛けさせられてゐた妻とは、別な妻であつた。おせんの中に、平生は自分自身さへ知らずに隱されてゐた秘密な美しさと別種の可愛らしさが、この機會に大膽に彼女の身體の各部分から溢れ出たのであつた。同時にまたこれは珍しい魅力となつて彼女の夫を新たに引きつけた。

二人が見ようとした溫泉を悉く廻つて宿に歸りついたのは夕方であつた。

『氣がゆせるんだせゐか急に足が動かなくなりましたわ。』

おせんは斯う云つて自分で笑ひながらびつこを引き〳〵長い廊下を自分たちの部屋へ入つた。

『あなたは。草臥やしませんの。』

『大して草臥もしないが。』

『どうかなすつたのぢやありませんか。』

『いや、――久しぶりに遠道をしたせゐだらう。お前は先に湯に入つて來た方がよい。』

彼は床の横の窓にもたれて、足を投出して、少し青い顏をしてゐた。おせんはその樣子が妙に氣になつたけれども、斯んな時に云ふことを聞かないのを彼は不斷から一番いやがつてゐたので、おとなしく手拭をさげて浴室へ下りた。けれども二三度湯を浴びる隙もなかつた。小女はあはただしい足音と共に叫んで廊下を駈けて來た。

『御新造さん――御新造さん――。』

おせんははつとして湯槽から飛び上つた。どうして着物を着たか、どうして三つの階段を駈け上つたか夢中であつた。部屋にころがり込むと夫は先刻の窓にうつ伏してゐた。而して前の疊の上にはまつ赤な血が驚くほど多量に吐き出されてあつた。

それ以來彼は壯健な身體には一度もならなかつた。而して六年間病床で暮らしてゐた間、おせんは誰よりも忠實な看護婦であつた。溫泉廻りなんぞをしなければ――この自責の念がどんな苦勞にも打ち勝たせたのであつた。實際その當座は兩親を初め親類や出入の者やその他町の人々や、あらゆる人たちの目がさう云つて自分を咎めてゐるやうで、――

事實さう云つてゐた人もあつたので——おせんは顏をあげては生きて行かれない氣がしてゐた。あの時いつになく繁しい思をしてはしやいだだけに、餘計にすまないと思はれた。

『何故私がもつと强情を張つて止めなかつたのだらう。』

このことを思ふといつも熱い淚があふれ出るのであつた。併しおせんの淚はただそれだけではすまなかつた。もつと違つた悲しみと苦痛が最後に來た。

死の一年ばかり前から夫は別人のやうに變つてしまつた。彼の身體から若い肉と血を奪ひ取りつつあつた死の吸血鬼は、同時に彼の靈魂からも、あらゆる人間らしい要素を吸ひ取つたかのやうに見えた。あれほど快活で優しかつた夫が非常に陰鬱になり、怒り易くなり、意地悪くなり、怖ろしく嫉妬深くなつた。藥や牛乳の時間が一分遲れても、病人は直ぐ瓶を投げつけたり、器物をひつくり返したりした。而して彼女が自分に對してちつとも誠實でないと云つて口汚く罵つた。

『お前はまた半襟を替へたな。』

襦袢一枚着換へても、彼は目敏く見つけて咎めるのであつた。

『お前は一體この頃はめかしてばかりゐる。おれはこんな病氣で寢てゐるのに何のあてがあればさうめかすのだ。』

反對におせんは老夫婦からは、見舞の人たちの手前もあるからいつでも見苦しくなく、小ぎれいにしてゐよと、云はれてゐるのであつた。おせんが淚を嚙みしめて默つてゐると、病人は一層いら立つて叫んだ。

『何故默つてゐるのだ。お前は何か返事の出來ないやうなことを考へてゐるのか。——馬鹿。』

或時はまた云つた。

『お前はおれが死ぬならさつさと死ねばよいと思つてゐるのだらう。さうすればお前は美人だし、若くはあるし、何處

へでも嫁かれるからな。』

『私はそんなことを考へたことはありません。』

『考へなくたつて分つた話だ。——兄貴が死んでも平氣でおれと結婚したのぢやないか。おれが死ねばまた誰か他の人と平氣に結婚するに極まつてゐる。』

これはおせんには最も悲しい言葉であつた。さうして辯解の方法を知らぬ言葉であつた。彼女はただ泣いた。

彼はまたその内におせんが醫者たちに愛想がよすぎると云つて叱つた。そのうちでも殊に若い醫學士で、手腕と誠實とで人々の信頼を受けてゐる一人の醫者に對して、——その醫者が丁度細君を失くしたと云ふ惡い事情も手傳つて——強い憎みを表はした。

『お前は何故彼奴を見て笑ふのだ。』

この醫者が診察して歸ると彼は必ずとげ／＼しい目をしておせんを詰問した。おせんは笑つたりしたことはなかつた。けれども彼女の持つて生れた女らしさと可愛らしさは、取りわけその美しい目許は、ただ默つてお辭儀を一つしただけでも、他の女には表せはない情趣を漂はすに十分なのであつた。

『一體彼奴は氣に食はない。おれを診察に來るのだか、お前に色目を使ひに來るのだか分らない。彼奴はおれを殺す積りなのだ。而しておれが死んだら早速お前を貰はうと思ひながらおれの脈を取つてゐるに相違ない。惡黨醫者——誰があんな奴に殺されるものか。』

毒が入つてゐると云つて彼は其の醫者の手から來る藥は一切飲まなくなつた。而しておせんに、誰に對してもさうであるが、殊にこの醫者と何か口を利かなければならない場合には、氣取つた聲を出さないで、思ひきり高い調子で話せ

と命令した。彼女はまた彼に疑はれていやな思をするに較べれば、どんな事をさせられてもよいと決心してゐたので、

『卵は矢張り二つづつにいたしませうか。』

とか、

『昨夜はよく眠りました。』

とか云ふ二言三言を、醫者に怪訝な顔をさせる程高い聲で且つ素氣なく云つた。彼はそれでも安心しなかつた。而して終に義理の悪い思をさせて、老夫婦にその醫者を斷らせた。最後にはおせんは髪も引きつめにして押し固めたまま、お白粉は元より剃刀さへ顔に當てることをしなくなつた。着物もなるたけ彼の目を刺戟しないやうな、地味な物ばかりを選んで着た。けれども何としても二十四の女の盛りの輝きを押潰すことは出來なかつた。取りつくろはなければ取りつくろはないほど彼女は尚と美しく見え、悲しみと勞苦はその姿の上に痛ましげな陰影を投げかけて、彼女を一層可憐にした。病人は厚い布團の中から忌々しさうにそれを見た。而して彼のぎら／＼した凄い目は、それがたまに眠で閉される以外は絶えずぢつと彼女の上にのみ据えられてゐた。

『おれは死にかけてゐるのに、お前はだん／＼綺麗になるな。』

彼はよく斯んな皮肉を口に出した。また彼が咳をするので急いで消毒液の入つた壺をさし出すと、彼は冷笑した。

『いやにあはてるね。——ふん、肺病がうつるのがそんなに怖いのか。』

或時はまた突然問ひかけた。

『おせん、お前は今何を考へてゐる。』

『何をつて。』

『正直に云へばいいのだ。おれが呼びかけた瞬間までお前が考へてゐたことを。』
『外に何を考へませう。私はいつだつてただあなたの御病氣が快くなるやうにと思つてゐるだけですわ。』
『嘘をつけ。何故本統のことを云はないのだ。――お前がそんな殊勝なことを思つてゐるかゐないか位のことがおれに分らないと思ふのか。おれはもつと外のことが知りたいのだ。お前が胸の底に隱しておいて決して口に出さないことを手で斷ち摑むやうに知り度いのだ。』
彼は枕許にあつた手巾を實際鷲摑みにして見せて叫んだ。
『人間業ではそれが分らない。聞けば出鱈目を云ふに極まつてゐる。嘘だとは思つても何故嘘だかを證明することが出來ない。おれはそれを思ふと、殘念なのだ。口惜しくてたまらないのだ。口惜しい、口惜しい。』
彼は聲をあげておい〳〵泣いた。この怖ろしい執着は、彼の病氣と比例して進んで行くやうに見えた。而していよ〳〵危險狀態に入つたことが醫者たちから明言された頃には、彼は片時もおせんを傍から離すまいとした。專門の看護婦も今では二人まで來てゐたし、親類からも女たちが代る〳〵見舞つて病床の手は多過ぎる程であつたにも拘はらず、おせんは食事に立つ暇さへ與へられなかつた。事情を飲み込んでゐた年寄たちは　病人の寐息がすや〳〵と靜まるのを見ると、引き立てるやうにしておせんの耳元に囁いた。
『さあ、今のうちに一寸口すましてお出でなさい。幾ら何んでも、それぢやあなたの身體が續かない。』
けれどもおせんがそつと座を立たうとすると不思議に病人はその瞬間目をぱちりと開けて、
『何處へ行くのだ。』
と咎めた。母親が見兼ねて昨夜夜通し起きてゐて、朝御飯さへまだすまないのだから可哀想ではないか、と云ふ意味の

ことを云ふと病人は母親には答へないで、

『おせん、お前は死にかけてゐるおれを見ながら飯が咽喉に通るのか。――食ふならおれの枕許で食つて見ろ。――お前がどんなに旨がつて食ふか、おれが見てやる。』

と云ひながら、恐ろしい形相をして彼女を睨みつけた。

　死ぬ前夜の光景はまた一層物凄いものであつた。丁度十一時頃であつた。彼は突然、

『死にたくない、死にたくない、死にたくない。』

と叫び出すと共に、どうして斯んな力が殘つてゐただらうかと驚くほどの勢で、身悶えしながらはね起きようとした。不意を打たれた看護婦が、あはてて左右から抑へつけると、

『放せ、貴様たちにもう用事はない。おせんはどうした。おせん、おせん。』

　彼の聲は咽喉笛をかき切つた人のやうにぜい〳〵して、息は嵐のやうに荒かつた。而しておせんの手を探り取ると、彼は墓の中までも放すまいとするかのやうにしつかり握りしめたまま續けて呼んだ。

『おせん、おれについて來い。一緒に來い。――おれは死にたくない。』

『ついて行きます。ついて行きます。』

　おせんは斯う答へたかつた。實際彼女の心はさう叫んでゐた。にも拘はらず一つの不可解な、背く物がその口を緘してゐた。――彼女は怖ろしくてたまらなかつたのであつた。

　この恐怖は當分のうち彼女から去らなかつた。一月後に續いた死に泣きくづれてゐる間でも、ふとその瞬間の怖ろしさを思ひ出すと震えた。夫の死はもとより悲しかつた。第一の夫よりも長く馴れて、仲よく暮しただけ、殊に戦死と云

ふやうな呆つ氣ない、噓のやうな死でないだけ、泣いても〳〵盡きない思ひ出でが無數にあつたけれども、その怖ろしさの前には、すべての悲しみも幾らか色を失つた。殊に最後の一年の苦しい惱みを思ふ時、おせんは何となしにほつとした氣のすることを拒めなかつたのであつた。彼女は佛に對してこれはすまないことだと思つた。それでもどうすることも出來なかつた。それ故、

『死んだ者も可哀想だが、おせんも中々辛かつたらう。長い間よく辛抱してくれた。』

と姑から改まつてお禮を云ふやうに話された時には、おせんは胸の底にためてゐた秘密の涙を、初めて思ふ樣流して泣くことが出來た。

百ケ日の法養もすんで、形見分けのことがそれ〳〵に所置されると、後にはおせんをどうするか、と云ふこと以外に、亡くなつた人に關係して殘された事務は何んにもなくなつた。太物問屋には今一度おせんとの結婚を想像させる年頃の人は誰もなかつたので、その町の習慣によると、殊にその未亡人が若くて子供のない場合には、彼女は實家へ歸つて、他の新たな結婚を待受けてもよかつたのであつた。けれども太物問屋ではおせんを手放さうとしなかつたし、おせんも歸らうとはしなかつたので、彼女はその儘その家に留まることになつた。而して老夫婦を相手に、未亡人と云ふよりは年の行つた大きい娘の待遇を受けて暮してゐた。これはのんきな樂しさの點で、彼女の生涯にまたとないよい生活であつた。

けれども三十にもならない女が未亡人の儘で一生を通すと云ふやうなことは、この町の人々には決して考へられないことであつた。老夫婦にしてもそれは十分知つてゐた。それ故おせんには內證であつたけれども、自分たちが一生彼女を引留めておく積りは決してないこと、良緣のあり次第、今度は自分たちの娘として、この家から立派に嫁がせるだら

う、と云ふことが實家へ約束されてゐたのであつた。

三年の後、その優しい年寄たちが彼女に丁度適當な縁先として選んだのは、町から十里ばかり隔つたE――村の村長の家であつた。三十三になる若主人が一年前に妻を失くして後を探してゐた。

『少し田舍で、それだけは可哀想だけれども、子供がゐないのを何よりと思はなければならない。』

この考へ方は誰からも是認せられた。それに村長の家は金持で、息子も評判のよい人であつたから、おせんはその結婚を拒絶する理由はなんにも見出されなかつた。でも彼女自身の心持が率直に云へるなら、おせんは嫁きたくなかつた。二度の經驗は、人間の結婚生活の餘り多くの斷面を彼女に示し過ぎてゐた。彼女には、もう結婚から幸福な生活が――それも長く變りなく續く平安な生活が――來ようとは信じられなかつたのであつた。が、その悲しみの心さへ、一生結婚しまいと誓ふまでの決心には達し得なかつた。女が結婚しないで何をするか。――これは此の町の年寄たちが女に對して持つてゐる唯一の反問であつた。而して此の時代の女たちはその答を知らなかつた。

おせんは二十八の春、約束の通り太物問屋の娘として、贅澤な紋服に飾り立てられて、いつまでも變らない若さと美しさを皆んなから褒めはやされながらE――村へ嫁いで行つた。村長の家にはもう母親はなかつた。而して農家とは云へ、自分の家では作男たちにほんの野菜物を作らせてゐる位なことで、老主人は役場の仕事をし、若い主人はまた近所の村にある畜産場に勤めて自轉車で通ふといふ風であつたから、すべての生活が少しも田舍びたところがなかつた。家も當世風な明るい、間取りのよい建物で、それが後に栗林を負ひ、左に二棟の土藏を控えて小山の上に立つてゐる有様は立派であつた。障子をあけると、菜の花と麥畑が斜面なりに式紙を張つたやうに續いて、ところ〳〵桃の花が擢んで咲いてゐる景色が目に飛び込んだ。これはおせんには珍らしい世界であつた。而してその廣々とした眺めは、うす暗

い商家の座敷や、上方風な作り庭や、倉庫の白壁の間では感ずることの出來なかつた、自由な、のんびりした氣持を彼女に與へた。新鮮な空氣とゆたかな日光の影響も爭はれなかつたであらう。

『斯んなになつては極りが惡くて町へ行かれない。』

とおせんは自分でおかしがるほど太つて身體ぢうつや〳〵した光に包まれ、幾らか青白かつた頰も杏子色になつた。而して花が散り、麥が穗になつて、野山が一齊に新緑に蔽はれる頃には、彼女の灰色の過去も、冬の朽葉と同じやうに、一變した生活の下積の中に沒し去つてゐた。

彼女がいつも坐つてゐる六疊の部屋から眺めると、青葉の中に横に、一筋の茶褐色の縣道が走つてゐるのが見渡された。毎日四時過になるとその道を北から一臺の自轉車が駈けて來て、一つの小さい森で一度その姿を遮られて、それからまた現はれたと思ふと、縣道から左へ細い路に折れ曲つて駈けて來る。――これがおせんの今度の夫であつた。彼は背は低かつたけれども敏捷らしい目つきをした元氣のよい男で、からつとした、思ひきりのよい性格が特長であつた。農學校の生徒であつた時は、大分遊んだと云ふ評判であつたけれども、今は堅くしてゐた。而して平生の無口に似合ず、酒を飲むと非常に面白い人間になつて、歌つたり、おどつたりした。併し惡い酒ではなかつた。

『おかしなもんだな、世の中のことと云ふものは。』

彼は少し醉つて來ると直ぐ斯んな調子で輕く話し出した。

『おれが町へ行つて佐賀屋（これが太物問屋の名前であつた）の前を通る度に、きれいな御新造だなと思つては見てゐたお前が、ひよつこりおれの女房になつたのだからな。全く思ふと變なものだ。』

『私だつてこんな山の中へ來ようなんて夢にも思つたことはありませんでしたわ。』

『これが來たのだからます／＼不思議だあね。だが、いやになつたらいつでもお歸り。その時にはおれの自轉車を貸してやる。あれだと二時間で行けるからな。』

『自轉車には乘れないから、まあ歸らないことにしておきませう。』

一年と五ヶ月の日が過ぎて、おせんは今はもう完全にその村の一人であつた。毎日部屋から眺める山や野や畑や樹木に彼女の目が馴れたと等しく、彼女はその村の土語にも馴れ、食物にも馴れ、風俗と習慣にも馴れて、困らなかつた。村の老人たちの寄合日、縣道と反對の山の背についた舊道に道祖神に洗米を捧げる日、何社のお祭、何院のお講、――これ等に對して村長の家の嫁として彼女がしなければならない所置も、指圖なしに適當に取りまかなつて行けた。知らない顏もなくなつたと共に、それ／＼の人の氣心も飲込めた。けれどもそのうちでどうしても彼女には分らなかつただ一つの事があつた。それは村民の間に持たれてゐる政黨上の烈しい敵對觀念であつた。

E――村はすべてで二百戸に足らぬ小村であつたけれども、林業や養蠶が盛んなために、一般に金があつて、衆議院議員の選擧權を有する者が六七十人あつた。而してそれがJ――黨とS――黨の二つに別れて、政爭の烈しさで知られてゐる九州のその地方でも、殊に核のやうに見られてゐる一區劃であつた。さうなるまでには勿論長い／＼歷史的の理由がいろ／＼あつたのではあるが、現在の狀態は實際奇妙で、知らないものには到底信じられない位であつた。

反對黨の者同士は交際は元よりろくに挨拶もしなかつた。結婚は殊に絕對にしなかつた。平生はぼろにくるまつて蟲のやうに土に埋まり、鍬を動かし、肥料桶をかついでゐる人たちが、政黨上の話となると悉く一かどの政治家となつて激しい議論をした。併し本統を云ふと、彼等の有するその方面の智識は、黨の首領の名前と、同じ派に屬する有名な代議士たちの名前、それからどちらが多數黨か、と云ふ位のことで、自分たちの黨の主義はどうであるか、政見はどうで

あるか、何をしつゝあるか、またどちらの政策が正しいのか、と云ふ點に就いては、一二人を除く外は一切無頓着であつた。と云ふよりは餘りに明白なことであつた。J——黨の人々に取つてはS——黨の云ふこと、なすことが全部最惡であり、外道であり、國賊的であり、S——黨の人々に取つてはまた反對にJ——黨のすることがそれであつたから。

『S——黨の奴が何をぬかすのだ。泥棒奴。』

『もう一度云つて見ろ、J——黨の火放野郎、ぶん擲つてやるぞ。』

小學校の生徒が斯んな言葉で喧嘩をした。いろはも知らない女たちでも、自分たちの黨の首領の名前と、反對黨の惡口だけはよく知つてゐた。

おせんの男の村長はE——村に於けるJ——黨の長老であつた。同時にまた彼は界隈での一番の物知で、志士で、自分では候補者に立つたことはなかつたけれども、候補者に立つほどの者は、彼の援助なしには決して成功しなかつたほど有力な人であつた。彼れは平生は息子よりも尚無口で、靜かで、長い白い顎髯を持つた以外には容貌も身なりもまわりの百姓と何んにも違はない平凡な老人に見えた。けれども話が一度政治上のことになると、彼の眠つたやうな目は急にらん／＼と輝き、顏には血が上り、聲は演說のやうに高くなつて、世上のすべての政治家を罵り、反對黨を呪ひ、自黨の不甲斐なさを憤つた。ただJ——黨の首領のI——伯爵のみはこの老人の崇拜する人であつた。而して彼の部屋の鴨居には、この地方を遊說した時伯爵が彼のために特に揮毫した『一心報國』の額がかかつてゐた。

もし丁度彼と同じ位置にあつて、反對黨に重きをなしてゐる人が同じ村になかつたならば、この村はもつと平和な纏まりのよい土地になつてゐたであらう。その男は地方の大地主で、金も餘計にあり、先代の時代からすでに村長の家とは反對に立つて來た關係から、老人が熱心なJ——黨員であるだけそれだけ、彼はS——黨の烈しい追隨者であつた。

而して村長よりも若く、當世風であつたので、多く青年を味方にしてゐた。E――村の政爭と云つても、要するにこの兩家の對立であり、一方から云へば老人と若い者との離反に外ならかつた。それに悪いのは双方の勢力が互角なことであつた。衆議院議員の選擧の時にはいつも二三票を爭ふ際どい競爭で、殊に現在では六十七人の有權者の内、三十四人がJ――黨員、三十三人がS――黨員と云ふ事情であつたから、彼等の敵對心は窮極に達してゐたのであつた。

おせんはその地主の男と云ふのを初めて見た日のことを後まで忘れなかつた。彼女は同じ村の親類の家からの歸りに、下男代りの作男を伴に連れて畦道を縣道に出ようとして辿つてゐると、左の方から一人の洋服の男が立派な馬に乗つて、埃を蹴立てて驅けて來た。而して彼等の前を通り過ぎる時、その男は鳥打帽の庇の下からじろりと彼女に一瞥を投げて行つた。彼女も彼の變つた出で立に注意を引かれたので、

『あれはどこの人。』

と聞いて見た。すると作男は、

『御新造さんは彼奴を知りなさらんか。――彼奴が、あんた、反對黨の親玉ぢや。』

と答へて、腹立たしさうに馬の後を見送つた。

けれどもその時は彼女が村に嫁いで來て半年にもならない頃であつたから、その作男の顔に浮んだ意味の正しい程度を知ることが出來なかつた。それで晩御飯の時何心なく、

『今日は立派な馬に乗つた人に逢ひました。馬具なんぞぴか〳〵して――』

と話し出すと、隣に坐つてゐた夫が行きなり、

『馬鹿。――馬や馬具が何んで珍らしいのだ。』

と怒鳴つた。おせんは箸を取り落すほどびつくりした。而して夫の顏を振返つた時、其處にあつたものは彼女を震はせた。それは、亡くなつた二度目の夫の病床で彼女が度々脅かされたものに似て、もつと深刻な、敵意に燃えた表情であつた。

併し、老人はただ默つて飯を食べてゐた。

これ程仲の惡い二つの群も、一致して事をしなければならない日が一年に一度廻つて來た。それは村の氏神なる××神社の九月十三日の祭禮であつた。この日だけは敵味方が打揃つて森の社に集り、同じ社殿に酒を汲み交はして平和に別れるのが例であつた。午後になると獅子が廻つた。頭を使ふ人と尾に廻はる人と——それを村では前獅子、後獅子、と云ふ名で呼んでゐた——一頭の獅子の身體の中には二人の若者が入るのであるが、兩派の一日の和睦を意味して、これにも必ず反對黨の者同士が組合はされることになつてゐた。けれどもこの時刻になると、平生の感情に反した形式をもどかしがる氣持と共に、祭酒の醉も十分に廻つて來るので、若者たちはどうにかしてその鬱憤を晴らさうとした。それには獅子がいつもよい機會になるのであつた。神前から出立して笛太鼓の音に乗りながら村の本道を一巡する間だけは、流石に彼等も神妙に舞つた。併しそれがすんで、今度は氏神の祝福を投げかける意味で、

『御祈禱——』

と叫びながら主だつた家々の門口に舞ひ込む段になると、前獅子と後獅子は急に、露骨に各自の本來の姿に返つた。舞ひ込む家がJ——黨の家だと、S——黨の獅子は祝福を投げる代りに默つて獅子の身體の青い幕から外に飛び出した。またS——黨の家に舞ひ込む時には、今度はJ——黨の獅子が脱けた。

村に嫁いで初めてこの祭の獅子を見た時はおせんは寧ろ呆つ氣に取られた。

『まあ、何と云ふ馬鹿々々しいことだらう。』

彼女はこれ以上を考へることは出來なかつた。而してそれは――決して口に出して云つたことはなかつたけれども――村の政爭に對する感情の全部でもあつた。

『でも、どうだつてよい。どうせ私に係り合ひはないことだから。』

彼女はさう信じてゐた。夫に愛されて、年寄に優しくされて、毎日を氣樂に暮らして行ける以上、J――黨もS――黨もあつたものではないと。――けれども彼女はその考がどんなに間違つたものであつたかを悲しむ日が間もなく來た。

議會が解散されて新たな選擧が始まつた。その時の政府はS――黨とJ――黨との聯合內閣の形は取つてゐたが、それは丁度E――村の××神社の一日の和睦と同じくほんの表面的なもので、新たな總選擧には全國のJ――黨の上に強い壓迫が加へられることが前から分つてゐた。而してE――村の屬する選擧區からは、J――黨のA――氏に對抗して、S――黨のB――氏が立つた。

選擧の期日が近づくに從つて豫想されてゐたものは段々、事實に現はれ出した。殊にE――村では平常の事情が事情であつただけに、それは何處よりも露骨に悲劇的に見えた。S――黨の運動員は有權者たちに公然現金を振り蒔いても咎められなかつたに反して、J――黨の者は常に巡査と探偵に取捲かれてゐて、僅かな謝禮の意味を約束することさへ出來なかつた。少し勇敢な運動員はどしどし拘引された。これは彼等を極度に怒らせた。が同時にまた彼等の勇氣を二十倍にさせた。

『一人殘らず引つ張られても屹度A――さんを出して見せるぞ。』

彼等は習つてゐた。

丁度その騒の最中であつた。おせんの舅とその息子に、町で開かれるA――氏の演説會に行くと云つて、四五人の親しいJ――黨の者と連れ立つて、前日から出かけた。けれども、町を夜中に立つて朝早く村に歸つた時の彼等には、出かける時の彼等とは何となしに違つた樣子が見えた。それは殊におせんの夫に著しかつた。彼等は明かに非常に興奮してゐた。而してその場合にいつも彼がするやうに左の肩を聳やかして、肝癪家らしい青い筋を額の端に盛上らせながら、顏ぢうをゆがめてゐた。

親子が家に歸つた時にはおせんは女中と裏の菜園に漬梅の紫蘇を取りに行つてゐて、下男だけがゐた。

『彼奴はこの世界に梅干ほど大事なものはないと思つてゐるのだ。――馬鹿が。』

下男は若主人の權幕に驚いて洗足の水も取らないで裏の方へ駈け出した。老主人はその隙に草鞋を解いて、自分で足を洗つて、默つたまゝ奥の部屋に入つたので、おせんがあはてて菜園から戻つた時には、火のない爐邊に突立つてゐる洋服の夫のみを見た。

『お歸りなさい。――ちつとも知らないで。』

彼女は遠くから機嫌を取るやうに呼びかけた。而して頭の白い手拭を外づしながら土間の草鞋を見ると續けて云つた。

『お父さんはもう奥ですか。――ぢや、お茶でも入れて行きませう。』

『そんなことはいい。』

夫は突つ立つたまま叫んだ。

『それよりかお前が支度をしろ。』

『——』

『これからお前は里へ行くのだ。』

おせんはその時初めて、心から喫驚した。

『どうしたのですか。——里のお母さんでも病いのですか。』

彼女は半分はさうかと思ひ、半分は決してさうではないと思ふことを云つた。

『お前のお母さんのことなぞおれが知るものか。』

『だつて出し抜けに里へ行けなんて、——譯が分らないぢやありませんか。』

『行つて見れば譯は分かり過ぎる程わかる。』

『そんな無理なことを云つて——』

『愚圖々々云ふことはない。おれが行けと云ふのだから行けばいいのだ。』

おせんは火のそれ等の言葉が何を意味するかを思うて震へた。彼女は彼の足許にうつ伏して聲をあげて泣き出した。

その時隣の間から聲が響いた。

『泉三郎、泉三郎。』

老人が息子を呼ぶのであつた。けれども彼は隔ての板戸を開けて此方に來ようとはしなかつたし、息子も行かなかつた。息子は大きな聲を張り上げて板戸越に父に答へた。

『お父さんは默つてゐて下さい。私の女房のことは私が自由に所置をつけます。——私は、お父さんに義理を立てるの、村の人たちに面目ないのと云つて斯んなことを云ふ譯では決してないのですから、その點は誤解しないで下さい。すべ

て私の一存でやることです。何んにも御心配は入りません。』
彼の言葉は宣言書のやうにきつぱりしてゐた。それから、
『三吉、三吉。』
と下男を呼んで、
『お前も支度をしろ。御新造を送つて町に行くのだ。』
と嚴命した。
隣の間からの聲は再びきこえなかつた。おせんは泣いて死んだやうになつてゐる身體を馬車に乘せられて、その日の夕方町の家に歸つた。歸つた時彼女には初めて何もかも分つた。しもたや造の實家はその町のS――黨の本部事務所として借り切られて、物々しく高張提灯のついた軒先には、S――黨候補者B――氏選擧事務所と書いた大きな立看板が出され、テエブルと椅子で模様替をされた店先には、S――黨贔屓の二番目の兄が、一つぱし重要人物らしい顏をして數人の運動員たちと何か高話をして笑つてゐた。
それつきり彼女はE――村に歸ることは出來なかつた。
『選擧さへすんだら。――』
彼女は萬一を頼んだ。けれどもA――氏は落選してJ――黨は悲慘な負方をした。E――村からは養家の太物問屋の方に正式に交渉があつて、着物も道具も、彼女が持つて行つた程の物は悉く送り返された。口實は、日本の離婚に於て絶對の權威を持つてゐる、一つの簡單な言葉であつた。――
『家風に合はないから。』

本統の理由を知つてゐる太物問屋の老夫婦は、心から彼女に同情した。併し彼等にしてもこの言ぐさだけには抗議することが出來ないのであつた。彼等は溜息をついて彼女を慰めた。

『まあ、惡い夢を見たと思つて諦めるより外はない。――その内にはまたどんな緣もあるだらうから。』

けれどもこの言葉はおせんに取つては今は最も怖ろしいものとなつてゐた。彼女は旣に餘りに惡い夢を見過ぎた。

『どんな家から貰はれても、誰が世話をしても、もう決して嫁かない。』

彼女は初めてこの決心に行き着いた。彼女にはもう何の希望もなければ、期待もなかつた。身一つを置かれるだけの部屋の隅と、三度の食事さへ手に入ればどんな辛抱をしてもよい。獨身でゐたい。――

今では太物問屋で再び老夫婦たちと一緒に暮らす譯には行かなかつたので、彼女の欲する物は、當然二人の兄と二人の嫂と六人の子供とそれに一人の六十三になる母親を交へてゐる彼女の生れた家の中に求めなければならなかつた。而してそれがどんなに辛い探し物かと云ふことを知るには半月とはいらなかつた。

長兄は何と云つても彼女には父親代りの人であつたし、その妻も彼女が子供時代に嫁いで來た人で、善くも惡くも馴れてゐたけれども、次兄夫婦はさうは行かなかつた。おせんはこの兄とは性が合はなかつた。それに彼の妻はおせんが最初に嫁いだ太物問屋に負けない町の金持の娘で、里の富と力を賴んで威張つてゐた。次兄はそれを壓へないばかりか却つて甘やかしてゐた。のみならず兄夫婦まで彼女に媚びるやうな態度を見せてゐた。母親さへ

『おつぎさん、おつぎさん。』

と客分の娘に對するやうな呼び方をしてゐた。その他よそへ嫁いでゐて、時折訪ねて來る位ではよく分らなかつた細かい感情や、立ち入つた家の事情がはつきり分かり出すと共に、おせんは自分の下駄一足置く場所もないやうな氣のする

時があつた。

E──村からすべての物が戻されて間もなくであつた。假に藏の中に仕舞はれた荷物の中から、おせんはふだん着や小物類を入れた簞笥を一つだけ納戸に置いておき度いと願つた。

『彼所もちつとどうにか片付けたら、簞笥の今一つ位は置かれなくもなからう。』

一々藏の中まで取りに行くのも大變だから、と母親は贊成した。けれども、其處は六疊しかない板の間で、それに同じく便利を願ふ心から兄たち夫婦の簞笥も一竿づゝは藏から持出してあり、殊に次兄夫婦の簞笥は觀音扉のついた洋服簞笥まで揃つて並べてある上に、子供たちの着物櫃などが亂雜に一緒に置いてあるので、その儘では場所がなかつた。

『それぢや洋服簞笥の上にお櫃を置いて貰ふことにしたらよからう。』と母親は云つた。さうすれば隅の方におせんの簞笥を十分に置けるだけの空間が出來るわけであつた。それで兎に角其處に彼女の簞笥が來たので、おせんは詫びるやうに、次兄の妻に挨拶した。

『姉さんのところが少し窮屈になつてお氣の毒ですね。』

『構ひません。』

おつぎは一言さう云つただけであつた。翌の日になると、次兄がめつたに男の用事のないその納戸に顏を出した。而して其處で自分の簞笥の前に坐つて抽斗の整理をしてゐるおせんを見ると、冷淡に聞いた。

『この簞笥は誰のだ。』

『誰のつて、私の簞笥ぢやありませんか。』

『お前の簞笥をまた何んだつて斯んなところへ持出したのだ。それでなくつても狹くつて仕方がないのに。』

『――。』

『一體お前は自分の現在の位置を考へないで、何んでも外の者と同じにする氣だからいけない。一町も二町もあるところぢやなし、着物位藏まで出しに行つたつていいぢやないか。そんな量見だから、離緣されるやうなことにもなるのだ。』

彼が云ひたいだけのことをつけ〲云つて出て行くと、引き違へに店の小僧が二人で入つて來た。而して彼等は昨日命ぜられて藏からかついで來たばかりの簞笥を、また二人で平氣に藏へかついで行つた。兄も嫂もそれを見てゐた。けれど何んとも云はなかつた。母親さへ怒らうとはしなかつた。彼女はただ

『私が兄さんたちに相談して見なかつたのが惡かつたのだ。』

と云つて自分を責めただけであつた。おつぎはまた一層知らん顏をしてすましてゐた。而して簞笥が納戶から出てしまふと、早速その後に入つて、がたぴし云はせて子供達の着物櫃を元の通りの位置に直しながら、家が狹くて、古くていやだ、と云ふいつもの不平を長くぶつ〲云つてゐた。

惡いのは、彼女とおせんがあんまり年が違はないのに、彼女には子供が四人もあつてずつとふけて見えるのに對して、おせんがいつまでも若くて、美しいことであつた。彼女とても決して美しくない女ではなかつただけ、一層惡かつた。

『あなたはお綺麗だから。』

と云ふのがおせんに向つてのおつぎの唯一の挨拶なのであつた。而しておせんが家に歸つてから彼女は目に見えて着物のよいのを着たり、髮をしよつちう結ひ變へたりした。それかと思ふと急にぱつたりお洒落を止めて、なりもふりも構はない樣子をして、そこいら中を掃き出し、拭き掃除をして、目まぐるしく働いた。赤ん坊が乳を欲しがつて泣いたり、

小さい子供が袖にからみついたりすると、
『あゝあ、お前たちからそんなにせがまれてはお母さんは何んにも出來やしない。本統に、こんな思ひをする位なら、誰か見たいに離縁されたつて獨り身の方が餘程氣樂だ。』
と云ひながら、赤ん坊をわざと泣かせておいたり、小さい子供を邪見に叱りつけたり、打つたりした。このヒステリイは少くとも一と月に一度はきつと廻つて來た。而してその發作が續く五六日間は兄夫婦は居候のやうに家の隅に縮こまつてゐた。母親とおせんは大概藏の中に逃げた。次兄は一二日は機嫌を取つてやつてゐるが、三日目位からは今度は二人で喧嘩をはじめて、怒つて毎日朝から外へ飛び出して夜は遲くでなければ歸らなかつた。このことがまた一層妻の發作を狂暴にした。彼女は本統の氣狂のやうに振舞つた。子供たちさへ母親を怖れた。女中でも子守でも傍に寄ることが出來なかつた。而して家内ぢうが喪に籠つたやうにひつそりと鳴りを靜めてゐる内に、彼女のきい／＼した怒の聲と小さい子供の叫び聲と赤ん坊の泣聲が、悲しいトリオを成して一日ぢう續いた。
おせんは藏の中で、高い金網窓から落ちて來る僅かな白い光線を頼りに、母親と二人で解き物などをいぢりながらそつと聞いて見た。
『お母さん、姉さんは以前から毎月あゝだつたのですか。』
『怒つて寢込む位なことは、それは毎月だつたのだけれども、この頃のやうなことはありはしなかつた。』
『私の歸つてゐるのが氣にいらないのですね。』
母親は返事の代りに默つて涙を拭いた。
『兄さんたちは島屋（おつぎの實家）に大分世話になることがあるのでせうか。』

こんな話を母親から聞いた後であつたから、その島屋を通じて新たな結婚の話が持ち上つた時に、おせんは非常に困つた。それも相手は五十を過ぎた人で、子供も四人あり、長男にはもう嫁が來てゐると云ふ事情であつた。ただ金だけには不自由のない家であつた。而してもしおせんがその結婚を承知するならば、萬一の場合に後で困らないだけの財產をおせんの名前にして置くと云ふことが、可なり威張つた態度で附け加へられて來た。人々が何よりも有利な條件として彼女に話して聞かせることもそれであつた。けれどもそれが却つておせんの女らしい純粹な心を傷つけることになつたとは氣がつかなかつた。おせんは、年寄の妻となることも、子供の多いのも、自分のやうな不幸な女に取つては仕方のない運命であるかも知れない。若しそれが最後の運命であるならば、悅んで行くであらう、と彼女は考へた。けれども、金で買はれるやうな目にだけは逢ひ度くない。少くとも町の人たちからさう疑はれるやうな結婚だけはしたくない。それならばもう結婚ではなくつて、妾奉公をするやうなものだ。廓に身を捨てる女と何んにも變りはなくなるのだ。――極度の素直さ、優しさと共に、妙に生一本な突き詰めた心を持つてゐるおせんは、一圖に斯う思ひ込んだ。而してこの思は彼女の胸の中だけでは、自分がこれまで二遍夫を變へたことや、或はまたこれから十遍結婚するかも知れないこととは決して衝突も矛盾もない、獨立した、美しい、まつ直な、溢れる、情熱であつた。何故なれば、彼女は誰と何遍結婚しようとも、またその結婚がどんな事情からであらうとも、結婚した以上は全身を捧げて夫を愛して來たから。――その人の最も誠實な妻であり、最も善良な妻であり、最も貞節な妻であらうと心がけて來たから。――今後とても屹度それを續けて行くであらうから。――

彼女はもう十五ではなかつたので、きつぱりとその結婚を拒絕することが出來た。その代りおつぎに對する義理と一

ても、その儘家にゐることはいけないと思ふから女中奉公に出して貰ひ度いと云ひ出した時には、人々は頭い驚と共にそれに劣らぬ反感を抱かれた。殊に次兄は前後の關係からそれを最も露骨に表はした一人であつた。

『お前見たいな女で、他人の家の臺所に三日働けたらおれが首をやつてもよい。』

彼は嘲笑した。

『そんな氣紛れを云はないで、人が貰つてくれると云ふなら有難いと思つて嫁くものだ。我儘を云つてゐるうちに、お婆さんになつて泣く時の來るのが分らないのか。』

けれどもおせんが決心を變へなかつたので、結句その意志は入れられた。――結婚だらうが奉公だらうが、家の者に取つては、彼女が再び家からゐなくなる點に違ひはなかつたから。

彼女の當にしてゐた場所は、縣廳の所在地にある大きな會社の社長の家であつた。夫人が病身で家事が取れないので女中頭といふ意味で家内向一般の取締を賴める中年の女を欲しがつてゐると聞いて、おせんはその地位が自分に得られるやうに、内々で手を廻してゐたのであつた。世話人は、同じ家に妹を小間使に出してゐる彼女の賴みつけの女髮結であつた。

『旦那樣も奥樣も物の分つたお優しい方ださうですから、斯うしてお家にゐらつしやるに比べれば、却つて氣だけはお樂かも知れませんよ。』

とその女は云つた。

おせんの僅かな一つの希望もそれに外ならなかつた。それで、

『どんな辛抱でもしよう。』

と決心してゐた。彼女は手足を棒の樣にして働く氣で出かけたのであつた。けれども不幸は何處までも追つかけて來た。それほど打ちはまつて行つた家にも、おせんは一と月半しかゐることは出來なかつた。

あの女髮結の言葉は嘘だつたのであらうか。——決して、嘘ではなかつた。少くとも最初は。夫人は彼女が意外に若くて美しかつたのを見て幾らかそれを氣にしたやうであつたが、おせんの誠實は容易にその不安を一掃した。而して期待以上のよい女中頭として氣に入られもし、可愛がられてもゐた。けれどもその内におせんを可愛がらうとするものが夫人のみではなくなり出すと共に、夫人の態度も直ぐと變つて來た。彼女は銳い目を夫から離さなくなつた。而して夫が女中頭に優しくすればするほど、自分は反對に冷淡にあしらひ出した。おせんは段々居辛くなつたが辛抱した。すると主人はます〳〵彼女を愛さうとした。夫人は終に露骨に憎み出した。それでもなほおせんは辛抱した。——この地位を捨ててまた何處に行くのか、と思ふとどんな苦痛に對しても新たな勇氣が出るのであつた。併しその苦痛が恐怖に變つた時には終に忍びきれなかつた。

六月の暑い一夜、夫人が外出してゐたことがあつた。その晩おせんは終に浴衣一枚でその家を飛び出した。而して夢中で港口の船着場に驅けて行つて、故鄕の町までの切符を買ふと明けの日の朝は、決して歸るまいと思つて出た家に再び歸つてゐた。

彼女は何を聞かれても默つてゐた。けれども直ぐ悟られてしまつた。

『若い女が獨り身で旅をほつつき歩いてゐれば、男から馬鹿にされるのは當り前だ。』

次兄は口に出して云つた。

『お前は親兄弟に恥をかかせて見た上でなければ、ものの道理が分らないのだから始末に惡い。』

誤解されてゐるのだ、と思ふとおせんは腹立たしさに燃えて叫んだ。

『兄さん。私を信じて下さい。もし私があなた方の恥になるやうな目に逢はされたのなら、歸らないで死んでゐます。』

併しどちらにしても、彼女がいつまでも獨身でゐるのがすべての間違のもとだと云ふことに人々の意見は一致した。而してまたそれは、この次に申込まれた結婚に對して選擇の權利を彼女自身から悉く奪ふものであつた。

その頃、海岸の近くで、町の金持の控邸や隱居所などの並んでゐる靜かな通に、一軒の別莊を借りて一年前から住まつてゐる中年の畫家があつた。町の者は彼が何處の生れの人であるかよくも知らなかつたけれども、また氣にもしなかつた。畫家とか書家とか云ふものは、彼等に云はすれば、昔から旅の者と極まつてゐたから。而してさう云ふ種類の人々はその人が非常に下手であるか、または非常に貧乏であるかでさへなければ、尊敬された。町の人々は四分の三以上商人であつて、彼等では帳面をつけるか、そろばんを彈くかより外には使ふことの出來ないその同じ手で、その旅人たちは美しい山水や花鳥を描いたり、大きな立派な字を書いたりすることが出來たから。而してまたそれは自分たちが儲けた金で家を建て直したり、別莊を拵へたりする場合にはなくてならぬ物で、さう云ふ人たちが一二人づつ町に滯在してゐることは、銀行や中學校や郡役所や劇場が必要であると同樣に、彼等の日常生活に必要なことであつたから。けれども旅人に對しては一般にさうである通りに、彼等は中々氣を許さなかつた。彼等からすつかり氣を許されて、本統の町の一人のやうに交際されることは、畫家でも書家でも非常に稀であつた。それ故、その中年の旅の畫家がおせんを貰ひたいと云ひ出した時に、直ぐ世話をする人が現はれてその話が事實になつたことは、その畫家が町の人々の間に持つてゐる信用の程度を知る證據にもなるのであつた。

その畫家は上品な容貌をした男で、本統の方よりもその落ちついた態度や、金放れのよい交際ぶりで町の人々を引きつ

九州の南畫に特別の興味を持つてゐるので、來たのだが、土地が意外に氣に入つたから半永久的に住む決心をして、それで結婚をするのだと云つた。これは町の人々が自分たちの故郷に就いて持つてゐる誇を十分滿足させるものであつた。彼の評判はますく\よくなつた。而して彼の故郷が紀州の和歌山であることが知れ渡つた時には、『もしかしたら、芝居の中によくあるやうに、紀州樣の御落胤と云ふやうな人かも知れませんね。普通の人にしては餘り立派すぎる。』

と云ふ風な大膽な憶測を發表するお婆さんまで出て來た。それだけははつきり分らなかつたけれども、彼の父母兄弟の全部が列席するには九州の結婚は和歌山からは餘り遠過ぎたことだけは事實であつた。それでおせんとの結婚の時には、彼の叔父夫婦だと云ふ男女が來たのみであつた。

おせんは今度は御新造さんではなくなつて、初めて

『奥さん。』

と呼ばれる位置になつた。この變化は姿をも變へてしまつた。それに夫の畫家は自分ではちつとも着物などを構はなかつた癖に、彼女だけには思ひきつたなりをさせたので、これまではよそ行きにしかしなかつたやうな着物をふだん着にして、黒ちりめんの羽織位は常に着てゐた。而していつも大きな丸髷に結つて水淺葱色の手絡をかけてゐるおせんは、以前の町女房姿のおせんや、手拭ばかりかぶつてゐた田舍御新造のおせんとは、全然別な美しさに作り替へられたおせんで、この上もない上品さと、淑やかさと、それで妙にあだめいた優美さの不思議な混合物に見えた。でもそれ以上に不思議なことは、これまでの三度の結婚も、その悉くの不幸も、彼女の肉體の上には爪で押したほどの痕をも殘さない、

とであつた。その點で彼女は月であつた。何遍缺けたやうに見えても暫く立つと再び完全な形と輝きを取戻して、新鮮な、初々しい、處女に返へるのであつた。而してまたこの更新は肉體と同じやうに精神の上にも極く自然に行はれたので、おせんは過去のために不當な苦しみをすることは決してなかつた。もしどうかした工合で彼女がその稀な場合に出逢ふと、日本の女性の後に昔から辛抱強く立つてゐる「諦め」が直ぐと救ひに現はれた。

『すんだことはすんだことなのだから。』

その上、この守護神から數々の慰めの言葉と優しい奬勵で勇氣づけられて現實へ押戻される時には、彼女は再び新たな生活の希望に燃えて、何人でも愛することが出來るのであつた。

彼女の愛は倍にもして返された上に、畫家の酬ゐ方は獨特であつた。彼女は女がそんな風に愛され得るものだとは今まで知らなかつた。知らなかつたと云へば、彼女は人間の本統の樂しみはまだ何んにも知らないで今まで來たのだと思つた。これまでの生活は、彼女の現在の生活に比べれば生活ではなかつた。自分は今こそ初めて結婚したのだと云ふ氣が何よりも強くした。人の家に奉公してまで、この手足をまつ黑にしてまで、獨り身でゐようと考へた半年前の自分を振り返ると、餘りに可哀想に見えた。

『私は本統に馬鹿でしたわねえ。』

『何故。』

『だつてあのままずつと奉公してゐればあなたは誰か他の人を貰つてゐたかも知れないのですもの。考へると危かつたと思ひますわ。』

『おれはまたお前は奉公をしてゐて、おれは誰か他の女を貰つたのだとよかつたと思つてゐるところだ。』

「私がいつそんな所まで旅になんて」

「反對だ。」

「――」

「お前が餘り可愛くなりすぎて困るのだ。」

その言葉がどんな深い意味を持つてゐたかは、その頃のおせんにはまだ分らなかつた。彼女はたゞ當面の生活に醉うて、他のことは何んにも考へようとはしなかつたし、夫の顏より他のものに目をやらうともしなかつた。それ故夫の故鄕だと云ふ和歌山から便りらしい便り一つないことも、結婚の時に伯父夫婦だと云つて列席した男女が、割合に年若かつたことも、またその人たちが本國の和歌山にはゐないで、反對の方角の長崎に住まつてゐたことも、大して氣にはかからなかつた。その內に、たゞ一つ彼女の注意を引くと同時に非常に彼女をいやがらしたことがあつた。それは夫がよく旅行をすることであつた。多い時には月に三四度も出かけた。少い時でも一度出ないことはなかつた。これは併し彼が結婚以前から持つてゐた習慣で、

「今度は××寺に一と月ばかりゐて竹田の模寫をうんとやつて來る積りです。」

と云ふやうな話をして、飯焚の婆やを一人殘したまま長い間留守になる彼を町の人たちはよく知つてゐた。而して彼等はこれを是認してゐた。彼の職業では旅行は一つの研究であつたから。同じ意味から或る時熊本附近を普通の縣道には依らないで、昔の道の、それも今では猿か鹿より外には通らなくなつてゐる間道傳ひに、彼が變な風をして歸つてゐたと云ふ風子の話が傳はつても町の人たちはたゞ笑つたきりであつた。

「詩家なんてものは風雅人だから、ちよつと景色でもよいところだと、どんな山の中でもうろつくのだ。」

妻だけは、でも、そんな人たちと同じ態度で彼の旅行を見ることが出來なかつたのは無理ではなかつた。

『私には里にも行かせないやうにしてゐる癖に、あなたは何かと云へば旅行ばかりなさる。』

彼がおせんの外出を日頃悦ばないのは事實であつた。どうしても出なければならない時には、家にゐる時とはまるで違つたやうな質素な身なりをさせた。多く夜行かせた。

『我家より里の方がよかつたら、いつでも行くがよい。』

『あなたさへゐらつしやれば誰が何處へ行きたいものですか。』

畫家は默つて、何か考へるやうな様子をして妻の顔を見てゐた。

『今度は私も一緒に連れていらして下さい。』

彼女は時によると子供のやうにせがんだ。

『汚ない寺の中にくすぶつてゐたり、嶮しい山へ寫生に行つたりするのに、女がついて行つてどうするつもりだ。』

『構ひませんわ、何處だつて。あなたのいらつしやるとこなら、どんな難儀をしてもついて行つて見せます。』

けれども彼は決して連れて行くとは云はなかつた。その代りそんな時にはいつもよりも一層優しい言葉で話し、一層強く抱いて別れて行つた。

再び彼が歸つて來る三四日、もしくば七八日の間は、おせんに取つては段々怖ろしいものとなつた。彼が今は自分の傍にはゐないのだと云ふ思ひは彼女を強く惱ました。殊に寺に留つてゐることは分つてゐても、その間彼が本統に僧侶と同じ生活をするかどうかは分らなかつたので、これまでの何度の結婚にも知られなくつて、たゞ彼からのみ知り得たもの、而して自分のみが知り得るものでなければならないものと、斯うやつて別れてゐる間に[illegible]

ないか、と云ふ疑ひに脅かされ出すと、おせんは夜もおち〳〵眠られない思ひをして彼の歸りを待つた。

丁度さう云ふ一夜のことであつた。床に入つてもいつまでも目がさえて、身内の熱くなるのを感じながら、寢返りばかりしてゐると、どこかでかすかに戸を叩く音が耳に入つた。――氣をつけて聞くとうちの裏口らしかつた。

『婆や、婆や。』

耳が遠くつて、その上宵から若い者と同じによく寢込まれるのを自慢にしてゐる婆やは返事をしなかつた。おせんは怖ろしかつたけれども、もしやと云ふ氣に勵まされて、一人で起きて戸を開けた。黑いものが飛び込んで來た。矢張り夫であつた。

まあ、今時分に――喫驚するぢやありませんか。』

『急にお前の顏が見度くなつたから山越をして歸つて來たのだ。』

この言葉はおせんを夢中にさせた。それで彼がいつも歸つて來た時ほど快活でないことや、顏の色も靑く目つきに淒味の見えることにも深く注意は引かれなかつた。それでも彼がすつかり百姓のなりをして、笠までかぶつて歸つたことだけは見遁がされる譯に行かなかつた。おせんが聞くと、

『山に行く時はいつでもこれさ。』

と彼は無造作に答へた。その後から今度は彼の方が聞いた。

『どうだ、本物の百姓に見えたかね。』

おせんがおかしがつて笑つてゐると、彼はしつこく、冗談ばかりでもないやうな調子で尙ほそれを聞いた。

『おい、何んとか云はないか。人が聞いてゐるのに。』

『あんな華奢な、色の白い百姓は九州には一人もゐませんわ。』

彼はふと默つて、長い睫毛の目をまたたいた。

彼がふだんとは變つてゐることが、おせんには段々と分つて來た。

『まだお眠らないの。』

『うむ。』

彼は向むきにしてゐた頭をくるりとこちらへ向けた。二人は顔を合せた。

『あなたは今夜はどうかなさつてるのね。』

彼は鼻の先に横になつた妻の顔をぢつと見詰めて一分間默つてゐた後で云つた。

『おせん。お前はおれがついて來いと云へば何處へでもついて來られるか。』

『あなたはお國にお歸りになるお積りなのね。』

彼はまた默つた。屹度さうなのだと思ひ込むと、おせんの目には涙が湧いた。彼と一緒ならば故郷を去ること位何んでもなかつた。ただ母のことを思ふと流石に悲しかつたのである。

『今日明日のことぢやないのだから、今から餘計な心配はしなくもよい。しかし人間は幾ら別れ度くなくつても、いつ別れる時が來るか知れないのだから、いつでもそれだけの覺悟はしてゐなければいけない。』

彼はおせんの母親のことを云つてゐるのか、又自分に關することを云つてゐるのか、はつきり分らないことを、わざとはつきりさせないままで續けた。おせんの心はまたそれを質す勇氣を持たなかつた程打ちひしがれてゐた。彼女は泣きながら怒つた。

『あなたはなんだって私に[illegible]
に。』

彼は返事の代りに突然激しい力で彼女を抱いた。而して、おせんはもう何んにも思はうとも、知らうともしなかつた。それ故朝起きて見て、傍に寢てゐた筈の彼の姿が見えなかつた時も、いつどうして居なくなつたのか、また何處へ行つたのかも少しも分らなかつた。殊に布團の下から現れた多額の紙幣の束に就いては、ただ驚きのみであつた。

半月の後、長崎の一軒の呉服屋を根城にして、京阪地方から、中國、北九州の諸方を荒らし廻つてゐた三人組の大泥棒が神戸で捕まつた。大阪の新聞の三面がその記事で賑はつてゐる時、その泥棒の一人が突然その町から消え去つた畫家によく似てゐると云ふことで町ぢうが盛んな評判をした。またそれに反對する人々は、彼が下の關と別府に家を持つて、女も置いてあるといふことは記事に出てゐるけれども、彼等の町のことや、おせんとの結婚のことや、また彼が一面畫家であつたと云ふやうなことは少しも書かれてゐないから、彼とは別人だと云つて爭つた。おせんの言葉はそれを強く證明した。

『あの人は、和歌山の家をついでゐる兄が急病でなくなつたと云ふ知らせが來たので、旅行先からその儘國へ行つたのですから、今に歸つて來ます。』

彼女は里の母親や兄たちにまでさう云つた。けれども一人になると泣いてばかりゐた。言葉で否定される迄りに、若しその怖ろしい事實がおせんの心の中でも本統に否定され得るものであつたら――決してそれは出來なかつた。一年ばかりの間に彼女が見たり聞いたりしたものは、――また二人でゐる樂しみの中に紛らされながら、何となしに氣になつたり、分らなかつたりしたものは、今新聞紙上の泥棒の顏を彼の顏だと極めることで、初めて解釋のつくことのみであ

つた。けれども自分が恐ろしい泥棒の妻であつたと云ふ嘆や、それを本統に町の人たちに知られることの恥しさや、またそのことを既に信じてゐるらしい人々の嘲も、彼がもう再び戻つては來ないのだと思ふ悲しみに比べればまだしも忍び易かつた。おせんの流す涙は純粋な思慕の涙であつた。彼女は自分を偽つた夫を恨まうとさへしなかつた。却つて今になつてどんなに根深く自分が彼を愛してゐたかを知ると共に、自分に對する彼の愛をも一層はつきりと確かめたやうに感じられたのであつた。何度頼んでも入籍の手續を曖昧にしたことや、また今度神戸の警察で一切を白状した時、この町に交渉のある行動だけは最後まで完全に秘密にしたその心づかひは誰のためであつたであらう。——

おせんは一と目でもよいからもう一度彼に逢ひ度いとのみ思つた。失踪の夜突然現れて彼女を驚かしたやうに、いつか不意にそつと忍んで逢ひに歸つて來てくれさうに思はれた。彼女は幾夜も無駄に遲くまで起てゐたり、夜中に目を覺まして、耳を立てたりして見た。

その年はおせんに取つては最も不幸の重なつた年であつた。講家の失踪の後間もなく母が亡くなつた。のみならずそれから三月も置かないで太物問屋の老婆がなくなつた。斯うしておせんは次から次と一年ぢう恐ろしい夢を見續けて、漸く我に返つてあたりを見廻す餘裕を取り戻した時には、今度はもう兄の家には完全に坐り場所がなくなつてをり、その上町の片隅にさへ自分の身を置くところは見出されないことが分つた。——頓て歸つて來ると明言した夫が歸らないとあれば彼女はいよ〳〵泥棒の妻であるし、でなくとも、旅の男から見捨てられた哀れな女であつたから。

もし母親がまだ無事にしてゐたならば、年寄の便りない心を慰める役目の唯一人として、おせんはどんな嘲の中にも住んで行けた女であつた。でも、その鎖は今は絶たれてゐた。またそのことは別としても、今一つおせんを搖り動かして、今までの生活を變へさせないでは置くまいとする一つの秘密があつた。それは夫が布團の下に敷き殘して行つた金

であつた。その金がどんな金であるかと云ふことは、おせんには今はもう分かり過ぎるほど分つてゐた。けれども彼女が兄の家に歸らないで今まで通り一人別れて住まうとすれば、その金以外に何がそれをさせ得るものがあらう。おせんの苦しみは此處にあつた。

彼女が思ひきつて故郷を去つたのは、母のも第二の母のも、二つながら一週忌のまだすまぬうちであつた。何處までも彼女に好意を持たうとした人々は、彼女は矢張り和歌山に歸つてゐる舊家から呼び寄せられて、その土地に行つたのだと云つてゐた。二三年もすると、大阪の大きな旅館で奉公をしてゐるおせんを或る人が見たと云ふやうな噂が立つた。それからまたその後では、旅館の神さんが亡くなつたので、人あしらひのよいおせんはその後に直されて、今では立派な身の上になつてゐると云ふ話が傳つた。

『唐物屋の旦那が仕入に上つた時に、逢つて昔話をして來たつて云ひますから、乾度本統のことでせうよ。』

『まあさうですか。さう云へばもうあの方が町を出てから、かれこれ七八年にもなりませうかねえ。』

『來年で丁度九年目ですわ。でもちつとも變つてゐませんてね。』

『あんな人も珍しうござんすね。若い時から色んな苦勞をした人ですけれども――』

『さうですとも。それでどんな不仕合せな目に逢つても、その後ではまた不思議と運が開けるのですから妙ですわ。』

町の家に片附いて、三四人の子供を持つて、夫にも死別れず、離縁されるほどの葛藤にも逢はず、平穩に一生を過さうとしてゐる彼女の古い女友達は、おせんの話が出る度に、乾度斯んな風に話した。

噂は嘘ではなかつた。この世では決してもう現はれないであらうと信ぜられた幸福が、その頃また不思議に彼女の上に廻つて來てゐたのであつた。おせんは今は客扱ひの丁寧な、而して何んでもよく物に氣のつくお神さんとして、行儀

の大きな旅館を手一つで支配する身分であつた。家つきの娘を妻にして長い間その我儘に悩まされて來た經驗を持つて年から云つてもおせんとは二十も違つてゐた老主人は、二度目の妻と云ふよりは娘のやうな愛し方で彼女に對してゐた。おせんはまた丁度それに似合しい態度でその愛を受入れることを知つてゐた。

『お父あん、お父あん。』

晩酌の相手をしながらよく冗談に云つてゐたその呼び方が、後では平常使はれて、而して非常に自然に聞こゆるやうになつた。子供の時に死別れて、父親の味を知らなかつたおせんは、その老人の濶達な、行屆いた愛の中に、それを感じようとするのであつた。その上彼女の優しい心は年齢を輕蔑しなかつたから、老人は滿足してゐた。もう五六年もしたら店をすつかり息子たちに讓つて、二人は樂隱居にならう。而してお四國遍路に出ようと云ふのがその老人の希望であつた。

『その時こそ九州の家にも久しぶりで墓詣に歸りませう。』

斯う云つておせんもその樂しみを一緒にしてゐた。――國を出て以來彼女は家とは音信不通なのであつた。彼女は今の生活を決して間違つた生活だとは考へなかつたから、國に知られて惡いと思つたことは一度もなかつた。それでも進んで便りをしたり、また消息を聞かうとしたりしなかつたのは、家族の冷淡を知つてゐるためでもなければ、また自分は恥を負うて故郷の町を去つた女だと云ふひけ目からでもなかつた。時はもうすべての感情を地ならししてゐた。彼女は今では故郷に對してはただなつかしさより外の不純な思は何んにも持ち得なかつたのであつた。それでも尙ほ彼女は自分が無事に生きてゐると云ふことさへ知らせ得なかつた。――彼女は子供のやうに恥かしかつたのであつた。兄たちと相談もしないで結婚したと云ふその一つのことが。

四年たつた。その時故郷の町の人々は、おせんが大阪から歸つて來たと云ふことを知つた。けれどもそれは決定の四國遍路の序でもなければ、昔の知人たちが噂してゐた通りの大きな旅館の、何不足ない身分の神さんでもなかつた。彼女は五度目の、親切な年寄の夫にまた死別れたのであつた。

父が生きてゐる時分でさへ、女中から直つたのだと云た意味で、ともすれば輕蔑を見せようとしてゐた息子夫婦は、その死と共に公然反抗の態度を取つて、元の地位以上には彼女を取扱ふまいとした。けれども彼女は辛抱してゐた。息子たちが何んとしようとも客は皆彼女を信頼してその親切と手落のない待遇に滿足して、以前と變らず『お神、お神』と云つて親しみを見せてくれるし、またそれが續いてゐる以上彼等が自分を無視することの出來ないのは分つてゐたから。けれども不幸なことには彼女はレウマチスにかゝつた。これは長い廊下を行つたり來たりし、または部屋から部屋に顏を出して、氣輕に働いたり話したりしなければならない彼女の毎日の仕事に取つては致命的の打擊であつた。彼女が見えないと懇意な定客たちは淋しがつた。彼等に取つては宿屋は單に泊るところではなく、滯在中はその一室を氣持のよい家庭に作り上げなければ承知しないので、彼等の要求する細いことになると彼女以外の神經では感じられないことが澤山あつた。

『お前では分らない。お神を呼んでくれ。』

女中は追ひ返された。新しい主人の細君が代つて顏を出しても追ひ返されることは同じであつた。

『おつ母さんを呼んでくれ。』

若い神さんはその度に威嚴を傷つけられて怒つて歸つた。而しておせんの寢てゐる部屋の前の廊下に來ると一層足音を荒くして通つた。

『年取つたお神さんならもうゐやはりまへん。病氣でお國へ行きやはりましたと云つとけ』

或時腹立たしげな調子で斯う女中に云ひつける聲が耳に入つた時、おせんは枕の上に熱い涙をこぼした。彼女が故郷の町の近くにある溫泉を志して、まだ苦しい身體を動かしてその家を離れたのは、それから間もなくであつた。湯はよく利いた。而して三月の滯在の間に、痛みは右の足を、氣をつけなければ分らない程度ではあるが、輕い跛足にした後で完全に彼女の手足から去つてしまつた。

一人旅の所在なさに苦しみながら、溫泉宿の二階の手摺にもたれてぢつと後の山々から湧く秋の雲を眺めてゐると、おせんは自分の變化の多い一生が雲と共に山の後から現はれては順々に目の前に擴がつて行くやうな氣がした。

『あの山だつたのだ。』

二度目の夫と暖かい冬の一日を草鞋がけで子供のやうに遊び步いた日のことを斯う考へ出して見ても、それは既に三十年から前の昔のことであつた。それにしても、何と云ふ樣々な出來事に出逢つて來たものであらう。また樣々な人々に、家に、悲しみに、合せてそれぞれに異なつた樂しみに。——彼女は人の五六人分の運命を一人で脊負はされたのだと思ひ、それだけ自分は業が深く生れついて來たのだと思つた。彼女は宗教のことは何んにも知らないと云つてよい位であつたけれども、斯んな順序にものを思ふ時には、傳統的の佛教の考へ方が矢張强くその頭を支配してゐたのであつた。それと共に彼女は今日までに夫と呼び妻と呼ばれて來た五人の人々は、自分とはよく〱深い因緣でこの世に結ばれてゐたのだと感じないではゐられなかつた。而して誰を思ひ出して見ても懷かしく、戀しいのみで、その中のただ一人だつて厭だと思ふ人はなかつた。死の最後の瞬間までも怖ろしい執着で自分を苦しめ通した夫に對しても、もはや怖れも恨みも忘れて愛のみを感じてゐた。政黨上の敵對心から、石ころ一つ窓から放り出すよりも容易に自分を家から追ひ出

した夫さへもなつかしかつた。泥棒の夫も戀しかつた。また父親の愛情で自分を押包んで、最近に思ひがけもなく生き甲斐のあつた數年を與へてくれた老人に對しても深い感謝を持つてゐた。わけても一年と一緒にゐないで、且つ一時の別れがその儘永久の別れになつた最初の若い夫は、一番夢幻的な、神聖な存在とさへなつて彼女の胸の奥の奥に横はつてゐた。何處か靜かな尼寺にでも入つて、斯う云ふ人々の冥福を祈ることで殘りの生涯を過し度い。でなければあの老人の遂げないで亡くなつた志をついでお四國廻りをしたい。これがいつとなしに樂しい空想となつて、時々彼女を見舞つてゐた。

けれどもそのどちらをもまだ決心することが出來なかつた中に、彼女の心の隅に早くから隱れてゐたもの、――故鄉に近い溫泉を彼女に選ばしたことさへ、既にその仕業であつたものが、手足が自由になると共に急に露骨な力で彼女を誘ひかけた。今一度故鄉の町を見度い。――彼女はこの慾望に打ち勝つことが出來なかつた。

『折角此處まで來てゐるのに、この機會を取放づしていつまた歸られよう。』

と云ふ思ひは、すべての故障を忘れさせたのであつた。彼女は終に思ひきつて立つた。けれども流石に町には夜つくだけの用心は忘れないで。

『まあ、おせんさん。』

門口の電燈の下で車を下りて家に入つて來る彼女を見た時、喫驚して一番に叫びかけたおつぎの叫び聲は、その儘町の古い友達や知人たちの叫び聲であつた。彼等は明けの日になるともう悉く彼女の歸つたことを知つたのであつた。而して町を通るとなつかしさうに聲をかけ、近よつて來、顏をのぞいて、生れた土地を忘れないでよく戾つて來たと云つて挨拶をした。過去はすべて忘られてゐるやうであつた。おせんは歸つて來てよかつたと思つた。その中でも取りわ

け彼女を見て悦んで、もう決して大阪には歸るなとまで云つたのは、最初の夫の姉に當たる太物問屋の長女で、おせんとは最も氣のあつた同士であつた。

『兩親ともあなたのことは死ぬが死ぬまで親身に心配してゐたのですから、この上あなたを旅へやつて苦勞させては私が親に對して申譯がない。』

彼女は眞實をこめて斯んな言葉を繰返した。

『町も私たちが育つた頃とはすつかり違つてしまひましたよ。それにみんな亡くなつて、あなたでもゐないとほんとうに、昔話をする相手もなくて、淋しくつて仕方がない。』

とも云つた。この言葉はおせんの方からも同じやうに云へる言葉であつた。彼女に對してこんな親切を示してくれる人は勿論、懐しさうに久しぶりの挨拶をする人たちでも、元に比べれば半分の人數もなかつた。彼女を可愛がつて、優しい娘ぶりを褒めた年寄たちは殆んど悉く亡くなつてをり、同じ年頃の人たちでも缺けてゐる人が少くなかつた。而してそれに代つて町を充たしてゐるものは、おせんが幼顔しか知らない人たちや、または何處の家の人とも見分けのつかないやうな若い仲間のみであつた。これはおせんの生れた家が、長兄夫婦はすつかりお爺さんとお婆さんになつてしまひ、次兄夫婦もいい加減年寄じみて、部屋と云ふ部屋は若い子供たちに占領され、長兄の總領の息子には既に嫁が來てゐると云ふ狀態と丁度同じであつた。而して彼等に取つてはおせんは自分たちの家に不意に姿を現した不思議な侵入者に見えたと等しく、町の若い人々には、殊に町の女學校に上つておせんたちの娘時代とは悉く違つた教育の下に成長しつつあつた若いハイカラな女生徒の群の目には、彼女は變な珍らしい異邦人のおばさんとしかうつらなかつた。殊に、その人は十五の時に初めて結婚して、今日まで五度結婚した婦人であると云ふ話を、年寄の一人から洩れ聞いた時には、彼

等は目を見張つた。而してその後で顔を見合せて皆んなで大きな聲で笑ひこけた。――十三でお手玉を取りながら、子供に乳を飲ませてゐた友達があつたと云ふ年寄の話を、若いおせんたちがおかしがつた時のやうに。

その頃はおせんは殆んど太物問屋の分家でばかり暮らしてゐた。臺所廻りのことを手傳つたり、お針をすけたりすれば、彼女一人分の仕事は十分あつたが、でもお裁縫は絹物となるともう自信がなかつた。人より早い結婚のためにものを習ふ期間が短かつたせゐもあつた。それに結婚後暇に任せて習つたことだつて、ほんのお嗜みとしてのお稽古に過ぎなかつたので、女一と通りのことで何んでも知らないものはなかつた癖に、さて何が出來るかと云へば、それで人に教へたり、金に代へられたりするものは何一つなかつた。

『乞食をする道も知らない、と云ふのは本統に私のことですね。』

斯んなことを彼女がはかなんだ調子で口に洩らす頃には、分家の主人夫婦もひそかにおせんのことを話題に載せてゐた。

『金は少しは持つたゐる風かい。』

『幾らか持つてはゐませうが、とても兄さんたちの息子でも一人貰つて、店でも持たせるなんて金はありますまいよ。』

『あゝしてゐても末を思ふと可哀想だ。』

『本統に可哀想ですわ。こんな腹の中の綺麗な女はないのですもの。』

『何處にか矢張り嫁く方がいいのだな。』

『あれで四十七なんて、知らないものにはとても見えませんからね。』

『どうして。まだ〱立派な世話女房になれる。』

おせんと二人だけで茶の間の長火鉢にあたつてゐた時、

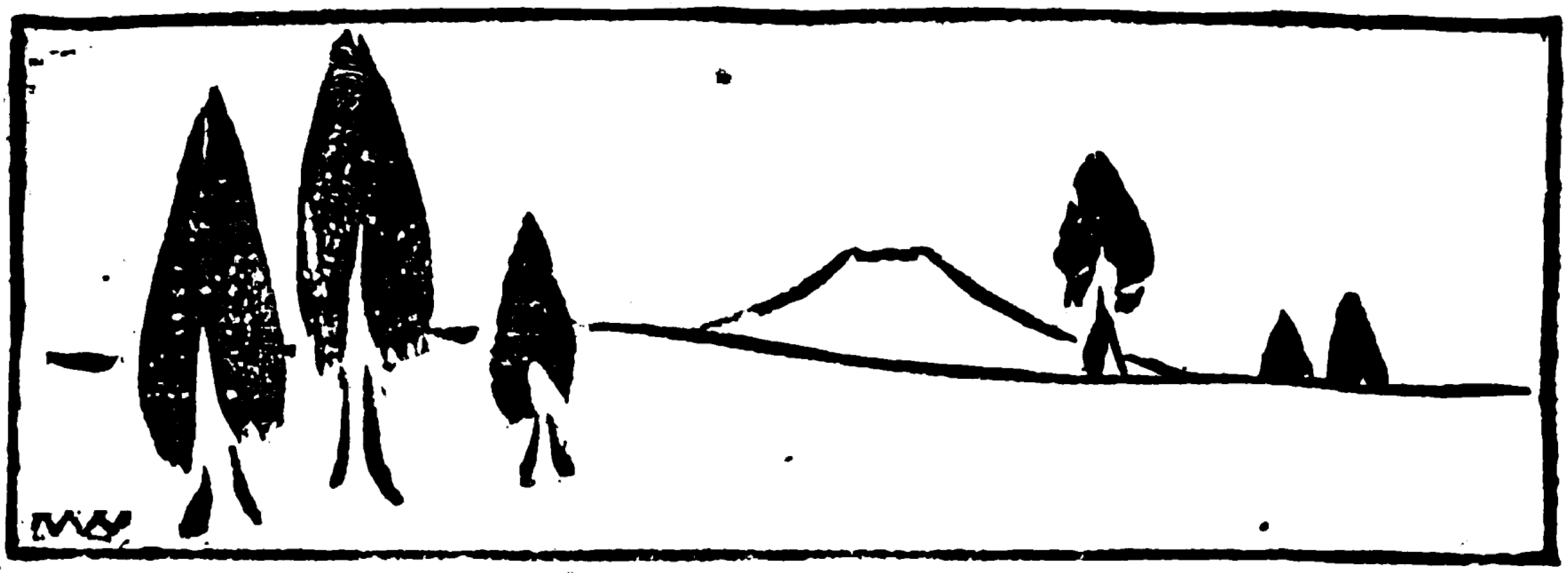
『おせんさん、宿は斯う云つてゐますがね。』

と云つて彼女が何んとなしに夫との話を傳へると、おせんはうつむいておしまひまで默つて聞いてゐた。而して特長のある口許の綻みのあたりが急に、かすかに震えたかと思ふと、大きな涙がぽた〳〵と火鉢の灰の上に落ちた。

それから一月もたたないうちであつた。或る早い朝、太物問屋の墓地のあるお寺の坂道を、おせんが輕い跛足を曳きながら靜かに上つてゐると、上の屋敷町から降りて來る一と群の學校通ひの女生徒と行き逢つた。彼女が彼等をやり過さうとして、狹い坂の緣に立つて待つてゐる前を、昂然と胸を張つて、袴の裾を小さい靴の先で蹴りながら通つた時、女生徒は自分たちでその不仕合な女につけてゐる仇名を思ひ出して微笑して行つた。それは

『五度半さん』

と云ふのであつた。おせんが近い町の或る瀨戸物屋の主婦となるだらうと云ふ噂はその時にはもう一般に知られてゐたのであつた。(完)



寅號金庫

上司小劍

一

『ノアの洪水だよ、君。』と、近頃エレヴエター係に廻はされた飛永は、何事にも片假名で書く言葉が入らなければ滿足し切れないといふやうな顏をして、嬉しさうな樣子で言つた。鐵枠の隅に今日は春田の初めて見た珍らしい紅色の花が、少し水を上げ兼ねた風情で、力なく一輪挿しの中にうなだれてゐた。

『これは何んといふ花ですか。』と、例によつて訊いてやらなければならないと、春田は思つたけれど、何分にも三階の屋根の上の水槽(タンク)が氣にかゝつて、今日は花の名どころでなかつた。

『早く、早く。……』と、今にもこの中央銀行の大きな石の館(やかた)が水の底にでも沈みかゝらうとするやうに促し立てられて、三階の屋根の上へと急ぐ春田には、出陣の勇士の如き武者ぶるひが自然に出るのであつた。毎日異つた花を一輪づゝ持つて來て、エレヴエターの鐵枠の隅へ、一輪挿しの小瓶ごと、青い紐で括り付けてゐた飛永は、其の

心掛けがしをらしく殊勝だと、上役の感に入つて、たまにはチツプもあるエレヴエターへ花とゝもに勸めることにして貰つてから、ます〳〵得意に、少くとも四日目ぐらゐでなければ同じ種類の花を持つて來ない。さうして珍らしい花を挿した時には、いつもじろ〳〵と春田の顏を見て、花の名を問はれることを待ち設けるやうにすのである。しかし今日はノアの洪水で、飛永自身さへ、花のことを忘れてゐるらしかつた。

『同じ水だツて君、この一輪挿しに入つてゐる水は、水の中でも一番優しくて、おとなしい水ですね。こんな優しくおとなしい水が、ドツサリ集ると、矢ツ張り群集心理で、堤を切つたり、家を流したりするんですね。』と、飛永は、青い硝子の一輪挿しに、赤い花の莖を浸してゐるほんの十滴ばかりの水を指さしながら言つた。

水の群集心理は可笑しいと微笑しながら、春田は矢張り花のことを忘れてゐない飛永が、赤い花の名を訊くやうに自分を促してゐるのだと知つたけれど、水槽（タンク）の方に心惹かれて、花の名はまア歸りに教はらうと思つた。

閑な昨日の日曜日を承けて、何んだかごた〳〵と忙しい月曜日であつたが、地下室や一階にばかり働いてゐて、午後三時の今まで、エレヴエターには朝から初めて乘つた。『君がエレヴエターに乘るのは、碌なことぢやない。』と、飛永からよく言はれてゐるやうに、二階や三階に電氣の故障さへなければ、青服に包まれた機關夫春田の姿を、エレヴエターの中に見出すことはないのであつた。

到頭赤い花の名を訊かずに、春田はエレヴエターを離れて、すら〳〵と三階の屋根裏へ昇つた。油を差すところから上に向いて行くと、この夏の初めこの屋根裏へ九十六本の電話線を探りに來て、銅で張つた屋根を透して襲ひかゝる太陽の炎熱に眩暈を起した厭やな場所が眼の前にあつた。此處で自分は死にはぐつたのだ。さう思ふと、奥の暗いところから、白裝束の死神が、積つた埃りを踏み〳〵、ノソリ〳〵と歩き出して來さうで、埃りのもつ氣味のわるい惡臭に、

ぷうんと鼻を衝かれた。

けれども今日は其の毒瓦斯の貯蔵所のやうな屋根裏へ入るのではなかつた。丁度屋根裏に背を向けて、五六段の鐵梯を登ると、此處に引窓のやうな出口があつて、それから屋根へ出られるやうになつてゐた。蒸し殺されるやうな屋根裏と違つて、屋根の上には風もあるであらう。眞夏の日光の直射は、銅の屋根を透して蒸されるよりも、ズツと怖くない。早く屋根の上へ出たい、屋根の上へ出て熱い日光にあたりたい、實際自分のやうに、地下室を棲家にしてゐる機關夫は、太陽の光に飢えてゐるのだ。多くの人が帽子や傘で避けようとする日光を、頭のてツぺんへ直かに受けてみたい氣持ちに、いつしかなつてゐたのだ。——

鬼ケ島の城門を小さくしたやうな鐵の戸に手をかけながら、春田はそんなことを考へてゐた。さうしてぐいツと鐵の戸を引ツ張つたけれど、固くて開かない。またぐいツと押してみたけれど、矢張りびくとも動かない。何んだこれはと思つてよく見ると、大きな錠が下りてゐるのだ。どうしてこれが眼に入らなかつたのかと、おぞましく思ひながら、春田は更にぐいぐいと、其の錠を引ツ張つてみたけれど、其の手が鍵になりやうもなかつた。

どうしようかと春田は困つた。此處の鍵が受付にあるのを知らないのではなかつたが、うツかりそれを借りて來なかつた不覺さ。今更其の爲めにまた赤い花の挿してあるエレヴエターで、一階まで下りて行くのは厭やだ。厭やだと言つても、鍵がなければ仕方がない。鐵の戸を押し破る力のない自分に取つては、其の鍵がたゞ錠前を開く爲めばかりの鍵ではない、錠前を開いて、戸を開いて、それによつて自分の仕事の道を開かなければならぬ鍵だ。鍵がなければ水槽(タンク)に近づくことが出來ない。水槽(タンク)に近づいて、水の盈虚を報ずる電鈴(ベル)の仕掛けの調節を直すことが出來ない。

どうしても今一度、エレヴエターで一階へ下りて、受付にある鍵を借りて來よう。さう思つて春田は恥を裹むといふや

うな心で、屋根裏から三階まで下りると、折りよく其處にエレヴエターがやつて來て、赤い花と飛永の顏とが、同時に眼の前にあつた。

『もう直つたのか、君。』と、飛永は少し變な顏をした。

『いや、わすれものをした。』と、春田は赤い花の前に差し俯向いて頭を掻いた。髮の毛の先きに指が觸れると、ピリピリと腦のしんまでが痛むやうであつた。

二階から、傲然としてエレヴエターに重量を加へたのは、獨眼龍の綽名で、見習どもに内々嘲笑ふやうに呼ばれてゐる△△局の調査役であつた。川瀬と言つて、五分刈り頭の圓顏で、八字髭がピンと滑稽に撥ねてゐる。獨眼龍と呼ばれても、片目ではないのを、春田は些か不思議に感じてゐたが、二十何年の昔し日清戰爭の時代に、川瀬といふ片目の將軍があつて、旅順とやらで奮戰したとか、虐殺をやつたとかで、勇名を世界に馳せた。さうして新聞なぞでは獨眼龍と擧めて(多分擧めたのであらう)書かれた。其の黴の生えたやうな古いことが、この石の館の方々にこびり着いた風になつて、恩給とともに殘つてゐる老朽行員の口から唱へられて、川瀬調査役は獨眼龍の名を得たのである。見習(給仕の事)どもは、自分たちの生れないズツと前の歷史を復習でもするやうなつもりになつて、獨眼龍々々々を口にしてゐる。

『いけないぢやないか、おい、あんな失態をやつちや。』と、獨眼龍はいきなり、春田の背後から嚙み付くやうに言つた。

しかし春田は默つて聞えない風をしながら、赤い花を見詰めてゐた。

『おい、君ツ。』と、獨眼龍は急き込む風に聲をかけた。眞逆彼れは春田が態と返辭をしないのだとは思はない樣子で、他のものに言つたと春田の耳がうツかり聞きちがへたやうに感じたのらしかつた。いつまでも答へないでゐてやらうか

ども思つたが、『君』といふ幾分の敬語を附けたのに免じて、春田は漸く、
『僕ですか。』と、強い調子で言つて、後を振り向いた。
『むゝ、君だよ。ほかに誰れもゐないぢやないか。……この男は此處ぢや機械だ、人間ぢやない。』と獨眼龍は例の權柄づくで言つて、飛永のハイカラ姿を指さした。
『何か御用ですか。』と、春田は出來るだけ白々しくした。
『だから今言つてるぢやないか。あんな失態をやつちやいけないぢやないか、ツて。二階も三階も便所は皆水だらけだ。ほんとに困つちまう、注意しなけれや困るよ。僕も今水責めに遭つちまつた。女子用の便所が一番ひどいやうだ。』と、獨眼龍が意氣込んで言つてゐるうちに、エレヴエターは一階に下り着いた。
氣取つた歩きかたをして、表の方へ行く獨眼龍を見送りつゝ、春田は大急ぎに受付へ行つて、屋根裏の窓の戸の鍵を借りて來た。」

二

『馬鹿にしてやがらア。獨眼龍め、俺のことを機械だ、人間ぢやない、とほざきやがつたぜ。』と、飛永はいつにない野蠻な言葉を使つて、春田を驚かした。春田は鍵を持つて再び屋根裏へ急ぐエレヴエターの途中に居た。
『龍に水と言ふから、あの獨眼龍が便所へ入つてるところを、水でいツぱいにしてやれやよかつた。』とも、飛永は罵つた。春田は今度も赤い花の名を訊いてゐる暇もなく、三階まで着くと、直ぐに屋根裏の窓へかゝつて、鐵の戸の鍵に鍵をコチ〱させつゝさツと開くと、氣持ちの好い蒼空が、忽ち頭の上にあつた。

『あゝア。……』と、春田は覺えず歎音の聲を揚げた。窓から這ひ出して、足を下屋根の上にかけると、其處には火のやうに熱くなつたトタン張りの上を、蜈蚣の這ふてゐるやうな恰好に一尺五寸幅ぐらゐの、普通の家の物干臺へ行く通路と同じ木製のものが、雨や日に晒らされて黑く朽ちかけたまゝに、二十間ばかりつゞいてゐた。春田はこの銀行の屋根をば下から眺めて、綠靑の浮いてゐる銅板だと思つてゐた。成るほど街の人の目から見えるところは銅を用ゐてあるのだけれど、見えないところは總べてトタン張りであつた。こんな大きな館にかういふ詐欺——ではないが、まやかし——の行はれてゐるのを、春田は意外に思ひながら、着物の裏なん、ぞ見えないところに贅澤をするこの土地の氣質に比べて、釣り合はないことだと情けなくなつた。しかしまた考へて見ると、これが近代の資本家氣質で、彼等はたゞ、外からや下からや、裏の裏まで眼の屆かない場所から見た眼にだけ、合理的で、立派なやうに、總べてのものを組み立てる一種の魅力とでもいふべきものを備へてゐる。多くのプロレタリアートは、このまやかしに誤魔化されて、トタン張りの屋根を銅板だと見るやうになつた。これだ、これだと、春田は亡き愛人濱江の父との寂しい郊外の佗住居で、日夜うるさいほど說き聽かされることの一部が、漸く解りかけたらしい氣がした。

蜈蚣のやうな木製の通路を行きつくしたところに、六七尺立方ぐらゐの四角い水槽(タンク)が儼然として、黑く扣へてゐた。十石餘りの水を含みさうな其の水槽が、水に滿腹して、餘つたものをば、何處からか吐き出さうとする。內部には浮標(ブイ)が浮いてゐて、水がひどく減ずれば、浮標の下部が水槽の底に觸れるとゝもに、電氣作用の自動信號がそれを報ずるので、下から直ぐに水を送つて、浮標の上部が水槽の蓋の裏に附いて、水の盈ちたことを自動信號で報ずるまでそれをつゞけるといふ平凡な仕掛けであるが、この日はどうしたのか、電氣の調節がわるくて、水の盈ちたことを報ずる電鈴(ベル)が鳴らなかつた。それが爲めに水は水槽(タンク)の飽滿を通り越して、方々へ溢れ出た。そこで飛永の言つた『ノアの洪水』は、

二階三階の便所に起りかけたのである。水の無くなつた時、手洗ひの栓を開きツ放しにしておいたといふこともまた、其の一つの原因であつた。

春田の電氣仕事は、見やう見まねで、此頃はだいぶ手に入つて來て、水槽の自動信號の調節を直すぐらゐのことは、何んでもなかつた。

仕事を終つた春田は、自分の腕一本で、この大きな銀行をば、恐ろしい洪水から救つたやうな氣がして、いゝ心持ちになつた。其のいゝ心持ちを熱風に吹かれて、劇しい日光の直射を受けつゝ、より高い建築物に遮られてゐない東北の方を見渡した。上野の森、駿河臺、九段、梢の枯れた高い木や塔や鳥居が、三階の窓から眺めるよりは幾分かよく見えた。この銀行中で、俺が一番高いところに立つてゐる。總裁も副總裁も理事も局長も、皆俺の足の下にあるのだと思ふと、春田はまた果敢ないやうないゝ心持ちになつた。

其のいゝ心持ちも、何分强い日光の直射に敵し兼ねて、トタンと銅との屋根からの照り返しに、息の詰まるほどの暑さを感じつゝ、玉の汗が拭ふ暇もなく、ぽたりとトタン板の上に落ちて、乾いて消えるのを、これは面白いと思つて、春田な稍暫らく暑さを辛抱して、蜈蚣のやうな木製の通路に立つてゐた。もツと〱、ほんたうに瀑布のやうな汗を絞つて、太陽に焼けた熱い〱トタン板の上に落してやりたいと思つた。じゆうと音を立てゝ、汗がトタン板の上に煮えるのを見たいと考へたけれど、幾ら暑くともそんなに汗は出なかつた。一滴二滴と、首を振つて、額や鼻の上から熱いトタン板の上へ落す汗の玉は、音もしないで直ぐ乾いて消えた。地下室に設けられる紙幣を煮る鍋の工事がだいぶ捗取つて、鋲をかしめる音も漸く靜かになりかゝつた時、屋根の上では機關夫が、トタン板の上に汗を煮てゐることを、利口な總裁だとて、よも知るまい。なぞと、そんなことを火の雨の降りさうな夏の炎天の下で考へつゝ、ぼんやり突つ立つて

ゐるところへ、同僚の相木が、囚人の如き樣子で、四角い窓から、鐵の戶を背栅に斂められたやうにしながら顏を出した。

『春田君、何をしてゐるんだ。あんまりおそいから、また眩暈をおこしてゐるんぢやないかと心配して、監督が見て來いと言つたぜ。』

さう言つた相木の顏は、妙に汚なく見えた。

『此處で眩暈を起したら、地面へまでは落ちないが、兎に角お陀佛だよ。こなひだ新館の工事の足場から墜ちた人夫と同じで、中央銀行の露と消えるよ。監督は僕が死んだら喜ぶだらう。』と、春田は妙に寂しい氣持ちになりながら言つた。

火の雨の注ぎかゝりさうな暑さの中にも、彼れは何處からか秋風が吹いて來るやうに感じた。

『いや、さうでないよ。監督はまだ君に未練があるんだよ。どうしてあんなに熱心なのか其の理由が解らないが、どうしても君を兒島爺さんのお聟さんにしようと思つてるんだね。兒島爺さんの方に未練があつて、監督に泣き付くのか知れないが、兎に角君も色男だよ、門衞の娘に思ひ付かれるなんて、機關夫冥利だね。僕なんぞこれで昔しから女に思ひ付かれたことなんか、一度だツてないんだから、さツぱりしたもんだ。』と、相木は鐵の戶に指先きで何やら字を書く眞似をしながら言つた。

『馬鹿ツ。……』と、春田は炎天の下に火を吹くやうな口元をして言つたが、其の後から、『はゝゝゝ。』と笑ひ出して顏を眞ツ赤にした。見合ひをすツぽ拔かして、兒島爺さんと其の娘のおかうちやんとに失望させたことが、擽つたい心持ちで思ひ出されて、腋の下にじく〳〵と汗の湧き出すのがよく分つた。見合ひぐらひはしても、亡き愛人濱江の靈に對して濟まないわけではあるまいなぞと、またしても愚癡な考へに墮ちかけたが、しかし神田の寂しい町で、此處の門

衞の兒島爺さんの家とさう遠くない距離に、見番らしい駄菓子屋の店を出して、近所の汚ならしい子供を相手に、一錢二錢の商ひをしてゐる亡き濱江の母親の日增しに痩せて行く姿を思ひ浮べると、濱江が亡くなつてから三ケ月にもならぬのに、見合の勸めに應じたことを悔なければならなかつた。見合ひに行く途中、母親の家へ立ち寄つて、濱江の裸體の寫眞を見てから、急に年增で出戻りの女髮結なんぞと見合ひをするのが厭やになつて、其のまゝすツぽ拔かして、郊外の森の中に濱江の父と同居してゐる家へ逃げ歸つたのは、何んとしても、考への足りない沙汰であつた。振り返へれば振り返へるほど、滑稽に映る自分の姿であつた。鎔けやしないかと危まるゝほど熱くなつたトタン張りの屋根の上を、自分の滑稽な幻影が、足の裏を火傷しながら踊り狂ふてゐるやうに思はれて、自分も其の幻影を追ふて、熱い屋根の上を狂ひ廻はりたいやうな氣がした。さうして、春田が素足を載せた草履の鼻緒の切れさうなのを、一歩だけ蜈蚣のやうな木製の通路から外に踏み出さうとした途端、

『おい危ないツ、何をするんだ。』と、相木は自殺を企てた人を止めるやうな勢ひで、窓から這ひ出して來た。

『トタンだねこれ。僕は何處までも皆銅(あか)と思つてた。』と、春田は焦げ付きさうに熱いトタン板を草履で踏んでみた。

『さうだトタンだよ。でもね、今は銅の値が下がつたから、トタンとタント違はないツてさ。尤も銅仕事となると、職人が手間をぼるがね。……熱いだらう君、そんなとこを踏んぢや。でも草履を穿いてるからよかつた。僕は跣足だと見たんで、花聟さんに足の裏を火傷さしちや大變だと思つたんだ。』

『草履を穿いてゝもなか／＼熱いよ。トタンの苦しみだ。』

『はゝゝゝツ。』と笑つたけれど、無學な相木には、其の意味が解らないらしかつた。これが飛水だつたら、また何からまいことを言つて酬いたであらう。しかし解らないで仕合はせだ、我れながら厭やなことを言つたものだと、春田の小

心は直ぐそれを悔ゐた。さうして、相木を先きに立てゝ、窓から屋根裏へ戻つた。元の通りに錠をおろした音が、ピーンと頭のしんにまで滲み込むやうに響いた。

三

其の夜、日黒の森の中の家へ歸つて來ると、亡き愛人の父親は、机に向つて何かしてゐたが、格子戸のない表口から、猫のやうに足音もなく、開けツ放しの座敷へ春田の入つて來たのを知らない樣子で、十燭に十六燭を盜用してもなほ薄暗い電燈が、机の上へ春田の頭の影を作つたのに驚いたらしく、急に何物かを、膝の下へ押し隱した。

『影彥か。……』

父親は珍らしく春田の苗字を呼ばずに、名を呼んでくれた。かういふ親しみのある呼びかたをされると、春田は濱江が生きて現世に在るやうな氣がしてならなかつた。懷しさが、ぞく〳〵と身に滲みた。

『今日、繁尾が來てなア。……』と、父親はほく〳〵と嬉しさうにしながら、面長の大きな顏の頰にとまつた蚊を、骨太の手でピシりと叩いた。

『血が着きやがつた。』

さう言つて、掌に見入つてゐる父親の風つきが、如何にも亡き濱江そツくりであつた。先刻から隨分吸はれたものとおぼしく、掌に赤く血の斑紋が出來て、其の中に滿腹した蚊の死骸が腹を破つて、黑くくツ附いてゐた。

其の赤い血が、亡き濱江の熱い唇にも通つてゐた同じ血であるのだと思ふと、春田は父親の大きな掌に接吻をして、蚊の腹から取り戻した血を啜めたいと思つた。父は傍の新聞紙を破つて、『△△△△』と大きな字の見えるところで、

惜し氣もなく學の血を拭き取りつゝ

『今日繁尾が來たよ。』と、また同じことを繰り返した。一人娘濱江を喪ふたのを機會に、この老夫婦は、目黑と神田とに別居して、それ〴〵異つた仕事に傷き痛んだ心を紛らさうとしてゐるのであるが、限りなき悲しみの後に、また寂しさを增すやうな生活の方法を取つたのは、決して策の得たものだと春田は思つてゐない。しかし母親が年來心がけてゐた三文商ひを、いよ〳〵この機會に始めるに就いて、神田の或る町に借りた家は、店のほかに六疊一間切りの家で、店は居抜きのまゝに賣つた先代の商品の賣れ殘りが其のまゝあつて、河岸への買ひ出しも、先代の老婆が手引きをして教へてくれるといふ便宜のあつた代りに、父親が机に向ふことの出來るやうな家ではなかつた。老夫婦が市の內外に別れて住まなければならぬ理由は、こゝからも生じたのであつた。

『繁尾、繁尾。……』と、父親が寢言に母親の名を呼んだのを聞いて、春田は冷りとしながら、老いても矢張り、妻を慕ふ心の熾んであるのに同情もし、推量もしたが、自分にはもう『濱江さん』と寢言にも呼ぶべき其の女が、灰になつてしまつたのを、今更に考へて、痛ましく、寂しく、悲しかつた。

『阿母さんがいらしたんですか、それや好かつたんですね。……矢ツ張り一緒にお住ひになつた方がいゝでせう。』と、つひ言ひ過ぎたと思はるゝことを、うツかり言つてしまつて、春田は口元を抓りたくなつたが、父親は『あはゝゝゝ。』と元氣に笑つて、『女房といふものは、中年の時に誰れでも一度は愛がなくなつて、離別したくなるものだが、其の時期を通過して相當の年輩になると、若い時とはまた違つた氣持ちで、夫婦仲がよくなつて、互ひに賴りにし合ふやうになるものだ。』と、如何にもしみ〴〵と咽喉の奥から味の出るやうな言葉で言つた。

『神田の方の商賣を廢めるか、もう少し大きな家で商賣をして、お父さんも一緒にゐらしたらいゝでせう。』と、春田は

また父親の心を引いてみるやうに言つた。

『いや一緒に居ちやいけない。濱江のことを思ひ出すからな。わしはまだいゝが、繁尾が仕様がない。あゝやつて子供相手の商賣を、幼稚園の保姆にでもなつたやうなつもりでやつてるから、氣が紛れてるが、若し閑だつたら泣いてばかりゐるだらう。今日も久し振りに店を休んで此處へ來ると、直ぐ泣き出すんだもの。濱江さん、濱江さん、……と氣ちがひのやうに言つて呼びながら、聲を立てゝおい〳〵泣き出したんで、全く弱つてしまつたよ。こんな郊外でありながら貧民窟式で、近所が近いんだから、聞えやしないかと思つてね。……繁尾はね、わしと差し向ひに坐つてると、濱江が其の側へ來て坐るやうに思はれてならないから、わしと一緒に住むのは厭やだといふんだよ。』と、父親も亡き濱江によく似た裂れの長い眼をしばたゝきながら言つて、机の上を見やつた。其處には濱江の寫眞が飾られて、好きであつた梨子の實が、母親の土産とおぼしく、神田のにほひを見せて、如何にも、下町育ちの母親の口から梨子の實と呼ばれさうな樣子で、赤い盆の上に載つて寫眞に供へられてあつた。さうして其の横には父親が舊知伊達伯爵に、翻譯を頼まれた『文明の破壞』の原書が、まだ半分までも進まずに、埃りを被つて、『新マルサス主義』の日本譯と並んでゐた。父親は此頃この『新マルサス主義』を愛讀して、毎夜寢床へ入つてから、其の講釋を春田に聽かせるのだが、春田はいゝ心持ちに『新マルサス主義』を子守り唄のやうにして、幼い頃のことを思ひ出しつゝ、うと〳〵と夢に入るのであつた。

春田は不圖、父親の膝のところに、眩しく光る金鎖りが、うね〳〵と細い蛇の如くに絡んでゐるのを見た。銀行で見た新らしい金貨に劣らぬ光を、父の洗晒らした單衣の膝に發見したのであつた。

『お父さん、それは？』と、指さゝれて、父親は周章てゝ金鎖の端を摘まみながら、あゝしまつた、といふやうな顏をした。

『これか。これはね。』と、少し吃つて、諦めた風に引き出した鎖のさきには、十七形の金時計が、恵比須さまに釣られた鯛のやうにして現はれた。

『あツ。』と叫びたくなつたのを耐へて、春田は其の金時計を見詰めた。何か不正な品でゞもあるかのやうに。

『これはね、繁尾が今日持つて來てくれたんだよ。あんな汚ない店でもよく賣れるさうでね。この時計を自分の代りにわしの側へ附けておくんだと言つて、先月と今月の純益で買つて來たんださうだ。安物は安物で、ペコ〱した薄いものだが、黄金は黄金だよ。』と、父親はびく〱してゐる樣子で、言ひ譯けでもするやうに言つた。

『さうですか。』と、春田はスリカリ納得して、たとへ瞬間でも、不正品の疑ひをかけたのがわるかつたと悔ゐた。

『ところが滑稽だよ、午砲が聞えたから、時間を合はしとかうと思つたが、針の動かしやうが分らないんだ。先の古い銀時計は横のところに押さへるぽち〱があつたが、これにはそれがないだらう。繁尾は午後だけでも店を開けて商ひをすると言つて歸つてしまつたし、訊く人がないので、わざ〱坂上の時計屋まで行つて、針の動かしやうを教はつたんだが、時計屋の小僧め、くす〱笑つたよ。』と、父親は大事さうに、新らしい時計を弄りながら言つた。

『新マルサス主義の講釋をする人が、時計の龍頭を引き出して針を廻はすことを知らなかつたのは滑稽ですね。』と、春田は笑つた。父親もともに笑つた。蚊がだん〱ひどくなつて來た。

其の夜もまた、盛んに蚊やり線香を焚いて、蚊帳を吊らない二つの寢床に枕を並べつゝ、春田は父親の口から出る新マルサス主義の講釋に、うつら〱と夢を誘はれた。

四

其の翌朝、一つの椿事が起つて、春田は銀行を休まなければならないことになつた。例の通り、四時少し過ぎに、父親が起きろといふ合圖の咳拂ひを二つしたので、それを聞くとゝもに春田はまだ寢てゐたいのを振り切るやうに床から離れて、くる〳〵と丸めた薄い蒲團と一枚の毛布とを便所から滲みて來る片腦油のにほひのする押し入れに押し込み、其のまゝ臺所口の戸を開けて飛び出すと、夜が明けたばかりの朝風とゝもに、壁一重隣りの大工の女房のバケツを提げた姿に突き當つた。

『あッ危いッ。』

大工のおかみさんは、バケツの水を溢しつゝ、身を開いて、かう叫んだ後から『お早やう。』と言つた。

『あツ、失敬、失敬。』と、春田は冷たい朝風に頬を撫でられながら、ペコ〳〵とお辭儀をした。

『あのう。』と、おかみさんは、暫く春田の寢ぼけ顏を見まもつて、聲を潜めながら『小包が來てますよ。家主(おほや)で預かつてますが、何んとも言ひませんか。』と、春田の家の直ぐ横の家主の住居の臺所口を、睨み詰めるやうにして言つた。

『昨日(きのふ)ね。……』と、おかみさんは、春田に返辭をする餘裕を與へないで、浴せかける風に、『旦那が何處かへお出かけになつた後で、郵便屋が來て、お留守だつたものですから、家主(おほや)へ預けて行つたんですよ。早くさう言はないと取つちまひますよ。狡猾(こす)いんだから。』と囁いて、だいぶ水の減つたバケツを提げるなり、サツさと行つてしまつた。

其の後へ、直ぐ前の五軒長屋の端のおかみさんが、薄汚ない寢衣のまゝ、忍び足に近寄つて來て、『葉がきも來てますよ。それは一昨日(をとゝひ)でしたが、矢つ張り旦那がお留守で、郵便屋は家主(おほや)へ預けて行きましたよ。』と、聲を潜めて言つた。春田は默つて頷きながら、其の好意を謝して、齒磨き楊枝を銜へつゝ、共同井戸に近づいたが、それは家主の勝手口の直ぐ前にあつて、狡猾な家主が長屋中に負擔させて、往來安全の名の下に、其の實は自分一戸の軒燈に使つてゐる電氣の灯は

ぼんやりと、まだ向ふの森から現はれない太陽に輝きを奪はれて、薄赤い色だけを磨り硝子に映してゐた。

早や起きの大家の女主人は、勝手口にチラと、派手な浴衣の柄を見せたが、春田を見ると、直ぐ逃げるやうに引つ返へさうとするのを、春田は追ひ縋る風に二三歩進んで『お早やうございます。』と呼び止めてから、『あのう、小包が來たさうでございますが、僕のところへ。』と、初めから詰るやうに問ふた。

『いゝえ、來て居りませんよ。』と、女主人はもう四十だといふ細面に、寢白粉の痕をいやらしく留めて、振り返へると同時にさう言ふなり、奥へ逃げ込まうとした。

『葉がきは？』と、春田は怒鳴るやうに言つた。

『葉がき？……』と、女主人は眩しさうな眼をして、『葉がきは、來てましたがね、うちへ來たのと一緒に、狀差しへ突ッ込んじまひましたから、あとで婆アやに持たしてあげます。』と言ひ棄てゝ、到頭奥へ逃げ込んでしまつた。それと引きちがひに、棕櫚箒やうな頭髮をした婆アやが、紙屑籠をかけた柱の蔭から、ぬうツと顏を出した。さうして夏でも凍傷の出來さうな荒れた手で、春田を手招きして奥の方を用心しながら、密められるだけ聲を密めて、

『來てますよ、小包が。……葉がきも來たんですが、小包を送つたといふ葉がきだつたもんだから、あなたに見せられないんだよ。破いてあんなかへ棄てたんぢやないか知ら。』と囁いてから、柱の方へ歩み寄つて、紙屑籠の中をがさごそと荒た手で探つた。

この邊に、バラックのやうな長屋を急造して、格子戸もないひどいのを住宅難の上げ汐に乘じて、法外な家賃で借してゐる家主は、工學士と自稱してゐた化けの皮も直ぐ剝げて、請負上りの周旋屋で、小金のある後家の男妾になつたのだといふ長屋中の惡口が、どうやらほんたうらしく見えかけて來た。後家といふのは、即ち女主人で、女子大學の出身だ

といふこと丶、中央銀行の△△局長が、從兄だといふことゝを自慢にしてゐる。敷金の受取書に書いた『春田影彥殿』といふ宛名（この格子戸のない貧乏長屋は、海野三郎といふ父親の名を出さないで、春田の名義にした）は、春田の眼の前で女主人がすら〳〵と筆を揮つたのだが、なか〳〵の能書で、春田はまだこれまで一度もこんな上手な字で其の名前を書かれたことがなかつた。しかしこの女主人には、バラックのやうな安普請の家を、法外に高く貸すといふ强慾のほかに、一種の發作から來る手癖の惡さがあつて、他人の物と見れば欲しくなる。森の下の町つゞきの中程にある炭、薪、酒屋で炭の註文をしながら、店頭に有り合はしたサイダーの瓶を一本、年の割りには長い袂に忍ばせたのを、小僧が發見して大騷ぎを起してから、軒並の商家では皆このハイカラな奥さんを警戒することになつた。しかし春田はどうしてもこ女主人を憎む氣になれないで、何處か自分と性癖の共通點があるやうに思はれて、自分がよく停車場のプラツトフームで汽車を待つ時、其處の線路へ轟々と進行して來る長い列車を引いた大きな機關車を見ると、其蒸氣に熱した眞ッ黑なカマを見かけて、線路へ躍り入りたいやうな氣がするのと、同じやうな心持ちを、女主人は酒屋の店頭に有り合はしたサイダーの瓶に對して抱くのであらう。詰まり先きの『物』に女主人を引き付ける力があるのは、眼の前に進行して來る威勢のよい機關車が自分を引き付けさうな力を有つてゐるのと同じだと思つてゐる。

されば、そんなに懇意にしてゐる間柄では決してないのだが、所謂性の合ふといふものか女主人は初對面の時から、春田に優しくしてくれて、勝手なことばかり書いてある借家證書を入れるのが、適當な保證人の得られない爲めに、おそくなつてゐても、女主人は他の貸家に對するやうな手厳しい催促をしない。さうして春田が中央銀行に勤めること知つては、△△局長が從兄だからよく賴んでおいてやらうなぞとも言つたりした。そんなことが長屋の金棒引き連に知れると、いろ〳〵の噂さを立てる口がうるさいと、春田はびく〳〵してゐたが、今までまだ自分が女主人から特別に待

遇されかけてゐるのを氣取つたものは、この森の中の小部落に一人もない。

いつもの通り、春田が流し元へ父親の洗面の水を取つてあげると、父親がむく／＼起きて來て、そこらあたりを薄桃色の歯磨き粉だらけにしながら、ゆツくりと口を嗽ぎ顔を洗つてゐる間に、春田は父親の寢床を片付け、家主の方に面した櫺子窓を開いて、バタ／＼と掃除をしてから、朝飯の支度にかゝつて、惡い炭の煙る七輪を、團扇がないので、口でぷう／＼吹いてゐた。すると突然座敷に當つて、

『大變だ。……』と叫ぶ父親のけたゝましい聲がした。驚いて駈け付けると、成るほど大變であつた。今まで父親の机の上に、濱江の寫眞へ供へるやうにして置いてあつた金時計が無くなつてゐる。父親は顔色を變へつゝ念の爲めに抽斗を開けたり、新マルサス主義や、文明の破壞の本を片寄せたり、古新聞を退けてみたりしたが、金時計は連れ添ふ金鎖とゝもに、何處からも出て來なかつた。

『君が、あんまり早くこの窓を開けるからいけないんだ。』と、父親は机の前の櫺子窓を、血眼で睨み付けた。窓には障子がなくて、外には大家の羽目板が、嘲笑つてゐる眼のやうな節穴を二つ並べて見せてゐた。始終温和しいな顔してゐる父親が、殆んど殺氣を含んでゐると思はるゝまでに、こんな怖い色を浮べたのは、春田の初めて見るところであつた。

『だいぶ、いろ／＼の評判を聞くから、現行犯の證據さへあつたら、直ぐあげてしまふんぢやがね。』と、白服帶劍の人は春田の訴へによつて、森の下の町から、のそり／＼と實地の檢分に來て、大家の羽目板を睨みながら言つた。

・長屋中のものは、黑山の如く櫺子窓の前に立つたが、父親も春田も默つてゐるので、巡査の來た仔細は判らないで、もどかしさうな顔色を、てんでに浮べてゐた。

『小包を渡しませんかい。あツしが行つて一つ取ツちめてやらうかね。』と壁一重隣りの大工は、スッカリ仕事に出る支

度を整へたまゝ、格子窓の前を立ち去り兼ねて、印袢纏の裾を引んまくるやうにしつゝ言つた。

『なに、いゝんですよ。』と、春田は大江を宥めながら妙に大家の女主人をいたはりたいやうな心持になつた。しかしまた小包は誰れから來たのかといふことが氣にかゝつて、この夏の初め東京へ來るなり直ぐ近付きになつた女流作家岩村小夜子から、冬帽子と夏帽子とを二度まで小包にして送つてくれたことも、頻りに思ひ出された。

父親はぐツたりとなつて、濱江の寫眞の前に胡座をかきながら、ヂツと考へ込んでゐた。

五

翌日の銀行は、地方の學校教師や生徒の團體の見學で、地下室は十時頃からゴタ〳〵し始めた。紙幣を燒く竈では、丁度前夜の十時に火を入れた紙幣が燒きあがつて、出納局長や國庫局長や大藏省の役人や、そんなお歴々に、調査役の獨眼龍も混り、見習(給仕)上りの若い書記が切つた封印をば、仔細らしく芝居の檢死の役人のやうな風で改めた上、そろ〳〵と錠を外して、竈の口を開いたが、さうかうしてゐるうちに、早や欠伸を噛み締めてゐるやうな樣子が、お歴々の顏に見えて來た。

長い鐵の棒が、小使の手で、竈の口に突ッ込れて、紙幣の燒けたのが掻き廻はされた。全く礦物のやうに凝固つたものが、竈の中でがり〳〵と碎かれてゐるのを見ると、これが多くの人を嬉しがらせ、笑はせ、怒らせ、罵らせ、泣かせたものゝ成れの果てかと、誰しも初めて見た時は、不思議に考へるのである。これが爲めに泣いたり笑つたりした人たちの一念が、こゝに凝り固まつて、灰ともならずに、厳めしく岩のやうな形をしてゐるのかと、春田も一度は恐ろしく感じたほどであつたが、黒ざらめを燒き固めたやうな、其の汚ならしい塊を、紙幣の燒けたのだと言つて、森の家へ父親の土産

に持つて歸るのも馬鹿々々しいと思つて、今日まで見合はせてゐた。

局長や大藏省のお歴々は、切腹を見屆けたお役人の如く竈の中のものが、異狀なく燒けたのを確かめると、さつと逃げるやうに地下室から退散した。其の後へ人夫がやつて來て、茶毘に附した紙幣の遺骨とでも言ひたげなものを、熊手に似た道具で掻き出し、淺い畚に入れて擔いで棄てに行く。矢ツ張り灰が立つので、蒸露で水をかけては竈の中を掻き立てゝゐる人夫の後姿を、さも〳〵貴い仕事でもしてゐるやうに、見學の田舍教師たちは、眼を瞠つてゐたが、落ちこぼれた。金屎みたいな燒き屑を、窃と拾つて、押し戴かんばかりにしながら、古い背廣のポケットへ入れて行くのも見えた。

嚴めしい鐵の扉の附いた燒却室も、今日は△△の廻つた國家のやうに、神祕がゝつた内部がスッカリ開放され、暴露されて、眞ん中に据つた大きな竈は、古い背廣の田舍教師や、小倉服の田舍生徒に撫で廻はされんばかりにしてゐる。牛乳屋のブリキ罐のやうな恰好をした大きな竈は、煉瓦で築かれて、パクリと開いた下部の鐵の戸から夥しい金屎を吐き出してゐる。向つて右に鐵の梯、左に轆轤が立つてゐて、蛙の眼のやうに上に向つて二つ附いた上部の圓い穴の轆轤に寄つた方のは、それによつてくる〳〵と卷き上げられる紙幣の束を入れるところで、梯の方に寄つたのは、焚き付けの鉋屑を入れるところである。竈の稍上部の周圍には、銹のやうにくるりと一周の出來る通路が附いてゐて、梯から其處に昇つて、左右の圓い穴へ手が屆く工合ひになつてゐる。竈の上部からは烟り出しの筒が曲つて石壁の外へ、外部から見えるあの烟徳利のやうな、一種異樣の恰好をした烟突につゞいてゐるのである。

それ等の說明を聽きながら、竈の鐵の戸の眞似をしたやうに、ぽかんと口を開いてゐる田舍教師たちを、邪魔ッ氣さうにしながら、人夫は畚を擔いで、紙幣の燒き屑を棄てに幾度も往復した。

「今日のは上等だぞ、三月に一度か四月に一度しか出ないんだ。灰になつても百圓紙幣は豪勢なもんだぜ。擔いでゝも

百圓紙幣の燒き屑は、屑の當り工合がいゝやうだよ。生のうちは手に取つて見たこともねえんだから、使つたことは憚りながらある譯はねえが、燒いたやつを掻き出して擔いで行つて棄てたのは、何千萬兩になるか知れねえ、豪勢なもんだ』こんなことを口にして威張つてゐる人夫の獨言を聞いて、春田は滅多に見られない百圓紙幣が昨夜盜に入つたのであつたことを思ひ出した。其の燒き屑なら、一つ拾つて森の中の家へ父親への土産に持つて歸つてもよい。大事な金時計を盜まれて悲しんでゐるところへ百圓、紙幣の灰を持つて歸るのも、一種のアイロニイだ。さう考へて、春田は擔いで行く人夫の畚の中から、だいぶ大きな塊を一つ摑み取つた。

成るほど小額紙幣なんぞの燒き屑のやうに、何處となく汚ならしいものではなくて、灰になつても上品な、貴族の俤が出てゐる。これが人間の死骸なら、王者でも乞食でも、白骨から貴賤の等差を見出すことは出來ないで、いづれを見ても同じ色であらうけれど、紙幣となると燒かれた後までも、階級に伴ふ尊卑の別がハツキリと現はれてゐて、藍の色の美しく浮んだのが、生の時よりも却つて立派なくらゐである。餘り貧しい人には手を觸れられなかつたことが、灰になつてもよく分るのは不思議だ。束になつたがそのまゝ層を作つて一枚〳〵數へられるやうに、斷面の現はれてゐるのも見事で、『明治十七年五月二十六日太政官布告第十八號兌換銀行券條例を遵奉し云々』の文字が灰の中にハツキりと浮んで讀まれるのも嬉しかつたが、其の文字のところは金屎のやうに凝固らないで、ふは〳〵と柔かさうであつた。それで餘りに眼を近づけて春田は言ひ知れぬ殘念さを覺えて見た機みに鼻息がかゝると、今まで現はれてゐたハツキリした文字が崩れて、幽靈の如く消えてしまつた。其の文字を其のまゝ森の中の家への土産に持つて歸ることの出來ないことを悲しみつゝ、竈の側へ寄つてまた探してみたけれど、それほど明らかに原形の文字の殘つたのはなくて、藤原鎌足公の冠の微かに見えるのを一つ拾つた。さうして其の頃から俄に空腹を覺えて、いつもこの紙幣の骨拾ひの時刻が正午にか

ゝつて、地下室の連中の嘗食を妨げられるのを怨みながら、まだごた〳〵してゐる中を、湯殿の脇のボイラーの側へ來て、百圓紙幣を燒いた金屎の塊の小さな破片を一つ摘り取つて、コンクリートの上へ『空腹』といふ字を、幾つも並べて樂書きした。

六

『おい〳〵。』と呼んだ聲が、△△局の調査役川瀨の聲であることを、春田は直ぐ知つた。今時分に獨眼龍がこんなところへ何をしに來たのかと、春田はそれを考へながら、返辭をしないでゐた。

『おい〳〵。』と、眼龍獨はまた呼んだけれど、春田が矢張り『空腹』といふ字ばかり書いてゐて、返辭をしないので、さしたる用事もなかつたのか、其のまゝ輕い靴音を立てゝ、何處へか行つてしまつた。春田が首を縮めつゝそうツと振り返へつた時は、もう其の後姿も何も見えなかつた。

久しくこの銀行にこびり附いて、今はもう恩給を唯一の樂みに、殘骸のやうな足へ安いゴム靴を穿いて、毎日たゞボン〳〵時計の振り子の如く、郊外のあばら家とこの大きな石の館との間を往復してゐる老守衛なんぞの、ちよい〳〵話すところから綜合して考へて見ると、この半ば地中に沈みかゝつたやうな、灰色の大石館は外形の上だけは、もとより何十年間何等の進歩を示すことが出來ないで、纔に目下工事中の新館の落成によつて、周圍に簇立した高い建築との背くらべに負けまいと焦慮(あせ)つてゐるに過ぎないが、内部では矢張り世の風潮に押し付けられて、いろ〳〵の改革を餘儀なくされようとしてゐる。殊に先年總裁の更代したことが大きな旋律を、館内の空氣に起させる因(もと)となつた。今は大臣とか大藏とかになつてゐる前總裁に比べると年齢が若いだけに今の總裁は考へも些か新らしく、同じ資本主義の節を詰めて

ゐる頭は、場所柄、職業柄、どうにも仕様がないばかりか、彼れとしては當然のことかも知れないけれど、しかし前總裁が、機關夫や小使や人夫を牛馬のやうに思つてゐたといふのに比べて、今の總裁は、矢張り自身たちと同じ人間だと思つてゐるだけの相違はあるらしい。『人夫』といふ熟字の頭に、『人』の字が附いてゐるのを不思議として、何か適當の字はないかと考へたとかいふ噂さのある前總裁は、自分が若い時外國に流浪して、第四級民の仲間に入つたといふことが、下層の階級に同情する原因を作らないで、それ等の貧しく賤しい人間を牛馬の如く思ふ憎惡の心を、逆磨のやうに肥えた身體に滲み込ませて、今は貴族になり濟ましてゐる。

『職工なんぞに金をやつても駄目だ。皆無駄に使つてしまふ。』

さう言つて彼れは、下級に與ふるものを、能ふ限り薄くしようとした。

ところが、今の總裁になつてから、成るべく下級に厚くしようとする傾きが見え出した。勿論この銀行の大きな看板に似ぬしみツたれは創業以來の痼疾で、日給の安さなんぞ、天下無比であるが、それでも青島戰爭の後の好景氣に、今の總裁から出た小使どもの賞與をば、彼等はいつもの通り、ほんの煙草代か鼻紙錢ぐらひに思つて開いて見ると、二百何十圓とかの、今まで見たこともない――いや見るのは幾十萬圓となく毎日見せ付けられて、夜は金の音に魘されるほどだが――曾つて自分のものとしたことのない大金に、氣が狂ひはしないかと思はるゝほど喜んだことがあるさうだ。

されば小使や機關夫どもに晝飯を銀行から出すやうになつてからも、重役の午餐の費用を削つて、成るだけ御馳走をしてやれとの有り難い上の御趣意ださうだが、それはむさ〳〵中途で變形して、山の芋が鰻になるのとは反對に、牛肉が南瓜に化けたり、さしみが油揚げになつたりするのではあるまいか。幾ら美味を與へても、あいつ等下級の人間は、生れつき顏の色が茶ツ葉色をしてゐるのかと、上の方では思つてゐるか知れない。……………こんなさもしい蔭口がよくエ

レヴエーターの昇り降りに、下級の人間の仲に囓かれる。

職工を牛馬と思ふやうな古い思想を持ち傳へた上は役が、今でもまだなか〳〵多い中にも其の代表者として、何んとなく蟲の好かぬ川瀬調査役を擧げたいと、春田は別に深く考へもしないでさう思つた。

『獨眼龍は僕のことを機械だ、人間ぢやないとほざきやがつた。』と、憤慨したエレヴエター係の飛氷の言葉にも、春田はひどく川瀬調査役に對して奮慨したのであつた。

『君、コツク室の電氣がまたいけないさうだ。火鉢に水をかけやがるんで、スヰツチの中へまで水が入つて、ショートしてフユーズが飛ぶんだらう。氣の毒だけど、見て來てやつてくれたまへ。』

漸く靜かになりかゝつた地下室の奥の方から、監督が妙に汚れた顏をして、かう言ひ〳〵眼を光らしながらやつて來た。門衛の兒島爺さんの娘との見合をすツぽ拔かした春田に對する憤りも、殆んど冷めて、書生上りの春田をば、元の通りいたはるやうな使ひかたをしようとするのである。

『えゝ行つて來ます。』と、春田はまた監督の心意氣に感ずるといふ風で、青い作業服のかくしにニツパを探りつゝ、地下室の階段を馳せ登つて、發道をば印刷所の隣りのコツク室へ入つた。其の大火鉢には魚を燒いた名殘りの皮や肉が焦げ附いて、餘り快くないにほひがもや〳〵してゐた。電燈を仰ぐと、笠も球も灰だらけになつて、汚れ煤つたソケツトに生きた色はなかつた。手を伸ばして、それを直さうとしてゐるところへ、見習が飛ぶやうに駈けて來て、『おい君ッ』と獨眼龍の口眞似をしたやうな呼びかたをした。

春田は兩手を伸ばして、ソケツトを外さうとしながら、物も言はずに、見習の面を見た。見習は小ましやくれた癇癪の筋を額に浮べて、制服の胸を叩くやうにしながら、

『二階の貴號の金庫が眞ッ暗だよ、早く來てなほしてくれたまへ。早く、早く。』と急き立てた。

『此處をなほしてから行くよ。』と言ひつゝ、春田は汚れたソケットを弄つてゐた。

『そんなものは、後でいゝぢやないか。今點けるんぢやないだらう。貴號は急ぐんだから、早く來てくれ。』と、見習は地團太を踏むやうにして、ゴム靴の底を不景氣な音で鳴らしつゝ言つた。

さう言はれてみればさうであつた。金庫の内部が眞ッ暗では困るであらう。一體からういふところに働くものゝ根性として、一つの仕事にかゝれば、それにこだはつて、他の仕事に融通を利かさないで、意地わるく人を苦しめて得意とする惡風がある。正直で仕事本位の春田は、さういふ下級の事務員根性、職工根性を卑しんでゐたのに、今圖らずも、自分がこの見習の少年に對して、其の卑しい根性を露出しようとしたのを悔ゆる心になつて、素直にコック室の仕事を止めると、無理にも笑顏を作りながら、少年の後から隨いて行つた。少年は勝利を誇るやうな足どりで、春田を二階に導いた。

七

今日はまた鐵枠の隅に結び付けられた一輪挿しの花が、黄色いのに變つてゐるのを、あれはチユリイプであらうかと思ひながら、飛氷のハイカラ姿に會釋する間もなく、春田は二階の床を踏んで、支店長室の前に立つた。其處は常に局長たちが食堂にして、食後の雜談を煙草の煙りの中に賑はせてゐるところで、長方形の卓子を圍んで、多くの椅子が觀兵式の兵隊さんのやうに並んでゐる。待合の噂さとか、藝妓や料理屋の品評とか、そんな話ばかりで、碌なことは言はぬさうで、ブウルジウアジイの惡臭の最も濃く流れるところのやうに春田は思つて、この一室を憎んでゐた。

『早く　早く。』と、見習がまた急き立てるので、支店長室を睨んでゐた眼を右へ曲つた突き當りの壁に向けつゝ、春田は妙

に力なく歩いて行つた。

突き當りの來賓便所の前の角のところに、問題の寅號金庫があつた。人でも捕つて食ひさうな、其の恐ろしい名の黑の鐵の引き戸が、開かれて、菱形の網目を作つた鐵の疊み戸もまた開かれてあつた。

自分たちの決して入ることを許されない、其の鐵の戸の入口に立つてゐると、内部からコツ〳〵と足音をさせて、その時ばかりは虎のやうに恐ろしい顏に見えた川瀨調査役が汗ばんだ額を拭きつゝ、夏のモーニングコートを鎧でも着けた風に、しやちこ張らして現はれた。覗いて見ると内部はほんたうに眞ツ暗であつた。

子から亥まで、十二支に因んで命けた金庫は、二階や地下室に散在してゐるが、春田はどうもこの寅號が一番怖いやうな氣がしてならなかつた。酉號とか未號とか戌號とかいふのは優しくて親しみもあるが、寅號は氣味がわるかつた。他の金庫のなかには始終鐵の戸が開いてゐるのもあつて、其處では網目を作つた鐵の疊み戸だけを締めた内部で、あか〳〵と電燈を點けて、白い作業服の女事務員が、夥しい貨幣の堆積に埋れる風に見られながら、クツキリと、黄金に塗の降りかゝつたやうな姿をして事務を執つてゐるが、此處の寅號ばかりは常に、死の扉の如き黑い鐵の戸を締め切つて、何か知ら怪談の種を藏してゐるやうに思はれてならなかつた。幾年か前、過つて此處に閉め込まれた女事務員が、唸るほどの貨幣に包まれつゝ、呼べども叫べども外へ通ぜずに、到頭餓死してしまつた靈魂が、夜な夜な陰火を點するといふ話を、眞としたいと春田は考へた。

『君つ、これを直ぐなほしてくれ。眞ツ暗で仕樣がない。』

川瀨獨眼龍は、兩の肩を怒らしながら、横柄にかう言つた。銀行への往復の電車の中で、紳士に向つて……』といふ言葉を使つて、必ず一回づゝは車掌と爭ふと、自ら語つてゐる獨眼龍は、矢張り車掌に對するのと同じ調子で、春田に

向ふのであつた。

『見なければ分りませんな。』と、春田は冷かに言つた。

『入れ。……仕方がない。……』と、獨眼龍はさも〳〵汝等の足を踏み込む場所ではないが、仕事のお蔭で入れてやるといふ風の、尊大な樣子で言つた。

入れてやると言つても、ほんの一足だけであつた。入口の直ぐ右側の壁にスヰツチがあつた。春田は其のスヰツチを改めながら、鋭と横目を使つて奥の方を見ると、錢湯の着物を入れる棚に戸のないやうなものが深くつゞいて、貨幣の入つてゐるに違ひない桐の箱に、『二十萬圓』なぞと書いた札の貼つてあるのが、ぼんやりと眼に映つた。

『三十分はかゝりますね。』と、春田はスヰツチの故障を發見して、さう言つた。

『三十分。……三十分も君をこの大切な場所へ入れておくわけに行かんよ。』と獨眼龍は早や居丈高になりかゝつた。

『さうですか、それぢや仕方がありません。』と、春田は言つて、寅號金庫の外へ出た。廊下の遙か向ふに、總裁室の正面が見えて、扉が開いてゐた。

獨眼龍はまだ寅號金庫の中で、ぐづ〳〵してゐる樣子であつたが、春田は癪に障つて仕樣のない頭を掻き〳〵、少し大袈裟に言へば、粉雪のやうな雲脂を廊下に散らしつゝ、エレヴエターで一階へ下り、地下室へ戻つたが、監督には何んとも復命しなかつた。

しかし、氣になるので、それから三十分間ほどして、また二階の寅號金庫の前へ行つて見ると、鐵の戸が堅く生死の境の扉のやうにして、閉まつてゐた。殆んど銀行中を探し廻はつたけれど獨眼龍の姿は見えなかつた。

やがて、退出時刻が來て、それから夜が近づいた。

――長篇『東京』第二部『勞働篇』の第九節及第十節――



監禁

正宗白鳥

安兵衞が實家へ歸つて來てから、かれこれ半歳の月日が過ぎた。その間彼れが家の外へ踏出したことは極めて稀れであつた。三度の食事時の外には、家の者と話をすることさへ成べく避けるやうにしてゐた。

はじめの間彼れは、座敷牢にでも入れられたやうな氣で、窮屈、退屈、失望、焦燥、懊惱、汚、辱などの、いろ〳〵な不愉快な氣持を絕えず經驗してゐたが、日が立つにつれて、現在の境遇の如何に關はらず、自分の心の中だけでは、その日〳〵に姑息に安んじて將來にも茫漠たる望みを掛けるやうになつてゐた。

彼れは可成りな資産のある東京の堀口といふ家へ養子に行つて、養父の關係してゐたある會社に奉職して可成りの地位を占めてゐたのであつたが、養家との內輪の折合が惡くなつた上に、會社の金を遣込んだり、酒色に溺れたり、いろ〳〵な不始末をしでかしたゝめに、つひに離緣されて、據なく實家に歸復して、當分は父兄の厄介者となつて徒食することになつた。一時故鄕の人々に羨まれてゐた彼れも、今は爪彈きさ

れて事實に輪をかけた惡い噂を立てられるので、成るべく人に顏を見られないやうにしてゐた。

遣込みは養家で奇麗に始末してくれたのだが、そのかはり、一錢の涙金も貰へないで追出されたのであるし、父兄をいたぶる譯にも行かないので、彼れは煙草錢にも不自由してゐた。ちよつと東京へ遊びに行きたいと思つても汽車賃さへなかつた。ある友人ある女へ手紙を出さうとしても、囚人が娑婆へ音信をするやうな樣で、看視の目を晦かしてゐる家の者の許しを得なければならぬので、いやな氣がして、大抵は止してしまつた。

あんないゝ家へ行つて、默つてゐても行々多額な身代が相續出來る運をもつてゐながら、無茶なことをするつて法があるものか、馬鹿にも程があると、兄でも兄嫁でも、妹でも親類でも、みんながさう思つて、侮蔑の目を彼れの方へ向けてゐる。離緣の交渉のあつた時にも、歸つて來てからも、家の者はじめ誰れに向つても、一言の自己辯護をしないで、愚人とでも惡人とでも、人の思ふがまゝに任せてゐるので、尚更しぶとい性の惡い者に見られた。

「みんなが思つてゐる通りおれは馬鹿だ」

彼れは、はじめの間は、人に責められなくつても、自分で自分を鞭打つてゐた。が、他人が彼れを馬鹿と思ふのと、自分でさう思ふのとは、同じ馬鹿でも譯合がちがつてゐた。……養家の兩親の六ケ敷い差圖を受けて小さくなつて若い時を送るくらゐなら、養子に行つた甲斐がないのだから、好きな事をやつて追出されたのは悔ゐるに及ばないのだが、あの醜さ極まる女房のおれんを憚つて、戀しかつたおそのに手出しをしないで、あの女が他家へ緣付くのを指を啣へて見てゐたことが殘惜しく思はれた。押付女房見たいで、情愛のなかつたおれんをも何となく憚り、兩親をも何となく憚つて、知らず〳〵養子根性で萎けてゐたことが、追出された後で思出して見ると忌々しかつた。賢者ぶつた男の晩酌のお相手をして、相變らずの昔自慢や金儲話を聞かされたり、神經やみの姑から日常の挨拶や口の利き方にまで干渉されたりす

るのにウンザリした揚句に、手足を伸して自由に息を吐きたいために、隠れ遊びを覺えて、次第に深みにはまつて、無考へなことをしたのであつたが、どうせ這込みをやるなら、もつと大きくやればよかつた。一州を取るも誅せられ八州を取るも誅せられると、昔の奴が云つてゐるぢやないか。……何處でも雇つて呉れないほどに名譽を毀損されて、親爺や兄貴のおなさけでやうやく飢餓を免かれて監禁同樣の目に會つて生きてゐるくらゐなら、本當の監獄へ入れられたつて構はなかつたのだ。……「おれは馬鹿だつた。知慧のある人間なら、五年もゐた養家から、裸一貫で、悪名だけ着せられて追出せられやしまい」

思出すまいとしても、五年の間の事が、退屈な彼れの念頭に屢々浮んだ。

「またお小言だ。小言を聞いてゐるうちに腹が減つた。蕎麥でも食べたいものだが、こつそり取つて來て貰へまいか」と、おれんに云ふと、おれんも、喰ふことには熱心な女だから、笑ひながら同意して、下女に言含めて、母親に内所でこつそり、取寄せて部屋へ運んでくれた。二人で睦じく喰つてゐるところへ、神經の敏い母親は蕎麥の匂ひでも嗅ぎつけたのか、出拔けに襖の間から顏を出した。

「お母さん、一ついかゞ」と、流石のおれんも間の悪い顏して云つたが、母親はニコリともしないで、襖を締めて行つてしまつた。……この蕎麥の祟りはひどかつた。あくる日の晩には、蕎麥が食卓の上にうんと積上げられてあつた。

流行感冒に罹つて一月も寢てゐた時には、母親も女房もよく看護をしてくれたが、あの時、清瀬の奴がよくやつて來ては、女どもの氣に入るやうな話をべちやくちや喋舌つてゐるのが耳に障つて溜らなかつた。苦情を云ひたいにも、養子の情けなさに、露骨にそれが云へなかつた。

「あなた嫉やつかんでるのよ」

一度、おれんが笑ひ〳〵入つて來た時に、ちよつといや味を云ふと、おれんは冷笑してさう云つた。……「あんなまづい面した女房が嫐しくつて、嫉妬を起してゐたのだらうか。さうでないつもりでも、內實はさうであつたのかも知れない。病氣の癒つた後でも、淸瀨の顏を見ると、何とも云へないいやな氣持がしてゐたから」

彼れは今でもさう思ふと、灰でも舐めさゝれたやうないやな氣持がした。おれんのやうな女のために假りにも嫉妬を起した自分の心に唾を引掛けたいやうな氣がした。

「學校の成績がよくつて、口が重くつて、見かけが謹直らしいのを取柄に、養子に迎へられたのだが、おれは人に好かれる素質は持つてゐないのだ。女の愛を惹くやうなところは尙更身に備はつてゐないのだ。だから、いくら自棄遊びをしたつて、一人の女にも思ひつかれたためしはない。」

彼れは遊びに耽つてゐた間には心に掛けなかつたことを、今は思出して屢々心寂しい思ひに襲はれた。

安兵衞は大山の山開き後、ことに七八月の眞夏に、參詣の團體が夥しく通るのを、庭の垣根越しに見たり、昔は無かつた乘合馬車や乘合自働車が、頻繁に通るのを、婆婆の陽氣な音として、感慨を寄せて耳に留めたりしてゐた。風流氣のあつた祖父が自分で工夫して作つたといふ庭には、深山になぞらへて、綠葉の濃い樹木の側に岩石が積上られ、その上に小祠が安置され、岩の間から水が落ちて泉水に流込むやうになつてゐるが、近年は家の者がかまはないので、庭は汚れて泉水は罅が入つたまゝになつてゐる。彼れは、鬱氣を吐きに庭へ下りた次手に、掃除をしたり枯枝を切つたり石を直したりなどして、泥溝のやうになつてゐる泉水をも渫つて淸水を湛へた。泉水が久振りに泉水らしくなつたのを喜んで、弟がそこへ金魚を放つた。

安兵衛は獨りで泉水の傍に蹲んで、可憐な金魚の泳ぐのをたび／＼見入つてゐた。何時となしにその數の減るのが不思議に思はれたが、氣をつけて見るとそれは蟹に傷けられるのであつた。……罅隙から洩れて水が減ると、奇怪な形をした蟹が横匍ひに匍つて、美しい金魚の後を追つて行くのを生物界の面白い現象として見てゐた。（家庭や社會や、人間同士の間の事件にのみ、心を使つて、喜んだり惱んだりして來た彼れには、こんなことでも珍らしく思はれた）

雀や鳥が飛んでゐるのも、生れてはじめて氣がついたやうに心に留まつた。蟻は群をなして營々と餌を集めてゐる。拂つても拂つても、蜘蛛は庭の樹木に巣を掛けてゐる。巣を目掛けて紙片でも拋付けると、蜘蛛めが慌てゝ、自分で網の目を切破つて邪魔な紙片を地上へ落して、新たな糸で急がしく綻ろびを縫つてしまふ。

安兵衛はかういふ風で、時々は狹い庭先の田舍景色や、小さな生物の生々した働き振りを見て、退屈を紛らせることもあつたが、蟄居の日が重なるにつれて彼自身の若い身體に溜つて來る活力の重荷に堪へられなくなつた。清新な田舍の空氣を吸つて粗食にしろ腹一杯喰つて何もしないでゐるため、一時痩せてゐた身體にも稍々肉がついて來た。そして五年間の養子生活の思出や、目前の世界の光景が、（思出すにつれ、見るにつれ、聞くにつれ）彼れの全身を操つたり呵んだりした。……只ならぬ魂をもつてゐるらしい面をして、手製の網の一端に頑張つて、蠅や蚊の引掛のるを待つてゐる蜘蛛のふるまひも、身についてゐる剪刀を持つて金魚を追つてゐる蟹の動作が、安兵衛自身、蟹となり蜘蛛と化したやうに、あの事その事を連想させた。……糸を吐けば吐ける、剪刀を働かさうと思へば働かせると、彼れは自分に具けつて持つてゐる者を顧みた。

「おれは本來は馬鹿ぢやないのに、何たる知慧のないことをしたものだ」

夏が過ぎると、泉水には一尾の金魚もゐなくなつたが、蟹の姿も見えなくなつた。蜘蛛も庭先で働かなくなつて、座敷の中の何處かにをり〳〵暗憺たる姿を不意に現はしては、安兵衞を驚かした。

「時候はよくなつたが、お前はこれからどうするつもりだい。學問をした者が今から百姓になる譯には行くまいから、また東京へ行つて今度は獨立して、何か仕事をやるつもりになつてゐるのだらうな」と、ある日、兄が不意に部屋へ入つて來て、改まつた顔して坐り込んで云つたので、安兵衞は驚いた。

「僕も東京へ行つて二三ケ月も搜したなら、相當な職が見當らないことはあるまいが、その間の費用は用意して行かなきやらないからね」と、重つたるい口で云つたが、兄にその費用を貸して呉れとは云はなかつた。

「お前が何時までもブラ〳〵遊んでゐても果てしがないから、確かりした目的が極まつて出掛けるのなら、多少の費用は工面してやらないこともないが、僅かな月給にでも有付いたら、今度は眞面目に奮發して身を立てる氣になつたのだらうな。相當に贅澤をしてゐたお前が、こんな田舍でまづい物を喰つてぢつとしてゐたのだから、懲りたらう。……しかし、よく辛抱してゐたものだ」

安兵衞は默つてゐた。彼れが養家にゐた間に、磯で買つた魚か、家の畝に出來た野菜かを手土産にして、東京見物に來て幾日も泊つてゐた時には、弟の前で身をひかへて小さくなつてゐた兄が、この頃は兄として弟を懲らしめる態度を取つてゐるのが、安兵衞には一圖に不愉快に思はれてゐた。……養家にゐるのでは家が家のやうな氣がしないし、父祖の家へ歸つて來ても兄の者と定つてゐる今では、三十近い自分などが安んじて身を置くところではなくなつてゐるのを、安兵衞は身に染みて感じてゐた。

「今だから云ふのだが、お前が離緣になりかけた時には、平塚の叔父さんや厚木の佐助さんなんかの意見では木崎の家

へ泥を塗つた者は當分家へ寄つせけない方がいゝ。いゝ歳をして學問もある人間が自分で自分の始末のつかんでいふ方はないといふことだつたが、老父が心配するし、おれも、この上もつとひどい間違いでも持上つちや溜らないと思つたものだから、おれが東京へ出掛けて、默つてお前を連れて戻つたのだ。實印を使つたとか、詐欺したとか、もつと惡い噂が、誰れが觸れまはつたのか、この近所で擴がつて、裁判にかゝると、隨分重い懲役を喰ふんだと云はれてるんで、おれは言譯は出來ず、人に顏が合はされないので、村會にも顏出ししなかつたのだ。田舍は口が煩いんでな。……しかし、堀口を出てから、もう半歳も立つてることだし、東京は廣いのだからお前が職業を捜すのに別段障りはないだらうね」

「さあ。……」安兵衛が身の入らない返事をすると兄は顏を曇らせた。

「東京で身が立てられないやうだと、別な方法を考へなければならない。」

「人間一匹喰つて行く道のつかないことはあるまい。明日にもいゝ考へが出て來るかも知れないから、まあ急らないでゐるんだな」と、安兵衛は度胸の据つたやうに云つて、兄を呆れさせた。

親類が最初云つてゐたやうに、追放出されたまゝ構ひつけられなかつた方が、體のいゝ監禁に甘んじてゐるよりはどれほど張合ひがあつて男らしくもあつてよかつたか知れないと、彼れは考へたが、それでは今夜にでも監禁を破つて勝手に飛出すかと云ふと、さうは出來なかつた。

夏のうちは、夜になつて凉みがてら、こつそり庭から出て、近所の田圃道をぶらつく外には、殆んど外へ出ることのなかつた彼れも、霖雨が名殘りなく霽れて、秋の日の冴えたある日、ふと思立つて、家の者にも云つて、大山詣りに出掛けた。乘合馬車は通つてゐたが、それには乘らないで、麓の町まで歩いて、それから草履に穿變へて、溪流のほとりを辿

り、險しい男坂の石段を登つて、阿夫利神社の拜殿まで行つた。故郷の伊勢原をはじめ、彼れの知つてゐる相模平野の村々は一目で見渡された。長い間蟄居してゐた後だから、熟知してゐる土地でも珍らしくつて、胸が開いて邪惡な思ひも一時清められた、信心の薄い彼れも神前に額ついて、參拜記念として家への土産にお札をも二三枚買つて、歸りには女坂を下りて、不動堂へ寄つて、日暮れ前に家へ歸つた。町の休み茶屋で手輕な中食を採つたゞけで、酒も飲まず、無論知合ひの家へ寄つたりなどしなかつたのだが、ノロノロ歩いて、山を見川を見野面を見て暇を潰してゐたゝめに、歸りが遲くなつたのであつた。

時節外れなので、參詣人が少く、たゞの遊覽客らしい人もあまり見當らなかつたし、知人に出會つた覺えもなかつたのだが彼れの姿は往戻りの間に幾人もの土地の人の目を惹いてゐたのであつた。「あれが伊勢原の末崎の次男坊だ」と指差して囁をする者もあつた。

留守のうちに、兄嫁の好意であらうか、部屋の中が整頓されて、隅々までも綺麗に拭磨かれて、汚れた座蒲團も新しいのに取替えられてあつた。安兵衞は珍らしく快活な氣持になつて家の者に山の話などして宵のうちを過したが、兄嫁は、豊間町外れの知人の家で聞いて來た無氣味な話を、安兵衞にも傳へた。

「どうもこの土地の男らしいつて云つてるんですよ。年齡はまだ若くつて、大變逃足が早いんですつて」

先月あたり、相模川に近い田圃道に、夕方變な男が現はれて、通掛りの若い女に惡戯をすると噂があつたが、この頃實は大山街道から秦野道の方が物騷になつたらしい。二三日前の夜にも、ある家の主婦が酷い目に會つた。自分の恥だから表沙汰にしないでゐるが、外にも同じやうな目に會つたやうな女があると云はれてゐる。そして、誰の口から出たともなく、その惡漢の人相や風體も分つてゐると兄嫁が恐れと、興味ともつて話すのを聞いて、安兵衞は、

「本當でせうか。山の中ぢやないし、大きな聲を出せば、誰れかが聞きつけるだらうと思はれるけれどな」と、何喰はぬ顔で應へたが、さういふ暴行がこの界隈で行はれてゐるといふことが、彼れの心にある幻想を起させた。自分の部屋へ入つて寢床に就いてからも、自分の目で見て來た大山道の冴えた秋景色と、兄嫁の話とが、他に用事のない彼の心の中一杯に動いてゐた。

三十足らずで獰悪な顔した、書生風の、逃足の早いその男を、安兵衛自身であるやうに思つたりした。その男を彼れは憎めなかつた。蔑視(さげす)まれなかつた。……自分の靈魂(たましひ)が夜な／＼、裏木戸から脱出て、相模川のほとりや、田圃道に現はれて、通りかゝる女を待伏せしてゐるのぢやないかと思つて、獨笑を浮べた。

彼れは、祭禮か祝い事があつた時だけ、兄のお相手になつて酒盃に親しむ外には、酒の匂ひを嗅いだこともなければ、白粉の匂ひを嗅いだこともなくつて、半歳を過して來たので、物足らぬ思ひは五體一杯に蓄積してゐた。

その後、かの痴漢の噂は嘘だつたのか、兄嫁(よめ)からも誰れからも聞かされなかつたが、ある晩澄切つた月の光に誘はれて、裏木戸から出て、花の散つた溝萩や、夜目にも深江の色を見せてゐる彼岸花で縁(ふち)を取られてゐる小溝の側を歩いてゐるとふと向うから、風呂敷包を抱へた肥肉(ふとりじし)の女が急ぎ足でやつて來るのに目が留つた。月の光を浴びたその女のうは、土くさい田舍女とは思へないほどに美しかつた。

ふと彼れの目は据つて、胸は轟いたが、すると、かの女は血相を變へて、下駄を脱棄てゝ裸足(はだし)で、横へ外れて、芋畝の中を驅出した。安兵衛は呆氣に取られて見てゐたが、譯が分ると、可笑しいよりも恐ろしくなつて、自分も驅けて戻つて裏木戸を堅く締めて、そつと部屋へ入つた。……が、かの女の顔は頭腦に彫付けられて離れなかつた。自分の顔がかの女によく見覺えられたことも恐ろしかつた。それでその夜はさん／＼苦しい夢に魘されたが、部屋が距つてゐるの

で誰れも呼醒ましてくれなかつた。

明け方の鷄の聲に目を醒ました彼れは、裏口から出て、昨夕のところへ行つて見たが、女の脱棄てた下駄は、もはや其處になかつた。風は薄着の肌に寒かつたが、あたりの野面の眺めは神々しいやうであつた。まだ人一人起きて出てゐないで、月の光は宵のうちよりも寂しい色を小溝のあたりに湛へてゐた。

「おれは碌でもないことばかり考へてゐたのだ」と、過去のすべてを悔ゐて、一時に涼しい氣持になつた。東京へ出て働くことは兎に角、今日にも兄の前に手を突いて、百姓業でも養鷄でも、田舍で自分の力で出來さうなことを相談して新たに心を入變へてやつて見ようと、意氣込んで家へ歸つたが、不思議にも、庭木戸は内から締られてあつた。

まだ皆んな眠つてゐるらしいのにと怪んで、表へ廻つて見たが表の戸も鎖されてあつた。聲を立てて呼起すのも事々しいので、氣がひけて、暫く茫然として家のまはりを歩いてゐたが、やがて、垣根へ上つて庭木につかまつて庭へ入つた。幸ひに、部屋の雨戸はサルが嵌つてゐなかつたので、そつと開けて入つて寢床に就いて、知らず〳〵再び眠つた今度は夢も見なかつた。

寢ることなら、何時まで寢てゐようとも、誰れにも構はれないのだから、遲くまで目を瞑つてゐたが、兄や弟が每日出掛けるところへそれ〴〵出掛けたあとで、起上つて、顏を洗ひに出ると、井戸端では兄嫁がひとり熱心に洗濯をしてゐた。

「今日もいゝ天氣だ」と、安兵衛は挨拶がはりに云つて、釣瓶を手にしたが、ふと氣ついて見上げた兄嫁の顏には、不斷の愛嬌が全く影を收めてゐた。

「不用心だから、庭木戸は締めときましたよ」

兄嫁の意地の惡さうな言葉は、安兵衛の胸を衝いた。

「あなたが締めたんですか、僕は寢づらかつたから、ちよつと散歩に行つてたんですよ」

彼れは、努めて穩かに云つたが、顏色は見る〳〵變つた。兄嫁は迂散くさい目で、その變つた顏色を見据ゑながら

「この頃は物騷だから、夜中に外へは出なさらない方がいゝでせう」

「どうしてです：僕は昨夕はじめて外へ出たんですよ。それも夜明け前だつたのです」安兵衛は例になく、辯護するやうな口を利いたが、辯護の甲斐のないことはよく分つてゐたので、それきり默つて口を漱ぎ顏を洗つてゐた。……世間の人々や親類などの刺立つた目に自分が取圍まれてゐることが今でも見えるやうだつた。兄嫁の目にも、解けがたい疑ひが宿つてゐるらしかつた。

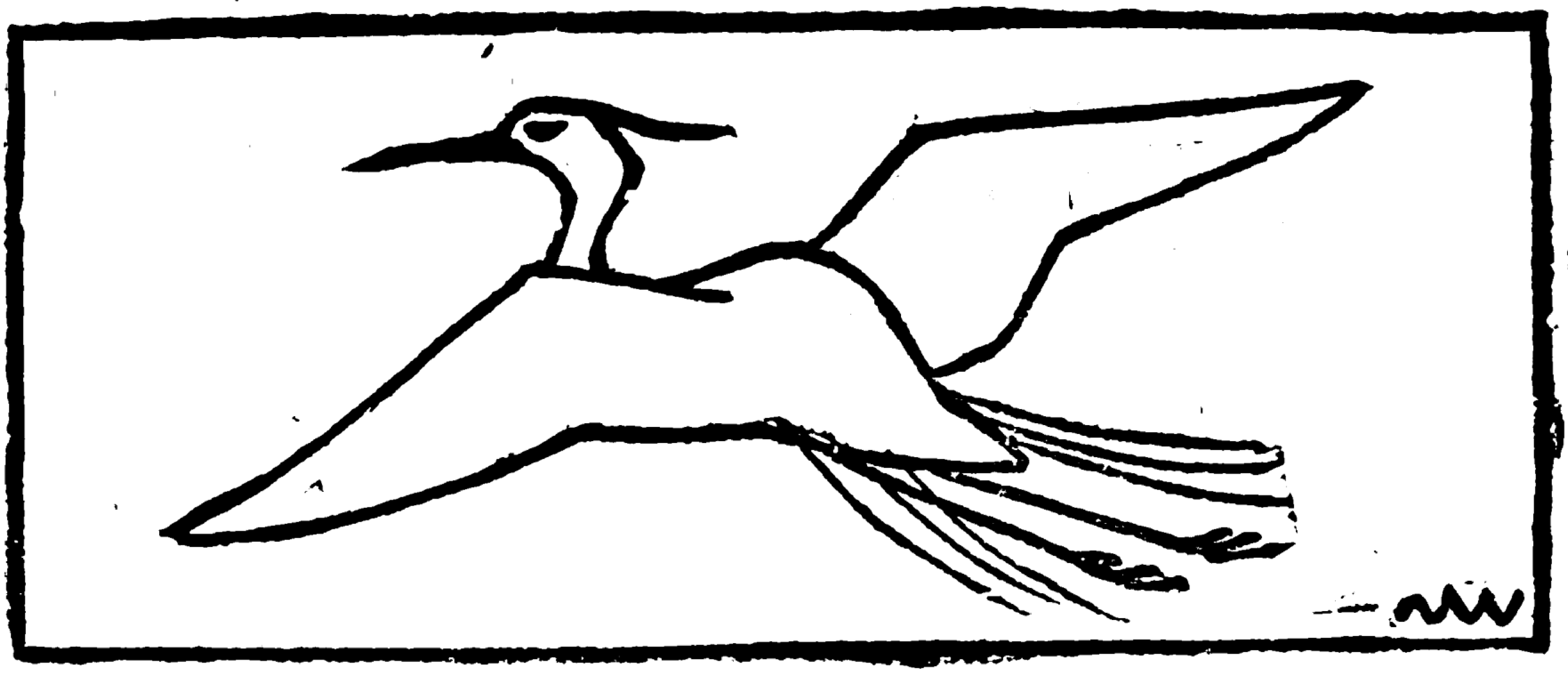
兄嫁は洗濯を中途にして家へ入つた。

「おれを怖がつてるのか」安兵衛は自分の部屋に歸つて、所在なさに横になつて、朝餐を食ふのも遠慮してゐた。自分の監禁の縛めが永久に解けさうにないのに打萎れた。

「兄嫁が此間話してた男に、おれは何故なれない」

安兵衛はそれを牴牾しく思つてゐると、月の光で見た田舍女の影が、まざ〳〵と目の前に立つた。……ふと、その影が消えたかと思ふと、大きな蜘蛛が一匹、何處からか匐出して頭の側へやつて來た。彼れは手許の洋書——蟄居後讀むだけは讀んでゐる自分の專門に關した有名な洋書——を振上げて、その蜘蛛を打据えた。足も頭もバラ〳〵になつた奴を、庭先へ拋棄てると、その折庭へ入つてゐた鷄は、餌でも呉れたのかと思つて急いで近寄つた。

安兵衛も昨夕からたび〳〵出歩いてゐる上に、朝餐も食べないのだから、空腹に堪へられなくなつて來た。



戯曲

墮落

——二幕——

谷崎潤一郎

人物

橋本澄子

山田禮二　澄子と同棲して居る男

三好數馬　澄子を戀ひして居る男

秀子　或る小劇場の女優

花子　カフェエの給仕女

時　現代

所　東京

第一幕

場面——或の街上、「ヴイオレット・カフェエ」と云ふ看板の出たカフェエの前。冬の深夜。

カフェエは街の曲り角にあつて、ガラス戸の鎖まつた間口が、前面と、向つて左側と、兩方へ面してゐる。餘り立派でない、小さなカフェエである。内部に明りが附いて居るけれども、もう客はないらしく、ひつそりして居る。上手に商店らしい隣家の一部が見える、が、それはすつかり戸を締めて寢鎭まつて居る。

路はカフェエの前を過ぎ、一つは一直線に前方下手へ入り、一つはカフェエの角を曲つて丁字形に舞臺の奧へ伸びて居る。

幕が開くと、奧の路を、外套の襟を立てゝ中折を眼深に被つた一人の男、――三好數馬が、影が動くやうに力なく前方へ歩いて來る。そして、カフェエの前へ來ると重々しい足取りになり、通り過ぎようとして二三遍躊躇した後、殘り惜しさうに見返りながら、遂に思ひ切つて上手へ行つてしまふ。と、正面のガラス戸を少し明けて、給仕女の花子が首を出す。

（花子）お〻寒！今夜は何て寒い晩だらう、――

花子、寒さうな恰好で往來を見廻す、間。

（澄子の聲）（ガラス戸の内で）ちよいと、花ちやん、――何してるの？

（花子）まあ、寒いツたらないわ、――

（澄子の聲）ちよいと！何してるのよ、

（花子）どうしたんだらう今夜は、――まだ十二時だつて云ふのに、――淋しい晩だわね。

（澄子の聲）駄目よ、そんなに待つたつて。もう晩いんだもの、――お氣の毒樣！

（花子）何がさ、春ちやん、――いやだよ、ほんたうに！まだ醉つ拂つて居るんだよ。

（澄子の聲）あら！もう醉つてなんぞ居やしなくつてよ、

（花子）醉つてない？（後ろを振り向く）醉つてないことがあるもんか、散々Tさんに飮まされた癖に！ちやんと知つてるわよ、――ね、さうでせう？――

(澄子の聲) いゝわよ、たんと冷やかして頂戴。

(花子) あゝあ、詰まらない晩だつたこと、春ちやんばかり面白くつてさ。

(澄子の聲) ちよいと、そんな事ばかり云つてないで、もう歸らない？

(花子) えゝ、もう歸るわ、一緒に行きませう、——(空を見上げる)まあ、星が綺麗だこと、此の鹽梅ぢや明日もきつとお天氣だわね。

花子戸をしめて中へ這入る。間もなく内部で店をしまふ支度を始め、電燈を薄暗くする。上手より三好數馬が再び引返して來る。店がしまつたらしいので、大膽に軒下へ歩み寄りながら、戸の中を覗ふやうにして曲り角を折れて行く。と、左側の、一番奥のガラス戸が開いて、羽織の上に毛絲の肩掛けをした花子が出て來る。三好はハッとして立ち止まる。花子ちよつと怪訝さうに三好を見それから店の方を振り返つて聲をかける。

(花子) 春ちやん、早くおしよ、何してるの？

(澄子の聲) お待ち遠さま、今直ぐ、——

(花子) 長いわねえ、早くして頂戴よ、寒いぢやないの。

さう云つて、又チラリと三好を見る。三好は棒のやうに突つ立つたまゝ、花子に話しかける。

(三好) あの、春子さんはおいでですか。

(花子) えゝ、居ますよ、

(三好) 僕、ちよつと會ひたいんだけれど、——

(花子) 今出て來ますよ、——春ちやん、誰方か會ひたいッて方が入らしつてよ。

(澄子の聲) だあれ？ほんたう？

（花子）ほんたうだわよ、嘘なんか云やしなくつてよ、――

三好、花子の出て來た戸口へ近づく。中から澄子が現れる。花子と略々同じ服裝、片手に毛絲の手袋を嵌め、片手にもう一つを嵌めながら出て來て、三好を見ると同時に愕いて立ち竦む。

（澄子）あら、――
（三好）澄子さん、――暫くでした、
（澄子）ほんたうに暫く、――御不沙汰いたしました、
（三好）此方に居らつしやることは疾うから知つて居ましたけれど、お訪ねしていゝかどうかと思つて居たもんですから、――でも、お變りはありませんか
（澄子）はい、――あなたもお變りはございませんの？
（三好）有り難う、僕は相變らずです、――しかし、あなたはもうお歸りになるんぢやないですか。お引き止めして惡くはないんですか。
（澄子）いゝえ、そんな事は、――
（三好）若しお差支へがないんなら、――ちよつと、――五分か十分――お話したいんですけれど、――
（澄子）構ひませんわ、今夜はいつもより早いんですから。
（花子）春ちやん、それぢやあたし、先へ行つてよ、
（澄子）さう、――済みませんけれど、どうかお先へ。
（花子）左様なら、お休み、

（澄子）左樣なら、

花子、二人に會釋をし、肩掛けの襟をかき合はせてスタスタと奧の路へ去る。三好は花子と反對に、前方の路へ歩いて來る。

（澄子）（まだ戸の前に佇みながら）數馬さん、宜しかつたら、中へお這入りになりませんこと？誰も居りはいたしませんの、

（三好）いゝえ、表で結構です、此の邊をうろつきながら話をしませう。

さう云つてカフエエの正面へ來、軒下に身を寄せる。澄子は戸口をしめ、うなだれがちに三好の傍へ歩いて來る。

（三好）大分寒い晩ですね、——中でなくつても此處で結構です、ちよつと立ち話をさして頂けばいゝんですから。

（澄子）でも、お風を召すといけませんわ、

（三好）なあに、そんな事はありません、僕よりかあなたにお氣の毒です、——僕はあなたに、斯うしてお目に懸りに來るのはよくない事だと思つたんですが、さう思ひながらついやつて來てしまつたんです。話と云つたところで、別に何も云ふことはないんですけれど、……

（澄子）よくいらしつて下さいました、——私、もうあなたにはお目に懸れないと思つて居たのでございます。

（三好）あゝ、さうでしたか、——あなたがさう思つて居らつしやるのに、やつて來るなんてほんとに僕が悪いんです。僕が意氣地がないからです。——澄子さん、どうか勘忍して下さい。

（澄子）（三好の言葉を殊更避けるやうにして）いゝえ、何もそんな事なんか、……それよりかあなた、此の頃も宅の方へおいでになりますの？

（三好）お宅へはもう暫く伺ひませんが、僕は此の頃、何處へも顔出しをしないんですよ。

（澄子）それぢやあれつきり、内の者にはお會ひになりませんの？母や兄は此の頃どうして居りますでせう？

（三好）お母様は、あれから一度お目にかゝつた時、あなたの事を仰つしやつて泣いておいででした。山田君が監獄へ行かれた時にも、あなたの事が新聞に出たりしたので、大さうお嘆きになつたさうです。僕はそんな事を圭之助君から聞きました。今更あなたにお話したところで、仕様がありませんけれど、……

（澄子）母には氣の毒でございますが、それも覺悟をして居たことでございますから、まあ、かうなるのも仕方がございませんわ。兄はさぞ怒つ居りますでせう。

（三好）圭之助君の事はよく知りません、今では圭之助君だつて、僕の相手にはなつてくれないんですから。――僕は獨りぼつちですよ。

澄子。うなだれて言葉なし。

（三好）――山田君は、もう出て來られたさうですね？

（澄子）はい、此の間出て參りました。

（三好）さうしてあなたは、いつから此處へお勤めになつて居らつしやるんです。

（澄子）あの、山田が牢へ參ります時からでございます、――こんな事をしないでもと思ひましたんですけれど、女優になるか、でなければカフェへ出ろと申しますもんですから、――

（三好）お母様も、それを仰つしやつておいででした、何も斯う云ふ所へ出てくれないでもよささうなものだのにッて。――

（澄子）母としたらきつとさう申しましたでせう。――けれど私は、もう母の子ではないのでございますもの　母もその

積りで居りませうし、私だつてさう思つて居るのでございます。私は、山田がしろと申すことなら、どんな事でもしなければならないと存じますわ。

(三好)　山田君は、矢張り根津に居るんですか？

(澄子)　はい、

(三好)　あの、先のお宅に？——

(澄子)　はい、

(三好)　あなたは毎晩、こんな時刻に彼處までお歸りになるんですか？

(澄子)　はい、——もつと晩くなる時もございますの。

(三好)　だつて、もう電車がないでせう、

(澄子)　いつも大概、歩いて歸りますの、

(三好)　大變ですね、此處から彼處までは半道ぐらゐあるでせうね、

(澄子)　でも、馴れましたからそれ程には思ひませんわ、

(三好)　山田君は、此の頃また淺草の方へ出て居られるやうですね、

(澄子)　はい、たまに、芝居がはねた時分に、寄つてくれることがございますの、——時々一緒に歸ることがございますの、極くたまですけれど、……

(三好)　それぢや、山田君も先のやうではなくなつたと見えますね、

(澄子)　えゝ、いくらか違つたかも分りませんわ。山田も苦しかつたでせうが、好い經驗をしたんですから、——

（三好）あゝ、山田君は幸福です、少くとも僕よりか。——

（澄子）……

（三好）——もうあなたをいぢめるやうな事は、——打つたり蹴たりするやうな事はないんですね、

（澄子）……

（三好）澄子さん、あなた氣持ちを惡くして居らつしやるんですか。こんなに山田君の事を聞いては、惡かつたんですか。

（澄子）いゝえ、……そんな事は……

（三好）惡かつたら赦して下さい、僕はただ、此の頃のあなたがどう云ふ風に暮らして居らつしやるか、それを知りたかつたものですから。

（澄子）でも、私はもう、あなたに心配して頂くだけの資格はないのでございます。

（三好）しかし心配するとしないとは、僕の自由にさして下さい、その自由だけは僕に與へて置いて下さい、それはあなたの爲めではなく、寧ろ僕の爲めなんですから。——それを取り上げられてしまつては、僕はあんまり淋し過ぎます。僕の不運があんまりひど過ぎます。ねえ、澄子さん、さう思つては下さらないでせうか。

（澄子）何卒さう仰つしやらないで下さいまし。私、何とお答へしていゝか分りませんから、——

（三好）山田君は、此の頃はあなたを大切にされるでせうか？——若し少しでも僕を憐れんで下さるなら、何卒僕の爲めに、僕の幸福の爲めにそれを聞かして下さいませんか。そのくらゐな事はして下すつてもいゝだらうと思ひますが、

……

（澄子）山田は私を愛して居ります、――

（三好）そしてあなただけを愛して？――外の女を愛さないで？――

（澄子）……

（三好）あなたを愛すると云ふばかりでなく、以前のやうなひどい目に遇はせないで、ほんたうに大切にして――居られるでせうか？

（澄子）……數馬さん、どうか赦して下さいまし、もう其の事は聞かないで下さいまし、……そんな風に仰つしやらないで、外の話をなすつて下さいまし、お願ひですから。……さうして下さらないと、斯うしてお目に懸ることが出來なくなつてしまひますから。……

（三好）でも僕はそれが聞きたいんです。善いにつけ悪いにつけ、それを聞かして頂ければ、せめても僕はお目に懸つた效があるんです。――あなたは山田君が、いゝ經驗をした、いくらか昔とは違つたやうだと仰つしやつたぢやありませんか。

（澄子）そりや、違つた所があるやうには思ひますけれど、……

（三好）澄子さん、何卒僕に話して下さい、本當の事を、――

（澄子）……

（三好）僕はあなたが、今でも苦勞をして居らつしやる、――前より一層つらい思ひをして居らつしやると云ふ事を、或る人から聞いたんです。山田君は牢から出て來てもちつとも、改心した樣子がない、相變らずあなたを苦しめて居る。口ではあなたを愛すると云ひながら、矢張り昔のやうに打つたり蹴たり、外に女を拵へたり、それはそれは非道い目

に遣はせて居ると云ふ話を、聞いたんです。その噂は本當ではないのでせうか？山田君は何の爲めに、あなたをこんな所へ奉公させて置くのでせうか？ねえ、澄子さん、どうか僕には隱さないで下さい、――少くとも僕にだけは、――

（澄子）でも、それをお話したところで、何にもなりはいたしませんもの。

（三好）いゝえ、ならない事はありません、僕に取つてはそれは何かになるのです。くどいやうですが僕はあなたの苦しみを聞いて、決してあなたをお救ひしようの、何のと云ふのぢやないんです。そんな資格が僕にない事はよく分つてゐるんです。僕は自分を救ひたいんです。あなたが苦しんで居らつしやるなら、その苦しみを知らして頂いて、あなたに對する悲しみを深めたいと思ふんです。――ねえ、何卒ほんたうの事を聞かして下さい、世間の噂が間違つて居るならそれに越した事はありませんが、あなたは今でも苦しんで居らつしやるんぢやないでせうか。

（澄子）數馬さん、――あなたに餘計な御心配をかけたりしては濟まないと思ひましたけれど、では隱さずに申しますわ。――世間の噂は本當でございます、山田は今でも、昔と變らないのでございます。

（三好）ぢや、今でも矢張り、打つたり蹴たりするんですね？

（澄子）はい、――出獄いたしましてから、いくらか人間が變つた事は變りましたが、でも前よりか一層惡くなりましたの、氣短かになつて、根性が僻んで來て。――私は毎日打たれない日はないのでございます。

（三好）でも山田君は、毎日あなたと會つては居られるんですね、

（澄子）そりや會ふことは會ひますれど、小遣ひ錢さへ取つてしまへば、直ぐに何處かへ行つてしまひますの。少しでも餘計稼いでてやれば、機嫌がいゝのでございます。

（三好）そしてその金は、何に使つてしまふんでせう？

（澄子）何に使ひますか、それは私には分りませんわ、そんな事を考へたくはございませんわ、――私はただ、山田の喜ぶ顏が見たいのでございます。打たれるよりは笑つて貰へる方が、誰しも嬉しうございますから。――
（三好）ですが、それであなたは、山田君を救ふことが出來るのでせうか？
（澄子）救ふと云ふことも、以前には考へたこともございましたが、今の私に、山田を救ふなど云ふ立派な事がどうして出來ませう。そんな事は昔の夢でございます。
（三好）あゝ、――（何事をか云はうとし、溜息をついて沈默する）
（澄子）私はあなたがたの前で、きつと山田を愛してやる、愛の力で救つてやると申したこともございました、――けれど私は、そんな强い人間ではなかつたのでございます。
（三好）――考へて見ると、人間てものはみんな弱いんです、誰も强い者なんかありやしないんです、――
（澄子）ほんたうにさうでございますわ、――ですから私はさう思ひましたの、自分はただ山田を愛してやればいゝのだ。山田を救はうとするよりも、山田と一緒に墮落してやるのが、ほんたうに山田を愛する道だ、そして結局は救ふ事にもなるのだと、さう考へて居りますの、山田がみんなから爪彈きされるやうな人間なら、僕だつて山田と同じに、その爪彈きを受けなけりやなりせんわ。
（三好）そりや、あなたが山田君を愛するとしたら、そこまで行かなけりやならないでせう。そのお心持ちは、僕にもよく分るやうな氣がしますよ。
（澄子）あたは山田を、悄いとお思ひになるのでせうか？
（三好）いゝえ、悄いとは思ひません、――僕はただ、斯うなつては山田君を羨ましいと思ふばかりです、山田君の惡

人なのが羨ましいばかりです、——山田君は僕に勝ちました、なぜ勝つたかと云へば、僕より惡人だつたからです。山田君は自分の惡をどしどし募らせて、そしてその惡であなたの同情を買つて行きます。惡い事をすればする程、一層シッカリとあなたの愛をせしめて行きます。——僕は山田君の持つて居る惡と云ふ武器を、つくづく羨ますには居られませんよ。

(澄子) あゝ、ほんたうにさうなのでございます、私にしたつて、山田があんな惡人でなければ疾うにあの人を捨てて居たかも知れませんけれど、惡い人だと思ふ傍から、その惡いのが可哀さうでならなくなつて、知らず識らず斯うなつてしまひましたの。今ではもう、その惡いのを憎むことさへ出來ないのでございます。

(三好) そりや、あなたがさう仰つしやるのは、——世間の人は兎も角も、僕は御尤もだと思ひますよ。僕は、——悲しい事ですが、——今でもやつぱり、あなたの氣持ちを理解する事が出來るのです。僕は山田君に欺されました、欺された上にも負かされました、そしてあなたには背かれました、けれどやつぱり、あなたが山田君を惡人だから可哀さうだと仰つしやつて、僕を捨てて山田君の所へ行かれた心持ちを、少しも憎む氣にはなれないのです。そこがあなたの好い所だ、あなたの美しい所や貴い所がそこにあるのだと、今でも僕はさう云ふ風に思ふのです。山田君にしたつて、何もあたの同情を買はうとか、僕を負かさうとか云ふ積りで、殊更に惡人になつて居るのぢやないんだし、あゝ云ふ生れつきなんだと思へば、そりやほんたうに可哀さうです。あなたがあの人を見捨てゝ、自分ひとり善人になる譯に行かないと仰つしやるのは、そりやほんたうに無理もありません。あなたのやうな性質としては、さうなるのが當り前だと云はなけりやなりません。山田君も可哀さうだし、あなたも可哀さうだ、そして僕だつて可哀さうだ、誰一人可哀さうでない者はないんだ、——僕は全くさう思ひますよ、僕はせめてもあなた方を恨むことが出來ればいゝん

ですけれど、それが出來ないのが不運なんです。捨てられても背かれても、それがみんな尤もだと思はれるし、誰を恨むあてもないのが、——いやそれどころか、猶更その人の優しさを忘れる事が出來ないのが、——

(澄子)　數馬さん、どうぞもう其の話は、——何卒勘忍して下さいまし、みんな私が惡いのでございます、——私あなたにお目に懸らなけりやよかつたのでございます。

(三好)　あなたが惡いと云ふことはありません、誰一人惡い者なんかありやしないんです、あなたも、山田君も、そして僕も、みんな當然あるべき所にあるんだと云ふやうな氣がする。それで居てあなたも苦しいし、僕も苦しい……山田君だつて惡い事をしながらも、やつぱり苦しくないことはないでせう。山田君は惡人だから苦しいのだし、僕は善人だから苦しいんです。僕も今ぢや山田君と同じやうに、誰にも相手にされないんですから、——僕は善人でありながら、——いや善人であるが故に、誰にも同情されないで、小さくなつて、獨りでぢつと苦しまなけりやならないんですよ。僕はもう、疾うの昔に圭之助君に愛憎を盡されてしまひました。此の頃ではあなたのお母樣までが、僕の意氣地なしを笑つて居らつしやるんです。誰一人として僕を憐れんでくれる者は、僕の氣持ちを理解してくれる者は居ないんです。

(澄子)　でもあなたのお心持ちは、私にはよく分つて居るのでございます、——今でも私には、——

(三好)　それや、あなたは分つて居て下さるでせう、僕はそれを有り難いと思ひます、ですが分つて居らつしやる事が、今では何になるでせう。

(澄子)　ですから私、お詫びして居るのでございます。

(三好)　いゝえ、僕はあやまつて頂いても仕方がないんです、僕はあなたにどうして頂かうと云ふのぢやないんですけ

れど、ただ此の悲しみを、――あなたと僕とが、斯うなつてまでお互ひに理解し合つて居ると云ふ悲しい運命を、考へて頂きたいんです。僕があなたを山田君に讓つたのは、僕の方が山田君より一層あなたを愛したからです、一層あなたの美點を認め、あなたを理解して居たからです、そして僕の其の氣持ちが、あなたにはよく分つてゐました、外の者には分らないでも、あなただけは分つて居て下さいました、僕はさうする方が眞にあなたを愛する道だと思つたからこそ、あの時山田君に讓りました。けれど、澄子さん、――僕とあなたとが、斯うなつてまで猶お互ひにその心持ちを感じ合はねばならないと云ふのは、あんまり苦しい事ぢやないでせうか。僕は苦しいからどうかしてくれと云ふのぢやありません、ただ苦しいのを訴へて居るだけなんですが、何卒僕の云ふ事を愚痴だと思つて聞いて下さい、――あなたは今でも僕を理解して居らつしやる、恐らく前よりも一層よく理解して下さるんだと、僕はさう信じて居ます。僕は自分の氣持ちに照らして、それを疑ふことは出來ないんです。僕だつて、斯うして別れてしまつてから、猶更あなたの心持ちを感じる事が出來るんですから。――僕の苦しみはそこにあるんですよ、僕はそれだから悲しいんですよ、僕は、あなたに忠實である爲めには、あなたに對する自分の愛を立證するには、ますます遠くあなたに離れて行かなけりやならない。あなたと僕の心持ちがピッタリ一致すればするほど、僕はあなたを山田君に讓つて、そこに苦しんで居られる優しいあなたと云ふものを、遠くから眺めて居なけりやならない。離れて居ると云ふ事が少しもお互ひを忘れさせる原にはならないで、却つてそれが二人の心をだんだん近く惹き寄せてしまふ。あなたも僕もそれをハッキリ感じて居るんです、――ねえ、澄子さん、あなたはさうでないと仰つしやるでせうか?

(澄子) 數馬さん、私あなたに、何も彼も隱す事は出來ないのでございます、うそをつく事は出來ないのでございます、けれどそれを云ひましては、山田に濟まないと存じますから、――

（三好）それでもあなたは、僕と遊つて山田君と云ふものが居られるからいゝのです。あなたは出來るだけ山田君を愛してお上げなさい、——愛さうとする努力に依つて幸福を築いて下さい、僕はそれを祈つて居ますが、しかしあなたは、いつになつたら僕をお忘れになるでせうか？あなたが山田君をお愛しになるのでしたら、僕を忘れてしまふ時が來なければならないと思ひますが、……

（澄子）ほんとうに私が惡いのでございます、——私から先に忘れなけりやならないのでございます、

（三好）僕はあなたに、決して忘れて貰ひたくはないんですけれど、——若しさう云ふ時が來たら、きつと悲しいだらうと思ひますけれど、でも又あなたさへ忘れて下すつたら、僕も斯うまで思ひ詰めずに居られるやうな氣もするんです。僕は、——正直の事を云ふと、——あなたが此處に居らつしやると云ふ話を聞いてから、もう今迄に何度此の前を通つたか知れません。今夜にしたつて最初から寄る積りではなかつたのに、つい我慢が出來なくなつてお訪してしまつたんです。僕はあなたが、もうお前には會へないから歸つてくれと仰つしやつて、いつそ突き出して下さればいゝと思つて居ました。そりや僕の方からやつて來たのが惡いんですが、僕のやうな意志の弱い人間は、自分を恨まないで人を恨まずには居られませんよ。

（澄子）ですが私だつて、やつぱり弱いんでございますもの、——あなたは私に、そんな事が出來るとお思ひになりますの？

（三好）それぢやあなたは此の後僕が訪ねて來ても、矢張り會つて下さいませうか？斯うして話をして下さるでせうか？いつ迄こんな事を繰り返したつてお互ひに苦むばかりですが、僕はあなたに其の御親切がある間は、結局來ないぢや居られなくなるんです。——ねえ、澄子さん、あなたはいつか、山田君の所へ戻られた時、僕に手紙を下すつたで

せう、僕がいつそ外國へでも行つてくれゝば忘れられると思ふけれど、でもさうなつたら、若し孰方かが病氣にでもなると心細い、せめてお互ひに死ぬ時だけは顔が見たいッて、あなたはあの手紙でそんな事を仰つしやつたでせう。僕も實際その通りなんです、洋行したらどうだらうツて隨分人にも云はれるんですが、僕もそれを考へると日本の土地を離れる勇氣が出ないんです。日本どころか東京をさへ離れることが出來ないで、毎晩かうして此の邊をうろついて居るんです。あゝ、僕等は一體いつ迄こんな風なんでせう、離れることも出來ないし、一緒になる事も出來ないで、――

(澄子) 數馬さん、あなた私を妹だと思つては下さいませんか、哀れな妹だと思つて、――もうお互に、兄妹だと思ふ事は出來ないでせうか。さう思ふことが出來さへすればいいのでございます、――とても私、あなたに會はずには居られないのでございますから、――

(三好) そりやほんたうに兄妹だと思へるなら、それに越した事はないのです。だが若し少しでも嘘があつたら、あなたは山田君に濟むでせうか、それでお互ひの心が濟むでせうか? 僕もあなたも、たとへ山田君を欺く事は出來たにしても、自分を欺くことは出來ないぢやありませんか。

(澄子) あゝ、勘忍して下さいまし、みんな私が弱いからでございます、斯うなつたのもみんな私のせゐでございます、私一人が悪い爲めにあなたにも山田にも、濟まないやうな事になるのでござます。私こそあなたからも山田からも、どんなに憎まれたつて仕方がないのでございますわ。……

いつの間にか二人はしやがんで語り合つてゐる。澄子は手袋を口に咬へ、聲を忍ばせてしく/\泣きながら、知らず識らず三好の片手を握つて容易に放しさうにも見えない。

奥の路の街きあたりに、山田禮二と秀子の姿が現はれる。秀子は公園あたりの女優らしい、下品でケバケバしい服装。山田は洋服にハンテイングを被り、スノー・コートを着て居る。兩人睦ましさうにくつ付きながら前方へ歩いて來て、カフエエの少し手前で立ち止る。

（山田）（遠くからガラス戸の方を見ながら）おや、もう締まつちまつたやうだぜ、今夜は馬鹿に早えんだなあ、

（秀子）でもまだ居るか知れないぢやないか、聞いて御覧よ、

（山田）なあに、もう歸つたらう、——

さう云ひながら、左側の一番奥のガラス戸に近づく。秀子は後ろの方へ離れて、物蔭に隱れて佇む。

山田の最初の聲が聞えると同時に、三好と澄子とは驚いて立ち上る。二人は互ひに眼で會釋をし、三好は足音を忍ばせつゝ靜かに上手へ立ち去り、澄子は身じまひを直す。

（山田）（輕くコツコツとガラス戸を叩く）おい、今晩は、——もう締まつたのかね？誰も居ないのかね？

（澄子）（曲り角を出て山田の見える所に立つ）ちよいと、今しまつたところなのよ、

（山田）何だ、お前そこに居たのか、今夜はえらく早えぢやねえか、（さう云ひながら舞臺前方へ歩いて來る）

（澄子）えゝ、今歸らうしとしてた所なの、

（山田）花ちやんはどうしたんだい、

（澄子）花ちやん？——花ちやんは一と足先へ歸つたわ、今夜は大變ひまだつたの、

（山田）暇か、——そいつは有り難くねえな、Tの野郎はどうしたんだ、

（澄子）來るには來たけれど、今夜は駄目だつてお酒を飲んで歸つちまつたの、

（山田）だが、いくらか持つてるだらう、

(澄子) いくらかツて、此れッきりッかありやしないわ、

紙入れを出して山田に渡す。山田それを受け取り、中を改めて札を拔きながら、

(山田) ふん、此れッきりぢや仕方がねえが、ぢやまあ此れだけでも貰つて置かう。(札をポッケットに收め、紙入れを返す)あゝ、もう少し早く來りや好かつたな、實は一杯飲まして貰はうと思つてたんだが、……

(澄子) あなた、此れから何處かへ入らつしやるの?

(山田) うん、ちよつと其處まで、……

(澄子) 秀子さんと御一緒なの?

(山田) うん、例に依つて御一緒さ、實はそこに待たしてあるんだよ、

(澄子) あゝさう、何だかさうらしい聲だと思つたもんだから、……

(山田) それからお前、氣の毒だがな、今夜事に依るとおそく歸るかも知れないから、火を起しといて貰ひたいな。

(澄子) えゝ、それぢやきつと歸つて來てね、

(山田) だけど何だぜ、秀子も泊まるかも知れないぜ、彼奴の內は遠いんだから、とても今から歸れやしないんだ、

(澄子) えゝ、──いゝわ、その積りで支度しとくわ、ですからきつと歸つて來てね、

(山田) (茶化す氣でゐながら其の實多少哀感に打たれて)あゝ、お前は感心だ、見上げたもんだ、さすが貞女だよ、やつぱり己の女房だよ。

(澄子) いやよ、そんなに冷やかしちや、あたし何だか悲しくなるわ、──

初めは笑ひながら云ひ、云ひ終つてからぢつと考へ込む、

(山田) それぢや己は出かけるからな、——まあ風でも引かないやうにしろよ、お前は體が弱いんだから、——
山田、さう云つて行きさうにする、
(澄子) ちよつと、ちよつとあなた、
(山田) 何だ、何か用か？
(澄子) あの、あたしあなたに、云はなけりやならない事があるんだけれど、何卒勘忍して下さいな、
(山田) 何さ、何さ一體？
(澄子) あの、實は今夜、數馬さんに會ひましたの、
(山田) 三好に會つた？何處で會つたんだ？
(澄子) 此處へ訪ねて來ましたの、
(山田) ふん、お前また、呼び出しでも掛けたんだらう、
(澄子) そんな事があるもんですか。此處に居る事なんか知らしたことはありやしないの。
(山田) まあ、どうだか怪しいもんだ、
(澄子) いゝえ、あたし決してそんな事はしやしません、ずうツと前に、たつた一度手紙を出したきりだつて、いつかもさう云つたぢやありませんか、
(山田) 成る程、お前がさう云ふなら其りやさうだらう、まさかそれだけは嘘ぢやなからう、そんな事にかけちや、お前は案外正直だからな。——だが何だつて訪ねて來たんだ？
(澄子) 別に何て云ふ事もないんだけれど、あたしが此處に居るツて事を聞いたもんだから、ついやつて來てしまつた

んだツて、——

(山田) ついやつて來たもよく出來たもんだ、それでどんな話をしたんだ？

(澄子) どんな話ツて、——何も此れと云ふ話をした譯ぢやないんだけれど、——

(山田) それぢや花ちやんも知つてるだらうな？

(澄子) いゝえ、花ちやんは知らないの、——店がしまつてからやつて來たもんだから、此處で立ち話をしただけなの。

(山田) たつた二人きりで？

(澄子) えゝ、

(山田) 何時間ぐらゐしやべつてたんだ、

(澄子) 何時間てほどぢやないんです、一時間か三十分ぐらゐ、

(山田) それぢや己が來るよつぽど前に歸つたのか？

(澄子) たつた今まで居たんだけれど、あなたの聲が聞えたもんだから、歸つて行きましたの、

(山田) そんならお前、なぜ直ぐ己に云はなかつたんだ、

(澄子) だからあたし、勘忍して下さいツて云つて居るんです、

(山田) お前、己に勘忍して貰ふことはそれだけだらうな？まさか外に、何もありやあしねえだらうな？

(澄子) えゝ、——ただあたし、たとへ訪ねて來たにしても會はない方が本當だつたと思ふんですの、これもあなたにあやまらなけりやならないんだわ、——ねえ、あなた、勘忍して下さいな、

(山田) まあいゝさ、惡いと云つたつて會つちまつたもなあ仕方がねえや、己あお前を信用してやらう、お前は貞女な

だんからな、（半分は皮肉らしく、半分は眞面目らしく云ふ）

（澄子）ねえ、そんな事を云はないで、――あたし本當に惡いと思つて居るんですから。

（山田）それぢや何か、外に惡い事でもあつたと云ふのか、

（澄子）（躊躇しつゝ）いゝえ、――何もそんな事は、――

（山田）まゝどんな話があつたか知らねえが、そんな事あ聞かなくつてもいゝや、聞かねえ方が花だらうから。――だが、三好の奴あよつぽど變な野郎だな、女みたいにめそめそしやがつて、執念深くいつ迄でも絡み着いて居やあがる

己ああんな奴は大嫌ひだ、

（澄子）だつて、あの人だつて可哀さうだとは思はなくつて？

（山田）そりや、お前は可哀さうだと思ふだらうさ、お前は義理があるんだらうから。

（澄子）いやよ、その話は止して頂戴、

（山田）だが、己は彼奴に義理なんか一つもねえんだ、彼奴よりやあ己の方がよつぽど可哀さうなんだ、

（澄子）……（何事か氣が咎めたらしく、うなだれて沈默する）

（山田）ねえ、さうだらう、それはお前にも分つて居るだらう、

（澄子）……（微かにうなづく）

（山田）それが分つて居てくれりやあ、己は何も文句はねえのさ、――な、大丈夫だらうな、たしかに分つて居るんだらうな、

（澄子）えゝ、そりや分つて居ますけれど、……

(山田) 居ますけれど何だと云ふんだ？

(澄子) ……ただね、數馬さんがあゝして、いつ迄もあんな風にして居るのが、氣の毒でならないの。今夜にしても會はない方がいゝとは思つたんだけれど、でも顏を見たら何だか氣の毒になつちまつて、歸つてくれなんて云ふ事は、とてもあたしには云へなくなつてしまつたわ。

(山田) だからいゝツて事よ、お前が己の女房だツて事さへちやんと分つて居りやあ、そんな言ひ譯にや及ばねえよ、――それで何かい？彼奴あ此れからも**ちよくちよく**やつて來る積りなのかい？

(澄子) そりや、あたしが此處に居る間は、やつて來ちや惡いと思ひながら、矢つ張りやつて來るだらうと思ふわ。あの人だつて、あたしと同じやうに弱いんだから。

(山田) ふん、さうだつけな、お前も彼奴も弱いのを賣り物にしてるんだつけな、考へて見ると弱い人間も重寶なもんさ。

(澄子) あなた！もう止して頂戴ツたら！あたしほんたうに自分の弱いのが惡いんだけれど、訪ねて來られりややつぱり會はずに居られないんだから、もう此處に居ない方がいゝと思ふわ、――ねえ、何處かへ行つちやいけないこと？その方がお互ひの爲めなんだから、

(山田) お互ひツて云ふなあ誰の事だ？

(澄子) 數馬さんの爲めにも、あたしの爲めにも、

(山田) だが、お前たちの爲めよりやあ己の爲めを考いて貰ひてえな、

(澄子) だつて、あなたの爲めにだつて、やつぱり其の方がよくはなくつて？ねえ、何處かあたしを外へやつて、もう會はせないやうにして頂戴よ、後生だから、――

（山田）まあ、さう云はないだつていゝさ、會ひたいと思ふなら會ふもよからうし、會はせないやうにしたからツて、お腹の中で思つて居られりや同じだからな、

山田、さう云つてニヤニヤと不思議な微笑を浮かべる。何となくぞつとするやうな、陰險な兇惡な眼つきになる。

（澄子）（判じるやうに山田の顏を見るゝ）あなた、なぜそんな事を云ふのよ？それぢやあたし、困つてしまふわ、

（山田）だからさ、會ひたければ會ふがいゝツて云つてるんだよ、何も困ることはないぢやないか。

（澄子）あなた、怒つて居るんぢやないの？

（山田）怒つでなんぞ居るもんか、己はお前の爲めを思つて親切に云つてるんだよ。なあ、さうぢやねえか、己はお前と三好とを會はせないやうにしたところで、何にもなりやあしねえんだからな、――そんな事よりか、いつそ彼奴を客に取つたらどうだつて云ふのよ、そんなにお前に惚れて居るなら丁度いゝや、何でも言ふ事を聞いてやつてうんと金を取つてやれ、いつそ其の方がいゝぢやねえか、

（澄子）……

（山田）え、おい、己も分らねえ事あ云はねえから、いつそさうしたらどうだつて云ふのよ、――

（澄子）……

（山田）お前、何を考へて居るんだ？何も考へる事あないだらうぜ、

（澄子）あなた、……それだけは、……それだけは勘忍して下さい、

（山田）おかしな事を云ふぢやねえか、お前が一番好きな男を客に取れと云つてるんだぜ、こんなうめえ話はねえぢやねえか、お前がほんとうに己を思つて居るんなら、それが出來ねえ筈はねえんだ。

(澄子)　だつて、そんな事はあたし出來やしません、……どうして其れがあなたの爲めになるんです？……

(山田)　どうしてだらうと餘計なお世話だ、お前が嫌がるだけ己は猶更さうさせるんだ、――え、おい、なぜお前にそれが出來ないんだよ、彼奴だつてTの野郎だつて同じ譯だぜ、

(澄子)　あなた數馬さんを誤解して居るんです、數馬さんはそんな人ぢやないんです、

(山田)　ふん、何て云ふと三好の肩を持ちやあがる！男ツて者はいくら口先で高尚な事を云つてたつて、結局の所は極まつてるんだよ、さうでなけりやあ惚れてないんだ、

(澄子)　いゝえ、そりやあんまりひどござんす、あんまり數馬さんにひどござんす、何て云つたつてあなたよりか私の方が、數馬さんの氣持ちは分つてるんです、

(山田)　だからさ、分つて居るなら丁度いゝから、そこんところを巧くやれさうなもんぢやねえか。あんな甘ツたるいおめでたい野郎はどうにでもなるんだ、さうして其の金は己の方へ貢いでくれて、時々會ふやうにしてやりやあ、向うだつて喜ぶだらうし、お前もまあ、口では何とか云ふやうなものゝ、ちつたあ憂さ晴らしになるだらうぜ、――もともと嫌ひな男と云ふんぢやねえんだからな、

(澄子)　いやです！いやです！あたし死んだつてそんな事をするのはいやです！もう後生だから止して下さい！

(山田)　ぢや、どうしてもいやだつて云ふのか？

(澄子)　あなただつて私だつて、散々數馬さんを非道い目に遭はして置きながら、何もそんなにしなくつたつていゝぢやありませんか。未だにあゝして苦しんで居るのに、それぢやあんまりぢやありませんか。

(山田)　苦しんでるから慰めてやれと云つて居るんだ、彼奴に慈悲をかけてやつたらよからうツて云ふんだ、

（澄子）　あなたには數馬さんが分らないんです！數馬さんがどんなに眞面目に苦しんで居るか、どんなに私の爲を思つて居てくれるか、それがちつとも分らないんです！あなたには眞實の愛と云ふものが、まるで分つてゐないんです！

（山田）　貴樣、三好に惚れてるんだな！未だに彼奴の事を思つてるんだな！

（澄子）　さう云つたつて無理ぢやありませんか、あたしはあなたの物なんです、あなたの物だからそんな眞似は出來ないんです！

（山田）　己の物だから己の云ふ通りになれツて云ふんだ、……ふん、何だつて！そんな眞似は出來ないツて！それぢや貴樣は外の男とはどうしてるんだ！今になつてそんな事が云へる體ぢやねえぢやねえか、……ふん、ほんたうの愛が聞いて呆れらあ！貴樣それほど三好の事を思つて居るなら、なぜそんなに墮落したんだ、お客を取つて亭主に金を貢いで居ますツて云ふ事を、貴樣三好に云はなかつたのか？

山田の聲がだんだん高くなつて來る。此の臺辭の途中より秀子待ちくたびれたやうに物蔭から出て來て、樣子を見て居る。

（澄子）　（泣きながら）……勘忍して下さい、……勘忍して下さい、……みんな私が惡いんですから……

（山田）　貴樣は己の爲めなら何でもする、どんなに墮落しても構はないツて云つたのを忘れたのか、……三好にそれを云はなかつたのか、云はなきや己が云つてやるから、……

（澄子）　（ますます激しく泣く）……私が惡いんです、……私が惡いんです、……あなたにも數馬さんにも濟まないんです、

（山田）　何？數馬さんに濟まない？何が濟まないんだ？三好に濟まない事が何處にあるんだ？——又泣きやあがつて、——何をそんなに泣く事があるんだよう！

いきなり靴の先で蹴り、ぴたりと平手で横顏を打つ。

（澄子）あなた！勘忍して、……後生だから勘忍して、……

（山田）勘忍してやるから云ふ事を聴け！聴かなきや承知しねえから！

さう云ひながら猶も揺り掛ける、

（秀子）（離れた處に立つて冷酷な態度で見物しながら）ちよいと！随分待たせるぢやないの、好い加減にしといたらどう？

（山田）（揺るのを止めて秀子を見、極まり惡さうにニヤニヤ笑ふ）まあいゝから默つて居てくれ、お前の出る幕ぢやねえんだから。

（秀子）だつて、どうしてくれるのよ、こんなに遅くなつちまつて、——あたし行く處がないぢやないの、

（山田）いや、お前には濟まなかつたな、

（秀子）ほんとうだわ！早くして頂戴よ！此の寒いのに三十分も立たせられちや溜りやしないわ、どうするのよ、今夜は一體？

（山田）どうするツて、己あ行くさ、

（秀子）行くなら、——さあ、もう行きませうよ、春ちやんだつて可哀さうだわ、そんなにイヂめたりなんかして、

（山田）（泣いてゐる澄子を尻目にかけながら）なあに、此奴あ此のくらゐな事をしてやつたつていゝんだが、——まあいゝや、後でゆつくり話してやるから、貴様もその積りで考へて置けよ、

（秀子）長いわねえ、何をいつ迄云つてゐるのよ、

（山田）あはゝゝゝ、飛んだ所を御覽に入れたな、ぢや、出かけようか、

（秀子）春ちやん、御免なさい、左様なら、——

山田と秀子奥の路を行き、鏡臺の後ろへ消える。

（澄子）（泣きながらばつたり地上へ倒れる）……數馬さん、……私やつぱりあなたの物なんです、……數馬さん、……

第二幕

場面――山田の家の内部。上手に六疊ぐらゐの部屋、下手に四疊半の玄關、二た間の境は襖で仕切られて居る。往來は鏡臺の後ろにあつて、四疊半の衝きあたりに障子が嵌まり、障子を明けると格子戸が見え、土間に降りられるやうになつて居る。六疊の間の往來へ面した側に肘掛窓、窓の前に長火鉢、炭取り、茶箪笥、その上に置時計、向つて左の隅に鏡臺など置いてある。上手は二枚の襖、襖の蔭には二階へ通ずる梯子段があるつもり。

第一幕より一と月程過ぎた冬の朝、室内には外套だの帽子だの襟卷だのが不精たらしく散らかつてゐる。山田は今起きたばかりかどてら姿で、長火鉢の右に据わり、楊枝を使ひながら新聞を讀んでゐる。澄子は少し前に起きたらしく、鏡臺の前で顏を作つて居る。

（山田）（新聞から眼を離し、置時計を見る）あゝ、もう九時か、――ちよつと湯に行つて來るからな、

（澄子）（鏡臺に向つたまゝ）あなた、昨夜ッから少し風氣ぢやないの、朝湯は止した方がいゝわ、

（山田）なあに、大した事あないよ、行つて來よう、――どれ、手拭と石鹼を取つてくれ、

火鉢の抽出しから湯錢を摑み出し、立ち上つて鏡臺の方へ行く、

（山田）おい、ちよつと取つてくれ、

（澄子）え、今、――

後ろ向きのまゝ、鏡臺に載つて居る手拭と石鹼を渡す、

（山田）何でえ、いやに此の頃はめかすぢやねえか、

（澄子） あら、そんな話ぢやないんだけれど、——

（山田） ヘツ、まあどうでもいゝや、——ぢや行つて來るぜ、

（澄子） えゝ、行つてらつしやい、あなたもせいぜい研いてらつしやい、

（山田） 時に已あ、腹が減つてゝ仕様がねえんだが、何か仕度しといてくれ、もう昨夜の物あ殘つてないのか、

（澄子） なんにも殘つてなんか居やしないわ、——あゝさうさう、殘つてるわ、わんたんめんの冷めたいのが、

（山田） 馬鹿、そんな物が喰へるかい、ほんたうに何かねえのか、

（澄子） いゝわ、何かこさへて置くから、

（山田） ぢや、賴んだぜ、

（澄子） 行つてらつしやい、風を引かないやうにして、——

山田玄關の方へ行かうとする、と、表の格子戸の明く音がして、誰かが土間へ這入つて來る。

（山田） （間じきりの襖の所に立つて）おう、誰——

（三好の聲） 御免下さい、

（山田） 誰？どなたです？

（三好の聲） 御免下さい、僕はあの、三好ですが、——

（山田） はあ？——

澄子、ハツとして山田と顏を見合はせる、山田手拭と石鹼を提げたまゝツカツカと出て行き、玄關の障子を明ける、

（山田） やあ、三好君ですか、どうも暫く、——

(三好)　御不沙汰しました、――突然伺つて失禮だとに思つたんですが、實は是非あなたにお目に懸りたい事があつて、お邪魔に出たんですけれど、――

(山田)　僕に？僕に用事だと仰つしやるんですか？

(三好)　えゝ、是非あなたにお話したい事があるんです、それで實は、朝のうちならお宅においでかと思つて伺つたんです、

(山田)　はあ、さうですか、――ぢや、兎も角上つて頂きますが、――ま、ちよつと待つて下さい、大變散らかつて居ますから、――

山田ぴたりと障子を締め切り、六疊の間へ戻つて來て又其處の襖を締める。それ迄の間、澄子はひどく不安な様子で門際に息を凝らしつゝ、二人の話を聞いて居る。

(山田)　(ヂロリと澄子を睨み、低聲に囁く)おい、お前二階へ行つて居ろ、

(澄子)　あなた、お願ひですから、――

絶望と悲痛に充ちた眼で山田を見上げ、その前に跪いて着物の裾に縋る、

(山田)　二階へ行つてろよ、――何をぐづぐづしてるんだ、――

(澄子)　お願ひですから、數馬さんに會はないで、――

(山田)　會はない譯にや行かねえぢやねえか、向うからやつて來たんだもの、

(澄子)　でも會はないで返して下さい、その方がいゝんですからさうして下さいッたら、――

(山田)　(惡意ある微笑)なあに、丁度いゝところだ、やつて來りやあ己の方にも話があるんだ。

（澄子）あなた、それだけは止して、——後生だから、——よう！返して下さいッたら！——でなけりやあたしに貸して下さい、

（山田）お前はいつでも會へるぢやねえか、己に會ひたいと云つてるんだ、

（澄子）いゝえ、どうしても會つちやいけません、會はないで下さい、

（山田）うるせえな、ほんたうに！何をそんなに恐がつてるんだ、己を會はしちや都合の惡い事でもあるのか？——さあ、二階へ行けッたら、なぜ行かねえんだ！

足で輕く突き放し。擲りさうな恰好をする。澄子、恨めしげに山田を一と眼見て力なく立ち上り、殆んど死んだやうな表情で梯子段へ去る。彼女の姿が上手の襖へ這入るのを待つて、山田はニヤリと奇妙な薄笑ひを洩らし、玄關へ戻つて來る。

（山田）（障子を明けて）や、どうも大變お待たせしました、さあ何卒、何卒お上り、——

三好、土間で外套を脱ぐ。

（山田）なに、其のまゝでよござんすよ、寒いんですから何卒其のまゝ、——僕も此の通りこんな風をして、甚だ失禮ですが、——

三好上つて來る、黒つぽい背廣服を着てゐる、外套と帽子襟卷を障子際に置き、山田に案内されて六疊の間へ行く。

（山田）どうも此の通り汚い所で、——さあ、どうか此方へ、別に取りませんから其の火鉢の傍へ入らしッて下さい、

山田は長火鉢の右に、三好は左に据わる。山田がのべつにしやべつて居る間、三好は一言も發せず、恐ろしく沈鬱に押し默つて居る。

（山田）（茶簞笥を明けて忙しく茶器を取り出し、鐵瓶に觸つて見て）や、どうも困つたな、實は今起きたところだもんですから、湯もロクロク沸いてないで、——

さう云つて今度は鐵瓶をおろし、炭取りを引き寄せて炭をつぎ始める、

(三好) どうかもうお構ひなく、

(山田) ですが寒いぢやありませんか、此の寒いのによくお出かけになりましたな、――此の頃は何ですか、お住居は矢張り先の所で？

(三好) はあ、彼處に居ます、――それで、今日お伺ひしたのは、實はいろいろの事があるのですが、何より先に僕はあなたにお詫びに來たんです、

(山田) 僕にあやまりに？

(三好) えゝ、さうです、――僕はあなたに、申譯のない事をして居るのです、

(山田) (少し顏色を變へる)へえ、そりやどんな事ですか？知ら

(三好) あなたは僕が、もう一と月ほど前から、時々澄子さんとカフヱエで會つて居た事を御承知でせう、それは多分澄子さんがあなたに打ち明けられた筈です、僕はそれに就いても、非常にあなたに濟まないと思つて居るんですが、しかし濟まない事はそれだけぢやないんです、僕と澄子さんとは、もう今日ではそれ以上の濟まない事をして居るんです、

(山田) ぢや、何ですか、澄子はあなたと、――あなたと會つて居ただけぢやないと云ふんですか？

(三好)・澄子さんも、も、あなたに對して取り返しの附かない罪を犯してしまつたのです、

(山田) ふん――で、そりやいつの事たんです？

(三好) その事があつたのは一週間ばかり前でした、そしてこれから、――僕等は毎晩或る所で會つて居たのです、

(山田) ちよつと、ちよつと斷つて置きますが、僕等と云ふのは止して下さい、僕等なんて云ふ言葉をあなたに使ふ權利はないんだ、

(三好) あゝさうですか、お氣に觸つたら赦して下さい、——

(山田) 一體そりやあ、孰方が先に持ち掛けたんです?

(三好) 僕は、自分を庇ふつもりもなし、澄子さんを庇ふつもりもありませんが、孰方が先と云ふやうな事は云へないと思ふんです。僕も澄子さんも初めは決してそんな氣ではありませんでした、尤もあの晩は二人とも少し酒を飲んで居たので、それが悪かつたんですけれど、——今になつて考へると、全く時のはずみだつたと、云ふより外はないやうな氣がするんです。勿論僕は斯う云つたからとて、多少なりとも自分の過ちを辯護するのぢやありません、どんな理由があつたにもせよ申譯のないことは事實ですが、僕と澄子さんとは同罪だと云ふ事をお話して居るのです。

(山田) 同罪だかどうだか、そんな事は僕の判斷に任しといたらいゝでせう、あなたは唯あなたの罪を告白なすつたらいゝのだ。ですが何ですね、そりや最初の晩は、時のはずみだつたと云やあそれッきりかも知れないが、その後の事あ一體どう云ふ譯なんです? 其の後の一週間もやつぱりはずみだと云ふ譯ですかね?

(三好) いゝえ、僕はさうは云ひません、その後の事は——全く二人の意志が弱かつたからです、僕も澄子さんも誘惑に克てなかつたのです、僕は始終あなたに會つてお詫びをしよう、告白しようとは思つて居ました、澄子さんだつてさうでしたらうが此の一週間と云ふものは、僕はその事で毎日苦しみつゞけました、けれども此の事は單に僕だけの問題ではないのですから、何と云つても澄子さんにも關係があるのですから、澄子さんを差し置いて、自分一人を潔くする事は出來ない。結局あなたの前へ出て罪を謝すべきであるにしても、先づ澄子さんから打ち明けるのが至當で

はないだらうか、若し澄子さんに之れだけの勇氣がないとしたら、少くとも澄子さんの承諾を得て、或は澄子さんに代つて僕が云ふべきではないだらうかと、さう思つて居た爲めに今日までおくれてしまつたのです。

(山田) ぢや、伺ひますが、あなたは今日は澄子の代理で入らしつた譯なんですね、

(三好) まあ、僕の話を聞いて下さい、――僕は今日まで澄子さんに幾度も幾度もせがみました、そしてどうかして澄子さんの口から、あなたがお聞きになるやうにと思つたんですが、澄子さんはもう少し時機を待つてくれと云つて、なかなか實行される勇氣がないんです。誤解をされちや困りますが、澄子さんは決してあなたを欺かうとしたのぢやありません、自分の罪を責める程度は恐らく僕より深かつたに違ひないのですが、ただそれだけに猶更後の結果を恐れて居られた、その爲めに僕より一層苦しんで居られた、――此れは僕自身の問題ぢやありませんけれど、ちよつとお斷りして置きたいと思ひますから、――

(山田) いや、御親切な事で、――何しろあれは誠に弱い女でしてな、

(三好) さうです、非常に弱いんです、ですが弱いと云ふ事は決していつも善い事ぢやありません。僕はいろいろ澄子さんを勵ましもしましたし、又若し自分で云へないやうなら、僕が代りに云はうと云つたのですけれど、澄子さんは僕があなたに會ふ事を一層心配して居られて、どうかそれだけは止してくれ、絶對にそんな事はしてくれるな、自分は覺悟して居るのだから近いうちにきつと何とかする、どうか待つてくれと云はれるのです。實は昨夜も泣いて僕に頼まれました。僕は、どうしていゝか分らなかつたので「待つ」とは云つてしまひましたが、しかし斯うしてぐづぐづな日を送つたところで、後になれば後になるほど猶更云ひ難くなるのですし、そんな事よりか、惡いと思ひながら段々深みへ陷て行くのが、さうしてますますあなたを欺く結果になるのが、僕には何より恐ろしく思はれたんです。そ

れで僕は、自分は澄子さんの弱さに惹かされてはならない、結局これは澄子さんの爲めにもならないのだと、さう考へて全く自分ひとりの腹で決心して、今日はお伺ひしたのです。

（山田）いや、話はよく分りました、で、あなたは僕に謝罪すると仰つしやるんですね？

（三好）えゝ、あなたに隱してさう云ふ事をして居たと云ふのは、僕が重々惡いんです、僕は幾重にも罪を謝します、――山田君、ほんたうに濟まない事をしました、申譯がありません、

（山田）申譯のない事あお仰つしやる迄もありませんよ、だが何かね、さう云つてあやまつただけで、それであなたは濟むと思つて居るのかね、

（三好）いゝえ、此れだけで濟むとは思つて居ません、しかし兎に角僕が惡かつたのですから、その惡かつた事に對してあやまらなけりやならないと思ひます、

（山田）そんな事あ當り前だ、濟まないと思つたらどうしてくれるんだ、己あそれを聞いてるんだ、

（三好）僕は自分の惡かつた點は認めて居ます、けれどもそれがどうしたら濟むか、あなたに對して犯した罪がどうしたら拭へるかと云はれると、實際それは拭ひやうがない、一生あなたにその罪を負はなけりやならないと、云ふ風に感じるんです。僕は恐らく、あなたが考へて居られるよりも一層深く、自分の罪を意識して居ると思ひます。僕の惡かつたのは單に此の一週間だけの事ぢやなく、抑もの初めから、――あなたと、澄子さんと、僕の三人が知り合ふやうになつた時から、惡かつたんです。（涙ぐんで、聲を曇らせながら、）あなたにいろいろ御迷惑を掛けたのも、澄子さんを今度のやうな窮境に立たせたのも、みんな僕が惡いんです。僕はあなたに罪があるのは勿論ですが、澄子さんに對しても罪があります。山田君、どうか此の事を聞いて下さい、僕が斯うしてお伺ひしたのは、あなたにお詫びをする

ばかりでなく、お詫をした上に聞いて頂きたい事があつたんです、……

(山田) あなたのやうな聖人は違つたもんだね、自分ひとりが悪いと云やあそれで濟むと思ふのかね、

(三好) どうか眞面目に、僕の云ふ事を聞いて下さい、そしてあなたもそれに就いて考へて見てはくれませんか、――僕は、今になつて思ふと、最初からあなたを欺いて居たのでした。あなたばかりでなく、澄子さんをも、僕自身をも欺いて居たのでした。僕はあの時、潔よくあなたに澄子さんを讓ると云ひました、そして自分でも讓つたつもりだつたのですが、しかしその後心のうちでは決して讓つて居なかつたのです、讓る事が出來なかつたのです。もう何も彼も正直に云つてしまひますが、僕の心の内には始終かう云ふ考へがありました、――自分は決して戀愛に負けたのではない、自分はたしかに勝つて居るのだ。勝つたからこそ、勝たんが爲めに讓つたのだ、自分は自分の愛を成し遂げる爲めに、勝ちを一層偉大にする爲めに、澄子さんの一身をあなたにお預けしたのに過ぎない。さうしてその心持ちは澄子さんにも分つてゐるのだ、澄子さんも心のうちでは、僕が戀の勝利者である事を認めて居られる、澄子さんはそれを認めて、僕の心持ちを酌んで、あなたの所へ行かれたのだ、――僕は、此の信念を片時も捨てたことはなかつたのです、それを信じて居たればこそ今日まで孤獨に堪へられたのです、僕は孤獨ではあるけれども、しかしその實、精神的には孤獨でない、何處かに自分を認めてくれ、自分の拂つた犧牲がいかに大きいものであつたかを察してくれて、多大の感謝を捧げてくれる人があるのだと、さう信じて自分を慰めて居たのです。……

(山田) ふん、さうすると何かね、あなたは澄子が僕を愛して居なかつた、僕の所へ來ることは來たがやつぱり君を思つて居たと云ふのかね?

(三好) 澄子さんは、僕の心持ちを酌んでくれ、僕を思つてくれたればこそあなたを愛し、愛さうと努力しました、――

―僕はさう云ふのがほんたうだと思ひます。澄子さんはあなたが惡人なのが悲しい、惡人なればこそ尙更心に苦しい事や寂寞を感じる事があるだらうに、それを誰一人理解して上げないで、而もあの時のやうに警察の手へ渡したりして、あなたがあれ程賴んだにも拘らず、無理やりに間を割いて澄子さんを奪はうとした、――あなたに對してみんながそんな風にするのが悲しい、それだからせめて自分は、一旦連れ添ふた以上何處までもあなたを愛して上げて、愛の力で孤獨を救つて上げなけりやならないと、さう云ふ風に思はれたんです。今では僕も孤獨に惱んでは居ますけれども、しかしあの時は僕には多勢の味方があつた、あなたには一人も友達がなかつたでせうが僕にはそれがあつた、僕とあなたと、孰方が餘計救はるべき地位にあつたか、孰方が餘計不仕合はせだつたかと云へば、それはあの時はあなたでした。ですから情に脆い澄子さんとして、僕を捨てゝもあなたに附かうと思はれたのは無理もないので、僕は自分が捨てられるのは非常に悲しい事でしたけれども、しかし澄子さんの優しい心づかひを考へると、いかにも澄子さんらしいうるはしい氣立てに感激しないでは居られませんでした。そしてどうかして澄子さんのその美しい性質を完うさせて上げたい、自分が眞に澄子さんを愛するなら、自分も矢張りその性質に同化して、澄子さんと同じ心になつて、自分の愛をあなたの上へ轉じなければならない。さうする事は苦しいには違ひないが、でも自分だけが苦しいのぢやないのだ、澄子さんだつて苦しいのだ、自分は澄子さんと同じ苦しみを苦しみ、同じ悲しみを悲しむと思へば、其處にこそほんとうの愛が成り立つ。自分が若し强ひてあなたに勝たうとすれば、同時に澄子さんと云ふ人の美しい心は消え失せてしまふし、自分の愛はそれ自身滅びてしまふ。僕はさう考へてあの時あなたに讓りました。それはあなたの爲めを思ひ、澄子さんの爲めを思つた結果でもあるのですが、しかし何よりも僕自身の爲めでした、僕の爲めにさうしなければならない事を感じました、僕はその點に於いて、一種のエゴイストだと云はれても仕方がないのです、

僕はあなたの云はれるやうな聖人ではないのです、

（山田）そりやさうだらう、何ぼ何でも人の女房を取つて置きながら、まさか聖人た云はれなからう、僕はそんなしち面倒臭い理窟なんか聞きたくないんだ、そんな事よりか一體あなたは、誰が悪いと云つてるんだ？あやまりに來たと云ひながら一體何をあやまつてるんだ？理窟は抜きにしてもつとハッキリ云つたらよからう、

（三好）ま、どうかさう怒らないで下さい、もう少し靜かに物を言はして下さい。あなたはさつき、澄子さんが孰方をほんたうに愛して居たか、孰方に忠實だつたかと云ふお尋ねでしたから、僕はそれに答へてゐるのです。僕の云ふ意味はつまり孰方にも忠實だつた、僕を愛して居ればこそあなたをも愛して居た、もつと突つ込んだ事を云へば、僕が澄子さんに對する愛をあなたの上へ轉じたやうに、澄子さんも僕に對する愛を以てあなたを愛した、……

（山田）ふん、ぢや僕はあなたの身代りになつた譯なのか、

（三好）……なぜならそれは、——澄子さんがあなたを愛する事は、澄子さん自身の感情でもあり、同時に僕の感情でもあつたんですから、……

（山田）有り難う、さうなつて來ると、僕はあなたに御禮を云はなきやならないんだね、

（三好）僕が若し、今云つたやうな考通り自分を導いて行けたとしたら、或はあなたからお禮を云はれてもよかつたかも知れません、けれども實際になつて見ると、そんなうまい工合には行きませんでした、いや行かないのが當り前でした、僕があなたにあやまらなけりやならない事は、僕の過ちはそこにあるのです、どんな理由があつたにもせよ、自分が愛して居るものを人に譲つたと云ふ事が悪かつたんです。或は澄子さんだつて悪かつたでせうし、その悪い程度も僕と同じだと思ひますが、しかし澄子さんを悪くしたのも、あんたに弱くさせてしまつたのも、結局僕の罪なの

です。僕はあなたを惡人だから可哀さうだ不仕合だせと云つてしまつて、その實自分も可哀さうな人間であるのを忘れて居ました。一體人を惡人だと極めてしまふのが惡いのですが、假りにあなたが惡人だつたとして、僕は何でせうか？僕に少しでもあなたより優れた所があるでせうか？善人だの惡人だのツて、そんなハツキリした區別がある譯はないのですし、たとへ僕にいくらか善いところがあつたにしても、それだからあなたより仕合はせだとは云へないんです。僕は自分と云ふものを餘り買ひ被り過ぎてゐました、人を憐れむ餘裕もないのに、生意氣にもあなたを憐れまうとしました、事實を云へば僕もあの時少くともあなたと同じ程度に於いて、澄子さんの救ひが必要だつたのです。そりや、僕には多勢の味方があつたとは云ふものゝ、しかしそんなものが結局何になつたでせう、なまじそんなものがあつたと云ふ事を、僕は今では腹立たしくさへ思つて居ます。僕にはただ澄子さん一人あればよかつたのです、澄子さんこそ僕のほんたうの、最後の味方であり、澄子さんに捨てられてしまへば、僕の不幸は決してあなたに譲らない筈なのです、……

（山田）三好さん、あなた今になつてそんな泣き言を並べたつて、仕方がないぢやありませんか、何と云つたつて僕はあなたに勝つたんだからね、あなたの方ぢや潔く讓つた積りかも知れないが、僕は立派に自分の力であの女を取つたんだからね、成る程あの時は泣いて見せたり拜んで見せたりして、あなたに頼んだにや違ひないが、ありやあ實は僕の手なのさ、あなたがそれに引ッ懸つたのが不覺なのさ、僕は仰せの通り惡人だから、いさとなりやあ泣き眞似ぐらゐはしますからね、

（三好）そりや、あなたは僕を引ッ懸けてやつた、泣き眞似をして欺してやつたんだと、思つて居られるかも知れない。けれども人間と云ふものは、たとへどんな惡人でも、決して自分が思つて居るほど、惡い事が出來るものではないので

す、人を欺す積りで居て、その實自分の本心を訴へてゐる事が多いのです。あなたはあの時泣き眞似をなすつた、僕の前に跪いて、額を地に擦りつけて、手を合はせてお賴みになつた、――それを狂言だと云つてしまへばそれ迄ですが、しかしその狂言の中に、矢張りあなたの本心があつたのではなかつたでせうか？あなたは僕を欺す爲めに、全く心にもない事をなすつたのでせうか？僕は恐らくさうではなからうと思ひます、あなたは矢張り澄子さんが欲しかつたのです、あゝ云ふ狂言を使つてまでも僕の心を動かさうとしたほど、それほど欲しかつたのです。澄子さんに捨てられちや大變だと思つたからこそ、あなた一流のやり方で僕に訴へられたのです。或はあなたは、自分でそれに氣が附いて居られないのかも知れませんが、どうかよく考へて見て下さい、あなたは決して、自分で思つて居られるやうな惡人ぢやないのだ。あなたがそんな惡人なら、僕も澄子さんもこんなに苦しみはしないのだ、僕はあなたの狂言に欺されたのぢやありません、その狂言の中にある眞實に動かされたのです、あなたの持つて居る力強い眞實が、自分の幸不幸を考へる暇のないほど、僕の胸を打つたのです、――

(山田)　ふゝん、(忌ま忌ましいやうな、羞かしいやうな苦笑ひをする)……成程ね、……まあ批評はあなたの勝手だから、……

(三好)　――僕はあの時、ほんたうにあなたを氣の毒だと思ひました、不仕合はせな人だと思ひました、どうかして澄子さんの優しい志を遂げさせて上げて、あなたを少しでも幸福にさせて上げたいと思ひました。其結果自分がどんなに苦しまうとも、あなたを負かしてしまふよりは樂しい事だ、自分は苦しみの中にも一縷の光明を認めて、慰められる道があると思ひました。僕は、ちやうどあなたが自分を惡人だと思つたやうに、自分を善人だと思ひ込んで、何か非常に犧牲的な事でもしたやうに感じました。僕が自分をエゴイストだと云つたのは此處の事なんです、なぜかと云ふと、そ

の實僕のした事は犧牲でもなく、ただその方が自分に愉快だつたから、——自分の性に合つて居たからに過ぎないのですから。僕はあなたの爲めや澄子さんの爲だと思ひながら、ほんたうは自分の爲めにして居たのですから、さうしてもつと惡い事には、それは決してあなたの爲めにも澄子さんの爲めにもならないのでした。僕が一時の氣持ちに任せて、エゴイズムを徹した結果はどうなつたかと云へば、僕も苦しむし、澄子さんも苦しむし、そしてあなたは、却て二人から欺かれた。——さうなつたのは凡て僕の罪なのです、僕が眞劍に、あなた方の爲めや自分の爲めを思はなかつたからなのです、若し此のまゝに放つて置けば、僕等三人はますます救はれなくなり、ますます墮落するばかりなんです。

(山田) 若し此のまゝに放つて置けば?——ぢや、放つて置いちや惡いとでも云ふのかね?

(三好) 山田君、どうかあなた、考へて見てくれませんか、僕はあなたにあやまつた上にもお願ひがあるのです、——澄子さんを——澄子さんを僕に返してはくれませんか、

(山田) (突然驚かされて眼の色を變へる)何だと? ふざけた事を云ふな!

(三好) 山田君、お願ひです、どうか僕に返して下さい、

(山田) それぢや君は、澄子と話し合ひで來たんだな!

(三好) いゝえさうぢやありません、全く僕だけの考へでお願ひするのです、澄子さんは弱いんです、あなたが進んで僕に返して下さらなけりや、いつ迄でもあなたの傍を離れない人です、ですから僕は直接あなたにお願ひに出たのです、

(山田) おい! 一體君あ人の女房を何だと思つてゐるんだね、ありやあ兎に角、あんな物でも生き物だからね、——當人の考へを聞きもしないで貰ひに來たたあ何の言ひ草だ、

（三好）　しかし、問題は眞の愛情にあるのだと思ひます、澄子さんは孰方をほんたうに愛して居られるか、そして孰方が、澄子さんをほんたうに愛して居るか、――それで極まるのだと思ひます。澄子さんは最初から僕の物でした、そして今でも、あなたの傍に居られる場合でも、僕はハッキリとさう感じますし、澄子さんだつて同じ譯だと思ひます、澄子さんは僕を愛する心持ちであなたを、愛さうとはして見ました、けれどもそれはあなたを欺く結果になつてしまつたのです。僕はあなたが澄子さんを虐待されたからと云つて、あなたを批難しようとは思ひませんが、しかしあなたも、澄子さんが自分の物でない事は知つて居られるのぢやないでせうか。――山田君、どうか僕等を哀れんで下さい、あなたも淋しいでせうけれど、僕等の苦しみを察して下さい、今こそ僕等があなたに哀れみを乞ふ時が來たんですから、――

（山田）　よろしい！　次第に依つたら聽いて上げやう、――だが、君の云ふ事あもうそれだけかね？

（三好）　此の願ひさへ聽いて下されば、此れ以上何も望むことはないのです、

（山田）　ふん、さうかね、――僕あこんな事あ餘り云ひたくはないんだが、しかし君の熱心に免じて打ち明けた事を話して上げよう、――澄子が孰方を愛して居るか、僕の話を聞いた上で一つゆつくりと考へて見給へ。君あ君と澄子とが僕を欺したと云ふけれど、欺したなあ矢張り僕なんだ、僕と澄子が君を欺したんだ、――誠にお氣の毒だけれど、――

さう云つて得意らしくニヤニヤ笑ふ、三好不思議さうに山田の顏を見守る、

（山田）　――さうだ、ちやうど一週間になる譯だね、――君と澄子とが所謂時のはずみで以てそんな事になつたなあ、あれはたしか九日の晩だつたから。ねえ、君、さうだつたらう？　あの晩君は澄子と一緒に、下谷の重の井つて云ふ内へ行つたらう、彼處は澄子の行きつけの内でね、――君あ知らないのも無理はないが、澄子は始終彼處へ行くんだよ、いつも彼處ときめて居るんだよ、――

さう云つて又ニヤニヤと笑ふ、その口調が冗談か眞面目か分らないので、三好は何更不安につゝまれる、

（山田）分つたかね？あの女は近頃そんな風になつてるんだよ、――さうだ、僕あ君にお禮を云はなきやならないが、君はたしか四日目の晩に、僕に擲られて困るとか云ふ話を聞いて、あの女に金を三拾圓やつただらう、金とそれから君の寫眞を。――その寫眞はちやんと僕の手元にあるよ、――ほれ、此處にしまつてあるんだ、――

火鉢の抽出しを明けて、そこから三枚の寫眞を出し、三好の前に投げ出す、

（山田）その二枚の寫眞も、みんな君のお仲間さ、まあ手に取つてよく見給へ、

二人ともぢつと顔を見合はせたまゝ、長き沈默。山田は例のうす笑ひをつゞけて居る。三好眞青になる。

（山田）どうしたんだい君、なぜ默つてゐるんだい、もう分つたと云ふのかね、

（三好）噓だ！あなたは噓を云つてるのだ、噓でないなら澄子さんに會はしてくれ給へ、

（山田）よからう！そいつもお慰みだ、（上手の襖を明けて呶鳴る）おい、澄子、ちよつと降りて來い、もうすつかり済んぢやつたんだ、……（間）おい！何してるんだ、降りて來ねえかつてば！（二階より微かに澄子の泣聲が聞える）なぜさつさとしねえんだ！

泣き聲がだんだん高くなる。山田「チョッ」と舌打ちをし、立ち上つて荒々しく二階へ上つて行く。ジタバタと伴ふ物音。一層高き泣き聲。間もなく澄子梯子段を引き擦りおろされ、座敷へ突き出される、と、三好の前へばつたり倒れ伏す。山田その樣子を眺めながら席へ戻る。

（澄子）……敷馬さん、赦して下さい、……

（三好）山田君の云つた事は、本當だと仰つしやるんですか、

（澄子）（泣きながらうなづく）……赦して下さい、……

三好溜息をつく。長き沈默。澄子のすゝり泣く聲のみ聞える。

（三好）さうですか、……それぢや分りました、……

再び間、

（三好）僕はもう、二度とあなたにはお目に懸りますまい、
（山田）君、此の女は僕の物だよ、僕の云ひつけなら何でもするんだ、僕と一緒にいくらでも墮落するんだ、
（三好）墮落したのは僕ですよ、あなた方ではない、——
（山田）ふん、……
（三好）澄子さん、どうかいつ迄も山田君を愛してお上げなさい、——僕はそれぢや、失禮します、
（山田）や、いよいよお歸りかね、そりやあどうも、一向お構ひしませんでしたね、

澄子まだ泣きつゞける、三好立つて玄關へ行く、山田も送つて行く、

（三好）（外套を抱へて土間に降りる）では、左樣なら、——もうあなたにもお目に懸りませんから、
（山田）なあに、又いつでもお出で下さい、彼奴に會ひたかつたら毎晩カフェに居ますからね、
（三好）左樣なら、

三好去る。山田障子をしめ、六疊の間へ戻つて來てもとの席に坐し、ぢつと考へながら澄子の泣き聲を聞いて居る、そして何となく哀れなやうな、痛快なやうな、重苦しい心持ちに沈んで居る。

（澄子）（突伏して居た體を起し、山田の膝に縋りつく）あなた、私を愛して下さい！……あなたの爲めにこんなに墮落してしまつたんです、……ほんたうに私を愛して下さい！……

山田、暫く無言で彼女の姿を眺めて居たが、やがて優しくその背を撫でてやる。

(山田) 澄子、勘忍してくれよ、己あほんたうに悪い人間だけれど、やつぱりお前が居なけりやあ淋しいんだ、

(澄子) あなた、もう秀子さんと切れて下さい、……あたしをほんたうに愛して下さい、……

(山田) うん、きつと、――きつとそのうちに切れてやる、己あ先から秀子よりかお前の方が可愛いゝんだ、己にやあただ悪い癖があるもんだから、……どうかしてお前の力で其の癖を直してくれ、……な、分つただらう、……な、己だつてさうなりてえんだから、……

澄子泣きつゝ頷く。山田も彼女を抱きしめて共に泣く。

(幕)

作者記――此の戯曲は、此れだけとしても二た幕物の脚本として讀めるやうに書いたのであるが、實は昨年十二月の「改造」へ出した「愛すればこそ」の後篇を成すものである。若し讀者が、彼れと此れとを合はせ讀んで下されば、そこに又三幕物としての一つの世界があるだらうと思ふ。作者は他日、「愛すればこそ」の題下に一と纏めにして單行本にする積りである。



女の生活

廣津和郎

汽車の中ではどうも眠れない習慣があるものだから、飯田町を出ると同時に、〇・一のカルモチンを八粒飲んだ。少し多過ぎるとも思つたが。――それが効いて來たのと、それから、發車してから暫くの間はそれ程でもなかつたスティイムが、次第に溫度を增して來て、身體が快くなつて來たのとで、いつの間にか睡氣を催して來た。此中央線の最終列車はいつも混むのであるが、その日はどうしたものか、割合に空いてゐた。一つは寒さのためであらうが。

空いてゐるから、場席には十分の餘裕があつた。そこで私は、空氣枕を出して、長々と腰掛の上に横になつた。新宿に來たのは知つてゐた。が、それから間もなく眠つてしまつたものと見える。――どの位眠つたものかは解らなかつた。藥で無理に眠らせた眠りなので、重苦しくて、快い眠りではなかつた。

その中に、不圖誰かが何か頻りと喋つてゐるのが耳に聞えて來た。それは隨分前から、音聲だけは、確に私の耳に聞えてゐたのであるが、併し何か遠い世界の事のやう

で、一向判然としなかつた。ところがその時、急に『それはほんたうに苦勞しましたわ。ほんたうに苦勞を……』と云ふ言葉がはつきりと聞えたのである。私は仰向けに長々と腰掛の上に、丁度汽車の進んで行く方向を頭にして横たはつてゐたのであるが、その喋り手は、私の頭から二三尺とは離れてゐないところにゐるのである。聲や言葉の調子から判斷すると、三十前後の、東京の女であるらしい。私は半分めざめ、半分眠つたやうな、妙な臆劫な氣持がしながら、聞くともなくその女の言葉を聞き始めた。

『それはお話にも何もならないんですよ。ほんたうに、三年間もよく辛抱したと思ひますわ。ええ、お嫁に行つて直ぐなんですからね、あのお瀧の事件が……』

『……』聞手が、それは多分私のところからは、その女を間に挾んだ上手に腰をかけてゐるに違ひないが、何か彼女に向つて合槌を打つた。濁りを帶びた男の聲だつた。「うん」とか「さう……」とか云つたのであらうが、聲の濁りだけで、言葉は聞えなかつた。

『その時なんぞ、あたしどんなに我慢して盡してやつたか解らないんですよ』と女は言葉を續けた『あたしがお嫁に行く前から、お瀧とは關係があつたんですからね。あたし、あの男にさう云つたんですよ、お瀧が好きなら、あなた、お瀧と一緒におなんなすつたらどうですつて。あたしはいつでも身を退きますつて。——ところが、どうでせう、あの男はあたしに謝罪るんですよ、手をつかんばかりにして。そしておろおろしてゐますの、意久地がないんですわね。男つてみんなあんなものなんでせうか。——「あなただつて覺悟があつてなさつた事なんでせうから、御自分で始末おしなさい」つて、憎らしいからあたしがかう云つてやると、まるで子供のやうな情なさゝうな顏をして、「どうしたらいいか、どうか考へて呉れ、お前にかうして頭を下げて賴むから」つて云ふんでせう。あたし何んだか可哀想になつて來

て、今から考へると、ほんたうに莫迦々々しいやうですけれど、一人で骨折つたんですよ。お瀧を他所に移してさ、そこで身二つにさせてさ、あなた、その苦勞つたら、ほんたうにありませんでしたわ』

『……』相手の男は、そこで又合槌を打つたらしい。

『お瀧を他所に移すつたつて、人眼に著くところは厭でせう、だから、あたし田端の方の産婆と云ふ産婆を、それは一軒々々たづねて歩いたんですよ。そしたら、妙なものね、その時分はお産が一番多い時だつて……あたし初めて知つたんですが、秋から冬にかけてが、一番子供が生れるんですつてね。……なかなか好い部屋がありませんの。どんな部屋でもと云へばあるんですけれど、あんまり汚い部屋では、あたしが冷淡なやうに思はれるのが厭さに、ほんたうに方々探したんですよ。そしてたうとうやつと目黒の方に目つけたんですがね、そのお瀧と云ふ女が、ほんたうに愚図なんでせう、生れる赤ん坊の着物ひとつ縫へない始末なんですからね。もう年の暮ではあつたし、忙しい事は忙しいし、その間に、あたしは手間を省いては赤ん坊の着物を縫つてやるし、それを本郷から目黒まで持つて行つてやるし……「姉さん、濟みません、濟みません」て、その時は、お瀧は涙を流してゐましたよ。「出來た事は仕方がないから」つて、あたしは抑つて慰めてやりましたの。……子供の時から、顔は知てゐたんですよ、あたしよりは年下ですが、直ぐ近所にゐたもんですからね、ぼんやりした子で、愚図だものですから、それまでも、いろいろな男になぐさみ物にされてゐたんですつて……』

語り手は一寸そこで言葉を切つて、大きな溜息をひとつした。その女の言葉が杜切れると、汽車のガタン、ゴトンと車輪の廻轉する音が、急に私の耳についたりした。その音の緩漫さから考へると、道はかなりの上りらしい。小佛峠はもう疾くに過ぎてしまつてゐるやうな氣がするが、併しどの邊を通つてゐるのだらう？……私は一寸起き上つて窓外を窺いて見ようと思つたが、併し何となく懶いのと、それから私の頭の上で喋つてゐる女の話の腰を折るのもまづいやうな

氣がしたのとで、そのまゝやはり眼をつぶつて、何も橫になつてゐた。

『その中に、たうとう子供が生れたんでせう。さうなると、その始末ですわ。男の子でしたがね。……あたし若しお瀧がその子を手放すのが厭だと云つたら、一番困ると思つてゐたんですよ。……あたしだつたら、どんな事があつたつて、手放しやしませんもの。……さうしたら好くしたものですわね。あゝした浮氣な女は、やつぱり何處か違つたものだと、あたし感心してしまひましたよ。まるで平氣なんですからね、それはまるで』そこで一寸輕蔑したやうな語氣を洩らして、『……産婆の婆さんが、それは好い人でね、もつともそんな事には馴れてゐるんでせうけれど、いろいろ心配して、貰ひ親を探して呉れましたの。ええ、五十圓つけてやる事にしたんですよ。……あたしがその子供を抱いて、車に乘るのを、産婆の玄關先で、お瀧がずつと見てゐるぢやありませんか。何ぼ何でも涙を流すだらうと思つたら、眼ひとつ屢叩きませんの。平氣な顏をして見送つてゐますの。あたし呆れてしまひましたわ。その時限り、一生手放す我子だと云ふのにね。……車が動き出すと、あたしの方が却つて涙が出て來てしまひましたわ。だつて、ほんたうに可哀さうな子ですものね。實の親がありながら、兩親ともまあその薄情つたら……それから先方の、貰つて呉れる人に會つたんですが、でも好い人達でしたわ。結婚して十年になるのに、子供がないと云つて、それは喜んでゐましたの。……ええ、あの子のためには却つて仕合せですわ。仕合ですとも。……そんなに樂な暮しの人ではなささうでしたが、でも、今年の五月に一寸行つて見ましたらね、ちやんとしたなりをさせてゐましたよ。三つになつたんですから、もう口を利いてね、そしてそれは大事にされてゐますの……』

『……』

語り手の聲は、かなりしんみりしてゐた。世の中にさらにあるであらう事件の一つを、さらにあるやうな話し方で話

してゐると云へばそれまでであるが、併し側で聞いてゐた私までが、何となく惹き入れられて行くやうな氣分が、彼女の話には十分あつた。――私はぢつと眼をつぶつたまま聞いてゐた。

『ところが、ほんのその當座――當座も當座、やつと二ケ月か三ケ月だけなんですからね、あの男が神妙にしてゐたのは』と一寸默つてゐた後で、女は語りつづけた。『今度は遊びを覺え始めたんですよ。それは男だから、ちつとは遊びに行つたつて仕方がありませんけれど、でも、ああ云ふ事のあつた直ぐ後なんですからね。――けど、あたし素人でない玄人となら、まあまあ、我慢してゐようと思つてゐましたの。玄人なら、後になつて、お瀧のやうな面倒な事は起るまいと思つたものですから。――さう思つて、我慢してゐると、どうでせう、人の氣も知らないで、人の默つてゐるのを好い事にして、だんだんそれが嵩じて來るぢやありませんか。初めは四日に一遍か五日に一遍ぐらゐしか家を明けなかつたのが、終ひには三日も四日も續けて歸つて來ないんですよ。……あたし、考へると、ほんたうに口惜しくなりましたわ。あたしの方で何ぼ盡したつて、何もならないんですからね。それでつい口に出して云ふと、『女なんか默つてゐろいツ』て直ぐかうですの。あたしも默つてゐられなくつて、つい罵るものですから、家が始終ごたごたして、おちつきが失くつてね。――さうしてゐる中に、H――町なんですがね、そこの玉奴つていふ藝者が……あなた御存知ですか？』

『いや、知りません……』聞手の男の言葉は、此時は私の耳にもきこえた。

『その玉奴と云ふのが、あの男に熱くなつてゐるといふ評判を聞きましたの。熱くなつてゐるつて、みんな手なんでせうけれどね。そしてあの男もそれに夢中になつて、スキがあつたら、あたしと別れるからつて、始終その玉奴に云つてゐるんですつて。……ええ、へんな處からあたしの耳に聞えたんですよ、髪結の口から。……あたし、たうとうもう我慢がならなくなつて來ましたの。で、あの男が始終行つて玉奴と會つてゐると云ふ待合に、或晩出かけて行

つたんですよ。その時は、もう恥も外聞もありませんでしたわ。口惜しくつて、口惜しくつて、もう夢中でしたの』と女はその時の樣子を思ひ出してゐるらしく、涙ぐんでゐさうな聲で云つた。『でも、生れて待合といふものに初めて行つたんでせう。女中が綺麗ななりをしてゐるのを見ましたら、氣が引けるやうな氣がしましたよ。それで、自分の良人だと云つたら、會はせて呉れないと思つたものですから、一生懸命に口惜しいのを堪へて、笑顏を作つて、側から用を云ひつかつて來た使の者だと云ひましたの。

『でも、良人の顏を見ると、あたし靜かに云はう、靜かに云はうと思つてゐたのも忘れて、つい泣聲で、むしやぶりついてしまひましたの。――だつて、「莫迦、何しに來やがつた?」かういきなり頭から怒鳴られたんですもの。……ええ、ええ、その女は何處かに姿を隱してゐて、出て來ませんでしたわ。……あたし、でも胸に思つてゐる事をすつかり云つてやりましたわ。何も彼も洗ひざらしに。「昔の事を考へて御覽なさい、あたしを袖にして、待合入りなんかしてゐられる義理か」つて。そしたら、あの男が、あたしを撲ちましたの』

明かに今は彼女は涙を流してゐると見える。鼻をすする音をさせた。

『その時、あたしはもうこれでおしまひだと思つたんですよ。こんな男と一生つれ添つてゐたら、どんなに苦勞をするか解らないと。――あたしに對して愛情といふものを、これつぱかりも持つてゐないんですからね。どうせいつか一度はあたしを振捨てようとしてゐるんですからね。あたし向うから捨てられるのは厭ですから、此方から出てしまはうと決心しましたの。……あたし泣きながら待合を出て來たんですよ。女中や何かが、さぞあたしの後姿を指さして笑つてゐるだらうと思つたら、ほんたうに、口惜しくつて口惜しくつて、あの時のやうに恥しい、苦しい思をした事はありませんわ』

彼女はそこで又鼻をすすつた。

『あたしその時から、あの男の家を出てしまひましたの。――兄に話して、荷物や何かをすつかり引取つて來て貰ひましたの……』

『…………』

それきり暫く無言になつた。相手の男も默つてゐた。私は相變らず仰向けに寝た姿勢を崩さずに、眼をねむつてゐたが、併しその無言の間に、その女が、どんなに沈んだ顔をしてゐるかが想像出來た。聞手の男が默つてゐるのも、一寸下手な慰めの言葉など云へない氣がしてゐたのだらう。――その氣持も解る氣がした。私もその女に對する同情の念が、かなり起つてゐた。かういふ話と云ふものは、由來一方からだけ聞いたのでは、片手落になるものであるが、併し彼女の云ふやうだと、男のやり方もひどいやうな氣もした。もつとも、その男自身の氣持になつて見れば、相當の理由があるであらうし、彼女を愛せない理由もあるのであらうが。――併し、いづれにしても、どんないきさつがあつたにして、女の立場としては、隨分苦いものに相違ない。その點は十分同情する價値があると思つた。

『それで、今はすつぱりと別れてしまはれたんですね？』と暫くして聞手の男が、彼女の心持を荒立てまいとするやうな、低い同情するやうな調子で訊いた。

『ええ、すつぱり別れてしまひましたの。ちやんと間に人を立てて』と女は泣いてゐた聲を上げた、と云つたやうな調子で答へた。『でも、あたし却つて清々しましたよ。別れてほんたうに好い事をしたと思ひましたよ。――あの男は、たうとう玉奴と一緒になつたとか云ひますがね、でもどうせ長持ちがしやしませんわ。根が浮氣者なんですもの……』

投げ出すやうな、もう未練も何もないと云つたやうな調子で云つたが、併し言葉のはしには、女らしい口惜しさが、十

分に漲つてゐた。――それも十分私には解る氣がした。

又暫く無言がつゞいた。

『それで今はあなたはどうしていらつしやるのです。――兄さんのお宅においでなんですか？』とやがて聞手の男が、先刻と同じやうな、なるたけ彼女の神經に觸れまいとすやるうな調子で訊ねた。

『いいえ。――兄の家には嫂も居りますし、さう長く世話になつてゐるわけにも行きませんから、それに女の身として、ただ默つて遊んでゐるわけにも行きませんから、何か商賣をしようといろいろ考へたんですよ』さう云つてゐる中に、彼女の言葉がだんだん明るくなつて行くのが、聞いてゐる私の耳にも感ぜられた。『けれども女の商賣つてなかなかありませんものね。初めは何處かに部屋でも借りて、裁縫でもして暮さうかとも思つたんですけれどもね、今時、一日坐り通しに坐つてゐたつて、いくらにもなりはしませんからね。――それにあたし、それはこんがない性分なんでございませう。――少し長く縫物をしてゐますと、直ぐ眼が痛んでまゐりますの。……それでいろいろ迷つた揚句、勸める人があつたものでございますから、A町の方で妙な事を始めたんでございますよ』

彼女は今は明かに、その頰に微笑をさへ浮べてゐるに違ひない。――私はその彼女の明るい調子に、かなりの好奇心を起した。

『なるほど』と聞手の男は、大きく合槌を打つた。

『初めは馴れないものでございますから、いろいろ交際だの何かで面倒でございましたけれどもね、少し馴れましたら、近頃はほんたうに氣楽になりましたよ。こんな事なら、早くさうすれば好かつたと思ひましたわ』

『と云ふと、何の御商賣ですか？』

『それが……』と彼女はそこでたうとう、

『おほほほ』と云ふ明るい笑ひ聲をさへ立てた。『待合ですの』

私は驚いて、その時眼を開いて、その女の顔を見る氣になつた。——聲を開いてゐた時よりも、眼を開けて見ると、その女は割合に若かつた。未だやつと二十六七だらう。丸髷に結つて、なりの事はよく私には解らないが、待合のおかみでも著さうな、澁い著物を著て、黒襟をかけて、そしてお召らしい縞の前掛を締めてゐた。小作りで、綺麗な女ではなかつたが、それ程醜い女でもなかつた。……私はその女の善良さうな、併し無智らしい横顔を眺めてゐる中に、妙に輕蔑してやりたいやうな氣持が一寸起つて來た。良人の待合入りに苦しめられて、良人と別れて來たが、結局、女の商賣としては、待合が適當だと思つた女……良人が待合入りをして自分を苦しめたと云ふ事と、他の男が自分の開いた待合に來て、その男の細君を苦しめるだらうといふ事との間に、何の矛盾も感じない女の無智、私はさう思つて、一寸その女に不愉快を感じた。

『それは結構ですな』と聞手の男が云つた。『でも、大分近頃の不景氣では、影響がありませうな』

私はその時その男の方にも眼をやつた。それは四十五六の、商人風の男で、顔の色が黒くて、痩せてゐた。その男は懇意と云ふ程ではないが、前から彼女と知合であるらしく、それが久しぶりで偶然にこの汽車の中で彼女に會ひ、そして彼女から、彼女の境遇をいろいろに聞かされたものらしかつた。——その男の様子にも、無論彼女の矛盾などについて何か感じてゐるやうなところはなかつた。

『ええ、でもお蔭様で、あたし共では、前の代からのその家にお馴染のお客様がありましてね、その方たちが御ひゐきにして下さるものですから、そんなでもありませんのよ。……それにA町はあの通りの場末でございませう。新橋や赤坂

あたりが不景氣になると、却つて景氣が好くなるんでございますよ』

『それは結構ですな』

『おまけに、あたしのところはそれは小さな家でね、お座敷もたつた三室しかありませんの。女中ひとりとあたしとたつた二人きりでございませう、ですから、かゝりはかかりませんし、日に二人か三人のお客様があれば、それで結構御飯が食べて行けるんでございますよ』

『なるほど、さうですかなあ！』と聞手の男は感心したやうな調子で云つた。

私は再び眼をつむつた。そして默つて尙もさういふ話を聞いてゐたが、その中に、今し方感じたあの妙に彼女や聞手の男を輕蔑したいと思つた峻しい感情が、次第にゆるやかになつて來るのを覺えた。――何もそんなに荒立てなくても――さう云つた氣がし始めたのである。良人の待合入りによつて苦しめられた彼女が、今度は待合を開く。――さういふところに、彼女が矛盾を感じてゐないとしたところで、そんな事は何も、責められなければならない程の彼女の罪でも何でもない。さう云つた氣がし始めたのである。他からさういふ事をとがめ立てさへしなければ、彼女は何の苦痛も感じないで、彼女を裏切るところの良人から獨立して、暮して行けるのである。『かゝりはかかりませんし、日に二人か三人のお客様があれば』から彼女は云つてゐる。そこには慾の深くないいぢらしささへある。――今のやうなへんに荒々しい世の中で、女中とたつた二人きりで、僅な遊客のお蔭で暮して行けるといふ事は、ほんたうにこの女に似つかはしい生活だと云つても差支へない。寧ろ謙遜、さう云つても差支へない。――さう云つたやうな氣がし始めたのである。

私は再び眼を開けて、彼女をながめた。前とは全然ちがつた明るい氣持で。――その時丁度彼女は、ほの暗い天井の電燈の光を受けた横顏に、何も考へてゐないやうな明るい微笑を浮べながら、相手の男に向つて、こんな事を云つてゐ

た。

『少しお出かけになりましては。……一寸可愛い妓が居りますよ。丸ぽちやの。表向きからだと、なかなか高い事を吹つかけますけれども、それは内々にして、決して大した御散財はかけませんわ』

『いや、どうも、いや、どうも……』相手の男は、滑稽な手附をして頭を掻きながら、擽つたいやうな顔をして、わつははと聲を崩して笑つてゐた。（十年十二月）

二人の青木愛三郎

宇野浩二

一

先づ始めに、斷つておきたいのは、この小說の表題の青木愛三郎といふ名前に就いてであるが、これは近頃評判の『基督と彼等』『奇蹟』『光明』『世界人』などと言ふ、市場に出ると忽ち二十版三十版と歡迎されてゐる、小說及び戲曲の本の作者の、あの有名な青木愛三郎と同じ青木愛三郎のことなのである。

が、實を言ふと私も、彼がもう四五年越しの肺病で、もつともその爲に始終床に就いてゐるとか、海岸に出養生に行つてゐるとかいふ程ではないが、同じ文學者仲間などとも餘り往來しないで、大抵自宅で養生したり、勉强したり、そして著作したりしてゐるといふこと、で、元來が所謂人道主義的な作家であつたが、近頃は更に宗教的な色彩を帶びるやうになつたといふこと、從つてさういふ傾向に淺薄な憧れを持つてゐる、といふよりもさういふ思想傾向の淺薄な流行に溺れてゐる、日本現代の青年に、偶然か當然か、彼は非常に持て囃されてゐるといふこと、又容貌に關しては、見たところ

へと言つて、雜誌や新聞の挿繪に出る寫眞に依つてだが、)彼はさういふ病身の人とは見えない程、柔道家のやうに筋骨逞しく太つてゐて、一羽の小鳥の死にも涙を流したり、盲目の乞食に物を施すにも帽子を取つたりするやうな人とは思はれない程、鷹のやうな目をして、いつも無性髯を生やしてゐる、そして割合に下品な顏をしてゐるといふこと――、つまり、讀者諸君も新聞や雜誌に依つて傳へられて知つてゐること以上に、私も、彼に就いては何にも知るところがないと言つてもよいのである。

ところが、私のもう何處かへ行つてしまつた友達の戸川介二は、青木愛三郎とは竹馬の友で、小學校は勿論、中學校、それから上京も一緒で、而も同じやうに文學を志して來たのであつた。そして私は彼と半年程の交際の間に、彼を通して色々と青木愛三郎に就いて聞くことが出來たのである。彼と私とが會つたのは、四年前の春の始めのことで、神田區の裏通の或る貧乏な出版屋の應接間で、私たちは、當時誰の翻譯も彼の翻譯も、悉く文學士益田白水といふ、その出版屋の主人の名前に依て刊行されてゐる、或る探偵小說の叢書に買つてもらふ爲の原稿を、各々片手に隱すやうにして持つて、俯向いて恐縮して座り込んでゐた時であつた。

やがて、私たちは別々に、丁度生徒が校長の部屋に呼ばれて行くやうに、その隣室の、主人の文學士益田白水の卓子の前に呼び出されて、「はあ、コナンですか、(この男は外國の作者の、姓名の上半分だけを呼ぶ癖があつた、即ちこれはコナンドイルのことである、)コナンはもう少し有り觸れ過ぎてゐますからな、」とか、「はあ、モウリスですか、(これは即ちモウリス・ルブランのことで、)モウリスも近頃は大分類書がありましてな、」とか、結局「よく考へておきませう、」といふのが最後で、私たちは又しても袖にされるのが常であつた。その日、私は始めて知り合ひになつた戸川介二と、歸りに何處かで珈琲でも飲みませう、と約束してあつたので、到着順に依つて、私の方が先に呼び込まれて、

「文字が少し亂暴過ぎるやうですな、さうではないでせうか、」と岳田白水は未だ三十四五でしかない癖に、既に老人のやうな、そして叮嚀な猫撫で聲で、「それに譯語が少し固過ぎるやうに思ひますが、如何でせうか、斯ういふ言はゞ通俗物としましては……」そして結局落第して歸ることになつたのであるが、次に呼び込まれた戸川介二を待合はす爲に、わざと應接室、と言ふよりは待合室で、ぐづ〳〵してゐたのである。そこは疊敷の三疊の間で、赤茶けた疊の上に、縁の缺けた、エビスビールの廣告か何かの、瀬戸物の灰皿と、寄席でも最早や使はないやうな、薄い汚れた坐蒲團が二三枚ある切りの汚い部屋で、私は殆ど豫期してゐたことだつたから、大して悄氣もせず、寧ろぼかんとして煙草を吹かしてゐた。すると、隣室での話聲がはつきりと聞えて來るのであるが、戸川介二も亦運んで來た原稿に就いては、私と大同小異の成績で、やつぱり落第したらしかつた。が、彼と私とが違つたのは、彼は兎に角的にして來たのだし、それに差迫つて困つてゐることがあるから、若干の金を借りたいと申込んで、到頭申出た額の四分の一に値切られて、漸く借りることになつたらしい氣配であつた。私は巧くやつたな、美しいな、と思ひながら、然し大部分ぼかんとして、やつぱり煙草を吹かしてゐたのである。すると、その時、斯ういふ會話が聞えて來た。——

「あなたは青木愛三郎さんを御存知ださうですが——あの『基督と彼等』の著者の……？」と主人の文學士が聞くと、

「えゝ、」と戸川介二が興味のなささうな聲で、「知つてゐます。」

「御友人なんですか？」

「えゝ、同郷で、小學校時分からずつと一緒でしたから……」

「あの人の本を出さして貰ふのは容易でないでせうな？」

「どうですか。僕はもう三四年も會ひませんから……」

この問答を隣室で聞いてゐた私には、無論、この汚い應接室で初對面をした戸川介二とあの有名な文學者の青木愛三郎とがそんな親しい友人であるといふことにも一應は驚かされたが、それよりも同じ二人の人間の問答會話が、その話題が違ふと、忽ち彌次喜多の道中のやうに、或る時が一人が王樣で一人が家來になり、他の瞬間には一轉して役目が振り變つたやうになつたのに、一層の驚きと滑稽とを感じた。――

私たちは共に獨身で、何れもあの神田の本屋の應接間に似たやうな汚い下宿に住んでゐて、同じやうに名もない、貧乏な文學書生の境遇である關係から、間もなく親しい友達になつてしまつた。彼は背の高い、痩せぎすの、青白い、しかし品のある立派な顔立の青年であつた。彼は、私が貧乏だ、貧乏だといふことを口癖のやうに言ふのと反對に、どんなに貧しくて、懐に一文の錢のない時でも、貧乏臭い言葉を一言も吐いたことがなかつた。「君、十錢持つてゐないかね?」と彼が言ふことがある。「生憎、一文もないね。」と私が氣の毒さうに、「どうするんだ?」と聞くと、「いや、いゝよ。」と言つて、彼は決して何と聞き返へしてもそれに就いて言はなかつた。後で考へて見ると、多分、歸りの電車賃がないらしかつたのである。

殊に私の目についたのは、彼の服裝であつた、と言ふのは、彼はそのやうな、要するに可成り貧乏な境遇にありながら、私たちが始めて會つた時、お召の着物に大島の羽織を着てゐた。この組合せは決して調和のいゝものではないが、彼にはその外に何の着換へもなかつたと見えて、單物の時候になる迄それをずつと着つゞけてゐて、次にはお召の單物にセルの羽織に變へた、そして最後に明石の着物になつた時分に、私は彼と別れてしまつたのであるが、多分彼はそれ等の着物を、移り變りの度に質屋の店先で着更へて來たものに違ひなかつた、それ等の着物は或物は可成り時代物であ

つたり、或ひは又變なところにはぎがあつて、彼がそれをどんなに女のやうに細心に、私と向つてゐる時など隱すことに氣を配つてゐたことか、或ひはひどく垢染みてゐたりしたが、兎に角、彼はそんな貧乏であつたにも拘らず、そんな種類の着物を着ることを享樂してゐたらしかつた。

彼の故鄕は靑森縣で、家は一村での門閥家らしかつた、彼はその家の二男で、さういふ田舍の豪家によく聞くやうに、もう傾きかゝつてゐたものか、それとも家の方はやつぱり立派にやつてゐたが、彼が勘當同樣の身分にでもなつてゐたものか、その邊の事情は彼の話だけでは十分によく分らなかつた。が、私が言へることは、彼は私が今迄知つて來た多くの人たちの中でも、有數な頭のいゝ男で、殊に、私たちが互ひに浮身を窶してゐた文學上の才能に於いて、色々の文學に就いての彼の批評を聞いたり、又私は唯の一篇も彼が書いた纏まつた文章らしい文章といふものは見たことがなかつたが、彼の樣々の話の話振りや觀察樣から推して、あゝ、この男は天才見たいな男だな、と幾度感心したことがあつたか知れなかつた、珍しい才人に違ひなかつた。

だが、私は又、屢々斯ういふ心配をした、といふのは、彼のやうな物分りのいゝ、頭の優れた、恰好な、それでゐて變に曲り屋の、このやうな男は、彼のやうな物の考へ方をして、彼のやうな境遇にゐると、いつの間にか頭ばかりが妙に進んでしまつて、こつ〳〵と物を書いたりなどすることが馬鹿らしくなつて來て、文學などに執着することを止めてしまひはしないか、といふことであつた。實際、それは私が未だ年が若かつたからといふ理由ばかりでなく、又彼が無名で、そして彼も亦年が若かつたからといふ理由ばかりでなく、と言つて、私たちは當時もう三十歲だつたのだから、彼が當代の諸々の文學者の缺點を、同時に少しはいゝ所をも、色々と擧げて批評する言葉は、全く天才的と言つても決して過ぎたものではなかつた。私はふと思ひ出したが、俗に眉毛の下の骨の高い者は物眞似が上手な性で、役者になつたら

いゝと言ふ諺があるが、彼がそれで、眉毛の臺になつてゐる骨が著しく高くて、それに眉毛が黒くて長いのが彼の特徴だつた、その爲か實に物眞似の上手な男で、機嫌のいい時など、よくあの出版屋の主人の、文學士の、頤を突き出す話し振りから、猫撫で聲から、言葉の癖などを眞似て見せて私を笑はしたり、又屢々何かの折に斯ういふ事は正宗白鳥ならこんな風に觀察するだらうとか、島崎藤村なら斯ういふ風に書くだらうとか言つて、即興の文章を作つて、口で言つて私を微笑さしたりした。

そのうちに彼は或女と戀愛に陷ちたのであつた、戀愛といふよりも戀愛的な交情を結んだと言つた方が適當かも知れない。その相手の女といふのは、待合に呼ばれる淫賣婦なのであるが、丁度彼がその女と馴染み始めた時分に、警察が急に彼女等の社會に對して嚴重な取締を始めて、それ等の待合と女たちに向つて、いつ幾日までに廢業しなければ悉く法律の處分を行ふといふ觸れが出たので、彼の馴染の女は彼の下宿に轉がり込んで來たといふやうな譯らしかつた。たつた一度　私は何にも知らずに、暫く彼の顏を見なかつたものだから、彼を下宿に尋ねた時、いつになく彼が狼狽したやうに見えたが、果して彼の汚い下宿の部屋の隅に、年の若い、仇つぽい女が坐つてゐて、私とふと顏を合はした時、一寸會釋をしたので、私も會釋を返したが、彼は別に紹介するやうな口を一度もきかなかつた、無論その女に就いて何の說明もしなかつた。その頃から私たちは今迄のやうに顏を合はさなかつたが、一度彼はその女を連れて、私の下宿に二十分ばかり遊びに來たことがあつたが、その時も少し文學の話などをした切りで、外に何にも言はないで歸つて行つた。それから半月程後のことであるが、或夕方、ふらりと一人で彼は私の下宿にやつて來て、「君、君は金を四五圓程持つてゐないだらうね？」と私に言つた。私はその時一圓位しか持つてゐなかつたので、さう答へると、彼は「ぢや、君、それを明日まで貸してくれないか？　そして君……」と一寸言ひにくさうにして、「君、何か忙しいことをしてゐるか？　僕、

頼みがあるんだがね、といふのは、これから横須賀まで附合つてくれないか、そして向ふで一晩泊つて、明日朝、僕も一緒に歸るから。今夜の宿賃も、それに往復の汽車賃も皆僕が持つよ、その代り今夜は君の一間を貸してくれ給へ、明日歸りに返すから、」と言ふのである。「一體、それはどういふ事なんだ、それやその位の附合ひはしてもいゝが？」と私が言ふと、「それは途々話すから、遲くなるといけないから、ぢやあ、一緒に行つてくれ給へ、」と言つて彼はもう中腰になつた、で、私も立上つたのである。

　そして、途々彼が話したところに依つて、私は始めて、どうして彼が彼女と知合ひになつたか、どうして彼が彼女と同棲するやうになつたかを知つたのである。が、彼女が彼のところに來て、彼が餘り貧乏で、彼女がこれ迄自分の體で稼いで暮してゐた時よりもずつと貧しく、不自由な日を送らねばならなかつたので、女は愛想を盡かして、十日程前に横須賀に藝者になつて行くことになつた、その町の警察は日本中で一番彼女等の種類の稼業の者に寛大で、そして又藝者とは言ひながら、三味線は持つすべを知らなくても宜しくて、以前彼女がしてゐたやうな事をしてゐればいゝと言ふので、そこに行くことに定めたのである。だが、その時分には彼も彼女も離れるとなると、幾分か互ひに慕ひ合ふ程の人情が出來てゐたので、彼女の方からも遊びに來いといふし彼の方からも彼女に合ひに行きたい氣持に襲はれてゐたと言ふのである、そして、その前にも、彼はもう一度、彼女に合ひに行つたことがあるのださうだが、その日はどゝも一人で行きにくかつたのか、私を誘ひ出したのであつた。彼はその時、殆ど金を持つてゐなかつたので、私のと合はして、横賀須まで二人が三等で往復する汽車賃がやつと程しかなかつたのに、彼は着物のやうに何彼につけて變に辻褄の合はない贅澤な男で、私がもしもの事を氣遣つて隨分反對したにも拘らず、二等に乘つてしまつた、おまけに横須賀の停車場から何とかいふお茶屋まで、彼は俥を命じてしまつたので、最後に私たちの懐には、二十錢に足りない金しか殘らなか

つた。

ところが、そこに難儀な事が起つたと言ふのは、そのお茶屋に着いて、食事の用意と一緒に、早速彼の女であるところの藝者をかけたところが、今先出てしまつて貰へないと言ふのである、遲くなつてもいゝから、今夜中に屹度貰へるようにしてくれと頼んだところが、それは引受けられないと女中が言ふのである。さあ、私たちは困つてしまつたのであつた。では、會はなくてもいゝから、こゝで一寸手紙を書くから、それを彼女にとゞけてくれないか、と頼むと、それは規則で出來ない、規則は規則だらうが、そこを何とか、いや、然し規則だから、と色々爭つた末、結局彼女附きの箱屋を呼んでもらふ事なつた。そのうちに時間が段々經つて行くし、私たちは夕飯を食つてゐないのだが、そこに並べられた料理に箸を附ける元氣もなくなつた。私は色々考へて「仕樣がないから、君、」と彼に言つた、「浦賀から東京通ひの汽船がある、あの汽船の三等にならこゝにある金で一人は乘れるから、僕はこれから浦賀まで歩いて行つて、十一時に出る船を捉へて、それで東京へ歸つて、明日の朝大急ぎで何とか金をこしらへて君を迎へに來てやらう。さうしよう、戸川君、もう斯うなつたら決心して、さうでもしないと、……それにもう二三十分も遲れたら、これから浦賀まで二里近くはあるだらうから、汽船にも間に合はなくなるし……。」

その時は流石の彼も可成り困つた顏をしてゐたが、私のこの提議には反對して、「まあ、待つてくれ給へ、何とかなるよ、今に。そして、まかり間違つたらこゝに泊つてしまへばいゝんだ、この家は料理屋兼待合なんだから、」と言つてゐたが、やはり晴れない顏付で、ひどくそわ〳〵してゐた。殊に彼が困つてゐたのは、彼女を抱えてゐる家では、既に彼女には彼といふ『惡足』があることを知つてゐて、十分警戒してゐたさうだから、今彼がそこに來てゐるといふことが、彼女の家に知れると、事が尙面倒になつてくるのである、だから、箱屋に手紙を頼むことだつて、餘程うまくしない

と、中々油斷がならないのである。そこへ、「あの、箱屋が參りましたから、一寸廊下まで」と女中が知らして來たので、彼はそこ〳〵に立つて行つた。すぐ部屋の外の廊下で何かごた〳〵言つてゐる聲が聞えて、それが急に收りさうもない氣配なので、私も堪り兼ねて、出て行つて見ると、廊下が鍵の手になつてゐる曲角のところに、彼の背の高い姿とその向ふに彼の體に半分隱れて、背の低い箱屋とが何か頻りに話をしてゐる。「それはども規則として出來ませんので……」と箱屋が言つてゐる。「それはさうだらうが、決して女を此方に貰はうとか、此方に來てくれとか言ふやうな事は書いてないんだ、それは保證する、そして又、來なくてもいゝと君が言つてくれてもいゝ、唯、急用なのだから、これに返事さへもらつてくれたらいゝんだ、」と彼が一生懸命に言ひ張つてゐる。そこへ私も顏を出して、「君返事を貰はなくても、唯渡してもらひさへしたらいゝ譯ぢやないか？」と彼に注意した。「さうだ、」と彼は又箱屋へ向つて、「返事も何もいらない、唯渡してくれさへしたらいゝんだ。」その時、私が何氣なくふと顏を上げると、丁度廊下の曲り角の隅に大きな姿見が掛なてゐて、その時どういふつもりだつたか、彼も私も袴を穿いてゐた、即ち二人の背の高い、（私も背が高い方なので、）袴を穿いた、その邊の常客である軍人にしては色の白い、それでゐて商人らしくも無論ない、珍らしい變つた種類の人間が二人と、小さな箱屋との三人の肖像が、何かの畫面のやうにその鏡に映つてゐるのである、そしてふと氣が附くと、今迄少しも氣が附かなかつたことには、その三人の肖像に對して、その背景に幾人もの女中の顏が、彼方からも此方からも不思議さうな顏をして視線を集中してゐる圖が、鏡の中に現はれてゐたことであつた。私は忽ち赤くなつたものである。

ところが、私たちが部屋に歸つてから五分と經たない時に、廊下にばた〳〵と女の足の音がしたかと思ふと、思ひがなく待つてゐた彼の女が這入つて來た。手紙を見たのか、と彼が聞くと、いゝえ、との答で、彼女の云ふには、今までゐた座敷があいたので、歸つて來ると、此家から掛つてゐるといふことだつたから、急いでやつて來たとの話だつた。

が、何にしてもよかつたといふので、そこで間もなく勘定を聞いて、女に拂つてもらつて、翌朝もう少し女から金を借りる約束をして、それから近所の宿屋に行つて私たちは泊つたのであつた。その晩、二人が枕を並べて床に就いて、お茶屋での心配だつた時の話などを回想して、つゞいて色々の話をしてゐた時、何かのついでに彼が言ふには、彼女は我儘な女で、彼の貧乏に愛想を盡かして、自分で好んでこんな所へ來ておきながら、來て見ると、東京にゐた時のやうに自由が利かない事やら、何やら彼やらで、直に厭になつたと見えて、彼のところへ歸りたい歸りたいと毎日程言つて來るのださうである。だが、歸るにしては、僅かながら、幾らかの借金をして這入つてゐるので、今更止めると言ふと、その借金に利息を添えた上に、やれ何の損害だとか、何の手數料だとか附加へて、相當の額に上るので、そんな金は到底彼に調達出來る筈がない、すると、彼女はそんなら折を見て逃亡して行くから、と彼に言ふのださうである。もし彼女が逃げ出して來るとすると、當然抱え主の方では彼を目あてに探しに來るに定つてゐるから、彼も一緒に姿を隱さなければならない、さうすると、姿だけでは未だ見付け出される恐れがあるから、名前などを變へてしまはなければならぬ、困つたことだなどと言つてゐた。

その翌朝、約束通り、彼の女は着物を質入れしてこしらへて來たと言つて、十六圓かの金を持つて來て、そつくり彼に渡して行つた。彼はそれで私たちの宿賃を拂つて、大威張りで二等に乘つて、私に一圓の代りに二圓返してくれた。彼は汽車の中で久しぶりで色々と文學の話をした、そして彼は相變らず當代の文學者たちを片つ端から輕蔑した口調で、例に依つて辛辣な批評を浴びせた末に、「ね、君、」と彼はにやくく笑ひながら「僕はこんな事を考へてるんだ。昨夜、君に一寸話したね、あの女がもし逃げて來たら、僕は仕樣がないから、早速下宿を引上げて、何處か、淺草とか、澁谷とか、飛んでもない違つた方角の、人口の稠密なところへ、名前を變へて二階借りでもして暮さなければならないんだ。ところで、僕は思

ひついたんだがね、今の文士なんて、みんな嬉さうな顏をしてゐるが、腹の中は何奴も此奴も甘くて、お目出度く出來てるに違ひないんだ、そこで僕は思ひついたんだが、その假名の名前でだね、自分は外國から歸つて來た者だと言ふんだ、手紙でだよ。さうだね、外國も普通の外國では面白くない、さうだ、露西亞がいゝ、日本の文學者は、露西亞といへば赤本でも講談本でも、何でも彼でも素的なものゝやうに思つてるからね、その露西亞から歸つて來たもので、直又露西亞に行くと書くんだ、露西亞で何處か學校にでも這入つてゐたことにするんだね。そしてその宛名の文士の著書のうちで何か一番値の安い本を調べて、それを此前露西亞にゐた時に飜譯して、飜譯したゞけぢやいけないから、誰か、誰でもいゝよ、クウプリンでも、アルツイバアセフでも、ゴリキイでも、それ〴〵向きのいゝ名前を選んで、それを見せたところが、クウプリン曰くサ、或ひはアルツイバアセフ曰くサ、これは大變面白い、この作者の外のものをもつと飜譯してくれ給へ、出版の方は自分が世話する、ことに依つたら序文を自分が書いてもいゝと言つてゐた、で、自分は今度露西亞に行つて急に貴下の外の書物を飜譯したいと思ふから、失禮だが御寄贈に預かりたい、と大體斯ういふ手紙をやるんだ。それや文士錄を調べるのさ、そして、文士なんてものはどうせ暇で始終往來してゐるものだらうし、女のやうにお喋りに違ひなからうし、殊にそんな手紙を貰はうものなら、喜んで吹聽して廻るだらうから、文士錄に依つて、同月同時刻に一度にそれ〴〵の文士にさういふ手紙を出すんだ。どんな臭つた標緻の女でもそれ〴〵自惚があるやうに、それ以上文士なんて言ふものは自惚家が多いだらうし、甘い人間たちに違ひないから、まあその手紙は八分まで成功するだらうと思ふんだ、どうだ？　そこで彼等の小說本が一通り集まつたら、早速引越して、もう一度名前を變へて、實際藝術家なんてものは逃亡人を調べることは馴れてるさうだから、二三度名前と居所を變へる必要があるさうだから、で、引越して、その集まつた本を賣るんだね、先づざつと五十人の文士にさういふ手紙を出すとして、四十人から平均一册半の割合

で六十冊は集まるね、一冊平均五十錢として、五六三十圓儲かる譯ぢやないか。無論、詐欺だよ、だが一番愛嬌のある、一番罪のない詐欺ぢやないか。アハハハ。」——

そして、それ切り私は彼、戸川介二を見ないのである。それから一週間程後、私がふと思ひ出して、彼を下宿に尋ねて行くと、そこの女中の言ふのに、「昨日、お引越しになりました、」との答で、行先は分らないと言ふのである。「いつか中、戸川君のとこにゐた女の人が引越す時に來なかつたかい？」と私が聞くと「どうですか？ 存じません、」と女中は無愛想に答へた。それ切り、私は彼を見ないのである。だから、前にも言つたやうに、私と彼との交際はこれ迄のところでは、その僅か半年足らずの間に過ぎないのである。

ところで、これは私の惡い癖で、話がすつかり脇道に這入つてしまつたのであつた、何故と言つて、私は始めこの小說の表題の名前の、青木愛三郎に就いて話さうと試みたのである、そしてそれは私の今言つた友達の、戸川介二が彼の竹馬の友達で、小學校からずつと、中學校を出て東京に、に來てからも一緒に勉强した仲で、即ち、彼から私は色々と青木愛三郎に就いて聞いたそれを傳へようとして、その前につい話手の戸川介二の話に溺れてしまつた譯である。昔風に書くと、閑話休題、としなければならぬところである。

先にも言つた通り、私は始めて彼、戸川介二に會つた神田區の或る出版屋の店で、偶然彼がその家の主人との話の中で、彼とあの有名な青木愛三郎とが友達であるといふことを會ひ始に聞いた位だから、そして私たちは共に文學者になりたい希望をいだいてゐた者であるから、自然、彼から話すともなく、私から問ふともなく、私たちの間には屢々青木愛三郎の話が出たものである。そこで、私は彼から時々、色々と聞いた青木愛三郎のことを、纏めて、彼の話として、次の章で讀者諸君に紹介しようと思ふのである。だから、次の章で「僕」といふのは、私のことではなく、戸川介二のこ

とであることを、油断なく讀者の頭に含んでおいて頂きたい、從つて、時々「僕」なるものが、「君、」と呼びかけるのはそれは、私を差すものである。

二

僕は、以前はさうでもなかつたが、此頃は滅多に青木愛三郎の話はしないやうにしてゐるんだ。と言ふのは、つまり、要するに僕のひがみかも知れないが、實際、僕にして見ると、彼が今のやうにえらくなり、有名にならなかつた時分なら、或ひは又僕が彼に匹敵する程の位置にでもゐれば何だが、兎に角現在のやうに二人の社會的地位が違つてしまつて見ると、「僕は彼の友達だ　而も一方ならぬ深い關係のある友達だ。」などと人に話すのは、僕自身に對しては別段何とも思はないが、さう言ふ僕に對する人の思はくを考へて、何とも知れぬ厭アな氣持がするからだ。「何をこの男は出鱈目なことを言ふ奴だらう」とか、「この男とあの有名な青木愛三郎とが友達だなんて、そんな筈があるものか。」とか、或ひは「ほお！この男とあの人とが友達かなア。同じ友達でも隨分違ふものだな。」とか、人間なんて言ふものは、それ〳〵自分の心持に從つてしか物事を考へられないものだからね、それを思ふと僕は、何とも、恥辱とも、憤慨とも知れぬ、厭アな氣持を感じるものだから、自分から進んでは勿論のこと、人から聞かれてもなるべく彼のことは話さないようにしてゐるのだ。實際彼は一昨々年だつたか、彼があの『基督と彼等』を發表して、忽ち有名になつてからは、誰にも彼と僕との長年の友達關係に就いて話したことはない、今が始めてだ、まあ、君なら話してもいゝだらうと思つて、實際のところ、僕にしても話したい慾求は心の中に十分あるのだから、それで話すんだ。

僕は、これは今に限つたことではない、ずつと以前から時々そんな事を思ふのだが、彼と僕との存在を考へると、あの

西洋秤を思ひ出す、まん中に棒が一本立つてゐて、その棒の尖に横に一本の棒があつて、その棒の左右の兩端に各々一箇の皿を吊つてある、つまり西洋秤だ、そしてその皿の何方かの席が彼、青木愛三郎ので、何方の席が僕、即ち戸川介二の席なのだ。そしてその皿は、谷崎潤一郎の言葉を借りると、ひよつとすると、何方かゞ金製で、何方かゞ銀製かも知れない、だが、彼のが金か、僕のが銀か、それは飜譯小說の言葉を借りて言ふと、神樣より外に知る者がない。

僕と彼とは同じ國の同じ生れの者だが、詳しく言ふと、僕の村は何某村大字北で、彼のは同じ何某村だが、大字南である、即ち僕の村と彼の村とは南と北とに二三町離れて立つてゐて、その境界に、隨分遠くの方からでも目印になるやうな、何百年と經つた、大きな一本の杉の木の突立つてゐる森を持つた鎭守の社と、その森の影に小學校とがある、あの鎭守の森の杉の木が、秤のまん中の棒だな、と僕は冗談に思ふことがある、あの杉の木は、未だ雷にも風にも折られずに、無事に立つてゐるか知ら? 僕はもう故郷を見ないこと、六七年になる。

僕の家は、村では一等の家柄の家で、それに昔から受繼いで來た相當な財產もあつた、田舍で、さういふ家の子供は子供仲間の隱然たる大將になるか、でなければ所謂蔭辨慶の、弱々しいお坊ちやんであるかの、大抵二つに一つだ、そして僕は大體その後者に屬するものであつた。ところが、青木愛三郎の家は、彼の祖父の時代に何處からか流れ込んで來たもので、もつとも田舍のことだから、一寸した小作百姓の稼ぎもしてゐたが、大體は萬屋が稼業であつた、もつとも村に萬屋は彼の家と合はして二軒あつたが、彼の方がずつと店も小さく、賣る物も粗惡で高いといふので評判は惡かつた。その家の一人息子である青木愛三郎は(上に二人も兄があつたのださうだが、悉く早世してしまつた、)非常な腕白で、惡戲子たちの中でも餓鬼大將であつた。だから、僕は子供の時分はなるべく彼を避けるやうにして、附合はなかつた。村でも、例へば共同錢湯の女湯の窓から石が降つて來たり、繋いであつた馬の綱が切り離されたり、通り道に巧く土

を被せた陷し穴がこしらへてあつたり、何かさういふ種類の子供の仕業に違ひない惡戲が發見されると、そしてその惡戲の主が分らない時には、乾度その尻を愛三郎の家に持込んで行くのが常であつた。だが又、彼はさういふ惡戲子には珍しく、學校の成績も決して外の子供たちには負けなかつた。僕は彼と尋常の一年二年と同じ組であつたが、試驗の成績はいつも級中で僕が一番で、彼が二番であつた。彼はさういふ家庭に育つた割合に、さして學校の勉強を勵むといふ程でもなかつたが、人の話に依ると、彼はさういふ惡戲をする一方、家にゐる時は一寸でも暇があると勉強してゐるといふ噂であつた、隨分負けず嫌ひな性質に違ひなかつた。ところが、僕たちが尋常三年になつた時から、彼は村にゐなくなつたのであつた。

いろ／＼人から聞いた話を綜合して見ると、彼の父といふ人は非常に良い人で、人の評判もよかつたが、彼の母の方は、何でも餘り素性のよくないといふ噂で、町のお茶屋の酌婦か何かだつたらしい、殊に性質も惡くて、彼の店の品物が粗惡でそして高いのも、皆彼女の所爲だといふ取沙汰だつた、思ふに、愛三郎はこの兩親の血を半分づゝ受繼いだのであらう。ところで、彼の父は耶蘇教の信心家だつた、僕たちの地方は、どういふ譯か、田舍に珍しく耶蘇教信者が多かつた、それで、彼の父は多分子供の教育の爲やら、經濟上の都合やら、色々の思案の末に、彼を町の教會の子弟養成所といふやうなところに、彼が尋常二年を終ると、遣つたものらしかつた。それは何でも或る金持の信者の寄附になるもので、貧乏の爲とか、或ひはその他の事情で子弟の教育の出來ない信者の子弟を、小學校から中學校、或ひは大學校へまでも入れて教育してやるといふ種類のものだつた、その代り、無論強制的にではないが、それ等の子弟は行く行くは牧師とか、教師とかいふ、成るべく耶蘇教の爲の仕事に就かせるようになつてゐた。それは町の教會堂の隣に立つてゐて、牧師が監督の役目に當つてゐるのである。

餘りはつきり言ふと、誇張になるかも知らないが、僕はさういふ譯で彼が村から、そして學校からゐなくなつたのを知ると、彼とは殆ど交際はしてゐなかつたと言つてもいゝ位なのだが、何故といふ事なく、妙に心寂しい氣がした。無論これは今から考へて推察した話であるが、言はゞ好敵手を失つた形であつた。何故と言つて、學校で一年の時も二年の時も、いつも首席を爭ふ相手は彼で、彼も僕を對象にしてゐたらうし、僕も彼を除いて眼中に置く外の子供はなかつた。學校の成績ばかりでなく、さういふ田舍のことだし、そんな子供のことだしするから、まあ大抵は分け隔てなくみんな友達として附合つてゐた中に、何故か彼と僕とだけは例外で、互ひの消息なども互ひの友達を通して聞く位のものであつた。言はゞ彼は腕白で一方の大將だつたし、僕の方は何と言つても村一番の家柄といふだけに、多少僕は外の者より尊敬されてゐた形で、從つて彼と僕とは一層何となく張合ふやうな形勢に置かれてゐたからである。だが、それも暫くのことで、僕はいつとなく彼の存在を忘れてしまつた。唯、年に二三度か四五度、彼は町から家に一寸歸つて來ることがあつたらしかつたが、僕たちは家も離れてゐたしするので、辛うじて年に一度位道で顏を合はすに過ぎなかつた。が、いつも挨拶もしなかつた。お互ひに段々大きくなつて來ると、益々氣持が固くなつて、つい挨拶する機會さへ失つてしまつたのである。が、その度に僕が驚いたことには、外の子供たちからもそんな噂は耳にはしてゐたが、實際、彼が生れ變つたかと思はれる程、音無しく、殆勝らしくなつて見えたことである。今でこそ彼は、もつとも病氣のせゐでもあらうが、いつの雜誌の口繪の寫眞を見てももしやくと無性髯を生やしてゐて、變に物凄い鷹のやうな目付になつてしまつたが、あれで子供の時分は可成り美少年だつたよ、品はなかつたがね、お母さんに似て、それが、多分その教會の養成所の制服なんだらうが、紺の小倉の洋服を着て、鞄を肩から斜めに掛けて歩いてゐる姿は、今でも僕の目の前に見える、實に田舍のことだから目立つて、殊勝で、可愛らしく見えたものだ、それを見て、僕もその町の教會に行きたくなつた位だつた。

そのうちに僕は小學校を終つて、町の中學校に入學することになつた、僕は町で會社に勤めてゐる伯父の家に寄宿して、毎日中學校に通つた。そこで、僕は再び青木愛三郎に會つたのである、彼と僕とは同じ中學の一年生に這入つたのだ。が、僕たちの中學一年生は、丁度昔の僕たちの小學校時代のやうに、二人とも餘り親しい口をきいた事なしに過ぎてしまつた、それに一年生が三つの級に分れてゐて、彼と僕とは級が別だつた。が、不思議なことに、各學期毎の試驗の成績は、僕は僕の級で一番だつたし、彼は僕の級で一番だつた、そして、一年の終の學年試驗の成績順は、三つの級を合はして、一年生全體の成績を扣所の壁に掲示されたのであるが、それに依ると、一年生全體で僕が一番で彼が二番であつた。ところで、多分、一年級の終の頃だつたと記憶するが、僕たちの村にあつた萬屋の彼の親の家が、町に引越して行つたのである。村の人の話に依ると、あんなに流行らない店だつたが、あのしつかり者のお上さんはどうして貯めたのであらう、多少の金をこしらへて、町で商賣を始める爲に引越して行つたとのことであつた、果して、彼等は町に行つて、小さな料理屋を始めたのであつた。それには彼の善良な耶蘇信者の父親は、力の限り女房にそんな商賣を始めることを止めたとのことであるが、彼女がどうしても聞かなかつたのださうである。その爲に教會に對して都合が惡くなつたのか、どうか知らないが、愛三郎は例の教會の養成所を引上げて、兩親の家から中學校に通ふことになつたのであつた。

一年から二年に進んだ春の休暇の或日のこと、僕は或友達に誘はれて、學校の運動場に庭球をしに行つた。と、廣いがらんとした運動場のテニス・コートの一つで、僕たちと同じ年頃の二人の學生が、僕たちより先に來てテニスをしてゐた、その一人が青木愛三郎であつた。彼は外の三人と違つて紺絣でなく、幾分か光つた糸の這入つた紡績絣の着物を着て、その下に黒いジヤケツを着てゐるのが、襟からも手首のところからも窺いて見えた、黒いジヤケツはその頃の中學生の流行だつたのである、だが、彼はその流行を、僕の知つてゐる限りでは最も早く追うた者であつた。その時、僕たち

はどんな會話を交して、どんな風に親しくなつて行つたか、忘れもしたし、思ひ出し思ひ出し話されない事もないが、くどくなるのを恐れて省くが、それから暫くして、彼が誘ふまゝに、テニスをしてゐた者四人で、彼の家に遊びに行つたのであつた。それは丁度少年の春機發動の初期の初期に當る頃に違ひない。といふのは、僕はその時、それ等の友達の中で、妙に彼、青木愛三郎が好いたらしく思はれたのである、その時の彼は、僕が知つてゐる子供の頃の腕白な彼とも、又教育の養成所の洋服を來て村に歸つて來た彼とも、或ひは過去一年間の、中學の制服を着てゐた彼とも、全く違つた、色こそ黒かつたが丸々した、可愛らしい大きな目をした、黒いジャケツを着て、光つた紡績の着物を來た、今日始めてあつた美しい少年であるやうな氣がしたのである。僕はその時、中學に這入つて以來、誰の口からともなく聞いてゐた、少年とか稚兒さんとか言ふ言葉が、言葉でなく、感情として、僕の心に少しづゝ萌して來たことを感じた、そして彼が一種特別な氣持で好きな氣がして來たのである、それと同時に、何といふ事なく、彼も亦僕を好いてゐるやうに感じられた。すると、これは屹度近いうちに、二人は普通の友達といふ以上に親しい仲になるに違ひないと言ふ氣がして來た、そしてひどく心の躍るのが感じられて來た。その心持は、料理屋の彼の家に行つて、村で見覺えてゐた彼の父や母やに會つた時、彼等に「おゝ、これは珍らしい、戸川さんの坊ちやんですか、」と挨拶された時、少しばかり興ざめた氣がしないではなかつたが、然しやつぱり一旦起つた氣持は消えてしまはなかつた。

そして、實際その通りになつたのであつた。それは又暫く後の、八月の休暇の間のことであつた。實はもうそれより前に、僕たちは互ひに好き合つてゐて、十分さういふ機運に達してゐたのだが、誰も知つてる通り、この男同志の戀愛などといふものは、何方かゞ年が若いとか、或ひは十分兄分らしいとかすれば、それが自然で、從つて早く成立する譯なのであるが、中學二年生で、同い年の僕たちは、言はゞ二人とも弟分の格で、つまり二人とも兄分を求めて、その所謂

稚兒さんになるべきものなのが、それが、さういふ二人が戀愛的な氣分を抱いたのであるから、何方も消極的で、容易に進行しなかつたのも無理はない。その頃のことであるが、丁度繪葉書の流行した時分で、「葉書文學」といふ雜誌があつた。それを僕は愛讀してゐたのであるが、その雜誌の何號かに、「郵便の切手の貼り方」といふ記事があつて、普通の意味の手紙の場合には切手を正しく、眞直に貼ること、そして人が死んだ知らせや、それの弔みや、總て願はぬ事を認めた時の手紙には、切手を逆まに貼ること、それから喧嘩とか、抗議する場合とか、絶交の場合などには眞横にして貼ること、中でも僕が最も注意して讀んだのは、戀を表はす場合には切手を斜めに曲げて貼ることといふ條であつた。僕はその事を如何にも珍しい、良い知識を得たやうな氣がして、學校の友達に觸れ廻つた、彼にも話したのは言ふ迄もない。さて、夏の休暇が來て、各々一ヶ月餘り會はなくなると、僕たちは屢々葉書や手紙を出し合つた、中にも僕は青木とは最も繁々文通した。僕は彼に手紙を書く度に、どうかして、思ひ切つて切手を斜めに貼つて出したいと思ふのだが、どうしてもそれが出來なかつた。ところが、或時、到頭彼からの葉書に、間違ひなく切手が斜めに貼られてあつた。僕も早速斜めに貼つて返事をした。その次からは彼も僕も必ず斜めに貼つて、そして手紙の内容が忽ち戀文になつたのであつた。

恥かしい話だが、先にも一寸言つた通り、彼も僕も上級生から屢々、放課後など追つ驅けられた。で、彼は或る時、自分は、もしもの時の護身用に柔術を習つてゐる、そして當て身とそれから復活させる法とを習つたから、君も萬一の場合の用意に覺えて置き給へ、敎へておかうと言つて、當て身をする時には拳固をかためて、相手の肋の大凡どの邊を突くか、そして相手が氣絶したら、その背中の方に廻つて、こんな風に相手の體を後から抱えて、(と彼は僕に自分でその型をして見せて、)此方の膝を立てゝ、何處に力を入れて、何處を締めるか、そしたら相手が息を吹き返すか、と言ふやうな事

を教へてくれたりした。そして、僕たちの戀は、實際、戀に違ひないので、中學の殆ど卒業する時まで續いたと言つてよかつた。考へて見ると、それは僕たちは屢々一緒に旅行したり、時とすると宿屋では一緒の蒲團の中で寢たり、色々とあつたが、結局僕たちは、たつた一度の接吻を除いては、同性間の何に見るやうな、そんな立入つた交際は決してしなかつたからであらう。(あゝ、堪らない、堪らない、僕は彼と、青木愛三郎と、男同志の日本人の癖に、たつた一度だが接吻をしたことがあるんだよ。あゝ、思ひ出しても堪らない！　もつとも、彼も今頃は、それを思ひ出して、ぞツとしてゐるだらうが……と戸川介二は顏を顰めて言つた)が、だから、僕たちの戀はそんなに長い間、殆ど卒業する時分までも續いたんだね。もつとも、五年生になつた頃からは、お互ひに戀愛氣分でゐることが段々馬鹿らしく、何だか背中がむづ〳〵する氣分にはなつてゐたが、それでも然し、やつぱり仲のいゝ友達ではあつた。ところで、學校の成績であるが、その後は彼と僕とは別に競爭するやな氣持にはならなかつたが、やつぱり五年の間ずつと僕が一番で、彼が二番であつた。そして、これは自慢ではないが、僕は所謂勉强家といふ方ではなかつた。(もつとも、これが惡かつたのだ。これが僕の今の不運の基に違ひないのだ。)が、それに反して僕は猛勉强をする質だつた。だから、彼は僕を恐れてゐたに違ひない、が、僕はちつとも彼を恐れてはゐなかつた。

ところが、中學を卒業すると共に、彼にも、僕にも、申し合はしたやうに、變な一身上の事件が起つた。僕の方を先に言ふと、僕は直に東京に出たのだが、家の方でどうしても僕が文科に這入ることを許さない、どうでも三部に這入つて、醫者になれと言ふのだ、國からわざ〳〵兄貴がやつて來て、僕が狡猾な事でもするのを恐れたのか、自分で三部の方に願書を出して歸つて行つた。僕はうか〳〵試驗にパスしたら大變だと思つたので、試驗場に出ることは出たが、悉くわざと出鱈目な答案を書いて出して、無論落第した、そして家の方を誤開化して、試驗準備で一年東京でぐづ〳〵

してゐるうちに、何とか兄貴を說き伏せて次の年には文科に這入る決心をしたのである。一方、青木の方の事件はと言ふと、何でも彼の中學の五年の時からだつたと思ふが、人の話では彼の親父が密かに相場に手を出して失策したのだとも言ふし、或ひは無暗に人の請け判をして卷添えを食つたのだとも言ふし、それにこれも人の噂だが、彼の母親が姦通したといふやうな事もあつて、到頭商賣を止めたのだ、それで彼も危く學校を止さなければならぬところを、兎に角卒業間際だつたので、やつとの事卒業したのだと言ふ話だつた。そんな譯で、彼も亦中學時代に僕と一緒に樂みにしたやうに高等學校の文科に進むことが出來なかつた。が、彼はその後、昔の敎會に近づいて、色々と運動した結果、例の敎會附屬の養成所から學資を出してもらふことに定つたのは、夏になつてからのことであつた。すると、彼のことだから、何でも高等學校の試驗にしくぢらないように、且つ出來れば最もいゝ成績で入學したいと思つたのであらう、敎會の寄宿舍に這入ると、朝から晩まで、眞に血の出るやうな勉强をつゞけたらしかつた、僕のところへの手紙にも、いつも漢文くづしのやうな文章で、唯一心に勉强してゐるといふやうな事ばかり、屢々報告して來たものである。

その一年の間、僕はどうしてゐたかと言ふと、實は少しも勉强してゐなかつた、僕は或る日、上野の圖書館で、何か英語の探偵物のやうな本を借りて、頻りにそれを原稿紙に飜譯して居る男と、ふと知り合ひになつたのだ。(探偵小說の飜譯! 考へて見ると、惡い辻占だつたね。英語の探偵小說よ、地獄に行け!)そしてその後その男と往來するやうになつて、その男を通して、色々とその男の友達とも交際するやうになつたのだ。實際、その男は根からの探偵小說の飜譯家ではなかつたので、錢の爲に、何とか言ふ飜譯家の下仕事をしてゐたのだつた。その男たちの仲間に這入つて、僕は始めて本場の文學靑年の空氣を吸つた譯だつた。彼等は當代の小說家や詩人たちを穢多のやうに輕蔑して、丁度自然主義の全盛時代だつたが、從つて自然主義といふものには頭から反感を持つて、頻りに新浪漫主義とか、象徵主義と

か、廢頽主義とかいふやうな事を稱へてゐた。無論僕も若氣の至りでその渦卷の中に飛び込んでしまつた。當時の僕たちの考では、勉强をしたり、早起きをしたり、三度の飯を三度それ〲世間並の時間に食つたり、酒を飲まなかつたり、健康の養生をしたり、さういふ總て常識的な事は泥坊するよりも排斥すべきことであつた。だから、一年後、僕はどうにか斯うにか國の兄を說き付けて、文學をやる許しは得たが、高等學校の試驗には見事に落第してしまつて、仕樣がないから、國への申譯に、無試驗の早稻田大學の文科に這入つたのである。

その時、靑木愛三郎も高等學校の試驗を受けに來たのであるが、彼は無論易々と及第した。僕は彼と久し振りで、つまり一年振りで東京で會つたのである。が、その時は僕と彼の頭は夜と晝と程違つてゐた。彼は一年足らず教會の養成所に戻つてゐた間に、すつかり耶蘇教信者になつてゐた。僕は彼をもう輕蔑し切つて、頭から罵倒したものだ、そして一年間の間に仕込んだ新浪曼主義や、象徵主義や、惡魔主義や、廢頽主義を頭から振りかざして、彼を散々やつつけた。實際、彼の文學上の知識の遲れてゐることも驚くべきものであつた、と言ふのは、彼は頻りに自然主義を攻擊して、卑い話が、自然主義といふのは男女の變ないきさつを書いたものだ、といふやうな、當時の新聞記者や、教育家たちの見解と少しも變らない立場で、さういふ不道德な、不健全な文學は價値がない、といふやうな事を頻りに言ふのである。

「君のいふ、一體神といふのは何だ?」と僕は言つた。「神なんて言ふものは、有るものを言ふのではなくて、無いものを言ふんだよ、有れば神ぢやないよ、無いから神なんだ。無いからこそ、その言葉に何とも知れぬ力もあれば、又魅力もあるんだ。神といふのは、即ち傳說なんだよ、お伽話なんだよ、架空なんだよ、ロマンスなんだよ、鐘なんだよ、敎會の窓の色硝子なんだよ、つまり見えもしなければ、觸ることも出來ない、要するに無だよ、無を象徵したものだよ、さういふ意味でなら、僕も神といふものを認めるよ、nihil in tenebris としてだね、つまり『暗がりの中の無』と

してだね。」

彼は僕の斯ういふ言葉を聞いて、呆氣に取られたやうに、その丸い、可愛らしい目を見開いて、答へるところを知らない有様だつた。

もつとも、始めのうちは彼も色々自分の意見を吐いたが、無論僕のいふことも出鱈目見たいなものではあるが、彼のはもつと阿呆らしいんだからね。段々彼は僕の議論に對して沈默するやうになつて、それが終には其拝教を改宗して、だん／＼僕と一緒に廢頽派の仲間入りをするやうになつたのだ。それが終ひには、彼の方から僕に、逆捩ぢを喰はせるやうにさへなつた、と言ふのは、彼は例の猛勉強で、僕などが飲めない酒を飲んだり、無暗に夜更かしをしたり、朝寝坊をしたりしたゐる間に、彼は切々と圖書館に通つて、廢頽派や、惡魔派や、象徴派に就いて英語で書かれてあるもの、日本語で書かれてあるもの、を悉く讀んでしまつたのだ。そして彼も亦大いに酒を飲んだり、女を買つたりし始めた、よく考へて見ると、僕たちより、少なくとも僕よりは彼の方が眞から酒も飲み始めて見ると好きだつたやうだし、女色も多少天成の好きのやうだつた。僕はこの時分から少しづゝ、此奴、中々隅に置けない、油斷のならない奴だ、と思ひ出したのである。けれども、要するに、やつぱり多分は彼を輕蔑してゐた。今になつて分つた譯ではないが、彼の場合に限らず、僕のこの輕蔑癖は僕の一生涯の致命傷だね。

それから暫く後のことだ、或ひは半年ももつと後だつたかも知れない、その時分は新劇團が方々に起つた時分でね、その中にS――協會といふのがあつたが、その劇團の二番目所ぐらゐの女優に、君などの記憶にはないかも知れないが、星野露子といふのがあつた。彼女は僕たちの國のもので、即ち僕や青木などの通つてゐた中學校のあつた町の者なのだ、もつとも、丁度彼女が女優になつた時分に、その一家は東京に引越して來てゐたんだが。その女と先づ青木が知り合ひ

になつたのだ。といふのは、よく何々縣人會といふものがあるだらう、僕は一切そんなものには出なかつたが、彼は始終そんな所へも顏を出してゐたものらしいのだ、そこで知り合つた或る男に紹介されて、それから彼女と知るやうになつたものと見えるが、或る日僕のところに來てその話をして、遊びに行つて見ないかと言ふので、それや面白い、行つて見ようと言つて、僕たちは彼女の家に出かけた、青木にはその訪問は何でも二度目か三度目らしかつた。

星野露子の死んだ父親といふのは、何でも相當な位置の官吏とか聞いたが、それで家族の者が遊んで食つて行ける程の遺産があつたらしいのである。家は彼女の母親と、出戻りの姉と、それに女中位の小人數の家庭だつたが、實を言ふと、僕は露子を始めて見た瞬間から忽ち心を取られてしまつた。ところが、青木もどうやら僕と同じ心の狀態であつたらしかつた。だから、僕等はその頃、何方から尋ね合つた時でも、暫く話した末に散步に出ようと言ふことになつて、暫く散步した後に、何方から言ひ出すともなく、露子を訪問しようと言ふことになつた。が、そんな狀態だつたから、お互ひに、實は僕は……と打明ける譯には行かなかつたばかりか、お互ひに毛頭そんな心持など抱いてゐないやうに見せ合はねばならなかつた。——こんな風に一々の話をそれ〴〵目鼻をつける迄に話してゐると大變だから、少し端折りながら話さう。(なアに、女のことになつて來たからと言つて、何も隱す譯ぢやあないが。)その間に、そつと青木が一人で彼女を訪問したり、或ひは又僕が少年のやうに心を焦しながら、彼女を一人で尋ねてゐるところへ、彼が來合はして、二人でばつの惡い思ひをしたり、そのうちに彼女が舞臺に立つたり僕たちは彼女の爲に過分の連中切符を受持たされて奔走したり、そして結局のところ、決してそんなにはつきりとした形でこそはないが、又僕たちも、(もつとも彼のことは知らないが、)そんなにはつきりした形で戀を打明けた譯ではないが、要するに袖にされた譯であつた。あゝ、星野露子! 女なんて、男には想像も附かない程、大人びたところと、子供々々したところがあるものだなア。然し、

さういふのも皆、彼女の手だつたのか知ら？　だが、戀なんて、ジャック・ロンドンの言ひ草ぢやないが、充たされないこそ永久に生きるのだらうが、滿足されたらその瞬間に死ぬものかも知れんから、やつぱり振られて歸る果報者かね。」

ところが、それに就いて斯う言ふ筋があるんだ、言ふのは、その後、否それと同時にかも知れないが、青木はその露子の出戻りの姉とくつ附いたことだ。その後で、彼は得々として僕に、どうして彼女と氣脈を通じたか、交際して見ると、彼女の方が妹よりもどんなに姉さんらしくて、情が濃くて、苦勞人らしい味があつて、更にもつと立入つたことまでをも、色々と話したが、更に僕をもつと驚かし且つ羨しがらしたことには、彼は彼女から色んな品物をもらつたり、果ては小遣をさへ貰つてゐることであつた。僕はさういふ話を聞くにつけて、段々彼が隅に置けない、油斷のならない人物だ、と多少尊敬するやうな氣さへ起つて來たのである。彼は僕が唯口先だけで、發明したり、賞讃したり、宣傳したりすることを、いつの間に覺えてしまふのか、着々と實行して見せるのである、それがこの露子の姉のことゝか、情事に就いてばかりでないのである。

聞くところに依ると、彼は高等學校のクラス中で、學問も無論だが、一番才人で、一番藝術家肌で、そして外に比類のない象徴主義、頽廢主義の主張者だと言ふことであつた。そして僕が驚いたことには、彼のクラスの或る男の話から察すると、その彼の言ふことは悉く僕の説を受賣りするものであるらしく、中には僕の言ふことに、彼自身がそれを三倍にも敷衍して話してゐるらしいのである。それ迄にも多少そんな事と推察しないではなかつたが、さうはつきりと耳に這入ると、僕としては一寸微笑まれるやうな、或ひは又不愉快なやうな、さては油斷のならないやうな、一種變挺な氣持がしない譯に行かなかつた。彼が又同時に附加へて、自分の同郷の友達で、今早稻田大學の文科にゐる男で、戸川介二とい

ふ男は、實際、自分はあゝいふ男こそ天才だと思ふ、少なくとも天才的な男だと思ふ、今に文壇の表面に一寸した機會を得て浮び上つたら、忽ち第一流の人物になれると思ふ、などと彼の同級の友達に始終言つてゐると言ふ話を聞くと、流石に又僕は甘い氣持になるのであつた。が、そのうち、彼にさういふ女が出來たり、僕の方は又同級の友達との往來が段々激しくなつて、結局彼などは餘り眼中にないことになるので、いつとなく次第に會ふことが少なくなつた。それに、僕は僕自身その頃心持に可成り動搖をし出した時だつた、どんな風に動搖して、どんな風に變つて行つたか、それを詳しく話してゐると益々長くなるし、それに全然餘談に渡る譯だから省くとして、その結果を言ふと、さあ、その間に一年程經つたか、一年半も經過したか、僕は今迄と全然反對の思想にかぶれるやうになつて來たのである。即ち唯の藝術といふものが馬鹿に空疎なものに見えて來て、もつと直接に人間の爲になるもの、そして成るべく健全な方へ、道徳的な方へ、從つて自分のする仕事は最大多數の最大幸福を致すやうなもの、そこで、トルストイと共に、昨日まであんなに心醉してゐた象徴派や、廢頽派などの文學を呪ふやうな傾向になつて來たのであつた。當然、これ迄親しく附合つてゐた友達とも、段々彼等のいふ事が、つまり彼等の思想は僕と共に變つた譯ではなく以前の通りなのだから、つまらなくなり、馬鹿らしく見え、氣障に思はれて來て、自然離れるやうになつた、或ひは考へて見ると、何かの事情で段々彼等と離れて來て、次第にさういふ思想に變つて來たのかも知れない。

僕がそんなに苦心をしてゐる間に、彼、青木愛三郎にも、もつと甚だ變つた事が起つたのであつた。或る日、突然、久しぶりで、多分半年目位で、彼が尋ねて來て、言ふには、「僕は到頭教會から破門されたよ。」

「それや困るだらう、實際問題から？」と彼が稍々驚いて聞くと、

「いや、實際問題の方は、」と彼は案外落着いたもので、「捨てる神あれば拾ふ神ありサ、どうにか困らないで行ける方法

が附いてゐるんだ。」

　聞いて見ると、彼の東京での亂行が、案外手近の學校當局の方はどうにか誤間化して行つてたのだが、國の教會の方に聞えて、もつとも二三度忠告されたのだが、一向改心する模様がなかつたので、破門と同時に、これ迄の仕送りを斷つて來たのださうだ。が、そこで彼の所謂捨てる神あれば拾ふ神ありと言ふ方の事情は、どういふ譯か、彼は餘り話したがらない様子で、さういふ事になつた徑路は抜きにして、何でも歐州通ひの船の事務長をしてゐる人の家庭に、家庭教師旁た這入つて、そこから應分の學資を出してもらふことになつたと言ふ話であつた「主人はそんな譯だから、殆ど年中家にゐないのでいゝ都合だが、」と彼はにや／＼しながら言つた「が、細君が生憎あまり美人でないのが物足りないよ。もう少し若くでもあるといゝんだがね、もう三十幾つといふから、僕より十歳も上なんだよ。」

「贅澤言ふなよ」と僕はたしなめるやうに言つて、そんな事は餘り話しつゞけるのを好まなさゝうにした。丁度、その時分にはもう殆ど僕の思想が變つてゐた時だつたので、彼の上機嫌に拘らず、僕は始終の間不機嫌で通したので、彼は勝手が違つたやうな顔をして、そこ／＼に歸つて行つた。築地の斯う斯ういふ所だから、是非遊びに來いと、彼は言ひ殘して行つたが、僕は到頭訪問しなかつた、それから又半年程經つたのである。

　すると、或る秋の日の午後、今度は彼と偶然町で遭つたのだつた、彼は高等學校の制服を着てゐた、そんなだらしのない生活をしてゐながらやつぱり、學校にだけは缺かさず出てゐるらしかつた。それに反して、僕はそんな健全な思想にかぶれて、そんなに所謂眞面目な氣持になつてゐたのだが、その頃は前よりも一層甚しくなつて、學校には唯籍があるといふだけで、その門の恰好や、教室の有樣さへ記憶にない程、ずつと無沙汰してゐたのである。彼は僕を見ると、僕は甚だ氣が重くて、進まなかつたのだが、久し振りだ、その邊のカフエーに寄らう、と云つて、僕を連れて行つた。

「どうしたんだ、此頃は妙に沈んでゐるぢやないか、」と青木はカフエーの卓子に向ひ合ふと、斯う言つた「此前會つた時もさうだつたが、今日は殊に顏色が惡いやうぢやないか、何處か惡いのか？」

「うむ、いや、」と僕は浮かぬ返事をした。

「僕は一度君に報告に行かう行かうと思つてゐたんだが、」と彼はそこで急に話を變へて言つた「僕は今、大變な事になつてゐるんだ。」

「どうしたんだ？」と僕は氣の乘らぬ聲で、顏を上げた。

「例に依つて女のことなんだがね、」と彼はしかし、口で言つてゐる程困つてゐるやうにも見えない樣子で、それよりも彼の氣が附いたことは、露子の姉との關係があつて以來、彼が、髮の毛の手入から、服裝から、持物から、めつきり贅澤になつたことであつた。

「やつぱり露子の姉さんのことでかね？」と僕は形式的に尋ねた。

「いや、あの女は、君も知つてる通り、あゝいふ性質だから一寸も心配な事も、困つた事もないんだがね、」と彼は言つた。

「もつと困つた女と僕は關係してしまつたんだ、と言ふのはね、高津の夫人――そら、僕が今世話になつてゐる家の夫人だ、……」

「その始終家にゐない船長の奧さんか？」と僕は少なからず驚いて聞いた。

「船長ぢやない、事務長だよ、」と彼は然しやつぱり割合に落着いたもので、「……その彼女と僕が特別な交際を結んだといふことは、それや、君、大した問題ぢやないよ、ね、君、さうぢやないか？ところが困つたことと言ふのは彼女が夫が歸つて來たら、離緣をしてもらつて、僕と結婚したいと云ひ出したんだ。もつとも、それには無理もないところが

あるんだ、彼女は始終海員の細君ほどつまらないものはない、夫は殆ど年中外に出て勝手な眞似をしてゐて、その反對に年中内の中にくすぶつてゐる妻に貞操を強ひて、それも未だ我慢が出來るが、大抵氣が荒くて、家庭的の温味がなくて、結局妻の得るところのものは、夫が外國から持參して來る惡性な病氣位のものだ、殊に彼女の夫は品性が劣つてゐて、彼女と氣が合はなくて、彼女も夫を理解しない代りに、夫も彼女を理解しないと言ふやうな話を、僕は毎日程聞かされてゐたんだ。そして、同情といふ譯でもなく、何といふ譯でもなく、無論口先では僕は始終彼女に同情する言葉のありたけを吐いてゐたが、それで到頭そんな關係に陥ちてしまつたのだから、彼女が僕にさういふ提議をするのも、まあ無理はないんだがね。……」

「夫婦の間に子供はないのかい？」と僕は聞いた。

「子供があるからこそ、僕は家庭教師ぢやないか、ハハハハ、」と彼は笑つて「しかし、無論、僕は逃げ出すつもりはつもりだよ。だがね、今すぐ逃げ出すと、忽ち困るのは學資の問題だからね、僕は密かに後の口を探してゐたんだが、斯うなると意地の惡いもので、中々見付からないんだよ。そこへ、又々一層困つたことが持上つて來た、と言ふのは、彼女が姙娠したんだ。これには流石の僕もあわてたね、多少。が、僕は早速、今のうちなら何でもないだらうから、處分してしまふことを提議したところが、彼女は青くなつて怒るやら、泣くやら、實に困つたよ、姙娠してゐるものだから、ヒステリイになつたんだね。しかし僕は……」

「止めてくれ、止めてくれ！」とその時僕はもう堪らなくなつて怒鳴つた。當時、僕はもうすつかり正義派で人道派になつてゐたからね「君は何といふ惡魔だ！　君は僕なんかと違つて、子供の時分から敎會的な空氣に育つた男ぢやないか、君は神を信じた男ぢやないか？」と言つてゐるうちに僕は曾て彼の信仰を輕蔑して、神の存在を否定して、今の彼にな

るやうな思想を彼に皷吹したことがあつたのを思ひ出して少しばかり極りが惡くなつた。が、又彼の今日は、言ふ迄もなく僕を摸倣して發展したもので、僕に多少の責任があると共に、彼は僕が考が變つたら、即ち又僕に追從して來なければならぬ筈のやうな氣がしたので、僕は元氣を落さずにつゞけた。「僕は近頃つく〴〵神樣の存在といふことを信じ出したよ。或ひはやつぱり僕がいつかも言つたやうに、神樣といふものはないものかも知れない、又神樣といふものは人間の發明した最も美しい嘘かも知れない、が、この嘘はどんな眞理にも匹敵する、どんな眞理より以上に、人間にとつて必要なものかも知れないと僕は思ふんだ。獏が夢なしに生きられないやうに、人は、君、神なしには生きられないものだよ。僕等が座右の銘にしてゐた、藝術は長くて人生は短いと言ふ言葉にしても、浮か浮か文字通りに考へてゐると欺されるよ、所謂藝術なんて言ふものは人生と同じことでやつぱり甚だ短いものだよ。今この地上にゐる君にしても僕にしても、或ひは彼處にゐる赤ン坊にしても、君の愛する女にしても、僕や君の親父にしても、君の今度生れて來る子にしても、今から七十年――たつた七十年だよ、今からたつた七十年後にはみんなこの地上から消えてなくなるんだよ。そして僕等の藝術にしてもそれ以上のものぢやないよ、或ひはもつと短命なものかも知れない。君、假に明日にしても、今夜にしても、死神が僕等の枕元にやつて來て、突然だが唯今即刻から俺の支配の下に這入るんだよ、と宣告されとたしたら、君はいつでも從容として神樣の御意のまゝに、と言へる用意があるか! いや、實は、僕もないんだよ。考へて見ると中々藝術どころぢやないよ。藝術といふ言葉は、神樣といふ言葉の次に造られた言葉に違ひない、だから、まあ神樣といふものを先に研究してかゝる必要があるよ。……」實は僕も次第に何を言つてゐるのか分らなくなつて來たのであつた、が、何かを、何か知らを、熱心に話したものである。

すると、相手の青木愛三郎は次第に俯向いて來て、熱心に僕のいふ事に耳を傾け始めた、が、多分、彼も亦僕自身が

よく分らないやうに、何を聞いてゐるのだか分らなかつたに違ひない、が又それと共に、僕の言はうとする何かの感じを彼も亦感じたに違ひない。お互に青年時代の物の感じ方は大方その位のところに違ひないから。そして、僕たちは別れたのであつた。

それから後、彼は一ケ月か二ケ月位づゝおいて、二三度僕のところへ尋ねて來た。來てももう除りいつかの問題には双方から觸れないようにしてゐた。それでも全然出ない譯でもなかつた。が、最も僕の注意を引いたのは來る度毎に、彼が段々僕の思想に近づいて來たことであつた。それと、もう一つは、彼が次第に風采にかまはなくなつて、君も實で知つてる通り、性來毛深い男だが、髯なども大抵剃刀を當てないやうだつた、そして目付などもいつか當年の丸々した、可愛らしい面影はなくなつて、だん〱凄味のやうなものを含んで來た。僕はその時分は、例に依つて學校にはちつとも出ないで、始終小説や戯曲の構想を凝らしたり、殆ど大抵完成しなかつたが、原稿紙に向つて頻りに書いてゐた。僕は何もさういふ事の一番鎗を爭ふ譯ではないが、その時分に僕に何か發表の機關があつて、書き出してゐたら、現今の所謂人道主義的作家の中では隨分古い看板の部になつてゐたかも知れないと思ふ、そして、人間といふものは妙なもので、一旦さう言ふ旗印で世間に目見えたら、世間でもさうしてしまふし、作家自身だつて、自分のさういふ方面だけ育くむやうになつて、つまりさういふ流儀の作家になつてしまふものだ、人間なんて案外不自由な、厭苦しいものだからね、それにはもつとも作家と共に、世間もその罪を半分背負はねばならぬと思ふ。兎に角、さういふ譯で、僕は頻りに人道派の小説や戯曲に苦心してゐた際だから、彼が來ると、主に一般の文學の話から、當時の文壇の罵倒から、いつの間にか自分の構想してゐる創作の梗概を一心不亂に彼をつかまへて話したものだ。自慢ぢやないが、さうなると、僕は中々雄辯で、そして話上手だからね、それにその當時僕が話した小説なり戯曲なりの梗概はつまらないものぢやなか

つたしね、殊に聞き手の彼、青木愛三郎にして見ると、當時の彼の境遇なり、彼の心持なり、十分それに動かされる資格があつた譯だから、彼は感歎して、時々身慄ひしながら、聞いてゐたよ。そして、屢々心から感動した様子で、「實にいゝ、實に素的だ、」と彼は叫んだ「君は何故それを書き上げないのかね、その位の作なら、何處かの雜誌の編輯者に宛てゝ、郵便で送りさへしたら、そしてその編輯者が讀みさへしたら、喜んで載せるよ。實にいゝね、實に素的だね、先の戯曲にしても、今の小說の方にしても……」

君はどうしてそれを發表しなかつたと言ふが、僕のやうな性質のものは、どんなえらい事を考へたつて、どんな良い事を思ひついたつて、結局駄目だね、つまり空花といふ奴だね、直に飽きるんだ、そして直に他人を輕蔑するやうに、自分を輕蔑してしまふんだ。……しかし、君、その時の僕の戯曲も小說も、發表したと同じことだよ、發表したと同じ結果になつたよ。その事は後で話すがね。

それから、最後に僕と彼と會つたのは、又三四ヶ月程後だつた。或る日、やつぱり彼の方からやつて來たのだ。そして、いきなり彼が言ふには、「僕は到頭あの女と結婚することにしたよ。此間、彼女の夫の高津氏が久しぶりで歐洲航路から歸つて來たんだ、僕は彼と二度目に會つた譯だ。そして、彼女はその晩、僕のゐない時に、一切のことを夫に打明けたんだ。君、人は見かけに依らないものだね、常々彼女から聞いてゐた高津氏なら、そんな話を聞いたら、立ち所に彼女を髮を掴んで引据えて、毆り殺し兼ねない人のやうだし、無論、僕などはピルトルで蜂の巣のやうに射拔かれる筈だが、君、實際はさうでないのだ。彼はそれを彼女から打ち明けられると、さうか、と別に顔色も大して變へないで言つて、それは大分非常な問題だから、即答はし兼ねる、明日の朝まで待つてくれ、と言つて、そしてその翌朝、彼女に、出來た事は仕様がないが、お前はどしてもあの男、青木を思ひ切れないか、どしても俺と別れたいか?……よし、そんなら

仕樣がない、お前の思ふ通りにしろ、唯俺の方の條件としては、子供は俺の方に置いて行つてくれ、それからお前の今度生れる子はお前たちの都合で、置いて行くなり、連れて行くなりしろ、と斯ういふ話なんだ。……」

「さうか。」と僕は唯默つて聞いてゐたがふと氣がついて、「ところで、さうなつたら、明日からの生活に困るだらう？」と聞くと、

「いや、その方は。」と青木は何故か、非常に恥かしさうにして、「女の家が相當な財產家なのだ、それで、その方はまあ心配がないんだ。……」

僕はそれを聞くと、何故か苦蟲を嚙み潰したやうな、急に厭な氣がした。で、ちつと彼の目を見詰めた、と、彼は一寸狼狽したやうに目を落した。

「君。」と僕は言つた。「さういふ風な行きがゝりの、さういふ風な動機の結婚は、長く圓滿につゞく自信があるかい？」

「いや、どうにか、僕も罪滅ぼしのつもりで、屹度つゞけるよ。」と彼は半分口の中で言つた。

——それ切り、僕は彼に會はないのだ。或ひはもう一生會ふことがないかも知れない。その後、人傳てに聞くところに依ると、その女との間に生れた男の子は、何でも俗に骨なしといふ種類の片輪者ださうだ。彼はその子とその母親とをひどく虐待してゐるといふやうな話も聞いた、そして間もなく彼は高等學校を卒業間際にも拘らず止したのである。それはさういふ家庭の事情からだとも言ふし、體が惡くなつたからだとも言ふし、どういふ事情だか知らないが、兎に角、その時分から彼は病身になつたのは確からしい。もつとも、彼はあんな頑丈な體格はしてゐるが、たしか遺傳性のものに違ひない、彼の親父も、まだ生きてはゐるが、同じ病氣を持つてゐるし、彼の小さい時分にそれぐ\死んだ二人の兄も、その病氣だつたと言ふから。

隨分長い話になつてしまつたね、もう止めよう。そして、それから一年程經つて、彼が發表して、忽ち有名になつた『基督と彼等』といふ小説や、その次に發表した『奇蹟』といふ戯曲や、それがつまり僕が先に、僕が昔構想した創作が、發表したと同じ結果になつた、と言つたのがそれで、つまり僕が彼に話した梗概を彼が仕立て上げたものなのだ。いや、僕はそんなに大して憤慨も感じない、何故と言つて、その時分には又、僕はあゝ言ふものはつまらないと思つてゐたから、そして僕の思想にしても、又昔に逆戻りした形になつて、君が今見る通り、今の僕は人道主義どころか、廢頽派に近いからね。

だが、僕は十分彼、青木愛三郎を認めてゐるよ、無論、僕自身より彼の方がえらいとは決して思はないがね、いや、或ひは結局彼の方が僕よりえらかつたのかも知れない、彼があんな人道主義めいた作を發表してゐながら、細君や子供を虐待してゐるのはどうだ、彼は僞善者だ、などと彼を知つてゐる人が往々憤慨してゐるのも耳にするが、しかし僕は彼を認めるよ。それは、或ひは今の彼は僞善者かも知れない、だが、大抵の善なんて、僞善から這入るんぢやないだらうか？　それに、實際、彼は自分の境遇や自分の生活を考へて、神樣や惡魔に始終嚇かされてゐるのかも知れない、それで彼の作物にしても、僕の構想を借りて、それに多分に街頭で祈るやうな文句を附加へて書いたのであらう、さうでもしなければ慰められないのだらう、だが、そんな街頭の祈りでも、それが手引になつて、本當の祈りに這入るかも知れないからね。殊に、それには都合のいゝことに、彼は病氣になつた、病氣が更に彼を洗練することになるに違ひない。もつとも、現在の、今彼が叫んでゐるやうな人道主義なんて、あんな人道主義なんて、仕樣がないよ、いくら輕蔑したつてかまはないよ、あんなものはせい〳〵往來の群集を喜ばす位のものだ、「皆さん、左側をお歩きなさい、」といふ程度のものだ。もつともあんな人道主義でも、何かの役には立つには立つんだからね、世の中なんてお手輕なものだよ。――

そして戸川介二は勢のない聲で高笑ひをした。

――これでこの小說の表題の、青木愛三郎といふ人物に就いて、彼の友人の戸川介二に說明させるといふ、作者の計畫は終つた譯であるが、さて、もう一度、閑話休題、と言はなければならぬことを、讀者、諒せよ。

三

靜岡縣の大――といふ海岸は、鐵道のステーションのある町から少し離れ過ぎてゐる關係だらうが、これ迄餘り都の人に顧みられなかつた所であるが、それは太平洋に面してゐて、一寸した灣を圍む半島になつた地勢の一部で、大――村はその半島の根元の邊にある小さな漁村である。近年、それも極く最近のことであるが、その邊が暖流の關係や何かから、靜岡縣の中でも最も氣候の溫い所といふので、東京あたりの一部の、極く一部の人に避寒地として知られるやうになつたのである。そこへ行く一番近くのステーションを持つてゐる伊――町の人々が、自分たちの町の繁榮策として、大――までの三里近くもある道を、町の經營で、餘り利益にもならない乘合自働車を走らしたり、結局その町の一部分の人にしか讀まれてゐない伊――新聞に、折さへあると避暑避寒の絕好の土地だと吹聽したり、果ては肺病の療養に最も適當な所だなどと書いて、大――村の人々を怒らしたり、そこに有志の資本家が集まつて、株式組織で、臨海樓といふ多少都會式の旅館を建てたり、兎に角、色々と骨折つてゐた。

その臨海樓が出來て間もなくの、去年の十月末の或る日の夕方、ひよつこりとそこの玄關に一人の客が立つたのである。かねて、餘り荷物などを持つてゐない、一人者の客を通すことになつてゐる、二階の六疊の部屋にその客を案內して、帳場に歸つて來た女中の話に、「あの、暫く滯在したいとお客樣は言つてます、」とのことであつた。客の這入つて來た時、

お上は丁度帳場にゐなかつたので、「どんな人？」と聞くと、「あの、何だか病人々々した人です、」と女中は答へた。このお上の役目を勤めてゐる三十七八歳の女は、伊――町の或る土木受負師の細君であるが、つまりこの株式會社臨海樓に雇はれてゐるものであつた。「さうかい、」とお上は言つた。「ぢやあ、この宿帳を持つて行つてお出で、」と

女中がそれを持つて、二階の部屋に這入て行くと、客は西側の窓の障子を開けて框の所に腰をかけて、ぼんやりと海の方を眺めてゐた。「あの、これをどうぞ、」と言つて、女中が宿帳を卓子の上に持つて行つて載せて、それから半間の床の間の隅にある硯箱を取りに行つた。すると、彼は默つてのそ〳〵と立上つて、ぴしやりと障子を閉めて、卓子の前に歸つて來て坐つたが、やがて女中が硯箱を持つて來て、水差しから水を注いで、墨を磨り始めても、彼はいつ迄も帳面の上をぼんやりと眺めてゐるだけで、何にも言はなかつた。彼女が墨を磨り終つて、「あの、どうか、」と恐々催促するやうに言ふと、彼は急に氣が付いたやうに、「ペンで書いてもいゝだらう？」と半分口の中で言つて、いきなり立上つて、例の半間の床の間に置いてあつた小さな手提鞄を持つて來て、中から萬年筆を取り出した。が、暫く何か考へてゐる風で、パラ〳〵と帳面を繰つて、前に書いてある人の名前などを見ながら小聲で讀んでゐたが、やがて「東京市何區何町、」と書いて、そして「青木愛三郎、三十四歳」と記したのである。それから、名前の肩に著述業と認め終ると、急に昂然とした樣子で、帳面を蓋しないで、女中の方に押しやつた。が、女中は音無しく頭を下げて、「ぢや、直に御飯の御仕度をいたします、」と言つて、下に下りて行つた。

が、暫くして、先の女中が火鉢を持つて來た時、彼は又窓の所に立つて、もうすつかり暮れてしまつた海の方を眺めてゐたが、彼女が火鉢の火を直してゐる傍に歩いて來て、「下で僕の名前を見て、何とか言つてゐなかつたかい？」と聞いた。「いゝえ、何にも、」と女中は不思議さうに言つた。彼女は今の先、宿帳を持つて下に行つて、その時も又お上が何か用に

言つたのか、ゐなかつたので、「何だか恐さうな人よ、」と番頭の常吉に言つたが、これを客が聞いてゐたのか知らと思つて氣味が惡かつたのでそこ〳〵に又下に下りて行つた。

すると、膳を運んで來た時、彼は又先と同じことを聞いた。が、別に下で何とも言つてゐなかつたし、そんな事を客が聞いたといふことも、ついお上にも番頭にも言ひ忘れてゐた位なので、やつぱり「いゝえ、何にも。」と答へた。客の青木愛三郎は甚だ物足りなさうな顏をした。

だが、その宿帳の名前を、お上がもつと早く見てゐたらよかつたのであつた。と言ふのは、彼女は靜岡の女學校を二年で止めたものであるが、性來大の文學好きであつた。彼女は以前一度嫁いだのであるが、夫に死に別れた爲に離緣して、そして今の夫に再婚したのであつた。丁度青木愛三郎が彼女の臨海樓に來た時分二三日の間といふものは、彼女は夫に頼まれて彼の商賣上の帳面の調べやら、溜つてゐる手紙の返事を書く事やらで、大變忙しい最中だつたのである。で、彼が來てから三日目の午後、その時彼は海岸に散歩に出て留守だつた、彼女はやつと忙しかつた仕事を一通り濟ましてほつとした氣持で、書き終つた手紙の數を讀んだり、帳面を重ねたりしてゐると、

「どうもをかしな人だね。」と次の間で番頭が女中を相手に話してゐることに、何氣なく耳をとられた。番頭の聲で、「何をする商賣の人だらう？」

「何か時々机に向つて書き物をしてるやうだが。」と女中の聲が言つた。

「それがね、どうもをかしいのは、」と番頭の聲で、「滯在してゐるお客の癖に、繪葉書が欲しいとか、郵便を出してくれとか、そんな注文がちつともないね。」

「妙に欝陶しい顏をしてゐるから、私は嫌ひさ、」と女中が言つた、「何だか窮屈で、恐いやうな人ね。」

「まさか、死に神に取つ憑かれてゐるんぢやあるまいね？」

「分らないよ、何だか……？」

そこで二人が笑つた時は、もうお上は彼等の方を聞いてゐなかつた、彼女は手近にあつた宿帳を取つて、その頁を繰つて見た。そして、そこに思ひがけなく、青木愛三郎といふ名前を見出して、先にも言たつやうに彼女は文學の愛好家だけに、非常に、驚いたのであつた。「青木愛三郎、青木愛三郎！」と彼女は芝居の役者が驚いた時にするやうな表情をして、幾度も幾度も口の中で繰り返した。殘念なことには、彼女は評判の『基督と彼等』も、『奇蹟』も、彼の著書は一つも未だ讀む機會を得なかつたが、然し彼が今どんなに有名な小說家であるかと言ふことは勿論、數年前から胸の病氣を患つてゐるといふ噂まで、何かの雜誌を讀んで承知してゐた。彼女はその瞬間、成る程、養生かた〴〵來られたんだな、と思つた。

「あの、常さん！」と彼女は取敢ず番頭を呼んで、「あの二階の六番のお客樣の部屋を一番に移してお上げ！ あの方は、お前さん、大した方なんだよ、東京の有名な小說家なんだよ。よく粗相のないようにしておくれ、お祭にもさう言つて、よく、ね。」

その言葉と入れ違ひに、散歩から問題の青木愛三郎が歸つて來た。彼の、少し歩き過ぎたせゐか、がつかりしたやうな、不機嫌な顏付が、と同時に一種悄然とした恰好が、如何にも小說家らしく見えた。

「お歸りなさいませ、」とお上は玄關口に走り出て、叮寧に挨拶した。彼女ばかりでなく無愛想な男だと不斷思つてゐた番頭までが、いつになく晴れ晴れした聲で、「お歸りなさい、」と叫んだので、青木愛三郎は多少狼狽した形で、「や、」と一寸頭を下げた。

「あの、つい不注意致して居りまして、先生とは一寸も存じませんものでしたから、誠に失禮いたしました。」とお上が詫まるやうに頭を下げて言つた。

「や、」と青木は更に一層狼狽した樣子で、又一寸頭を下げた。

「あの、一番のお座敷を急いで掃除しておくれ、お繁や、」と彼女は奥の方に叫んで、それから「一寸お座敷をお掃除いたします間、むさくろしい所ですが、此方で暫く……あの、お體の加減は如何でございます？　當地は御承知でもございませうが、どんな冬でも、雪などは十年に一度も降りません位で、氷なぞも一年に一度か二度も張ることがあるかないかといふやうな所で、お體には屹度お宜しいでせうと存じます。」

「さうですか、」と青木は柱にもたれ掛つたまゝ言つた。

「先生のお書きになつて入らつしやるものは始終拜見さして頂いて居ります、」とお上はそこで嘘を言つて、「あの、むさくろしい所ですが、今直にお掃除が出來ますから、どうぞ暫く此方で……。お節や、先生にそちらからお座蒲團を。」

「いや、僕はこゝで結構です、」と言つて、青木は袂から敷島を一本抜き出して、立つたまゝで火鉢から火を移した。

「何かお作がお出來になりますですか？」とお上は言つた。「どうぞ此方へお出でになりますうちに、立派なものをお書き下さいますように。この土地の紀念にもなりまして、名譽でございますから……。」

青木はこのお上の挨拶に、顔が熱くなつて、腋の下から冷汗が出るのを感じながら、返答に困つてゐると、そこへ折よく、「お座敷のお掃除が出來ましたから、」と女中のお繁が知らして來た。

「御案内いたしませう、」と言つて、お上は自分で立つて、彼を二階の一番の部屋といふ方へ連れて行つた。そこは東西に延びてゐるその家の物建の、一番西の端になつてゐて、一間の床の間の付いた、八疊の座敷であつた。北側の窓を開ける

と、富士山が額椽にでも入れたやうに眺められるし、又西の小窓を開けると、「此方の方はずつと海が見晴らしになつて居りまして、あの右手の、一段高くなつてゐる山の下の邊に家のかたまつて見えるのが、伊――の町でございます、」と、お上が教へた。

「煙草を、敷島を三つ四つ持つて來ておいて下さい、」と青木は少し煩さくなつたので、追ひ拂ふつもりで注文した。「はい、唯今」、と言つてお上が下りて行つた後で、彼は、始め來た時には、自分のそんなにも有名である筈の名前が、誰にも認められないのをひどく物足りない氣がしたが、認められると又餘りに大袈裟になつたのを擽つたく感じながら、此前の部屋と違つて中々立派な、紫檀のに代へられてゐる卓子に肘を突いて、見るともなしに床の間の方を見ると、賴山陽の天草の詩の、無論擬筆か何かだらうが、軸が掛てゐる下に、大凡一尺もある鑄物の布袋和尙の置物が据えられてあつて、その片隅に、彼の唯一の荷物である、小型の革の手提鞄が一層肩身が狹くなつたやうな表情をして置かれてあるのが苦笑が頰に浮かんで眺められた。

暫くすると、お上が又、小學校の祝日の時に、校長の傍の卓子に具へられるやうな、大きな錦手模樣の瀨戸物の花瓶に、菊を一ぱい盛つたのを運んで來て、あわてゝ手元にあつた雜誌の頁を開いて讀み入つた恰好をしてゐる青木に、「度々お邪魔いたします、」と挨拶して、暫く花瓶と布袋和尙の位置を對照しては、置き所に苦心してゐた。「ねえ、先生、」と彼女は立つて行きがけに又聲をかけた。「先生が此方に入らしつてゐる事が、伊――町にでも聞えましたら、勿論新聞に出ますでせうし、そしたら新聞記者が尋ねて來たり、色々な人が訪問して來てお困りでせうね？」

「それや困りますね、困りますね、」と青木は雜誌の頁から目を離して、「……しかし、もうひよつとすると、東京の新聞の消息位には出たかも知れませんから、――もつとも誰にも言はずに來てるんですからね、――そしたら、……困つたな。あの、伊――町には新聞があるんですか？」

「えゝ、ございます、伊——新聞といふのが。」

「ぢや、そこへ手紙でも出して、新聞に書かないやうに、頼んでおかうか知ら……？」と青木は迷惑さうに半分獨言で言つた。

それが、先にも言つたやうに、青木愛三郎が大——海岸に來てから三日目のことであつた。彼に自分の名前がこんな邊鄙な海岸にまで知られてゐるごとが不快ではなかつたらうが、それが餘りの急な持てはやされ方なので、少なからず僻易した形であつた。番頭の常吉の態度の變り方などは殊に甚しかつた。實は、彼はお上から客の青木の身分を言ひ聞かされる迄は、餘りいゝ客ぢやない位に思つて、殆どその存在を無視してゐたのだが、元田舍者で、露骨な正直者の彼は、それに一口に言ふと所謂おつちよこちよいで、お上にさう言ひ聞かされてからと言ふものは、忽ち出來るだけの愛想を振り撒き出した。「先生、今日は少し寒いですね、」「今日はどちらの方へおぶらつきです、先生？」「先生、お風呂が沸きました。今日は私がお流しませうか、先生、」「先生は全く、失禮ですが、骨と皮ばかり見たいですね、先生、學問するとこんなに痩せるのかね？」「ほんとに先生は始終何か心配してるやうに見えますね、先生見たいな學問する人は、みんなそんな顔になるのかね？」と喋つてゐるうちに、段々持前の田舍言葉になつて來るのだが、先生といふ言葉だけは、何か餘程嬉しいことのやうに、挾むことを忘れなかつた。

ところで、お上が言つたことが心配になつたのか、青木はその翌日、伊——町の伊——新聞編輯部宛に「拜啓、突然ですが、私は目下養生旁た一寸した創作の仕事を兼ねて、大——海岸の臨海樓に來てゐますが、もし東京の新聞の記事からでもその事が貴社のお耳に這入りましても、どうか御發表下さらぬようお願申します、早々。青木愛三郎、」と葉書に認めて、女中に投函させた。すると、その翌日の晝頃早速、伊——新聞社々員といふ肩書のある、須東多喜夫といふ

男が名札を通じて、彼を尋ねて來た。

「おゝ、到頭來たか、」と彼は女中のお繁の手から名札を受取ると、迷惑さうに顔を顰めて獨り言つた。「……仕様がない、通してくれ給へ。」

やがて、瘠せた、色の黒い、鼻の下に小さな髭を貯へた、背廣姿の新聞記者が這入つて來て、「これは青木先生ですか、始めまして、私は伊――新聞の……」といふやうな型通りの挨拶をした。青木も割合に叮嚀に挨拶を返した。須東は年はもう彼れ此れ三十歳を過ぎた位に見えたが、青木に對してはまるで初心な文學青年のやうな態度で、自分は早稲田大學の文科を出たもので、學校にゐる時分には無論作家になるつもりだつたが、家が貧乏なのと、それよりも才分を恵まれなかつたのとで、いつの間にかこんな新聞記者になつて、いつの間にかこんな田舎に流れ込んで來てしまつて、もう――伊――新聞に這入つてから五年になるといふやうな事を話した。

「君は、失敬ですが、お幾つです？」と青木は尋ねた。

「もう三十三になります、」と須東は恥入るやうに言つた。

「中學を出て、直に早稲田の文科に這入つたのですか？」と青木は聞いてから、「ぢや、丁度その君の居られた時分でせうな、君と同じクラス位かも知れませんよ、僕の友達がゐた筈ですが……」

「何といふ方です？」と須東は聞いた。

「いや、しかし、學校に籍を置いてたと言ふだけで、殆ど出てなどゐなかつたでせうから、たとへ同じクラスだつても御存知ないでせう。……名は、戸川介二といふ男ですが……？」

「戸川介二……聞いたことがあるやうな氣もしますが……」と須東は鹿爪らしく首を傾けた。「いや、しかし、存じませ

ん。卒業の年は××年位ですか?」

「いや、多分卒業しなかつたかと思ひます、」と青木は暗い顔をして言つた、「よく出來た男でしたがな。實際、天才的な男でしたよ、僕なども多分にその男の影響を受けたものです、もつとも、僕はその男とは少年時代からの、ずつと友達でもありましたが……。」

「その方は今どうして居られるのです?」と須東は、しかし、別に興味なささうに聞いた。

「どうしてゐるか、それが分らないのです。僕たちが學生時分には……」と青木愛三郎は感慨深さうに、果てはその心持細い、切の長い目に霑ひを生じたかと思へるやうな表情をしてつゞけた「實際、あの男こそどんなに頭拔けてえらくなるだらう、とみんなで羨望したり、嫉妬の感情を抱いた程でした。が、結局、あの男が僕たちの期待に裏切つたのは、今になつて考へて見ると、……つまり彼は骨の髓までの虚無主義者だつたからなんです。」

聞いてゐる須東は、何故そんなに青木がそんな友達のことを感慨深さうに話すのか分らなかつたが、唯斯ういふ立派な人がそんなに感心してゐる人といふのは、どんな人間だらう、と一寸空想して見た、が、何の見當も付かなかつた。

「先生は今何か御執筆中ですか?」と話が切れた時、須東は改まつた樣子で聞いた。

「書きたいとは思つてるんですが、」と青木は言つた、「何より體が大事ですからね、ついぶらぶらしてゐますよ。」

「あゝ、さうでしたね、」と須東は思ひ出したやうに、「近頃はお體の加減は如何です?」と氣が付くと青木が人の三倍も煙草をすふのを心配さうに見ながら聞いた。

「相變らずです、」と青木は無頓着な風で答へた。

それから又須東は、どんなに青木の『基督と彼等』や、『奇蹟』や、或ひは最近の『世界人』やを愛讀したかと言ふや

うな話から、それ等の作に對する感心した感想を述べたり、又作者の青木のそれ等に對する感想を叩いたり、一頻り文學とか、文壇とかいふ種類の話で賑つた。彼は青木が心おきなく、色々と話してくれたことを厚く感謝した。彼はだんだん馴れて來ると、青木が思ひの外話題も多く、捌けてゐて、それに話上手であることにも驚かされた。だから、歸る前には可成りくつろいだ氣持になつて、

「先生はお酒などお上りにならないでせうな、無論、藝者とか何とか言ふやうな者の出沒するところへなど、お出かけになることも……？」といふやうな話をした。

「えゝ、酒は呑みません、」と青木は答へた、「從つて、さういふ所へ自分から進んで出かけて行くといふことは滅多にありませんが、友達に誘はれて行くことも稀にはありますよ、これでも、」と言つて、最後に取つて付けたやうにハツハハハと笑つた。

「先生のやうな方のお座敷はむつかしいでせうな、」と須東は眼鏡の中で、烟たさうに目をくしや〱させながら、相手の機嫌を伺ふやうに言つた。

「いや、そんなでもありませんよ、」と青木もその細い目をしば〱さして、「多少は觀察する興味もありますからね。ハツハハハ。」

「ぢや、一度御案内いたしませうかな、」と須東は言つた、そしてあわてゝ附足した、「何かの御參考にもなりますでせうから。……」

そして彼は夕方近くに歸つて行つた。

ところが、その翌日、須東は四時頃に乘合でない自働車を臨海樓に乘り付けて、青木を尋ねて來た。須東が女中の案

内ゝなしに青木の部屋に這入つて來ると、青木は丁度來た時の日のやうに、北側の窓框に腰をかけて、腕組をしてぼんやりと富士山を眺めてゐた。

「先生、」とその日は和服姿で、須東は部屋に入つて來るなり叫んだ。「どうです、御退屈でせうと思つてお迎ひに上りました。今日は夕御飯を上りかた〴〵伊――町へお出かけになりませんか？」

「さあ、」と青木が生返事をしてゐるところへ、お上が茶盆を持つて上つて來た。

「いらつしやいませ、」と彼女は須東に言つて、それから「先生、お出かけですか？」

「さあ、」と青木はやつぱり生返事で答へて、一寸間をおいてから、須東へともお上へともつかずに、半分獨言のやうに

「僕は一遍東京の方へ歸つて來ようかと思つてたんだが……どんな所だか、一寸檢分のつもりで、着換へも何にも持たずに出て來たものですから、然し非常に氣に入りましたよ、實際、氣に入つた。」

「まあ、そんな事を仰有らずに……」と須東は言つた。「着換へなどは郵便でもお取寄せになつたらいゝぢやありませんか？」

「それもさうですね。」

「さあ、それより、御迷惑でせうが、行つて見ませう、」と須東は言つた。「折角自働車でお迎へに上つたんですから。」

「お迎へに入らしつたんですか、」とお上は須東の方に向つて云つて、それから「ぢやあ、先生、お出かけなすつて御覧なさいまし。どうせ田舍で、つまらない所ですけど、又御氣分もお晴れになるでせうから、」と勸めた。

さういふ話で、愈よ伊――町に出かけることになつた青木と須東とを、お上が自働車のところまで送つて行くと、そこへ家の中から慌しく番頭の常吉が走り出て來て、「一寸待つて下さい、一寸待つて下さい、」と叫んだ。そして常吉はお

上に「あの、晩の用事を足しに、今次手にこの自働車に乘せて貰つて、伊――へ行つて來てもいゝでせう？」と言つた。
「乘せてやらう、乘り給へ、」とお上が何とも答へないうちに、車の中から須東が叫んだ。で、番頭は大急ぎで又家の中に這入つて、羽織を引つ掛けて、自働車に乘り込んだ。
「先生、お風を召さないやうになさいませ、行つて入らつしやいませ、」と自働車の機械の廻り始める音がした時、お上が言つた。
「ぢや、先生をお借りして行きます、」と自働車が動き出した時、須東がお上に叫んだ。「ひよつとしたら、今夜一晩先生をお借りしますよ。」
「いや、それは……」と青木は口の中で言つたが、それは走り出した自働車の音で、誰にも聞えなかつた。
その晩の一時過ぎてから、酒臭い息を吐きながら、番頭の常吉は一人で歸つて來た。
「どうしたんだよ、お前さん、だらしがないねえ、」と顏を顰めて言ふお上に、
「勸められたんだよ、勸められたんですよ、」と常吉は云つた。「そして新聞屋さんがお上さんに宜しくと言つてたよ、先生を確かにお預りしたつて、明日朝のうちにお送りするつて……。」
「まあ、仕樣がないね。お前さんも早くお休み、」とお上は舌打して言つた。
然し、翌日の午過ぎになつて、青木愛三郎は悄然として、一人で、丁度彼が始めてこゝに來た時を思はせるやうな恰好で、俥で歸つて來た。風のある日で、往來に水を撒いてゐた番頭の常吉が最初に彼を見付けて、「先生、お歸りなさい」と片手に杓を持つたまゝで飛んで來て、「先生、昨晩は御馳走樣でした」と彼は薄い毛の頭を撫でながら言つた。
が、青木はそこ／＼にそれに答へて、逃げるやうに自分の部屋に歸ると、頭が痛いからと云つて、女中に床を敷かし

て終てしまつた。

その翌日は青木はいつもの通り、十時頃に起きたが、何だが今迄よりも一層元氣がなくなつたやうに見えた。午後、散歩に出る時、玄關でお上が二言三言聲をかけた時にも、唯簡單な返事をしたゞけで、直にぶら〳〵と出かけて行つた。暫くすると彼は急ぎ足に後戻りして來て、「敷島を二つばかりとマッチを下さい、」と言つた、そしてそれを受け取ると、外の事は何にも言はないで、直に又表に引返した。

「本當に小說家なんて言ふものは變つてるわね、」とお上は、彼に煙草とマッチを渡したまゝ、その後を見送るやうに立つてゐたお繁の方に、話しかけるともなく、獨言とも付かずに言つた「まつたく、いつかお前たちが言つたやうに、始めて見たら、譯を知らない人が見たら、死にゝでも入らしつたやうに見えるわ」

そこへ、玄關に伊――新聞記者の須東多喜夫がひよつこり這入つて來た「やあ、此間は失禮、」と彼は鼈甲緣の眼鏡の奧から、その善良らしい目をにこ〳〵させながら言つた、「青木さんは?」

「たつた今、海岸の方へ散歩にお出になりましたとこ、」とお上は得意の女學生言葉で言つた。「あなた、先生のやうなあんな眞面目な方を變なとこへ引張ちやあ厭ですよ。乾度迷惑して入らつしやいますわよ。」

「ところが、ところが、」と、須東はにこ〳〵顏をつゞけて、「どうして大もてなんですよ。伊――の藝者ですつかり青木さんに岡惚れしてしまつたのがある位なんですよ。……海岸つて、此方の方?」と須東は外海岸への方の道をさして聞いた。

「えゝ、さう、たつた今ですわ、」とお上は言つた。

臨海樓の前を出て、小さな牧場のある角を曲ると、そこから畑の中の一本道が六七町で外海の岸に出るのであるが、

海岸のところはずつと可成り高い松原の土堤になつてゐた。須東がその牧場の角を曲つた時、向ふを見ると、青木の姿が遥かにもうその土堤近くを歩いて行くのが眺められた。二三度「青木さーん！」と叫んで見たが、聞える筈がないのか、それとも青木が例に依つて何か思ひに沈んでゐるので聞えないのか、要するに通じなかつた。

松原のその土堤から、海面は又畑の方の三倍もの低さにあつて、それがだらだらした傾斜の砂濱になつてゐるので、見方に依ると、それは砂漠のやうに廣く見えた。その土堤の頂上と波打際との丁度中間の邊に、青木はぼんやりした恰好で蹲んで、ぷかぷかと煙草の烟を吹いてゐた。須東が「青木さん！」と土堤の上から叫ぶと、今度は直に聞えた。それが餘り突然だつた爲か、青木は何か悪い事でもしてゐたやうに、狼狽した恰好で振り返つた。が、須東はそんな事には頓着なく、ざくざくと砂を踏んで、その傍に歩いて行つて、

「此間は大變失禮しました。」と言つた。「先生、松龍が……そら、あの富士額の、受け口の女ですよ、彼女があなたにすつかり悶惚れしてしまつて、あなたの……あなたのお伽をした女ね、染次とか言ひましたね、あの女に是非先生をくれつて言ふので、大騒ぎをしてゐますよ。」

が、青木は笑ひ顔もしないで、答へなかつた。須東は餘り心安立ての口をきいたので、青木の機嫌を悪くしたのに違ひないと思つて、

「この頃は富士山がいつも奇麗ですね、先生。こゝの景色は一寸三保の松原といふ感じですが、――先生は三保を御存じですか？――彼處より確かに景色は大きいやうに思ひます。」

「さうですかね」と青木は冷淡な答へをして、すひ終つた一本の敷島を口火にして、又新しいのをすひ付けた。

「ところで、先生、今日は一寸改まつたお賴みがあつて參つたのですがね、」と暫くして須東が言ひ出した。「伊――の町

に扶英會といふ、あの町の者を中心にした、謂はば智識階級の青年會と言つたやうな團體があるんです。もつとも青年會ぢやないんですから、現に會長などは醫學士で、五十幾つになる人ですが、それに伊――には御承相の通り師範學校もありますから、そこの職員や生徒の有志とか、私たちのやうな職業のものとか、小學校の教員とか、變つた顏觸れとしては伊――町の警察署長なども會員の一人なんです、ですから、決してそんなに低級な人間の寄合ひではないんです。ところで、お賴みといふのは、その會から私が賴まれて來たんですが、先生に是非講演をして頂きたいといふのです。如何でせうか、無論、御迷惑でせうが、私からも是非お願ひしますから、曲げて御承諾願へませんでせうか？」

「困つたなア、僕は講演なんて、經驗も少ないし、下手なんですがね、」と青木は言つた。

「いえ、どう致しまして、」と須東は熱心に言つた。「もう、どんなお話でも結構なんです、もし御承諾が願へましたら、どんなに會員一同が喜ぶかも知れません。もつとも、お禮の方は大したことも出來ないかと思ひますので、面目ありませんが……」

「困つたなア、」と青木はくり返した、が、お禮といふ言葉を聞いて、確かに一寸氣を動かしたやうに見えた。無論、須東にはそんな事は氣が付かなかつたが、

「ね、先生、是非お願ひいたします、どんなお話でも……いえ、極端に言へば先生のお顏さへ見せて頂いたらいゝやうなものなんですから。」

「會場など定つてゐるんですか？」と青木は聞いた。

「えゝ、實は氣の早い話ですが、師範校の講堂を借りる事までもう定めてあるんです。ですから、どうぞ、是非、御迷惑でせうが……」と須東は賴んだ。

「日はいつなんです？」
「それが、どうも急な話なんですが、明日が丁度土曜日なものですから、その、明日の午後六時といふ時間でお願ひしたいんです、」と須東は恐縮さうに、肩を縮めて言つた。
「實に急な話ですね、」と青木は又煙草に火をつけながら言つた。「ぢやあ、まあ、何かやりませう。」
やがて、二人は立上つて、ぶら〳〵と宿の方への途を並んで歩いた。何かの話の次手の時、青木がふと思ひ出したやうに、
「ところで、僕は君も御存知の通り、着のみ着のままで來てゐる譯ですから、袴も何もないんですが……」
「それで結構ですよ、」と須東は言つた。「もつとも袴は、失禮ですが、私のをお穿き下すつたら結構です。」
言ふ迄もなく、その翌日の伊――町での青木愛三郎の講演は大變な人氣であつた。定刻を殆ど違へずに、聽衆席の向つて左側の特別席には、會長の醫學士は無論のこと、特別會員の警察署長も、師範學校教頭も悉く鹿爪らしい顔を並べて坐つてゐた。演壇の背景の中央には型の如く一枚の細長い紙が掛つてゐて、それには「神の愛と人の愛と　青木愛三郎氏」と認められてあつた。その青木愛三郎は彼の所謂着のみ着のまゝの、大島絣の着物に同じ羽織を着て、須東からの借物のセルの袴を穿いて、心持ち前屈みの姿勢で、始終右手に持つた手巾を口に――といふよりも鼻の邊から口の邊一體にかけて蔽ふやうにして、如何にも『基督と彼等』の作者らしい落着きを以て喋つてゐた。始めは稍々聲が低過ぎて、全體の聽衆に聞え兼ねる恨みがあつたが、それも段々話し進むに從つて、講堂全體が鳴りを鎭めた爲か、彼の聲が底力を持つて來たのか、低い調子が却つて重々しさを見せて、滿堂に沁み渡つた。彼は始め、ほんの二三十分で許して頂きます、と前置したにも拘らず、演説は一時間つゞき、一時間半つゞき殆ど二時間近くに渡つた。而も、聽衆が眞面目であつたの

と、演說そのものも、實際『其者と彼等』の著者として、決して恥しくない立派な內容のものだつたので、非常に熱心に聞かれた。彼の講演が終つた時、當日の司會者の、例の師範學校の教頭が演壇に上つて、

「今日の青木先生の御講演は實に有益な、有難い講演だつたと思ひます、」と彼は感動のこもつた聲で言つた。「青木先生が御病中にも拘らず、我々の爲めに斯ういふ結構な講演をして下すつたことは、我が扶桑會のみならず、伊——町民の心から感謝する所であります。殊に今日、私が最も嬉しく、愉快に存じましたのは、あの長い、何方かといふと內容の深い、難しい御講演を、皆さんが咳拂ひ一つせずに、熱心に耳を澄まして聞かれたことであります、これは私たちは勿論のこと、屹度講演者の青木先生も御滿足に思つて下さつたことと思ひます。私は皆さんの頭が、あの青木先生の御講演を、あんなに熱心に、あんなに耳を澄まして聞かれる程、皆さんの頭が進んでゐることを思ふと、滿腔の喜びに堪えません。では、これで今夜の會を終ります。」

會が終つてから、青木を中心にして、會の主立つた人々が集まつて、學校の教員室で簡單な茶話會が催された。その席で、席の末席に列なつてゐた、その學校の卒業生で、當時伊——町の小學校に勤めてゐた若い教員の甲が乙に、

「君、どうして青木先生はあの長い講演の間、始終手巾を口に當てゝ居られたんだらう?」と小聲で聞いた。

「あれはね、君、僕も考へてゐたんだが、」と乙が甲に聞いた。「先生は肺病なんだらう? だから、病氣が聽衆にうつらないように氣を附けられたんぢやないかね?」

「なる程ね、」と甲は感心したやうに云つた。そして卓子の上の菓子をそつと一つつまんで、それをむしやむしやと食つてから、暫くして、「君、さうぢやないよ、」と忘れた時分に又先の話をつゞけた。「何ぼ何でもあんな演壇の上にゐて、口から鼻から、まるで顏を半分隱すやうにして、自分の息を注意しなくたつて、聽衆に傳染するなんて筈がないよ。僕が一昨年

の夏、東京でやつぱりあの先生の講演を聞いたことがあつたが、その時はあんな事はなかつたよ。多分、その時分より、こんな所へ養生に來て居られる位だから、もつと病氣が進んだので、會場の汚い埃を吸はない用心をされたに違ひないよ。」

「なる程ね、」と乙は感心したやうに言つた、そして二人はそつと含み聲で笑つた。その話はそれ切りで濟んだが、茶話會が解散になつた時、この甲教員が、學校の出口のところで 靑木愛三郎を後から追つ驅けて、「先生！」と呼びかけた。そして名札を出して、「失禮ですが、私は斯ういふ者で。……先生の御講演は東京で一度と、今度で丁度三度目に拜聽いたしました 有難うございます、」と言つて、お辭儀をして、そして暗がりの中へ消えてしまつた。靑木愛三郎は暫くその場に突立つて、呆氣に取られたやうにぼんやりしてゐた。

「靑木さん、どうぞ此方へ、」とその時警察署長が聲をかけた。と言ふのは、今し方茶話會の席上で、「もう今夜は時間も遲いしするから、これから大――まで歸るのは、自働車にしても何にしても大變だから 今夜は此地でお泊りになつたらいゝでしよう、」と誰かゞ言つたのであつた。すると、「それがいゝです。もう九時過ぎですから、どうぞ、一寸もおかまひは出來ませんが、どうか私の所へ、」と扶桑會長の醫學士が言つた。「いや、私の宅が一番近いんですから。どうぞ私の方へ、」と師範學校の教頭が言つた。「いや、實は私の方にそのつもりで用意がしてあるんです、」と警察署長がその毬栗頭を振つて言ふには、「實は、その一寸先生にお賴みしたいことがあるもんですから、私は今夜は遲くなつてもならなくてもそのつもりで、家に用意をさせてあるんです。」それで、署長が勝つたのであつた。が、實の所、靑木にして見れば、署長の家は勿論のこと、教頭の家にしても、醫學士の家にしても、そんな窮屈な所で泊るのは甚だ迷惑なことに違ひなかつた。で、一應も二應も辭退したのであるが、それが通じなかつた。此際、せめて須東が何とか血路を開いてくれるだらう、と時々の彼の方を見たのだが、さういふ席に出ると、一向存在を主張することが出來ないらしく、彼は何にも

言はなかつたところか、「ぢやあ、先生、署長さんのお家で御厄介になられたらいゝでせう、」と言ふのである。「中々立派なお家ですよ。」――そんな譯で、彼は仕様なしに、署長の家へ泊ることになつた次第なのであつた。

署長は、然し、二人切りになつて話して見ると、實にいゝ人間らしかつた。青木は始めてこの署長の顔を見た時から、何處やら見たことのあるやうな氣が頻りにするのに、どうしても思ひ出せないで多少苛々さへして居たが、「青木さん此方ですよ、」と學校の門のところで聲を掛けられて振り返つた時、門燈の光で明暗の出來たその顔を見て、思はず可笑しくなつた、といふのは、署長の顔は臨海樓の彼の部屋の、床の間の置物の布袋和尚に似てゐたのであつた。が、署長はそんな事を察しる筈もないから、快活な聲で色んな雜談をしながら、彼を案内して、暗い町筋を右に左に曲つて行つた。餘り幾度も道を曲るので、流石に知らない町とは言ひながら、青木が少し不審に思ひ出した時、いつの間にか何だか見馴れた町に來たと思ふと、署長がすた／＼と這入つて行つた家は、此間須東に連れられて行つた、「大勝」といふ宿屋兼業の料理屋だつた。青木は一寸當惑を感じたが、仕方がないと思つて、署長に附いて玄關を上つた。と、署長は始終來てゐるものと見えて、出て來た女中たちは「先日は失禮、」とか、「此間のはどうなりまして？」とか、馴れ馴れしい挨拶をしてゐたが、その中の一人がふと青木を認めて、「おや、先生、よく入らつしやいました、先日は失禮しました。松龍さんが、先生がお出でになつたら、是非呼んでくれとくれ／＼も言傳てしてゐましたよ、」と叫んだ。

「これはこれは、」と署長はその毬栗頭の布袋顔を嬉しさうに振つて、「青木さんも隅に置けませんなア。もうさういふ調子では……ワハハハハ、」と如何にも署長らしい言ひ方をした。

「家へと思ひましたけど、家などつまりませんからな、窮屈なばかしで……」と署長はやがて座に着いてから言つた。

「で、失禮と思ひましたが、こんな所へ御案内しました、始めて御案内するつもりだつたら、もう先に御承知とは驚きま

したね、ワハハハハ。」

「松龍が先生に惚れてゐるのかい？」とそこで署長は一轉して、女中に向つて問いた。「ぢやあ、松龍を呼んでくれ。それからさん子、新駒、吉奴、まあそんな所を、いゝやうに掛けてくれ。」

「もうどうか、」と青木は恐縮して言つた。「僕はあんまり賑かなのを好きませんので……」

「成る程、先生はしんねこの方ですな、」と署長は言つた。「如何にも。おい〳〵、ぢやあ、松龍と……さあ、吉奴でも。二人だけにしてくれ。青木さんはお酒は？」

「僕は一滴も、」と青木は言つた。

「實は　私もこんな恰好をしてゐて、酒は餘りいけない方なんです。それでどうして斯うなるんでせう？　ワハハハハ、」と署長は言つた。

それから色々あつて、「ところで、先生、さつき一寸お耳に入れましたお賴みといふのはですね。いや、何でもない事なんです。」と署長が言ふには、「その、今度この伊――の町役場が改築になりまして、その明後日落成式があるのです。それに就きまして、先生に、一つ、その祝文をお願ひしたいんですが。その、私が祝文を讀むことになつて居りましてな、それをどうぞ、えゝ、極く短いもので、何でも結構です、是非作つていたゞきたいのですが。次手にそれを先生のお筆で書いて頂きましたら、尙頂上ですが、そしたら役場に寫しをやつて　取り返して來て、私の家の家寶にしたいと思ひますんですが……。どうぞ、先生、是非どうぞ。」

無論　その位のことを斷る譯には行かなかつたので、それに講演などよりはずつと手輕なことでもあつたから、彼は署長の申出を承諾した。署長は大變喜んで、十二時頃、青木を殘して歸つて行く時、「では、そんな譯ですから　明日中に何

とか御考へを願ひます、こゝの家には私からよく申し付けておきますから、どうぞ一日でも二日でもお飽きにならないうちは御ゆつくりなすつて下さい。そして明日の晩、又私が伺ひますから、それ迄はどうかお厭ひでもお止まりを願ひます。明朝用紙などは私の方からお屆けしますから、どうぞ何分よろしく、」と言つた。

その翌朝の十時頃、青木が松龍と二人で朝飯を食つてゐるところへ、鼈甲眼鏡の須東がやつて來て、襖を開けるなり「よお、御兩人！」と叫んだ。それから、「今朝署長の家へ行つたら、此方だと言ふので、やつて來たんですが、流石にあの署長は通人だけに味をやりますね。松龍、本望だらう？」

「えゝ、本望ですわ、」と松龍はその大きな體を媚びるやうに曲げて、味噌齒をにつと見せながら言つた。「須東さん、あなた、御飯は？」

「朝飯は夙に濟んだよ、」と須東は言つた。「今度は晝飯の番だよ。」

やがて、松龍が何かの用事で下に立つて行つた時、須東は青木に「昨夜の講演のお禮は幾ら出ました、少なかつたでせうな？」

青木は茶話會の席上で、會長の醫學士から西洋封筒に這入つた包を受取つてから、署長と一緒に「大勝」に來て、便所に行つた時そつと開いたので、それがたつた二十圓であることを知つてゐたが、「まだ開けて見ません、」と冷淡に答へた。

その時、署長の家からの使が用紙などを屆けて來たので、「何を頼まれたんです？」と須東に聞かれて、祝文の話をすると、

「色々御面倒な事が増えますな、」と須東は言つた。「ぢやあ、今日はお邪魔でせうから失禮します、又都合に依りまして、夕方でもお伺ひします。」

ところが、彼も亦愈よ歸りがけに、青木に又一つ面倒な事を増やして行つた。といふのは、三枚でも四枚でもいゝ、十枚か二十枚書いて下すつたら尚結構だ、元より恥かしい程のお禮しか出せないが、是非紀念の爲に伊——新聞に何か書いてほしい、と言ふのである。青木は迷惑さうな顔をして、この度は署長の時と違つて一二度斷つたが、結局、氣の弱い男に違ひないので、承諾してしまつた。「先生、本當に御迷惑でせうが、どうぞ宜しくお願ひ申します、」と須東は幾度も幾度も頭を下げて歸つて行つた。

午後、青木が使者を返して、一時間餘りかゝつて、例の署長から頼まれた町役場の落成式の祝文を丁度書き終つた時分に、伊——新聞社の須東からの使といふ者が、「先程お願ひしました事、何卒宜しく御願ひ申上げ候」云々といふ手紙を添えて、新聞社用の原稿紙を届けて來た。青木はそれを見ると、一寸苦笑を浮かべたが、次手にこれも書いてしまはうと思つて、直に構想にかゝつた。ぢつと机の前に坐つてゐては構想の出來ない質と見えて、彼は部屋の中を檻の中の動物のやうに、彼方此方と歩き廻つた。表を一寸散歩して來たいと頻に考へたが、何だか昨夜の講演會で町中の人に顔を知られてしまつたやうな氣がして、大——でのやうに氣輕に外に出る氣が起らなかつた。で、部屋の中を歩きながら、幾度も幾度も窓の前に立止まつて、そこの障子を細目に開けては、往來の方を窺いて見たりした。田舍町の料理屋にしては中々立派な家で、その窓の下から門の所まで、十間ばかりの間は御影の石疊が敷いてあつて、兩側には八ツ手や櫻の木や楓などが植ゑられてあつた。その向ふに、丁度門と往來を隔てゝ相對した位置に、可成り大きな菓子屋があつた。彼は二三度その菓子屋の店頭を遠望してゐるうちに、菓子が食ひたくなつたので、女中を呼んでそれを命じてから、愈よ須東に頼まれた原稿を書き始めた。それには『海濱の哲學的逍遙』といふ題をつけた。が、それは今日直に渡さないつもりで、書き終ると、隱すやうに懷の中に收めてしまつた。それに二時間ばかり費したので、やがてすつかり日が暮れて、

電燈が點る時分になつて來ると、何となしに心細くなつて來たので、靑木は署長のところへ電話を掛けようかと二三度考へたが、なるべく落着きを見せてゐる方がいゝと思つて、思ひ止まつて又部屋の中を彼方此方と步き出した。やがて、例の往來の方へ向つた窓の障子からそつと覗いてゐると、昨日の和服姿とは全く面目を改めた署長が、劒をがちや〳〵鳴らしながら這入つて來るのが見えた。神經衰弱の加減か、その警察の制服姿に靑木はひどく驚かされた樣子だつたが、そツと障子を閉めておいて、机の前に歸つて、わざと落着いて座つて見ると、手持無沙汰なので、先に書いておいた祝文を机の上にひろげて、讀み直してゐるところへ、女中と一緖に署長が聲だけは昨夜と同じ調子で、「や、昨晚は失禮いたしました。おや、お一人ですか、御退屈でしたでせう、」と言つて、帽子を脫いだ所を見ると、又だん〳〵昨夜の好人物らしい感じが出て來たので、靑木はやつと胸を撫で下した形で、「粗末なものですが、どうやら書いておきましたから、」と言つて、それを署長の方に押しやつた。

「これはこれは、どうも、これはどうも、」と署長は洋服の膝を窮屈さうに折つて、どつさりと胡坐を搔いて、卓子の向ふ側に坐つた、そして靑木の書いたものを手に取つて、一寸拜んでから擴げて見て、「これはどうも結構です、見事な御手蹟ですな、流石に、……結構です、」と嬉しさうに言つた。彼はそれを叮嚀に幾つかに畳んで、もう一度拜んでから、小學生徒が免狀をしまふやうに、洋服の上衣のポケツトに挾んだ、それから思ひ出したやうに「松龍は?」と問いた。

「いえ、午前中に返しました切りです、」と彼が恐縮さうに云ふと、

「それやいけない、おい〳〵、」と署長は言ひながら、手を叩いて女中を呼んだ、「松龍をどうした? 早く呼べ、早く。御飯の仕度はまだなのかい?」

「僕は一度大――の方に歸らうと思ひます、」と靑木は言つた、「昨日出た切りですから、宿で心配してるだらうと思ひま

すから。」

「かまふもんですか、まあ、さう言はずに御ゆつくりなすつたらいゝでせう。おい、御飯の用意はいゝかい？」

「ぢやあ、御飯だけいたゞいて、兎に角、今夜は一度歸ります、」と青木は主張した。

が、そのうちに飯を食つたり、藝者が來たりして、いつの間にか時間が過ぎて、愈よ歸り仕度を始めたのはもう八時前であつた。が、署長は松龍を連れて、わざ〳〵自働車で彼を臨海樓まで送つて來た。

新聞で彼の講演の記事を讀んでゐた臨海樓のお上は、その晩、彼の部屋にやつて來て、一時間近くも色んなお喋りをして行つた。彼女は新聞の記事に依つて、彼を賞める新しい言葉を覺えたものと見えて、お世辭の言ひ方がいつもより一層流暢で、變つたハイカラな言葉を混ぜて述べた。青木も始めのうちこそ何だつたが、この二三日の間に、急に新聞記者が來たり、お茶屋に招待されたり、講演會に出たり、署長に尊敬されたり、まるで政治家の受けるやうな觀迎と喝采とに馴れて來ると、いつかそれが當然のやうに、又別に驚くべきことでも、變つたことでもなく、實際、自分はさういふ風に扱はれても、何の間違つたことでないと言ふ氣がして來た。だから、その晩はお上の彼に對する言葉がいつもより一層尊敬を以て語られたやうに、彼がお上に對する態度や言葉附もこれ迄とは少し變つて見えた。つまり、昨日までのやうに妙におづ〳〵した所や、悄然とした所がなくなつて、言葉にしても、例へば「どうも田舍の人は何かにつけて大袈裟でね、」とか、「署長は人間はいゝやうですが、あれぢや少し調子が輕過ぎるやうですな、」とか、「どうも先生々々がやあ、藝者遊びも唄一つうたふ譯にも行きませんからな、」と言ふ風に、幾らか尊大な言ひ廻しになつたやうに思へた。

彼は一人寢床の中に這入つてからも、長い間、譯もなく愉快で、世の中が組し易いやうな、この世が住むに値するやうな、樂しい氣持で興奮して來て、容易に眠りつけなかつた。で、枕元に放り出してあつた「海邊の哲學的逍遙」の原稿を

拾ひ上げて、讀み直して見ると、それも亦「どんなものだい？」と思へる程いゝ文章に見えて、「うまい、うまい！」と幾度か自分で獨言ちて、終には聲を上げて朗讀して見たりした。が、一昨日からの疲れで、いつとなくうとうと眠りに落ちた。

「先生、先生！」と枕元に女中の聲がして、彼が起されたのは翌日の晝前のことであつた。「お客樣です、先生！」

青木愛三郎は夢中で、蒲團の中から兩手を突張つて、伸をして、ぽーッと目を開くと、入口の障子が夢の中でのやうに靜かに開いて、そこに松龍が微笑みながら這入つて來る姿が眺められた。彼はあわてゝ、兩手を蒲團の中に收めて、それから本式に目を開いて、「やあ、失敬、失敬、」と聲をかけた。彼は朝の目覺めから幸福であつた。そこで、急いで起き出して、顏を洗つて、松龍とさし向ひで朝飯兼の晝飯を食つてゐると、須東多喜夫がやつて來た。

「君、書いておきましたよ、」と彼は須東を見ると、てれ隱しを兼ねて斯う叫んだ、そして床の間の布袋の置物の前にあつた原稿を、箸を持つた手で指さした。

「これはどうも有難うございました、早速に、」と須東も早速職業的な言葉で禮を言つた、が、直にや〱と顏を笑はせて、「大分お羨ましい光景ですな」と言つた。

「私が押しかけて來たのよ、」と松龍は味噌齒をむき出して叫んだ。

「君は御飯はどうです？」と青木は未だ幾分か極りの惡さうな樣子で聞いた。

「今、食べて來たばかりのところですから、まだお腹が空きません。どうぞ御遠慮なく、」と須東は答へた。

そして結局一二時間程後、三人は、番頭の常吉に伊——町まで自動車を呼びに行つてもらつて、それに乘つて伊——に出かけて行つたのであつた。青木は此間の講演會の禮金があるので、番頭への使賃や自動車代などを、惜しげもなくおまけを附けて拂つた。彼は腹の中で、近日受取る筈の警察署長からの禮金と、須東の新聞社からの原稿料とを考へて、

だん〳〵氣持が增長して來るのを覺えた。——そして、その日から、四五日、ずつと續けて彼は臨海樓に歸らなかつたのである、恰もそこから『大勝』の方へ宿を變へてしまつたやうな形で、彼は十分いゝ氣になつて根を下ろしてしまつて、その間松龍は彼の傍に附き切りだつたし、彼自身酒こそ飲まなかつたが、夜になると、大抵須東を電話で呼び寄せたり、或る時などは臨海樓の常吉を自働車で迎ひにやつて呼んだり、そしてさういふ時は賑かに四五人も藝者を呼んで、豪勢に遊んでゐたのであつた。

ところが、四日目だか、五日目だつたかの午後、彼が丁度一人ゐた時を見計らつて、そーツと女中頭が襖を開けて彼の座敷に這入つて來た、そして「先生樣、誠に恐れ入りますが、」と彼女は上目使ひで彼の方をちら〳〵と見上げながら言つた。「此邊の定りになつて居りますので、恐れ入りますが、一度御勘定をお下げ下さいますように……へえ……誠に恐れ入りますが……？」

すると、青木は忽ち顏色を變へて、「そんなものは宿の方から、常吉でも呼んで取つてくれ給へ、」と叫んだ、だが、何處か力の拔けた聲で、「宿の方に千圓ばかり預けてありますから。」

「どうも、誠に失禮いたしました、」と女中頭は蜘蛛のやうにお辭儀をして、部屋を出て行つた。

すると、極端に神經が銳敏になつてゐた青木の氣持に、どうやら下の帳場の方から、使を出して、大——の臨海樓に調べにでもやつた氣配が感じられた、確かにさうとは分らなかつたが、どうもそんな風な氣がされた。彼はこの四五日來の元氣な顏色をすつかり失つて、實際、千圓の金なんぞ預けた樣子はないのであるから、急に苛々した樣子で、いつかその同じ部屋の中で、署長の祝文や、須東の新聞への原稿を書いた時と同じやうに、それよりももつと苛々した恰好で、部屋の中を頭を振りながら彼方此方と步き出した。彼はもう障子の隙間から往來を覗く餘裕さへ持たないやうに見えた。

暫くすると、彼は自棄のやうに手を叩いて、女中に「大急ぎで自働車を呼んでくれ給へ。これから大――に歸るから。」と叫んだ。

が、どうしたのか、自働車は二十分待つても三十分待つても來ないので、彼は幾度も幾度も氣狂のやうに手を叩いて催促したが、その度毎に唯今直にとか、何處のも皆出拂つてゐますから一寸お待ち下さい、とか云ふ返事だつた。さう斯うしてゐるうちに一時間も經つて、未だ自働車が來なかつた前に、慌しく階段を上つて來る氣配がしたので、青木がはツとしてその方に注意してゐると、それは女中でなくて、伊――新聞の須東多喜夫で、

「青木さん？」と彼は青木の姿を見ると、いつになく鋭い聲で、「今日、社にこんな手紙が參りましたんですが、あなたに覺え……か、お心當りがありますか？」と言つて、彼の前に一通の手紙を突きつけるやうにして見せた。

青木はその時は多少落着いた形をして、卓子の前にわざと威嚴を作つて坐つてゐたが、須東の言葉に何事かはツとした樣子で　突きつけられた手紙を震へる手で受取つて、一目見るなり「あ――」と彼は消え入るやうな聲で叫んで、兩手で頭を抱えて　卓子の上に顏を伏せてしまつたのであつた。彼は一言の辯解も反駁もしなかつた。それは東京にゐる、本當の『基督と彼等』の著者の青木愛三郎から、伊――新聞社に宛てた、彼のあづかり知らない講演や、文章に對する抗議狀なのであつた。

伊――新聞社の須東多喜夫がどんなに狼狽したか、又扶桑會がどんなに面目を潰したか、その外警察署長、（彼の手下の者がその贋の青木愛三郎を警察に連れて行つたのであつた。）それから臨海樓の文學好きのお上、味噌醬油屋の松流（然し、彼女はたとへ彼がどんな泥棒でも、追剝でも、やつぱりどうしても私はあの人が好きでならぬと言つて、朋輩の

話の種になつた）等等の人たちがどんなに恐縮したか、又その後、須東は新聞社を解雇されて、就職口に困つた末、臨海樓に暫く世話になりに行つたり、布袋顏の署長が進退伺を出したり、師範學校の教頭が恥で病氣になつたり、さては臨海樓のお上が亭主の土木受負師に毆打されて叱られた上に、株式會社の社長から一週間謹愼を命じられたり、——さう言ふ色々なその後の事件は、幾ら私が骨折つて書いても、今迄の私の經驗からすると、それは徒らに讀者を怒らすだけであらう。やがて、どんなさういふ事件を書いても、讀者を怒らさないやうに書ける迄、私の修業が積んだら改めてそれ等は書く事にして、又實際、さういふ事件がこの小說の主題ではないので、實は今年の秋、私がその同じ大——海岸の臨海樓に行つて、そこで見聞きした事を書かうとしたのがこの小說の本體なのであるが、いつの間にか「はしがき」がこんなに長くなつてしまつたので、殘念ながら、私が諸君に言はうとする事を、最後に、一口に簡單に述べておかう。

閑話休題。

その贋の青木愛三郎は、本當の青木愛三郎の竹馬の友達で、そして又私の尊敬してゐた友達の、戸川介二であつたことを、私はそこで聞いたのであつた。結局、その時の色々の金錢上の不始末は、青森縣の戸川の實家から支拂はれて、だから彼は別に法律上の罪人になることは免れて、又來た時のやうに小さな手提鞄を一つ持つて、飄然と消えてしまつたと言ふことであつた。そして臨海樓のお上が私に、それ等の話の末に、言ふには、「今年の夏、本當の青木さんがやつぱり此地にお見えになりましたが、斯う申しちや失禮ですが、あの別の青木さんの方がずつと品などもおありになつて、番頭などもやつぱりさう申すんですが、あんな者の言ふ事など的になりませんが、ずつと好きだなんて言つてる位なんでございますよ。さう言へば 須東さんなんかも、負け惜みかも知れませんか、前の青木さんの方がずつとえらいやうに思へるがな、本當はどうだか知らないが、話なんかしてゐると、前の青木さんの方がずつと文士らしくて、えらいやうな

氣がするがな、と言つてらつしやいました。須東さんと言へば、あの方も到頭今年の夏東京にお出になつて、何でも今では詩人會といふ會に這入つて、近々に詩集をお出しになるといふやうな話です、却つてあんな事があつて、よくおなりになつた譯ですよ。おほゝゝ。」

無論、私はその時、自分がその贋の青木愛三郎の友人であることは言はなかつたが、それ等の話を聞きながら、やつぱり未だあの男は、さういふ何も知らない人が見ても、そんな風に見えるのかな、と一寸嬉しいやうな氣がした、一度會つて見たいとも思つた。恐らく彼が書いたと言ふ、警察署長の代作をした祝文にしても、伊――新聞に出した「海邊の哲學的逍遙」にしても、乾度相當にいゝものだつたに違ひない、と私は信じるのである。そして又お上が言ふには、「本當にあの方は、實際何か厭世思想に沈んで、若しかしたら死ぬやうなつもりで入らしつたんぢやないか、と私は思ふんですが……。ですから、始めからあんな事をするつもりぢやあなくて、ふッとした出來心で、青木さんの名前を宿帳につけたのが、(どうせ有名か有名でないかだけで、やつぱり同じやうな職業の方でせうから)それがみんなが大騷ぎをしたので、自分でも引くに引かれず、あんな事になつてしまつたんぢやあないかと思ふんでございますよ、それには私なども罪があるんですわね、」と彼女の所謂女學生言葉で言ふのにも、私は半分の信を置くのである。

それは兎も角、多分、この一時東京にまで聞えて來た青木愛三郎の贋者が、戸川介二といふ男で、その戸川介二といふ男がどんな人物であるかといふ事は、騙られた本人の青木愛三郎と、そして私位を除いては、世に餘り知つてゐる者はないだらうと思ふ、そして、彼奴、まだゐるな、と思つて、多少とも氣味の悪い思をしたのも、恐らく青木愛三郎と私とであらうか。何故と言つて、青木が戸川から彼の一部分を學んだやうに、私も亦彼から彼の一部分の確に影響を受けて、今日に到つたものである。若し何處かで彼がこの小說を讀んだら、あの細い切の長い目を細くして、苦笑をするだらう

と思ふ、そして若しかすると、彼自身と青木と私とを材料にして、「三人の戸川介二」と言ふやうな小説でも工夫するかも知れない。だが、無論、彼は要するに、一生何にも書かずに終るだらう。（十、十二）



續その日暮しをする人

佐藤春夫

私――といふのはつひ先達つて「その日暮しをする人」といふものを書いたのと同じ私であるが、實をいふとあれは、最初にはあんなことを書くつもりはなかつた。ほんの書き出しに一ことと思つたことが、それを書いてゐるうちにつひあんなものに出來てしまつたので、だから私としては、あの時書かうと企てたことは全く何も書けてはゐないのである。それ故、今度とても書かうと思つてゐることは、あの時に書けないでしまつたことやら、それにその後になつて思ひ出したことやらいくらかはある。だが、締切に追はれてゐることでもあり、その上いづれは筋も文(あや)もある話ではなし、どこでどう切れるものやら一行先きはわからないのだが、兎も角も書いてゐるうちには何かになつて來るであらう。言はゞ、小供が粘土の一かたまりを持つて、これであんなものをこしらへて見ようと思つてゐるうちに、そのあんなものが出來上らなくとも、何かしらは出來上らうかと思ふのである。何しろ私が粘土の一かたまりを持つてゐる――心のなかに持つてゐることだけは本當なのである。

どこから書いていいかわからないが、先づその頃と言はう。その頃、——私がおぼつかない心を抱いて侘い一日の日を持ちあつかひながら、朝、目が覺めてさてつくづくと心のうつろな彈みのなさを感じながら、幼兒はこんな時によく母親を呼んで泣き出すものだが、さうして夢幻から覺めた幼兒は母親の乳房を見つけてはつきりと現實の希望を見出すと、もうすつかり夢幻と現實とのへんなうつろが充たされてにこにこするものなのだが……、私は、朝の目覺め、それも老人か何かのやうに早くから目の覺める朝、その朝の目覺めにそんなことを毎朝考へながら、さてつらつら思へば、今の私も譬へて見ればその幼兒と何の違ひもない。——戀愛といふ夢幻から戀ふべきものがもうないといふ現實に目が覺めかかつて、このさびしさは幼兒の寢覺めの心をそのまま永く持ちつづけてゐる生活なのだ。それにしても呼ばうにも、私の心には心の母はなく、さてその母から見せて貰へる希望の乳房もないやうに思ひ做して、私は、やつと夜の明け放れたらしい戸の外を見ようと、寢床の中から蚊帳を半分もぐつて戸を明けながら、曇つてゐるのを見ては何といふ陰氣らしい天氣だらうと思ひ、からりと晴れてゐるのを見てはその廣々とした深い空が故もなくしみじみとさびしかつた。要するに晴れてゐやうが曇つてゐやうが、どちらだつて私の心の空虚はそれが爲めに一さう募るのであつた。——人はよく夕ぐれ時がさびしいとか悲しいとか惱ましいとか言ふ。なる程、夕方も隨分ともの悲しくはある。だが夕方がさびしく悲しいといふ人はしんからのさびしさを未だ知らないからであらう。本當にさびしい身にとつては夜あけこそ最も深いさびしさを知る時である。また午後の三時ごろなどもへんに所在なくさびしいし、さて夕方もさびしくないことはないし、さう言つてゐれば結局は一日中さびしい事になる。さうしてそれに違ひないが、そのうちでどちらかといふと私は寧ろ夜が一ばんさびしくないやうな氣がした。夜になるとどうやらその一日でさびしさにも少し疲れが出てそのせいかさびしさが少しぼんやりと鈍つたものになり——まあ譬へて見ると荒涼たる風物に靄がかかつて、そのために

荒涼たるものがいくらか和げられるのでもあつたらうか。何にせよ夜の方が、朝や午後三時ごろのさびしさのやうに鋭くきびしいそのくせさびしさ特有のよんどころ無さを持つたものでなく、いくらかは甘い、つまりどうかすると泣けもするやうな程度や性質のものに變つてゐる。それに夜には、もう少しすれば眠れるのだといふ希望がある——尤も、それにはよほどの努力をして、晝間からよく心がけて體を疲れさせて置かなくてはならない事は、先達つて述べたとほりであるが——。

さてそんなふうな或る夜のことであつた。私はふとした氣まぐれに近頃はやつてゐるダンスといふものを見たいと思ひ立つたのである。人間がたくさん集つて樂しみに醉うてゐる場所を見たいと思ひ立つたのであつた。さうして私は以前、人の噂で別に氣にもとめずに聞いてゐた或る大きな建物——その七階建の第七階に舞踏場があるといふ建物へ這入つて見るつもりになつた。その建物の入口に立つて、私は私自身の肉體や精神の狀態を自分でよく相談して見た——こんな高い建物へ昇つたら目まひがしやしないかしら、そんな華かな人ごみのなかへ雜つてしまつたらその結果私のさびしさはどんなものになるだらう、大たいそんなことを考へるために私はものの三分ほどその建物の入口に佇立つて、その宏壯な繪はがきなどで見てゐる紐育あたりの家の普通の大きさのものは多分からもあらうかと思へるその建物の二百だか三百だか列んでゐるであらうその窓を、私はひとりしよんぼりと見上げたのであつた。それらのさまざまな事務室は、夜だからもう業務を終へて灯が消えて　た。さうして多分舞踏場はその傍だらうと思へる屋上庭園には赤い提灯が一列に小さく、鏤められたやうに列んでゐた。オケストラが、多分そのあたりからであらう。さつきから漂ふて來てゐる。私は何となく氣おくれがしてものの三分間もそのやうにして立つてゐたが、その時一群の男女が私のそばを通つて、やはりその高い屋上を見あげると互に樂しげに談笑しながらどやどやとその建物の入口へ、無雜作に入つて行つた。

私は思ひきつてその四五人の男女について行つた。さうしてこの多分二組の兄弟だらうと思へるいづれも二十前後の青年や少女たちと一緒に、妙に身にひけを感じながらもエレベエタアに乘つた。さうして「しまつた！　かな」と思つた——私はエレベエタアのなかでちよつとふら〱となつて、こんな時に高いところへ行けば天井が上から自分の頭の方へだんだんと落ちかかつて來て今にも息がつまるやうに感じたことが、以前にも度々あつたからである。が、しかしそんなことを充分に感ずるひまもなくエレベエタアは一氣に、もう第七階に來て居た。

舞踏室はエレベエタアの着いたすぐとつつきで、あの赤い提灯のある屋上庭園の隣りの明るい廣間であつたが、案内を知らない私は舞踏室に沿うた廊下を歩いてその屋上庭園——ここならば天井が頭の上へ落ちかかつて來る心配はない——へ出た。さうしてそこの一隅にあつた卓に凭れながら私は、明け放した窓越しに舞踏室の見える方へまともに腰を下した。普通の小說だとここで私は、私が窓越しに見た舞踏室の光景を一つたとひあつさりとでも描き出して見せるべきであらうが、私は面倒だからそれはやめることにして、只一つ二つ、私に用のあつたことだけは書かなければなるまい。——私はそこで無心に踊つてゐる三四十人に近いさまざまな人を瞥見した。彼等は皆、頻にたへず表情の音樂である笑ひの波を浮べてゐた。さうし、若し私だつてその仲間にまぢつたら何となく心も輕くなり、成程人生はかういふふうにして暮すべきものだと思へるのではないか、と、ふとさう思つた時に私は思はず自分の年を考へて見たのである。——もし私の年がもう十若いか、或は十老いてゐたならば、私はきつと少しも躊躇せずに舞踏を習つて見ようと思ひ立つた事であらう。十九であつたら私は、たとひどんなにさびしい心を抱いてゐたところで、自暴自棄の足どりで踊り狂つてゐるうちには十九の人生の憂愁ならいつの間にか踊り忘れるだらうと思へた。さうして見る人々は私のやけになつて自分の憂愁を蹴散らさうとしてゐる足どりを見て、それが若者にふさはしい踊り方だと思つてくれるかも知れない。又

私が三十九であつたならば、私が物憂さうに踊るのを見て人々は、この人は早くももう自分の人生に疲れさうになつてゐるらしい。それにしても青春の思ひ出をもう一度思ひ出して見ようとして、ここに來て踊つてゐるのだらう——さう人々は優しい悪意のない微笑で私を見てくれさうでもある。しかし私はもう十九でもない、又まだ三十九でもない。さうして現實生活の活氣に充ちあふれてゐるべき私の年輩で、しかもしよんぼりと只ひとりで舞踏場に來て、無理に相手を求めながら舞踏するとしたら、さうしてその私の相手といふのは私の心とは何の關係もない異性であるとしたならば、二十九 私は私自身としてはあまりにみじめであり、はたの見る目にもあまり物欲しげであるに相違ない。又たとひ私が今の私の年輩であつても、若し私が妻なり情人なりをつれてここに出入りをするのであつたら、いや假りにつれては來なくともさういふものを心に持つてゐる人であつたら、私は何のひけ目をも感ずることなしにここに出入りもすることが出來るであらう。實際、ここにゐる人々はいづれも何か幸福の一部分をそれぞれの心に抱いてゐる。さうしてそれをもう一層擴張しようと思つてここに來てゐるのである——彼等の持つてゐる喜びを溢れるものにしようとして、ここにかうし踊つてゐるのである。さればこそここにゐるすべての人々は、顔にはたへず表情の美しい舞踏曲であるところの笑を漂はしながら、心には更に樂しい氣持を追ひもとめて、しかもすこしも見すぼらしくもなく不自然でもないのであらう。ところで、もう一度私はといふと、私には芥子粒ほどの幸福も歡樂もない。さうして若しこのうつろな私が、假りにこの人たちのなかに雜つて舞踏しようと思ふとすれば、それは全然無いところのものを外側から捜し出さうと焦る僞めに外ならない。實にそれは見すぼらしく哀れに違ひない。さうだ、元手のある人間はそれを元にしてもつとそれを殖やさうとすることも出來る。ところで一文無しがもし何か金儲けを考へて實行するとしたら、それは世間の咎めを受けるか物笑ひになるかそのどちらかに違ない。言はゞ私は今、幸福に就てその一文無しのやうなものだ。何

かほんの人並みな幸福の樂しみをでも求めようとあせればあせるほど、私の心情はさびしげに乃至は何か妬はしげに見えるばかりであらう……。私はまづ大たいこんなことをこのとほりにたど〱しくおぼつかなく、考へるといふよりは感じながら、手持ち無沙汰なままに卓上にあつたビールのコップを取つてぐつと口をつけると、さてその苦いコップを下に置いて、例の舞踏室の方を何氣なく見つめた——その時、くるりと一まわりしてその半身を窓なかに現はして、やがてもう一まわりと身を引いて窓ぎわから遠ざかると、その全身を私の目に見せた一組の舞踏者があつた。その舞踏者が私の目についた——さてそれは次の一組が例の窓ぎわに現はれた時に、そのかげになつて彼等はもう見えなくなつたが、私の目をとめたのはひとりの十四ぐらゐな體つきをした少女で、それはリボンから爪尖で立つたその靴まですつかり雪白で裝はうて、そのおかつぱに斷髪して垂れた黑い毛はその子が一つくるりと舞ふごとにふわふわと動いた。その白づくめの子の相手といふのは、どこかの學校の金ぼたんのたくさんある制服をつけた十七ばかりの少年であつた。私はもう一度彼等を見たいと心がけて窓のなかをぢつと見てゐるうちに、彼等はさまざまな舞踏者のなかに時々見え隱れしながら、くるりと上半身を窓ぎわに表はすと、その次の一組と立ち代つて姿を消し、しばらく待つてゐるうちに再びおかつぱの髮と白いリボンとのふわりと搖れる姿を鮮やかに現はすと、舞ひながら窓の奧の方へ消えて行つた。かうして幾度かごく近い窓越しに私の目に見えるところへ閃きのやうに現れたりさて消えたり、さうしてピアノが止んだところで彼等は踊りをやめて倚子に歸つたが、それは私のところからまともに見える場所であつた。二人は並んで腰をかけてゐた。少女は上目づかひをして少年に何か話しかけてゐる模樣であつたが、大きな瞳を持つた阿刳りの丸顏である。少年の方は細おもての素直に高い鼻のある横顏でうなづいてゐた。ふたりの連れでさうして多分は少女の母であらう、少女の隣りに三十五にはまだならないほどに見える婦人が、どこか彿のこの少女に似た顏の下で小さな銀

の扇を動しながら、少年と少女とをにこやかに見やつてゐた。不意にピアノが鳴り出すと、さつきからもう踊り疲れてゐたらしい人々は直ぐに立上らうとはしなかつたが、只一人あの少年が音につれてすつと立上ると少女も同時に立つて少年の肩につかまつた。ふたりは直ぐに踊り初めた。この一曲は終りまで彼等の一組の外には誰も立上らなかつた。さうしてふたりだけが熱中した足どりで踊りつづけた。それが上手であるかどうかを私は知るべくもない。ただ私はしばらくそれに眺め入つてから、突然立ち上つて卓から離れると、屋上庭園の片隅へ私は歩み去つた。さて私はその人造石の手すりに片手をのせて、灯でほの赤く煙つた都會の夏の夜の空に目を　つて、たまたまそこに低くかかつてゐた八日ほどの月が光を失つてゐるのをぼんやりと見ながら、さて私は思はず息を深く引いて、自分の胸のなかがふるへるのを感じた。――私はさつきから卓上　あるがままに何心なく三四杯を飲んだビールの爲めに醉つてゐたのに違ひない。さうして私の感傷癖は醉の爲めに發したのであらう。――私はあの少年と少女、譬へば春の日に互に花の上で會つて睦みながら縺れあつて紺円の中空の方へ消えて行く蝶と蝶とのやうに踊つてゐる少年と少女とを見て、私は危く泣けさうになつたのである――私は醉へば泣き上戸になるのだから。しかし私は泣かずに濟んだ。ただ一息深く息を引いただけでどうやら私のセンチメンタリズムの頂上はとほり越したものと見え、同時に微醉も亦醒めたやうな氣がして私は、きつといくらか青褪めたらうと思へる自分の顔を再びさつきの卓の方へ運んで行つて、そこで金を支拂つた。さうして、また氣分がふら〳〵とするかも知れないことを惧れたから、私は今度はエレベエタアへは乘らずに、この大きな建物のぎくしやくと折れ曲る鐵の階段を、灯が暗かつたからのろい足どりで一段一段と下りた。

私はもう涙が出さうには悲しくなかつた。しかし舞踏場のあるその建物から出て來た時には、冷たい妙に理に落ちた心になつて私は異邦人のやうなさびしさを感じた。……先づ假りに――と私は石甃の上をコツコツと歩きながら考へた

――先づ假りに私が今十七の少年であるとして（！）さうしてその私が十四になる少女と踊つてゐるとする。且つ、私たちが戀に墜ちても周圍の人々は嬉びこそすれ何の不服もないやうな事情だとする。さういふ風にしてふたりは生涯をともにして白髮の人になるとする。さうして私たちの一人が物心ついて以來の自分の思ひ出を端しなく手繰つて見る時にはいつもそこに、影の形に副ふように必ず自分の妻なり夫なりの生活もそれに纏つて考へ出される、さうしてそれ以外のどんな人物も決して思ひ浮ぶことがなかつたとしたならば、それこそ二人の人間が全く一つの生涯をしたといふことになるであらう。トルストイも結婚に就て確にそんなことを言つたやうに私は思ふが、私はそれが道徳的で最もいいことだらうかどうかは全く知らない。がただもしさういふ人生を私が持つてゐたとしたならば、私は何と樂しく幸福なことであらう。ところで（！）實際の私である。……實際の私がどんなふうにして空しく――いや決して空しくではない無殘に、自分の青春を斬り刻んで來たことか。どんなふうにして私が二十九の今日にしてあまりに早くも人生の落寞を知つたかといふことを、私はここでさう手輕るには言へさうにもない。言ひたくもない。私は自ら求め好んでボヘミアンライフを樂しんでゐるかの如くに、私の外側だけを見た人は思つてゐるであらう。さうして私をどう見ようともそれは人々の勝手で、一たい他人に正しい了解を要求するのはそもそも求める方の間違ひで、私はもう今はだれにも何も求めようとは思つてゐないのであるが、さて苦しいのは私自身で感ずる自分である。――私はもう早くも人生の落寞などといふ私の年齡では何のやうもないことを知つてしまつた。さうして私はボヘミアンどころではない、この人生で求めるところのものはいかなる外のものでもなくて、ただ偏に「市民の幸福」である。さてその第一のものは良き妻である。私も曾ては良き詩の一句の爲めなら人生の幸福などは悪魔にくれてやつてもいいと思つたこともないではない。しかし良き詩は不幸な生涯につける藥であつて、幸福な生涯さへあれば詩などはもともと不用な筈であつた。私は今ま

であまり詩を愛しすぎてその代りに人生をおろそかにした。——このために私は人生そのものから罰せられたやうな氣もする……コツコツと石甃の上をひとりで首を垂れて歩きながら、私の考へはしどろもどろに亂れて來たが、私はその考へはその考へとして、別にもう一つさつきからの緒口をたどりながら……私は今、二十九であるが、——とさう自分の年齢をはつきりと意識して考へつづけた——この私がこれから後に、若しほんとうに深く、たとへば私が彼の女にしたごとくほんとうに深く人を思ふやうなことがこの後にあつたとしても、私はもう今までの二十九年間を全く私ひとりに關はつて、私が新らしく持つかも知れないであらう私のその戀人とは私は些の關係もない世界を私は住んで來てしまつてゐるのである。私の人生を假りに人並に五十年とする、私はその稻妻のやうな人生の五分の三をもう過して來た。さて殘りの五分の二は、若し機會と人とさへあるならば私が是非試みて見やうと或る時から心懸けてゐることである一事、ほんとうに深く限りなく人を愛しきつて見ようとする歲月としては、人生の五分の二は何といふ短さであらう。その代りには、若しいつまで經つても今日のやうな心でただひとりして生きなければならない運命で私があつたら、二十年は何と退屈な怖ろしい時間の長いつながりであらう！——さういふ二十年は何と退屈な怖ろしい時間の長いつながりであらう！とさう考へた時に、私には今まで全く思ひもつかなかつたやうな或るアイデアが私の頭のなかに浮んだ。それはカントの實行したやうな時間のきちんとした規則的生活の生涯といふものである。私はそんなものを冷たいものとして考へたことは無論しばしばあつた。しかしそれが或る慰さめのあるものではなからうかと思ひ浮んだのは、實にこの時が最初でさうして全く唐突な機會であつた。——一日の二十四時間を、メートルグラスの目盛りをするやうに正確に區切つて、その區切りのなかに豫め定めたとほりの自分の生活を間違ひなく實行する。昨日のこの時間にしてゐた通りのつづきを今日の今してゐる。さうして明日この時間になればやはり今日のこのことのつづきをしてゐる。さうし

てそれは一週間の後のこの時間も、十年後のこの時間も、或ひは生きてさへゐるならば二十年後のこの時間もやはり同じ場所で同じ仕事のつづきをつづけてゐる。さうして明日になつて何をしようか、昨日は何をしてゐたらうか、とそんなことを決して思つて見る必要もなしに、ただ或る時間とさへ言へば、必ず私のした事、してゐる事、する事がはつきりと解つてゐる——この單純なしかし嚴格な生活は人がちよつと思つて見た時に考へるであらうやうなそんな冷たいものではなく、孤獨な人間にとつてはきつと或る氣樂な、言はば時間そのものを友人に持つてゐるやうな樂しい生活であるかも知れない。さうしてかういふ考へは全く孤獨を充分に味つた事のない人間には思ひもつかない思想であらう。私はこんなことを考へ初めたのであつたが、さてそれを自分が實行して見ようといふ決心にまではどうやらなれさうにもなかつた……

——私はなほも石甃の上をコツコツと歩きながら、さつきから心のなかで折りさへあれば頭を擡げよう擡げようとしてゐる或る思ひ出を、無理に避けられるだけ避けようと、かうしてなるべく自分とは直接の關係のないやうな純然たる思索の方へ自分の考へをめぐらして行つたのであつたが、それがやつと全く思ひどほりの方向に向つて、規則的生活といふやうな題目になつて仕舞ふことが出來たかと思ふと、私の考へはすつかり行き詰りになつて、すると先刻から頭を擡げようとしてゐた或る思ひ出が、ひよつくりと避けがたい形になつて私の心に浮んで來た。——それは私が、先刻、舞踏場で少年と少女とが相擁して踊つてゐるのを見てゐるうちに私の心のなかへ押しよせて、私の醉つてゐる目に涙を流させようとしたものと全く同じものなのである。——いつか、と言つて私はその日を決して忘れたのではない、その日ごろのことを私は覺えすぎるほど覺えてゐるが、それらの日の或る日に、あの女がそのころ私が人に知られないやうにして住んでゐた或る宿屋へたづねて來てくれて、ふたりはそこで湯のたぎつてゐる火鉢を眞中に置いて、その時その女

は彼の女の幼いころのことをしみじみと話し出した。それは何でもない事で、彼の女が十三四ぐらゐの少女のころにはまるで男の子のやうに亂暴な子供で木のぼりをしたり蝗を追つかけたり蛙を手づかみにしたりしたことい、思ひ出すがままの些細な描寫であつた。私は女がさも幼時をなつかしむやうな氣もちで話るのをぢつと聞きながら、私の心はその女の聲につれて女の言ふとほりの幻を描きながら、――愛を持つて聽けばどんな言葉も詩だから――その二十六の女が十三四であつた時を見るやうに感じられた。さうしてその故もないことが私に彼の女を一さう好きにした。女が語り盡してふと默つた時に、私も默つた。その沈默の瞬間にふたりに、何事をも忘れさつてただ世界に二人きりであつた。彼の女の呼吸を私がしてゐた。さうして私の心の呼吸は彼の女がしてゐたであらう。私はそれを疑はない。その時私は、口に出して言つた――

「あなたがそのとほりの十三四で、私が十七八で、さうして今のやうな心持ちになつてゐて、それを誰もさまたげなかつたらどんなに樂しいでせうね。」

「ええ。」

女は氣のない返事をして、それからその口調には似もつかない熱い吐息をした。私とその女とは女の吐息のために全く今までの心持から、急に一氣に複雜なその當時のふたりの境涯に今更のやうに氣がついて、私は心のなかで自分の心のまわりを見まわした……少年と少女との無心な舞踏が私に、私が曾てあの時あの女に言つた言葉を、切なくも思ひ起させた。私はその自分の言葉を自分で忘れずにゐた……しかし、しかし、その言葉や、その心持を今更らひとりで思ひ出して見てそれがなにになるものか。さうだとも、それはその時間もその心も消えて無くなつたのではない。だが、もう過ぎてしまつた事ぢやないか。ね。ね。――私はかう自分で自分を慰めたり機嫌をとつたりして、さて自分で自分に相

談をするのであつた。――ね。あそこの店には氣に入つたステツキがあつたぜ。今夜はあれを一つ買はうぢやないか――

私は石甃の上をコツコツと見かけは元氣よく歩いた――やはり初夏の銀座の人の出さかる時刻に。



時勢は移る

菊池寛

序幕。　慶應の末年。
第二幕。　明治十七年。
第三幕。　大正十一年。

序幕

人物

杉田源右衛門。　　六十
源之丞。　その子　二十九
おあさ。　その妻　五十一
おゆき。　その娘　十九
山崎東伍。　おゆきの許婚者　二十七
その他重要ならざる二三の人物。

所。　四國の某藩。　徳川家の親藩。

時。　慶應の末年。

第一場

事情と舞臺。官軍が、國境に迫つて居る。一藩は恭順か佐幕かの議論に、沸騰してゐる。今日も、城中で朝廷に恭順を表するか、それとも宗家のために、官軍を引き受けて一戰するかに就て、評定が開かれてゐる。

藩の家老にして、軍奉行を勤める杉田源右衛門の家、七百石の高祿をとれども、頗る質素なる家作り、源右衛門の妻のおあさと娘のおゆき、絲側近く相對して、縫物をしてゐる。

床の間には、鎧櫃が置かれてゐ、長押には長短二本の槍が、掛けられてゐる。

おゆき。(縫物の手を止め)もうお母様、お手許が見えんぢやらう。

おあさ。あゝ行燈を點けて貰はうかのう。

(おゆき立ち上り、納戸より行燈を取り出し、燈心をかき立てゝ點火する)

おあさ。眼の力が弱うなつて、絲をみゝそに通すのに骨が折れる。

おゆき。もう、お休みなさんせ。お母様は、今日本當によくお精が出ました。

おあさ。お前もよく出たのう。——が、かうあせつて、おこしらへを急いでも、今年中に婚禮が出來るかしらん。

おゆき。…………………。

おあさ。こんなに世の中が、騷がしうなつて、土佐の兵隊が何時、押し寄せてくるかも知れん云ふと、此先どんなことがあるかも知れん。萬一戰にでもなると、東伍どのは直ぐ飛び出す云ふて、昨日もあんたに勇んで居られたからの

う。

おゆき。（針を無意識に動かしてゐる）…………………………。

おあさ。觀音寺までは、土佐の兵隊がは入つとると云ふ噂ぢやのう。

おゆき。本當にいくさが、始まるのかしら。

おあさ。お前のお父様などは、どうあつても一いくさせないかん云ふて、昨日も鉈や刀の手入をして、おいでになつた。

おゆき。何うしても、いくさになるのかしら。

おあさ。御家中にも、お父様のやうな一徹者が多いからのう。

おゆき。どうして、戰せないかんのだらう。

おあさ。何うして言ふて、將軍さまと禁裡さまとが、天下爭ひをしておいでになるのぢやもの。

おゆき。お上は、孰ちらへお附きになるのかしら。

おあさ。待從樣は、田安樣からの御養子ぢやけに、御本家の將軍家には、弓を引かれん言ふて、おいでになるのぢやけど、それかて禁裡さまにお手向ひする氣は、毛頭無いのぢや。そうぢやけに、御家中が、二つに意見が分れて、評定がもめるのぢや。

おゆき。こんなとき、兄さんが家に居ると、少しは氣强いのぢやけど。

おあさ。いや、こんなとき、源之丞が居るとどんなことになるか知れん。またお父様と、どんな怖しいいさかいをするかも知れん。

おゆき。あの時、何うして兄さんは、お父様とあんな大喧嘩をしたのかしら。

おあさ。考へてゐることが、丸切り反對ぢやからのう。あのときは、怖しかつたのう。お父樣が、刀を拔いて、源之丞を追ひ廻すのだもの。刀が、鴨居に支へなかつたら、源之丞は何うなつてゐるか知れん。

おゆき。兄さんは、おたつしやかしら。

おあさ。たつしやで、居て吳れゝばいゝと思ふけれど、なにさま氣性の烈しい、向不見ぢやから、何うなつてゐるか分らん。お前のお父樣と兄さんとは、考へてゐることは、南と北とのやうに、反對ぢやけれど、氣性は生き寫しぢやからのう。自分が、かうと思つたことには、生命でも何でも惜しみはせんからのう。

おゆき。天誅組に、お入りになつたと云ふのは、眞丈かしら。

おあさ。天誅組には入つて居たとも云ひ、寺田屋騷動のときに居合はしたとも言ひ、京都で新選組の者に斬られたとも言ふけれども、みんな確かな證據はないのぢや。

おゆき。生きてゐて下されば、どんなに嬉しいか知れはしない。

おあさ。お父樣は、今でも口癖のやうに、あんな不埒者は、何うなつても介意はん云ふておぢやるけれども、心の裡ではやつぱり忘れられんと見えて、時々源之丞のことを思ひ出して居られるやうな御容子ぢや。此頃、時々ぼんやり考へ込んでおいでになる時なぞ、屹度源之丞のことを思ひ出して居られるのぢや。お母樣には、ちやんとそれが分る。

（二人しばらく言葉なし）

おゆき。お歸りが遲いのう。

おあさ。御評定が、もめてゐるのぢやらう。今日で、戰をするかせぬかゞ定まるのぢやけに。

（母子再び言葉なし。夕闇が、だん／＼家の周圍を閉す。行燈の灯が、漸く明るくなる。ふと庭の植込に、人の影がう

ごく。(源之丞である)

源之丞。母上！　母上！

(最初は聞えない)

源之丞。母上！　母上！

(娘のおゆき、先に氣が付く。駭いて、母の袖を引いて、耳打する)

おあさ。(駭きながら氣丈に)誰ぢや。何者ぢや！

源之丞。(周圍を見廻しながら、急に現はれて、緣側に手をつく)母上　源之丞で御座る。

おあさ。(驚駭して)まあ！源之丞。

おゆき。おゝ兄さん！

おあさ。まあ、お前よく歸つて來たのう。よく無事で居て吳れたのう。妾は、お前のことを、どんなに心配したか知れやせん。まあ　無事で何よりぢや。

源之丞。母上にも、おたつしやで何よりぢや。おゆきも、たつしやで結構ぢやのう。して、お父上は。

おあさ。(急に眉をひそめて)まだ、お出先からお歸りにならぬ。

源之丞。それでは、しばらく茲に居てお話しいたしませう。お父上が、お歸りになる氣勢がしたら、直ぐ立ち去りませう。

おあさ。お前の身の上を、どれほど案じたか分りやせぬぞ。お父上には、内緒でも、せめて手紙の一つもことづけて吳ればよいものを。家出してから、何の音沙汰もないのぢやからのう。

源之丞。お申譯ムりませぬ。私も母上のこと、又妹のこと思ひ出さぬでもムいませぬが、何さま忙しうて、去年の秋は江戸に下り、夏から秋にかけては、長州から九州へ渡つて居りましたから。

おあさ。して、今度歸つたのは、お父さまにお詫びをして、此家を繼いで呉れるためかい。

源之丞。（苦笑して）源之丞には、家のことなどは、念頭には御座りませぬ。大君の御國、みかどの御國のこと丈しか、念頭には御座りませぬ。

おあさ。（源之丞の云ふことが、分らぬ如く）それなら、お前は何しに歸つて來たのぢや、家に落付いて、私達を欣ばして呉れるためではなかつたのか。

源之丞。いゝえ、さうでは御座りませぬ。家に落着く、それは此の日本國中が、落着いてから、歸つて參つても遲うは御座いませぬ。どうぞ、今しばらくの間、源之丞におひまを下さいませ。

おあさ。（あきらめて）して、お前は何處に在宿ぢや。

源之丞。向ひ地からの漁船に乘り、先刻西濱に着いたばかりで御座ります。

おあさ。家に落着くためではなうて、何の用に歸つて來たのぢや。

源之丞。精しくは、申し上げられませぬ。が、無益の軍(いくさ)を止め、家中一統に、間違つた道に、踏み込まさないやうにと、歸つて參りました。父上は、今日いづれにおいでになりました?。

おあさ。お城へ上つて居られるのぢや。

源之丞。さやう、それでは先刻西濱の漁師ともが、申してゐたことは、本當で御座りまするな。城中で大評定があると云ふ筈よ。

おあさ。何でも、その様な容子ぢや。

源之丞。して、一藩の氣勢はいかゞで御座りまするか。禁裡さまへ、お味方しますか、それとも御宗家たる將軍家へ。

おあさ。妾達には、そんなことは何にも分りませぬ。が、お前のお父様は、御宗家たる公方様へ弓を引く不忠者めがと、口癖のやうに云つて居られる。

源之丞。（失望して）さ様で御座りまするか、お父様はまだそんなことを云つて居られますか。

おあさ。源之丞！　お前、また！　お父様と、云ひ争ひをしに、歸つて來たのぢやなからうのう。

源之丞。…………………………。

おあさ。お父さまは、お前のことを、口に出しては、何にも云はれんけど、心の裡では隨分案じて居れるのぢやぞ。あの意地張の強いお父様ぢやけに、初の裡は私達が、お前の噂をすると、噂をする云ふて、一寸でも口に出すと、聲を立てゝ怒つて居れたが、今では私達がヒソ〳〵とお前の噂をすると何となく御機嫌が、いゝらしいのぢや。九月十一日はゝお前のお誕生ぢやらう。今年も、その日の朝になつて、今日は源之丞の誕生日ぢや、何處に居てゞもいゝから、無事に居て呉れゝばいゝと、妾が心の裡で祈つてゐると、朝お目覺めになつたお父さまが「赤飯が喰ひたくなつた」と、かう仰つしやるぢやないか。（おあさ、かすかに泣く。おゆきも、それに連れて、すゝり泣きの聲を洩す）お父さまのお心の裡を察して、早くお父さまにお詫びをして、家へ歸つておくれ。お母さんには、勤王とか佐幕とか、そんな難しい議論よりも、親子が揃ふて、樂しく暮すのが、一番幸福に思ふのぢや。それが、一番いゝことのやうに思ふのぢや。

源之丞。私もさう思ひます。そんな時代にしたいのです。親子が滿足して、幸福に暮せるやうな時代にしたいのです。

が、世の中に間違があると云ふことが解ると、それを默つては見てゐられないのです。間違つた者が、天下の權を握にして、正しい者が虐げられてゐると云ふことが分ると、私はそれを默つて見てゐること　出來ないのです。世の中に間違があると云ふことを知りながら、默つて見て居ると云ふことは卑怯な……………あゝこんなことは申上げるのではなかつた。あゝお母樣、私は五日の裡に、京へ引返さなきやいかないのです。が、只今はどうも、空腹で堪へられません。どうも空腹で…………か喰べるものをいたゞきたいのです。

おあさ。さうだらう。忍んで、來たのぢやからのう。おゆき、お前は臺所へ行つて、そつとおむすびを　さへて、持つておいで。召使どもには、悟られぬやうにのう。

おゆき。はい、畏りました。

おあさ。お父樣は、お前が出奔すると、大變お怒りになつて、直ぐお前の勘當届をお出しになつたのを知つてゐるか。

源之丞。知つて居ます。が、そんなことは何でもありません。

仲間の聲。(遙かに)お歸りで御座います。

おあさ。あゝお歸りぢや。お前は、その邊にかくれて、おいで。いや、あの離れの四疊半へ、あすこは〆切りになつて、誰も行かないけに。直ぐ後から、食事を持たしてやるけに。

源之丞。承知しました。

(源之丞微笑を洩しながら、奥へかくれる)

(源右衛門、背高き老人、身體はやゝ衰へたれども、元氣は一杯で、麻の上下を付け、右の手に刀を下げながら、は入つて來る)

おあさ。(縫物をしまつて挨拶する)用事にまぎれて、お出迎へがおそなはりました。お歸り遊ばしませ。

源右衛門。(やゝいら／＼しげに)早う。着換を持つて來い。

(いら／＼しく、上下をかなぐり捨てる、烈しい音をさせながら、刀架に刀を置く)

(おゆき着換を持つて來る)

源右衛門。(着物を換へながら)女中共を山崎へ遣はして東伍を呼んで參れ。

おあさ。何ぞ、火急な用で御座りまするか。

源右衛門。うん、急用ぢや。お前達には、先に申して置くが、東伍とおゆきとの縁談は、破談にいたしたぞ。

おあさ。(駭いて)えゝつ！

おゆき。(聲は出さざれども驚駭甚し)…………。

おあさ。それは、またどう云ふ譯で御座りますか。

源右衛門。(妻には答へず)おい誰か居らんか。誰か居らんのか。

女中。(出て來る)はい。

源右衛門。山崎へ參つて、ちと火急な用事があるほどに、東伍どのに直ぐ見えるやうに云へ。

女中。はい。(去る)。

おあさ。東伍殿を呼び付けて、何うなさるので御座いますか。

源右衛門。破談を申し渡すのぢや。

おあさ。東伍殿が、何ぞお氣に觸るやうなことをいたしましたか。

源右衛門。不所存者だから、緣を切てやるのぢや。今日城中の御評定で、御親藩たる御緣つゞきに依て、此度はお家の御運をかけ、山內京極の兵を引受けて、一戰いたすやう、申上げたに。何事ぞ、東伍を初、家中の若武士が百餘名連判の上で、官軍への恭順を申上げてゐる。何と云ふ卑怯者どもぢや。命の惜しい卑怯者どもぢや。祖先以來、お手厚い祿をいただいた者が、命を捨てるのは、かう云つた時の御奉公より、外にはないではないか。戰ときけば、第一に走せ向ふべき若武士どもが、何と云ふ不埒な、不忠な、卑怯な、えゝ思ひ出す丈でも、苦々しい奴ぢや。

(源之丞。ひそかに植込の中にて、聽いてゐる)

おあさ。それで、御評定は何うなりました。

源右衛門。みんな、どいつも此奴も、臆病風に腸を吹かれて、首鼠兩端を持し、一身一家の安穩ばかりを思つて居る腰拔ばかりぢやから、俺と矢野主馬と、二人で大義名分を說いて、到頭一戰に及ぶことに、藩論が定まつたのぢや。

(植込の中の源之丞、駭いて身を進める)

おあさ。それでは、いよ〳〵戰爭で御座りまするか。

源右衛門。お前達、ちやんと覺悟をして置かな、ならんぞ。何時なんどき籠城になるかも知れん。

おゆき。戰爭になりましたら、味方が勝になりませうかしら。

源右衛門。心配するな。今御當家が、將軍家のために、旗を擧げると、紀州が動き、藝州が動き、姫路の酒井侯が動く。(ふと、其處に源之丞が、置忘れてあつた扇子に目を付ける。)何ぢや。見なれぬ扇子ぢやのう。(開いて見る)うん見事な筆蹟ぢやな。なに、

聞說中原虎狼橫。執先慷慨唱勤王。

腰間頻斫櫻花雲。欲向東天吐彩光。

なに、南海の志士、杉田源之丞の鴫に依つて、薩藩小松帶刀。（源右衛門、鋭　妻及娘を見る）おあさ、此の扇子の持主は誰ぢや。誰ぢや、申して見い、此の扇子の持主は、誰ぢや。

おあさ。（色を失つて言葉なし）…………………。

源右衛門。持主は誰ぢや。申して見い！。

おあさ。……………………。

源右衛門。なに申さぬ。そちは、勘當した源之丞を引き入れたな。俺に、ひそかに引き入れたな。

おあさ。申譯ムりませぬ。

源右衛門。して、源之丞は何處に居る。何處へかくした。

おあさ。お探しになつてどうなさります。

源右衛門。改心いたせば、勘當を許して、今度の戰の先手にしてやる。改心いたさぬとあらば、叩き斬つて、軍陣の血祭にしてやる。何處ぢや、何處に隱したのぢや。申せ、申せ。

おあさ。それは、申し上げられませぬ。

源右衛門。なに云はぬ！（手を延して、妻の髮に手をかけんとす）

源之丞。（植込より氣輕に飛び出す）。父上、母上をおいぢめになつてはいけません。

源右衛門。うん、源之丞だな。（態の裡に、一味のなつかしさを藏してゐる）

源之丞。おゝ、しう御座ります。

源右衛門。まだ殺されては居なかつたのか。果報な奴め！

源之丞。なか〳〵。さう手輕には、殺されませぬ。

源右衛門。馬鹿者め！何しに立ち歸つた。

源之丞。京都で承りましたところ、當藩の君臣達、進退に迷つてゐると聽きましたから、一大事と思ひましたので、取るものも、取敢ず、歸國いたしました。一藩の歸嚮を誤らぬやう、家中に遊說いたし、當松平家の社稷を全うしたいと思ふてゐます。

源右衛門。進退に迷つてゐるなどゝ、たはけたことを申すな。藩論は今日の御評定で、しかと決定したぞ。

源之丞。それは結構で御座りまするな。して如何樣に。

源右衛門。如何樣に定まつたもない！御親藩同樣の御當家が、將軍家に敵對する土佐、京極の手を引き受けて、干戈に及ぶのは、至當の事ぢや。

源之丞。（嘆息して）お父樣には、まだお目がさめませぬな。

源右衛門。（怒つて）なに、目が醒めぬ。親に向つて、不埒なことを申す奴。（刀架の刀に、手がかゝる）直れ、それへ。

源之丞。いゝえ、直りませぬ。源之丞の命は、まだ外に使ひ道が御座りますからな。

源右衛門。なにを！

源之丞。さう、お怒りなされず、氣を靜めてお聽きなされえ。お父上は、失禮ながら、かやうな田舍に御座るゆゑ、まだ日本國中の形勢は、お判りになつて居らぬのぢや。勤王討幕の聲は、潮のやうに、天下に充ち滿ちて居りまするぞ。此の潮に逆らうのは昇る日の光を妨るほどの、愚かなことだと云ふことが、お判りにはなりませぬか。

源右衛門。なにを申す。勤王など〻と申すことは、薩長の奴等が將軍家を倒して、我自ら天下の權を握らうとするための口實ぢや、術數ぢや。その口實に迷ふて、將軍家に弓を引くと云ふやうな、愚かなことがあるものか。彼等の口車に乘つて、將軍家を倒して見い。その後に現はれるものは、決して王政の復古ではないぞ。必ず毛利か島津かの天下ぢや。建武の中興を見ても直ぐ判ることぢや。かやうな口車に乘つて、親藩然の御當家の家來たる貴樣が、將軍家に手向ふなどは、敵の甘言に乘つて、味方の大將の首を狙ふのと同然ぢや。これほど、明かな道理が、貴樣に分らないのか。

源之丞。（冷かに）さやうな事を申す人達に、幾人も逢ひました。勤王攘夷は、薩長が、幕府を倒し天下を私するための口實ぢやと。薩長の中にも、左樣なことを考へて居る者がないとは申しませぬ。が、そんな人達は、自分達が策略のつもりで、點けた火が、自分達では、何うすることも出來ないほど、大きくなつて居るのを知らない愚かな人々で御座りまする。勤王は、もはや時の勢で御座りまするぞ。勤王の勢に逆ふ者は、その下敷になつて、踏み碎かれてしまふ外はありますまい。三百年の太平を誇つた幕府が、此の言葉に依つて、グラ〳〵と搖ぎ出したのが、お父樣のお目に入りませぬか。再度の長州征伐をどう御覽になりました。幕府の衰亡の姿と、禁裡のお勢のすさまじいこと〻が、お父さまのお目には見ませぬか。幕府が倒れ、天子の御世になるしるしが、到る處にあり〳〵と見えてゐます。かやうなときに、まだ御宗家が大事ぢやの、勤王は口實など〻仰せあつて、順逆の道をお誤りになることは、お父さま父の御損では御座りませぬぞ。さうした議論こそ、當松平家を亡すばかりでなく、世の勢を逆に押して無用な血を流す間違つた議論で御座りまするぞ。土佐の兵を引き受けて、一戰なさらうなど〻は片腹痛い仰せぢや。今年の春、山内侯が上海へ人を遣し、舶來の元込銃を千二百挺ばかりお買ひ求めになつたことを、御存じありませぬか。精鋭な元込銃

の前に、鉛と刀との武士どもを並べるのは、弓の上手の前に尺二の的を並べるやうなものぢや。ハヽヽヽヽ、これほどのことをお父上には……

源右衛門。おのれ！父を輕んじ、御家を思はぬ不忠者め！不孝者め！

（刀架の刀を引寄せる、源之丞、少しも怖れず）

源之丞。かやうな時勢が、お判りになりませぬかな。時勢の移つて行くさまが、お目には見えませぬかな。新しい時勢の潮に乘つて當松平家のお家を安泰にすると共に、一家の經綸を天下に行ふことが、我々志あるものゝ、取るべき道では御座りませぬか。

源右衛門。（源之丞に捕られたる利腕を放たんともがきながら）貴樣は一身の出世のために、薩長の徒の尻馬に乘つて、御宗家へ弓を引くのだな。

源之丞。（絶望して）ハヽヽ。お父樣には、これほど明かな名分が。ハヽヽヽ。

源右衛門。父を嘲笑いたすのか、おのれ！

（刀の柄に手をかける）

源之丞。左樣なことをなされても、もはや恐れる源之丞では御座りませぬぞ。三年前の源之丞とは、源之丞が違ひますぞ。

源右衛門。お前は、折角藩論を覆すために來たのだな。

源之丞。御家を亡し、人を殺す、順逆を誤つた戰は、源之丞一命を賭しても止めますぞ。

源右衛門。（激憤して刀を拔く）おのれ！戰の血祭にしてやる。

（源之丞に斬りかゝらうとする。おあさとおゆき、源右衛門に縋り付く。）

源右衛門。放せ！ 放せ！（妻と娘とを引放さんとすれども離れず、意氣やゝ挫む）

おあさ。（夫を漸く制して）源之丞！ 武士の家に生れた其方が、父上のお言葉に背くと云ふことがあるものか。

源之丞。お母さま、それもみなこの御城下に無益な血を流したくないからぢや。負けると定まつた間違つた戰に……。

源右衛門。なにを！

おあさ。源之丞、言葉が過ぎますぞ。

（父子尙烈しく對してゐるときに、仲間があわたゞしく馳け込んで來る）

仲間。矢野さまより、急な書狀が參りました、（書狀を出す）

源右衛門。（妻を介して書狀を受取つて讀む）何に、火急の用あり、卽刻御來宅被下度……。うむ。（仲間に）使の者は歸つたか。

仲間。いや、待つて居ります。

源右衛門。よし、卽刻伺ふと云へ。おあさ、矢野殿へ行つて來るから、忰を一歩たりとも外へ出すな。

おあさ。（肯く）あのう御夕食は。

源右衛門。お城で、御酒をいたゞいたから、まだ空腹ではない。その上に心がせく。

（源右衛門、袴を付け羽織を着る）

源右衛門。源之丞、一足でも當邸を出れば、横目に申付けてひつくゝるぞ。

源之丞。（苦笑して）なに逃げもかくれも致しませぬ。

（おあさ、おゆき源右衛門を送つて去り、直ぐ引返して來る）

おあさ。まあ、いゝ仲裁ぢやつたのう。
源之丞。お母さま、お腹空いてゐます。どうぞ、先刻お願したものを。
おあさ。あゝ、つひうつかり忘れてゐました。あゝおゆき、お前おむすびを持つておいで。
おゆき。はい。(立ち上つて去り、握り飯を持つて歸つて來る)
源之丞。(つゞけさまに三つ四つ喰ひながら)やつぱり家の御飯はおいしいなあ。お母様、家のおいしい味噌漬はありませぬか。
おあさ。まあ、蟲おさへに少し喰べて、おいで。もう、お父様に分つたのぢやから、後でちやんと膳をこさへて上げるから。
源之丞。(ふと憂慮を帶びて)矢野と云ふのは、あの矢野主馬どので御座るのう。(考へ込む)火急の用事! 公用なれば、私宅へ呼ぶ筈はない。今日の評定に就ての火急の用事なら、私宅へ呼ぶ筈はない。お母様今まで、こんなお使が見えたことが御座りまするか。
おあさ。いゝえ。
源之丞。今日は城中で大評定があつた日ぢやのう。お父さま達が、强硬に開戰を說へたので、家中が不承無承承諾した。あやしいな、こいつは。
おあさ。えゝ何ぢや、何ぞ思ひ當ることがあるのかい。
源之丞。備前池田侯の家老、赤木總右衛門が殺られたのも、城中の評定からの歸りがけぢや。
おあさ。えゝ、何ぢや。

源之丞。お父上さへなければ、門閥派は一たまりもあるまい。お壯佼、若武士どもは、何と申して居りました。

おあさ。何でも、血氣の若武士が、百人も連署して朝廷への恭順を申上げたと云ふので、お父さまは、火のやうに怒つて居られた。東伍どのも、一味したと云つて、エライ御立腹で、おゆきとの緣を切らうと仰しやるのぢや。

女中。(は入つて來る)山崎さまへ入つて參りました。東伍さまは、お留守で御座ります。

おあさ。あゝ御苦勞、それで言傳は傳へて置いたのう。

女中。はい。

源之丞。あゝ東伍にも久しく逢はぬな。彼奴には逢つて話して見たいな。彼奴には、俺の勤王論を、よく吹き込んで置いたからな。……………だが、矢野主馬からの使！

おあさ。お前、その矢野さまのお使が、何うしたと云ふのぢや。

源之丞。(默つてゐる)……………………………。

おあさ。お前、お父さまのお身の上に、何ぞ不吉なことが、あるとでも思ふのかい。

源之丞。矢野殿の屋敷は、內町だな。お濠端を通つて、三番丁を右に。うむ、七本松へ出るな。……………お壯佼、矢野の使は怪しい、合點が行かぬ。まさしく勤王を說へる者の、いつはつての誘ひぢや。

おあさ。えゝつ、それはまことか？

源之丞。私の蟲が知らせる。私の蟲が知らせる。さうに違ない、さうに違ない。

おあさ。えーつ！　そんなら早く。馳け付けて、馳け付けて。

源之丞。お母さま、私にお父さまを救へと、仰つしやるのですか。もし、私がお父さまの子でなかつたら、お父さまを

殺すのは、私かも分らない。時勢に逆つて、時勢を妨ぎるものが、その下に砕かれるのは自然の數ぢや。それを救ふことはない、それを救ふのは、やつぱり時勢に逆ふのぢや。お父さまのやうな考へ方が、お家を亡し、多くの人々をなやませるのぢや。若武士が、お父さまを狙ふのは正しい。親子でなかつたら、此の源之丞が手にかける。

おあさ。(狂亂して)まあ、何と云ふのだい。父親が九死の場合に。

おゆき。お兄さま、どうぞ。お父様を。

おあさ。さあ! 早く、お前は、槍を持しては、藩中に稀な腕利きぢやけに。

(長押にかけたる手槍を取つて手渡さうとする)

源之丞。お母さま、私は無益な戰を止めて、松平家を救ひ、無用な血潮を流さないために、わざ〳〵走せ歸つたのです。その私が、戰争を起す發頭人のお父様を…………。親子は親子、大義は大義ぢや。

おあさ。お前、何を云ふのぢや、現在の父、肉親の父親が…………。あゝおゆき、お前は工藤さまへ云つておいで、佐竹さまへも。

おゆき。はい。(馳け出す)

仲間。(色を變へて馳け付けて來る)奥樣大變で御座りまする。

おあさ。何うしたのぢや。何うしたのぢや。

仲間。矢野さまのお屋敷へ行く途中、七本松まで行きましたところ、覆面の者が五六人で旦那様を取り圍みました。

おあさ。あゝ、源之丞!

源之丞。(憤然として立ち上り)なに七本松!

(一散に馳け出す)

おあさ。あゝ源之丞、間に合つて呉れゝばえゝが。

第二場

舞臺。

城下七本松。遙に士族の屋敷が、闇の中に並んでゐる。淋しき原場。源右衛門、手を負ひながら、四人を相手にして斬り結んでゐる。烈しき太刀合せ。

源右衛門。なに奴だ！　名を名乘れ！　名を。

(四人無言のまゝ、烈しく斬り込む)

源右衛門。さては、御高恩を忘れ、御宗家に弓を引かんとする夜賊どもだな！

(四人更に烈しく斬り込み、源右衛門、斬り斃さる。源之丞、まつしぐらに走つて來る。四人狼狽し、二人逃げ二人止る。)

源之丞。父上！　父上！

(答なきに依つて、父の死骸に取り付く)

源之丞。うむ、遲かつたな。

(立ち上りさま逃げんとする若者の一人に斬り付く。大刀先、肩をかすりたるまゝ、そのまゝ逃げ延る。源之丞、憤然として、一人殘りし若者に立ち向ひ、一刀の下に斬り倒す)

源之丞。父の敵、思ひ知れ！

手負ひたる者。なに、源之丞どのか。

源之丞。なに貴様は東伍か。

(駭いて介抱する。深手と見え、力なく倒れんとする)

源之丞。なぜ、貴様父上を斬つた。勤王黨の人々が、父上を斬るのは無理はない。だが貴様が手を下さないでも、いゝではないか。

東伍。(苦しき呼吸にて)ゆるして呉れ。籤だ！ 籤が當つたのだ！云ひ譯をすると卑怯に當るからなあ。

源之丞。さうか、胸中は察しるぞ。だが、手は深いぞ。

東伍。うむ、介錯してくれ。

源之丞。何か、遺言はないか。

東伍。ない。

源之丞。おゆきに何か云つてやれ。

東伍。たゞよろしく云つてくれ。新しい御世に會はないで死ぬのが、殘念ぢや。

源之丞。貴様とは、話したかつたのぢや。大君の世になるのは、もう半年とはかゝらぬぞ。有栖川の宮の錦旗は、この二十日に京都を出るのぢや。俺は、參謀附の一人ぢや。…………(弱る手負をかき起しながら)父上が死ぬ。が、父上の時代も死ぬのぢや。俺達の時代が來るな。東伍、お前を殺したのは、殘念だ。が、死ね！ 欣んで死ね。お前は新しい御世の礎ぢや。俺は、生きてお前と二人分の働きをしてやるぞ。

（この戯曲は、序幕第二幕第三幕の連絡對照に依り、時勢の推移を示さんこと作者が意圖なり、されば序幕のみを離して掲載すること、作者の忍びざる所なれど、約束の小説出來ざりしゆゑ、強いて此の戯曲の序幕のみを出すなり。外遊前に努めて完成を期すべし。完成の節、二幕三幕を合せて再讀を給はらば、作者の欣懐、これに過ぎず）



虎から豹へ

長谷川如是閑

『おいお前さんは、先生ぢやねえか。』

T島へ通ふ渡船の中で、彼れの前に鼻を突き合せて座つてゐた、ペンペラ物の、派手な縞のねんねこを着た、丸つこい老人が、さう云つて彼れの顔を見た。その老人の帽子もかぶらない禿げかゝつた頭の處々に、銀の針でも植えたやうな太い白髪がきら〳〵と輝いてゐた。

先生と呼ばれた彼れは、きつちりと身體についた――といふと好い様だが、お蔭で肩の縫目が口を開いてゐて、背中の所が太鼓の皮のやうに張り切つた、寢恍け色の外套を着て、前の老人を締木にかけて引のばしたほど平らたい、細長い身體をした若い男であつた。

『矢張りさうだよ。おい、相變らずチョー然て恰好かい、それは。』老人は機嫌のいゝ顏でそんなことをいつた。

苦いものでも嚙まされたやうな横縦の皺を、眉から頰にかけて切り込んだやうに深

く刻んでゐた男は、さう云はれて、始めて老人の顔に氣が付いた。

『あゝ虎使ひのおとつさんだつたね。これは失敬した。あゝおとつさんだつたね。』妙に特徴のある顔の持主であつた彼れは、その顔を何處へか置き忘れて來たやうな、當り前の顔になつて、細い身體をのめらして、懐し相な風を見せた。

『何をしてゐなさる、今は?』老人は、『虎使ひのおとつさん』と呼ばれたので、船中の客が、好奇の眼を自分に向けてゐるのに頓着なく、とても虎なんぞ使へ相もない優しい調子でさういつた。

『何をしてゐるつて、相變らずで困るんだ。』

先生は、何處か先生の困つたの見たやうな調子で、顋をしやくつた。

『ハツハツハ。好いなア、まるで人の事見てえだね。でかう見たところ、何處か工場の事務員て樣な工合だね。』

『あんまり事務員て工合でもなからう。乾干しにならないだけの事さ。』

背中がハチ切れ相でも何でも、假りにも洋服を着た男が、何方かといへば沈んだ調子でさういふのが、如何にも眞劍に聽えるので、船の客の中には、私かに笑つたものもあつたが、先生のすぐ隣に座つて煙草を吹かしてゐた着流しの男は

『全く當今はやり切れませんよ。小賣商人は暴利をムサボルか何か知らねえが、わつし等はいくらムサボつても立ち行かねえんですからね、全く乾干しにならないのは見つけもんでさ。何しろ好いものは好過ぎて、惡いものは惡る過ぎるてんだから助りこはありやしませんや。飛んでもない世の中になつたものさね。』と向ふ岸のクレーンにでも話しかけてゐるやうに、そつちの方を見つめながら、そんなことを獨語のやうにしやべつた。

『世間がやかましくなるなア無理はねえね。』老人は、ほんの調子を合はせるやうにさう云つて、『時に先生、全く何かい眞實に相變らずなのかい。そんなことはあるめえ。』

『全く相變らずさ。此頃ば、おとゞさんの厄介になつてゐた頃が戀しくなつた。』先生はぶつきら棒にそんなことを云つて、苦い顏に淋しい笑みを見せた。

先生と虎使ひ――此の奇妙な相手同士と、その意味のわからない問答とは、兩岸の騷がしい世界を逃げて行く船のやうに、悠々と廣い流を渡つてゐる此の船の中の退屈な人達の好奇心をそゝつてゐるらしいが、二人は頓着なく、

『眞實かい先生、一體あれから何をしてゐなすつた。』

先生は、さう老人に聽かれて見ると、何をしてゐたかと自分でも考へて見る必要があつた。先生は數年前に猛烈な腦病にかゝつて、半歳ばかり呆痴のやうになつてゐたが、それから後の世界とその以前の世界とは　薄い幕を張られた彼方と此方とのやうに、彼れの記憶に境界がつけられてゐた。その前のことを考へて見ると、彼れは永い間の焦ら〳〵した漂泊の末に此の虎使ひの老人の弟子になつて、少しの間虎使ひをしてゐたことがあつた。今から思ふと、何んでそんな眞似をする氣になつたのか、氣でも狂つたのではないかと思ふ外はないのであつた。實際また、その後間もなくあの烈しい腦病を患つたことを思ふと、氣が狂つてゐたのかも知れなかつた。けれども、その當時は、人間といふ人間が、皆自分に背ろ向きになつてゐた。その事は今から考へて見ても、判然さうであつたと思はれた。さういふ時に、あの虎だけが自分を相手にしてゐると感じた時には眞實に嬉しかつた。而かも猛烈に咆吼しながら、自分に向つて來る虎と組打ちをして、虎がその大い口を自分の肩に當てゝ厚いズックの肩當てを透して虎の息の溫か味を感じた時の心持は、歡喜といふには餘りに深刻な、痛快といふには餘りに莊重な、たゞ胸の躍る感じであつた。さうしてそれに喝采してゐる多數の人間の前で、彼れは征服者のやうな誇りを感じたのであつた。處がそれを十日ほども續けてゐるうち、彼れは、彼れと虎との戰が、さづい樂隊に囃やし立てられていや〳〵繰返してゐる退屈な遊戯に過ぎないことを感じて、それを多

數人に見せてゐるのが、全く卑怯な奴隷の役目としか思へなかつた。彼れは決して眞面目に虎を相手にしてゐるのではなかつた。虎も彼れを、眞面目に相手にしてゐるのではなかつた。それは彼れが、その前に退屈して喧嘩分れをした學校の先生の生活や、會社員の生活やと少しの變りもない生活であつた。で彼れは、間もなくそれもやめてしまつたが、それでも、少しの間相手にした虎と分れる時の彼れの心持は、前の學校の校長や會社の重役に別れた時の心持のやうに索然たるものではなかつた。殊に彼れと虎との仲介者になつてくれたこの老人と別れる時に 彼れは譯もなく悲しかつた。彼れはその時たつた二個だけしかない彼れの友達――一つは虎の形をし、一つは人間の形をしてゐた――を同時に喪ふやうな氣がしたのであつた。元來喪ふものなどを持つたことは、彼には始めての經驗であつた。で多少變な氣がしたのであつた。

間もなく激烈な腦病に罹つたのであつたが、健全の時には、生きて行くに非常に無駄骨の折れたのに反して、白痴のやうになつてゐた間の彼れは、生まれてから覺えのないほど、抵抗力を感じない、無風帶にゐるやうな生活を味つた。あとから考へると、その間に、何處かで石にでも躓いて轉んで死んでしまはなかつたのが不思議だと思はれた。でなくとも、誰れかゞ自分の頭をガンと喰はして自分を往生させても、問題にも何にもならないのだつたと思はれた。それよりも、その間に、何うして食物が自分の口に入つて來たかを何う考へてもわからなかつた。自分はもとより、その間殊更ら食物を口に持つて行つたやうな覺えはなかつた。それを彼れが人にいつた時に、その人は『生きて行く事を心配したら、虫けらなんぞは生活の不安で皆氣狂ひとなつてゐる筈だ。』そんなことを彼れに云つたのであつたが、それを聽いてゐた傍の一人は、『だから虫けらは皆あんな變な恰好をしてゐるのだよ。』と云つた。彼れは、自分も亦今までは全く虫けらの通りの恰好をしてゐたのだらうと思はない譯に行かなかつた。が病氣の癒つた後の彼れは、そんなことが皆夢を想

ひ出すやうな影の薄い記憶になつてゐた。それは彼れにとつて、何處かへ置き去りにして來た重い荷物であつた。

その後の彼れは、先づ捉ることとの出來た職業が、彼れに食物を與へること――勿論乾干しにならないだけのものだが――に感謝こそしないでも、滿足してゐた。滿足してゐないでも不平ではなかつた。不平でなくはなくとも、仕方がないと思つた。その最後のことは確かであつた。で彼れは前のやうに、自分に來たあたり前の運命を、汚たない海嘯にでも襲はれたやうに逃げ廻ることをしなかつた。さうして目下はT島の或る工場の庶務係――といふと何んな複雜な事務を採るのかと思はれるが、實はカン〳〵の前に座つて 購入の石炭の笊がその上に乘せられる度に現はれる秤目を、見てゐるふりをして勝手なことを考へてゐるのが、その重な仕事なのである。それは無論、何時まで經つても『相變らず』でゐることは當然であつた。少くとも、石炭の笊の大さの一定してゐる限り、現はれる秤目も、十年一日の如く『相變らず』なのである。

でおとつさんから何をしてゐたと聽かれて、考へて見ても、何をしてゐたのか見當がつかなかつた。で一番確かなことを云つた。

『あれから腦を惡くしてね。長い間バカ見たいで居たよ。』

『それは聽いてたつけ。見舞に行かうと思つたつて、所がわからねえだらうぢやないか。……で何かい、今の仕事はあんまり面白くもねえて云ひなさるのかい。』

『面白くないね。』これは自信を以てさういふ事が出來た。彼れは秤目を見ながら何時も考へた。石炭を擔ぐ奴は、秤目を出す奴だからとにかくも何かしてゐるのだ。カン〳〵は秤目が出る奴だから、これも何かしてゐるといへる。出すでもなし、出るでもなし、石炭でもなし、擔ぐ奴でもなし、カン〳〵でも、秤り目でもないのが彼れである。つまりそれ

は、何でもないのが彼れであるといふことないである。面白ろい筈がない『さうかい。……今日はもう歸りだらう。時刻は早いが、上つた所で一杯やりながら、久しぶりで、から何しやうじやねえか。話もあるが、こんな所では何うにもならねえ。』

間もなく船が着くと、老人は先きに立つて、つひ四五間先きのめし屋の暖簾をくゞつた。時間が早いので、店はガランどしてゐたが、奥の薄暗い場所で、魚を作つてゐる亭主が、忙し相な威勢のいゝ聲をかけた。

黒光りに輝つてゐる長い臺の前に座つたのは、彼れには久しぶりだつた。綺麗な刺身の皿が、前に列べられた時に、彼れは酒を呑んだ。根つから呑めない酒も、こんな時に一口舐めると、たまらなくうまいやうな氣がした。一切れ口へ持つて行つた刺身の赤かい冷めたい舌ざわりは何ともいへなかつた。何の問題が、彼れと老人とを此處に持ち來したのか、そんなことはすつかり何處へか行つてしまつて、食慾だけが彼れを引張り廻してゐた。老人が食物にはちつとも手をつけずに酒ばかり飲んでゐるのが、彼れに氣になつた。老人が、猪口を持つて行く度に傾く頭の横に、鮮かに見えてゐる創痕は豹に噛まれた形身であつた。

『先生　仕事がつまらねえ〳〵て云ひなさるが、でもそれをよす氣はねえのだらう。矢張事務は事務なんだらうね。』老人は立てつゞけに飲んだ猪口を漸くそこへ置いて云つた。

『僕も相變らずだが、おとつさんも矢張例の虎使ひかい。』彼れは、自分の仕事を説明せずにそんなことを云つた。

『戯談いつちやいけねえ、此の年になつて、だん袋を着て三公と相棒でもなからうぢやねえか。第一向ふがこんな爺と相棒はご免だつて云わ。』三公とは虎の名であつた。

『さうかい、ぢやもう廢業かい。』

『廢業だ。あの時、君が來てくれたんで、もう年が明けると思つてるとすぐ逃げられてしまつて落膽したぜ。所が君、あの後間もなく三公が身うけをされたつて話さ。何とかいふ金持が買取つて、國の動物園に寄附するつて九州へ送られちやつたのさ。奴さん今は樂隱居だ。』

老人は、その後自分も香具師の群から離れていろ〱の稼業を始めたことを話した。けれどもそれは皆失敗して、結局或る土木の請負師の下で人夫頭で働いて、今は親方株で納つてゐるといふやうなことを云つて、

『いけねえ〱。長い事三公を相手にしてゐて急に人間を相手にすると腹の立つことばかりだ。第一眞實のことをいふ奴は一人も居ねえんだからやり切れねえ。三公は口を利けなかつたから嘘も吐かねえて理窟だが　君も知つてゐる通り可哀相のやうなほど正直者だつた。人間の皮被つてゐる奴に碌なものはねえ。そこへ行くと獸は間違つたつて嘘はねえよ。「俺はお前の友達だよ」此方がさう心から思つてかゝると、向ふはすつかり友達になつて、噛みつけたつて噛みつきやしねへ。「此奴は油斷がならねへ」そんなことを此方が考へてゐると、向うも安心しねえからがぶりと來るんだ。此方せへ嘘がなけア向ふは確かなもんだ。所が人間はさうは行かねへ。此方は友達のつもりでかゝつても、なあに、向ふは隙さへありや取つて喰はう量見だから　氣を好くしてゐたらガブリ〱噛ぢられ通しでゐなきあならねへ。俺はほんとに久しぶりで人間を相手にして烈い目に逢つちやつた。お蔭で折角の虎の子を元も子もなくしてしまつて、すつてんのてんになつて、仕方がねえ、いけ歳を仕つて、シヤベルを擔いで、若い者に敗けねへやうな面をして、おめへ三年てものは汗水流して苦しんぢやつた。けれども其處へ行くと、仕事てへものはありがてへもんさ。人間を相手にすればこそ腹も立つが、石ころや棒杭を相手にしてゐる分にや喧嘩にもならねへてもんだ。今日では、何うかかうかもうそんなことをしねへで濟むんだか、けへつていけねへね。請負師や人足は、石ころや棒杭のつもりぢや扱へねへからね。さうかつ

て、人間のつもりで扱つてゐると石ころだつたりして見當のつかねへに困ら。』

老人は、少しばかり酒が廻ると、昔の通りのおとつさんになつて一流のテツ學で先生を煙に捲くのであつた。さうしてとう〳〵おとつさんの口癖が出た。

『先生はテツ學てえものを心得てゐなさるから、こちとらの云ふことなんぞはセヽラ笑つてゐなさるが、世間學は年寄りの方が上手だからね。生意氣なことをいふやうだが、此方のテツ學もさう馬鹿にしたものぢやねへ。』

それも久しぶりで聽くと、彼れには悪い氣持もしなかつた。でバツを合してゐると、おとつさんは嬉れし相に調子に乘るのであつた。

『ですからさ。失禮だがその通りですよ。早へ話が、先生は洋服を着てゐる。わつしはこんな見つともねへねんね子を着てゐる。今一寸守つ子のを借用に及んだて譯だ。でもその見つともねへわつしの方が、立派な洋服の紳士……まあさ、立派でなくとも洋服は洋服だ……その紳士の先生よりも、懐にはお寶を澤山持つてゐるつて〈話だ。失敬々々。』

そんなことを云つてゐても、老人は中々要領を得た事務家だつた。で先刻の所謂話しなるものを、彼れが忘れてゐたに拘らず、老人は語り出した。

『實は、先生が當分上景氣といふのなら、こんなことはお話にもならねへんだかね。先生何でしたつけね、あん時に、虎はもういやになつたが豹なら入へるつて云つたけね。』

彼れは、確かにさう思つたことを覺えてゐたのであつた。彼れの豹に關する智識は、老人から聽いてゐただけだつた。それによると、豹は虎と違つて、相手に對していつでも初對面なのであつた。豹は平生は喜怒色に現はさずといつたやうで、少しもその氣心が知れない、從つて、此方は少しも油斷が出來ない。いくら馴れたものでも、何かの拍子で噛み

つくことは珍らしくない。今まで豹を長く使つたもので一度もやられなかつたといふものはない。『豹は一寸人間てところがあるぜ。』そんなことを聴いた彼れは、さういふ常に新しい、いつも始めてのやうに緊張した生活の氣持は、ぢきに倦怠に陥りたがる自分の生活を救ふ唯一のものであるやうな氣がした。で老人に賴んで豹使ひの口を求めたが、その當時には見つからなかつたのであつた。

『さうそんなことを言つたつけね。』彼れは思ひ出したまゝにさう云つた。

『言つたつけぢやねへぜ。あんなに人に骨を折らせたぢやねへか。處があん時は駄目だつたが、今度一つその口があるんだが、先生もうやる氣はねへだらうね。』

『今！』彼れは何年前かに、始めて或る友達に虎使ひの口があると聴かされた時よりも、餘程驚いたやうにさう叫んだ。

『今さ。豹の使ひ手を一生懸命に探してゐるのだが、何うもないので困つてゐるのさ。』

老人の話によると、それは彼れの居つた猛獸團が、最近に金主が代つて、大に規模を擴張して、『二十世紀猛獸團』とかいふ名稱で、活動の連續物を生で行かうといふ意氣込みなのだといふのであつた。で外の手は全部揃つたが、たゞ子供の豹二匹を使ひこなすものがないので、老人がその詮索を賴まれたのであつた。修業は老人の指導の下に行ふのだから、技倆はあつても、命に別條のないことは確かだと老人は力んでゐる。尤も生命保險がついてゐるから、自分の命さへ惜しくなければ、遺族の困るやうなことはない、と老人は妙な理窟をいふのであつた。

『今更ら先生に、そんな眞似をしなせへたあ云へねへから、おすゝめはしねへが、先生は、豹は居ねへか豹は居ねへかつて、あつしをせびつた事があるから、話しだけはして置くのさ。尤もやる氣があつたら先方は大助りでさ。』

『出來るか知ら僕に。』彼れはたゞそんなことを云つて見たのであつた。

無論今の彼れは、豹使ひなんて、虎使ひ以上の命がけの仕事に突き入る氣もなければ、そんな必要もなかつた。昔そんなことを躍起となつて考へたのは、全く腦の惡かつた故だとしか解釋されないのであつた。前の虎が歸つて來て、お入りなさいと云つてくれても、もうその檻の中へ入つて行く氣になれさうにもなかつた。

『けれども先生何ですぜ。人間なんか相手にして碌でもねへ仕事をやつてゐるんなら、獸を相手にしてゐた方が、何の位好いか知れやしねへ、あつしだつてもう少し若ければ、こんなことをしてゐるより、虎と組打をして暮らすね。それでご飯がいたゞいて行けれあ、こんな氣樂なことはありやしねえ。命が危ぶねへていふけど、家の中にばかり居たつて、二階から墜ちて死ぬものもあるんだからね。』

『さうだとも』彼れは口を入れた『元來惜しいやうな命を持ち合してもゐないんだからね。その點は頗る簡單だがね。』

彼れはそんなことをいつたが、實をいふと、數年前のやうに、命が惜しいとも惜しくないともてんで問題にしてゐなかつたのと違つて、今は、少くともそれが惜しいか惜しくないかを一考するやうになつてゐるのは事實だつた。でその點も、以前のやうに簡單でも無さ相に思はれた。

『さうでさ、それに、いくら惜んだつて、死ぬ時に助かつたてへ奴は一人もないんだからね。こりあもう甲乙なしに、みんな先が見へてゐやがるんだから怨みつこがなくて好いや。けど先生、あつしは勸めるんじやねへんですぜ。何んたつて、先生は洋服を着た立派な會社員だ。何も今更ら香具師の仲間入りをしなせえなんて、そんな失禮なことを申し上げられた義理ぢやねへからね。その位のことはあつしだつて心得て居ますさ。』

老人の心持もぐらついてゐることは確かだが、彼れの心持も確乎してゐるとは云へなかつた。成る程彼れは、腐つても洋服を着た會社員である。けれども、カン〳〵よりも石炭よりも立派な會社員であるとはいはれない會社員だつた。

それでも會社員であることが、石炭やカン／＼ほど確實ならば、まだしもだが、目下の造船中止問題から、造船所の下受同様の製鐵を專門にしてゐる彼れの會社では、それでなくとも不景氣で實行された冗員淘汰が、これから先きは倘のこと海嘯のやうにやつて來やうとする矢先に、先づ危險を感ずるのは、カン／＼よりも彼れ自身であることは確かであつた。『電信』といふ言葉はあるが、文字通りに電信柱に張られた好景氣時代の、下級事務員募集の廣告を頼りに入つて來た彼れのやうなものは、その廣告ビラが剝れ落ちる頃に、一緒に駄目になるやうに出來上つてゐるのであつた。

さう思ふと此の『洋服の會社員』の腐れかゝつた洋服の方が、會社員よりも壽命が長がさうに思はれた。そんなことを考へた時に、彼れは昔の彼れが羨ましかつた。何故ならば、昔の彼れは、そんなことを考へた時には、彼れの近所に何か面白ろい事件が突發して來るやうな氣がしただけで、殊にそれが近所でなく、彼れ自身の上に起つて來るので、ヨリ近いだけ一層面白ろいやうな氣もしたのであつた。然しもつと好いことは、てんでそんなことが考えられもしなかつたことであつた。さうして起つて見ても、何のこともなかつたのであつた。今まで生きて來られ　のがその證據であつた。

ところが今は全くさうは行かなくなつた。萬一にも『洋服の會社員』の、洋服　方でなく、會社員の方が駄目なつたは時には、その先きには、もう問題はないやうな氣がした。その『ない』は昔の『ない』とは違つて、問題ばかりが無いのではなく、その問題の持主も同時に無くなるのであつた。『晩かれ早かれ無くなるに定まつてゐる』などゝ、いゝ加減晩くまで得をしてゐるおとつさんのいふやうに、さう簡單には考へられなかつた。

そんなことを思ひつくと、會社員は決して豹使ひよりも安全な職業ではなかつた。然し、頭がよくなつて始めて、今の、全くカン／＼以下の職業を得た時に、彼れは命拾ひをしたと思つた。だからそれを剝ぎ取られることは、彼

れに取つて拾つた命の處分問題なのであつた。さうなると、おとつさんの所謂相談も、聞き放しには出來なかつた。豹の方は確かに嚙まれるに定まつてゐるのではないが、會社の方は確かに首になるに定まつてゐるとすると、豹の方が安全率が多かつた。思ひがけないことに立ち到るものだと彼れは考へた。でさう云つた。

『二三前日に、おとつさんのことを思ひ出したが、矢張虫が知らせたんだね。何だか虎使ひ時代が戀しくて堪らなかつた。いつそもう一度やつて見るかな。』

威勢よくさう云つたが、實はちつともその氣になつてゐる譯ではなかつた。論理上、豹の方が會社よりも、彼れの生命に危險のないことは明かになつてゐても、その理窟が、彼れを會社から豹に乘り移らせる力をちつとも持つてゐないのが不思議であつた。

『まあ然しあつしは勸めねへよ。とつくり考へなせへ、今が今て譯でもないから。』

おとつさんはそんなことを繰り返した。

『大將ひどく景氣が好いぢやありませんか。』さういつて誰れかゞ彼れの肩を叩いた。

ふりむくと會社の人夫の一人が、彼れと背中合せに座らうとしてゐるのであつた。

『手當を皆飲んぢやつちや、家へ歸つて奥さんに叱られますぜ』その男は、背しろ向きでそんなことを云つた。

『手當?』彼れは、何の意味とも判斷が付かずに、たゞ鸚鵡返しにさういつた。

『手當をさ。折角貰つたつてヤケ酒になつちやつちや奥さんが助かりますめえ。』

『奥さんもなし、手當もないから安心だ。』彼れはそんなことを云つた。

『ねえことにある　んですか。奥さんは何うだか知らねえが、手當は確かだ。あんたのは六十日分だつてことまで解つ

てゐるんだから。』

『それや何の話だい。』と向ふ側のおとつさんは人足に聲をかけた。

『解雇手當て奴でさ。今日は會社で職工が五十人ばかりと、事務員が十人ほど首になつたんでさ。柴川さんはそのお仲間て譯で、一寸懷工合が好いて勘定なんでさ。』柴川といふのは彼れの名前であつた。

『眞劒の話かい、それは。』おとつさんは、彼れが面喰つて口の利けないうちに、さう云つて人足に尋ねた。

『眞劒の何のつて、私の知つてるのは柴川さんに此島さんきりだけれど、十人やられたのは確かでさ。此島さんに聽いたんだから間違ひなしだ。先生、おめへさんまだ知らねへんだね。』

彼れは、今日は仕事の都合で、早退けをしたので知らずにしまつたのであつた。

『アッハッハ。落語家の噺だね。首を斬られた奴が、驅け出してゐるうち、振り向いたらコロリと落ちたてんだね。アッハッハ。』

『アッハッハ。』彼れも一緒に笑つたけれども可笑しくも何ともなかつた。

『けど先生、笑つちやゐられねへ、これから何うしなさる。』老人は眞赤な顏を鹿爪らしくしてさう云つた。

『もう問題はない。豹だ〳〵。』彼れは興奮して高い聲で怒鳴つた。

何時の間にか、可なり立て込んでゐたお客の赤い顏や青い顏が一切に彼れの方を向いた。『ヒョウだ〳〵。』と聲色を使つてゐるものもあつた。

『まあ、兎に角その手當てえのを貰つて來るんだね。さうしてまあその間ゆつくり思案し給へ。』老人はまだ愼重に構えてゐる。

『手當なんか一文も取れるもんか。小使老爺の高利を貸りたのをまるで拂はなかつたから、今頃は、手當 月給も全部あの爺のとこへ行つてるだらう。それでも足りないかも知れないな。』彼れは實際翌日から何うして好いかわからなかつた。

『何、そんな高利の金なんか、正直に拂ふべら棒はねえが、それにしても此方がお手つぱらひぢや遣り切れねえ。』老人は盃を前に置いて、恭しく兩手を膝の上についで考へ込むやうな風をした。

『だから豹だつて云つてるぢやないか。』

彼れはもう豹が自分の友達になつてしまつたやうな氣がした。彼れは昔の自分を取り戻したやうな氣がして元氣づいた、さうして嬉れしかつた。

明る朝彼れはおとつさんと一緒に、猛獸閣の金主を訪ねて、少しの融通を頼みに行くことになつた。その金主といふのは、山田といふ新しい法學士で此頃辯護士を開業した若い男であつた。山田は、市中の眞中に可なり堂々たる事務所を兼ねた住宅を構えてゐるのであるが、猛獸閣に關係するやうになつてから、山の手い、嘗て彼れが虎使ひの弟子入をしてゐた時に、おとつさんの世話で借りた事のあるパンヤの二階を借りてその關係の事務所にしてゐるといふことであつたので、二人は共處へ出かけたのであつた。

彼れは、おとつさんからそのパンやに出掛けるのだと云ふことを聞いた時に、妙に胸の躍るのを覺えた。彼れは、その後數年間、時々想ひ出される——或は一日でも全く忘れ切つてしまつたことの無かつた——そのパン屋の記憶を今更らしいやうに思ひ浮べることを禁じ得なかつた。

それは、二間間口の小さな眞黒に燻ぶつたパン屋であつた。店といつても、下半分をスリ硝子でした古い硝子戸が立つてゐて、その内は、普通にパン屋と稱せられる店とは全然違つて、店全部が土間で、そこに大きい煉瓦の竈が築かれてゐて、陳列棚のやうなものは一つもなく、その代りに、大きい亞鉛の箱が積み重ねられてゐるのであつた。それは、此パン屋が全く食パン專門で、而かも自分の所で燒いたパンの外は絶對に賣らないのであつた。

それも彼れは面白ろいと思つたが、それよりも彼れに興味を與へたのは、そのパン屋の主人であつた。それは彼れがサンタクロースと綽名した通り、畫にあるサンタクロースそつくりの姿をしてゐるのであつた。髪の毛や髯はあんなに眞白ではなく、やゝぢゞ穢い胡麻鹽だが、その蓬々と生えた恰好と、毛だらけの間から、顏の筋肉が杏のやうな色でふくらんでゐる工合と、クリスマスのお爺さんの少し若いだけであつた。それにあんな風な恰好ではないが、畫家の被るやうな縁なしの帽子を小さくその房々とした髮の毛の眞上にのせて、年中温か相な洋服で、おまけに派手な[illegible]りチョツキで、たゞそれが何れもこれも非常に洗ひ曝されてゐるだけであつた。而して年中洋袴の前[illegible]白い片布で卷いゐた。

不思議のやうなのは、此老人のたつた一人の子供が、彼れの居た頃、漸く高等小學を終つ[illegible]計りの子娘で[illegible]つたことであつた。さうして爺さんの妻君といふのは若い美人だつたといふことは聽いたが、それはその娘の赤坊のうちに沒して、それ切り老人はやもめ暮しをしてゐるのだといふことであつた。

爺さんに、若い頃アメリカの軍艦のコックになつて彼地へ渡つて、年を取[illegible]まで戻つ[illegible]來なかつたといふことであつた。

『其頃は君、アメリカの軍艦で東洋に來てゐるのは、日本の少年をボーイにして乘せてゐたものだよ。殊に顏の美しい

少年が多かつたね。僕はこれでも美少年だつたのでね。ずつと早くからいろんな船に乘つたものだ。今よりその頃の方が日米親善だつたね。』

爺さんはそんなことを云つて、自分の乘つた船の船長や士官の寫眞を澤山に見せたりした。パン燒の腕は、彼地で鍛え上げたといふので、それは亦素敵もなく鼻息の荒いものだつた。

『今日本で出來るパンなんど、チヤリヘスが何うの木村屋が何うのと言つても、わしの所のパンに比べたらお話にならない。三百六十五日、一日だつて燒け加減が違つた、味が違つたなんて事があつたらお目にかゝらない。改良パンの何パンのつていふのは、皆眞個のパンの燒けないものが、ごまかし燒きをしてゐるんだ。中々何うして、粉の質が一寸違つても、火加減が一寸違つても、水加減が一寸違つても、もう眞個のパンは出來ないよ。第一自分の手馴れた竈を離れちやつたら、もう思ふやうなパンは燒けるもんぢやないんだからね。今のパン屋は仕合せだ。眞個のパンを喰はせられたものはないから、饅頭の皮のやうな覡せもの〻パンがパンで候て大手を振つて通つてゐるんだからね。世の中は萬事張り合ひがなくなつちやつたね。眞個のものをこしらへてやると却つて氣に入らないんだからね。世話がなくつて飛んだ好いが、名人てものは天下に不用になつてしまうんだからね。だからだらしもない連中がのさばつてゐるのさ。俺が一人で頑張つて見たつて追ツつかないが、一人だつて、まゐ切り居ないよりは増しだ。誰れが何といつたつて、俺は命のある限りかうやつてゐるよ。』

實際爺さんは、自分の店が段々得意の減つて行くのを、自分の爲めにではなく、天下の爲めに憂ひてゐるといふ工合であつた。廣告もせず店も飾らず、小僧一人に配達車を引かせて、その小僧の能力の屆く限りだけを販賣區域としてゐるので、場末に新しいパン屋の出來る毎に、爺さんの得意は減つて行くのであつたが、爺さんはそんなことには頓着な

く、天下のパンを燒くことだけを自分の天職にして、まるつ切り買手がなくなつても、燒くだけは燒かなければ承知しないのであつた。

彼れは、此の爺さんに興味も持ち、同情もし、手傳つてやりたいのだが、石炭一切れ窯に抛り込むことも嫌ふので、手を出し兼ねて、腹の中で一生懸命に聲援してゐた。さうして小僧の休んだ日には箱車を引いて配達に廻つたこともあつた。而して爺さんが、アメリカの百姓を賭博で敗かす話をさへ、感心して聽いてゐる外はなかつたのである。

けれども、彼れが久しぶりで此のパン屋を尋ねることになつて、胸が躍つたのは、お爺さんの外にそれをさせる原因があつたのであつた。それは、その當時、僅か十四五の小娘であつたおふみと呼んだお爺さんの一人娘であつた。

お爺さんは、商賣ものゝパン燒の外に、家の内のことは、炊事からふき掃除まですべて自分の手でしてゐたのだが、段々年を取ると共に、おふみも大きくなるので、彼女は父の相手として小まめに働くのであつた。朝も暗いうちに起さんと一緒に起きて、もうその頃は一ぱし炊事の方だけを自分でやつてのけるやうになつてゐた。始めは、誰れの炊いた飯を喰つてゐるとも知らなかつた彼れは、それがふうちやんの小さい骨折であつたことを知るやうになつてから、彼れは、生來の朝寢を改めて少しの手傳位はしてやり度いと思つたのであるが、餘り相手が早過ぎるので、滿足にそれが出來るのは偶々のことであつた。その度おふみは、

『先生、今日は何處かへお出かけ。』なんて尋ねたのであつた。けれども何時も何處へも出かけないので、結句それは自分を手傳ふ爲めに早起きをするのだといふことを知つてから、ふうちやんは大人らしい調子で彼れに禮をいつたりした。

『子供の癖に、そんな御禮なんぞ云ふもんぢやない。』

彼れがさういつてやると

「ハイ。ぢや先生此手桶に水を汲んで來て。」

そんな馴れ／＼しいことを言ひ合つたのもほんの僅の間であつたが、おふみの無邪氣な、塵毛一つない美しい心持は、彼の女が何か一言云つても、何か一寸したことをして見せても、その度に、彼れの心の底に深く／＼刻み込まれて行くのであつた。

「先生何うしてあなたは虎に嚙まれないのでせう。」そんなことを彼女はいつた。

「それは嚙まれないと定まつちやゐない。」彼れがさういふと、おふみは心配さうに、

「だから私何時でも心配で／＼しやうがないのよ。毎日先生が出て行く時に、私はもう、今日は嚙まれてお歸りになりやしまいか、今日こそ嚙まれやしまいかつて、お歸りになるまで、それは／＼心配になつてゐるのよ。」

何の底意もなく、たださういふ心持をそのまゝ語つてゐるふうちやんの言葉を聽いてゐるうちに、彼れはこみ上げて來る涙を堪えるのに骨が折れた。何とも返事が出來ないので、カラ咳をして外方を向いてしまうのであつた。

彼れの身の上について、實際そんな心配をしてゐるものは、廣い世界にふうちやんたつた一人なのであつた。興行主には、彼れといふ人間よりも虎といふ動物の方が大切なのであつた。で嚙まれた時でも彼れは決して虎は殺さないといふ約束をしてゐるのであつた。虎を殺すと嚙まれても損害を十分に與れないといふことが契約書にちやんと書いてあるのであつた。彼れが嚙まれた時に、迷惑するのは、彼れ一人切りだつた。でそれを心配する必要を感じてゐるものは彼れ自身の外には無いと、彼れは固く信じてゐたのであつたが、ふうちやんの眞劍になつた心配顔を見せられた時には、今まで張りつめてゐた氣が急に緩んでしまつたやうで、自分の命が無上に大事なもののやうに思はれた。その大事な命

を毎日何度となく危險に陥れてゐる自分が餘りに殘忍なやうに思はれた。

けれども、さういふ彼れの傍で、彼れに同情してゐる唯一人の人間は、何の力もない、弱々しい少女だと思ふと、彼れはまだ〱、自分は一人で戰つてゐるのではないといふやうなたるんだ心持にはなれないと、自分を引締める外はないのであつた。

そう思つても、彼れが弱はらせられたのは、毎日の出がけであつた。つひ振り向くまいとしても、我れ知らず振り向いた時に、門口で彼れを見送つて居るおふみの心配相た眼付とかち合ふことがあつた。すると其の日は、何となく氣遲れがして、少くとも檻に飛び込む時に、何か胸の所に塞へてゐるものがあるやうに感じるのであつた。

彼れはその苦しみから逃れたいと思つても、それには彼れが家を出るのにふうちやんが居ない時を撰む外はなかつた。けれども定刻のある彼れには、それは中々六かしかつた。で或る時彼れはふうちやんにさう云つて見た。

『輕業師でも猛獸師でもね、皆御幣かつぎでね。毎日朝起きた時に、こんなことがあつたとか、家を出る時にこんな事があつたとかいふとその日は大變に氣になつて、それがため却つて危險な目に逢ふものなのだよ、だからふうちやん、私が家を出る時にね……』そこまで云つたが、彼れは何うしてもその先をいふ元氣が出なかつた。そうして何だか心細いやうな悲しいやうな心持になつて、鼻がつまつて口が利けなくなつてしまつた。

『何なの……』ふうちやんはさう云つて少し躊躇してゐたが、思ひ切つたやうに『あの私がお見送りしてゐちやいけないの？』と態とらしく高い聲で云つた。

『ウン。』と彼れは辛らうじて諾いて見せた。

『惡るかつたわね、明日からよしてよ。……でも私知らなかつたものですもの……』と段々言葉尻をかすかにして、ふう

ちかふに俯向いたが、やがて心持赤くなつた顔を斜めに上げて、淋しい微笑を見せた。その時のおふみの姿には、今でもアリ〳〵と彼れの眼の前にちらついてゐる幻であつた。

それは僅か三四ケ月の間の、ほんとうに短い〳〵夢であつたが、それは彼れが、生れてこの方、極暑のやうな焦ら立たしい生活と極寒のやうに冷めたい生活との連續の間に、たつた一度だけソヨと吹いた溫かい春風であつた。彼れは、もう永久に同じ風に吹かれる運命から引離されたと思つてゐた時、今度端しなく彼女の家を訪づれる機會に接したのであつた。

彼れは、省線電車のY停車場を下りて、その家の方へ、おとよさんと一緒に足を運ばせながら、次第に強く息のはづむを覺えた。

もとのまゝの貧相なその店の前に出た時、彼れは、硝子戸のうちの薄暗い所に女らしい影を認めたので、おとつさんのあとから店に入る時に、異樣の不安を感じたのであつた。

『いらつしやい。』

おふみの聲とは似ても似つかない女の聲がしたので、彼れは驚いて其の方を見ると、山出しらしい下女が、二人をお客と間違へて、そんな聲をかけたのであつた。

『パンの御用ぢやないんだよ。二階の旦那がおいでならお目にかゝりてえんだ。』おとつさんはそんなことを云つて階子段の上り口に立つた。

『やあおとつさんか上り給へ。』

二階からそんな聲がしたので、二人は上つて行つた。

二階は壁も新しく、襖なんぞも塗りたてと見えて見違へるやうに奇麗になつてゐた。立派な唐卓が中央に据えてあつて、そこに恰幅の好い男が大きな座布團に、殿樣でも坐つてゐるやうな格好で坐つてゐる。それが猛獸團の金主の法學士辯護士であつた。

彼れは、その男の顏を一目見てすつかり思ひ出したのであつた。山田といふ平凡な姓だつたので、その人とは今まで氣付なかつたが、彼れは此の山田の學生時代に、一二度友人の家で逢つたことがあつたのであつた。その時分はもつと瘠せた華奢な貴公子然たる青年であつたが、今見ると肥り返つて、可なり優しくこけてゐた筈の頰が、息でも吹き込んだやうに膨れてゐた。がそれは泥れもない山田であつた。彼れは、この場ですぐとそれと云ひ出さうかと思つたが、向ふが氣付かないから、そんなことをする必要もないと思つて默つてゐた。それにその頃から高慢な男で、地方の大財產家といふのを鼻にかけて、友人を書生扱ひにしたがつた人間であるから、今の山田の身分で、落魄した彼れを何んなに見下げるか解つたものぢやないと思ふと、知れない方が結局好いと思つた。

山田はその頃から學生の癖に、一寸した邸を構えて、玄關番の書生や女中の二人も使つてゐるやうな生活をしたてゐた。さうして、何處かに妾のやうなものが別にあるといふ噂もあつた。噂ばかりでなく、それらしい女を連れて歩いてゐるのに逢つたといふ友人もあつた。さうしてその女が時々逢つてゐるといふことを觸れ廻してゐる連中もあつた。成績などは無論善い方ではなく、何年か遅れて、制服で學校へ出るのが恰好がよくないので始終背廣で通つてゐた。教室では何處にゐるか滅多に姿を見せたこともないのに、宴會があると屹度中心になつて采配を振つてゐた。

彼れはそんな事を想ひ出してゐたが、山田の方では、自分の友人のうちから豹を使ふ男が現れやうとは豫期してゐる筈がないので、此貧相な新しい使用人を、買物でもするやうな眼付でジロ〳〵見てゐるのであつた。

彼れは、實はおふみのことが氣にかゝつて、今にも其處へ出て來やしないかとそればかり考へてゐた。

おとつゝさんの紹介やら介添やらで、話は殆んど山田と老人とだけで運んで、彼れは汚たない花嫁のやうにたゞ默つて坐つてゐた。で型の如く證書を入れて彼れの捺印を取つて、彼れに渡された前借金まで一先づおとつゝさんが受取つて、札數を數へて彼れに渡した。

おとつゝさんは、これからすぐ彼れを連れて小屋へ行くといふので、二人は直ぐとパン屋を出た。ふうちやんにもサンタクロースのお爺さんにも逢へなかつたので、彼れは氣拔けがしたやうなフラ〳〵した歩みを運んでゐた。

ふうちやんの事、おとつゝさんに聽いて見やうと思つても、中々それが口に出て來なかつた。仕方がないので、必要もないお爺さんのことを聞いて見た。

『爺さん今日は買ひ出しだらう。』おとつゝさんはぶつきら棒にそれだけ云つた。

『ふうちやんも居なかつたね。』彼れは漸くそれを云つたが、胸がドキ〳〵してゐるのを感じた。

『ふうちやんはおめへ、もう夙うから日本橋の山田さんの宅の方へ行つてら。』

おとつゝさんにさう云はれて、彼れは覺えず立ち止つた。さうして何か云はうとしたが、何をいふつもりだか自分にもわからなかつた。

『先生まだ知らずかへ。』おとつゝさんは手輕にそんなことをいつたかと思つたら、憤慨したやうな調子で前のことをいひ出した。

『あの山田は何百萬圓の身代の後繼ぎか知らねえが、隨分冥利の惡い男だぜ。あれで末へ行つて惡くなかつたら、天道様は辭職するが好んだ。』

「山田が何うしたの」彼れは、努めて落ついた調子でさう云つたのだが、それは妙に顫えを帯びたかすれ聲だつた。

「何うしたつておめへ、嫁に貰ふ〳〵つて云つちや娘子を家へ引ずり込んで、散々玩弄にして抛り出してしまうのが病なんだつてよ。いくら金があるか知らねへが、金で勘辨のなることかい。人を馬鹿にしてやがるぢやねえか。だから俺は、金持とヒキ蛙は大嫌れへなんだ。先生、だつて腹が立つぢやねへか、それがふう坊で五六人目だつてへから驚ろかあ。何も知らねへ可愛らしいふう坊を、可哀相に……。まるで山犬見たやうな奴だなア。あの正直のお爺さんがすつかり欺されてしまつて、さういつてやると却つて腹を立てるんだから、氣の毒で目もあてられねへ。」

彼れは急に目が眩んで、往來がすつかり見えなくなつてしまつた。

「……でも私ちつとも知らなかつたのですもの……」さう云つて眩ゆ相に彼れを見たふうちやんの、桃色に染められた顔が、彼れの眼の先きにチラついた。山田のデク〳〵と脂ぎつた顔が、彼れの額に突き當り相に、鼻の先きへ現はれた。その顔がもう一つ、遠くの方でジロ〳〵と彼れを眺めた。眞白な恰好のいゝ足が二本、あり〳〵と宙に現れた。その傍に釣り下つてゐるバケツの水がジヤブ〳〵とその足にかゝつた。昔の山田の頬のこけた顔が、眞白い歯を見せて笑つた。

「公正證書なんぞ出して、山田め空涙を流しやがつて、……」

「馬鹿〳〵しい眞正直なものは、片端からギユて目に遭はされるんだ……」

おとつさんが何かそんなことを云つてゐるのが、混線した電話のやうに時々彼れの耳に入つた。

「これだ。」おとつさんのさういつた大きい聲に、彼れは氣がついて見ると、眼の前に豹の檻があつた。子供と聽いた豹は可なり大い身體をして、背がいやにヒョロ高かつた。おとつさんが鐵の棒を見せると、豹は、牙を出して恐しい顔をして凄しい息を吹きかけた。

彼れは、いきなり外套と上着を一緒にぬぎすてゝ檻に近寄つた。

おとつさんは驚いて、後から追ひかけて彼れを捉えた。

『先生、入る氣かい。飛んでもねえ。十日や廿日手馴してからでなければ入るらしくも出來るもんか。』

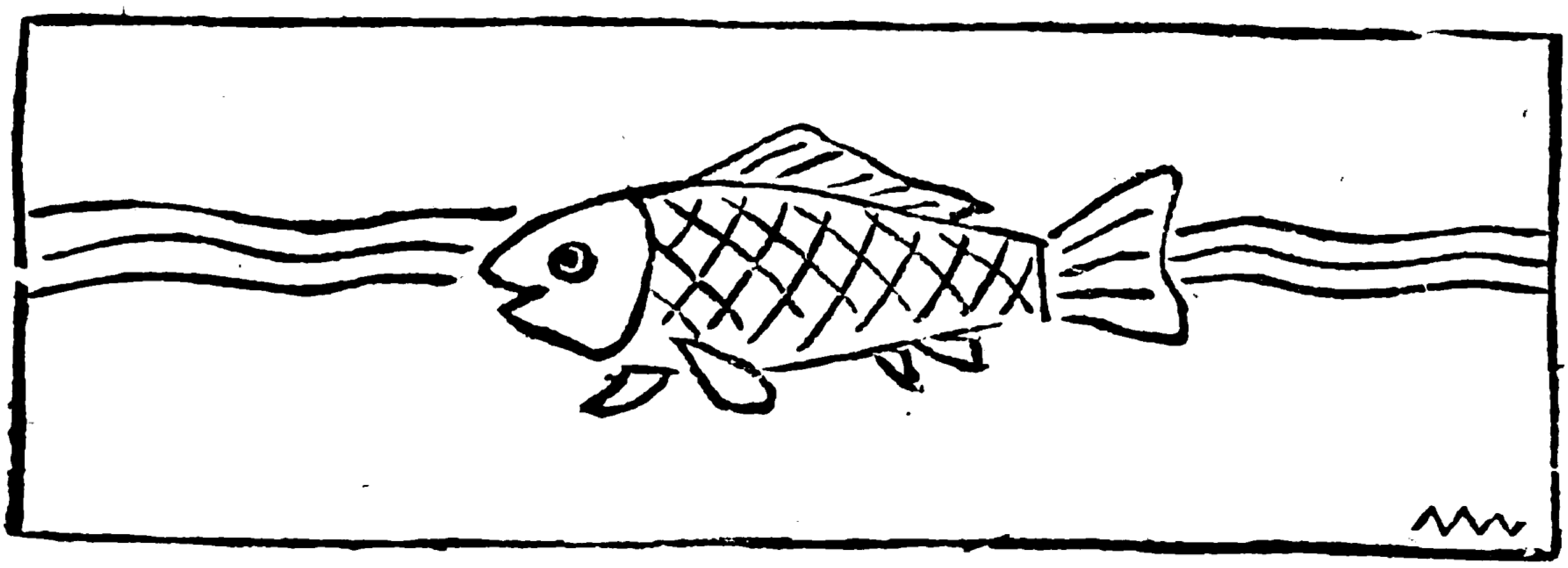
彼れはいきなりおとつさんを突き飛ばして、檻に飛びついて閂に手をかけて、ガチャ〳〵搖すつた。

おとつさんはすぐと身體を立て直して、彼れに飛びついて暴れ狂ふ彼れを羽がひ締めにして檻から引離した。

おとつさんの、松の根つこのやうな腕にしめつけられた彼れは、

「入るんだ〳〵。』と獸音のやうに叫びながら手足を悶がかせた。瀑のやうな涙が、止度なく彼れの頬を流れた。

（をはり）



魚になつた興義

室生犀星

一

僧、興義、硯葢を洗ひながらゐたが、ふと泉郎（あま）の子供らが一疋の魚を提げてゆくのを呼び止め、そしてその魚をわしに與れぬかと、錢一文を與へた。

子供らが去ると、その魚のあぎとから鉤を抜き、しづかに秋澄みを渡らした湖水にひたし、その魚の呼吸を吹きかへすまで、手の平でそつと抱きすくめるやうにして、それの充分な呼吸をためしてから、徐ろに手のひらを水裡から放した。魚は、それきり水の深みに氣疎い泳ぎをつづけてゐたが、間もなく藍いろの水くらがりに沈み込み、その影をおさめて行つた。

僧、興義、寺へ歸へると、明窓のある東の淨机にもたれ、あひもかはらず遊魚の圖ばかり書いてゐた。が、ふと今日湖岸で求めた魚のあぎとに、白い洒（さら）された釣針の痕があつたことを思ひ出した。古い傷あとが痣になり目に沁みのこつてゐた。

「その魚が、の。一度やはり釣針にかけられたことのある魚らしいのぢや。そいぢやに、まだ懲りずに餌針を食ふといふことは、虫けらながら心外ぢや。そして又子供らに釣られたものと見える。」

町からきてゐる丹嶺といふ、美しい子坊をその円窓越しに呼び止め、興義は、やや艱難に悩み心疲れたらしい聲音で、その物がたりをした。

「いいえ、お師僧、湖水の大物魚はたいがい釣針を嚥んで居ります。この間も文四郎の押まへた大鯉なぞは、四本もそれをお腹に持つて居りました。錆び込んだ針と針とが抱き合つてゐたといふことでございます。」

「さうか、文四郎が左う言つて居たのか。」

丹嶺は、子供らしく又眼をみひらき、次の話をした。

「それから槙家の平の助様方では、わづか二寸にしかならぬ鯖が三本まで針をのみこんでゐたのを知らずに召しあがられたさうで、左様、先日、ご参詣のをり左う申し居られました。」

僧、興義は、目たたきしながら、珍らしい話だと首肯いて見せた。

丹嶺は、庭の落葉を掃き、竹箒の音をさらさらさせ、師僧がまた魚の絹をかきはじめたらしい書院の、ひつそりした靜かさをさまたげまいと、箒目を細かくちぢめ、二度掃きをはじめた。

「晩にの、町へ出たら唐紙を忘れてくれまいぞ。」

「畏りました。」

絹　を試め濕めらしたらしい師僧の聲が、まる窓越しに起つた。

興義は、幾帳もある遊魚譜帳をかさねた机にもたれ、又今日湖畔で求めた魚が水の深みにきえて行つた薄暗い底の、

そのこまかい動きを思ひ出した。それが眉のやうに纖く、眼底にのこつてゐた。

かばかりわれのいろくずを慕ふは
われのすぎこし
魚のこころに影し示めしにあらざるか
われのかばかりいろくずにこころ狂ふは。

興義は、古い詩韻をあたまにうかべ、それを解き味ふた。もはや日沒に近かつた。

二

閑暇があると、興義は、小船で地引網から捕れる魚を買ひ込み、水深と靜寂とにどろんとした凪ぎ工合を見込んで、魚を、水裡に放しては、その泳ぎ行くさまを興深くうつとりと見惚れてゐた。ひらつく尾のさきが優しいばかりでなくその姿は、興義の手に移つて、唐紙のうへに寂しい思痕のかげをとどめた。同じい遊魚の圖冊でありながらも、さまざまな數奇な形を異へて描かれ愉しまれてゐたのである。

或日、寺へ歸へると、間もなく發熱を感じ、興義は、床中に悪寒におそはれ、臥なければならなかつた。

「けふは湖水の風がひどう荒かつた。それゆゑ或ひは風邪を引いたのかも知れない。頭が熱い」

興義は、いそいそ立ち働いてくれる弟子坊に、あらたに描きかけた鯉魚圖を欄間にかけさせ、倦るさうに見入りな

から、熱い乾いた口もとをしめすために、冷たい水茶を一杯所望した。

三日經ち、四日經つても、興義は、臥たきりで動けなかつた。なかば眼を閉ぢたり、幾刻も呼吸をつめたりした。

興義は、うつらうつらしながらも、手のひらで魚の肌にさわり、それが水裏に尾ひれをうごかして行くさまや、こころゆくまで湖洋に浮することと、また、温かい舟中の日ざしにぬくとまつて、夢應の間をさまよふこと、それが遊離の夢とつながることとなぞ、つぎから次へと考へ考へしてゐた。枕頭をゆききする魚に、いくたびとなく夢破れたりしたのだつた。

しまひに興義は、かう言つて丹嶺に依賴した。

「此處からわしの見られるやうに、生きたのを泳がして呉れぬか。われは鯉魚が見たい。お前にはよくわしの云ふことが分る筈ぢや。」

丹嶺は、村落に下りて行き、漁師文四郎から、湖水の鯉魚を生かしてある篊閉ひにあつた三尾の鯉を携へかへつた。

丹嶺は、寺門の石段をあがるとき、溌溂する飛沫に、袖口の赤い法衣を幾度も濡らした。

興義は、枕を辷らせ、言ひ附け通りに持ち搬んだ平盥のなかに、くろぐろと平泳ぎしてゐる鯉魚の幾疋かを、病餘の、もの憫げな目つきで打ちながめ、その手を伸べ、魚の肌に指をふれようとしたが、外れて徒らに飛沫が散るばかりだつた。

「冷水ゆゑおからだにさわります。おしづかに。」

さういふ丹嶺をも聞かず、興義は、頑なにつむりを振つて見せ、そのままにさせて呉れといふやうにした。

「いや、だいぢない。」

丹治は、他の衆と一しよに、幾たびも停めたがきかれなかつた。そのくせ興義に、もはや手を伸さうとしても、それのちからが脱け落ち、手は、平盥の竹輪をかすめるに過ぎなかつた。

ただ、魚の水の面で息づくつぶやきだけが、盥の中でおこり、僅かな寺院につたはるだけだつた。日ましにさむくなる、ぬれ椽の日ざしも夕景ちかく、次第にいまはうすらんで見えた。

「お師僧」

丹治がさう言つてさし覗いたとき、興義のつむりは、もう動かなくなつてゐた。閉ぢられた眼は、くぼんだまま、寂然とした或る陰影をふくみ、床側に群れるひとびとの、顔のいろを變えさせた。

使は、四方にゆききした。下寺、末社、檀家家中、總代の人人が集り、潚やかに物言はず座してゐた。そして何事もなく、間もなく水をすらその口もとを濕しても甲斐がなかつた。

一同は、頭を垂れた。僧、興義の臨終は近かつた。凡裡にして、溫雅な興義の人望は、村外になほ餅錢を猟らしくるほど、しめやかで且つ賑やかだつた。

が、最後に納棺するとき、ひとびとは、申し合はせたやうにその溫顔を名殘り惜んだ。が、ふしぎに興義の心臓になほ餘溫があることに氣づき、あはてて布團を厚くし、からだの四方に溫かい火を起したのである。

丹治は、そのとき庭へ出してあつた例の盥の鯉が、あまりにからだが大きすぎてゐるため、くるしさうに仰向きになつてゐるのを、藥餌を煮ながら目にうつした。かれは知らず識らず立つてその鯉のからだを起し、さらに藥餌の火を强めた。

その翌くる夕景、僧、興義は、呼吸をとりもどし、人人の顏をひとわたり眺め、何かに逐ひつめられたやうに恐ろ

しさうな、蒼白い皮膚をうごかした。

「わしは今まで寢つてゐたのか。それとも起きてゐたのか。」

看護人の末座で、丹嶺は、愁はしげな眉をひらきながら、その美しい目を師僧の目のうちで、靜乎としてみひらいた。

そして、すこし坐さり出た。

「いいえ、お師僧、あれにございますものにお氣をつけ下さい。」

興義は、白い、なま新しい材木からなる棺桶を目にいれた。——皆は、默つて同じい視線を師僧と棺桶とにかはるがはる目に移し眺めた。

興義は、そのとき丹嶺を呼び、おどおどした目付で、かう言つて、まだ夢からさめきらない、よく寢起きのひとがする遲いしばしばした目付をした。

「おん身は、平の助を知つてゐる筈ぢや。その平樣へ行つての。」

丹嶺は、師僧の、熱くさい息をかぎ、あまり突然な問ねかたですこし慌てながら返事をした。師僧は、まただるい言葉を續けた。

「いまあの衆は、鯉の膾を食べてゐる筈ぢや。鮮たらしいごりごりした味噌和えを皆の衆との。——。」

興義は、息を切つてまた「それが本統かどうか訊ねてきて呉れ。」

丹嶺は、ふしぎな師僧の言葉をいくども胸裡でひとり考へしながら、慌然として古びて蒼い寺門を東に向いて出た。

三

俯、興義は、丹嶺が出て行つてから、又ぼんやり考へ耽つて、頭のなかにつながる不思議なもろもろな幻像をたどりはじめた。ゆめの上にゆめを築くやうな惑はしい氣持ちは、俯、興義の心の上に、しだいにその影かたちを濃く映し出した。

六日前の午后すぎ、興義は、一人湖岸のへりをぶらぶら歩いてゐた。實際、湖べりを歩いてゐたのか、それとも水中を泳いでゐたのか、しつかり覺えられなかつた。興義は、かるい何處までつづいてゐるか分らない。長く廣い柔らかいものを手繰り手繰りゆくうち、ふと外部の冷たさにかかはらず、からだの熱がいや增さるのを感じた。柔らかいものはかれの兩手によつて靜かに前へ前へと掻き分けられてゐた。

夕暮であるか、それとも月夜であるか、また明るい午后過ぎであるかも判然しなかつた。ただ、興義は、蒼い層と層との間を行き、貝底に耳朶をあてがふやうな不思議な昨晴とした風に似た音を、からだのあとさきに聞き流すだけだつた。

その他は、蒼い透明な色あひが深い廣いつながりを持ち、それが極度の靜寂をふくんで、絶えず伸びちぢみしてゐるのを惚然として眺めた。

「わたしは何時の間に此處へ來てしまつたのか。わたしはわたしの日頃の願望の國へいま來てゐるのだ。さうしてゐたしは此の蒼茫とした魚界を自由に泳ぎ廻つてゐるのぢや。わたしは、とうとう來たのだ。」

興義は、そのとき嬉しさのあまり聲を立てやうとした。それは永い間考へてゐた遊戯のむれに、諧諧のいたくすの世界へ自分がいつ知らず泳ぎたのしんでゐるのを、自分ではつきり眺めたからである。

「だが、自分がへいぜいからこの魚界を志してゐたことを、何者にも知らせてはならない。自分で自分の考へを傾ら

ぬ振りをしなければならない。若しさうしないと自分はこの樂しい魚界から去らなければならなくなるから。」

興義は、かう考へると、何食はぬかほをしながら泳ぎ廻はつてゐた。

が、ときどき泳ぎを止め、これが俺、興義の姿かと、かれはうつすりと影引くうつくしい靑靑した魚體の、しかもぱつちりした快活な下げ尾の立派さと雄雄しさをふりかへり眺めたりした。かれの影は優しげな銀いろを底の沙みに漂はしてゐた。――自分でこれまで書いた遊魚の圖面のことごとくが拙く、そして恥かしい劣作であることを、いまさらのやうに興義は恥ぢた。

興義は、とある美しい砂地から湧く噴き水の冷たい底にからだを臥かしてゐる、一疋の[illegible]さうた魚影をながめた。かつて何處かで見たことのある、白い痣のある寂しげな姿であつた。そのとき、その魚影は、すぐ興義を見つけ出し、懇懃と羞明とにおもてを染め、しづかに近づいた。

「何處へまゐられます。あなたをおわすれすることができません。あなたをおぼえて居ります。」

興義は、ふと魚體のうしろに子供らが騷いでゐたことと、錢一文を投げ打つたことを思ひ出した。

「お前だつたか、餌針にやられぬやうにするとよい。お前はいくどもひどい目に遭つてゐるからの。」

魚影は、はづかしさに後退さつて、言ひ吃りながら

「あなたさまもお氣をつけなさるやうに、このあたりは餌針が多うございますから。」

興義は、微笑つて、そらをながめ尾をふつて見せた。

「わしのことは按じるな。わしには放生の功德もありあやまちはない筈ぢや。」

興義は、魚に別れると、さまざまな針よりほそい姿をしてゐるのや、開くふくれてゐるのや、わけても白魚が一列も

雁行しながら、はげしく小さい尾ひれを顫はせ走つてゆくのが、この上なくやさしく美しかつた。しかもその鮮けた姿は、青みある屑の上にいくつらなりとない影を引き引きしてゐた。

このうち興義は、次第にひもじくなり出した。かれは何かを食らうとしたが、生きた雑魚より外に食ふものがなかつた。

「わしは佛弟子ぢや。殺生をしてはならない。」

かれは、さう考へると空腹をかかへたまま、あちこち泳いでゐた。小さい雑魚は、そのひもじさうな青い目つきをみると、すばやく姿を藻陰れの彼方や、砂の高みのかげにかくしたりした。興義の空腹は、しだいに烈しくなり、何か食はねばならなかつた。ときには、心とはべつべつに突然雑魚を追ひかけやうとしては、ぢつと尾ひれをちぢませ、物陰にひそみながら考へ込んだ。おれは、ああいふ生きものをあやめてはならない。この一事だけは護らねばならない。興義に、目まひのしさうな空つぽなからだの奥のちからが脱け、ふらふらして、ぼんやり蒼い水中をながめ込んでゐた。

そのとき水の上から細いひとすぢの影が、まるで音もなくもぐり込み、そのさきに、美しい餌が芳はしい色と匂ひとを漂はせ、突然に水底ちかくでとどまり、森として餌を垂れてゐた。興義は、その餌をながめてゐるうち、ひとりでに微笑をもらした。それは紛ふかたもない、見覚えのある漁師文四郎の餌針であつたからである。――興義は、水の底から見あげると、うつすりと文四郎の老軀が踞み込んで、釣糸を心でさぐりながらゐる有様が、のびちぢみする小波のまにまに浮んで見えた。

興義は、もう一刻もたまらなかつた。人間界の自らが魚類の餌に飛びつくといふことからして、興義の心を暗く鬱々

させた。どうしてもあれだけには觸れまいと、泳ぎ離れたまま凝然と見つめてゐた。文四郎の得物をも能く貫つてやつたことがあつた。それだのに自分はそれを今狙つてゐる。興義に、そのとき初めて自分がかなり卑しいものであることに氣がついた。が、とうてい空腹には勝つことができず知らず識らず行くまいと思つても餌針の方へちかづいて行つた。そしてあやふく、それに觸れやうとした。

「あ、もし……。」

興義は、その聲のする方へふりかへつた。すると、れいの魚が自慢のある自分のあぎとを指さすやうにして見せ、さもしい笑ひをふくんで頭をふつて見せた。

「いや、わしは弄んでゐるだけのことぢや。」

興義は、さういふと蒼惶にあかくなり、餌針からすうゐとはなれて見せた。あれはたあぶなうございます。さう先刻の魚はいふと、反對の方へ泳いで行つた。それを見過ごすと、興義は、しらずしらず又た餌針のほうに近づき、だれもゐないのに、あかくなつて又はなれて見たりした。そして戀しげにその餌針に、はじめは尾をふれて見た。味覺がからだに沁みつき、饑じさはもう怺へることのできないまで、腹をしびれさせた。こんどは頭のさきでこつそり餌をつツついて見た。水の上のかげがすうと動いた。同時に浮標の白い玉のかげが、矢のやうにするどく興義のからだをかすめ、水底に消えた。興義は、その影でからだを斬られたやうに、その首をすぼめた。

「いや、わしはちよいと弄んで見ただけぢや。」

かれは誰にいふともなくひとり言をすると、しまひに夢中になつて釣糸にからだをこすり、餌をつツつき、物ぐるはしいまでになつてゐた。もう何も見えないやうな氣がした。そのときはつと氣がつくと餌針はいつの間にか、あぎとに

衝き立つてゐた。しまつたと思ふ間もなく、ぐいとちから強く手繰られた。あぎとが裂れた。あたりは恐ろしく靜まりきつて、ふしぎに水面にではなく、はんたいに水底へ引き入れられるやうな眩まひが、あたまの心から尾ひれの尖端まで顫へながらするどく走つた。興義は、しかたなく多くの魚のそれのやうにだらりと尾を垂れ、口を開けたまま、高く高く釣り上げられた。

四

船の上には、紛ふかたもなく漁師文四郎が乘り込み、興義の、からだの眞中をつかんだ。そしてだの手で、上あごと下あごを押しあけ、糸を手繰つて鐵針の曲がりの反對へ、針を腹の底へも一度突き込むやうにして、ぐい、と外した。興義は、からだぢうを絞られるやうな痛みをかんじた。

「途方もない大きいしろ物だ。」

さう文四郎は、ひとり言をすると、尾籠へ押し込もうとした。興義は、もう耐らなくなつて聲をかけた。

「文四郎。わしぢや。興義をしらぬ筈はない。」

文四郎は、一向聽えさうもなかつた。尾籠に入れてしまふと、それを再び淵水に浸けてをくために、さんぶりと投げ込んで、又、糸を垂れはじめた。いくら呼んでも平常あのくらゐ人のよい文四郎にかかはらず、いつさへ返事をしなかつた。他に釣り上げられた魚はみな押しだまつて大尾籠の底の方にこびりついてゐた。

「あ、もし……。」

興義は、その聲のする方へ向いた。が、魚のかげすらなかつた。あの魚のいふとほりにすればよかつた。さう後悔が

あさましくつのり出した。

その聲は、なま若い丹頂にも似てゐた。自分の身いきはりのことをしてくれる少年の、その聲がまだ耳底にのこつてゐた。なぜ魚などになつたのだらうと考へ、人間返還の途方にいまは全く萎れ悲しんだ。尾籠の底まで暗みがゆき亘るころ、やつと文四郎は、それを提げ、船を芦荻の岸べにもやいだ。

そのときさぶしげな鐘聲が水の上をつたひつたひ、興義の、くらい、宿命づけられた耳底をおとづれたのである。

五

漁師文四郎は、村居してゐる平の助の門口に立ち、よく透る磯鵜聲を立てて、門内に聲をかけた。南椽に落葉を焚いてゐる小者に、南恭に倦いた平の助が、何指か圍しながらゐるのが見えた。興義は、たしなみのよい平の助が、陳如言めいた碧水青峰の一軸を懸けてゐるのを薄暗い尾籠の底からすかすやうにして窺ひ眺めた。

文四郎は、草鞋の湖泥を落すため、二三度躍るやうに足踏みをして、庭のうちへ這入つて行つた。

「鯉汁まで出來申す。南天の間葉くらゐあり申す。」

さう節づけて言ひながら、尾籠から鯉魚の興義を引きずり出さうとした。興義は、聲を出して

「平の助の前へ出すことだけ止めくれさつしやい。」

が、文四郎は、れいによつて一向きこえぬ振りをした。そしてその虹のやうな百鱗を慣れた手つきで、漁夫らしく幾たびも尾の方へ撫でおろしたりした。

「洗ひにするかの。大番では生き作りといふ。しかしこれは何といふ珍らしい大物ぢや。」

平の助は、椽に踞居し、ちよいと指さきで鯉魚の肌にふれてみた。そのとき興義は、生あたたかい指頭をおのが肉塊にかんじた。運座吟のときにする平の助の、耳ほじりながら染筆する手癖を、興義は、なにごころなく思ひ出した。

「なます。味噌和えなます。近江なます。鮒のそろばんなます。なますなますは何んでもしろもの次第ぢや。」

文四郎は、へいぜいの口調で巫山戯けると、平の助もつい貰ひ笑ひをし、文四郎の釣糸加減をいたく賞揚した。

「湖魚もおん身にはかなはぬ。まるで十年鯉ぢや。」

文四郎は、うれしさうに又鯉をなで廻し、尾をハネさせたりした。

「なます刈盤はございますか。こちらさまに。」

「いや、それなら平内がする。あれは上手ぢや。」

平の助は、手を叩いて、弟の平内を呼んだ。平内は、酒を煮るため、庭後の、やや黄色の艶をふくみはじめた柚子を剪るため、木鋏の舌打ちをこころ見てゐた。

「落葉を焚き酒を煮るか、兄じや。」

平の助は、喰手になり居り呉れるかと、弟に、鯉を指さしたづねた。

「文四郎、鯉かの。」

弟は、それに觸れて見、したたか賞めそやし、文四郎の右肩をたたいた。

「何の、鳥刺しと鯉を料理ることは名人ぢや、兄じや、わけのないことぢや、一と庖丁あてやう。」

平の助は、若い元氣な舎弟をほほ笑みながら眺めた。

「ぢや一つ手なみにあやかるかな。その手での。」

平内は、文四郎をかへり見、散岸に、「後學に見てをかぬか。」と訊ねた。

「いえ、平内様、お噂は明日今日といはれぬ大儀に居ります。」

三人は、哄然と一笑した。人の氣もしらずにと興義は、さぶしく揃まなかれらを心憎くながめた。

平内は、俎盤と、出刄とを揃え、出刄は、古紙の上で礪ぎはじめられた。冷たい水にふれた若い平内の手は、眞赤い燃えついてゐるやうだつた。

「では平の助様、おゆるり。」

文四郎は、から尾籠をかつぎ、うら柴折戸へ、この人のくせにする草鞋の音を忍ばせながら出て行つた。興義は、そのうしろ姿を寂しく又淺猿しく眺めた。この様子だと自分はなますにされるに定つてゐる。刄物がちくちく肌に答めて來た。それぱかりではなく尾ひれがはげしく慄へた。

「兄じや、大根はないか。切れ味をためるのぢや。」

平内は、あちこちを四顧した。兄は、垣根へ指さした。

「干したやつを遺れ、かまはぬ。」

柿の樹から斜かひに、垣根にわたされた干大根の綟ひ縄があつた。平内は、そこに近づくと、ひと息にその生白い一本を狙ふた。すつと眞中から二つに切り放たれた。それがくちなし色に、黑土の上につそ笑く音を立てて落ちた。興義は、慄然として刄がしらに走る凄氣に身をすくめた。

兄弟は、顔を見合せ、瞎じげに樂しく微笑ひ合つたのである。

「こんな大物になるとの、兄じや、よく水音が立えてゐると云ふが、この化もののたちのよいこゝはどうぢや。」

平の助は、尾籠から取り出した平内の両手にあまる鯉とその腕とを見くらべ、かるい快活な舌づつみを打ち、桧下駄を引つかけて庭石づたひに立ち出た。

「この生きのよいことは、こちらの手が切れさうだ。」

年若い平内は、爼盤におさへた鯉魚の奥義を、おほ方の鯉魚を料理るそれのならはしに従つて、出刄で一と撫で尾がしらへ亘りをつけた。

そのとき平の助は、料理に就いて面白い話があると言つて

「信長がの、三好を滅ぼしたときに、三好の料理番坪内といふのに、鯉の料理をさせそれが好味ならば助命するといふお觸れを出したのぢや、ところが信長は、坪内のこさへた鯉料理は水くさく拙いと言ひ出し、早や首を刎ねろと言ひ付けた。」

「ところが坪内は今一度といふ所望を願出た。その第二番の料理が幸ひに信長の氣に入つて助命されたさうぢや。が、坪内はさきに出した料理は三好風で第一等の庖丁振りで、あとのは野鄙な薬味とかで作つた悪い料理だつたさうぢや。」

平内は、微笑つてきいてゐたが

「信長には料理の味はわかるまい。」

「だからその坪内は心で、信長を冷笑つたことだらうの。」

奥義は、その挿話をきいてゐたが、平の助のさまざまな物博りに舌を卷いた。

「わしも三好風にやるかの。」

「さうぢや、長柄から左代公方家の、そのご好風の庖丁の味を見せい。」

兄弟は、上機嫌だつた。平内は、出刄をつッ立てた。興義は、恐ろしさと口惜さにびくびくしながら、聲を立てた。

「平の助、わしぢや。わしを思ひ出してくれぬか。」

さういふ悲しげな興義の聲は、二人にとどかなかつた。

平内は、出刄の柄で刄尖きをそらに向け、かんと俎盤でためし、それを突き立てる身がまへをした。興義は、恥かしさも忘れ、聲を立てて泣き叫んだ。

ひやりとしたとき、腮から熱湯をつぎ込まれたやうな氣がし、ざつくり骨まで切り推かれる刄物の音がした。痛みは喉もとからはすかひに身體ぢゆうにひびき亘つた。鯉魚の興義は、身を悶え、藻掻き、汗をしたたか搔いてゐるうち、ふしぎに美しい丹嶺の俤がぼんやり映つて消えた。そのとき興義は、腮から頭をねぢ切られた。が、魚といふものは、切られた頭だけがべつに生きて、こんなわしのやうな考へを考へてゐるものかと、ふしぎな氣がした。

――そのとき僧、興義は六日目の假眠からぼんやり目をさましたのである。

六

「丹嶺はまだ歸へらぬか。」

興義は、平の助へ出した使をいくども待遠しがつた。不安と恐ろしさとから醒めた安堵は、たまたま、水中の世界へかれを逐ひ立てた。そのたびに、興義は、落着かぬ目付をした。

丹嶺はかへつて來た。その顏をみるなり、興義は訊ねた。床から乘り出すやうにしながら――。

「平の助はなますを食べてゐたか。それとも」

興義は、どう答へるであらうかと、紅い丹嶺の鬼灯口を眺めた。

「はい、なますを……。」

唾をのんで、子坊は、師僧のおどおどした目をうかがひながら續けた。

「文四郎釣の大鯉を洗ひ立て、洗ひ剝き身にして――。」

それをさかなに南楼で、賢弟平内さまと、ご酒莚中だとこたへた。

「それをおん身はみたか。」

丹嶺は、その由をつたへた。興義は、にはかに寒さと顫さがつッ張るやうな惑はしい氣になつた。

「ではその膾をすこし貰つてきて吳れぬか。」

丹嶺は、再び平の助から洗ひ膾の殘りを貰ひ受け、持ちかへつたときは、日ぐれに近かつた。

興義は、おづおづ這入つてきた丹嶺を、目に入れると、すぐ頭たかぶり、急き込んで訊ねた。

「なますを頒けくれたかの。」

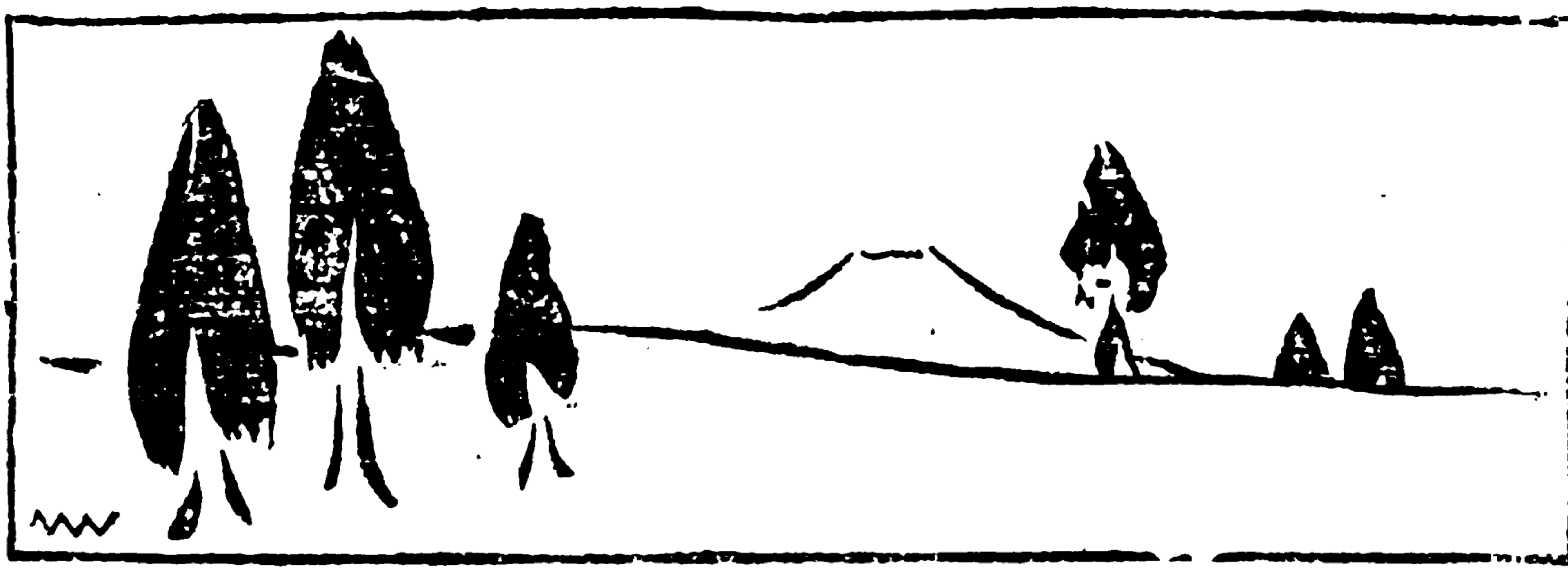
丹嶺は、古伊萬里三重の、色附蓋物のまま、師僧の前におもむろに差し出した。そして、失禮ではあるがいつにない師僧の御所望ゆえ、殘餘の憚りをも知らず差しお贈りするといふ、平の助の言葉を傳へた。

「さうか。蓋を取れい。」

うす桃色の、鮮鋭な、洗ひ身は、こりこりにちぢんで、なまぐさく、寂然と、興義の目前にあつた。ちぢれた皮片がうづき出しさうで、發肉は鮮やかに顫えて見えた。興義は、凝然と身ぶるいを感じた。しかも五年わさびの嚴しい藥味

が、興義の、弱りきつた鼓膜をつんざくやうに、下走つてゐた。

やはり自分ではなかつたか。さう思ふと人間復還の喜悦にこころ昂ぶるほど、うれしかつた。興義は、知らず識らず病熱的に、手を伸べ、あざやかなその魚肉の一片に指をふれようとした。さうして慄然として再び身ぶるひをした。



心ごゝろ

久保田萬太郎

人物。

要太郎。	仙臺屋（味噌問屋）の長男。		三十四五
謙次郎。	同　次男。		二十四五
おたか。	同　隠居。	（登場せず）	五十八九
藤兵衛。	おたかの弟。（森田町の叔父）	（登場せず）	四十五六
善　造。	もと仙臺屋の奉公人。	（登場せず）	四十六七
伊之助。	同		三十七八
おしげ。	仙臺屋に古くゐる女中。		四十二三
おしづ。	謙次郎の愛人	（登場せず）	二十二三
小料理屋「菱梅」の主人。			四十一二
竹本島之助と呼ばるゝ寄席藝人。			二十四五

土州屋の旦那と呼ばるゝ島之助の客。
外に、夜番、「裏梅」の小女など。

その一

仙台屋の裏手。（聖天町附近）

十二月中旬。年の市すぎの曇りたる夜。九時ごろ。

土藏のかげに謙次郎がぼんやり立つてゐる。間。

露次ぐちからおしげが出て來る。

謙次郎。（人の出て來るけはひにそれとなくあるきかゝる。――が、それをおしげと知ると安心したやうに）おしげ。

――おしげ：………

おしげ。（探るやうにそのはうをみて）若旦那…………（あたりに氣を兼ねながら側へ寄る）よつぽどお待ちになりましたか。

謙次郎。なアにそんなでもない。――十分ばかりだ。

おしげ。………（謙次郎の身形に目をつける。）
謙次郎。（それを避けるやうに）どんな工合だ、おふくろは。
おしげ。えゝ。――矢つ張………
謙次郎。いけないか。
おしげ。はつきりなさいません。
謙次郎。この二三日、また、酷く寒いからな。――で、醫者はどういふんだ。
おしげ。心が大へんに疲れておいでだから。――あんまり氣をつかはせないやうに。――先生はそれをおいひになります。
謙次郎。（間）矢つ張お前がすつかりやつてゝ呉れるんだらう。
おしげ。看護婦さんとわたくしとで。
謙次郎。何だ、看護婦が來てゐるのか。
おしげ。………（うなづく）
謙次郎。其奴はよく〳〵だな。
おしげ。それといふのも。――皆あなたのなさり方がお悪いから………
謙次郎。そんな奴があるものか。
おしげ。いゝえ、若旦那。――あなたさへお宅に御辛抱なされば こんなことにはなりません。
謙次郎。またお前は話をそこへ持つて行く。――紋切形だ。

おしげ。でも、それに違ひなければ、あなた………

謙次郎。(強ひて托鉢(たくはつ)に)辛抱するにもしないにも。――そんで俺をうちへ寄せつけないんぢやアないか。

おしげ。それは、あなた………

謙次郎。それも是もあるもんか。――森田町だの方々(ほうぼう)が心配してくれたつて兄貴はロクた返事をしないんぢやアないか。

――それがいゝ證據だ。

おしげ。………(無言)

謙次郎。兄貴がうちにゐる以上。――兄貴 うちのあはない俺の安穏でゐられるはずがないぢやアないか。おふくろだつて考へたがいゝんだ。

おしげ、若旦那。

謙次郎。何だ。

おしげ。それは何をおつしやいますの

謙次郎。………(無言)

おしげ。あなたのお身持(みもち)。――あなたがお宅をお出になるときのいろ〳〵の經緯(いきさつ)。――あなたはわたくしが何にも知らないと思つていらつしやいますい。

謙次郎。………(無言)

おしげ。あとの、御隱居さまの御心配をお考になつたら、あなた。――假(か)りにもそんな………

謙次郎。分つてゐるよ。――いはれなくつたつて分つてゐる。

おしげ。分つておいでになるなら。――世間へ行つて、あんまり、御自分で御自分の箔をお剝しにならないはうが……
……(謙次郎の顔をみる)

謙次郎。…………(無言)

おしげ。それがお詫のお邪魔になりますから…………

謙次郎。よしてくれ。――俺は、何も、お前の説法を聽きに出て來たんぢやない。――それよりお手紙でいつて置いたことを。――その返事さへ聽けばいゝんだ。

おしげ。でも、是は…………

謙次郎。そのうちに、また、それはゆつくり聽くよ。――こんなところにぐづぐづしてゐて、誰にみられてもあんまり恰好のいゝ圖ぢやアない。――早いことにしてくれ。

おしげ。(あきらめる。間。帶の間から紙にくるんだものを出して)では、おつしやつただけ…………(今更のやうに、また、あたりに氣を兼ねるやうにして渡す)

謙次郎。有難う。――いつも無理をいつて濟まない。(うけとつて、そのまゝ、無雜作にふところへ入れる)――使を寄越さうと思つたんだけれど。――いつも使でばかり何するから…………

おしげ。…………(無言)

謙次郎。兄貴は今夜は…………?

おしげ。夕方、お出かけになつて、まだおかへりになりません。

謙次郎。さうか。――(氣をかへて)ぢやア俺は行くぜ。――おふくろにいゝやうにさういつてくれ。

おしげ。よろしう御座います。

謙次郎。それと身體のはうを大切にね――もし模樣が惡いやうだつたら、善公のところまでさういつて寄越してくれ。――善公が俺のゐるところを知つてゐるから。

おしげ。そんなこともないだらうとは思ひますが。――平生あんまり御丈夫なはうでございませんから。

謙次郎。それだ、心配は。

おしげ。…………（無言）

謙次郎。ぢやア、また。――（幾分自分をとりなすやうに）俺のことは案じなくつても大丈夫だよ。――俺だつて少しは考へてゐる。

おしげ。どうぞね、若旦那。――仙臺屋といふお見世の名前も思つて下すつて。――あんまり、我をお張りにならないで…………

謙次郎。…………（うなづく）

おしげ。では、お氣をつけなすつて。

謙次郎。ほんとに濟まなかつたな。

おしげ。何の、あなた。

謙次郎、おしげのそばを離れる。――行きかけて一寸おしげのほうをふり返る。――そのまゝ入る。

おしげ寂しくそのあとをみ送る。

間。

夜番の拍子木の音近づく。――おしげ、露次のなかへ入る。

長き間。

夜番出て來る。――拍子木を叩きながら露次のなかへ入る。――しばらくして、また、出て來る。――上手へ入る。

間。

謙次郎、出て來る。――おしげからうけとつて、たしかにふところへ入れたはずの金のみえなくなつたこゝろでそれとなく、ふところをみたり、袂を探つたりしながら、もとのところまで返つて來る。

間。(拍子木の音遠ざかる)

謙次郎、落ちてゐるけしきもないので 望する。――ぼんやり、何といふこともなく立ち盡す。

間。

誰か來るけはひに促されて、謙次郎、ぼんやりあるきかける。――下手から、要太郎、出て來る。――双方知らずにすれ違ふ。

要太郎。(すれ違つてからふり向く。――謙次郎と知つて)謙次郎ぢやアないか。

謙次郎。(呼ばれてすこしあわてる。――立ちどまる。――そつとふり返つてみる。)…………(無言。――要太郎と知つて。)

間。

要太郎。どうした。

謙次郎。…………（無言）

要太郎。どうした。――俺はお前にあひたいと思つてゐた。

謙次郎。…………（無言）

要太郎。今夜も、お前のことで、實は森田町まで行つて來たのだが…………

謙次郎。…………（無言。――ふと要太郎の顔をみる。――が、すぐにまた眼をふせる。）

要太郎。森田町でも、櫻木町でも、俺の心もちをまるで分つてくれない。――俺がいへばいふほど――何かいへばいふほど話が喰違つてくる。

謙次郎。…………（無言）

要太郎。森田町でも、櫻木町でも――俺がお前を憎んでゞもゐるやうに思つてゐる。――お前を憎くつて俺がうちへ入れないと思つてゐる。――あくまで俺がちがつてゐる…………

謙次郎。でも、あなたは…………

要太郎。…………（口をつぐむ。――謙次郎の顔を見る）

謙次郎。すこしは世間をみるはうが當人のためになる。――森田町の叔父さんのまへで、はつきり、さういつたといふぢアありませんか。

要太郎。（うなづいて）いつたかも知れない。――おそらくいつたらう。――何としてもお前は世間を知らなすぎると俺は思つてゐる。

謙次郎。…………（無言。――うべなはない面もち）

要太郎。かういつたらお前は腹を立てるかも知れないが。――が、お前の知つてゐる世間は――お前のみた世間は茶屋小屋の窓からみた世間だ。――茶屋小屋の窓からみた、寡の知れた世間だ。俺たちのいふほんたうの……

謙次郎（遮ぎるやうに）さうぢやアありません。そんなことをいふんぢやアありません。わたしのいふのは…………

要太郎。…………（無言）

謙次郎。すこしは世間をみるほうが當人のためになる。――この一言から押しても――あたたがわたしを好く思つてゐないことは分ります。

要太郎。よくは思つてゐない。――無論よくは思つてゐない。

謙次郎。…………（無言）

要太郎。お前のしたいろ／＼の仕だら。――ことに、うちを出る前後の、おつ母さんはじめうちのものみんなにお前のかけた心配といふものは並大抵ぢやアない。――お前にしてもそれは分つてゐるだらう。

謙次郎。…………（無言）

要太郎。その仕切をつけるのが大事だ。――お前はどう考へてゐる。

謙次郎。…………（無言）

要太郎。（間）森田町の話にはその見とめがついてゐない。――それが分らないから俺には森田町の話がうけこめない。

謙次郎。…………（無言）

要太郎。俺がお前にあひたいと思つたのはそこだ。――お前にあつて、はつきり、お前の料見を聴きゝたいと思つたのだ。

謙次郎。…………（無言）

要太郎。どう考へてゐる。――どういふつもりでゐる

謙次郎。どうも考へてゐません。

要太郎。…………？（無言）

謙次郎。どういふつもりでもゐません。

要太郎。…………（無言）

謙次郎。わたしは、たゞ、うちへかへることだけを、――それも周圍の人たちの種々心配してくれるのを無下にも出來ないので、それで音無しく、森川町の叔父さんのいふ通りうちへ返ることに――返つてもいゝと思つたゞけなんです。

要太郎。…………（無言）

謙次郎。何もぐづ／＼いはれて。――這ひつくばつてまで返らうとは思ひません。

要太郎。…………（無言）

謙次郎。どつせやくざに持ちくづした身體です。――今から陰氣臭い帳場のなかにつぐなんでも始りません

要太郎。…………（無言）

謙次郎。それも、なくてならない人間なら知らず、うちにはあなたといふ人がゐるんだから…………

要太郎。（強く。――だが、しづかに）謙次郎。

謙次郎（全く反抗の態度で）何です。

要太郎（しづかに）お前はなぜさう要もない意地を張る。

謙次郎。…………（無言）

要太郎。要もない意地を張つて不貞腐れる。――なぜほんとうのお前をみせないのだ。

謙次郎。いゝえ、兄さん……

要太郎。(押へるやうに)俺はお前を知つてゐる。――誰よりもよくお前を知つてゐる、――俺とお前とはきやうだいだ。

謙次郎。……………(無言)

要太郎。なるほど俺は養子でお前は實子だ。――だが、お前のうまれたときにもう俺はうちにゐた。――俺とお前とはいつしよに育つた。――死んだ年寄が決してそれをいはなかつたから、ものごゝろのつくまで、俺は、俺とお前と、ほんたうの、血を分けたきやうだいだとばかり思つてゐた。

謙次郎。……………(無言)

要太郎。養子の、實子のと、おたがひの間をいろ／＼にいひ出したのは世間だ。――義理があるのないのといひ出したのは世間だ。――俺たちの知つたことぢやアない。――底を叩けばお前にしたつてさう思つてゐるに違ひない。

謙次郎。……………(無言)

要太郎。お前はかへりたくなくつても俺はかへつて貰ひたいと思つてゐる。――俺に親身な相談相手といふものゝないことはお前が知つてゐる……………

謙次郎。それほどに思つてくれるあなたが。――あなたのいふことはわたしには分らない。

要太郎。(うなづいて)森田町でもそれを俺に詰つた。――だが、俺は、お前に這ひつくばへとはいはない。――お前が自分でいふやうに這ひつくばつてかへれとは決していはない。

謙次郎。……………(無言)

要太郎。同時に、また、お前のいふほどお前の卑怯がやくざになつてゐるとも俺は思はない。
謙次郎。…………(無言)
要太郎。いまゝでの仕だらをはつきりお前が悪いと思つてくれゝばいゝ。――悪いと思つてその償ひをさへしてくれゝばいゝ。
謙次郎。どうすればいゝんです。――分るやうにいつて下さい。
要太郎。いまゐるうちを出てくれ。
謙次郎。いまゐるうち…………?
要太郎。いまお前が世話になつてゐるうちをだ。――いひかへればいつしよにゐるいまの女とわかれてくれ。
謙次郎。(不意をうたれたやうに)そんな。――そんなことは…………
要太郎。隠さなくつてもいゝ。――俺は善造から聴いてすつかり知つてゐる。
謙次郎。(思はずむら〳〵として)善造がそんなことを…………
要太郎。それがお前の悪いところだ。――聴くやうにして聴いたから善造も話してくれたのだ。――お前が腹を立てることはない。
謙次郎。…………(無言)
要太郎。野暮な、分らない兄貴だと思ふだらうが、あの女がそばにゐてはお前の立つ瀬がなくなる。――何としても先方に悪いものがついてをりますので。――あれほどお前を贔負の、お前のためにならないことゝいつたら塵ほどもいはない善造でさへかういつてゐる。――かういつて心配してゐる。

謙次郎。…………（無言）

要太郎。かういつてもお前には分らないかも知れない。――お前にはあの新堀の母子の氣立のいゝことばかりしかみえてゐないから。――うしろで絲を引いてゐるものゝあるのに氣がつかないから…………

謙次郎。…………（無言。――半ば嘲けるやうに、半ば何か怖れるやうに要太郎の顔をみる）

要太郎。伊之助だ。――俺が去年足を刈つた伊之助だ。

謙次郎。…………（無言。――安心したやうにも、また、何か不安心なものがあるやうにも）

要太郎。はじめお前をそゝのかして横道へつれ込んだ男だ。

謙次郎。…………（無言）

要太郎。お前はあの男に惚れ切つてゐる。――だが、俺は、肚のよくない男と思つてゐた。たくらみのある油斷のならない男と思つてゐた。――十三から見世に來て、年寄が手鹽にかけた人間と思へばこそ、俺も眼をつぶつてゐたが、少し手証をみたことがあるから、去年、あゝしてきつぱりと出入をさしとめた。――それ以來俺を　のかたきにしてゐる。

謙次郎。…………（無言）

要太郎。根が如才のない男だから方々へ自分を哀れつぽく持ちかける。――哀れつぽく持ちかけては俺のさんそをあげる。――あることないこといひ散らす。――揚句がお前をつかまへていまのさまだ。

謙次郎。…………（無言）

要太郎。お前さへつかまへて置けば先方は仕事がし易い。これほど先方にとつて究竟な道具はない。――これはお前に分るだらう。

謙次郎。…………（無言）

要太郎。女にわかれてくれといふことは伊之助と緣を切つてくれといふことだ。——割つていへばさうだ。——人形よりも人形使の話だ。

謙次郎。…………（無言）

要太郎。どうだ。——お前のために、仙臺屋といふお前のうちのために思案をかへる氣はないか。

謙次郎。…………（無言）

要太郎。俺はお前のうちといつた。——このうちは俺のうちぢやアない、お前のうちだ。——お前が主人のうちだ。——俺はたゞ年寄からお前へ行く間を——その途中しばらくを預つたゞけだ。

謙次郎。…………（無言）

要太郎。どうにか　まで、年寄から渡されたものだけは手をつけずに持ちこたへた。——これで年寄への俺のつとめは濟んだ。——今度はこれをそつくりお前へわたす。——さうすれば、それで、おつ母さんへの俺のつとめが濟むのだ。…

謙次郎。…………（無言）

要太郎。（と寂しく）藥の上から貰はれて來て——この年まで厄介になつて來た俺だ…………

謙次郎。…………（無言）

要太郎。俺は、强情を張つて、とう／＼こゝまで一人で通して來た。——このさきもこれでずつと通すつもりだ。——だが、お前はさうは行かない。どうせ一人世話をするものを持たなければいけない。——女と、こゝでいまわかれても、好きなものなら、お前——二年でも三年でもして餘燼がさめたら、俺が改めて骨を折りもしよう。——普通か

らも聴き、外のものからも聴いて、およその次第は分つてゐる。――商賣をした人間に似合はない固いところがあるやうだ。――あゝいふ風ならおつ母さんの気にも入るだらう。

謙次郎。…………（無言）

要太郎。森川町で聴いたらうがおつ母さんはこの月はじめから工合を悪くしてゐなさる。――平生しつかりしてゐるだけにかういふときは寂しさうだ。――話相手といつてはおしげだけだから、…………

謙次郎。…………（無言）

要太郎。考へてくれ。――考へてもう一度算盤を置き直してくれ。――どつちがわらはれてもおたがひの恥だ。

謙次郎。…………（無言）

やゝ長き間。

謙次郎。おそくなりますから…………

要太郎。かへるか。

謙次郎。えゝ。

要太郎。引きとめて勝手なことばかりいつた。――悪く思はないでくれ。

謙次郎。…………（無言。）

要太郎。宵の口、大へんに暖いと思つたらすつかり曇つた。（空を見る）

謙次郎。…………（無言。――さそはれて同じく空をみる）

要太郎。少しだ。（紙入からなにがしかの札を出して謙次郎に握らせる）

謙次郎。そんな…………（要太郎の顔を見る）

要太郎。外にゐたらいろ／＼と不自由だらうが、さゝになつて、また、その不自由したことが何かの足しになるときもあるだらう。

謙次郎。……　……（無言）

要太郎。だが、酒だけは少し愼めよ。——酒を飲　とお前は間違ひが多いから。

謙次郎。…………（無言）

要太郎。さ、ぢやアわかれよう。——萬事は、また、善造のところへ行つて相談したらいゝ。

謙次郎。…………（無言）

要太郎。あの男は、正直な、いゝ男だ。——うちのため、お前のためはかりを思つてゐる男だ。——お前が相談をかけてやれば必とよろこぶ。

謙次郎。（微に）えゝ…………

要太郎。今年も、あと、十二三日だ。——一夜あけたら、また、此方でも手筈をするから。

謙次郎。えゝ。——それよりも、兄さん…………

要太郎。…………？

謙次郎。おつ母さんの…………

要太郎。大丈夫だ。——それほどのことはない。

謙次郎。…………（無言）

要太郎。氣をつけておいで。

間。

二人わかれる。――そのまゝ要太郎は上手へ入る。

謙次郎、ぼんやりそのあとをみ送る。――ほんとうの自分に返つた悲しい心もち。――おのづと泪ぐまれて來る。

間。

遠く、また、夜番の拍子木の音。

（幕）

その二

「ちら梅」とよぶ小料理屋の内部。（仲見世附近）

「その一」と同夜。十時前後。

（正面の入口、閉て切つた硝子障子のそとに白く裏梅を染めぬいた紺の暖簾がみえる。見世にすべて土間短冊形の長い卓が二とところに並べてある。）

一つの卓には、上州屋の旦那と呼ばれる老人が島之助と一つしょに酒を飲んでゐる、一つの卓には、すつと離れ

て、伊之助が一人で酒を飲んでゐる。——土州屋の旦那のはうは醉つてもうとろ〳〵してゐるが、伊之助のはうはまだしつかりしてゐる。二三本の徳利を前にならべて、みるでもなし、みないでもなしに、土州屋の旦那と島之助のはうを密かにみてゐる。——板場の、蟹だの螺だのをのせた棚のかげに主人が夕刊を讀んでゐる。

間。

土州屋の旦那。(小聲で)………ねぐら離れしほとゝぎす、子で子にあらぬみづからを、この年月の御養育。(首をぐつたりさせる)

島之助。(幾分伊之助のはうに氣を兼ねて)およしなさいよ、旦那。——みつともない。

土州屋の旦那(顔をあげて)不味いかい。——俺のは不味いかい。

島之助。結構ですわ。——結構ですけど………

土州屋の旦那(よくは聽かずに)さうか。——だが、俺は、玉三つて淨瑠璃、好きだよ。——また、お前さんの、今夜の出來が滅法好かつた。

島之助(眉をひそめて)いやですよ、旦那。

土州屋の旦那。ほんたうだよ。——ほんたうに巧かつたよ。——うそだと思つたら、お前………

島之助。もう結構。——それよりも、さ、もう一つ召上れ。(銚子をとる)

土州屋の旦那。有難う。——(自分のまへにならんでゐる猪口をみて)さうか。(うなづく)ぢやアこれは一つお前さん

にあげよう。

島之助。あら、それは………

土州屋の旦那。まア、そんなこといはないで。——わたしは、もう、今夜はすつかり酩酊だ。(さういひながら島之助から銚子をとる。——島之助につぐ)

島之助。あゝ、もう、そんなに。(そのまゝ猪口を下に置く)——あたしも今夜は。——(頬に手をあてゝ)赤くなつたでせう。

土州屋の旦那。外へ出ればさめちまふさ。(猪口をとつて口へ持つて行く)

島之助。…………(それにはこたへないで、默つて、酌をする)

土州屋の旦那。(今度は默つてつがせながら)…………まだそのうへに妹まで、みづからを助けんと…………(首をふる)——どうだね、もつと何か喰べないか…………

島之助。あたしは、もう…………

土州屋の旦那。何か、かう、飯の喰へるものでも。

島之助。御飯、頂きませんわ。

土州屋の旦那。喰べない?——さうか。——ぢやア俺も喰べない。

島之助。上れやアしませんわ。

土州屋の旦那。ぢやア、かうしよう。——代りに何かおつ母さんへおみやげを持つて行かう。——ねえ、さうしよう。

島之助。ようござんすわ、そんなに。——外にいろ／＼あるんですもの。

土州屋の旦那。いゝよ、いゝよ。――お前は默つておいで。――（献立を書いた板を引寄せて眼を配る）さてと。――何にしようか。――何にしようぞ。――（主人を呼ぶ）親方ア。

主人。（新聞を離して）へい。

土州屋の旦那。申兼ねましたが、一つ、甘鯛を折にお入れなすつて。

主人。甘鯛を。――かしこまりました。――お幾人様ほど？

土州屋の旦那。よろしきやうに、そこは。

主人。へい。（板場の奥にみえなくなる）

島之助。旦那、まだ熱いのがありますのよ。（銚子をとつてすゝめる）

土州屋の旦那。止さう。――もう止さう。――この上飲んだら、もう………

島之助。まあ。――折角お銚子を持つたんですから。

土州屋の旦那。そんなに俺を醉はしていゝのかい。

島之助。大丈夫ですわ。

土州屋の旦那　お前さんは大丈夫さ。――お前さんは大丈夫でも。――まアいゝ、どうにかなるだらう。（猪口をとる）

島之助。なりますわ。（つぐ）

土州屋の旦那。（口の中で）………子で子にあらぬみづからを、と。（猪口に口をつけて下に置く）――どうしよう、俥で行かうか。――それと、ぶら〳〵歩かうか。

島之助。どつちでも。

土州屋の旦那。とにかく雷門まで出て、思案を決めよう。――（主人に）親方、まだですか。

主人。へい、たゞいま。（板場から折を持つて出る。）お待遠さま。（土州屋の旦那のそばに置く）

土州屋の旦那（みて）ど、どうも濟みません。――とんだお手數を。

主人。どういたしまして。

土州屋の旦那。お手數ついでに、どうぞ、御勘定を。

主人、へ、有難う存じます。（小さな算盤をとつて、立身のまゝ、二人の膳のうへをみながら球をうごかす）八圓六十錢頂戴いたします。

土州屋の旦那。八圓六十錢と。（紙入をあけて札を出す）是で、どうぞ。――あとは姐やに。

主人。へ、有難う存じます。（うけとつて板場へ入る）

土州屋の旦那。さア、出かけよう。

土州屋の旦那と島之助、腰かけから立つ。いろ／＼の買物をして來たと覺しい包を持つて臺のそばを離れる。――島之助の持つもの丶なかには羽子板がある。

土州屋の旦那。どうも御馳走さまでした。

主人。（板場で女たちと一しよに）有難うございます。

土州屋の旦那。（伊之助に）どうも、あなた、失禮いたしました。――おさきへ御免下さい。

伊之助。御免下さい。

土州屋の旦那、硝子障子をあけ、ふら／＼する足許をふみしめてさきへ出て行く。あとから島之助も會釋をして

出て行く。

間。

伊之助。一寸、熱いのを一つ。

主人。へい。——(女たちに)あちらお銚子だよ。

伊之助。あの女、とき〲來るんですか。

主人。いゝえ、こゝのところ一二度、いまの旦那とおみえになつたきりで。

伊之助。何者だか………?

主人。一向に。——御存じでございますか。

伊之助。知つてゐます。——あれは色物の寄席へ出てゐる島之助といふ女義太夫ですよ。

主人。あゝ、島之助さん。——さうでございますか。

女の一人が德利を銅壺から出して來て伊之助の前に置く。——すぐに板場へかへる。

伊之助。だけど、この方(親指をみせる)は?——始終こゝへみへる顏です。

主人。えゝとき〲おみえになります。——門跡前の土州屋さんの旦那でございますよ。

伊之助。門跡前の土州屋?——あゝ、あすこの………

主人。御存じでせう。

伊之助。道理でどこかみたことのあゝ顏だと思つた——さうですか、土州屋の大將ですか

主人(笑つて)いつも元氣のいゝ方で…………。

伊之助。始終あれですか。

主人。いゝえね　この春時分、海老屋だつたかの花魁をうけ出して、何でも、この、馬道あたりへ圍つたとかどうしたとかいふことを一寸聞きましたから、てつきりそれだなと、實は、この間つからさう思つてゐたんですが…………

伊之助。大したこつた

主人。晝間。帳場の中で眼を光らかしてゐるところをみた分にはとても分りません。

伊之助。いまの工合ぢやア、大將、大分喰下られてゐるやうだから。

主人。それに、また、片つぽがなか〳〵しつかりらしい。

伊之助。それは、もう、あの女と來たら……　……

主人　何かござんすか。

伊之助。うちの店の謙次郎さんね…………

主人。えゝ、あの、若大將。

伊之助。謙次郎さんがあの女に酷い目にあつてゐる。

主人。それは〳〵は。

伊之助。尤も、まだ、とりとめた道樂もしない時分だつたが、すつかり、此奴、夢中になつてしまつてね。――四谷だらうが、新宿だらうが、それからそれと毎晩のやうに追つかけおん廻した揚句が、願ひがかなつて、どうにか、まア、一しよに飯の一つも喰へるやうになつたと思召せ。――さア、泳がせることく。――何のかのと、あれで、半年ばかりに默つて、「箱」は消えたでせうね。

主人。勿體(もつたい)ない。

伊之助。で、どうしたかといへば、とどのつまりが、御贔負にして下さるのは有難いが、何分、まだ、修行中で、師匠にもかた〲いはれてをりますから。――さういつたやうなことで、ぽんと一つ、何の事はない、體よく突出されてそれつきり…………

主人。其奴は…………

伊之助。で、謙次郎さん、さぞ腹を立てたらうと思ふと大違ひ。――間いかだ、今どきめづらしい藝人だ。――ほと〲感心してゐるのをみて、わたしは、これはと思つた…… ……

主人(うなづく)大きに。

伊之助 で、まア、それが手解きといへば手解き。――そこにはまたそこにいろ〱曰くのあることで、とう〱一つぱしの極道になつたものゝ、さて、未だに謙次郎さん、あの女のことを忘れてゐません。――といふものが、その後かゝり合ふ女といふ女、みんなあの型だから可笑しい。

主人。ある奴です。

伊之助。わたしで好かつた。是がもし謙次郎さんだつたら、いまのさまをみて坊主になるといふかも知れない。

主人 とにかく、あの女、術があります。

伊之助、だが、あれだけ土州屋を押へてゐたらこの暮はさぞ樂だらう――それを思ふとうらやましい。

主人。一つ、因縁でもつけに出かけます。

伊之助。さア。――だが、親方とぢやア…………

主人。いけませんか。
伊之助。おたがひに安の出來ない役者だから。
主人。（手を拍つて）違ひない。
風の音。――硝子障子のそとの暖簾の煽るのが見える。
伊之助。（外をみて）風が出て來ましたね。
主人。先刻まであんまり暖かすぎましたから。
伊之助。（徳利をふつてみて）姐さん、お酒をもう一つ。
主人。（女たちに）おい、お酒だよ。
間。
謙次郎が硝子障子のそとに來る。――誰がゐるとも知らずうつかりあけて入る。
主人。入らつしやいまし。
伊之助。（主人のさういふのにさそはれて何の氣なしにそのはうをみる。）おや、謙次郎さん。
謙次郎、呼ばれて思はずちどまる。――伊之助のゐるのをみてギヨツとする。――どうしていゝか分らない混亂が來る。
伊之助。こつちへ入らつしやい。――此方が好ござます。（そばに席をあける）
謙次郎。有難う。（躊躇する。――だが、外にどうすることも出來ないので、あきらめて伊之助のそばへ行く。――腰を下ろしながら主人に強いて愛想よく會釋する。）

主人。お久しぶりで。――いま些力と六時をしてをりました。

謙次郎。さうでしたか。

伊之助。どうしました。――かけ違つてしばらくお目にかゝりませんでしたね。

謙次郎。（よそ〳〵しく）さうだつたね。（献立を書いた板をとつてみる）

伊之助。それから昔刻、新堀のうちの門まで寄つたらちやうどお留守で……

謙次郎。あゝ、少し用が出来たものだから。――（主人に）まだ飯前ですから、どうぞ一つ。

主人。何か鍋のものでも。

伊之助。鰒になさい、鰒に。

謙次郎。戯談だらう、俺は飯を喰うんだ。

伊之助。すぐにですか。

謙次郎。あゝ。

伊之助。（笑つて）それこそ戯談だ。――（自分の猪口を干してさす。）一つ上げませう。――少し冷めたいけれど、いま、すぐ、熱いのが来ます。（徳利をとる）

謙次郎。俺は飲まないんだ。

伊之助。飲まない？――（謙次郎の顔をみて）どうかしたんですか。

謙次郎。どうもしないが。――こゝのところ暫く飲まないんだ。

伊之助。はてね。――さういへば、今夜は、何だか浮かない顔をしてゐますね。

謙次郎。大したことはないんだが。――さういはれりやア、少し腦が病めるんだ。

伊之助。其奴は飮まないからだ。――あなたの前だが、飮む口がどうかして二三日も飮まなかつたら覿面身體に響きます。――とき〳〵、試してみたが不思議なくらゐです。――さういふときに熱すぎるほどの奴を一杯ぐつと引つかければ……

謙次郎。(いま〳〵しいやうに)そのくらゐなことは俺だつて知つてゐるよ。

伊之助。知つてるならやつたらいゝでせう、――譯のないこつた。――(主人に)ねえ、親方。

主人。それは飮つたはうがよろしいでせう。――何か大きなもので一つ。この湯吞ではいかがです。(茶碗をとつて出す)

伊之助。湯吞結構。――此方へ貸して下さい。(うけとる)――(女たちに)姐や、お酒は?

　女、うつかりしてゐた銅壺の中の德利をすぐに出して來る。

伊之助。熱つ(德利に觸れた手を思はず離す)――此奴は沸立つてゐる。――おあつらへた。――(湯吞を謙次郎のまへに置いて)さア、上れ。

謙次郎(間が惡さうに)止さう。――まア、よして置かう。

伊之助。なぜです。

謙次郎。なぜと訊かれても困るが。――少しやめてみようかと思つて…………

伊之助。やめる?(間。――たちまち笑つて)およしなさいよ、――そんな白々しい顏をして、そんな…………

謙次郎。いゝえ、ほんたうに。――ほんたうに止めようと思つてゐる。

伊之助。ほんたうに?(念を押す)

謙次郎。…………(うなづく)

伊之助。だけど、また。――何か理由でもあるんですか。

謙次郎。理由といふほどのこともないが――酒を飲むと、俺は。――とかく間違ひが多いからね。

伊之助。いつてみれば?

謙次郎。いつてみれば。――(自ら愧づるやうに)そんなことは、まア、いゝぢやアないか。

伊之助。誰かに、あなた、何かいはれましたね。

謙次郎。(少し慌てゝ)いゝえ、そんなことはない。

伊之助。さうですか。(うなづく)――ぢやア、ま、よして置きませう。(機嫌を悪くする。――謙次郎には構はず自分だけで一つ二つ飲む。)

間。

謙次郎。(臆病に、あたりの白けた心もちから自分を救ひ出すやうに笑ふ)戯談だよ、戯談だよ。――誰がやめるものか。――(湯呑をとつて)さ、ついで。

伊之助。(猪口を持つたまゝで)飲むんですか。

謙次郎。飲むとも。

伊之助。それならさうと早くいつてくれゝば。(猪口を下に置く)――ぢあア、つぎますよ。(幾分まだ強面に権利をとる。――つぐ。)

謙次郎。(さすがに氣がさすらしく、飲みかけて、一度、下に置く。――だが、伊之助だの主人だのゝ眼を感じることに

よつて、すぐ、また、湯呑をとり上げる。――飲み干す。)

伊之助。もう一つ。

謙次郎。湯呑はもう御下にしよう。――(主人に)親方、こゝへもお膳を下さいな。

主人。へい、たゞいま。

謙次郎。それからばかでも燒いて下さいな。

主人。ばかを。――かしこまりました。

女、膳に銚子を添へて持つて來る。――謙次郎、すぐに猪口をとり上げる。側から伊之助がつぐ。

謙次郎。へえ、有難う。

伊之助。あなたに聞かせることがあります。

謙次郎。…………?

伊之助。あなたがもう少し早く來ると。――あなたに見せたいものがゐたんです。

謙次郎。見せたいもの?

伊之助。島之助がゐたんです。

謙次郎。(眼をそらして)何だ、下らない…… ……

伊之助。うそだと思ふんですか。

謙次郎。どうだつて構はない。

伊之助。尤も連れがあるんです。――門跡前の、それ、上州屋ね。――あそこの旦つくが一しよなんです。

謙次郎。…………（無言。――自分を紛らすやうに飲む）

伊之助。上州屋の、その、とろ〳〵した工合。――あれは大した女ですね。

謙次郎。…………（無言）

伊之助。あなたは早く見切をつけて好かつた。――あの女に引つかゝてゐた日には、仕舞に骨まで舐られます。

女。お待ち遠さま。（謙次郎のまへに誂へものを持つて來る）

謙次郎。お酒をあと持つて來ておくれ。

女。へい。（行きかける）

伊之助。此方もだ。

女。へい。

伊之助。大體、あの女の…………

謙次郎。よしてくれ。――そんな話はたくさんだ。

伊之助。（笑つて）といふのは、まだ、あの女に思ひが殘つてゐるからです。――おしづさんにいひますぜ。

謙次郎。（猪口をさす）まア、一つ行かう。――（伊之助の顏をみて）今夜は、お前、大分醉つてゐるね。

伊之助。夕刻まではしつかりしてゐたんですがね。――あなたの顏をみたらすつかり嬉しくなつてしまつて。――何だか、かう、急に…………

女、謙次郎のまへと、伊之助のまへと、兩方に、銚子を持つて來る。

伊之助。あなたもお飲みなさいよ、少しお飲みなさいよ。——あなたは飲まないと竟見に透きがあつていけない。(猪口をさす)

謙次郞。飲むよ。——かうなりやア、もう、飲むよ。——さア、ついだ。

伊之助。さう來なくつちやア噓だ。(つぐ)——飲んで、今夜は、久しぶりにぐづ〱になりませう。——どこかへ行きませう。

謙次郞。戯けちやアいけない。——今の身分だ。

伊之助(わらつて)あなたは知らないと思つてゐるんですか。

謙次郞。何を。

伊之助。あなたが今夜どこへ行つたか…………

謙次郞。…………(無言)

伊之助。あなた、今夜、聖天町へ行つたでせう。

謙次郞。…………?

伊之助。(わらつて)どうです。

謙次郞。行かないとはいはない。

伊之助。御覽なさい。——行けば無駄にはかへらないはずだ。

謙次郞。おふくろは工合が惡くつて寢てゐるんだ。(自分でついで飲む)

伊之助。でも、おしげといふものがゐます。——おしげにあへばお內儀さんにあつたも同じこつてす。

謙次郎。(むしろ満足なやうに)よく知つてゐるね。
伊之助。それは、あなた。――その位な寸法が分らなくつてどうします。
謙次郎。まア、上げよう。(猪口をさす)
伊之助。(うけとりながら)ごまかしちやアいけません。
謙次郎 (金を失したことをはつきり思ひ浮べる。――たまらなくなる。――急いで話をかへる。)それよりも、今夜、兄貴にあつた。
伊之助。これに? (親指をみせる)
謙次郎。…………(うなづく。――伊之助から返された猪口に口をつける。)
伊之助。どうしました。――何かいひましたか。
謙次郎。(うなづく)いつた。
伊之助。(氣色ばんで)何をいひました?
謙次郎。(間。――わざと嘲けるやうに笑つて)みんな俺がお前を憎んでゞもゐるやうに思つてゐるが、俺は決してお前を憎んでやアしない。――さういつた。
伊之助。(反感そのものゝやうに)さういふ門々しいことをいふんだ。――憎んでもゐないものが――憎んでゐないならゐないやうに、素直にあなたをうちへ入れたらいゝぢやアありませんか。――何のかのとこだわることはないぢやアありませんか。
謙次郎。だから俺はいつた。――何もあなたに這ひつくばつてまでわたしはうちへ入らうとは思ひません。――そんな

弱い尻はないんだから。
伊之助。そうですとも。
謙次郎。仙臺屋にはあなたといふ立派な人がゐるんだ。――生憎とやくざに生れついたわたしのやうな人間はゐなくつたつていゝんだ…………
伊之助。乙うおやんなすつたね。――相手はどうしました。
謙次郎。仙臺屋はお前のものだ。――死んだ親父からお前へわたる間をしばらく俺が預つてゐるだけだ。――はつきりかういやアがつた。
伊之助。それだ。――さういふ綺麗なことをいふんだ。――そんなら、なぜ、仙臺屋の家についた人間を――おんこ譜代の人間を大切にしないんだとはつきりいつてやりてえや。――ねえ、さうでせう。――その道理でせう。
謙次郎。さうだとも――（女に）姐さん、お酒がないよ。
伊之助。古いもので――大旦那の時分のもので、いま、まんぞくに店へ出入してゐるものが何人あります？――それが何よりの證據だ。――善造一人ぢやアありませんか。――あのぐうだらべえの善造一人ぢやアありませんか。――誰が、あんな、義理を知らない奴のところへ行くものか、――みんなさういつてゐます。
謙一郎。…………（うなづく。――自分について飲む）
伊之助。森田町さんだつていつてゐますぜ。――姉さんが一人で氣の毒だから行くんだ。――姉さんでもゐなくなつたら俺は行くのは御免だ。――森田町さんばかりぢやアありません、さうなりやア――お内儀さんでもゐなくなりやア、櫻木町さんだつて、本郷さんだつて緣切だ。

謙次郎。尤もさうたつた方が兄貴には都合がいゝかも知れねえ。

伊之助。(大きくうなづいて)全くだ。――さうなりやア、おしげだつてゐなくなりまさア。――すれば、あとは、みんな、親指の一味ばかりだ。――親指の徒黨ばかりだ。お家はいよ／＼萬歳だ。――ざまア見やがれ。(罵るやうにわらふ)

謙次郎。(自分で自分の掘つた穴に落ちる――自分でうつかりいひ捨てたことのなかへ誘入れられる。――おたかのない後の家のさまがまざ／＼と眼にうかぶ。――急に狂ほしく立上る)行かう、伊之公行かう。

伊之助。どこへ?(顔をあげる)

謙次郎、どこかへ行かう。――どこかへ行つてもつと飲まう。

伊之助。行きませう。

謙次郎 仙臺屋は俺のものぢやアない、お前のものだ。――兄貴は、かう、はつきりいつたんだ。――俺のものを俺が使ふに不思議はないんだ。

伊之助。さうですとも。

謙次郎。さきになつて使はうが今使はうが、――使ふ味にかはりはねえんだ。――親方、預けて置くよ。(「この一」で要太郎からうけとつた拾圓札を臺のうへに投げ出す。)

謙次郎をさきに伊之助、硝子障子をあける。――暖簾を煽る風が先刻よりも強くなつてゐる。)

謙次郎。畜生、酷い風になりやアがつた。

二人、硝子障子をあけ放したまゝ出て行く。

間。

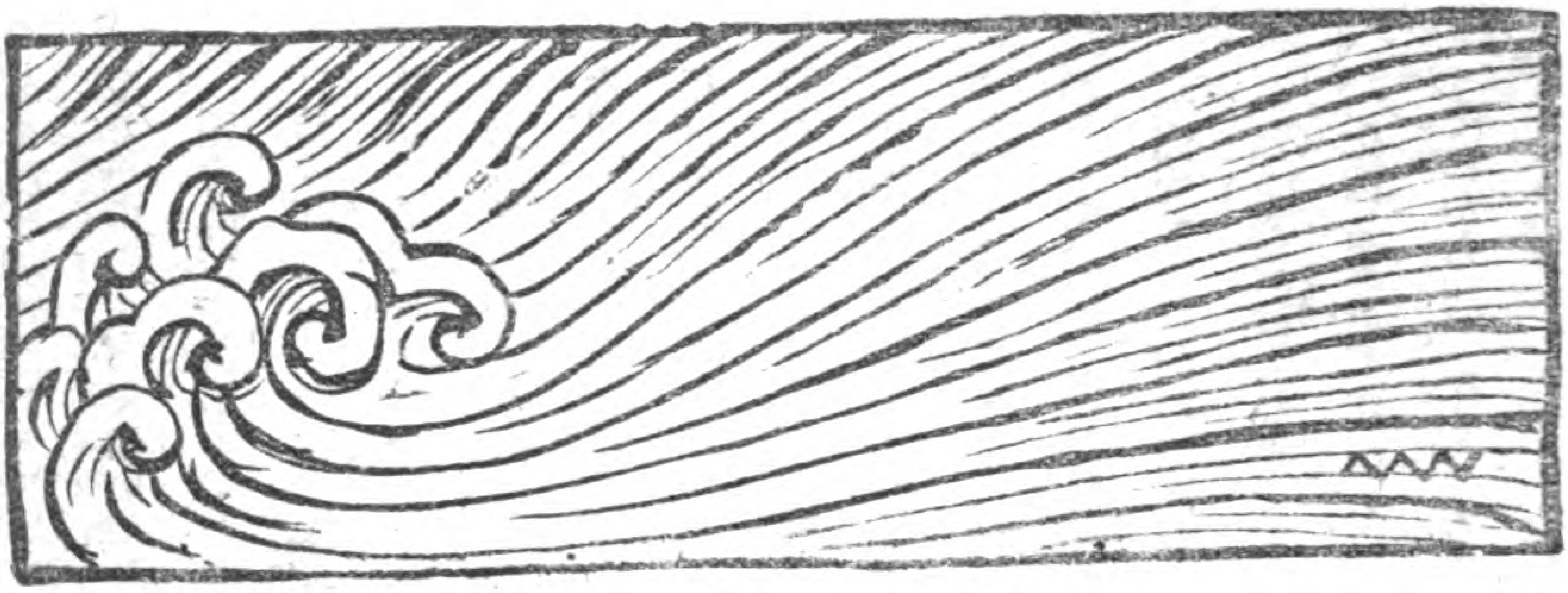
女、出て來て膳のうへを片附ける。

間。

主人、いまゝでの二人のことなどまるで心にかけないやうに外へ出て懸行燈をとり込んで來る。つぎに暖簾を外して來る。

（幕）

（十年十二月）



或女の死

徳田秋聲

お芳が急病だといふ電話がかゝつて來たとき、種吉はその傭はれてゐるデパートメントストアの自分の受持の西洋[illegible]具の販賣部に何時ものやうに店番をしてゐたのであつたが、その大きな雜貨店の雇員總てのなかでも、彼は主人の女婿である支配人の下と言つた格の一人であつたところから、ちよつと店を離れる譯に行かなかつた。

「今少し前に裏で洗濯をしてゐたんださうですがね、內へ入つて來ると、何だか急に體が大儀で何うすることも出來ないんださうです。どこが惡いんだか能く判りませんが、胸元が苦しくて、口も利けないてつた始末でね、何うも可笑しいから、お氣の毒ですが、一つ急いでお歸んなすつていたゞきたいんですが……」と、さう言つて電話で知らしてくれたのは、二階に間借りをしてゐる、田中といふ或商店の通い番頭であつた。

種吉はちよつとどきりとしたが、折わるく昨日も少し飲みすぎて一日休んだところだつたので、それではお芳の母へ直ぐ出向くやうに電話をかけておくから、至急に醫者を呼んで診てもらふやうにと賴んでおいて、電話を切つたのであつた。母はお芳

がまだ此のデパートメントストアの横手にある繪葉書と煙草とを商つてゐる床店に、お芳が坐つてゐた頃から、主人の家で奥向のことに働いてゐた。

種吉は店が忙しかつたので、つい紛れがちではあつたが、何となく氣が落着かなかつた。こゝへ入つてからは、嚴しく言渡されてゐるので、飲仲間とも悉皆交渉を絶つて、滅多にお茶屋なぞへ足踏はしないことに謹愼してゐたが、以前の生活を考へると、いくら贔屓目に見ても、お芳に好く仕向けたとは決して言へなかつた。

勿論彼の十年程前に矢張りこのデパートメントストアにゐたこともあつて、そこで床店の番をしてゐたお芳の嫻やかな、しかし場所柄だけに何處か澁皮のむけた、意氣な下町の娘らしい姿に惹着けられたのであつた。お芳は幼少のをりに脳を患つたとかで、どこか箍のゆるいところのある娘だつたが、煙草や繪葉書の賣行の好いのは、場所も場所だつたけれど、一つは彼女の様子が人　を惹いたからであつた。

軍隊を出たばかりの種吉は、その店へ入つてから商賣上のことにかけては、可也呑込が速くて、何彼に拔目のないことが、直きに上役の人達の目に著いたところから、時々店先へ來て、商賣の話などして行く度びに何となく彼をお芳に賴もしく思はせてゐた。

「商賣なら私何の商賣でも好きですわ。何うしても商賣がやつて見たいんですけれど……」お芳は言ふのであつた。

「私も商賣は大好きですね。女が店へ坐るには、化粧品が一等でせうね。」種吉は言ふのであつた。

「化粧品も可ござんすね。ローズの出るのは化粧品が一等ですけれど、場所さへよかつたら、急度賣れるんです。」

それから間もなく、或日二人は甘く諜しあはせておいて、一日淺草へ遊びに行つた。そして其の歸りに一緒に御飯を食べた。ちやうど花の咲きかけた三月頃のことで、春の熱病に人はけされてゐる時であつた。お芳はまだ二十二になつ

たばかりであつた。肩つきや頸脚などが素直で、手足もすんなりしてゐた。脳病の痕迹として、目が少しどろんとしてゐたけれど、それが又た種吉には一層好いたらしく思はれた。そして其の時お芳は總てを種吉の腕に投げかけたのであつた。

「商賣の資本なら私も少しはもつてゐます。」お芳はさう言つて、一日も早く長いあひだ其處の看板娘として曝されて來たあの床店から足を洗ふことを希つた。

種吉が素捷こくお芳を引こぬいたことは、しかし幼い時分目をかけて來た、年取つた主人を矜やかしたばかりか、お芳を張つてゐた多くの若いものを「あつ」と言はせずにはおかなかつた。

「兵隊あがりの青二才に遣られるなんて、さすがの乃公も氣がつかなかつた。」老主人はさう言つて舌打ちをした。彼は露店商人から成りあがつて、今は數百萬圓の富を作つてゐた。

けれど種吉が強ち素捷こいばかりではなかつた。お芳の母から主人の細君へ、細君から又主人へ詫び願つて二人で店をもつてから、後に詳しいことが知れたことであつたが、お芳はその頃もう處女ではなかつた。淺草の歸りに、種吉が彼女を誘つた秘密な場所でもお芳自身が正直にちよつと告白したとほりに、彼女は心にもなく或男に弄ばれてゐた。それはその店へ煙草をおろして行く專賣局の役人で、ある日お芳が品切れになつた煙草の注文に、遠くもない彼の築地の家を訪ねたとき、ふとそんな係蹄に彼女はかゝつたのであつた。寒い朝がまだ早かつた。そのうへ彼は夫婦間に葛藤が醸されて、その頃獨り殘されてゐた。

種吉はそれを聞いたとき、ちよつとうんざりさせられたが、しかしそれが一層彼の興味を唆りもした。お芳はさして

深い羞恥を感ずることもなしに、然しいくらかの不正直な修飾をもつて、可也安易な氣持で、それを告白したのであつた。種吉はその不檢束な態度に不快を抱いたが、決して脈にはならなかつた。

とにかく二人は望みのとほり新しい一つの店を持つことができた。そして樂しい幸福な日が二年ばかり續いた。お芳は初め種吉が豫期したほど、商賣が上手ではなかつた。總てが型にはまつた遣方で、種吉がゐないとなると、品物を卸しに問屋から飛んだものをうんと背負ひこませられたりしてゐた。でもそんな點では、種吉も氣を惡くするやうなことはなかつた。それよりも總ての點で彼女が思つたほど聢かりしてゐないことであつた。緊意な問屋の男がいつも奥へ上り込んで話しこんでゐることなどが、殊にも種吉の期待を裏切つたが、何かしら金の無駄使ひをすることなども、厭であつた。それに先の電話局の男との關係も、種吉自身の智識以上に、何かを知つてゐる男があつたりして、一緒に酒を飲んだりする折に、時々氣を惡くさせられた。

お芳の出產が又た、種吉に取つて苦惱の一つであつた。勿論月を繰つてみたところで、明白にそれを疑ひだてる何等の根據もないことではあつたが、しかし疑問の目を瞠ればいくらも瞠れるのであつた。商賣の資本と云ふのも、多分そんな處から出てゐるのだらうから、無意識にさうした打算が自分にあつたことも拒めなかつたが、しかし考へてみると總てがお芳に取つては好い商賣であつたのかも知れないのであつた。

種吉はその子供を愛せずにはゐられなかつた。酒に醉ふと持前の感傷癖が出て、彼はそれを口へ出して、お芳を苦しめるのであつたが、子供自身には不思議な愛着が加はつた。

今迄堅氣の商人の娘らしい愼みと、十分の血統らしいお上品さとをもつてゐたお芳が、鄭重な主人の手から解放されてから、次第に型が崩れて行つたと同時に、氣持も不檢束に流れがちであつたとほりに、種吉の心も次第に荒んで行つ

た。彼は以前の男のことを言出して、彼女を虐げたが、反撥力も意氣張もないお芳には、酒のうへで演ぜられる彼の狂態も何の手答へもなかつた。彼女は全くの啞であつた。哀れな種吉はいつも外へ弾き出されるより外なかつた。時とすると彼は問屋の品物をごかしたりして、三日も四日も家を明けた。お芳が子供を負つて、彼を救ひに出かけることも度々であつた。

店が段々寂れて行つた。終ひに持ち切れなくなつた。種吉は厚しを着るやうな身分にまで成下がつて行つた。それでも彼は酒を飲むことを止めることが出來なかつた。そして其の間にも、仲間の若い男に、お芳は唆のかされたりした。醉つて狂態を演ずる種吉が、どこまで沈んで行くかゞ可恐しくなつて來た。何處まで従いて行つても、際限がないやうに思はれた。お芳はその男と、或時家を出奔しようとさへしたのであつた。

切端つまつた或年の暮に、彼はふと大きい實業家の誰かの立志傳に感奮して、大道へ露店を張つて、思ひがけない利益に味を占めて以來、彼はいつかその仲間の顔利きになつて行つた。彼はぼろい金を儲けて荒い金を使ふことに慣れた。そして足を抜からく／＼と思ひながら、つひ／＼引摺られて行つた。何うかすると、彼はお芳と二人で、遠く離れて二箇所に店を張つたりした。お芳は次ぎに產れた子供を負つて、夜振にかまはず寒い風のなかに立つてゐた。別に苦痛も感じなかつた。次第に恥も忘れがちであつた。そしてそんな仲間のうちの上方辯の若い一人の苦學生と、いつも持場を隣合にしてゐたところから、何時かさうした關係に陥つて行つたのであつた。雨も降らないのに、二人は早く店をしまつて、家へ歸つて行つた。

間もなく種吉は其を感づいた。是までにさへなかつた葛藤が、長いあひだ三人の間に續いた。今迄ぐうたらに見えたお芳にも、青年の刺戟は利目はあつた。狂人のやうに種吉に打たれた彼女は、毅然としてその頼かな手をあげて彼の頭

を打ちかへした。

「あなたも男なら、未錬らしく打つたり毆つたりしないで下さい。そして綺麗に話をつけて私に暇を下さい。」お芳は蒼くなつて言ふのであつた。

種吉は一層猛び立つた。しかし散々毒づいたり暴れたり、蟲にいりついて口惜しがつたりした果には、其がいつもの彼の病癖であるやうに、めそ〳〵と嗚咽の聲を立てるのであつた。そして今までの荒い仕向を泣きながら妻に詫びたり、何事をも子供に免じて赦さうとさへ思ふのであつた。

結局人が間へ入つて、彼女をしばらく預かることになつたところで、彼は六つになる子供の健一の遊場に困つて、方々酒場を連れあるいたり、不相應なお茶屋へあがつて、彼を慰めたりして、その日〳〵を紛らせてゐた。

種吉が少し早目に用事を片づけて、家へ歸つて來たのは、五時頃であつた。

今は彼も主人の子飼で、しかも其の外に一人亡くしたりなどして、現在の店へ入つてから可也好い待遇を受けてゐたので、悉皆醒めてゐた。

「二三年みつちり働いてごらん。今はつまらないけれど、そのうちには何うにかなるだらう。決して悪いやうにはしないから。」主人夫婦は言ふのであつた。

彼は殆んどぴつたり酒を罷めてゐた。お芳の總てが解つて來たと同時に、彼女を受容れるだけの餘裕も出來て來た。子供の學校の成績の優れてゐることも、彼に取つては救ひの一つであつた。

彼が歸つて行つた時には、しかしお芳はもう口も利けないくらゐ情ない體になつて了つてゐた。

「何うだ、お芳しつかりしろ」と、種吉が豁いて傍へ寄つて行くと、お芳は兩手を延べて、彼の胸倉に武者振りついて、何か言ひたげに口をもがく／＼させたが舌が利かなかつた。

二階の男や近所の人の話によると、お芳は裏の水口端から内へあがつて來ると、遽かにぐつたりとなつて、無性に醫を嫌がつてゐたが、終ひに胸を掻き搖つたり、障子につかまつて悶え苦しんだりしてゐた。午后のことで醫者は漸くのことで一人呼んで來たけれど、その時には、あはてゝ駈けつけてくれた母に手足や背を撫さすつてもらつたりして、苦痛が去つてゐた。

「苦しくて仕樣がないから、早く癒かして下さい。」さう言ふのも漸とであつた。

母のお律は急いで蒲團を延べてやつた。そして　を撫でさすつて遣つた。熱も高いので、氷嚢もつけてやつた。

醫者は胃病だと言つてゐた。それに感冒もあると云ふのであつた。

種吉はひどく可哀さうになつて來た。何を言ひかけても答へることが出來なかつた。彼は狼狽した。そして夜になつてから、少し遠方にある或る病院から、漸と博士に來てもらふことが出來た。前に診てもらつた醫者が餘りにへつちよちこよいで、其上家が汚なかつたり、お芳が裏店の女房じみた風をしてゐたので、甚く冷淡で高慢であつたが、年取つた博士はさすがに人の[illegible]の尊いことを知つてゐた。

「誠にお氣の毒のことだが、もう遅くなつては手のつけやうがない。それあ胃もあるでせうがね、心臟がすつかり弱つてしまつてゐる。何とも致方がない。」博士は言ふのであつた。

種吉は今更のやうに狼狽した。さつき自分の胸倉を取つて、何か訴へようとして、そのまゝどたりと横になつたまゝ手も足も全く動くことすら出來なかつた。もう耳も聞えないらしかつた。勿論視力も失はれてゐた。

種吉は夢のやうな氣がした。狼狽と絶望は感じながらも、何かまた一と皮、そこにび遊があるやうな氣がした。ほんとうに狼狽と絶望を感じてゐるのではないと思はれた。彼は自分の兩腦が痲痺してゐるのではないかと疑つた。

「注射駄目ですか。」種吉は笑顔で訊いた。

「それも御希望なら爲てあげても可いが、却つて苦しむ。無論反應のある筈もないのだから、やるだけ無駄ですよ。それよりか酸素吸入でもやつた方が、病人は樂だ。其の方におしなさい。」

種吉は初めて可哀さうな彼女の運命を、はつきり見せつけられたのを感じた。このまゝ死んで行く。つひ今朝まで死の影さへ想像しなかつた若い彼女が、永久にこの世のなかから消されて行く。毎日平氣で見てゐた姿も一生見られなくなる。聲も聞かれなくなる。種吉はさう思ふと、ひどく悲しくなつて來た。

「酷いことになるもんですね。」種吉はお芳の手を握りながら、さも辛さうに母のお律に言ふのであつた。

餘り晴やかではないが、いつもおつとりしてゐて、物靜かでお上品なお律は、口數も利かずに、目に涙をためてゐた。

「ほんとに短かい生命ですね。可哀さうに苦勞の爲通しで……。」お律は獨語つて咽喉を塞らせてゐた。

「何とかできないもんですかね。」種吉は腹立しさうに言つた。

酸素吸入の音と、ぜい／＼言ふお芳の息使ひとが、しん／＼と更けて行く夜の靜けさのうちに、先きへ／＼と時を縮めて行くやうに思はれた。

周圍には色々の人が集つてゐた。醫科器械屋の叔母さんの痛ましい顏も見えたし、種吉の兄夫婦の顏も見えた。主人の夫人も來てゐたし、その人の先妻の娘も來てゐた。彼等は時々しめやかな聲で、何か私語いてゐた。

「可哀相だね。これでづつと息を引取つて行くのか知ら。」

「さう言へば、こないだ私のところへ來て、裏口から顏を出して、何だか息切れがして困ると言つてゐましたよ。かりと知つたら、あの時早く診てもらへば可かつたのに。」

「私んとこへも來ましたよ。つひ四五日前に。ちやうど御飯時でしたから、何にもないけれど、御飯を食べておいでと言つたの。何だか此の頃痩れてゐるなと思つたけれど、それでも御飯はいつものことで、どつかり坐り込んで、お鉢の底の出るほど食べて行つたぢやありませんか。」

皆んなはそんな話をして、笑つたり涙を拭いたりしてゐた。

お芳は何を言はれても、むづつともしなかつた。冷い脂汗が、皮膚に汚點の出たやうな其の顏に入染んでゐた。爪が蒼くなつてゐた。指が硬ばりかけて來た。

「保險金を取りぞくねないやうにしなくちや可けないぜ。」種吉の兄が言ふのであつた。

「あツ然うだ。」種吉は初めて氣づいたやうに言ふのであつた。

「證書はあるか。」

「いや證書はまだ取つてない。」種吉は不安さうに言ふのであつた。

實際取る權利があるか何うかゞ疑はれた。それは種吉が、或る會社の勸誘員をしてゐる友達の都合で、强ひて附けさせられたものであつた。

「あれも木村さんが、自分の其の月の收入上、何うしても入れなくちやならないので、お芳が厭だと言ふのを、自分で掛金の立替へまでして、無理に入れたんですがね、それもつひ一週間ほど前のことだ。」

「その受取は此方へ取つてあるかい。」

「それあ取つてあります。」

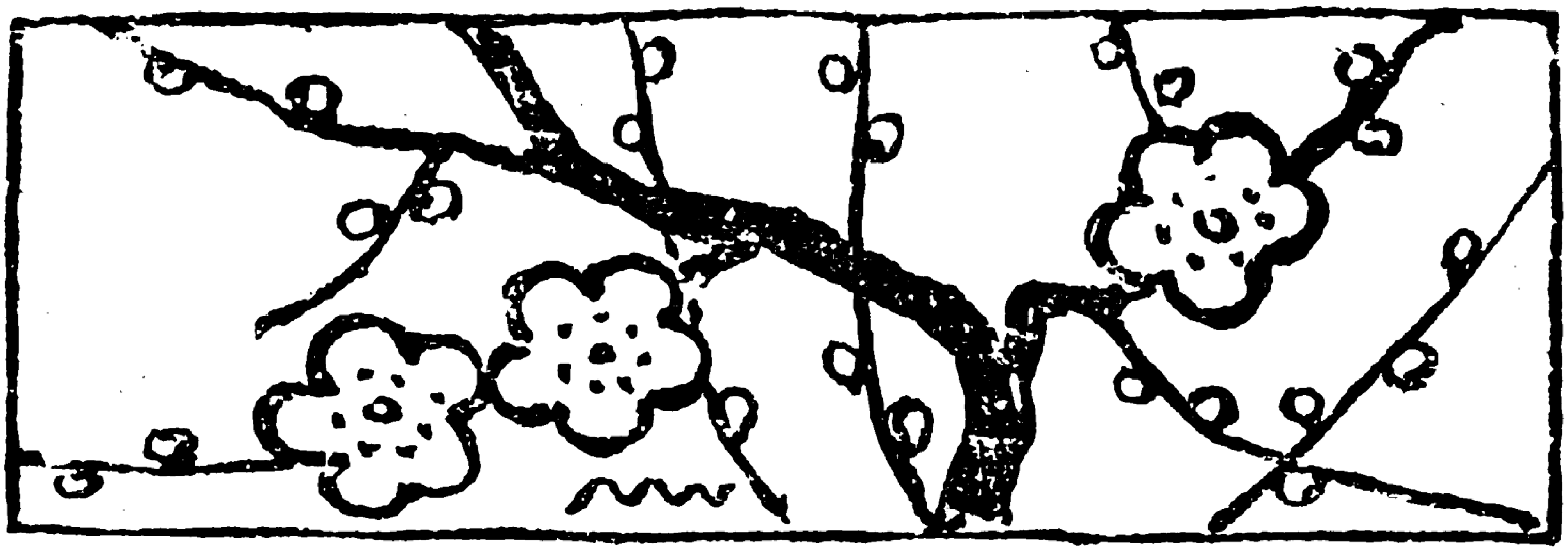
「ぢや大丈夫だ。甘いことをしたな。」

「けど厭ですね。子供三人殘して死なれたんぢや私が遣り切れませんからね。」種吉は笑つてゐたが、この能なしの、しかし罪も科もない善良な女の短い一生が、さうした犧牲を拂ふために生きられてゐたのだといふ氣がして、自然に頭が下るやうに感じた。

お芳の息が次第に微弱になつて行つた。長い貧しい暮しに窶れた顏から、生の色が見る〳〵失せてしまつた。そして變つた何の前觸れもなしに呼吸が絕えてしまつた。今まで喘ぎ〳〵してゐた口から泡を吹いてゐた。

種吉はごぼんといふ音がして、自分の胸元に大きな空虛ができたやうな寂しさに襲はれた。

コレから保險金を受取る前後が、興味があるので、それを書くはづで死の前後は省略して書いたが、どうもこれだけの方が締つてゐるやうだからこれで擱筆。



俊寛

芥川龍之介

俊寛云ひけるは……神明外になし。唯我等が一念なり。……唯佛法を修行して、今度生死を出で給ふべし。　　源平盛衰記

（俊寛）いとど思ひの深くなれば、かくぞ思ひつづけける、「見せばやな我を思はむ友もがな磯のとまやの柴の庵を。」　　同上

一

俊寛様の話ですか？　俊寛様の話位、世間に間違つて傳へられた事は、まづ外にはありますまい。いや、俊寛様の話ばかりではありません。このわたし、——有王自身の事さへ、飛でもない嘘が傳はつてゐるのです。現につひこの間も、或琵琶法師が語つたのを聞けば、俊寛様は御歎きの餘り、岩に頭を打ちつけて、狂ひ死をなすつてしまふし、わたしはその御屍骸を肩に、身を投げて死んでしまつたなどと、云つてゐるではありませんか？　又もう一人の琵琶法師は、俊寛様はあの島の女と、夫婦の談ら

ひをなすつた上、子供も大勢御出來になり、都にいらしつた時よりも、樂しい生涯を御送りなつたとか、まことしやかに語つてゐました。前の琵琶法師の語つた事が、跡方もない嘘だと云ふ事は、この有王が生きてゐるのでも、おわかりになるかと思ひますが、後の琵琶法師の語つた事も、やはり好い加減の出たらめなのです。

一體琵琶法師などと云ふものは、どれもこれも我は顏に、嘘ばかりついてゐるものなのです。が、その嘘のうまい事は、わたしでも褒めずにはゐられません。わたしはあの笹葺の小屋に、俊寛樣が子供たちと、御戲れになる所を聞けば、思はず微笑も浮べましたし、又あの浪音の高い月夜に、狂ひ死をなさる所を聞けば、つひ涙さへ落しました。たとひ嘘とは云ふものの、ああ云ふ琵琶法師の語つた嘘は、きつと琥珀の中の蟲のやうに、末代までも傳はるでせう。して見ればさう云ふ嘘があるだけ、わたしでも今の内ありの儘に、俊寛樣の事を御話しないと、琵琶法師の嘘は何時の間にか、ほんたうに變つてしまふかも知れない――と、かうあなたは仰有るのですか？　成程それも御尤もです。では丁度夜長を幸ひ、わたしがはるばる鬼界が島へ、俊寛樣を御尋ね申した、その時の事を御話しませう。しかしわたしは琵琶法師のやうに、上手にはとても話されません。唯わたしの話の取り柄は、この有王が目のあたりに見た、飾りのない眞實と云ふ事だけです。ではどうか少時の間、御退屈でも御聞き下さい。

二

わたしが鬼界が島に渡つたのは、治承三年五月の末、或曇つた午過ぎです。これは琵琶法師も語る事ですが、その日も彼是暮れかけた時分、わたしはやつと俊寛樣に、めぐり遇ふ事が出來ました。しかもその場所は人氣のない海べ、――唯灰色の浪ばかりが、砂の上に寄せては倒れる、如何にも寂しい海べだつたのです。

俊寛様のその時の御姿は、——かうです。世間に傳はつてゐるのには、「童かとすれば年老いてその貌にあらず、法師かと思へば又髪は空さまに生ひ上りて白髪多し。よろづの塵や藻屑のつきたれども打ち拂はず。頸細くして腹大きに脹れ、色黒うして足手細し。人に似て人に非ず」と云ふのですが、これも大抵は作り事です。殊に頸が細かつたの、腹が脹れてゐたのと云ふのは、地獄變の畫からでも思ひついたのでせう。つまり鬼界が島と云ふ所から、餓鬼の形容を使つたのです。成程その時の俊寛様は、髪も延びて御出でになれば、色も日に燒けていらつしやいましたが、その外は昔に變らない、——いや、變らない所ではありません。昔よりも一層丈夫さうな、頼もしい御姿だつたのです。それが靜かな潮風に、法衣の裾を吹かせながら、浪打際を獨り御出でになる、——見れば御手には何と云ふのか、笹の枝に貫いた、小さい魚を下げていらつしやいました。

「僧都の御房！　よく御無事でいらつしやいました。わたしです！　有王です！」

わたしは思はず駈け寄りながら、嬉しまぎれにかう叫びました。

「おお、有王か！」

俊寛様も驚いたやうに、わたしの顏を御覽になりました。が、もうわたしはその時には、御主人の膝を抱いた儘、嬉し泣きに泣いてゐたのです。

「よく來たな。有王！　おれはもう今生では、お前にも會へぬと思つてゐた。」

俊寛様も少時の間は、涙ぐんでいらつしやるやうでしたが、やがてわたしを御抱き起しになると、

「泣くな。泣くな。せめては今日會つただけでも、佛菩薩の御慈悲と思ふが好い。」と、親のやうに慰めて下さいました。

「はい、もう泣きは致しません。御房は、——御房の御住居は、この界隈でございますか？」

「住居か？　住居はあの山の陰ぢや。」

俊寛様は魚を下げた御手に、間近い磯山を御指しになりました。

「住居と云つても、檜肌葺きではないぞ。」

「はい、それは承知して居ります。何しろこんな離れ島でございますから、――」

わたしはさう云ひかけたなり、又涙に咽びさうにしました。すると御主人は昔のやうに、優しい微笑を御見せになりながら、

「しかし居心は悪くない住居ぢや。寝所もお前には不自由はさせぬ。では一しよに來て見るが好い」と、氣輕に案内をして下さいました。

少時の後わたしたちは、浪ばかり騒がしい海べから、寂しい漁村へはひりました。薄白い路の左右には、梢から垂れた榕樹の枝に、肉の厚い葉が光つてゐる、――その木の間に點々と、篠葺きの屋根を並べたのが、この島の土人の家なのです。が、さう云ふ家の中に、赤々と竈の火が見えたり、珍らしい人影が見えたりすると、兎に角村里へ來たと云ふ、懐しい氣もちだけはして來ました。

御主人は時々振り返りながら、この家にゐるのは琉球人だとか、あの檻には豕が飼つてあるとか、いろいろ教へて下さいました。しかしそれよりも嬉しかつたのは、烏帽子さへかぶらない土人の男女が、俊寛様の御姿を見ると、必頭を下げた事です。殊に一度なぞは或家の前に、鶏を追つてゐた女の兒さへ、御時宜をしたではありませんか？　わたしは勿論嬉しいと同時に、不思議にも思つたものですから、何か譯のある事かと、そつと御主人に伺つて見ました。

「成經様や康頼様が、御話しになつた所では、この島の土人も鬼のやうに、情を知らぬ奴かと存じましたが、――」

「成程、都にゐるものには、さう思はれるに相違あるまい。が、流人とは云ふものの、おれたちは皆都人ぢや。邊土の民は何時の世にも、都人と見れば頭を下げる。業平の朝臣、實方の朝臣、――皆大同小異ではないか？　ああ云ふ都人もおれのやうに、東や陸奥へ下つた事は、思ひの外樂しい旅だつたかも知れぬ。」

「しかし實方の朝臣などは、御隱れになつた後でさへ、都戀しさの一念から、台盤所の雀になつたと、云ひ傳へて居るではありませんか？」

「さう云ふ噂を立てたものは、お前と同じ都人ぢや。鬼界が島の土人と云へば、鬼のやうに思ふ都人ぢや。して見ればこれも當てにはならぬ。」

　その時又一人御主人に、頭を下げた女がゐました。これは丁度榕樹の陰に、幼な兒を抱いてゐたのですが、その葉に後を遮られたせゐか、紅染めの單衣を着た姿が、夕明りに浮んで見えたものです。すると御主人はこの女に、優しい會釋を返されてから、

「あれが少將の北の方ぢやぞ」と、小聲に敎へて下さいました。

　わたしはさすがに驚きました。

「北の方と申しますと、――成經樣はあの女と、夫婦になつていらしつたのですか？」

　俊寛樣は薄笑ひと一しよに、ちよいと頷いて御見せになりました。

「抱いてゐた兒も少將の胤ぢやよ。」

「成程、さう伺つて見れば、かう云ふ邊土にも似合はない、美しい顏をして居りました。」

「何、美しい顏をしてゐた？　美しい顏とはどう云ふ顏ぢや？」

「まあ、眼の細い、頬のふくらんだ、鼻の餘り高くない、おつとりした顏かと思ひますが、――」

「それもやはり都の好みぢや。この島ではまづ眼の大きい、頬の何處かほつそりした、鼻も人よりは心もち高い、きりりした顏が尊まれる。その爲に今の女なぞも、此處では誰も美しいとは云はぬ。」

わたしは思はず笑ひ出しました。

「やはり土人の悲しさには、美しいと云ふ事を知らないのですね。さうするとこの島の土人たちは、都の上﨟を見せてやつても、皆醜いと笑ひますかしら？」

「いや、美しいと云ふ事は、この島の土人も知らぬではない。唯好みが違つてゐるのぢや。しかし好みと云ふものも、萬代不變とは請合はれぬ。その證據には御寺々々の、御佛の御姿を拜むが好い。三界六道の教主、十方最勝、光明無量、三學無碍、億々衆生引導の能化、南無大慈大悲釋迦牟尼如來も、三十二相八十種好の御姿は、時代毎にいろいろ御變りになつた。御佛でももしさうとすれば、如何か是美人と云ふ事も、時代毎にやはり違ふ筈ぢや。都でもこの後五百年か、或は又一千年か、兎に角その好みの變る時には、この島の土人の女所か、南蠻北狄の女のやうに、凄まじい顏がはやるかも知れぬ。」

「まさかそんな事もありますまい。我國ぶりは何時の世にも、我國ぶりでゐる筈ですから。」

「所がその我國ぶりも、時と場合では當てにならぬ。たとへば當世の上﨟の顏は、唐朝の御佛に活寫しぢや。これは都人の顏の好みが、唐土になずんでゐる證據ではないか？　すると人皇何代かの後には、碧眼の胡人の女の顏にも、うつつをぬかす時がないとは云はれぬ。」

わたしは自然とほほ笑みました。御主人は以前もかう云ふ風に、わたしたちへ御教訓なすつたのです。「變らぬのは御

姿ばかりではない。御心もやはり昔の儘だ。」——さう思ふと何だかわたしの耳には、遠い都の鐘の聲も、通つて來るやうな氣がしました。が、御主人は榕樹の陰に、ゆつくり御み足を運びながら、こんな事も亦仰有るのです。

「有王。おれはこの島に渡つて以來、何が嬉しかつたか知つてゐるか？　それはあのやかましい女房のやつに、毎日小言を云はれずとも、暮されるやうになつた事ぢやよ。」

三

その夜わたしは結び燈台の光に、御主人の御飯を頂きました。本來ならばそんな事は、恐れ多い次第なのですが、御主人の御言もありましたし、御給仕にはこの頃御召使ひの、惡俗（みつくろ）の童（わらべ）も居りましたから、御招伴に預つた譯なのです。

御部屋は竹椽をめぐらせた、僧庵とも云ひたい拵へです。椽先に垂れた簾の外には、前栽の竹むらがあるのですが、椿の油を燃やした光も、さすがに其處までは屆きません。御部屋の中には皮籠ばかりか、厨子もあれば机もある、——皮籠は都を御立ちの時から、御持ちになつてゐたのですが、厨子や机はこの島の土人が、不束ながらも御拵へ申した、琉球赤木とかの細工ださうです。その厨子の上には經文と一しよに、阿彌陀如來の尊像が一體、端然と金色に輝いてゐました。これは確か康頼樣の、都返りの御形見だとか、伺つたやうに思つてゐます。

俊寛樣は圓座の上に、樂々と御坐りなすつた儘、いろいろ御馳走を下さいました。勿論この島の事ですから、酢や醤油は都程、味が好いとは思はれません。が、その御馳走の珍しい事は、汁、膾、煮つけ、果物、——名さへ確かに知つてゐるのは、殆一つもなかつた位です。御主人はわたしが呆れたやうに、箸もつけないのを御覽になると、上機嫌に御笑ひなさりながら、かう御勸め下さいました。

「どうぢや、その汁の味は？　それはこの島の名産の、臭梧桐と云ふ物ぢやぞ。こちらの魚も食うて見るが好い。これも名産の永良部鰻ぢや。あの皿にある白地鳥、――さうさう、あの燒き肉ぢや。――あれも都などでは見た事もあるまい。白地鳥と云ふ物は、背の靑い、腹の白い、形は鴫にそつくりの鳥ぢや。この島の土人はあの肉を食ふと、瘴氣を拂ふとか稱へてゐる。その芋も存外味は好いぞ。名前か？　名前は琉球芋ぢや。梶王などは飯の代りに、毎日その芋を食うてゐる。」

梶王と云ふのはさつき申した、兎唇の童の名前なのです。

「どれでも勝手に箸をつけてくれい。粥ばかり啜つてゐさへすれば、得脱するやうに考へるのは、沙門にあり勝ちの不量見ぢや。世尊さへ成道される時には、牧牛の女難陀婆羅の、乳糜の供養を受けられたではないか？　もしあの時空腹の儘、畢波羅樹下に坐つてゐられたら、第六天の魔王波旬は、三人の魔女なぞを遣すよりも、六牙象王の味噌漬けだの、天龍八部の粕漬けだの、天竺の珍味を降らせたかも知らぬ。尤も食足れば淫を思ふのは、我々凡夫の慣ひぢやから、乳糜を食はれた世尊の前へ、三人の魔女を遣つたのは、波旬も天つ晴見上げた才子ぢや。が、魔王の淺間しさには、その乳糜を獻じたものが、女人ぢやと云ふ事を忘れて居つた。牧牛の女難陀婆羅、世尊に乳糜を獻じ奉る、――世尊が無上の道へ入られるには、雪山六年の苦行よりも、これが遙かに大事だつたのぢや。「取彼乳糜如意飽食、悉皆淨盡」――佛本行經七卷の中にも、あれ程難有い所は澤山あるまい。――「爾時菩薩食糜已訖從座而起。安庠漸々向菩提樹。」どうぢや。「安庠漸々向菩提樹」女人を見、乳糜に飽かれた、端嚴微妙の世尊の御姿が、目のあたりに拜まれるやうではないか？」

俊寛樣は樂しさうに、晩の御飯をおしまひになると、今度は涼しい竹椽の近くへ、圓座を御移しになりながら、

「では空腹が直つたら、都の便りでも聞かせて貰はう」とわたしの話を御促しになりました。

わたしは思はず眼を伏せました。兼ねて覺悟はしてゐたものの、いざ申し上げるとなつて見ると、今更のやうに心が怯れたのです。しかし御主人は無頓着に、芭蕉の葉の扇を御手にした儘、もう一度御催促なさいました。

「どうぢや、女房は相不變小言ばかり云つてゐるか？」

わたしはやむを得ず俯向いたなり、御留守の間に出來した、いろいろの大變を御話しました。御主人が御捕はれなすつた後、御近習は皆逃げ去つた事、京極の御屋形や鹿ケ谷の御山莊も、平家の侍に奪はれた事、北の方は去年の冬、御隱れになつてしまつた事、若君も重い疱瘡の爲に、その跡を御追ひなすつた事、今ではあなたの御家族の中でも、たつた一人姫君だけが、奈良の伯母御前の御住居に、人目を忍んでいらつしやる事、——さう云ふ御話をしてゐる内に、わたしの眼には何時の間にか、燈臺の火影が曇つて來ました。軒先の簾、厨子の上の御佛、——それももうどうしたかわかりません。わたしはとうとう御話半ばに、その場へ泣き沈んでしまひました。御主人は始終默然と、御耳を傾けていらしつたやうです。が、姫君の事を御聞きになると、突然さも御心配さうに、法衣の膝を御寄せになりました。

「姫はどうぢや？　伯母御前にはようなついてゐるか？」

「はい。御睦しいやうに存じました。」

わたしは泣く泣く俊寛樣へ、姫君の御消息をさし上げました。それはこの島へ渡るものには、門司や赤間が關を船出する時、やかましい詮議があるさうですから、髻に隱して來た御文なのです。御主人は早速燈臺の光に、御消息をおひろげなさりながら、所々小聲に御讀みになりました。

「……世の中かきくらして晴るる心地なく侍り。……さても三人一つ島に流されけるに、……などや御身一人

殘り止まり給ふらんと、………都には草のゆかりも枯れはてて、………當時は奈良の伯母御前の御許に侍り。………おろそかなるべき事にはあらねど、かすかなる住居推し量り給へ。………さてもこの三とせまで、如何御心強く、行とも候とも承はざるらん。………とくとく御上り候へ。戀しとも戀し。ゆかしともゆかし。………あなかしこ、あなかしこ。………」

俊寬樣は御文を御置きになると、ぢつと腕組みをなすつた儘、大きい息をおつきになりました。

「姫はもう十二にな　た筈ぢやな。――おれも都には未練はないが、姫にだけは一目會ひたい。」

わたしは御心中を思ひやりながら、唯涙ばかり拭つてゐました。

「しかし會へぬものならば、――泣くな。有王。いや、泣きたければ泣いても好い。しかしこの娑婆世界には、一々泣いては泣き盡せぬ程、悲しい事が澤山あるぞ。」

御主人は後の黒木の柱に、ゆつくり背中を御寄せになつてから、寂しさうに御微笑なさいました。

「女房も死ぬ。若も死ぬ。姫には一生會へぬかも知れぬ。屋形や山莊もおれの物ではない。おれは獨り離れ島に老の來るのを待つてゐる。――これがおれの今のさまぢや。が、この苦艱を受けてゐるのは、何もおれ一人に限つた事ではない。おれ一人業苦の大海に、沒在してゐると考へるのは、佛弟子にも似合はぬ增長慢ぢや。「增長驕慢、尙非世俗白衣所宜」艱難の多いのに誇る心も、やはり邪業には違ひあるまい。その心さへ除いてしまへば、この粟散邊土の中にも、おれ程の苦を受けてゐるものは、恒河沙の數より多いかも知れぬ。いや、人界に生れ出たものは、たとひこの島に流されずとも、皆おれと同じやうに、孤獨の歎を洩らしてゐるのぢや。村上の御門第七の王子、二品中務親王六代の後胤、仁和寺の法印寬雅が子、京極の源大納言雅俊卿の孫に生まれたのは、かう云ふ俊寬一人ぢやが、天が下には千の俊寬、萬の俊寬、十萬の俊寬、百億の俊寬が流されてゐる。――」

俊寛樣はかう仰有ると、忽ち又御眼の何處かに、陽氣な御氣色が閃きました。

「一條二條の大路の辻に、盲人が一人さまようてゐるのは、世にも憐れに見えるかも知れぬ。が、廣い洛中洛外、無量無數の盲人どもに、充ち滿ちた所を眺めたら、――有王。お前はどうすると思ふ？　おれならばまつ先にふき出してしまふぞ。おれの島流しも同じ事ぢや。十方に遍滿した俊寛どもが、皆唯一人流されたやうに、泣きつ喚きつしてゐると思へば、涙の中にも笑はずにはゐられぬ。有王。三界一心と知つた上は、何よりもまづ笑ふ事を學べ。笑ふ事を學ぶ爲には、まづ增長慢を捨てねばならぬ。世尊の御出世は我々衆生に、笑ふ事を教へに來られたのぢや。大般涅槃の御時にさへ、摩訶伽葉は笑つたではないか？」

その時はわたしも何時の間にか、頰の上の涙が乾いてゐました。すると御主人は簾越しに、遠い星空を御覽になりながら、

「お前が都へ歸つたら、姫にも歎きをするよりは、笑ふ事を學べと云つてくれい」と、何事もないやうに仰有るのです。

「わたしは都へは歸りません。」

もう一度わたしの眼の中には、新たに涙が浮んで來ました。今度はさう云ふ御言葉を、御恨みに思つた涙なのです。

「わたしは都にゐた時の通り、御伺勤めをするつもりです。年とつた一人の母さへ捨て、兄弟にも仔細は話さずに、はるばるこの島へ渡つて來たのは、その爲ばかりではありませんか？　わたしはさう仰有られる程、命が惜いやうに見えるでせうか？　わたしはそれ程恩義を知らぬ、人非人のやうに見えるでせうか？わたしはそれ程、――」

「それ程愚かとは思はなかつた。」

御主人は又前のやうに、にこにこ御笑ひになりました。

「お前がこの島に止まつてゐれば、姫に安否を知らせるのは、誰が外に勤めるのぢや？　おれは一人でも不自由はせぬ。まして梶王と云ふ童がゐる。――と云つてもまさか妬みなぞはすまいな？　あれは便りのないみなし兒ぢや。幼い島流しの俊寛ぢや。お前は便船のあり次第、早速都へ歸るが好い。その代り今夜は姫への土産に、おれの島住ひがどんなだつたか、それをお前に話して聞かさう。又お前は泣いてゐるな？　よしよし、ではやはり泣きながら、おれの話を聞いてくれい。おれは獨り笑ひながら、勝手に話を續けるだけぢや。」

俊寛樣は悠々と、芭蕉扇を御使ひなさりながら、島住居の御話をなさり始めました。軒先に垂れた簾の上には、ともし火の光を尋ねて來たのでせう、かすかに蟲の這ふ音が聞えてゐます。わたしは頭を垂れた儘、ぢつと御話に聞き入りました。

四

「おれがこの島へ流されたのは、治承元年七月の始ぢや。おれは一度も成親の卿と、天下なぞを計つた覺えはない。それが西八條へ籠められた後、いきなり、この島へ流されたのぢやから、始はおれも忌々しさの餘り、飯を食ふ氣さへ起らなかつた。」

「しかし都の噂では、――」

わたしは御言葉を遮りました。

「僧都の御房も宗人の一人に、おなりになつたとか云ふ事ですが、――」

「それはさう思ふに違ひない。成親の卿さへ宗人の一人に、おれを數へてゐたさうぢやから、――しかしおれは宗人ではない。淨海入道の天下が好いか、成親の卿の天下が好いか、それさへおれにはわからぬ程ぢや。事によると成親

の卿は、淨海入道よりひがんでゐるだけ、天下の政治には不向きかも知れぬ。おれは唯平家の天下には、ないに若かぬと云つただけぢや。源平藤橘、どの天下も結局あるのはないに若かぬ。この島の土人を見るが好い。平家の代でも源氏の代でも、同じやうに芋を食つては、同じやうに子を産んでゐる。天下の役人は役人がゐぬと、天下も亡ぶやうに思うてゐるが、それは役人のうぬ惚れだけぢや。」

「が俗都の御房の天下になれば、何御不足にもありますまい。」

俊寛樣の御眼の中には、わたしの微笑が映つたやうに、やはり御微笑が浮びました。

「成親の卿の天下同樣、平家の天下より惡いかも知れぬ。何故と云へば俊寛は、淨海入道より物わかりが好い。物わかりが好ければ政治なぞには、夢中になれぬ筈ではないか？　理非曲直も辨へずに、途方もない夢ばかり見續けてゐる、――其處が高平太の强い所ぢや。小松の內府なぞは利巧なだけに、天下を料理するとなれば、淨海入道より數段下ぢや。內府も始終病身ぢやと云ふが、平家一門の爲を計れば、一日も早く死んだが好い。その上又おれにしても、食色の二性を離れぬ事は、淨海入道と似たやうなものぢや。さう云ふ凡夫の取つた天下は、やはり衆生の爲にはならぬ。所詮人界が淨土になるには、御佛の御天下を待つ外はあるまい。――おれはさう思つてゐたから、天下を計る心なぞは、微塵も貯へてはゐなかつた。」

「しかしあの頃は每夜のやうに、中御門高倉の大納言樣へ、御通ひなすつたではありませんか？」

わたしは御不用意を責めるやうに、俊寛樣の御顏を眺めました。ほんたうに當時の御主人は、北の方の御心配も御存知ないのか、夜は京極の御屋形にも、滅多に御休みではなかつたのです。しかし御主人は相不變、澄ました御顏をなすつた儘、芭蕉扇を使つていらつしやいました。

「其處が凡夫の淺ましさぢや。丁度あの頃あの屋形には、鶴の前と云ふ上童があつた。これが如何なる天魔の化身か、おれを捉へて離さぬのぢや。おれの一生の不仕合はせは、皆あの女がゐたばかりに、降つて湧いたと云うても好い。女房に横面を打たれたのも、鹿ケ谷の山莊を假したのも、しまひにこの島へ流されたのも、――しかし有王、喜んでくれい。おれは鶴の前に夢中になつても、謀叛の宗人にはならなかつた。女人に愛染を生じたためしは、古今の聖者にも稀ではない。大幻術の摩登伽女には、阿難尊者さへ迷はせられた。龍樹菩薩も在俗の時には、王宮の美人を偷む爲に、隱形の術を修せられたさうぢや。しかし謀叛人になつた聖者は、天竺震旦本朝を問はず、唯の一人もあつた事は聞かぬ。これは聞かぬのも不思議はない。女人に愛著を生ずるのは、五根の欲を放つだけの事ぢや。が、謀叛を企てるには、貪嗔癡の三毒を具へねばならぬ。聖者は五欲は放たれても、三毒の害は受けられぬのぢや。して見ればおれの知慧の光も、五欲の爲に曇つたと云へ、消えはしなかつたと云はねばなるまい。――が、それは兎も角も、おれはこの島へ渡つた當座、毎日忌々しい思ひをしてゐた。」

「それはさぞかし御難儀だつたでせう。御食事は勿論、御召し物さへ、御不自由勝ちに違ひありませんから、」

「いや、衣食は春秋二度づつ、肥前の國鹿瀨の莊から、少將のもとへ送つて來た。鹿瀨の莊は少將の舅、平の教盛の所領の地ぢや。その上おれは一年程たつと、この島の風土にも慣れてしまつた。が、忌々しさを忘れるには、一しよに流された相手が惡い。丹波の少將成經などは、ふさいでゐなければ居睡りをしてゐた。」

「成經樣は御年若でもあり、父君の御不運を御思ひになつては、御歎きなさるのも御尤もです。」

「何、少將はおれと同樣、天下はどうなつてもかまはぬ男ぢや。あの男は琵琶でも掻き鳴らしたり、櫻の花でも眺めたり、上﨟に戀歌でもつけてゐれば、それが極樂ぢやと思うてゐる。ぢやからおれに會ひさへすれば、謀叛人の父ばか

り怨んでゐた。」
「しかし康頼様は何都の御房と、御親しいやうに伺ひましたが。」
「所がこれが難物なのぢや。康頼は何でも願さへかければ、天神地神、諸佛菩薩、悉あの男の云ふなり次第に、利益を垂れると思うてゐる。つまり康頼の考へでは、神佛も商人と同じなのぢや。唯神佛は商人のやうに、金錢では冥護を御賣りにならぬ。ぢやから祭文を讀む。香火を供へる。この後の山なぞには、姿の好い松も、澤山あつたが、皆康頼に伐られてしまうた。伐つて何にするかと思へば、千本の卒塔婆を拵へた上、一々それに歌を書いては、海の中へ抛りこむのぢや。おれはまだ康頼位、現金な男は見た事がない。」
「それでも莫迦にはなりません。都の噂ではその卒塔婆が、熊野にも一本、嚴島にも一本、流れ寄つたとか申してゐました。」
「千本の中には一本や二本、日本の土地へも着きさうなものぢや。ほんたうに冥護を信ずるならば、たつた一本流すが好い。その上康頼は難有さうに、千本の卒塔婆を流す時でも、始終風向きを考へてゐたぞ。何時かおれはあの男が、海へ卒塔婆を流す時に、歸命頂禮熊野三所の權現、分けては日吉山王王子の眷屬、總じては上は梵天帝釋、下は堅牢地神、殊には內海外海龍神八部、應護の眼を垂れさせ給へと唱へたから、その跡へ並びに西風大明神、黑潮の權現も守らせ給へ、謹上再拝とつけてやつた。」
「惡い御冗談をなさいます。」
わたしもさすがに笑ひ出しました。
「すると康頼は怒つたぞ。ああ云ふ大嗔恚を起すやうでは、現世利益は兎も角も、後生往生は覺束ないものぢや。

――が、その内に困まつた事には、少將も何時か康賴と一しよに、神信心を始めたではないか？　それも熊野とか王子とか、由緒のある神を拜むのではない。この島の火山には鎭護の爲か、岩殿と云ふ祠がある。その岩殿へ詣でるのぢや。――火山と云へば思ひ出したが、お前はまだ火山を見た事はあるまい？」

「はい、唯さつき榕樹の梢に、薄赤い煙のたなびいた、禿げ山の姿を眺めただけです。」

「では明日で　おれと一しよに、頂へ登つて見るが好い。頂へ行けばこの島ばかりか、大海の景色は手にとるやうぢや。岩殿の祠も途中にある、――その岩殿へ詣でるのに、康賴はおれにも行けと云うたが、おれは容易に行かうとは云はぬ。」

「都では俊寛の御房一人、さう云ふ神詣でもなさらない爲に、御殘されになつたと申して居ります。」

「いや、それはさうかも知れぬ。」

俊寛樣は眞面目さうに、ちよいと御首を御振りになりました。

「もし岩殿に靈があれば、俊寛一人を殘した儘、二人の都返りを取り持つ位は、何と思はぬ禍津神ぢや。お前はさつきおれが教へた、少將の女房を覺えてゐるか？　あの女もやはり岩殿へ、少將がこの島を去らぬやうに、毎日毎夜詣でたものぢや。所がその願は少しも通らぬ。すると岩殿と云ふ神は、天魔にも増した横道者ぢや。天魔には世尊御出世の時から、諸惡を行ふと云ふ戒行がある。もし岩殿の神の代りに、天魔があの祠にゐるとすれば、少將は都へ返る途中、船から落ちるか、熱病になるか、兎に角に死んだのに相違ない。これが少將もあの女も、同時に破滅させる唯一の途ぢや。が、岩殿は人間のやうに、諸善ばかりも行はねば、諸惡ばかりも行はぬらしい。尤もこれは岩殿には限らぬ。奧州名取郡笠島の道祖は、都の加茂河原の西、一條の北の邊に住ませられる、出雲路の道祖の御娘ぢや。が、この神は父の

神が、まだ聟の神も探されぬ内に、若い都の商人と妹脊の契を結んだ上、さつさと奥へ落ちて來られた。かうなつては凡夫も同じではないか？ あの貴方の中將は、この神の前を通られる時、下馬も拜もされなかつたばかりに、とうとう蹴殺されておしまひなすつた。かう云ふ人間に近い神は、五塵を離れてゐぬのぢやから、何を仕出かすか油斷はならぬ。このためしでもわかる通り、一體神と云ふものは、人間離れをせぬ限り、祟めろと云へた義理ではない。――が、そんな事は話の枝葉ぢや。康頼と少將とは一心に、岩殿詣でを續け出した。それも岩殿を熊野になぞらへ、あの浦は和歌浦、この坂は蕪坂なぞと、一々名をつけてやるのぢやから、まづ童たちが鹿狩と云つては、小犬を狙ひまはすのも同じ事ぢや。唯音無の瀧だけは本物よりもずつと大きかつた。」

「それでも都の噂では、奇瑞があつたとか申してゐますが。」

「その奇瑞の一つはかうぢや。結願の當日岩殿の前に、二人が法施を手向けてゐると、山風が木々を煽つた拍子に、椿の葉が二枚こぼれて來た。その椿の葉には二枚とも、蟲の食つた跡が殘つてゐる。それが一つには歸雁とあり、一つには二とあつたさうぢや。合せて讀めば歸雁二となる、――こんな事が嬉しいのか、康頼は翌日得々と、おれにもその葉を見せなぞした。成程二とは讀めぬでもない。が、歸雁は如何にも無理ぢや。おれは餘り可笑しかつたから、次の日山へ行つた歸りに、椿の葉を何枚も拾つて來てやつた。その葉の蟲食ひを續けて讀めば、歸雁二所の騒ぎではない。「明日歸洛」と云ふのもある。「清盛横死」と云ふのもある。「康頼往生」と云ふのもある。おれはさぞかし康頼も、喜ぶぢやらうと思うたが、――」

「それは御立腹なすつたでせう。」

「康頼は怒るのに妙を得てゐる。舞も洛中に並びないが、腹を立てるのは、一段と巧者ぢや。あの男は謀叛なぞに加は

つたのも、嗔恚に牽かれたのに相違ない。その嗔恚の源はと云へば、やはり増長慢のなせる業ぢや。平家は高平太以下皆惡人、こちらは大納言以下皆善人、――康頼はかう思うてゐる。そのうぬ惚れが僞にならぬ。又さつきも云うた通り、我々凡夫は誰も彼も、皆高平太と同様なのぢや。が、康頼の腹を立てるのが好いか、少將のため息をするのが好いか、どちらが好いかはおれにもわからぬ。」

「成經樣御一人だけは、御妻子もあつたさうですから、御紛れになる事もありましたらうに。」

「所が始終蒼い顏をしては、つまらぬ愚痴ばかりこぼしてゐた。たとへば谷間の椿を見ると、この島には櫻も咲かないと云ふ。火山の頂の煙を見ると、この島には青い山もないと云ふ。何でも其處にある物は云はずに、ない物だけ並べ立ててゐるのぢや。一度なぞはおれと一しよに、礒山へ槖吾を摘みに行つたら、ああ、わたしはどうすれば好いのか、此處には加茂川の流れもないと云うた。おれがあの時吹き出さなかつたのは、我立つ杣の地主權現、日吉の御冥護に違ひない。が、おれは莫迦々々しかつたから、此處には福原の獄もない、平相國入道淨海もゐない、難有い難有いとかう云うた。」

「そんな事を仰有つては、いくら少將でも御腹立ちになりましたらう。」

「いや、怒られれば本望ぢや。が、少將はおれの顏を見ると、悲しさうに首を振りながら、あなたには何もおわかりにならない、あなたは仕合せな方ですと云うた。ああ云ふ返答は、怒られるよりも難儀ぢや。おれは、――實はおれもその時だけは、妙に氣が沈んでしまうた。もし少將の云ふやうに、何もわからぬおれぢやつたら、氣も沈まずにすんだかも知れぬ。しかしおれにはわかつてゐるのぢや。おれも一時は少將のやうに、眼の中の涙を誇つたことがある。その涙に透かして見れば、あの死んだ女房も、どの位美しい女に見えたか、――おれはそんな事を考へると、急に少將が

氣の毒になつた。が、氣の毒になつて見ても、可笑しいものは可笑しいではないか？　そこでおれは笑ひながら、言葉だけは眞面目に慰めようとした。おれが少將に怒られたのは、跡にも先にもあの時だけぢや。少將はおれが慰めてやると、急に恐しい顏をしながら、噓をおつきなさい。わたしはあなたに慰められるよりも、笑はれる方が本望ですと云うた。その途端に、――妙ではないか？　とうとうおれは吹き出してしまうた。」

「少將はどうなさいました？」

「四五日の間はおれに遇うても、挨拶さへ碌にしなかつた。が、その後又遇うたら、悲しさうに首を振つては、ああ、都へ返りたい、此處には牛車も通らないと云うた。あの男こそおれより仕合せものぢや。――が、少將や康頼でも、やはり居らぬよりは、ゐた方が好い。二人に都へ歸られた當座、おれは又一年ぶりに、毎日寂しうてならなかつた。」

「都の噂では御寂しい所か、御歎き死にもなさり兼ねない、御容子だつたとか申してゐました。」

わたしは出來るだけ細々と、その御噂を御話しました。琵琶法師の語る言葉を借りれば、「天に仰ぎ地に俯し、悲しみ給へどかひぞなき。……猶も舟の纜に取りつき、腰になり脇になり、丈の及ぶ程は、引かれておはしけるが、丈も及ばぬ程にもなりしかば、又空しき渚に泳ぎ返り、……是具して行けや、我乘せて行けやとて、をめき叫び給へども、漕ぎ行く船のならひにて、跡は白浪ばかりなり」と云ふ、御狂亂の一段を御話したのです。俊寛樣は御珍しさうに、その話を聞いていらつしやいましたが、まだ船の見える間は、手招ぎをなすつていらしつたと云ふ、今では名高い御話をすると、

「それは滿更噓ではない。何度もおれは手招ぎをした」と、素直に御頷きなさいました。

「では都の噂通り、あの松浦の佐用姫のやうに、御別れを御惜しみなすつたのですか？」

「一年の間同じ島に、話し合うた友だちと別れるのぢや。別れを惜しむのは當然ではないか？　しかし何度も手招ぎをしたのは、別れを惜しんだばかりではない。——一體あの時おれの所へ、船のはひつたのを知らせたのは、この島にゐる琉球人ぢや。それが濱べから飛んで來ると、息も切れ切れに船々と云ふ。船はまづわかつたものの、何の船がはひつて來たのか、その外の言葉はさつぱりわからぬ。あれはあの男もうろたへた餘り、日本語と琉球語とを交る交る、饒舌つてゐたのに違ひあるまい。おれは兎も角も船と云ふから、早速濱べへ出かけて見た。すると濱べには何時の間にか、土人が大勢集つてゐる。その上に高い帆柱のあるのが、云ふまでもない迎ひの舟ぢや。おれもその舟を見た時には、さすがに心が躍るやうな氣がした。少將や康賴はおれより先に、もう舟の側へ駈けつけてゐたが、この喜びやうも一通りではない。現にあの琉球人なぞは、二人とも毒蛇に嚙まれた揚句、氣が狂つたのかと思うた位ぢや。その内に六波羅から使に立つた、丹左衞門尉基安は、少將に赦免の教書を渡した。が、少將の讀むのを聞けば、おれの名前がはひつてゐない。おれだけは赦免にならぬのぢや。——さう思つたおれの心の中には、僅か一彈指の間ぢやが、いろいろの事が浮んで來た。姫や若の顏、女房の罵る聲、京極の屋形の庭の景色、天竺の早利即利兄弟、震旦の一行阿闍梨、本朝の實方の朝臣、——とても一々數へてはゐられぬ。唯今でも可笑しいのは、その中にふと車を引いた、赤牛の尻が見えた事ぢや。しかしおれは一心に、騷がぬ容子をつくつてゐた。勿論少將や康賴は、氣の毒さうにおれを慰めたり、俊寛も一しよに乘せてくれいと、使にも賴んだりしてゐたやうぢや。が、赦免の下らぬものは、何をどうしても、舟へは乘れぬ。おれは不動心を振ひ起しながら、何故おれ一人赦免に洩れたか、その譯をいろいろ考へて見た。高平太はおれを憎んでゐる。——それも確かには違ひない。しかし高平太は憎むばかりか、內心おれを恐れてゐる。おれは前の法勝寺の執行ぢや。兵仗の道は知る筈がない。が、天下は思ひの外、おれの議論に應ずるかも知れぬ。——高平太は其

虚を恐れてゐるのぢや。おれはかう考へたら、苦笑せずにはゐられなかつた。山門や源氏の侍どもに、都合の好い議論を拵へるのは、西光法師なぞの償い役ぢや。おれは□たる一平家に、心を労する程老耄れはせぬ。さつきもお前に云うた通り、天下は誰でも取つてゐるが好い。おれは一巻の経文の外に、鶏の前でもゐれば安堵してゐる。しかし浄海入道になると、浅学短才の悲しさに、俊寛も無気味に思うてゐるのぢや。して見れば首でも刎ねられる代りに、この島に一人残されるのは、まだ仕合せの内かも知れぬ。――そんな事を思つてゐる間に、愈舟出と云ふ時になつた。すると少将の妻になつた女が、あの赤児を抱いた儘、どうかその舟に乗せてくれいと云ふ。おれは気の毒に思うたから、女は咎めるにも及ぶまいと、使の基安に頼んでやつた。が、基安は取り合ひもせぬ。あの男は勿論役目の外は、何一つ知らぬ木偶の坊ぢや。おれもあの男は咎めずとも好い。唯罪の深いのは少将ぢや。――」

俊寛様は御腹立たしさうに、ばたばた□芭蕉扇を御使ひなさいました。

「あの女は気違ひのやうに、何でも舟へ乗らうとする。舟子たちはそれを乗せまいとする。とうとうしまひにあの女は、少将の直垂の裾を摑んだ。すると少将は蒼い顔をした儘、邪慳にその手を刎ねのけたではないか？　女は渚べに倒れたが、それぎり二度と乗らうともせぬ。唯おいおい泣くばかりぢや。おれはあの一瞬間、康頼にも負けぬ大嗔恚を起した。少将は人畜生ぢや。康頼もそれを見てゐるのは、仏弟子の所業とも思はれぬ。おまけにあの女を乗せる事は、おれの外に誰も頼まなかつた。――おれはさう思うたら、今でも不思議な気がする位、ありとあらゆる罵詈讒謗が、口を衝いて溢れて来た。尤もおれの使つたのは、京童の云ふ悪口ではない。八万法蔵十二部経中の悪鬼羅刹の名前ばかり、矢つぎ早に浴びせたのぢや。が、舟は見る見る遠ざかつてしまふ。あの女はやはり泣き伏した儘ぢや。おれは渚べにじだんだを踏みながら、返せ返せと手招きをした。」

御主人の御腹立ちにも關らず、わたしは御話を伺つてゐる内に、自然とほほ笑んでしまひました。すると御主人も御笑ひになりながら、

「その手招ぎが俥はつてゐるのぢや。嗔恚の祟りは其處にもある。あの時おれが怒りさへせねば、俊寛は都へ歸りたさに、狂ひまはつたなぞと云ふ事も、口の端へ上らずにすんだかも知れぬ。」と、仕方がなささうに仰有るのです。

「しかしその後は格別に、御歎きなさる事はなかつたのですか？」

「歎いても仕方はないではないか？　その上時のたつ内には、寂しさも次第に消えて行つた。おれは今では己身の中に、本佛を見るより望みはない。自土卽淨土と觀じさへすれば、大歡喜の笑ひ聲も、火山から炎の迸るやうに、自然と湧いて來なければならぬ。おれは何處までも自力の信者ぢや。――おお、まだ一つ忘れてゐた。あの女は泣き伏したぎり、何時までたつても動かうとせぬ。その内に土人も散じてしまふ。舟は青空に紛れるばかりぢや。おれは餘りのいぢらしさに、慰めてやりたいと思うたから、そつと後手に抱き起さうとした。するとあの女はどうしたと思ふ？　いきなりおれをはり倒したのぢや。おれは目が眩らみながら、仰向けに其處へ倒れてしまうた。おれの肉身に宿らせ給ふ、諸佛諸菩薩諸明王も、あれには驚かれたに相違ない。しかしやつと起き上つて見ると、あの女はもう村の方へ、すごすご歩いて行く所ぢやつた。何、おれをはり倒した譯か？　それはあの女に聞いたが好い。が、事によると人氣はなし、凌ぜられるとでも思つたかも知れぬ。」

五

わたしは御主人とその翌日、この島の火山へ登りました。それから一月程御側にゐた後、御名殘り惜しい思ひをしなが

ら、もう一度都へ歸つて來ました。「見せばやなわれを思はん友もがな磯のとまやの柴の庵を――これが御片見に頂いた歌です。俊寛様はやはり今でも、あの離れ島の笹葺きの家に、相不變御一人悠々と、御暮らしになつてゐる事でせう。事によると今夜あたりは、琉球芋を召し上りながら、御佛の事や天下の事を御考へになつてゐるかも知れません。さう云ふ御話はこの外にも、まだいろいろ伺つてあるのですが、それは又何時か申し上げませう。

二月號に掲載せらるべき二大作

戯曲　三幕物…………久米正雄

ロシヤの過去と現在とは我々に何を敎へるか？…………小野俊一

前者は著者が久方振りにて世に問ふ純藝術的の大力作にして、後者は少壯露國通の第一人者たる著者が二ケ月を費して執筆したる貳百枚の大雄篇なり。

◎本號特價　金貳圓　郵稅金五錢

中央公論大賣捌所

[illegible]區裏神保町	東海堂
同　京橋區銀座三丁目	北隆館
同　京橋區元數寄屋町	至誠堂
同　日本橋區本石町	誠春堂
同　本郷區本富士町	盛文館
大阪市北區梅田町	立盛堂
同　北區東梅田町	共盛社
京都市七條停車場前	前田大誠社
同　四條西洞院	中京堂
名古屋市富澤町	日韓書房
朝鮮京城本町二丁目	

◎定價　金六拾錢郵稅金貳錢（海外郵稅拾錢但支那を除く）

冊數／國別	內國	外國
六冊	金參圓六拾錢	金四圓貳拾錢
十二冊	金七圓貳拾錢	金八圓四拾錢
以上郵稅共		

▲但し新年號春秋二期附錄號臨時號は各倍冊に付普通號二冊の代金を申請くべし、即ち一ケ年通計十七冊分の割合なれば一ケ年分御注文の方は內國は金拾圓貳拾錢外國は金拾壹圓九拾錢の割となれども頁數の都合にて臨時變更することあるべし

一[illegible]郵稅[illegible]前金さ[illegible]前金切の場合は發送な[illegible]

一振替貯金　口座は東京三十四番なり

一郵券代用　は謝絶す但し郵便局に不便の地に限り一割增にて代用せらるゝを拒まず

一代金引替　小包の取扱は一切謝絶す

一集金郵便　御希望の方は拂込金額以外に左記料金を加へたる其總額を前以て弊社へ通知せらるべし、弊社は直ちに其取扱手續をなすべし但集金郵便の申込を受くるも現金受領濟にあらざれば雜誌發送せず

一金一圓迄　金六錢
一金五圓迄　金七錢（集金委託料及送料共）
一金拾圓迄　金八錢

一中央公論及婦人公論代金取り纏め御拂込みの場合には各誌割當て金額御指定を乞ふ

一受領證請求は必ず返信料を要す

大正十年十二月二十五日印刷納本
大正十一年一月一日發行
（禁轉載）

發行兼編輯人　瀧田哲太郎
印刷人　高木西三

東京市本郷區本郷三丁目六番地
發行所　中央公論社
電話　小石川一四四
電信略號コウロン

東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地
印刷所　秀英舍第一工場

CHUO KORON (*The Central Review.*)

By THE CHUO KORON SHA PUBLISHING CO., Published Monthly.
Terms of Subscription: Annual subscription *yen* 11.90; Single copy 70 *sen* including Postage. Entered at the Post Office at Los Angeles, Cal. U.S.A. as second-class mail matter.

